PL 797 .8 A6 1926

Ryutei, Tanehiko
Ryutei Tanehiko shu zen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

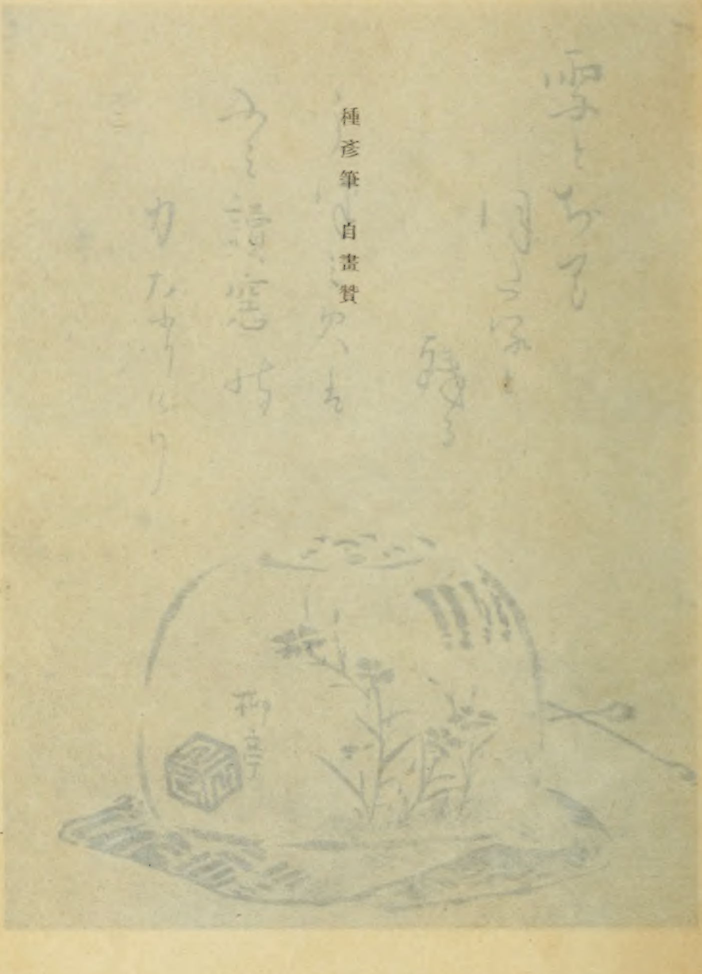
http://www.archive.org/details/ryteitanehikoshz00ryte

柳亭種彦集

全

LIBRARY
MAY 03 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
797
.8
A6
1926

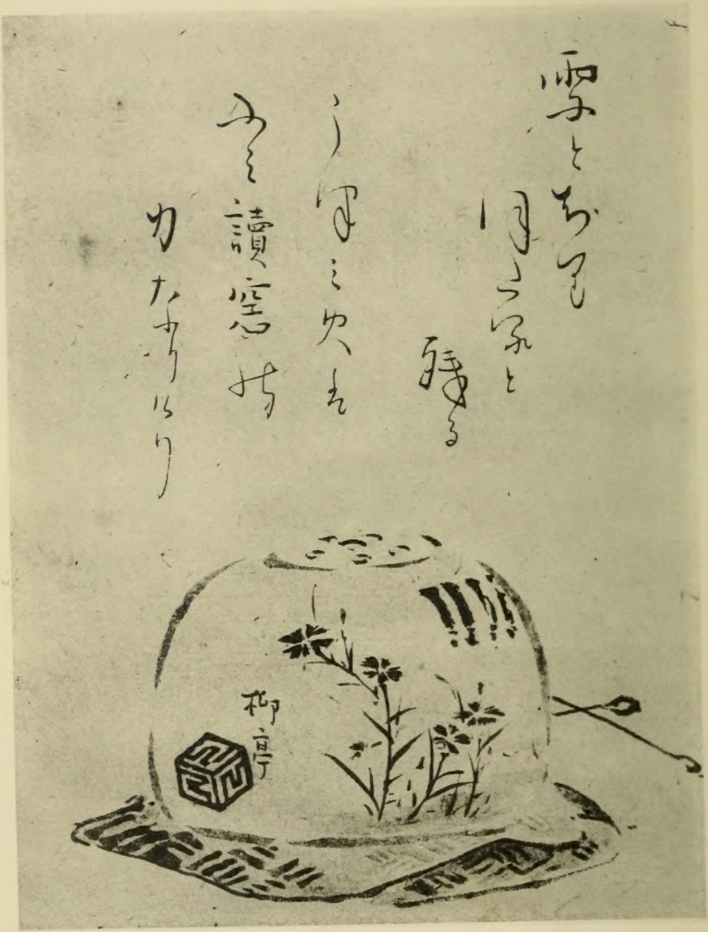


種彦筆　自畫賛

蘇玄瑛 自書贊

LIBRARY
MAY
UNIVERSITY OF

PL
A6
1926


柳亭

種彦自筆「邯鄲諸国物語」草稿

近代 日本文學大系 第十九卷目次

近世怪談霜夜星

近世怪談霜夜星……一一六
序……三
おほむね……六
もくろく……八
一 卷
讖語上 笠もりの由來 和田山のあれ……一一
讖語下 光明寺形見の笄……一七
二 卷
第一回 海邊のもみぢ あふぎの紅絲……二四
第二回 六浦わたり 手がひの猫……三六
三 卷
第三回 蛇のあやしみ 狂女の溺死……四〇
第四回 花のちまた 夢の奇事……四六
第五回 堤の蟲の音 水ぐるま……五二
四 卷
第六回 編んだ布の狂人 古屋の木まくら……五七
第七回 鎌倉の怪事 虫ぐるま……五九
五 卷

第八回　種々の茶話　わかれし身……七一
第九回　尼がいのり　鉦鼓の觀音……七六
阿波之鳴門……八七　一六六
序……八七
一之巻
處女弓子木履に聟を釣りて今市に賣る　並　聟をあたへて多門偕老を誓ふ事……九一
與次右衛門金泉場に雛小弓を射る　並　災殃逃へて好事をひらく事……九七
二之巻
弓子水無瀨慣の宮に花を見る　並　好事變つて災殃となる事……一〇四
十三の浅にて軍太與次右衛門を討つ　並　畠山多門本國阿波へ赴く事……一〇六
淺茅盲女となりて貧家に苦しむ　並　次郎九郎孝心の事……一一一
三之巻
畠山國清孝子を賞む　並　觀音寺に夜參して次郎九郎靈夢を得る事……一二七
鬼老婆寶木弓子を呵責す　並　花桶の水に危急を遁る事……一三三
四之巻
次郎九郎木偶を鋳出して活計とたつ　並　橘平發心物語の事……一三九
海賊阿波の鳴門の通船を襲ふ　並　多門弓子月夜に管絃をもよほす事……一四七
五之巻
十郎兵衛弓子を誘きて八栗山に伴ふ　並　淺茅薄命を恨みて女僧となる事……一四九
お弓我が子としらずて實禮を殺す　並　軍太十郎兵衛が家に宿る事……一五一

淺間嶽面影草紙……一六七—二三四

田植歌……一六七
事のはじめ……一七一
目錄……一七三

一之卷

第一　淺間の後室遺山宅　樹の夜の花遊覽……一七五
第二　一蓋茉莉に茶事の奥儀を傳ふ……一八六

二之卷

第三　忘貝寄居蟲修行者が物語を聞きて羽黒山に登る……一九三
第四　幸崎の社にて巴之丞初めて瞿麥に逢ふ……一九八
第五　星影土右衛門幻術を以て巴之丞が矢をまぬがる……二〇四

三之卷

第六　忘貝寄居蟲にかはりて花巷に身を賣る……二〇九
第七　月夜に瞿麥時鳥を迴へて恥辱をあたふ……二一二
第八　巴之丞再び皐都に旅だつ……二一六
後編發端……二三〇
後編豫告……二三三

淺間嶽面影草紙後篇　逢州執著譚……二三五—二六六

序……二三七
總目錄……二七一

篇　卷

第一　巴之丞花街に到る夜閑一斎がむすめ忘貝に廻り逢ひ茶道の傳書を得る事……二四一
第二　田字草が長にて逢州時鳥姉妹の名のりをなす竹器の瞿麥恨みの風にちる事……二五二

笛巻

第三　瞿麥の方深夜に時鳥を殺害なす男波の笛鬼火に順つて飛びさる事……二六八
第四　時鳥の亡靈種々の奇怪をあらはし瞿麥狂死まぼろしぎぬたの事……二八三

琴巻上

第五　巴之丞菊ケ淵の山荘に遊君を集會め細太丸に命せて猿樂伎伎を興行なす事……二九一
第六　五郎藏杜鵑花と思ひ違へて逢州を殺す土右衛門再び隱形の術をほどこす事……三〇五

琴巻下

第七　寄居蟲袖乞して四ツ竹の曲子を唄ふ於杉が懺悔物語暗に母子再會の事……三一八
第八　非人の家に良治雨の小止をまつ袖乞の娘茶をたてて良治にまゐらす事……三二七

箜篌巻

第九　逢州が幽魂巴之丞を清涼山に誘引ふ石橋の物語金色の獅子王牡丹の花に狂ふ事……三四二
第十　寄居蟲獅子舞に打扮ちて討を討つ吉鏡の威徳土右衛門が妖術を破る事……三五六
附言……三六五

勢田橋龍女の本地……三六七—四四八
序……三六九
代序……三七〇

上

大序……三七三
法の華郭の花 頓作街賣苦海經……三八九

中

二段目……三九五

下

三段目……四二三
附言……四四七

綟手摺昔木偶……四四九—五八八

序……四五一
目次……四五四

卷之一

一 發端みやこふじの上……四五五
二 發端みやこふじの下……四六四

卷之二

三 たまぶち……四七六

四 こぢよろで……四八三
五 ふぢおろし……四九五

卷之三

六 やきいんあみがさ……五〇八
七 いちもんじ……五一六

卷之四

八 おぼろふじ……五二八

九 やぶあみがさ……五四九
十 ふせあみかさ……五六一
十一 大あみがさ……五七八

巻之五

正本製……五八九―九二五

初編

樂屋の續き繪 於仲清七物語……五九一

貳編

曾我祭 小稻判兵衛物語……六[illegible]

三編

當年積雪白雙紙 顔見世物語……六六六

四編

昔模様女百合若 於菊幸介物語……七二〇

五編

吾妻花雙蝶々……七五八

六編

吾妻與五郎新狂言 前編の續き狂言……七九一

七編

立物抄 於染久松物語……八二二

八編

立物抄 前編の續き……八五七

九編

立物抄 前編の續き……八九四

女模樣稻妻染……九一七

國字小說 三蟲拇戰……九六一

浮世形六枚屏風……九九五

解題……文學博士 笹川種郎……卷頭 一―三四

目次終

解題

種彥と其の時代

文學博士　笹川種郎

柳亭種彥が生まれたのは天明三年であるが、黃表紙作家として喜三二、春町、全交が幾多の著作を公にした時であつた。此の歲の名作としては、喜三二に『長生見度記』あり、馬鹿人に『啌多雁取帳』あり、南仙楚滿人もはじめて敵討物に手をつけて『敵討三味線由來』を作り、當年取つて二十三歲の京傳も『鐘は上野贔屓』を著し、宿屋飯盛も富本の流行を題材とし、珍らしくも『兩國の名取草』を著してゐる。世は田沼專權時代で、江戶は太平の春に醉つてゐたのである。種彥は多くの作家と異なりて、其の家柄が最も高かつた。戲作六家撰に依ると彼の傳記は次の如くである。

種彥、姓は源氏、名は知久、愛雀軒と號し、又足薪翁とも號した。別に修紫樓と號せるは、田舍源氏の行はれたからである。通稱は高屋彥四郞、麾下の士で、食祿二百俵を賜はつた。もと橫

手氏で、甲州武士である。淺草堀田原に住んでゐた。但し物之本作者部類には下谷御徒町御先手組屋敷内に住むと見えてゐる。曾て漢畫を學んだが、俳諧の古調を好み又川柳にも嗜みが深く、木卯と號した。幼時癇癖強く、やゝもすると腹を立てるので、其の父戒めて、

　風に天窗はられて睡る柳かな

の一句を與へたので、之よりして自省したと云ふ。又天明振の狂歌を好みて、狂名を柳の風成と稱し、後改めて心の種俊と云つた。當時下谷に三彦と云ふのがあつて種彦も其の一人であつた。柳の風成からして柳亭と號し、俗名の彦と、種俊の種とを取りて、戲名を種彦と稱した。印に三つ彦を用ゐたのは壯年の時、劇を好み、殊に故人坂東秀佳(三代目三津五郎)の藝に倣ひ、屢素人芝居、茶番所作事に出演して、三津五郎に酷似したので、茶番連中にては三つ彦を以て渾號したからである。種彦曾て云ふ、「戲作者も俳優者なり、傾城に齊し、譬へば傾城は顏のみ美しくて、張も意氣地もなく、また髮の飾り衣裳の綺羅なければ客つかず、又戲子も男つきよく、藝も未熟ならずとても、是れも衣裳の綺羅と諸人愛敬を專らとせざれば見物喜ばず、人惡みて贔屓の客なし。此の理に似て戲曲作者も全體は上手にてよく綴ると雖も、拙き畫工に畫かれ、惡しき彫工の手にかゝり、外題ともに惡しければ、榮なくして賣れず、當りを取ること難かるべし。されど後

に上手と人に云はるゝ者は未熟なる初めより其の器あらはるゝなり。爰に一つの噺あり、昔名人と呼ばれし俳優人元祖中村仲藏(秀鶴後中山小十郎)初めは藝道も未熟にて、俗に云ふぺい〳〵にて、顔を赤く隈どり、緞衣裳の素袍にて並び大名に出でしが、粘強き緞素袍なれば、二日三日に棚落ちて皺多く、見苦しきを、樂屋に入りて後、外の同位の役人は人手にのみかけて疊みもやらず、其の儘に衣裳棚へ上げ置いて、又明くる日其の場來れば、前の素袍を著て出る故、いと見苦しかりしに、秀鶴一人は衣裳を人手にかけず、自ら其の素袍を水のしして能く疊み、日毎にかくの如く丁寧になし置きしかば、翌日著て舞臺へ出て列座の戯子と並びし時に一際勝れて立派に、いかにも上手らしく見え、看官の目にもたちければ、戯場中の役人も目をつけて、彼は一器量ある者なり、後の狂言にはたゞの役相當ならんと、其の役をさせて試みんと、衆の中より抽きて役割をつけたるに、衆に違はず、其の役をも相應に勤めたれば、次第〳〵によき役を勤め、位も昇り、終に名人となり、今にその譽を殘せり。天下に名を轟かす者は、初めより其の器量衆に超えたり、戯作も此の秀鶴が心懸にて常に心を用ゐ、一句一章たりとも疎かに書くまじきものなり、丁寧反復してつゞまやかに筋の通る樣に書きたけれ、書わりにも工夫を凝らすべきかと云々。」「又常に用ゐる所の硯は、茄子の形したるなり、其の蓋に自詠の狂歌を彫らせたり、其の歌、

名人になれ〳〵茄子とおもへどもとにかくへたははなれざりけり」

との逸話を傳へてゐる。一句一章たりともおろそかに書くまじきと云ひ、丁寧反復してつゞまやかに筋の通るやうに書きたけれと云ひ、書入れにも工夫を凝らすべきかと云ふに依りても、彼が細心精思の人であることが知られる。實際種彦の著作は頗る念の入つた凝つたものであつた。

物之本江戸作者部類には種彦を評して「初めは讀本のみ綴りしが、文化の季の頃より、讀本を綴らず、臭草紙の作を旨とせり、文化丙子の新板、正本製（じたて）といふ合卷物（歌川國貞畫、西村屋與八板）時好に稱ひて、數編相續いで出たり。此の合卷、文を少なくして、畫を旨とす、其の畫精妙、本文に勝れり。又文政十二年の春の新板、田舍源氏と云ふ合卷冊子、世評嘩がしきまでに行はれたり（鶴屋板）。こも畫は國貞にて、其の綺ます〳〵妙なればなり、既に數編に及べり、（但二十張合卷二冊を一編とす）。是れをもて當今臭草紙の巨擘と稱せらる、其の身に於ても自負甚しと云ふ。此の人さしたる學力もなけれど、狂才は餘の作者の白眉たる事、世の婦幼の評する所なり。聞くに舊き義太夫本數十種を藏弆して、戯作の種とし、且西鶴が浮世本、八文字屋本などをも多く藏めたりと云ふ、さもあらんか。思ふに元祿年間より源氏物語を無下に俗文に綴り、更めて、婦幼の玩び物にせしも多かり。そは女五經あかし物語五冊（延寶九年の印本なり）、風流源氏（元

篋中の古板なり）、若草源氏（寛永三年の印本なり）、雛鶴源氏（右の後篇なり）、嵐源氏（享保三年の印本、江島生島の事を仄かして作り設けたるなり）、此の餘なほあるべし。田舍源氏は竊かに是等のを父母として作り設けたるなるべし。本を得知らで、末を取るはなべての世の常なれば、昨日今日は某の源氏など云ふ中本物さへ出て種彦の顰に倣ふもありと聞きにき。かばかりの作者にだも及ぶ者のなきを思へば、實にも離しといふべし」と賞めるのやら、けなすのやら、皮肉の評を加へてゐるが、文と畫と相待つて、讀者の感興を惹かうとする所に作者の働きがあり、種彦が芝居狂言好きは、趣向に芝居がゝつた所の多いも無理ならぬ事である。終には「勢田橋龍女の本地」と云へる、彼が讀本淨瑠璃と云ふものまでも作るに至つたのである。西鶴の遺稿と稱すれども、事實は然らざるものに「西鶴諸國話」あり、八文字屋本に「其磧諸國物語」あり、而して種彦に「邯鄲諸國物語」あれば、「西鶴が浮世八文字屋本などをも多く藏めたりと云ふ」との評も必ずしも不當ではあるまい。なほ考ふれば西鶴の「好色一代男」は今樣源氏物語であるが、種彦は更に一歩を進めて、市井の世之介を化して、大奧の光氏としたとも云はれよう。して見れば、作者部類の評も強ちに棄つべきものでもない。

種彦は穩かな柔和な、氣品のあるお旗本であつたから、他の作者のやうな放蕩者や高慢辯はな

あつた。若し彼の癖はと云へば、好古癖であつた。曲亭馬琴の考證には、極めて厭味が多く、物識り振が鼻の先にぶら下つてゐたが、京傳と種彦との好古癖は嫌味がないばかりでなく、風俗史上に有益なる資料であつた。種彦の隨筆『用捨箱』、『還魂紙料』は、いづれも好箇の考證物であるが、流石に種彦は芝居好きだけありて、芝居や淨瑠璃、音曲に關係したものが割合に多くある。好色本目錄も、吉原書籍目錄も、彼が博覽多識なるを窺ふべく、此の他にも『骨董はりかへ』『文箱の紐』等あり、彼は叢書を涉獵し、遺物を搜索し、其の好古癖を以て、綿密に考證したのであつた。此の好古癖は自づと彼の作品の上にも現はれて、文章にも、繪畫にも、行き屆いた穿鑿の跡が見える。其の一例として、本編中に收めたる『近世怪談霜夜星』第三卷の吉原の光景を抄錄して見よう。

龜角なす閒に、はや柳巷に到れば、太夫、格子、散茶、梅茶、次女郎、局見せまで、品々の女郎は五町にところ狹く建て竝べ、櫻の顏ばせ柳の腰の花娘、我劣らじと粧ひかざる。其の一二は、早川、三河、江口、定家、家隆、吉田、相摸、河内、坂田、せいしゆ、政當、萬世、小宰相、大よし、小よし、半太夫、吉十郎などゝ、これ一時の花魁なり。禿花車つきそひこ、戀たち道中揚屋行の華やかなるは、筆に及ぶべうもなし。菅笠、市女笠、奇特頭巾、摺箔したる袖折姿は遙か昔になりゆき、瑇瑁の櫛象牙の笄には、金粉もて唐花を

靑かせ、千種染、三好染、加賀絹の色染、縫ひ入れたる大礒風の結び髪、きしたる肩に、友禪染の丸づくし、禁閣にしたてたるわらはげたるあり、又は山路、須崎の染模様、うち出し鹿子に、吉長の小色染をかさね、帯はすぢ天鵞絨のはやり結び、ただんわけに結びたるは、都を慕ふ風流なるべし。此の頃よりすべて芙蓉といふ字のはでを學び、一様に絹子鼻緒の馬下駄は一様にしていと目だち、手々に團扇を持つあれば、人形をかい抱くあり、群れ集まるかひこ共は、ちよたを已がじしに歩む。品あるなかに、朧富士の野郎笠は肩を隠し、辰之助染に黄繻子のうちつけたる羽織、はつばの大小を片岡風にさしたるは、助七が刷毛め鞘なるべく、淡竹紫竹の杖つきたるは、よしや風呂丹前姿の餘風なり。釣髭の男は兎のおんのしと云うて、頭より羽織をかぶり、角太夫節の七小町、初音、三井寺など、せきしゆぶれの扇うち鳴らして歌ひ、高崎足袋、細緒の奈良草履、朽木綿の丈短きを著たるは、浪花人と見え、中川喜雲が口あひを云ひ、鹿子ゆび扇をりをみしめしてみれば、鶯くもむべなり。其の餘は今様帯の手綱染、蜻蛉結びの茶筅がみ、紫の置頭巾、燒印なしたる菅編笠、ぞめき空手振は、玉水鈴蟲のうた、正宜の道行、養の上の浮瑠璃、井筒、のんやれぶし、小諸節口々に喚き、美少年は蜘蛛のいくつわの大模様、白縮緬の綿入羽織、雲間ぐゝみ、緋ぢくしのだてなるあり。南にめぐり、北に去る、賑ひ更に云ひ盡し難し。

これ文化文政の北郭にあらずして、遠く時代を隔ちたる風俗史上の吉原であつた。好古癖の彼は

時代風俗を其の好みから展觀したのである。

彼が藏書の今傳はるものを見るに、大抵書入れして深切に考證してゐる。しかも彼の考證には些の慢心なく、更に厭味のないもので、披閲するものをして、其の博識に深厚の敬意を拂はしめるものがある。

彼の文學上の作物は全く彼の道樂氣から出てゐる。彼は幾多の作家よりも晩く世に生まれ出たのであつた。然も彼の著作時代は江戸文化の最も爛熟した、江戸の全盛期なる文化文政年間であつた。大御所樣なる徳川家齊が榮業を極めた風流第一の時であつたのである。即ち文化四年、南仙笑楚滿人は此の年を以て歿したが、敵討物の猶全盛を極めたる時、青本は其の前年を以て安政四年より三十二年を經て、其の體裁を變じたる時に、始めて『奴ノ小萬物語』四冊の合卷草雙紙を出したのである。草雙紙の合卷は、文化三年、式亭三馬が『淺草觀音利生仇討雷太郎強惡物語』十卷を出したのを以て、其の嚆矢とする。後に重板して、『雷太郎姦雄物語』又は『雷太郎姦惡物語』と云ふもので、十冊を合卷として非常の好評を博し、三馬自身も、生涯自負したと云ふ事である。『青本年表』に、「此の年（文化三年）三馬作『雷太郎』『合卷の初めといふべし、此の本出てより世上の稗史すべて合卷となれり。」とあるは、即ちこれである。種彦は此の年また『江戸紫三人兄弟』の初篇を

出してゐる。のみならず『阿波之鳴門』五卷の讀本も亦此の時代に公にせられた。之よりして後、讀本及び合卷の著は續々公にせられたが、讀本は合卷の多きに及ぶべくもなく、彼は實に合卷の作家であつた。まだ青春の血氣盛り二十五歳であつたから、油の乘つた時代であつた。彼よりも二十歳前後の年長者であつた京傳、馬琴、一九、三馬が猶盛んに活動してゐる時に、彼は健氣にも合卷の形で文壇に乘り出したのである。此の年馬琴は『園の雪』、『墨田川梅柳新書』、『雲妙間雨夜月』、『椿說弓張月』後編、『松浦佐用姫石魂錄』前編を著し、京傳は『敵討岡崎女郎衆』、『お六櫛木曾仇討』、『敵討千鳥玉川』、『敵討白藤源太談』、『絲車九尾狐』、『俠雙蝶々』、『岩井櫛粂野仇討』、『俠客雙蝶々』を公にし、十返舍一九は『東海道膝栗毛』六編を出した。式亭三馬の『浮世風呂』初編は二年を隔てゝ文化六年に出版されてゐる。之より後、年々種彦は著したが、其の作物の一覽は次の如くである。

讀　本

阿波之鳴門　五冊（北齋畫）　　近世怪談霜夜星　五冊（北齋畫）
淺間嶽面影草紙　三冊（北嵩畫）　　淺間嶽後日逢州執著譚　五冊（北嵩畫）
綟手摺昔木偶　五冊（重信畫）　　勢田橋龍女の本地　三冊（北齋畫）

風俗傳　五冊(不明)

草雙紙

奴小萬物語　四冊(桃川畫)

鱸庖丁青砥切味　七冊(北嵩畫)

梅櫻振袖日記　三冊(國丸畫)

錦帶淮無間　六冊(重信畫)

花紅葉一對若衆　三冊(重信畫)

忠孝義理詰物　六冊(同上)

高野山萬年草紙　六冊(重信畫)

女合法辻談義　六冊(清峯畫)

正本製　二編　六冊　小いな半兵衛(同上)

正本製　四編　六冊　おきく幸助(同上)

正本製　七、八、九編　十八冊　お染久松(同上)

國字小說三蟲拇戰　六冊(前編國貞 後編國丸畫)

江戶紫三人兄弟　八冊(同上)

京一番娘羽子板　六冊(重信畫)

春霞布袋木地　三冊(重信畫)

花吹雪若衆宗玄　六冊(春扇畫)

女模樣稻妻染　六冊(同上)

近松門左衛門會我昔狂言種彥修訂　三冊(國貞畫)

滑稽豬鳥囀　二冊(國丸畫)

正本製　初編　六冊　於仲清七(國貞畫)

正本製　三編　九冊　二代源兵衛(同上)

正本製　五、六編　十二冊　二ッ葉々(同上)

正本製　十、十一、十二編　十二冊　夕霧伊左衛門 花咲綱五郎(同上)

合三國小女郎狐　六冊(重信畫)

千瀨川一代記　六冊（前編國貞 後編貞秀畫）
南色梅早咲　六冊（重政畫）
畫傀儡二面鏡　六冊（同上）
娘修行者花道記　六冊（國貞畫）
傾城盛衰記　六冊（國直畫）
浮世形六枚屏風　六冊（豊國畫）
小かん平兵衛莊飾錦額無垢　五冊 柳川合作（美丸畫）
色ちら吉田緣藤澤　六冊（同上）
孝貞兩岸一覽　六冊（國直畫）
鯨帯博多三國　六冊（國貞畫）
女郎花喩言粟嚢　六冊（國貞畫）
新藪八百屋藏開　六冊（同上）
燈籠踊秋花園　六冊（同上）
近江表座鋪八景　六冊（同上）

桔梗辻千種衫　五冊（國貞畫）
此らん蝶絲二箇裂手綱紫　六冊（國貞畫）
淺間嶽煙姿繪　六冊（重信畫）
娘金平昔繪草紙　六冊（同上）
鄙案道中雙六　六冊（國貞畫）
浮狂言三勝嘶　六冊（國貞畫）
忍寶對花籠　五冊（國貞畫）
浮世一休郭問答　六冊（同上）
操競三人女　六冊（豊國畫）
比翼紋松爾鶴賀　六冊（豊國畫）
水木舞扇猫骨　六冊（國貞畫）
小脇差夢蝶鮫　六冊（同上）
唐人髷今國性爺　六冊（同上）
花紅葉名所扇　六冊（同上）

鷹金紺屋作早染　六冊（同上）
人形筆五色絲藏　六冊（國貞畫）
柳絲花の組交　六冊（同上）
忍笠時代蒔繪　四冊（國丸畫）
誂染遠山鹿子　二十四冊（國貞畫）
同二日目怪談三島お仙　四冊（國貞畫）
花櫻木春夜語　四冊（英泉畫）
奇妙頂禮地藏道行　二冊（同上）
邯鄲諸國物語近江の卷　八冊（國貞畫）
同三編播磨の卷　十二冊（同上）
自問自答戯言句合　二冊（國芳畫）
ふしみときはくまさか物語　四冊（國貞廣重畫）
昔話浦島ぢゝい　三冊（貞秀畫）
火焚ばゞ　二冊（同上）

笹色猪口ハ暦手　六冊（前編豐國二編二世豐國畫）
蛙歌春土手節　六冊（國貞畫）
伊呂波引寺入節用　十二冊（同上）
關東小六昔舞臺　十二冊（重政畫）
昔々歌舞伎物語　四冊　初日夕ぎり幕うら葉（國丸畫）
富士裾野こがれの蝶貝　四冊（英泉畫）
三つ瀬川上品仕立追善物　二冊（國貞畫）
出生奴小萬傳　四冊（國直畫）
同二編大和の卷　十二冊（同上）
讀宮城野忍昔　四冊（國貞畫）
おきく幸介お夏清十郎縁結月下菊　三冊（國貞畫）
娘丹後奴惠記堀川歌女猿曳　六冊（重信畫）
きちちやんとん〳〵　三冊（同上）
茶番いろは　二冊（同上）

偐紫田舎源氏　初篇　桐壺　毎編四冊づゝ（國貞畫）
同　二編　桐壺、帚木、あふひ（同上以下同じ）
同　三編　空蟬
同　四編　夕顔の上
同　五編　夕顔の下
同　六編　若紫
同　七編　末摘花
同　八編　紅葉の賀
同　九編　紅葉の賀
同　十編　末摘花
同　十一編　あふひ
同　十二編　花の宴
同　十三編　榊
同　十四編　榊
同　十五編　榊
同　十六編　花散里
同　十七編　須磨
同　十八編　明石
同　十九編　明石
同　二十編　明石
同　二十一編　明石
同　二十二編　みをつくし
同　二十三編　みをつゝくし、蓬生
同　二十四編　關屋
同　二十五編　繪合
同　二十六編　松風
同　二十七編　薄雲
同　二十八編　松風、朝顔

同　二十九編　朝顔
同　三十一編　玉柱
同　三十三編　初音
同　三十五編　螢
同　三十七編　野分、みゆき

同　三十編　玉柱
同　三十二編　乙女
同　三十四編　初音、胡蝶
同　三十六編　常夏、かゞり火、野分
同　三十八編　藤袴、巻ばしら

雑　書

還魂志料　二冊
足薪翁百話
吉原書籍目錄　一冊
文箱の紐

用捨箱　三冊
好色本目錄　一冊
骨董ほりかへ

旗本八萬騎及び御家人のうちには、歌舞音曲に浮身をやつす者さへあつた時代である。五千石を捨てても、君と一夜の歡を倶にせんことを希ふ武家さへあつた時代である。種彦が軟文學趣味に奔つたのも偶然ではない。

遮莫、旗本出身だけあつて、文章に品位のあつたことを否むことは出來ぬ。趣向に芝居がゝつ

たところはあつたにせよ、彼には卑しい、さもしい、齷齪したところがなかつた。機鋒の鋭いところ、才氣の穎脫したところ、穿つたところ、通なところはなかつたが、どこやら鷹揚な、悠揚迫らざるところがあつた。固より彼の家柄と、生まれと、教育と、趣向とが然らしめたのであるが、太平なる時代の影も射してゐたのである。

種彥と豐國

若し源氏を今樣風に書き直すものありとすれば、其の適任者は種彥を措いて他に求むべき者はない。西鶴の世之介は唯の漁色家で、暗い影の描寫に過ぎなかつた。そこには義理や人情のいきさつは描かれなかつた。他の源氏を冠する物も、要するに名を假りた些細の述作に外ならない。偐紫田舍此の間に在りて、今樣源氏を著さんと努力した彼は、彼として最も善い著眼であつた。源氏は彼の生命となつたのである。

源氏物語は我が文章中最も大なるものにして、蓋し其の述作の時代に於ては、世界を通じて、あれ程の大文學はない。否當代のみならず、古今を通じて、稀に見るの大著である。源氏の一生を描きたる四十四帖を正編として、薫大將を主人としたる宇治十帖を以て其の續編とする。男女

の戀愛を以て骨子となし、搢紳社會の裏面を描寫したものではあるが、作者の人生觀、佛教の感化は著しく其の間にあらはれて、寫實の影に理想の光が閃いてゐる。前後に照應あり、伏線ありて、一波は千波萬波を生じ、或ははかなき戀、道ならぬ戀、或は情の淺き深き、淡き濃き、華やかなると寂しきと、嬉しきとかなしきと、種々多樣にして、人情の機微を穿ち、盛者必衰の理、因果應報の律を隱約の裏に述べてゐる。筆のめでたきは云ふもさらなり、卷々の終りが一樣の體ならざるが如き小事に見ても、作者の用意と才筆とは驚嘆するの外はない。情を寫すの巧みなるは固より云ふに及ばず、其の景を敍ぶるの妙を得たる、一讀三嘆の價がありて、情景雙絶の域に入つてゐる。

然し源氏の世界は平安朝で、京洛の天地であつた。これにては當時の讀者を滿足さすることは難いから、これを通俗に引直したのみならず、これを今樣に飜案したのである。大御所が贅澤を極めて、内寵の多かつたのは、種彦をして、好箇の思ひ付きをなさしむるに足つてゐる、種彦の物數寄は手傳ひて、豐國の插畫は一に西丸の殿中裝飾に據つたと云ふ事である。然し此の書の世評喧しかつたに就ては、國貞の插畫が與つて力が多かつた。

歌川國貞は初代豐國の門人で、氏を角田、俗稱を初め庄藏、後に香藏と云ひ、五渡亭又は香蝶

樸と稱した。腕の達者を以て聞え、美人畫殊に役者畫を多く畫いた。自ら二代豐國と稱し、一陽齋と號したが、事實は三代である。浮世繪史から云ふと、頽廢期の作家で、軟か味が乏しく、品位も浮世繪全盛時代のものに比べると劣つてゐる。然し草雙紙の插畫としては、種彦の文と相待あつて、其の說明をなすに最も適當してゐた。正本製や田舍源氏が彼の插畫を得て、光彩を放つたことは云ふまでもない。

然し田舍源氏は世評喧しく種彦の名は遠近に聞えたが、終にこれに依りて、彼は累を受くる事となつた。天保十三年の水野越前守の改革、即ち天保の改革又は水越の改革として知られた極端なる改革は到る處に波を揚げ、飛沫を點じ、種彦も田舍源氏の爲に咎を蒙り、田舍源氏は絕板を命ぜられた。恰も病後の種彦は元來小心の几帳面家であつたから心痛し、此の述作を終ふるに至らず、三十八篇を最後とし、天保十三年七月十八日、六十歲にて身歿つた。辭世の句に云ふ、

散るものにさだまる秋の柳かな

又、

源氏の人々のうせ給ひしも大方秋なり

秋も秋六十帖をなごりかな

赤坂一つ木平河山淨土寺に葬り、法諡を芳寛院殿勇譽心禪居士と稱した。其の家今に連綿として、後裔は遠州濱松に住してゐる。

京傳と豐國とも文畫相助けてゐたものの、種彦と國貞との密接なるに比すべくもない。種彦の草雙紙の半分は畫で讀ませるのである。田舍源氏が盛行した半分の理由は、國貞の畫が與つてゐる。要するに黄表紙が變化して長くなつたのである。然し種彦は畫を國貞に任せ切りで、唯文章だけ書いてゐたのではない。好古癖考證癖がありて、根が凝性であり、『戲曲作者も全體は上手にてよく綴るといへども、描き畫工に描かれ、惡しき彫工の手にかゝり、外題ともに惡しければ、榮なくして賣れず、當りを取る事難かるべし。』と云ひ、『畫わりにも工風を凝らすべきか。』と云ふほど、插畫には苦心してゐたのである。元來種彦は芝居好きであり、國貞は役者繪に長じ、腕達者と來てゐるから、相提携するには、まことに恰好であつた。

一言にして盡せば、彼は丹念家であつた。彼の稿本を見ても、其の文字と云ひ、下繪と云ひ、極めて丹念である。池田金太郎氏所藏の『邯鄲諸國物語』(卷頭口繪)の稿本を見れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。尤も江戸時代の作家は、京傳にしろ、馬琴にしろ、其の他の作家、何れも草稿には入念であつたが、取り別け種彦は一字一畫苟もせざる風がある。猶口繪の火燵の自畫贊

ら池田氏の珍藏である。

讀本と草雙紙

種彥の讀本は數も少ないが、傑作もない。彼は到底讀本作家でなかつた。黃表紙や洒落本は流行過ぎての事であるから、固より種彥以前の作家のやうに此の種類には筆を染めなかつた。『春情水揚帳』は此の種の本の作家のそれと當りはつくが、多くは不明であるのにかゝはらず、種彥の作として知られ、又此の種の中の傑作と推賞されてゐるが、さほどの名作とも思はれない。彼の特色は草雙紙にある。

『偐紫田舍源氏』は彼をして不朽ならしめたものであるが、國貞の表紙の美しいのが、どれほど力となつたことであらう。此の他彼の力作に『正本製』と『邯鄲諸國物語』とがある。後者の初篇の發行は、『田舍源氏』十一、十二、十三、十四編發刊と同年であり、最後の三編は、『田舍源氏』三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七編と同年の梓行であるから、彼の作としては、晩年の著述にかゝる。各卷々は獨立してゐるが、又人物と事實との連絡があるから、通じて之を讀んで、首尾相應じてゐるところに興味がある。各卷には何れも劇の香が搖曳して、淨瑠璃飜案の

眞蹟がしたゝかに見える。此の點は馬琴などが支那小説より脱化して來たのと類似してゐる。彼は其の書く「淺間嶽面影草紙」のはしがきに、「此の書は淨瑠璃本を飜案し云々」と云つてゐる程に、淨瑠璃飜案家であつた。

「昔語諸國物語」と云ひ、『修紫田舍源氏』と云ひ、「正本製」と云ひ、彼の草雙紙には觀るべきものがあつた。殊に趣向よりも、寧ろ彼の文辭は洗煉されて、こゝにも彼の凝性が見えてゐる。笠亭仙果が「昔語諸國物語」の續篇を書いて、狗尾續貂の譏を免れないのは、一つに文章のはたらきがあるからだ。彼の草雙紙は此の讀本ほどに文章に凝つてゐなかつたが、それでも畫と文章とで華やかであつた。

随筆家としての種彦

隨筆のうち風俗史の資料となるべき有益の書中には、山東京傳の「近世奇跡考」、「骨董集」、山東京山の「歴世女裝考」と、種彦の「還魂紙料」、「用捨箱」とが必ず擧げられる。

「還魂紙料」（二冊）には種彦の嗜好が見え、因幡が淨瑠璃附近江節、淨瑠璃節の起原、夷屋吉郎兵衛附蘆城貫の狂言坂田藤十郎、八百屋お七の歌舞伎、花天國附六段目、七々踊、玉川千之丞、

柴垣、など、淨瑠璃、歌舞伎音曲に關したものが多い。此の書は文政九年十二月の發行で、猶二編及び『ふる元結』の豫告がしてあるが、刊行には及ばなかつたものと見える。『用捨箱』(三冊)は天保十二年の開板で、種彥歿する前一年の物である。これにも六方詞、捨てあるといふ小歌、土手節加賀節、淨瑠璃本刊行の初め、奥淨瑠璃、瀧井山三郎などがあるが、『還魂紙料』に比しては此の種のものが少ない。然し兩書共に柳亭該博の知識が見えてめでたい隨筆である。彼の隨筆は唯思ひついた事、感じた事、聞いた事なんかをさら／＼と書き付けたものではなくして、必ず實物に依りて博引旁證し、多くの畫圖を插入して、綿密に考證してゐる。卽ちあらゆる材料を提供し、最後に斷案を下してゐるのだ。例へば秋色櫻を考證するに、貞享中の江戸繪圖、延寶の安見之圖、東叡山の古圖、『柴の一木』、『雜談集』、『富士石』、『花時鳥』などを以てし、上野の古圖を縮寫し、最後に、『秋色は享保十年四月十九日歿す、行年詳かならざれど、男女の子あまた儲け、旣に孫もありと聞けば、夭死にあらざることは論なし、先づ試みに享年を五十と定むる時は、十三歲は延寶八年に當れり、縱ひ幼なけなる口つきにても其の時代の調は自然と知るゝ物なれど、彼の櫻あぶなしの句は延寶の調にもあらず、今の地に觀音も立たせ給はず、恐らくは後人此の句を作りて、附會の說を設けしなるべし。』と云つてゐるが、これを京傳の『近世奇跡考』、『骨董集』の

秋色櫻に唯秋色傳の考證をしてゐるのに比すると、別種の趣がありて、好古癖考證癖の深きを見るに足りる。此等の書は後世を益すること、誠に多大で、他の隨筆とは、選を異にしてゐる。

近世怪談霜夜星

五卷、文化三年の作で、種彦の讀本の一である。文化三年と云ふと、種彦二十三歳のときである。文化五年の出版にかゝり、插畫は北齋が描いてゐる。種彦の文藻は此の頃にも既に現はれて、めでたき文章である。目錄はひどく氣取つたものだ。醜婦の死靈が蛇となつて、執念くつき纏ふ物語で、四谷怪談などの手本である。頗る因緣づくめの怪奇小說である。

阿波之鳴門

五卷、同じく讀本で、文化四年の板、北齋畫。淨瑠璃にある阿波十郎兵衞、お弓、お鶴を主題としたもので、十郎兵衞が海賊生活を營み、月夜に管絃を催す畠山多門の樓船を襲ひて、多門を討取り、其の妻弓子を奪ふ。弓子は心ならずも十郎兵衞の意に從ひ居るうち、計らず順禮唄歌ふ我が子のお鶴を殺して自害する。然し鶴子は高麗人の仙藥蘇生丹にて蘇生し、母の靈に助けられ

て大和川原にて十郎兵衛を討取ると云ふのを以て大團圓とする。

水主楫取等を揃へ、折しも風よしとて帆十分に引上ぐれば、をさな車は十餘町を走り、岸の人の小さう見えしも、霞の中に隱れゆき、今は此の渡船も彼の岸より見えずやなるらんと心細く、遠方を望めば淡路島山の畫圖の如く、海上に浮み、その餘は唯浪の白きのみぞ見えける。程なく日も暮れければ船をとゞめ、明くれば又西風強ければとて船を出さず、押鮎鮨鰒保夜の交鮨ひじきもを菜として、酒のみてさゞめきわたり、明くれば走り、暮るれば泊り、ゆく／＼てあけの日は阿波の鳴門を過ふべしと、とある港口に船を止めけるが、其の夜は春にも似ず、月明らにて面白しとて、多門は屋形船に上り、またの障子を推開けば、雲も浪にぞ見ゆる。海原に、孤月清明として東天にのぼり、棹は穿つ波底の月を、船は壓ふ水中の天を、といへる詩さへ思ひ出て、扇を鳴らして眺めゐたり。弓子は別船にて湯をひき、顏に紅粉を施さざるは、雅を慢じてにやあらんと心憎く、みのしろ衣をさふふく風に飜し、紅玉の膚をあらはせしは、龍神の難を恐れざるにやと危し。

と、土佐日記などをあしらつての文章は、流石に種彦たる所である。

淺間嶽面影草紙

三卷、讀本、文化五年板、北嵩畫。淺間嶽の淨瑠璃を飜案したものである。侍女時鳥の殿中にて責めさいなまれ、嘲弄されるくだりが、妹脊山のお三輪から來たのは云ふまでもない。「煙、翠色を埋みて千里に連なり、日、晴嵐を射て、一方に聳ゆ、危巓を擧んで風木の葉を簇げ、懸泉布を垂れて水聲礁を打つ。」の如き、「遠水漠々として天に連なり、蒲浦の楊柳絲を吐き、風起つて細浪魚鱗を刻む。」の如き漢語調の形容が處々目立つて見える。

逢州執著譚

五卷、「淺間嶽」の後編で、文化九年の板、插畫柳川重信。富本常磐津の淨瑠璃を本として作つたと云つてゐる。淺間ヶ嶽の狂言は元祿以後の當り狂言として知られたもので、「傾城淺間嶽」の狂言本にも、「いにしへより當り狂言おほしといへども、山下半左衞門の嫁鏡は五度のくりかへし、坂田藤十郎の夕霧狂言は十八度の大當り、中村七三郎の淺間嶽は三都にて數多度の興行あり、これを歌舞伎三大部といへり。中頃竹本筑後掾淨瑠璃にも名筆傾城鑑に淺間の趣向を立入れたり、それよりして石橋の所作事の口明には柔に歌をうたはせる鬻籠界のをかしみより怨靈の景事まで今に狂言の殘りしは七三郎の功云ふべくはあらねど云々。」とある。中村七三郎は元祿十一

年正月二十一日より京都にて傾城淺間嶽を演出し、大々當りにて百二十日間興行したこ外記節の古きより、一中、富本等、何れも淺間嶽の淨瑠璃がある。外記節の古きは、此の編の巻首に出てゐるが、一中では、

（上略）巴之丞も奥州がみひとつならぬ山吹の黄なる泉の未來までいざ伴はんこたたへと、情の露もおく二階、梯子の立浪ばた〳〵と立寄れば、「瞋恚の緋櫻烈々として膚を犯し、「炎に咽ぶ鹽竈櫻、又煩惱の犬櫻、「追へども去らず目前に尖き劍の山櫻、「身に降りかゝる花吹雪、なう苦しやと泣きさけぶ涙と漲る流櫻、「岩に碎けて玉散る思ひ、「實に燒魂の炎熱と結びもとめぬ、したがひの夫（つま）よ〳〵と呼ぶ聲ばかり忽ちもんざい消滅しこ迷ひの雲も晴れ渡り、姿はもとの家櫻、花の都と榮えけり。

と、櫻盡しとなり、富本では、

（上略）未來の罪は現在の果によるものを、さなきだに、「指切り、「髪切り、「僞りの、起請の血潮は紅蓮の波、うその涙の水まさる、三途の川の唐紅、劍の山は此の山から我と貫く刃の苦しみ、合「人の思ひにあこがれこ、「此の身を焦す、「焦熱の、合「炎の責も諸共に、奈落の底までも、合「離れはせじと附き纏ひ、くるり〳〵〳〵と、追ひ廻り〳〵、輪廻の車、煩惱の、きづなに引かるゝ我が魂（たま）を結びとゞめよ、したがひの、合「つまよ〳〵と呼びかはす、聲も亂るゝおぼろ影、見えつ

見えずみ、今は幻の姿は消えて陽炎の、もえだんに飛び交ふ花の蝶、手にも取られずちら〳〵〳〵、む風に亂るゝ白粉も梢に殘して草がくれ。

と、謡で結んでゐる。此の煩惱の菩提は謡曲の善知鳥（うとう）や藤戸から來たもので、長唄の高尾懺悔なども同一轍である。此の篇は芝居狂言で石橋を用ゐたのに從ひて、獅子舞にしてゐるが、やはり一時に二つの胡蝶は彷彿として、五郎藏杜鵑花（さつき）が姿と化し、あら歡ばしや、多年の宿意を晴らし參らせんと思ふから、魂魄中有にさ迷ひ、影身につき添ひまゐらせしが、今ぞ成佛なし侍ると、又もとの胡蝶となり、虚空遙かに飛びさりければ」と胡蝶を使つて卷を畢つてゐる。

勢田橋龍女の本地

三卷、文化八年の板、葛飾北齋畫。讀本ではあるが、種彦が名づけて讀本淨瑠璃と云ふものである。「此の書つねの小説とは異なれど、強ひて節を下さんとにもあらず、院本ともまた等しからず、共に相半ばする一體の書なり」とあるがごとく、作者の道樂氣から起つた著述ではあるが、流石に種彦だけあつて、「此の書すべて平安堂（近松門左衛門）が作例にならへば、たてがけのんこ（男子の髪）鳴笏（女子上に同じ）ぬめりあるく（歩きゝなり）なんど、其の頃の流言を用ゐたるところもあり、

亦、『囃子は何か白木のこなか』二一冊のうち八人合のこの類、此の道先達の作意をその儘に寫すものが多いこと、述べてゐるほど、中々に凝つた所が多い。作意は大したものではないが、文章は大凝りに凝つてゐる。先づ（法の華／錦の花）頓作御經苦海經に讀者をあつと云はせる趣向、洒落としては極めて念入りの洒落である。海神が琵琶湖の名所を說明するくだり、これも亦頗る念入りのものである。とにかく文章の勢ひで面白く讀ませるところが作者の働きである。附言に、「秀郷海神多門小織がゆく〳〵、老狐再び龍女と化すること、勢田の橋龍女の宮の緣起なんど後編にくはし」とあれば、後編を出すつもりであつたと見える。とにかく道樂氣の勝つたもので、此にも作者の癖が善く現はれてゐる。

綟手摺昔木偶

五卷、文化九年の板、插畫は柳川重信。種彦の讀本としては最後のものである。例の好古癖から出た作で、「松の葉」にある端唄「一世にこゝにあはれらしきは、散茶歸りのふじ吉云々」に興味を催して、當度の吉三なるものを假り、之を主人公として綴つたのである。卷頭にある綟手摺の考證、つゞいて目次は編笠の名寄せで、一々之を考證してゐるなど、流石に種彦ならでは出

來ぬ莫當で、嫉妬を禁じ得ぬ。地獄變相の酒宴、水菅の胸を刺したる鑓の舞など、處々に由があつて面々に面白い。文章も、取つたる衿を思はする、放せばはらりとこぼるゝ裳、錦の襷は時ならぬ、花を散らすや夜嵐に、傳ふる野寺の鐘の聲、さゝめく星の影見えて、清きは留むる遣水を身をひらめかし躍り越えこの如き、其の夜も既に更闌けて、松吹く風も物凄く、漲り落つる川波の、音すさまじき乙路の里、時こそ來れ落ちゆかんと、咲き殘りたる卯の花垣の如きの類、到る處に散見して、作者の錦心繡腸を思はせる。

正本製

初編、お仲清七、六卷、文化十二年板。二編、小いな半兵衛、六卷、出板年號不明。三編、九卷、二代源氏物、一名顏見世物語、文化十四年板。四編、おさく幸助七役草紙、六卷、文政三年板。五編、六編、二つ蝶々、合十二卷(其の內五編六卷、文政五年板)。六編六卷、同六年板。七編、八編、九編、お染久松、合十八卷(每編六卷づゝ、七編、文政七年板、八編、同八年板、九編、同九年板)。十編、十一編、十二編、夕霧伊左衛門、花咲綱五郎、合十二卷(每編四卷づゝ、十編、文政十一年板、十一編、同十二年板、十二編、天保二年板)、插畫は歌川國貞。草雙紙。作

者の芝居好きは此に至りて、其の極に達してゐる。すべて芝居がゝり、初編の口繪は、皆樂屋裏で、立川焉馬の似顔なども出てゐる。插繪にも佐柄天神の場などが描かれ、卷の終りは「一打連れ切戸へ入りにけり。」「又花水屋の二階に戻る。」などとあり、編末は「まづ後編はこれぎりめでたく打出し。」と結んでゐる。三編は顔見せの暫、大薩摩淨瑠璃などがあり、西村屋（書店）見世の者口上と題して、

先づ以ちまして當店御愛顧と御座りまして賣出早々益々數御購求下さりまする段板元與八は申上升るに及ばませず、總て草雙紙に打懸り升る者共心魂に徹しまして有難仕合に存じ奉り升る。扨當年は顔見合狂言の趣に書綴らせましてはございますれど、初編にも御斷り申しました通り眞實の狂言とは殊の外違ひました所も御座りませう。高か草雙紙ぢやと御覽し下さりまするやう偏に願ひ奉り升る。此所は淨瑠璃の趣にござり升れば則ち外題をお目に觸れます。「淨瑠璃名題、「戀川の昔摸、「戀川か今様、「寫浮世畫姿、「寫淨瑠璃、始まり左様に讀み被下ませう。

と、書肆の古代をなし、四編は昔模様女百合若と題して、水木辰之助が百合姫をつとめ、狂言作者近松門左衞門と記し、五編の初めには種彦國貞等が居並んだ畫を載せ、

「口眞口上」 私儀此度伊勢參宮より上坂仕りましたにつきまして、彼の地の芝居の趣を正本仕立五編目へし

たゞいまするやう板元のすゝめによりまして、又候相變りませぬ不束なる繪雙紙を御覽に入れます。

（種彦口上）圓眞申上げまする通り、板元の頼みに依りまして、愚作致してはござりますれど、私は上坂仕りましたこともござりませねば、彼の地のたねほんを借受けまして、唯からでもあらうかと推量ばかりおしあてゞあてると申すがえんぎになり、例年よりは百層倍、

（眞）お求め御覽のほど、

（兩人）偏に願ひ奉ります。

と、口上を述ぶる件よろしくあり、十編には、

（板元口上）東西々々引〆正本製と申す繪草紙、昨年まで九編相續きましたる處、御退屈も遊ばされず御高覽成下されまする段有難く仕合に存じ奉ります。隨ひまして當年も右の後を御覽に入れまする樣申附けましたる處、作者種彦申しまするは、私事本來歌舞伎不案内にて是れまで書綴りましたるは貞の推測(おしあて)の事故、はや趣向も之なく、右の作は宜しくれまする樣辭退仕りましたる折柄、市村座にて御評判の忠臣藏人形がゝりの大道具、其の長谷川が歌川が繪に寫し、淨瑠璃狂言幕なしの趣に書述仕りまする樣相勸め取敢ず御覽に入れ奉ります。はや十編に充てますれば、正本製の切り狂言に御座りますなれども、末編(すゑ)まではことゝ長ゝ御座りますれば、幾々御高覽の程を希ひ奉ります。先づは此の處戀ヶ窪出口の段始まり左樣東西引東西。

作者も畫家も板元まで打揃つての大芝居で、繪にそれ〴〵の趣向を凝らしてゐるから、芝居好きの人々には中々の評判であつた。（本集には、九編までを收めた。）

女模樣稻妻染

六卷、文化十三年板、柳川重信畫。草雙紙。吉川百合之助、名古屋お三、十部鹿藏、遊君遠山、鹿藏の娘畫筆、不破宗夫、宗夫の娘闇屋などが經絲になり横絲になつて織り成されたものであるが、大して面白いものではない。雨に燕の縫模樣した小袖を著、鮫鞘の細身の脇差と尺八を腰にさし、笠深々と被り、六法懸りに、大津の色町柴屋町を歩くは、父の仇を尋ねる名古屋お三、雲に稻妻の派手模樣、同じ出立の女俠は不破の娘闇屋、「此の尺八に吹きすさむ戀慕の仇、戀の仇、虛空にひらめく稻妻は不破の闇屋が染模樣、夕立雨よりは烈しい爭のうち受けて見や。」と不破と名古屋とを女に仕替へたのが此の書の趣向である。

國字小說 三蟲拇戰

六卷、文政二年の板、前、國貞畫、後、國丸畫、草雙紙。蛇、蛙、蛞蝓三蟲の精が宿つた因緣

話。例に依りて大分附會の多い小說である。舞臺は近江の湖水のほとり、浮見堂も出れば、柴屋町も出る。種彥の作には善く江州が出て來る。そはともあれ餘りに因緣づくめで、面白くもなく、たわいもないこと夥しい。蓋し拙作である。

浮世形六枚屏風

六卷、文政四年刊、歌川豐國畫。草雙紙に蘭譯英譯のあるので名高いが、それほど推賞すべき作ではない。自序にもあることく、「此の本に無いものは、先づ第一に敵役、異人妖術怪說、狐、狸、ひきがへる、家の系圖や寶物、紛失すべき物もない、親子兄弟名乘り合ふ、印籠かんざし割詮議、緣や佛の夢知らせ、腹切身替おきまり、血を見る事が少しもない。」とあるが、此の書の特色で、犬に打ちつけた石もろとも懷中から轉げ出した百兩包を投げ棄てたので、死ぬ氣になり、近松の曾根崎心中の道行を聞いて、覺悟をしながら、腹立ちまぎれに打倒す犬張子の中から、百兩包が轉び出たので、めでたし／＼の大團圓となる所、實にたわいもない物語である。末に三つ紋と三つ嶋とを考證してゐるなどは、此の作者の相變らずの好古癖。到る處に風俗資料が百兩包のやうに轉がつてゐるのは嬉しい。

種彦の小說には當時の讀本家に通じた癖があつて、因緣がひどく附き纏つてゐる。隨分取つてつけたやうな、しつつこいところに厭味を感ずるが、種彦の特色はどこかに品があつて、下卑たところが無い。彼の地位と人格とが然らしめたのであらう。種彦の門に笠亭仙果があつた。尾張熱田の問屋役で、通稱高橋彌太郎と云ひ、『八犬傳犬の雙紙』、『鹽屋文正 油屋お染 古今草紙合』、『國字傳水滸傳』、『三都妖婦傳』、『薄紫宇治曙』、『夢想兵衛胡蝶物語』、『八重撫子累物語』等の著あるも、種彦に比して、文章も趣向もいたく劣つて、所謂下手の長談義である。其の初めの『合はせ物端唄彈初』、『花街雀竹の夜遊』等七種の作は皆種彦校とあつて、まだ獨立した作家ではなかつたのである。此の他萼亭柳菊、瓢亭吉見種繁、柳泉亭種正等の門人があつた。草雙紙作家としては應亭萬賀があつて、『釋迦八相倭文庫』を著し、柳下亭種員があつて、『白縫譚』、『兒雷也豪傑譚』を作り、春馬、西馬、琴童、種清、秀賀等を初めとして、幾多の作者の名が見えてゐるが、種彦以後復見るべきものなく、遂に江戸の末期に至つたのである。明治初期の假名垣魯文等は、此の畑の中に育てられて、成長したものである。

解題卒

近世怪談霜夜星

霜夜星序

余罹寒疾屏居讀書。夜已初更。門有剝啄聲。家僮起而應之。則友人種彥
子也。乃謂余曰。吾為一大事因緣來。余驚而徐問其故。種彥子曰。霜夜星一編
既成。剞劂告竣。將以布世。但所少者足下序文而已。盍以速成諸。余
因思。數月前已有其約。以塵事紛々如蝟集。加之擗衣食于奔走。未暇
搆思也。就架上撿之。種彥子所贈草稿在焉。取而朗誦一遍。乃言曰。
天道恢々疏而不漏。積善有慶。積惡有殃。此古人眞實語也。夫伊兵衛花兒相見
于路傍也。名士佳人才貌匹敵。目挑心許。兩意已融液矣。若是時而婚焉。則琴
瑟好調鳳凰和鳴。何不善之有。唯其流離落魄伶仃孤苦。各々東西萍斷音絕。一
則蹤跡不定窶囊空磬。纔賴澤兒以餬口。一則被奪提徒落乎花街。終向快
保帳下為蕉酒兒。可見二人之緣於是乎休焉。既而紙窗故紙認花兒筆。

移居芝濱。鑽穴窺玉。百般不善自是兆。則安知不好因縁即悪因縁
乎。此學也使伊兵衛棄糟糠之妻。花兒辜負于恩人。人爲人之輕佻。可
以知耳。嫂婦冤魂爲祟。父子立地下世。不亦宜乎。求次郎於津島則不
然也。少年情癡事遊冶。桃花流水各々有情。更無驚蝶負心之行。其殺、、于官太
夫。則冥々有數耳。凡物過濃則歸淡。過淡則爲濃。此理之常。無
足怪者也。花兒津島之爲尼亦復爾爾。彼則思從前積悪漸々來報。愛著
姦心一時消盡矣。擲玉簪而代念珠。棄紅裙以著緇衣。積年之悪爲懺悔滅
矣。此則情人死賊。事起非常。頓思人世夢幻茫々無定。遂奉佛行脚。此
二尼所異也。夫水滸小說中第一書也。請擧一二以論之。打虎一也。武行者
以智黒旋風以刀殺婦人一也。宋公明出於不得已。武行者直情徑往。在於
報仇耳。此其所以稱妙筆也。今種彦子之作此編。才子佳人其事稍同。而其意
則異矣。母乃效顰水滸乎。種彦子莞爾而笑曰。然。自是燈下劇談不覺移
時。僮僕輩在傍者昏々然睡。種彦子曰。今日之會談。論如涌。可謂愉快也。

唯恨ムラクハ序文ノ不ルレ成ラ耳。余ガ曰ク。此ノ編機軸既ニ妙ナリ矣。何ゾ待チテ二余ガ文ヲ一而輕重セン。惟フニ足

下與レ余交情最モ密ニシテ。而更ニ無クンバ二一言以テ辨ズルコト一卷端ニ。則後世其レ謂ハン二之ヲ何トカ一。遂ニ錄シテ二前

言ヲ一以テ爲ルニ二之ガ序ト一。

文化丁卯歲孟冬朔日

江戸　柏菴玉家撰

于時文化三年丙寅夏
柳亭主人識

もくろく

かさもりのゆらい
わだやまのあれ（暴雨）
くわうみやうじ（光明寺）
かたみのかんざし
うみべのもみぢ
あふぎのこうじ（紅絲）
むつらわたり（六浦）
てがひのねこ
をろちのあやしみ（蛇）
きやうぢよのできし（溺死）
はなのちまた
ゆめのきじ（奇事）

つゝみ（堤）のむしのね

みづぐるま

あんだはゝきのきやうじん

ふるや（古屋）のきまくら

かまくらのけじ（怪事）

から（空）くるま

くさ〲のさき（茶器）

わたしぶね

あまがいほり

しやうご（鉦鼓）くわんおん

をはり

近世怪談霜夜星一卷

東都　種彦　著

機語上

笠もりの由來
和田山のあれ

「日は暮るゝ雨は降る野に袖ぬれてたどる旅路に頼む笠もり。」と、御詠歌となへ、鉦うちならして賑はしき。「上總國笠森觀世音菩薩は、むかし當國櫻井といふ所に、蜜をあきなふ農夫あり。それが娘を波木とよび、旦は早く起き夕は歸るさに月をいたゞき、わたり遠き奈留加の海へ出でて、めかり鹽燒の、いとまめ／＼しく生親男に仕へしが、一日思はず此の山をよぎりしに、觀音の靈像あり。雨露佛體に注ぐを歎き、おのが著たる笠を御佛にうち著せ進らせ、折しも五月雨のそぼふるに、苗ひきて居たるが、不思議や光明赫奕として、降りくる雨身へ一滴もかゝらざりしかば、やんごとなき御方此のさまを見給ひ、軈て波木をとりあげ愛妾となし、翁もろとも家富み榮えしより、笠森觀世音菩薩と名づけ奉る。」と、だみたる言葉にて緣起を物語り、「今日開帳の初めなり。」とて、諸人蟻の蜜に集まる

が如し。そも此の御堂といふは、四方峪づくりの舞台にて、總南に名高き精舍なり。蘭窗に彫りたる巧雲かさなり、繡柱にきざみたる玉龍めぐる。玉を敷き、金を鏤め、更に結構いひ盡すべからず。頃は彌生中の八日、心念不空の風あたゝかに、枯木の花開き、利益によりては、天に鳴る雷といふものも恐れ、實なき枇杷もとり得べく、心信肝に銘ずるの輩、往來しばらくもとだえなく、棒をつかひ刀を拔きて藥を賣るあり。或は刀玉打ち鐵鐶くゞりて錢をこふもあり。此の所に土人等とうち交り、見物なす一箇の武士あり。彼はもと房州海上山の麓、芳見のさとといふ所の產れにて、いと幼きより都方の、ある御館に給仕してありけるが、いぬる年芳見の里なる、父文治兵衛といふ者病ありと告げこせしかば、主人にいとまを願ひ、仕へを辭して故鄕に歸り、實やかに看病なせど、定まれる命にやあるらめ、父文治兵衛なき人の數に入りければ、悲歎言葉に演べがたく、程く忌みどもはてて後、伊兵衛心に思ふは、かかる山家に住居して、樵夫漁翁にともなひ、いたづらに月日を送らんは、人たる者の本意にあらず、さらば他國に移り、家の佳名をひきおこさんと、連路なれば此の觀音へ詣でしなり。彼は年いまだ二十に充たず、口に鷄舌をふくみ、手に蘭を握らずして、鄙に似氣なき風流士なり。日もはや西にうすづき、烏雀ねぐらを急ぐ頃なれば、いざや我も旅宿にかへらんと、夕陽まばゆく扇もてさへぎりつゝ向うを見れば、二人づれなる女、里人とは見えず、何れよしあるさまにして、

一人は年三十をも越えなんとし、業平の歌のさまならねど、しぼめる花に匂ひ殘りていと麗し。今一人の年二八ばかりなるが、殊にあでやかにして、貌は暮れゆく春を惜しむ桃花の如く、腰は百すぢの絲をつかねしにもたぐふべし。柳の眉、けうらなる髮のかゝり、にほひある面つき、繪にうつすとも寫し得じ、筆にかくとも言葉及び難からん。伊兵衞袖ふりあひて斜に見やり、わくらばに人と生まれし身の、かかる美人を妻となしてこそ、世に住むかひもあるらめと、心のうちに思ひ、行き過ぎんとするに、降るとも知らぬ春雨のほそ〴〵と顏にかゝれば、「よしやぬれても」など口ずさみ、花の下なる茶亭に憩ひて霽間を待てば、彼の女二人もおなじ牀机に腰うちかけぬ。これかかる珍事をひき出す媒とはなりけり。伊兵衞茶など飮み終り、煙管をまさぐりものとなし云ひ出でけるは、「女性にもの申さんは無禮なれど、いづれよりいづれへ渡らせ給ふ」と、若しや戀の手づなにもなりなんと、いと馴れ〳〵しく問ひよれば、姉と思しきが答へて「さればとよ、妾はもと都の者にて侍ひしが、不幸にして良人に別れ、親を先だて、叔父なる者當國千種の浦に住むよし、これを頼みくだり侍へど、これにも尋ねあはず、せん術なう近きほとりなる草とり仁王とて、往古孝女の心願にて、一夜に三反の草を取り給ひしとやら、土人の口碑に殘り侍ふ鄰村に、これなる花子と申す妹と只二人、膝を入るべきばかりの庵に、世をおぢきなく送り侍ふ。」と、伊兵衞が人からよろしきに頼もしくや思ひけん、細々

と物語れば伊兵衛もうちうなづき、「何とやら事の由は知り侍はねど、便りなき御身のさぞ覺束なくおぼすらん。殊に花子とやらんは、端正にして顔色うるはしく、楊家が深窓を出でし玉環は知らず、月もねたみ花もうらむ粧ひなるに、何として嘉き壻にてもとり給はずや。」と云へば、花子も顔さと赭め、「兎に角兩親に別れてより、沖漕ぐ舟の今はかゝらんしまもなく侍る。」と、自然と眼中に情を含み、伊兵衛を見れば、此方も心ときめけど、姉の手前はた云ひよる言葉もなう、兎やせまし角やせましと思ふうち、向うより小山の如き男、揚々として歩み來り、やがて頭に戴く幞帽をとつて傍におき、つかくくと彼の女に向つて云へらく、「我近邊の人を頼み、それなる女子を所望なせど、返簡なきは我を侮るにや。かく身服は賤しけれど、乞丐穢多にもあらず。今日は是非に有無の返答聞かんと、直におして參りたり。」と、蘭菊の下に猪熊の狂へる如くたはむるれば、伊兵衛側に詠めゐて心中に怒り、彼の男に向つて云ひけるは、「我は初めてあひ參らすることなれば、何かことわけは知り侍はねど、人たち繁き中なれば、重ねてのことにし給はんや、一つ流れを汲むすら縁とやら、さしすぐしたる事にはあれど。」と言ひなごむれば、彼の男大きに怒り、「此奴何等の者なれば、いらざる口ざしをなす者かな、姑娘おしだまりておはするは、此の男を壻となし給ふ心や、よしくく此の後の見せしめなり。」と、おのがはきたる板草履にて、伊兵衛が眞向はたと打つてかゝれば、伊兵衛ひらりと身をかは

し、その手を捕へあざ笑つて云ふ、「我今かく落魄なせど、大小をもたばさむ者なり。汝ごときにやはか打たるべきか。」とて、髻摑んでひき起せば、のけさまに撞と倒れし、大地にて頭をしたゝか打ち、かなはじとや思ひけん、「此の爲返は見よ〳〵、汝心にしるしおけ。」と、口の中にてつぶやき、逃げかへるも可笑しかりき。伊兵衛は塵うち拂ひ、「徒らに罪つくりたり。いやとよ女性、かかる所に坐しては、彼の悪者又來らんも知り難し、いざとく〳〵歸りね。」と云ふに、女は悦び、「妾を姉妹ばかりと侮り、此の妹を戀ひ慕へど、固よりむくつけき田舎人、何ぞ心に染み候はん、君の力もて事故なうすみたり。」と一禮述べ、はや黄昏なれば別れを告げて、お花諸共立ち出づれば、殘り多くは思へども仕術なう、畢竟あとにつき見えがくれに宿所を知りて後、云ひよる便りもあらんと、遙かひきさがり茶屋の牀机を立ち出づれば、花子が扇なほ側にあり。取紛れ置き忘れしものならんと、何心なく開き見れば、もと花子も一目見るより、伊兵衛が風流なるに心あれば、かごと是れを知らせんと、懐中にありし紅筆にて、扇の風の吹きもつたへよと、細々と心のたけを書いつけありければ、伊兵衛愕然とうち驚き、さては花子も我にこゝろありやと、神魂體を離れ、我にもあらぬ心地して、愈あとを慕ひゆくに、「やれ喧嘩よ。」とわめく聲の聞ゆるにぞ、若しや先の男仲間の悪者を語らひ來らんも知るべからず、兎まれ角まれ逢うては事むづかしと、とある小路へひき外し、遂に一片の霞に隔たり、彼の女

を見失うたり。せんかたなく、まづおのが旅宿をもとめし田尾と云へる所に歸り、明日彼の姉妹が宿所をさがし見んと、寢ねんとするに、なほ花子が面影瞳の中にありて、しばしの間も忘れやらず、慰む方もやと牀のさむしろ立ち出でて、緣先の障子押開けば、はや居待の月のおぼろ〳〵と南が程にめぐり來つ。前は路に向つて門なし、行人征馬簾のもとにいたると、長命がいひしもかかるやどりにや、谷川の漲る音かすかにして、わざとならぬ庭の木だち、すべて耳にふれ、目にさへぎるもの、皆涙を落す媒とはなりけり。ふと側を見れば、木瓜の形の花挿あり。伊兵衛はもと花むすぶ道を好みし故、こはよき戲れなりと、まづ庭に下りたち、花の下枝を折り取るに、石につまづき砂にて足を怪我しければ、淸めんとするに石盤に水なし。此の旅店の前面に、鍬とり淸水といへる流れありて、闇夜に霜劍を拔き放せし如く見えければ、これ幸ひと、まづ手淸め口そゝぐに、淸らかにして甘味あり、南陽縣の菊水もこれには及ばじと、又口そゝぐにこは不思議や、初めにかへて血鮮く、口中に保ちかね、眉をひそめていふ。

「立田川もみぢ葉流る神なびの三室の山に時雨降るらし

その古歌とはことかはれど、此の水上にきはめて事あらん、鐵を以て門を造る惡鬼、手をうつてこれを笑ふ、いかなる珍事ならんか、畢竟さがし見んにはしかじ。」と、獨言して、水に沿ひ半町ばかりい

たりしに、枯柴足にまとひ漸うと踏み分け行けば、狐兎の跡ある徑あり。流れによこたはりし舟橋の縄をたぐりてうち渡り、向うを見るに、和田山といふ一つの高山あり。春にもあらぬ心地して雲霧おひのぼり、飛泉天外よりおち、怪松奇柏枝を交へ、繁きが下に月ももらねば、冷やかなる露ふりて衣襟の中に入り、苔滑らかなる九折を辛うじて攀ち登れば、一宇の辻堂と思しきものあり。青苔梁をつゝみ、縁の板半ばおりて半ば朽ち、供物を峯の嵐にまかせ、金葉を降雨にうるほし、曉の露玉をたれて蓮座のよそほひをそへ、甍やぶれて霧不絶の香をたき、扉おちて月常住の燈をかゝぐ、そのもの凄きこといはん方なし。あやしむべし辻堂の内に女の叫ぶ聲あり。さてこそと裏に入りて見るに、一人の女に木丸をかけ堂の柱に縛めおき、今一人は大男上へまたがり、黒髪を左の手にまとひ、右の手にて柄もくだけよと、心情をさし貫き、はたして此の鮮血谷川へ流れしなり。こは山賊のがさじ」と、腰刀抜く手も見せず打つてかゝれば、得たりと刀抜かんとせしが、胸もと強くさしとほし、鋩あまりて縁の板を貫きし故、その儘にて捨ておき、佛前にありて紫銅の花瓶にて受け止めれば、水さと流れて手負の顔へかゝると等しく、あと叫ぶ聲の聞ゆるに、又切りつくれば、手もと狂ひて黒みたる佛を眞二つに切りさけたり。彼の山賊かなはじとや思ひけん、口に含みし小笛吹きならせば、此處の岩間彼處の林より、いづれも暖帽に面をつゝみし草賊出づること十餘人、手々に刀抜きつれ打

つてかゝれば、伊兵衛はいかなるわけは知らねど、ひたすら彼の女を助けんと、身を捨てて切りむすぶに、相手は多勢殊に山路にくはしき輩なれば、谷をはね越え岩を傳ひ、隙を討たんとつけ狙へど、伊兵衛は名を得し中條兵庫之助が流れを汲み、佐分利流の奥義を究め、眼光三亂、微塵割、祕術をつくし事ともせずに働いたり。これさへ十分の危急なるに、雪上に霜を加ふるとやらん、不思議や山鳴動し、一陣の風吹き來り、雲上り月光俄に見えず、漸々晦冥黑霧咫尺にむらがり、手をのべて掌を見ず。こゝに於ていかんともなす事能はず、只聲を賴りに切り、足音をしるべに闘ふのみなり。かくてかの山賊ども木丸かけし娘をひきたて、麓の方へ逃げんとす。後をめがけ追ひ下るに、早くも山賊は舟橋へとび乘れば、後につゞいて乘らんとせしが、過つて釣綱をうちきり、舟は水にしたがひ行方も知らず流れけり。伊兵衛ひとり川端に殘り、後のことも氣づかはしく、堂の内へ入りて手負をひき起せば、はやことぎれしと見え、手は嚴冬に氷を握るが如し。はつと思ひて走り出で、「草賊等逃ぐること勿れ。」と呼ばはれど、對ふ相手もなく、此の時風あらく斜に降る雨面をうち、時ならぬ雷さへおどろ／＼鳴り出で、麓の方をうち見れば、音信山、雀ヶ崎、御美ヶ池、天蓋山、富士塚のわたり、火把ともしつれ、あまたの百姓とりかこめば、さては彼の山賊の追手ならん、此の多勢にてよも取り逃すことはあらじと、心ゆるみてだうと倒れ、人心地はなかりけり。

機語下　光明寺　形見の簪

伊兵衛は和田山に悶絶なし、更に正氣なかりしが、いづこともなく雲板のこゑ幽に聞え、靄々たる香煙鼻中に入りて、目を開けば、幢幡風に閃き、須彌壇の上に、蓮華部の印を結び給ひし、阿彌陀如來いまして、簠簋籩豆の器に、燈明の火影うつり、まばゆきまでなれば、さては早くも閻浮提をはなれ、極樂にいたりしかと、訝りつゝ四邊を見れば、一人の長老伊兵衛が側近々と歩みより「旅人心を靜め給へ、此の所は前夜狂賊と闘ひ給ひし和田山の麓、光明寺といふ蘭若なり。旅人遂に縡たえたるによつて、所の莊屋拙僧に一火をくだし葬りくれよ。」と、そこもとを誘ひしが、心頭に少しあたたまりありしかば、藥を與へまゐらせしに、果して再生を得給ひぬ。いかなる緣故にて、盜賊と闘ひ給ひしや、その始末を語り給へ。」と、ねもごろに聞ゆるに、伊兵衛初めて正氣づき、言葉を卑しうして、寺僧の介抱を謝し、先つ夜旅店庭先にて、花を折り清水を汲み、鮮血を慕ひて辻堂に到り、いづこいかなる者か知らねど、盜賊に苦しめられし女子を助けんとなし、和田山に闘ひを始め、俄に山の鳴動せしことまで、おちもなく語りければ、長老かさねて云ふは「賊を憎み小女を憐み、自己の命も顧みざる仁心あれば、其の身いさゝかも恙なく、蘇生なり給ひしも、是れ一つの因緣なり。はたいつ

の頃より、いかなる縁故といふはさとらざれど、此の和田山に亂れやきの刃、雁頭の矢の根、此の二品をたづさへし者みだりに登ることをゆるさず、若し押して山登なせば、大雨くだり、或は雷大地に落ちて、打ち殺さるゝもあり、又は僅かの木の枝頭上に落ち、刃をもつて斬るが如く、兩段になりて命をおとせしものもありとやらん。旅人幸ひにして身に恙なし」と語りぬ。果して伊兵衛が刀は、關うちの無銘にして、亂燒なりければ、こゝにおいて山荒れし縁故を知り、彼の刀かたはらにありけるを取り上げ見れば、はじめ紫銅の膽瓶にて鬪ひしゆゑやらん、刃悉くこぼれ、鋸の如くになりたり。扨はかくの如き刀にて斬り結びし故、甲斐々々しきこともなく、盗賊一人だも討ちとめざりしと、漸く緣先に歩み出で、凡顏を洗ふ淨水を湛へたる、石盤の水呑まんと、水面にうつる顏うち見れば、色は瓢の枯れざるが如く、唇はあふちの花を含めるに似たり。かかる處へ初め伊兵衛をつれ來りし莊屋はじめ、あまたの土人、「やれ旅人には甦生り給ふや。」と、筵織るさんごといふ物を、片手に持ちつゝ來るあれば、まんぐは土篩うち捨てて來るもあり。又は祭見るが如く負ひたる子の泣くもかまはず、人おしわけて來るもあり、傍より「やれそれ〳〵の鹽燒の五藏、磯蚯蚓ほりの二郎は、ねりものだんじり見るが如く、たち騷ぐ。」と笑へば、中にもおとなしやかなるが「旅人はやく藥師にても呼び迎へ、心地みて貰ひ給へ」とをしふれば、側より「旅人なども賊の仲間ならんと云ひしかども、さ

にはあらで、卻つて賊等と鬪ひ給ふ御方なるに、初めは我旅人にも縄かけんとなしたり。」など、役にたたぬ言口々にわめくうち、伊兵衛は漸く水呑み、心落ちつきふと思ひ出で、「さるにても彼の女はいづくの者やらん。」と、四十許りの男に問ひければ、男答へて云ふは、「先の夜殺されたるは姉にて、木丸かけ山賊の誘ひ行きしは於花といふ妹なり。」と、聞くより伊兵衛再び驚き、山賊と思ひしものは、昨日笠森觀音にて、我に芒鞋をもて打ち懸りし男ならん、又忙はしく花子を連れて立退きしは、まつかくの面體の男にてはなきや。」と云へば、「さればとよその男は、雲舞の半六とて惡者なるが、兼て花子を貰ひ、わが妻になさんとは僞りにて、いかなる花街にも賣り渡し、金を得て高妓になさんと思へど、兎に角姉さまたげをなすゆゑやらん、むごたらしく切り殺し、今朝行きて見れば、片腕打落されて、地藏堂の緣の上にありて、かた／＼の手は刀にても握りしやらん、五本の指悉く落ちたりし。」など物語るに、また側より是れも里の子とおぼしく、十五六なる娘が云ふは、「於花女郎はいかなるあふれ者に捕はれ、浦泊の土妓にも賣り渡され給ひつらん、日頃心ばへやさしく、此のさせし櫛もそれぞれの日我に賜へるなり。」と、涙うかむるは鄙びたる言葉のうちに、實ありて歎きを添へぬ。伊兵衛席を丁とうつて、「今ぞ知る、草とり仁王の傍に、庵ひき結びし花子姉妹にてありけるよな。いづくいかなる人と知らで、助けんとなしけるも、はなれざる紅絲のなす處ならん。」と、はら／＼と涙落せ

ば、里人が云ふは、一枚はかの花子を相知り給ふ御方にて侍ひしや」と、一つの簪を出し、「是れは和田山の草堂におち散りたるなれば、せめてもの記念とも見なし給へ」と渡しける。伊兵衛歡びつゝ取り上げ見れば、李の花の如き唐紋つき、きのふ茶亭にやすらひし時、見覺えある花子が銀釵なり。肉つきし髮の毛、からまれてありけるは、きはめて半六が毒手に陥り、いましめかけんとなしける時、髮も亂れつらんと、今見る如く涙催す種とはなりけり。以前の四十ばかりの男、伊兵衛に向ひ、「われら都がたのさる御館に勤仕なりしてありける刻、かのお花が父、蘆部兵藏といふ者と、軒を並べて住居なしける故、かの姉妹の身の上は仔細知り侍る。かのお花が父、兵藏といふ者は、蟲一つ殺さざる生質にて、佩刀、脇差、目貫、小柄まで、南無佛の文字を用ゐる故、時の人異名して、念佛兵藏といひしが、かかる時に至りては、佛菩薩の力にも及び難きや、姉は狂賊に殺され、妹はいかなる苦や受けん、南無佛の文字つきたる佩刀、親のかたみと此の日頃までかの家にありしが、今塵一つなきは、先の夜半六が盜みとりしものならん。」と、語るを聽くうち伊兵衛は怒氣に堪へず、漸くに心とりなほし、假令花子いかなる村里にさまよひ、土妓傀儡となつて、旅客に錦帶をゆるすとも、心だに清らげならば、再び探し出さんものをと、五三日この處にとゞまり、藥を服し、常の心地にひきかへりて、まづ長老に別れを告げ、姉の遺骸を厚く葬り、香花のことねんごろに賴みおき、寺僧にはそれぞれに

布施を與へ、やがて出で行かんと酒肉戒むる石碑によりそひ、草鞋の紐うちしめつゝ、樓門の額うち見れば、音信山とかけり。風流の道もかしこかりければ、夫木集に、

　時鳥たづね來つれば今こそは音づれ山のかひに鳴くなり

それとは事かはれど、花子をたづねんに、音信山のおとづれを、聞かでやすぎんと心に誓ひ、旅宿に歸り行柳脚絆など、こま〴〵と旅よそほひを整へ、心靜かに稻毛の神を伏し拜み、それよりして、秋はいそのなみぞよせくると詠みし、千種の浦をあとに見なし、舟もよふなしければ、風折よしと、水主楫取重石をひきあげ、催馬樂ならぬ船唄に、旅のうさを忘れ、蕭颯たる風にまかせ、小綱町といふ所に著きける。此の下伊兵衞武藏國に赴き、於澤といふ醜婦のもとへ入壻となり、再びお花に巡りあひ、於澤を僞りて退けしことなど、十餘年のうち種々の物語あり。いたつがはしければ詳に是れを說かず。下回に花方求次郎といふ、處士の物語るをもて、推し量り知るべし。よつて此の一卷を機語となし、二の卷をさして一回とす。此の卷終らば二卷目は、別に新しき物語と思ひ給へば、首尾つばらかに知るべし。

霜夜星一卷畢

近世怪談霜夜星　二卷

第一回　海邊のもみぢ　あふぎの紅絲

今といふに久しく、昔といふに近き頃なりけるが一つの怪事あり。その首尾を尋ぬるに、下總と武藏のあはひに須崎といへる處あり。此のわたりに花方求次郎といへる處士、代々家居を廣らかに造り住ひけるが、元來貨財倉庫に滿ち、その田美にしておのづから家富み榮え、只歌を詠み詩を賦し、數口の家といへどいと豐かに暮しける。前は渺々たる滄海に朝日波に映じ、東に總房の二州を見はらし、西に高繩芝浦は弓の如く曲り、發船矢の如く飛ぶ。秋もやゝ更けゆくまゝ庭前の紅葉いろをあらそひ、錦なす梢も花にまさりてにくからじと、あしがきのへだてなき友どち六人四人うちまじり、求次郎が館につどひ、海邊に出でて逍遙し、夕日にはえある紅葉見も秋の日の暮れやすきをかこち、既に酒もたけなはに及びける。爰に天羽歡次といふ者あり。彼に一人の娘ありて、名を歌次とよび、天性みめざまよき女なれば、此の花方の家の侍女におくりて後、愈求次郎とへだてなく語らひ、今日も娘歌次と共に此の酒席につらなり居たるが、あやしむべし一つの蛇歡次があとべにつきそひて、恰

も己がかげのはなれざるが如く、彼方へ歩めば彼方へつきそひ、恨みありげに頭をもたげくゞまり居たり。人々も怪しき事に思ひ、歡次も何とやらんおもなげにて、おのれが腰をさぐり見、藥籠の根つけに蛙の形を彫りたるを取り、こは蛇ほど執念恐ろしきものはあらじ、此の蛙を見入れしならんと投げ出せば、蛇は嬉しげにひきくはへ、草を分けて入りけり。歡次は何とやらん心よからざる面もちにて別れを告げて歸りける。席にある人口々に蛇の執念すさまじきを語り出づれば、求次郎かさねていふは、「蘭菊の二女みどりの髮の蛇と化し、雉のあぶりものかきて蛇となるの類、昔今物語には聞きつるが」と云ひさし、歡次に向ひ「用事あらんには手をならすべし、しばし此の席を遠ざくべし」と云ひ教へ、かさねて人々に向ひ「かの歡次に蛇のつき添ふことは假初の事ならず、澤子といへる女の一念ならんと思ふ事あり、長物語ながら聞き給へ」と、杯手にとりあげ腰扇うちならして語り出でけるは、「近き頃額ヶ谷のほとりに、室田主計といふ者あり。年四十といふ春の頃より風の心地と打臥しけるが、次第々々に衰へ勞れ、醫師のはかりごとも露しるしなく見えにける。此の主計といへる者は、妻は二年以前みまかり、於澤と名づけし女兒只一人ありける。いかなる宿世の報いにや、容貌あくまで醜く瀧の淀みなす髮短く、膚は松の老木に似て、鼻ゆがみ頰高やかにして、黑き齒の斑なるは雪をおびたる烏の如く、月にほゆる狼の聲樣なれば、誰あつて娶るべき者もなく、十餘り七ッ八ッ

の花もいつの程にか散りゆきぬるを、日頃主計はものうきことに思ひ、病の中にも此の事のみ云ひ出でて、せんなきくり言も限りある命はせんすべなう、六月十日あまりに、えならぬ風吹き來り、月日のねすみ草の根をかみ、遂にはかなく黄泉の旅に赴きける。澤子は孤となり、俄に夢の醒めし如く、泣きまどひつ悲しみに堪へず、殊には頼るべき親類も數なけれど、俗言にいふ人に鬼はなきとやらん、近鄰の人々夫彼とつどひ、主計が野邊おくりのことなどいとねんごろになしはてぬ。又此の頃同じあたり汐干の里といふ所に、もと房州の產まれにして、高西伊兵衛といふ者何といふなりはひもなく、いたづらに閑居する處士あり。彼が方へ折にふれ問ひおとづれなす道具屋三次といふ男、主計にもちとのよしみあれば、主計みまかりてより、家を興すべき子なきを屈強の事に思ひ、ある日伊兵衛が閑居に訪ひ申しけるは、「貴殿はか〴〵しき口入もなくば、我が相識りし家に一人の女兒あり、手も拙からず衣も美しくひねるに、かしこの家繼ぎ給はんや。」と云へば、伊兵衛なのめならず喜び、「我とては此の地にしるべなき身なれば、若し此の事と〻のはばこよなき幸ひなり、よろしくなかうどなし給へ。」と三次に賴むに、三次快げにうけがひ、澤子が方へ來りて云ひ出でけるは、「此の近きほとりに、もと出所は房州海上山の麓とやらんなれど、久しく都にてやごとなき館に給仕しければ、みやびやかなる處士、殊に譜第正しき者あり。主計どの身まかり給ひて、女兒主にては柱なき家の如くな

らん。かの人を聟になし給へ、われら媒妁なすうへは、あしきやうには計らはじ。と、此の三次といへる者は己が商賣のみちに疎しとて、目無三次と異名せる愚者なれど、かかることの空言はいとまことしく見せかけ、彼方此方心にくきさまにいひなしける。澤子は遠き親類にも此の事聞え、婚姻とゝのふべくにきはまりぬ。かくて其の當日にいたりければ、伊兵衞は殊に風と柳の雑ひをそへ、既に席に臨めば、澤子も今日を晴れと醜き面に粉黛をいろどり、嫁衣裳まとひしさまは、清少納言が冬の月にたぐへし、老女の化粧はものかは。赤鬼のなす所とはいへど、かの伊兵衞が傍にありけるを、暫く譬へをうつて謂はば、霜に香を增す水仙花と、臭氣あらそふねぶかと、一瓶にさしはさむが如し。伊兵衞も一目見るより、あなうたてや世にはかかる惡女もあるものかな、我美醜は論ぜざれども、かくと知らばいかで此の家の聟と呼ばれんと、心のうち大いに三次を恨めども又思ひかへして、よしや是れも定め事にて、みな月老のなす所ならんと枕席を同じうし、過ぐるともなしに數ヶ月を經、九月の末つ方になりける。伊兵衞は夜の更けゆくもわすれ、机上に短檠を近づけ書史どもまさぐりてゐしが、しはがれし蟲の聲の心細さにやゝ障子ひきあけ見れば、街に降りすさみし一村時雨もいつの程にか霽れ、月中空に澄み昇り、軒端這ふさゝがには白銀の絲をのべ、今や布まき返すらん砧の音もとだえ、さなきだにものさびしきに、こし方のこと思ひめぐらせば、往年上總國にてしかゞゝのことあ

りて、思ひそめし花子が筆のあと殘せし扇、里人の與へし銀釵など取り出でて、物うきを慰むれど、形見をあだとよみしもむべにて、戀ふてふ心のやるせなさは尚まさり、あはれ我が思ふ人と手を連ねて此の月を見たらんにはと、わたり近き橋の名のすがた見ざる悔い事に、男ながらも涙はふり落ちにけり。かの三次は、牙錢に眼くれて、いとめでたくいひなしたれど、今は煙も細くなりゆくまゝに、あかり障子を反紙にてはりたるが、隈なき月におろ／＼見えければ、何心なくよみ見るに、住吉物語借りにおこせしを送るといふ消息にて、松の煙のいろいといやしからず、心にくき書きさまかなと火をてらしてよく／＼見れば、某の日花子としるしあり。若し夫れもやとかの扇と比べ見れば、果して同じ筆なり。さては此のあたりに住居するやと、胸さへとつ／＼と躍り、澤子に向つて云ふは、「この障子にはりある女文字の玉章は、とりわけ水莖の跡うるはし、何人の書きおくるにや。」と何氣なきそぶりして問ひければ、澤子は絲くりて居けるが、「それこそ芝浦に住む伊藤快保といへる人の妾の筆にて侍りぬ。妾が鄰に綱をすくをなりはひとなしける者住みけるが、彼手業には似もよらず、和書の種々もおろ／＼知る故、使を求めて快保が別室花子を、手のはかせとして學びたるが、その文も彼が方へ來りしにて、いつぞや我いれ匣貸しつるあはひにうち挾まれて來りしなり。」といふに、伊兵衛は果せるかなと心に喜び、我たま／＼受け難き人間の化をうけながら、かかる惡女を妻とよび、肉に

舌つゞみうつて修身をまたん、何卒快保にたより、花子に逢ひ見まく思ひ、折もがなと、日を經るうち、芝浦の快保が鄰に賣家あるを、つてを得て聞き出し、雲に梯を得し心地して、急ぎその家を買ひ取り、雉ケ谷をばそこ／＼とりかたづけ、芝浦へ住居を移し、表をまばらなる竹格子となし、怪しき竹すだれなどかゝげ、花結ぶを指南なるやど札を出し、一月二月過ぐるうち伊兵衛がかの業に長けたるを見及び聞き及び、門弟あまたとなりければ、今はなか／＼昔のうさもうち忘れ、いとゆたかにぞ世を經にける。抑伊藤快保といへる者の、遠く先祖をたづぬれば、太田道灌に仕へ、一度民間におちいると雖も、その刻武功數度に及びし餘光によりて、代々畠田あまた持ち傳へ、殿造美々しく、婢僕多く召仕へば、やごとなき御館にも恥ぢらはざる光景なり。彼が妾たる花子なれば、かる／＼しく端居する事もなく、伊兵衛も鄰に住めるといふのみにて、數ケ月は面影だにも見ずして過ぎにき。かくて九月一日といへる夕方は日蝕し給ふとて、快保が館なる丫鬟二人四人庭先におりたち、夕陽を仰ぎ見て、『今の程にや、月のみちかけは常なれど日のかくなり給ふはいかなる事にや。』と云へば、『あれこそ日のわづらひ給ふなり。』と、さがなき常に云ひ爭ふ折、お花も緣先近う立出でけるが、みくずめの羅より紅の下襲すきとほり、前髪のはつかに解れて、顏にはら／＼とかゝりしは、柳の絲に初花を隱す心地して、衣篝のかをりときめき、實にこの世の人とも思はれず、おとなしやかに侍女

に向ひ、『東國にては見え難かるべしと、月日しるす書にも見ゆれば、はつかばかりの蝕ならん、かくなせばよく見ゆるものぞ。』と、傍にありける鏡臺の鏡とり、軒の下より外の方へさし出す折、伊兵衛はおのが樓上になぎわたる海原をながめやる姿、鏡のうちにあり〳〵と寫りしかば、花子は心づかず、この頃丫鬟等が鄰へ移り住み給ふ殿は風流なりとうはさせしは、若しや此の人にやとよく〳〵見れば、豈計らんや上總國にて見初めたる風流士に露たがはざれば、はつと思ひて樓上を見上げ、かたみに目と目を見合はせ、伊兵衛は兼て思ひ設けしことなれば、心のたけをかいつけたる玉章を、かたみとなせし扇の要に結ひつけ、側にゐるお澤が目にふれざるやう、己が體をかげとなし、樓上より投げ下すに、折よくも花子がみだれ箱のうちにとゞまりぬ。花子は顔さとあかめ、思はず後を顧みれば、快保はひたすら日蝕をながめ、露心づきしけはひも見えざれば、心おち居て、侍女等にそれとさとられじと、いそぎ玉章を袖に隱し、何氣なき面持ちして、障子ひきたてて入りぬ。伊兵衛花子が玉章を取り入れしを見やり、半ば事なりたりとよろこび、それよりしては片時も花子がことわすれやらず、それと云はねども思ふさまに見えければ、門弟どもうちまじり袖が浦の月見にと舟をうかめ、伊兵衛をいざなひ花街に至りければ、伊兵衛はこゝろならずも、若しやあが思ふ人に俤の似たらん君やあると、彼方此方見廻れども、青柳の風にしなやかなるは色も香もなく、夕顔の眞白くにほひあ

るも插とならず、我が思ふみやびやかなる花より見れば、深山木の心地して一夜假寢の心もなく、門弟をばよしなにいひくろめ、閑居にかへり唯うつ〳〵として、今宵やおとづれのある、明日やかへしごとあらんと、それのみこゝろだよりとなし、遂に病の牀にうち臥しにける。嗚呼あはれむべし、籠に飼ふ鶴のついばみを忘れ、こずゑに叫ぶ猿はらわたを斷つ、妻をこふなれが心も亦推しはかり知るべし。

第二回　六浦わたり　手がひの猫

休題且話、快保が側女於花は、いかなることありて、伊藤の家に到りしといふに、往年笠森觀音開帳の茶亭にて、娘心に伊兵衞に懸想し、かの人ならで、下紐うちとくべくも思はざりしが、その夜ゆくりなく雲舞半六といふ光棍に捕はれ、姊は和田山にて殺害なされ、面白からぬ憂き命を辛うじて助かり、それより半六は於花をひいて武藏國に到り、名ある柳巷に賣り渡さんとなしければ、花子はよゝと泣き入りてつや〳〵ものもたうべず、「淺ましき花娘となり、一度客にはづかしめをうくるに於ては、舌をかみても死ぬべし。」と口ばしれば、容艷は秀でけれど惡棍のかどはかせしを知り、名ある娼家にては、誰あつて於花をかゝへんといふ者もなく、半六も今はもてあまし、強ひていはばあた

ら瑰をくだきもやせんと、だましつ、すかしつ、さま〴〵にいひこしらへ、波にかたしく袖が浦、神奈川といふわたりなる旅店に、やうやく僅かばかりの金に賣り渡し、半六は行方知れずなりけり。於花はくびれ死ぬ覺悟にて、その夜は寢もやらず、泣き明し居たりける。折よく快保は江の島鎌倉の秋景を眺め、六浦わたりせし旅行の戻り路に此の旅店に宿り合はせ、襖のあなたにて女子の悲しむ聲を聞きつけ、下奴をよびて緣故をとひ、いと不便なる事に思ひ、まづかの女子をよびて親族もあらば、共に力をそへ、身のをさまりをはかりやるべしと、於花をよび出し、「いかなる由緣にて此の旅店へは賣り渡されし、我が力に及ばんほどならば、家に誘ひゆかん」などねもごろに聞えければ、於花は涙ながら半六に捉はれしより、便りなき憂き身の上を落ちもなく語りけるに、快保は不便もいや增し、殊に鄙に生ひたちしとは見えず、品容あてなるをにくからず思ひ、家長にあひて於花が身の代をあがなひ、芝浦の館につれかへりければ、花子は快保が大恩をかへりみ、いなむに言葉なく、側室とはなりにけり。さはいへ笠森にて見初めたる風流士のこと、つかの間も忘れやらず、ふたゝび鄰の二階に住居をもとめたるを知り、旣に外情起り、此の頃伊兵衞が扇にそへたる文を繰りかへし、いかにもして返しごとをおくるべしと、戀のかけはしうち渡さんにも、くらぶのやまの守る人多きを心のうちに悲しみ、又一たび火の坑に陷りしを、快保がなさけにて玉の緒をつなぎとめしことを思ひ出で、是れ

がためには、鳥羽の戀塚、津の國のをとめ塚のふることをも身にたくらべて、一人胸をいためける。

さてしも伊兵衛は病の牀にありて、於花がことのみ思ひわづらひありけるが、強ち枕をはなれざる病にもあらざれば、ある夜一人孤燈にむかつて書をひらき、見ぬ世の友を机上にいざなひ、心なぐさとなし居ける。於澤はかたはらにありて藥をあたゝめ心をそへて介抱なし、伊兵衛に向つて言ひけるは、「君かく夜更くるまでねぶりつき給はねば、御いたつきのさはりともなり侍らんに、明日のことにゆづり給へ」なんど、心をもちゐていふ面を伊兵衛は見るもいとゞうるさく「我が書をひらくをさまたぐるは、汝がいぎたなきに較べてなるべし。われにかゝづらふに及びず、己こそとく寢ねよ」と聲あらかに罵れば、於澤はかへさん言葉もなく「ゆるさせ給へ」とうち泣きて、伊兵衛が膝にとりすがる。伊兵衛於澤をばはたとつきのけ面杖つきて机にもたれ、又冊子をおし披き更に澤子にとりあはねば、於澤もせんすべなく涙を袖におしかくし、泣く〳〵臥所に入りにけり。伊兵衛も枕を取つて眠りつかんとなし、ふと側を見れば、手飼の小猫文車の紐にざれあそび居たるが、先まで紅の鈴玉を結びおきしに、いつの間にやらん眞白なるねりぎぬと變じたり。伊兵衛訝りつゝほどき見るに、絲をもてくけたるにはあらず、ねりぎぬの裏にたゝみこめたる玉章あり。胸とゞろきておし開けば、

波こゆる　末の松山　はつかにも　ありその海に　よするてふ　わが家のつまも　うつせがひ

むかしの文字を　みつにわけ　刃のしたに　心とゞめん

と記しありて、於花が手跡にまがふべうもなければ、こは前日の返しごとなるべしと、心に思ふは、波越ゆる末の松とは女のあだし心あるをいふよしは、清輔抄に見えて、又古今集にも、君をおきてあだし心をとよめり、されば彼もわれとひとしき思ひにて、わが庵のうつせ貝は快保が家にあらざるを知らしめ、昔を三つに分くれば二十一日となる、かの唐土の名妓が隠語を用ゐる、刃に心をとめて忍べよといふはんじ物なるべしと、病もとみに愈えたる心地して、其の夜は枕をとれど眠りもやらず二十一日をこそ待ちゐたり。程なく其の日にもなりければ、病牀を出でて湯をひき髪をけづり、澤子に向つて云ひけるは、我は鐇が谷の何某が許へ、遁れざる事ありて赴かんと思ひ湯をひきたるが、なにとやらん又心地あしく、御身此の書簡をもて彼處に赴き、しかじかのこと云ひのぶべし。路の程もいと遠きに、今宵は何某のもとに宿し明日帰るべしとこま〴〵に欺きければ、於澤はさとも心づかず、いとまごひして出で行きけり。伊兵衛は唯日の傾くを待ちわぶれど、天心より縄を以てつなぎとめし如く、秋の日ながら暮るゝおそしと思ひわびて、やうやく初更も過ぎければ庭先におりたち、暫し築地によりて快保が館をうかゞふに、兼てそのまうけとおぼしく、築地に梯子をかけおきたり。心やすく忍びこえ伊藤の前栽をうち見れば、荻萩薄いろ〳〵の秋草露もたわゝに咲き亂れたるが、星

の光にほの見えて、月の夜よりもなほ見どころ多し。家居つきぐ／＼しく、南向きに障子たてまはし燈火いとあかかりければ、恐る／＼隙間よりのぞき見るに、調度もさのみ多からず、今ひきたりと見えて柱をならべしまゝ琴を傍におしやり、香爐に火殘りて匂ひ殊の外にかをり、鬢の髮まよふ筋なくゆりかけたる女、白く玉をのべたる如き手を膝の上にかさね、もの思ひなるさま何となく心凄げに見えたり。遙か奥の方より十二三なる女童走り來り、何やらんひそ／＼物語らふに、人ありと知らでかの女は外の方を向きたる面を見れば、まがふべうもなき花子なり。猶は驚きの端をふみはづし、女童が退きいづるを待ち、ほと／＼と障子をはじきておとなへば、お花も若しやかの人ならめやと、障子おしひらき伊兵衞なりと見るよりも、兼て思ひ設けしことなれば、しばしは顔を紅になし、扇をとつて燈火をあふぎ消ち、「此の處はいとはしたなく人の見る事もあらんに、此方へ來り給へ」と、右の手に銀釵をとりて髮のほつれをかきあげ、左に伊兵衞が手を携へ、幾間か隔てたる紅閨に伴ひける。さすがに二人は言葉もなう、伊兵衞目注して花子を見れば、上總國にてあひ見し時は、未だ年たらはずして、譬へば春待遠かりし若木の花なりしが、今は色こく咲きみだれたるに、戀ひまさりておぼえ、魂もなき心地して花子が身近うすりより、此の頃、から猫のなかだちにて、今宵しのべといへるはんじものをときたることをききとし、上總國和田山にて惡棍と闘ひ、舟橋の釣繩をうち切りしことまで、落

いもなく語りければ、於花もうち驚き「さては和田山にて盜人等を相手となし、妾姉妹を憐み給ひしは君にてありけるか。」と、互に深き縁をいひ出で、秋の夜にはほつきざりけり。花子かさねて云ひけるは「君にも今かたりまゐらせし如く、姉の敵雲峰半六は妾をば殺しもやらず、所々の[illegible]家を誘ひ歩きしかど、女の力にて彼を討ち得んことも思ひもよらず、ゝたとひしとても無念とも衣の心の中を推し量り給へ。幸ひなるかな、彼の半六は當地に足をとゞめ、頬刈組といふ町奴の仲間になり、姓名をはあらためける由、風の便りに聞き侍る。まつた妾が父兵藏が祕藏なしたる、南無阿彌陀佛の文字をしとこめに彫りたる傳刀を盜みとり、半六が差料となせば是れぞたしかなる證據なり。何卒彼を探し出し、妾に力をそへ姉の仇を討たせてたべ、君を慕ひまゐらせしも、一つには此の一事を頼み參らせん爲なれば、強ち浮きたる心にもあらじ。」と、こまごまと物がたりける。是れ正道にて正道にあらず、たとひ姉の仇を討たん爲なればとて、側室の身として主の目を掠め、異人に私情を通じ夫婦二人が身に及ぼさらんや。遂に敵を討ち得ざるのみか、伊兵衞花子が後に薄命なるを見て、世の人の教へぐさともなし給へ。はや鐘鷄曉をうつたへければ、伊兵衞別れを告げてたたんとするを、花子しばし。」とおしとめ「空貝にて知らせまゐらせし如く、今宵家長快保家にあらざれば、かく心靜かに物がたりなし侍れど、又の逢ふ瀬も定めなきに。」とかこちつゝ、あゝいかなる縁にや、雙の玉手を左右の男の枕

に代らしめ、さ夜衣よしなきつまをご重ねける。それよりは折にふれてしのびあふよし、日を積み月をかさね、あこぎが浦にひく網の、快保が耳に入り、なみ／＼の者ならば怒りに乘じ、花子伊兵衛をうちはたすべかりしが、前にもいふ如く情ある生まれなれば、かかるたはれたる心のいできし女、いひたりともせんなし。只何となく花子をば伊兵衛が許へおくらんと思ひ、或夜花子を靜かなる一室に招き、さま／＼と問ひけれど、花子初めの程は身に覺えなきよしを云ひときければ、快保かねてお花が通はせし文を開きおきしを證據とし、一つ／＼ばらに白狀なさばあしきやうには計らはじ、と云ひけるに、花子は消えも入りたき思ひなれど、のがるべきやうもなく、一五一十を明らさまに語りければ、快保うち驚き『御身かの伊兵衛を上總國にて見そめしとあれば、是れ我より先の情人なり。御身が罪を責めんには我が恥も世にあらはるべし、必ずしも心を勞する事なかれ』と、其の夜は花子を臥さしめ、とやせましかくやせましとたゆたひしが、急度心を定め、かの侍女歌次が父歡次は、この頃快保が館の食客なりければ、彼を伊兵衛が家につかはし、只何となく花子を送るべしと、そのとり結びをなしけるに、二人は玉樹もとより得し心地して悦べども、爰に難儀なるは、元來伊兵衛は室田の家に接腳壻のことなれば、いかにしてか於澤を退けんと思ひわづらふ折節、合壁より歡次まうで來て、伊兵衛が面もちあしきを問ふ。伊兵衛お澤が席にあらざる隙をうかがひ『我が心を勞する元といへるは女房澤

すかことなり。いかにしてか彼を遠けんと相談なしければ、歡次がゝとうち笑ひ、「それこそしか計られたまへ、これにこしたる良き謀あらじ」と云ひ教へぬ。伊勢衛大いに喜び、いまで物なんどひそかに歡次におくり、それよりして伊兵衛晝夜家にあらず、賭に利を失ひし趣にもてなし、於澤が衣類はさらなり、櫛笄にいたるまで、悉く賣代なし、廓に通ひて家に歸らず、さながら主なきが如く、壁破れ疊ちぎれ、連雨には露したゝりて柱をつたひ、かかるいぶせき住居なれど、澤子は悲しくおもひゐて、たま〳〵伊兵衛家に戻れば、それとなしに諫めの言葉を用ゐれど、伊兵衛かつて聞きいれず、我が家にあらざる夜に誰やらん、汝がもとへしのび男の來りしを、まさしく我に告げたる者あり、そはいかなる私夫にや、すみやかに白狀なせと根なし言をいひかけ、呆れてものも云ひ得ざる澤子をとつておさへ、黑髮を拳にからみ、赤裸となして打擲なせば、何と云ひ說く言葉もなく、澤子はたゞ泣きいるのみなり。伊兵衛澤子を外の方に突き出し、戶をさしかためて音もたてず、しづまりかへつて臥しにける。於澤は醜き顏に似氣なく、正直なる生まれなれば、今は身ひとつに憂き難儀のかさなりし心地して、頼るべき親類もなくいかゞはせんとためらひしが、所詮今生きながらへたりとも、苦しき海の波間にたゞよひ、なに樂しみに世を經べきと、あたりの小川へ身を投げて死にうせけるぞあはれなり。伊兵衛は謀とゝのひたりと悅びけれども、何とやらんうしろめたくて、

當所のすまひもたゝし難く、相州鎌倉亂橋の此方なる、杉戸の森と聞えしわたりに閑居をうつし、さるころ柳巷に通ひかけ物に利を失ひしは、みな於澤を退けん謀なれば、實は赤貧にもあらず、鄙めづらしく家居なしつらひ、はじめ口入れしたる歡次を頼み、快保が方へ申し遣はし、既に花子を娶るべきにきはめ、その當日をぞ待ちたりける。これよりして少しく怪事あり」となほ語りやまざりける。

於花伊兵衛が閨中の私語にいたりては、求次郎が知るべくはなけれど、同じことを再び識さんもものぐるほしく、過ぎ行きしことのつばらかなるを、求次郎が物がたりとなして、見る人に知らしめんを要とすればなり。そは作りものがたりの體と見ゆるし給へ。

霜夜星二卷 畢

近世怪談霜夜星　三卷

第三回　蛇のあやしみ　狂女の溺死

「待つにものうきは日を送ること年の如しと、やう／＼於花を妻るべく吉日にさだめけり。其の日は伊兵衛もつとめて髪けづり湯をひき心構へなしけり。程なく黄昏に至り、花子は媒人歡次に誘はれ來りければ、席をはらつて酒肴を設け、心ばかりの婚禮酒斛をかはすに、於花今さら銀燭の火影まばゆく、面をそむけ居たりける。やゝ時うつれば歡次別れを告げ、送り來りし快保が從者ども旅宿まで歸らんとなすに、二人ひたぶる押止め、ともに今一盞をすゝめけれど、歡次うち笑ひ、「諺にも甲夜の程といひ侍るに思はず時を移せり。新人には豫て霜雪と積る物語なし給へ。」とて立ち歸りぬ。於花は芝浦の館にかはり、侍女婢奴もあらざれば、みづから枕邊の燈火を遠ざけ屏風ひきまはし、夢にや見んと夜半の衣をかへざりしも、今日は忌み／＼しき言葉とはなりけり。枕上の戯れにいふは「君わらはを娶り給ふはこれ一時のたはむれにして、元來馴れ睦み給ひし於澤さまさへ退け給ふ薄情なれば、妾もいろよき小袖を身にまとひ粧ひをそふるうちは、かく枕をならべ給ふとも、秋の野末の凩にたが

めも薄くなりたらんには、又異人を迎へ給ふらめ」と云へば、伊兵衛うち笑みて「さなのたまひそ、我に於澤を退けし薄情あれば、御身も我と私情を通ぜし快保への薄情あり」於花面に恥をいだき「斯くのたまふは理に似て理にあらず。妾は未だ四五に充てず、既に快保は國に杖つくの年なれば、これ似氣なき女夫にして、君と紅絲をひけるなれば、必ず心にばしかけ給ふなこと」、其の身も共にうちふしけるが、爰に一つ奇とすべきは、四更の頃螢光飛び來て、燈火にはたと當りうち消すこと三度、夏の夜にもあらざるに、怪しき事に思ひ、短檠を枕もとに近づけければ漸くそのことも止みけり。伊兵衛ふと心つき、煙草盆の抽斗より、光明寺にて里人のあたへし簪を出し「御身此の簪をおぼえ給ふらめ。是れ故人を忘れやらぬ種なりしが、今は又昔を語る賜物となりたり」と、閑談こまやかなる所に、天井よりはたと物音して枕邊へ落つるものあり。短檠の火かげ幽なるに見れば、大きさ三尺もあらん蛇なり。於花は女の心弱きによわり、あというて飛び退くを、伊兵衛おししづめ、右に手燭を取り、左に蛇を摑んで緣さきにうち捨て、閨房に入らんとなすに、かの蛇ははやくも伊兵衛より先にかへりて、座敷中に頭をもたげ舌をはいてゐたり。伊兵衛心中に思ふは、昔より女の一念蛇になりしためし少なからず。於澤が一念蛇となりて、我を怨むるも知るべからず、心弱くなしては惡しかりなんと、手燭の柄にて蛇の胴中をつき通せば、蛇は苦しげに尾と頭をひとつにあつめ、手燭をまとふを

そのまゝ庭にうち捨て閨房にかへり、此の所は山にそひ流れに向ふ地なれば、かゝる事もまゝありなん、恐るゝ事なかれと、於花を言ひこしらへうち臥しぬ。程なく暁告ぐる鐘の聲に夢を破つて、伊兵衛は枕をもたげ、枕もとにありし煙草盤をひき寄せけるが、先の蛇側にくゞまり居たり。うち驚き煙管をとつてうちつくれば、なほ近う來りて先に物語りせし、於花が簪をくはへのたり出ける。こは心得ずと捕らんとするに忽ち一團の陰火となり、屏風を越して飛び出でければ、伊兵衛もぞつとなせしが、物音なさば於花の目や覺しておそれやせんと、衾をかつぎて又夢をむすびける。それよりしては伊兵衛が猛き心に、死靈や恐れけん、何の怪しきこともなく、幾年をへて二人の愛子をまうけ、兄を惣五郎とよびて五歳なり。この頃歡びありし妹をお村と名づけ、又かの伊藤快保は年老いたりと、ほとり近き百姓より養子をなし、此の者を伊藤金吾と改め、今芝浦に住めり。我と金吾と水魚のよしみあり。又歡次もけふの如く折にふれ我が館に來れば、かの兩人の話にして、聊かも偽りにあらず　朧げに傳へ聞くは、かの歡次が宅に此の頃屡怪しき事あり。是れ若しくは澤子が祟りなるべしと、恐れあへるとやらん、されど其の一事は深く包みて我にだに語らず。さすれば印籠をくはへ去りし小蛇も由縁なきにあらず、はた侍女歡次はかの歡次が娘なれば、物がたりの中しばし席を遁さけしなり」と、手を鳴らして歡次を呼び出し、酌させといひて又杯をすゝめければ、人々も否をふるつて

恐れ「いと怪しき話なり。」と云ひのゝしりあひけり。時に不思議や先の小蛇線先よりするするとのたり上り、歌次の襟のおはひへくゞり入る。歌次阿と叫んでそのまゝ倒れ息絶えければ、来次郎はじめ席にある人々、こはいかになりけると抱き起すに、やゝありて息出で見るみる面に朱を注ぎ、髪ふりみだれ眼さかづり、昔も絵にうつす鬼女の如く、側の銚子を取つて大地に投げつけ、「あら腹だたしや我その頃は、伊兵衛が妄執つゆ知らず、只貧に溺るゝ事のみ思ひ、頼る親類もあらざれば川に入りて溺死せしが、思ひきや相棒が側女と私情なし、彼を失つて本意となす、悪さも憎しの一念忽ち小蛇となり、伊兵衛が身に近づけども、彼が勇気にさまたげられ、いまだ念ひは遂げざれども、見よみよ人の怨みはあさましきものや、己ら夫婦二道の巷に誘はんことと、歯を嚙り牙をかみ、ほとつく息の夕陽に向つて火宅の如く、来次郎を恨めしげに、うち見やりいやよ来次郎汝がさかなき目のはに、多くの人のもの笑ひを語り出で、逢ひの雲の十重二十重、かさねる事の恨めしやことと、板縁を踏みならし、西へ走り東へかけりて狂ひまはるさま、刀山劔樹の罪人の如く、はたと直前を睨みけるに、此の縁さきにその首さにかかり難き石盤あり、水満々とたゝへたれば、己が顔の水面にうつるをつくづくと見、あはれ汝ほどなる顔ばせあらば、我も伊兵衛に逃げられじ、せめてもの心やりに、汝が寵歓次をまたかうどなしたる怨みなれば、やがて冥土の道となさんことと、おのれと己が影を罵り、石盤に手をかけながら

ふりあふ向けば、よく五六人の力をかつて動かし難き石盤忽然として地をはなるゝこと三四尺、更に力を用ゐるやうもなく、聊かも胸をどらざれば、さては於澤が死靈の乘りうつりしならめと、求次郎はじめ恐れあひ、手ざす者もあらざりしが、草鞋作助といふ男は、少しく力量ありしかば、庭さきよりうかゞひより、跳び上りて抱きとむれば、歌次も後に撲と倒れ、手もと外れて手水鉢を取り落し、水滾々と流れけり。その折人々はせよりて、漸くに抱きすくめ、一室に押しこめ外より堅く釘にてうちつけ、元の席にかへり、又一杯をあぐれども、此の騷動にて大いに興を破り、それ〴〵に別れを告げおのが家路に赴きける。求次郎は歌次が狂氣何とやらんきづかはしく、作助を呼びて申しけるは、「我無く徒事を語り、かくよからぬ事をひき出し、後悔してせんなけれど、汝これより船をとばし、芝浦なる金吾歡次が方にいたり、澤子が靈魂侍女歌次を苦しむる事、詳かに告ぐべし。」と云ふに、作助かしこみて「幸ひ今汐あひよし。」と、浪を分けて漕ぎゆき、三更の頃金吾のみ同船なして歸り、作助申しけるは、「さて君の命じ給ふ如く、歡次どのをも誘ひ歸らんと思ひ侍りしが、『たとひ娘が狂死なすとも亡靈の業ならんには仕術なし。明日こそ參らめ。』と恐れをのゝき來り給はじ。」と告げければ、求次郎金吾を座敷に伴ひ煙茶をはりて後、云ひ出でけるは、「諺にも鈴を盜む者は、己が耳を塞ぎて、異人に耳あることを知らず、澤子が怨念かく許りならんとは思ひもかけず。足下より聞きたるまゝ、

伊兵衛が嫡に小蛇螢光の怪事を語り出で、又しか〴〵の怪事をきまうく。彼の歌次亂言を口走るうち、伊兵衛花子はさらなり、媒人なしたる歡次まで、深く恨みたる模樣なれば、此の後伊藤の家にも、如何なる怪事あらんも計り知るべからず。よつて貴殿をも、詳に縁故を告げんためまねきたり」と云ひければ、金吾もおほきに恐れ、まづ歌次が光景を見んと、おそる〳〵求次郎もろとも、杉戸の隙間より覗き見れば、歌次はなほ狂ひ止まず。ひたぶる哭き悲しみ疊をひきほごし、藁を束ねて人形をつくり、是れを罵りて云ふは、「汝花はじめ此の眼をもて伊兵衛が春心を發かし、再び此の口をもて澤子を退け給へと、姦計をすゝめしならん」と、藁人形の面とおぼしき所を簪にてつらぬき、又「右の手をもて衣をひきかけ、左の手をもて枕にかはらしめつらん」と、はら〳〵と涙を落し「わがいふことを於花汝つばらに此の胸に覺えあるらめ」と、二度簪にてつき通せば、不思議や皮さけ肉やぶるゝが如く、鮮血淋々としたゝり落つれば、求次郎金吾は二目とも見ず、座敷に逃げかへりし時は面土の如く、やう〳〵心とり靜め夜も更けければ、臥戸に入りて休みけり。かくて作助は夜明頃起き出で、歌次が押籠められし一室、あまりに音もなさゞるを訝り、やをら杉戸をひらき見るに、藁人形一つあるのみかつて歌次は見えず。出口をかたく戸ざしおきしが、走り出でん道理なしとよく〳〵見れば、拳をも出しがたき格子に、髪の毛数十筋ひきかゝりあり。こゝよりや出でけんといよ〳〵あやしみ、

求次郎金吾をもよび起し、屋敷のくま〲殘る所なくさがし索むれども、それと思はるゝものもなく、只歎次が處の道具海邊に落ちありしに心づき、汀へ下りたち見るに、はたして小袖の裳波間にひらめくを見出し、急ぎひき上げければ、あはれむべし、きのふの顏色露ばかりもなく、藍の如く青く瓢の如く腫れ、夜半の中に溺死せしありさまなれば、せん術なくこの趣を告げ、死骸を歎次が方へ送りやり、猶花方の家にも祟りあらん事を恐れ、僧を請じて經をよましめ、且は一伍一什を手紙にしたゝめ、作助を使として鎌倉へ走らせければ、日あらず伊兵衛が宅に到り、於花にも對面し、求次郎がふしなしごとを物語りせしより、於澤が靈の歌次をとり殺せしを、金吾もまのあたり見たるまで落ちもなく語り出で、かの死靈を避くること肝要たるべしと、ねもごろに聞えければ、伊兵衛夫婦大きに恐れ、眉に火のつき、足もとより蛟のいはるが如く、急ぎとある八幡の宮居より、神主をこひてつるうちなどせしめ、善を施し身を愼みけるとなり。これよりも兩家いよ〱無事にしてしるすべきことなし。

第四回　花のちまた　夢の奇事

陽鳥羽をやすめず、はやくも三年の星霜をふりてのち、良からぬ事いできて、途に花方伊藤の兩家

断絶す。其の縁故といふは、求次郎先つとしより、ふと友がきに誘はれ、花と柳の巷に眠り、隅田の月見るかへるさ、浅茅ヶ原の笠やどりにかこちつゝ、女郎がよび止む時なく、此の頃名高き巴樓津島とやらんに、殊に相愛の情み深く、旦夕さらに家にあらざれば、求次郎が伯母近きほとりにありけるが、此の事ほゞ聞き及び、兎に角求次郎が妻迎へんにはしくべからずと、既にその事定まりしに、求次郎今更いなまん言葉なく、又從ひたらんには、津島と枕上に誓ひし事の違はんなど思ひつゞけ、ひとまづ此の事あからさまに津島にいひたらん上ともかうも計らはんと、花巷に通へる頃金吾とも折にふれ袂をつらねしに、或日金吾求次郎が家を訪ひしを、「よき折から。」と勸めつゝ、共に宮戸川に棹させし船は、一葉を浮めし心地し、三ツ櫓二ツ櫓逸はやく北を向きて走れば、兩岸足ありて南へ歩むが如く、右にうれしの森松柏枝をまじへ、左は並木松のむらだちにて、三谷通ひは稻荷の岡の馬に乘り、又兵衛どのはのんやれ綱すきよといふ唄をうたひ、爰に三瓦かしこに五瓦、酒などひさぐ看板は櫻の梢に結ひつけ、蒸蕎麥の店は一膳六文かけ値なしとしるせし行燈を出す。兎角なす間にはや柳巷に到れば、太夫、格子、散茶、梅茶、次女郎、局見せまで、品々の女郎は五つの町にところせく建てならべ、櫻の顏ばせ柳の腰の花娘我おとらじと粧ひかざるその一二は、早川、三河、江口、定家、家隆、吉田、相模、河内、坂田、せいしゆ、政常、萬世、小宰相、大よし、小よし、半太夫、吉十郎な

どこれ一時の花魁なり。禿花車つきそひて、戀たち道中揚屋ゆきの華やかなるは、筆に及ぶべうもなし。塗笠、市女笠、奇特頭巾、褶縮したる壺折すがたは、はるかいにしへになりゆき、島田の笄象牙の簪には、金粉もて唐花を畫かせ、千彌染、三好染、加賀絹の色染、鯨ざし入れたる大磯風のむすび髮、きしたて眉に、友禪染の丸ぐくし、鶯袖にしたてたるわらはけたるあり。又は山路、須崎の染模樣、うち出の鹿子に、吉長の小色染をかさね、帶はすお天鵞絨のはやり結び、左だんわけに結びたるは、都を慕ふ風流なるべし。此の頃よりなべて芙蓉といふ妓のはでをまねび、一樣に綸子鼻緒の馬下駄は今樣にしていと目だち、手々にうちはを持つあれば、人形をかい抱くあり、群れ集まるかひて共は、ちまたをおのがじゝに歩む。品あるなかに朧富士の野郎笠は肩をかくし辰之助染に黄繻子のうちつけたる羽織、はつばの大小を片岡風にさしたるは、勘七が刷毛め鞘なるべく、淡竹紫竹の杖つきたるはよしや風呂丹前姿の餘風なり。つり髭の男は兎のおんのしと云うて、頭より羽織をかぶり、角太夫ぶしの七小町、初音、三井寺など、せきしゆぶねの扇うち鳴らしてうたひ、高崎足袋、細緒のならさうり、朽木縞の丈みじかきを着たるは、浪花人と見え、中川喜雲が口あひをいひ、鹿子ゆひ扇おりをみしめしてみれば、驚くもむべなり。その餘は今樣帶の手綱染、蜻蛉むすびの茶筅がみ、紫のおき頭巾、燒印おしたる貸編笠、ぞめき空手振は玉水鈴蟲のうた、託宣の道行、あふひのうへの淨

瑠璃、らうさい、のんやれぶし、小諸節口々にわめき、美少年は蜘蛛のいくつわの大模樣、白ちりめんの綿入羽織、縹緞ぐゝみ、緋がくしのだてなるあり、南にめぐり、北にさる、醉ひ更に云ひつくしがたし。程なく求次郎金吾は、巴やが樓に登れば、珍魚一尾百錢をいとはず、海山のさかなをとゝのへ、新造禿など集まりもてなしつゝ、やがて相方津島も出でけるが、青年端麗にして花貌柳腰そなはり、求次郎がまよへるもむべなりと、金吾も心のうちに思ひける。この夜は雨そぼふりいとしほしめやかなれば、金龍山の別れの鐘もよそに聞きなし、すゞろとなしに一日二日をおくりけり。かくてある夜求次郎津島に向つて申しけるは、「われ御身とかく馴れ染めしも、はや一年餘りなり。ふと見そめしよりその俤身にそひて、煩惱の犬うてども去らず、又御身もかくうらなく契り給ひし心の、うれしともいはん方なし。幸ひわれにさだまる妻もなし、御身をやがて迎へとり、手活の花とながめんと思へども、伯母なる者かたく制して許さず。三十近きまで寡すみは、人の思はん手前もあればと切にすゝめ、心ならずも唐衣つま迎ふるはずに約をきはめぬ。さあるとて御身の情、今更忘るとにはあらねど、筑波山の陰茂く通はゞ、人目の關にもかゝらんなれば、折々ならでは通ひがたし。又逢ふまでの名殘と思ひ、此の日頃家に歸らず、御身もこゝろよからんなれど、今宵はひとしほうちとけ給へ。此の事とくあから樣に語らんと思へども、いはでの山の岩つゝじ、云はで胸をこがしつるぞ」と、枝

葉つばらに物語れば、津島はとみに答へもせず、求次郎が膝に髻すりつけ居たりしが、顔うちあげて、「人は妻をば持つまじき者と兼好とやらん法師のいひしかど、さなくては御心もやすみ侍るまじ、こよなきめでたき事なり。誰にはらはん枕の塵、憂き川竹の身にし假の契りに、かくまでまことある御志の、このまゝ死すとも冥土へのよき賜物なり。寄るべ定めぬ捨小舟、今日の客人の心に從ひ、又明日の客人も同じさまにもてなし、待つ夕送るきぬ〴〵、是れ誰人のためといふ事を知らず、田舍漢に出づればよそほかに間夫やあらんと責め、又ある客人は我に心のほど見せんとならば、針をもて腕に名を刺せと敎へ、空言はまことと思ひ、やがて郭をはなれんならば、我が宿にいざなはんと、髭くひそらすもうとましく、慕ふ人にうとまるゝはなべて浮世のならひにて、強ち殿を恨むとにはあらねど、今のたまふ事は皆跡なき空言ならん。わが心のほど是れ見給へ。」と、いづちに隱しおきけん、剃刀とり出で、小指ふつつとおし切れば、求次郎もあわて止めんとなすに、はや血迸りて枕もとに置きたる挾嚢にかゝるとひとしく、不思議や陰火猛んに閃き出づれば、いかなる事やらんと、求次郎もたゞ惘然となしゐける。

第五回　堤の蟲の音　水ぐるま

求次郎ふと目さめてあたりを見れば、津島は前後も知らず臥しゐたり。これ物語なし、陰火のひらめきしことなど、皆一炊の神夢なり。求次郎こゝろづき、枕もとにおきし挟嚢をとり見るに、まさしくあたゝまりあり。愈あやしみおし開けば、去りしころ津島ととりかはせし誓史より血染みて、守袋に入れおきたる神符へ懸り、彼の神符の半ばあら／＼と焼けてあり、誰やらんわるさに取り出で火桶のなかへおとせしならんと、心づかざるこそあさまし。此の神符につきて一つの話あり。求次郎いまだいはけなきとき、子育てなしとて、女兒のかたちにつくり、髮をひきご髷になし、歌貝歌竹をとりくれ／＼と、餘念なくあそびゐたりしに、年四十をも越えなんと思ふ祝、手に鈴をならし苍をよぎりしが、忽ち足をとゞめ額をあつめ、「憐むべし／＼」といひつゝ、求次郎が顔をうち詠め、既に行き過ぎんとなすに、求次郎が親なる半藏これを見て、易からぬ事に思ひ、かの祝を呼び止め、米錢など施し問うて云ふは、「祠司あやしのふりありて吐息して過ぎ給ふは、此の小兒に若しいかなる災ひにてもあらば、慈悲を垂れてこれを示し給へ」とねんごろに問ひければ、かの祠司求次郎を指さして云ふは、「此の小兒見る／＼瞳の下に若月の如き雲あるは、正しく劍難の相なり、年三十を越すべからず、なれど問ふ人なきに語らんは物乞はんにも似たりと思へど、心に餘りて遂に言葉を發せしなり。」と物語れば、半藏云ふは、「われ外に子もなく、實に獅子の玉を弄ぶが如く、背丈ののぶるを悦びて、

我が老いの來ることを知らず、此の妖孽いかにしてか免るゝ事あらば示し給へ。」と餘儀なく頼むに、祝は一言にも及ばず、一枚の閃刀紙を取り出し、朱をもて海松を束ねし如くの文字を書き、かさねていふは、「此の符を持ちて、二月三月の間は幅五尺にすぎざる小川にても舟を愼み、又いさゝかにても不淨に穢すことあらば、罪を蒙ること泥をうつて身へはぬるよりも速かならん。」と云ひ終つて、遂に去つてかへる所を知らず。此の祝を見知りし人の云へるは、「是れはもと肥前國長崎の産にして、青木主計といへるものにて、某の神祠を守り、ある時思ひがけなき罪に處せられ、門戸を青竹にてとぢられけるより、神に仕ふべき身にあらずとて、四方の國々遊行し、駿河なる芙蓉峯にのぼりて、

　ふじの根にのぼりて見ればしきたへの枕にむすぶ草だにもなし

と云へるなどいとをかし。さるやん事なき宮人より召されて、神代の卷を講ぜしめ、恩賞與へ給はらんと聞えしかど、望む所にあらずと兩腰をもすてて行方知らずなりけり。此の神符を與へしは果してかの主計なり」とぞ。これより求次郎は肌身離さず神符を持ちたりしが、今津島が容艶に迷ひ、誓文の血をもて神符を穢し、此の災ひをひき出す、是れ正に快保が家を絶さん爲なれば、於澤が怨みの枝葉にして、言へば時雨に陰と頼みし紅葉も、晴れて後はその枝をたをるが如し。此の事求次郎ちともこゝろづかず、津島も目さめて互に手をうちかけ物語る折から、三崎といへる禿はしり來て、「誰やらん君

にあはせよと御出であり。」と知らずなるも待たで入り來るは、是れも近しからざる朋友にして、卯月官太夫といふ者なり。この男はもと頬胡組といふて、人の遊興の席には無禮に押入り、または十字路に横行なし、怒れば則ち殺す、刀の乾くを不吉とする一箇の惡者なり。其のいでたちを見るに、都富士の大編笠を手に持ち、奥じまに肉色の裏つきたる袴をはき、近江布の羽織を著、長脇刀短中刀いかめしくさしたり。心はおそくよからねども、うはべは言葉を巧みにし、阿り諛ひ求次郎にとりいり、今夕もよき折からとあとを慕ひて來れるなり。求次郎見るより「何として久々訪ひたまはざりしや。」と互の挨拶終り、金吾をも呼び起させけれども、日々の大酒にて生を隔てし如くなれば、まづ二人にて事足りぬと、その頃流行りける河内流の投節、吾妻なまりのさゝぶしなど、聲をかしく唄ひ、人々も興にいり、盃のめぐりやまず。殊に官太夫は鯨鯢の百川を吸ふが如き大酒にて、津島求次郎も大きに醉ひを發せし頃、官太夫いふは「いかに求君、この頃は秋や、更けて花街に名高き名殘の雁、堤に近き蟲の音など又ゆかしからずや。ひとまづ此の樓をくだり、ぞめきてのち蟲聞きに行かばや。」とひたすらすゝめければ、求次郎は衣桁にかけある、肥後木綿に縞の方へ子持すぢ染めたる金吾が羽織をうち著てたち出づれば、津島いふは「明日御館へ歸らせ給ふ由、今宵はわきて御物語もさぶらへば」と止めけれども、流るゝ霞春の風、あしもとさへ定まらず、かへりみもせず出で行きける。憐むべし求次郎

た命朝日に向ふ雪佛のごとく、これ黄泉の門出にして、再びこの閾を踏まざること、ゆめ知らぬも哀れなれ。津島も花魁はなる〻まで見おくれども、せんすべなう待合の松のもとなる床几に腰うちかけ、げにや皓々たる秋の夜、遥々たる春の日だに長しとせざる契りなるに、今宵一夜にしていかが更鶏の枕を同じ床にたづさへんと、さしうつむきて口覆ひしたるは、人も目出むる美人なり。さても二人はそゞろき出で留め付けの松をもうち過ぎし頃、宮太夫云ふは、「貴殿例として斯く郭に日を重ね、ほとんど〻しき遊宴を開き給ふ。」と問ひければ、「されば とよ、我郭に通ふを嫌しく讒むる者あり、されど盗人のひまありて、守る人のひまなきとやらん、更に家にあらざれば、兎角妻迎へんにはしくべからずと遂に其の事整ひぬ。」さては郭の見をさめと思ひ、此の日頃洒落になれり、頭き家を忘れたるにもあらずこと物語るに、宮太夫心中に思ふは、此の求次郎兄を卜口にあまりて頗る富家なり、妻迎ふるにたしては極めて畜金の類ひもあらん。これによつてかく巴楼に日を送るに疑ひなしと、忽ち悪意を催ほし、「重ねて云へらく、我この頃賭物に利を失ひ、見らる〻如く空袋を覆ふ許りなる。ほとりも未錯りときわけしみなり。偏に貴殿のめぐみを受けすんば、いかで赤貧の病の根をたたん。子銀精にても貸し給はれ。」と、おしつけがましく云ひければ、「いかにこ〻は途中なり、家に帰りしのちは途も前もせめ。」と答ふれば、宮太夫得たりと思ひ、「いよ／＼恵み給はんとならば、明日踏を同じうし貴殿の

館に到らん」と、言葉を重ねくどくどと云ふにぞ、求次郎耳やかましく「いやとよ、我は蟲の音聞かんがための出でたれ、貴殿の賭物の吉凶聞きには来らず」と、更にとりあはねば、宮太夫も口を閉ぢ、草叢にすだく蟲の聲を心當にして堤を下りけるに、楊柳の木立月に影じて、鐵蛇小路に横はるが如く、何とやらん空吹く風すらもの凄くおぼゆる時、宮太夫ひそかに思ふは、金吾は酒に醉ひ巴樓にては我が面體を知らん道理なし。畢竟殺害して立退くにはしかじと、懐の重きに目やくらみけん、遣り過してはたと求次郎に斬りつくれば、何かはもつてたまるべき、呵というてのけざまに倒れ、「汝惡黨、いかなる罪ありて我を殺すや。かくいふは牛に向つて琴を奏するに似たれども、わが體に懷刀だになきをうかがひ卑怯なり、未練なり」と、もとより肩尖かすり淺疵なれば、閃と右へ身をかはし宮太夫に抱きつく。宮太夫は只一言の問答にも及ばず、ふりはなして斬り結ぶに、求次郎あやまつて堤の下なる小川へ落ちたり。得たりと刀逆手にとりなほし、えいと聲かけ突きけるが、求次郎折よくも水道の樋にとりつき這ひ上れば、宮太夫が刀は空しく泥を刺し通しけり。此の時四更の頃なれば道哲庵の鉦、もののの哀れに聞ゆるのみにて、四方寂寞として、一つならざる蟲の聲かしましく、村雲覆ひて月全くあらはれず、暗き夜に鶺鴒を放つ如く、彼方にたふれ此方に伏し、又うちこめる二の太刀を、腰扇にてうけとむれど、鶏卵を擲つて磐石に打ちつくるが如く、颯々たる比良の山颪に奪はれける、眞野

の浦波吹きたつるに似たり。求次郎はじめ落ちたる流れは、元來田の面へ程よく水をひかんが爲、水道へかけたる水車の水門なり。樋の板をおろしありしを踏み落しければ、車は次第にゆらめき出で、くる／＼と廻るに、あはや求次郎がかた袖、車に纏ひつき動く事能はず。宮太夫は是れ幸ひと袈裟がけに切放てば、腰より下は流れにおち兩手は堤の草を摑み、生齡僅か二十七を一期として、冥土の人となりにけり。宮太夫は止め刺さんと、うちこみし刀ひけども／＼拔けざれば、朧月に透し見るに、萬卷をしるせし辻札に刀尖あまりて切り込んだり。足をかけてぬきとれば、堤の上に人聲あり。ふりかへり見るに花澤がよへる馬飼なり。刀うちふつて提灯はつと斬り落せば、又後のかた蟲の音俄にとだえしに心づき、草叢にかくろひてうかゞへば、果して小路づたひに來る者あり。さてこそと手裏劍はつしとうちつくるに、的はづれしと見え、なほ足ばやにすゝみよる。逃げんとするに後へひき戻す心地あれば、心をすゑて窺ふ。求次郎が挾囊に紐をつけ、首にかけありしを切らざるなり。あわてて是れをかなぐれば、四方に人聲して「やれ人殺しよ／＼。」と呼ばはりしに驚き、畔をはねこえ畦をつたひ、行方も知らず逃げ失せたり。

霜夜星三卷　畢

近世怪談霜夜星　四卷

第六囘　編んだ帚の狂人　古屋の木まくら

この時來りしものは別の人にあらず、求次郎が挐鞋作助、主人のかへりおそきをきづかひ、夜更けてより須崎を出で、花巷へといそぐ折、土手の下に、「人殺し〳〵。」と呼ばいて騒動あり、何事やらんと足ばやに進みよれば、銑鋧肩尖をかすつて柳の樹にはつしとたつ。拔きとり見れば割搯枝のかたしなり。哀れ露と消えしものは何地の人ならんと、幸ひ雲はれ月の夜とあらたまりければ、玲瓏たる影にすかし見るに、豈はからんや、主人求次郎鮮血にまみれ伏したりければ、作助愕然とうち驚き、天を仰ぎ地を叩き、泣くに涙なく叫ぶに聲なし。この騒ぎにて近鄰の人、手々に棒ひきさげて馳せ集まりければ、その縁故は知らざれども、此の死骸は我が主人なる由を云ひ解きて、求次郎が亡骸を假にあたりへかくし、まづこの由花方の家に知らして後、兎もかくも事を議すべしと、涙をさめて立上れば、遠寺の鐘聲殷々として、會者定離を告げ、柳巷にかきならす琴歌の露にやどる稲妻に、如露亦如電のはかなきを、我にしらすかと思ほひて、夢に夢見し心地なれど、かくてははてじと、泣く〳〵須

[illegible]

らぬことに思ひ、人を出してさぐりもとむれども、今は彼處にありし、今日は其のわたりにて見たりしと、僅に風說に聞くのみにて遂に尋ねあはず、三日目の日ふべ淺草より牛島に渡る渡場にて、狂ひ死にぞ亡せにける。求次郎傘屋は家をつぐべき子なく、伏保は傘屋に別れてより、近邊の寺院へひきこもり、薙門となりけるが、重なる〳〵愁へにや、幾ほどなく死亡りける。ただめ聽する人心にして、作助は家に歸り、縁故を告げて後、かの難儀にうつたる擔扶を見るに、南無阿彌陀佛の文字あり、つくづく思ひめぐらすに、先つ頃法壽寺花見の時、求次郎が誘ひし、卯月宮太夫といふ浪人が所持なせし擔扶にて、作助も見覺えあれば、求次郎を役害なせしは、彼が仕業とは明白なれど、仇討の心もなきにや、求次郎が瀦へおきたる金一百兩盜みとり、雨風のはげしき夜亡命なし、行きがた知らずなりける。これいかなることより起る。於清が女の性のかたましきより、その怨氣消散せず、花方伊藤の兩家、見るがうちに斷絕し、此の一事を人つたへ聞きしかば、誰ありてこその家に住ひなす者もなく、主人なき家に亂草生ふるのみなりけり。遙か年をふりて後、求次郎が古家を買ひとり、ある醫師住みし、再び未此の怪しみありし事、白藏が牛島間に出でたり。

第七回　藤宮の怪事　害くゝるゝま

かまくらと聞えしは、御所跡管領館あとなど、土人言葉を捨てず、ここなりし彼處なりしと物語れど、皆田圃のみとなつて、げにや、草も木もなびきし秋の霜消えて空しき苔をはらふ山かぜ、と詠ぜしもむべなり。されど驛路市町の賑ひは昔に倍し、旅店所せきまで棟をまじへ、諸國の商客ここに集まり、美酒海鮮ひとつとして欠けたる事なく、水清く山麗しき平安の地ともいふべし。かの伊兵衛が住居を求めしは、少し街に遠ざかり後は松葉が谷、扇が谷に續き、前に山川の流れありて、掛樋の水人の力をからず、花に、雪に、眺めよき一つの草庵なり。諺にも、夏來れば寒さを忘れ、冬さればば暑さを思はず、いぬる年は求次郎が横死より伊藤の家も絶え、快保は大風の如き病にて世をさりしかど、於澤が祟りとはゆめ知らず、年月たち行くにつれ、漸く枕をやすんじ暮しける。頃は神無月とかいへる孟冬なりけるが、伊兵衛於花は二人の愛子と共に、椽さきにありて詠むれば、陽は西山に没し、月は杉戸の杜にさし出で、戸ざすに情つきずと、なほ端近う立出で、大空をうち見るに、浮雲蝶に似て飛び、魚鱗の如くつらなり、大いに趣をそへぬ。ふと伊兵衛於花に向つて過ぎこし方の事ども語り出で、かの快保が館にありつる時は、殊に華奢の情深かりし、など戯れければ、花子答へて、「されば とよ、妾も女郎に陥り、娼子とならんには、思はぬ人に笑ひをもよほし、籬に立つて客をまねかんとなしけるに、今かく思ひまうけず、情人に添臥なし、愛子を二人までまうけしは、砂の中に

ひろへる玉にやあるらめ。」と云ひければ、伊兵衛うち笑ひ、「既に諺にも明珠連城たからにあらず、子孫をもて寳とす、愛子の榮えゆく末ほど見まほしきはなし。」と云ふうち、はや幼子が習ひにて、お村は花にとりつきて、「母さま、ねぶたくなりたるに、寢かしてたべ。」とあまゆれば、於花は悦五郎、お村を誘ひて、閨房に入りければ、伊兵衛は尚さやかなる影にめで、月のむしろをたちかねて、柱にゐよりてありけるが、柴の戸ほそをほと／＼とたゝきおとなふものあり。いと怪しみて、「誰なるぞ。」と云へば、「わらはなり、こゝあけてたべ、もの申さんことあり。」と答ふるは、正しく女の聲なり。伊兵衛訝りながら庭におりたち、片折戸おしひらけば、丈なる黑髮をおどろ／＼しくふりみだし、青ざめたる女髣髴としてたゝずみゐたり。元來不敵の伊兵衛、「何者なりや。」と立寄り見れば、姿は何方にか消え・村雲にかくれたる月のもの淒く照り、颯々たる嵐木々の梢を鳴らすのみなり。ぞつとして振りかへれば、きり／＼と音して柴折戸を開き、跳石をつたひ牀へのぼる足音のみなして、曾て姿は目にさへぎらず。細やかなる鬼火縁先に燃えたりければ、伊兵衛心に思ふは、それ瑯琊代醉編に野狐髑髏を抱き、北斗を百禮して、婦人の形と化し、また酉陽雜俎に、狐尾を振つて火を出すをのせたり。此の地の南は、箱根足柄關の八重山峨々として、又雅麥おふる諸越が原とやらん、荒野に隔たること遠からねば、狐狸の我をたぶらかすも知るべからずと、四壁を屹と見まはすに、先の女は伊兵衛よりも

早く座敷に入り、顔さへ上げ得ず只さめ〴〵と泣き居たり。伊兵衛女の側に歩みより、腰刀閃かし切りつくれば、姿は消えてまた忽然として後にあり、後を拂へば前に來り、前を空打ちすれば、右左につきまとひ、更に己がかげの離れざるが如し。此の時烈しき風起りて、庭前の砂を飛ばせ、燈檠の火消えんとして、又闇らかなるぞと見えしが、かの女絲より細く、雪より冷き手をのばし、伊兵衛が襟頭かいつかんで外のかたへ出でんとす。伊兵衛力足を踏みならし、手に當るを幸ひと、煙盤をもつて打ちつくれば、一同に灰たちのぼり、こゝろ〳〵漁舟にあらねども、しばしあやめも分かざりしが、やう〳〵に隱消えて彼の女をつく〴〵見れば、怪しいかな、これ即ちこの世をさりし於澤なり。扨はうつせみのきたなき魂なりけるよと驚き思へど、尚こゑ荒らかに云ふは「汝於澤、まこと靈あらば我がいふ事をよく聞くべし。汝が魯鈍によつて汝が命を失ふは、これ夏の蟲火に入るの類なり。それにいかでか、我を恨むる事やある。」と、はたと睨まへければ、於澤が姿は漸々に遠ざかり、向ひの林の中に入り、手の及ばざる梢にたつて、ひたすら伊兵衛を睨み返し、一度は冷笑をなし、又はらはらと涙を落す。伊兵衛ふと心づき「よし〳〵汝が嫌ふものあり。」と、牀の間にありし種ヶ島を取り、藥ごめになし、澤子をめがけ撞と撃てば、不思議や空中に車の軋るおとなして、澤子が姿は見えず、地上よりも鬼火はつと燃え出でぬ。すはやと立ちより見るに、地錦の朱なるが風にうごめくのみ、そ

れと思はんものもなく、たゞ襟のあたりへばら／＼と水のかゝりしかば、木々の葉末のしづくにやと手にうつし、燈下へさし出し見るに鮮血なり。こはいかにと驚くなり、撞と音して椽先へ落つるものあり。立ちより見れば思ひきや、いぬる年仲人したる歡次が鮮首、眼は半ば開いて死にもやらず、水をのむ魚の如く、口をうごめかして居たり。伊兵衛は總身の毛一度によだち、なみ／＼の者ならば、氣もとり失ふべかりしを、やう／＼に心をしづめ歡次が首をとりて、種ヶ島の鳶尾にくゝり、泉水へしづめぬ。於花は今の筒音に驚き、閨をたち出でて樣子を問へば、明らさまに語らば恐れやせんと、「一時迷ひし小鳥の月にうかれしを、撃ちとめんとなせしなり」と答へければ、於花うち笑ひ、一時の戯れに愛子の目や覺さん」と、手をたづさへてふしどに入る折、悦五郎あと叫ぶ。夫婦あわてて寢衣をはね、抱きおこせば、はや息も絶えだえにて、「許せよ／＼」と亂言をいひ、程もあらず死にうせければ、於花は只伏しまろびて正體なし。伊兵衛もとりわけ、待ちの事共思ひあはすに、これ亦、澤子が亡靈のわざなめりと、悦五郎が死顏うち見るに、先年蛇の喫へ去りし、花が形見の簪にて、口の中より咽骨を貫きたり。思ふに違はず、憎き死靈の所業かなと、拳を握つて憤るに、又側に、陽炎の如く澤子が寃鬼あらはれ出で、さも嘉ばしき面持して、悦五郎が死顏うちまもり、莞爾となせば、伊兵衛怒氣を忍びず、佩刀を拔きて斬りかゝるに、唯霞を切り、煙を突くが如し。花子が目にはかり

死靈露ばかりも見えざれば、詮方なきに伊兵衛刀を拔きて斬り拂ふは、愛子一人うしなひし愁へにより、狂氣なせしと思ひ、「良人心をしづめ給へ。悦五郎死したりとも、お村は不便と思きぬにや」と、ひたぶるに押しとめんとなし、あやまつて柄もとまはり、伊兵衛は己が刀にておのれと肩に腰へ疵をうけたり。花は再び驚き、「いかにせん〳〵」と泣きまどふに、「淺墓なればなげき驚くことなかれ」と、衾にて捲き、夜も明け放れければ、悦五郎を野邊送りなし、ゆふべ一片の煙とはなしはてぬ。かくてより伊兵衛花子は鬱々として更に樂しまず、懷の珠を奪はれ、插の花を嵐に散らせし思ひなれど、村兒が徒にあるを見て、これをや住吉の岸におふてふ萱草となし、二月三月過しけり。かの伊兵衛が創著れりかなれば、日あらずして全く癒えたれども、何とやらん痒みを覺え、次第々々に腫れ上り遂に腫物と成り、醫師を招きて見せしむれど、「何と名づくべきことも覺えず」と答ふ。これよりも膏藥をほどこし藥を勸むれど、その驗かつてなく、今は立居すら心にまかせず、怪しむべし、また一節の珍事出で來て、每夜四更の頃ほひと思ふ頃、何方ともなく鼠數多集まりて、伊兵衛が腫物より出づる膿汁をなむるに、その心地よきこと云ふ許りもなし。花子はいと奇怪なる事に思ひ、枕邊にありて鼠を追ひ退くれども、暫しも痛み堪へ難く、かくなす事夜毎にして、遂に伊兵衛が身膏潮れ盡り、ほと〳〵命も絕ゆべうぞ見えにけれ。悲歎の中にも於花は一つ計をまうけ、長櫃の中に伊兵衛を伏さしめ、

息出しの穴をくりあけ側に守りゐれば、果して鼠も来らざりしかば心に喜び、五更の頃ほひと思へる頃、あまりに音もなさざりし故、長櫃のふたを開き「薬にてもまゐり給はじや。」と云ひつゝ伊兵衛を見るに、豈計らんや、裏には鼠満ち／＼て、白黒斑なる其の数知るべからず。こはいかんせんと跳びのけば、かの鼠ひとつに集まると見えしが、忽ち陽炎の如き女の形と化し、外の方へたち出づる。於花は襟元より水を灌けるが如く、思はず撞と倒れければ、お村此の音にや驚きけん、側に臥し居たるが、魂消る許り聲をあげ阿と叫びつゝ起き上るに、於花あわててかき抱けど、たゞ眼を見つめ歯をかみしめ、わづかに息の通ふのみなり。伊兵衛長櫃の内より骸の如き手をのばし、霜によわる松蟲のかれびたる聲たてて「やよお村心をつけよ。驚き夢見しにやあらん、於花必ずうろたふるな。我薬もて来て、飲ません。」と、子を思ふの切なるは、己がいたつきもうち忘れ、立たんとすれど目眩き、がばと倒れて伏しまろぶは見る目も苦しき光景なり。お村やう／＼目をひらき「母さま、さては夢にて侍りしよな。今現の如く竹の林の中にて、知らぬ嫗さまのいづちともなく歩み来て「我に負はれよ、好き物とらせん。」と、我を背に負ひ一歩二歩行くとおもひしが、振返りて睨みし其の顔の醜さ恐ろしさ、譬ふべき物なし。驚て襟もとかい攫んで撞と大地へ投げつけられしと思ひて夢さめぬ。その攫まれし跡の今に痛きぞ、薬つけてたべ。」と云ひつゝ、又「あなや。」と叫び「あれ、夢に見たる嫗

ごとは、かしこにいまして、我を睨み給ふ。早くわびしていなしてたべ。これよりは石弄もとらじ、わるさもせじ、明日はつとめて手習ふ事もよくせんに。」と、花子にとりつけば、於花うち泣きつゝ、「暑さ寒さもおろ〳〵知る年とりて、いと童げたること云ふものかな。おそはれしより正心のつかぬにこそ。熱ある時は空をゆき、谷底へ落つる夢をも見るものぞ。」と、さま〴〵に云ひこしらふれば、伊兵衞潸然と涙を落し、「今更云はんも、面に汗なすことにはあなれど、我御身の艶なるにめで、良からぬ事と知りつゝも、罪なき澤子を追ひ退け、彼は迫つて入水なせしが、其の恨みいかで夫婦に懸らざらん。我は漢和の史記に洩れたる異病に苦しみ、いぬる年は婚禮の席に小蛇の怪あり。悦五郎、村兒が有樣、これみな澤子が亡靈の所業にて因果の道理必然たり。」と、いつぞや澤子が幽靈現はれて、わが目にはさへぎりしより、歡次が死首の事など一五一十を物語り、かさねて云ふは「我もはや冥土の鬼とならんこと遠からじ、自業自得の催すところ、嘆きても詮なければ、御身必ず此の處に足を留めず、尼法師ともさまをかへ、諸國の靈場を巡拜し、幸ひ上總國市原郡光明寺は、姉の遺骸を葬りたる地なれば、かの寺へ頼り親子が後世を弔うてたべ、御佛の敎へには、十惡五逆の極重罪も、一念十念の稱名の功力にて、罪滅し、極樂往生なすと聞く。頼みおくことこれのみなり。」と云ふうちもはや舌こはり、たのみ少なく見えにけり。花はあまりのことに言葉さへ出でやらず、袖を顔におしあ

てゝよゝとばかりに泣き居しが、かくては悪しかりなんと伊兵衛に力を添へて云ふは、「良人はこれ一箇の武夫なり。日頃ゆゝしき性に似氣なき事な宣ひそ。かかる事は己が心より、おのれが身に祟りをうくるなど、古き物語にも聞き侍る。」と、背をなで足をさすり、又お村を抱き上げ、涙かくして介抱なす、その心ぐるほしさは推し量り知るべし。お村は於花に抱かれてゐたりしが、顔色俄に變り、伊兵衛が面をまじろきもせずうち見やり、莞爾と笑ひ、「父上今のたまふ婚禮の時、簪を啣へ去りし小蛇は此の如くにや」と云ひ、附近にありける錦の腰帯をとりて、伊兵衛が膝に投げつくれば、奇なるかな、忽ち一つの小蛇と化し、錦の文は鱗の如く、紅の紕はさながら舌を吐くに似て、伊兵衛が咽に纏ひつき、次第々々に締めつくれば、見る／＼面に朱をそゝぎ、空を摑んで苦しみつゝ、悶絶僻地周章死をなすを、お村微笑みて心よげに打見やり、「いかに伊兵衛、水に溺れて死すとは、いづれか苦しからん」と云ひをはり、恰も枯木を倒すが如く、二人一度に撞と倒れ、既に息絶え死にうせけり。

此の時一團の鬼火、陰々として表の方へ飛び出で、いづこともなく人聲して「今は望みも足りたり。又明日の夜こそ來らめ」と、かや／＼と笑ふにぞ、花は悲しさ恐ろしさ半ば死せる人の如く、よゝとばかりに聲たてゝ泣くより外に所在もなく、亂心のごとなりけるが、これも定まれる因縁にや、夜明けてより正氣つき、近邊の人々に懺悔のためとて、一分始終を物語り、伊兵衛が亡骸とりをさめんと

なるに、前夜のくけ紐はなほ首にまとひて離れず、村兒は俄に死したれば身もあへてはそらず、活けるにかはらぬ顔ばせを見るになか／＼胸つぶれ、花子は又も狂氣のごとく襖の隙にくりごとして「よしや妾が身の上に恨むる罪もあらばあれ、この子に何の咎ありや、三途の川に迷ひては、母よ／＼とたづねんに、同じ路にや赴かん。」と、自害せんとなしけるを、近鄰の人さま／＼に云ひなごめ、伊兵衞村兒が柩をならべて寺院へ送り、かの伊兵衞が遺言なれば、惜しからぬ命もながらへて尼になり、菩提を弔ひ給へとて於花にすゝめければ、花子も人々の言葉をうけひき「又明日の夜こそ來らめ。」と云ふ聲の、耳の底に殘りてそら恐ろしく、其の日のうちに家財もそこ／＼とりをさめ、墨の衣に露の涙をしほり、三界無庵樹下石上のはかなくも行方定めず出で行きぬ。これはいかなる事よりや起る。されば佛の教文にも、邪淫は五戒の一つならずや、愼むべきの要なり。しかつしより澤子が靈鬼、此の地に留まり、陰雨の時はなほ鬼火飄蕩として、こゝに閃き彼處に燃え、また暗夜の文なきには、遠く車の轢る音なくして眼には見えず、かの車にあひし者は、三年を過ぎず命終るとて土俗恐れをなし、杉戸の杜の鬼火、雙橋の空車など、一席の茶話となりけるが、遙か年ふりて後、東福寺千人結制の師家、象海和尚、關東に杖をひき給ふ剩、この地に遊行まし／＼、土人の話說を聞き給ひ、澤子がしるしとて墓を築き、一七日讀經ありしかば、大德の教化により、その後は絶えて怪しき事もなかりしと

なん語りつたへたることなり。これよりいかなる物語にやうつる、をはりの巻を開いて知らん。

霜夜星四巻畢

近世怪談霜夜星 五卷

第八回　種々の茶器 わたし舟

いぬる年於澤がもとは伊兵衛を媒嫗なしたる、道具屋三次は兎角なりはひの道にはうとくして、賭物にて金を得んことを思へども、それもうちつゞきて仕合あしく、また媒介をなさんにも、世の人皆三次が言葉をたくみ、兩舌を弄するを知れば、誰あつて彼に委ぬる者もなく、いかにせんと思ふ折、下總國銚子といふところに旅戲場ありて、この債主にとりいり、目代となつて彼處に赴き松島半彌が門弟、松島平三、竹中吉三郎が門弟、竹中半七これらを場魁となし、その餘は緣竿使の權次、太鼓うちの助八といふ愚人まで俳優となし、正月頃より興行なせしが、思ひのほかなる繁昌にて十兩餘の金を儲け、三月戲場はてて後、ひとまづ故鄕に歸らんと、かの金を裹へ入れ腰の重きを樂しみて、只一人舟橋といふわたりへも近づく折、いつとなく三十ばかりなる賈客と見ゆる男と路づれの如くなり、互に煙草の火など借りけるが、かの路づれの男三次に對つて、「いかに旅の御方我もそれ〳〵の所までかへる者なるが、今宵は同じ旅店に宿り給はじや。」といふに、三次もよき程にいらへして又一

里程行きたりしかば、かの男向ひの林を指さして云ふ「あれ見給へ、向ひの小高き處ははや大神宮の森ならん、彼處に一軒の酒屋あれば旅人には好み給はじや知らざれど、しばらく憩ひて疲れをなぐさめ給へ。」と云ひつゝ、懷中より螢火打とり出でて獨答說に云へらく「嗚呼世に得まほしきは金にて、又得がたきも金にしくものなし、今僅かの金さへあらん程ならば、五十兩六十兩の利を得んこと、嚢の中の物を握るが如し、我もその事にて成田邊まで行きつるが、これも金ひとひらも出で來ず、只空しく手を束ねて、人のよき事せんを見んより外てだてなし。」と物語るうち、天照皇の宮居近き酒屋の前に出でたり。三次はちとも道を急げばと別れを告げて行き過ぎんとす。かの男三次が袖を控へて放さず。三次もせんすべなく、酒屋の牀机に腰うちかくれば、かの男小奴を呼びて酒肴を出させ、ひたぶる三次にすゝむ。三次ひそかに思ふは、我持ちつけざる金本金とも今こゝに三十兩餘あり、若しや此奴葬巫醫にて早くもこれをかぎつけ、我を酒に醉はしめんとの謀ならんも知るべからずと、喉のぶく/\と鳴るをこらへ、我は不喫下なりと僞りて一杯をも飲まざれば、かの男つゞけ飲に飲みたるが、大いに醉ひを發し、草鞋はきたるまゝ菅笠を枕とし、前後知らず熟睡なす。三次初めて心おちつき側にある銚子をとり、一杯飲んで舌うちならし「嗚呼人は體面によらずとやら、彼は我をたゞ酒相手になさんとしけるならん。かくと知らば疾くより飲んで憂きをはるけん物を。」と、又五六杯飲み

けるに、かの男更に起き上らず。三次心をいらち、最早申も下る刻なるにとゆり起しける間に、かの男が財布懐中よりすべり落ち、書簡やうのもの打散れば、三次苦々と云ひつゝ、取り集めんとなし、ふと彼の書簡の上書を見るに、道具屋五郎次といふ名あてあり、さては此の男も我と同じあきなひをなすものならんと、思はずかの書簡をおしひらき見れば、何某殿かねぐ〳〵茶事を好みたまひし處に、葛西領飯塚村乙戸源蔵といふ浪人、道提が茶壺、守徳が茶杓、甚四郎が茶筅、一路が手取釜、その外種々の茶器貯へ居る由、何卒両士両ほどに買ひとり、何某殿へさしあげたる程ならば、幾許の利もあらんと、其の事つばらに書きつけあれば、三次思はず呵々とうち笑ひ、「諺にも長者の田は實ることも早しとやらん、我十両にあまる金を儲け、又ゆくりなく金のつるにとりつきぬ。思ふに此の男先にいひし独言はこの事なるべし。何某殿茶事を好み給ふは我も疾知るところなり。これより飯塚村へ赴き此の茶器を買ひとりて、何某殿へさし上げなんには、幾許の金を得んも知るべからず、これ幸ひの端口なり」といふをり、かの男吽と云うて寝返りをなせば、三次うち驚き、そら知らざる面持なして、杯をとり上げ、咳をなしつゝ、問はで事すむ刻限を小奴に問ひなどする間に、かの男又熟睡なす。三次心に歓び、書簡と手拭をば酒屋の小奴の疑はざるため、床机に殘し、手淨するそぶりして此の處を足速に遁れ去り、はや黄昏なれば舟橋に宿をもとめ、春の夜の明けやすくほの暗きに旅宿を出

でて路を急げば、はや辰の下る刻飯塚村へ來れり。三次鄕人にむかつて、「此の邊に乙戸源藏と云ふ浪士やおはす。」と問ふ。「彼所なり。」となしへければ大いに歡び、門邊に立ちて案内すれば、「應。」と答へてたち出づるに、如何にも武士の浪人と見ゆる大男なり。三次は體面をつく〴〵うちまもり、「貴殿は道具屋何某が甲斡にてはあらざるや。いつぞやも云ひし如くかの茶器をしむとにはあらざれど、我かく落魄なし只得まほしきは金なり。四十兩を一兩かきても售沽なし難し。同じ事云ひに來り給はば、はや〳〵歸り給へ。」と、にべなくも云ひはなせば、三次ひそかに思ふやう、「さてはかの五郎次一兩もやすく買ひとらんと、度々此の處へ來りしと覺ゆ。」と、手をもみ頭を下げて云ふは、「今日私彼に代りて來りしは、かの茶器の買主あり、右に茶器を渡し、左に金を受け收むるなれば、三日を過ぎず借と後金を贖はん。今日は曲げて我に預け給へ。」と云ひつゝ、懷より金三十五兩をとり出せば、浪人頭を左右にうち振り、「いつぞやも云ひし如く、四十兩の金少し用ゐるところあれば、家に傳へ來りし茶器を售沽なすなり。」とうけひかねど、半ばは心とけし面持し、つと立つて壁廚より茶器の箱種々取出せば、三次六七分心を安んじ、いよ〳〵膝を進めて云へりけるは、「先刻にも云ひし如く、三五日の内には急度五兩を送るべし。是れはそれまでの典物とも見給へ。」と、己が著たる雨衣に、只一腰のわきざしさへとりそへて差出せば、かの浪人莞爾となし、「貴殿は未だ若人に似氣なき分說よき男なり。

いつぞや來りし五郎次といふ甲幹は、ひたすら三十兩にて求めし故、我これを許さず、貴殿は此の如くりちぎなれば、正しく五兩をも贈りこさるべし。いかにもこの典物にて茶器は悉く償くべし」と云ふに、三次心に歡び、金を改め道具を受取り、一かさねて來るべし」とて急ぎ故鄕に歸り、其の夜は兒童の春待つ如くいねもやらず、我日ごろ目利に疎しとて、同行の者異名して、目無三次と呼びけるを面惡く思ひしに、此の茶器はかの道具屋の目利せしを、先へくゞりて買ひとりたれば、百に一つ利を得ぬことはあらじと、明くるを待ちて、何某殿の館にいたり、しかぐ〱のこと云ひ入るれば、番士眉をひそめ、「尤も相公茶事は好み給へど、かかる器物をたづね給ふことは聞きさふらはず、兎も角も申して見ん。」と裏へ入り、しばらくありてかの番士立出で、「主人に緣故を聞えさふらへど、此方の館にてその如くの茶器たづね求めし覺えなし、門違へにやあるらめ。」と答ふるに、三次は心あて食ひ違ひ、あきたる口をとぢもやらず、しばらく言葉も出でざりしが、きつと思案を定め、よしさらば仲間の者へ賣りなしても、十兩二十兩の利を得んは心やすかるべしと、夫彼と見せけれど、一目見るより冷笑ひ、「今に始めぬ目無三次が仕業や、これは皆僞物にて僅かの金にもなり難し、媒の空言には妙計あるべけれど、商賣の道にはうとし。」と口々に云ひのゝしれば、三次は心ならずも路をいそぎ、飯塚村へゆき見れば、かの家は固く戸ざしてあり。近鄰の人に問ふに、「此の家はもと空室にて、いつぞ

や何とか云ひし浪人一月ばかり住みけるが、其の後いづ方へ行きつるや絶えて知れる者なし」と云ふに、三次初めて提徒なる事を心づけど更に仕術なく、茶器を大地に投げつければ、ほとりの里人驚き見て、狂人にやあるらめと打笑ひける。此の物語の起りと云ふは、伊兵衛を於澤が許へ接脚婿とせしより、かかる珍事出で來にけり。然はあれど強ち三次が業ならねば、亡靈の祟りにもあらざる故、命に恙はなけれど千辛萬苦して利得けし、金本金さへ光棍の爲に奪はれしは、多年媒を事とし兩舌をもて肝煎貨をむさぼりし、因果車のめぐり來りしにやあらん。これはさておきかの源藏といふ浪人を何人といふに、是れ則ち卯月官太夫なり。先年求次郎を殺害なし、その場をたち退き奥州の方へ赴きしが、それより又下總國銚子といふ處へ來りし刻、かの三次といふ愚人、三十五兩の金を得て故郷へ歸るを知り、同じ仲間門平といふ者を旅商人にいでたたせ、根なしごとの書簡を落させ、三次を甘くも計りしなり。門平はその日酒屋に殘り豫てしめし合はせし如く、次の日の夕暮官太夫が假栖に來れば、早三次は茶器を買ひ取り立ち歸りしあとなり。官太夫、門平を見るより、首尾よし／＼と打笑ひ、かの金を分ち與へ、元來空家をしばしが程借りたるなれば、次の日そこ／＼にとりかたづけ、門平をゐて葛飾の方へ赴かんと、沼田の渡に近づく折、空俄にかき曇り、一むら雨のさと降りかゝれば、二人は松の並木にかくろひて、袖笠に路を急ぎはや渡口に到りし時、わたし守空を仰ぎて云ふ。

「西山に棚々雲といふ出でて、見る／＼消ゆるは西風の強く吹くべし。」と云ひつゝ、舟をもどらせ、此方の岸にうちつくる。二人は舟に乗りうつるをり、門平ふと宮太夫が指枝の片々なるを見て、其の故を問ふに、宮太夫は外に具合なきを見て、障る事はあらじと語り出でけるは、「もと此の太刀は道ならぬことにて得たりしが、其の後求次郎を殺害の刹那、鍔元に打ちたる故、今はかく片をなりしと抜き出して門平に見せ、又懐中より紙の袋を取り出し、「此の品も求次郎が所持にて、三谷にて奪ひとりし時、金五十両ありつるが、日あらずして空しくなり、すこしもやらぬこの年月懐中なせしが、この頃また貴殿のはたらきにて少しく重みを得たりしと物語なしうち、はや舟は向ひの岸につかんとなしが、いかにしけん、さす棹ほきと折れて舟川中へ漂ひ出づる。この時一陣の風さと吹き来り、怪しむべし、高浪逆浪の逆まくことと、宛も洋中にあるが如し。三人あわてふためけど、遂に舳へ波を打ちこみ、舟は見る／＼水底へまきこみける。舟長は手馴れし業とて波をくゞりて游ぎつけど、宮太夫門平はその業をなし得ざれば、底の水屑となりはてけるが、かゝるわづかの枝流にて鱣あやかしの所為にもあるべからず。これまた一つの因果物語あり、下回を讀み得て事つばらに知るべし。

第九回　尼がいほり　鉦鼓の觀音

これはさておき、こゝに花ケ谷次郎が男雄作助は、何卒して主人の讎、官太夫が在所をさとり、一
太刀なりと怨みんと、讎の身よりへ聞えば遠く迷けんも知るべからずと、金百兩盜みとりかけおちな
せしと云ひふらし、髮を切り圓順と名を改め、神社佛閣廻國の修行者と様をかへ、雲水の身の常なが
ら、岩もる水に渇を凌ぎ朽ちたる祠に軒を消す。長汀曲浦の旅もいとはず、はやくも五年を經て、東
國はおちもなく探しもとむれども、運拙うして面影の似よりし人にもめぐりあはず、官太夫が水死な
せしことは夢知らず、又西國をや探し見んと、水戸街道をうちすぎ、葛飾なる夕顔の觀音へ戻足に詣
で、僅か五六町行きたりしに、如何にしてか路に迷ひ、遂に人家も見えず、如今とことかはり四木龜
割沼田のわたし、一面に茫々たる荒野なれど、玄冬の時節なれば千種も霜に消たれ、折しも東北に風
起して、柳絮風に隨ひ、鵞毛そらにひるがへる。大雪地に積ること八寸ばかり、圓順はなほとゞまら
ず歩みしに、ひとつの流れにそひし林あり。見あぐれば木々は時ならざる花かとあやしみ、見おろせ
ば水は藍に染むるが如し。今來し路も跡絶えて、右へ行かんや、左へゆかんや、己が足の向くる方を
知らず、兩路いまだ決せざる所に、まだ暮れやらねど雲とぢて、ほの暗き彼の林より、忽ち燈火の光
閃き出でたり。圓順心に喜び、立ちより見れば、はたして一つの庵あり。間あらはなる荆棘垣より
さしのぞけば、閾おりて閼伽棚あらうちめ、風もたまるべくもあらぬ障子ひきたて、それさへ香の煙

にふすほり、佛壇に燈明をかゝげ、かたへに琴一面あるのみ、人とては見えず。あはれ我と同じき棄門の庵なるべきに、主人庵におはさん程ならば、強ひても一夜の宿をもとめんと、いと本意なく向ひを見れば、前面の流れに棹さして來る一葉のたななし小舟あり。これ正に蘆花の岸に宿すれば半簑に雪をとゞめ、歌うて楓葉の影をすぐれば孤舟に秋をのせたりと、異國の人のいひし紅塵の外とは、かゝる處をさしてやいひけんと暫時ながむるうち、かの棹させし者の簑の雪うちはらひ――たちわたる身のうき雲も晴れぬべし、妙の御法のわしの山風と吟じ終り、笠とるを見れば年三十ばかりのそぎあまなり。藤のしなへに梅が香をとめ、あてなるはいふばかりなし。翡翠の窈窕なるをなさけなくきりはらひ、墨ぞめにやつせしさまは、散りも始めぬ花の枝を山風のさそひて、末波む里の匂ひになしたりともいふべし。これ則ち此の庵の主人と見え枝折戸をば開かず、庭前に漕ぎよせて簑笠を舟に殘し、かぐはしき寒紅梅を片手にもち、片手に一串の念珠を爪ぐりしづ〳〵と牀にのぼれば、圓順おとなうていふ。「これはこれ周行の修行者なるが、降り來る雪の路に迷ひ、孤村の辻いまだ何方なる事を知らず、憐むらくは尊尼花軒に一夜の慈悲をたれ給へ。」と云ひいるれば、かの尼聞きて、さゝの小笹の一節に、訪ふ人もなき蓬生に誰ならんと、枝折戸押開き圓順に對つて云ふは、「廻國し給ふ御身の、此の雪にては、さぞや難儀し給はん、とりわけ志す御佛の逮夜にてはべれば、此方より申してなり

と御宿まゐらせんが、我とても姿變れど元女の一人住みなり。御同行もあらば兎も角もせめなれど、佛へ仕ふる道にあらず、是れより右の小路に辿らせ給はば、はや小梅隅田村へほど遠くもさふらはねば、彼處になりと宿をもとめ給へ、常香の火ぐちを見るにはや申も下る頃と覺ゆ。日暮れぬ先に、とくとく急ぎ給へ。」と云ひさして、網戸うちしめて入りければ、圓順はかへさん言葉もなく、この女僧のいふこと是れ又理なきにもあらずと、仕術なう、もと來し路へひきかへさんとなし、ふと思ひ出づるは、「我が主、求次郎若月こそかはれ明日は忌日なるに、苦しき旅にとり紛れ、おろそかになしたり。」と、思はず聲を發し、「幽谷院花露刃落信士、頓生菩提南無佛々々。」と唱へ、鉦うち鳴らし既にゆかんとす。女僧は閼伽桶に花をさし、佛に手向け居たりしが、いかに思ひけん此の聲を聞き、頓て緣先に出で呼び止めて云へらく、「いやとよ、御修行者、をやみなき雪に惱び、歩み給ふもはかどるまじ、食のまづき衾の薄きだに厭ひ給はじとならば、まげて御宿まゐらせん。」と、聞くより圓順大いに悅び、「再生の父母なり。」と一禮を述べ、脚半草鞋をとり足をそゝぎ、「我も今宵は志す御佛あれば、夜はいねず念佛せん。」と云ふに、女僧もほゝゑみ、「妾も好める道なれば、ふつゝかなる琴まさぐりて御佛に手向けんと、これ見給へ、蛛網をひきたるを、塵を拂ひとり出し侍る。」と見するに、圓順も、「共に好める道なり。」と答へ、茶を煎て佛に供じ、尼かさねて云ふは、「恥かしながら今宵志す御佛

といふは、深閨に花の紐とき、神に祈り佛に誓ひ、二世の語らひこまやかなりしが、明日といふなよあだざくら、夜半の嵐に露と消えさせ給ひ、恰も羽翼をわかれし思ひにて、薄命桃花のごとく、飛花落葉無常のならひを知り、墨染の身は後世のいとなみより外なし。」と、念珠を鉢盂巾の上にのせ、胡琴ひきよせて柱を雲居にならぶれば、いとけたかくなりて岩越す波のさまなり。一度爪をふるれば一弦の絹をさくが如く、泉の響くに異ならず。はた歌うたふ聲のしをらしきには、空ゆく鴈の連もみだれん。圓顱も少時聞きとれてゐけるが、やがて佛前に香をひねり心に思ふは、我運つたなうして仇に巡り會はず、いづれの日か刃に衂るの時あらんと、ふと鉢うちならす棒を見るに、搊枝のかたわれにて、南無阿彌陀佛の文字あり。懷中より求次郎が死骸の側に落ち散りたる、搊枝をとり出し合はせ見るに、露たがはざれば大いに悦び、この女倩きはめて敵宮太夫が枝葉ならん、ひつ括りて詮議なさんと思へども、短慮不レ遂レ功とやらん胸をさすり、名曲もなどて耳に入らん。やがて尼の傍へにじりより、「いかに尼君、此の棒は是れ、割搊枝のかたしなり。何としてかゝる物を持ち給ふ」と問ふに、尼も胡琴おしやり、「その搊枝にこそいとあやしき物語のさふらふ。過ぎにし彌生の頃、前面の川上なる渡場にて舟覆り、しかじかの事にて乘合二人溺死せしが、もとより水練達せし舟長、水を分けてさがせども遂に死骸だに見ず過ぎ去りしが、其の頃殊にうらゝかなる日、妾も青草を踏みて鬱を散ぜ

れと、筆頭、菜金莕草の数々を摘み、又は川岸へおりたち根芹などひきしに、亂杭にひきかゝりて一つの羽織あり。泥砂に塗れざれば持ち歸りて見しに、袖の中に重味あり、これ即ちその揷枝なり。近所の者、「これは先の日水に溺れし人の羽織ならん。」と云ひし故、その日の舟守に問へば、「いかにも見覺えの候、哀れ世を捨て給ふ御身は、一遍の廻向なし給へ。」と云ひ捨てて歸りしに、幸ひ揷枝には南無佛の文字ある故、鈴をならす棒となし、羽織はこの如く鉢盂巾となしたり。」と一伍一什を語れば、圓順少しくも聞きいれず、呵々と笑ひ、「漁人網をもて江にのぞみ、漁人にはあらずと云ふに異なることなし。波濤眼を穿つ洋中は知らず、かかるわづかの枝川にてかかることのよもあるべき。汝果して官太夫が親類ならん。彼緣林白浪の類なれば我をおそれ、これ根なき虚言なるべし。わが主君の仇何卒してさがし出さんと、心に思はざる念佛し、手に應ぜざる鉦をならす。いづれに隱れしのぶや、つぶらに白狀せよ、くゝし上げても云はせでや止みなん。」と簾かゝげし繩をちぎり威丈高になつて問ひかくれど、もと覺えなき事なれば、千歲を經るとも盲人いかで黑白をわかたん、只默して口をつぐみてゐたり。もと圓順りちぎなる性なれば、ひと筋に思ひこみ、緣先より雪の中へ尼を蹴落し、ひたすら責め問ふ折、これも修行者の行き暮れたると見え、庵の外面にたゝずみしが、いかに思ひけん笠ひきちぎり、「姉の敵のがさじ。」と、懷刀にて驀地に圓順めがけ切つて蒐る。うち驚きかい潛つて手元を

しかととらへ、此の時日は全く暮れけれども雪光にすかし、その容色を見ればこれも亦女僧なり。こなたも人違へなれば手もちなく圓順をうち見やり、「修行者には花方求次郎の家臣作助ならずや。」と云ふに、圓順もつく／＼見るに、姿かはれど花子なりければ互に不審はれざりけり。圓順まづ我を姉の仇と云ひし緣由を問ふ。花子云ふは、「貴殿の持ち給ひし名號の揥枝は、わらはが親なる蘆部兵藏といへる者祕藏して持ちたりしが、上總國にて雲舞半六といふ惡者、わらはを奪ひ姉を殺し立退きし時、その揥枝及びあまたの財寶掠め取り、其の後卯月宮太夫と姓名をかへ、彷徨ふよし風説に聞き、伊兵衞諸共より／＼探し索むれども緣なくて巡り逢はず。今外面の方にて、揥枝より事起りし首尾おろおろ聞きし故、貴殿の持ち給ふと思ひ、夜目に宮太夫と思ひ違へしなり。」と語る。圓順もはたと手を打ち、「我が主求次郎君の仇といへるも彼なり。」と、初めを語り終りを云ふに、花子圓順に對つて、「いかなればかく淺はかなる事をなし給ふ。此の尼君の宣ふ事まことなりせば、大いなる麁忽なり。」と、忙はしく扶け起すに、尼は言葉を出さんとすれど口ごもりて、つや／＼云ひ出でず。花子柴を焚き尼の肌をあたゝむるに、やゝありて涙涌くこと泉のごとく、やう／＼に口を開き、「さては求君の由緣の御方にて候ひしや。今は何をかつゝみ侍らん、わらはは巴樓の妓女津島なり。」と、聞くより圓順愕然として、「さては我が主君寵顧他に異なる婦人を、神ならぬ身の露知らで、しばらくも御心を苦しめ侍

る、我が罪いかんせん。」と胸をたゝいて粗忽をわぶるに、津島尼云ふは「いやさな宣ひそ、我が主君大切と思ふ心より起りし事なれば、いかにあしざまに思ひ侍らん。求君横死なし給ひてより、眉を畫き紅唇を彩るにもの憂く、旦には涙、黄泉の路にしたゝり、夕には思ひ千里の月に嘯く。程なく花芭の苦痛を免れ、このほとりの由縁にたより、ひたすら後の世を營むも、これみな求君の菩提のためなり。まつた先に御宿まゐらせんと俄にとゞめしは、花露刃落信士と唱へたまふうちに、刃といふ文字あり。さては御身の志し給ふ御佛も、刃にかゝりて果て給ふなるやと、身につまされて止めまゐらせしが、今ぞ知る、これ即ち求君の法の號なりしや。」とおさへんとすれど、涙はふり落ち、こまぐ\と物語れば、二人も共にあはれをもよほせり。尼かさねて云ふは、「さてはいつぞや前面の川にて死せし旅人こそ、求君の仇敵なりけるか。」と、過ぎ去りしことの思ひ出でられ、よゝと泣き居たるが、圓順信と心づき、鉢盂巾をとりあげ、「これは則ち官太夫が羽織なれば、空衣を刺せし例にならひ、いざ疾く\/。」と云ふに、二人も懐刀抜きつれて、「姉の敵。」「主の仇。」「良人にひとしき求君の横死は彼が罪なり。」と、散々に貫きて本意を達せしまねびをなす。この時漸う雪も小止み、雲破れて月燈火を挑げしかば、庭の面は白き羅の上に、砂金を散らせし如くきらめきゐたり。一陣の烈風吹き來り、燈火さつと消え、四隅の暗さ何とやらん物凄く、己が後を顧みる心あり。時に不思議や幻の如く小

蛇窖中より來り、津島尼の口の中に入ると見えしが、撲とたふれ息絶えたり。「こはいかになし給ふ。」と、花子圓順抱き起して介抱なすに、權くありて頭を上げ、花子を見て涙さしぐみ、「花子我を誰とか思ふ、我は此の世を去りし澤が靈なり。汝に示すべき事ありて、この女僧の體を借りしなり。我死してはや四足面體は土塊となりたれども、怨みは須臾の間も忘れざりし。そは初めは、伊兵衞が姦智によつて我を遠ざけ、汝を我が佛と尊み、いんじ年月に望みて「明珠連城寶にあらず、子孫をもて寶とす。」と、廣言吐きしを憎しと思ひ、其の夜竊にて悦五郎を殺しけるに、愛子の別れによりて伊兵衞が心俄に弱り、豫て怨みんと思へど法華經にも說く如く、人氣猛んなる時は、水火も燒溺する事能はず、虎豹も牙をふれ難し、この時に臨んで心の儘に、村子伊兵衞を狂死せしめ、汝をも同じ途にと思ひしかど、諸國の靈場を巡拜し、伊兵衞は更なり我があとをも弔ふ故、あはれ汝を殺したらんには、我が爲とて一遍の念佛をも、唱ふる人はあらざるにと年をふるうち、大德の敎化により、天堂に化を得んこと遠からじ。汝いよ／＼佛門に入り、伊兵衞二人の兒のあと弔ふべし。我因に語り聞かさん、火途血途刀途、合はせて三途の巷に立つて迷ふに、求次郎横死は強ち我がまねきしにもあらず、彼が所持なせしいと尊き神符を、血をもて穢せし故、天神地祇の罰を蒙り、官太夫が劍の鏽と消えうせぬ。我その虛に乘じ金吾に狂氣なさしめ、伊藤の家を絶やしぬ。かの卯月官太夫は求次郎を殺害な

し、挟囊をうばひとり、かの神符中にありしを、そのまゝ捨てもやらで持ちたりしが、此の神符は河伯の好むによりて、二月三月の間は海若のゆるしをうけ遊行なすの月なれば、舟に乗ることなく、あたへし祝部のいましめしかど、官太夫はこれを知らず、舟に乗じて遂に命を失ひしなり。我が怨みも今は盡きぬ。花子には人々のあとを弔ふにしかじ」と云ひをはり、がばと倒れて先の小蛇庭先へ出づると見えしが、一塊の髑髏となりぬ。圓順は先靈の物語一伍一什を聞きはて、我が本意を遂げざる由縁を知り、花子は今更圓順が手前も面なく、よゝと泣きゐたるが、かくてははてじと涙をさめて、尼を抱き起し、圓順諸共介抱なせば、やうやう息出で驚夢の覺めし如く、いかなる事といふことを知らず。圓順花子は有枝有葉なものがたり、三人ひとしく薄命をなげく。やゝありて圓順花子に向ひ、「我はもと仇官太夫を討たんと、かくいでたちし墨染も、今はなかなか佛縁となりぬ。長らく人々の後を弔はん、二人の尼僧心はいかん」と於花云へらく、「我はこれより上總國なる光明寺へと赴すなれば、同じ庵に住みはてんはいかに」圓順頭打ちふり、「いまだ三十に過ぎざる女僧と、同じ室に居らんは人の思はん手前も悪しからん」とうけひかず。程なく夜も明けぬれば、二人の尼に別れを告げ、鉦をならして出で行きぬ。二人の女僧は光明寺へ赴き形ばかりなる庵をむすび、念佛よりほか他事なく、夜更けてより鉦をならさば、心なき賤の目や覺さんと、指にて摺りつゝ佛名を唱へ明せしが、年を經

てかの鉦鼓自然と中凹になりけり。かくて或夜の夢に、音樂の聲雲中に聞えしかば、思はず頭を上げて空を望めば、片々として華降り下り、容顏端美の菩薩、莊嚴の蓮華に坐し、雲に乘じて來り給ふ。あな尊と掌を打合はせ拜み奉るに、思ひきや伊兵衛澤子求次郎を始め、凡て死靈の爲に命を落せし者共、婆娑にありつる姿に變り、さも快げに合掌し、南無佛と唱念なすと思へば、松吹く風に夢を破れど、猶香氣馥郁として庵中にみちしかば、奇異の事に思ひ、二人の女僧等しく語り出で夢合なすに、津島尼が見たる所も亦花子の夢も、些かの違ひなし。さては先年死靈の云ひし如く、天堂に化を受けしならんといと賴もしく覺え、遙かに年を經て同じ年同じ日時も違へず二人の尼、眠るが如く大往生をとげにけり。その後舞馬の禍ひにて此の寺一時に烏有となり、火鎭まりて後一堆の灰を拂ふに、かの中凹になりたる鉦鼓佛前にありて燒け爛れ、鑪鞴をもて工みし如く、圓通の尊像と拜まれ給ひ、殊更靈驗著しとて諸人奇異の思ひをなし、鉦鼓觀音となづけ奉りしとなん。かの圓順も佛門の志益深く、日本廻國の修行者圓順といへる、供養佛石碑など國々にあり。されど終りし所は詳かに知れず。哀れ本意を遂げなば何くれの書にも見え口碑にも留まらん。物嘆かはしき事ならずや。

霜夜星五卷　畢（大尾）

阿波之鳴門

阿波之鳴門 一之卷

柳亭種彦著
友人玉家凝夫校

處女弓子木履に歌を結んで今市に贈る
並 櫛をあたへて多門偕老を誓ふ事

むかし小野のお通といへる女、淨瑠璃御前、一期盛衰の事を十二段につゞり、扇をはじきて朗詠とせしより、淨瑠璃といふ號おこり、それより世々の好事家いできて、三絃に合して節曲なし、往昔をも世態にとりなし、唐人にも大和の言辭をもちゐる、木偶人にまはしめ善をすゝめ、惡をこらすに尤も可なるべくが、あはれむべし、兒女これを實とし、跡をさして聖なりといふ類すくなからず。彼の阿波の鳴門と題號せし淨瑠璃本に、十郎兵衞といへる者あり、主君の爲に千苦萬苦して遂に其の志をとげしごとく書きなせしは、實ににくむべきの盜賊なり。其の事跡をくはしくたゞぬるに、往古元弘正慶の頃かとよ、津の國東生郡北長柄村といふ所に、二五作といふ土民あり。かれが孫今市といへる、是れ卽ち後の西國に横行なせし海賊の首領、十郎兵衞が兒名なり。今市未だいわけなきとき

より、百姓の業をきらひ、遠く大和田の浦にいで、彼の地に名だかき鯉掴みといふ事を覺え、日々水底へくゞりて魚を索め、これを近郷へひさいで生活となしにける。一日今市、二五作に對つて、「いつぞは問ひまゐらせんと思ひ侍りしが、われ雙親の顏さへしらず、たゞ祖父のかたはらにありてかく成長なし、父母はいとけなき時、みまかり給ひしと、御物語にて聞き侍りしのみなるが、此の頃みやこがたのト者、我を相していへらく『雙親のうち父は未だ此の世にあり。』と、此のことばにて少しく心にまよひいできたれり。我が父はいつの頃みまかり給ひ、名は何と申せしぞ。」と問ひければ、二五作目をしばうちて「汝にとく言ひきかすべきとは思へども、此の事好き事にあらず、年を經ばおのづから知るべし。」といらへせざれば、今市おしかへして問はんとせしが、かくまで我が種姓をつゝみ給ふは、もしや世にある棄兒にやと心に恥おて、その席をまかでぬ。これ今市十七歳のときにぞありける。又此の二五作が合壁に鉾杉與次右衛門といふ處士あり、妻を淺茅といひ、女夫のなかむつましく、次郎九郎弓子とよぶ二人の愛子ありて、又水無瀬といふ老母と共に、すべて家内五口なれど、元來與次右衛門は多田翁なれば、富むといふにはあらねど、坐してくらふにほどよく、黄白に事かけざれど、事かけたるは兄次郎九郎にて、質性愚かしく、朝暗讀なす書も夕には一字もよみえず、今年十九歳といふなれど、やうやく七歳の小兒に智は優りがたき獃子なれど、親に孝をつくし、篤實なる

は常人にまさりしかば、これを頼みとし、父母の愛想は、智あるものいよゝ彌増しけり。妹弓子今年二八にて、美形尋常にあらず。花唇鶯の聲をあざむき、柳腰燕のかるきに類す。才あれど才にほこらず、手かき歌よむにつたなからず、親の目してみれば、愚かなるも智ありとみえ、醜きも花貌しう見ゆるは、なべてよの人ごゝろなるに、まいてや、かくのごとき才と姿と一對の處女なれば、掌中の珊瑚は物かは、自己は綱黄の衣をきれども、弓子には錦繍を身にまつはせ、えがたき書どもを多くあつめてよまさゞりものとなさしめ、淀川の月櫻野の花よりは、かれが顏をまもりゐるは、こよなき樂しみとし、頓て公貴の室にもそなへんとおもひゐたり。今市もかれがすがたにふかく心をかけ、たまづさを送りていひよれど、弓子はかれが成長、兇惡に醜男をきらひ、一どの返簡もなさゞりしかば、今市はなほおもひいやまして、又一日艶簡こま〴〵としたゝめ、小石を重となして弓子がはしゐしたる縁先へ投げつくれば、弓子いと興覺る事におもひ、與次右衛門にかくとつげんとせしが、我をしたひていひよりしを、かへつて他に赤耻かかせんもいとびんなく思ひ、いつそかれを辱めて、此のえんを斷つべしと思量して、かうばしきみちのく紙に、いなの山いなといへるは此のうたにてしらせ給へなどかきつけ、己がぬぎすておきたる木履のかたしにむすびつけ、今市が庭になげもどす。をりよく今市はふつに返し事なきを恨みつゝ、弓子が方をながめ居たる折なれば、いかよき返簡にやと大いに歡

び、とるておそしとひらきみれば、

　拾ひてはすてもおかれじ白波のよるてふあとの戀忘貝

とくり返し吟じけれど、強ちこひ歌にもあらず、歌の意こゝろに落ちかね、いかなる由緣にやと問ひかへさんも口惜しく、又をりをみていひよるは心やすしと月日をぞかさねける。それより弓子は今市が音信なければ、扨は我が事おもひ絶えたるにやと喜びゐたり。一日與次右衛門は近郷へおもむき、其の日は老母みなせ孫九郎次郎をいざなひて、南長柄鶴滿寺の阿彌陀佛へまうで、母あさぢと、弓子のみ家にありしが、頃しもまだ初春の事なれば、ふるともしらで春雨さへそゝぎければ、弓子は祖母のむかひにとて、笠もて出でんとするをあさぢ押しとめ、「あはれ世にあらんほどならば、さはやすく端居をもさせまじき愛子に、たとひ母のむかへなればとて、たゞ一人はこゝろもとなし。妾ひとはしりいてこんに、留守とくなすべし。」とて出でゆきけり。弓子は一人、机にもたれ、梅花園に匂ひ春鶯軒に囀るを眺め、時にあひたる古歌などくちずさむをり、やごとなき人の狩にいでしにや、箙をおひ犬をひいてやをらこの家をめがけはしり來り、「いかに未通女、ひぢかさ雨のはるゝにほどもあらじとおぼゆ。從者共のきたるまで少時このところかし給へ。」といふに、弓子は「やすき事にはべる。」といらへして、竹緣に圓坐しき、「これへきたりて休ひ給へ、苦茗一椀まゐらせん。」とさしいだせば、狩人

志のあつきを謝し、不斗あたりを見れば、庭の筧滴々として、苔にうづむ扉もにくからず、文車には日本書あまたつみ重ね、こと〴〵く雅なりしかば、いかなる人の閑居にやと此の時はじめて弓子をみるに、美膚は雪にてつかねしごとく、雲鬢すこしみだれて花の顔にちりかゝる樣、世にまれなる美人なれば、狩人もこゝろときめき、「いかに閨秀、うちつけ懸想とやらんにていひいづべき言葉はなけれど、君が終身をまかすべき武夫ありや、かならず我を狂人となおもひ給ひそ、おもひに絶えかね戀ひ死なんよりはと、白地に問ひまゐらするなり。」とたはむれければ、弓子は赧然たる粉面に時ならぬ紅葉をちりばめ、はしりいらんとせしが、はづかはしきうちにも、目注にてかの狩人をみれば、今市には似もよらず對面のよき武人なれば、こゝろにおもふは、もしや此の如くのますらをと夫婦のかたらひなさんには、たとひ父母の耳にいるとも、さのみ怒りをひきいだす事はあるまじと、とつ〳〵とをどれる胸をやう〳〵に和め、「たはれごとをのたまふも女子の心せまく、實しくおもひしと、笑ひたまはばわらひ給へ、もしや君のごとき相公の側室のかずにも入らば、妾はもとよりさぞや雙親もよろこび侍らん。」と、死に就く想ひにていひいでければ、狩人も莞爾み、「よしやのたまふ事實ならば、近きほどに迎への人をこすべき。」と、手をとりて身ぢかういだきよすれば、弓子微笑して、「生愛親のゆるしなきうちに、みだりがはしき事なな し給ひそ。」とふりはなせば、狩人はこのことばに恥ぢてせ

おひたる顏のひきだしより、鬢櫛一ッとりいだし「往昔いまだ姻緣なき女人は、髮をみだし童の形なるゆゑ、伊勢物語に君ならずして誰かあぐべきの詠歌あり、今よりふりわけがみを結納むるしるしこ」と、かの櫛を與へければ、弓子は小金にて棣棠花つきたる笄をとり「やまぶきの實のなきほどの笠やどり、井手のしたひも廻りあふべきたよりも」と、狩人にわたすを、門の扉につなぎおきたる犬、外のかたをむきて吠えければ、弓子おどろきとびのくを、狩人うち笑ひ「向ひの小路よりきたるは、我が家隷桃井軍太といふものなり、これを我に告げたるならん、吠犬にもこゝろあり」といふうち、はや門首より腰ををり「相公これにわたらせ給ひしや、雨も小止み候いざ歸路を催し給へ」と進むるに、なごりをしくも弓子に別れをつげ「かならず此の軍太をしてむかふべき」とやくし、まかでゐるうしろかげの見ゆるまで見おくり、さながら手にもつ物をうばはれしごとく、身は空蟬のもぬけとなりて佇をり、後門より次郎九郎かへり來り「妹々」とよばへど應へざれば、はてはたかやかなる聲にて「やよ弓子」と叫ぶに弓子うちおどろき「いつのまにかへり給ひし」と、その思はぬさまにとふ。次郎九郎いふ「いま祖母親母かへり給ふに、老いたる者のならひにて、心せはしく火をもとめ給ふべし。それゆゑ我はさきだちて走りかへりたり」はたして火桶かゝゆるに、螢火ばかりにきえのこりしのみなり、我を獃子とないひそ、汝家にありてなにごとをかなしける、早くふせ籠もてきて、

母の肌衣をあたゝむべし」と睨みまはし、火桶に炭をもそへず混空扇をとつてあふぎたつれば、丹子は逆へ炎焼のかゝらんを恐れ、振袖にて拂ふ童情に花あり、愚人に又至孝の賞あり、是れを愛し是れを賞すべし。休題目話今市も丹子が事このまゝに止みなんとはおぼえねど、近會より二五作病におかされ、今市枕邊にあり看病すれど、老病のゆゑにや藥力露驗なく、たのみ少なくみえにける。それゆゑにこそ、丹子が事しばしおもひ絶えたるなり。一日今市を枕邊へちかくまねき、「我が命もはや旦夕にせまれり、いまこそ汝が種姓かたりきかさん、我そのむかしは、この長柄の里にて他に知りたる大戸にて、一人の處女あり、婚姻の事いまだ何方へも委ねざりしが、ある夜強盜こみいりて、我はじめ家内の男女のこりなく、縄纏にて縛りあげ、たゞ處女一人手をかけず、かのなかの首領とおぼしきが、金の有所を叱めとひ、又は娘にたはむれなんどなせしが、いかんともせん術なく、たゞ空しくまもりゐるのみなり。夜あけてのち泣く／＼娘は我々が索をほどき自害せんとなしける故、忙ておしとめ、「宜なるかな親の眼のまへにて盜賊の玩弄物となりたるは、はづかはしともむねんともいふべき言葉はあるまじけれど、此の一事を知るものは、われ夫婦のみなり、いかで人にや知らすべきことと、縁由いうてとゞめしが、その後こゝろおちしとて、三月四月うちふせしを、醫をまねきてみせしむるに、正しく懐妊なりといふ。せちにとへど、私夫もあらざれば、盜賊の種なるべけれど、これも宿世よ

わきだまりし悪因縁なるべし、女兒が身につゝがなく、身二ッになりてのち、其の兒は淵川へも沈めんとおもふに、程なく平産せしは玉をあざむく男兒なり。孫にあまきは老いがならひ、殺すはおろか荒き風だにあてざりしは、これ則ちなんぢなり。父なき兒をうめるはなべて女子の恥なるに、まいてや盗賊の種をやどせしを苦にやみて、女兒もほどなく此の世を去り、これ禍ひのいとぐちにて、すべて家子死につくし、のこりしものは白屋と我ばかりなり。」とつばらにかたり、ひと腰の佩刀をいだし「此の刀は當國加島鍛治が打つたるにて、さし表に女龍の影あり。二龍の劍と祕藏せしが、男龍の劍はかの夜盗賊に奪ひとられ、此の佩刀のみ殘れり。」と今市にあたへ、かさねていふは「又其の夜彼の盗賊あやしの袈裟をとりおとす、あとにて人にとへば、洗水帛といふ世にまれなる織物のよし、則ちこれにあり。」と巾箱よりいだし、少時なみださしぐみて「あはれ汝が生長をみるに、逆惡にしておこなひ宜しからず、麻を植ゑて麻を得るのたとへ、老いがまよひは是れのみなり。」といひ終り、六十八を一期として、遂に泉下鬼のかずにいりけり。今市がなげきたとふにものなく、かくてあるべきにあらねば、かたばかりの野邊おくりをいとなみ、これよりこゝろをあらため、善心にたちかへりけれど、さるものは日々に疎しと、又れいの悪黨に入り、賭をなし、これをよき事と思ひゐるぞ淺ましし。かくて一日、弓子が許より木履につけて送りこせし歌をとりいだし、忽然として怒りを生じ、

我其の頃は父の種姓をしらざるゆゑ、歌の意をさとらざりしが、

拾ひてはすてもおかれじ白波のよるてふあとの戀忘貝

さては我盗人の種なるを弓子がしるべくはなけれど、與次衞門此の事をつたへ聞きしを、彼又弓子に物語り、さればや白波のよるてふあとの戀忘貝とつゞけ、ひらにすて難きなど、すべて我が身の上の事なりしよな、戀のかなはぬはともあれ、かくまで我をかなしめしこそ遺恨なれ、與次右衞門に我が執心なるよしをものがたり、弓子を我が妻になさばやと、こゝろふとくもおもへども、與次右衞門此のごろ家にあらざれば、おもひを空しくすごしけり。此の一回すべて此のものがたりの機語なり、下回にとくところをきけ。

與次右衞門金泉場に鶴小弓を射る
並 災殃纏つて好事をひく事

何等事にて、このごろ與次右衞門家にあらずといふに、近會よりこゝちつねならず、この病は痼虚より起るところなれば、湯治に如くべからずと、弓子淺茅に老母をあづけ、自己一人同國多田の里中野の湯に浴みせんと赴きしが、そも／＼彼の地の靈泉は諸疾に效あること神妙なりとて、入湯の旅舍兩側に建ちならび、美酒は伊丹に酒匠あり、鮮魚は尼が崎に漁り、實に賞すべきの金泉なり。與次

右衞門も柳を家號とする、何某がもとにかりゐして、二廻ばかり浴みせしに、こゝち常にひきかへりければ、猶又一廻も入湯せんと、其の日はかの地の名所、鼓が瀧をはじめ、鉢指山、多田の神社、うつるが瀬などこゝろのまゝに逍遙し、夕かた柳屋にもどりしに、入湯の旅客、圍碁雙六、己がじゝに翫ぶ中に、楊弓を射てたはむるゝものあり。與次右衞門小弓をとりあげ、二三本はなちけれど、元來此の術にくはしからねば、矢は的の傍へもよらずして、はては紙門の間より、かなたの正堂へ矢一筋それ、彼の中の主客が持ちたる杯を射おとしければ、彼の客大いに怒り、紙門あらゝかにひきあけ、與次右衞門をとつておさへ、「汝戯れにもせよ、我に矢をいかけしこそ不禮なれ。」と叱めければ、與次右衞門はさらなり、ありあふ湯女までたちへだだり、さま〴〵にいひ和むれど、彼の男なほいかりやまず、「そも汝はいづちの奴にや、すみやかに名をなのるべし。」といふに、與次右衞門もせんすべなく、「我は當國長柄の里にすむ鉾杉與次右衞門といふものなり。おもはずたはむれに貴客の興をやぶりしは、悔いてもせんなし、ひたすら罪をゆるさせ給へ。」と慇懃にわびければ、彼の客何等由縁にや、筆をおびたる漆、わらすべに結ぶ海鼠の如く、俄に軟弱となり、滿面に笑みを含んで、「げに酒ほど惡しきものはあらじ、我さまでなき事を醉ひに乘じて。」といひさし、扇の要にて耳のわきざまを掻き、「狂樂とはよくもなづけし。」と己が咎を酒におほはせ、「まづ／＼こなたへきたり給へ。」と與次

右衛門が手をとりて、上座に直し酒をあたゝめ肴をかへ、さながら珍客をえたる如く饗應しければ、與次右衛門はさらに不審はれず、おづ／＼座鋪の光景をみるに、大湯女小湯女琴ひく盲女、口叩きあんま法師などあまたあつめ、時をえたるさまなれば、彼の客はいかなる國守の門子にやとこゝろにおもひゐたり。ほどなく日もくれければ、彼の客側の人を遠ざけ、膝をすゝめていひ出でけるは、「さては箪杉與次右衛門殿とは貴殿にて侍ひしよな、こなたよりわざ／＼訪らひまゐらせんと思ひゐるをり、不意對面なすこそ事とゝのふべき前兆ならん。まづ由縁はあとにてゆる／＼かたりまうさん、是れを見給へ。」と山吹の花つきたる簪をいだすに、與次右衛門とりあけみれば、女兒弓子が簪なりければ、なほ不審はれざりけり。彼の客いひいでけるは、「我は桃井軍太といへる者なるが、我が主君とたのみまゐらする御方は、阿波の國司畠山國清の舍弟畠山多門とまうして、弓の本末をもしるいへなれど、元來世の閙鋪を嫌ひ、南北の朝にかたよらずたゞ狩を好み給ふが、日外鶯塚のわたりを狩りくらし、花軒に雨をさけし折、愛玉にうちつけにいひよりしが、深窗にもいなにはあらぬいらへして、遇りあふべきしるしにと、此の簪をおくりものになし給ひし由、未だ然るべき嘉壻もなくんば、多門が室にまうしうけたし。」と、有枝有葉を物がたれば、與次右衛門心のうちにおもふは、いま阿波の國司畠山國清が舍弟なれば、壻にとりて不足なく、こよなき女兒が幸ひなりとよろこべど、

なほ言葉に花をそへ、「こゝろやすき事にはあなれど、田舎に生長ちていとはしたなく、難波津のはなも書きさへ、わらはげたる女子を、かくまで好み給ふは、棘荊に花ありとの御眼たがひにや。又我が弱女もいやしき身を省みず、やごとなき御方を慕ひ参らするは、泥龜の翼を生じ、飛行せんと願ふに等しく、この許嫁甚だ覺束なし。」とうけがはざれば、軍太なほもさしより、「さなのたまひそ月老の赤繩は、など貴と賤とえらばん。」とひたぶる勸むるに、與次右衛門も納得なし、「しからば明日長柄へかへり、女兒にもよろこばさん。」と、むかへにこすべき手つがひなど參定なし、別れを告げてたたんとするを、軍太、「しばし。」とおしとめ金百兩とり出し、「處士とあなづりし贈物とな思ひ給ひそ、鹿子絞染の小袖にてもまゐらせばやと、多門まうしつけしが、松の操を愛し、雪のいろなきをめづる、人其の好むところ一ならざれば、このまゝまゐらせ、志のうすからざるをかごとしらせ申すなり。」と金をわたし、笑ひを含んで、「いかに明日御かへりとのことなれば、かりの契りはくるしかるまじ、我があげおきし湯女のうち、こゝろにかなへるをえらび、腰にても打たせ給はじや。」といふに、與次右衛門も微笑み、「我が娘子なんどは、雛あそびのわるさせしを、この頃の如くおぼえしが、それさへいつのほどにか男ほしく、多門君といひかはすなど、ゆめのほどなり、其の親たる我等、湯女狂ひも似氣なかるべし、後生こそねがはまほしけれ。」と戯れ、南無佛と唱名して、紙門ひきたて臥戸に

いりぬ。後に考へ合はすれば、此の時正慶元年春三月の事なりけり。

阿波之鳴門一之巻 畢

阿波之鳴門　二之卷

柳亭種彥子著
友人玉家擬夫校

弓子水無瀨櫻の宮に花を見る
並 好事變つて災殃となる事

さても弓子は其の後、狩人の音信なきを、おもひわづらひありけるが、頃しも彌生半ばなれば、老母をなぐさめ、清明なるに乘じ、大和川の花を見んと、淺茅次郎九郎を家にとゞめ、孫弓子を將て朝に長柄をいで、母恩寺禰塚をすぎ櫻の宮にいたりければ、弓子は神前に額突き、神明のちからもて、情人にあはせませよと、願言してをちこちを見めぐるに、散りもはじめず、咲きものこらず、爛漫たる花の梢は淀川の波に映じ、漁釣舟を轉らすれば、雪上に棹さし、樵夫樹下に嘯けば雲にいるかとあやまたるゝ。みなせ弓子も茶亭に憩ひて幽艷を賞し、眺望數刻に及び、日すでに斜にして晩鐘風に謳ひ、散々とはなのありかゝるにおどろかされ、歸路におもむかんとなすをり、同じ茶房に四十有餘の男、これも花をながめて休らひ居たるが、弓子をつくづく觀て、甚だ慕はしきさまにて「いかに御老母こ

れなる娘子には御連にて侍ふにや。」と問ふ。みなせうち笑みて「孫にて侍る。」と答へければ、彼の男落涙して、「よにはかく似たる者もあるものかな。我が女子今年十七を一期として、くさばの露ときえ失せしが、此の處女につゆたがはず、もしくは亡魂の又も陽世にうかれきたるかと、いと怪しきほどに侍り。」といひければ、みなせ弓子もすゞろにもの悲しく、よの哀れに袖をぬらし、「われ／＼は長柄の里にすむ者にて侍ふが、かならず訪ひ給へ。」など、さながら昔年より相識の如く、互に語なしけるをり、芳野武士とおぼしき三五個の酔興人、酒筒の底をたゝき、月もうつろふ本あらの小萩、波もいろあるゑでの山吹と、今様うたひ、肉笛に腰扇を拍子とり、踉々蹌々と歩み来しが、目せき笠ふかくかづきたる處士にゆきわたり、刀の鞘そらざまにかへし、舌戦つのり、遂に[illegible]刀を抜きはなてば、花見の群集東西へ逃げ去り、南北へ走り、其の噪動大かたならず。弓子も周章て惑ひて逃げんとすれど、みなせは老いたるうへに足さへ労れければ、思ふがまゝに走り難く、ほと／＼危かりけるに、彼の男精悍しくみなせを脊おひ、弓子が手をとり、やう／＼淀川の堤にいたり、渚につなぎおきたる舟を指さし「あの舟こそ我が乗り来りしなり、長柄まで便船申さん。」といふに、二人いと歓んで乗りうつる。彼の男も続いてとびのり、纜をとくよと見えしが、水無瀬が衿首かいつかんで、川へざぶと投げこみたり。「あなや。」と叫ぶ弓子をとつて押へ、手巾を木丸となし、舳へ押しこみて、仕合よし

と口につぶやき、行方もしらず漕ぎてゆく。憐むべしみなせは聲さへたて得ず、浮きつ沈みつ流れしが、折よく水中にとりつきしを、側の舟長あはれみて、械をさしかけひきあげつ、水に溺れし由緣をとへど、人意なかりしが片時ありて漸く口を開き、緣故を語れば、一人の船頭のいへらく「それこそ日頃風說のある小濱の治郎といふ盜賊、多く黨をひいて秀麗き女兒を勾引す由、今日櫻の宮の躁動も、彼等が謀計なるべし。」と、きくより水無瀨悵然として、「よしやお弓はあらずとも、花やみすてて歸らなん。」と諷ひながら、櫻の枝を肩にかけ、扇を開いて路ゆく人をさしまねき「やよ弓子老婆をすてていづくへゆく。」と叫びつ呼びつしどもなく、川にそひてぞ狂ひゆく。此の日與次右衛門は心うれしく、家を望んで早長柄の渡まで來りしが、路ゆく人の風說をきくに、櫻の宮の花見にて、女兒を勾引され風子となりたる老女ありといふて、村兒等が狂人をとり圍き、小石をうちつけなどなすを、憐れいづちの人にやと、立寄りみれば、豈料らんや老母みなせなり。與次右衛門大いに驚き、急ぎ助け起せば、みなせ目を瞋らし「やよ、與次右衛門弓子は何地へいなせしぞ、はや取り返してくれよ。」とて、大地を叩いて泣き惑ふ。與次右衛門其の由緣はしらざれど、街上の笑話となるをはぢ、老母の手をとり、思念切々として我が家を望んで走りける。此の時妻淺茅は、母女子が歸りこぬをまちわびたるをり、良人與次右衛門母を誘ひ來るをみて、愈 悶ひ、はた弓子が見えざるを怪しみ、門

邊までいでむかへければ、與次右衛門ことばもいださず、正堂に母を伴ひ「北堂神意をつけ給へ、與次右衛門にて侍ふ。」など實やかにとへど、「只孫をもどせ弓子をかへせ。」といふのみにて、更に本性なかりしかば、一室へ臥具を設けて母を臥さしめ、元の席にかへり、初めてあさぢに、母の狂氣せしを不意湯治のかへりに見あたりし仔細を語り、あさぢは又今朝弓子を誘引ひて、櫻狩にいでたるよしを語る。與次右衛門大きに驚き、過刻淀川の街說を思ひめぐらせば「女子弓子を勾引され、それゆゑにこそ母は亂心し給ひしや。」といふをきくよりあさぢはよゝと泣き伏して、更に正體なかりけり。與次右衛門爐火をまさぐりつゝ、ほと吐息していへらく、「娘弓子を失ひしは、宿世よりさだまりし因果とおもひあきらめんか、身體こゝに窮る難儀あり、其の緣故といふは、我が湯治場にて如此々の事あり。」と軍太に回り會ひ、弓子を送るべき契約せし一五一十を物語れば、あさぢはふりおつる淚のひまに、「あはれ弓子家にあらば、かれも歡び埋木の夫婦まで、世にいづることもありなん。」と聲をたつるを、與次右衛門袖をもて口をおさへ、「然おもふは宜なれど、もしくは老母の耳にいらん。」と夫婦互に聲を吞み、啼泣刻をうつせしをり、彼の老母を安眠させたる一間にたてし明障子の、ゆら〳〵とうごめくに、二人いとあやしみ、やをら引きあけ見れば、水無瀨懷劍にて胸もとをさし貫き、朱に染みて伏しゐたり。夢現のさかひをしらず、遽周章きひき起せば、聲のもれん支度にや、手巾を口に啣へは

や息も絶えはてたり。歎きのうちにも側に、筆硯の取散らしあるに思ひあたり、佶とあたりを見れば果して障子に書きおきあり。急ぎ燈をちかうひきよせ、と見れば、

老いたる者は小兒に等しく、いと物見だけくて、櫻の花に春日をくらし、思ひきや、盜賊のために弓子を奪ひ取られしは、悔いても詮なき老いが咎なり。其のをりこそ頓に死ぬべかりしを、亂心となり、恥辱しき事さへしらず、漸く心をしづめ正氣となりて夫婦の物語らひをきくに、何某とやらん國の司へ、弓子をまゐらすべき契約さだまりしとやらん、老いが身一ツに迫り自ら刃に臥しぬ。我が亡骸をもて證據となし、彼の方へ申しひらくべし。村婆水無瀬かしこみていふ。

と詳に記しあれば、「扨は正氣となり給ひ、夫婦か歎きのもれきこえ、自害し給ひしとおぼえたり。是れ我が手をもて母を殺すに、其の罪等し」と頓足してありけるが、側に兄次郎九郎愚かなる者の常にて、いと寐ぎたなき寐貌をまもり、「かかる鬧ぎも露しらざる、獸子をして弓子がかはりにつれゆかば、母もこの世をさりたまはじ、我も又多門殿へ分說あり。」と、かへらぬ周章して、其の夜は遂に泣きあかしけり。

十三の渡にて軍太與次右衞門を討つ
并　畠山多門本國阿波へ赴く事

さても桃井軍太は、同國陀開島に假栖なし給ふ、畠山多門に斯くと申せしかば、多門大いに歡び、引出物など給ひ、尚支度微細にて、次日軍太に弓子を迎へこべきよしのたまへば、軍太かしこみて命をうけ、肩輿長刀をさきとし、從者數多したがへ、長柄村へぞおもむきけり。又與次右衛門は老母みなせの亡骸を竹轎にかきのせ、弓子を奪はれし分說として、畠山の館に急ぐなり。十三の渡にてはたと軍太に行き合ひたり。互の挨拶をはり、與次右衛門いひいでけるは「扨も弱息弓子が事につき、一席に盡しがたき物語あり。」と、己がつらせたる竹轎をさしまねき「いで此の内を見給へ。」といふに軍太訝りながら、さと戸をおしひらき見て大いに驚き「貴客此の處まで、出でむかへ給ふは、處子をおくり給ふにやと思ひ侍りしに、乘物の裏なるは此れ老女の亡骸なり。必定深き由緣あるべし、いかにや。」と問ふ。與次右衛門淚を拂ひ「聞き給へよ語り申さん。」と、櫻の宮の花見を首めとし、水無瀬が自害なしたる尾りまで、つばらに述べ、懷中より百兩の金をいだし返せしに、彼の軍太といふ者は生得奸佞にして、貪欲深き惡性ものなれば、此の金をみるより不斗惡意を發し、刀を拔きて與次右衛門に切つてかゝる。おもひまうけざることなれば、肩先へ切りこまれ「此奴何ゆゑ我を害せんとはなすぞ。」といひさま起きあがりて、拔きあはすれど、初度の手癖に劍法やゝみだれ、ふむ足さへもさだまらざるを、軍太得たりと聲をはげまし「弓子を勾引されしなんどと亡說をかまへ、など多門君へ申

しわけたつべきか。」と理非も分たず、遂に與次右衞門を切り殺し、弓子を迎ふべき乘物のうちに、與次右衞門が首を藏し、高山の館にぞ歸りける。彼の與次右衞門が許より、老母の死骸を舁き乘せたる輿舁、あさぢ次郎九郎へ斯くと告げしかば、夢路をたどる心地して、やう〳〵に走りつき、この光景をみるよりも、さらに目もくれ心きえ、亡骸にひしといだきつき、「愛子の行方しらず、それさへ悲しと思ひしに、母もこの世をさり給ひ、まだ此の上の杖柱と、たのみに思ふ良人まで、人手にかゝりて亡せ給ふは、いかなる前世の報いぞや、妾も共につれてたべ。」と天を仰ぎ地を敲き、涙さへいでやらず、聲を限りに叫びけり。次郎九郎は只茫々として、淺茅が袖に取縋り、「母上父上は何人が殺せしぞ、我其の仇人にあはん程ならば、たとひ力は及ばずとも、食ひつきても思ひしらせんに、教へてたべ。」と泣きふしけり。あさぢやゝ涙をさめ、「日頃武道も心がけ給ふ御身にて、かくやみ〳〵と討たれ給ひ、殊に御首さへ見えざるは、山賊の所爲にもあるべからず、我心せくまゝ、只良人の身に大事有りと、つぐると等しく走けきたり、緣故を聞きはたさず、さきの輿舁にとはんには、仇人の姓名も詳にしるべし。其の後こそ兎も斯うもせめ。」と、水無瀨與次右衞門が亡骸を、乘物の内に納め菩提所へ送りゆき、むなしく煙となしはてぬ。あさぢが心のほど哀れはかなき事がらなり。さても軍太は阿間島の屋敷に歸り、與次右衞門が死首を多門の御前になほしおき、君の命のごとく、小子長柄の里にいた

りし處、彼の處女弓子家にあらず。其の仔細を問へば、與次右衛門湯治におもむきし留守にて、病死せしと申せど、みなあとなき空言にて、彼の弓子はとくに女院に賣りわたせしを、我を欺き、君より委ねたまはりし百兩の小金まで、彼にかたり奪られしは、是れみな我が謬りなり、此のうへの申譯とし與次右衛門を討ち捨てたり。」と實しく語れば、多門も打驚かせ給ひしが、やゝあつて「汝が申すところ理には似たれども、既に弓子と夫婦の契約なせし上は、彼は假の外父なり、とくと理非もたださず、殺害なせしこそ疎忽なれ。」と、不興の體に見え給ひけり。理なるかな、今宵紅閨に新枕せんず情人を失ひ、その夜は寢もやり給はず、一人孤燈にむかつて無常を觀じ、遂に弓矢の道を廢し、桑門ともなりなん御心なれど、兄國淸側にあれば、其の心願だにとげがたく、ほどなく病にかこちて、本國阿波の德島へくだられける。

淺茅盲女となりて貧家に苦しむ
并次郎九郎孝心の事

かくて淺茅次郎九郎は泣く〳〵家に歸り、彼の輿舁に緣故を問ひて、與次右衛門を殺害せしは、畠山多門が家子なる由はしれしかど、愚かなる次郎九郎の力もて、仇討の事なんど思ひもよらず、活きながらふべき心さへなけれど、活計る術しらぬ次郎九郎が、我が亡後にて餓死やなすべしと、しばし

ば心をひるがへして、其の年もくれたちかへる春となれば、いと長閑に霞しき、野邊にもゆる若菜をつみ、川に漁りの舟を浮め、なべて人心もうき立つ中に、あさぢは一室にひき籠り、あくれば眞次右衞門みなせが横死をなげき、くるれば弓子が行方を慕ひ、かへりやらぬ周諄して、其の憂への重なる故にやあるらめ、日を積みて打ちふせば、次郎九郎大きに驚き、片時も枕邊をさりやらず看病りけるが、漸々に病勞かさなり、朝烏に向ふ梟の栖を迷ひ、黄昏すぐる庭鷄の啄めるさへ思ふが儘ならさるごとく、日にふるれども黒白をわかちがたく、遂に盲女となりにける。次郎九郎が歎きいふべきもなく、そが上に、坐して汲めば大海も盡くる期ありとやらん、田畑さへ藥の料に賣りしろなし、今は世を經べき計もなく、只次郎九郎街道へいで旅人の裝齊を荷ひ、五錢三錢の錢を得、半ばは食にあて半ばは酒を買ひて實々しく母にすゝめ、また錢をも得ず、夕かしぐべき米さへなき日は、持つていでし晝食の辨當を己はくひもやらで、「今日は何某が饗應にて、我は肚ふくるゝほどなにくれの物たうべたり。此の握飯は母さままゐり給へ。」とすゝめつゝ、朝は星をいたゞき、夕は月に向うて憩はず、足をはかりに走りまはれど、きはめたる生活計なければ、貧しきなどはいふばかりもなく、あさぢも聽くに忍びず、細貨におるべき苧をひねれど、目かいの見えぬことなれば、日をつみ月を重ねて百錢の錢を得る事かたく、家内に有るところの雜木まで、悉く煙のしろに賣りなして、塵ばかりの物も留

あす、家は荒れゆく儘に壁には蔦葛はひかゝり、小笹は牀を貫きて簀子のうへに露滴く、八重葎のみ門を閉ぢ、野花色をあらそうてひらけど、留まるべき客なく、尾花の袖は風にまねけど訪らふ人稀なり。ものの哀れは秋こそまされりといひしも、きのふとすぎ今日と暮れて、冬のなかばにぞなりにける。かくて一日次郎九郎は例の如く街道へいでけれど、此の日は旅人もまれにして、只一錢の錢も得ず母の好む酒だに買ひ得る事ならざれば、いかにせんと路頭に少時たゆたひしが、佶と心をさだめ、己が著たる綴の衣を賣りなして酒と米を買ひ、いそぎ家に歸りて酒をあたゝめ母にあたへ、心にかなふべき物語などなして、薦屏風の臥戸にいりぬ。賞すべきの孝子なり。其の夜は雨さへいたく降りけるが、ほどなく空はれ雲ちりて、さもすさまじき月の光は、かたぶきたる軒端よりかげをもらし、はしたなく吹く小夜嵐に、梢へ含む雨の斑々とふりかゝり、我が家のみ又しぐれして、あさぢはねもやらず、こしかた行末のことなど思ひめぐらし、すゞろに落涙してありけるが、「嗚呼我々ほど世に薄命の者もあらじ、母上與次右衛門どのはいうてかへらぬ事ながら、花よ月よとおもひ子を盜賊の爲に失ひ、日外卜者にとひしとき、回り會ふべき期ありとのことばを憑み、鴈の翼の譬へもあれば、今日や便宜もありやせん、明日は音信きく事かと、泣き潰したる盲人の、今にも弓子が歸りこば、脊丈長びしを見られまじ」と、それさへ思ひにとりそへて、二年近くたよりなきは、必定浦わの傀儡や女院の

妓女となりつらん。我が側にありてさへ、艾を炙くもきらひなれば、暑さ寒さの補ひに、呑ませし藥も絶えはてて、勞ひがなしつらん、よしや百綴の衣を著、餓死をなすとても、親子一所にあらんなら、かかる歎きもあるまじ。」と、少時泣きふしゐたりしが、思ひ返して涙を歛め、「無益周詳して、次郎九郎が目覺めば、共に歎きをそふべき。」と、衾をかつぎていねんとす。次郎九郎は過刻より母のことばのもれ聞え、涙をのみてゐたりしが、忍びかねてや、よゝとばかりに聲たつれば、あさぢ驚きさぐりより「やよ次郎九郎、母がなげきの洩れ聞え、忍泣すとおぼえたり。あのごとくいひたるも、老いたる者の愚癡とやらん、善惡は是れあざなへる繩の如く、又好き事も來るべし。」と言ひこしらふれば、次郎九郎も涙をかくし、「御心さへそのごとくならんには、いかで歎き申すべし。さきの酒是れにあり、いであたゝめて參らせん。」と、茶杯につぎてさし出すを、淺茅請け得んとなし、不斗次郎九郎が袖をさぐり見れば、只解衣の一重絹のみなり。淺茅うち驚き「こは肌薄にて寒風の身にしみん、私衣は何處に有りや、我さぐりもてきて取らせん。」と立たんとするを、次郎九郎母の袖をひかへ、「我は火爐の側にあれば、いと暑くてこゝちよし。」とおしとむれど、あさぢ更に留まらず「いま寒風に肌を冷せば、またくる春には、きはめて病を發するものぞ、何方にあり〳〵。」と問ひければ、次郎九郎は哭きいりて、やゝいらへもせざりしが、「母さま今日は街道にて然るべき旅人も通りあはせず、只

一錢の錢も得ざれば、せん術なきまゝ、我が著たる衣を賣り、酒と米とにかへたれば、此の解衣より外に著る物なし。」と、きくより淺茅は涙にくれて正體なく「いかに愚かなればとて、汝が著たる衣まで、酒食の料に賣りなす事世にあるべきとも覺えず、我が子の衣にかへしときけば、憂へを拂ふ玉箒も、猛火ともゆる餓鬼道の、水に臨める心地して、彼の熱鐵の丸を呑むと傳へし魔道の辛苦も、これにやいかで勝るべし。」と、手に持つ茶杯を置きもやらず、身をふるはすれば、酒の溢れて膝にかゝるを、次郎九郎手巾にてぬぐひつゝ「母上さ歎き給ひては、御勞の害とならん。いかなる宿世の因縁にて、貧苦に迫り孝行は、心の半ばもなし難し。」と、聲をはかりに泣きさけぶ。淺茅やう／＼鼻うちかみて「嘸寒からんこれ著よ。」とて、己が著たる衾をぬぎ、次郎九郎にひきかくる。次郎九郎大いに驚き「年老い給ふ御身なれば、まづ母樣こそめし候へ。」と、親子互に讓りあふ。あさぢわざと聲ふりたて「やよ次郎、親の言葉をそむかぬを孝心とこそ聞きつるが、其の辨へさへなきほどなら、いで我其の衾をきるべき。」とひきよすれば、次郎九郎うちなきて「なにしに御ことばをそむき申すべし。」と、衾をとりて寐るを見て、よゝと聲たて泣かんとせしが、綴の袖を口に啣へて、涙をかくし「あはれ古は身なれて疎き衣さへ、今あらん程ならば、彼に與へて喜ばさんに、かくまで尾羽を打枯らすは、日頃信心したてまつる觀世音の御誓ひに、枯れたる木にも花咲くとは空事にてありけるよ。」と、

御佛さへうらみたて、泣寐入に臥しにけり。次郎九郎そとおきて、彼の衾を引きかぶるやうに灰に著せ、心に思ふは、「今母のことばには、觀音の佛力にて枯木も花咲く春にあふと、是れ屈強の事なり。」とひとりごち、其の曉を初めとし、夜毎觀音寺の觀音へ詣で、「母の眼病平愈なし、二ツには親子が命つなぐべき、寶をさづけ給へ。」など、一心不亂にいのりける。愚かなる次郎九郎も、心言よりなして、智あるごとくみえにける。

阿波之鳴門二之卷　終

阿波之鳴門 三之卷

柳亭種彥子著
友人玉家樞夫校

畠山國淸孝子を憐む
其 觀音寺に夜參して次郎九郎應驗を得る事

柳龍門山觀音寺の觀世音菩薩は、むかし孝德帝の御念持佛にして、靈驗殊に掲焉しと、近郷の老若參詣日夜たえまなし。次郎九郎も夜毎あゆみをはこび、はや三七日におよびける其の夜は、雨さへいたくふりて寒風肌を穿ち、神淸み骨冷え木の葉の衾いと寒く、さながら淨牀に坐するが如し。されど應驗をえざるうちは、此の所をたちさるまじと佛前に通夜してありけるが、何方ともなく童顔鶴髪の老翁一人、次郎九郎がそばちかく立ちより、「汝至孝切なるのあまり、貧を佛にうつたへ、かつ母の眼精平愈をねがふ。なににまれ手にきたる物をとらへば、幸福まねかずしてきたり、此の一事人にかたらば、却つて災ひをひきいださん。されど皇天の賞なきにあらず。時のいたるをまつべし」といひはなち、光明赫奕たる形と現じ、佛殿へいり給ふと思へば、空とぶ鴉の小夜の枕におどろかれて、

南柯の一夢さめにけり。次郎九郎奇異のおもひをなし、あたりをみるに觀音寺の佛殿なる柱にゐよりて、まどろみしにぞありける。ほどなくあや鷄の聲遠近にきこえ、あかねさす日は甍をてらし、朝あらし梢の露を拂つて、夜はまつたく明けはなれければ、いで歸路におもむかんと出でゆきぬるに、時にもあらぬ蜻蛉掌中にきたりてうごかず。愚かなる者のならひにて、彼の蜻蛉を藁すべにてむすび手まさぐりてあゆみゆく。此の邊に又橘平といふ狩人あり、彼弓を手にふるれば百發百中の術をきはめ、そがなかにわきて雉子を射るに妙あり。彼の橘平妻は三年いぜんみまかり、三吉とよぶ愛子のみなりける。今日も又三吉を誘引ひ未旦に狩にいで、忽ち雌雄の雉子をいとめ、家をさして歸らんとなすなり、次郎九郎にゆきあひたり。三吉次郎九郎が手にもつ蜻蛉をみて「とゝさまあれをもらひてたべ。」といふに、橘平も次郎九郎とは知故の事なれば「やよ、次郎、何地へ行きたりしや。」とことばをかけ「我が幼きに其の蜻蛉を得させよ。」といふに、次郎九郎「やすき事なり。」と與へんとなし、不斗おもひいでけるは「さきに老翁のいひたるは、なにゝまれ手にきたる物をはなたずば、幸福のいたる期あると、告けたまひしを我はたと忘れたり。」と大いに驚き、重ねて橘平に向ひ「我此の蜻蛉はすこしく用ゐるところあれば、參らせ難し。」と云ふに、三吉はいよ〱「あれほしや。」と泣き叫ぶ。橘平三吉をいひ和め「いまにとりて與へん。」といへど、をりしも冬のすゑつかたなれば、此のものほかに

あるべしともおぼえず、忽ち次郎九郎が愚かにて孝行なるを計の種となし「やよ、次郎、我今雉二羽を射てもてり、こは眼の藥にて雉の肉をくらふときは、盲人も眼をひらくと聞く。其の蜻蛉とかへん。」といふに、次郎九郎是れを實とし、大いに歡び蜻蛉を三吉に與へ、「我にはいろよき方をたまへ。」と雉の雄をとり、家に歸らんとす。橘平心にをかしく、はた彼が孝心を感じ、幸ひあたりに一軒の酒房あれば、次郎九郎を誘いて彼所に到り、酒をいだしてすゝめけれど、次郎九郎頭をふり「我はあへて酒を好まじ、たゞ我がのむべきほど、陶へいれてあたへ給へ、家にかへりて母をよろこばさん。」といへば、橘平ます〳〵感激し、「汝母に與へんとなら、別に一陶を持ち行くべし、我價をつぐのはん。」と、ひたぶる進めければ、次郎九郎も大いに醉ひを發し、橘平に別れをつげ、彼の雉を繩にて結び肩にかけ、片手に陶をさげ、踉々蹌々となし、頓て塊につまづきよろめくはずみに、思はず彼の雉を枯草の中へ投げこみたり。折しも側にあさりゐたる雉子一羽、この音におどろき飛びいでければ、次郎九郎は己が雉子の蘇生りしと思ひ、あとについて追ひゆくをり、標と音して矢一ツ來り、飛びゆく雉子を射とめぬ。次郎九郎再度おどろくところへ、はるかむかひの樹林より、弓矢たづさへたる武夫、寛々とあゆみきたるは、是れ則ち畠山多門が兄同名國清が朝狩にいでたるなり。國清側の從者をして、雉子をとらせんとなすに、次郎九郎うち泣きて「そは此方の雉子にて侍る、如此々々の事に

て得たり。」と、首尾つゞまらざる物語なすに、國清はたゞ彼を狂人にやとおもひ、そのまゝ雉子を得させしかば、次郎九郎心をやすんじ、たちかへらんとなすをり、一ッの子犬雉子の雄を喫へ来るを見れば、是れ橘平に得たる鳥なり、犬をおひやりとりかへし、いそぎたち戻つて、國清がまへに頭をさけ、如此々々の事いうて詫びければ、國清其の性の篤實なるを賞め、あへて罪をせめず、次郎九郎が名を問ひて、且驚き、「汝人にすぐれて至孝なる事、我とくに聞きおよび、わざ／＼訪らひても賞すべき刻、廻り會ふこそ幸ひなり。」と、小袖一重小判二十兩給ひければ、次郎九郎は夢みし如く喜びて、千度百度拜謝なし、元の路へぞかへりける。さきにいだせる今市は、十郎兵衛と名を改め、悪行募りて家にある事まれなりしが、此の日長柄へたちかへるをりふし、我が合壁なる次郎九郎、いみじき小袖を肩にかけ、一ッの財布を提げ來るをみて、大いに訝り縁故をとふ。次郎九郎は十郎兵衛が日頃より、愚人々々と口ぎたなう罵るを、つらにくく思ひゐたるをりなれば、路頭にたちとまり、「いかに十郎兵衛汝我を愚人なりとあざけれど、今此の搭嗹のうちには、二十兩といふ金あり、汝二十兩といふ大金は見たることもあるまじ。」とほこらかに罵れば、十郎兵衛から／＼とうち笑ひ、「其の搭嗹のうちなるは錢にてもあるまじ、我を賺かんため、石瓦や入れおきぬらん。」といふに、次郎九郎は酒氣をおびたる上なれば、忽ち怒りをしやうじ、彼の夢の告げもうちわすれ、財布をひらいて十郎兵衛が手に

わたす。十郎兵衞熟みるに、まがふべうもなき小判なりければ、大いに驚く其の折、風にふきちる木の葉二葉財布の中へ落ちければ、心に姦計をまうけ、早くも二兩の小判を收み、財布の口をむすんで、次郎九郎に返し「汝かくばかりの金を、由緣もなき人の與ふべき筈なし。おもふに、狐にや魅されつらん。其の小袖も、破芭蕉なるべし」といひすてて別れけり。次郎九郎は家にかへりて、一五一十を母あさぢにきこえけれど、日頃よりあさぢが苦をやすめんと、今日は何某が佳物あたへしなどいふ事つねなれば、あさぢ更に實とおもはず、よきほどに返答なしける。次郎はなほ佛恩を謝すべしととつて返し、又觀音寺へ詣でけるが、路の側になにやらん淸らかなる紙に包みし物おちしあり、指頭にていらへければ餅のごとし。心に歡び今日は好き事のみ重なれば、又なにやらん得たりと、家に歸つて、彼の紙包を開きみれば、豈料らんや馬の糞をこと〳〵しく包みたり。大いに驚き、屛風にかけおきたる小袖をみるに、是れ又芭蕉の葉なり。いよ〳〵訝り懷中の財布をいだしみるに、二十兩の金、十八兩ありて、あとふた兩は木の葉なり。さては十郎兵衞がいひたるごとく、狐めに化されしに疑ひなし、もはやふた兩は木の葉と變じたり、殘り十八兩も、漸々に木の葉とならんは必定せり。此の馬の糞を、餅とおもひて食らはざるは、まだこの上の仕合なり「あな惡の畜生や」と、財布を庭へ投げうつを、十郎兵衞垣間より手を出して取りいれぬ。是れ次郎九郎が愚かなるより思ひあたり、

合壁にうかゞひゐて、觀音寺へ謝参りにゆくを聞き、馬の糞を紙に包みて拾はせ、彼が留守のあひだに早くもしのびより、官女のあさぢのみなれば、小袖を盗みとり、芭蕉の葉とかへおきしなど、みな十郎兵衛が姦計なり。さて、次郎九郎は彼の雉子を軒にかけおきしが、古草鞋ともならず、德利の酒は尿の香ひもなさざれば、扨は彼の武夫のみ狐にて、橘平は狐にはあらざりしかと思ひきはめ、雉子を割烹して母にあたへければ、忽ち眼中の雲ちりて白日をみる事を得、眼のひらきしこそ奇なりといふも餘りあり。是れ正に、次郎九郎が孝心を神佛の加護なし給ひ、雪中に笋をほり氷を破つて、鯉魚を得たる類にや。又社日に酒を呑めば、聾を治むる故、治聾酒と名づくと海録砕事にみえたれば、雉子を食らつて眼病の愈ゆる事、何くれの書にもありや、何にまれ珍説話にあらずや。

鬼老婆鹽木弓子を呵責す
并花桶の水に危急を免る事

是れは扨おきこゝに又、土佐國安喜郡田浦といへる所は、むかひは阿波國鞆の浦にちかく、大島七島は目の前にみえ、渺々たる滄海水遠うして船たかく、峨々たる青山風暴うして松低し。そも此の港にかゝりて、西國の通船、風まちなす事多ければ、江口室の津には、およぶべうもなけれど、さゝやかなる花街あり。染川にそむる色里は、鄙も都にかはりなく、たはれ島のたはれ男ら、きよらなる島

帽子きて、はなやかに衣紋をため、柳の髪をうちみれば、一様にいでたつ娼婦は、歌舞の菩薩の天くだりませしかとうたがふばかり。憐むべしこれ百家の妾、錦帳をたれて花のひもとき、朱簾をまきて月の眉を畫く。貴をおくり賤をむかへ、若きと語り老いたると臥し、あさづま船のあさき契りは、煙に花を結ぶが如く、風をまたでちり果て、根をたちし浮草の、流れによりて咲くきしを異にするは、娼妓のつねなれど、女院に溺する心しては、安養世界極樂淨土のたのしみも、是れにやおよばんとおもふもむべぞかし。されば しらなみのかへりくる後朝は羅衣香をとめて、心紅閨にあるがごとく、磯馴松のまつてふ書きし玉章を開けば、神、花街にとんで、身體寒蟬に似たり。琵琶法師が撥の音波に響き、田樂法師の柏板打つ音は、樹魂にそうてかしがまし。其がなかに、浦松の長といふ娼家あり。海にそひ山にちなみ、大きやかに宅居して、主人は鹽木とよぶ老女にて、貪欲深く心あくまで猛く、人異名して鬼老婆とぞいへりける。彼が弟に又、小濱の次郎といふ盜賊あり。遠くみやこがたを徘徊なし、多く美麗き婦女をかどはかし、此の所を始め、すべて邊鄙の妓女に賣りわたしけれど、此の頃は朝廷も南北とわかり、麻のごとくみだれし刻なれば、かれを罪すべき人もなく、幸ひにして天刑いまだいたらず、ゆみ子もかれがために勾引され、はじめ室の津の女院へ賣り渡しけれど、お弓は歎きのあまり、細紐にて縊れ死なんとなし、又は剃刀にて自害せんおももちたび〱にて、そが上一人の

客をもむかへざれば、彼の長もてあまし、小濱の次郎にかへしぬ。次郎もせんすべなくて、此の浦松の婢が許へおくりける。彼の鬼老婆はかかる事を常となせば、「我なしやうこそあんなれ。」とて、はじめのほどは弓子をこゝろよくやしなひおき、彼を傷寄して、妓女となさば金の涌く泉なるべしと思ひ、その後しば／＼せめたゝき、「この苦しみをのがれんなら、客をむかへて横陳なせ、さすれば此の鹽木も我が佛と敬ひ、唐の錦の袿きて、たゞ一杯の茶を呑むすら、手を拍らして女童にはこばせ、別につらき事はあらじ。」と、哄しつ賺しつさま／＼にいひこしらふれど、弓子さらに承引かず。一度肌をけがさんなら、此の海のみくづとならんとうち歎くに、さすがの鹽木もせんすべなく、奴婢のごとくおひ使へど、お弓妓とならんよりはと、かへつて是れをよろこび、米をかしぎ水を汲み、朝は午にて牀をはらひ、夕は妓女の臥具をまうけ、もしや都へ送りかへす事もあらんかと、女子の寵愛にもおもひめぐらし、早くおきおそく寢ね、實々しくつかへ、はや二年をへて女院にあれど、かへる事をゆるさざれば、所詮息ある中、親はらからにもあはれまじ、今日や死ぬべく明日や泉下鬼とならんと、さすがに命をしまれて、血の涙は袖をそめ、麻布の衣きてしを／＼とあゆめるさま、胸のおもひを知らぬ火のつくし人は、彼が妍醜にて賤しき業をなすをあはれみ、此の花街の花魁より弓子を價身せんと願ふも多かりけり。頃は六月なかばにて、火雲天をこがし、扇の風のかへつてあつきも、金烏西

山に沈んで凉風や、いたり、海士のたく藻にあらねども、蚊火の煙をくゆらせ、濱びさしのもとについゐて、海原をながむれば、波も都のかたにかへるかとおもはれ、不慮にあはれもよほして、少時落涙なしけるに、此の時家長鹽木は持佛にむかひ、鉦をならし看經してありけるが、お弓が悲しむ聲を聞きつけ、目を瞋らし眉をあつめ「あら忌しや、そこにて泣くは誰そ」と問へど、涙にむせて答へせざれば、ちかく立ちより、おゆみをみて大いに叱り「汝このごとくうち嘯くは、古郷をしたひ歸らん事をおもふならん、我がことばをよく聽くべし、犬は賊を戸外にまもり、猫は鼠を土藏にうかゞふも、是れみな主の祿を食むその恩を報ずるなり。汝はや二年あまり此の女院に命つなぐは、これ此の婆々の餘光ならずや。それになんぞ日夕哭面かわくのみ、只一人の客をも迎へず、恩をみて恩を知らず、彼の犬猫にもおとるぞかし。其の上奴婢におひ使へば、薪木樵りても一束にすぎず、その管にもあらんなん、このほそやかなる手業には、辛苦なるべく思ふがゆゑ、妓女となれとは進むるぞ、老いたる者のいふ事に惡き事は露あらじ、この美麗しき顏に似ぬ胸の中のしぶとや」と、手にもつ鐘木を榜笞として、したゝかに打ちすうる。お弓うたれながら些も席を退かず「妾今まで賤しき業も辭退せざるは、一度古郷へかへらん事を思へばなり。其の願ひだに果さずば、ころさば殺せ此の老野狐」今いふことばの其が中に、犬猫におとりしなれど、そは何の道理ぞや。我はこれ、親あり兄あり　いひ

かはしたる良人もあるに、三年以前櫻の宮の花見にて、汝が弟小濱の次郎に勾引され、是れ我のみにあるべからず、此の家の妓女はみな、主ある婦女を盜みとりたるなるべけれど、汝が猛き心に恐れ、思はぬ人に笑ひを催し、知るも知らぬも妻よばひ、囘答ありやいできかん。」と、花顏忽ち血を注ぎ、玉手に一身の力を握つて、鹽木がかたにゝじりよる。鹽木弓子を目注にみやり、舌を吐いて冷笑なし、「あら有難の法談や、南無阿彌陀佛々々々々々々。」と唱名し、側をみれば、蚊やり燻らす火桶の中に、横はりて扶提あり、心によろこび火桶をひきよせ、「あなうたての蚊や、なんぢあればこそ、夏の月は賞うすし。」と一人ごち、扇をとり混空お弓がかたへ、煙をあふぎかくれば、弓子座をたたんとするを、鹽木はしつかととらへ、「やよ紛頭、汝さきによりわれを罵り、つねにかはりて出氣つは、にげはしらんとの料簡なるべし、いで汝がその顏に、極印うつておくべき。」と、火桶の中より扶提をいだし、片手におゆみが衣門をとり、額へ火印をつけんとす。弓子は呼と魂消るばかり聲をあげ、「なうそればかりはゆるしてたべ、朝夕鏡にむかふとき、年月あはぬ日はうへに、あひまゐらするとながめしに、我が顏も我ならず、ことに五體の不具なれば、佛化をうる事かたしとやらん、法のをしへもつたへきく、殺さばいつそ殺してたべ。」と、鹽木が手にかみつきて、身を逃れんとあせりける。鹽木からからとうち笑ひ、「さほど命がをしきとなら、妓女となりて客を迎へよ、奴婢となりくちはてんに、

たとひ艶なる顔ありとも、暗夜の錦深山の花、眺むるものもあらじなら、此の燒鐵にちりはつるや、いかに〳〵」とつけまとふ。弓子氣も魂も身にそはず、よろめき〳〵逃げんとするは、友に後れし雛鶴の、野分の風に吹きたてられし、筍をほる石女が、呵責の鬼にあふ如し。鹽木おゆみをとつて押へ、眞白髮をふりみだし、まばらに殘りたる齒をかみしめ、雪より清く花より妙なるおゆみが顔へ、あはや扶提のあたらんとなしける時、樓上より水さとながれて、老女が頭へかゝり、彼の燒鐵の火もうち消えけり。鹽木大いに怒り、頭をかへして樓上をみあぐれば、まだ花街には初々しきと思しく、蟬の羽も賺くかろらかなる袴のくゝりだかにとり、練貫の氷のごとくなる一重衣きたる、一個の美男子、かた手に目がくしにたれたる簾をかゝげ、かた手に草深百合と瞿夏の、色異なるをさしたる花桶をさげたり　今弓子が危急をたすけしは、此の花桶の水を洒げるなるべし。鹽木目を瞋らし「汝は今日初見參の客ならずや、そも何等の理ありて、我が少女を責め擊つさまたげをなしける」と、怒りに乘じて罵れど、彼の客耳にもかけず、花桶を側におき、扇を開いて寛々と階道をくだり、歌うたうていふ「我に吹毛劍あり、殺活時に臨む。」と朗詠をはつて、鹽木が側に來り「賊婦にむかつて無益の舌を弄さんもものゝはし、罪は心にこそおぼえあるらめ、天罰おもひしれりや。」と、佩刀を拔きはなつとみえしが、老女は忽ち兩段になり、火筋を摑めるまゝにて緣にたふれ、腰より下は撞と庭へ

ご落ちたりける。彼の客刀をとりなほし、鍛冶が神妙かな、錆なき刃に鮮血を濺ぐは、狂雲佳月を妬む樣あり。」とひとりごち、「小女々々。」とよばふに、弓子膝ぶしさへさだまらず、おろ／＼にじりより、「花にすさめぬ風も吹けかし。」といひさま、しほたれ衣の袖をもて、刀の鐔際へうちかくれば、彼の客刀をひくにしたがひ、ほどよく鮮血をぬぐひとりぬ。彼の客うち笑みて、「花にすさめぬ風をもて、月の雲にたぐへし刃の血をふきとるなど、風雅のみちは忘れざりしよ、津の國長柄のさと鋒杉の處女お弓、我をおぼえありや。」といふにお弓うち驚き、すかしみれど此の時はや、斜月沈々として野根山に隱れ、今の噪ぎに燈さへきえければ、銀燭徒らにみえ分たず。弓子軒にかけたる螢籠をとりきたり、彼の客の面をてらしみたりける。これなん螢のともす火にみると、源のいたるが女車と思ひて、なりひらの車になまめき、又玉かづらの君を、兵部卿の宮にみせまゐらせんと、翠簾のひまへ、螢をいれしおもかげあり。弓子もさかしき女なれば、是れよりやおもひあたりしならん。是れ則ち雨宿りのをり、釵をおくつて、偕老を誓ひし情人なりしかば、且喜び且みなりのいやしきを恥ぢ、手下よりとりおとせば、籠くだけ羅やぶれ、螢たかく飛びあがり、文なき暗をてらしぬ。

阿波之鳴門三之卷　終

阿波之鳴門 四之卷

柳亭種彦著
友人玉家凝夫校

次郎九郎木偶を舞はして活計となす
並橋本發心物語の事

扨も長柄の里なる次郎九郎は、畠山國淸より得たる小金二十兩を、十郎兵衛に騙りとられしかど、母淺茅が眼病の、まつたく愈えたるを深く喜び、夫れより愚かなる心にも一計をまうけ、邊近き鶯塚といふ塚の前にいでゝ、木偶を舞はして往來の人を留め、錢をこふ事日々おこたりなく、其の頃より近鄕の老若は、彼が孝子なることを聞きつたへ、錢をうる事多かりければ、半ば心を安んじ、徒らに其の年も暮れ次の年も秋の末になりにける。かくて一日次郎九郎は母淺茅を誘引ひて生平の如く街道へいでゝ、次郎九郎見物に對つていへらく「我が舞はしなる木偶にもくさ〳〵の番組あり、先づ靑道心の神崎がよひ、白河巨子の窓印地、左甚の僧の門等立、此の白拍子の人形は、佛御前の男舞てふ舞ひぶりなり」といひをはり、歌に、

それ〳〵、此の御方のおひたちは、水を穿つて紅艶をみると、いとつや〳〵しき顔を泥に埋める譬へにて、蓮と申す兒名なり。島黄金の雪の肌、見る人聞く人結縁をねがへばや、蓮といへるをよびかへて、佛とこそははやされたり。

と聲をかしう謳ひ、木偶をふり動かし、淺茅太鼓をうつて拍子をそふれば、見物の諸人願をかけ、はた彼が孝子なるを賞歎し、錢を投げても別れ去るも、此のあるじも何方の國守の室にやと思しく、侍女奴婢從者數多左右をかこみ、先を拂つて來りしが、花橘の描金して、あたりも輝く許りなる駕輿を此所にとゞめ、戸をさしおしひらけば、掛香のかをりえならず、しづかに立ちいでたる其の人をみるに、玉手蜜眞が手を盡したりとも、是れにはまさるべうも覺えぬ、忍摺の袿きて、紅の玉裳ふり、雪なす足のさゝやかにいでたるは、都たゞ禮石の鶺鴒鼻したる、古人が見たらんには、さぞ焦れ思ふらめ。彼の女房淺茅がかたへちかよりとおもひよるを見れば、是は則ちお月なり、あまりにおもひかけぬことなれば、言葉さへいでやらず、お月も少時涙さしぐみ、頓に緣故をいひもいでず、やゝありて、「あづらしや阿上を童はかく華やぎたる姿にて、再度あひ參らすれば、不審りおぼすも理なり、是れには一席につくし難き物語の侍る、此所は往來もしげきに、荒れたりとも我が屋に誘引いたまへ」といひいづることばさへつゞやかにして、實に國守の室といへど、恥かしからぬおもむきなれば、半ば

喜び笑ほうたぶひ、鳥羽玉の夜の夢にやあるらめと、次郎九郎諸とも答へさへなしやらで、只管お弓が顔をまもりゐるのみなりけり。お弓自ら鬮の手を上り、花の袂に襤褸の袖をまじへて羞ぢらふ色なく、行くほどに聳えある松の老樹の下に到れば、屋家くづれていとあやふく、壁の骨あらはにいで、簀子の上にはきたなき蟲あつまりて、妨碍などはいふべうもなければ、斯くもあれゆくものかなと、お弓は心中に驚き、まづ上座とおぼしき所に、淺茅をならしめ、つかへたる手の形は塵のうちに殘るばかり、居ずまひも繕はず、うや〳〵しく禮をなし、「母人兄人にもさぞ不審しう思さんが、妾四年以前櫻の宮にて、小濱の次郎といふ盗賊に勾引され、首尾は如此々々にて、遂に彼の次郎が姉鹽木といふ老女の毒手に落ちいり、命もうしなふべかりしを、思ひきや、往年私かに夫婦の契約なし侍りし、畠山多門君にめぐりあひ、初めて父の横死を知り、猶彼の君の御物語を詳に聞き侍れば、妾次郎に勾引されしより一部始終齟齬なし、父上與次右衛門殿の非命の死は、多門君の家來、桃井軍太といふ者の所爲にして、多門君には、父上與次右衛門殿の舅たるを欺き、百兩の黄金を得て後、妾を曲輪へ賣りわたせしなんど虚言をかまへ、己私かに彼の黄金を掠取りしとおぼゆ。多門君にも彼が奸計をあらかじめおもはかりたまへば、御氣色よろしからざりしとやらん。近頃わらは不意、多門君にあひまゐらせしなり、實に小濱の次郎といふ盗賊に勾引されしよしきこえ侍らへば、君にも大いに怒ら

せたまひ、彼の軍太を糺明あるべきよしをつたへ聞き、いちはやく亡命して行方知らずなりぬ。彼の軍太今幸ひ畠山の御館にあらば、仇を討つて父尊靈に手向けんものと、悔いの八千度くゆれども詮術なし。昔には妾が操をまつたうし、他心なきを感じ給ひ、多門君の北の方と仰がれてより、直に彼の地を出船して、二日さき當地に來り、兒人の孝心をも詳に聞き、侍る人をしてむかへ參らせんとはおもひしが、妾もまたわざ／＼これにまうできて、心ざしのうちからざるを、かごと知らせ參らするなりけりと、嬉しきにも涙さきだつは、女子の常なりけり。淺茅次郎九郎も、老母水無瀨が自害をさきとし、悲歎のあまりに盲女となり、父雉子をくらつて眼病の愈えたることまで、おちもなく語り、三年を經て、母子相會するの事なれば、二人が喜びいふべうもなく、かずの物語を悉く記さんには、みるにさへくだ／＼しきをいとひ、閑語はもらしつ。お弓かさねていふは、「妾が良人多門君の兄君國清といへる御方、是れなる次郎九郎殿の孝心を感じ、はた落魂れ給ひぬ。初めは則ち畠山の家來桃井軍太が父上を討つたる由なれば、他の事にあらずと憐みおぼし、黄金二十兩を惠み給ひし由、さる事侍りしにや。」と問ひければ、次郎九郎答へて「夫れこそ彼の野狐の事なるらめ」と、雉子を返して黄金を得、遂に十郎兵衞がことばに違はず、木の葉と化じたるまで、いきまきて物語れば、お弓いと不審り、其の十郎兵衞といふ者は往年妾に懸想せし今市といふ者なる由、彼元盜人の胤なれば、白浪

の歌を送つて辱めしが、今なほ悪行募りしと聞き及ぶ。彼が姦智をもて兇人をたばかり、木の葉と金をいれかへたるは必定せり。國淸君に斯くとつげたてまつり、十郎兵衛を捕へて詮議せんに、縁故は分明しるべし」といひ終り、侍女に命じていろよき小袖を、次郎九郎淺茅に著せかへ、「いざ阿閇島の舘にいたり給へ。」とすゝむれど、淺茅頭をうちふり、「妾賤しき身をもて、尊き人と一席にをらん事のぞみにあらず、御身に再度めぐりあひ、かゝる出世を見る上は、母が望みははたしぬ。」とてかたく辭して、畠山の舘にいたらざれば、ぜんすべなう阿閇島に歸りていぬ、多門にかくと聞え、同國豐島郡垂水村といふ所に別舘をつくり、淺茅次郎九郎が住居となし、こゝにおいて頓に幸福のいたる事、弓子が貞心、次郎九郎が孝心のなすところにして、書を開くの輩、彼等をまねび給はゞ、還著の幸ひといふべし。又此の頃淺茅が卜居せし、垂水村伊和寺といへる佛地に、道心堅固の念佛者あり。日々鉦をならして、近郷を勸化なしけるが、淺茅一日彼の道心をよびいれ、母貞人の菩提の爲と、米錢を施しければ、彼の道心淺茅を見て大いに驚き、「御身は往年盲女となりし淺茅殿にはあらずや、かく華やかなる姿といひ、眼病の愈えたる事大いなる仕合なり。」といふを見れば、橘平にぞありける。次郎九郎身を轉して橘平を拜謁なし、「こは恩人よくも訪らひ給ふものかな」と、手をとりて上座に進む、橘平更に不審はれず、「御身等何等縁故ありて、我を恩人とはいひ給ふ」と問ひければ、次郎九

帥在年雉子を伴ひ、眼の眼前の愛えたるより、妹背の多門吾の妻となりたることまで詳に語りければ、播半はたと手をうち、我一事の黄れも寶と思ふ心、明らかに寶となり、眼前の平癒わりしは、さまで御身が手もた、其の感應たし給ふところにして、我が思は際詐りもあらず、今は門を守ずかくして、彼の雉子について一條の因果物がたりあり、聞き給へよ申さん。我御身に雉子の難をわたへ、嘴はゆるゝなよおさやらで、帽ぐるにかけおきしか、其の夜三更の頃ほひに、苦悩えて正氣つかず、遂に斃死しき。と暫くさて、さながら雉子の聲に似たり。禽なれき藥をあたへけれど、露ばかりも效なく、草葉の露ときえうせぬ。我が歎きいふべうもなく、かくしてあるべき事ならねば、亡骸を傍におさめ、肌に香をひねりて念佛しつゝあるところへ、彼の雉子の雌なるがおのれもまゝにて、傷のかたまであゆみきたる。こは怪しやと壁にかけたる時おつとり、屍打にてうちかゝりければ忽ち死したり。怪なかけて見るに、矢疵よりしたゝりし鮮血にて、おぼろかなる文字倚縁にのこりぬ。

いまはそし焼野の雉子なれもおなじ

とてゝでは鮮やかにしるせども、其の後は讀み得難し。我熟思ふやう、蜻蛉をもて雉子にかへしゝ、子の愛に溺るればなり。多生劫とめし雉子のうたに、焼野の雉あり、親ごゝろに有るべきに、焼野の雉子の悲しみを、己が活計となすことは、未來の苦患もおそろしと、其の席をさらず髻をはら

りて異様の身となりはてぬ。おもふに嫁は養子に吉事をひき、雉は苦患のたねとなる、宿直の雉子ともに因縁ありしも不思議なり。ことさらなりければ、浅茅次郎九郎もうちおどろき、その夜は橘平を家にとゞめ、出雲満月譚にときそうへせり。橘平はそれよりいよ／＼念仏おこたりなく、殺生の罪をあがなひ、一塊の墓をきづいて、雉子塚と名づけければ、ときの人彼所の畷を雉子畷とよびけりとなん。南雉子畷はいかになりしや知らず。雉子塚は聞く人ありしとこそなれ。是れ作り物語に似たれども、南天門につなげる中には、心ある身のたのもしきかたとし、津国にて歌をよみ、安倍清の鶴書は、菰がくれいひとりねた、夢のうちにさえたるをはじめ、木の葉へ蝉の歌をはさみ、八坂の塔に蝉のあつまりし古事なんど、おもひあはらせず、猶お不思議となすにたらざるにや。

　河内志に記するところに、津の国垂水岩氏が娘、河内の人の許へ嫁してものいはざりければ、瘂なりとおもひて、おくりかへす道にて、其のたはむれもて雉子を射る。其の時彼の娘、ものいはじ、父は長柄の人柱、雉子もなかずば射られざらまし。と詠みけることをのせたり。人柱の事無根話なれば左伝にいふ、賈大夫が妻三年ものいはず笑はず、賈大夫雉子を射るを見て、彼の妻はじめて笑ひものいふをのせたり、河内志の作者これらを附会してつくりあうけたるやうにおぼゆ。橘平が雉子畷の墓話といへるも是なりや知らず。

是れは扨おき、一日十郎兵衛は淀川の堤をよぎり、楊柳の蜘の網に山蜂のかゝりたるを、何心なくながめゐたるに、蜘蛛をりはへて、山蜂をまとはんとなせど、かへつて山蜂の針にくるしめられ、只いたづらに網をかけ廻る、其の折しも颯と吹きくる風につれ、二つの蟲川の面へおつると等しく、蜘はあやゆく柳の葉にのりうつり、水中へよこざまにおちいりてうごき得ざる山蜂を、絲をもてまとひ、水の上をはしること、只に平地を行くが如く、岸の草にかくれひければ、十郎兵衛莞爾とうちゑみ、蜘蛛は山蜂の猛に及ばざれど、水中に落ち入りては忽ち蜘の絲にまつはる、我輩のむかしより、海賊を業となせば、水練は海童が道をきはめ、龍の顋の珠をもとりえん、是れより西國におもむき、海上の通船をうかゞひて、黄白財寶を奪ひとらんに、元來水上のはたらきなれば、數百人をもてかこむとも、海濱を潜りて遁げのびんに、など恐るゝにたらんや、是れにこしたる良計あらじ」と、ひとりごちたるところへ、三五人の捕吏十郎兵衛が左右よりうかゞひより、鐵尺を閃かして打つてかゝる、十郎兵衛手にもつ絲にて、丁度うけとめ身を轉らして、川の瀬へとび込みて、行方も知らず逃げうせけり。此の捕吏をいかなる者といふに、卽ち畠山多門が家來なり。往年次郎九郎が黃金を奪ひとりしを初め、種々の悪事ある十郎兵衛なれば、斯く捕吏をむけられしとは聞えし。かへつていふ、彼の橘平道心が家に立田といふありて、裏劍法を學び、且往、槍が制したる槍といへる兵具を熟練

なす由きこえければ、淺茅、橘平に妹立田をこひて弓子が侍女におくりけり。弓子なのめに喜び、立田を師として閨範をまなび、香客を銚鋭にうちあなどし、更におこたりなくぞ見えける。ゆくほどなくお弓懷孕となり、玉の如くの女子をうみおとし、弦と鶴ととなへおなじければと、弓に因みてお鶴となづけ、掌の玉とぞいつくしみぬ。又橘平道心は妹立田を畠山の館に送りてのち、外に親類血族もなければ、こゝろやすく思ひ、人々に別れをつげ、諸國修行に赴きけるとなん。

海賊阿波の鳴門の通船を襲ふ
畠多門弓子月夜に管絃をもよほす事

其の年もはてて、あくれば暦應元年南朝の延元三年の事なりけるが、さる年楠正成新田義貞兩將の討死よりひき續き、干戈のうごき止むときなく、片時もおだやかなるまはなかりけり。此の頃も畠山多門は病にかこちて、弓矢のみちを廢し、日々詩歌のみに心をゆだねてありければ、世のさわがしきをものうくおもひ、本國阿波にくだるべしと、其のもよほしきりにて、ほどなく清明なる日をえらび、お弓の方もろともに、旅姿けはしく打扮ち、鶴子を婦にいだかせ、住吉の濱邊より乘船なすに、淺茅次郎九郎をはじめむつましう語りたる友ども、海邊まで送りきて、只管別れををしみけり。
お弓、淺茅に向ひ、母うへにはさぞたよりなうおぼさんが、妾阿波國に着船なさば、兄次郎九郎殿も

あとらに彼の地へむかへたてまつらん、さすれば汝かりそめのわかれながら二とせを一、美なしくよそほうれる使船に乗りうつりぬ。是れぞ此の世のわかれとは、後にこそおもひあたるらめ。村上掃部頭をそれへ、なりしも風よしとて、貢船十分にひきあぐれば、みるみるうちに十餘町をはしり、岸の人のたひきう見えしも陸のうちにかくるゝ、今は此の船も彼の岸よりみえずやなるらんと、心ぼそく遠かたをのぞめば、あはぢ島やまの畫圖のごとく海上に浮み、そのほかはたゞ浪の白きのみぞ見えけり。ほどなく日もくれければ船をとゞめ、あくれば西風つよければとて船をいださず、押鮨保夜の交鮨ひだきも夜を徒として、酒をのみてさゝめきわたり、あくればはしり暮るれはとまり、ゆきゆきてあけの日は阿波の鳴門を過ぐべしと、とある港口に船を留めけるが、その夜は春にも似ず月明うしておもしろしと、玄門は使船にのぼりやぐら障子をおしひらけば、雲もなく波とそよめる海原に、孤月清明として東天にのぼり、一輪は寒つ夜陰の月を、船は眠る水中の天を」といへる詩さへ思ひいで、席をならして眺めあたり。玄門は別船にて湯をひき、顔に紅粉をほどこさざるは、艶を慢じてにやあらんと心にくく、ゑのしろ衣をうちふくる風にひるがへし、紅裙の膚をあらはせしは、龍神の嬲をおそれざるにやとあやふし。玄門多門にむかつていひけるは、いつぞは、問ひまゐらせんとおもひ侍りしが、あのごとく、使船に上段をかまへ、二ツの箱をすゑおき給ふはいかなる品にやと問ひければ、

名門おりにおかひさいかにも此の二品の箱はみだりにひらく事をゆるさざれば、不審におもひ給ふも
ことわりなり、一ッの箱は畠山の重宝にて、又一ッの箱は往昔承暦四庚申年、高麗国より日本の王
贈みに来朝なせし剣、高麗人のもちわたりし、蘇生丹といへる仙薬にて、設ひ溺死なしたる身
にこれをまして、非命の死をとげたるもの、此の仙薬を服する時は、忽ち蘇生なすによつて、然なづけし
と言ひつたふるのみにて、我すら彼の箱はひらかじ。要き戦路に無益なるものがたりし侍りて、さぞ
ねぶりをもよほしつらんことと、門弟に命じて、和琴、琵琶、篳篥、尺八などとりいださせ、おのおの
かたは囃子のやく、侍女は太鼓のやくと、みなそれぞれに楽人をさだめ、月ふくるまで、管絃の
もよほしありければ、海浜の鷗もねむりをはなれてをどり、ゐなかたの天津乙女も、雲の中にたちまふ
くぞ見えにけり。是れは扨おき、十郎兵衛は往年淀川の水なくずりてにげうせしより、ひそかに阿波
國へおもむき海賊の首領となりて、名をも阿波の十郎兵衛とよび、由良石浦鹿越兵六野寄の一味、手
組の三大なんどいふ悪党をはなれ、数百人の手下をまつめ、鳴門の中瀬のわたりを、西國の通船をま
ちけるか、此の夜十郎兵衛は鹿越兵六と唯二人、一つの端艇をうかめ、様子小竹筒の用意して、また
を身にも目を着してゐたりけるが、はや四更のころほひなれば、大船のかたに漕ぎよせとすれとなし、
十郎兵衛耳をそばだて、かなたより八重の汐路をこぎわけて、風につれくる管絃の音は、われ聞く

にありと聞きし龍神の遊行にやと、四方を佶と見まはすに、ほどはなれてさやかにそれといちじるけれ
れど、三四艘の艨艟あり。こはおもひもかけぬ懸りきたりと、暗號と思しく篝につけたる竹燈籠といひ
で、舳にたちて吹きたつれば、何處ともなく賊船數十艘、螺の音的に漕ぎきたり、首領何かの事あり
てまねき給ひしことといふに、十郎兵衛莞爾と打笑み、「今宵はしかるべき船をも見あたらず、いたづら
に月をながめてゐたるものしも、忽然として管絃の音の聞えしかば、こゝろをとゞめて遠方のそめ
ば、あれ見られよ、戌亥にあたつて三四艘の樓船あり。おもふに西國九州の國司、都のぼりなしきを
運び、此の鳴門を渡海なし、本國へおもむくならん。寶の山を眼前におき、手を空しくなすも無念な
り。手下のこらず、隼兵六を先手となさば、我が手下すこしも及ぶまじ、心靜かに此の小舟にて見物
せん」と、多門が乘りたる船をのかせ、櫓を早めて漕ぎ寄せけり。扨も多門弓手はほどなく音樂は
てての、門も侍女にもいとまをとらせ、ねぶりにつかんとなすをりしも、艫のかた俄にさわがしく、
「一盗人あり／＼」とよばはりて、侍女近江田多門が前に兩手をつき、「諸君大變あり、海賊と覺しき船
數十艘巨巳のかたより漕ぎきたり、はや御船へ亂入なし侍りし」妾も一方ふさぎ申さんといふ間も
なく、隼兵六山猿左衞は七八人の手下うちつれ、さゝふる番兵を左右に切りたふし、ひとしく上
り、兵六槍をひねつて多門をめがけ、いでおゝ、多門はしく身をかわし、刀をふつて面を恐る

兵六はたと小膝をつき、槍をかぶりて柄をもてうけとむ。一人の草賊すかしより、をがみうちにきりかゝる。こゝろえたりと身をひけば、力餘りてこべりへ切りこみ、刀をひらりともがく折しも、弓子けゞしくこづまをひきあげ、黄金作の長刀こわきにかいこみ、草賊をめがけひとはねはぬれば、あやまたず、恰も瓜をさくが如く、乳の下よりさつくときりければ、腰より下は海に落ちいり、頭は太刀をはなしもやらず舷へ下りけり。「女と思ひて侮るな。」と山猿五藏三四人の草賊もろともお弓を中におつとり圍み、すきをうたんとつけねらふ。弓子さらに恐れもやらず、近よる草賊を袈裟がけに切りはなし、手ばやに長刀しごきもどす石突あたつて、一人の草賊叫とばかりにそり返り、海へざんぶと落ちいりたり。うちもらされし草賊、かなはじとやおもひけん、艫のかたへにげいだす。お弓つゞいておひかけいで、足もと狂ひて舷をふみはづし海中へおちんとなす。壁案の喜佐はすきを見て、多門が船にのりうつらんと、海賊船をちかくこぎよせ、五藏が女にきりたてられしをやすからず思ひ、船をへだてゝついてかゝれば、めあてはづれて、お弓が帯を槍をもつて船のこべりへぬひつけたり。お弓は船よりさかしまにさがり、水中へはおちもやらず、「あなや。」と叫んで身をもがけば、帯の結びめしやらとけて、くる／＼とめぐりつゝ、あはや、水ぎはちかくなりたるところに、をりよく十郎兵衛がのりたる小舟、二ツの船のあはひへ漕ぎいれければ、お弓は十郎兵衛が小舟の中にまろびおち、

叫とばかりに息たえたり。十郎兵衛ひきおこして顔をみれど、はやいるかたの月は横ぎる雲にひかりをうしなひ、うたがひにたえとわき難し。をりふし草賊だふのきけたる車ぞうけの油明松の火かげに、今一顔見せなや、又君ことば提灯しいふ漸くお弓が美人をしり、海中へ沈け込まれたもむざんなりと、介抱の手下にいひつけて、いう〳〵と多門が船へのりうつり、後合を信と見れば一個の美男子、大童となつて兵六初あまたの手下を相手とし、追つつ返しつたゝかひたり。是れ則ち島山多門なり。十郎兵衛なごれを見すまし、用意の半弓おつとりきつてはなせば、あやまたず肩尖一ゆりゆつてぐさとたつ。急所の痛手にひるむところをまちまうけたる海賊ども、櫓が上に折りかさなり、多門をめがけて切りつくれば、なにかはもつてたまるべき、枯木に斧をふるゝがごとく、四肢はなるゝ〳〵打ちおとされ、両身膾の如く切りさいなまれ、悲しいかなや二十年の夢も半ばにさめ、西海の浪の上に、あはれはかなく消え失せけり。此の時侍女衣川はあまたの海賊とたゝかひゐて、はるかに多門が討死を見るよりも、今ははやこれまでなりと、自害せんとなしけるが、若君御子の事をおもひいで、船梯にかけのぼれば、まだ二歳なる小児の、かゝる騒ぎも露しらず、心よげなる寝顔を眺め、「父上母上の御最期もしり給はで、いかなる夢や見給ふらん。いかにもして御命を救ひ参らせん。」と涙にくれつゝ、抱きあげ、一息はつとつく間もあらせず、手鉄の三太衣川をめがけ切りかゝる。心得たりと左の小脇におつとり抱き、

少時三丈ともたゝかひしが、立田が太刀さきするどにして、敵し難くやありけん、湖へざんぶと飛び込みて、已が艦へのり移り、蓬矢にかけしぞ射たりける。立田も防ぐに計つき、おつるを右にかこひ左にへだて、已が艦を楯となし、漸く艀へのり移る。多門にしたがひし侍どもは、花車風流のものなれば、かゝる變事にはいひがひなく、禦ぎたゝかふ心もなく、杯盞、箱子、金椀、標行、唐笠、鍋、算なんど兵具調度の分ちなく、賊徒をふせぐ礫となす。其のうちにあやまつて金瓶をうちつけければ、壺くだけ包やぶれ、圓金四方に飛びちつて片々たる黄蝶園中にむらがるごとく、井出の山吹風をそふに似たり。かくて百兩にあまれる小金立田がのりたる艀のうちに落ちとゞまりければ、草賊纜をとつて立田が舟を引戻す。立田こゝろえ刀をふつて纜を切り拂へば、はずみをうつて舟は遙かにたゞよひいづる。折しも俄に風はげしく、雨さへしとゝと降りいで、狂浪逆波のさかまく事、白馬の脊をたつる如し。立田は圓通菩薩を心のうちに念じ、櫓をはやめておしゆけども、さきにうけたる矢疵より汐風しみと侵り、やゝもすればめくるめき、氣もきえぐ\になりゆきて、舟底にたふれしが、又心をとりなほし目覺めて泣きさるお鶴を抱き、此の時始めて已が體をかへり見れば、身に征矢をおびたるは秋野の尾花に異ならず。かゝる痛手にては姫君をもりたつる事も叶ふまじ」と、艫にどうとたふれ臥す。舟はさかまく荒浪に浮きつ沈みつ三町ばかり流れけり。立田なけきの中に、

ほどはなれたる艜船を見あたり、くるしき聲をはりあげて、「緣故は心おちゐて後きこえ侍らん、憐れとおぼし命を助けたび給へ。」と、涙にむせてよばひければ、彼の舟の中より、便舟なしたる一個の旅僧あらはれいで、立田が乘りたる艀へひらつけに漕ぎよせさせ、禪杖をなげかけければ、立田禪杖にとり縋り、漸く艜舟へはひあがりけり。

阿波之鳴門四之巻 終

阿波之鳴門　五之巻

柳亭種彦子著
友人玉家癡夫校

十郎兵衛弓子を賺きて八栗山に伴ふ
並 淺茅薄命を恨みて女僧となる事

是れは扨おき、阿波の十郎兵衛は畠山多門を討ちとめ、いひがひなき家臣郎等をば、或は海へ沈けこみ、或は切り倒し、みな殺しとなして、財寶のこりなく盗みとり、みなそれ〴〵にわかちあたへ、絶入なしたる弓子を誘いて、おのれが隱家、阿波國阿波郡岩倉にかへり、手下にいひつけさま〴〵介抱なしければ、弓子も漸く息いで、正氣つきてあたりをみるに、見もなれぬ賤が家に、鬼のごとき大男左右にゐながれ、あるは猿の皮にて覆面したるもあり、あるはくるま太刀を佩び、あるは油明松鐵鎖を腰につけ、又は脊に龍をいれずみし、額に三日月のごとき刀疵をうけたるもありて、あたりのおそろしさに、又絶えいりもすべきありさまなり。上座になほりゐたる阿波の十郎兵衛、お弓にむかつていひけるは、いかに女性、さのみ恐れ給ひそ、我々は漁して活計となす者なれば、みだりに非道

不義を行ふ盗賊にはあらじ、御身前夜阿波の鳴門にて海賊に出であひ、あやまつて我が漁船へ乗あいりたるゆゑ、此の隠家へつれかへりしなり。そもいかなる人の妻にや」など問ひければ、弓子すこし心おちゐて、まづ人々の介抱を謝し、さていひけるは、「妾は此の阿波の國司畠山國清の弟、同名多門といへるものゝ妻にて侍るが、此の度本國へくだる海路にて盗賊に出であひ、かく難儀に及び侍ふなり。此の上の御情けには、妾を阿波國徳島へおくりてたべ、彼の地にいたらば、夫の安否も聞ゆべし」ともの語れば、十郎兵衛きくごとに打驚き、「我が合壁に住みし弓子、畠山多門といへる貴家の室となりたりと、津の國にて街説に聞きたるが、扨は我がこゝろをかけし女なりけるか」と、目をとゞめて見るに、與次右衛門が娘弓子にまがふべうもなければ、心のそこに喜びけり。弓子草賊におかひ、さるにても此の地はなにと申す所なりや」と問ひければ、兵六答へて、「此の地は阿波國」といひさすを、十郎兵衛目をもて知らしめ、なかばより物語をひきとり、「此の地は日向國宮崎郡川口村といふ所なれば、徳島へはほどとほし。されど御身をば不日に送りやるべし」と、目にいふるまゝ、こなたばかり、手下に命じて弓子をいたはらせければ、兵六は更に不審はれざりけり。十郎兵衛手島の三太をひそかなる處に招きて申しけるは、「我昨夜鳴門において討ちとめたる武人は、畠山多門といへる者なるよし、彼の女が物がたりにて聞きたるが、彼の畠山多門といへるは、當阿波の國司國清が舎弟な

れば、當國に住居せんには、我々が僉議もきびしかるべし。幸ひ汝が故里讃岐國三木郡は、山たかく谷ふかく、身を隱さんには屈竟のところなり。髙山の樓船を切りとりて、そくばくの金を得たれば、ひとまづ彼の地に立ちこえ、身をやすうおくるべし」といひければ、三太も宜なりとうけがひ、次の日雜具をそこ／＼とりかたづけ、お弓には徳島へおくりかへすといひあざむき、竹籠にたすけのせ、草賊にかかせ、三木郡八栗山に到りけり。弓子は徳島にいたるとのみおもひしに、あらぬ山路の白晝につれゆき、夫れより何地へもおくりゆくけはひも見えざれば、心のそこに訝ばす、おそる／＼十郎兵衛に向つていひけるは、「日向國とやらんにてのたまひしは、妾をして徳島へおくりかへすときこえしが、さはなくてかかる山路に誘引ひ給ひしは、何なる由緒にや」と問ひければ、十郎兵衛むゝとうち笑ひ「いかに女、汝に見する一品あり」と、行李をひらきて、一ツのふくさ包をとりいだし、弓子が目さきへつきつくる。弓子は何の心もつかず、手にとりあけておしひらけば、中に木履のかたしと別に道のく紙の玉章あり。いぶかりつゝよみくだすに、

拾ひてはすても置かれじ白浪のよるてふあとの戀忘貝

とかいつけて我が手跡にまぎれなし。忽ち往年今市におくりたる木履なる事を思ひ出で、なみならず驚き、此の時初めて十郎兵衛を熟くみるに、はるかに年はたけたれども、今市にまぎれなし。こは何に

とせんと逃げいづれば、十郎兵衛由刀をぬきもちて、弓子が袖を疊にぬひつけ、柄を握つてうごかせず。やよ弓子、汝先年此の歌を我におくり、はづかしめしを覺えあるらめ、過日汝が口より多門が妻なりといひたるにて、とくお弓なりとは心づきしが、我が面を見ちがへたるを幸ひ、此の八栗山にいざなひたれば、にぐるとも、たはやすく女の足にて徳島へゆかん事思ひもよらず、今はなかく戀ひまさりしのみにもあらず、我が種姓を思ひがけなく聞きしより、白波の歌をもて恥辱を與へたるを知り、むねんさやる方なく、再び汝にあひ見し上は、心の儘に横陳して、我が煩惱の胸さへはるれば、それを遺恨の心やりとなし、徳島へ送りかへさんとは、佛に等しき心ならずや。今いふ如き恨みはあれども、其の艶なる顔色に何とて刃のあてらるべき。我を惡者となな言ひそ、汝こそ却つて命たゞある賊なり。」と、後より抱きつかんとなす。お弓「あなやっ」と叫んで身をふるはし、總身の力を出して十郎兵衛をのけざまに突きたふし、由刀おつとりあげ、自害せんとなしければ、十郎兵衛飛びあがつて、手にもつ刀をふみ落し、帶をもつて椽先のはしらにくゝりあげ、兵六喜佐なんどいふ手下にいひつけ、一室の入口に格子をうちつけ、其の内に弓子をこめおき、草賊を番人となし、晝夜おこたりなくつけおきければ、弓子は死ぬことすら心にまかせず、二日三日は食をたちて、饑死しなんと思ひしが、此のところは讃岐國三木郡といふ所にて、徳島へは、さまで遠からぬ由を、草賊が語るを聞き、

又心をとりなほし、いかにもして草賊等に、心をゆるさせ此の所をにげのびんと、さまざま計をめぐらしけれど、十郎兵衛は天性奸佞なる男なれば、いよいよ油断はなさざりけり。嗚呼いたましいかなや。弓子は一室におしこめられ、夫子の生死をきかまく思ふのみにて、死にもやらず活きもやらず、憂き命を辛うじて存へ、いたづらに月日をおくりけり。是れよりは別にしるしとどむべき物語なし。

因にいふ、弓子絶入なして四時をすぎ、忽然として息いで、常の心地となりたるは、畠山の寶物のうちに蘇生丹といへる仙藥ありしを、十郎兵衛盗み來り、此の藥を口の中に灌ぎいれし故なり。十郎兵衛大いに喜び、彼の仙藥をば手下の者にさへふかくつゝみ、衣櫥の抽斗に納め、かたく錠鑰をさしおきたりとぞ。是れは扨おき、鳴門においてうちもらされし、多門が家來一兩人艀にて津の國に乘り歸り、畠山國清が舘にいたり、多門が鳴門のおきにて海賊にいであひ、船中のこりなく討死の趣を告げければ、國清は只一人の舍弟を、ゆゑもなく失ひ、怒氣心頭よりおこり、たゞちに阿波國に入たはせて、海賊の姓名を聞ひきはむるに、阿波の十郎兵衛といへる者なるよしを聞き出し、十郎兵衛が隱家を、捕人をもつてとりかこみしが、はや何地へか逃げうせければ、國清が計策にて屈強の兵士を賈船にかくし、西海を乘りめぐれど、元來船路に委しき海賊なれば、容易くはとらへ難く見えにけり。淺茅は多門弓子が非命の死をつたへ聞き、雨しづくと泣きて、死にもしなんと思へど、次郎九郎

が心をもちゐて介抱なすも、もかひ〴〵となし、重ね〳〵の薄命をうらみ、髪をおろして尼となり、住吉郡の海べん勝間といふ所に、かたばかりの庵を結び、日々あはれ高山をうちながめ、孫子をも村なしたるはあゆかたにやと、これすら涙もよほすたねとなりぬ。次郎九郎が孝心はなか〳〵に倍し、束のまも孝養をおこたらず、なにくれと心をもちゐるけり。

お弓我が子としらで順禮を殺す
並 軍太十郎兵衞が家に宿る事

さてもお弓は十郎兵衞にとらへられ、塵ふかき空屋にこめおかれ、夫子のゆくへを聞かまく思ひ、なかばは偽心となりて、夢のまに六年をおくりけれど、十郎兵衞は心なほくうちすておきけり。清く心さだまりて、お弓熟思ふやう、「所詮かくてあらんには、百年をふるとても、夫子にあひ見ん事思ひもよらず、一度阿波國に歸り、主君にまみえて後、自害して分説せんと心を定め、しだいに心とけしさまにもてなし、火坑に身を投げ、荊棘をいだくくるしみをおしかくし、心にそまぬ下紐をも解くのほどになりそめて、十郎兵衞に身をまかせければ、十郎兵衞大いによろこび、さながら我が妻がいにもてなせども、才智ふかき性なれば、かくなして逃げいでんも知るべからずと、またかく心をゆるさざれば、お弓もせんすべなくて、又いたづらに一年をおくりける。十郎兵衞も今はさ

いかふ事なしとや思ひけん、母子に心を残さずつけ、手下を引きつれ何地へか出でさりしこそ生憎なれば、母子はいたくよろこび、道に迷ひし四國巡路の修行者を家にとゞめ、もし然るべき者もあらば、身の上を委しく語り、賂しるべとなして逃げ出でんと謀りしが、修行者は老いたる女、愚かなる土民にて、物の用にたつべきとも覺えねば、こゝらすも日を重ね、七月も半ばたちて、なき魂まつる夜とはなりにき。此の夜もお弓は一人家にありて、心ごかりの香華を佛前へそなへ、暁きより起きいでゝ、谷川へおりたち閼伽の水汲まんとて、手もたゆげにたてかへりをりしも、讀經のきこえたえて、まだ春あかぬ鶯の、谷とはならぬ谷かげに、うた謡ふ聲ぞきこえける。

ふるさとをはるばるこゝに紀三井寺花のみやこも近くなるらん

ふだらくや岸うつ浪は三熊野のなちの御山にひゞく瀧つせ

とうたひつゝ、さしも險しき山路をたどる／＼よぢのぼり、お弓が門邊にたちとゞまり、二順禮に御報謝こと、いふも優しき姿なり。一とせ報謝進らせんとて、しらげの米を盆にもり、さしいだしつゝ熟見るに、十にはたらはず九ツには、遙か背丈も長びし女子、手に竹の小笠と柄杓をもち、いたく道につかれしと見え、おさなき足も荊棘にさかれて血にまみれ、あまりの事のいたはしさに一まづこなたへあがりて憩ひ給へ、其の手桶に水もあり、いざ足そゝぎて參らせん。朝の雨にて庭先はなめらかに

でありきにくし。妾が手をしかと捕へ、ころびて怪我はし給ふな」と直に我が子をいたはる如く、手づから順禮の足を洗ぎ、怪しき座鋪にともなひて、「茶一ッ參らせん」と、茶椀に掌をつけ、をさなき者にはあつすぎしとや思ひけん。茶をふきさまして側によれば、それなる順禮娘には今年何歳になり給ふ」と問ひければ、兩の掌をさし出し、大指を一ッをりて見するは、九歳といへるをしめすなるべし。お弓うちうなづき、「さきより笈摺小袋を見れば、同行二人としるしあり、とゝさまにやはゝさまにや」とねもごろにいふに、小女もいとうれしげに、「いえ／＼、同行は父さま母さまにも侍らず、緣故ありてとゝさまも母さまも、御顔もおぼえず、御名もしらず、たゞ庶叔さまの世話になりしが、往年よりをぢさまは脚氣とやらにて足たたず、漸う近頃こゝろよき故、妾をつれてゐやことやらいふ遠いところへゆき侍るが、さきに草鞋買ふうち、つい庶叔さまを見うしなひたり。おしつけ此の道へたづねてまゐり候まで、姉さまのところにおきてたべ、よその子は爹々さま母さまに、ほしき物ねだるを見れば、何として妾には雙親のなき事かと、旦も夕も泣きあかし、伯父さまの病ひ給ふうちは、よその子のやうにわるさもせず、およばぬ手わざに藥を煎じ、全快をよろこびて、難波とやらいふ大母さまの許へ、おくりやるとの言葉をたのみに、苦しい山坂こゆるうち、伯父さまをさへ見はぐりて、この身はなにとなるべき」と、門をのぞきつ座に直り、案じわづらひ涙ぐむ。お弓小女が頭うちなで、

「お、理なり〳〵、なに此の道は一筋なれば、おしつけ伯父様にもそもじを尋ねて見えらるべき、なにぞたべたき物あらば、此の姑に心おきなういひ給へ。」と、小女を膝に抱きあげ、心をつけていたはれば、順禮はなほうち泣きて、「其の様になさけ深き事のたまへば、お前がどうかほんのはゝさまの様に思はれて、別れてゆくが妾は悲しい。もう伯父さまもいりませぬ、何卒此の家におきてたべ、おまへの側にゐる事なら、飯たいてなりと、水汲んでなりと、妾は厭ひは致しませぬ。」と、わつとばかりに泣きいだし、お弓にひしといだきつく。道理と思ふ心より、お弓もわつと泣かんとせしが、漸うに涙を隠し、「此の子とした事が、無益きことをいひだして、妾までもらひ泣きに、よしなき涙をこぼしたり。父母の名も顔もしらじとは、捨子とやらんも、世になきためしにもあらず。さぞたよりなうおぼさんに、妾も側におきたけれど、妾も。」と、いひさして四壁をかへりみ、「一日二日のうちには、此の所を立ちのく者なれば、そなたを此の家におきがたし。」と、あたりの手箱ひきよせて、小金一兩とりいだし、「是れをそなたに與へんほどに、人里に出でてのち、紅き絹買うて髪ゆやれ、但しは又花のつきたる簪買やるか、どうやら妾もほしくなりし。」と、賺しつすかしつ餘念なし。順禮は頭うちふり、「いえ〳〵金といふ物は、小判とやらを、こゝに數多もつてをります。」と、首にかけたる財布をとりて、お弓に渡せば、お弓更に實となさず、何心なくひらき見るに、二百兩にあまる小金あり。う

もおどろきて小女にかへし、縁故あらんと心に推し、此の小判といふ物をもつてあるを、盗賊が知る其の時は、そなたの難儀となるほどに、人にはな見せ給ふな、たとひ此の姿が出すといふとも、貸すものにあらずといひきかし、お弓は縁にたちいでて、日もはや申下刻とおぼゆるに、そなたの同行衆はもし[illegible]にかゝりはし給はじや、そなたの道に見うしなひ、やすき心もあらまじと、またりゐ見廻し、幸ひなるかな、此の笠を門の柱にかけおかば、屈強の枝折なりと、楓葉を紙もて刺みてぬひつけたる竹の小笠を門にかけ、なにくれと介抱なせば、連れに別れし其の憂さも子供心にうちわすれ、お弓が膝を枕として、旅寝の夢をぞむすびける。お弓は一人うち笑ひ、あさきものほど罪なきものはあらじ、今あひたる童ば、實の母と思ふやらん、膝にてよくらにうたゝねし、風ばひきてたもるなと、一間の内に蚊帳をたれ、目覺めぬ樣に小女を抱き、そひねなすこそ憐れなり。はやくれぬとや告げ渡る、遠寺の鐘の寥々と、響きをさそふ山風に、鉦鼓の聲もすみわたり、あくれる谷をあとにせて、のきくらしたる修行者の、庵の外面にたちどまり、夕陽幽谷に落ち野鳥林中にかへり、ゆふつゞ星のかげ見えて、くるゝもはやき秋の日の、此の所をゆきすぎなば、いつ人里にいでんとも計り難し、惟夫狩人の住舎ならんなににまれ、一夜の宿りをこうてみんと、網戸を喧ひしかば、のよしいひいるれば、お弓は小女の同行ならんと、庭におりたち、柴折戸おしひらけば、さにはあら

で旦那國の修行者なり。いぶせきだにいと思ひ給はじない、一夜の御宿まゐらせん。まづこなたへきたり給へ」と家宅にいざなひて、煙茶のもてなしこまやかなり。修行者もうれしげに一禮のべて、草鞋をとり足あらひて、さてくさぐさの物語なす間に、彼の修行者も越津の國の產まれなるよしをいひ出でければ、お萬はふかきとなつかしくて、もし此の所をしりてやいゐる、たよりにもなりなんと、なにくれと言ひなしければ、修行者又いへりけるは「我そのかみ昔は當國主の舍弟多門といへる武士の家臣なりしが、緣故有りて出國なし、國々武者修行を心ざしたれど、別におそろしき事もなし」なんどほこりかにいふ面を、うちおどろきて熟見れば、何とやらん見覺えありしこは彼の桃井軍太なりけると知るべからずことゝ心にとめつゝ、かくしおきたる中刀を箪笥のなかよりとり出し、修行者の側にまはり、「もし修行者の姓名は桃井軍太とはいひ給はじや」と問ふに、修行者うちおどろき「いかにも我は軍太なり、我が姓名をしられる女性、いかなる人にておはすらん」とふりかへれば、お萬中刀ぬきはなち、親の仇ときりかゝる。軍太身を閃かしてとびしさり「こはたわけな女性、我非義非道をおこなひて、みだりに人を殺さゞれば、かたきといはるゝおぼえなし。もしくは人たがへさるゝものにや」といふに、お萬聲あらゝげ「おぼえなしとは、卑怯しごく、汝往年、當の國十三ノ渡にて殺害なしたる、奥次右衛門が娘なるぞ。はや十年にもなれば見わすれもしつらん。汝が口よりは知らずも、桃井軍太と姓名をなのりし

は、妾に親の仇を討つこと天道のひきあはせ、いざたちあがつて勝負なせ。」とつめよれば、権太些とは
けまし、「数へ見れば十餘年のむかし、津の國において與次右衛門をうつたるは此の権太なり。」といふ
に、さてこそ。」とお弓すかさず切りつくる。閃と右へ身をさけて、「またれよ女性、汝が父與次右衛門
は我より百兩の黄金を請けとり、汝を多門君へおくりたてまつらず、彼の黄金もかへさざれば、君
への申譯として討ちはてたる與次右衛門は、どこも直さぬ盗賊なり。征伐なしたる盗人の親類血類、
敵なりといはんには、數にかぎりもあるべからず。強ち我を討ちえんとなら、所詮川なき雲水の身、
いざ討ち殺せ。」と兩手をくみて座になほる。弓子涙をはら〳〵と落し、「父與次右衛門殿に限り、心に
くもりなき事は、鏡にかけて明らかなれど、何を證據にいひとくべき、いかゞはせん。」とたゆたひし
か、ふと心づき権太に向ひ、「妾が身の上より父に盗賊の悪名おほせ、討ち得たりとも本意ならず。妾
今百兩の黄金をかへしあたへんが、彼の金をもて父の悪名を雪ぎ、その上にて親の仇と名のりあひ
尋常に勝負なすべきや。」といひければ、権太私かに思ふは、かゝる白屋に百兩といへる黄金のあらん
道理もなく、よしまた黄金あるにもせよ、女の小腕なにほどの事あらん、百兩の黄金をうばひ、返
討になさんには、大いなる仕合なりと、心に喜び、「いかにも百兩の黄金さへ我にかへさんには、親
の敵と名のりもしなん。」とて、「金を與ふべし。」といひければ、お弓大いに喜び、権太が方に眼をくば

り、一間のうちに他愛なく、ねぶりゐたる襁褓の小女が黄金をとり、音なき様に忍びいでしが、あまりに心せきたちて、首にかけたる財布の紐をはづさざれば、小女は紐にてひき起され、わつといひて泣きいだし、「これ姑さま、さきには金と言ふものは、他人にもかさぬものとのたまひて、妾をねせつけ、盗み給ふか悲しや」と、紐をたぐりてにじりより、小さき手にて財布を握り、はなさぬけしき見えざれば、お由はいとゞ心いられ、「今危急の事有つて百両の黄金なければ、姑は活きてはゐられぬ程に、少時の内貸してたも、是れ手をあはせをがむぞ」と、思はず聲をかけけるが、軍太の方にも聞えんと心づきて、聲をひそめ「なさけと思ひて貸してたもこと」と、さまざまといひ和むれども、小女は更に聞きいれず、財布を持つて逃げ出づれば、引留めんとする財布の紐、後に隠せし白刃にひき觸はれて、ふつと切れ小女は後居に撞とたふれ、小判四方にとびちりけり。小女は白刃を見るよりも「あれ姑さまは妾を殺し給ふに、他人ござてはやく妾をたすけてたべ」と、聲の限りによばはれば、お弓は軍太に知らせじと、袖をもて小女が口をおさふれば、なほも聲をあげ泣かんとせしが、まだ九ツなる女子の、氣をせなうちに息つまり、撞とばかりに倒れふす。うち驚きて抱きおこし、心をつけて介抱なせど、はや息絶えて死にうせければ、「こは何とせん。」と、彼方もきうかひ此方もきうかひ、身をわけまくもおもはへて、悲嘆の涙にくれけるが、一親の仇にはかへられじ、首尾よく軍太をうちおほせ、此の

住みもてあとねもごろにとむらひけん、許させ給へ」と、心のうちに唱名し、また散る小判を拾ひあつめ、重太が前に投げやれば、重太は金を数へ見て懐中にしかと納め、篋の内より刀とりいで、かへり討になさんものと、お弓をめがけ切りかゝる。のぞむところとわたりあひ、半時ばかり闘ひしが、弓子は立田にまなび得て、剣法を熟練なせし上なれば、重太はお弓に切りたてられ、かなはじとや思ひけん、おもてをそむけて逃げいづれば、弓子つゞいておひかけいで、肩先深く切りこみて、返す刀に首うち落し、喜び勇むそのをりしも、六十ばかりの旅の僧、門の柱にかけおきたる、首の小笠を引かけにすかし見て、「扨は孫鶴子は此の家の内に宿りしならん。夕暮より見失ひ、心も心ならざりしが、よろこばしや」と二人ごゑ、編戸をひらきて内にいり、此の光景を見るよりも、大いにおどろき、小女が亡骸抱きあげ、「こゝに孫は何人が殺せしぞ」と、狂気の如く泣きまどひ、忽ちお弓が重太をうちとめたるを見るよりも、「孫の仇も此の盗賊ならめ」と、落ちたる刀拾ひあげ、お弓を目がけて切りかかる。弓子忙はしく身をさけて、「やれまち給へ分説あり」といふ顔熟うちまもり、「女性には、お弓の方にて渡らせられずや」といふ。弓子おどろき何人なる事を知らず。旅僧内川を傍に投げすて、弓子が手をとりて上座になほし、はるかさがつて両手をつかへ、「御見わすれは宜なり、貧道は昔の侍女たりし立田が兄橘平なり。」といふに、弓子旅僧をつくぐ見れば、いかにも其の人なりければ、只

呆るゝばかりなり。橘平、お弓に向ひ、「君には鳴門の洋中にて入水なし給ひしと聞きたるが、いかにしてか此の所にかくれすみ給ひ、また何等由緒有つて孫にて候小女。軍太が亡骸を指さし、あれなる修行者と見ゆる男を殺害なし給ひしにと問ふに、弓子答へて「妾此の所に隠れ住むは、一席に盡しがたき物がたりあり。と、身に暗き事の有るなれば、頓に言ひもいでず。親の仇たる桃井軍太にめぐりあひ、あやまつて小女を殺したるまで、纔ながらにかたりければ、橘平も涙にくれ、「親の仇を討ち給はん爲とたれば、我が孫の五人三人命をおとし候とも、などか恨みたてまつらんや、實はわが孫にても侍らず。我往年四國遍路ところみさし、商船に便りをもとめ、阿波の鳴門を過るをりしも、小舟にのりたる女一人、二歳ばかりの女子をいだき、數ヶ所の矢疵にくるしむ有様、見捨ててすぎんも桑門の本意ならずと、禪杖を彼の小舟に投げかけひきよせければ、豈料らんや妹立田なり。我を見るより、さも嬉しげに涙をふくみ、只一言の言葉もかはさず、そのまゝ相果て候が、さるにても此の女子は、畠山家の御身よりならんも知るべからずと、商船の事なれば、直に津の國には歸りがたく、我がゆかりある土佐國高岡郡中嶋といふ所におもむき、なさけある家の軒にたち、乳をもらひてそだつるうち、往年より、我は脚氣とやらん病におかされ、足なへぎて立つことあたはず、人なして音信せんにも遍土といひ、戰國の刻なれば、おもひを空しく年をつみ、漸く病も癒えたるゆゑ、阿波國に

いたりしが、今は彼の地に畠山の御一族も住み給はねば、せんすべなう我が孫と偽りによび、順禮とすがたをやつさせ、此の所まで誘引ひしに、露の命のきえはてしも、みな宿世のやくそくならん。いかなる由緒にや、立田が乗りたる小舟の中に、二百兩に餘る小金あり。拾ひあつめて持ち返りしが、出所もたしかならざれば、かく貧苦にせまれども、一兩もつかひすてず、此の子に持たせおきたるは、我が一點の赤心と思ひし事も仇となり、此の金故に死にうせしは、いかなる前世の報いぞや」と、雨雫と泣きくどふ。お弓は過刻よりの物語、何とやらん胸にこたへ、「もし此の小女に守袋はなかりしや」と問ひければ、橘平答へて、「いかにも赤地の錦の守袋に、某年某月某日誕生の女子鶴子としるせし臍帯あり」ときくより、お弓は正體なく、「さては我が子か娘か」と亡骸を抱きあげ、身もうくばかり泣きさけぶ。橘平も打ちおどろき「扨は姫君にてありけるか、七年をへてめぐりあひ、親子の名乗もしたまはず、はかなきわかれとなりゆきし、御心ねのいたはしや」と、少時涙にくれてけり。

お弓はおつるが亡骸に、生けるがごとくくりごとして、「さきにそなたが此の弓を、實の母とおもひしとは、なしが知らせて言ひたるならん。あひたい見たいと憂き年月、こがれしかひも波の上に、きえなばかかる苦しみは、あるまじものを」といだきあぐる、亡骸の笈摺金具にかゝり、錠前さしたる衣櫃の抽斗、ひくにつれて開きければ、お弓は何の心もつかず、ふりかへり見る抽斗に、畠山の家系と、

蘇生丹と言へる仙藥あり。弓子なゝめならず喜び、鶴子が口に藥をとりてそゝぎ入るゝに、忽然として息いで、常のさまになりたるは、奇なりといふもあまりあり。鶴子橘平を見るよりも、うれしげにかけよれば、橘平もよろこびにたへず、弓子とも〴〵さきのあらましものがたれば、鶴子はお弓にいだきつき、「さては實の母さまか。」「娘にてありけるか。」と、互に手に手をとり交し、うれし淚にくれにけり。橘平不斗、「多門が十郎兵衞といふ海賊にうたれたる由、德島にて聞きたり。」と語りいでければ、お弓大いにおどろき、「努々知らざる事ながら、良人の敵に身を任せ、生きながらへて何かせん、そがゆゑ蘇生丹も此の家にありしは必定せり、死して良人にいひわけせん。」と、橘平鶴子には、「あとより妾は追ひつかんに、高松といふ所にてまちあはすべし。」と、云ひ賺きておとしやり、はるかに見やる後かげ、これが此のよの別れかと、思へば氣もきえ眼もくらみ、其の儘そこに泣きふせしが、かくてははてじと心をはげまし、「おのれ阿波の十郎兵衞、今におもひしらせん。」と、白刃の鋩口に銜へ、はるかの谷に眞逆さま、花の顏岩にくだき、微塵となりて死にうせしは、あはれはかなき身のはてなり。さても十郎兵衞は、八栗やまを立ちいで、直に阿波國にいたり、例のごとく船をうかめ、一日鳴門を過る賈船に込みいりしに、元來此の船は國淸が家臣をかくしおきたる官船なれば、おもひもかけず、手鉄の三太鹿越兵六をはじめ、手下のこりなくからめとられ、既に十郎兵衞もとらへら

れんとなしけるが、例のごとく海中へとびこみ、浪を潜りて時の間に十餘町をおよぎぬけ、辛うじて一艘の大船を見あたり、彼の船に乗り見れば、是れもおなじき海賊船なり。「西海の賊は我のみとおもひしに、別に海賊の首領あるは、是れ我々が大いなるさまたけなり。彼の首領さへ討ちすてなば、殘りし草賊等は何ほどの事あらん」と、心ふとくも思ひきはめ、此の船にたすけのせられしを一禮のぶるさまにもてなし、側ちかくすりより、刀をぬいて切つて懸る。かの賊も身ををどらして「心得たり。」とぬき合はせ、二合三合打ちあひければ、十郎兵衛聲を勵まし、「まづ待たれよ、貴客の佩刀に男龍の彫あり、我が劍に女龍の彫あり。其の刀は津の國長柄の里において盜みとり給ひしならん。」と問ひければ、彼の賊も刀をひき「我ちかごろ海賊となりしが、むかしはみやこ方の盜賊、小濱の次郎といふ者にて、往年長柄の里にて盜みとり、きれあぢよければ佩刀となす、いかにしてか汝是れを知れりや。」といふ。十郎兵衛懷中より、二五作が與へたる洗水帛の袈裟とり出し、小濱の次郎にみせければ、手にとりあげてうち驚き「是れこそ我が所持なせし洗水帛といふ織物なるが、往年長柄の里の大戸にこみいり、小女にたはむれ取落せしに、さては彼の大戸の血類なりけるか。」と言ふに、十郎兵衛涙をはら〳〵とながし、此の袈裟のぬしこそ、我が父なり。」と、祖父二五作が物がたりを、おち〳〵かたりいでければ、小濱の次郎大いにおどろき「扨はその夜我がたはぶれし手弱女に出生なせし男

なるや、こは思ひがけなき父子の對面なりける。」と、手をとりかはして喜びける。時にふしぎや、冷風俄に波上におこつて、お弓が怨鬼かげのごとくにあらはれ出で、眞帆十分にひきあげて、矢よりもはやき大船の、艫をとつてつきかへせば、狂浪逆波左右にわかり、忽然として十餘町を、艫の方につき戻し、さきに切りぬけたる畠山の官船まぢかくなれば、十郎兵衛大いに氣をいらめ、弓子が怨鬼に切りかゝる。弓子さらにおそれもやらず、白刃を口にひきくはへ、冷笑をなすと見えしが、見る〳〵白骨となつて波上の風にきえうせけり。畠山の官船は此の船めあてに漕ぎ來り、捕手の多勢海賊船へのり移れど、小濱の次郎十郎兵衛をはじめ、足なへぎて立つことあたはず、無念とは思へども、手をつかねて繩めを待つぞこゝちよし。畠山の家臣は力をも用ゐず、數多の賊をからめとり、大いに喜び津の國さして歸船なしけり。是れは扨おき、淺茅は津の國住吉郡の庵室にこもりゐて、後世のいとなみおこたりなかりしが、ある夜夢むらく、弓子此の世にありし姿にて、淺茅が枕邊にきたり、顏をもあげえず泣きゐたり。淺茅夢心にうちおどろき、こは亡魂のうかれまよひて、又もこのよに來りけるかと、只管念佛となへければ、弓子漸く顏うちあげ、十郎兵衛にとらへられし事より、橘平鶴子にめぐりあひし一伍一什を、おろ〳〵語りいで、重ねていひけるは、「明日は橘平鶴子を誘引ひて、此の庵室にきたるべし。まつた彼の阿波の十郎兵衛、小濱の次郎といふ兩賊を初め、あまたの盜賊、我怨鬼

となつて、國淸君の家臣に捕へさせければ、日あらずして此の津の國淺香山の麓、大和川原において刑罰におこなはれん。其の折娘鶴子に刑罪の太刀とりをさせ給はば、我が怨鬼が身につきそひ、鶴子に討たせ申すべし。夜あけて後海邊にいで、龍の彫りたる佩刀あるをもつて、正夢なることを知り給ひね。」と言ふかと思へば、猛然として夢さめけり。淺茅奇異の事に思ひ、次郎九郎に夢のあらまし物がたり、よゝとばかりに泣きふしけるが、かくては果てじと、海邊にいでそこゝとたづねめぐれど、それと思はれるものもなし。かかるをりしも、常におなれぬ大浪、裾をひたすばかりによせ来り、果して一腰の劒をうちあげけり。とりあげ見るに、髪ながやかにおひたる髑髏、白刃を啣へてありければ、是れなん弓子が髑髏なるべしと、いとゞなみだをもよほしけるをりしも橘平は鶴子をいざなひ、此の庵室にたづねきたりければ、淺茅はかけより鶴子をいだき、「これはゝなるぞ、よくも無事きたりし」と喜ぶに、橘平大いにおどろき、「僅か二歳の時わかれ給ひし鶴子君を、よくも見覺え給ふものかな。」と訝れば、淺茅は漸く涙をおさめ、「弓子が夢の告げをもつて、今日この庵室へ、兩人が来ることをはやくも知りしをはじめとして、白刃を髑髏の啣へてうちあげしまで、おちもなくかたりければ、橘平は涙にくれ、「さては八栗山にておひまつらせしが、この世にての御別れにてありけるか。」と、桃井軍太が修行者となりて来りしことより、蘇生丹といへる仙薬にて、再び鶴子の蘇生りし事、

高松といふ所にて弓子をまちあはせけれど、あまりに音信なきゆゑ、また八栗山にたちかへりしが、遂に行方も知れざりしことまで語りいで、四人ひとしくなげきけり。淺茅白刃をとりて、佛前におほし、一七日があひだ念佛おこたりなく唱へけるに、髑髏は雪霜の如く消えうせけれど、なほ白刃に齒の形は鮮やかに殘りければ、當國川邊郡今福の常光寺へをさめけり。彼の御寺に今もなほ、齒形の劍とてありとなん。かくて一日淺茅は孫鶴子を誘引ひて、畠山の舘に到り、國清にあひて一伍一什をものがたれば、國清なみならずおどろき、いかにも、汝がことばにたがはず、小濱の次郎、阿波の十郎兵衛をはじめ、あまたの海賊をとらへきて、ちかきほどに大和川原において、首をはねんとおもひしが、我がためにも姪たる鶴子、かく健かにて此の世にあれば、海賊阿波の十郎兵衛は、則ち父多門が敵なり。ことに弓子が怨鬼つきたれば、討ち得ざる事はよもあらじ。」と大いに喜び、其の當日になりければ、國清鶴子を誘いて、大和川原にたちいでけるに、鶴子は畏れる氣色もなく、明光たる劍を眞向にかざし、十郎兵衛が後に廻ると見えしが、首は前にぞ落ちにけり。次郎九郎も、側になみゐて、「鶴子一人にてはこゝろもとなし、我も共に太刀どりせん。」とたち上り、小濱の次郎をはじめ、あまた海賊の首を刎ねにける。日ごろ愚かなるには似氣なく、太刀のかまへ聲ざままで、何とやらん畠山多門に似たりければ、鶴子には弓子が怨鬼かげ身にそひ、次郎九郎には多門が靈の力をそふるな

りんと、人々大奇特の事におもひける。しかりしより次郎九郎も、桑門と姿をかへ、いよ〳〵孝行おこたりなく、愚直なる性なれば、後にはかへつて大徳のきこえありけりとなん。鶴子は同清が養女となり、吉見知武の舎弟同名知利といふものを聟となし、畠山の家いとめでたく、とみ栄えけりとなん語りつたへたるとなり。

阿波之鳴門五之巻　大尾

淺間嶽面影草紙

田種歌

苗代にかゝり、早苗をひきて篠簀にたふ、禾擔を聞いて荷ひつゝ、田づらに行きて配り渡す、早少女の受取りて植うる田歌ぞ面白き。中略。歌は國により、言葉は所によるとかや。近江の國風に、「あは降るともなよいぞ／＼、燕笠もなよいぞ／＼、君にだに逢ふといふならばいぞ／＼、手にとる早苗も捨てて行かましいぞ／＼、穗に穗重なれいぞ／＼、日出たし／＼千歳樂や萬歳樂」とうたひて、田は道わたしよろこぶとかや。丹波國の風の歌に、「春のころより我が閨に、通ふ殿子のあれどなよ、人に忍べば隱し、隱して語らぬよな。中略。」日は照りに照らして、暑さに堪へがたき、蛭といふ蟲の田の中にありて、人の足にとりつき、血をすひくらふ。そのかたち覆盆子のごとく、中略。このくるしみの中よりも面白き歌うたふことと、籠の鳥の色音おもしろくさへづるに譬ふべし。

此の田植歌は、淨瑠璃作者の祖小野於通が作とて、洛東某寺に藏する所なり。淨瑠璃にもとづき此の物語を書けるより、思ひ出で、錄して序とはなしぬ。

于時文化五戊辰年夏六月　東都　柳亭種彦

此ノ書ハ淨瑠璃本ヲ飜案シ、更ニ一點ノ實ナシトイヘドモ、唯善ナルハ榮エ、惡ナルハ亡ブルノ天理ヲ洩ラサズ。サレバ書ヲ披クノ兒女、其ノ善ナルヲ好シ、惡ナルヲ惡マバ、勸善懲惡ノ素意、空言ノ中ニコモルベシ。

維時文化五年戊辰夏六月、一二ノ卷書果シ、同冬十月草稿完クヲハル

柳亭主人種彦誌

事のはじめ

淀の邊は歌にも詠み、古き書にも見えぬれど、古より船には便りよき所なりけん。むかしく丹波國氷上郡柏原といふ所に、木の瀬といふ鏡師あり。津の國より都の方へ行くべきことありければ、四歳になる字の葉と言ふ娘を將て、まづ津の國へ赴き、なすべき事畢てて、いざや京へ行かんと、淀の船に乘りけり。爰に年の頃は四十にすぎ、五十に傾きたる男、六歳許りと四歳ばかりの娘を連れ、木の瀬よりは先に此の船に乘り居たるが、彼の四歳許りの娘は、字の葉と姿形も唯同じ樣なり。木の瀬は彼の男の側にありて、さまぐの物語なす間に、馴るゝも速きをさなひどもの打向ひ、手に絲をかけて綾取をなし、餘念なく遊び居ければ、こは思ひかけずをさあひの友だちを得たりと、斜ならずよろこびぬ。此の頃又希有の愚者あり、其の扮裝いと異樣なり。まづ四尺八寸もあるべき刀の、鐺は八寸ばかり銀にてはぎつぎ、柄は一尺八寸に造り、細繩にて提げたるを佩び、或は編笠をかぶり、或は黑革の脚絆をはき、又は熊手鉞をかつぎ、湯帷衣の肩のあたりへ、劍と櫻と舟さす械を染出したるは、劍花械といふ隱語なるべし。斯く異類異形の光景にて、堺大小路天滿を始めとして、人だち繁き所を擇び、喧嘩買はうく」とよびありき、衣裳兩腰など物數寄に拵へたる人を見ては、猥り

に空賞をなし、又は悪口などいひて、機を起てさせんとさまざまになぶりあなどり、別に人なきが如く振舞へども、さばかりの狼藉ものなれば、誰ありて相手になるべき者もなく、茨組と異名なし、道を譲りて通しけり。彼の悪漢者ども此の舟に乗り居て、「酒くらはずや牛蒡くらへ」と賣り來るを、錢をも出さず奪ひとり、「喰らへといふ故くらふなり」と、腹ふくるゝまで打ちくらひ、果ては同士喧嘩をし出し、拳をもつて打ちあひ、遂に刀を抜くよと見えしが、一箇の悪漢を茶臼切にぞきつたりける。かゝりしかば乗合の男女周章ふためき、歩みの板をはね渡し、東西に逃去りぬ。木の瀬も大きに狼狽へ惑ひ、行燈はうち消しつ、夕月さへ雲に隠れて、墨を流せしが如き暗の夜なれば、綾を取りて遊び居たる、彼の男の娘を宇の葉とおもひ、小脇にいだきて走り去る。彼の男は宇の葉を己が娘とこゝろえ、一室にしかと抱きつけ、こと背におひ、姉娘の手をひきて、是れも又逃げ去りぬ。

此の物語は何某なる僧、此の船に乗り居て、旅日記のうちに留め置きしを、さる方より索め出し、後の物語に符合なせば、書い誌して發端とはなしぬ。

柳亭主人

淺間嶽面影草紙目錄

卷之一

第一　淺間の後室遠山尼袖の渡の花遊覽

第二　一齋末期に家事の奥儀を傳ふ

卷之二

第三　忘貝寄居蟲修行者が物語を聞きて羽黒山に赴く

第四　辛崎の社にて巴之丞初めて瞿麥に逢ふ

第五　星影土右衛門幻術を以て巴之丞が矢を奄る

卷之三

第六　忘貝寄居蟲に代りて花街に身を賣る

第七　月夜に瞿麥時鳥を迎へて恥辱を與ふ

第八　巴之丞再度京都に旅だつ

淺間嶽面影草紙　一之巻

編者　柳亭種彦

第一　淺間の後室遠山尼袖の渡の花遊覧

説話京都將軍義滿公と申すは、尊氏の三男義詮が長子なり。貞治六丁未年四月二十六日、義詮薨逝ありければ、（寶篋院と號す、嫡乃正年二十二）甫未だ幼なく坐すを將軍とあふぎ、管領職細川武藏守頼之輔佐し奉り巍々として忠心を盡し、邪曲奸佞の臣を遠ざけ、敎因といへる南都の側に住む遁世者を招きて、御學問師にまゐらせ、日を逐つて將軍賢々しくなり給ひければ、萬民怖れ謹むこと故將軍に超え、遂に西國の菊池を退治し、攝州河州の殘黨をたひらげ、武威四夷をてらし、四海を掌に握れども、政務に親疎のわたくしなく、春風春雨の庶物をうるほすに似たりと、司馬温公が言葉も、かかる君をさしてやいふなるべく、貴賤高枕にねぶる御代とはなりぬ。此のころ淺間巴之丞良治といふ者あり。父は淺間由利之進良久とて、往年將軍義滿公菊池征伐の刻、軍功數度に及び、陸奥にて五千貫の知行

を給ひけるが、程もあらず死去なしけり。巴之丞が歎きいはん方なく、同じ道にも赴くべきこゝちなりしが、父良久が武功によりて彼の五千貫の知行を巴之丞に給ひければ、君恩の辱きと、母遠山尼が健かなるとを力として、陸奥國牡鹿郡眞野莊につうり住みぬ。此の眞野莊といへるは、萬葉集第三の卷に、笠女郎が歌に「みちのくのまのの茅原遠けれど俤にして見ゆといふものを」此の歌新千載集にも見ゆ。と詠みたる名所にて、元亨、正中のあひだは、後醍醐天皇八の皇子、義仁親王の住ませたまひし舊跡なれば、昔忍ばしく、金銀珠玉を鏤めたる館を造り、榮華なにかにつけて、不足なくあかし暮しけり。

かくて永和三年の事なりしが、淺間家の祖たる源師房、三百年の遠忌に當りしかば、同郡石の卷牧山の長福寺にて法養あり。當日は淺間の後室遠山尼參詣なし給ひぬ。そも〳〵此の遠山尼と申すは、近藤平治兵衞盛正が娘にて、十四歳のとき良久に嫁し、十六歳にて巴之丞をまうけぬれば、未だ年は三十ばかりと見え、黑髮は束ねし儘にて切りはらひ、色ある袿にいや黑き袈裟かけたるは、實にこのよの人とも思はれず、侍女左右をかこみ、靜やかに御寺に詣で給ひしが、頃しも春三月の事なれば、北上川袖のわたり櫻さき亂れけるを、あだに見過さんも本意なく、日の本の風俗にて、魚をもて祭るとかいふ遠忌なるに、まいて佛事果てて後は、櫻狩り暮しぬとも深き罪もあるまじと、未の上刻許りに長福寺を立ち去でつゝ、彼方此方を逍遙なせば、水は淺く流れて淸く、山は低く連なつて綠なり。欄

漫たる花の梢は、羅綺を刻むかとおどろかれ、渺々たる海水は、瑠璃を敷けりともいひつべし。近く住吉の神殿いよやかにとゝのひ、遠く金華の奇峯霞のうちにあらはれ、眺望皆に及べる所、歌人思ひを勞し、騷人筆を惱まさぬはなし。やゝ時うつれば、程なく開きし櫻のもとに幕うちまはし、破子小竹筒とり出でて、酒もやゝたけなはならんとなす折、侍女杜鵑花というて、琴ひきの上手を呼び給ひ、彼を琴の役と定め、須崎角彌とて未だ丫角なる門子に、鼓弓をすらせて合調なさしめ、大きやかなる女童の手ぶりよきを、二人まで選びて白拍子に打扮たせ憂世忘れといふ今樣を舞ひ奏でければ、頭には翠翹金雀玉の搔頭あり。羅綺のうすもの白粉とまがひ、丹青暐曄といろどり、裾翻つて蘭麝を散らし、鶯の囀る如き聲して「まづ春は花のもと、夏は涼しき川ぞひに、夜よし月よし秋たちて、雪のあさけのなよ竹に、とまる雀のちよとなく、憂世忘れておもしろや、うき世忘れておもしろや」と唄ひければ、花見んと欲して、却つて花にや羨まれなんと、聞くもえならぬ調べに屬耳け、見もなれぬ舞ひぶりに眼かれせずうちまもり、一座鳴りをひそめて居たりけり。かくて日も西山に傾き今樣もはて、角彌杜鵑花は幕の外にすべり出でつ。杯少時めぐりて後、星影土右衞門といへる家老後室に向ひ、はや御歸館を催し申すべし。」と、御前を立ちけるが、白紙にて封じたる、書に挾む柴折のかたちしたるものを、袂より取落しぬ。遠山尼何心なく披き給へば、幾多の文字あり。彼は鬅き

男上のみ思ひしに、さはなくて花に對せし詩歌にや、書い記せしならんと讀み給へば、土右衛門より侍女さつきに贈れる艶書なり。去る頃より數多く玉章を寄せぬれど、ふつに答へなき趣にて、人知らぬ袖は涙に朽ちなんと、阿武隈川の埋木にたとへ、空しく門に待ちあかしぬるは、立ちくされたる錦木に比し、狹布の細布胸あはずとも、一夜の情かけてよと、強ちに掻口說きたる消息なれば、わが身の上にはあらねど、嬉は嬉きのはしなくも、人や見咎めなんと懷中に深く納め、土右衛門が日黑みたる顔して、[illegible]きさつきを戀慕ふは、山鴉とかいふ鳥の、此の花の枝を[illegible]とおすに等しかるべしと、心の底に笑ひこしつ、家の束ねともなるべき身をもて、[illegible]かはしき行狀を[illegible]ひもしつ、衣紋かいつくろひ、靜かに歩を徙し給ふをり、土右衛門が聲して、「不義の曲者一寸も動くまじ、君に告げ奉りて絞首を刎ねんこそなれど、いらなくも呼びたてて、角彌さつきが髻をつかんで後室の御前にひき据うれば、二人が面は夕映の、花よりもなほ紅にて、鰐の脣にのる思ひしつ、さし俯向きて言葉なし。土右衛門かさねていふ、「此の兩人過刻に琴鼓弓を合奏なすなり、眉去り眼來つて、稍情意相通するの面持、心得ずと思ひ侍ひしに、案に違はず御供乘物の裏にて、潛かに相語らふを某とくと見極めぬ。いかが計らひ申すべし」と、息まきていひければ、遠山尼打聞き給ひ、「浮世を捨てたる身にて、男女の情を述べんは、佛の御前におそれあれども、戀に三の差別あり、一は女の方よりかき口說き、一は男の方

より云ひ寄り、一は互に思ひそむる、是れを相愛といふ。譬へば落花心ありて、流水に氣色をそふれば、流水又情あり、落花を浮めて春の餘波を惜しむ、問ふべく落花流水のおもむきとなるや、流水落花のおもむきとなるや。されば互にいひ出づるとしもなく、深き中らひとなる。是れ三の別ちなり。其がうち女のかたより云ひ寄るはまれにて、男のかたより強ちにかき口說き、近くは日本の神、遠くは二世の佛を誓ひにたて、あるは文して云ひ寄り、あるは言葉をとゞめ、よしなき義理に絡まれて、女の心弱きより、思はぬ男に逢ひ見る事なきにあらず、若し此の兩人も今云ふ如くならんには、角彌にのみ咎ありて、さつきには深き罪もなし、夫れをして同罪に行ふは、縱ひ法にもせよ僻事なり、いよいよ角彌が方より云ひ出でしにきはまらば、角彌をば首を刎ね、侍女さつきは其方に預けつかはすべし」と宣へば、土右衛門大きに喜び「やよ角彌、汝が方より侍女さつきに云ひ寄り、若し承引なきに於ては、命をたつべしなんど搔口說きしならん、包まず白狀なすべし」と責め問へば、角彌漸く顏うちあげ「斯くなる上は包み隱すも無益、某若氣の至りにて、さつきに不義をいひかけ、密通に紛れなし、今君の宣ひし如く、疾く某が首を刎ね、さつき殿の命助け給はらば、死しても御恩は忘れ申すまじ。」といふに、土右衛門さもありなんといふ面持して、角彌が頂髮引摑み、荒けなくも引きたつる。杜鵑花は何と云ひ解く言葉もなく、兩袖を顏におしあて、よゝと許りに泣き居たるが、斯くと見

るより恥かはしき事をも忘れ、階あらはに走りより、纖弱き腕に角彌を圍ひ、遠山尼に對つていひけるは、「今宣ふは妾が命助け給はんとの、御慈悲にて侍るべけれど、人こそ知らね心のうちに、良人とさだめし角彌どの、罪科に逢ふを他眼に見て、後に阿容々々存命ふべき妾が心と思ひたまふや。そは御情なき御心なり。近曾月見の折柄に、不圖角彌どのを思ひそめ、所有神を誓ひにたて、書き送りし玉章は、數の羊の腹にもみち、牛の車につみてんばかり多なれど、館の法度に背かじと、にべなき答へに力なく、一夕廊の暗まぎれ、角彌どのの袖をひかへ、女子の口より恥かはしき事いひ出し、「いよゝ承引き給はじとなら、潔く刃に伏し、蓮臺に待ち進らせん。』と、おどしの懐劍胸元につきつくるを、「やをれ短氣なる振舞せそ。」とおし止め、元來實死ぬべき心ならねば、見かはす顏も互に春の心を包み、わりなき中となりてければ、妾にこの咎はあり、角彌どのの命助け給ひ、妾を意の任に罪なはし給はば、三途川の水をむすび、死出の山の月も朗かにながむべし」と、おくれ髮を搔きはらひ衿くつろげ、雪なす項をさし延ぶれば、遠山尼懷中より、過刻の玉章をとり出し、「兩人かくの如く死を爭ふを見れば、いづれをいづれと分ちがたし、一定此の艶書を開かんには、事分明に知るべし。」と、土右衛門に渡し給ふ。土右衛門何心なく取上げしが、忽地面土の如く變じ、物をも云はず引裂かんとするを、後室手早に取上げ給ひ、金地の小やかなる扇をふりあげ、土右衛門が面を丁々と打ち給

ふに、角彌さつきを初め數多の侍女は、其の緣由を知らざれば、「こは重ね〳〵の珍事なり。」と掌に汗を握り、空しくまもり居たりけり。後室なほ腹立たしき面持して、柳の眉梢をひきあげつ、聲振りたてて宣ふは、「口に語ふを聞けば、善人ならぬはなく、眼に行狀を見れば、惡人ならぬはなしとの常言宜なるかな。過刻に不意此の艶書を得て披き見れば、汝こそ却つて杜鵑花を搔口說き、承引かざるを遺恨となし、兩人が不義を見出し、角彌を罪に陷れんと計る事は、妾とくに心づき、汝に杜鵑花を預けんなんど言ひしは、其方の心をひき見ん爲なり。思ふに違はぬ言葉のはし〴〵、家の束ねともなるべき身をもて、かく猥りがはしき行狀は、二人にまさりて汝に咎あり、分說あらば疾くいへ聞かん。」と、息まき荒く宣へど、土右衞門は唯頭をたれ、一言半句の答へだになさざれば、後室彌焦だち給ひ、「己土右衞門切腹申し付くべき奴なれども、佛詣の歸りといひ、櫻狩り暮す折柄、かかる珍事の出で來し事、街に洩れ公に聞えなば、淺間の家の恥辱となれば、命ばかりは助けくれん、兩腰のみ彼に與へ、衣類上下引剝ぎて、早とく追放つべし。」と宣ふに、御供の若侍みな土右衞門を惡しと思ふ輩なれば、只小袖一重となし、手々に木の枝折り持ちて、「とく出でよ去れよ。」と追立つる。土右衞門はあなかまやといふ面持して塵うち拂ひ、若侍を睨み廻し、悠々と出で行くを、惡まぬ者はなかりけり。後室重ねて宣ふは、「角彌杜鵑花も家の法度を背きたれば、不便には思へども術なし、親兄

弟の許しをも待たで密通なし、主にさへ恥辱を與へしは、人面獸心とやいふべき、犬にひとしき行狀なれば、是れを汝が鏡にせよ」と、侍女を呼びて料紙とり出さしめ、落散りたる乘物の戸に、墨黑く犬といふ字をかいつけ、靜々と立ち歸り給へば、二人は御跡にひき殘り惘然として居たりしが、角彌屹と心づき、眉を顰めていへりけるは、「今御心ありげに此の乘物の戸に、犬といふ字を記したまへしは、彼の弓の末弭を以て、三韓の王の額に書きたる故事にもあらず、思ふに戸に犬をかけて戻るとよむ、たつ、たちも戸に因める言葉なれば、一度たち戻れといへる隱し詞にて、俗間に用ゆる文字なれど、簷に隱れて我々に、知らしめ給ひしならん。」と、杜鵑花と手を携へつゝ、跡を慕ひて追行けば、遠山尼はとある松原に駕籠を止め、春の夜には似氣なくて、清けき月を眺めつ、物思はしき形勢に見え給へば、流石二人は面なくて、御前に行きもやらず、松の樹林に月の小闇きを便り、うち潛み居たるを、遠山尼かくと見そなはし給ひ、潛かに腰元を走らせ、二人を乘物の前に招き、涙と共に宣ふは、「星影土左衞門が姦惡にて、兩人が不義分明しき事におよびしは、歎きてもせんなし、殊に侍女さつきは、幼き時より妾が側にありて、十種香貝覆は手なれたらんが、耕し草ぎる賤しき鄙のたつきをば、屏風の丹青繪に見しのみにて、賤の小手卷くりかへすは、星へ手向の絲なりしも、今日はわが身の上となり、さぞ便りなう思ふならん。角彌とても弓射太刀あはする術は熟くすべけれど、商賈の道

には疎かるべしと、縦ひ幾多の辛苦なし、往来の人の袂にすがり、賤がふせやの軒に彷徨へ、一錢二錢を乞ひしなりと、夫婦なかよく添ひ遂げよ。孟子とかいふ書に、和したるを琴瑟とほめ、不和なるを易には反目ときらへり。古代の涙をもつて竹をそめ、異朝にゆく船を慕ひて、領巾麾山に石となりしも、外に男のなきにあらず、わが思ふ人しなければなり。其方のふたり、角彌は武士の道さへすたりにたれど、一點も貞操をなそこなひそ。過刻に此の一條いひ聞かさんとは思ひしが、日暮れて潜かに妾が心をあかさんと、其の折は態と情なくもてなして、一度立戻れといふ隠語をおくりしも、解けしぞあらん。薄氷の、薄き縁と思ひなせそ。よき一對の夫婦なるに、上右衛門が眼にふれざるさき、妾仲立たざりしことこそ後悔なれ。僅かなれども是れを活計の本錢となし、又くる春の花を待ちてよ」と小判百兩餘りもありたる、服紗包を兩人が前へ投げやり、乗物いそがしたて、館をさして歸り給へば、二人はなかなか言葉はなくて、御後を伏拜むのみ。初更の鐘聲殷々と響き、松間の花落々としてふりしきり、再び故郷へ歸るべき、錦の衣となりつと心に祝ぎ、互にしどけなき帯ひきしめ、何方ともなく落ち行きたり。これは扨置き爰に又、眞野の庄より一里ばかり東南、粟田村といふ所に、團一齋といへる茶人あり。若年の時より茶事を好み、はや年も五十にかたぶきて、彌近郷の若人、彼が茶道に熱しゐたるを聞き及び、茶を嗜む者一齋が門に入らざるはなかりけり。淺間巳之兵衛良治も彼を師

とたのみ、一齋はしば／＼淺間の館に交加ひ、此の日も後室遠山尼、もの詣でなし給ひければ、良治徒然を慰めんと、消息して一齋をまねき、一口茶會を催し、漸く夜も初更のころほひ、一齋に暇をたびてけり。かかりしかば一齋は、巴之丞が從者二人を將て、常よりは足の運びもせはしく、宿所をさして急ぎしに、鮑田の村口、子育地藏の前を過るをりしも、俄に東風烈しくおとし來り、豚の形したる狂雲頭上におほひ、春雨一とほり降りいでしが、遠方の山の端には、なほ月の光さへさして、小止むに程もなきおもむきなれば、彼の地藏堂に憩ひぬ。此の時おくり來りし從者のいへらく、「一齋主には夜更けて一人、館より歸り給ふ事數多なるに、今宵に限り我々を、倶し給ふは何等故ぞ。」と問ふ。一齋莞爾み、「家君かねて折木根の建水を尋ね給ひしが、此度不意きかたにて、彼の器を賣拂ふ者あれば、今日その事を申し上げしに、「則ち贖ひ來よ。」とて金百兩たまひぬ。さるからに夜も更けぬれば、『供人を將て參れ』とや仰せしならん。」と、物がたりなす間に、雲は四方に吹きちり、弧月半天にあつて、ふけさは眞晝の如く、森知る鳥も塒を迷ひ、花の梢に匂やかなる露を含めるさま、心ゆく眺めなりければ、二人の從者に對ひ、「夜も既に更闌けたり、我が家も早ほど近かれば、とく歸りね。」と暇とらせければ、下奴の習ひにて僅かの道ながら、強ひて一齋を送らんとはいひも出さず、大きに喜べる樣して一人がいふ、「われ火爐に除[illegible]醪をかけ置きたるか、燗や徹りけん。」と喞てば、一人がいふ、

「我も干鰯と萩華を、小架の小隅に置きたるを、近頃來る野良猫の、咥へ去りけん」と呟き、足早に歸り去りぬ。一齋ひとりごちていふは、「夜は四更に向々とす。多の金を持ち人なき道を走らんは、火を懷にして、薄氷を踏む心はあれど、かく窶々しき姿にて百枚の金あらんとは、神佛も知り給ふまじ。されば後安きは常にしも變らじ。」と、思はず地藏堂を顧み、呵々とうち笑ひ、「無益自問自答に、佛は早知り給ひき。南無地藏大薩、必ずしも此の事、人にばし語り給ふな。」と戲るれば、忽地石佛に聲あり、「我は云はざれども汝云ふ事なかれ。」と、微妙の聲にひきかへて、だみたる聲樣にて宣へば、一齋は呆れはて、軒もれ月に熟堂内を透し見れば、一箇の悪漢船後光のうしろに隱ろひ居て、腰刀ぬくよと見えしが、物をもいはず一齋に切つて蒐る。一齋もゆゑある武士の果てなれば、心得たりと腰刀を拔合はせ、少時が程は戰ひしに、嗚呼奇なるかな妙なるかな、曲者が姿は煙の如く消えうせ、只刀のみ空中をひらめき、或は車にとり青眼に構へ、其の自在なる事人あるよりも速かなり。一齋此の爲體に呆れ果て、劍法やゝ亂れければ、いつの間にか肩の尖に切りつけられ、鮮血さつと迸り、尻居に撐と倒れふす。時に懷中の財布、自ら空中を飛び行けば、一齋周章てて追はんとなせど、初度の痛手にたつもたち得ず、刀を杖にじり出でしが、苦痛に堪へずやありけん、叫苦と一聲叫ぶとそのまゝ、俯しにこそ仆れけり。こゝに又一齋が下奴切平といふ者、主人の歸りを待ちわびつ、門首

までたち出で、思はず月の清かなるに漫行きしつ、蛇田村をたち離れければ、遙かなたこなたに人の聲して、「曲者やらじ。」と叫び、又は刃をうちあはする音、幽に聞えしかば、喘ぎ〳〵驅け來たれど、はや一齋は朱にそみて倒れ伏し、側に幻の如く人影あり。這奴曲者と切りつくれば、地藏堂の因果車を刀尖さがりに切割つたり。此の時何方ともなく、「やよ下郎、汝も殺すは輙けれど、金なければ殺すも益なし。我が仇人とないひそ、金こそ却つて讎人なれ。」と、いふ聲は耳近く聞ゆれども、曾て姿は見えず。なほ彼方此方逍遙なすとおぼしく、聲はりあげつ、「君をまつ夜は夜さへながき、壁のあぶらを八皿たてぬ。」と曲子をうたひ、板金剛ふみならす音のみ聞ゆれば、それを便りに切りつくれど、絶えて刃にさはるものはなかりけり。

第二　一齋末期に茶事の奥義を傳ふ

南一齋が妻宿木といひしは、往年身まかり、家に二人の女子あり、今玆姉忘貝十三歳にて、妹寄居蟲は十一歳なり。窮巷の中に生まれ、蓬莩のもとに成長ると雖も、容姿いと艶妖にて、心ざま優雅しく、そのうへ孝順更に比なかりければ、一齋も一かたならず愛で慈しみ、彼等に回僻ある心やいできなんと、後妻をば娶らず、此の年頃寡住にてくらしけり。此の夜も姉妹の少女は、一齋が常ならず、戻

り、御運さへ氣遣ひ、門に出て巷にたちて待ちわびしが、はや眞夜中も過ぎぬれば、今宵は淺間の御館に宿し、明日の日やかへり給ふならんと思ひとり、漸く枕をとりて眠み、半時ならざるに起き出でつ、睡を拂ひ燈火を扇ぎ、やをら障子をおしひらけば、半ばは天明けなんとして、半ばにいまだ明けやらず。花影殘月をとゞめては、紅雲に明鏡を包めるがごとく、曉星まれにして數あるは、暗き夜に螢の光を見るに似たり。蝶やどりて花粉をとゞめ、鶯眠りて柳金を借る、紫だちし横雲に、三つ四つ二つ聞鳥の聲ひゞくには、清女が筆すさみを思ひ出で、鐘響いて曉光寒きには、平兼盛が詩もかかる光景や作りしならんと、漫ろにながむる折しも、狂風颯然として吹いたり、庭木の櫻吹きちらし、忽然地上に錦繡をはり、軒端近く雀鴉咬々と鳴きて、頭の悲しふを訴ふるが如く聞ゆるに、姉妹は何とやらん胸うち騒ぎ、外のかたを見れば、一齋が從子奈吉といへる者と、下部切平兩人にて、手負ひたる一齋を地藏堂の扉に乘せ、擔ひ端に昇きて來たれば、未通女姉妹は此の形勢を見るよりも、夢とも現ともわきかねて、一齋にすがりつき、二親もうたてき御姿や、かくはいかにして、何者が切りたるぞ。やよ切平、泣いて居たとてわかるにあらず、はや疾く容子を語るべし。父上心をたしかに持ち給へ、さのみ深傷といふにはあらずと、言葉は健氣に聞ゆれど、年端もゆかぬ姉妹、右と左に立寄り、手負の背を撫でさすり、忍び涙にむせ返るは、哀れといふも餘りあり。切平も涙かき拂ひ、初め

終りを聞ければ、奈古平瞼しばたゝき、「我も渡場の長平太が許に賭して居たりしが」と失口いし、側をかへり見て大きにおどろき、「否さにあらず、賭なせし長平太が、ゝ有しが、日頃伸父者人の意見を思ひて、ときふ／＼にいひ賺きて其の場を逃げ、村はづれの地藏堂の前を通りしに、仲父うへには此の爲體、切平は腹きらんず面なれば、漸うにいひ和め立ち歸りは歸りしが、はや其の深夜にてに、臨終に間もあるまじ。貯へ置きたる金あらば、われ等に讓る遺言をよく聞き置きて給はれ」と、しば／＼瞼りあけつれど、涙さへに出づべう樣もなければ、手拭にて兩眼を腫とおさへ、聲のみ大きやかになし、只管歎く面にもてなせば、二人の少女は實と思ひ、日頃は只邪見とのみ思ひたるに、奈古平どのさへあの如く泣き給ふに、爹さま死んで下さるな」と、かよわき力に抱き起せば、一齊に二人が肩を杖となし、悪びれもせず座敷に居なほり、苦しき息をほつとつき、「過刻には我まで人事を忘れ、其のまゝ死ぬべく思ひしが、今又心請々しくはなりたれども、兎ても角ても此の夜にては、存命ふ事は思ひもよらず、一通り云ひ置く事、姉も妹もよう聞くべし。二人ともいと幼き時なれど、朧氣に覺えあるらめ、往んじ應安二年、われ皇都に赴きし折節、淀の渡の夜船にて、喧嘩がひとやらん悪漢同士喧嘩を仕出し、われは二人の娘を連れ、漸くその場を遁れ出で、心づきてよく見れば、一人は我が娘にあらず、宿所を問へど片言のみにてわかちがたく、仕術なう此の奥州に連れかへり、姉

忘貝が名にゆかり、しばし此の家を宿かりの、立ちかへる事もあれかしと、すぐに呼びたる妹のやどかり、其の時尺なし帶に結び居たる、笹鶴錦の守り袋、貞治六年三月三日誕生の女子、字の葉と記せし臍帶と、一寸八分の正觀音、此の二品を證據となし、實の父母に再會の期をまつべし」と、懷中よりとり出さんと、心澗れば手しびれて、思ふが儘ならざるを、忘貝見る目もいぶせく、手を取添へて出さするに、一齋又いひけるは「われ過刻に曲者と切りむすびしが、忽地形の消え亡せしは、これ隱形の術とおぼし。さすれば彼の妖術をほどこすものは、わが仇人の餘類なり、かく聞ゆるとも若し年を經て囘會はば、女のかよわき小腕にて、みだりに親の仇人なんどといひて、返討にな討たれそ。われ曾て聞ける事あり、彼の幻術を行ふとき、鏡をもつて其の人を照らせば、妖術忽地くじけて本形を現はす、夫れ鏡は元無心にして明らかなれば、鬼魅妖怪も正體をつゝみ難し。昔偶豪成、張蓋踊の二人、蜀の雲臺山の石室に思ひをこらす。忽地黃絹葛巾の道士あり、壁上にかけたる鏡中を見れば二匹の鹿なり。又伯夷といふもの、林慮山の下の野亭に宿す、前面に十餘の人來る、鏡をもつてこれを見れば則ち羣犬なりと。事は援神記抱朴子に詳かなれど、我危急に及びて此のものなければ如何にとも術なく、斯くやみ／＼と深痍を負ひぬる事の口惜しさよ」と、いふ言毎に息きれて、既に命も終るべう見えつるが、慨然として眼を見ひらき、二人が顏をまもりつめ、潸然と淚をおとし「わかな

からん後の心がゝりは、二人の少女の事のみなり、是れより彼等の力となすは、奈古平聞平兩人なれども、聞平が變心に引きかへて、奈古平が行状宜しからず、とく／＼心をいれかへて、二人の嫁を世に出し、人がましきものの妻ともなさば、縱ひ我野外の古墳となつて、舊態をはらはず一華を手向くる人なくとも、たれにこしたる法養あらじ。燒野の雉子夜の鶴、まして萬物の靈たる人と生まれ、子を思はぬ者のあるべきか。女めかしき囘諄ながら、我が老いの來るをば知らず、早く月日もたてかしな、二人の娘を成長させ、似合はしき壻取つて、初孫の顔見んと、思ひし事も夢の夢、逢ひかけて居る結目の小袖、著せて喜ぶ顔さへも、見ずに死ぬるが淺ましや」と、はや目も見えずなりければ、苦痛を忍びて枕より、右と左に抱きよせて、「姉よ妹よ、やがて壻とり嫁いりせば、貧しき富めるに關らず、心に叶ひし夫を持て。えては黄金に目がくれて、見にくき男を夫となし、年を經るに從ひて、他の夫の見めよきを傾羨める心より、不良事の出で來るなり。斯くなる事と知るならば、近曾ねだりし摺箔の、帶なりと買うてやるべきに、賤しきものには似氣なしと、叱りしを腹をもたてず、莞爾笑うて居た時は、口へこそ出さねど、心に賞めて居たりしぞ。其の手函に金あり、同じ樣なを一筋買ひ、又それ彼と姉妹してはひあふな」と、涙と共にいひ諭せば、二人はいとゞ悲しくて、「どうぞ死んで下さるな、痛ましい父上や」と、聲も惜しまず泣きにけり。一齋漸く顔うちあげ、「嗚呼歎くは愚痴の至

りなり。無益事を語らんより、息ある中に言はで叶はぬ大事あり。淺間巴之丞良治君より、預け給ひつる金百兩を失ひたるは、悔いてもせんなきわが過ちなり。彼の君ふかく茶事に心を委ね給へど、未だ奥義を傳へ申さず、土藏に納めおきし、唐木の手函の裏なるは、則ち茶事の傳書なり。彼の二卷の卷物を汝等に傳へ置けば、せめてもの分説に折を見て、良治君に差上げくだし、はや我も終焉の期と覺ゆれば、此の世の餘波姊忘貝が手前にて、薄茶一服所望せん」と、いへども答へなき居たり。一齋はなほ氣をいらち「我も元來は武士なり。武士の娘とよばるゝ者が、小兒の如く泣いて居て、人にばし笑はれな。早疾く〳〵」とせりたてられ、せん術なげに爐に向ひ、とり出す服紗の紫は、沸の迎ふ雲のいろ、末期の水の建水を、見るに瞑れ心きえ、茶杓とる手もふるはれて、たぎるや釜のたれよりも、涙の玉のおりまさり、何ごと人の問ひし時、露と答へてきえなまし。その生親男の言葉をば、背かじものと漸うに、薄茶一服たて終れば、一齋は持ちより莞爾として茶椀をとりあげ、一口呑むと見えつるに、卒然として息たえぬ。嗚呼これいかなる日ぞや、于時永和三年春三月某日なりけり。二人の小女は亡骸にとりすがり、「爹々なう、妾もともに黄泉とやらに連れてたべ」と、聲のかぎり泣きにければ、心弱くてかなはじと、切平は涙をかくし、さま〴〵にいひ慰むるに、奈古平も欠伸の涙を幸ひと、周諄めかしく何やらん諄々とつぶやき、かくてあるべき事ならねば、かたばかりの野邊送りを

いとなみ、往年世を去りし一齋が妻、宿木が墓のかたはらに葬り、極浦新月居士と法號し、姉妹はいと信だちて、七日々々の佛事も懇に弔ひけり。二人の少女の心の中、悲歎いかばかりならん、推し量り知り給ひね。

淺間嶽面影草紙一之卷　終

淺間嶽面影草紙　二之卷

編者　柳亭種彦

第三　忘貝寄居蟲修行者が物語を聞きて羽黒山に赴く

其のゝちは事なく過ぎぬれば、記すべき事なし。かくて永和五年改元ありて、康暦にうつさるゝ此年春三月某日は、一齋が三回忌に當りしかば、忘貝寄居蟲は、逮夜より父母の墓にまうで、苔を拂ひ華を供じ、徹夜墓の前を去りやらず、靈前に細々許なる燈籠をかけ、いまそかりし時嗜める品を机上にそなへ、香をたきて身をきよめ、念佛唱へ居たりしかば、鉦鼓の音も澄み渡り、いと物々しく聞えけり。春宵短を苦しむと、詩にもつくりし如く、春の夜の明けやすく、程なく東方白みわたり、清風吹き來つて新柳をはらひ、一聲の鶯鳥高枝にありて、花さへ雪とふりかゝれば、又も見んと詠みし古歌にはひきかへて、今頃は斯くなりし斯うなりしと、父の最期を思ひやり、不慮に物悲しく、袖の涙は夜の間に置き添ふ露よりも繁く、かき曇る聲はりあげて、一心不亂に南無佛々々々と唱名し、

姉は閼伽の清きを汲み來らんと、花桶を手にさげつ、庫裏のかたへ行きなんとなす折しも、家に留めおきつる下奴切平、あわたゞしく馳せ來り、一封の書簡をとり出で、涙さしぐみて言葉さへいださねば、忘貝は何事やらんと打驚き、佛前の燈籠をとりて讀み下せば、故郷に殘し置きたる切平が老母、病に臥して死に向々となせば、早く身のいとまを申しこひ、國元にたち歸るべしといふ消息なり。忘貝はわが身の上にたくらべつ、彼が心づかひを思ひやり、涙はふり落ちていふ事をしも知らず。切平漸くいへりけるは「君達もしろしめす如く、我が故郷は河内國高安といふ所にて、いとはるけき旅なれば、頓には立ちかへり難く、未だ年も若うるます君達を殘し置き、覺束なくは候へども、老いたる母の病急しと告げこせしに、赴かざるも不孝なり、此の所思ひ分けられ、暫しの暇たびてんや。」といひければ、忘貝寄居蟲は、心細さのいや增さど、止むるにも止めがたく、彼が心にまかせぬ。切平は大きによろこび、行裝もそこ／＼に調へ、急ぎ故郷に赴きけり。かくて姉妹の少女は、其の夜も塚のかたはらに通夜なし、いと信やかに見えければ、近鄕の農夫、其の子の不孝なるを誡むるには、まづ彼等が身の上をかたりいで、姉妹の孝順を訛りたる曲子につゞり、苗植うるの折は、かならずこれを唄ひけるが、其の歌は今もなほ村翁の脣上にありとなん。さても其の後姉妹は、ひたすら父の橫死をなげき、何卒仇人を探し出し、最期の無念を晴らさんと、神と佛に祈れども、たゞそれにひきかへ一

齋が賜奈古平は、酒に溺れ色に耽り、夜は夜もすがら賭して、半時も家にあらず、其がうへ此の頃は打續きて幸なく、金あまた失ひ、己が家をば賭の本錢に賣りなしけれど、それさへ朝日に向ふ春の雪の、數日ならざるに消え失せ、忘貝が許に食客となりて居たりしが、身に半錢をも留めざれば、鬱々として更に樂しまず、斯くてはいつか春めかしき事もなかるまじと、一日同子の悪棍を語らひ、鄰村なる稻荷の社に掛け置きたる、神樂の面を盜みきたり、如此々々計らふべしと點頭き合ひ、日暮るゝをまちにけり。此の夜姉妹の少女は燈火の下に、古き物語の書を披きて居たりしに、めり／＼と音して板戸をこぢ放ち、小山の如き大の男つと入るを見れば、面は正しく鬼女なりけり。呵と叫んで逃げいだせば、異類異形の者ども、行くさきに立ちふさがり、會釋もなく二人の少女を、高手小手にいましめ置き、衣類茶器雜器臥具のわかちなく、有りとあらゆる物を土藏より運び出すに、二人は淺ましくも悲しくて、恐る／＼その人を見るに、身には袖なき羽織をうがち、泥にまみれる草鞋をはきたるは、顔に似氣なき鈿目命なり。又破れし紙雨衣を身に纏ひ、葛籠を背負ひて立ち出づるは、猿田彦の面に似たり。狼狽へまはる鐘馗大臣を、然かせよ斯くせよと叱るは、却つて一角三眼の鬼なり。蛭子は緣よりふみはづして腰をぬき、白髮の翁の肩にかゝり、あるは眼鼻のゆがみたるもあり、或は鍋の炭をもて、面をこそ畫きたる黑奴の如きもあり。すべて山海經にも洩れ、萬國の圖にも見えざ

る盜賊等、半時ばかりに塵も殘さず盜み去れば、二人は活きたる心地もなく、聲たてまく思へども、手巾をもて口を包みたれば、それさへ心にまかせず、只涙のあるかぎり、泣き居るばかりなりしが、かくて奈古平は神樂の面にて顏をかくし、心のまゝに姉妹が、衣類雜器を盜みさり、知音のかたに預け置き、何氣なきおもゝちして、曉頃たちかへり、此の光景を見るよりも、大きに驚きたるおもむきにて、急ぎ縛めをひき解き、忘貝が泣く〳〵ものがたりなす初め終りを聞き果て、拳を握り齒がみをなし「われ今宵家にあらば、縱ひ百萬の強盜込み入るとも、よも活けしは歸すまじ」と、立つつ居つ身もだえなし、少時ありて涙ををさめ「嗚呼これも皆御身等が、宿世つたなき故なるべし、命さへあらんには、又世に出づる事もあるべきに、深く歎きて病にな臥し給ひそ」と、樣々にいひ慰むれば、二人の少女は奈古平が所業とも夢知らず、漸うに鼻うちかみ、取り散らしたる雜器の裏に、茶道傳授の卷物を入れ置きつる匣を取り落して、盜み去らざりしかば大きに喜び、折を見て良治君にさし上げんと、一卷のみ、姉妹が守り袋に納め、夫れを賴みに數日か過ぎぬれど、今年巳之丞良治は、宮都守護の在番に赴き、此の國にあらざれば夫れさへ心にまかせず、只日暮過ぎゆきたる父母の戀しくて、袖につゝむ涙より外に、賴む方もなかりけり。斯くてある夕暮の事なりしが、一箇の修行者忘貝が軒に彷徨み「これは金華山に赴く修行者にて候が、思はず道に踏み迷ひぬ、何れの方を望みてや、旅店

あるく大路に出でべき、道へ給はれことゝいひければ、忘貝答へて、此の所は室田村と申して、街道といふにもあらねば、はたごやといふも旅籠も候はず、参らす物もなきへなれど、夜の衣は薄けれど、今宵は此の家にて明させ給へことゝいひければ、修行者は大きに喜び、笈をおろし草鞋をとり、まづ佛壇に向つて廻向をなし、乗定よりて様々の物語なす序に、修行者がいふには、われ此のごろ出羽國に赴き、月山湯殿山に参詣なし、羽黒山に登山せんと、田川郡に出て國の西南、手向村にやどりしに、七人我を止めていふやう、近頃此の羽黒山に強盗山賊ありて、財寶を奪ひ人民を害し、日暮るれば怪有の幻術をほどこし、姿をかくし雲を起し、危急に臨めばわが姿を隠すを以て、國司も制する事能はずと物語りし故、思ひを胸に鎖し、麓より立歸りぬ。これわが目のあたり見聞せし所にて、朧氣なる事にはあらずことゝいひければ、姉妹は眼と眼を見合はせ、心の中に大いに喜び、見常聞法の思ひをなし、夜明けなば早々、合掌して修行者を歸し、忘貝寄居蟲に向つていひけるは、妾等父の怨敵を討たまく思へど、その手がゝりを得ざれば、月日を徒らに過せしに、昨夜の修行者が物語、羽黒山の盗賊こそ父が最後の物語に、符も符契を合はすが如く、彼の隠形の術を行ひて、父を討つたる曲者ならん。女の身よわきに力なけれど、猛き心は大丈夫にも劣るべき、そなたとともに彼の山塞に赴き、諸國をめぐる修行者の、道に進みし體にもてなし、色をもつてたぶらかさば、討ち得ざる事はよもあらじ。よし

仕損じて殺されなば、一念怨鬼となつて、共に冥途へ連れ行かん、かかる際に及びては、命をもなにかせん。」と、小褄けはしくひきあぐれば、寄居蟲は答へもなさず、側にありあふ脇差おつとり、鞘ながら向つてかゝる。忘貝いそがはしく身を轉らせ、火爐にかけたる自在の竹にて丁とうけとめ、「寄居蟲さなたは狂氣なしたるや。」といふに、寄居蟲完爾とうち笑み、「姉上には兼てより忍び／＼に稽古なし給ひたる、手槍の手練を試み侍るになん。」と答へければ、忘貝いふ、「こは新好らしき其方の言葉、いでや互に手槍小太刀の術を比べんといふより早く、妹の太刀を跳ね返し、自在の竹を假の竹刀、手早く扱いて、立ち對へば、妹も太刀を青眼に構へ、すきを討たんとつけ廻す。姉がいらつて突き出す竹刀、危く妹が肩をかすり、妹が切り込む太刀先を、沈んで拂へば又つけいり、蹴かへす褄は秋の紅葉に異ならず。花の顔ばせ朱に變じ、少時爭ふ其の光景、花に小蝶の狂ふが如く、柳の風にもまるゝに似たり。かかる所へ日毎午時には、必ず來る花ひさぐ老婆、門首に徬徨み、「花めせ／＼。」の聲に驚き、二人は笑ひに紛らして、忘貝は帚をとつて塵かいはらひ、寄居蟲は火爐に柴を折りくべつ、客知らざる面持なして居たりけり。

第四　辛崎の社にて凹之丞初めて罷婆に逢ふ

忘貝寄居蟲は、奈古平なき許りの惡棍と努知らねば、一事の顚末を聞えあげ、羽州とやらんに倶して行き給へ」といひければ、奈古平は仕果せぬと心に喜び、家財を賣りなして路金に宛て、姉妹を將て出羽國へと志し、遠田玉造を經て中山龜割山に到る。此の所は奧羽の境なり。夫れより尾花澤舟方をも打過ぎ、最上川にそひ乾へと行きぬ。是れなん否にはあらぬ稲舟と詠みたる名所なれど、大望ある身はかかる詠めも徒らに見なし、猿馴峠を越えなんとすれば、右に鳥海山綿々と連なり、左に月山巍々と聳えて見え渡るに、我が尋ぬる仇人は、彼方なるめと心嬉しく、ゆきゆきて鶴が岡に到る。此の所は出羽國田川郡羽黑山の麓なり。幸ひ手向村といふわたりに、奈古平が些との知方ありければ、彼の者を頼みて膝をいるべきばかりの空房を買ひ求め、二五日すまひけるが、一夕忘貝寄居蟲に對つていひけるは、「我々蓄へも多からぬ身をもて、いつまでか斯くてあるべき、畢竟此の國に徙りしも、仇人を尋ね求めん爲にしあれば、女ながらもいでや武夫の、心より起してよ」といひ諭すに、二妾もさこそ思ひ侍ること答へなして、次の日未明に起き出でつつ奈古平をば家に殘し、心強くも唯二人、いづこを夫れとしら雲の、山また山にわけのぼるに、危くも險氣なる未通女なりけり。抑羽黑山と聞えしは、人皇三十二代崇峻天皇の御母、蘇我の稲目の娘小姉君の開基にして、祭る所の御神は、伊弉諸伊弉冊尊二柱の御神とも、又は羽州九神のうちなる、伊須波明神を羽黑權現と崇めたてまつるとも、又

は頭倉魂と申す。夫れ當山は羽州三高山の其の一にて、月山湯殿山と並び立つて鼎の如く、麓より本社に至る山路六十二町、本社より絶頂まで十九町五間一尺、未だ此の頃は登山なすもの稀なれば、靈場往ふに東北靈地の柄となれり、煙霧色を埋つて千里に連なり、日晴雲を鎖し、奇に嶺り、危嶺は竹を攀んで風木の蔓を纏ひ、懸泉は布をかけて水壁礎を打つ、岩角峰しくして道なきたる如く、道路は羊の腸に似たり。目に牧笛雲を穿つて高ければ、樵歌月を帯びて行く。或は壊石頭の上にありて、驚くる膽を轟かし、又は已に松足もとに礙はして、或る崩土をいひつべし。頭をめぐらせば山嶽連りて重疊、耳をそばだつれば猿猴鳴いて寂寞、數株の松柏森々と茂り、晝も日影をもらさねば、苔滑にして常に雨の如く、暗き事月なき夜に似たり。いと嶮岨しく怖ろしき道を厭はず、櫻谷もうち越え絶頂に至れる折しも、樵夫の道に迷ひしぞ、谷陰より、意に激するもの、槍して一人が前にすゝみ來り、完爾として言つていへらく、これは姉妹の孝女、いと不幸にて、父の仇人をたづぬる事、さりながら汝等は宿世いと拙く、薄命なる事たとへば桃の花の如く、後に實を結びて美味人を喜ばすといへども、花王と榮ゆ一時なれば、詠むるものもなく、當山は宿魂神の跡垂れ給ふ靈場にて、かりそめにも盜賊の籠るべき山ならず。汝等が尋ぬる仇人といふは、今津の國にあり、東國は狹くに立ち去りたり。さりながら彼隠形の術をはきこして、女の小腕にてたやすく討たれん者に

あらず。今都に赴きたりとも無益なり、三年は此の地に足を留め、時いたるを待つべし」と、いふ聲は松風に交り、谷川の水音幽に響くのみにて、何處に往きけん翁の姿は、かいくれに見えやらず。二人は大いにおどろき、夢かと思へば夢にもあらず、現と思へど現にもあらず、しばしあつて忘貝がいふは、「もしや彼の翁も盗賊の餘類ならんやと思へども、我々が胸中を指したる事、恰も鏡に物のうつるが如し。察する所當山の神靈現じ給ひ、われわれに力を添へ給ふなるべし。」と思ひとり、手向村にくだり、數日此の所に住ひて、よりより仇人の在所をさがし索むるといへども、元來彼の修行者は奈古平が同手にて、先頃奈古平が盗み取りつる金の内、大半分を受取つて、此の地へ逃げ來る序、一人の惡漢を修行者に打扮させ、羽黒山に隱形の術を施す者ありと言ひ聞かせ、姉妹を當地に倶してきたりは、頓て遊女に賣渡し、金を得んと下心にて、皆あとなき空言なれば、羽黒山に滯留しても何條尋ねあたらん。且あつて知れる人もなく、いよいよ彼の山にて見えつる翁は、神靈にうたがひなしと心に頷き、彼の翁が言葉に任せて都へは登らず。ひたすら切平が歸りをこそは待ちわびけり。却説 淺間巴之丞良治は、東路に年經しが、京都在番も果てければ、いざや奥州に下るべしと近江路にさし懸り、名におふ湖水に連なる、八つの景色も見まほしく、まづ辛崎の神社へ詣で、湖水の汀にたちいでて、遠近を詠むれば、遠水漠々として天に連なり、滿浦の楊柳緑を吐き、風起つて細浪魚鱗を刻

むる蒼々たる老松は、青き傘を開きし如く、「是れなん一ッ松といふ、奥州の果てまでも聞えたる、松ならめ。」と言ひ合ふ中、菊が濱の方よりも、下仕走孺なんど附き従うたる女車、静やかに轢らせ来り、神前に轅をすゑさせ、立ち出づる女を見るに、年正に二八ばかり、そのいでたち如何になれば、淡く薄き強ちに装はされども、天性の顔色玉の如く、眼には秋の水を湛へ、口には春の花を開かせ、柳の髪丈と等しく、櫻襲のうすらかなるを、つぼみならずうちかけたれば、裾はあるまゝにうちなびける、かけ、もえたつばかりの緋の袴をふみくゝみ、蝶鳥の要うちたる杉横目のひあふぎ、のどやかに打插し、豫て設け置きたる筵道を、静やかに歩行める容、もし此の人に比べんには、花も却つて色なく、雪も却つて黒しとやらん。彼の小野小町が再び此の世に来りしにあらざれば、天津少女の假に下界へ下りしにやあらんて、實に花に言葉ありて、柳の活きて働ける様なり。巴之丞が侍どもも彼の人を見るより、魂飛んで人事を知らず、「扨も艶なる女性かな。」と、袖引合ひて姦しきまでいひ合ふに、巴之丞侍を制し、「こははしたなし。何れの姫君ならんも知るべからざるに、吾妻人は口賢なしと、都の者にな笑はれそ。若し無禮なる事あれば、淺間の家の越度なり。」と、道を弓方に避けて立ち帰らんとなすに、元来巴之丞も花車風流の男にて、顔形嫺雅なれば、彼の女性も過刻よりの、立振舞を憎からず思ひけん、女童を走らせて、巴之丞を神前に招きぬ。巴之丞怖る〳〵階をうち登るに女性は巴

之丞が側近く居より一察するに吾妻男都がたの在番果て、故郷へ赴き給ふ道ゆきぶりに、當社へ參詣なし給ふと見るは、妾が僻目なりや。いざ酒一つ聞しめして、旅のうさをも忘れ給へ。」と、偏提懐子とり出でさせ、只管酒を勸めければ、巴之丞大いに驚き「こは畏し、僕は無位無官の暴夷、天上雲の上人と、筵を連ぬべき者にあらず。許させ給へ。」と退出んとなすを「少時。」と押しとめ「君御名を名乘り給はずとも、淺間巴之丞良治君といふ事は、妾よくも知り侍り。御跡慕ひて參りしなり。」と、女童に銚子とらせ、一獻ほして巴之丞にさしぬ。巴之丞は不審しながら、杯をとりあげて酒半ばを飲みほして、膝の傍へ置きつるなり。彼の女性「いで御肴まゐらせん。」と、檜あふぎをつまどりて、香はしき墨すりながし、何やらん書きて巴之丞に贈る。巴之丞とりあげて吟ずれば、

勿念跡君雖者言相時

かの女かさねて「君は此の歌を知召すや。」と問ひければ、巴之丞少時ありて「勿念跡君者雖言相時何時知而加君不戀有牟。此の歌は拾遺集に、題しらず人丸とて載せられたれども、其の元は萬葉集第二卷、柿本朝臣人麿が妻依羅の娘子、人麿と相別るゝの歌と覺え候なり。」といひければ、彼の女性扇をもつて欄を丁とうち「扨は思ふに違はず、和歌の道をも嗜み給ふと思ひ侍る。妾は或家の娘夏草と申す物なるが、恥かはしき事なれど、いつぞや清水詣での折から、不圖君を戀ひそめて、露忘

る丶隙もなく、折を見て媒の端もがなと、一日二日と送る中、はや君には都へ立ち出で給ふと聞くよりも、嬉しかりし事をも忘れ、うつゝ心に消ゆると、御あと慕ひて参りしぞや、心やりに嘆き詫びは答へ給へ、情ある人にもなげの言葉はなきなれことと、恨みにつきし口説き給ひければ、巴之丞も白地なるうちつけ懸想に、何と答ふべき言葉もなく、さし俯向きて居たりしが、少時ありて顔をあげ、某ものむくつけき某へ、厚き心の仰言は、身にも餘りて不慮におぼえ侍れども、我にも一人の母あり、君にも雙親ましますべし。されば互にたらちねに聞えて後、都をば霞と共に立つとても、秋かぜ吹くまでのひまに、白川の関のあなたに御答へ申すべし。はや羣鴉塒にかへり、夕陽斜なりたれば、いざや御帰館を催されしかるべうもや。われも旅宿に赴かんと、西東に相別れぬ。

第五　星影土右衛門幻術を以て巴之丞が矢をまぬがる

是れはさておき星影土右衛門は、奥州を追放されてより、下総常陸を横行なし、さま〲の姦悪を行ひ、今は彼の地にも住みがたく、先づ都へ赴かんと、廻国の修行者にいでたち、武蔵相模のあひだなる、あすだ川原に行き暮れて、とある松の樹だちに紙帳をたれ、野宿して居たりしをり、外面のかたに何やらんさわがしきを、紙帳をかゝげて近けき月に熟く見れば、坂東順禮と見えて、十四五歳

ばかりなる妹き女を、川ごしの悪棍ども十餘人、眞中にとり圍み、一人がいふ、「所詮われ／＼がつけ來りしは、蛇に見いれられしも同じ事なり、かよわき力にあらがはずと、我と共に來るべし。大磯小磯なんどいふ、賑はしき花巷といふ所へ遊女に賣渡し、此の木綿の著るものも、錦の袂にひきかへて、油つけずのわら束ね、髮も艶ようなる上に、耳に早歌といふうし面白き唄を聞き、口に美味を食らひ、女童を二人三人ひき連れて、此の上の榮華はなし。はや疾く答へをなすべし。」と責め問ひ、「やよ白藏、我は先よりの長談義にて、口のすがなくなりつ。斯く事をわけて言ひ聞かせど、此の女ふつに答へなきは、若し啞子か聾ならんも計り難し、いで汝とかはるべし。」といひければ、一人がいふ、「今黑藏のいふ如く、此の艶なる顏ばせにては、花主にうけ出され、奶々とかしづかれんは忽地なり。まづう此方を向きて美麗しき顏見せよ。」と、飽くまでに嘲弄なすを、少女は只頭をたれ、何と答へもなさざりしが、すつくと立つて二人が腕くびかい摑み、何の苦もなく投げ退けたり。「小女郎と思ひあなどりそ。」と、割木を以て打つてかゝれば、柄杓おつ取り丁とうけとめ、裾を拂へば足をちどりに踏み違へ、水に閃く月影の、目に見えつれど手にとる事あたはず。さしもの大勢あしらひかね、無二無三に割木をとりあげ打ち蒐るを、はずみをうつて川へ投げこみ、或は松が根にて頭を碎きたるもあり。只一人の未通女に敵する事かたく、四方に颯と逃げ散りたり。星影土右衞門は少女が爲體を、面もふら

す守り居しが、竊かに錫杖を引提げて、少女が後に立ちよるに、少女は先よりの働きに、身體や、勞れたれば、少時息をやすめんと、落ちありたる柄杓とりあげ、川水を汲みとりて、咽をうるほさんとなしけるが、後にうかゞふ土右衛門が姿、彷彿として水面にうつるに驚き、竹杖にしこみたる短刀を拔放ち、土右衛門に切つてかゝる。土右衛門は身を閃かし、錫杖を以てはつしと受けとめ、「やれ待たれよ少女、われは修行者の行きくれて、野宿なしたるにて、先の悪棍とひとしからず。まづ心をしづめ短刀を納め給へ」といひければ、彼の女はほゝ笑み、「實德ある修行者にて坐さば、妾惡棍に圍まれたる、危急を救ひ給はらんに、其のをりは餘所目に見て、身體勞れし油斷を見すまし、打ちかゝらんず光景は、一定汝も盜賊ならん。女ながらも力量を憑みての一人旅、斬らるゝものなら斬つて見よ」と、又土右衛門にうつてかゝる。土右衛門莞爾と打笑み、「我も諸國武者修行を志す者なれば、汝如き小女郎相手には不足なれど、いで劍法を試みん。」と、錫杖に仕こみし刀ぬきもち、少時が程は切り結ぶ。時に向うの木陰より矢一つ來つて、土右衛門が肩の尖へぐさとたつ。土右衛門大いにおどろき、向ひを佶とうち見やれば、數多の武士眞一文字に走り來り、土右衛門をとり圍むありさまなれば、土右衛門は兼て設け置きつる、紙帳の内に潛りいり、悠々と鐘鼓打ちならし、念佛の聲高やかにこそ聞えけり。數多の武士紙帳のめぐりをとり圍み、手々に紙帳をひきさけば、奇なるかな鐘鼓一

つあるのみにて、今まで念佛の聲なしたる土右衛門が姿は、何地へ行きけんかいくれに見えやらず、唯惘然たるばかりなり。乗物かきする者ども、半弓もちて立出づるは、是れ別人にあらず巴之丞良治なり。良治は牀几にかゝり少女に向つて言ひけるは、「今汝が職ひし修行者は、元某が家臣星影土右衛門といふものなり。由縁ありて館をば、四年已前追放なす。然るにいま東國にありて、さま〴〵の惡逆をなすよし、彼は殊に怪有の幻術をほどこし、姿をかくす事自在なりと聞き及びしが、甚說に違はぬ此の爲體、一定御身も彼か毒手に害されんが不便さに、乗物の裏より半弓を射かけし所、弓矢の德には彼も妖術を行ふ事あたはず、逃げ去りしと覺えたり。心得ぬは御身少女に似氣なき力量、これも不思議の一つなり、何處いかなる者なりや。」と、深切に問ひければ、少女答へて、「妾は丹波國の者なるが、由縁ありて實の父母は、いかなる者といふ事をしも知らず、まゝ子よすに子と疎まれはしられ、辛うじて成長なせしが、其の父母さへも不幸にして、去年の冬一時に世を去り、孤の寄邊なう奥州の方に尋ぬべき事ありて、僅かなる力をたのみ、女の身の恐ろしとは思ひながら、漸う此の處まで來りしが、計らずも惡棍に出で會ひ、斯かる品に及び候なり。」と言ひければ、良治かさねて、「我は淺間巴之丞といふ者にて、都がたより奥州へ下るものなるが、汝も彼の國に赴くとあれば、これ幸ひなり。共に倶して行くべきに、名は何といふやらん。」と問ひぬ。少女答へて、「初めにも聞え候如く、

よゝ子よす子と異名のやうに言ひしのみ、定まれる名も候はずといひければ、良治うち笑ひ、海士の子なれば宿も定めずといへる、古歌は聞きつれど、名のなき女は珍らかなり。はて何と呼ぶべき。」といふ折しも、雲間遙かに時鳥一聲鳴き渡りければ、「幸ひなるかな今より汝をば時鳥とよぶべし。」と、侍に命じて厚く勞らせ、奥州さして下りける。

淺間嶽面影草紙二之卷　終

淺間嶽面影草紙　三之巻

編者　柳亭種彦

第六　忘貝寄居蟲にかはりて花巻に身を賣る

喜びあれば又悲しみありの古語に引きかへ、忘貝寄居蟲の姉妹は、憂への上に憂へを添へ、歎きの上に歎きを重ね、忘貝は康暦二年夏の頃より、病におかされ起臥さへ心にまかせず、食も一切すゝまざれば、寄居蟲が歎き大方ならず、枕邊を離れず看病いとこまやかにて、神佛を心に念じ、若し姉が死すべき定業ならば、妾が命をかはりにたて、是非一度本復なさしめ給へと祈りしが、其の赤心や通じけん、九月末の頃より、些か病は怠りぬれど、はかゞゝしく全快なるべき様も見えやらず、去るとし盗賊の奪ひ殘せし雜器すら、悉く藥の料に賣代なし、まいて貯へつる金は、太陽にてらせる氷のごとく、木枯はしたなく吹きすさむ日にも、薄らかなる袷一重にて、鳥を追ひ柴をかり、細き煙の代となし、雪ならぬ足も荊棘に破られ、土に塗れし筍の如く、盆に顔をてらし、水を油にかへてくらしけり

れば、いとめでたき黒髪も、枯野の薄に異ならず。されど姉姉が天性の艶しきは、煙中の玉にも比すべく、清きものはこゝろばせと、顔かたちのみなりけり。或時は寄居蟲、忘貝が病の怠りし間をうかがひ、往來の人の袖に縋り、一錢二錢を乞ひて、姉が心に叶ふべき食物を調へ、心遣ひのやるかたなさは、先に大人たちの著はし給へる物がたりに讓りて、詳には記さず。是れにひきかへ奈古平は、計策を施すべき時來りぬと大いに喜び、忘貝に藥を與へし醫師を、密かに語らひけるに、彼の醫師も金に眼なき愚者なれば、一日忘貝が病を訪ひ、寄居蟲を密かにまねき、さて言ひけるは、「姉上の病やうやく快き方に赴けども、多年の辛苦五臟を損ひ、氣より發せし病なれば、唯あるべき通りの藥にては、急に全快こゝろもとなし。人參犀角すべて高金の藥を用ゐなば、急度二十日の內には、心清々しくなるべし。」と語りけるに、寄居蟲は心やすからず思ひ、奈古平にしか〴〵のよし物語りければ、奈古平は計策なりぬと心に喜び、「そは心やすき事なり、此の頃都方の花街に、遊女の口入なす男と、われ不圖相識となりぬ。御身彼の花街に身をうり、其の金をもて藥の料となすときには、姉が本復疑ひあるべからず。さはいへ幼き時より、片時側を放れやらず、姉は妹を憐み、妹は姉を敬ひ、杖柱とも頼みしものを、其方が身の代と聞くならば、何として姉は藥を飲むべきぞ。こは御身と密かに語らふのみ、忘貝には露漏らし給ふな。われ人に倍して飯をくらひ、力はなみ〳〵の丈人ながら、金につま

るは世の習ひとて、言甲斐なき男なりと、御身が笑ひ給ふ所も面なし。」と、只管歎く聲音にもてなせば、寄居蟲は淺ましくも悲しくて、顔をさへ擡げざりしが、稍ありて言ひけるは、「姉上の病氣本復さへなす事なれば、そは妾も望める所なり。さりながら妾花巷とやらんに行くならば、看病なす者あるべからず、快くなり給ふ姉さまの御顔を、一目見る其の上は、縱ひ命に及ぶとも、など此の上の喜びやあるべき。」と言ひければ、奈古平呵々と打笑ひ、「そは何より心やすし、御身遊女とさへならんなら、餘所ながら彼の個戶の男にあひ、其の後身の代の中半ばの金をかりうけ、姉の本復なすまでは、心靜かに看病なすべし。人に鬼はなき物を、御身が赤心物語らば、縱ひ五十日が百日なりとも、暇得させぬものやあるべき、われ宜しく計らふべし。」とて、密かに寄居蟲を誘ひ、彼の個戶に引合はせ、金を借り得て寄居蟲に渡しければ、急ぎ醫師を迎へて忘貝が藥調合を賴みけり。元來此の一條は、奈古平醫師と計りし奸計にて、強ち高金の藥ならねど、寄居蟲が赤心を神佛も哀れとや鑒しけん、幾日もあらざるに忘貝が病全く愈え、常の心地にひきかへりける。寄居蟲は斯かる喜びのうちにも、又姉に別るゝ事の悲しく、人しらぬ袖に涙の露を添へぬ。かくて忘貝が病本復なしければ、寄居蟲を買ひ得し男、忘貝には絹鬻ぐ者なりと言ひ欺き、殘金をもて寄居蟲を誘ひ行かんと來りければ、兼て思ひ設けし事ながら、寄居蟲は今更のやうに悲しくて、はふり落つる涙を隱し、唯さらぬ物語のみな

し居たりし彼の男何おもひけん、奈古平を軒の外面に呼び出し、密かに言ひけるは、先の日は病にほうけしく窶れ、垢つきし姿ゆゑ、姉には更に眼も留らざりしが、今快き體を見れば、妹に勝りし艶うるはしく、殊に年も十六歳許りと見ゆるなれば、直に花魁と呼ばれんさまなり、昔し妹の方を變改なし、姉をわれに渡し給はゞ、定の金五十兩のうへに、二十兩を増すべしといひければ、奈古平暫時思案をなし、大きやかに一聲呵々と笑ひ、己が手にて口を塞ぎ、われが胸中に妙計あり、明日午時に來り給はゞ、首尾よく忘貝を渡すべしと、彼の男を歸しけり。寄居蟲は今宵此の家の餘波なりと、夫れとはなしに只浮世物語によそへ、姉へは夜と共に暇ごひなし、悲歎をかくす胸のうち、昔しさは言ひ盡すべうもなかりけり。夜も明けぬれば寄居蟲は、何時までかくて有るべき、思ひ放れて都に赴かんと、忘貝が病の中に願こめなしたる、此の地の生土神に詣でければ、奈古平は折よしと忘貝に向ひ、御身には病の障りになりもやせんと、深くも包みぬれど、我が後にて恨むるは必定せりと、是非に及ばず言ひ聞かす、一條の物語ありと言ひければ、忘貝はなほならず驚き、「奈古平ぬしの常にかはり、斯く宣ふは心がゝりにて侍る、何等由縁や聞かせてたべ」と、膝をすゝめぬれば、奈古平眼をしばたゝき、丈夫の我すら思ひ出せば、涙にむせて言ひかぬる、其の仔細といふは、日頃仲よきあの寄居蟲は、今日より此の家に在らずして、遠き都に赴くなり」と、聞くより忘貝大いに驚き、「そは何

と宣ふぞ、妹は姿とていと憐れ、遠き都に旅だつとや。よも實とは思はれじ、早とく其の由縁を語り給へ」とて、仔細のごとく、奈古平に取縋れば、空涙を手拭にてのごひ「此のたび御身の病氣は、心氣を深くいためしたれば、常の藥種にては本復も心もとなしと、醫師の言葉に力なく、寄居蟲は遊女に身を賣り、此のこゝろ飲みたる御身の藥は、彼が身の代にて調へたる、みな高金の藥なり」と語るうちに、忘貝は何と思ひ辨ふかもなく、唯ひた泣きに泣きて、顔をさへあげざりしが、涙の裏に周章して、姉を思うて遊女に身をうり、得がたき藥を調へて、本復させてくれたる赤心、禮は言葉に盡しがたしのさりながら、言に其の事一言なりと、此の姉に語りては聞かせぬぞ、縱ひ命を存へたりとも、憂き辛苦も共にせし、妹を遊女となし、おめ／＼活きて居らるべきか、慈悲に情に奈古平どの、妹を花街に遣らぬ思案、とく／＼してたべ」と泣き惑ふ、奈古平は計策なりぬと心に喜び「寄居蟲が身の代は、はや借り受けて藥の料に失ひたれば、御身彼に代りて花街に行き給ふより、別に寄居蟲を遊女となさぬ、良き計らひはあらぬ」と呟くに、歎きの内にも忘貝は喜び思ひ「一度死すべき命を助かりたれば、遊女となるとも更に人を恨むべき事なし。此の上の情に如此計らひたび給へ」と、いふ折しも隣戸の男、竹輪をつらきて來りければ、奈古平彼の男の袖を引き、又垣の外面に廻り出で「昨日契約なしつる如く、姉を渡し申すべきに、まづ金を與へ給へ」といひければ、彼の男も喜び、後金の上

父に十兩を渡しける。奈古平は半面に笑ひ半面に憂へ、忘貝が側に來り「先に語りたる如く、寄居蟲を買ひたる男は則ち此の人なり。愈寄居蟲が代りに、花巷に行きなんや」と言ひければ、涙にくれて答へだになさず。少時ありて「今も妾がいへる如く、身の代の金は妾が藥の料となしつるなれば覺悟なれど、寄居蟲が歸りをまち、言ひ殘す事も樣々あれば、明日は花巷に赴くべし、今日一日は暇たび給へ」とうち泣くに、奈古平呵々と打笑ひ「御身いと幼き事をいふものかな、寄居蟲が歸りなば、などか御身を花巷にやるべきぞや、初めより覺悟なりと彼が行くは必定せり、さすれば御身が志も反古になる理ならずや、百日百夜暇乞なしつるとも、別れは同じ悲しみなるに、彼が戻らぬこそ幸ひなれ、われ御身が赤心をば、宜しく彼に傳へん。」と、泣き居る忘貝を引立て、無理に竹轎に押込めば、只泣呃して奈古平が袖を控へ「寄居蟲が今朝物詣に出でゆくなり、姉樣輕はずみして、病み返して給はるな、藥も今に煎じ出で來ん。快きとて怠れば、肥立も遲しといふ事ぞや。能たうべ給ふなら、鯖の魚も妾にありと、いつに變らず信々しく、心を添へて給はりしが、此の世の別れといふ事は、神ならぬ身の努しらず、斯くなる事と知るならば、とくと顏見ておかんもの、脊丈は姉より大きけれど、まだ仇なき性ありて、臥具をふみはぐが癖なるに、目覺め給はば引掛けて、風ひかしてほし給はるな。今宵よりは石菩とり、歌がるたの相手がなうて、嘸や寂しく思ふらめ。落著く花巷も知れ

しなら、人を以て告げこさんに、必ず逢はせに連れてたべ、寵愛の猫が首たまは、針箱の抽斗へ昨夜縫ひて入れ置きし、忘れずやりて給はれ」と、いふ間に早乗りたる竹轎は、門邊まで舁き出す。折しも寄居蟲は生土神より立ちかへり、此の光景を見るよりも、周章てふためきかけよりて、こは姉上を何地に連れ行き給ふぞ。」と、竹轎にとりつき泣き惑ふ。姉も涙にくれながら「やよ妹、其方が花巷に身をうりし、一條の物がたりは、奈古平殿より聞きたるぞや、妾其方の代りとなり、花巷とやらんに行く程に、何卒して父の仇人を尋ね出し、一太刀なりと恨みてくれ。頼み置くは是れのみなり。」と、疾く竹轎を急がしたて、別れんとする袖にすがり「宣ふ所は理に似つれども、奈古平どのと密かにかたらひ、花巷とやらんに行く事は、思ひ定めし上なれば、妾は露悲しとも思ひ侍らず。姉さまには其の上に、肥だち給ふも昨日今日、まだ全快しといふにもあらず、さらぬだに旅は物憂き物なるに、水がはりにて勞きり、昔に返るは著きぞや、妾を將て行き給へ、姉上をば渡さじ。」と取りつき歎けば、忘貝は言ひ和め「同じ事を繰返しいはんもいと憂けれど、妾が身の代にて妾が命を買ひたるなれば、遊女となるとも恨むべき事更になし。他に漏らすもうたてけれど、淀の夜船の暗まぎれ、取違へたる御身なれば、妾が肉身の妹ならざるは、父の末期のもの語り、其方も熟く聞きつらめ、血を分けぬ淺ましさは、妹を藥の料に賣り、姉はよき衣著たりなんど、世の人口は如何ともせん術なし。情と思うて

妾なれば、花街とやらんにやりてたべ」と、よゝと許りに泣き伏せば、妹は涙おし拭ひ「妾とても宜ふ所に嫁りはなく、實の姉さま添はれぬ故、遊女となるを餘所目に見しと、人の手前も後めたし、慈悲と思うて妾を代りにやりてたべ」「いゝや妾こそ行くべきぞ」「いや妾こそ行くべきぞ」と、互に爭ひ果つべくも見えざれば、忘貝懐劔ぬきもち「南無阿彌陀佛」と自害せんとなしけるを、寄居蟲周章て押しとむれば「なゝや放ちて殺してよ、妹を遊女傀儡となし、おめ／＼活きて居らるべきや、姉が命を助けんと思ふなら、花街に行くを許してくれ」と、潸々と泣きければ、妹も懐劔抜き放ち「姉上には後れ侍らじ、花街に行くを止め給はば、妾も共に自害せん」と、死を爭へる姉妹が赤心を、囮戸の男も感じ思ひ、漸く兩人をいひ宥め、不良事と知りつゝも、活計は是非もなく、あまたの女子を買ひありき、或は夫に別るゝの悲しみ、或は子に離るゝの歎き、幾度か見つれども、是れはこれには引きかへて、死をあらそへる姉妹が心、見るにすら涙とゞめがたし。いや奈古平どのとやらん、先頃與へたる金は、藥調へし由なれば、今日の殘金はたゞ十兩の金をば、我へ返し給へ。半ばの金を損となし、姉も妹も連れゆくまじ、妹の方を變改し、姉を遊女に賣るならば、二十兩の金を増すべしといひつるは、妹にも由縁を聞きて、姉とも熟く談りてし上の事なり。察するに足下は妹を嚇き、姉を渡されとなしつるゆゑ、かかる歎きを引出し、鬼にも増りて恐ろしき、活計のわれなれど、斯く悲歎

にさまる姉妹を、引放ちて行くべきぞや。いざ疾く金を返し給へ。」と、只管に奈古平を責めければ、奈古平もこと詮し、二十兩の金を財布より投げ出し、「妹は初めよりの契約なれば、連れ行き給ふとも異議あらじ。姉を渡さんと計りしゆゑ、斯かる事も出で來しなり。此の金さへ返しなば、言ふべき事はあるまじ。」と、云ふより早く何方ともなく逃げ行きければ、姉妹は呆れ果てて少時言葉も出でざりしが、姉は漸く心をしづめ、「やよ妹今聞く如く、其方に代りし此の姉が、花屋とやらに行く時は、此の二十兩は此方の金となる由なり。さすれば是れを路用として、遙々の道ながら河内國高安、切平が在所をたづね、力を合はせて父上の仇人を討つてくれ、落著く所も知れしなら、妾も彼所へ消息せん。強ひて御身が遊女となれば、此の金も得る事ならず、路用なければ如何にともせん術なく、妾此の所に留まらば、又奈古平が立ち歸り、何等憂目にあはんも知れず。されば兩人が爲なれば、妾を花屋にやりてよ。」と、事を分けて言ひ聞かすれば、靜かにも辭み難く、答へは只涙なりけり。陶戸の男も、いと哀れなる事に思ひ、「姉の言ひつる如く此の金は御身のなれば、心置きなく是れをもつて、河内とやらん其の便宜の地に赴き給へ。」と、二十兩の上に五兩の小判を増し、財布に入れて寄居蟲が首にかけ、事を熟くも聞きわけつれば、竹輿をとつて急がせてんことを催したつる。姉は涙を押隱し、彼の茶道の傳書をとり出し、父の形見の巻物二巻、一巻は妾が方に留め置き、一巻を其方へ與へ置く程に、何方

とてあれ巴之丞良治君に、廻りあひ奉らば、此の傳書をさしあげて、父の赤心物語れよ。」と、寄居蟲がとり縋り、泣き居る姉が振袖を、先の懐劍抜き放ち、ふつつと切れば寄居蟲は、大地に摚と轉びつゝ、「是れ晴姉さま、いま一言いふ事あり。」と、歎き叫ぶも餘所ごとに、聞きなす姉は稍悲しく、泣く聲聞かせじ洩らさじと、袂を口に押しふくみ、竹轎を早めて急ぎ行きぬ。寄居蟲は只夢路をたどる心持して、其の儘そこに泣き伏したりしが、斯くては果てじと思ひ直し、心細くも唯一人、何地をあてと定めもなく、道の程十町あまり歩みしに、時雨さへ降り出でて、はや日も暮に向々とし、ほとほと道に勞れければ、とある樹の根に尻打ちかけ、少時憩らひ居たる折しも、奈古平は寄居蟲が跡を慕ひて走せ來り、物をば言はず衿首をかい摑み、既に引きたて行かんとす。寄居蟲は悲しくて、繊弱き小腕に突き退けて、「こは非道なり妾を何地に連れ行くにや。」と、發憤きて言ひければ、奈古平呵々と笑ひ、「御身等二人を多年養ひ置きたるも、遊女に賣りて金を得んと思へばなり。斯くなる上は包むも無益、我が姦計を一伍一什に語り聞かさん、先づ初め怪しき面を被りて、己が家へ盗賊に入り、彼の地に住み難き事ある故に、同子者を修行者に打扮たせ、御身等を此の地に誘ひ、又羽黒山にて神靈の告げと思はせしも、皆わが開者にて、長く當地に足を繋ぎ、御身等が成長をまつて、多なる金に暖まらんが計策なり。」と、聞く度毎に寄居蟲は怒りに堪へ兼ね、畢竟彼を欺き殺し、此の場を逃れ去らん

には如かじと思案を定め、泣き居る面持して密かに懷劍拔き隱し、奈古平が脇腹をめがけ突込めば、奈古平は狼狽へ惑ひ、女子と侮りし不覺をとりしと、又打ちかゝる懷劍を、落ちたる笠にて丁と受け留め手負ながらも元來強氣の曲者なれば、遂に寄居蟲が懷劍もぎ放ち、ほと／＼危く見えつる折、寄居蟲よりは先に、樹深き森の茂みに憩ひ、時雨の小止を待ちたる旅人、かくと見るより走せよつて、思ひもかけぬ後より、奈古平めがけ切りつくれば、何かはもつて堪るべき、雨段となりて死しけるは、心持よかりし光景なり。彼の旅人寄居蟲を劬りたすけ、笠とるを見れば是れ則ち切平なり。寄居蟲はあまりの事の喜ばしさに、切平にとり縋り、中々に言葉はなくて、只先だつものは涙なり。切平は不審しみ、「只一人にて他國をさまよひ給ふといひ、奈古平どのの爲體、小子ふつに應允ゆかず、泣き給ふのみにては其の由縁も知れ難し。先づ一條の物語きかせ給へ」と、信だちて問ひければ、寄居蟲漸く鼻打ちかみ、首尾を物がたれば、切平も唯呆れにあきれ、涙さへ出でやらず、やゝありて己が膝を丁とうち、「夫れにて思ひ合はする事あり、母の病氣に是非もなく、本國へたち歸れば、母はいと健かにて、かへつて我が安否を問はんと、去る頃人に言傳てて、消息せし由語りし故、不審しとは思へども、彼の地に數月勞れを休め、母に又もや暇をこひ、蚫田村に來り見れば、君達彼處にましまさず、それより漫にたづね廻り、今計らずも危急を救ひ申せしも、我が忠義を神佛の守り給ひしならん。思

ふに我が母の病氣と偽はりし昔偽も、皆奈吉平が姦計にて、我を本國へ歸して後、君が事を遊女に賣らんと巧みしならん。今は月日早く過ごし春なれば、姉上は遊女とはなりたまはじを」と涙にくれ、「さはいふて歸りし周諄なり。都の花巷に尋ね行き、頓て目出度う逢はせ奉らん。」と、力を添へつ勵まして、都の空に旅だちけり。是れは扨おき同じ康曆二年四月上旬に、淺間巴之丞良治は、奧州に歸國なし、其の後は事なく過ぎ往きたるが、嗚呼樂しみ盡きて憂へ更に來るの語、悲しいかな無常の惡鬼は鐵城にこもれども、防ぐべき計策なく、七月の頃より巴之丞の北堂遠山氏、風の心地と打臥し給ひ、醫師百計を施すと雖も、其の驗更になく、未だ定過ぎて程もなき花の姿を、えならぬ風に吹きちらし、遂に亡人の數に入り給ひけり。巴之丞の悲しび家臣の歎き、事々に記さんには煩々しきを略き、用なきは漏らしつ。斯くてあるべき事ならねば、御亡骸をば牧山の長福寺にをさめ奉り、七日々々の御業には、近郷の僧を集へ、誦經懇に行ひける。かかる歎きの裏にも、月日更に止まる事なく、夢の間に忌も果て、冬もいつしか過ぎゆきて、次の年の春にもなりけり。彼の去る年巴之丞が、相模國あすだ川より將て來りし、賤の小女時鳥も此の館にとゞまり、常に巴之丞が側にありて、信々しく仕へけるが、顏色美しく心ざま優しく、はや情心つく年ともなりぬれば、いと嫻ぎたるを巴之丞も情からず思ひ、寢覺の閨寂しきに、雨そぼ降る夜密かに時鳥を枕近く招きけるが、まだ世になれぬ小女な

れど、媚く姿のいとつゝましくて、強ち靜なるにもあらねど、鼻じろみて物も一切いひ出でざるが、巴之丞はなほ得三枝所、心地して、今宵なん深閨に花の紐とけそめつ、襄王の夢を結びけり。初めの程は唯假初の契りと思ひしも、さるべき緣にやありけん、しかりし日より日に〳〵愛しみいやまし、花をたづぬる胡蝶、池をめぐる鴛鴦の、須臾も離るゝ時なく、手を携へ袂を連ね、いつとなく水魚の中となりにけり。此の頃御門は畏くも人皇一百代、後圓融院にてわたらせ給ふ。時の大臣たる師良公に、瞿麥と申す女子一人いまそかりける。深窓に成長り、詩歌はいふもさらなり、絲竹の道にさへ暗からず、生平に雲上を好みて、車ならざれば假にも、大路を步く事なく、されど天性色ごのみなりければ、何なる漫行きの隙にや、巴之丞を見そめてより、露忘るゝ間なく、去る年辛崎の神前にて、端なくも回り會ひ、流石に名は夫れと言ひ兼ねて、夏草と聞えし檜扇を端折りて、古歌一首書いつけて贈りしは、則ち此の姫子なり。強ちのうちつけ懸想に、巴之丞はよき程に答へて、奧州に歸りて後、巴之丞の音信を待ちかね、遂に病の牀に打臥しければ、御母の歎き大方ならず。御父師良公にも、此の由緣畧聞えあげ、「堂上武家と隔つるといへども、急ぎ瞿麥を淺間の館に送るべし。姫が命なからん後、悔ゆるとも甲斐あるべからず。」と宣ひければ、子を思ふの切なるは、貴き賤しきの變りなく、御父も「此の儀尤もなり。」と承引き給ひ、さるべき求人ありて、遙々奧州まで斯くと聞えければ、淺間

の家臣打集ひて商議なし、「當時上にも御覺え目出度き師良公の姫君を、武家の身にて室とせんは、面目是れにしくべからず、急ぎ御答へあるべし。」と、一定の勸めに仕術なく、此の儀承引き給へども、侍女時鳥と深閨の契り心實なれば、鬱結として心更に樂しまず。待たざる月日は往ぐる事常よりも急く、程なく春すぎ夏きりて、瞿麥姫の輿いれあるべき期來りければ、時鳥をば別館に移し、婚姻の規式いと儼かにて、紅閨の私語には、往年扇に歌書いつけて贈りし折は、斯くなりしかなりしと語りいで、彼の扇をかへて春夢婆に逢ふと作りし詩、朧月夜の内侍の事なんど思ひ出でぬらんと、是は愚が推し量りて言ふ事になん。

第七　月夜に瞿麥時鳥を迎へて恥辱をあたふ

容姓物は仄かなるが、心にはなも異所に据ゑ置き、折に觸れて通はんこそ却つて契りも深く、互に愛しみも彌增すべし。先にもいふ如く彼の瞿麥姫は、顏色玉の如く膚は雪を欺き、花も妬み月も恨む美人にてあれど、春を思ふの情飽くまで深く、色好みなる性なりければ、紅粉を粧ふ事のみ一日の業となし、只管媚を以て巴之丞が心を蕩し、己權勢をとらんとのみ計りける。巴之丞は憂き事に思ひ、時鳥を忍ばせ置きつる、別館にのみありけり。さなきだに寵を妬んで勢ひを得まく思ひ、妍を爭うて

愛に誇るは婦女の常なるを、まいて斯くの如き瞿麥が性なれば、胸中燃ゆるが如く思へど、如何ともせん術なく、折もがな時鳥とやらん側女に、恥辱を與へ心やりにせんものと、腹わろき侍女奴婢をかたらひ、時鳥が素性を密かに捜り聞き置きけり。斯くて程なく八月十五日にもなりければ、月見の酒宴をうながすべしと、瞿麥、巴之丞に言ひけるは、「君には時鳥とやらん側室を、別館に居ゑ置き給ふ由、侍女等が問はず語りに、妾も豫て聞き侍りぬ。折もがな打解けて語らんと思ふに、幸ひ今宵は此の館に招き、望の夜の月を賞し侍るべし」と強ちに勸めければ、巴之丞は心の底に喜びざれど、分說くに言葉なく、夜にいりて時鳥を迎へけり。時鳥はいと面領くて、惶るゝ左右の光景を見るに、よろづ雲上をまねぶ瞿麥が好みにまかせ、新たに造り設けたる館なれば、竹芝寺の故事にはあらで、雲の上もかくやあらんと思ふ許り、母屋の廂長押の上に、大和むしろを敷き滿て、晴のかたの翠簾は鎭子をおかず、鉤をかけて高らかに捲きあげたるは、月を見んとの料なるべし。後のかたには蘇芳濃きうちの紐つけたる、唐織の壁代ひき廻し、二階厨子には火取、白銀の籠箸、匙鉢、泔杯、唾壺の箱、打亂の筥、いま一裝の厨子には、梅花、荷葉、侍從、黑方の類にや、香合の筥、合、冊子の筥櫛の筥なんど、所せく飾りたて、唐匣には八花形の鏡、錦の守汗巾まで、常に目馴れぬもの多く、遙か向ひに紫檀の手の枕几帳をたて、蒔繪の脇息に打もたれたる婦人こそ、瞿麥の方なるべしと、いとゞ心

こくかせられて、顏を傾れて立ちも得あがらざるに、瞿麥はそれと見るより座をたちて、柱に時鳥が手をとり、「咲くにも此の館に招きしを、折なければ互に面をさへ知らず、過せし事の本意なさよ。けふよりしては姉とも思ひ給へ、妾も又無禮ながら妹と思ひて、憂きも樂しきも倶にせん」と、隔意なく語らふ言葉に、時鳥はたゞ恥らひて、唯口の裏に答ふるのみなり。瞿麥は笑ひて「今は、年いと若ければ、さ憚るもことわりなれど、別に客人もあらざれば、心置き給ふ事更になし」、かゝる折打とけんには、酒にしく物あるべからず」と、自ら玉杯をとりて時鳥に數杯たまはり、むかうに、はや眞夜中と覺しく、月は南にめぐりきて、影いと冴えく興更に盡きざれば、瞿麥侍女をよびて、錦木と號けける琴をとりよせ、時鳥が前に押しやりて「御身は美人でゐらせらるゝに、心ばへも優しと聞き、一定琴は名手ならめ。常陸うたふ東國にても、音撥して興を添へ給ひねかし」といひければ、時鳥は打驚き「こは思ひもかけぬ仰せにこそ侍れ。土生の小家にて成長りし妾、いかで琴ひく事をようすべきぞ。此の儀ばかりは許させ給へ」と、ことしうつぶければ、瞿麥うち笑ひ、「業を誇らにあらはさぬものは、其の業の熟せざればなり。常言にも能く鳥とる鷹は、爪を隠すとかいふなる。包むほど尚奥ゆかし、其の琴の氣にいらで、手をくださざると覺え侍る、松風のかたや勝らん、瀧の絲やよからん」と、琴五六面とりよせ、只管に勸むるに、時鳥は實に琴弾く事を習ひ得ざれば、顔赤うなりて答ふべき言葉もなく、少時ありて、「先に

もいふ如く、僅かにても彈き覺え侍らば、上の仰せを露いなみ侍るべき、恥かしながら丹波國の田舍に生まれ、絲繰り機織り賤が營む業ならで、覺え侍ること更になし。」と、有狀に其の身の恥を聞ゆるに、瞿麥は腹だたしき顏もちして「唐土の伯牙とやらんは、聞く人なしとて絃を斷ちしと傳へ聞く。妾琴彈く事の妨ければ、妙手をいかで聞き得る事のあればあれやと、謾りて調べざるや。侍女の其の中には、少しは琴に熟したる者もあれば疾く彈くべし。梁の塵をうごかし、池の魚の躍るまでも、御身の妙手は知るべきぞ。大名の側室たる身が、幼くとも琴彈いならし、腰折歌の一首二首、詠み出でざる者やあるべき。」と、飽くまで嘲哢なせば、侍女の惡さげなるがいふは、時鳥の御方には、琴調べ給ふか給はざるかは知らねど、歌はよく物し給ふよし、兼て風說に聞きはべりぬ。」と聞ゆるに、瞿麥も微笑みて、「さればよ先よりの辭退は、實ならずとこそ思ひつれ。今宵の月を題として、歌よみて聞かせよ。」と仰すれば、侍女は打笑ひ、「奶々には何宜ふや、時鳥の御方は三十一字の歌にはあらず田舍同者の謳ひ歩く、順禮歌といふ物を、よくも謳ひ給ふなり。」と撒動きて笑ひぬ。瞿麥は不審しき面もちして、催馬樂早歌は耳なれたれど、其の順禮うたとやらんは、名を聞くさへ初めてなり。いと興ある事にこそ、時鳥うたひてよ。」と言ひければ、時鳥は消えもいりたき思ひにて、はふり落つる涙を雨衣に包みかね、答へも更になき居るを、侍女等はせめたて、水盤の柄杓もち來り、時鳥が手に

わたし」これをもちて諷ひ給へ、笈摺といふ衣は、此の御館にあらざれば仕術なし。」と、よゝとばかりに泣き居るを、彼方へ突きやり此方へ押しやり、種々に責めさいなめば、時鳥は堪へかねて、中にも悪さげにつぶ／＼と肥えたる侍女が、とりたる手を振り放ち、更に力を用ゐるやうすもなく、衿首つかんで五六間廣庭に投げ退けたり。殘りの侍女大きにおどろき、左右より取りつくを莞爾につゝ、楊の枝にも比ふべき、かよわき腕をさしのばし、或は帶をつかみ、或は胸さかを取りて、須臾の間に皆庭先に投げつけければ、何方ともなく皆ちり／゛＼に逃れゆき、唯瞿麥一人のみとなりぬ。時鳥は塵うちはらひ、瞿麥が側へ心しづかに歩みより「賤の女の妾をあなどり、琴彈けよ歌よめよと責め給ふは、樵夫に海の路を問ひ、海士に深山の案内を聞く、非道とやいふべき。たれ愚か者にも必ず一徳ありとかや、女といへども武家に仕ふる妾なれば、些しは武の道を心がけ侍れば、見給ふ如く多勢の侍女を相手となせど、手にたつ者一人もなし。以前は雲の上人にもせよ、今は淺間家の奴なれば、長刀小太刀はいふも更なり、弓馬の道さへ心がけ給ふと覺え侍る。何にもあれ無禮なれど、御相手になり進らせん。先づ酒一つきこしめせ。」と、ありあふ菓盤に杯を乘せ、左りの手の大指と、食指にてすみをおさへ、いと輕々と瞿麥が、目さきへ突きつくれば、此の力にやおそれけん、瞿麥更に言葉をも出さざれば、時鳥うち笑ひ「今にもあれ敵此の館に寄せ来る其の時は、良人に代りて討死せん

こそ、武士の妻の本意なれ。姦しく口立には似氣なく、力なき侍女等、今時鳥が歸館るなり、何人にもあれ出で合ひて止めて見よ、愚かなる唐人は知らず、琴調べて敵を防ぐ計策あらば聞かせよ、時鳥が竹轎もて、こゝと家來を呼びいれ、瞿麥に會釋なし、徐々と立ち歸りしが、華やぎたる酒宴にて、かくまで恥辱を與へられ、一時の怒りに乘じ奶々を罵りたれば、自害して死に亡せんと覺悟を極め、病なる由いひて、己が閨房に引籠り、あたりに屛風引廻し、ありし事ども書置し、心を靜めて懷劍ぬきもち、自害せんとなす折しも、巴之丞は走りいで、懷劍もちし其の手にすがり、とかくあらんと思ひしゆゑ、御身よりさきに此の所に忍び來り、さきよりの一二は紙門のあなたに聞きたるぞ。奧瞿麥が不良きふるまひ、われも後堂にありて、今や出でん〳〵とおもひしが、却つて我彼處にあらば、御身がためにも惡しかりなんと、眼をふたぎて忍びしぞや。自害せんとなす心根、理には似つれども、去る頃より月水もとまり、酢きものを嗜むと聞く。若し懷胎も計りがたし、腹なる子は不便とは思はぬにやと、さま〴〵に言ひ和むれど、時鳥は唯涙にくれ、頭をふりて承引かざる面もちなりしが、不思議なるかな持ちたる懷劍とり落し、五體俄に顫ひ出し、惡寒發熱甚しく、更に人事をしも知らで、其のまゝに倒れ伏す。巴之丞初め侍女の介抱にて、漸く五三日を經て、正氣はつきぬれど、腫物總身に隙なくいでき、紫だちて腫れ上れば、巴之丞は並ならず驚き、醫を招きて見せしむるに、何

事情なれや正には知り難けれど、是れ俗に言へる癩病なるべしと答へければ、巴之丞は浅ましき事に思ひ、時鳥にかくと聞えなば、自害せんは必定なり、唯一疾毒より発せし腫物なれば、近きに快愈のべし。」といひ教へ、金を厭はず醫療手を盡しけり。

第八　巴之丞再度皇都に旅だつ

程なく春にもなりぬ。かくて後時鳥が病日夜にいやまし、花の顔色松皮の如く爛れ腐れ、臭気室内に満ちぬれば、青蠅集まつて膿汁を啜り、薬まゐらする侍女さへ、袖にて鼻をおほへる許りなれど、巴之丞はかく穢れたるも厭はず、日毎枕近く来り、看病の侍女に何くれと心を添へぬ。時鳥が心の中には浅ましき事かぎりなく、自害して死なんとは思へども、巴之丞が情深きを思ひかへし、夢の間に二月にもなりければ、再度都在番に登るべき由、公の命黙止し難く、巴之丞は心ならずも旅装を整へ、既に其の日も近づきて、時鳥が病状を訪ひ、涙ながらに別れを告げ、「われがなき上にて必ずしも心強く持ち給ふべし。頓て帰り来らんに、全快して待ち給へ。」となだめ、懇に聞えければ、時鳥も涙にくれ「所詮妾が業病は、本復なすべくも思ひ侍らず、是れこそ今生の別れならめ。妾言ひ置く事一條心強くおはさんが、聞き置きてたび給へ。妾が養親は丹波國氷上郡、柏原といふ所に住みたる、鏡師

木の瀬といふ者なるが、忠安三年某の月某の日、木の瀬が實の娘字の葉といふ、四歳になれる愛子を將て、流川の夜舶に乗りしが、妾もその時父につれられ、同じ舶に乗合ひ、彼の娘と遊び居たる折しも、如此々々の騒動に燈も消えたれば、善悪もしらず、妾を娘字の葉とこゝろえ、其の場をいそぎのがれ逃げのびて、心おちゐて熟く見れば、木の瀬はわが娘ならぬに驚き、妾も父ならざるを見て、悲しかりし事は今によく覺えて侍る。僅かに四歳の年なれば、父の名も所もしらず、仕方なう彼の木の瀬が養女となり、名もそのまゝ字の葉とつき、成長はなしたれど、父は程なく此の世を去り、母は邪見の性にし、繼子棄子と疎み果てられ、遂に遊女に賣られんは必定せしつ、疾く此の家を逃れ去れと、近隣の者の諫にしたがひ、道ならぬことゝ知りつゝも、唯一人丹波國を立ち出でゝ、されど木の瀬が語りしは、流川の夜舶にて、我が父のもらひうけたる様、奥州の訛りありと聞きしのみ、奥州へ下りなば、不圖も父に逢ひまゐらせんと、名をば問ひつゝ來て聞えざりしが、時鳥の鳴く音を聞き、妾が名と呼び給ひしに、妾の子で子にあらぬ時鳥、深き因縁のこもり侍るよしと不思議さに、高聲も御壽のそのうちに、妾が父にめぐり逢ひ給ふ事もあらば、よしなに語り聞かせ給へ、さし方には證據となるべき品もなければ、彼の實の字の葉が所持なせし守は、世に稀なる笹蔓錦、一寸八分の正觀音、此の一品をこそ持てる女の養親こそ、妾が實の父にておはすこそ、母はいと幼き時にたくれ給ひ、

二人の嫂うへありし事のみ、朧氣に覺え侍れ。かかる業病うけつれも、義理ある母の目を掠めて亡命なし、剩へ賤の身をも顧みず、御情をうけかけ侍る罪ならめ」と、膿汁に穢れたる手にてかれば、取りまかる事さへ心に任せず、枕にうちもたれ身を涙に浮きぬ許りに歎きけり。巴之丞は時鳥が便りなき物語を聞く毎に、いとゞ不便もいやましぬれど、かくては果てじと心をはげまし「御身が實の父姉は、奥州の者とあれば、尋ね得ぬ事はよもあらじ、頓て對面なさせん間、力を落さず養生なすべし。」と、さま／＼に心を添へ、都の空へと急ぎけり。

後編發端

此の末黑麥時鳥を殺し、時鳥の怨鬼黑麥を苦しむる事わけは既に書きはべりつれど、剞劂師の工未だ成らず、書房しきりに發兌のときをいそげば、後編にゆづりぬ。後編發販のときを待ちて、首尾まつたきを見給ふべし。

かくて淺間巴之丞良治は、都在番に赴きぬれど、心更におだやかならず、我當國に來りて後、瞿麥が妬心にて側女時鳥の、いかなる憂目や見つらんなど思ひめぐらし、只管古鄕のみ案じ思ひ、學窗にのみ籠まり居ければ、心氣結ぼれて人と對語りを嫌ひ、唯いねがてにて五月も末になりぬ。家臣は巴之丞が物思はしき顏付を、旦夕心やすからず思ひ、かくては頓て勞きとなりなんは必定なり。かかる

期淫酒の毒たるも、却つて氣を保養の藥となるべし。」と、密かに心ききたる白齒者を語らひ、それそれの納涼にかこつけ、忍びやかに館を夕暮より立ち出で、從者をばそれの所より歸らしめ、五條坂の花街に到りけり。巴之丞は常に歩みなれざる大路なれば、往來の人も目なれざる事のみ多く、足もいと輕らかに覺えて、堤を下り大きなる娼門を過ぐれば、あまたの遊女の客まち顔なるが、茶屋が牀几に腰うちかけ、或は門首におくり出でつゝ、只管に別れを惜しみ、又の逢ふ夜を契るもあり、或は稀の見參をよろこび、手を攜へて樓に登るあり。巴之丞は今宵初めてかかる光景を見るより、古今の人情かはりなく、彼の客にならましかば、樂しからんなど思ひつゝ、心も浮きたつばかり、彼方をながめ此方を顧み、漫行く折しも、此の地の惡棍巴之丞が佩刀の柄に袖を引きかけ、會釋もなくかなぐりて行き過ぐれば、巴之丞白齒者に向ひ、「其奴慮外者なり。切りすてよ。」と言ひければ、彼の惡棍が衿首つかみ、投げ退けんと閙く折、惡棍同士と見えつる男、四方より走せあつまり、巴之丞主從を中にとりこみ、無二無三に打つてかゝる。始めにも言ふ如く、忍びての夜行なれば、從者をばかへしつ、只三五人の白齒者、惡棍の多勢に敵しがたく、既に危く見えける所へ、一箇の俠客韋駄天の如く走け來り、片端より惡棍を取つて投げ退け、巴之丞を後に圍ひ、「是れこそ止事なき淺間某の君なるぞ。此の後無禮働く奴等は、一人も活けて歸すまじ。」と言ひければ、惡棍等も彼の俠客が力量は、兼て恐れ

雷の聲を聞く、鶏の見し鷹の如く、皆散り〳〵に逃げ行きけり。爰に又忘貝は、此の花街に賣渡されて、今は全盛といふ名高き太夫なりしが、此の處を通りあはせ、淺間の君なりと聞くよりも、昔にや良治なりしを知りて、自ら巴之丞かと、「此方へ來り給へ。」と、とある茶屋に誘引ひけれども、例の俠客の巴之丞、白齒者と打連れ、同じ茶屋に到りける。此の俠客は御所の五郎藏といふ者なり。此の後に如何なる事のありや、詳なる事は後編の端首にあり。發兌の期を待ち得て見給へかし。

淺間嶽面影草紙三之卷 終

おもかげざうし後編

巳之丞遠州が許へかよひ、五郎蔵人違へにて遠州を殺し、言譯なうして切腹なす事、および星影土右衛門が姦悪、寄居蟲袖乞となりて花都に来り、遠州が殺されつるを何某に聞き、我が姉とは夢知らで、哀れなる曲子につゞり、門ッだゝ合はせて花街をうたひありき、實の母にめぐりあふ事、又遠州が従に亡魂となりて、香のけぶりに再びすがたをあらはすは、富本常磐津のじやうるり本をもととして綴れり、是れを戯場の狂言に比せば、前編は大序なり、第一番め大づめにて、後へんは第二番の序幕なり、大切に至るがごとし。

淺間嶽面影草紙後帙

逢州執著譚

執著譚序

鏡花間ニ水月ヲ曰ク。汝有耶無耶。水月曰ク。子是乎非乎。相契共成歡。且嘗釋曰。我嘗稱乎。人以テ爲ス有ト我諾々。爲ス無ト我諾々。故ニ假ニ我發起ス頓悔ヲ。我以テ不レ管セ。當ニ我得ル入ルヲ菩提ニ。我以テ不レ誇ラ。冥々混々。任ニ人之所ニ捨テ焉。譬ヘ之ヲ一貫ノ道。帶ニ之一切ノ智。日而曰ヘ之ヲ。昔而傳フ之ヲ。何ゾ嗷々嘖々也。我何勝乎。功成リテ而不レ居ラ。與ヘテ而不レ奪ハ。德乾坤焉。無相千體無乇。萬聲曰ク已ニ矣ス々々。今都下有ニ柳亭主ナル者一。能ク以テ無ヲ爲ニ有ト。以テ有ヲ爲ニ無ト。神變自在ニ不ニ可ラ言説ス也。近來所ノ著ス有リ執著譚五卷一。其ノ化功非ズ汝ガ權實ニ。及ブ汝ガ業果ニ而過ル。得タリ補受ケ後隔之態ヲ如何ト。一一容相顧ミテ而不ニ知ラ所ニ爲ス。愕然トシテ而自失シ。忽爾トシテ而消散ス也。余假寐朦朧之間。聞ク此ノ談ヲ。如シ有ルガ所ニ請フ時ニ。偶友人種彦携ヘテ扉ヲ來リ。出シ稿本數卷ヲ。託シテ序ヲ於余ニ。余開ヲ卷ヲ熟ク觀ルニ。全ク無相之所ニ稱スル。悉ク々ク。上篇中ニ。因テ不レ顧ミ拙語ヲ。且ツ所ノ聞クヲ書シテ於卷端ニ。以テ充ツ乞責之科ニ云フ。

壬申孟春

崇米道人題ニ於松亭之西窗下

上には天竺にてなつかしき、思ひの山をかさねては、けいせい山によだれの僊り、驛路の鈴を振るとかや、わが朝の唐土の物語、それは煙の中よりぞ、かをりのゆかしく立昇る、あふ州がたの姿ありしにはあらず、道中を歩むが如く見えたるは、さながら戀る郭にて、くるは誰の爲其樣のみ、二上り「恨みも戀も殘らねど、よしや心のかはりやせんなしと、思ふ疑ひはらさん爲の、誓紙をやいた煙となしたまふ。

中畧

一遊女の地獄さりとては、二六時中にはやひきかくる三味線の、さても君とはよい中々よおいとかれ酒のすさまじさ、たゞ熱鐵をのむ如く、其の日の酒宴敵はたれ、相手はたぞ、あら物々し、かねて下くだはしつゝらん、いで物見せんそこのくなと名のりかけ、小づまかいとり袖うちかざし、歌「一振袖の花に見まがふそのおもはくを。

下畧

右は外記節の逢州淺間が嶽懺悔の段なり、こゝをもて古くよりもてはやしたる狂言なるをしり給へ。

逢州執著譚　後開後編

一名本朝長恨歌

作者柳亭種彦

五巻總目錄

第一　巴之丞花街に到る夜闇一齋がむすめ
　忘貝に廻り逢ひ茶道の傳書を得る事

第二　田字草が長にて逢州時鳥姉妹の
　名のりをなす　竹器の瞿麥恨みの風に散る事

第三　瞿麥の方深夜に時鳥を殺害なす
　男波の笛鬼火に順つて飛びさる事

第四　時鳥の亡靈種々の奇怪をあらはし
　瞿麥狂死　まほろしぎぬたの事

第五 巴之丞菊が澗の山莊に遊君を集會め
細太丸に命せて猿樂俳優を興行なす事

第六 五郎藏杜鵑花と思ひ違へて逢州を殺す
土右衛門再び隱形の術をほどこす事

第七 寄居蟲袖乞して四ツ竹の曲子を唄ふ
於杉が懺悔物語暗に母子再會の事

第八 非人の家に良治雨の小止を待つ
袖乞の娘茶をたてて良治にまゐらする事

第九 逢州か幽魂巴之丞を清涼山に誘引ふ
石橋の物語 金色の獅子王牡丹の花に狂ふ事

第十 寄居蟲父の仇をうつ古鏡の
威德土右衛門が妖術をくじく事

淺間嶽後編 逢州執著譚五冊總目錄 畢

淺間嶽面影
草紙後帙 逢州執著譚 篇卷

柳亭種彦著

第一

巴之丞花街に到る夜閨一癖がむすめ
忘貝に廻り逢ひ茶道の傳書を得る事

夫れ務めて厭離しつべき事、愛欲に過ぎたるはなし、人は愛慾のうちに、獨來獨去し善惡變化し、殃福異所なりと、佛經にも說かれたり。されば愛慾に執著するの迷ひは、如何なる事よりや生ずる、目注て想ひをなし、おもひ熾んにして愛をなし、愛感じては遂に身を摩で穢ふまじへ、戀通つて色迷ひ、迷ひきはまつて畏れをなす、こゝに至つては死すれども、なほ愛執の冥路に迷ひ、魂魄中宇にさまよふが故に、假に姿を現すものありとなん。かの古くより言ひもて囃したる、遊君逢州も斯かる類にやありけん。そもそも京都將軍義滿公は、往んじ永和三年戊午年の三月、室町の新館に移徙ありてより、花の御所とも室町殿とも稱しけり。于時管領武藏守賴之を始め、聰明叡聖賢の輩に近臣營中に充ち、頻に四海昇平し、たゞ弓箭の塵を拂はず、其の上一莖九穗の豊饒なりければ、花におご

月にうかれ、花車風流を好むもの多く、田樂白拍子早歌催馬樂なんど、もてはやす代とはなりけり、されば都五條坂の曲は、熱鬧昔に倍し、歌樓妓館十字街にたちつゞき、絲ならで竹ならぬ、娼妓舞女袖をつらねて、西に東にゆきかひつ、花にたぐふべき容なるも、飄客のあらしにさそはれ、月と見なす貌は、玉簾の雲にかくる、紅の日傘は、絳き雪の積るかとうたがひ、黒漆の駒下駄は、なき霜を踏むかと驚く、是れ仙境に似たるの慾界、玉と欺く白露の、あくれば消ゆる契りともしらで、霜を被き月をおびて、頻波のしげく／＼より來る遊人は、氷を擔ひて井を填むるが如く金玉盡くる期あり、愛情つくる期なし、遂に樂所愁怨を生じ、身を亡ぼすのさかひにやいたらん、畏るべく愼むべし。爰に淺間巴之丞良治は、永徳二年三月のころ、陸奥牡鹿郡をうち立ち、都在番に赴きぬれど、愛宕時鳥が病のうちといひ、何くれと古郷の空のみしたはしく、鬱結として心更に樂しまず、漸くには所勞とやなりなんと、家臣のすゝめにまかせ、納涼にかこつけ、此の夜花街にいたり、かかる光景を見廻りて、やゝ積鬱を散じけるに、漫行の惡棍等、巴之丞が太刀の柄に袖をひきかけ、會釋もなく搜り、其の上同手の惡棍をよび集へ、飽くまで惡口なしけれど、忍びての夜行なれば、只二三人の白歯者のみにて、かかる多勢に當り難く、ほと／＼危く見えたる折しも、御所の五郎藏といふ一人の侠客、六方がゝりに歩み來り、惡棍を取つて投げのけ、巴之丞を背に圍ひ、金剛立に立隔たり、「是れこそ淺間

なにがしの君にて、止事なき御方なり、此の上に無禮はたらく奴等あらば、一人も活けて歸さじ」と罵りければ、悪棍等は猫を見たる鼠の如く、何地ともなく逃げ行きけり。時に此の花街に雙びなき、逢州といふ全盛の遊君あり、思はずも今の騒動にて、揚屋に通ふ路をふさがれ、側に彷徨ふ、敢て驚くけはひもなく、眞紅の總角結びさげし、絹張の團扇にて、面にかゝる土埃をうち扇ぎて居たりしに、今御所の五郎藏が、淺間の君なる由いひつるを、聞くと等しく蓮歩輕く移して、自ら巴之丞が手なしとり「最危き事に侍るなど、懇懃に勞り、落ちおりし扇團扇を、禿をして取り上げさせ、五郎藏と打連れだち、とある茶亭の樓にのぼり逢州いひけるは、「過刻に五郎藏主のいひ給ひしを聞き侍るに、君は正しく淺間巴之丞良治公にて在すべし、そも何等由緣ありて、輕々しくも此の處に、到り給ひしこと聞ゆるに、巴之丞も然ならず驚き、「御身いかにしてや我が名をしりけん」と、なほ詳かに問ひ明らめんとなす折、花車一人走り來り、「逢州さまはや暮近きに、とく急がせ給へ」と催しければ、逢州は名殘の多げに座を立ち上り、此の花街の風俗にて、大夫主戀たちうち集ひ、揚屋いりといふ事の侍ふ。今は心せき侍れば、暮れなば妾が座敷に請じ、寛やかに語り申さん。年頃會ひ參らせたく、旦夕心にたえざりしに、いかなる風が君を柳の巷にたびけけん」と微笑み、事なれし樣に裾をあつかひて、いとかはしく梯子をくだりければ、巴之丞さらに不審はれず、「遊女といひ汝といひ、我を深く敬ふ面

ぶりなるが、如何なる縁故ある者にや、其の事はやゝ語りてよと問ひ給へば、五郎蔵は涙を流し、前髪はらひて面がはり、斯く實しき姿となつて、名をも御所の五郎蔵とあらためつれば、御見忘れ給ふも宜なり、昔年の刻は君の御側に侍ひし、須崎角彌にて候ふといひければ、巴之丞再びおどろき、さればこそ何とやらん、面貌に見おぼえありとは思へども、其の人なりとはしらざりし。互に丫角のころなりしが、よくも我を見違へず、過刻に醉興の奴等を追退け、危急を忽ちすくひしも、三世の機縁盡きざる故にやあらんずらん。」と、隔てなき言葉に、五郎蔵は女めかしくも涙とゞめかね、「若氣の花のあだし心より、御妹君遠山尼公の御侍女、杜鵑花どのと密通し、既に縛首も刎ねらるべきところ、思ひかけずも遠山尼公の御計らひにて、不思議に命たすかるのみか、金まで給はりし鴻恩、報い奉るよりもがなと、思ふに甲斐なく疾くも無常風吹きて、此の世を去り給ひしと聞く悲しさ。斯て今は國を隔てつれば、御墓にさへ詣で奉らず、朝な夕な思ひ煩ひし折に、幸ひ君都にいまして給ひしよし風かに聞き、露大恩を報ぜんと、餘所ながら守護いたせしに、一點の赤心を神佛も憐れとやみそなはしけん、計らずもめぐりあひ奉り、某が喜び此の上や候べき。」と、はじめをはりを物がたり、美酒鮮魚をところ狭く持ち出でて、なほ三五人の歌妓をむかへ、琴を彈らし今樣の小歌なんど、こゑおもしろく唄はせ、其の實義面にあらはれければ、巴之丞も彼が志の切なるを深くよろこび、か

さねて言ひけるは、「いかに五郎藏、世をしのぶ身のうへなれば、名を改めしは宜なれど、御身といへる姓は、地名ともおもはれじ、是れには一定因縁あらめ、語りてよ」と宣ふに、五郎藏うち笑ひ、「申し出すも徑庭しくは候へど、往年五月二十八日、雨夜のはげしき夜、何當言葉とがめよりの事おこりけん、醉狂の客手に白刃をひつ提げ、大わらはにて走り巡り、あまた數を取逃せしが無念とて、知るしらぬ分ちなく、往來の客を二三人、淺瘡をおはせし愚者あり。小人輩の醉狂人をくみとめて、榊邑の騒動を靜めしか、時に五月二十八日、菖蒲もしれぬ五月晴、其の昔富士の裾野にて、曾我五郎時宗が、御所の五郎丸が抱き止めしに等閑たりと、誰いふとなく異名とはなりて侍ふ。又御所といふに因み、新開荒藏、二宮太郎兵衛、梶原平平、俣交重すけなんど、鎌倉武士の名をかれども、大一大萬、二蓋子、三頭子、龜甲、或は花菱のたぐひを染めし、湯帷子を著なしたる俠客は、悉小子にしたがふ者共なれば、若しや御夜歩行のをりもあらば、御供に俱せらるべし。夫れはともあれ昔を此の茶亭に誘引ひまゐらせしは、田字草の長が許に名たかき、逢州と申す全盛の花魁なるが、君にかねて逢ひ參らせたきなんど聞えしは、小子更に不審はれず、御心當りも侍ふや」と問ふ。巴之丞頭をふり、「否我も其の事未詳しらぬ思へども、彼が言葉に今宵我をむかへて、物がたらんと言ひつれば、後には自來事のやうは知るべし」と、仔細に語らふ間に、逢君一人何心なく、樓にのぼり、巴之丞をとふかうへ、居る。

はしたなく、ゆゝしくもはしたなく、眞白なる面さへも氣のほりて、紅梅つゝむ花の雪の、さえまいりたき面ぶりなりしが、せん術なう五郎藏が側に止まり居れり。巴之丞は是れにも心とゞめず、杯にうつれる顔を熟々とうち眺めつゝ、いかに五郎藏、汝館にありし其のころは、母君もいと健かに在して、我も汝も前髮ありしが、斯く二人とも面替るは、筬投ぐる間より疾かなり。其の日は我家にありて、詳のことは知らざりしが、袖の渡りの花見のとき、家臣星影土右衛門といふ愚者、我が戀のかなはざるを遺恨に思ひ、汝と杜鵑花が密通を視明はし、常言にいふ毛を吹いて創にふるれば、己れ疵をうくるの理、杜鵑花に送る艶書を落し、二人齊しく其の席より追ひ拂はれしとやらん。母君の宣はするは、「まだ角彌に妻もなく、況んや杜鵑花はかひなづけし夫さへなければ、不義にして不義にあらず、互に思ふ中といひ、天のなせる良緣ならんに、斯く分明き事に及びつれば爲便なし、折もあらば往方を尋ね、勘氣をゆるし得させよ。」と、密かに我に宣ひしが、はや徒らに六年あまりの春秋を過しつ。」と懷舊の涙つゝみかねて見えければ、五郎藏も漫にもの悲しく、頭をたれて回答さへなしやらず。巴之丞潸然たる涙を止め、「やよ五郎藏さな歎きそ、今日はからずも廻りあひつることこそ幸ひ、都在番果てしのち、國の老臣にも聞えあげ、陸奧によび迎へ、元の武士にとりたて得させん。」と言ひつゝも、何事やらんおもひ出でゝうちほゝ笑み、「我ながらいと愚かなる物のいひざまや、此の事は今論らずともお

そうなし。さきより事に紛れて問ひ洩らせし、杜鵑花がいと健かなるか、愛子にても儲けしやと問ひ給へば、五郎藏側に居ゐたる遊君の手をとり、巴之丞が前に誘ひ出申し出づるも面伏なる事にはあれど、小子往ぬる年病に罹り、貯蓄つきて仕方なく、彼の逢州主と同じ長、田字草のもとの遊女に賣り、僅かの金に身をかへて、我が妻にして妻ならぬ、此の遊女こそ杜鵑花がなれる果てに候ふと、語る中より彼の遊女を熟見るに、果して杜鵑花なりければ、「こは思ひかけず」とて、巴之丞たゞならず打驚き、それも彼も涙をさそふる種なりけり。杜鵑花は只面を耻らひ、却退りゐしていふ事をもしらず。やゝありて、君がかゝる所に居給はんとは思ひもつかず、漫に此の楼に登り来て、かく廓めきたる姿にて、あひまゐらする事面なくこそ侍る。噯今さらに思ひ出せば、はてしなき涙に絞る、袖のわたりの襟どき、戀風故にわりなく、身は春ながら秋さびし、白河の関うちこへて、遥けき都におもむきつ、御母君より多なる金は賜ひしかど、女夫とも活計のみちに疎く、譬へにも坐して汲めば滄海もつくるの期あり、一葩づゝに落る花の、諸は早く青葉となり、知がりもとにゐる田鶴の、ともしくなりし其のうへに、五郎藏が長の病苦、首の飾りや手調度さへ、皆賣盡して仕方なく、つい歸るべき烏の卵の、すもりが長に身を委ね、盡くに褪き眉黛の、似氣なき年に寄らせぬ、鹿子目結のいとしごき、面にはわからぬ心には、泣いて待つ間をまたぬ間と、見すれば長し曉の、鐘は怨みて湯

とはいへども、煩惱の汙れ流ふによしなく、穢土の中の穢土とや言はれ、苦しき海の中に苦しく、實に遊女ほど憂身なのは侍るまじきと物語るを、五郎藏は目をもて言葉を止めければ、はやくも其の心を得て、涙搔拂ひ笑ひに紛らし、君には氣の結ぼれ給ひぬらんと、遊里にいたり給ひしなるに、心なくもしありかいなる事聞えしは、我ながら鈍ましやっと、歌妓もろともに琴を調べ、朗詠など唄ひければ、巴之丞も漸く心うきたち、「かゝる事なん心を勞する事なかれ、我國に歸りて後は兎も角も計らひ杜鵑花をも贖ひ出さん」と宣ふに、二人も斜ならず悅び、杜鵑花は疊紙より鬢櫛取出でて、巴之丞が髮の亂れを搔きあげなんどする間に、金烏は西山に傾き、淸水寺の晩鐘、錚々と音冴えて、思はれん解語花を催す羯鼓ともいふべく、數の遊君我劣らじと誰れなるらし、天飛ぶ雁の連なるが如く、大路を裔々とゆく樣は、心言葉も及ばれず。杜鵑花は元より里馴れし女なれば、何くれと心そへて、蒲簾敷きみて、巴之丞を高欄近く移し、あれ見たまへや艷々として、唐綾の袿にかゝる黒髮は、尾花のすゑとうちみだし、蹟崩に水車、繰出褄にそめなるは、河隈の長に名高き、經寫大夫に侍るなり、茶巾筒の紋をつけ、笹と鷺と橋をそめなしは、鵲の隱語、遠波の長の如意の君とか覺え侍る。梯子の菓島の駝子いり、小栗くづしの今樣染、白野の長こそ孔雀の君と申すなり。擂箱の團扇にくるくるの上に繪いりは、おなじ長の河孤頰、亂菊そめしは力命大夫、巾乙の丸は孤蘇の君、中小の丸、うねすぢは

石龍宮の小馬、白女、横葛蒲に物の本二、珠藻の長ッ中指觀音、次なるは字男、香爐、小兒とか號し侍る。これらは悉蟹島、江口、神崎などに、名高かりし遊君を慕ひ、其の名をよびつるとか承り侍ると覺えしまゝに、物語りければ、巴之丞も殆ど興にいり、又杯を廻らしける。此の時逢州は少しく後にひきさがり、しばし粧ひをこらしてねり出でしが、傍に見つるよりは艶色殊まさり、鶴の鷄の羣にたてるに似て、今まで花と見つるも、此の花に消ひて氣はされ、數の遊女は唯常磐木の色なきが如し、輿よりて逢州再び茶亭に來り、しばしそれにて待ちねかしと一と巴女と思はしだれの外に殘し、さら〳〵と衣のおとさへして、樓に登り巴之丞が側近く居よれど、過刻には心せかれて、事のやうを聞えあげず、先づ是れ見給へとて、手帕につゝみたる卷物とおぼしき物を差出せば、繰返し熟見て、巴之丞おほいにおどろき、「是れこそ我が年頃懸望するところなり、茶道傳授の秘書にして、奥書に圓一齋としるせしは、則ち我が茶道の師なり、御身いかにしてかかる品を持てりや。」と問ふに、逢州は雙眼に涙をうかめ、「妾は一齋の娘、忘れ貝と申す者にてはべるが、父一齋君より大なる金をあづかり參らせ、御館より歸りがけ、盗賊に出會ひ、彼の金を殘りなく奪ひとられ、剩へ手疵をおひたまひ其の疵の星もえこらへさせたまはで、亡せたまひけれ、君の事心にかかりつゝ、せめて茶道の秘書なりとてもまゐらせたくあらせ、少くは罪を贖へ、とて、遺言ありしながら、未だ吾が身はみさかなくて、御館にまゐらん心もな

く、兎や角思ひ屈したるうち、心ねぢけたる伯父故に、様々の辛き目見て、遂にはかなき憂き節にぞなり侍る」と、涙と共に語りければ、巴之丞も眼しばたゝき、「我も一齋が非命の死を聞けり、因果ぞ逢はざる其の昔、斯くと聞えば為さんかたもあるべきにこそ」と、情ある言葉に逢州は、唯悲しくて泣く。杜鵑花五郎藏も、「こは思ひかけぬ事なりし」と、或は歎き或は喜び、其に奇縁を感じけるが、さて杜鵑花巴之丞に向ひ、「逢州主とは姉妹の如くかたらひまうせど、一齋主の娘にてあらんとは、妾さへしらざりし。」と言ふに、五郎藏も側より、「杜鵑花の心うかざるも宜なり。我は若年の刻君の使として、一齋どのの家に行きたりしかば、幼年きをりは逢州主を見參らせし事もありしが、今まで露それとも知らざりし、思ひ出づればいと幼き女子、髪にて雛造りて居給ひしが、それにてやありけんことと打笑ふに、逢州は歎きの裏にも覚めず思ひ、「其の後はいひ給ふな」と、漸くうち微笑み、「無縁き閑話して、さぞ心なき女とや思すらん、先にも申す如くなれば、其の祕書は君の方にとあずけ給へ」といふを、杜鵑花はよき折からと杯をとりあげ、「逢州主にも竹葉過し給ひて、憂へを拂ひ給ひね」とすゝめつゝ、少時めぐる杯に、巴之丞も大いに醉ひを發し、逢州が艶なるに心や移りけん、眉末の眼きたり、唯顔打まもるを、杜鵑花は疾くその心を推し、逢州が連れ來りし杉といへる老女に、「とかくこなたへ」と私かに語らひければ、杉は頓て樓にのぼり、「君にはいうこの花にもあれ、一夜あかさん

上にいたり給ひしならん、夫れ彼といはんより、縁深き逢州主のもとにいたり給はば、我がともがら
にとりても幸ひならん、杜鵑花ぬしいかに思すやと、己が心より出でつる如く言ひけるに、巴之丞は
早くも意中を言ひ當てられ、流石面なくや火かげに顔をそむけ、よきに計らひてよと、他の事はいは
ず、杜鵑花は心に喜び、いざ逢州ぬし君を誘引ひ參らせ、なほ言ひ洩らしつる事共を語り給へと、い
へど、逢州は顔さと赤うなし、一體なき事ないひ給ひそ、賤しき身にして、争で君の願をとるべきと、
含む樣にしてなせど、是れも滿面に笑みを含み、心春めきて見ゆるに、かなたをさなきふるまひや、兎
まれ角まれ田字草の家につき給へことと、杜鵑花は心輕げに、先に進みて立ち出でければ、五郎藏は明
の日來りし、又もや會ひ參らせんことと、己が家にかへりければ、扨も巴之丞は二人の遊君ともなはれ、
程なく田字草が長の家に到り見るに、すこし奥まりたる處あり、是れなん逢州が物すまひにて、經營り
ようけし座敷とおぼしく、前に透垣めぐらし、はては廣々と限りなき庭につくりなし、むづかし
げなる大路のさまは、ものふりたる木立に隔たりて見えず、今まで聞はしきには引きかへ、閑寂深々
として寂寥たり、時に逢州は巴之丞を廊にうつし、女童に命じ瑠璃燈に火を點じければ、水晶の簾
に輝き、異國にありといふなる夜明簾かとおもはれ、高麗百濟のにしきにや、衣桁にかけわたしたる
毬杖、九花帳ともいふべし、床違棚には唐画薫籠香爐かざり、碁盤雙六盤貝桶追玆、歌がるたの文

宇ぐさ、お花結の類、もてあそびのくさ〴〵さへ、漏るゝところもなくおきならべ、側に大きやかなる竹器なるに、最とうるはしき唐瞿麥を活けたりける。ほどなく屋廊に人のけはひして、女童歡女なんど大勢、數多酒肴を持ちいでければ、再び爰に酒宴なりしき、目馴れざる歌妓が舞ひぶりに、おもはずも盃の數を重ね、酒宴も闌と見えけるを、杜鵑花それと心づき、ありあふ人々とうち連れ、此の席を退出ける。

第二　田字草が長にて逢州時鳥姉妹の名のりをなす　竹器の瞿麥恨みの風に散る事

其の夜も既に更けわたり、雷鳴遠く響き、雲のたゝずまひ例ならず、雨少しうちそゝぎけるか、程なく雨やみ雲散りしと思しく、月光窗をうかゞひ、ねぶたげなる曲子の聲さへ、物がなしく聞えけり。斯くて巴之丞は須臾鴛鴦の衾にまどろみ、眼をひらいて枕邊を見れば、逢州は端に起きたち、野風呂やうの物、手づから打扇ぎて居たりしが、巴之丞が目ざめしを見て「最早三更も過ぎ、四更にも近かるべきに、煎茶一碗きこしめされ、竹葉の醉ひを醒し給ひね」と差出せば、心地よげに飲み終り、何くれと物語なす序に、巴之丞言ひけるは「我年來不便の者に思ひつる側女あり、名は時鳥と呼びぬ、然るに御身の容顏、彼の女によく似たり、縱ひ姉妹なりといふとも、誰か空言なりと言はん、御身

にも妹ありやといひければ、逢州心えぬ面振して、「宣ふ如く、一人妹も侍ひしが、由緣ありて胤腹とも異なれば、妾には似もやらず、其の時鳥の方とやらんは、何等の家の姫君にて坐すや。」と問ふ。巴之丞答へて、「彼は高貴の深窗に成長りしといふにもあらず、丹波國木の瀬といふ鏡師の女なれど、彼四歳のとし流しの夜船の暗紛れ、とり違へたる繼子にて、實の父母は何なる人といふ事をしらず、其のむかし母は病ふのひまもなく、姉と寢臥を共にせしを、子心に覺えし。」と、語るを聞いて逢州は膝をすゝめ、「その事にしあらば、妾もおもひ出す事の侍る、妹は繼しき中なりと糊に聞え侍りしも、淀の夜船の取替子、宣ふに露たがはず、妾が實の妹の方には、證據となるべき品もなけれど、とりかへたる後の妹の守り袋には、笹蔓錦」といふを抑へて、「その中にいれありしは、一寸八分の觀音にやあらん」といへば、逢州忙はしく、「君それを如何にして知召すや」「こは淺き問ひごとや、その二品を所持せる女の養親こそ、時鳥が實の父母にて、木の瀬が彼に物がたり。さては御身の妹にてありけるか、こは〳〵いかにことなくたゞに打ちおどろき、夢現ともわきかねて、逢州は聲くもり、「絶えて程へし實の妹、今は何地に住む事と、旦夕おもひ出せしが、君の御側に侍ひしか、歸らせ給ふ其のをりは、妾も國へ倶し給ひ、顏見せ給はれ」とうち泣けど、巴之丞吐息して、「われもさこそ思へども、爰に一つの難儀あり、御身に聞かるゝも便なけれど、我が宗罪婆と言ふは、原雲の上にも立交らひし女

聞くのみ、又た但心なきにこそ、時鳥を愛ずるすら痛くおもひ、去年の秋ニ左の夜、時鳥が月に啼きに招き、東噴東田舎に成長せ、雅言をしらざるを聞き出し、傍けたる侍女と示し合はせ、琴をならへふ我が詠めよとて、さまなくに責め苛み、遂へまでに恥辱の痛へし事あり、御身も国へ連れのぼれば、又すくなる憂目や見ん、われ瞿麦を退けんとはおもへども、時の大臣たる師良公の女なれば、容易くは討ち難し、其のうへ時鳥も良夜に鳴きされ、心気をや労しけん、遂に病の牀に臥し、間なく悪宿を移し、魂の衣草の露、消ゆるに際なき命とはしりながら、公の命默止し難く、心ならずも草陰に住みもけきぬ。今ははや冥途の鬼とやなりつらんが、我も心清々しからねば、告げしらさざるとはおはゆるなれども、仔細に物かたれば、逢州は覚はふり落つる、涙の間にいひけるは、世に気ほど寒しきものは侍らねど、後の妹の寄居虫も、今は行がたしらなるの、離れぐくの磯おどり、貝の水音に寄騒ぎ、なみだの雨にぬれて、袖はかわかぬ樹まくら、室の一夜の寝覚に、前の妹の行がたは、たれとしれども睦まじい、おのの運道からぬ、昔話にいたつ時鳥、冥途の鳥となつたりとは、実に浅けといふにやあらん、言うてかへらぬ愚痴ながら、花街に来たるそのときより、花をむすび琴をしらべ、總て客をむかふるに、與となるべき遊藝は、なきはきながら覚え侍る。姉が琴を習ふるは、嘸と活計のたねとなり、妹が琴をしらべえざるは、何なくて病となること しらぶるも聴たらん、調べきするも

「罰たらん」二人の姉妹かくまでも、辛き目見つるは前世に、いかなる罪や作りけん」と、源太にあまり、泣きぬ悲しみいつ果つべうも見えざれば、由なき事を言ひ出でしと、巴之丞は悔い思ひ、さな歎き給ひそ、一定死せりといふにはあらず。恙なくば御身を園によび迎へ、めでたく對面させすべし」と、諭う言ひ宥め、左右を顧みれば、一面の玉琴あり。長磯には水にゆかりうく櫻花を、牙骨螺鈿もて象り、又比琵琶の文字あり。是れ幸ひと取り下し、遼州が前に直し、今宵はいひ甲斐無何に、鬮つぶれ涙こぼれ、遂に遊興の趣を失へり。先で珍らしき雅樂を聞いて、鬱情をはらすべしといひければ、遼州は遇きがいにて、更に手も觸れやらず。一筝で表琴彈く事かはよりすべき、姫は、法曹一曲を奏し、鳥も驚かせ給へといふに、巴之丞につこと笑ひ、御身花街に生きてより、それぞれの師をないへ、琴を調べ花をむすび、客を迎ふる興となすといへども、はや忘れしや」と、言葉のとおめに住なたら、曖然たる顔をあげ、よしなき事を言ひたらうへは、是非なし、遼州のおさましきは、たゞ無なる曲のみつれとなり、雅音はいづかへかきえゆき侍へ、さこは斯くせよ斯うせよと、みしへてだに給はらば、たどたどしくも侍りなんといふ。うひうひしげに琴とりたけし、少し燈をそむけ、こゝろみに調子搔きあはせ、心にいけは彈きすさみけり。彼は頃雅樂堪能の家に就きて奥義をきはめ、大かたを會やうに上りたれば、入聞りしたる新聲なれば、無にして淫聲にながれず。巴之丞は高欄を背にいへ、

少時間き惚れゐたりしが、雨雲月をかくし、さら／＼と音するを、夕雨や降り出でけんと、ふりさけ見れば軒近き、青柳の靡しきかぜにゆらめきて、板廂をはらふにぞありける。時に不思議や笛竹のおと幽にきこえ、漸々に近よりつゝ、柴折門の外面に彷徨ふ、やがて琴と同じ聲に吹きあはせければ、笛は琴にしたがひ、琴は笛にしたがひ、清雅正に澄んで、音律よく合度ひ、清幽哀怨と、程拍子こまやかなり。巴之丞はつと身を起し、一きは訝しや昔唐朝玄宗皇帝、灞浦といふ地の竹をきりて、遊仙笛を作り、我これに倣ひ、紀伊國和歌の浦なる弱竹にて、横笛を作らしめ、男波となづけ秘藏せしが、彼のふえの音によくも肖たり。何人ならん心得ずことゝ、軒にかけたる燈籠をとつて照らし見れば、二八ばかりと見ゆる手弱女、女童二人ひき具し、笛に心をとゞめ、地摺るばかりの雨袖の、袂は夜風を含ませつ、紅裙翻つて飄々然たる形勢は、舞女なんどの嫺かしき姿にてあらず。あな心憎やと目もはなたずまもり居る。折よく雲やぶれ月いと明く照りまさり、燈籠の火影を借らず、さやかに見ゆる美人は、おもひもかけぬ國に殘せし時鳥にぞありける。巴之丞大いにおどろき、手にもつ燈籠とり落せば、はつとばかりに燃えあがる、火影に此方も見上ぐる高樓、「時鳥にあらずや。」「さ宣ふは殿なるや。」こは思ひもかけずと互に言ふ事をしも知らず。稍ありて、「やよ時鳥、御事はいかにして此の處へは來りしぞ、物語るべき事も多なり、先で此の樓に登るべし。」と、いふに嬉しみ見上ぐれど、名

のみなりけり時鳥、翼なければ仕方なく、月影隔つ見越の松、枝きるべしとや場師が、かけおく階子を幸ひと、雪なす腕を指しのべて、力も用ゐずいと輕々と、軒にうちかけするすると、巴之丞が前に來り、「妾不思議にも、九死を出でて一生を得、心地常にかへりしより、只管君に逢ひ參らせたく、櫂婆の御方にしかじかの由聞えあげ、兎も角もとの命せをうけ、道はかゆかぬ女の旅も、片時もはやく健かに、わたらせたまふ御顔を、見まく思ひて足もすゝみ、過刻に御館へ到着せしが、君はこよひ此の花街に、わたらせ給ふと仄かに聞き、此の男波を持ち參りしを幸ひ、したゞみたる音ながら、章臺を吹きありき、よそながら尋ね參らせしに、果して此の樓にて會ひ奉り、妾が喜び此の上や侍るべき」と、よらまくせしが逢州がまへを恥ぢ、うち微笑みて手をつかへ、更に禮は閣さざりけり。巴之丞なのめによろこび、「我國をいづる刻は、おことに力をつけまく思ひ、勇ましき事のみ聞え、ことばには出さねど、心のうちは陽世の、きたなき魂になりなんと、人しらず涙おとせし折もありしが、かく清々しくなるのみか、昔にかはらぬ艶なる顔となつたるは、優曇鉢華の盛りにや比せん、浮木の盲龜大容を見るにや譬へん、喜びの其の上に又悅ぶべき事のあんなれ、是れなる逢州といふ遊君は、元我が茶道の師、團一齋がむすめ忘貝といふにて、淀の夜船に別れたる、お事が實の姉なり」と、聞けど不審ははれやらず、「扨はおまへが姉上か」「妹にてありけるか」と、側近く立ちよりしが、いとを

さなき時別れつれば、實の姉妹なりとは、姉も妹も思はざる形勢にて、笑ひもやらず泣きもやらず、少時まもりゐしが、時鳥が嬋娟たる粧ひに、心中私かに怒りを生じ、巴之丞に對つて言ひけるは「時鳥の方とやらんは、去年の秋より病に罹り、枕をもあげ難し、今ほどは死にやしつらんなど、宣ひしにはひきかへて、此の女郎を見侍るに、面痩もし給はず、窶れしさまは更になし。思ふに妾に妹のある事を、杜鵑花ぬしに聞き給ひ、御側室のそのうちより、眉ざまよきを選り出し、君はしらぬ面振にて、此の處へよびよせつ、花にまじれば常磐木の、色も香もなき妾が姿、氣壓さるゝはいとはねど、姉妹のなのりをなさしめ、後にて笑ひ給はんとは、戯れも品によれ、斯かる事は許させ給へ」と、いと不興氣に見えければ、巴之丞は忿に逆ひ、「時鳥がやまひ頓に快くなつたるは、我も不審しくおもふ處なり」と、なほ審かに語らんとなす袖を控へ、時鳥のいひけるは「總て娼婦白拍子なんどは、別に計策をまうけ、男子の心をいざなふとか聞き侍る。斯かる條を怨ずるも、唐音にててれんつかふとか申す、手管にやはべりなん、淺ましの一夜妻、花の巷に小寢るより、魂も胡蝶と浮れては、彼の燈蛾燭をはらふ譬へにも近かるべし、いざ御歸館を催し給へ」といふに、逢州うち腹たち「夜毎にかはるまくらの數、淺ましの身なりとは、そなたがいひ給はずとも、よく心得ては侍れども、霜に機おる織婦も、浪に棹さす漁翁も、客も横陣の娼婦も、活計なればせんすべなし。心よりなす好色には侍

らじ、強ちに謂ひ笑ひを獻じ、色を以て權勢を、とらんと計る心よりは、娼婦なれど妾が心は、最清う侍るなり」と、にべなき言葉を、時鳥は聞かぬ樣にもてなしつ、急きたつ胸は鎮むれど、涙目にあふれ身ふるはれて、怒り面にあらはれければ、已ことを今は言ひ盡すに言葉なく、有合ふ姿見の鏡をとつて、文車のうへにおき、逢州も時鳥も、我がいふ事をよく聞くべし、計らざる對面ゆゑ、互に審とおもはざるも理なり。此の鏡にお事らが顏をうつし、姉妹とてあらそはれず、其の顏の似たるをもつて、二人が疑念はらすべし」といふに、流石いなみもやらず、一雙の美人一時にたち向ふ、其のさま艷しくして異なり、時鳥は原蓬生の家に成長るといへども、既に良治が寵を得てより、蘭閨に花帳を垂れ、椎殿に珠簾を下し、車ならざれば外戸にゆかず、輿ならざれば傍門を出でず。されば二八の貝はみつれども、よろづ臆し勝にて、世にたれし未通女の如く、擧止嬋娟なり。其の打扮如何となれば、海松房の黑髪を、深草流にゆりあげ、身には紫苑色の紗衣に、菊流を擢箔したる褙子を穿し、二寸割の繻珍の帶を高に結び、袖刀の隱しざし、手には珊瑚の蛇眼うつたる、泥繪の扇をもち、桃顏露はに咲みて、微しく皓齒のいづるを覆ひたり。惜しむべし膚は肥えたりといへども、枝おもげなる牡丹花の、一村雨の露をおびたるに似てなほ艶かなり。又逢州は計らずも、荊棘の林に身を沈め、艶色あるを以て遂に花魁のくらゐに著き、名は殆ど三千の列をかね、情の海に沈魚を漁り、戀の山に落鴈

を符す。されば二九の貝にすぎざれど、事なれし樣は、三輪ぐむ老女にもたちまさり、聲妙に質うるはし、其の打扮如何となれば、髮は假髷の放髩結、鴨脚にゆひあげ、身には當世やうの朧染、摘塵子のあひだには、秋草の種々を、友禪繪にいろどり、紅襟おのれなりにしどけなう、下には白無垢黃無垢をかさね、黑紅の一重なるを、ひきしごきの貝むすび、しやうどけをつくろはず、あの人と彫りたる釵をとつて、こぼれかゝる鬢の髮を搔きあげつ。憐むべし肌はすこし瘦せたりといへども、野面に生ひし女郎花、風にもまるゝ風情にて、なほおもむきあり。嗚呼かかるすがたを觀ば、何人か臭き皮袋の裏、三十六種の不淨物ある事をしらん、懼るべしつゝしむべし。さても逢州時鳥は、鏡にうつる顏と顏、熟とうちまもれば、實に巴之丞がいひしに違はず、肖たりや〳〵花菖蒲、いづれとわかぬかほよばな、さては實の姉妹かと、たがひにおどろき見合はすはずみ、時鳥の指櫛を、はたと鏡のうへにおとし、をさなき時のありさまを、おもひ出でていひけるは「いかに逢州どのとやらん、おまへが實の姉さまならば、妾が三つの秋のころ、此の鏡見るやうに、井戸を覗いて遊びしとき、芥子坊主へさした塗櫛、おとした事のありけるが、夫れを覺えて居給ふや。」と、おもひがけなき問ひ事に、逢州少時思案なし「妾はそなたに三つの增しゆゑ、いかで夫れを忘るべき、井戸は脊戸の小高き處、團栗のなる大きな樹のした、然もそなたの落した櫛は、半田村の地藏尊、二十四日の市のとき、參々と

連れ立つて、姉が買うて貰うたを、わたしもささねばならぬとて、やんちや言やつてひつたくり、形に似合はぬ大きな櫛を、芥子坊主へさしたので、おとした井戸の水の上、浮いては見ゆれど取る爲便なく、妾もともに泣いて居たを、切平が賺しこしらへ、其のかはりとて鬼灯を、七つもらうて姉がひに、妾は四つ其方は三つ、むいて見たれば四つながら、姉のは蟲が喰うてゐて、やくにたたねば其方のを、一つたもれたもらねば、明日よりは平生のやうに、負うて遊びに出やせぬと、嚇しても聞きいれず、逃ぐる拍子に潦、片足泥に踏みこみて、紅鼻緒の草履を汙し、又泣いたを覺えてゐること」と、聞くに悲しく時鳥は涙さしぐみ「其の春おまへは寺いりして、淺香山の手本をもらひ、手習なさるが羨ましく、まだ幼なき禿筆、わけもない事書きちらし、手本を墨でよごしたを、おまへが大いに腹立てて、妾は撃たれて額に瘤、泣いてゐたれば母さまが、妹のわるいは知れては居れど、をさなうても女子は女子、なぜ言葉では叱らぬぞ、夫れは姉も長しう、ないとおまへが叱られたを、妾は嬉しう思ひしが、今となりては勿體ないこと」と、聞けばきく程逢州は、胸にこたふる物がたり、わつとばかりに泣き出し「その事をおぼえて居やれば、疑ひもない妾が妹、夫れ覺えても居たまはん、鄰村の二五作の兒人、都土産のおやま人形、其方も妾ももらうたとき、美しう髪結うて、よい衣著たが羨ましく、妾やおやまになりたいと、由縁もしらずにいひつるが、遂に曲中の憂きつとめ、こまどりせしは昔に

し、今は此の身も籠の鳥、花車や遣手はその折の、鬼より強う逃げかくれ、淺ましの身の果てや、思へば昔なつかしやこと、口說き歎けば時鳥も、やゝ暫時涙にくれ「其のおなげきは理ながら、などなきときのしのばしきは、妾とてかはりはなく、鳩の車の手遊びに、三枝の禮は露しらず、反哺の孝もつくさぬに、烏萬度の月と日は、つい夢の間にすぎゆきつ、戀し〳〵とおもひたる、其の姉上にあひながら、客言なりと思ふより、遊女よ白拍子よ、てれん手管の客言と、思ふさまにいひつるも、世界しらずの内氣、心の狹き故なりと、思ひかへして腹たてず、此の上ともに時鳥、それは斯くせよさうせよと、たらはぬ事の侍らば、言ひ教へて給はれ」と、いへば逢州顏赧め「妾も漫に腹たつまゝ、不良き事を聞えしが、今となりては面目ない、連なる枝に咲く花も、雨露の惠みに開きしと、手折りて瓶に活したるか、水の力に咲きしとは、色香異なる事もあり、侍女にかしづかれ、國司の愛妾と、亡八がもとの遊女とは、などひと列に語るべき、心隔なく此の上には、姉に禮儀を教へてたべ」と、はじめのあらそひ引きかへて、言は稚く姿は窈窕、或はよろこび、或はなげき、いつ果つべうも見えざれば、巴之丞いひけるは「御身等さ歎くは宜なれど、是れ皆いひてかへらぬ繰言なり、互にいひもし聞きもせで、叶はぬ事も多かるべきに、無益き涙止めてよ」と言ひ爲すに、逢州漸く面うちあげ「女はよろづ言ひ甲斐なくて、涙もろきが常なれば、不意き對面を、喜ぶことは外になり、悲歎に時をう

つしたり、やよ時鳥渚の夜舟の一條は、父の物語にて聞きつれば、問ふにおよばず夫れより以來、い
かなる里に身をよせしや、それ聞かまほしことと、いへども涙に咽喉り、頓に回答もなしかねて、「され
ばとや妾を誘引ひ行きつるは、木の瀬といふ鏡師にぞ侍る。周く尋ね巡りしかど、父上姉上御行方の
知れざれば、泣き居る妾をさまざまに言ひ宥め、彼が古郷丹波國、柏原といふところへ將て歸り、實
の娘とあはれめど、妻は木の瀬に似もやらず、心ねぢけし性にて、母よと慕へど子と呼ばず、何國に
か愛子を失ひ、素性も知れぬ他の子を、連れ歸るものやある、顔見るさへもうたてしと、撃たれたり
叩かれたり、宵なかに悲しのたゆるまも、なくなく送る憂き年月、父の木の瀬は程なく死て、邪見の母
の為一人となり、なほ嫌増に責めはたられ、死なんと思ふもいくそたび、その艱苦いふべくもあらね
ども、父上母上姉さまに、巡り逢はんをちから草、道ならぬ事と知りながら、夜に紛れて忍び出で、
國々を流離ふなり、如此々々の由縁ありて、昔の鴻恩うけつるなり、思ひもかけず姉上には環り會ひ
つ、此の上の願ひには、はや雙親にあはせてたべ、今は何地に住み給ふことと取縋れば、遠州はよゝと
ばかりに泣きしづみ、「語り出づるも涙のたね、兒心にもおぼえやせん、母上は元病がち、又その上に
其方の往方、しれねばいとゞ心氣もつかれ、思ひほそりて亡人と、なり給ひしは十年のむかし、又父
上も妾が十三歳といふ春の中旬、箇樣々々の事ありて、人手にかゝりて果て給ふことと、聞く時鳥は狂

ふが如く、「そは何と宣ふぞ、父上も母上も、はや此の世を去り給ひしとや。こは何とせん淺ましや、し
て仇人は何方の孰、などとくには討ち給はぬ。いひがひなき心や」と、諫め激ます心操、感ずる裏に
猶悲しく、「その人を知る程なら、討ちえる事は稱はずとも、一太刀恨までおくべきや。命も身をも惜
しまねど、在所はさらなり名をさへ知らねば仕方なく、無念の月日をすぐしつ」と、ものぐるほしく
語るにぞ、時鳥は涙搔拂ひ、「口惜しきその上に、又口をしき事やきく。此の身は奈落に沈まば沈め、
惡鬼蛇龍と生をかへ、父の讐我が身の仇、夫れ彼恨までやあるべき」と、丈と齊しき黑髮を、右左へ
きとふり亂し、花の顏色朱を濺ぎ、すつくと立つて傍を睨み、竹器に插したる瞿麥の、花熟とうち
まもり、化しげに莞爾とわらひ、「あら心憎くも咲きつるかな、おきそふ露と消えてはかなき、黃泉の
おにのしこ草と、なるは誰ゆゑ此の花ゆゑ、恨めしの瞿麥や」と、柳の眉ひきあげて、はたと目注に
睨みければ、露を含みて生々したる、花も忽地色香をうしなひ、そよとの風も吹かなくに、颯と許り
に飛び散つたり。巴之丞逢州は、衿より水を濺ぐが如く、小夜風骨に徹つて、もの寒き事いへば更な
り。やゝありて、「やよ時鳥、父が非命の死を聞きて、怒氣に堪へざるは、理あるに似つれど、御身
にも讐ありとは心得ね。そは寃まれ病癒えて程なきに、斯く心を苛だてなば、又病とやなりやせん、
まづ心を定めてよ」と、逢州ともろ〴〵和なれども、たえて一言の應へもなさず、涙潸然と落し、項を

たれて泣き居たり。時に老杉樹の梢は何れもひけん、蔭にて首尾を聞きゐたるが、やをら降り下るを
おし聞き、時鳥と顔見合はせ互におどろき、暫しとたゞずみるひまきにつれ、あら怪しいかな時鳥が姿、
忽然ときえうせて、唯一管の笛となりぬ。折から逢州が丫鬟、時鳥と叫びて走り来り、吾侍婢に女郎
の連れ来給ひたる、二人の女童と打集會ひ、秋日とりて晴れけしが、両三の螢火となりしこそ、あな
怖や、とて、息もたゆげに語るを聞き、逢州は再た思ひ揃ふおもひなく、二人の妹は河方にゆきつる、妹
よ時鳥よ、と呼びたつれば、外の方より一羽の時鳥、後へ飛びいりて、不如歸々々と鳴き返り、
巴之丞が膝のほとりに落つると見えしが、白木の位牌となりにける。慌ただしくとりあげ見れば、靈寶
桔梗信女とぞしるしたる。扨は彼黄泉の鬼となりたりといへども、再び娑婆にすがたを現はし、逢州は我
が妹なりと、我にしらせしものなるかと、思ふよりまづ涙こぼれ、茫然として酔へるが如くしたゐて
逢州は夢現のさかひをしらず、少時は言葉も出ざりけるに、諸處へ、郎に入音して、騒ぎ／＼走り
来るもの中あり、是れ則ち淺間の老臣、雪枝藤惣太が一子、同苗小鐵之助といふ者なり。巴之丞聲をか
け、一あらぬ心ことなや、汝は父藤惣太と共に、國のまもりに残しおきしが、斯く慌しく来つるには、
必定ふかき緣故あるらめ、語れよ聞かんずるにと宣ひければ、さればとや時鳥の御身、漸に稍ぬもり
ましにたり給ひしが、ある夜何者ともしらず忍びいり、無殘にも殺害なして立ち退いたり。君の寵愛に

異なる婦人なれば、等閑になりがたしと、夜を日に繼いで到着なし、君此の花街に漫行きし給ふよしは、故ありて聞き、尋ねまゐらす折から、五郎藏とかいへる道往く若者、提灯に君の紋をしるしたるを視て、此の樓に忍び居給ふよしを、しらしたり」とかたるを聞き、又もや悲涙袖をうるほし「我國を出でつる時よりも、時鳥が爲體、なき命とはおもひながら、非命に死すべしとはしらざりし。やよ小織之助、時鳥が法號は、華實結枯信女とはいはずや」と仰するに「君はやくもしろしめされ候、御位牌もこれに持てり」とて、手帊を開きとり出でて、開けてくやしき亡靈は、手匣のうちの空しければ、うちかへし左み右みて大いにおどろき、出國の刻よりして、片時も身をはなさず、封もそのまゝありながら、御位牌の見えざるは心えず、とばかりにては分說たちがたし、尊慮にしたがひ、小子を罪なはし給へ」と、最面なげに見えにける。逢州は嚮より涙にかきくれ居たりしが「いやとよ小織の殿とやらん、あへて心な勞め給ひそ、其の位牌はこれなるべし」と、彼の時鳥の化しつる位牌をさし出せば、小織之助は再びおどろき、更にいふよしもしらず。逢州又いひけるは「妾は逢州といふ遊君にて、時鳥の方こそ、妾が實の妹にて侍る。高樣々々の緣故ありて、姉妹の名のりまでなしつるが、今おもひ合はすれば、此の世にきえて亡靈の、假にすがたをあらはせし、怨鬼にてや侍りなん。それと知りなばいふ事も、聞く事もあるものを。今よりしては日夕にあはるゝ事とおもひし故、たれも是

れも言ひもらし、残りし空さへ彌増に、半熟睡を視もしたり、視られもせしは夢の間で、ゆかしき悲しさ戀しさは、知らぬ昔に百倍せしにと、いひかけて又泣き沈めば、いと理にこそと小織之助も、ともに涙にかきくれぬ。巴之丞は默々として居たりしが、嗚呼歎くは愚痴のなす處ぞ、生あれば必ず死あり、遅かれ速かれあだし野の、露になる身は如夢幻響、前世の約束因果の道理、凡慮をもつて説くべからず、只此のうへは後世のいとなみ、追福こそ肝要なれ、と、漸うにすかしこしらへ、ありあふ机に位牌をなほし、白牡丹となづけし名香を薫らせ、二人齊しく掌をうちあはせ、曇寶結枯信女、頓生菩提南無佛々々と伏拜めば、怪しいかな枯骨に陰雨を注ぐが如く、最前散つたる罌麥の、花はみる／＼猛火となり、竹器をすゑし花車に燃えつきて、彼の地獄の繪卷物にてみつる、火の車と言へるものの如く、忽地空中にまひあがり、飄々として飛去りけり。人々はます／＼奇異のおもひをなしけるが、程なく東方白を生じ、あや鶏の聲華やぎて歌ふに驚き、巴之丞逢州に別れを告げ、猶散華燒香怠るまじと、白牡丹の名香を、半ば分ちて逢州に與へ、小織之助を引具して歸りける。端にもいふ如く此の樓は、奥まりたる處なれば、長き初め杜鵑花は、此の夜の樣は知らざりしとなん。

淺間嶽面影草紙後帙 逢州執著譚卷之一 終

淺間嶽面影 草紙後帙 逢州執著譚 笛卷

種彦 著

第一 瞿麥の方深夜に時鳥を殺害なす 男波の笛鬼火に順つて飛びさる事

夫れ苦樂得失は惑ひによつて生じ、生死禍福は天の主るところにして、敢て言ふべからず。愚かなる眼よりみるときは、幸あると幸なきは、人の善悪によらざるに似つれど、邪にして樂しむは、板の火の如く、一旦熾んなりといへど消ゆるに速く、心ざま正しくて苦しむは、泥砂に濁る水の如し。日を經ばいかでか原の清きに復らざらん。さても陸奧牡鹿郡淺間巴之丞が館において、如何なる者か側室時鳥を殺害せしといふに、彼の妬婦瞿麥が所爲なり。詳かにその緣由を問ふに、巴之丞皇都守護におもむきてより、頭踏まふる者なければ、瞿麥が猥りなる行跡日頃にいや增し、花の晨月の夕はいふも更なり、日夜酒宴遊興に耽り、自が居る高樓には、琴鼓弓の音の絶ゆるときなく、或は佛詣でに託け、漫行しばしばなるに、老臣雪枝彌總太といへる者、心やすからずおもひ、折にふれ

諫め申せど、露承引き給ふ御氣色なく、妾はときの朝臣師良が女なり、妾ありてこそ忠良治、上のおんおぼえも目出たきに、かばかりの遊樂は、いかで苦しかるべき」と侈りかに罵り、心ねだけし侍女のみ傍にをらしめ、その餘の人には絶えて對面もし給はず、己が隨意遊び給ふを見きく者、心あるも心なきも、此のする如何なる事やいでくるならんと、潜かに附囁きあへりとなん。

〇作者　種彦伏告

此の一條は巴之丞、皇都におもむきしあとに、却つて陸奥なる館の事を說きいづれば、一の巻にいへる花街の說話よりは前なり。前後二編を合はせて見給ふ時は、前編第八回、巴之丞再度皇都に旅だつといふところに、此の條を次いで、同じく下冊後編發端を除き、後帙一の巻を讀み給ふべし。譬ふるも烏滸のわざなれど、源語に竪行横行あるが如し。此の巻半ばまでは、時鳥存命のうちなり、夫れ心得て看給ひね。

かくて後淺間家の奶々瞿麥の方は、牧山の長福寺なりける遠山尼公の御墓に、詣でんとて立ちいで給ひけるが、いとはなやかに物好みし給ふ本性なれば、侍女半女にいたるまで、花を折り紅葉を重ねし綺羅は、散り殘りし花も恥づるばかり粧ひつ、北上川のほとりまで練りいでぬ。時は夏のはじめなれば、あさ綠なる空の氣色、いみじう霞みわたりたるは、春の眺めに異ならで、こぼれて匂ふ櫻花、

忍び音になく、時鳥、さながら十洲三島夢中に在りといふなる、遊仙の枕に眠る心地なし、眼にふる毎に興なきものはなかりけり。此の所は則ち蓮由尼公いまそかりしとき、御詣での道ゆき振りに、終日櫻がりし、角觴杜鵑花に琴鼓弓を合奏させさせ給ひし、袖の渡りにて、相模が「みちのくの袖のわたりの涙川、心のうちに流れてぞすむ」と詠じたるふるき名所なり。さて瞿麥の方汀に暫く逍遥して、牧由の方に赴かんとし給ふときに、形貌ゝしき四方髪の男、「直々瞿麥の方に告すべきことあり」と、おそれ氣もなく、御輿に近づきければ、扈從の侍、立ち隔り、「奶々に聞え奉る事あらば御館に來り、それぞれの人につきてこそ云ふべけれ、汝如き賤しき身をもて、御側に近づくは曲事なるべし、疾くさがれよ」と息まく折柄、「やよ侍原さないひそ、其の者に對面すべし。」と宣はするに、侍原は縁由はしらずといへども、「畏み候。」と應へて控へたり。ときに轎子の戸を靜やかにひきあけさせ、扇さし插頭より出で給ふ、おん姿のはなばなしと淸げにて、ほとりも輝くかとおもはれ、さまざまの絲もて花鳥を繡したる、紅の裾ふみしだきたまふに、奇南の香さとこぼれて、うつくしくうち笑ひたる面貌、眉のかゝりの艶かなる、いへば更なり、畫の仙といひし紀金岡、百濟川成なりとも、この婥しをいかでか寫し得ん。嗚呼おそるべし、かく無色花の如くにて、却つて心の荊棘を隱せり、さて侍には二三人の侍女を殘し、其の餘の從者は聲のとゞくまでに遠ざけ、「近う來るべし。」と彼の男をまね

き給ひね。」これ何等者ぞと問ふに、往年費人奈吉平に弟入して、修行者に打扮ち、忘貝寄居蟲の姉妹を恋はせたる、蛭平太といふ者にて、近曾野夫盗を業として、四ヵ髪とかり鎖なと名をよびかへたる愚者なり。鈍丸醉ひて、ひきくだし、日外御頼みにまかせ、年ふる蛇の生血にて、調合なせし靈藥ことひかけ、傍を顧みれば、瞿麥微笑み、「さな驚きそ、從者は悉く遠ざけ、妾が心の底をもよくしれる侍女のみ側に侍れば、あへて憚る事なかれ」と嗔するに、鈍丸も心おちゐて、いひけるは、「さる秋とやらん月みる宴に、時鳥の妓を招き給ひ、酒に和して彼の藥を喫まし、あらはれし驗ありて、其の夜より惡瘡を發し、猜竅となりしよし詳に聞けり。事なりし上は賞金を給はるべき、證文まで與へ給ひ、音信なきは不審なり」と聞ひければ、瞿麥曰く、「妾も疾くよりそのことを心にかゝりつれど、折なくていひもやらざりし。」とて侍女ども、手匣の内なる金の包とりいでて、彼に與へよ」と宣ふにより、鈍丸いよ〳〵茫蠱にいり、「彼の毒藥を解すには、日に三度淨水に身を打たせ、如此を々の藥を服ます時は、頓に猜竅平愈して、原の姿となる事は、我が家法の祕中の祕なり、精しくは此の紙に寫したり。」と、證文にさしそへて、右の手にさし出し、左に賞金をうけをさめぬ。瞿麥又曰く、「所詮死を待つべき時鳥が、猜竅平愈なすべき、良藥の法は益なしといへども、又自來用る處もあらんか、たれは殘まれ決定々しき姿にて、數多の賞金をもち、人にな覗咎あられそ、從者の目らさるかこそなけれ、此

方の小道より狹く／＼と往きね」と敎へ給へば、「心得候」と答へて僅かに行過ぐるを、折よしと瞿麥懷劍ぬきはなし、鈍が目がけ打ちたりけるが、的外れず項より、咽もとまでぐさと貫り、一聲叫びて息たえたり。侍女ども大いに驚き「こは何の誤りありてか、鈍を御手にかけられし」と言へば、「やよ音高し人や聞かん、潛かにいひそ」と押留め、心靜かに褄かいとつて、すゐ／＼と死骸の側に立ちより、手早く懷劍ぬきとつて、半璧月を雲の眞袖に押隱し「彼原末妾に緣なく、又時鳥に恨みもなし、只賞金に管らんとおもひ、一日方人なすといへども、妾にすぐれて賞金を與ふる者あるときには、彼が口より發覺れんは必定せり。さる故をもて今手にかけ、向來の難を除るゝなり。汝等も妾が計策を、若し外にもらすときは、此の鈍が如くなるぞ、他事となおもひそ」と、頓て留目を刺しをはり、死骸を岸破と前なる川へ突倒し、裳を蹴あげて小褄をとり、短刀の鮮血おし拭へば、侍女は身毛竪ち、何といふべき辭をしも知らず。時に不思議や水上より、一團の陰火漸々と燃えあがり、瞿麥のほとりを飛び巡り、忽然として斑たる犬と化し、轉に鈍をより戾したる證文、瞿麥が懷中よりおち散りたるを口に啣へ、何方ともなく消えうせける。瞿麥なみならずおどろき「あな口惜し、かの密書謄けにてはたらさじものを、何地行きけん」と悔めど甲斐なし。兎角なす間に、日は申上刻ばかりとなり、風が傳ふる野寺の鐘も暮ちかきに、此の日は長福寺に詣で給はず、直に館にかへり、

又例の酒宴を催し、侍女どもをあつめて、歌ひつ舞ひつ遊び興じ給ひける。是れは扨おき爰に又良治が閨室時鳥は、さる年の秋晋菱の方にまねかれ、月みる筵に連なりてより、さしも窈窕なりし顔色、忽地悪瘡の爲に破られ、生まれもつかぬ不具となり、譬へば雨を濺ぎし花、風に賺かれし柳、紅の顔緑の髪、何地にやきえゆきけん、絶えて昔の人とは見えず。良治皇都に旅だちてよりは、別殿にひき籠り、胡蝶舞振といふ伶悧氣なる女童、爾人のみ傍におき、他人には面をあはせぬる事をさへ恥ぢ給へども、其の昔良治が寵愛淺からず、殊に心ざま正しきは、老臣もよく知るが故に、さま〴〵にいひ慰め、醫療手を盡しければ、漸く心地すが〳〵しくなるといへども、彼の悪瘡は蟇の生血をもて調じたる、鴆毒のなすところにして、風寒暑濕の外なれば、神丹華陀が術も盡き、日に〳〵重りかになりゆくにぞ、かくては存命へても何かせんと、半熟死にもやらざる憂き身をかこち、歎きのもとに枝さしそへ、甲斐なき事のみいひつゞけ、夢のやうなりし夜な〳〵は、泣くより外の所在もなく、爰に於て竊かに思へらく、「自一旦良治に寵せられてより、深窗に在りて綾羅を身に纏ひ、幽閨に臥して蘭麝を衣に薫らせ、ほと〳〵幸あるに似つれど、不意奇病に苦しみ、かくおどろ〳〵しき顔色と變ずるは、過ぎぬる方の報いにやあらん、嗚呼天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、自他生きとし生けるものやある、錦繍の飾りも冥途の境に益なく、珠玉の寳財も閻王の宮には何かせんこと、頓に菩提

心を發し、偏に念珠を爪繰り、唯名號、更におこたらず。しかりしより後は、墓園の花を見ては、如來静に心を觀じ、紅閨の月に臨みては、一切法常住を悟し、さながら心は沙門の如く、いと殊勝にも又あはれなりけり。かくてある夜雨しめやかに降りいでければ、時鳥は過しかたゆくすゑの事などおもひつゞけ、一人寢もやらず、例の如く數珠つまぐりて坐しけるが、程はなれたる殿には、撫子が遊びと思しくて、琴の音のいと細う聞えければ、流石に姉くやおもひけん、耳を傾けつゝ、打泣きていひけるは、いかに胡蝶よ舞振よ、同じ儕にありながら、其方等は彼に屈從するをもて、片時の暇もなくあれあの如く遊び興ずるを餘所に聞きなし、さぞ本意なき心には、傾羨しとおもふべし。と、自が憂身に比べて宣へば、二人の女童はうち泣きつゝ、これは聊あかしき御仰せにぞ侍る、かく朝夕御側をたちさらで仕へ參らするも、宿世とやらんよりの、深き緣にぞはべるべきに、何條高貴を等閑におもひ奉らん、かかる事に御心を勞し給はゞ、おん病の障りなるべし、吾儕は是れに侍るからに、心隈なくもいけ聞え給へ。と涙おし包み、二人は障子の外にすべりいで、由ある草紙の繪讀して居たりしが、をさなきは寢ぎたなきならひにて、悲しむうちにも眠りを催し、其のまゝ音もなく打臥しぬ。時に風そよ吹きて、燈火屢瞬き、さらさらと軒に懸る雨の音さへ、物凄しく、不圖枕方を視れば、怪しむべし諍なる老犬、朦朧としてかゞまり居れり。原來時鳥は男子に恥ざる勇ありといへども、病苦に心

やゝ弱りけん、あな怖ろしと衣引被きて打臥さんとなすを、彼の老犬銜へきつゝ、「さな恐れ給ひそ、我は昔に化する者にあらず、申さん事のあるによりて來れり」といふ聲いきゝか人間に異なる事なし。時鳥漸くこゝろをさめ、やをら起き直り、ひぢ近なる枕刀おつとりて、衣の間に押隱し、「汝獸身にてありながら、更に人語をなす、怪しむべきの甚しきなり、必定深き緣由あるべし、いふ事あらば疾くいへ、聞かんずるは」と宣へば、彼の老犬潸然と涙を流し、「小子婆婆にありし昔は鶴立といふ醫師なりしが、我が家に傳ふる祕毒あり、酒に和して喫ふむれば、忽地惡瘡を發して痃癖と變じ、又彼の毒を解すべき製藥、二つの奇法を得つるが、此の事いかにしてか漏れけん、瞿麥の方きこしめされ竊かに調合なすべしと仰せを蒙り、われ貪欲深くして、何の思慮なく承引き、是れに加ふるに墓の生血を以て、不日に調へまゐらせたり。君彼の藥を服する故に、鳥の片羽に似つる姿となり給ひし、是れ悉く瞿麥が、君を妬く思ふより起りし事にはあれど、其の罪人の原はそれがしなり。しかるに瞿麥の方より、事なかりし上は賞金を給はるべき餘文を與へながら、かつて音信なし、我詐りつゝ近會佛詣での折を伺ひ、北上川にて瞿麥の方にあひ參らせ、かくと聞えたてまつりしに、心よく賞金をあたへ、やり過して背中より、一刀に切つて捨てられ、水のあはれや果なくも、黄泉の鬼とはなり侍る。我が雖きよりの謀られつるなれば、人を恨みる由緣はあらざれども、餘りに口惜しと思ひたる一念、又は年頃

さまざまの奸惡をなしつる報いにて、忽地畜生道に墮し、無量の苦辛を受くるといへども、娑婆にありし時だにも、愚痴なりし小忰、盛んなる凡にをいかで苦しむる事を得つべき。瞿麥が[illegible]るかうに、いよ／＼三熱の苦に艱苦絶ゆる閑なし、此の紙にかきたるは、鴆毒を解す藥方と、賞金を約したる證文なれ、彼をもて病氣平愈の期を催し、これをもて證據として、おん身と我が讐敵たる瞿麥を討ちとり、地獄の苦患を助けてたべ、仇を恩なる報いをうけんずとて、悲しき姿にてまみえ來り候ぞことと、後悔の涙しきりなり。纔より時鳥は、默々として聞きゐたるが、今は怒りに堪へかねつ、すつくと立つていひけるは、こは我が奇病も汝が所爲にてありけるよ、互に斬らんと思ひ鎗を奪ふは、なべて女の常にはあれど、毒藥をもて顏色を變ぜさせ、おのれ權勢をとらんとするは、武家の妻には似氣なく、卑怯未練の行跡かな、人に報いはありやなしや、今におもひ知らせんず。我は唯宿世の惡業報い來て、疥癬となりしと思ふより、せめて未來は極樂へ、到らせ給へと日々に、唱へし御佛讀みたる經文も、今は何にか白露の、玉と輝く水晶の、珠數捻ぢ切つてかなぐりに投げすて、障子さと押しひらけば、月は隈なくさえわたり、翠簾かけわたせる樓に、たちまよふ女の透影みえ、なほ涼小夜風につたふなる、琴の音色も心から、修羅の鼓と聞ゆべし。時鳥は忍度みやり、「あら口惜し腹だたし、縱ひ此のまゝ死するとも、靈魂怨魂惡鬼となり、瞿麥はじめ梶原とおもふ奴原、ことごとに奈落へつれ行か

んこと」と、寒上りたる顏色に、血筋は眞紅の綱をはり、髮逆に立ちのぼり、對慄はし齒をならし「いかに鈍玄とやらんが靈鬼心安かれ、我が病愈ゆとその儘、妬婦撫子を討つてすて、其の場をさらず自害なし、三途の巷に再會せん、歸れや〳〵」といふかと思へば、愕然として夢覺めたり。時鳥はたゞ惘然としてゐたりしが、少時ありて吐息をつき「無慙き事を思ひ寢に、夢現とも辨へず、咎なき人を罵りしが、若しや思はず言葉にいだし、侍女共の聞きやしつらんと影護う、且は夢にもあれ御佛を、恨みし事の罪深し」と獨言ちつゝ、空炷の煙にて雙手を淨め、水晶の珠數取出し、爪繰らんと脇息に引きならせば、怪しむべしいつの程にか珠數の緒きれて、斑々と膝の上にこぼれかゝり、彼の鮫人の涙の如く、板間を漏れ來る丸雹に似たり。なにとやらん胸とゞろき、枕がみを熟くみるに、犬の足あとところ〴〵に印し、夢に鈍玄が持ちたりし一通の書簡あり。こは不審しといそがはしく開きみれば、果して賞金の證文と藥方なり。扨は正夢なりけるか、さるにても腹ぐろき撫子、いかにしてか恨みをはるべきぞと、つと立つて障子ひきあくれば、雲散り雨はれて、月皎々と冴えわたり、程離れし樓に琴の調べの聞ゆるまで、夢に見つると露違はず。此の時胡蝶舞振の兩人は、次の間にありて時鳥が目覺めたるを知り、「何事をかし給ふぞ」と、紙燭持ち出でければ、「蔀より影の漏れくるにて月の明きをしり、思はず立ちいでたり」といひ繕へ、何氣なき體にて其の夜は打臥し、時鳥心におもへら

く、一夢に元五臓の煩ひと、、信じられしといへども、世にも人にも捨てられ、かくあやしの姿となりて、いつまでか居るべき、若し此の藥毒となりて、死すとも更に恨みなし、先づ服藥して試みんにしかじ」と、即時に醫師に仰せて調合なさしめ、庭に清水をひきたる掛樋を作らせ、旦夕身を濯ぎなどして、總て夢に得つる藥法の如く、露洩らさず療養怠らざれば、奇なるかな夢と見し肌を埋みたる惡瘡も漸に癒え、姿の花も原の春にあへる心持となりぬ。さて瞿麥のかたは、この由傳へ聞き給ひ私かに驚き、「抑時鳥が奇病は、蟇の生血にて調合なせし毒藥によりてなれば、なみ／＼の藥にて治すべき謂れなし、殊に掛樋の水に身をうたする由、彼の鈍漢がいひつる處に一點の違ひなし、若し彼の藥方時鳥が手に入りたるか、さあらんには我が身のゆゝしき大事たるべし、安閑と日を送る處にあらず、彼の書簡をもて良治に告げざるうちに、寧ろ殺害して後難を除くべし、彼いかに力量あるにもせよ、病に勞れし上なれば、何程の事かあらん」と心にうなづき、或夜時鳥が閨房をうかゞひ、前栽の村竹に隱れゐたるが、時に五月の初めなれば、こもりたる柳の梢蕭然く、青葉吹きまく高根おろしに、時雨めきたる雲ひきはへ、牽牛の星の影暗く、更に園の中とはおもはえず、氣疎き野らの心持して、夜も漸々と深けわたるを、折よしとたちいでしが、流石に胸は轟きの、橋を踏みならす思ひしつ、輙にはたちいらず、先づ板縁にのぼり、障子の隙よりさし覗けば、時鳥は只一人、孤燈に向つて書をひら

き、さらに餘念なき光景にて、別に人影は見えもわたらず。折しも散り殘りたる卯の花垣より、胡蝶二つ四つ飛びいでて、螢火の光を慕ふとおぼしく、障子につきて翼をならし閃くを、是れ屈竟なりと己は縁のおけにかくろひ、鞭を延し、そろそろ障子をひきあくれば、彼の胡蝶はさも嬉し氣に飛びいりしが、はしたなく吹く風に煽れ、螢火にやあたりけん、内は烏羽玉の暗とぞなりぬ。原來時鳥は侍ながらの芽を厭ひ、夜は遠く寢ねさせ、側には舞振胡蝶の童の外人氣なきに、障子うち開きしは心得ず、若し盜人などの財をかすめに來るにやあらんと、おそるおそるうかゞひ見るに、袖うち翳して彷徨める女あり。まづ心おちゐて「誰ぞや無益く障子開きし故に、蝶は螢火に焦れて死したり、妾に不意く殺生の、罪負はせぬるか憎さよ。何の爲にか其處に忍びをるぞ」と立ちよる處を羅婆に、鞘口早く抜きはなし、肩先四五寸切りさげたり。思ひがけなき事なれば、尻居に礑と倒れ臥し、又うち懸ゐる身を轉らし、手に當るを幸ひと、柳筥とつてうけとむれば、赤白の丹尺四方に飛び散り、春の手向の幣袋、風に亂すに髣髴たり。時に風あれ雲散りて、山の端近く入りかたの、月の光に時鳥佶度みやり「御身は正しく若葉の前ならずや。言はずとも覺えあるらめ、妾もおん身に年月積る怨みあり、今日や聞えん明日やいひいでんと思ふうち、却つておん身妾が閨房に忍びきたり、嬲し討ちになさんとなすは、武士の家には似氣なく、最卑怯なる行跡ならずや。いざ潔く勝負なせ」と、微笑

つてたちなけるを、起しもたてず突込む白刃をかい挑り、扱ぎ取る力や餘りけん、撲地と顚ぶを瞿麥すかさず組みついたり。心得たりと時鳥は身を閃かし、頓て瞿麥を取つて引伏せ、只一突と懷劍ふりあげ、心ははやれど病に勞れ、殊に初太刀の手疵に苦しみ、手も萎へ痺れて懷劍を、おもはず庭に取落し、互に髻を摑みあひ、裳の褄亂るゝ小夜嵐、緣より下へ轉びおつ、音はさながら火宅の車、姿は花たり紅葉たり、何れが先に散りて行く、夢又夢現や現空蟬の、羽におく露の命ごと、知るや知らずや挑み合ふ、留奇南の薫は海棠に、比へし顏に香ひあり、蜀の錦の帶しめあげ、月は落つれど星の光にすかし視て、見えみ見えずみ爭ひしが、初めにもいふ如く、痛手にや弱りけん、時鳥は只退きがちにて、紫燕花の咲き滿ちし、泉水を平地とこゝろへ、片足水におちいつたり。瞿麥は事たりぬと喜びつゝ、落ちたる懷劍拾ひ上げ、起きなほる時鳥が左の腕を切つて落し、呵と叫ぶ間もあらせず、胸さかとつて白刃を頤につきつけ、「いまのおもひはいかにぞ。」と問ひぬ。時鳥、はやなき命と思ひあきらめ、更にわるびれし氣色なく、微笑つて右の手をさしいだし、「此の手をして君が珊瑚の枕に換へ、此の指をもてあはで過ぎにし夜半を數へ、衣をおほひ合せうち撫で、總て左よりは憎しみ此の手にあり、いで右の手をも切りて心やりにし給へ。」といふに、「しぶとき女め。」といひさま切つて落す。時鳥は無念心骨に銘刻し、いまだ死にもやらず、いと苦しげなる聲をいだし、「妾が姿は後より見つるかこ

て勝れたりと、君の戯れ給ひし事あり、茲をも切り給へ」と、谷中なる瞿麥が方に差向け、捍と轉びて遂に息絶え死に失せけり。「あら心持よし」と、死骸を池の汀に蹴こみ、立ちさらんとする折しも、胡蝶舞振りの女童は、此の物音に驚きて漸く起き出で、瞿麥が裾に縋りつき、「何人かはしらず時鳥の方を殺せしぞ、疾くいであひ給へ」と呼ばはれど、松吹く風岩こす波の音に紛れて、はかばかしくも聞えず。瞿麥は人や聞くらんとうしろめたく、側を顧みつゝ、ふうと手をのばして舞振が衿かい摑み、ただ一刀に切つて捨て、あはやと驚く胡蝶をとつて膝に引敷き、胸もとをさし通せば、鮮血さつと濆り、汀に開きし紫燕花の、花にかゝると見えつるが、紫變じてから紅、不思議や紫色の陰火と化し、牀に飾りし笛に聲あること、さながら人のふきならすに異ならず。見る〳〵陰火は三團となり、彼の笛もろとも南の方へ飛去りける。かかる怪異を視てさへ、瞿麥更に怕るゝ色なく、又立去らんとなしける處に、程離れて直宿したる侍女ども、今胡蝶が叫ぶ聲の聞えしとおぼしく、追々に出で來るにぞ、見つけられじと懐劍うちふり、持つたる雪洞右左に切つて落し、袖うちかざして廊下つたひに逃げさりける。扨侍女どもは、時鳥の方みえさせ給はずとて大いに驚き、頓て池の汀にて、胡蝶が死骸につまづき、こはなみ〳〵の事ならずと、家隷老臣を喚び會へ、庭の隈々殘る所なく擇ねもとめしかど、時鳥が死骸は池水にゆられて、人丈ばかり生ひのびし、菖蒲のなかにかくれて頓には見えず、

天明り後漸くたつね出せしが、憐むべし昨夜梳りし黒髪も、池の玉藻と亂れあひ、雫はふしき寃の下也、看左に頽り落されし、みるもいぶせき亡骸に取縋り、侍女共は悪悪して泣く。時に雪枝小鶴二女に對ひ、時鳥の御方は日頃より、侍女さへも寝所近くは居らしめ給はず、我を憐いふも更なり、さるからにかかる凶事もいでくるならんか、是れは今言ひてもせんなけれど、何は兎まれ主君の寵愛淺からざる側室を、人知らず殺害せられし、此のまゝには捨ておき難し、直宿の侍女原はなじかは、分明に詮議を遂ぐべし」といひければ、彌總太頭を振り、「否々我思ふ仔細あれば、此の一事は深く祕し、人に語る事なかれ」といひさとしけるに、流石に老臣の言葉といひ、一定深き謂れあるべしとて、其の意に隨ひ、「此の事人にもらす者は、曲事たるべし」と侍女どもにいひ聞かせ、瞿麥の方には、唯時鳥は病によりて、死去りぬと聞えければ、瞿麥の方も打驚きし體にもてなし給ひける。そも〳〵雪枝彌總太が時鳥を殺害せし罪人を糺さざるは、瞿麥が所爲なるを推し、血で血を洗ふ世の譏りを憚りてなるべし。かくて時鳥が亡骸は、淺間家の菩提所長福寺へ葬り、[illegible]實結枯信女と法號なしけり。夫れ大集經に、若しくは竹若しくは葦、實なるに及びて則ち枯れ、又任螺異卒は孕りて身亡ぶと説き給へり。既に良治國に在りし刻より、時鳥はけしきばみて見えけれど、俄に奇病をうけて其の事やみぬ。今法號に其の意を含むも、是れ又奇といふべし。さても時鳥が非命に死しつる事ども、良治公に告げ奉

ふんと小織之助其の役に宛てられ、時鳥が位牌をば蒔繪の箱に收め、竝に用意調ひければ、父彌惣太も病ある由きこえ、保養のため本國近江にたち越えんと、瞿麥の方に願ひ、其の事許されければ、小織之助と打連れて旅だち、往き／＼て近江路にもなりぬ。さて彌惣太いひけるは「我も願て故郷にいたり、君の御氣色も伺はんするあひだ、汝は暫く彼の地にとゞまり、君に宮仕し忠義怠ることなかれ」と、くれ／＼も教訓し、勢田の橋より引離れ、小織之助は良治が旅館を志して急ぎける。是より小織之助良治が旅宿にいたり、その夜良治花香に奥行きなしつる事は一卷に說きたり、此の條と合はせて見給ひね。

第四　時鳥の亡靈種々の奇怪をあらはし　瞿麥狂死　まぼろしぎぬたの事

瞿麥は思ふ儘に時鳥を弄り殺しとなし、頃日の怨み一時に晴れしかど、若し此の詮議身の上に及ぶときは、いかにしてか分說かんと、安き心もあらざりしが、唯病死にて時鳥は死に去りぬといひふらし、絶えて其の沙汰に及ばず。叔に我が所爲と知る者あらじぞと、初めて安堵の思ひをなし、夏もいつしか過ぎゆき、秋も半ばになりぬ。望の夜は例の如く、月見る宴をまうけんと、心がまへ殘るところなく、殊に其の夜は天に一點の雲なく、月はいと／＼さし登りければ、瞿麥晴の方に端居して酒宴を催し、詩を賦し歌を詠み、夜もいたく深け、酒もすかりになりける時、侍女の言ひけるは、「君去

年の今宵は、時鳥を此の處にまねき、琴を調べよ、歌よめよと、吾們さへ集會ひ、さまぐ〳〵に弄りものして、ほと〳〵興に入りたりしが、其の人なくして今かしむかしごと」と聞ゆれば、又一人が曰く「それは田舍同者の賴禮歌唄はせんとて、あの水盤の柄杓持ち來りし奴なり、あはれ時鳥もがな來れかし、又並りて遊ばん」などいひのゝめく聲のうちに、水盤より一團の陰火飛びいで、不如歸々々と啼きわたるを、時にもあらぬ時鳥あな訝しと、聲の知べに見あぐれば、今まで晴れわたりし月俄に朦朧として、風瑟々とおとしきたり、何とやらん蕭然く、衿より水を灑ぐ心持しつゝ、己が後をかへりみて、皆あしたる事をいひ出でしといふ面振なり。瞿麥も怪しと思へど、さらぬ風情に微笑みつゝ「彼に手ぶりは及ばずとも、妾は時鳥の代りに琴一曲調ぶべし、誰そ持てこよ」と琴一面を取出させ給へば、是れも時鳥を擬わし、松風と瀧の緒なり。以上二つ琴の名 琴も多きに今宵にかぎり、此の二面をとりいだせしは、心ならず思へど詮すべなう、瓶に插したる萩の露にて、指うち濕し琴かきならすに、絶えて音はいでやらず。こは不思議なりと琴取替へ、又一面調ぶれど、只板を打つが如く、絲には僅かの聲もなくて、何地ともなくから〳〵と打笑ひ「怨みはまう其の琴にあり、絲を妾が押へ居るは、眼に見えざるや、いかに陸汝が妙手に誇るとも、音のいづべき謂れなし、彈かば疾く彈けあな愚かよ、去年の秋汝等妾に拔けりけられ、辛き目みつる事はいひも出でず、妾がみやび事をしらで、恥辱

をうけし事のみ誇りかに言ふが胸悪し。」と、頓て瞿麦が膝元の二面の琴、右左に轉つて撲地と倒れ、さながら人の手をかけて投ぐるが如し。流石大膽なる瞿麦も、餘りの事に魂きえて、言ふべき事もしらず。侍女原は更に生きたる心持はなく、南無佛々々と唱へなどして、既に興盡き事醒めければ、今宵の酒宴はこれ限りぞと、瞿麦も座を立ちあがり、戰ひ居る侍女を言ひはげまし、件の琴をとりかたづけんとなすに、恰も雨を濺ぎし如し。恐ろ／＼螢火照らし見るに、血に染みし手の形、絲の間に印し、水に散り浮く紅葉を畫きしに似たり。「あなや」といひて打置けば、又かや／＼と打笑ひ、「みよみよ今に思ひしらさん。」と、聲は耳の許に響き、姿は更にみえもわたらず、一團の陰火几帳のかげより轉びいで、雲居遥かに飛びさりける。さて次の夜は雨さへいたく降りければ、又いかなる怪事やあらんと、侍女どもは心も更に心ならず。瞿麦とかく言ひこしらへ、徒然を慰めんと、十炷香を催し、遊びに紛れつゝ、怖ろしとおもふも少しうちわすれけるに、障子さら／＼とひらくを、誰ぞ来るにやと顧みれど、曾て人もあらず。いつのまにやら侍女にうち交り、二人の女童あり、「妾らも遊びがたきにし給へ。」といふと、再び驚き熟々みれば、時鳥とともに世を去りし、胡蝶舞振の両人なり。侍女は一塊となり、袖うち被して答ふる者もなし。時に時鳥の聲宅上にあり、「やよ胡蝶と舞振よ、香聞きして遊ばんより、此の棟木を疾くきるべし、瞿麦初め侍女原の棟木にうたれて、あをち苦しむを

見んには、十性者にははるか勝れて、をかしかるべし。」といへば、「應。」と答へて立ちあがらんとする處々、瞿麥纐纈抜きはなし、はつしと切りしが是れ両個の鬼火となり、蔀をくゞりて飛び出でけるに、其の奇怪さに人々は大いに驚き、逃げんとすれども[illegible]して立つ事あたはず。二人の亡靈又[illegible]上にてしばしかゞやき、其處を斷てぬ此處を切れぬとせしふうは、時鳥が往り々昔の聲に似たり。頓て鋸の音聞え、壁に傾れて屑さへ難なく落れかゝれば、こはいかになりゆく事ぞと、或は觀世音の御名を唱ふるもあり、或は守り袋に額にあてゝ伏拜むもあれど、かゝる邪なる者どもに、いかでか神佛の冥助あるべき、遂に棟木自ら崩れ、拉然と響いて瞿麥が膝の前に落ちければ、侍女どもは棟木にしかれ、叫と叫んで息も絶え／＼になりぬ。此の聲遠く聞えて、何事にやと手燭を照らして出で來る人もあり侍女ども漸く正氣つきしあたりを見れば、崩れたりし棟木もなく、又屋の上にはやゝ／＼と藁の葉、樹魂に響きて物すごき事いへば更なり。兎角なす間に夜も明けはなれければ、總て館に崩れしところもあらざりけり。さて次の夜は雨やみ、月いとじう冴えわたりけれど、夜毎の怪事に物怖ぢし、何人あつて眺むる者もなく、蔀おろして鳴りを潛めてゐたりしが、夜半ばかりに人の來るけはひして、「今宵は何して遊ばんぞ。」といふ聲頃日瞿麥が禮をつくりて、侍女ばらにうたせて慰みしが、其の鉦聲ひに此處にあり、よう是れなうちて眠りを覺ましてと、庭先にて拍子をかしくうちすさみければ、これを

閨もの中に寝もやらず、おそろしく格子より差覗くに、人はなく只[illegible]のおのづから轉つて來れ[illegible]の音、昔の夜は亡靈もちかくは來らず、昨夜棟木の崩れしより、少しは恐ろしさも劣り、眠らで居たる者もありけるが、忽地瞿麥が臥したる屏風のうちに、車の轢る聲あり。見るく美々しく粧ひたる、五緒の車人もあらで轉りいで、直宿せる侍女の前を徐やかにゆきすぎれば、大いにおどろき屏風引きのけ瞿麥をみるに、首なき軀ぞ打臥しけり。こは變化の御首をとり往きつるならん、必定にかくと聞えば、吾們が落度なるべし、いかにしてか分說かんのみと、おそろしさも忘れかの車を睨と見れば、又かやくと笑ふ聲して、あと方もなく消え失せける。時に瞿麥は呀と吐息して起き直り、あな恐ろし時鳥が亡靈、我が首を持てゆくと夢にみしにと、物語り給ふに再度おどろき、熟くみれば御首は原の儘にて、あへて異なる事なし。さては車の往きつるも夢にてやあらんとおもへど、轍はたゞしく疊に殘りあり、是れ又奇怪といふべし。さて次の夜は風烈しく雲おほひて月さへいでず、庭に礁の音の[illegible]事昨夜に[illegible]聲きこえ、[illegible]の事[illegible]し[illegible]出たり[illegible]東[illegible]時鳥が彷彿と見[illegible]にれ[illegible]し[illegible]り、[illegible]居[illegible]と[illegible]十日[illegible]時鳥は瞿麥が[illegible]の[illegible]

いひつゝひきたてんとなす。瞿麥生きたる心地もせで、漸く枕邊の刀拔き持ち切りはらへど、亡靈更に懼るゝ色なくかやく／＼と笑ひ、池水に溺れ兩手をきり落されつるに比ぶれば、いかに責むとも物數ならず、見よ／＼今に思ひしらさんずるぞと聲のみ殘り、姿は煙のごとくきえうせける。やゝ暫しづまりて後、侍女ばらは正氣つき、傍をかへりみれど、それとおもはしき物もなく、たゞ鮮血淋々としたゝり落つるに紙燭して見れば、血に染みし足のあと天井にあり／＼と殘り、これより血のながるゝにて、方燈の油さへこと／＼く血と變じ、腥風颯然とおこり、ものすごきこと、たとへんにものなく、瞿麥を見ればさらさらに人事をしらず、うちふし居けるにより、うろたへまどひ、さま／＼に介抱なしけり。

既に夜明けしより、瞿麥は物狂はしくなり、一切ものもいはでたゞ日打臥し、其のほかはさせる怪事もあらざれど、瞿麥が面に惡瘡を發する事、時鳥がありし姿に露違はず、いろ／＼の亂言のうちにも、今の思ひは如何にぞ、／＼と繰返し／＼いひつゝ、なほ瞿麥が眼には、時鳥が姿の見ゆるにやあらん、白刃をひらめかし空を切りなどなせば、侍女どもも近づきがたくて、日に／＼顏色憔悴し、今や命も旦夕にせまりし時、言ふべきこともありとて枕邊に、家隷をよびあつめ、まづさめ／＼と涙を

誑し、汝等よおろ／＼失れと心づきけん、此の瞿麥に苦しむるは則ち我が靈なり。」といふ聲は時鳥に異ならず。暫しありて又曰く、「妾が身の賤しきを知り、さま／＼に嘲弄し、剰へ鈍なとやらんいふ醫師を誑らひ、毒藥をもて妾を大風となし、相公の寵をねとらんとはかりしを、鈍なが幽魂の告げによりて詳かに知り、如此々々の藥を服し、少しく病おこたりしが、情なや瞿麥早くも心づき、深夜我が閨に忍び來り、騙し討ちになしつるなど、總て此の女の所爲なるぞ。」と、瞿麥が姿を假り時鳥が身の上を、漏るゝ處もなく告げをはり、「見よ／＼今の思ひはいかにぞ。」といひ、又「あな苦し。」と喚ぶは、瞿麥が聲なり。「見よ／＼今に思ひ知らさんずるは。」と、庭先に立出づるを、人々周章て押留むれば、右左に突退け、なほ狂ひ狂うて走りゆき、池の汀に立つて衆人をさし招き、又時鳥が聲して、「妾を殺害せしは此の處にぞあんなれ、かくの如く手を打ち落しぬ。」とて、持つたる扇振上げて、我とわが左の手を礑とうてば、刃をもて斷つが如く、鮮血さつと濺りて、「あな苦し／＼。」と叫び、「今の思ひはいかにぞ、いまの思ひはいかにぞ。」といひつゝ、池水に落ち入り、くるひ死にぞ死せにけり。

嗚呼因果覿面の理、これを聞くもの皆恐れ愼まざらんや。また瞿麥に從ひ時鳥を嘲させし、邪なる侍女どもは、かの棟木にうたれしと思へるところ漸に痛み、或は蹇となり或は短頸となり、みな惡報によりて、生まれもつかぬ不具とぞなりにける。しかりし後眞野の莊にて、更に人なき野邊に碪の

音をきくものあり、土人是れを幻碪(まぼろしぎぬた)といへり。又碪(またきぬた)を夜戸外(よるこぐわい)におけば、時(とき)として聲(こゑ)ありとて、黄昏(たそかれ)にはかならずとり入るゝ事(こと)となん。これ時鳥(ほとゝぎす)が怨鬼(をんき)きぬたに留(とゞ)まるものか、又狐狸(きつね)のこれによつてたぶらかすものか。今(いま)は其(その)事(こと)もたえて、をさあいを賺(すか)す乳人(おち)が、伽(とぎ)ものがたりのみ彼(か)の地(ち)にはのこれりと、ある翁(おきな)のかたりし。

淺間嶽面影草紙後帙 逢州執著譚巻之二 終

淺間嶽面影草紙後帙 逢州執著譚 琴卷上

種彦著

第五

巴之丞菊が淵の山莊に遊君を集會め
細太九に命せて猿樂俳優を興行なす事

卻説淺間巴之丞良治は、時鳥が非命の死を聞いてより、悲歎やる方なく、僧を供養し經を誦まし、追善丁寧にいとなみ、とかくなす間に舊年も見る／＼あらたまり、又來る春を迎へける。嗚呼去る者は日々に疎しといへど、容顏愛執尚忘れずやありけん、せめて其の人の面影に肖つるを視て、心やりにせんと、折りにふれ逢州が許へ訪ひよりければ、五郎藏は信やかに、巴之丞が後邊に副ひて道次を守護り、杜鵑花は門首にむかへいでて、主從の禮儀を亂さず、眞心をつくして仕へける。抑巴之丞逢州がもとへ通ひしは、色をおもんじ傾國をおもふにあらず、たゞ亡き人の慕はしく、忍びかねつゝ忍ぶ草、忘れ草てふ生ふる事もあらんかと、心慰種に見し花の、今はなか／＼色增して、恩愛殆んとあつく、逢州も又なき妹の、色をねとる心にはあらなくに、此の君を憑み參らせ、仇人の往方

を擇ね、宿意をとげんと思ふ間、わりなくも語らひしが、女の心はいと淺くて、いつしか巴之丞が眞心に深くもおもひそみ、誰かしらん鴛鴦の衾のうちに、偕老のちかひあらんとは。かゝりしかば病にかこつけ、逢州は他の客をむかへず、巴之丞も彼が玉臂に就かざれば眠らず、歸らんとすれば艶梅露にないて、袖をわかつに懶く、ゆかんとすれば新柳風にまねいて、足の歩びも殊さらにすゝみ、雨の旦雪の夕のいとひなく通ひつゝも、田字草が長の巣守となりしが、なほ是れにあかず、俄に大工をあつめて、下河原雲居寺のほとり、菊澗といふ處に山莊をつくらせければ、きのふは煙草にうづもれ、閑寂幽凄なりし地も、けふは玉樓金臺連延と建て續き、蓬がなかの蟲の聲は、吹物の音色にかはり、松吹く風は玉の小琴と調べかへ、七十二間の渡殿、三十三間の釣殿、みな悉く紫檀、花櫚、沈木、伽羅奇南の類をもてつくりなし、笑みを買ふ木の下には、錦繡の戸帳をひき、眉をふかく窗のまへには、水晶の簾をくだし、屏帳の綺麗言葉にものべがたく、珍寳のかざり畫にうつすともうつしえじ。園には谷川をひきいれて、廣らかなる池となし、頃しも秋のすゑなれば、紅葉の楓樹さはやかに、たゞ見る天地は蜀江にてはりなし、四方は錦にてつゝむが如く、谷にわたせる橋梁水に映ずる光景、更に人間の界ともおもほえず、且に是れ九天の畫堂ともいひつべし。さて巴之丞は日毎此の山莊にありて、五條坂より逢州をまねき、朝笑暮歡居るに起つに離れず。一日巴之丞戲れていふ、我此の美人を得た

り、花の姿は終日に見れどもあかず、枕上の密語は夜もすがら語れども盡きず、彼の唐の玄宗皇帝、華清宮にありて、楊貴妃を寵愛せしも、我が宴樂には及ぶまじと、是れより浴室をつくり、井華洞とよびなし、貴妃がこのみし花なりとて、紅白の牡丹を絹を以て造り、假山にうゑみてぬ。嗚呼昔しかかるとき、家に安祿山が如き奸佞の臣あらば、鼙鼓天にひゞき、鯨波地を動かすの騷擾、近きにあるべけれど、良治が近臣は悉恩を知り、義をおもふの輩なれば、欄を折るのいさめ屢なりといへど、かつて聞きもいれず。此の頃又細太丸といふものあり、彼は世に聞えし白藤太が孫にして、猿樂田樂獅子舞の奥妙をきはめければ、良治彼の細太丸をよびよせ、「數多の遊君をあつめて、猿樂或は今様の伎藝をまなばし、井華洞に場を構へ、酒宴の興となすべし」と命せければ、細太丸かしこみて諸行し、扮すべき役々をさだめ、既に說合はせ事とゝのひ、其の日にもなりぬ。山莊の端殿に御簾をたれて棧敷をまうけ、臺をほどよくみおろし、絲竹琴鼓は幕のうちにそなへたり。さて良治巴の上褥に著き、と齊しく、紅顏綠髮の美人、細殿をあゆみ出でたるが、手に手に海陸の珍味をさゝげ出で、香霧佳肴所狭くおきならべければ、良治もおもはず數杯をかたぶけけり。さて歌樂は、

貞女狩歌舞、　吉士舞、　久米歌舞、　淺茅原曲、
國栖曲、　小墾田舞、　百濟歌舞、　隼人歌舞、

御劇八場と定めたり。これ等は神樂散樂の古風なる名をかりて、あらたに入調したるうたひものに、程拍子をあはせてたちまふ俳優なり。人々は目をぬぐひ、いまやくと待つほどこそなけれ、容貌端正に音聲麗妙なる遊君、けふをはれと打扮ち、廻雪の袖をひるがへしければ、彼の青海にねりいでたるも、これにはいかでおよばんと、心ゆくまでの觀ものなりけり。爰に雪枝小織之助が父彌總太は、病氣保養のため、本國近江にありけるに、主君良治下河原に山莊をかまへ、只管酒宴遊樂にのみ、あかしくらす條ほのかに聞き、心さらにおだやかならず、急ぎ皇都に上り、此の日山莊にきたり、かかる光景を潛かにうかゞひみて大いにおどろき、たゞちに面前へいで、諫めをいれんと思ひしが、否まづ俳優はてゝのち、こゝろしづかに意見のおもむきをいはめと、次の間にひかへ居て、日暮れて後通ひの女原にいひつがせ、小織之助をまねきけり。小織之助は何事やらんと御前を退き、父なりと見るよりも心おどろかれ、「こは何故に此の處へは來ませしぞ。」と、いひもはてざるにはたと睨まへ、「やをれ御側に册きながら、君かくまで放佚無慙にならせ給ふを、唖然と眺めくらせし不忠者、とくく此の席を退出候へ。」と、聲ふりたてゝ罵りければ、小織之助おそるくいひけるは、「父君の怒らせ給ふ事、いと理には侍れど、老臣の諫めをすら、もちゐ給はざる良治公、若年の某が申す條、いかで聞きいれ給ふべき、さるゆゑにこそよからぬ事とは思へども、君命默止しがたく、かかる御宴にもつ

らなり侍る」といひければ、彌總太いよ〳〵怒り、「數度諫言を奉り、聞きいれ給はぬ其の時は、などか潔く切腹はなさゞるぞ、か許りの事思ひあきらめざる汝にてはなかりしに、一定天魔のみいれしにやあらん、我が面前にて自害をとげ、君を諫めたてまつらざる、其の身の罪を贖ふべし」と、老いの氣を焦燥て、思はず聲も大きやかになりければ、良治もかくと洩れ聞き給ひ、やがて彌總太を召されける。かくて彌總太はさらにおそるゝ風情もなく、良治がまへに跪き「さていひけるは、君が學窗にのみ籠らせられ、繩錐のつとめおこたり給はず、自然と御心鬱滯し、御藥がちにてすぎ給ひし、さるからに折にふれての歌舞音樂の御慰びは、あらまほしき事には侍へど、斯く花鳥風月の御宴にそみ、剰へ數多の妓女をあつめられ候なんど、大内のきこえもよろしからじ、遠くは平の清盛白拍子を愛好し、近くは高時法師田樂を賞翫するの類ひ、悉く不吉の祥なり。はやく御心を翻し、御節に歸らせ給へ」と、憚る氣色もなく申しける。良治何思ひけん、一言の答へもなさず。なほ彌總太は小織之助をよび出し、今まで諫め申さゞる罪をせめ「すみやかに切腹なすべし」といひけるが、良治も爛醉の上なれば、大いに氣色を損じ「おのれ彌總太一轍なるは、老いたる者の癖ひとおもひ、一言の言葉も交へず、打捨ておけばよき事と思ひ、よし汝が一子にもせよ、我近臣として召仕ふ小織之助に、私に切腹いひつけし條、我に對して是れみよとの所業、奇怪なる老いぼれかな、いで其の

闘ひをさけて、怒りをやすむことしつと、玉散る白刃抜き持せば、弾穂太少しも身を措しまず、嘲ぞかゝりて匿殿を歩みし例「鄙原となるを見しよりは、とく首を刎ねたまへ。」と合掌なすに、小織之助はいにおどろき、右の御怒りをひき出だしも、原小子が過りなれば、我をこそ御手にかけ給へ。」と、走せよるを弾穂太撲地とつき退け、綱にもいへる如く御側に冊きながら、妄りにとまらぬ者たる程の曲者、右の御手にかけ給はば、御佩刀けがれなりき。我をこそ御手にかけ給はれ。」「否我をこそ。」「我をこそ。」と交手死を争ふ赤心を、遊君も見るに忍びず、楽屋より立ち出でて「御短慮に候。」とさまざまに止めまゐらすれど、更に聞きもいれず。おほや弾穂太が首は、おちもやく見えたりしが、怪しむべし風烈しくおとしきたり、燈火颯ときゆると、とし、さら／＼と締障子のひらく音して、喝て人は見えず、唯時鳥一声、良治が頭りうへに鳴きつるが、良治は酒気忽地にさめて、ありし事は悉夢の如く、ああな嬉しやと、まづ白刃を納めければ、弾穂太小織之助も大いに喜び、遊君を慰めて諫言をゝはへければ、良治も漸く心をやはらげ、遊君はもとのごとく、左様の長りもとにかへし、幸枝を下を将て、其の夜館にかへり給ひける。翌に燈火いきへてみなをり、時鳥ありし家にて、締障子をひらきいできたり、良治が佩刀を抜きもちし、手にすがりとどめしと、遊君が眼には見えたりとなん。さて良治館にたちかへりしをりから、撫子の片狂死をはじめ、時鳥が非命の死も、撫子のかの所偽なるよ

しまで、往進ひきもきらざれば、巴之丞も心ざしにおだやかならず、嗚呼憎むべきは佞婆、憐むべきは時鳥と、数回歎息せしが、また心をひるがへし、昏きをだつも素殘るも業、顛逆二門忘縁にあらざらんや、喜怒好悪は情の動いてひかれやすき初めときく、不良き事のいでくるも、藻にすむ蟲のわれからぞ、傳へ聞く蘭菊の二女、おのれのうちに眼をとぢ、鼻を反身に化すといふ、昔語も身のうへに、今不知火の筑紫なる、刈萱にて道心を發願せし、人のむかしも斯くこそあるらめ、不便の事をしなしたりとて、一向に後悔し、嗚呼ある時近臣のいさめをもちゐず、淫酒に耽り宴楽にのみあかしくらさば、愈恥は百にもあれ、名は後人の舌にあそばれん、止なん〳〵と獨言し、ありしことども玉章にしるし、小織に助に渾せて、逢州が許へ送りて後は、たえて花街にゆかず、只一室にとぢこもり、忘れんと思ふがゆゑに忘れやらず、愛執の窗に暁の寝覚をしたひ、炷きしめし衣の香の薫るにつけても、[illegible]繰かへる讀の[illegible]の数々に、佛の御名をとなへつゝ、亡き人の追福より他事なきこゝろ、是れはさておき爰に又、星影土右衛門は往ぬる年、慇彩の術を以て、良治が兵士の圍みをまぬがれ、難なくあすだ河原を立退いてしより、国く中國を遍歴し、我にひとしき悪黨をあつめ、なほこころすゑにつきたる奸計をめぐらし、數多の金銀を掠めとるといへども、幸ひにして天刑いまだいたらず、頃日洛の傍のほとりに在りて、一日竇塚素兵衛、[illegible]生九六といへる、放蕩無慙の

痴者をしたがへ、清水寺のちかきあたりを徘徊せしが、時に二月下旬日よくはれて、空のけしき鳥の鳴く音もこゝちよげなりければ、貴賤老若のわかちなく、袖をつらね袂をまじへ、おのが心々に往來ふうちに、ひときは目だちし婀娜なる婦人あり、これ別人にあらず五條坂の遊君杜鵑花なり。いふ宿願の事ありて、歌の中山清閑寺の觀音に詣で、清水越にてはしなくも、土右衛門に行きあひたり。夫れとはさらに心もつかで、往きすぎんとなしけるを、土右衛門はやくも杜鵑花なることをしり心に喜び、なほ見きはめんとおもふをり、素兵五が持ちたる扇を、櫻の枝にうちあてんとて投けたるが、杜鵑花の連れし女童の花簪に當り、鐺と音しておちければ、女童ふかくおどろき、「無正事し給ふな」と、袖うちふるふを、杜鵑花はさないひそとて微笑み、扇は拾はせて素兵五にかへし、土右衛門なりとは夢しらず、褄かいとつてかへりけり。時に土右衛門、あたりの酒房にいり、上座にあぐみ居て、二人に對つていひけるは「和主等は近曾の相識なれば、詳の事はしるまじ、今街上にて見つる、遊君と覺しき女は、我が古主淺間巴之丞良治の母蓮山尼の侍女なり、我淺間の家臣たりし昔、不圖彼に懸戀し、さま〴〵に口說きしが、露うけひかぬのみか、頭崎角彌といふ同役に密通なせしかば、我が無念やるかたなく、彼等が不義を見あらはし、縛首も刎ねんずものと思ひのほか、如此々々の事ありて我も國を追放されしが、嗚呼何等由緣ぞや、今において煩惱のきづな斷ちがたし、いかなる計策をほ

どこしてか、彼を手にいれんず。」と、うちひそみていふ。二人は聲をひとしくして、「そはいと心やすし、などかばかりの事に心を勞し給ふ、元淺間家の侍女なりとは、尊客に聞きつるが初めなれど、我我あの女はよくしれり、あれこそ五條坂の亡八、田守草が長の遊君なれば、彼の花を手折るには、何のかたき事かあらん。」と、誇りかにいふを、土右衛門呵々とうち笑ひ、「和主等さ思ふも理なれど、いまだ未通女のころよりして、顔に似氣なく心強にして、義氣をさ〳〵男子にはおちず、尋常の女とおもひ譲らば、却つて辱めをうけん、そも何等の由縁によつて、遊女とはなりたるならん、彼當地にあるをおもへば、角彌も共に居らんな一定せり、まづ奸計をもて、角彌に自滅をとらせ、そのうへにて杜鵑花を手にいれんか、否杜鵑花を手にいれて後、這奴を退けんな心やすし。」と、二人點頭き、猶兩人に密計を謀じ合はせ、家路をさして歸りける。斯くてのち杜鵑花ある夜、甲屋といへる茶房よりよびむかへられ、彼の家にいたりしが、田舎人の客にて、酒をひたと強ひつけられ、おもはずも醉ひを發し、席につらなるも物苦しく、人目をしのびて梯子をくだり、顧みがちに鶴歩して、行廊をあゆみゆきしが、斯くとは更に知る者なく、人目なければしどけなき、貌形をもつくろはず、胸のあたりうちくつろげ、疊紙にてうち扇ぎ、そよ吹く風をまち居たるに、元此の茶房は細々許なるながれを、庭にせきいれたれば、岩に咽ぶ水音いとゞしく、小笹の露燈籠の火影にてりて、夏の夜の螢かとあ

やりたれ、松が枝の梢の葉は、風の随意にそよぎて、秋の野の尾花に似たり。かかるをりから障子さとおしひらき、杜鵑花が裾をとらふる者あり。打驚かれて、誰ぞや誰ぞ、不作事し給ふなとすかし見れば、ただ相識にはあらず。されど容貌何とやらん見おぼえあれば、夫れは彼かとおもひしかど、僧見ればほかの遊女の客にて、我は知らざれど、彼方はわれをしるゆゑの戯れならんと、わざと彼笑みて、「いつの程よりか爰に忍び居て、人驚かし給ふ憎さよ」と、あらはなる脛をおほひ、褄掻摑み裾をよせたとすれど、しかと握りてはなさず。「いかにも推し給ふ如く、とくより爰に隠沼の、底の下草に隠れて、しられぬ戀のくるしきを、しらせんとてご訪ひよりし、はや六年七年あひ見されど、我が顔は見わすれつらん、かくいふは御身ゆゑに、浪々せし星影土右衛門なり。」と、聞いて杜鵑花は再び驚き、熟見るにはたして其の人なりければ、悪さはおかしさに、胸をどりておだやかならず。土右衛門かくいひけるは、往年袖のわたりの花見にて、御身と角彌が密通を、見あらはせし其の時は、さぞ無念とも思ひたらんが、よく理をわきまへ、角彌は其の席にて切腹なさしめ、御身は女の事なれば、切に命を申しこひ、我が思ひをはらさんとてなせしなれば、是れ皆御身を慕ふ心の實より出でたるにて、頓て我を悪み給ふ由縁もなし」と、なほ身近くよらんとなすを、杜鵑花は早くも退きて、傍によせもつけず、頭を衿にさしいれて、更に一言の答へもなさず。土右衛門なほ聲をひくうして、

「這間何の容止ありて、此の處へ來りしと、聞し給ふもよく心得て侍へど、あゝ何等緣にや、御身の
こと少時もわするゝ時なく、再度還り會ふをりもがなと、心の願ひ遂に叶ひ、此の頃歌の中山より、
清水越しておちはずも、御身に往きあひ、此の花街の遊君となつたるよし、聞くとひとしく人の誹り
もかへりみず、まうで來しは胸のおもひのやるせなき故ぞかし、情なきなさけをも、かごとはかけて
給ひねこ」と、うちつけに口說りければ、こはいかにしてか言ひとかんと、須臾打案じけるが、元來士
右衞門は奸曲邪智の曲者なれば、強ひて嫌みを與ふるときは、われのみかたまで、いかなる奸計に
おちいらんも計りがたし、兎に角いひくるめて、此の場を逃れんにはしかじと、わざと言葉を和げ、
「田舍生ちのはしたなき、此の杜鵑花を容言にもせよ、斯く切に聞え給ふは、昔ならで外にあるべき
か、昔をおもひ出羽や、最上の川の稻舟の、いなといふにはあらねども、館にありしその頃より、君
をつらくもてなせしは、御心を告げしらせ給はぬさきに、角彌吉といひかはしつれば、彼方の志も
破りがたくて、せんすべなき處なり、かく聞え侍らば、今は何人にか憚るべきと宣はんが、昔はひか
れし袖を捕ひ、よし遊女となりくだればとて、又其の人に横陳しては、衣ばかりの恥ならず、寶に戀
を換ふるなり、君傾城となつたるゆゑ、遂には思ひをはたせしと、御身も共に悪名の巷にもれん、嗚
呼浮世に憂きのかよひあり、世を經る程苦しきものはあらじを」と、あとは言ひも果さず、まだ世に

なれぬ未通女の、ふたつ臆しがちなる言葉の文にとりなすうちも、外に人や聞きつらんと、傍に氣をくばり、酒氣發して顔は夕映のもみぢをちらし、立居に衣の香もれて、梅の木の間をすぐるかとおもはれ、強き心もしらぬさまにたをやぎたるを、土右衛門は猶忍びずもやありけん近くより、「我かばかり聖だちし事聞きには來らじ、五郎藏と緣斷ち給へといはんには、不諾給ふも宜なり」と、言ひ出づるに杜鵑花重ねて驚き、「何その五郎藏と宣はするは。」「無益き事な包み給ひそ、須崎角蒲變名して、御所の五郎藏となつたるは言ふもさらなり、我にしたがふ素兵五、太九六を間者として、たれ彼とくに聞きおきたり、されば迚も節義は打捨てて、遊女と成りし御身なれば、終身を誓ふ事は稱はずとも、唯假のちぎりをむすび、一夜の情かけ給はば、明日は青道心となるとても、恨みとは思はじものを、我が佛たすけ給へ」と、雪なす手をとらへ、ほと／＼猥りがはしきにおよばんとするに、杜鵑花今は怒りにたへかね、「御身も昔は淺間家の近臣なれば、聖賢の書の一條は見給ふらめ、斯く事をわけ道理をつくして聞ゆるに、露聞きわき給はぬは、いと愚かなる行跡にぞ侍る。たれ女は大路を歩行むだに額に扇を加へ、袖几帳して羞ぢらふが習ひにて、兩夫にまみゆるをもて、二張の弓に比し、賤に一庭の譏りいかんせん。しかはあれど憂川竹のながれに沈む身は、常の女とひとしからず、思ふ思はぬ隔てなく、白地にものがたり、身は下人の指にさされて、彼こそ何某といふ遊女なりと、言ひ

しらふを卸つて喜び、名は瓢客の舌にあそんで、仇しあだなみ婀娜めきたる言の葉の、末の世に傳ふるを羞とす、活きながら火坑に身を投じたりともいひつべし。爰をよく聞きわき給へ。かくまで罪の深緑、松のくらゐといはるゝ身も、女はおなじ女にて、自他うきたる心より、異夫を重ぬるにはあらじ、貞をはなれて貞あり、操をすてて操あり、知らせたまふうへは、詳に言ふに及ばねども、丫角の頃よりして、いひ交したる其の人の、長の病著にせんかたなく、遊女とはなつたれども、夫に自滅を取らせんと計りたる仇敵に、小夜衣を重ねんか。」と、息まき荒く言ひけるを、土右衞門は日往にみやり「口賢くもいひつるかな、斯くなる上は千々の金にその身を贖ひ、思ひを晴らさでおくべきや」と冷笑へば、杜鵑花は眉じりひきあげて「色と情を販ぐ身と、怒りを笑ひに紛らして、物和かに應へなすに、聞くに憂き非義非道、人の面獸の心、言葉をはすも穢らはし」と、座をたたんとなしけるに、土右衞門も怒り心頭よりおこり、褶を扇に突きとむる。杜鵑花はなほもうち腹だち、持つたる疊眞面にうちつけ、力をきはめて裲の、褶をはらへば煩惱の、犬つくばひに撲地と轉け、又起きたちて捕へんとする折こそあれ、軒にかけたる燈籠を、めあてに何人かは打つたる礫、燈火きえて曀々たり。杜鵑花はよろこび庭におりたち、木影に身をひそめけるを、土右衞門東にこゝろもつかず、急くも後堂に逃行きしとおもひ、何やらん一人點頭き、一室の裏へいりにけり。時に柴折戸を剝喙と敲ふ

者あり。杜鵑花おそる〱さし覗けば、是れ則ち五郎藏なり。且おどろき且よろこび「いつの程より
か爰に忍びて居給ひし、いま星影土右衛門に巡りあひし。」と言ふを止めて、「我嚮よりの様子は、垣の
外面に聞き居たれば、再び語るに及ばず、又礫をもて燈籠の火を打ち消し、御身を密かに招きしは。」
といひさし、邊に人やあると右左を顧み、縁側に尻うちかけ、尺八臂に突きもたせて言ひけるは、「頃
日良治君、本國の御館にはさま〲の怪異あり、是れ悉時鳥の方を殺害なしたる怨魂のなすところに
て、遂には瞿麥の御方も、狂ひ死をなし給ひしと仄かに聞けり、杜鵑花は然いふ事を知れりや。」と、
問へば聲を密め、「其の事は君より玉章に言ひ越し給ひしとて、逢州主の物語に聞きぬ、たれより逢州
主も只管におもひ屈して、唯いねがてにてすぎ給ふ。」と應ふれば、五郎藏は吐息して「爰に一つの難
儀あり、其方も豫てしりつらん、逢州主の揚代、それかれ百兩あまりの負債あり、田守草の長我をば
たる事嚴し、原來温柔に生ひ立ち給ふ良治君、さる事には心づき給はず、されば迚く御館も穏かなら
ざる折柄、斯くと聞えんも近臣の手前憚りあり、と許りにては事果てじ、憂きが中に又憂き事を聞か
るは心なきには似つれども、恩惠厚き君の御爲、我にとも〲力を添へ、小金才覺してたべ。」と、う
ちしめりていひければ、杜鵑花はまづ胸塞がり、「妾もとくより小金を調へ、負債を長に償はんとは思
へども。」と言ひさして潸然と泣く。五郎藏も瞼しばだゝき、「嗚呼負債の事のみ苦にやみて、勞うて給

はるな、命ぞ人のもの種。」と、涙拂うてたつ袖を暫しとひかへ、「まだいふ事も多なる。」と、ひき止むれど心強く、「吾人めに懸らば惡しからん。」と、立ち出でしが又立ち戻り、「やよ杜鵑花いとゞさへ、思ひほそりし逢州主に、負債の事はしらせ給ふな、近きに忍びて來らめ。」と、立別れんとなしける折、庭の小笹の茂みより、曲者二人あらはれ出で、ものをも言はず拔打に、はつしと切れば五郎藏は、飛鳥の如く身を轉らせ、右と左に投げ退けたり。「あなや。」と杜鵑花が聲たつるを、五郎藏は手をもて止め、「とく／＼行きね。」と奥に追ひやり、優々として立ち出づれば、曲者は怖る／＼おき上り、白刃を引提げ、五郎藏が背後について往くぞとは、知るかしらぬか尺八を、心にいれて吹きすまし、顧みもせず歸りけり。

第六　五郎藏杜鵑花と思ひ違へて逢州を殺す　土右衛門再び隱形の術をほどこす事

世の中の憂き事はみな身の上に、ふりかゝりたる春の雨、身をしる雨にくづをれし、杜鵑花は一人樓に、思ひわびつゝ侘びしらに、煙草の煙雲となり、胸のおもひはれやらず、人氣なければ吐息をつき、「鴻恩うけし主君の御ため、天に齊しき良人のためゐ、此の身は何等憂目にあひ、命に及ぶ事ありとも、露厭ふ氣はあらねども、操をまもる心から、心の下紐うち解けて、小寢る夜もなき川竹の、

流れに沈むは名のみにて、何人に黄金の才覺を、いひよふる方もあらし吹く、侘しき宿は春ながら、花もさかざる憂身やな、嗚呼兎に角に經がたき物は世の中」と、いひかけて唯潸々と泣きにけり。斯てる折柄一間より、「その金御身にあたふべし。」と、立ち出づるは上右衛門なり。杜鵑花は聞くもうたてしと、立上る裳の上に、百兩あまりもあらん、小判をいれし財布を、はたと投げ出しければ、杜鵑花も金の才覺に、おもひ屈したる折といひ、黄金の鎖にひきかねて、「御身のために怨みこそあれ、思もなき妾夫婦、多なる黄金を給はらんとは、よも實とは思はじ」と、おそる〳〵いひければ、上右衛門む」と打笑ひ、「女の淺き心より、さおもふも尤もなり、其の身は憂目にあふとても、良人のためには厭はじと、御身が今獨言ありしを聞くに忍びず、此の黄金を參らすあひだ、左郎藏が當難を救ひ給へ」と、信だちていひければ、杜鵑花は不審ながら先づうれしく、取りあげんとする其の手をはらひ、財布をとつて膝のほとりへおき、「いかに杜鵑花、袖の渡の花見のとき、遠山尼公の御身にいひしをおぼえあるらめ、落花心あれば流水また情ありと、御身に落花の心なくて、我何ぞ流水の情あらん、この黄金を得んとおもはば、一筆すら〳〵と書きながし、我に與へ給ひね。」と、思ひがけなき上右衛門が言葉に暫しうち案じ、「妾に書けと宣はするは、其の黄金を借りうくる、券書とやらんの事にやあるべき。夫れなればいと心安し」といへば、上右衛門頭をふり、「否券書にはあらじ、左郎藏へ離狀かき、

我がこゝろに從はば、千々の金も惜しむにたらず。」と、聞いて杜鵑花は物をもいはず、座を立ち奥へゆかんとす。土右衛門は敢て留むる氣色もなく、「答へもなさずたち去るは、此の金を得んといふ、心はなきにやあらんずらん、此の金なきときは、御身夫婦が淺間家へ、鴻恩を報ゆべき其の期を誤つべし、されぱとて用なき金を、與ふべしと我はいはじ、そは御身が心任せなり。」と、財布を取つて懐に納めければ、杜鵑花は千に百に念じ侘び、少時答へもなさざりしが、心に思ふは、まづ彼にしたがふ姿にみせ、假に離狀を書いて良人へ送り、彼の金をもて負債を償ひ、その云譯に自害せんとおもひさだめ、さて土右衛門が傍に立ちより、「今となりて妾が恥を、君に聞ゆるも便なければ、かくまでに實ある君が心に心とけ、こゝろのうちを語りまゐらせん、妾疾くより五郎藏が、赤貧となりしを疎んじ、緣を斷たまくおもへども、富めるにつき貧しきに離れなば、人の誹り我が身の上に及ぶべしと、いまだ言葉には出さず。君若し其の金を妾におくり給はる時は、五郎藏に與へて主家の用に宛てて、夫れを功に五郎藏と緣をたち、君に終身をまかさん事いと易かるべし、愈金を與へ給ふや。」といひければ、土右衛門は事成りたりと心に喜び、「御身此の場をさらず、五郎藏へ送るべき離狀書いて我にあたへ、今宵川竹が長に誘引ひゆかば、いかにも金を與ふべし、いざとく〱。」と催して、金は財布のまゝ、杜鵑花がまへに差出しければ、美しくうち微笑み、「君にかくまで實あり、妾も何ぞ實なか

なんや、これ見給へ」と違棚より、硯の箱をとりおろし、流石面なくやありけん、うるはしくは見えねまでに違ひけり、少し螢火を背け、手もとをのけにすり流す、墨はいがみど真直ならず、女の心一筋に、大の丸きを、命毛や、鼠のあす筆とりあげて、山鳥の尾のながながと、くり返したる巻紙に、書きおとせしが、熟見て、あなをこなしと引破き、又書きくだし読み下し、威刀に換へて切れどきれぬ、筆の鞘さへよしや世に、短き盧のうりぶきと、涙かくして差出せば、土右衛門は兇猫とうち悉み、まよくも背けりと受け納め、全く杜鵑花にあたへ、いそがはしく梯子をくだり、時延と被しくうち嘆けば、庭の隈より大丸六素兵左あらはれ出でて、土右衛門が前に畏まりて、命せにしたがひ、庭の木陰にかくれゐて、左郎藏が歸りをまち、唯一うちと切りつけしに、這奴も強者、何の苦もなく投げ退けられ、思ひの外に苦き目見て、われわれが命既に危かりつるが、何おもひけん後をも見ずしてかへりしかば、猶なほ背後につきてうかゞひゆけども、這奴が勇気烈しきゆゑにや、たえて打掛るひまもなし、首領彼をうち取るべき、手段をめぐらしたまへことといひければ、土右衛門何なと打笑ひ、あら詞甲斐なき奴等かな、彼如きに怯れ戦き、逃げ歸りし臆病者、白地に物語るは、直なりとや賞むべき、嬲しとや笑ふべき、ことばとりを顧み、彼の杜鵑花が玉章を取出し、是れこそ杜鵑花より、左郎藏におくる離状なり、我杜鵑花を言瞞きてかかせつれば、二人は急ぎ左郎藏が家にいたり、這奴

が怒りをひき出し、門邊に待ち受け討ち止めよ。」と渡しければ、太九六は受け繼ぎ、五郎藏にこの儘

脹をれたさんは、いと心やすき事にはあれど、我は繩に投退けられ、腰痛みてたゝ難し、討ち取る役は素兵五に、命せ給へ」といふに、素兵五大いに驚き、「投げられしは和主のみにあらず、我は流れの中に落ちいり、背に肚をうちつけたれば、腕きて、歩行くだに心に任せず、我は其の玉章をもてゆくべし、和主門にまちうけ給へ。」と、爭ひ果つべうも見えざれば、土右衛門は氣を焦ち「さまで五郎藏を恐るゝとならば、汝等の手はかりじ、とくく玉章を持ちゆきね。」と二人を追ひやり、枕元の懐に登り「いさとく田宇草が長にゆくべし。」と急がしたつれば、杜鵑花は答へもなし兼ねて、掌を帶の間にさしはさみ、「日頃常に癪聚のやまひあり、時も時とてひたと鳩尾を塞ぎ、言ふさへもいと苦しかくては程近き、長が家にも歸り難からん、少時まち給はれ。」といひつゝも、又打伏して息もたゆげに見えけるに、土右衛門は心得ぬ面持して、なほさまぐに賺しければ、杜鵑花漸氣に起きあがり、「伴かで叶はぬ事あらば、君ばかりゆき給へ、妾は病癒えし後、心閑かに歸るべし。」と、鬱結として更に人事をしらず、土右衛門は大いに怒り、「我ひとり長が家にゆく程なら、言葉を盡して離狀をかかしめ、何ぞ黄金を與へんや、是非に我を誘引ふべし。」と、惱める杜鵑花が手をとりて、引立てんとする其の折から、「やよ少時待ち給へ。」と聲かけ、襖門さと開き、徐かに一人が中にわけいり、手に持ちた

る團扇をもて、上右衛門を押止むる者あり、誰ぞと見れば是れ則ち逢州なり。脂粉の粧は雲を鬢に起し、綺羅の艶は萩の秋を摺る風情あり。唯是れ乙織女の下界にくだるかとあやまたるゝ。さて逢州、鶯の囀る如き聲を出していひけるは、「星影主とやらんには、妾をばしらし給ふまじ、杜鵑花主とは姉妹の如き、逢州と云ふ遊女にぞはんべる、妾も頃日病に苦しみ、枕をもあげざりしが、遁れざる事ありし、嚮に此の茶亭にきたり、事の[illegible]は襖のあなたにて聞き侍ふ。互に若の頃よりして、言ひかはしたる其の人に、離状書いてわかるゝとは、よく／＼深き由縁ありて、否、よく／＼深き君と杜鵑花主の、縁にやはべりなん、今夜を千よのはじめとし、龜鶴の契りを結び給はん其のゆかりから、杜鵑花主の持病の癪、嘸本意なうもおぼさんか、ゆく末ながき諸白髪、今宵にも限るまじ、僅かの黄金を與へしゆゑ、病に臥したる其の人を、誘引ひしと言はれんには、却つて君の恥ならずや、爰をよくおぼしあきらめ給ひね」と、さまざまに言和めければ、上右衛門も言葉をやはらげ、兼て聞き及びたる華魁逢州主の、ここまで事をわけいひ給ふを、聞き分けぬにはあらねども、田字草が長に誘れゆかんず契約にて、金まで渡せしに、俄の病は心えず、杜鵑花が事は吾にうちまかせ給へ。」と、又立ちよらんとなしければ、逢州はなほおし隔て、「さおぼさば波風たたぬ計らひあり、見給へよ妾は髪もとりあげず、臥したるまゝの身嫐衣、白綾の此の小袖と、杜鵑花主のはなやぎたる、目結の衣とぬぎかへて、

藻蒲黄に萱水、たれしらぬ者もなき、杜鵑花主のあの提灯をもたせなば、夜目にはそれと人も見ん、殊に袿は一對に、胡蝶を縫ひしも時の幸ひ、妾を假に杜鵑花主と思ひ給ひ、長が許にいたり給はば、程なく主の痛もおり、後よりきたり給ふべし」と、流石に里なれし逢州なれば、杜鵑花が心をはやくも推し、土右衛門を此の處にあらせじとて、言葉をたくみに賺しこしらへければ、土右衛門も逢州が辯舌にいひまはされ、しぶしぶに承引きけり。杜鵑花はいと侘しげに、物もつやつや言はざりしが、過刻に離狀を書き誤ちたるさまにもてなし、調へおきつる玉章を、袂より取出でゝ、逢州が耳に口を寄せ「密かに五郎藏どのに、おくり給はれ」とわたしければ、逢州はさらぬ面もちしてとり隱し、是れぞこのよの別れとは、しら綾の衣脫ぎすてて、杜鵑花が胸の火燒草、我が身の上に著かへたる、紅蓮の炎の緋鹿子に、雪の肌の消えてゆく、ともしらずして下りたつは、三惡道の段梯子、日わたる駒の駒下駄も、一足宛に死を急ぐ、いざさせ給へと鬼々しき、火車は地獄の使にて、無常風に吹きかへし、蹴かへす月日の鼠裏、命の種の根や食まん、星影といふ毒龍あり、さきに猛虎のかゝると、おもひもかけず逢州は、さまざまに言慰め、杜鵑花をば甲屋に殘し、土右衛門と打連れだち出でけり。

是れはさておき素兵五太九六の兩人は、御所の五郎藏が隱家に尋ねゆき、嚮の手なみにや驚きけん、門首に傍徨みて內にはいらず「何やらん杜鵑花主が、これ送り給ふ」とて、かの玉章を投げ出し、足

さやに逃げさりけり。此の時左郎藏は家に歸り、唯一人あぐみ居て、來しかた行末の事など思ひめぐらし、下に及ぎこめたりしが、何の心もつかず、杜鵑花が文を手に取りあげ、燈火のもとに繰りかへし繰りかへし讀み終り、且怪しみ且おどろき、これ正しく離状なり、過刻に會ひつる其の時は、常に變りし事もなく、うつて替へたる彼が胸中、女の許より男のもとへ、離状おくる例もなし。あな不審しや若しくは上右衛門、我が怒りをひき出さんとて、然はからひしにやあらんと熟見れど、杜鵑花が筆蹟に紛ふべうもなければ、少時默然として、左往右往に思ひめぐらし、やゝありて忿然として怒りをおこし、最前星形上右衛門、甲屋にて杜鵑花をとらへ、言葉をつくして口説りしを、彼は厭ふさまなりしが、定めがたきは人心、我赤貧となりしを疎み、其の身を彼にまかせつるか、否、夫れも我が潔白なる心にくらべつる推量といふべし、今こそ思ひあたりたり、とくより杜鵑花上右衛門に靡くといへども、竊には我垣の外面にしのぶを知り、わざと難面くもてなすさまを見せ、心をゆるませ這奴が手下にいひつけ、我を害さんたくみよな、運強くも脱れし、あなおそろしく／＼と、數回歎息なせしが、なほ怒りに堪へずやありけん、すんと立つて押入をあくる襖門の閾みさへ、焦心れてとり出す脇差、鞘にふせたる蝶鮫も、浮世を夢としら緒に、歪まぬ變の雙紐り、腰にほつこみ走せ出でける。かく堪忍人に勝へたる左郎藏といへども、火性短氣をいかんせん、王の暴にや比せん、錦の破

れどもいはんかたなき嘘を、理つけて託ふ逢州は左右衛門を誘引ひ、甲屋をたち出でしが、此の夜も春に似もやらず、空さへ曇りがちにて、さそひ吹く風衣さむく、花の吹雪は雲よりや、こほるゝかと覺ゆめる。子刻の鐘も告けわたり、「魚鮮めせ／＼、一按摩消辭」とよびありくのみ、軒守る犬の吠ゆるこゑに、打ちまじりてものさみしく、甲夜のにぎはひにはひき替り、花街寂寞として夜色又幽々たり。禿火車は、逢州がさきにすゝみ後にさがり、夜もはや更闌けたれば、「大夫さん急がせ給へ」と催せど、逢州は杜鵑花がおもひ勞ふを見るに堪へかね、當難をたすけんとて、左右衛門を誘れきたりしなれば、用守草が家に歸りて後、爲やせん角やいはんと、心も心ならず、「あれ見給へ雲のたえまの星あかりに、櫻の白くのみ見えたるも、何となく風情ありげに物語り、寛かに詠め徐かにあゆみ、閒あらせんとて屢行きを止めければ、左右衛門は氣を焦燥ち、「長が許にいたりなば、疾く杜鵑花をよびむかへ給へ、斯くほど近き路を、往きなやむといへる病にもあるまじ」と、流石逢州がうちとりたる、たち行跡に耻おやしけん、其の外の事は言はず、「既に用守草が家も近づきけり。さても御所の五郎藏は、手中にて斃れつゝみ、はやくも逢州とのはさきへまはり、辻行燈の影に身を潜め、いまや／＼と待つをりしも、菜蒲黄に傍水、おぼえある杜鵑花が提灯、更さき來る其の容は、まがうべうもなき左右衛門なり、不法の大賊水性の淫婦、蛇蠍豺狼となして、怒りをやすらんと思ふから、氣逆のぼり眼く、

られ、衣の色あひにのみ心をとめ、逢州が面は見も定めず、往く先へつと現はれ出でて、腰刀閃かして提灯撲地と切り落せば、「あなや」と禿が叫ぶ聲、火車は白刃を見るよりも、足なへて起ちもあがらず、逢州は豫てより、仇を討たんず願ひありて、心男々しき女なれば、若しや吾が仇の餘類、反討にせんとて來りしか、さるにても便宜あしと早くも心づき、駒下駄脱ぎすて、善惡もしらぬ暗を幸ひ、二三間ばかり逃れゆく。衣にとめたる炷物の、薫を知方に追ひゆく五郎藏、板金剛にて背後より、裾をしかと踏み止むれば、裲ひらりと脫の殼、聲さへたてぬ虛蟬の、また逃げ出せば又追ひゆき、切りこむ白刃は冷りと、顋にさはつて空を突く、はつとばかりに飛び退く逢州、衿よりこぼるゝ紅の、肌著をおもはず踏みくだみ、撲地と轉べばおこしもたてず、膊四五寸切りさげたり。呼と叫ぶをこころよげに、衿髪とつてひきまはし、氷の刃胸に突きつけ「己が爲にこそ鴻恩受けし、御主君の勘氣をかうむり、今となつて讎敵たる、土右衛門に身を任せ、榮利を計る老野狐、我に恥辱を與へしは、此の胸に覺えあるらん、怨みの刃うけとめよ」と、聲たつる間もあらせばこそ、力を究めてさし通せば、雪の膚も紅の、鮮血に染みて魂きはる、玉の簪地におちて、今仙境にや歸るらん、花の姿を見すてつゝ、いまはの鴈も空に啼く、聲もろともに息たえたり。「あなこゝちよや、さるにても、土右衛門はいかにしつらん」と、見廻らす折ふし、風あれ雲破れ、二十日あまりの月山の端にさし登り、皎

閴として白日の如し。五郎藏信度打見やれば、いつの程にや逃げ去りけん、側に人氣なく唯土右衛門のみ自若として傍徨みゐたり「這奴不敵の曲者逃しはせじ。」と、白刃打振り切りかゝれば、土右衛門は莞爾とうち笑み「おのれ來つて虎の髭をとらんとするや、嗚呼危し〳〵。」と、廣言はなつて拔合はせ、丁々と戰ひしが、奇なる哉妙なる哉、朝日に向ふ霜の如く、土右衛門が形忽然ときえ失せ、唯白刃のみ虛空に閃き、擊てど拂へど手ごたへなく、霞を切り煙を突き、又陽炎を握るに似て、いかんともせんすべなく、ほと〳〵危く見えけるが、五郎藏不圖心づき、眼をとゞめて熟々見るに、姿こそ見えね土右衛門が壁人、月影にあり〳〵と、街上へうつりければ、扨こそ彼が幻術も、太陰の德には勝つ事あたはずと覺ゆれ、是れ天の助けなりと、影を的に容なさる。土右衛門も五郎藏が勇氣はげしきに、敵し難くやありけん、又も八重雲吹きとおて、月をかくせる雨雲りにまぎれて、遂に逃げ失せけり。かゝる處へ花街の雜戸、手に〳〵棒を引提げつゝ、提灯ともしつれ走せ集まりしが、五郎藏が白刃を引提げたるを見て近くも進まず、あれ取逃すな。」とよばはり、遠く圍みてたゞ彼と罵り居たり。五郎藏も今は力なく、逢州が首うちおとし、袖ひきちぎつて腰に結び、繻の離狀をうしなひければ、威の白刃うちふつて、遙かのあなたの辻行燈を取り來り、心徐ろに尋ねありしが、逢州がとりおとせし、杜鵑花が後の巨筆を、彼の離狀とこゝろえ、拾ひ上げて懷に確と納め、值もなき雜戸に、鞋を負

はせんも罪深しと透間を窺ひ、何地ともなく逃去りけり。さて花街の輩には、逢州が死骸の傍にたちより、萌黄の縫紋衣の色あひ、切り落したる提灯の印まで、疑ひもなき田守草が長の、杜鵑花なるべし。」と言ひしらふ折から、杜鵑花は甲屋にありて、かくと聞くより夢の浮橋諸ともに、走り来りて亡骸を見るよりも、餘りのことに涙も出でず、暫然として傍徨みしが、身には逢州が白綾の小袖を著なしたり。嚮より害に苦しみて、髪さへも亂れつれば、雜戸は一め見るより、「あなや。」と喚び、「やよ杜鵑花主の幽靈、非業の死は是非もなし、あと懇ろに弔ひ進らせん、はやきえ給へ南無阿彌陀佛なむあみぶつ。」と、異口同音にとなへけり。

第六　後條

田守草が長にては、花の司とたのみたる、逢州を殺害なされ、剰へ其の人をさへ取逃し、何者なる事をしらず、憤りがほにて次の日も、既に暮れんとす。取りわき杜鵑花には、姉妹ともたのみつる、逢州が非業の死を深く歎き、病といひたて己が閨房にたれ籠めて居たりしが、若しや敵の手懸にもなりなんと、昨夜死骸の傍にて、拾ひ置きたる玉章を、取出し開き見るに、思ひがけなや五郎藏より、送りたる離状なり。杜鵑花も心驚き、左往右往思ひ廻らし、扨は昨夜の離狀を、送りたるを眞と思ひ、良人の怒りをひき出し、妾を害さんとなし、謬つて逢州主を殺害なし給ひしならん、こは如

何せん」と少時涙に暮れゐたるが、屹度心を定め「主君と敬ふ良治公、夫れに因縁ある逢州主を殺したる云譯には、五郎藏殿切腹し給ふに疑ひなし、無益き繰言言はんより、妾先に自害して、人を殺せし惡名も、我が身の上に著ぬべし」と五郎藏に送らんとて、縫ひおきたる綿入を取出で、袿の上に著なし、手筥の內に隱しおきし、懷劍をぬき放し、左の小脇に突立てたるが、流石女の心弱く、鮮血さつと濆るに、瞑眩きてたまりえず、撲地と顚び、間の掛門を打覆せば、此の物音に打驚き、於杉は周章て走り來り「こは杜鵑花主狂氣ばしし給ひしか、死なで叶はぬ事ならば止めはせじ、由緣を聞かせ給ひね」と、勞り起せば眼をみひらき「於杉殿樣子と言うて外にもあらじ、昨夜逢州主を殺せしは、斯くいふ杜鵑花に侍るなり、さ驚き給ふも理なり、情人を逢州主にねとられしが恨めしく、人しらず殺害せしが、闇室の裏に不善をなせば、鬼得て是れを誅すとやらん、遂には此の身も罪せられん事思ひとり、潔く自害して冥途に赴き侍るなり、哀れ此の事五郎藏殿に、傳へ給はれ」といひすて、刀を引廻さんとなしければ、於杉攜り止めて曰く「逢州主の最期の一條は、妾も心に徹せし事あり、死は一旦にして易しと聞く、まづ少時待ち給へ、いひ聞かすべき事あり」と、樣々に勞りける。

淺間嶽面影草紙後帙 逢州執著譚卷之三 終

淺間嶽面影
草紙後帙

逢州執著譚 琴卷下

種彦 著

第七 寄居蟲袖乞して四ツ竹の曲子を唄ふ
於杉が懺悔物語暗に母子再會の事

さても御所の五郎藏は、柳巷の雜戸には手も負はせず、難なく圍みを遁れたち歸り、逢州が首級とは曾てしらず、袖にひき包みしまゝ、佛壇の下にかくし、次の日はさらぬ風情にてゐたりしが、原逢州が殺されつる一條は、田字草の長も深くつゝみ、人々の口を留めければ、程近き五郎藏が隱家なれど、其の事は風說するものもなく、今は漸く心おちゐて、梶原平平、秩父重助をはじめ、數多の手下をあつめ、終日酒盃みかはし、日暮におよびて、己が志々に別れたり。五郎藏唯一人となりければ、つくづくおもひめぐらすに、我が身赤貧となりしを疎み、富めるにつきて榮利をはかるは、惡みても飽きたらぬ杜鵑花なれど、あだめく花街の風俗のみ、斯かる不法の志もいできしならん、我長の病著に貯蓄つき、せん術なきところなれど、遊女となせしは我か罪にて、彼のみ惡むも由緣なきに似た

り、昔は一つ衾により、憂きを語りし其の人を、一旦の怒りに乘り、仇敵の如くおもひしは、われながら偏屈なり、せめては首級を人しらず、寺院に葬り亡きあとを、丁寧に弔はんとおもひ定め、流石は恩愛すてがたく、門口丁と鎖しかため、居よりて徐らひきあくる、帋門に畫く武藏野の、つまはこもれど花房を、ちぎりし如き死貌を、今はなか〱見るに忍びず、ありあふ調度にすゑて、佛壇の前に直し、燈光かゝげ鈴うちならし、「南無幽靈頓生菩提、なむあみだぶつ〱。」と、唱へつゝつく〲みれば、こはいかんせん杜鵑花にはあらで、逢州が在りしに變らぬ顏ばせなれど、血に塗れたる口もとよりは、噛みしめたる齒の少しあらはれ、目は半ば開いて怨めし氣に睨むに肖たり。五郎藏は一目みるより、なみならずうち驚かれ、惘然として醉へるが如く、怪々として、夢に似たり。稍ありて獨言にいへるは、「あな訝しや引きちぎりたる片袖は、おぼえある鹿子目ゆひ、杜鵑花が衣に疑ひなし、又昨夜見たる提灯の紋といひ、それと思ひ究めしに、これぞ正しく逢州主の首級なり、もしくは老狸野干の、我に憑いて障礙をなすにやあらん、たゞしは心の迷ひか」と、燈火を近くよせ、右み左みれど逢州に、紛ふべうもあらざれば、こは如何にせし錯ちぞや、まづ長が許に行き、よそながら問ひ究めんと、走せ出せしが又たち戻り、兎やせん角やせんと氣を焦燥ち、たちゐる間に袂より、杜鵑花が玉章うち散りて、風にうち開くるを克くみれば、昨夜の離狀にはあらで、假名も文字もしどけなく、行

籠れて昔をなしたり。心をこめゝ其の間にも、手にとりあげて讀みくだす、その玉章のおもはかねに目く、

御ものがたりなくとも、田守草の長の負目は、妾あがなひ申さんと、さまん＼に心をくだき侍れど、風をもまたで散る、ひと花ごゝろのかたのみにて、井手の玉河いひ出でんよすがもなく、いはぬ色なる山吹の、花の黄金はいつかもとめんと、まだ春わかみ谷蔭の、鳴かぬに思ひ彌増すをりかね、星影の佞人妾に言ひより、君の御許に離状をおくりはべらば、金百兩與へんと聞ゆるも、いと苦しくは侍れど、路の柳垣の花、手折る人しまつ遊女と、身のあさましきをかへりみつゝも、風に柳の吹くまゝに、まかするこゝろにもてなし、道ならぬ事としりつゝも、空言の離状をかき、その金にて長に負目を贖ひ、わらははは自害して浮世の夢を見はて、蓮臺とやらんを半ばわけてまつらすからに、幾百とせの壽も過ぎ給はば、此の世にかはらぬ妹背の契りこそ、心だのめに侍るなん、かしこ。

と讀み下して再びおどろき、斯かる杜鵑花がこゝろと知らで、一旦の怒りに堪へかね、討ち果さんとせし愚かさよ、我何の面目ありてか、再び彼に見ゆべき、加之人遣へとは言ひながら、主君良治公寵愛他に異なる、逢州どのを殺害なし、若し此の事告に洩れなば、良治こそ逢州が色にまよひ、淫

酒に耽り宴樂にのみあかしくらしたまふ故、止む事を得ず五郎藏彼を殺害せしなんど、いひしらふも測り難し。翟婁の片狂死まで、おもひたえて御巷にも到り給はず、仁義德化ある御主君に、わが短慮から
なき名を負はせたてまつるに似たり。葱嶺山の高きに譬へ、蒼海の深きに比すとも、なほあまりある
鴻恩うけし良治君、其の恩を露むくいたてまつらず、却つて御名の巷にいづる、不良の事をしなせし
は、我ながら醜しとやいはん、愚かとや言はん、神にも佛にも見放されしや、無念口惜しことて、袖
を食ひ縛き疊にひれ伏し、女めかしく歎きしが、少時ありて兩肌押脱ぎ、氷の刀拔きはなし、逢州が
首にうちむかひ、はらはらと涙をながし、「夫れ人は定業不定業非業不非業のほかにいでず、小笹の丸
雪草の露、遂には消ゆるいのちなれども、嗚呼御身ほど薄命の者はあらじ、かくいふ五郎藏が短氣ゆ
ゑ、はかなき最期をとげ給ひ、さぞな無念とも思ひたらんが、斯くなるも宿世のやくそくとあきらめ
給ひ、心殘さず成佛あれ、いで我も切腹して御身に罪を贖ふべし。」といひもあへず、脱ぎかけし袂に
白刄を押卷き、左の小脇に突立てて、右の傍腹まで、一文字にひき廻す折こそあれ、お杉は痍負ひた
る杜鵑花を竹籠にかき乘せ、喘ぎ喘ぎ走り來り、五郎藏が門にたちより、戸扉も破るゝ許りにうちた
たき、「爰あけてたべたべ。」とよばはれど、たえて答ふる者なければ、力をきはめて押しかへし、鎖
はづれてひらく扉に、力餘りて合破とこけ、五郎藏が自殺せしを見るよりも、「やれはやまり給ひし。」

と言ひさし、いそぎ外面に出で、杜鵑花を竹籠よりいたはり出し、門はもとの如く鎖しかため、五郎藏が傍に誘引ひぬ。さて杜鵑花は苦しき息の下より「我が夫には何等故ありて、生害はし給ふ。」と問はれて、五郎藏莞爾とうち笑み「それ我がいふべき事にこそあれ、我切腹なす由縁は」といひつゝ頤をもつて逢州が首をさし教へ「言はずと御身等推し給へ、いと面なし。」と顏をそむけ、暫くは言葉もいださず「いかに杜鵑花つゝむとすれど、御身も顏色例ならず、殊に衣より鮮血のしたゝるは、一定深き由縁あらん、疾く語りてよ。」といふさへも、いと苦しげなり。其の時お杉近く進み「杜鵑花にはけさより、心持つねならずと、物も一切いひ給はず、閨房にこもりて只管に、ものおもはしき面もちなる、心得ずと思ひし故、さま／＼に言ひ慰め、物とゝのへる其の暇に、呀と一聲魂消えて、はせよりみれば無殘やな、雪の膚を搔破り、杜鵑花ぬしも此の自害。」と、つぼ折りし衣刎ねのくれば、脂膏に通る鮮血の紅、見るより五郎藏大いに驚き「なほ仔細あるべし。」と、うち潛まりて聞き居たり。お杉重ねていひけるは「妾も周章て抱きおこし『何恨みありて生害には及び給ふ、樣子を聞かし給はれ。』と、問へば答へて、『此の杜鵑花は、逢州に情人をねとられ、その怨みはれ難く、暗にまぎれ殺害し、人知らずとは思へども、天道いかでみ許し給はん、遂には逃れぬ罪咎と、心より思ひ諦め、腹切つて死し了んぬ。』と、淚一滴おとしもせず、潔ういひ給ひしぞや。噫素性とて爭はれず、流石は武

士の妻なりと、おもふからなほ悲しくて、せめては息あるそのうちに、御身に會はせ餘波をも惜しませんと、病氣といつはり竹駕に乘せ、いたはり來たる甲斐もなく、五郎藏どのも此の切腹、よく／＼淺き緣にや。」と、悲歎の涙袖を潤し、「いかに杜鵑花ぬし、戀故人を害せしといひなし、實はこれなる五郎藏殿の身にかはりて、死なんとこそおもひ給ひしならんに、さぞな本意なく思ふらめ。」と、心の底をいひあてられ、杜鵑花も漸く膝行りより、「晴五郎藏どのお杉どのも、斯く知らせ給ふ上はつゝむも益なし、女の心はいと淺く、星影土右衛門を言ひ嫌き、金とゝのへんとおもひこみ、加之箇樣箇樣の由緣ありて、逢州ぬしと小袖を脱ぎかへ、咎なき人ははかなき最期、其の場におちある離狀を拾ひあげ、君の怒りの刃にふれ、人違へなる事を諦り得て、何等おもひ廻らせども、怜悧しだてせし此の身は罪人、悔の八千たびくゆれども、かひも渚に海士の刈る、みるめを忍ぶ閨房のうち、君の綿入を身に著なし、女めかしく自害して、吭のくさりは搔切らず、御身にかはる心にて、腹切つて死ぬ此の杜鵑花を、少しは不便と思ひ給はば、未來は變らぬ夫婦ごと、いうて聞かせて給はれ。」と、絶えいるばかり泣きにけり。五郎藏も涙搔拂ひ、「我とても今となりて、お杉どのはいふも更なり、御身に會ふさへ面目なし。僅かの金にさしつまり、物語りしが仇となり、こゝろを千々に碎くなる、金を得てん謀みとは、淺き心にしら絲の、染むればそまる人心、憎しく／＼と思ひこみ、我が妻ながらも大恩あ

る、御身を討ち果さんとせし冥罰は、忽地此の身に報い來て、假にも主君の褥をとらし、逢州殿を殺せしは、主を討ちしに齊しきぞや、極重惡人無他方便、唯生彌陀ときく時は、唯念佛こそ頼もしき、さらば生死の雲を消除し、偕老の華臺同穴の寶地にて、再會せん。」と絶え入る息を呻とつき、苦痛をみせじと眼をみはり、やよ杜鵑花「御身はさまで深疵とも覺えず、殊にいさゝか罪なき身ぞ、何卒我の養生して、なからく跡を弔ひてたべ、いふべき事も是れ限り、さらば。」と言ひ捨て、刀を引廻さんとする、其の手にお杉は縋りつき「愚かの事をいひ給ふ、松の二葉は常盤にて、一本芒枯れ易し、野中の案山子澪標も、獨りはたたぬ世のためしぞ、御身が死去き給ひなば、何條ながらへ居給ふべき、杜鵑花ぬしを助けんとおもひ給はば、御身もともども養生して、壁生草のいつまでも、添ひ遂けんとは思さずや、言ひがひ無の心やな。」と、激す詞の嬉しくて、杜鵑花は痛疵うち忘れ、お杉どのよくとどめては給はりし。五郎藏どのに會ふときは、言ひも懲し給はんとこそおもひしに、さもなくて親しき今の言葉を聞き、死にて嬉しき命なり。兎にも角にも我が夫は、活きながらへて給はれかし、雪に折けし弱竹や、水にかげそふ藤波の、逆さま事には侍れど、思ひ出で給ふをりもあらば、一杯の水一枝の花、手向けて給はれ我が夫。」と、いひかけて又よゝと泣く。五郎藏はお杉をして、側の屏風にかけし小袖を取りおろさせ、さて言ひけるは「我御所の五郎藏と、惡名人にいはれし身が、兼ての覺

悟も最期に亂れ、心急されしといはれんも面なし、氣をおとさせじとおもふから、竊のやうに聞えつれ、御身も我も此の期にては、存命ふべしともおもはえず、此の小袖は我が下著にとて贈りたる、燕子花の百色ぞめ、御身も錦入の其の下に、著なしつるは幸ひなり、これを著替へて一對となし、先や最期を潔くなすべし」と、深更に聞せず徐ら身を起し、小袖をとつて肩にうちかくるも、いと苦しげなれば、於杉は視るに忍びず、潛隱て傍にたちより、帶ひき結びつ介抱なすに、杜鵑花も漸く身をすりよせ、「在りしに變らず逢州ぬし」と、言ひ、人面は合はせながら、一軀の無きぞ寠し」と、首級を袖にうけもちて、文繰りすつる千行の涙、お杉は不圖心づき、たれにこそ屈竟のものありと、腰につけたる風呂敷包とり擴げ、是れぞ昨夜逢州ぬしの著給ひたる裲襠なり、幢幡につくりてある蘭若へ納めんと、竊に微衣裳のもとへ、持ち行くべしとおもふ折から、杜鵑花ぬしの此の遺體、おもはず此處へ持て來りしも幸ひなり、これを逢州ぬしの軀の、形代とも見給へ」とさしおきぬ、五郎藏もつくづく見るに、昨夜逢州を殺しつる折、裲ははやく脱ぎすてて、更に鮮血に染まず、たゞ板金剛に一踏みとめたる、泥のあとの殘りしを見るより、其の刻は氣もきえ心も亂れ、苦しくもありつらんに、唯一聲叫びたらば、斯く無殘には殺害もなすまじきに、心雄々しきも却つて其の身の仇となりし」と、數回歎息なしけり。時に初更の鐘聲鎗々と響き、笹に植ゑたる一樹の櫻、爛漫と咲き亂れしが風に誘はれ、はらは

らと落ちそふを借度みやり、いかに杜鵑花、我いまだ須崎角彌といひし昔、御身と密かに通ぜしが、七右衛門に見顯はされ、既に刑罰におこなはるべかりしも、永和三年三月中旬、北上川細の渡の花のときなり。所と日は異なりといへども、遂には花下に命を果す、是れ宿生よりの約束と思はれ、かかる緣は末の世に語り傳へ、男も女も行狀正しからざれば、淺ましき死をなすといふ、人の教へになすべし。」といふに、杜鵑花もいと苦しげに眼を見開き、「忘れもやらじ其の時は、牧山の長福寺よりの歸り路、遠山尼公の命せをうけ、むかし結城莊七郎景氏が娘、千世能姫がつくりたる、浮世わすれといふ今樣をうたひ、御身の鼓弓と妾が琴を合奏せしは、緣を結びしいとぐちなりしが、浮世の夢を見はてつゝ、消え往く身にはいと似合はし、此の世の名殘に彼の今樣を朗詠せん。」といひかけ、壁にかけたる鼓弓をとり卸させ、漸うと膝にのせ、先づこゝろみに清搔きければ、五郎藏もうち微笑み、「それにてこそ我が妻なり、おくれはせじ。」とこれも又、尺八をとり出し、吹き合はすれど息洩れて、傳ふ涙は露きりに、きれどつながる妹と脊や、戀慕ながしの徒し名も、鼓弓呼吸の絲たえて、魂は虚空に海老尾、棹の御子にあらねども、鼓弓の弓の音にぞよる、一世の親子二世の夫、三世の主の三ツの絲、絲まきしめて調子ほどよくひきならし、

まづ春は花の木、夏は凉しき河ぞひに、夜よし月よし秋たちて、雪の朝のなよ竹に、止るすゞめ

の千代とたゝく、浮世わすれておもしろや、うき世わすれておもしろや。

千世能姫浮世忘れの今やうをうたひし事、本朝二十四孝に見えたり。

と唄ひけるか、日頃好むところの妙手なれば、音色も清み渡りて興ある事とは聞ゆれど、いとゞ憐れはまさりけり。斯かる折から袖乞とおぼしく、四十ばかりの男と二八許りの娘と、門の外に傍徨ゐ、彼の男恭しく歎きして「これは風流新口說、四ッ竹のうち合はせ、昨夜の事を今日すぐに、唄ふ處を興じ給へ、小歌は世にしる魚屋梅露草子がさく、三絃は奥山桃雲が手を下したれば、拙からざるは聞きての後しらせ給へ」と、ことばには似ず板廂に、霰のはしる如きおとして、三絃をいとさわがしくひきならしければ、娘は愛敬つきて四ッ竹を、雙の手にうち合はせつゝうたひけり。

是れより袖乞の娘の歌「一爰に哀れな說話がござる、まだき蕾の頃ほひよりも、水を灑ぎつ小枝をたわめ、臥具の錦の室咲に、さけば色香のいと隱れなき、花の都の柳巷の名とり、時に逢州自他毎に、愛でつゐほれつ錦木よりも、門にたつ人身もくづをれて、男たやしよ緒絶の橋の、君をあこやの松甲斐もなく、外に出羽いづると栢植の、小櫛とる間もしき波よせて、茶屋がむかひの提灯は、星を連ぬる宵々毎に、忍び逢瀨のそのもつれにて、端手な柳にするどき松の、葉越々々の月ならなくに、あはや閃く劒の霜に、ちりてゆく身は血汐のもみぢ。

勢州山田にて唄ふ小歌は、同國山田川崎町に住みし、魚屋梅露草子といへる者の作なり。其の音頭小歌もおなじ作者なり。梅露川崎町に住むがゆゑに、川崎音頭とも伊勢音頭とも言へるなるべし。三絃は奥山桃雲といふ者手をくだす。此の桃雲は本師職なるよし、予が識れる或人の通信に見えたり。其の時代は異なるべけれど、此の小歌の作者には、梅露草子が名をかりられたれば、因にしるしつ。

唄ふ聲に五郎藏は耳を欹てて、「時もときとて物ごひが、唄ふ小歌は逢州ぬしの、果なくなりし身の上を、何地の何人か作りけん、浮きたる心もありし如く、言ひ傳ふること恨み多し、噂噂悪しといへ悪しといへ、其の人の名を巷にもらせしは、我が短氣より起りしにて、怨むべき人もなしことと、又後悔の涙にくれ、袖打ちしぼる物ごひは、他處の時雨と星あかりに、あやしの本を繰り廣げ、「ごあ聞き給へ是れからが、逢州の最期物がたり、一しほ憐れなところに侍ふ」と、大聲に呼ばはり文三絃を彈き出せば、哀は聲もうら悲しく、斯くぞうたひいだしける。

歌「逢州若しき聲をあげ、是れ莆少時まち給へ、妾に何の咎ありて、かかる憂目に見せ給ふと、身「いへど叫べとつゆ聞きわけず、何の由縁とは事あたらしや、我とおん身は丫角よりも、離れじものといひ交し、仇し浮名も憂事とせず、共に憂世を諸白髪まで、渡りくらべんものとし誓ひ、

阿波の鳴門のあひ見ぬ暇に、よそに浪風々々たちつ、他の眺めと散りゆく花は、爰にちらして此の身も共に、死してうきたる名を流すのは、まだ思出と言ひつゝも、氷の刃鞘をはらぬき、あをき苦しむ光景をみるよりも、流石命の惜しまれて、うちかへす刀に首かききおとし、往方しれずに落ち失せければ、未練者とてみな口々に、笑はぬ人ぞなかりける。實に逢州が無残の最期、哀れなりとも中々に、申すばかりはなかりけり。

一あれ聞き給へ五郎蔵殿、かくもあらんと推量して、心正しき逢州とはしらず、私夫に殺されたりと聞いなし、世間へその人を、未練と謗るも其の人の、門と知らねばぜんすべなければ、妾も今宵死にのがれば、明日はいかなる悪名をや、此の身の上に負すらん。あな聞くもうたてしと、聲の限り泣きければ、お杉もいと理なりと思ふより、はふり落つる涙を袖に打拂ひ、物とらせて追ひやりたる、帯につけたる巾着より、唐錢三錢とり出し、門引開けて、こいぞ物とらせんといひければ、親は深く辱からせて、編笠を後だかに被り、面は白地にあらはさず、白やかなる手に錢を受持ち、數囘おしいただき立ちかへらんとなしけるが、何事か心に徹しけん、彼の男の耳に口をよせ打囁きて、小柴垣のほとりに身を潜め、内のやうすを聞きゐたり。ともしらずしてお杉は原の席に立戻り、嗚呼妾程價なかなき者はあらじ、捨て果てし妾が身も、存命へあれば存る世なるに、惜しまるゝ身は惜まらで、

かかる哀れを見る事よ、妾こそ自害して、死なで叶はぬ命なり、今となりていひ出づるも、面なき業には侍れど、懺悔に罪もきゆるとやらん、苦痛を凌ぎ聞き給はれ、妾は原丹波國氷上郡柏原にすみし、鏡師木の瀬といふ者の妻にて、良治公の側室時鳥の御方に、幼き日見せし繼母は、則ち此の杉に侍ふぞや、思ひ出づれば往んじ應安三年、夫の木の瀬宇の葉と名づけし、四歳になる娘を誘引ひ、都がたに赴きての歸るさ、淀川の夜船にて、喧嘩買とやらんの騷擾に紛れ、宇の葉と思ひて異人の娘を連れ歸り、何方の何人が子としらねば、せんかたなう後の宇の葉とよびなせしが、吾が頑なる心から、繼子々々と惡みつゝ、夫の木の瀬世を去りて、いよ／＼おこる貪慾心、遊女に賣つて金を得んと目算みしを、何人か宇の葉に告げたりけん、往方なうなりゆきしが、妾の邪見を疎みはて、親類血族も親しまず、身のおき處なきまゝに、此の都に赴きつ、田守草の長の老女となり、逢州ぬしの物語を、熟聞き侍るに、淀より娘を誘引ひゆきしは、團一齋殿とかいひて、逢州ぬしの爹々とや、吾が邪みたるこゝろには似もやらず、名も寄居蟲とよびかへて、不便の者と養育み給ひ、姉妹のなからひもいと睦まじくすぎゆきしに、如此々々の由縁ありて、今は在所も知れずとて、言ひ出しては泣き給ふ、逢州ぬしの赤心は、此の身のための善知識、忽地惡念發起して、善心には立戻れど、我がかたへ連れのきし、逢州ぬしの媚女は、繼子々々と疎みつゝ、あまつさへ行方しれずと、流石に妾もいひかねて、

心のうちにて手を合はせ、逢州ぬしを伏拜み、さらぬ體にもてなせしが、おもはずも後の字の葉は、良治公の側室となり、長がもとにて名乘をなしつる一條は、聞きもつたへ給ふらめ、妾も其の夜は心もつかず、步廊にて聞き居たるが、悉身のうへの物がたり、胸のあたりへ燒鐵を、さされるゝよりも苦しくて、寧そ娘に對面なし、只管賠話んと思ひしを、障子ひらけばあら不思議や、姿はきえて往方しれず、後に聞きぬ是れぞ時鳥の怨鬼なりと。妾が本意なさいへば更なり、さるからに恩を報ゆる心にて、逢州ぬしをいたはりつ、實の娘と冊きしに、夫れさへあへなき此の最期。」と、又も涙に咽せかへれば、手負も聞きて、「いと理なり。」と、悲涙袖を濕しけり。かかる折から外面に傍徨む物乞の娘、笠ぬぎすてて「許させ給へ。」と內にいり、首にかけたる守袋をとり出し「是れ見覺えの候や。」と、お杉が前に差出しければ、訝し氣にすかし見て、古金襴の笹蔓形「此の中には一寸八分の、正觀音の尊像はあらずや。」といふに、娘は猶もお杉が顏を熟守り「妾は團一齋が娘、寄居蟲といふものに侍るが、此の守袋をしらせ給ふといひ、嚮よりのものがたり、疑ひもなき母上ならん、三歲の折淀の夜船に別れまゐらせし、女子は妾に候ぞ。」といふに、お杉もうち驚かれ「今もいまとてしのばしく、其方の事を言ひ出でしに、思ひきや外面に忍びて聞かんとは。よく／＼見れば兒顏覺えあり、克くもたづねて來りしぞ。」「さては母上なりけるか。」「戀娘か懷かしや。」と、抱きよせて歎きけり。救

彼の男さし寄りて「小子は切平と申す、一齋の奴僕なるが、往年奈古平といふ者に欺かれ、河内國に旅立ちし隙に、忘貝さまは往方しれず、寄居蟲さまをも守り參らせ、國々を遍歴し、周く敵を尋ね巡るといへども、今において所在をしらず、近頃華洛に赴きて、此の處より程遠からぬ、長堤の下に蝸舍を設け、貯へつきてせんすべなく、袖乞とは成つたるなり」寄居蟲さまにも日頃戀しとおぼしたる、母上に廻り會ひ、嘸歡び給はん」といひければ、お杉答へて「切平殿とやらんが赤心も、逢州主の物がたりにてよくも知れり、夫れは兎まれ最前曲子をうたひつるより、良久しく何等の由縁ありてか、外面に忍びて居つるならん」と詰るに、切平又曰く「おん身の帶に結び給ひたる巾著は、世に希なる笹蔓錦にて、此の守袋とおなじ裂なり。先に錢とらせ給ひしとき、寄居蟲さま眼ばやくみうけ、夫れゆゑに小柴垣にそうて、一伍一什を聞きつるなり」先づ問ふべくはお杉どのの言葉、心得がたき事あり、寄居蟲さまおよび吾が身の事ども、逢州主に聞きおきたりと宣はする、その逢州主とやらんは、何等の人にや」といひければ、お杉は涙堰きあへず「逢州主とは異人ならじ、一齋どのの女、寄居蟲の姉と頼みし忘貝が、柳巷にてしか呼びつるなり」と、聞いて寄居蟲小膝を礑とうち「扨は姉上も此の柳巷に坐すとや、神ならぬ身の努しらで、近きに居をトせしかゐ、年來念ずる觀世音の冥助ならん、母上是れより直に妾を誘れゆき、姉うへに會はせ給へ」といひつゝ、綴りたる衣の袖を打返し「花街

は錦に花を添へ、姿つくろふ處と聞く、かく窶々しき姿にて、妹といひて訪ひ寄らば、姉上も面なかるべし、切平は立戻り、著替をもちて來るべし、さぞな其方もようこびおもはんに、など物は言はざるぞ」と懐中鏡とり出し、髪の亂れを搔きあげつ勇むほど、猶お杉は口ごもりて答へもなさず。稍ありて「やよ娘、姉にあひたう思ふなら、花街に往くまでもなく、姉は爰に」と涙ながら、逢州の首級を前にさしおけば、「あなや」と叫び飛び退きて、袖打被し顫ひゐる。切平は手を叉き、惘然として居たりしが、逢州が首級に眼を留めてうちまもり「寄居蟲さま熟く心して見給ひね、此の首級こそ正しく忘貝さまに疑ふべうもあらず、今朝街說に聞きつる、人手に懸りて果てたりし、遊君の名も逢州とやらんといふなれば、あなさてかはし。」と傍を顧み「燈火暗うして確と見とめがたけれど、夫婦と見えたる二人の手負、殊にこの首級、此の家にあるをおもひ廻らすに、一定深き由縁あらめ。」と、いひつる間に寄居蟲も、おそる／＼首級をとみかうみ「切平の言葉の如く、此の首は姉さまの面ざしによくも似たり、いかなる事ぞ母さま切平、由緣を疾く聞かせ給へ。」と、餘りの事に涙もおちず、心みだれし如くなりぬ。お杉も涙にかきくれて「切平どのの推量に違はず、逢州ぬしは昨夜甲屋といふ茶屋より歸るさ、人手にかゝりて死しつるなり、其方が最前曲子につくりて唄ひしは、姉忘貝の事にてあり」といふに、寄居蟲よゝと許りに泣伏して「さては姉上は何者が殺せしぞ、若しや敵に廻りあひ、返

討にはあらざるや。」と、なほ詳かに事を問ひあきらめんとなしけるが、お杉も流石五郎藏なりともいひ兼ねて、躊躇ふさまに五郎藏は膝行り出で、「何寄居蟲女郎とやらん、御身の姉上逢州上を殺せしは、此の五郎藏といふ者なり、嚮に唄ひ給ひたる曲子には、私夫に殺されつると、浮きたる心もある如く作り給ひしが、全くさいふ事にあらず。」と、これを發語として、お杉杜鵑花二人かはる〴〵、ありし事どもおちもなく語りければ、寄居蟲は何と思ひ辨ふ方もなく、少時涙に伏沈み、一切貌もあげざりしが、稍ありていひけるは、「年頃慕ひし母上姉上、回り會ひはおひながら、淺ましき此の光景、宣ふ事を聞くからに、何人を怨みん是れも又、宿世よりの約束ならめ、とはいへ昨日逢ふならば、笑うて二人此のやうに、顔と顔とをあはさんに、一日おそくてあぢきなや、是れ喃姉うへ寄居蟲が、尋ねて來り侍ふぞ、應妹よう來たと、一言いうて給はれよ、逢州といふ遊君が、昨夜人に殺されつと、路行く人のいふを聞き、曲子に作りて切平もろとも、家々の門にたち、しらぬ事とは言ひながら、姉の浮名を世に唄ふは、いかなる業か淺まし。」と、お杉が袖にとり縋り、歎き果つべうも見えざれば、切平はさしよりて「さ悲き給ふは宜なれど、姉上忘貝樣といふ事を、知らせ給はねばせんかたなし、その曲子が媒して、母上に回り會ひ給ひしは、姉尊靈の導き給ふに疑ひなし、かかる上は一齋君の最期の縁由を、母上にきこえあげ、父の仇を討ち給ふこそ肝要なり。」と、いひ慰めければお杉曰く、

一齋殿非命の死は、逢州ぬし淺間の君に物語り給ふを、襖門を隔てて聞き居たるが、敵の名をさへしらずとや、いかにして索ね給ふ事と、言葉の中たり寄居蟲も涙を拂ひ、「これぞといへる證據もあらねど、隱行の術とかいひて、形を隱す曲者こそ、讐敵なる由は、父の今般の物がたり。」と、聞くに五郎藏大いにおどろき「われ昨夜土右衛門を討ちもらせしも、彼の隱行の術に依りてなり、あな訝し、若しくは彼が所爲ならんもしるべからず、心をつけて見給ひね、思はずも最期をのべたり。」と、刀を切目ながくひきまはす、杜鵑花も苦しげに額髮ふりわけつゝ、いと細き聲をふり立て、一絲に紛れて言ひもらせり、此の右の袂には、土右衛門より得たる百兩の金あり、妾夫婦が死に行かば、長き負債ははたるまじ、寄居蟲女郎に參らせて、身の貧しきを貢ぎ給へ、今は露塵おもひおく事侍らねど、空言にもせよ五郎藏どのに、離狀を送りつるか、後世の迷ひとなりなん事と、女の心一條に、思ひみだるる心の中を、お杉も不便とくみとりて、傍の銚子をとりあげ、手水鉢の水をうつして座になほり、五郎藏どの聞かるゝ如き、杜鵑花ぬしの實心、未來は一つ蓮葉に、二人寢るてふ結めの杯、又も此の場にとり結び、迷ひをはらし給ひね事と、いへども物はいひかねて、唯打點頭くばかりなり。寄居蟲も信だちて、銚子たづさへ立寄りて、「いざ杜鵑花主よりさし給へ。」と、杯を手にうつせど、身も戰慄きてゆりこぼす、水の哀れや消えてゆく、浮世は夢の蝶花形、島臺ならで鶴龜を、法の燈に明日

は見ゆる、經帷の白無垢も、鮮血にそまる色直し、三々九度や九品の蓮臺、靈棚ならでいつかさて、同鴛せん冥途の嫁入、切平もごとゝ心得、燒くや門火も春東風に、煙は西に靡くなる、時も違へず五郎藏杜鵑花、眠るが如く緒絶えたり。かねて覺悟も今更のやうに悲しくて、亡しき骸を搖りうごかし、二人は又も歎きしが、お杉、寄居蟲に對ひ、「やよ娘、馴染のなき其方さへ、あへなき最後を見るからに、涙にくるゝは理ながら、色も香もなく老いくだつ、此の老女は存命へゐて、貞操さへ端正さへ勝り劣らぬ梅櫻、蕾の花を吹きちらされ、殘る妾が心のうち、推し量りても見給ひね、曉鐘寺の九品佛へまうでんと、唐錢句文を選り出し、巾著へいれおきしが、先に三錢をん身に與へ、爰に六文殘りしも、六道錢となるといふ、兆にやあらん」と泣き伏しければ、切平は勢り起し、いと理には侍れど、此の世に歎く涙の爲に、三途川の水嵩を增し、往生の妨げなり、婚姻の一盃を、末期になせし杜鵑花主、五郎藏どのと睦まじく、冥途でそひとげ給はる爲、謠に換ふる經陀羅尼、弘誓の船に帆をあげて、月諸共に西へゆく、成佛得脫の法養こそ、あらまほし」といひければ、お杉も漸く涙を止め、杜鵑花が袂より金を取出で、逢州の裲にとりそへ、「姉の形見ともろともに」と、寄居蟲に與へ、扨五郎藏が手下を呼び集め、首尾を物語り、かたの如く野邊送りを營み、かくて在るべきにあらねば、曉の頃ほひ、家路にこそは別れ去りけり。

第八　非人の家に良治雨の小止をまつ 袖乞の娘茶をたてて良治にまゐらす事

扨も其の後淺間巴之丞良治は、春の餘波もしらぬまでに、垂こめておはし暮しけるに、一日小織之助人なきをりをうかゞひ、御前に進み出でゝ申しけるは、「君しろしめさずや、頃日御所の五郎藏、何等の恨みありてか、田宇草の遊君逆州を殺害せしと、巷の風説あり、小子彼處に往きて、詳の事を聞き果つべし。」といひければ、巴之丞も打潛みて「今は我も仄かに聞けり、今宵潛かに曲中に到り、箇のやうを探り問ふべし。」とて、小織之助一人を倶し、忍びやかに館をたち出で、暮近き頃五條坂の此方なる、堤の下に差懸りけるが、爰にさゝやかなる流れに沿ひて、爛漫と咲き亂れたる櫻の大樹あり。巴之丞少時樹下に徬徨み、刀の柄に扇うちかけ、遠近を眺むれば、新柳煙を含み、春草雨を帶びて寂寥たり。時にそよ吹く風につれ、散り敷く花の水の隨意、流れゆくを打見やり、良治殆んど興にいり、「前庭の落花は雪の如くなれども、笠は重き事なし。」とて、扇を持つて拍子とり、朗詠なしければ、忽地背のかたに聲あり。「山復深く樹は青るゝに似たれども、日は未だ傾かず。」と唄ふを聞き、あな心憎や。」とみかへるに、二八許りの少女、澤ゆく水を桶に汲みとり、彼は花にみとれて佇むなり。熟〱視れば、紅粉を粧はざれども、天性の美形玉のごとく、絶えて鬢櫛もとらずと見え、海松の如く亂れ

たる黒髪もにほひありて、何となくをかしげなり。思はずも巴之丞主従と顔を見あはせ、手にもつ竹笠を假に几帳して、堤を廻り立さりぬ。良治もあへて急ぐべき路ならねば、「何等ものぞ」とて、彼の少女の後について、三町ばかり往きけるが、此の所は少し市中に遠ざかり、竹樹蓊鬱にして泉石鮮明たり。思ひきやかかる閑靜の佳境有らんとはと、猶わけつゝ行けば、いぶせく荒れにあれたる小家あり。小織之助曰く、「是れなん先の少女が隱家とおぼしく、彼が手に持ちたりし竹笠、片折戸にかけおきたり。」頃日往交ひたる道ながら、此の所に家ある事をしらず、何なる人の栖家にや、尋ねとふべし」といふ折から、春雨俄にふりいでしに驚き、籬にそうて晴間を待てども、なほ八重雨袖笠に玉を散らし、所詮頓に晴るべしとも思ほえず。時に破れし窗より香煙細く立ちのぼり、風暗香をおくりければ、良治邊をみめぐらし「いかに小織之助、先に我花をみつるをり、賤の女に似げなく、朗詠の句をつぎ、今又伏屋に名木を薫らし、なにさまゆゑある人の、世塵を厭ふ栖家とおぼゆれ、折柄の雨やどりには、荒れたる軒も逸興ならん、しか／＼はからふべし」と命せければ、「畏み候」といひて、庵の扃扉ほと／＼と噴ひぬ。「誰ぞや／＼」と美しく答へて、此の時日色全く沒しければ、紙燭して迎へ出で、折戸押開くは、是れ則ち先に見つる手弱女なり。小織之助丁寧に禮をなし「小子が主君所用ありて、五條坂のほとりに赴かんとなし、かく俄なる雨にあひ、ほと／＼往きわづらひ候なり、是

れより長が許に程近ければ、彼處に走せゆき、傘持ちきつる間、少時少女の軒端をかり、主君を憩はせ申したし」といひければ、少女打微笑みつゝ、二人が姿をつら／＼うちまもり「君達は最前花の本にて見え奉りし貴人ならん、見給ふ如く内も外なる土生家、休はせ給ふ處も侍はず、と許りにて雨にそぼち給ふもいと侘し。恥かしながら妾は往來の袂に携り、僅かの錢を得て飢を凌ぐ身にしあれば、その手にふれたる蓑笠を、まゐらせんも憚りあり、無益き事をいふ間に、雨はいよ／＼降り出でぬ、あゝ何とせん」と、深く思ひ勞ふさまなり。小織之助良治が前に立戻り「彼が申す處を聞き候に、此の處は非人の家とおぼえ候、片時にもあれかゝる處に憩はせ給はば、人の誹り御身の上におよぶべし、とく／＼歸らせ給へ。」といふに、「否々非人にもあれ乞食にもせよ、姿の艶なる言葉の雅びたる、いかにも心ゆかしき處あり、強ひて宿を求めんぞ」と、徐やかにあゆみより「世の中を厭ふまでこそかたからめと詠みし、西行法師が江口の里の雨やどりにはあらねど、我も五條坂の某が長に通へる戀の奴にて、さまで心きたなきものにあらず、曲げて須臾休はせ候へ。」と、打通るにより少女もせんすべなげに、佳文席鋪きまうけて上座に移し、遙か退りて手をつかへ、更に禮をみださず。座さだまりて後良治、四壁をみ廻らすに、外より見つるとは事かはり、こぼれたる壁、傾きたる軒端ながら、家は風流につくりなし、釜のたぎりの松風、潔く、炭の形花のさしぶり、悉く法に叶ひ、なにさま廬同

陸羽のあとを慕ふ、數寄者と思はれければ、はたせるかなと心のうちに稱讃なし、「女性は茶道を嗜むところを見れ、爐の切りかた自在のかゝり、我が學びしに露違はず、俗塵をはなれし風雅の茶寮、おくゆかしき住居かな」と仰せければ、「こは面なき事を聞え侍る、草露の窗に臥をしき、蓬草の許に眠り、蟲の聲草の籬、荒れて侘しき賤が家も、紫殿紅樓を眼馴れ給ひし貴人は、却つて興ありとも見給はんが、元來身貧にして山菓庭に落ちず、柴火爐に盡きて夜薄の衣いと寒し、袖乞とまでなり下り、似氣なき事とは知りながら、亡父の若かりし時よりして、嗜みたる道なれば捨てもやらず、霞を憐み露をかなしみ、數寄者を學び候なり」といひつるにより巳之丞益嘆息なし、「茶心といひ美形といひ、勝り劣らぬ手弱女を、埋木となすぞ口惜しき、さればこそ先により、故ある人とは見うけつれ、一樹の陰に雨を防け、一河の流れを汲むさへも、ひとかたならぬ縁と聞く。いで其方の手まへにて、芳茗一服所望せん」と宣へば、少女なほも身をくだり、「重ね〴〵も憚りおほき仰せ事を聞え侍るものかな、賤の女の俾しきてまへ、いかで君に奉らん、こは罪深しゆるさせ給へ。」と推辭むにより、良治重ねて言ひけるは、「そもそれ茶は和朝の風俗にして、花車になるの一つなり、其の原は禪學に出でゝ、心を世外の閑境に遊ばしめ、維摩が方丈に倣ひて、四疊半を圍ひとする、何とて貴と賤を論ずべき、強ひて乞ふ上は默止す事なかれ。」と、再三の望みに少女も今はせんすべなく、赧らむ顏の緋服紗も、花に

紛ふや櫻炭、雪の白炭しろたへの、手らとたゆげに蘆屋釜、かゝる簾のよしや世は、夢と悟りて高麗の、錦のへりに替へて敷く、客疊さへ熊川の、茶椀取出し手品たてぶり拙からず、濃茶一杯調へ出す。主は非人客は貴人、珍奇なる茶會なり。良治たてぶりの事馴れたるを稱し、且服のよろしきを讃め、心よく喫みほすと齊しく、不思議や俄に眠りもよほしければ、温柔の良治臂を曲げて枕にかへ、其のまゝ眠り着きぬ。かくて少女は佛門をひらき、一つの位牌をとり出し、茶を供じ燒香して、ねもごろに廻向なしけるを、小織之助不圖その位牌を見れば、俗名逢州と書きつけたり。「扨は御身も逢州主に由縁ある御方なりけるか、某が主君と申すは」と、いひかけて言葉を吐へたり。少女言ふ、「妾は則ち逢州の妹、寄居蟲といふ者に侍るが、君たちは又何等由縁ありて、姉上の事を問はせ給ふ」と問ふによりて、小織之助又曰く、「此の位牌を見たる上は、街説に違はず逢州ぬしは、非命に死せられもの ならん、無慙の事をなしたり」と、悲歎やるかたなくはみゆれど、寄居蟲はふつに其の心を得ず。お杉がおくりたる逢州の襠のいと清ければ、良治が裾にうちかけ、風を防ふ樣もいと信だちてみえける。小織之助もかく居より「御身逢州ぬしの妹とあらば、言ひもらし聞きもせる事多なり、此の處にて詳の事を語られには、主君の眠りを妨げん、此方へ來るべし」とて、次の間に誘引ひけり。

淺間嶽面影草紙後帙 逢州執着譚 卷之四 終

淺間嶽面影草紙後帙 逢州執著譚 螢後卷

種彥著

第九

逢州が幽魂巴之丞を清涼山に誘引ふ
石橋の物語 金色の獅子王牡丹に狂ふ事

時に夜風烈しくおとし來り、西北に雲起りて、東南に雨の脚いよ／＼繁く、淺間の心凄さに、良治不圖眠り覺めて、枕のほとりを顧みれば、怪しの女ぞ現はれたり。雨に濕れたる桃眼露はに映へ、嵐に亂れたる柳髮しだらかに垂れ、羅綾の袂鮮やかに、錦繡の裾斜めなり。視るからに心おどろき、女客には何人にてやおはすらん、更に現とも覺え候はず」と、愼み畏れていひければ、女うちわらひ、「君には早くも妾を視忘れ給ひしか、あなうきたる御心かな」と打恨む。良治尚も不審はれず、つらつらうちまもり大いに驚き、「さいふ其方は逢州にはあらずや、人手に懸りて死しつると聞きし故、思ひに堪へかね、此の處までさまよひきたりしが、健かなる其方の姿、あな訝し」と一度は驚き、ふたびは喜びけり。逢州はなほうらぶれたる面持にて、「妾は君に別れ参らせてより、不良くも人手にかゝ

り、憂きや浮世の夢かるゝ、蝶の翼の白粉も、風に亂れて草隱れ、淺ましき身になり侍る、たゞ忘れ難きは互の戀路、戀しゆかしにもゆるなる、胸の煙をくらべなば、淺間の山も數ならず、閻浮にありし其の昔、綾羅を切つて方茵となしては、朱房玉樓のうちに眠り、錦繡を截つて衣を重ねては、紫殿寶閣のうへに遊び、旦に酒の泉を汲み、夕に肉の林に歌ふ、夏の夜の稻妻は、雲に文ありとのみながめ、秋の夕の白露は、玉と賺くをもて、心ゆくみものとはすれど、假にも無常迅速のことわりをしらざれば、穢土の迷倒を離れて、淨土の快樂を受けん心もなく、榮耀に飽き充ち三寶を信ぜず、さるからに永く八寒の氷に纏はれ、いよ／＼焦熱の佛鼎に溺るべかりしを、聊か孝順の志あるを以て、忽ち五障の雲を消除し、南方無垢の月を眺め、覺蕋西刹の寶池に遊ぶ身とはなりぬ、君と妾が緣には、一席に盡しがたき物語あり、まづ此方へきたらせ給へ。」と手をとれば、良治も更に夢現のさかひをしらず、白雲に乘じて蒼天に登るが如く、霞を分け霧をしのぎ、或は白雲花を帶びて、老松梢をならぶる嵩山にいたり、或は猿猴雲に叫び飛泉巖に灑ぐ高峯を過り、ゆき／＼ていと危き高嶺に憩ひぬ。

さて逢州巴之丞に對ひ、「かねて音にも聞き給ふらん、此の所は唐土清涼山といへるにて、あれに見えつるが名にしおふ石橋なり、むかひは文殊の淨土にて、常に笙歌の華ふり、尊き事言葉には演べがたし。」といふに、良治答へて、「斯かる尊き靈場に、何等の由緣をもて、我を誘引ひ來りし。」と問ふ。逢

周又曰く、君さきつ世には、参議左大辯清光の息男、大江定基といひし人なり、國務の間赤坂の力壽といへる遊君に馴れそめ、互に契り深かりけるが、無常の風防ぎ難く、遂に彼の力壽息絶え眼閉ぢぬれば、枕を雙べし面影、席を同じうせし移香も、替り終てぬる姿なれども、色欲の愛執未だ盡きず、七日を經て野外に送る、戀慕の火は哀傷の胸を焼き、別離の涙は愛著の身を浸す、是れ逆縁の善知識として、忽地に出家して、比叡山楞嚴院惠心先德の室に入り、寂照法師といひしは則ち御身なり、圓教三觀の肝膓を習ひ、佛知佛見の奥旨を得つるが故、今生は國司と生れ給ひたり、妾の前生は彼の遊君力壽なり、されば君と縁を結びしは、宿世より定まりたる奇縁といふべし、往昔長保五年秋八月二十五日、御身の前生寂照法師入唐して、此の清涼山にいたり、大聖文殊の靈像を拜し奉りぬ、さる因緣をもて君を再び此の處に誘引ひまゐらせたりと、首尾を物語るに、良治また奇異の思ひをなし、遠近を顧みれど、あまりに山を遠く來つるとおぼしく、雲又跡を立隔て、樵歌牧笛の聲さへも聞えず、徐らたちよりて石橋を見わたせば、其の面僅かにして、苔なめらかに谷ふかく、したは泥犂もしら浪の、虚空を渡るが如くにて、雲に聳ゆる粧ひは、譬へば夕陽雨の後に、虹を渡せるかとあやまたれ、又は弓をひける姿に似たり、瀧津瀬は雲より落ちて、數千丈の瀧壺には青暗うして、見るにさへ身の毛もいよだち、峨々たる巖石にいと危くかゝりたる石の橋なり、さては是れぞ吾が日本まで

も、その名かくれなき石橋なりけるか、何れの代いかなる人の作りいだせる、語りてよ。」と宣ふに、逢州曰く、「それ天地開闢けてよりこの方、雨露を降して國土を渡る、是れ即ち天の浮橋ともいへり、其の外國土世界において、橋の名所さまざまにして、水波の難を遁れ、萬民富める世を渡るも、是れ皆橋の徳とかや。然るに此の橋は人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現して、つゞける石の橋なれば、石橋と名をなづけたり。其の面僅かに尺よりは狹うして、其の長は三丈餘におよべり、上には瀧の絲雲よりかゝり、山河震動して雨塊を動かせば、そのかみ名を得たりし高僧貴僧も、こゝにて難行苦行捨身の行をなし、さうなう渡らぬ橋に侍る。されども君は前生に大徳の聞えあり、なにかはくるしかるべき、いざ石橋をうちわたり、文殊菩薩を御拜み候へ。」と、おもひもなく演べければ、良治も依りて寂照法師が再生なる事をしり、「起緣を聞くぞあり難き、いで文殊の淨土とやらんを拜すべし。」と、石橋にさしかゝれば、苔なめりて足もたまらず、目もくれ心もきえ、神變佛力にあらざれば、渡るべうも覺えざれば、逢州の袂に縋り、辛うじて向ひの岸に到りぬ。いままで嶮しかりし山の形には引替へて、地平らなる事掌の如く、吠瑠璃の砂をしきみて、玉の礎には栴檀の柱をたて、黄金の樓臺珠玉の殿閣、靈光赫々たる閣々連延として、莊嚴更に人界に比すべき物なし。孔雀鸚鵡は八功徳の池に遊び、鳧鴈鴛鴦は珊瑚の寶沙に來集る。時に笛笙琴箜篌、夕日の雲に響きわたり、歡喜信仰

自ら生じ、是れ正に天樂を奏し、和雅音を暢發し、尤華燈を供養なすともいひつべし。逢州耳を澄て、「絲竹の調べ聞ゆれば、影向の時節も今幾程によも過ぎじ、暫く待たせ給へ。」といふ折しも、金色の狻猊二疋蹄奮迅として現はれいで、枝々爛々と咲き亂れたる、牡丹に狂ふとみえつるが、逢州もともに興にいり、扇をあげて頻伽の囀る如き聲をいだし、

獅子團亂旋の武樂の砌り、牡丹の英薫ひ充ち、大きんりきんの獅子頭、うてやはやせや牡丹房、牡丹房、黄金の蘂現はれて、花に戯れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の、勢ひなびかぬ草木もなき、時なれや萬歳千秋。

と舞ひかなでければ、彼の獅子王も共に狂ひくるふと見えたる折しも、紫雲靉靆として、是れ正に文殊菩薩の影向と覺しく、善巧丹菓の脣鮮やかにして、寶智金花の容圓かなる尊佛、滿月の如き光明を放つて、獅子の座になほり給ひければ、良治愕然として只管拜し奉りぬ。逢州又曰く「見給ふ如く菱天堂に、快樂を受くるといへども、父の讎を討たざる無念さ、刹那も忘るゝ事なし。さる故をもて卿を妹寄居蟲が、閑居に誘引ひ參らせたり。又仇人の姓名は、告げまゐらするに及ばず、自來おもひ當り給ふ事あるべきにより、力を添へて讎を討たせ給はれ。」といひつゝ、涙を潸然とおとし、「憐なべきは時鳥の御方なり、怨恨忽ち瞿麥姫を狂死なさしめ、今共に無間地獄に墮ち、苦辛量りなし、

これより三時を過ぎず、南方より老僧のいたる事あるべし、これ佛の化身なり、かの御僧に託して、抜苦與樂の法養を勸め給へ、かならず奇瑞あるべし、いふべき事もこれ限り、餘波は盡きじ。」といひかけ、立別れんとなしければ、良治驚き「まづ少時待ち給へいふ事あり。」と、裾をしかととらふると思ひしが、彼の寄居蟲がうち掛けたる、逢州が袿を抱いて夢覺めたり。時に異香一室に滿ち〳〵ければ、良治奇異の思ひをなし、傍をかへりみるに、すがれたれども名香とおぼしき空炷に、金色の胡蝶二雙、靄然として飛び廻り、翩々繽々たる光景を佶度ながめ、實に風蝶の夢よりも、はかなきものは浮世なり、聞きしに逢はず逢州も、はや亡き人の數にいり、思ひを夢に告げしにやあらん、又雌雄の獅子王とみつるは、此の一雙の蝶なるか、あな訝し。」と愈怪しみ「誰ぞ來れよ。」と手を拍らし給へば、頓て寄居蟲小織之助、兩人御前にまゐりける。さて良治いひけるは「先づ少女に問ふべき事あり、此の奇南は正しく我が秘藏するところの、白牡丹といへる名香と覺し、去る頃遊君逢州に與へし他に、所持なす者あるべしともおぼえず、又逢州が物好して、縫ひ狂はせし袿といひ、我悉く覺えあり、一定御身は彼に由緣ある者ならん、包まず語りてよ。」と仰せければ、寄居蟲も頭をさげ、君は淺間良治公にてござある由、小織の殿に聞き侍りて、妾もおどろき侍ふなり。君にもかねて俚名は、きこしめしつる事もあらん、妾則ち逢州の妹寄居蟲に侍る、父團一齋非命に死せる一條は、必定姉

逢州よりきこえ奉りしとおぼゆれば、今更いふに及ばず、又此の茶道の傳書は、宮中一巻は姉妹にひきわけ持ちたりしが、折もあらば君にたてまつれとある、父の遺物に候ふ」と云ひしとき、姉逢州が身のうへはいふも更なり、五郎蔵杜鵑花が自害の事、田守草の老女と親子の名告せし事、父の讎を討たんため、紺ごひとなりし事、總てありし事ども露もらさず語りける。良治もかきくどくの奇遇を感じ、「今御身のいへる如く、すぎつる事は逢州より詳にきけり。又茶道の傳書も、よくに我に與へしかど、半ばにして事の足らざるを本意なう思ひしが、今おん身に一巻を得、首尾全く合ひたり」と喜びつゝ、鬮に寄居蟲が物語しつる序に、とり出でたる財布をうちかへし／＼熟視て、「あら怪しむべし、是れこそ琵琶魚といへる魚の皮にてつくれる財布にて、我このうちに金をさされ、御身の父に託せしが、其の夜殺害なされ、金も奪ひとられし由きけり。何にして再び此の品を得つるや。」と問ふ。小織之助曰く、「その事は小子少女に聞いて詳にしれり、其の金は如此々々の故にて、杜鵑花どのより贈りたるなれば、原は星影土右衛門が、所持の財布なるべし。」といふにより、良治暫くうち案じ、「陸奥にて土右衛門を追放せしも、一齋が討たれつるも同日といひ、殊に此の財布を所持なすをもて考ふれば、一齋を討ちとり金を奪ひて立退きしは、土右衛門ならんもしるべからず、鬮の夢に逢州我に向ひ、敵の姓名は告げずといへども、自来おもひあたる事あるべしといひつるは、必定是れなるべし。」

といひければ、寄居蟲小膝を礑とうち、「これにておもひあたりたり、五郎藏土右衞門と戰ひし其のとき、形を隱す幻術をおこなひしよし、父の今般の物がたりに、恰も符節を合はすが如く、旣に敵は彼なるべしと、五郎藏どのもいひ給ひし、まだそのうへにかかる證據のあるうへは、切平が歸りて後、手筈をさだめ討ちとらん。」と、抱帶ひきしめつゝ微笑ひ、勇みたつたる折しもあれ、切平は一人の老僧を誘引ひ、たち戻りける間、寄居蟲も喜びつゝ、過刻よりの一二を物がたりければ、切平も奇異のおもひをなし、巴之丞を敬ひつゝ末座に居りぬ。その時良治切平が倶し來りし、老僧のいと尊氣なるに深く歸依し、「何等の人なりや。」と問ふ。切平いふ。「我も何地いかなる人といふ事はしらざれど、唯雨にそぼち、行き勞ひ給ふを見るに忍びず、ともなひ參らせたり。」と應ふ。良治忽ち夢中に逢州がいひし事を思ひ出でて、老僧の手をとりて上座になほし、丁寧に禮をなしていひけるは、「我箇樣々々の靈夢を見たり、又如此々々の告げあり、思ふに此の家は南面なれば、南方より至る僧ありとは、果して老師の事なるべし、願はくは大德の功力に依りて、時鳥が靈魂を慰し、成佛得脫なさしめ給へ。」と、只管に賴みければ、老僧あへて辭する色なく、「我も一大事の因緣ありて來れり、言葉を費し給ふ事なかれ。」と、珠數を袖くゝみに持ちて徐ら立上り、何やらん口の中に唱ふるとみえつるが、時に風瑟々と落し來り、逢州が裲襠飄颻として、さながら人の著なすが如く、老僧の傍に歩みより、何方と

もなくさも悲しげなる聲して、人間萬事醉ひ泥の如し、氷の上に降る雪、砂の上におく霜の、はかなく消えて跡もなき、霧起人とはなりながら、今に輪廻の心をしらず、さなりせば盡未來永劫にて、何人か樺をとつて生死の海を渉らん、戀しの閻浮なつかしの娑婆世界」と、雨々と泣きかなしむ聲あれども更に姿は見えず、猶袿は蠢きて、老僧の前に胡跪くに似たり。老僧曰く「汝はなにものぞ」又袿に聲ありていふ、「妾は即ち良治の側室、時鳥といふものなり、命終の魂神無間地獄に墮し、刹那も呵責の間なしと雖も、大徳の化義にあづからんがため、姉の袿に陽世の、魂を再び返したり」老僧又曰く「汝いかんぞ地獄に墮ちし。」「こは愚かなる問事や、夫れ佳人は才子をもとめ、才子は佳人を愛す、女は容の美しく、姿のめでたきをもて寵をうけ、身のをさまりをはかるならずや。妾十分の艶色はあらずといへども、幸ひにして君と横陳したりし身が、忽ち醜婦となりたるは、毒藥を酒に和し、飲ましめし故にして、悉瞿麥が所爲なり。それのみならず小蝶舞振の二人の女童諸共、彼が邪見の刃に伏して世をさりぬ。おもひにもゆる胸の火は、焦熱の炎となり、涙の雨は八寒の氷と變じ、呵責の杖の現にも、いかで怨みを忘るべき、たすけ給へ御僧。」と、いと苦しげに聲の聞えければ、老僧大喝一聲して曰ふ「汝が怨魂既に瞿麥を狂死なさしめ、頓に怨みもはるべかりしを、又何にか執着して、魂を縛し魄を絆ぎ、善所に到る發願は起さざるや。」「のたまふ如く瞿麥の狂死も、我が怨みのな

すところにして、ともに奈落にしづめたり。又娑閻浮にありしその昔、些かも積惡をなさず、何の故にか斯く辛き目はみつる、因果應報の理も、空言にてありけるかと、不圖思ひし最期の一念未だ散ぜず、これ迷ひの一つなり。」老僧打笑ひ、「誤りなしと思ふぞ誤りなれ、汝惡にもせよ、親とたのみつる其の人に告げずして、走りたる是れ一つ。良治が側室となるに及びて、我高貴の女なりせば、内室とよばれんものと、心に慾をいだいたる是れ二つ。又良治瞿麥をよび迎へ、婚姻をなすにおよび、言葉にいださずといへど、汝も嫉妬の心なきにあらず、是れ三つ。己が罪己を責むる、他を恨むまでもなく、自己が心の鬼を殺せ、善惡不二と聞く時は、邪正も一如ならざらんや、悟れや悟れ、いかにや如何にや。」と責め給へど、亡靈絶えて應ふる言葉なく、良治初め人々も、渇仰の頭をたれ、感涙袖をうるほしけり。彼の時鳥が姿、老僧の眼にはさへぎると思しく、なほ喝して曰く、「それ敎へ弘しといへども、事理の二法を出でず、佛も衆生も悟りと迷ひとの二つにあり。其の迷ひといつは、忽然念起无明より生をうけて、十二因縁の車、廻り廻りて始めもなく終りもなし、譬へて旋火輪ともいへり、悲しいかな三界の衆生、生ずると雖も生の始めをしらず、傷ましいかな六道の凡夫、死するといへども死の終りをしらず。ある時は八寒にしづみ八熱に焦れ、又は刀林劍葉に身を貫き、銅柱鐵座に膚を焙る。餓鬼となりては饑寒に苦しみ、牛馬と生を變へては、磐石の重荷して苦患をうくる、鳥にてや

ありけん梟にてやありけん、偶人間天道の善果を得て、六塵六賊に本心を奪はれ、愛別離苦の涙海より深かりしといへども、聞法隨喜のためには、一滴もこぼさず、見る事聞く事に罪障を積み、三途の故郷に歸る事、幾多度ぞや。汝緣にひかれ境に著して、いまだ此の理をしらず、聞我名者、斷惡修善、聽我說者、得大智慧、知我身者、即身成佛」と、責めかけ〳〵祈りけるが、又戯れていふ、

日なければ夜なし、月なければ宵なし

山和卓漆つけねばはげもせず生まれねば死にもせまいぞ

と手に持つ念珠撚上げて、袿を丁とうち給へば、又何方ともなく聲ありて、「あらあり難や大德の敎化をうけ、迷ひの雲霧晴れ渡り、一相眞如の月の光、愛著の冥路をてらし、佛性自然の理をしり、今ぞ成佛なし得ること」といふ聲聞えて、虛空に紫雲棚引きつゝ、靑蓮の華片々と降り來り、妙なる音樂遠かに聞ゆる其の光景、良治が夢にみつると一點も違はず、是れも又夢にやあらんと訝りけり。爰に寄居蟲が母於杉は、逢州が墓前に手向けんと、牡丹を插したる花筒を手に持ち、郭巷をたちいでしが、忽然として金色の胡蝶雙つとびきたり、往きつ還りつ香を戀ひ露を嘗め、翼を撲ち鬚を搖かし、携へ持ちし牡丹に狂ひ、更に人を恐れず、緝々として戯れければ、いと怪しき事におもひ、胡蝶の飛ぶ方に付きて步みしに、とある草舍の前にいでたり、是れ則ち寄居蟲が隱家なり。於杉は外面に彷徨み、彼

の老僧と時鳥の靈魂の問答を詳に聞き、寄居蟲が奇なる事はしるといへども、流石うしろめたく、頓にはたゝもいひきかしが、此の時漸う悟りいり、ありし事共露もるゝ所なく懺悔して、髻を拂ひ老僧の御弟子となりぬ。兎角なる間に夜もいたく深けければ、老僧は別れをつげ立去らんとなすを一良治少時ことおしとめ、小蔵之助に命せて、金を布施とし勞を謝しければ、老僧は手にだに觸れず、うち笑ひていひけるは、「世は浮きたる雲と思ひ、身は流るゝ水に似て、いづこときしたる住家もなく、樹下石上の桑門、杖と笠とのそのほかは、無一物こそ所行なれ、高意を悖くに似つれども、我において用なし」と、固く辭して受收めず、扨傍を顧みて、逢州が袿の袂より、櫻花の一輪こぼれたるをとりあげ、「花飛んで蝶おどろけども、人曾て無常の理をしらず、風無心にして花を散らす、花のちるを見て自散る事をしらず、人も又無心といふべし、逢州が殺されつる其の夜、風の隨意ありしく櫻、此の衣のあはひにとゞまり、今こぼれいでつるも一つの因縁ならめ、此の花を我に布施し給へ。」と、唯一輪の花を手にもち、人々のとゞむるを耳にもかけず、遂に去つて歸るところをしらずなりけり。

巴之丞曰く、「怪しむべし彼の老僧、總て此の一條の奇事は、聞かずして熟くしれり、果して凡慮の及ぶところにあらず」とて、信心彌增してみえければ、於杉いふ、「嚮に懺悔なしつる折、詳に事はしらせ給はねど、不思議にも此の女寄居蟲に囘り會ひ侍れども、逢州ぬし死にさりてより、とりわき柳售は熱

聞しく、此處にありしとも確かにはしらざりしが、如此々々の事にて、一雙の胡蝶老女を此の庵に誘引ひたりしといふによれり、良治も夢に清涼山に赴き、覺めて後香煙に胡蝶の戯れし事などいひいで、汝を此の舍に導きせし彼の胡蝶も、逢州時鳥が靈魂のなす處なるべし」と語りける。扨於杉は携へきたりし、牡丹の花簡を位牌の前にすゑ、寄居蟲の貝の守りをとりいだし、觀音の佛龕を開きみれば、尚たるかな彼の老僧の持ち歸りし、一輪の櫻を御手にすゑ給ひ、拈華微笑の尊容、彼の老僧が面に髣髴たり。良治再び逢州が夢の告げを思ひいで、扨は此の圓通大士、九識の神通分身自在なるが故に、假に老僧と現じ、教化なし給ひしに疑ひなし」と、感涙袖を絞りける。切平は最前より、默々として居たりしが、この時漸く口をひらき「逢州君又時鳥の御方とやらんも、不思議に佛の化益にあづかり、成佛得脫なし給ひ、其のうへ敵の手がゝりも知れしとあれば、彼の土右衞門が首を刎ねて、父君の靈魂を慰し給ふにしかじ、一齋君御最期の折から、我おもはずも彼所に往きかゝりたれど、隱形の術によりて、姿を幻の如くかへつるゆゑ、面體はしかと視きはめざれど、彼なほ興に乘じ、板金剛をふみならし、鄙びたる曲子を歌ひつるにより、聲のつやは聞き知れり。彼の星影土右衞門とやらんは、今は何地に隱れすむものなりや、我彼に面會して、緖のやうを探るべし」と問ふ。於杉近くゐよりて、彼は放蕩無慙の愚者にて、何地に在むとも定かならず、逢州ぬしの最期より、五郎藏殿勇氣にや怖れけん、

絶えて棒巻にも來らざりしが、五郎藏殿自害と聞き、彼漸く心を安んじ、頃日又甲屋といふ茶亭に來り、日夜酒宴を催すよし、是れ屈竟の事にあらずや、此の老女がてびきして參らせんあひだ、いそぎ甲屋におもむき、實か否かたゞしたまへ。」といひければ、良治頭をふり、「否々彼は隱形の術を行ひ、五郎藏さへ討ちもらせる曲者なり、かよわき女の力にて、討ち得る事覺つかなし、又彼が妖術を折く計策ありや、夫れきかまほし。」といふにより、寄居蟲答へて、「されば父一齋今般にのぞみていひつる事あり、「鏡は元無心にして其の光明らけし、故に鬼魅妖怪も本體を包み難し、彼幻術をほどこすといへども、鏡をもて照らす時は、姿を顯はさんは必定せり。」と、捜神記抱朴子の漢書をひきて物語り侍る。さる故に古鏡をもとめ、常に肌身はなさず所持なし候なり。」と、言葉よどまずいひければ、良治甚感じけり。此時於杉は扇を座具として、念佛唱へゐたりしが、筒にさしたる牡丹花一輪、扇の上に落ちければ、良治は點頭きて腰扇をうちひらき、座具となしたる扇のうへに、うち重ねていひけるは、「我れ先に清凉山におもむき、夢に獅子王とみつるも、覺めては一雙の胡蝶と成りぬ。今此の如く腰扇を重ねしその形は、翼をならべたる胡蝶に似たり、これに牡丹の花を粧ひ、獅子王の頭にかたどり、散樂獅子舞を今様に作りなし、寄居蟲は八つ撥をうつ獅子舞と姿をやつし、土右衛門に近づきて、やす／＼敵を討ちとるべし。」逢州が幽魂奮迅たる獅子王もかくとも、狂ひくるうて舞ひかなでし其

の詞を、いまもなほおぼえありと、扇をとりてさら〳〵と書流して與へ、又いへるは、此の小織之助は家の老臣、雪枝彌總太といふ者の一子にて、視る如く女といふべき顏色あれど、力量は衆の若人には勝れり、又寄居蟲は男も恥づべき勇氣あり、殊に姿のたをやぎたる、雄鸞雌鳳なり、一對の夫婦なり、こゝをもて思ふに、互にいひ交しつる人もあらじとなら、今宵直に緣を結びて、共に力を合はせて、仇を討たれなば何にか」といひければ、於杉切平は大いに喜びて、それこそ願ひてもなき幸なり。寄居蟲にもとく〳〵告げ參らせよ」とすゝむれど、顏さと赧うなし、袖の振を手まさぐりて、更に一言の詞なし。小織之助も退きがちにて、並び居るも面なげなり、良治は頗る趣を解る者なれば、はやくも彼等が意中をしり、「何にまれ二人とも、我が言葉はそむかじとおぼゆれば、是れより旅館にきたるべし、其の後よきにはからはん」とて、寄居蟲小織之助を將て館にかへり、家臣に命せて、假に婚姻のとりむすびをなさしめ給ひける。

第十　寄居蟲獅子舞に打扮ちて仇を討つ
古鏡の威德土右衞門が妖術を破る事

さても星影土右衞門は、老女於杉のいひしにたがはず、御所の五郎藏が勇氣烈しきにおそれ、柳巷にはたちよらざりしに、彼は主人の寵愛他に異なる、逢州を殺害なし、其の分讓として切腹なさし

と風聞あれば、すこしく心おちゐるといへども、是れも我を謀く計策にやあらんと、忽ち狐疑の心を懐き、まづ手下の者をつかはして仔細を聞はせ、漸々枕を高う眠りけり。さて太九六素兵左は、日頃土右衛門が隠家にきたり、首領には何とてかく籠りがちにて過ぎ給ふ、柳巷にはたゞ杜鵑花にまさる花もあるべきにことさまゞに勸め、同士の悪黨とうちつれ、日暮より花街を徘徊なし、例の閑當言葉咎めにかこつけて喧嘩を買ひ、往來の妨げをなすといへども、彼等が狼藉をおそれ、誰あつてとりあふ者もなかりける。或一日土右衛門は囚人の手下をしたがへ、彼の甲屋にいたりけるが、主人は家にあらず、門下ばかりとおぼしくて、見熟れざる男出で迎へ、座敷にともなひければ、土右衛門に向ひつゝ由縁を問ふ。彼の男答へて曰ふ、小子は此の甲屋の聟にて候が、主人頃日病あつて、賓客を饗應しまゐらす事心に任せず、さる故におのれは別室に移り、小子をとりおき侍ふあひだ、向來も昔に變らず、柳巷にいたらせ給ふ折は、かならず訪はせ給へ、と、頓て酒肴を持ち出でけり。此の主人を何者といふに、是れ則ち切平なり。愈土右衛門を仇敵なるや見きはめんとて、假に甲屋の主と打扮ちしも、悉於杉がはからひなり。かくて切平は土右衛門がたちふるまひに心を留め、又彼が聲音を聞くに、何となく聞きしりたるところあり、「十に八九分は敵なるべし。」と心に喜び、その席をしりぞき、かねて此の家に招きおきし、小織之助寄居蟲を、閑室に伴ひていひけるは、「小子此の甲屋の主と僞

り、土右衛門が寫體を窺ふに、一族を害したる、敵にうたがひあるべきにあらず、是れ天の與ふるところなれば、兎にも角にも今宵のうちに、宿意を晴らさせ申すべし、かつは小織の殿、男姿にて居給はば、土右衛門も敵もつ身といひ、殊に心をゆるすまじ、竝をかりて女めかしく髪をゆひあげ、寄居蟲さまもろともに舞妓といつはり、良治君の宣ひし如く、獅子舞に打扮ち敵に近より、本意を遂げさせ給ふにしかじ、又寄居蟲さまは牡丹、小織の殿は小櫻と、假に御名をよぶべきぞ、我は日暮土右衛門に酒を進め舞ひを發して後、かしこに誘ひ參らせん」と、其の用意を調へおき、元の座敷にたちいで大杯をめぐらし既に酒も闌となりけるとき、切平いひけるは「小子近ごろめしかゝへたる舞妓、牡丹小櫻といふ兩人あり、果の社に神事あるにより、練ものにいださんため、獅子舞をまなばせ候が、此の處によびいだし一指舞はせ、酒燕に興をそなへ侍らんや」と問ひぬ。土右衛門は上座にあぐみゐて、寛々と點頭き「それこそうへなき觀物ならん、まづ此の席に招き、彼等二人に舞をとらせ、その上舞ぶりをものぞむべし」といひければ、切平さし心え「牡丹小櫻いそぎ此方へ來るべし」と、よびつぐ言葉にしたがひ、やがて寄居蟲小織之助の兩人舞妓にいでたち、はなやかに裝ひて座につきぬ。土右衛門は彼等が艷なる容貌をみるからに、まづ心ときめき「近くきたれよ物語る事あり」と、兩人を右左に居らしめ、戯れていふ、「互にまさりおとらぬ色香あれば、共に花の王といふ主の物す

きにて、牡丹小櫻とはいふなるべけれど、牡丹に二十日草の名あり、櫻に夢見草の異名あり。かくて居らば百夜も飽かざるを、二十日といふぞ恨みおほし。我は夢ばかりの契りは好まじ、今宵たゞにねびきして、園に植ゑかへまく思ふなり。彼の楊妃が弄せし一捻紅、神に祈りて盛りを延べ、納言が愛でつる花なりとも、爭で御身等に及ぶべきこと、只管に戯れければ、寄居蟲は怒氣に堪へかね、土右衛門がとらへし手をふりはなし、たちかゝらんとする面持を、小織之助はやくも心づき、「やよ牡丹、しばしと便宜を窺へと、いひつるをはや忘れしか。」と、押隔たつてなだむれど、更にとゞまるけしきなく、「今此の期を延しなば、又いつか討つべきぞ。」「いやいや討つにはまだはやし。」「いやいや其處のき給へ小櫻どの。」と、牡丹は猶も息まきあらく、襷綰折つてたち向へば、土右衛門倩復うちゑやり、「こゝろえざる女が爲體、何をかうつ。」と問ひかけられ、小織之助答へていふ、「妾がまなびし獅子舞には、八つ拵といふ事あり。牡丹が今いひたるも、彼の八つ拵をうつ事にてぞ侍るべし。」土右衛門又曰く、「その儀にてあるならば、疾く舞ひてみすべし。」と望むにより、辭する色なく兩人は座をたち上り、扇をかさねて獅子の頭をつくり、是れを頭に戴き、色どる羯鼓を胸にかけ、手には牡丹の花をもち、彼處の座敷に練り出でゝ、兩人聲を齊しくして、かくぞ歌ひいだしたり

吉野龍田の花紅葉、更科越路の月雪、

獅子とらでんは時なしる、雨村雲や在すらん、土右衛門は秘曲にみとれ、猶々ふかゝる杯の酔ひをすゝむ、ねぶりもきたる光景に、寄居蟲は立およれば、又眼をみ開き杯をとりあぐるこゑとがむるれじと小織之助、寄居蟲に目くばせなし、獅子團亂旋の武樂の間、牡丹の英にはひ満ち、にきんのきんの獅子頭、うてやはやせや牡丹房、折節よしとて兩人は、牡丹の花をとりすつれば、枝にしこみし氷の刃、振の袂におしかくし、「彼の獅子頭をうてやうてっ」と、目をひき袖を觸れつゝも、立舞ふ氣色に魂れより、敵を手ごみにしたりけり、潜かる所へ五郎藏にしたがひし梶原平平、秩父の重助をはじめ韜竟の若者、障子のかげよりあらはれいで、狼狽へさわぐ土右衛門が、手下をとつておさへ、「此奴に吾儕がまさに計られん、はやく本意を遂げ給へ」と投げつけつ、土右衛門が側には寄せもつけず。土右衛門も何なる由縁といふ事をしらず、「御身等我を何とかする」と、寄居蟲が小腕取つてつき放せば、小織之助いふ、「汝陸奥にありし時、鬼田村の地蔵堂に隠れゐて、老人を害し金百両うばひとりし事あらん、おぼえありや」と詰りかくる。土右衛門むゝと打笑ひ、「して其の老人を我害せしといへる、證據ありや」と問ふによりて、寄居蟲夜の財布を取り出し、「汝日外杜鵑花どのに與へたる此の財布は、醍醐魚の皮にて作りしにて、良治公の御手匣にをさめありしを、如此々々の由縁ありて、妾が父あづかり申せしを、今汝が所持なすといひ、父の

最期は其方が、追放せられし同日なれば、敵に疑ひあるべからず」と、いふをもまたず切平も、かくし持ちたる刀の柄に手をうちかけ「いまいひ給ひしその上に、隠形の術をおこなふこそ、是れ又一つの證據なり。我も甲屋の舅とは空言、汝にあへなく討たれたる、團一齋が下部切平といへるもの、其の夜折よく彼處に走せつけ、主人をいたはり鍼けしが、遂にはかなくなり給ふ。斯くなりては逃れぬところと思ひあきらめ、敵と名乘つて討たれまつ」と、二人齊しくつめよせたり。土右衞門も刀おつとり立ちあがり、「汝等がいふ如く我等のわたりより追ひ放たれ、路用に宛つべき金を得んと、老人を害せしが、知らず彼は故主良治が茶道の師、團一齋といふ者にて、淺間の館より掠め申せし金なるか。二」「歌妓の牡丹といひし女は、即ち團一齋が娘にて、遠州の妹婿寄居蟲、又小褄と名乘りしは、淺間の老臣雪枝彌總太が一子、同名小織之助、良治公の命によつて、寄居蟲と婚姻なせば、我が爲にも外父の仇。」「扨はみな悉く我を討たんず計策にてありしよの。いかにも一齋とやらんを害せしは、この土右衞門にてありけるぞ。しかも其の夜は朧月、下部の顔も見きはめず、實に此の家の主とおもひ、小織之助は元來幼年の頃なれば、是れ迄に見たがへ、かくやみ／＼と俘にせられしは、我が運の傾くところか。無念口惜しといひたらんには、汝等こそ喜びおもはんが、我に健かなる雙手あり。汝等よつて我が首を討たんずるを、安閑とまもつてをるべきや。不便なれども返討にして得させん、覺悟せ

よことりぬき持ち立ち向ふ。二人も交る〳〵拔き合はせ、少時が間戰ひしが、原來小織之助は劍法を熟練なせし若者にて、其が上君命に依りての助太刀なれば、命を塵芥よりもかろんじ、ふみこみ〳〵切りむすびけるによつて、土右衛門も彼が早わざに敵しがたく、ほと〳〵危くみえけるが、例の祕文を唱ふるとひとしく、姿は更にみえずなりて、白刃のみ空に躍りすさもあらせず打ちかけたり。寄居蟲は心得て、兼て用意なしおきし、古鏡をとりてさしつけしに、又金色の胡蝶一つ、いづこともなく飛びきたり、彼の古鏡の光を助け、翩然と飛びめぐれば、土右衛門が姿元の如くに現はれたり。かかりしかば二人大いに力を得て、遂に小織之助が切りこむ刃に、土右衛門はうけ損じ、右より髮際にきりさげられ、阿と叫びてたふれ伏すを、寄居蟲はせよりて、父の敵おぼえよと、遂に首をうち落し、二人齊しく喜び勇み、土右衛門が首を水盤にて洗ひきよめ、一齋が位牌に備へける。於杉も過剱より人々がはたらきを、次の間に窺ひゐて、心さらにおだやかならざりしが、今土右衛門を討ちとりしをみて、漸く安堵の思ひをなし、此の處にたちいで共に喜びつ、まづ位牌を伏し拜みぬ。時に二つの胡蝶は彷徉として、五郎藏杜鵑花が姿と化し、こはあら歡ばしや、多年の宿意をはらしまゐらせんと思ふから、魂魄中有にさまよひ、影見につきそひ進らせしが、今ぞ成佛なし侍ることと、又元の胡蝶となり、虛空遙かに飛びさりければ、重ね〴〵も奇異なる事におもひ。さては日外花筒の牡丹にたはむれ、お

もはや寄居蟲が家に、ふたゝびきしたりし二つの蝶こそ、彼ら二人が亡靈にてありけるかと、感ずるからに又も於杉は、すぎし事を語り出し、喜ぶうちにも涙催すこそ、是れ老いの一念なりけり。浩かる所へ五郎藏が下手の若者、太九六素兵五を縛めとりてひき來りければ、小織之助あつく其の勞を謝し、「此の兩人の惡棍は、良治公にありし事ども告げ奉りて後こそ、兎も角も計らはん。」と、繩付をひきたて、急ぎ良治公の旅館に赴きけり。かくて良治公は復讐の一條、詳にきこしめされ、斜ならず喜びて給ひ、「素兵五太九六の兩人は、させる罪なき者なれば、命を助け追ひ放つべし。」と仰せけるにより、兩人も良治公の仁心に感伏なし、これより善心にたち返りけるこそ。さて小織之助にはあまたの加增をくだし給はり、改めて寄居蟲と婚姻なし、切平も武士にとりたて給ひ、陸奥に將て下り給うて後、於杉は彼の一齋がうたれたる、蛙田村の地藏堂に庵を結び、一寸八分の正觀音を念持佛となし、佛道堅固にして、世を安く送りける。又良治は年も若うして、未だ世繼もあらざれば、鰥にしてをらん事あしかるべしと、老臣の勸めに任せ、故ある家より再び妻を娶り、夫婦の中らひ睦ましく、男女數多の子を設け、昔に倍して家富み榮ゆる事いへば更なり。斯くめでたき折から、往年夢にみつる、清涼山石橋の光景を諸物に綴り、小織之助に舞はしめ給ひしが、後の代に傳ふる謠曲は、是等の事より起りけんと、例の筆を狂はする客言を、いと長うかき綴りしも、唯善なるは榮え、惡なるは亡ぶの天理

など、童に教ふる繪畫なれば、誤りも多かるべし、繙くの君子幸ひに見許し給へ。

淺間嶽面影草紙後談 逢州執著譚卷之五（大尾）

附言

此の書一點の實なし、唯戯場に古くよりもてはやしたる、淺間嶽の狂言によりて編めるが故に、面影草紙とはいへり。亦後帙を執著と標題せしは、彼の狂言の尾りに獅子舞あり、石橋、英獅子、執著などいへり。石橋は謠曲にありて、なほ家々に口傳あるべければ、其の名をはゞかりて、執著譚とよぶのみ。

後帙著述に臨んで、側に人ありていふ、「戯場の獅子舞に、扇を重ねて獅子の頭をつくるは、謠曲望月よりいでたり」と。予原來謠曲に疎し、爰に於て初めて望月を讀むに、是れ又復讎なり。彼の書に友治あり、此の公に良治あり、望月といひ星影といふは對句に似たり。「名殘をしのぶ古里の淺間のけぶり立ち迷ふ。」といへるも因ありて、總て暗合といふべし。故に復讎の一段は望月によりてつくれり。

人名は大むねつくりまうけたりといへど、七右衛門、鏡ねり、木の瀬の名は、室町物語に見えたり。前篇發端喧嘩買の條も、彼の書によりて編めり。遊君の五衣著たる事は、曾我物語に見えて、舞女の車にて行きつるは、平家物語に出でたり。此の書永和永徳年間の物語なれば、遊君の姿もいか

にありけん、かかる反草紙はこれ等の事にかゝはらず。畫は專ら今樣を寫し、文は中昔の樣にて、朧染、百花染、黑紅の貝結などかけり。古今の違ひ、是れのみにかぎらず。茶の湯は東山殿におこり、三絃の永祿の頃よりおこなはれしは、世の人の知るところなり、永和年間にその事をかけるも、狂言綺語と見ゆるし給へ。

因にいふ、四つ竹節のおこりは、つむら半九郎なるべし。つむら節とも半九郎節ともいひ、皆り偏盡、都町盡の類種々あり。其の語路今の四つ竹節に似たり。竹をもて拍子とるは、これよりなほ後なるべし。

勢田橋龍女の本地

序

生於百世之前者謂之古人。生於百世之後者謂之後人。古人不能見後人。後人亦不能見古人。既已皆不可見。則安知眞有其事有其人乎。然則古人終不可見耶。曰何爲不可見乎。世有靈心慧眼之人。則雖曠古累劫之久。百世不可見之古人。如識其面矣。方今提筆、而寫百世不可見之古人者爲誰乎。曰爲柳亭翁。翁嘗著書數十種。人間一切可喜可愕。可泣可恨之事。悉出翁一人神工鬼斧之手。使天下萬人之讀者。魂驚魄動。膽冷氣復。不寒而戰慄。不病而呻吟。不能釋然於手於口於目於心焉。頃復著腮課一篇。名曰龍女本地。筆下寫千秋未有之情狀。紙上現累劫無數之化境。以山河爲一場。以百世爲半餉。猶樵者入山。渉歷人間百歲之日月於一局輪贏之中矣。又與百世不可見之古人神會於一堂上矣。噫乎非翁神工鬼斧之手。何以到于此乎。何以至于此乎。

文化七年庚午八月望

柏菴主人題

代　序

此の勢多橋龍女の本地は、淡海なる湖水にちかき、名所々々をたねとして作りまうけしなれど、彼の湖上笠翁が毛筆の釣竿をとつて、文池に漁りし稗史にもあらず。しほならぬ海にかげ清き月にめでつも、法華經のうらにかいつけたる、紫式部が筆のすさみにもたらはず、近代平安堂近松門左衛門義太夫にうたはせ、傀儡にあはさんとてかける、淨瑠璃にもとづき、近曾もつぱら世におこなはれつる、小說に混じてあらはすなれば、新たに讀本淨瑠璃とはいふなり。

此の書つねの小說とは異なれど、しひて節をくださんとにもあらず、院本とも亦等しからず、共に相半ばする一體の書なり。嗚呼吾の短きをいかんせん、まさんとすれば文章つたなく、うたはんとすれば語の路すぐならず。看ん人さいはひにゆるし給へ。

此の書總て平安堂が作例にならへば、○たてかけりんこ男子の髪のふう○鴨髱女子に同じ○ねびのおほく媚きぬくなりなんど、其の頃の流言を用ゐたるところもあり、亦一樣子は何か白木の[illegible]から、一間のうちへ入相の[illegible]の類、此の道先達の作意をそのまゝにうつすもおほし。

此の書原より狂言綺語のねなし言にあなれば、時代人名地名等、數の引書をもちゐるも、おほよそに

して止みぬ。誤りをいはんには際限なかるべし。されども勸善懲惡の微意、畧空言のうちにこもれり。意にとゞめて善きにうつり給へといふも、例の老婆心なりけり。

于時文化七年庚午夏日

柳亭主人種彥誌

勢田橋龍女の本地　上

作者　柳亭種彦

大序

蛟龍神も雲なき日を以て其の精をなすこと能はずとかや。疾き風さへも降る雨に、塵はおのづから讐へども、年に先だつ寒梅は、雪に色香を埋められ、秋をもまたで鳴く鹿に、獵男が矢をも逃れえず。されば明なりし時をまつ、智者の心は春のはな、さかりひさしき九重や、つたへ／＼て六十一代、朱雀帝のしろしめす、天下雲ゐの庭ぞ長閑なる。當今いまだ幼帝にましませど、天のなせる御才徳、するを頼みある顔御簾のうちの奥ざまには、かしこくも又ありがたき。玉座の左は藤原の忠平、君恩に誇るたかぶり、才ある者を妬み讒し、諂ふ者をよしとする、我意驕慢たるそのいきほひ、右の座には藤原の恒佐、階下には下野の押領使、田原藤太秀郷、おなじく弟藤次宗郷、めしによつて參内し、大紋の袖たをやかに、そのほか百官百司の面々、かすみのごとく居ながれて、雲の容月の君、威

儀をたゞして伺候あれ。恒佐公出勞し「いかに秀郷いまだ都にては、そのさたに及ばねども、關の東のあら男、よりより謀叛の企てあるよし、征罰延引なしがたし、討手をこひ受け申したしと、藤次宗郷が再三の奏聞。しかしなんだとは同胞の兄弟なれども、不和なるよしはかねてきく、若しやわたくしの意趣をさしはさみ、忽劇にもおよばんかと、兩人を召しよせたり。ことくと評議いたしたうへ、何れにもあれ早くゝだり、叡襟をやすむべし。」といふに、忠平すゝみ出で「恒佐も知らるゝごとく、なすめ司を遣はしたれば、秀郷は我がむこがね、聟は子なり。子を見る事親にしかず、わが目がねに叶はぬ秀郷、朝敵征罰思ひもよらず。誰彼といふまでもなく、討手は則ち宗郷。」と、何かさけんにいつたやら、取持顔につけ上り「サア兄者人秀郷殿、宗郷が敕諚かうなり、關東へ下つても云ひぶんはござらぬか。」「コレおだまつしやつては、いつまでもことがひぬ。あつア何か日頃はやれ下野の押領使、禁裏守護の武官で候などといはれしも、宗郷がいひ出すまで、叛逆人のあることをしらぬ故の面目なさ、やれ笑止やっ」とひようようく。秀郷の家臣大竹五郎はるかあとに控へしが、こらへかねしつゝとより「コハ宗郷公の詞とも覺えず、君の叡慮をやすめんと朝夕に心をくだき、忠義無二の秀郷公朝敵の起るのを、何の今までしらずにござらう。奏聞をなされぬは、深い御思案あつての事、たれに何をや親にひとしき兄をさしおき、おのれ一人がでかしだて、折角討手をこひ受けられ、太刀ぬく

術もしらぬこなた、鯨波を聞いたなら、ヤレ眼がまはると逃げるであらう。ナ、きの毒や。」と左顧眞。宗郷もくわつとせきたち、「ヤイ五郎われや爰をどこぢやと思ふ、宇宙の理非を糺す大内、蟲同然の己らが口をさし出す處でない。今一言ぬかして見ろ、手は見せぬ。」ときめつくれば、大竹五郎空うそぶき、「ナニ、理非を糺す大内ゆゑ、理非をいつて聞かすのだ。何手は見せぬおもしろい、鞍馬山の神事の様に、巧うは切れぬ此の大竹、切れるものならきつて見ろ。」「ナニ、きいではおかぬ。サア切れ。」と互に鍔元くつろげて、已にかうよと詰めよすれば、「玉座ちかし、しづまれ。」と、秀郷は二人を制し、すこしじぎして頭をさげ、「宗郷が内奏のごとく、其の沙汰なきにも候はず。則ち謀叛の大將は、桓武天皇の遠裔、葛原の親王四代の孫、鎭守府の將軍良將が男、瀧口小次郎相馬の將門といふ者なり、下總國猿島郡に内裏をうつして館をかまへ、自ら新皇帝と稱すると、飛驒のたくみが巧くのうつたへ、また袞龍の御衣をはじめ、緒直衣五衣、大内ならで不用の服、染物なせしも一つの不審と、紺掻が再度の注進、そのほか冠師錦織、間者となして窺ふに、いよ／＼帝位をのぞむ結構、すておきがたく候間、わが家來大友藏人兌抵と申す者、巧くしのびて下總にくだらしめ、假に田原藤太秀郷と名のらせ、將門がやかたにいたり、「秀郷御身方に參らん。」といひいれし。折しも將門くしけづりて居たりしが、夫れをも待たず大わらはにて對面し、膝に落ちたる飯粒をひろひ、輕忽なる彼がふるまひ、「よし賊兵

をおこせばとて、何ほどの事あらんことと、飛札をもつて告げこしたり。叡慮をいため奉るも便なければ、奏聞をとげずといへども、忠勤片時もわすれざる、藤太が胸中かくのとほり。」と、水を流せる辯舌に、忠平宗郷胸算用、くひちがひたる、四五、十五、二一天下に名をあぐる、兄をしり目にかけ算り、けたいな顔で小ざかしき、恒佐卿感じ給ひ、「今にはじめぬ藤太が武略、イヤ何忠平卿、聞かるるごとく間者をもつて敵地をさぐり、備へもあらまし整ひたれば、藤太を討手に下すとも、別人の恨みもあるまじ。御尊慮いかに。」と詰めよすれば、「さ、さ、それは、イヤもうどうなと御勝手しだいに。」と、面ふくらして詞なし。かかる折から百姓四五人、一の白狐を鎖に繋ぎ、庭上にうづくまれば、忠平はぐつとねめつけ、「えしれぬ獣を持参して、鳳闕を穢す土民め、誰が免して爰へきた。叶しやうが遅いがさいご、勤番の武士にいひつけ、いちいち首をはねさす。」と、事がなあれとおもふつぼ、あたりあらされこはごは這ひ出で、「ハイわたくし共は近江のくに石山のほとりの百姓、ふつと捕へた此の狐、御覧じませ。からだは白し、尾は二ツにさけてある。たゞ事ならずと村中が打寄つて、稲荷に勧請したいおねがひ、どうぞ宜しうおとりなし。」と、額を砂にすりつくれば、白狐もともに頭をさげ、敬ふさまぞ不思議なる。「ヲヽ、幸ひ幸ひ近江の國守秀郷とは則ちわが事。朝敵征罰のかどいでに、かかる靈狐を得るも吉兆、勢田のほとりに宮地をあたへ、官位はわれも詞をそへ、申しこひて得させ

んこと、いふに悦ぶ百姓ども、忠平から／＼と打笑ひ、「狐は不吉の陰獣なるに、宮居をたつるもかたはら痛し。但しは敵がこはきゆゑ、狐も味かたの数にいれ、ばかして高名する気がやまで」と、なじる詞の尾につく宗郷、「忠平卿の御意のとほり神霊とあがめんより、湖水の深みへ石こづめ、はめてしまふがよからう。」と、傍若無人の悪口に、又もこらへぬ大竹五郎、「かたじけなくも敕許に預り、関東へ下る御主人、動ともすれば詞の先をり、不吉をつくるは逆心同然、堪忍ぶくろの緒がきれては、どいつこいつの用捨はない。」と、切刃まはせばはつたと白眼み、「又しても／＼此の秀郷がさしずも待たず、いらざる汝が力だて。すさりをらう」と怒りの顔色、はやりにはやる大竹も、朝日にむかふはつ霜の、しを／＼するぞ殊勝なる。秀郷なほも謹んで、「忠平卿の御詞さることには候へども、天竺にては班足太子が塚の神、唐土にては荼枳尼天、わが朝にては稲の御魂と鎮めまつる例もあり。ひたすら両尾の此の老狐な秀郷に賜はれ」と、しきつて申せば恒佐卿尤もとや思しけん、しづ／＼立つて御簾に向ひ、叡慮細やかに承り、「やがて／＼秀郷是れこそ露の硯となづけ、唐土よりわたりたる奇代の宝器、朝敵征罰敕許のしるし、汝にくだし賜はる間、有りがたう頂戴すべし。まつた宗郷が兄を差置き内奏せしも、忠勤をはげむゆゑなれば、両人ともに遺恨なく、秀郷は東にくだり、宗郷は都に残り、禁廷の守護おこたるまじ。老狐は藤太に賜はる間、宮居を営み申すべし」と、残るかたなき綸言に、

さすがの忠平吉向も出です、秀郷はなほ身にあまる、君が恵みの御硯の、露を受けもつ袴衣や、これならなくに大紋の、鮮やかに立ち出づる。玉しく庭の玉ごとは、暉きかねし白露に、心も清める宗綱が、あとにさがつて大竹五郎、肩ひぢ張つて歸館の警固、智あり勇あり從人の、昔時覆へる雲の上、月の都の疾く晴れて、千とせ八ちとせ限りなき御代の榮えぞ、三重山高く築きて雲老樹を埋み、谷遠くめぐつて水怪石をうがつ、初二上山と聞えしは、常に霧降り風はげしく、柴刈る翁のひたび歌、牛ひく童が笛なふで、耳にふるゝ物とては、雹たばしる多羅葉の、葉音に交る鈴のこゑ、変は蘆のすだれにて、たれと見えねど東屋の、軒よりもるゝ護魔木の煙、陳人とこそ知られける。かかる處に藤次宗、同じく舍弟藤六友綱、徑路づたひのつきのき、歩む後より葦笈に、顔と姿はかくせども、鐺よりもるゝ目結の小袖、風にはらはらほらほらと、なまめきだちし足ぞのは、あめに朽ちたる案山子より、をみなへし生ふことゝなり、二人は庵のまへに佇み「松羅陳人在庵か」と、言ふ聲もれて簾をかゝげ立ち出づる其の形相、頭はおどろをふり亂し、芥子のかをりにくすぶりし、麻の衣を身にまとひ、壇をおり立ち手をつかへ、「春ながらまださえかへり、雪をもよほす寒天に、思ひがけなき御光臨、いざまづ是れへ」と塵を清め、假の牀机に二人を移し、「かねてお頼みにまかせ、秀郷公を調伏せんと、あれ御覽候へ藁人形を體とかたどり、六十四本の幣をたて、二十四行の供物をそなへ、百八

の證明をてらし、大元秘密の邪法をもつて、丹精をこらし祈るといへども、今に於てしるしなきは、流石勇氣のみちたる御舎兄、是れよりは又手段をかへ、首尾よくことを計らはんが、現在兄を失はんず、各の心のうち貧道何ともがてん參らず。」「オ、さう思ふも尤も／＼、當時下總國猿島に、將門といふ豪傑あり、彼謀叛を企てしをりから、われ／＼も一味なし、兄の知らぬを幸ひに、わざと某討手を蒙り、味方をひきゐて彼の地にくだり、事をなさんとおもひのほか、疾く秀郷將門がむほんの趣、聞書を以てさぐりしり、逐一の奏聞ゆゑ、討手は兄にきはまるむねんさ、たれ故の此の賴み」「ムヽ、弟宗郷のいはるゝ通り、此の友郷も則ち同心、しかし兄秀郷は關東へくだる心もなく、遊里にかよひ放埒惰弱と、みかたの者がより／＼ちうしん。」「フ、して事なりし其の上は、公家なりと大名なりと、われ／＼が望みしだい、貴賤もいつかど、おとりたて、七堂伽藍の主はうけあひ。」「おもしろいおもしろい、つねひ覺えし蝦蟇の妖術、小龍の奇怪をあらはし、秀郷殿を身方になすか、呪ひ殺すか二ツに一ツ。」したが、こと成就の其の上では望みにまかせん。たゞしかな證據を一つ、其の證據は妾がいうて聞かせん」と、蓑笠ぬぎすてしづ／＼通るいぜんの女、「御兩所の噂に聞く、松羅とやらは其方なな、自らは秀郷が宿のつま、司の前といへる者、此の上は心やすう館へも來られよ。」と、したしき詞に不審はれず、「コハ冥加なき御詞、貧道は元名もなき法師、あれ御覽候へ庵に年經る松が枝に、

ふとひし事あるをもて、松羅とはよびならはす。夫れは格別今日此の處に御出では[illegible]、その氣遣ひ無用なゝ、姉上も一味同心、ソ、」「ホ、、、、さうばかり仰しやつては陳入にはかこれが行くまい。妾が父はときの朝臣、忠平といへる者、兼て將門と心をあはせ、此の日本を半ばわけし、領するたくみ。夫れとはなしに勸めても、物がたい秀郷殿、得心のない其の上に、妾までに心をおき、隔てらるゝが口惜しい。夫れにひきかへ御二人は、さこいなき父の身がた、此の上は秀明ぞ、よきに。」とばかりうち笑みし、顏は櫻木、心はいばら、蝶の羽がひに山蜂の、はりをもたせしごとくなり。松羅はなほもえつぼにいり「御兩所にはいつぞやより、さまざま奇術を御目にかけしが、奧さまには初見參、はて何をがなお慰み。」と、かたへにありあふ水甕とりあげ、いはほにうちかけ秘文を唱へ、燒香の香水うちそゝげば、不思議や甕の中よりも、水滔々とみなぎりおち、玉のすだれか白布か、瀧とおり玉とくだけ、三丈餘りの瀧つ瀬を、爰にうつせる奇代の幻術、目の前につこと笑ひ、「かかる奇術を見る上は、まだ賴みたき仔細あり、秀郷と先妻の、中にまうけし娘の玉の井、貞盛殿の一子貞武と云號なさぬ中の娘ゆゑ、障もならずにいたれども、繼母と妾をうとみ、やゝともすればつけ目しい、もゥうとましいことばつかり、賴みといふはこゝのこと。人知らず玉の井を、遠ざくる仕やうがあらば、教へてたべ。」とありければ、松羅はしばし思案をなし、ぬぎすておきし客おつ取り、くだんの流れに

うちこめば、忽ち雌雄の鴛鴦の、かたちと化して羽たゝきなし、浪間を潜り水際に求食り、戯れ遊ぶありさまに、宗郷きつと眼をつけて、「ナニ松羅姉うへが今の頼み、一言の答へもなく、脊をむけて、鴛鴦となしつる所存ぞ心得ず。」と、とへば松羅打ちうなづき、「す、その仕やうはまづ此の通り。」と、つんと立つて雨の手に、雌雄の鴛鴦、引つさけ來り、手早にひきこき華皿に、血汐を絞りさし出し、御物がたりを承るに、言ひなづけある[illegible]なれば、申さば主ある女も同然、此の生血を酒に和して飲ませるときんば、男女の心をみだす秘藥、是れを以て異人に心を通はせ、不義をいひたて追ひ出さば、一ツの邪魔は拂ふといふものに「出來た／＼、これで妾も少しは安堵、友郷殿彼の品松羅に御見せあれ。」「心得申す。」ととり出す密書、「一通は姉上の心をこめし、秘密の願書、又一通は事成就の其の上で、はうびを與へん墨付なれば、隨分とも大事にしめされ。」と、渡す折しも暴風、どう／＼ざつと吹き來り、二通の密書を虚空にまきあげ、遙かに谷へひら／＼／＼「あれよ／＼。」と、呼びあはせるを征す松羅陳人、「此の處は深山なれば、たとひ何處に落ち散るとも、外へもれん氣遣ひなし。まづ／＼庵へ御入りあれ。」と、いふのもきかぬ氣ばやの宗郷、「イヤサ堤の壞れも蟻のあな、人手に渡らば一大事。」と、覗けど底は白雲の、埋む深谷に氣をのまれ、吐息ついたる許りなり。

此の道具上へひきあげ秀卿狩場のでたちにて密書をよみ居る。これより谷のしたへたちの物がたり

[illegible]

[illegible]故こそあれ、われいつ[illegible]

[illegible]

なり。

伐木丁々として山更に幽なり、鳥の鳴く音も嵐吹く、遙かの谷には藤太秀郷、供をも連れたゞ一人、岩かどに腰打ちかけ、風にとび來る件の密書、逐一に讀みをはり、誰がたきすての篝火に、煙となして默然と、物をもいはぬかたはらに、卑しからざる山賤が、訴訟ありげに進み出で「思ひがけなき御目見えは、再び運の開くるすゑよう、此の上の御情には、兄が勘氣の許るゝやう、一向願ひ奉ること」と、兩手をついて敎へば、秀郷漸く口をひらき「兄大竹左郞もろ共に、わが近習に加へし其方、朝妻の遊女に馴れ初め、それ故に兄の勘氣」「ハヽア御意の通り若氣の花の徒らより、杖柱とも賴みたる、兄にさへ勘當受け、世を憚りて味方の名字をかのり、玉櫛多門方紀と、人がましき名はなのれど、其の日の煙もたつやたたず、微けき夫婦が世わたりも、是れ皆此の身の不所存から。」と、先非を悔いしほろ／＼涙、心を不便と秀郷も、顏をそむけて居たりしが、稍あつて「何多門、汝は元われに對して麁度もなく、左郞とても實の弟、にくうて勘當したでもなく、こらしめのためなれば、「ハア、ア今頃はどこにどうして居ること。」と、いひ出さぬ日はなきと、妻の小笹が物語、一ッの功だに立つならば、我もともども詞をそへ、武士に取りたて得させん。」と、情の詞に身をへりくだり「ハヽありがたき御詞、イヤハヤ身の事にかゝづらひ、問ひ奉らん事のもらせり。」見れば人をも供せられず、か

かゝる山路に御出でありしたつ。「ホ、ウ汝が不審も故こそあれ、われいつぞや勢田の邊に宮居を造り、白狐を神とあがめしに、彼の白狐告げて曰く、「君某の日三上山にいたり給はゞ、君に仇する者共の、たくみのあらまし知るべし。」と、まざ／＼しき夢の告げに、去るによつて此の山路にさ迷ふうち、不思議や俄に眠りきざし、岩を枕のうたゝねに、夢現とも辨へず、宗郷友郷がたくみの次第、聞き取るのみか密書まで、我が手にはいつたれど、血で血を洗ふに力なく、火に打込みて煙となすつ。嗚呼定め難きは人心。」と、又も思案の折こそあれ、山路傳ひに友郷は、小鳥をにがせし鵰眼、きよろ／＼うろうろ尋ねくるつ。秀郷きつと打ちみやり、「彼に逢うては事むづかし、コレかう／＼。」と私語きあひ、木陰に忍ぶ間もなく、一ツの壺をこわきに抱へ、さもいかつげに、「これやゝい山賤、われ大切なる書簡一通、今の暴風に吹きたてられしが、落ちた處は確かに此の谷、左樣な物は見あたらずや。」と、いひつゝ、顏をうち見やり、「われや確か五郎が弟の多門ならずや。」「ホ、サ勘當受けた玉櫛多門、主親なしの一本だち、かけかまひはなけれども、密書もおれが疾くひろひ、一々に讀んで見れば、見さげはてた大惡人、その壺も樣子があらう、此方へ渡せ。」とよばはれば、氣味わる／＼も友郷は、一世の浮沈と覺悟を極め、「夫れ見られてはもうこれまで、觀念せよ。」と斬りつくる。心得ひらりとぬきあはせ、劍の稻妻ちやう／＼／＼、ちやう／＼はつしと斬り結ぶ、太刀風刃風山風に、砂をけたてゝ三重一戰

うたり、多門が手練の太刀すぢに、友郷今はたまりかね、刀からりと打落され、いち足出して逃げ出し。「遁さじやらじ」と追ひ行く折しも、「ヤレまて多門。」と聲をかけ、悠然として藤太秀郷、木陰を立ち出であたりを見まはし、「惡としりつゝ宗郷友郷、其のまゝ置くもてだての一ツ、遠く追はんな無益のいたり。其の品是れへ。」と捨て置きし、件の壺を打開けば、怪しの血汐を湛へたり。何か心に頷しけん、秀郷ほくほくうちうなづき、なほも多門を近づけて「こな。」「ハツ。」「こな。」「ハツ。」と私語けば、枯木に花の咲くのまね、「委細承知つかまつる。」「事なりしからは、兄の勘氣は我が許す。」「ハツァ重ね重ね御鴻恩、おつつけ吉相御聞かせ申さん。」「過分々々。やあく秀郷が歸館の用意。」「はつ。」と答ふる詞のした、何くに隱れ忍びけん、前後を固むあまたの家來、行列くつさね徒士若黨、お手先をふる腰をふる、ふつて涌いたる喜びに、多門は後を伏し拜めば、遙かに見返る秀郷も、よきにと計り夕がすみ、ひき別れてぞ。　逢坂の關路に近き法の庭、苔に埋みし草の門、小柴垣し渡して、目に洩れしとやあれはてし、軒端にまとふ蔦かつら、笆に匂ふ白梅も、夜の嵐にちりしきて、目前の無常を縁し、かけ樋の水音いさぎよく、心の濁りやあらふらん。扨も貞盛の一子、小六郎貞武は、浮世に恨みあり明の、月の都をうちはなれ、長等山園城寺に、去年より草の庵をむすび、昨日は弓矢とりし手に、けふは爪繰る水晶や、珠數ひきならす文机の、うへに佛經むすび文、戀と無常のあらし書、何

くの誰が鳥のあと」ねたしゆかしの風情かな。爰に秀郷の息女玉の井姫、小六郎貞武といひなづけはありながら、ねもせぬ春のきり〴〵す、逢ふ夜をまちし甲斐もなく、出家せんず覺悟のよし、仄かに傳へ聞き給ひ、御歎き大方ならず、玉櫛多門を使として日毎におくる玉章も、手にだにふれぬかたくなに、多門も今はせん方なく、色よきへんじ聞くまでは、中々生きて歸らじと、その身は酒食をとゞめつゝ、柴折の外面に圓座しき、渇死と覺悟きはめれば、雨露霜もいとはばこそ、いう〳〵として坐しゐたり。折からきなく鶯の、はつ音に貞武縁に立ち出で「實にや溪のうぐひすは、下化衆生の囀に囀り、等覺一轉のほとゝぎすは、上求菩提のはやしにすだつと、きなける鳥の音色まで、世塵をはなれし此の靈場は面白の詠めやな」と、暫し聞きとれゐたりしが、透垣より外面を見やり「臣櫛多門汝はいまだ歸らじやな」と、詞にはつと兩手をさげ「今更申すに及ばねども、さいつ頃より主家の姫君病に臥し給ふ。これはといへば君を戀病、まことの逢瀬はともかくも、君の色あるお返事が、いかなる名醫の藥より、ききめのあるは知れたこと、お心とけざる其のうちは、死んでも門はうごくまいと、性根をすゑし錦木男、元いひなづけの御中なれば、強ち不義といふでもない。ついすら〳〵とのお返事をな」と、實を顯はす主思ひ。不便と思へどなほも氣づよく「いかにも汝がいふとほり、互に顏をしらねども、親と親とがいひなづけ、末は夫婦となるべき玉の井、垣をこゆるのおそれはなけれ

ど、さいつ頃母にわかれ、世をうきことに思ひそめ、菩提に入つたる此の貞武。父の御ゆるし出づると其のまゝ、剃髪せんとかねての覺悟、切なる心はうれしけれど、こゝの處をがてんして、ふつゝりおもひ切るやうに、いうて聞かせよ玉櫛。」と、物和かに宣へば、多門なほも頭をさげ、「夫れに如在のあるべきや、さまざまになだむれど、いちづに思ふは婦女子のつね、此の上氣のよき事を申さば、共に飾りをおろされん御あり樣。」「ホヽウ紅裙をたつて法衣をつけんとは、流石は藤太の姫ほどある。コレ多門千束とおくりし玉づさは、手にだにふれずかへせしが、切なる姫が心といひ、其方が忠義にめで、さいぜんの文はひらき、文机にのせてある此の文を、是れから懷へいれておけば、互に肌にそふ心、せめては是れを規模にして、はやばや館にかへられよ、よしなのことにかゝづらひ、誦經のときをのばしたり。けがれし耳を淨めん。」と、閼伽桶たづさへしづしづと、庭のいた井にさしかかれば、多門もほつと吐息して、ふたゝびいはん詞もなく、口をつぐみてゐたりける。かかる處へ何處より、爰に來にけん八文字、小織といひて朝妻の、里になれたるとりなりは、ふき出し髷に鴨髱、あとにそうたる新造も、太夫に優るきりやうよし、媚いて又しやんとして、衣の著こなしかいどりの、小褄にもるゝ緋鹿子は、夫を戀ふてふしるしかや、駕籠は麓に殘しおき、いと物なげる辨當を、負籠たわゝに荷はせて、やうやう彼所につどひより、多門が脊をしとゝうち、ついとそむけてあちらむき、

そらさぬ顔で居たりしは、風にもまるゝ緋ざくらの、うてな見せたる如くなり。多門は見るよりびつくりし、「思ひがけなきそなたは小織、爰へはどうして此の形は」と、問へばにつこと打ち笑ひ「此の頃のおまへのおふみ、お姫樣のせつなる戀路、若しもかなはぬ其のときは、酒食をとめて干死ぬとやらの御文でい、どうやら愚痴なことゝしい。そうじて戀ぢといふものは、さう木折には行かぬもの、此の小織が、思ふには、やつはり御膳も常の樣に、酒も飲んで心ながら、いつまでも待つたのが、よささうなと思ふ故、突出しの吹雪を連れて、はるばる爰まで來やんした。サア酒一ツ。」と蓋を開き、丁度受けてさらりとほし、さゝ杯を多門はとりあげ、「さりとてはせつなる心、忘れはおかぬかたじけない。我等もほんのいひかゝり、餘りお返事ないゆゑに、今度はさらりと趣向をかへ、拙者これにて餓死仕るなどと出かけても、丸太に鎹釘きゝへは通らぬ。ひよんな事をいひ出して、後へも先へも行かぬ處をよう來てたもつた。盡未來此の大恩は忘れぬ。」と、續けて四五はい小織へさす「餘りお見ごと抑へました、こゝらは吹雪がお間のぼ。」と、いへど吹雪はうつかりと、立つてゐ居てゐ覗いてゐ「アレあの机にもたれて居給ふが、貞武樣に違ひはない、ても美しい御きりやう。」と、小織に顏を見やはせて、「オ、はづかしい。」と袖おほふ。いひたい事もやつ口の、うちにこもるも戀なれや。二人はなほも酒ごとに、手もとを見るやらすけるやら、餘念なかりし睦ましさ、憚りながらもすておかき、

色のみちには貞武も、木竹ならねば折戸をひらき、「何か仔細はしらねども、さいぜんよりあれにて聞けば面白さうな二人がはなし。マアその女子は何者。」と、問はれてはつと口ごもるを、小織がひつとり、「はい、私は多門殿と深いなじみ、朝妻の里にすむ小織と申す流れの女、君傾城はどなたへも推參を仕り、一節をかなへるもの。それの不無禮もかへり見ず、この處へ參りしは、お返事のでぬ其のうちは、屍に成つてもかへらぬと、多門殿が申し過し、あとへもさきへも參らぬ首尾、若しも夫がはてられますれば、ながらへはつべき心でなし。わたしが死ねば新造禿、引舟中居やりてまで、生きて居ぬのが郭のおきて。さすればお心お一ツで、大勢人の損ずると、佛道とやら申すのでは、人を幾たり殺しても、ほれた女へ返事はするなと、釋迦の教へがござんすか。」と、あぢな處へ持ちかける、郭の色のしやれ言葉、水を流す如くなり。貞武も感じいり、「君傾城といふ者は、だて一へんをかざりつゝ、實なきものと聞きつるが、物うちいひたるけはひにて、心の誠はあらはれたり。事を分けたそなたの詞、多くの人の命にかゝらば、戀を叶へんものでもないが、その戀とやら色とやら、かつて知らぬ此の貞武。」「ホヽヽヽ、さうお心さへやはらげば、なんのてまひまいらぬこと。しかし戀にも差別がある、上ツ方では歌で口說き、夫れより下は文の取りやり、人目があれば膝の先、ちよつとさはつた手のうちにも、なるとならぬは知れてある、色一通りは郭のが、しやんと短う埒明いて、くどく

どせいでよござんす。禿立から色戀の、中でそだつた私が御傳授」一寸、其の郭とは漢にいふ花街柳巷、街賣女色と說きたれば、佛の國にもありと聞く」情あきなふ色里よな」一ホンニそれ/\ずんと前かた、私があうた坊さん客、小むつかしいこと言はしやんしたを、ところ/\覺えて居れば、あなたのおすきなお經とやらに、郭の事をひきくらべ、目がらのさしかへもらひのわけ、おはなし申すも此の場のいつきよう」一コレハ一段きごとならん、さあ/\早う」とはやう/\に、心とけたる小六郎、さアしてやつたと多門が喜び、小織は杯あらためて「おまへは酒のお相手」と、いやがる吹雪をつきやりおしやり、小褄ゆかしく取り上げて、いかめしくこそ語りけり。

法の華
郭の花
頓作街賣靑海經

如是我聞花街の說、そも/\郭と申するは、玉樓金臺軒たかく、かの法華經に說かれたる、五百由旬の寶塔も、おく/\やとばかりあきれしし「夕ぐれの鐘が夜明の揚屋町、かすかを作るしなつくる、かはい/\の烏瓜、夜をはなれぬ遊君は、南北に道中し、東西に姿をかざり、其の風俗も物ごしも、世界の外のせかいにて、情あきなふ色を賣る、戀をおはせて三ツ蒲團、三佛性の三ツ齒の下駄、三ツを三ツにて九品の蓮臺、そのしな/\を云はうなら、烏瑟の髻やなぎの髮、梅が香匂ふ髷の艶、濃紫

の彼方には、紫雲に乗ずるうちかけは、是れ上品の太夫職、さて中品は来迎の、彌陀さしなる群に、菩薩の数の二十五人、天神とこそなりにけり。下品はつぼね端女郎、如露の情を線香の、如電に切る青暖簾、はかなき夢のゆめの間に、戀ぞこもれる初瀬山、はなに霞の袖几帳「花がわらへば柳の絲も、亂れ心やみだれ／＼て野邊行く人の、さはいへばおちやん色見ゆる、露もつ萩はうはき者、招いてついとあちらむく、風の莟は人じらしつ、さて又客にあふ品の、こまん／＼あるが其のなかに、初めは手管の方便も、末は誠の眞實に二世も三世もかはるまい、指切り髪切り捨身の心中、つひに夫婦となるもあり、又は堰かれた其の人に、たま／＼あふも忍ぶ草、是れかこひの草忘れ草、忘れはせじのむつごとは、限りある夜にかぎりなく、つひわかれぢとなる鐘に、しようこともなく後から、なほす羽織の會者定離、義理一ぺんであふ人は、折客折破の手管のかけひき、聞たをしのばす小座鋪へ、そつとはづした段梯子、とん／＼／＼と魂も、とんでうつゝや空體無生、實があつてわけしつて、眞實しんからそふ氣でも、まゝにならぬがつとめにて、長い年季の聲聞縁覺、ながいうちにはつい飽いて、男のはうから退いておき、本来空寂無生體、實がないとは胴慾な、あゝわれとても流れの身、根をたたれたる藻のはなの、どこで開いてどこで散る、どう成る事か末しらず、知らぬもよしや世の中「かかる尊き傾城はさつ、紫磨金色の雪の肌、皆結縁を願ひつゝ、常住不滅のおはつめに、天人ならぬ太

盡が、花をふらして供養すれば、音と樂とをつかさどる、藝者まはしの乾闥婆、みなそれ〴〵に指圖して、竹をならし絲を調べ、簫笛琴箜篌いまこゝに極樂世界も外ならず」と、頓教頓語小織が利發、口から出しだい語りける。貞武殆んど興にいり、猶めぐらする杯の、數もかさなる醉心、しば〳〵通ふ目つかひに、夫れといはねど見てとる小織、マアどうやらかうやらお心もやはらいで、おまへの願ひも叶ひさうなが、わたしが口でいふよりは、戀の指南はさいはひの吹雪どの、あなたもあんまりいやさうでもないお顔つき、是非に今宵はお寢間のおとぎ」と、手をとり側へつきやれば「おれ又あじやらな事ばかり」と、表面はせかぬふりなれど、心の裏ははや瀬川、顏にもみぢを流しけり。見るに多門はもどかしく「さうじ〳〵してござつては、いつならうやら果てしがない。ちやつと〳〵」と氣をあせる、折りも吹き來る夕風に、松のこずゑのばらりとなる。「怖や。」といふをはずみにて、抱きついたるおほこ氣を、いやにはあらぬ小六郎、しめて返せし手のうちに、無量の戀やこもるらん。玉樟多門つゝしんで「御念願かなはせられ、姫君にはさぞ御滿ぞく、私までがとも〴〵に、お嬉しう存じます。」と、いふに貞武不審がほ「ナニこの女を姫君とは。」「ハツ夫れこそ則ち主君の息女、玉の井姫。」「サアお心ねがいとしさに、もつたいない事ながら、吹雪といふ新造にしたてたのは私がはからひ。」「ハテ思ひがけなきこのばの事ども。」「して又遊女小織といひしは、夫れこそ則ち拙者が女房、

彼も以前はながれの女に、大多門が申す通り、禍ひ三年時の用、昔おぼえし川竹の、差かゝりの御仲人となつた我々此の處へまゐりしも、私の計らひならず、勘當受けし兄大竹には、對面をとげずといへども、三上山にて秀郷公の御目にかゝりし其の頃、宗郷友郷異人を語らひ、鷲鷹の生血をもつに、姫君の心をみだし、退けんずたくみのおもむき、兩尾の靈狐の告げによつて、我が肴備にしるしめされ、その生血をうばひとり、たれなる瓶子の酒にくわし、最前君にすゝめしかば、忽ち御心和ぎつらん、此の上御中睦ましう、添ひとげてたまはらば、毒藥變じて藥の生血、是れみな君の計らひ」と、樣子殘らず物がたれば、貞武いよ〳〵感じ入り「オ、さこそ〳〵おことらが忠義にめで、我が胸中もかたり聞かさん。さても藤太秀郷殿、朝敵退治の敕許にあづかり、關の東に打立たん、其の用意もあるべき處、鏡の宿の花街にかよひ、放埒惰弱と世の取沙汰、あら不審しと思ひし故、佛門に入りしと僞り、此の三井寺に庵を結び、忍びをもつて探り見るに、將門に一味の者、都にありと慥かに注進。さてこそ軍慮に賢き秀郷、彼等に心をゆるさせん、反間の計略と、狭くわれはするしたり。かかる智勇の秀郷殿、聟にとつて不足なし。ことに互にをさなきより、いひなづけの玉の井姫、未來までもかはらぬ夫婦、心を勞す事なかれ。」と、聞くに嬉しき玉の井姫、「あの衆達がすゝめにて、はしたない此の形も、お前に逢ひたい心の實、かはいと思うてくださんせ。」と、さしうつむいておはします。

多門夫婦も安堵の思ひ、心え小織が走りより「互につもるお咄は、さアあの一間へとすゝめられ、玉の井こちへと手をとりて、二人いざなひ入り給ふ、嬉しはづかし新牀の、うちやゆかしき風情なり。二人もほつと吐息をつき「アヽうへつがたといふ者は、思ひ思うた戀路でも、て短うは行かぬもの、併しそなたの働きで、どうやらかうやら埒明いた、かたじけないことと寄りそへば「ホヽヽ他人がましい女房の禮、わたしよりはお前こそ、毎日ひにちのお文のお使、ほつとせいもつきたであろ、まだ酒もこゝにある、一ッ飲んで氣をはらし、わゝらうて下さんすなことす、夫れよからうがさりながら、そなたとおれが爰にゐて、若しも人にみつかるときは、彼のおかたのお身のさはり、話さにやならぬ事もあれば、こちへ〳〵とまはり縁、廻つて勝手に入りにける。しばらくあつて表のかた、人音足音さわがしく、紺のだいなし角鍔ほつこみ、下部にやつす侍女ども、てん手に貝桶ひつさげ〳〵、庭先に大音あげ「田原の息女玉の井姫、此の家に忍びおはする由、注進あつて慥かにきく、大切なる姫君と不義はたらいた不敵なやつ、ひつたて來れと仰せを受け、おしやらく色平、ねごいが喜津平、うちは圍平、まことに勘平、司の前の身内にて、名うての金平おてんば者、討手として向うたり、さア尋常に腕まはすか、たゞしふんごみ繩かけうか、いかに〳〵と呼ばはつたり、貞武かくと聞くよりも、多門夫婦姫もろとも、うら道よりおとしやり、いう〳〵と一間を立出で「ヤア業々しや方々、

討手とあらば武士にこそいひ付けんに、なまぬるこい女ばら、察する處司の前、姫を罪せん心のたくみ、女わらべにやみ／＼と、搦め捕られん某ならず、ならば手柄にかゝりて見よと、梅の若枝おつ取つて、閃りと庭へ飛び下るれば、「夫れ逃すな」とおしやらくが、顔もちみぢのあかつ面、眉毛のあとは青黛に、負けぬ色なる實に勵平、貝桶振上げ打ちかゝる。心えひらりと身をかはし、機をうつて蹴返せば、ころ／＼／＼とこけ清水、あとへまはつて團平喜津平、一さつてもきついお若衆さん、一しあんして汗かいたり、なほいとしさが増らうことと、目あひ云うて組付くを、襟がみ取つて引廻す、はずみに落ちし玉章を、起き返つたる色平が拾ふと更に白梅の、枝おつ取りのべてう／＼／＼、落花みぢんに打ちたてなぎたて、初瀬のあらし芳野の吹雪、花を散らして三重「戰うたり。元より手だれの貞武に、おつなこし／＼追ひまはされ、叶はじものと各まくれ、むら／＼はつと逃げて行く。追はんも無益と貞武は、につこと笑うて立つたるなりしも、はや告げわたる人相も、時にあふみの名所の一ツ、二ツ三ツ四ツいふくまで、落ちやしぬらんつま鳥を、したふ鳥のこう／＼／＼、ふくらすゞめはあう／＼／＼、忠あり孝ありなさけあり、末頼もしの若武者やと、皆人語り傳へける。

勢田橋龍女の本地 中

作者　柳亭種彦

二段目

人性平らに清まんと欲りして、慾これを害すとかや。されば田原藤太秀郷は、朝敵将門易々と、討たしゝ玉へと祈願をこめ、辛崎の神前にて、今夜管絃を催さんと、あまたの遊君呼び集め、指引の役人には、秀郷の弟藤六友郷、さもいかつげにむんずと坐す。次は昵近大竹五郎、鴎じりなる大小に並ぶ色どり都どり、紅と二布とに脛と足、あかきは雪とすみだ河。武勇に色のはえくらべ、勇ましくも又婀娜かし。小笹はけふのかひぞへ役、しとやかに手をつかへ、かねて仰せられたうれし、鏡の宿の名とりの傾城、糸竹の妙手なれば、召しつれましてござります。我が君様へおとりなし、よろしう願ひあげますこと、いへば友郷打ちうなづき、兄秀郷もとつくときたり、神主かたにて事ない侍らかね、我等いひつげまでもなく、小笹は彼らを同道あれ。併し神事なら神事のやうに、神子説吏にはいひつ

けす、なまぬるこい遊女を呼びよせ、神前を揚屋あしらひ、夜神樂も腹の皮、現をぬかした兄おやのうつそり、まづ誰ぢややらぬかさした、顔が見たいことと當言が、耳にさはつてつつと寄り、「アイお前の兄ご藤太さん、藤にまかせた松のくらゐ、大夫といふもしやらくさけれど、深い中といふ事は、名を聞いても知れてある、海神とはわたしが事、見しつておいて下さんせ」と、すつかりいうて小ぎみよき、言葉につやはなけしまだ、さすがそれしやと見えにける。鶴を見ならふ小雀の、新造が目ひき袖ひき、「そんならあなたが秀郷さんの弟ご、友郷さんでござんすか。まだお若衆と聞いたのゐ、なんでもこつちの思はくにて、樂しんだとはきつうい違ひ、あれあのにらんだ眼のこはさ、遣手衆に頼んだら、女郎さん方のしめしがきき、疫病がみもはひるまい」と、どつと笑へばなほねめつけ、「やいこゝなこびつちよめら、あごたも切れぬさんまいで、武士たる者を嘲弄致すか、今一言吐したら、女とはいはさぬ」と、きつは廻せば海神は、をかしさ耐へて、「これいなあ、長老とやら納所とやら、そんな事を此の子達が、何の知つていふものぞ」「いやたれでも今身共の眼が」「サアだれは」「だれはとは」「それはとはたれ男の眼にはすゞをはれ」「お前の眼許がりんとして、どうもいへぬとはあたのぢやろ、をしい事には紙雛見るやうに、つつはり返つた上下が、主さんのは瑕にきず、とてものことなら武士やめて、たてかけのんこの巻羽織、當せいふうでぬめらしたい、いばらの枝をこんな瑠

璃の、壺へきしたも又よかろふと、何をいふやらたわいなき、ことばも里のならはしなり。大竹左郎つゝしんで、先刻よりよほどのひまいり、何かといふ間に初夜近し、君にも嘸かし御退屈、友綱公には彼等を連れられ、御入りあつて然るべし。いや何女房、こよひは大切なる神事なれば、ずいぶんともに心をつけ、かた／＼を伴ひあされ。と、いへば小笹が、「さればいな、私も先から心は急く、とやかう思へどかんじんの、神事に使ふ眞琴が、まだうちあけてこぬとの事。ほんにそれ／＼秀さんの物ずきは、勢田とやらの橋板で、本けんと枕琴、二面の琴をつくらせて、此の海神が調ぶる筈、橋板なら桐でもあるまい、どんな音色がせうぞいの。と、半ぶん聞かずさし出る新造、「秀さんと大夫さん、二ッならぶるまくら琴、ねいろのよいはしれてある、聞くのがこはいはしんぢい。と、そやしたつればにつこりと、戀にははおぬ傾城も、笑ひをかくす袖屛風、半開きなる緋ざくらに、かすみのかゝるごとくなり。「ヤイがやく／＼とかしましい、身どもはちつと用事もあれば、なんぢらは神前へ、とつとと行け。とねめつけられ、「そりやこそ眼許かりんとした、皆ござんせ。と打連れて、衣紋直してこつまとり、會釋のないが會釋にて、小笹もろとも入りにける。ひき違へて松羅陳人、琴師の團平ひき連れ來り、それと見るより持たしたる、二面の琴を友綱が、まへに直して兩手をつき、かね／＼君の仰せのごとく、御舍兄秀郷殿が、味方につけん一ッの手だて、團平を語らひて、唐橋の二面の琴、うちあけ

さてこそ〳〵さりぬべし」と、いへば友郷うち見やり「ヤ、松羅過分〳〵、手筈の如く計らひくれよ、褒美の金も持たしたり、神職方にて渡さん」「ト、喜び勇めば大竹は、不審ながらさし寄つて「いや何松羅殿とやら、拙者は元秀郷の譜代たりしが、ふとした事よりかた〴〵に一味いたし、友郷公には取りわけ、御目を下し給はるもの。して此の琴を頼みにして、秀郷を討ち取るとは今聞きしが初めなり、いかなる手だてに候やらん、後學のため聞きたし」と、いふに團平ひきとつて「されば〳〵我らも深い様子はしらねど、此の琴をうつをりから、松羅殿がわせられて、斯う〳〵いふわけおやによつて、うふういつた其の上では、ほうびの金はうつしり物と、サ言はれた故やすいことゝ受けあうたら、何か此の琴のうらへ、むづかしい字を書かれたばつかりナア松羅。」「いかにも團平が申す通り、うちに隱形の秘文をしるし、我今宵蝦蟇となつて、此の琴の中に隱れ、奇怪を見せて藤太殿、こつちの味方につけるが一ッ、さもなくばだまし討ち、お氣遣ひあそばすな」と、人もなげなるふる舞に、大竹もぎよつとせしが、何思ひけん抜きうちに、はつしときれば煙のごとく、姿のきゆるぞ不思議なる。友郷は眼に角立て「ヤイ五郎狂氣せしか」ときめつけられ、刀を鞘に手早く納め、餘り怪しき彼が詞、虚實を試さんその爲に、まづ斯くは計らひしが、かたちを隱す奇代の妙術、無禮はごめん」と手を下ぐる。友郷ほく〳〵うちうなづき「未だ汝は奇術を見ざれば、不審に思ふも尤も〳〵。サア聞かるゝ

迎へたれば、無禮を宥し對面あれ、松羅殿陳人。」と、大竹諸共。」呼び立つれば、「方々尋ね給ふに及ばぬ、松羅はとくより爰にあり。」と、いふはまさしく琴のうち。「フ、すりや今の騒ぎに紛れ、早くも忍び給ひしか。」「いかにも／＼我は琴の内にあり、このまゝかしこへ持たれよ。」と、言ふ聲すれど形なき、魔術に猶も友郷は、事なりたりとしたり顔。「はや／＼あれへ。」とせり立つれば、大竹もろとも團十は、琴差しになひまりがたより、内を覗いて、「是れ先生、ほうびの分口忘れまいぞ、催促にいつたとて、又隠形で消えられては、しよ事がない。」とつぶやき／＼、三人うちつれ入りにける。絲の調べや吹きものゝ、音色も冴えてかう／＼と、鐘の聲さへおとすなる、比良のねおろし月更けて、風もおろに和ぎわたり、琴に調べや譲りけん、そよともいはぬ松がえより、不思議やちら／＼ちる松葉、名にしおうたる夜のあめ、そふ降る音と聞きたがへ、神前の翠簾高々と、まき上げさせて藤太秀郷、七寶を鏤めたる管絃の大鼓にうちむかふ。左の座には海神が、琴ひきさして弦枕、右に小笹が笛竹を額にあてゝとろ／＼と、眠ると知らでついこけて、前後もしらぬ睡魔のきざし。ときに山鳴り谷こたへ、天地六しゆに震動して、浪滔々ともの すごき、松の葉かげに物こそ見ゆれ。たゞごとならずと見てければ、金色の小龍紅の舌を吐き、琴をめがけて飛びかゝる。あやしや一ッの大蜈蚣、琴の空にや隠れけん、海神がうちかけの、つまをくゞつてあらはれ出で、百の足がき振りうごかし、寄らんとも

よせじとみがまへたり。小龍なほも怒りをなし、逆立つ鱗は湖水のさゞなみ、蜈蚣はからだを巴の字にまき、口より毒氣を吹きかくる、此の勢ひにやおそれけん、小龍少ししりぞきしが、また飛びかゝつてくんづほぐれつ、劣らじ負けじとくひあふは、漢の大和の昔より、聞きもおよばぬ奇怪なり。此の物おとにや目さめけん、うち驚きて面かくす、袖の陰よりうかゞふ海神、小笹もやう／＼心つき、かねて用意のふところ刀、こひぐちくつろげ立ちむかふ。すは今こそと友綱は、一間のうちに身をひそめ、樣子いかにとまもりゐる。藤太秀鄕ちつとも騷がず、刀おつ取りつつ立ちあがり、「あゝら怪しや昔皇極天皇、美濃國石津郡、某の莊の橋桁にて琴を作る、今琴ひきの橋と呼ぶこれなり。まつた船の餘材をもつて和琴を製し、その音七里にひゞきしと、古事記にも見えたれば、われも又是れにならひ、勢田の橋板をもつて琴をうたしめ、名づけて唐橋とよぶ。うちにひそみしあやしの蜈蚣、小龍とあらそふありさま、聞くならく勢田は龍宮の東門なりと、まつた三上の山深く、年ふる蜈蚣住むなると、土人のことばも空しからず、夫れかれ思ふに故こそあらめ、奇代の變化のふるまひや」と、はつたとにらめば消え失せて、白氣陰々と立ちのぼり、煙の中に忽然とすがたをあらはす、松羅陳人、法衣のすそをはせをつて、利劍ひつさげ秀鄕めがけ、眞いちもんじに飛びかゝる。心得うちかけひらりと脫ぎすて、懷劍ぬいてつつかくる、小笹がさそくに劣らじと、海神もつゝとより、手とりにせん

と組みとむれば、霧か霞か陽炎か、姿は消えてあともなし。なむさんほうとくまぐ〳〵を、尋ね求むる眼前に、「ハヽヽヽ、はつ。」と高笑ひ、扨こそ爰にと立ちよれば、又消え失せて目に見えぬ、松羅が魔術ぞ不思議なる。秀郷は二人を制し、松羅とやらいふ賣僧坊主、蜈蚣をつかふ奇術を行ひ、三上山に住む由は我もとつく聞き及ぶ、彼がしわざに疑ひなし、シヤ何程のことあらん。瑣細のことにかまはずと、さあ琴ひけ。」といふぜんと、煙草くゆらす大丈夫。堪へ兼ねて友郷は、屏風の隈よりつつと出で、「いや兄ぢや人、當社で管絃を催されしは、武運長久祈りの爲、それに怪しい今夜のしだら、奇怪を見るは不吉の前表、おちつくもことによる、とつくと様子を糺されよ。」と、己がたくみのねどひごと。時分はよしと松羅陳人、再びかたへに姿をあらはし、「ヤヽ、友郷とやらんが言つしに違はず、朝敵たやすく亡ぼす爲、神いさめのこよひの管絃、夫れと知りつゝ妨げしは、われ秀郷に頼みたき仔細あり、應といへばその通り、いやといへば幻術にて、立ちどころに命をとる、さあ、いやか、おうか、返答一ツが生死のさかひ、いかに〳〵。」とつめよする。秀郷につことうち笑みて、「我いやしくも禁裏守護の武官たり、一天の君のほか、主君と頼みし人なければ、又頼まるゝ覺えもなし。聞かずと知れし謀叛の餘類、討ちとらんは易けれど、血をあやむるは神へのおそれ、命は助けて得さする間、はやくかへれ。」と呼ばはつたり。「ハヽ、さすがは秀郷よく言つた、須彌山を罌粟にかくし、杯を浮めて洋中

な渡るこの松羅、わが眼より見るときは、干將莫耶が劍も竹箆、切らるゝものなら切つて見よと、人を恐れぬにくい口、無念と思へど龍神小蛇、姿を隠すに手ざしもならず、息をのんでぞ罷りゐる。友郷は膝すりよせ、「とかく見きは悪い合點、何か様子を聞きもせず、歸れというて歸りもせまい、殊には魔術を行ふ曲者、武邊だてするこなたでも、ちつととやつととへへ、むつかしかろ」と、なだめる言葉を耳にもかけず、「やあ〳〵誰かある秀郷が弓矢是れへ」と呼ばはれば、はつと答へて大竹九郎、むら重籐に征矢二すぢ、取りそろへて持ち出づる。秀郷はいう〳〵と、弓杖ついてつつたちあがり、こゝろしづかに弓手の肩、ねぢかけて大音あげ「汝に天魔の術あれば、我に蟇目の奇術あり。抑蟇目と申すことは、天竺のおんたらし、わが日本の天のかぐ山のはじめの木、是れ神佛製作の一張弓、末筈に日天子、元筈に月天子、鞄皮を七重にまくは七代の天津神、矢すりのどうに弓矢の神、是れぞ即わたけもすうち、かぶらどうにはやひのみことと、重籐の數二十八宿にくばつて四方を拜し、弓は丸くて外に廻り弦はけたにて内に位す、天地方圓おのづから具はつて、矢はその中にわざをなす事、人間天地にあいどうせられ、どうせいすゐに異ならず。文なき暗に羣る小鳥、あまぎる雪にとぶ鷺の、かたち見えねば聲をしるべ、聲も形もなきときは、心を以て的とせん、藤太がやさき受けて見よ」と、弦うちならさば陳人の、すがたは消えて以前の難蛇、おりつあがりつ松がえに、どうえうするぞ不思

謂ふなる。

蟇目は弓とる家々になほ秘傳あるべし、唯兒女の眠りをさまさんとてつくる。かかる戯れたる書に、なかなかそれをいはんもをこのわざなれば、近松門左衛門が著はす天鼓といふ淨瑠璃二だんめの、尾山路判官梅豐が白狐になやまさるゝとて、いつはりをかまへたる神職松垣が女房を見あらはす條に書けることばを、其のまゝに用ゐたり。

何を目あてになしたりけん、弓に矢からりと打ちつがひ、忘るゝばかりひき絞り、切つて離せばあやまたず、あつと魂ぎる聲もろとも、肩さき篦深に射とほされし、姿をあらはす松羅陳人。なむさんはうしそんぜし、もう是れまでと友綱が、刀ぬく手を弓とりなほし、大鳥うちにてとゞむる秀郷。松羅は姿も消え失せて、砂にひいたる血のあと、遠くは行くまいぼつかけて、ごうおやおやと大竹が、縮はせをつて驅け出すを、秀郷聲かけ「やれまて五郎、我思ふ仔細あれば、きやつはそのまゝ捨ておくべし、龍神小笹それそれ」と、目でしらすれば心得て、翠簾まきおろし寂寥と、なほ更けまさる小夜あらし、蘆間に潜むあぢ鴨の、しばなく音さへものさびて、目に見ゆる物とては、月をひたしてべうべうと、はてはいづこかしら波の、音のみ耳にかまびすし。小笹はそつとぬき足に、かしこを漸うしのび出で、松の雫に脇差の、目くぎをしめし目かくばり、一息ほつとつく處へ、言ひ合はさねど龍神

も、忍び姿のほゝかむり、しごきをときの抱帶、裾小短くはせ折つて、雫の素足は眞砂地に、あさる鷗のつがひ、小笹にはたと行きあたり、互にびつくり顔見合はせ、「そなたは確か龍神殿。」「さうおつしやるは小笹さん、こゝへはどうして此のおなりは、何ぞ深い樣子があらう、ちやつと聞かせて下さりませ。」と、問はれて小笹が、「さればいの、其方も聞いてゐやつた通り、曲者の跡おうて、五郎殿のゆく處を、それには及ばぬすておけと、わが君樣のおつしやつたは、なんぼ心が正しうても、うはべは惡にくみした故、うたがふお氣ではあるまいかと、女のぐちな心から、案じすごして夫のかはり、砂にひいたる血しほをしたひ、あとおつかけてうち取る合點。」「それなら私も同じこと、いかに女子の小腕でも、さつきにあなたと二人して、くみとめなんだか口惜しい。」「オ、でかしやつた、跡は言はずと知れてある、何かといふ間に手のびになり、取逃しては恥の恥、右と左に[illegible]道、二人が分つてがつてんか。」「心得ました。」といふしでの、きねがたもとをひるがへす、神樂の鈴やつゞみの音あとに聞き捨て、「行く雲の足さへ早く風あれて、いと物すごき濱づたひ、あひづを今やと松がねに、腰うちかけて團平が、あくびましくら獨りごと、「やれたいくつや／＼、此の濱手で待ち合はせ、首尾よういつた其の上では、はうびのわけ口貰ふはず、あつたまらうと思ひの外、なんぢや後は墓原前は湖、襟もとがぞく／＼して、うそ寂しう成つてきた、もう沙汰もありさうなもの。」と、つぶやく

後にはうほつと、すがたあらはす松羅陳人、「よ、さぞかし團平待ちかねつらん。」と、いふにびつくり振返り、「やあ此の處へはいつの間にゝして彼のかたの樣子はなゝ」と、問はれて松羅無念の顔色、さも苦しげに肩すきへ、立つたる尖矢ぬき取つて、はら／＼と涙をおとし、「汝もかねて知つてのとほり、宗鄕友鄕司の前と、心をあはし秀鄕を失はんと、蜈蚣となつて琴のうちに身をひそめ、まんまと彼に近づきしが、武勇すぐれし藤太秀鄕、わが幻術も敵しがたく、これ見よ手疵少々かうむりて、跡なくらまし立歸ること、聞くより團平膝つつかけ、「ヤアてぬるし／＼、たとひ鬼神なればとて、先生の魔術を以て取りひしがば、シヤ何程の事あるべき、これよりすぐさまとつてかへし、こよひの恥辱をすすがれよ」と、はげます言葉にうちうなづき、「おうさ／＼われもさは思ひしが、思ひがけなき不覺をとり、受けたる矢疵に血しほのけがれ、こよひは術もほどこしがたし、イヤナニ團平これを見よ、これこそ露の硯と名づけ、禁庭より賜はりし秀鄕が家の重器、最前盜みとつたれば、矢疵はこれでうめあはせ、をりをうかゞひ秀鄕が、命をうばふ手だてもさま／＼」「ハヽ、さすがは先生、あつはれのおてがら／＼、それで褒美の金もすつしり。」「サア約束のわけ口を」と、慾に心はくらがりを、探りよつたる團平が、えり首摑んで膝にひつしき、これはともかくを起しも立てず、おちたる矢がらとるより早く、咽にぐつと突きたつれば、アツとばかりに七轉八倒、松羅陳人せゝら笑ひ「ハヽ、、ハ、、、

もたくれ／＼、これはうびい白雨も此のほつぼに持つてはゐれど、我にやる氣はちつともないことこに大事をしつたやつら、生けておいては夜がねられぬ、そこで殺すおや、ホ、おれがおりはおつともあるまい、ハヽくるしいかせつないか、コレ／＼、ホイ、もろいやつもうこねた、地獄極樂餓鬼畜生、勝手な方へ行きをれよと、死骸をはつたと足蹴に蹴飛ばし、一人笑みして立つたる折から、日にたれとも白刃のひかり、松羅なすつはり後けさ、惡の報いは忽ちに、めぐる因果の車のわだち、こッにたつて死してんけり、後の築垣ふみこえて、ぬつと出でしは廻國修行者、右と左も一時に、女だからに垣おしわけ、様子うかゞふ海神小箱、かくともしらず不敵の曲者、錫杖にしこみしだんびらひつさげ、死骸の懐中とつくとあらため、金と硯を奪ひとり、内懐へ納めた顔、鉦うちならしいううと、あゆむ向うへつつなつ小笹、顔見られじと曲者は、笠ひつかうで[illegible]足、もどるこなたに海神か、曲者やらぬとことなる手さき、拂へばつけ入る手練と手練、おりゝ／＼とつけ廻す、梅と櫻の花くらべ、老木の松もひとこぶし、ミシャめんだうなことと振切るはずみ、笠ひつちぎれて折よくも、雲間を出づる月かげに、顔見てびつくり「やあおまへは、コレ。」（拍子よく）

一竹になりたや尺八竹に、コイサ、君にれんぽの歌口しめて、コレサ、それも一夜おやヨイ／＼寝かたらぬ、うたふ小歌の一節に、浮かれくる人通ふ人、衣紋つくろふ姿見る、鏡の宿のにぎはひは、實に

歡樂の天下一、中に優れし一構、大田屋が奥座敷、二階は手をうつ鼓うつ、門に男が水をうつ、忙がしげにぞ見えにけり。口「さて申し宗観様此の揚屋が秀継のこ」二「コレ密かに〳〵」口「ハツ龍神とやら申す遊君をあげづめにて、日夜をわかぬ酒宴の色茶屋」二「すりや將門征伐に打立つべき心もなく」口「いつかないかなけもない事、かく申す大竹五郎も、夫れゆゑに秀継を見限り、おの〳〵がたに一味いたし、うつけものの有様をおきにお目にかけうと存じ、此の處にお供いたしたこ」誰ぞ頼まう申しゆ〳〵」二「アイ〳〵どなたさんでござんすか、秀大臣の總揚で、座敷は殘らず塞がるし、女郎樣方もない程に、お初なら笑止ながらわきへお出でなさりませ」口「これさ〳〵その樣にもぎだうにいはぬものだ、此のおかたは遠國のさるお侍、海神といふおけいせいの器量よきを聞き及び、わざわざとの御來臨」今「さうとも〳〵、あけてあたらぜひがない、せめて杯ばかりなと、國元へ話のたねこ」口「よいやうに頼む〳〵」二「アイ〳〵お座敷許りのお望みなら、ちとの間かりて上げませう、結び合に海神も見える筈、まあ〳〵こちへ」と打連れて、座敷へ通せば兩人は、顔見合はせてしすまし顔」誰ぞお茶あげましやお菓子もて、御酒よ肴よと花車中居、銚子杯とりどりに、一先づおちかづきお手もとをこぼさはるもなれも色酒に、なれたとりやり杯の、廻りにときをぞうつしけり。中居のおたつが目早く見つけ、お鹿どんお咲どん、何とかいふ間に太夫さんが、あれ向うからきやしやん

す。」一番にそれ〳〵。よつぽど酒がすきだと見えて、あの道中のしどけなさ。」□「どれ〳〵どこへ。」□「正眞になつて」いふ間ほどなく戀のみち、情がよする小波や、眼もとのしほのさしひきに、名も隠れなき海神は、はだのしらなみほの見ゆる、衣紋なほしてのつしりと、柳があゆむ花笑ふ、恋の名さへちどり足、よはぬふりして新造の、肩にもつるゝはじもみぢ、立田がもとへいりきたれば、中居は見るよりくちぐ〵に、「おそい〳〵太夫さん、さつきにから秀さんは、おまへをあんまり待ちかねて、今すや〳〵と奥でうたゝね。夫れに又座敷許りでだんない程に、主さんちよつとかりてくれと、こゝにも客しゆがまつてぢやに、今まで何してゐやしやんした。」と、問はれて莞爾とうち笑ひ、「さいな聞いてくださんせ、夕のさゝがすぎたせいか、けふはよつぽど氣やひもわるし、しごきを切つてはちまきして、晝すぎまでねてゐたれば、松屋から呼びにきて、山蜂と名をつけた、彼の田舎のぶう〳〵客、さしたく〵の杯事、ほつとあいた退口を、たいこの一甫が訴人して、八幡屋で見付けられ、「弓矢八まん逃さぬ。」と、又そこで三ッ四ッ、いつものけんでもり潰し、負色になる處を、鐵子の花がかへり忠、わたしがお開のはかりごと、乘りた顔して切りぬけたを、「夫れにうたせ給ふは龍神主と見受けたり。正なうも敵に後を見せ給ふか。返させたまへ、暫し〳〵。」と扇屋で、まねくは誰ぞと振りかへれば、えびら紅梅總角なんど、辻占茶やへ忍ぶの上手、夜半のくぜつのひぞりにも、後は見せぬ手とり

の若武者、新ざう兎に下知を傳へ、鼓弓のゆみに投壺の矢、さんなすむゆのあひ言葉、懷兵模の紬の
樽、あれんにおさんと備へたり。「太夫さんとした事が、軍の話かなんぞの様にお〻笑止こと〳〵ます、
おきやや、そなたしゆが何をしつて。そこで私もむつとして、丼皿鉢嫌ひなく、ひきうけ〳〵飲む
ほどに、たつたひとりに飲みたてられ、さしもの大ぜいたまりえず、卵のはなおぜしの白粉や、顔は
變じて紅梅おぜし、足はしどろの八もんじ、こうまかいくる駒下駄に、ひけや引船しれさう兎、いの
ちからん〳〵逃はあれど、鯨子はわらひの鯨波、こかいもくゝる〻ばかりなり。けふの酒戰もこつちが
ち、酒といつては一寸も、ひけをとらぬ此の海神。おそうなりはなつたれど、ちつとも醉ひはしやん
せぬこと、よはぬふりするなが言が、醉うたしるしと見えにける。引船兎は氣のどく顔、一終にない太
夫さんの醉ひやう、あれ又憎けさんす、ま、あぶなこ〳〵、、、このやをかしい、此のやうに讀
するはまだ酒がたらぬせる、一つついでこと取る杯、お鹿が抑へて「これいなあ、その上に上つた
ら、なほ〳〵たわいはあるまいに。夫れよりは、太夫さん、ちよつとお客にごあいさつことといへば宗
鄕、「何さ〳〵、きつう醉うたやうすと見ゆる、何かと言はばむつかしからう、氣ま〻にするがこち
らも樂しみ。」「さうとも〳〵、御旦那の御意の通り、しどけなりふりつくろはず、顔もほんのりさ
くら色、醉うた姿も又ひとしほ。」「ホイそのさくらで思ひだした、あんまりこれは花見酒、夫れ太夫

甘あけますことゝ、いふ言葉あつて海神は、びつくり思はず落した杯、いふな〳〵と眼でしらせて、これて爰にわる大背ぶ、心を悟り笑ひに紛らし、「ア、これは〳〵、此の杯、とした事が、こぼいでもよい物を、コレ千鳥こちらのお方におかけ申しやこ」「アイ〳〵」と返事も長ぎせる、ひたひにあてて海神に、ねぶる海棠花の露、これのとこけて風に、顔吹かせてゐたりける、折から走つてくる中居、お庭どん、こゝは誰の噂もかな、奥の座敷もいまあいた、皆さん連れてござんせぬかいな、「ア、だれよからうっ身どもはちつと用事もあれば、今あとから行く程に皆の者は先へのきやれ」「アイ〳〵さんなら早うござんせや、先へ行つて待ちますること、鐵下を擬る背もつゝたれ未だ主に風ひかすな、お蒲團かけておけ申しやれ」と、あたふた騒いでいりにける。何おもはけん宗輔は、刀おつとつ海神が枕頭にゐちよれば、大竹五郎おし隔て、「ロ、フゥきつきうかへて此の女を、これや何とたすけますといつはてしれた事、性根を試し味方につけ、人知らず秀郷を彼に殺害さそうと思つての」「これや宗輔公のお言葉とも存じませぬ。傾城づれに大事を語り、外へもれまい物でもない。秀郷を殺すのは何のてまひまいらぬ事」と、言ふな五郎それしらぬではなけれども、兄秀郷も功の者、若し討ち損ぜば事は破れ、心を許さし此の女、ぜひ此方の身方につける、其所退けやッ」と氣をいらつ、こじりを押へて、「ロ、ヤ、その御心なら猶の事、生酔本性違はずと、下世話にいへど死人同然、酔ひの醒めたるを

のうへで、仕樣はさま〴〵。」△「フウ、して同心せぬその時は、こゝに此の頭うたせた新みの刀、試し物にはよい肉あひ。エヽ面白い〳〵。委細はあれなる亭座敷、五郎きやれ」といひつけに、慈悲と情は

しらかみの、障子ひつたて入りにける。

唄「花におく露小笹の霰、涙の玉のはら〳〵と、こぼれし助いが戀の露、しんできまかいとしい故に、愚痴と知りつゝつい、いふ事が、きにあたるのは無理ぢやない、あゝほんにまゝならぬ

人目なければ海神は、おき廻りてやとりことに、二人の歎は戀の情、これは夫れにはひきかへて、君傾城と成りさがれども、心にしばしも忘れぬ忠義、心をつけてうかゞふ時節、今のはたしか宗郷殿と見た故に、醉うたふりして聞いてゐれば、げんざい兄ごを殺さうとは、いふもさうもない大惡人、此の事をやつと我が君樣へ申さうか、いや〳〵智勇すぐれし秀郷樣、これからいはずと能く御ぞんじ、なまじひ今奧へいて、人目にたゝば惡からう。どうかかうかの思案顏、奧は小うたのしめやかに、

唄「可愛をとことしめてねて、つい明けやすい秋の夜に、花に浮るゝ春の日は、どれが短う思ふぞえ、あゝほんにまゝならぬ

ひ「それはさうとおてんの行かぬは五郎殿、忠義無二のさむらひなりしが、敵にくみせし今の樣子、ハテわれもやつぱりけいりやくか、一善の惡意のたゝえぬか、取つてなげたる粋の、琴柱におつる鴈

かねる、ここ越路いそぐなれども、散るてふ花を春風の、こくうに吹くや尺八の、音色もすみて暮露吹いたる、様子ありげの虚無僧ひとり、切戸のそとにたゝずめば、物見だかきが里のくせ「それや虚無僧」と駆け出るしんざう「ハヽ此の子達とした事が、そは/\しやんなはしたないこと、と、叱るも同じ甲斐ら、籠に乗せし御ひねりの、神ならぬ身のたれぞとは、知らずさし出す海神か、うつむし顔を見てびつくり「ヤァお前は兄さん」「ヤ妹の小枝かしくて、逢ひ申すこと」と、天蓋取つて打通れば、海神はさしよつて「コレ兄さんお前は君の仰せを受け、彼の将門に「コレ」〇「サァそれ故の長の旅路、便りのないは聞きたか、帰らずんした沙汰もなく、爰に住まい此の姿、どうも合点が行きやんせぬこと、問へばほく/\うちうなづき、「一その不審もも尤もと、とくに帰国はなしたれど、朝敵征伐に心をくだしめ、おもは虚無僧、まつた斯く虚無僧と姿をかへしも、敵の間者をさぐらんため。又今宵わざわざ此のところへ来りしは、おとなりいつて頼みたきしさいもあり、今更いふには及ばねども、親父様も田原の御譜代。ふとした事より御勘気かうむり、浪々の身とおなりなされ、あげくれたはいてつひに御病死、父の家名がおこしたさ。三歳の娘をあづけ、女房を退きざりに、国を出でしも十とせあまり。それに義理ある兄の子ゆゑ、妹と言ひなし此のあふみおにつれきたり、貧苦にせまつて勤めほうこう。たゞれは格別つひには我が念願叶ひ、ふしぎにも召しかへされ、今は田原の執権しよく、大友

藏人兌抵と、いかめしき名をなのるも、是れみな主君秀郷公の御鴻恩、よも忘れてはゐやるまいな。」
○「これや兄さんのお言葉とも覺えませぬ、卑しい勤めはしてゐれど、心は武士の娘の小枝、それを忘れてよい物かいな」「オヽ、たれ聞いておちついた」と、庭に咲いたる櫻木の、枝をりとりてさし出し「イヤナニ妹、頼みといふは則ち此の花、ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ、な、とつくりと思案しめさ。最前あれにてちらりと聞けば、わが君是れにござある由、申しあぐべき事もあれば、奥へいて御目見え、後に／＼」といひすてて、心殘して入るあとに、とつおいつの思案顏、とけた樣でもとけかぬる、櫻の枝を打眺め、「散ること知らぬ常磐木より、盛り短き櫻木の、色香も深き此のひと枝、人は一代名は末代、忠義の爲には惜しまぬ命、散りて日出たき名を殘せと、兄さんの心のなぞ。さうぢや／＼」と思はずも、見やる此方の障子を細目、あけてさしだす宗郷が、顏見てびつくりたてきる障子、そ知らぬ顏でよろ／＼／＼「海神を一人置いて、皆の者はどこへいきやつた、それや手が惡い、ちどりや霞や、銚子杯持つておぢやつ」と、奥の騒ぎに手拍子を、うつゝたわいもないふりに、見せて一間に「入相の、鐘もひゞきて暮すぐる、智勇兼備の名將も、色と情の大敵は、防ぎかねたる藤太秀郷。今は浮名も立田屋が亭座敷に籠居して、鎧にかふる著ながし小袖。にしきの蒲團唐木の脇息、いう／＼ぜんとねぶりゐる。新造禿寄りあつまり、「さつきにから秀さんのあんまりなねぶ

りやう」「擽つておこそおやかいか」とたれよりはこよりよつて、顔をなでたがよいわいのう」とたれがよかろ」と立ちさわぎ、苦界で苦界知らぬのが、實に新造のとくぞかし。海神は一間を立ち出で、「此の子達とした事が、又こゝで騒いでか。もう秀さんのお目も覺めう、醉ひざめには渇くもの、お茶の用意をしておきや」と、詞の花のさくらすへ、釜のたぎりの松風や、耳に入りけん秀鄕は、すつくと立つて太刀おつとり、▲「おのれ變化逃さじ」と、驅け出せば新造が袂に縋つて「若しく秀さん、怖い夢でも見さんしたか」爰は立田屋の亭座敷。變化とやられけとやら、そんな物はゐやんせぬ」と、いはれてやうやう心つき、海神が顔うち眺め、手を叉いて悄然たり。○「ホヽヽ、秀さんとした事が、仰山なあの顔わいの。三日人にかたらねば、どのやうな惡い夢も、身にはさはりのないとやら。憂へを拂ふ玉はゝき、サア竹葉あがつて、御寢なれ」と、いはれてやうやう氣をとり直し、▲「秀鄕とも言はるゝ者が、女わらべじみたなんぞの樣に、おそはれて氣を失ひ、そなたの前もめんぼくないが、餘りと言へば不思議の夢」○「ハテもうよいわいな、すぎるみなりにと言ひはせぬ、よい程お前があがつたら、あとは私がすけやんせう」と、なみなみとつぐ杯を、ひと口のんで下におき、▲「あゝ此の肴ではもう飲めぬ、新造ども何であつさりした肴を、早く早く」とせり立つる、こなたの襖のかげよりも、「お肴拙者がさしあげん、まづしばらく」と聲かけて、しづしづ出づる藏人覺

抵。様子はしら木の三方に、無紋のかれしも腹切刀、うや／＼しくたづさへ出で、遙かさがつて兩手をつき、一先づもつてうるはしき、御尊顔を拜し、恐悦至極、と相陳ぶれば、秀郷寛々とうちながめ、▲「ホヽウ珍らしや藏人覚抵、酔ひざめに水上下、ひいやり腹に九寸五分、心をこめし此の肴、かたじけないと受けたいが、腹切る覚えがつふつない。一體おのれ何用あつて、遊興のばゝも顧みず、此のところへ何しにきた、さア夫れ聞かう」と怒りの顔色、藏人猶も身をへりくだり、「君海神とやらんが閑色になりませられ、晝夜をわかぬ御酒宴に、朝敵征伐の御出陣も、延び／＼に罷りなり、朝廷よりは日々の御催し、もだしがたく藏人が、おして推參いたせしは、是非とも君の御供して、罷り歸るかさもなくば」▲「此の秀郷に腹切れといふ事か」　コハ存じよらぬ御仰せ、二度諫めて身退くとは、毛唐人の汚い腸、君に仕へしその日より、親に放れ妻子をすて、命を塵芥よりも輕しとするこそ、大丈夫の日本魂、たとへば君の御不興受け、切腹致せと御意あるとも、此の場をさらぬ今での覺悟」と、ちつとも動ぜず座をしめしは、不敵にも又勇ましく、秀郷につこと打笑ひ「諫めをも用ゐぬ其の時は、面あてに腹きらうと、われや覺悟して參つたか、おもしろい、サ、サ、早く切れ」コレ新造ども狂言とは又ちがふ、本の腹きりよく見ておけ。是れを肴に一杯飲まん、海神つけ」とさかづきを、手に取上ぐれば、海神は、どうなる事かと氣もそゞろ、藏人涙をはら／＼と流し、　エお

情なき御詞、傾城のわれのなぐさみに切る腹は持ち申さず。かほど氣強き主人としらず、奉公なしたはわが誤り。エヽ是非もなき身のあり様。」と、悔み歎けばはつたと白眼み、▲「聞きたくもないよまひごと、此の扇にて藏人めを、打つて／＼うちすゑて、息のねとめい海神。」と、持つたる扇膝許へ、なげやり給へば猶悲しく、○「いえ／＼／＼何程君の仰せでも、此の事許りは許して。」と、託ち歎けば、▲「もうよい／＼、いやといはば秀郷が手を下して打擲せん、そこのけ女。」と立ち上がる。○「まあまあ待つて。」と止むる海神、▲「とめるは汝が打つ心か。」○「サアそれは。」▲「早く彼奴めが生面はれ、サア／＼／＼。」とせきたつ秀郷、○「はつ。」といへど現在の、兄をどうして打たれうぞ。」とあつて打たねば君の怒り、若し御手討になるよりは、討つが兄への孝行ぞと、心でをがんで丁々々、▲「やあ手緩い／＼、要を返して眉間を打て。」○「アイ。」▲「打て。」○「アイ、御諚でござるぞ藏人殿。」と、又振上げて丁々々、丁々はつしと打据ゑ／＼、打たるゝ人よりうつ苦しさ、扇の骨も砕くる思ひ、わつと許りに倒れふし、性體更になきゐたる。心地よげに藤太秀郷、▲「オヽよく打つたでかした／＼、面白うもない意見を聞き、あつたら醉ひが皆さめた。奥へいつて飲み直さう、新造禿海神をつれてゆけ。」と、泣きゐる者を無理やりに、引立て奥へ入り給ふ。後に藏人只一人、暫し思案にくれゐたる。時分はよしと藤次宗郷大竹五郎一間を立ち出で、「やあ藏人遊女風情におもてをぶたれ、われや武士が

實つたか、無念とは思はぬか」と、いはれて漸う顏をあげ「こは思ひがけなき宗鄕公、いつの間に此の處へこそ、兄秀鄕が不行跡、實否を正さん其の爲に、大竹五郎がお供して、最前よりの有樣は、あれにてとつくと見聞けたこと、御兩所の手前といひ、面目もなき此の場のしぎ、此の上のお構には、御かいしやくなさると詐りにて、刀逆手にとり直すを、ヤレまて藏人、死ぬる命を存へて、此の宗鄕に一味しやれ、一同一味とは、合點の行かぬは尤も／＼、宗鄕公には忠平與世と心を合はせ將門に內通なし、豫て謀叛の御企。かくいふ五郎もとくより同心、一廉面白し／＼、及ばずながら藏人あも、御連判の數にくはゝり、面をふまれた意趣がへし、秀鄕公の御首を コレ、す、早速の承引滿足なるぞ。こゝは道理、人目もあれば、委細は奥で申し聞かさん。五郎は一人あとにのこり、なほも萬事に心をつけよ、藏人うたれ」と立ちお出でなか、何思ひけん立ちとまり、これなうかうこと囁きて、藏人をおつたてやり、小隱りしたる小萩のかげ、樣子うかゞふ折こそあれ、儀にひと聞き合し、こけつまろびつ走け出る常陸、やれまて女と秀鄕が、むつとり太刀にて立ち出ずれば、大竹五郎つゝとより、「ヤレ何と御意に背いたお侍ぞねども、思ふ仲の思いきかへ、くせつの連れはしれたこと」お手討とはあまり御山、たとへいかしなを遊ばさうと、いつまで秀鄕につこと契ひ、一樣すければ不審な尤も。われ最前うたゝね爲したる夢のうち、昔田の橋を渡りしが、その丈二丈あまり

の大蛇、古木にひとしき角をふりたて、紅の舌をはき、我をのまんずその有様。シヤ何程のことあらんと、なほふみこえて渡りゆく。不思議や大蛇は美女と化し、又行く先へあらはれしを、よく〳〵見れば海神なり。あら心得ずと太刀ぬきかざし、みけんをめがけ斬りつけしと、思へばたちまち夢さめたり。是れ見よ此の太刀に血をひき、眉間に疵をかうむりしは、彼は變化に疑ひなし。されば正體をあらはすか、さなくば切つて捨てんずと、聞くより五郎も刀おつとり、面かくしする海神が、袖ひきのくれば秀郷が、言つしに違はぬみけんの疵、〽「さてこそ變化ござんなれ、いで大竹が太刀風に、變化の正體あらはして、手柄の程を見せんずと、太刀ぬきかざし海神が、眞向目がけ切り蒐れば、ぬけつくゞりつしらなみに、むらがる千鳥花の蝶、裾も袂もひら〳〵〳〵、ひらりとぬいだるうちかけに、白刃をまとふさそくのはやわざ。すはしれものと眼をくばり、弓手のかたにつめよる秀郷、馬手のかたには大竹五郎、手どりにせんとつつ立つたり。海神恐るゝけしきもなく、〇「さいぜん昔の夢のうち、怪しの姿あらはせしは、わが神變の不思議をもつて、君の武勇をためした上、頼みまゐらせ年來の、あたを討つべきわらはが願ひ、まあ一通り聞いてたべ」と、いふに秀郷大竹も、樣子あらんとひかへゐる。海神は座をあらため「妾實は人間ならず、中天竺無熱地善女龍王の、乙の姫にてあるぞかし。昔開化天皇のおんとき、不二のねがたと同じ夜に、湖水ひらけしその折から、此の近江にす

みかを穢し、下とせんよりも夢の間や、浮世のことはしらなみの、そこに住めども情なや、爰にとしふる蛇龍あり。よな／＼来つてわらはを苦しめ、まだ百年か二百年、辨へもなきいとし子を、取りくらはれしその時は、九萬九千の鱗もさか立ち、無念と思へど龍神より、遙かに神通まさりし變化、敵せんことも思ひもよらじ、疑惑の迷ひはたにだしと、龍女は恐るゝ人界へ、假に生を受けたるも、弓矢に達せし人に近づき、此の一大事を頼まんため、不便とおぼし我が子のあた、蜈蚣を退治し給はば、廣大無邊の御慈悲ぞと、涙と共に語りしは、ことわりせめて哀れなり。大竹五郎あざ笑ひ、「何此の近江に千年すむとも、千年は千年でも、點を落して苦界十年、ばけそくなひの龍女どの、必定汝は人に頼まれ、幻術にて奇怪をあらはし、だましよつてわが君を、討ちたてまつらん計略と、見た目はちつとも違ひはあるまい、サア尋常に白状せよ、いかに／＼とつめよする。「ヤアこなさまそ五郎、かしこくもわが朝にては、地神四代、彦火々出見尊、龍女と契つてひのみこをまうけ給ひ、唐土にては黄帝の、時にあたつて仙西の馬師皇、龍の病を治したるためし、ためしなきともいひがたく、彼を以て是れを見れば、怪しとするにたらず。いかに女、汝實の龍女にて、千年湖水に住居をなさば、鳰照の名所古跡、里數もおほよそ知りつらん、語れ聞かん」と、いひはなせば、すんど立つて海神は、岩うつ波の響き、屛風、正面にひき廻し、まはりおふ薬鑑に、二面の琴、打ちかけて座になほり、「あれ

御覧ぜや橋のおくに番付たる、二面の琴ならぶれば、ともなほさす勢田の橋、左は大橋九十六けん、ここ十三けんの小橋は十三、琴風に靡きし浪はみなうみ、銀のすなごは螢だに、また早咲の卯花を咲にうつせしは比良の高根、衣新にかけし鏡山の、匂ひの横は志賀の花園。▲「まだ、逢坂の関、あらまし見ゆる湖水の地理、四明が嶽は西か東か。」○「比良より南勢田の西、則ち比叡の絶頂にて、愛宕は逆圖に。」▲「白鳥居や三井寺は。」○「いかん鐘かけし瓦燈口。」□「オ、これまでは違ひはない、して又勢田の橋の異名は。」○「されこそ我が住所ぞとよ、勢田の長橋から橋や、名は唐までも響きし、橋上もなつけしぞへと、湖の水の流るれば、又青柳の橋ともよぶ。」▲「湖水の廣さは。」○「南北十十里、東西をはさこ七八里、又は四五里の處も有り、廻りは六十餘里といへり。」□「我が恐るゝ變化の棲家はの、かれかの鏡臺の鏡山、石に當つて一つの高山、三上山とも神山とも、名にはいへどもとてならぬ、變化は樓臺に隠所よ。」▲「してく汝は。」○「妾は勢田の水底に、金輪王の都あり。瑠璃の瓊殿を階とし、水晶りんは砂とみだれ、宮殿樓閣たちつゞき、虹のかけはし紫雲の廻廊、夏は涼風冬は暖風、風々せんと吹き來り、樂しみつきせぬすみかなれども、あさましやかなしやな、夜もすでに更けゆけて、宮に艫櫓の音もなく、道をゆく浪もねぶる比、三上の山に黒雲あらはれ、勢田の橋に打ちおほひ、百足不思議の妖怪なれば、忽ち波に潜りいり、われく眷屬を取り喰らふこと數

を知らす、こよひかしこに赴きて、雲のおほふを合圖とし、仇を亡ぼし給はれ。」と、思ひこうでぞ頼みける。藤太秀郷勇み立ち、▲「鬼にもせよ蛇にもせよ、武士と見かけて頼むとあれば、いうよせんな武門の名をれ。五郎は是れより立ちかへり、鎧腹巻弓箭、取揃へてはや來れ、われはすぐさま勢田におもむき、弓勢の程見すべし。」と、太刀おつ取つてつつ立つたり。さてこそ末世に至るまで、龍女に頼まれ秀郷が、年經る蜈蚣を射とめしと、いひ傳へしも理なり。海神歡喜踊躍のあり様、◯「す、いさぎよし秀郷殿、變化を首尾よく退治して、わが住む都に來り給へ。錦の巻物米のたはら、奇代の釣鐘名譽の太刀、あまたのたからを參らせん。あゝ喜ばしや嬉しや。」と、扇をあげて舞ひかなで、蹴かへす下著のかくしうら、紅かへつて體より、火焔を出すが如くにて、髯のしやらどけ尾つゝとさき、髪のかざりの玳瑁や、十二の角をふり立て／＼行きつ戻りつ／＼と、さつと吹きくる小夜あらし、袂に受けて飄々と、微妙の淨音あざやかに、いざさせ給へとゆふなみの、ひきはかへさじ武士の、矢ばせのわたり名も高き、勢田の橋へと走り行く。あとに大竹夢見しこゝろ、只茫然とあきれるる。一間の内より立ち出る宗鄕、◯「コレ／＼五郎どの。」□「ヤァあなたは宗鄕様。」◯「す、立ち歸つたる様にもてなし、様子は殘らずあれにてきく。こゝろえざる女がふるまひ、汝は後をぼつかけて、様子をとくと見屆けよ。」□「然らば拙者は勢田の橋へ。」◯「早う行け。」□「ハッ跡を慕うて。」

勢田橋龍女の本地 下

作者　柳亭種彦

三段目

たれし鏡中如像と佛もとき、心は鏡の臺とかや、されば秀郷の奥がた司の前、賢言のおかげさひて、所存心も深みどり、松の操もいつしかに、變ればかはる飛鳥川、流れにおふる杜若、ゆかりの色にねたられし、夫を恨み身を慢み、うらみ／＼をかさねつゝ、八重の汐路のうすぐもり、思ひに胸もはれざりしが、一昨夜かゞみの宿より、海神といふ遊女をいざなひ、秀郷の行方しれずとて注進櫛のはをひくが如く、館のさうどう大かたならず、司の前をはじめとして秀郷弟藤次宗郷藤六友郷、執權大友黨人元抵なんど、大書院に相詰むれば、其のほか家中の諸士、詰所々々によりつどひ、評議に時をぞ移しける。襖障子の襖もひらけばさとかをる、姿美しき玉の非姫、しとやかにひと間を立ち出でゝ、いかなることにや此のほどより父上の御旅寐、おまつさへお行方しれず、母様にもさぞお案じなしたか

いつもの御酒きけんで、晝は花の下に暮し、夜はおぼろなる月にめで、漫行に何となく、館に歸り給はねならん、おきもじお痛の遊ばすな」と、胸の案じを慰むる、心の中こそ優しけれ。司の前は室うそぶき「何といやるぞ玉の井、おぼろ月夜にうかるゝとは、色好みのなぞ／＼か、てゝごのきしやう受けついでは、こなたもみくな身もちおやめるまい。嫌こそおすまねわ、が嬢、色ぐるひは成りませぬ」「いつそやもあおいなふみ、給うて持つてゐるはずゐ」と、一寸いふにも詞にはり、眞綿でつゝむ藤次宗綱、「ヤヤハヽヽ與のこめた兒の行せき、四十に近いものが、うつゝを拔かして里通ひ、其れさへあるにはいへなうなう行きしは、どんな此のがないせんさく」「サレバ／＼宗綱殿のいはるゝ通り、なんぼ總領なればとて、うつけ者の秀綱に、此の田原の家をと」「サ預けてあくゝも危な物じ」「いかにも御兩所の御詞の如く、藏人あも御はうらつを深く歎き、御諫言申せしに、思ひの外の御立ぶく、逆なふぜいにおもてたぶれけ、主人ながらも見限りはて、御兩所にいちみの、イヤいちぶん立てて給はれと、御願ひ申せし上は、奥方へおとなしに一ナ、その氣遣ひむよう／＼、女でこそあれ誰あらう、忠平公の息女なれば、田原の家はねかさうと起さうと、姉上の心任せ」「サ、さうとも／＼、いま友綱がいふ通り、きつとした世とゐもあれば、兄秀綱が家出したを幸ひに、どうかしやうもありそなもの」と、おのが悪事をぬりかくす、壁訴訟こそうたてけれ。司の前は思慮もなく、「げんにそれ／＼宗綱

紳殿友紳殿、斯くに生ずる上からは、いそぎ此の由禁庭へ申しあげ、何れなりとも家督とさだめ、かぎあの参内し給へ」と、聞くにかなしき玉の井ひめ、「母様のおつしやること、いか／＼御なりはなけれども、父上は龍女に頼まれ、蜈蚣退治に行き給ふと、かぜの便りに聞いた許り、いま歸り給ふもしれじ、家督定めはまあ〳〵」と、御待ち給へば藏人定擬、姫君の御意の通り、男使は人目だてば、大竹左郎が女房に申しつけ、鏡の宿に遣はしたれば、もはや戻るに間もあるまじ」と、いふ間ほどなく大竹が、虎の小笹は愛敬を、露とこぼして御所ふうの、髱の香にほふ梅がかや、薄紬の腰元に、半琴もたせしとやかに、御前はるかにかしこまり、藏人殿の内意を受け、かゞみの宿に立おこえ、ことのしだいをたづねしに、世上のうはさにちがひなく、龍女の化身遊女となり、わが君様の武勇を見こみ、蜈蚣たいぢの大事をたのみ、勢田の橋におもむき給ひ、夫れよりはお行方しれず、あとに殘りし物とては、唐橋の琴一めん。一めんをこひうけて、即ちこれにもたしたり。御かたみとも見給へ」と語るを聞きて顔見合はせ、人々はしたりがほ、玉の井姫は涙ながら、「いかに智勇すぐれたる父上におはせばとて、龍神さへおそ恐るゝ、化生の物に出であひて、若しおけがばしし給ひしか、戀しのとと様、なつかしの父上や」と、かたみの琴をだきかゝへ、わつとばかりに泣き給へば、「おだうりでござやつ」といたはる小笹、藏人もともなく／＼に、やう／＼なだめ参らせて、ひと間の内へ入りにける。あと

に二人鼻つき合はせ、なほこりずまの物だくみ、ひそ〳〵語らふ折こそあれ、息をきつて大竹五郎庭さきに兩手をつき「御注進。」とよばはれば、「ナニ、注進とはきづかひなり、いかに〳〵」とせきたつ御臺、兩人も刀おつとり、樣子いかにと聞きゐたる。「さしも藤太秀鄕公海神の言葉にしたがひ、としふる蜈蚣を退治せんと、小具足に身をかため、あかぢの錦の直垂の、四ツのくゝりを程よくよせさせ、せなしぢに龍虎の雙の小手、白檀みがきの臑當して、握り太なる弓たばさみ、箙高に征矢おひなし、せたの橋いた踏みならし、いまや〳〵と待つところに、三上やまのかたよりも、黒雲ひとむらうちおほひ、數千のたいまつ二行につらなり、湖水をめがけ舞ひ下る。これなんありと秀鄕公、五人ばりに十五そく、忘るゝばかりひきしぼり、よつぴきへうどはなち給へど、鐵に當るが如く、筈を返して矢柄も碎け、化生のものにはたたざりけり。「エヽ、射そんぜしか口をしや。」と、蜻蛉むすびひきほどき、上ざしのかぶら矢とり出し、矢のねに唾をふきかけて、同じ矢つぼを射たりしかば、さしもの變化もたまりえず、震動雷電すさまじく、のたうち廻つて死してんげり。」「フウして又化生の形を見しや。」「さん候程なく雲晴れて風をさまり、たいまつ照らして見てあれば、實にや龍女のいつしに違はず、變化はとしふる蜈蚣にて、二行に連なるたいまつは、彼が足より出せるひかり。」「シテ〳〵夫の行方はいかに。」「ハア龍女は歡喜のありさまにて、「年來の仇ほろびしうへは、心安しとゆふ波の、底にい

きなひ参らせん」いざさせ給へ」と打連れて、歩めば波も陸地の如く、折から風あれ篝も蔽ひ。つひには昔の御すがた、見失ひたてまつる」と、息つぎあへずうつたふれば、兩人ぞく／＼こゝをどりなし「かねて頼みし松羅陳人、様子いかにと案ぜしに、これ皆かれが幻術にて、兄きをいつはりあたみづうみ、龍宮へ行きもせまい、いまごろは水ぶくれ」「こゝろよし／＼」と、勇みいだせし司の前、「わらはとても秀郷が仁義だてにあきはてしが、行方の知れぬも一つの幸ひ、父のやかたへ言ひ遣はし、やがてみやこを攻め亡ぼし、四海を握るはまたゝく中」と、につこと笑うて立つたるは、ふてきにも又恐ろしく、兩人は座をたちあがり、「ホヽ、でかしたり大竹五郎、秀郷此の土にあらざるには、近々に旗上げせん、ゐさいはあれなる亭ざしき、はや／＼來れ」と打連れて、いつさ／＼と入りにける。聞くにたへかね臣の非道、ふすまおしあけまろび出で、母のもすそに取りすがり「様子は殘らず聞きました。エヽきよくもなや情なしや。蜈蚣のはらよりお前の鉢、さしてそれぞとしらなみの、そこのみくづとなり給ふ。父上かへせと〻樣もどせ」と狂氣の如く、花のかんばせ上氣して、夕日にてらす緋櫻や、ほらつくもすそに風立ちて、涙の雨のよこしぶき、かよわき腕は絲やなぎ、ひけど拂へどいつかないかな、よれつもつれつつきまとふ。司の前くわつとせきたち「エヽ、聞きたくもない恨みごと。まゝしき世とあなどりて、あることないこと讒奏し、わらはにはぢを與へんとや。これ此の文

はそなたより、誰やらへ遣つたふみ、とくに拾ひておきたるが、佛心のわらは故、今までなんとも言はなんだ。サアそつちからも儘こそ言はば、こつちも不義のせんぎをしようか、何と／＼」と詰めよするに、玉の井筵もつともおくせず「そのふみは言ひかけの貞武様へ遣つたなりや、不義といふでもござんせぬ。おまへにせんぎはまあ頼まぬ。ふぎの咎よりおまへこそ、夫をのろふ大罪人、松羅とやらいふ恐ろしい魔術を使ふものを頼み」といふ口袖にてちやつと押へ、一す、それ知られてはもうこれまで、生けては置かぬくわんねんせよ」と、ふところ刀ひつさばき、かけより給ふを女房たち、「こははしたなし消く」と、ひきとどむるやふりきり／＼ひき放し、ひらめく刃はさえわたる月、雲のびんづらはつと亂れ、怒れる兩眼星のごとく、實にや内心如夜叉ごと、佛の説きしもことわりなり。「サア母様父上にお別れ申し、あぢきなき世をかこち、剃髪染衣の身とならんと、かねてかくこの北の丘の井、すつぱりと遊ばせ」と、氷のやいば雪のはだ、消ゆるを惜しまぬ覺悟のてい、「ます、よい覺悟」と立ちよる御臺、すでに危きその所へ、藏人あわてて走り出で、「先づしばらく」と止むれば、「ナフなんぢは秀總殿を見限り、今日より身方につくといつしが、寂なかばふは二心か」「イヤ全くさにあらず、御手にかけて討ち給はば、ままこ憎みなんどとて、世の人口にかかるは定。それよりは拙者あが堅田のうらに御供し、人知らず、なう、なう」と扇でひざを打つ／＼、と、討つを知らするまでしたを悟り、一す、

料簡しにくいところなれど、藏人がことばに免じ、このたびは助けてやる程に、どこへなりとも出て失せうせいと、あたりを睨んでいふ／＼と、ふすまおしあけ入り給ふ。下の井姫は泣く／＼も、縁より下へなりもよく、下部がかき出す乘物に、しを／＼として乘り給へば、小笹はひと間はしり出で「ゑるさいはあれにて聞きました、御庭の中のおひあひさへ、やれおひがさよお手とれよと、あまたの女中つきそひしに、今日おやかたをいで給はば、いかなる物か傅かん。あのまゝ、國の情でらしい、ようも／＼むごたらしう、出て失せうとは言ひをつたぞ。月もる家は愚かのこと、とらふす野べの末までも、此の小笹がお供して、彼のおかたに逢はせますぞ。お心つよう思召せ」と、力をつけつ、「御氣に入りのいつもの手箱、ふうしの御硯持つておおやれ」と、腰元に持ち運ばせ、半琴までもとり揃へ、おかごの中へ入用の、品をかぞへてかひ／＼しき、心をふびんと藏人も、暫し涙にくれたるが、かくてははてじと下りたちて、小笹が襟がみ取つて突きのけ、「ヤア拙者の惜しみ受け、御首討つべき主の井姫、御供は思ひもよらず」と、いふを聞くよりきもはんらん、「イヤ／＼／＼此の小笹が居る中は、なんぼでも姫君を討たする事はまかならぬ」と、すつくと立つて乘物の、棒ばな摑んで突き戻せば、「こしやくな女」とひき退くる、又むさぶりつく一生懸命、出あひがしらに大竹五郎、女房をはつたと白眼み、「いらざる女のさしで口、たしなみをらう」と叱りつけ、「ヤア藏人われや新參の敵役、見ご

と姫の御首うつかと」「ム、打つとも／＼」ニ「己が姫を討つ心はわれはよく知つて居ようがと」ニソリヤいふまでもない、我に姫を討たせにやるおれが心もしつて居ようがと」「ヤ、知つたとも／＼」ニしつたしたく踏み出す、かごの足なみ七種なづな、唐土の鳥の口まねや、おうむ返しを聞きとりて、少しは小笹があんどの思ひ、名をとる鶏と日本の鳥、渡らぬ先にあはせたる、智者と勇者が駒と駒、堅田の浦へと二重「行く空の名所を一つへらして歸る駕、堅田の浦の辻堂に、作りかけたる非人ごや、竹のはしらも世にさげて、己がきまゝにおひ茂る、松の木だちにならぶ、若木の櫻咲きみちて、今をさかりと香に匂ふ、八重九重やみやこにも、住みなれし身ははぢもせぬ、芝生のしとねこものたど、浦風のみや訪るゝと、あるじと見えて乞人の老女、怪しの衣身にまとひ、きぬたにもたれうたゝねに、飛びかふ蝶もおのづから、花に夢魂や遊ぶらんと、かたへの松の枝騒ぐ、鳥の羽音に眠りさまし、諸鳥のねぐら求むる聲するは、日暮もちかくなりやしつらん、思ひまはせばわが身ほど、世にあぢきなき者はなし、行方の知れぬ我が夫に、めぐり逢ひたいばつかりに、いとし可愛いの娘も、乞食非人となりさがり、辛い悲しいうきとし月、ゆびをりかぞへて十三年、夢にも便りのないことは、若しやすぎゆき給ひしかと、かひなきことをくどき泣き、聲も惜しまずむせびいる。折からあたりの百姓二人、ぼたうもちまうしもどりがけ、老女がまへに立ちとまり「イヤサ、地藏堂の非人のかゝさん、小

よしはまだしらんかいのと、いふこゑ聞きて涙をかくし「さう言はしやるは太郎作様か、あの小よしはいつものやうに、街道へ貰ひにいたれば、もう戻るに間もあるまい、火うちばこも爰にある、いつぶくなとて行かしやれのと、いへば太郎作うちうなづき「今更いふではなけれども、こゝなこよしの器量のよさ、ナア／＼左作よ」「さればいやい、娘を女房におこしたら、こなんまでも引きとつて、御隠居様にしておこと、いふ人も澤山あるげな。たれに又かはいさうに、袖乞さすとはいな物ずき。」と、笑へば老女もうちほゝゑみ、「ふつゝかな娘の小よし、そのやうに言うて下さるは、身にあまつてお嬉しいこと。したがわたしも元は武士の妻、あの小よしが三ツのはる、わけあつて夫は家出、今においての（ゆ）くへ知れず、わたし許りの子でもなし、とゝごに廻り逢ふまでは、どうもよめりがさせにくいこと、」聞いて二人はよこでを打ち、夫れで様子ががらりと知れた、武士の娘程あつて、先ヅ第一が親孝行、つまはづれのじんじやうさ、瓜のつるになすびはならぬ、イヤそのなすで思ひ出した、苗ふせたせにの畠、歸つていつぺん見まはろかし「これ／＼太郎作、かゝさんがいまいうたふつゝかとは、なんのこつちやい。はて知れた事、ありや孝行の大和ことばい、おらが娘もふつゝかにしたいものぢやにと打笑ひ、わが家／＼へ立ちかへる、身に襤褸心に錦きゞすなく、野道細道とつかはと、春のひあしもせはしなく、いそ／＼歸る娘の小よし、かた手に德利やれ傘、身なり構はぬ孝行もの、かゝさんいま戻り

ましたの。「オ、わがみはもう戻りやつたか」「さればいな、今日は日和のよいお蔭で、おあしもたんと貰うた故、お前のすきなしやうが酒、拵へておかうと思うて、酒もこなから買うて来たこと、さし出せば源五兵衛、なんのまあ心づかひおいてたも。ともしはもの云はぬ身をもつて、夜は夜露に濡ぎぬた、昼はゆききの袖にすがり、いつせん二せんの手のうちを、貰うて此の身をはごくむに、ほんに我が子と思やせぬ、日頃信ずる観音様、我が子と生まれ給ふかと、拝んで使つかゐるわいなう」「いかなる前世の報いにて、此の世からなる畜生道、死ぬに死なれぬ身の因果、こらへてやいのことゝ縋り、なけけば小よしもともに涙、泣く聲もろとも鶉衣、哀れに秋や来るらん。小よしはわざと笑ひを催し「オヽ、、、、何のまあ、さうしたことが、他人がましいわが子に禮、浮世はめぐるくるまの輪、又よい事のあるは定、とゝさんにめぐり逢ひ、元の武士に立ち歸り、お前に習うた琴三味線、こしもと集めてつれ帰る、やがてお聞かせ申しませう。涼風がお身にあたらば、御持病のおしやく〳〵の毒。酒の肴の出来るまで、暫しお休みなされ」と、いへどしなく〳〵あなしどり、奥の一間を枕屏、衝立押しあけて入りにける。今をかぎり来るは田原の穢多穢人党扱、案内と見えて最前の吉蔵、ひとの先にたて、善悪邪正の別れ道、立ち止まれば太郎作は、手をもおそ〳〵と小腰をかゞめ、「お尋ねの非人の娘、あの小家が即ち住所」と、いへば穢人うちうなづき、「わいらが道々いふにたがはず、親孝行できやうも

よく、年もたしか、二八か十六七でもござりましよ。」「よし／＼最早用事はおりない體に、かつてし
だいに立ち歸り、此の事かならず他言いたすな。」ソレたうざのはうび」となげやる小判に、びつくりお
れいもなく／＼に、言はぬ色なる山吹を、押しいたゞいて立ち歸る。藏人は手をこまぬき、とつお
いつの胸算用、深き思案や有明の、櫻がもとに立ちよりて、イヤサ二非人物くれうことゝ、言ふ聲もれ
て鷹だれの、雲間を出づる月の眉、貴妃や西施が俤も、うつろふ顏に引きかへて、身はつき／＼の
ほりつきぬこゝと返事もあいさやうの、藍の色もつあさがほや、ひかけよつまとしらずなに、御
はうしやなされ」と下をつければ、藏人つく／＼うちまもり、天晴國のかたみの縁といふとも、恥かしか
らぬ顏かたち、「コリヤ娘そちは母に孝行とな、そのうはさ近鄰に隱れなく、わざ／＼尋ね來りしは、
樣子によつて親子ともかゝへてくれんそれがし存念、いかなることにて斯く浪々、さぞござらうとは
なりたること」と、問はれて小よしは顏をあげ、「どなたかはしらねども、お慈悲深いそのお尋ね、お話し
申すも涙のたね、わたしが三ツの春とやら、とゝ樣には生きわかれ、かゝさんも内障のやまひ、問ひ
だんがふの人もなく、せん方なさに旅人の、袂に縋しつけて「なが／＼の母の病氣、どうぞ一錢御
合力」と、言へども備しら宵の、小笹かたぶけ行くもあり、人の軒ばに佇めば、うるさいこじきめ又
うせた、此の頃見えぬはきものも、あやつであらうと此の身には、露しらなみにぬれぎぬの、惡名受

くるもどうぞして、眼がいの見えぬ母様に、苦勞かけまい聞かせまいと、辛い悲しいうき年月、やうやう永らへて居る中に、さる醫しや樣の話には、眞珠とかいふ藥、金はたんと出るけれど、ひとまはり程用ゐたら、眼病もなほらうと、聞いたばかりで心には、任せぬのみか朝夕の、けぶりも細き親子が貧苦、哀れと思し給はれ」と、思はずわつとなげきしが、やうやうに顔を上げ「あのまあ私としたことが、ついおことばにほだされて、おはもじい身のさんげ、御許されて」とあといひさし、袖うち掩ふぞ傷ましけれ。藏人も目をしばたゝき「寶にや泥中の蓮砂に交るこがねとやらん、聞きしにまさるお事が孝心、感ずるに餘りあり、たとひ千金萬金でも、いとはず眼びやう療治なし、一生扶助してとらせんが、餘儀ない汝に無心がある、聞いてくれるかコリヤ娘」と、うら問ひかゝれば「ホヽヽ、改まつた事おつしやります」「かゝさんの病氣もなほり、老いらくにさへなることなら、御刀の試しもの、たとひ命の御用でも、なんのいなと申しましよ」と、蟲が知らせて言ふぞとは、我も知らぬおかはいやと、思へば胸までせぐりくる、涙のみこみ藏人は「おゝよい覺悟」と物をもいはず、刀四五寸拔きかくれば、はつと驚き有りあふ硯、こだてに取つてちやつと飛び退き「ヤ、、、、待つて下さりませ、樣子も言はず殺さうとは、おさむらひには似合はぬ御ひけふ」女ながらも武士の娘、品によつたらおあひてにこと、卷衣取つてきつとの身構へ、藏人につことうち笑みて、小ひざをいれて斜

にならへ、陰陽をあこし體のかため「ホヽ心がけあつぱれ／＼、心せくまゝ樣子も語らず、即衛なしては我が與り、それがしこそは當國の國守、田原藤太秀郷が家來、大友藏人定祇といふもの、御臺所の御心がたましく、下世話にいふ囃子にくれ、わうかなおなごをいひたてに、正の手を此の浦にて、殺害せよとの御仰せ、討てとあるも討つべきも、僞りおとらぬ御主と御主、御首實檢し給ふとも、女性の事なりよもや身近くはよせられまじ。なんぢが首を龍と詐り、渡かぜなく此の場を納め、折を見やはせいはなだめ參らせんと、思ひついたがその身の不運、斷く大事を語る上は、いやでもおうでも命に替ふ。覺悟せよ」と拔き放す、白刃の下に座をしめて、「事をわけての今のお頼み、かゝさんさへ大事にかけ、はごくんで下さるなら、命をも上げませうと、「わたしが口から言うた上は、ひけふ未練な心はない。したが日毎讀誦の普門品、讀み終るその中には、かゝさんのめも覺めう程に、しばしの命助けてたべ」と、健氣なことばに藏人は、刀をさやに納めても、納まらぬ胸なでおろせば、小よしは立つて反古張の手箱より出す普門品、きぬたの上に繰り廣げ、心靜かにねんじゆなす。藏人はひとりごと、「御何にことわけ言ふとても、往生づくりのなぶり斬り、跡方もなき空言と、思はれんも後めたし。老母がいたはるそのしようこ、姫君に御めみえ、とめて未來は心よく、成佛せよ」と辭臺い、「御輿參れ」と、よばはれば、はつと答へてしと／＼／＼、足なみ揃ふ四枚がた、露のべう打つ乘

物を、程よきところにかきすうれば、家来を遠ざけ手づから「これこそ卿かたたの浦、幸ひ婆の花盛り、比良のたかねに残んの雪、暫しあひだ御遊覧ことと、宝物の戸をひき開くれば、ささうらぶれたるおもしろや、思ひの風に花ちりて、錦は涙の玉の井姫しみ／＼とたち出で給ひ「ナウ蔵人言ひたきことは数々なれど、胸に余つて口へは出ぬ、一生の思出に、かのおかにたつた一日、もそれも叶はぬ事ならば、ついひと思ひに殺して」と、かこち給へば頭をさげ、「ハ存じよらざる御仰せ、たとひ御薬の命なりとて、君の御首給はるべき蔵人が心にあらず。ヤヤこれなる賤しき賤の女ながら、母に孝心篤き者、恐れながらお言葉を」と、申しあぐれば玉の井姫、暫し涙にくれさせ給ひ、「ヤヤナウそもじは母に孝行とや、世が世のときであらうなら、こしもとにも召抱へ、その孝心を見習うたら、なんぼまゝしいはゝ様でも、殺せとまでの憎しみは、よもこの身にはあるまいに、苦しい身の世渡りも、親子苦労を共にする、苦労がけつく羨ましい、教へてやいの」としどもなく、手をとりかはし泣き給へば、小ふじも共に御涙に、絞る袂はつゞれとにしき、心は劣らぬはなもみぢ、何れながめや優るらん。やゝあつて涙をとゞめ「御前様としたことが、勿体ない事おつしやります。何か様子は存じませねど、上つ方より下さままで、憂い辛いはある習ひ、御心痛め遊ばさずと、あれ／＼向ふは名にし浮御堂、かすみがくれに間野のいり江、御歌なりと遊ばされませ」と、蔵人も共々に、料紙御

すゞり御たばこぼん、それおしとねと心きゝ、しけばすみれの紫に、二つ重ねし如くなり。扨は砧かうち見やり、「まくら几帳のかたおしして、おせたれかけしその上に、佛經をひらきしは、いかなる器」と問ひ給へば「これこそは砧と申し、暖がたつきに打てるもの、御見なれざるも御一興」と、差出すを手にとりあげ「小夜ぎぬたと歌にはよみ、六玉川の屏風にも、畫いてあれど見るは初め、唐にては宮中に、蠶をかひしためしもあり、しづの女の手わざまで、をなごはしらで叶はぬ事」殊には母に孝行な、そなたの心にあやかるため、此の砧の打ちやうを、教へてたべ」と宣へば、小よしはなほもふしやくして「ゑやうがない御言葉、此のつちを斯うもつて、まきかへし／＼、打つより外の傳じゆはない」夫れよりは御前樣、きつきちよつと見うけました、御駕籠のうちのおまくら琴、鳥も驚く御しらべを、聞かまほしや」とほのめけば、姫も悲しさうち忘れ「今のそなたの言葉のはし／＼、よほりや心がけあると見ゆる、唐橋と名をつけて、自らが父のかたみ、氣にいらずとも一曲、さあ／＼所望」と勸められ、小よしは答へもあからむ顔「ひよんなこと申し出し、みさきなき調べを姫君に、お聞かせ申すもおはもじい」「ただ御辭退申すもぶれいとやら、御許されて」と玉琴を、おめずおくせずひきよする。藏人は最前より、何思ひけんもくねんと、物をもいはずゐたりしが、つんと立つて「すすそれよ。砧は玉の聲ともいふ、はなをもよほす鞨鼓のしゆかう、琵琶湖の浪に和琴の合奏、時にと

つて面白し、コリヤ娘その玉琴のを、な、玉の緒も、いつ何時切れうも知れぬ。よく心えて。」とよそながら、最期をかれに知らすとは、姫はしら布まきかへし、錦のしとねにそぐはぬきぬた、おしろのうへに玉琴の、ねいろ優しくしらべける。

歌「たそや此の夜中にさいたる門を叩くは、峯のあらしか、松風か、叩くともよも明けじ、ひらく花のあだなれば。

鄙に似氣なきつまおとを、帖にもたれ聞き居る姫君、藏人は此の閒に、不便ながらも首討つて、主人の命助けんと、義心にこつてもしかすがに、まだおひさきある愛盛り、何くへやいばがあてられう、かはいの者やと刀もぬまり、心にねたばあひかぬる。調子直して、

歌「吹く風を、たれかはあだと言ひそめし、君が衣の香軒の梅、はな橘の薫をも、風が傳へてうれしとまうす、門の青柳あらひ髮、しほやにたてる煙をも、風が靡けていとしとまうす。

うたふを聞けば、おぼえの唱歌、藏人はつと驚愕なし、若しや女房もろ共に、すておきし我が娘かと、思つて見ればをさな顏、殘つたやうなも心の迷ひか、但しは定かと心も空。琴のねいろに夢さめて、とぼ〳〵出づる小よしが母、思はず見やる面ざしは、やつれはつれど女房小その、襤褸に殘る家のもん。「さては娘か我が妻か。」と、言はんとせしがいや〳〵、なまじひ親子の名のりせば、反つてな

けさを重ねる道理と、涙のみ込み顔をそむけ、思ひなほせどなほされぬ、娘ははやがね入相の、かねこうこうと音さえて、湖水にあらく〳〵散る嵐、眺むる様にぞ知らぬふぜいにて様子知られば、そのあとを、「ま〳〵早く」と下さるゝお姫、母もそれとは露しらず「そなたはどうして琴ひきやらぬ」と、小よしがそばへ立ちよれば、「サヽ此の国の御姫様、殿様のおかへりまで、ふとした事がお耳に止まり、琴ひけとおつしやるゆゑ、お笑ひ草に今のしらべ、若しや琴が御意に叶ひ、御ほうこうにあがつたら、お前にもあつたには逢はれまい。ずゐぶんともにおたつしやで、われらはねやうにしやさんせ」ナヽあの子とした事が、死んでも行く様に、それがなんの泣くことぞ、歌うたふもなかなか訛り。どうして御意にいりやしよまいぞ、神仏のお恵みで、御ほうこうに出やるならば、わしも嬉しうて〳〵、なりやせまい。「御さむらひ衆侍女衆、みな御苦労に存じます、御茶あげたうても埴生のこや、落葉たくたるかけせぬ、恥かしうござります」と、子故の愛想つるしよう日、ほた〳〵、母は喜び顔、見るに小よしは身もよもあられず、殿人も忍び泣き、姫は袖をおしやり給ひ、「イヤモウ驚きいつた琴のしゆれん、そなたの仕込みが感じいる」と、「これは〳〵あり難い御言葉、十二三の頃までは、よう〳〵琴も教へましたが、御覧の通り親子が浪々、唐人が琴をたき、水鶏をにるの戯れも、わが身の上に知らぬ火の、つくし琴さへいつしかに、たきゞの代にうりなしてこの一つ〳〵かゝされ、

歌「いはでよい事ついいひ出して、それがくぜつの種となり、ひぞり／＼て宵申とせなかた、暁のかねとりの聲、あふはわかれのはじめといへど、

かゝさん逢ふは別れの初めとは、よういうたおやないかいな。十六年がその間、かたときもおまへのそばを、離れたことはなけれども、いつ別れうも知れぬが浮世、たとへわたしが死んだとて、これまでの命と諦め、必ず泣いて下さんすな」と此の子としたことが久なきやるか、ト、ト、ト、

歌「ついいまさらになけかれて、

わけもないことかなしいは、皆かんしやくの蟲のせゐ」かゝさん何の泣きやせぬに、

歌「なくは啼いてもあのや、背なきに、しやうじ漏る日を屛風でかくし」

「いかさまな、娘が母にいふに違はず、會者定離とは佛もとき、あいは別るゝ世のならひ、生き別れした父もありと、きいぜんそちが身共に語、今まで有所の知れざるは、はや亡き人となつつらん、よしんばめぐり逢ふとても、親子の名のりするやせず、別れになるならぬ辭宜となられ、悲しさ辛さは百層倍、逢はぬも却つてましたならめ」ト、我が身の上をふそながら、言ふとは小よしに氣もつかず、娘は頭に聲くもり「わたしはとても父上の、御行方はしらぬゆゑ、そこにとはかの闇くはかなさ、死んで逢はれる事ならば、殺してやいのと口說き泣き、様子知らねばかよしが隣にひきくゝぶるは不憫

ないが、御姫様と娘の小よし、おほかたとしもいつつゐの御聲なら、ヤレ死なうの殺せいとは、むだ事にも言はぬもの、眼こそ見えね此の婆も、まだ二十年や三十年、死ぬこつちやござりませぬ。」と、いへば藏人頭をふり、「イヤそれは心えたがへ、コリヤ娘あれを見よ、湖水に散り浮く櫻花、色なき花はこずゑに殘り、蕾が散るは老少不定、蕾を散らしてそのあとへ、殘る親木の心のうち、悲しいとも切ないとも、いふにいはれぬ苦しさは、マ、、、、どのやうであらうぞやい。なんぢが父が此の世にゐて、假へば立身出世して、綾や錦にくるまるとも、昔のすのこ一枚に、親子三人ねたときを、思ひ出すその時は、胸もはりさく切なさを、忠義といふ字におほはれて、忍び涙を流すであらう。」と、われと泣きたいところをば、笑ひに紛らしそしらぬ顏。姫はとかうの言葉なく、目をすりあかめたいじやくり、小よしは泣くこゑ聞かせじと、襤褸の袂かみしむれど、涙の玉の散りまさり、琴の音色やなほゐらん。忠義いちづの藏人兌抵、歎きはいつかはつべきと、口に唱名目に涙、唯ひと刀と抜きうちに、はつしと切りしが恩愛のきづなにからまれ手元も狂ひ、肩先四五寸切りさげれば、「あゝ。」と一聲魂ぎるこゑ、老女は驚きさわぎより、「ヤ、、、、コリヤ小よしをなんで切つた、なにとがあつて切らしやつた。」と、刀もつ手に縋りつき、狂氣の如く泣き叫べば、藏人いらつて「イヤサお主のために首うつ娘、とめだてしてけがまくるな、そこのけ小その。」とひきのくれど、老女はなほも手を放さず、「心

得ぬはこなたの聲、三郎殿によく似たうへ、小よしといふ名を知つたもふしぎ、コレ／＼小よし此の人の、顔かたちちやつと言うて聞かせてたもこと、問はれて苦しき息をつき「ハヽ、鼻筋とほつて眼の中すゞしく、右のまぶたに一つのほくろ、としは五十にまだ足らぬ、二ッか三ッか三ッハいじ、かねが ね聞いた家の紋は」「オヽそんならたしかに三郎殿、そなたが常々逢ひたがつた、とゝさんはこの人おやごと、聞いて驚く小よしより、玉の井姫はうろ／＼と、手おひをいたはりおろ／＼涙、「コレ藏人何故あつてむごたらしう、そなたは娘を切りやつたぞ、死ぬべきは此の玉の井、とうから覺悟してゐること、螺鈿のたばこ打返せば、うちより出づる珊瑚の珠數、錦のけさに懷劍おしまき、すでに自害と見えければ、「コハ御短慮なことゞむる藏人に、老女はつめより聲あららげ、「コレ三郎殿こちらこそ眼は見えね、窶れても女房の顏、よも見忘れはさつしやるまい、小よしを見ん事成人させ、お前に見せて喜ばさうと、年月のこの艱難、それと知りつゝ名のりもせず、ヨウマァ切られたものぞいの、サァわけ聞かうこと恨み泣き、「今となつて藏人が、又善心になつたもふしぎ、サァ／＼／＼と詰めよせられ、涙拂つてどつかと座し、「いかにも御不審な御尤も、某が父大友左衞門元繁といつしは、秀郷公の御父村雄公の近臣たりしが、ふとした事より御勘當、夫れなきやみにつひに憤死、せめては父が心をつぎ、再び家名をおこさんものと、本名は深くつゝみ、漁師三郎と名をあらため、即ちこ

れなる小そのゝあとより、娘小よしをまうけし後に、よく／＼聞けば小そのが父は、海道四郎八といふ海賊にて、村雄のお手にかゝりしとや、われに仇あるかたきも田原、われに恩あるお主も田原、こは惡縁と思ひあきらめ、義理ある妹をいざなひて、筑紫のすみ家をたち出でしが、此の琴緒の十三年、めぐり逢はざる娘の小よし、御身がはりに立つもいんえん。」「サアお前の家出なされしよ、わたしが日のきがなきゆゑ、今の嘆き。」と小そのが悔み、ておひは聞いてすがりつき、「そんならお前がとゝさんか、逢ひたかつた。」と苦痛も忘れ、嬉し涙ぞ道理なる。「ホヽさほど義ある藏人が悪と知りつゝおだ樣に、くみしやつたはどうしたわけ。」「ハア元より軍慮にさとき我が君、大竹五郎とそれがしを、私かに招きて宣ふは、「わが弟藤次宗繩藤六友繩の兩人は、忠平興世と心あはせ、將門に內つうなす由、汝ら兩人一まづかれに一味と見せかけ、變あらば告けしらせよ。」と、世にあり難き仰せを受け、いつたん敵に降るといへども、心にへんしも忘れぬ忠義、かざみの宿の海神も、實に拙者が妹にて、龍女といつしも將門を、誅伐のてだてなければ、父上にもなほ御あんたい、めでたう逢はせ参らせん。」と、手おひの方は見向きもせずに、泣かぬ顏してゐたりける。玉の井姫は正體なく、「そんならわらはが身がはりに、死んでたもるか可愛や。」と、歎き給へば國はなほ、「戀しい夫に廻りあひ、いとしい娘に別るゝとは、今日はよい日か惡い日か、おまへに逢うたらわびごととして、親子三人暮さうと、思つた事

も夢の夢、夢なら覺めよかしと叫び泣き、泣かじとすれど藏人も、まぶたの堤おしきつて、なみだ〳〵のはやせ川、ひらの高ねの雪げより、溜水のみづやまさるらん、小よしはやう〳〵かほをあげ、「モウモウ泣いてくださんすな、とゝさんのお主なら、わたしが爲にもやつはりお主、お役に立つは身の本望、逢ひたい見たいとゝ樣に、逢うて死ぬれば恨みもなし、とはいふものの今いちど、お顔がとつくり拜みたい、もう目が見えぬか悲しいことと、苦痛をかくし齒をかみしめ、首さし延べて覺悟のていに心を鬼に藏人は、一世の鍔きはにぎりつめ、涙をそゝぐみだれやき、やいばの霜にしぼめる花、首は前にぞ落ちにけり。わつとばかりにとり亂し、なげきにしづむをりこそあれ、辻堂に聲あつて「ヤアヤア藏人主の非が首討ちなば、司馬これにて實檢せん。」と、いふに驚き小よしが首を、緋の手箱におし隱し、むくろは乘ものゝ二人はこもだれ、あたふた忍ばす間もなく、辻堂の戸をさつとあけ、こしもとに手しよくをもたせ、立ち出で給ふ司馬の前、「主人と心得たすくるしなもありなんと、別館よりこのところに、拔道のあるを幸ひ、忍びて來るに今の太刀おと、ホヽウあつぱれ〳〵、いで首見んと宣へば、はつとはいへど髮のかざり、いかでか姬に紛ふべき、いかゞはせんというよの聲「早く〳〵」とせりたてられ、せんかたなさに吹く風に、てしよくの消えしを幸ひと、首を手箱の蓋にのせ、差出せば不思議やな、鬼火へうとうと燃え上り、紛ふ方なき姬の首、藏人は不審晴れやらず。司のまへはくれん

じようも定み、こり、よく討つたでかした〳〵、まだ頼みたきしさいあれば、おとまり來れ」といひすて、元來し道にひつかへす、あと見送つて月かげに、すかして見ればやつはり娘、唯ほうぜんと心もふたつ、暫しあきれてゐたりしが、何はともあれ姫君の、御顔はいしてあんぜんと、簀戶ひきあくればこはいかに、玉の井姫は俯せふして、小その懷劍咽につきたて、今を限りと苦しむ有様には、つと驚き、「コレ〳〵女房、何故あつてこの自害、樣子はどうぢや」とせきたつ藏人「サア何者ともしれず、お姫様を奪ひとり裏道より立退いたり、言譯なさの此の自害」と、半分聞かず「なむさんばう、しなしたり殘念や。」と、かけ出せしが傍なる、櫻の枝に結びし短冊、きつと目をつけ「ハア、大海に有りときくなる玉の井も、波なき底ぞすみよかるらし」これこそ大竹左郎が手跡、扨は姫の御身をきづかひ、見え隱れに御供して、波なきそこにいざなひ申せしものならん、ハ、ア小そのはやまつたり」と、聞いて手おひも驚きながら、「姫のお行方しれしとは、此の上のわらはが喜び、いかに忠義の爲なりやとて、たつたひとりの娘に別れ、何樂しみに生きのびん、百萬年の御壽命すぎ、親子三人連葉の、上で暮すを待ちまする」と、老木に積る白雪の、もろくもおちて消えにける。人目なければ藏人は、つまの死骸娘のくび、右と左にだきかゝへ、涙にかきくれゐたりしが、「よ、あつぱれわが子我がつまよ、でかしたりさりながら、殘りおほきは今日まで、一日あんどの思ひもせず、貧苦で死なせしかは

いさよ、父の家名も再びおこし、殿のお命助けしには、おいとまねがひこあと弔はん、三世の諸佛大悲の力、親子いつしよにみちびき給へ」と、髻ふつつとおしきれば、二五佐太郎作木かげを立ち出で、「様子は殘らず聞きました。かういふ事としつたなら、お前をつれてこまいもの、何でもかよしが出世のたねと、思つたことがちがひと違ひ、殺した人はてゝごなりや、人に恨みはなけれども、首になつても見やしやませ、にこにこ笑うてゐる樣おやこと、人に人果たく／＼も、二人が死骸乘物の、うちにをさめておき出づる、心をおんじ藏人は、涙拂うてたつ足も、心もとのわりよわ／＼と、おちたるけさをうちかけて、手にくりじゆずのたま／＼に、めぐり逢ひたるこざくらと、ともにありゆくうばざくら、殘る此の身もすみぞめざくら、ぼだいに導く縁ざくら、その名はくちぬおたたの浦、大友ざくらと云ひ傳へ、義心の花をぞさかせける。

文化八辛未年正月二日

右之讀本淨瑠理ハ者柳亭一家之戲作ニテ而以テ通俗ヲ爲ス要ト故ニ隨テ物ニ國字ヲ正シテ俗字ヲ各爲ニ用捨ス、勸善懲惡義理分明也。余爲ニ之ヲ懇望シテ令ム開板セ候。

永壽堂主人

重而吟咏之借于、昔話墨語等在云加筆一笑哉。

柳亭種彦

大竹丘郎大友蔵人等が宗郷友郷に一味せしは、秀郷が計策なることは卷中にも略とけり。辛崎にて松羅陳人を殺したる修行者はすなはち蔵人なり。大序にもいふごとく、下總國にくだりし歸路おもはずも爰に來かゝり、彼を害して寶硯をとりもどせしなり。又修業者と打扮しは、忍ぶにたよりよき故なるべし。

蔵人が娘海神といふ名を幸ひ、秀郷あやしい夢物語して、假に龍女と名のらせつゝ悪敵をあざむく智計にて、これさきに松羅陳人蜈蚣と小龍の奇怪をあらはせしにもとづき、宗郷友郷等に、秀郷はじつに松羅が幻術にてたきものとなりしと、己が智に迷はせんとの計らひなり。

大竹丘郎秀郷　蜈蚣退治のものがたりも元より根なしごとなり。

堅田の浦にて、小よしが首級しばし玉の井姫の御首と見えしは、雨尾の靈狐のなす所なり。首卷の畫圖をみて知りたまへ。今畫圖を略す。

秀郷海神多門小織がゆくへ、老狐ふたゝび龍女と化すことと、勢田の橋龍女の宮の起源なれど、後篇にくはし。都て爰にいふ所は、すゑ／＼をよみ給はゞおのづから知るべけれど、例の贅說をいふ。

なかばにして筆をおきぬれば其のおほむねをしるしつ。

勢田橋龍女の本地 畢

綟手摺昔木偶

序

織錦不成段不如一匹布之有用也。柳亭子。嘗與余善矣。爲人不崇儒不信佛。居常讀稗史亦自著作之孜々而不休焉。如此編乃其著作中之一耳。閲之其事雖稗其義卽孝悌廉恥。其理全因果應報。可以勵惰可以破暗。嗚呼腐儒凡僧。一以陷溺於所學一以染著於所祖遂無益乎。敎化更不管乎。解脫匏瓜之弊。孰與于此編之適中事情砭刺人俗之勝矣。然則柳亭子之不崇儒不信佛實有以也。豈徒不信不崇是執乎。此必其意謂寸錦之眩耀眼不及匹布之溫覆肌也。誠其然乎誠其然乎。

文化癸酉孟春

松亭人陳題

櫟齋主人元春書

富度の古主は何なる者といふ事を知らず、たゞ右にいだせる元祿の印本〔松の葉〕の曲子に、その名の見ゆるのみなり。予が友人ある翁の傳へたりとて、此の曲子を歌ひかつ三絃をひく、本調子にて古雅最も愛すべし。予平安堂が院本を好むの癖あれば、渠が名を假りこれが趣を奪ひ、遂に一齣の小説となすのみ、更に實事にあらず。

操手摺といふは、人形を弄ふ人の姿を見せん料に、絹の衣にて手摺を張りしなり。昔は人形に足を著けず、裾より手をさしこみ、眼のうへに指しあげて弄ふゆゑ、斯くなさねば今の出づかひのごとく姿を見することを嫌し。操手摺木偶の圖は正德の印本〔御[illegible]記〕にあり。又おなじ頃錦文流が作〔棠大門屋敷〕に、「庶が石の上るりに操手摺といふことを仕出し、人形のつかひやうをみせ、素語といふことをはじめたり。あやつり芝居に舞臺をつくること、此の時を初めとす。」とあれば、專ら此のころ流行はれしとみえたり。此の庶が石は則ち平安堂の作なり。予が著述も平安堂が作意によればしか號けたり。

人形のてすり、眞に書かば欄ならん、手をするといふ語の本によりて手摺とは書きたり。摺はトリヒシバの意なり。或は揩の誤りともいひ、又揩の誤りともいふ、しばらく俗に隨ひ手摺と書するは、婦女子のみやすからんが爲なり。中昔の目せき笠の名をもて目次となすは、かの曲子に編笠を插しと歌ふに因あればなり。おほみふじ都ふじなんどいふは、富士山の形をうつして作れるならん。ふじ

おろしは西鶴が男色大鑑に、「富士おろしといふ大編笠をぬけば、紫の手綱にて顔かぶりしたる。」とあれば、美少年の被りしものなるべし。小女郎手もおなじ書にあり、「小女郎手の編笠を向うびくにかぶり」とあれば、今藤屋伊左衛門が狂言に用ゐるは是れならん。焼印編笠は、泥丁の茶屋なんどにて、花街におもむく客に一夜づゝ借す編笠なり。其の名松の葉に見えたり。此のこと都にもありしや。西鶴が置土産に、「朱雀の細道といふ野邊に編笠きせて案山子を拵へ古き竹杖をつかせておきしに、萬鳥も不斷焼印の大編笠を見つけて、是れも供なしの大じんと思ひけると云々。」案ずるに茶屋の家號などを焼印して貸したるものなるべし。野夫編笠は元祿の印本今様職にあり、形未だ考へず。毛端は、或人白皮にて縁をとりたる古き編笠を藏する者あり、是れなりといふ。これ等を初め、都富士朧富士一文字の類はくさ〴〵の書にみえたり。故に出所を誌さず。ふせ編笠は近松が浄瑠璃本に、「十露盤捨てて町人は、戀の相場に手をしめて、明日の御首尾の日より見る、武士もどうバヽをふせ編笠。」とあり。すべて道成寺の小歌は此の文に倣ひて書けると見ゆる所多し。これも目せき笠におなじく目ふせぎ笠の畧語か、とまれかくまれ無用のことを叶いて漫りに楮林を費しぬ。

文化九年月々

柳亭種彦誌

目次

都富士　一文字
玉端　朧富士
小女郎手　野夫編笠
富士下風　伏編笠
焼印編笠　大編笠

畢

綟手摺昔木偶　巻之一

江戸　柳亭種彦作

一　發端みやこふじの上

そも／＼出羽國飽海郡に三ツの高山あり。所謂、月山、湯殿山、羽黒山これなり。就中、月山は高嶺天によこたはり、遥か絶頂は日月の上にあるかと疑はる。故に月山とはいふなるべし。視あぐれば百尺の青嶂雲樹天を障へ、見おろせば千仞の碧崖、水波石に激す。谿には喬木とみつるも路轉つて梢を踏み、ゆき／＼て野口海道坂に至る。是れより上は樵夫も通ふこと稀なれば、奇柏怪松枝を交へ、人跡絶え鳥語幽に、煙霧朦朧として、常に微雨小濡るが如し、こゝを小月山姥月光といふ。また雨告山、牛ケ首、籠山なんどといへる所あり。雨告山は、麓より望み見るに、白雲山を隠すときは、多時ならずして雨降るといふ。牛ケ首はその形の似つる故の名なり。籠山は杖を地上にたつるに、力をもちゐず下ること、籠にものをさすがごとし。是れより平清水行者戻りをすぎて頂上に至る。行程

凡そ關東道九十里といへど、その實は計り知るべからず。ひだりに補陀落越をみて、すこしくくだれば、十三絃といふ久間に靈所あり。このところは神仙の栖家にて、甘露溶々と露に滴してくだり、亦朱き露あり、その色丹に齊しく、日に映ずれば木石赭然として、朱雪の積るがごとし。羣仙龍に駕し、鶴に乘り、遊戯の姿を往古は眼のあたりみつる者あり。今も時としては金石絲竹の聲をきくことあるにより、琴引谷といひつるを、いつか十三絃と呼びかへしなるべし。爰に嘉應承安の頃、一ツの怪事あり。この嶽の麓、櫻小路、香箱町なんどきこえしは、家居たちつゞき、鄙に似氣なく、賑はしき巷なるが、夜更け人しづまりて後、怪しき歌をうたひつゝ、躍りくるうて大路を行くものあり。初めの程は心もつかざりしに、夜毎かくのごとくなれば、里人奇怪におもひ、板戸の透より覗ひみるに、或は手體に手足を生じ、或は珠數に眼口備はり、又は鼓のかたちしたるもあり、扇を頭にうちかづきたるもありて、惡人に似て人に非ず、唱歌も安正ならねど、口々に歌ひつれたり。總て數多の年を經し雜器は、付喪神とて、變化となるとは聞きしかど、眼のあたりみつるは、最めづらかなることに思ひ、曉の頃ほひ怪物のあとに從ひ行くに、月山なる琴引谷の中に隱れぬ。此のこと日を經れど止まず、里人さま〴〵に商議して、彼の琴引谷は、往古より神仙の住家なるよしいひ傳ふ。若し幽谷のうちに巨萬の寶などありて、其の靈のなすところならんも計りがたし。なにゝまれ吉兆に疑ひなしと、忽地

利欲に眼くらみ、衆人を呼び集め、截斤を揮り崩せば、石門と思しき物あり、門扉傾きし間より燈火光々と閃きいづれば、里人は案に違ひ、少時躊躇ひけるが、かくてはいつか果つべきと心を勵まし、鐵槌をもつて打碎くに、あら怪しむべし、此の裏廣々たる石室なり。中央に石を疊んで牀となし、錦の褥うづたかく、年は未だ二十に足らぬ女の顔容髮のかゝり、いと艶やかなるが、玉牡丹の金釵を頭重げにさし、濃き紅の袴踏み隨き、身には白綾の衣を穿ち、うへに虎豹の裘をまとひたり。側には斗を釘るへき器に、油を漂へて燈火を挑け、雕車だつたゞしく粧ひたる車の、幾百年か經りけん、輦輿もいざれ、蒔繪も剥げ朽ちたるをひきかけ、横に肱をつき持たせて、眠りゐる有様は、まさに書中の乾[illegible]に、昔はいかなる花にや伴ひけん、更に色香の變ぜざるも怪し。彼の女漸く眠りさめ、莞爾としていへらく、人々驚くことなかれ、妾は闍輪の翁が娘赤魚といふものにて、琉璃王の御母、阿閇の皇后に仕へし女官なり、彌勒の出世を待つべしと發願し、大寶元年此の石室に籠りしが、原來日影の射らざれば、暗々として經文讀誦の便りなし。さるゆゑに油といふ物を造り、あまたの器に蓄へ、松明に換へたるも今既に盡きなんとす。是れを乞ひ貰はんがために、さまざまの奇怪を顯はし、石室を開かせたり。といふに、鄕人はいよいよ奇異の思ひをなし、仔細に觀るに、實に彼の女がいふに違はず、油を納めしとおぼしき器など、數なきまで備へ、猶奥のかたに納數の几帳をたれ、中の朽ち

たる琵琶、絃のきれたる琴なんど、目馴れぬ楽器を並べたり。或は時として絲竹の調べ聞えしも、此の所なるべしと初めて地仙なる事を知り、等閑になさばいかなる祟りやあらんと、不日に油を製し、彼の器に悉くをさめければ、女大いに歓び「妾是れより三日を限り、衆人を相して此の恵みに答ふべし」と、或は過去の因果を示し、又は未来の禍福を告ぐるに、毫髪も違はず、響きの物に應ずるが如し。こゝにおいて郷人の尊敬大かたならず、前後を爭ひ詣で来つ。常は女人禁制の霊場なれど、彼の女仙赤魚これをさへ免して、参り集ふ者その数を知らず。かくて限りの日も既に暮向々たる頃、年は二八ばかりとみえ、美麗なる女、女童一人倶し、道のゆくての嶮しきにや労れけん、辿る／＼歩み来て、徐かに女仙の前にすゝみ、懐より蝶の蒔絵したる、香筥をとり出し、香を炷き身を浄め懇念に拝をなす。女仙赤魚熟みて「御身は田舎人に似氣なく貴人の相あり。傷ましいかな短命にして、然も義の為に戦死為べし」といふ。彼の女近くるより「妾は小櫻とまうして、當山の麓、手向町に住む浪人の女なるが、兼て武家に給事すべき願ひあれば、義によつて死せんは、女ながらも本意なり」と答ふ。女仙默頭き「御身に女子一人あり、ゆく末は富み栄ゆる事疑ふべからず。されど歓びあり、悲しみあり、花の開落速かなるに比ふべし」といひつゝ、つと身を起し、小櫻が膝元にさしおきたる香筥を取上げ、指を折りて算へ「此の筥に四ツの蝴蝶の蒔絵あり、御身が女子の禍福、すべて此の蝶の

ごとくならん、よく記憶して女子を諾すべき人に語れ。自来おもひ當る事あるべし。ゆめ／＼。」と扇をあけてさし招けば、不思議や蝶は扇を離れ、空中にとびめぐり、少時ありて元の蒔繪となりぬ。小櫻いよ／＼驚嘆なし、又いひけるは、一齣にも聞ゆるごとく、妾は近きに都に赴き、給事すべき願ひあれど、かつて嫁すべきの心なし。殊に短命と宣はすれば、女子をまうくべき謂れなし、願はくは詳らかに告げ給へ。」といへば、赤魚は打笑ひて再び答へず。とかくなす間に日も暮れはてしに驚き、小櫻は殘りおほげに座をたち、石室をいづると齊しく、打碎きし石門もとの如く鎖しければ、郷人はかねてたのみおきたる衆僧に讀經させつゝ、上をおほひ既に石室を埋めけり。奇怪のことにあらずや。

かくてあまたの年うつり、治承四年になりぬ。其の頃一院第二の皇子、茂仁王とまうすは先帝高倉院の御兄にて、御母は東宮大夫公實の息男、納言季成の御女なり。三條高倉に住ませ給へば、高倉宮と申し奉る、御才覺も勝れてましましけれど、故建春門院の御妬み故にや、親王の宣旨もなく、只簾中に鬱としてゐ給ひければ、近衛川原に在りける、源三位入道賴政、ある夜潛かに此の宮の御所に參りて申しけるは、「君はまさしく天照大神の御苗裔にて渡らせ給ふに、等閑に過ぎさせ給ふぞ言ひ甲斐なき。覽せ平家は榮華身に餘り、積惡日々に増過せり。當時計策を施さずんばいつか期すべき。早く諸國の源氏に令旨を下し、召し集め給へ。」と、頻りに御謀叛をすゝめ參らせければ、宮も尤もと

や憎しけれ、ひし／＼とおぼしめしたたせ給ひ、新宮十郎義盛が在京を幸ひ、即時に藏人になされ、行家と改名し、源氏の將士に廻宣の令旨賜はりし、旅だたせ給ひける。この事はやくも平家にもれ、清盛は更なり、一族安き心なく、所謂東國の勢馳せ寄らぬ前に、宮は土佐の畑へ左遷し奉るべしと、商議一決なしけるよし、頼政仄かに傳へ聞き、長谷部信連といへる心ききたる武士に命じ、薄衣に市女笠とりいでて、宮を女房の姿にやつし、近士佐大夫宗信に、なよやかなる直衣小袴着せ、黒丸といふ若者に、表着したる袋を持たせ、青侍などの女を迎へて行くぞと見せ、三井寺へおとし參らせ、扨て頼政入道には、五六日過て、嫡子仲綱、次男兼綱、三男頼兼をはじめ、數多の兵士を從へ、三井寺に馳せ參じ、さま／＼軍議なしにける。是れは扨おき爰に又、頼政が股肱耳目とよばれたる、渡邊競瀧口といふ者ありけり。其の天性をとふに、學窗に螢をひろひ、閑室に雪を束ね、風月の才にたけしのみにあらず、弓は養由が腕ざしにならひ、軍法は張良が奥旨を極め、太刀あはする術においても、雙なき若者にて、殊に美男のきこえたかし。妻を六浦といひ、これ又心ばへやさしく、良人の勇氣を見ならひてや、心をゝしく、千鳥と名づけし三歳の女子一人ぞありける。住居は右大將宗盛公の裏築地に近かりけるが、一日宗盛公より俄に使をはせて、競をまねき給ひければ、何事にやあらんと、六浦はいとゞ心ならずも待ちわぶ折柄、貝鞍おいたる馬をひかせ、黒絲威の鎧に、皆具とり揃へ、從者

に持たせたち戻りけるあひだ、六浦も漸くこゝろおちゐ、競が前に手をつかへ「今日は常にかはり、あわたゞしくめさせ給ひし故、安き心もあらざりしに、たくましき馬、めでたき鎧を賜はりしは、こよなき幸ひなり。いかなる事ぞ語り給へ」と問へど、競は答へもなさず、少時ありて座をたち上り、「仔細は頓てぞ知るべきに、まづ御身は千鳥を誘引ひ、早く館を立退くべし。長居なさば、忌々しき事のいできたらん。」といへば、六浦大いにおどろき「そは心えぬ仰せにぞ侍る、兎まれ角まれ、縁由を告げ給へ、さなくばいつまでも此の座は去らじ。」と打泣くに、競莞爾として「おもひまうけざることなれば、さ驚くも尤もなり、心さだめてよく聞くべし。主君源三位頼政公、高倉宮に御謀叛をすゝめまうし、潜かに思し立ちありけるところ、はやくも平家にもれきこえ、宮を三井園城寺におとしまゐらせ、主君をはじめ渡邊一黨、軍の評議最中なり。我とくに知るといへども、思ふ宗ありて、安閑と日をおくりしに、果して宗盛我を招き、しかじかの由をかたる。初めて聞きし様にもてなし「近曾より何等ことにや、頼政我を疎んじ、心を隔つる事屢なりしが、それ故にこそ告げ知らせざるものならん。」と、わざと怒りを顯はせば、愚將の宗盛實とこゝろえ、「さあらば我に仕へよ、引出物とらせん。」と言ひつるを幸ひ、彼が秘藏の小糟毛の駒をこひうけたり。主君の大事を餘所に見しも此の馬を奪はん爲なるぞ。」と、語もよどまず語りければ、六浦膝を進め「妾もこの頃洛中穩かならざるよしは、

風かにきけり。抑は宮の御謀叛にてありけるか、妾ふつに心得がたき事二ツあり。かかる御企てあらん程ならば、眞先かけて君を招き給ふべきに其の事なき、是れ一ツ。又君もかくと知りながら、僅かに敵將の駒を奪はんとて躊躇し給ひしは、御心臆したるに似たり、是れ二ツ。詳に語らせたまへ」と問ひぬ。競點頭き「み給へよ、我が館は宗盛が局町と築地を隔てしのみなれば、兵士をもつて告け越す時には、いよ／＼敵にらるべきと、遠く思慮を廻らされ、まつた捨ておき給ふとも、御跡より參るべき我が胸中を察してなり。家臣黒丸御所に在りしを幸ひに、忍びて宮の御供に倶せられたるにて、我が異心なきは顯はれたり。又計策を施し敵の駒を奪ひしは、往年相政公の嫡男、仲綱公の祕藏ありし鹿毛の駒、宗盛無體に所望して、脊に仲綱と燒印をすゑ、仲綱ひけ／＼と畜生の名によびたるを、仲綱公は更なり、源氏の諸武士、めざましきことにおもひゐたれば、うばひとつたる此の馬に、宗盛と燒印し、敵陣へ追ひかへし、恥を雪ぐべしとおもひてなり。さすれば我を惡しみ深く、おん身等まで、何なる憂きめにあはんも計りがたし。其方の父夢幻入道が隱家、深草の里に、千鳥を連れて落ちゆくべし。合戰の場は宇治橋のほとりとおぼゆれば、彼所はさまで遠からじ、軍發る其の時は、郎等黒丸にいひつけ、おん身が許へ告げしらさんが、此のたびの御謀叛は、只諸國に散ずる源氏の武士の心をひきたて、勵みをつけん計策にて、萬に一ツも勝利の程はおぼつかなし」と、はや心構へなしけ

れば、六浦はいとゞ悲しくて、ひきも止めん心なれど、日頃勇々しき夫の氣質、かくと聞えば言ひ懲らし、甲斐なき者とや笑はれんと落つる涙を押隱し、首途を祝ふ熨斗昆布、銚子土器捧げいづれば、「よくも心づきたり。」と、三獻飲んで六浦にさし、鎧一領取出させ、「我討死ときくならば、形見にせよ。」と與へつゝ、心持よげなる顔色を、折よしと側により、「娘千鳥は褥により、乳母に抱かれ假寐せり。おろ／＼ものの心もしれば、呼び覺し連れ來らんに、御盃をたまはり、御出陣のやうを語りきかさん。」といふに、競呵々とうち笑ひ、「おろかよ命の危きことと、戰場のみに限るべからず、閾をこゆれば敵あり、いつを終りと白眞弓、弓取る家のならひぞや。又さなきだに泡沫無常、坐するうちとに一日も、やすき心はなきものを、賀茂の祭に練りいづるも、討死の首途も、こゝろは更にかはりなし。嚮のやうにはきこえつれ、若し天運にかなひ、宮を御代にいだしまうさば、めでたく親子再會せん。」と、物具とつてうちかくれば、六浦はとかういひかねて、「御太刀は何れや鐵味のよかるべき、御兜は何なるをや召させ給ふ。」と、前にたち後にそひ、武者ぶりを繕ふも、今日を限りと思ふより、涙に眼もくれ手もたゆく、引結びたる箙籠の、硯の墨の薄からぬ、えにしも切生の矢を負ひかけ、心せかれてたちいづれば、鎧の金具鳴る音に、千鳥も眠りや覺めにけん、走り來りて手をつかへ、「父上何地へわたらせ給ふ。」と問ふ顔を、競は熟うちまもり、「幼き身にきこゆるも無益けれど、相公頼政公

御謀叛といふものを、宮に勧めまゐらせ給ひし故、我は是れより井寺に赴き、討死をなすからに、長然やかに生長して、母に孝行盡すべし」と、いへば千鳥微笑み、「討死とやらし給ひて、歸り來ますその時は、よき土産賜はれ」と、語の文さへよくも聞えず、六浦も今は忍へかね、はふり落つる涙を包み、一切ものもいはで草摺にとり縋れば、競聲ふりたて、「無益の歎きに時移り、敵にかくと聞えなば、軍兵襲ひ來らんは必定なり、とく／＼此の家を立退くべし」と、留むる手先を引拂ひ、顧みもせず出で行きけり。あはれ果なき物語にぞありける。

二　發端みやこふじの下

深草の里となんいへるは、皇城を去る事さまで遠からねど、静けさは尚嵯峨野にもたち勝り、然にさゝやかなる庵あり、門設けたれど、常に鎖すは邂逅に訪ひよる人もなければなるべし。荊棘葎透垣に蔓ひ纏はり、生ひ茂りし夏草は、踏み分けし跡だに定かならず、松吹く風の騒がはしきに讀經の聲も排々しくは聞えねど、香煙窓を穿つて立登るにぞ、住む人ありとは知られたり。これ六浦が父夢幻法師が隠家なり。六浦は此の程より女千鳥と、年ごろ相馴れて心知れる侍女三五人を將て、父の許を頼み、孃が便りを待侘びしが、軍務の閙暇なきにやあらん、絶えて音信を聞かず。夢幻も陣中の様子

聞かまほしく、雨雲おほひて暗き夜を幸ひに、法衣の上に蓑をまとひ、竹笠ひつかうで三井寺近く忍びよる。爰に宗盛が士卒、敵陣の便宜を窺ひ、三井寺を燒討になすべしと、是れも彼所を徘徊なし、はしなく夢幻法師にいであひ、諜者とや思ひけん、それ討捕れとおつとりまく。夢幻大いに驚き、「我は此の邊に住む大般若建立の僧なるが、此の頃の怱劇に物くれる人もなく、ほと／＼飢ゑに臨みし故、食を求めに行く者なり、思ひ誤り後悔をさせ給ひそ。」と語忙しく言ひければ、軍卒は松明ふり照らしつく／＼とうちまもり「此の法師はさる頃より主君の御惡しみ深き、渡邊競が女の父なり、此奴を捕へ詰問なさば、競が親類血族の往方は詳かに知るべきぞ、よき者の來れる。」と犇々とおりかさなり、搦め捕らんとなしければ、夢幻心裏に思へらく、何にしてか我が名を知りけん、かかりせば言ひ賺くとも逃すまじと、心をさだめ、手ばやく太刀を奪ひとり、敵兵めがけて打つて蒐る。此の夢幻は原東國武士の浪人にて、劍法は熟したり、幸ひに奪ひし太刀の切味よく快地に五人を切り伏せたり、されども敵は多勢なれば、遂に數箇所に深疵をうけ、敵し難くやおもひけん、折ふし大雨ふりいだし、松明はみな消えぬ、善惡もしらぬ暗を幸ひ行方もしれず逃げうせけり。扨も六浦は夢幻が歸りおそきを案じ、行きもならはぬ玉鉾の、道の程五六丁たちいでしに、大雨しきりに降りくだり、ほとほと往きなやみ木陰に少時雨をさけ、休らひゐたる其のところへ、喘ぎ／＼かけくる者あり、是れ則

ち夢幻なり。時に雨止み雲散りて、星の光に六浦をすかし見るよりも、はりつめし氣もたゆみはて大地に撞と倒れ伏し、更に正氣あらざれば、こは父上かとていたはり起し、おもひがけなき此の深痍、何者の所爲ぞと、泣きさけぶ聲の耳にいりけん、稍ありて息ふきかへし、ありし事どもくはしくかたり、「かかりせばおん身等此の所にたちしのぶは最も危し、何地にもあれ敵なき方へ落ちゆくべし」とこれを最期の語として父も皐月の雨催ひ、雲間の星ともろ共に、きえて果なくなりにける。六浦は父の死骸にとりつき、聲のかぎり歎きしが、斯くてあるべきにあらねば侍女どもを召集ひ、かよわき力に漸うと土を穿ち、かりに亡骸を埋めけり。嗚呼それ衆生は無始より生じて三界を出でず、形を殘す者更になしとはいへど、とりわけ果なき最期ぞと只管に無常を觀悟し、庵に立戻る頃、夜はほの〴〵と明けわたり、空いとよく晴れて、朝日はなやかにさし出でぬ。かくて六浦は庭の板井にさし懸り、手づから閼伽を汲みきたり、佛壇に燈明をてらし、落つる涙の露としまがふ、水晶の珠數爪繰り、南無釋の夢幻居士、成等正覺頓證菩提とふし拜み、經机の塵うち拂ひ、普門品とりいだし、涙に聲も滯りて、「若三千大千國土滿中怨賊と、打鳴らす鈴の音の、夫れよりもいと幽けく、風がつたふ陣鐘の響きに六浦耳を欹て、さては我が夫豫て打死と期し給ひし、宇治橋の合戰も今日とおぼえたり、父に別れて程もなく、また何なる憂き事や聞くべきか、あら氣づかひやと、彼所に往きて軍のやうす

視まほしくおもひしが、不斗心つき、それ此の御經に、彼所執刀杖、尋段々壞と說き給ひ、又怖畏軍陣中、衆怨悉退散ときこえつるは、執るところの刀も杖も、御名をとなふる聲に尋いで段々に壞れ、軍陣に怖るゝとも、衆の怨悉く退散けんとの事なる由、經文讀誦のその折節、合戰の起りしは、軍勝利にうたがひなしと、圓通大師の御告げなるらん。世になき父は無垢淸淨の境にいたりき、此の世の夫は神通力を具足させ、軍に勝たしめ給はれと、卷き納めたる經文の、紐を又もや得解脫衆寶人聞俱發聲、聲を發して雨陣は、矢聲のおとすさまじく、天地に響く攻鼓、手にとるごとく聞ゆるにぞ、すは今こそと氣も逆のぼり、我にもあらで經文を持てる儘にてたちあがれば、礫と音して爪繰る念珠袖より落つるに心つき、やをら元の座になほり、妾がいかにおもふとも、甲斐なきこととは知りながら、あきらめがたき女の愚癡、それよ經にも、若多愚癡、便得離癡と、いく度か、まきかへせども眼くらみ、甘露の法雨ひきかへて、淚の雨は潸然と、煩惱の焰滅えやらず、われから狂ふ心の駒下駄、裾踏摑つて庭におりたち、良人は修羅の途にあり、それと知りつゝ安閑と經文讀誦に期みのばさば、武士たる妻の本意に叛かん、妾も直に戰場に馳せ參じ、よき敵とさし違へん、未來は無間に墮ちなばおちよ、罪も報いも白柄の長刀、舒とつて見渡せば、さすが名におふ深草の、草茫々と生ひ茂り、昨夜の雨に露をふくみ、秋かとばかり霧たちこめ、いろ〳〵の錦さし物、朦朧にみえつるは、彼の佛

國にありと言ふなる、乾闥婆城、阿修羅の荒れたる勢ひにはしり來る若武者あり。手痛くはたらきしと見え、玉なす汗は鎧をひたし、頓にことばも出さず。六浦詰と見やり「其方はまさしく黑丸ならずや、縛により待ちかねし」と、氣を焦燥て問ひければ、黑丸は頭をあげ、「さても宮の追討使として、敵兵おほよそ二萬餘騎、おしよするときこえしかば、大將賴政公の下知によつて、宮を南都へ落しまゐらせ、宇治平等院に陣をする、橋の中の間ひき放せば、皐月の雨に水嵩も增し、浪滔々ともの すごき、此處にて敵を射とれやとて、弦くひしめし矢束とき、待つ間程なくよせくる大軍、宇治橋の南北の岸にうち臨み、一時に合はする鯨波、浪にたゞへておびたゞし。かくて味方の陣中より、筒井の淨妙明春と名のりつゝ、たゞ一筋の橋桁を危げもなく打渡り、平家の軍兵ここに來れと、扇をあげてさしまねけど、さうなう寄せんやうもなし。彼を射とれと敵陣には、矢種をおしまず射つれども、これをも物の數とせず、篠つく矢先を切り拂ふ、一來法師これをたすけ、二人がために敵兵討たるゝこと數を知らず、橋はひきつ水は高し、敵も飽倦みてみえつるところに、田原の又太郎忠綱、宇治川の先陣なりと名のり、我おとらじと三百餘騎、むれゐる鳥の羽音もかくやと、白浪にさつ／＼とうちいれたり。いまだ軍は盛んにて、勝負更にわかたざれば、陣中に立戻り、事の爲躰を仔細に見とゞけ、又も注進申すべし」と原の路へ馳せ去りぬ。六浦いよ／＼仰天なし、敵兵川

を渡しなば、宮方の御大事なるべきに、此の期を延ばさば悔ゆとも詮なからん、良人の最期に少時なりと、會うて言ふべきことありと、娘千鳥か朝寐したるを幸ひ、まづ侍女をよびいだし「若し夫婦とも討死と聞くならば、千鳥を誘引ひ、丹波國矢代といふ地におもむくべし。彼所は主君頼政公、鳴く聲鵺に似たりといひし、變化を射たりし恩賞に、たまはりたるところゆゑ、其の名も直に矢代と名づけ、恩顧の者も多しと聞けば、世を忍ぶに便宜の地なり」と殘ることなくいひをしへ、又一人の侍女に命じ、かの鏡が與へたる鎧一領とりいださせ、唐櫃の上になほし、鳩尾板、栴檀板をかけ、臂甲、肩甲をつけおくべしと、手筈の用意調へければ、侍女は涙にくれ、かくては幼き御方の、如何にやならせ給ふべきと、留むるを聞きもいれず、皆奥の間に退かしめ、鎧直垂とつて著し、流石みだれてかひがひしく、頰當つくる、其の所へ、門の板戸をあらゝかに押しひらき、捕人一人はせ入つたり。折あししと庭におりたち、門の戸撥的たてきれば、殘りの捕人はひそめきあひ、さうなうは打ちもいらず。六浦はなほも油斷なく、右左に眼をくばり、先にすゝみし一人の捕人、鐵尺打振りとび蒐るを、心得たりと身を閃かし、さき腕とらへて投げのくれば、戻りをうつて伏轉び、起きもあがらぬ其のひまに、鎧の側にはせよりて、綿嚙とつて程よくひきよせ、引合おしひらき、弓手を臂甲にさしとほせば、又一人がはしりいり組まんとかゝるを身を反り、膝に引敷き動かせず、馬手の臂甲をさかけたり

ける。嗚呼感ずべし、月も妬める容止にて、男子に勝る勇氣あり、羅綾にだも任へがたき、姿に雪の耳朶濃、いとゞ身がるに着なしければ、緋絲の紅は、細腰にまとひたる肌着の透くやと媚きぬ。狛人は漸に亂入なし、微塵にせんと打ち懸るを、襟くび掴んで撞的投げつけ、脊に足を踏みかけて、しつかと縮めたる高紐も、總て散りゆく花むすび、未來は一ッ蓮葉に、みちびき給へ佛間、纐纈の根緒ひきとほすひまもあらせず、又打ちかゝるを、左右一度に拂ひのけ、手ばやく長帶ひきしめつゝ、思ひきつたる千鳥がこと、又思ひだす乳隱しの、環をしるべに後より、組みつくをふり解き、長刀おつとり立ちむかへば、六浦がてなみに氣臆れて、敢て刃向ふものもなく、みなちり／＼に逃げ去りたり。かくて六浦は平等院にはせゆきしが、はや亂軍のことなれば、良人の往方主君のありか、撢ねもとめん手段もなく、兎角なすまに味方の軍兵、いろめきたち、最危げに見えければ、長刀うちふり、敵陣に斬つていり、少時がほどに、敵十四五騎うちとりつ、勢ひ猛に戰ひけるが、其の身も數箇所に手疵をうけ、鎧に立つ矢は秋の野の、尾花をみだすに髣髴たり。六浦も今は敵しがたくや思ひけん、蹌踉く足を踏みしめて、漸く庵に立ちかへれば、千鳥も目覺めて侍女にいだかれつゝ、周章て惑ひてはしりいで、淺ましの御ありさまと鎧の袖に携りつき、皆悲しとて泣きぬ。斯かる所へ黑丸は、敵陣の圍みをきりぬけ、再び庵にはしりきたり、「さては奶公にも、御出陣と覺えたり。さすれば詳にかた

るにおよばず、無念ながらも味方は小勢、敵の多勢にあたりがたく、競君をはじめとして、渡邊省、同じく授、早、清なんど、ところ〳〵に討死して、頼政君にも平等院にて、生害ありしとうけたまはる。かゝりせば此の所を、片時も急く立退き給へ、我も主君の御供せん。」と馬手ざしに手を打懸け、既に自害と見えければ、六浦黒丸を押しとゞめ、「妾は此の痛手にては、所詮活きながらふべしともおぼえず、心にかゝるは娘千鳥、かれをもりたて成長させなば、死するにまさる功にして、冥途より我がたも、さぞうれしとや見給ふらめ。妾が父夢幻は原東國の武士の浪人葛野磯六といふ者にて、其の頃妾は小櫻とよび、一年出羽國羽黒山の麓、手向町に住みけるとき、箇様〳〵の事あり。」とて、月山の十二間より、地仙出現したること、および其の身に禍福を告げつること、香筥に蒔繪したる四ツの蝶をもて、因果をときたるまで詳に語り、又いひけるは、「妾其の刻は嫁すべき心なきをもて、かの女仙赤魚女子ありといひつるを、いと不審しくおもひしが、不圖も渡邊の館に給事のをりから、およびなきとは知りながら、不才君をおもひ初め、遂には心の願ひかなひ、嬉しきわが身も顧みず、横陳なし進らせて、小夜の衣のたとし呼び、二重の帯、三重とかこちし戀瘦に、むすびかへたる額帯、そのよろこびの程もなく、しめもならはぬ表帯に、此の深草の露とし消ゆる、今に至りて女仙の語、違はざるをよくも知りぬ。」と、語る中に、内飼袋より、香筥の蓋をいだし、「又曰く、渡邊授殿に染丸と

嫁けし、今年五歳の男子あり、すゑ〲は娘千鳥とめあはすべき契約なし、此の香箱をひきわけて、片しは彼方へおくりおきぬ。然るに此の染丸は、接殿侍女にたはむれて産ませ給ひし男子にて、正室早田の嫉みつよく、傍的にあづけ、近郷に住ませ給ふよし、其の地は汝も聞きもらせり、接殿も打死あれば、在所もさだかには知れまじなれど、此の香箱を證として、四ツの胡蝶の二ツ合ひ、ひき離れしを全く合はせ、夫婦となしてくれよかしと、金子包ともにいだし、黒丸に與ふるも、いと苦しげに見えけるが、いひおくことも是れかぎりと、馬手ざしを手にとりあげ、笛喉切つて死にうせけり。侍女どもは千鳥とともに、六浦が死骸にとりつきて、悲涙とゞめがたく見えければ、黒丸も六浦がことば理あるに感激なし、泣きゐる千鳥をさま〲に言ひ慰め、經文をよみたる、唐櫃の内に忍ばせ、彼の六浦が著たりし具足は鏡が常に護藏せし、耳坐濃なりけるにより、千鳥が成長の後、形見ともなすべしと、我が著したる鎧と脱ぎ替へ、かくてあるべきにあらねば、侍女どもは己が隨意落しやり、六浦が死骸をとりかくす暇さへなく、柴垣ひき崩して打ちおほひ、庵に火をかけたちされば、みるみる火焰天を焦し、忽地灰燼となりにける。黒丸今は心安しと、唐櫃をとつていとかる〲と脊負ひ、支度なしおきたる、蓑笠にて姿を忍び、立ちあがる折しもあれ、何方ともなく矢一筋飛びきたり、黒丸が射向の袖に中りしが、矢は究めて短く、弭勢も手弱ければ裏をばかかず、鎧の縅をぞ射きりた

り、何者の仕業ぞと、立ちとまりて打ちみやれば、生ひ茂りたる夏草を押しわけつゝ、漸く十歳ばかりなるべき男子、いと愛らしく腹卷して、弓携へて歩み出で、「それに居るは鏡が郎等黒丸ならずや。かくいふは隣の一戰に、御身に討たれし千壽太郎が一子、水雄丸といふ者なり、其の怨みを報いんと、汝があとを慕ひ來り、此の叢に忍びゐて、ことの形勢は詳に知りぬ。先で、潔く勝負を決せよ」とことばよどまず言ひければ、黒丸莞爾とうちゑみ、「嗚呼世も靜かなる時ならせば、乳母に抱かれ閨房を離れまじき、幼なき身をもちて、軍に出で立つのみならず、我を仇なりとつけねらふ篤感さるに餘りあり。いかにも千壽太郎とやらんは、今朝宇治橋の邊にて、我討ちとりし覺えあり。併しながら、幼きおん身に討たれなば、情もて然はからひしと、他のいはんは必定せり、さすればおん身の功も空し。この理をききわけて一日の怒りを和め、成長だにし給はば、我がかたより尋ねゆき、討つ討たるるは、そのときの天運に委すべし、これぞ變ぜぬ誓なり」と慇懃の旨をとつて奥へ行ければ、水雄丸はさも歡ばしげに懷中なし、なほもことばを契ひ、原の路へ走せさりぬ。黒丸あとをうちながめやり、「この稚君だになかりせば、此所にて討たれ、彼が本意を遂げさすべきに」と、數回歎息なし、こゝをさす方へいでゆきぬ。是れは扨おき爰に又、鏡邊口等と共に戰死したる、渡邊授が妻轡田は、夫討たれぬと聞きしかば、せめて死骸の見まほしく、供をも倶せず只一人、平等院へと急ぎつゝ、迷ひ行くこそ哀

れなれこ夜も既に更深けて、漸く彼所に著きぬれど、軍は疾くにこと果てぬ。鯨波、矢さけびの音もなく、松吹く嵐颯々と、晝の景色に引替へて、寂寥たる堤傳ひ、此所ぞ合戰の場とおぼしくて、斷れたる太刀碎けし兜なんど、彼方此方に落ち散りしを、みるからに先づ涙はふりおち、女の心の淺きより、若し存命へても坐さんかと、「吾が夫、授殿はいづくにぞ。」と、聲の限り呼びけれど、岸打つ浪の音ならで、更に答ふるものもなし。堅田は猶も狂ふが如く、群れゐる鷗たちさわぐ、羽音をそれかと走りよりしが、夫婦の緣の盡きざる故にやあらん、青葉がちなる楊柳原、死骸に撲地と躓きて、星の光によく見れば、疑ひもなき授なり。腹一文字に掻切りて、自ら首をかきおとしたるが、幸ひに敵も持ちさらず、脱ぎ捨てたる鎧とともに、側にありければ、こは、わが夫かとて首を抱き、たゞ涙のあらんかぎり泣きけるが、稍ありて歎きをとゞめ、それ主君の御ためには、命を塵芥よりも輕んじ、義に依つて死するは、武士のならひぞと、生平良人が、いひ諭し給ひしを、愚かにも忘れたり。未だ御首に亡魂の、留まりてゐ給はゞ、無益き周諄とや笑ひ給はんと、佶と心を飜し、涙と共に袖ひきさき、授が首をおしつゝみ、弱る心をとりなほし、宇治橋の邊にたちいづれば、二十日餘りの月ほのぼのと差出でつ。冴けき影によく見るに、此所に神寂びし宮居あり。いかなる神か鎭りますと、華表の額をみあぐるに、橋姫宮と記したり。堅田潸然と涙をながし、一傳へ聞くこの御神は、嫉妬に仍

りて命を亡し給ひしよし、つたふるゆゑにて、今も人を妬しと思ふもの、此の神に願言なせば、成就なすとやらん。思ひいづるも口惜しや、往ぬる年わが夫授君、葛城といふ侍女に忍びあひ、男子をまでまうけ給ひしを、妾は喜びこそせめ、妬しと思ふこゝろ更になしといへど、なにものか讒言して、われ彼等母子を悪み、呪詛なすなんどと流言しけるあひだ、館を出し、今は何地に住りとも告げ給はず。良人に疎まれ、安閑と活きながらへしは、我ながら愚かなり。片時も急く自害して、冥途の夫に分説せん。と死神にやさそはれけん、土を穿ちて死級を填め、懐剣袖におしまきつゝ、吭のくさりを掻切つて、忽ち息絶え死にうせけり。時に川波滔々と漲り、雲居遥かに鳴きわたる、郭公さへ亡魂の化すにやあらんと物凄き、寂寞たる禿倉の扉を、右左におしひらき、立ちいづる女あり。身には氷のごとき練衣を著なし、振亂したる黒髪を、九ツに結び分けしは、宛然角の生ひいでしかとあやまたる。右の手に燈籠を引提げ、左には藁にて作りし人形に、數多の釘をうちたるをたづさへ、徐やかに歩みより、堅田が顔を、さも心持よげにうちゑみやり、高木履にて死骸を撲地と汀に蹴反し、莞爾と笑つてたつたるは、最も怪しき擧動なり。黒丸後にうかゞひゐて、女が姿の異なるに驚き、まづ面を見んとたちよれば、彼の女も紋あしとや思ひけん、袖うち覆ひて立戻れば、又往く先に立塞がり、やらじと止むる曲者あり。その打扮如何となれば、一頂の編笠にて面を隠し、腰に一管の短笛をさしたり。これ

正しく、諸國を廻る梵論寺とはしられぬ。彼の女は氣を焦燥て、突退けて往かんとす。黒丸も心得て二人が間に走りいり、女の袖をひき摑む。此の時、月は雲に隱れ、菖蒲もしらぬ闇なれば、梵論寺も捜り寄り、黒丸にゆきあたり、簑よりこぼるゝ草摺に、足地蹈めて取附きしが、今朝の六浦が血戰に揺絲やきれたりけん、草摺斷離るゝその端舍に女の袖もふッつときれ、尻居に撲と倒るれば、二人が各負ひし傷の内、一時に迸出す小兒の聲こ 折しも夜風烈しくて、月は雲間に現はれつ。彼の女は黒丸が姿を熟々と打守り、何か心に點頭きしが、又も八重雲吹き閉おて、もとの闇とぞなりにける。此の女は是れ何者ぞ、此の梵論寺は是れ何者ぞ。ともに後々の條を讀みて知り給へ。

此の次玉ぶちの條は、是れより十餘箇年を經て、頼朝公世を治めたまひての後なり。

二　たまぶち

世にこゝにあはれらしきは、ふどの吉三の里がよひ、船にも駕籠にもえのらいで、深編笠をかいこんでと、あだし名を小歌にとゞめし、事跡を仔細にとふに、往古征夷大將軍源頼朝公、關の東に旗あげありてより、平家は忽ち榮華の夢覺め、西海の泡ときえ、漸く世の中無爲に屬してのち、相州鎌倉大倉郷に、あらたに殿造りを營み給ひ、御移徙ありければ、諸國の佳客こゝに集ひ、豪家富室門

戸をつらね、その繁昌昔の福原にもおさ〳〵劣らず。此の頃鶴ヶ岡八幡の鳥居ちかき、琵琶小路に富度の吉三とて、樂器をはじめ總ての調度を商ぎ、富度とよぶてふ名をすぐに、世を富みわたる商人ありけり。父は與次右衛門といひつるが、往年吉三に家を讓り程なく落髪して、名も閑樂とあらためければ、母雪吹も諸ともに、佛の御弟子と姿をかへ、隱居を構へん願ひなれど、閑樂よりは二十ばかり年も若く、其の身も健かなるにより、剃髮をとゞまり、いまだ若年の吉三が、活計を助けける。又此の富度屋に伎八佐吾七といふ二人の甲幹あり。此の佐吾七は由緣ありて、ちかき年召抱へしものなれど、心潔白にて、しかも活計のみちを曉え、信だちてつかへければ、閑樂夫婦はよき者を得たりとて、斜ならず喜び、不便を加へてめしつかひぬ。亦彼が妹を菖蒲といひ、天性怜悧しく、その上眉目もいつくしければ、是れをも富度屋によびむかへ、まづ菖蒲は雪吹が養女となし、末は吉三とめあはすべしと、夫婦私かに語らふのみ、白地にはいひいでず、菖蒲はおもひかけずも斯かる富家の處女となり、その喜びいふべうもあらざれど、貧しかりし昔を忘れず、實しげに父母につかへ、吉三を兄のごとく敬ひ、吉三も又菖蒲を妹の如くいたはり、その中の最睦ましきをみて、閑樂、雪吹、佐吾七等も安堵の思ひをなしにける。此の佐吾七はもと武藏相模の境なる侍從川のほとりに住み、六浦の海に漁りして、妹の菖蒲諸共に、いと貧しげなる姿なりしが、閑樂彼を召抱へしそのはじめは、是れより

三百年前にて、吉三いまだ丫角のむかし、頃しも春三月、空いとよく晴れて、諸鳥の聲も長閑なるに、いざや漫行せばやとて、吉三は從者に命じ、樏子偏提を調へさせ、まづ瀬戸明神へ參詣なし、彼方此方を逍遙なすに、海潮漫々として、百國の千帆望にいつて至り、此の頃の暖氣に催されて、花は遠近に咲きみち、水や空、雲や花ともわけがたく、えもいはれざる景色なれば、軈て櫻が本に莚を敷かしめ、少時酒讌を催し、思はず數杯を傾け、吉三は大いに醉ひを發し、此の席を退でけるが、風朗かに面をうちこゝちよきに乘じ、供人をもしたがへず、手おかき櫻の枝を手折り、酒をもりたる壺盧を掛け、蹌々踉々として、風に隨ふ落葉のごとく、水に漂ふ遊魚の思ひして、油堤をうかれ歩きつゝ、手に持つ扇を前なる川にとりおとしけるが、折しも一陣の風おとしきたり、爛漫たる花の梢を吹きちらせば、いづこともなく胡蝶四ッとびいでつ、扇につけたる佩香を、花の香とおもひけん、翼を撲ち鬚を搖かし、おりつあがりつ舞ひあそび、水のまに〳〵ながれ行く、扇を慕ひて飛び廻れば、吉三は興あることにおもひ、これも流れにしたがひて堤をくだり、とある庵の前にいでたり。此の流れは即ち侍從川にて、庵は佐吾七が住家なり。時に障子さとおしあけて、立ち出づる處女あり。年はいまだ二五にすぎずとおぼしく、よろづ臆しがちにて、衣の著なしは童めけど、天性の美形玉のごとく、顏は桃李の花を賺き、膚は雪を束ねしに似たり。これ佐吾七の妹菖蒲なり。吉三も不慮に心うか

れ、何をかなすとまもりゐるに、菖蒲は行器をたづさへつゝ、徐やかに庭におりたち、川水を汲みとりて、手もたゆげに竹縁にはこび、花瓶に水を湛へ、再び川岸にあゆみより、ひきしごきの帶に簪を結び、吉三がとりおとせし扇に投げかけ、打捺みてひきよせんとなしけるが、一ッの蝶に簪やあたりけん、憐むべし、羽をたれて水面に落ち、散り浮く花にともなはれ、いづこともなく流れけり。其の餘の蝴蝶もこれにおどろき、二ッの蝶は吉三が傍徨むほとりにきたりて消え亡せ、又一ッの蝶は障子を開きて窺ひ居たる、佐吾七が懐中に飛びいりければ、佐吾七も深く驚き、障子傍とたてきりぬ。吉三は更にこれをしらず、なほも菖蒲が顔の艶かなるにみとれ居たり。扨菖蒲は辛うじて、扇をとりあげよくみるに、要に佩香を結びさげ、一首の歌を書いつけたり。「五月雨に池の眞菰の水越えて。」とまでは吟じけれど、あとはをとこ文字の走り書きなれば讀み勞ひて暫しうち案ずるを、吉三は片折戸の外面より「いづれ菖蒲とひきぞわづらふ。」といひつゝ立ちつるを熟みるに、彼の眞雅僧都が心を惱ませし、業平が童たちはいさしらず、又世に類なき美少年なりければ、菖蒲は貌さと赧うなし、とどろく胸をやう〳〵におしなだめ「君はいかなる御方にて、何の故にてかかる佳狭き土生の家にはいたらせ給ひし、又妾が名をよくも知り、よびかけ給ひし不審しさよ。」とひければ、吉三打笑ひ「さてはおん身は菖蒲とはよぶならん、我おもはずも歌の句を續ぎ、御身が名をしりたるも不思議なり。

又いまとりあげし其の扇は、わがをさなき筐の跡なり。判官源義經公、悞ちて弓を海中に取落し、敵に小兵なりしらさじと取りかへし給ひしは、八島の軍物語。これはそれに引替へて、我が筐力の扇を、知られじとてぞ來りたり。その扇疾くかへし給へ」といふに菖蒲うち微笑み、一聲には此の歌を吟じ給ひしを、おもひ逢へて妾が名をしらせ參らせ、今又おん物語を聞き侍りて、此の歌は君が水莖の跡なる事を知れり。さあらばいよ／＼返さじ」と袖の振にて扇を抱き、逃ぐるを追うて、おもはず障子の内にたち入り、あたりを見るに、荒れたるながらも家は清氣に造りなし、牀と思しきに雛を飾りたり。吉三は何といひいでん緣もなく、頓て携へきたりし吸筒をとりいだせば、菖蒲もさし心得顔の杯取り下し差出すもいと面慚しげなり。吉三益心持惑ひ、まづ一盞を傾け、杯を菖蒲に與へていひけるは、「夫れ扇を人に送るときは、緣の絶ゆるよしいひ傳へ、ゆゝしとて忌むとも今は甲斐はあらじと詠ぜし歌もあんなれ。我とおん身はさる中にしもあらねば、むすばぬ夢の覺めなんと悔むに似たれど、おもはずも此處にきたり、日頃相馴れしごとく語らひつれば、今となりて緣を斷たんも歎かはし、只管其の扇かへさせ給へ」と聞ゆれば、菖蒲うつくしくうち笑ひ、「扇を返しまゐらすは、いとやすきことに侍へど、かかる折もあらずば、いかでか賤が伏屋に、いたらせ給ふことのあるべき、此の扇強ちに惜しと思さば、日毎に徒然を訪はせ給へ、自來かへし申さん期もあるべし。君が投げの言葉

を貢として、答へまゐらすも、いとをさなし」とて止みぬ。吉三は傀儡の雛を指し「夫れ源氏物語に上に餘りぬる人は、雛遊びは忘れ侍るものぞとあれば、往古は唯童女が手遊びなんどより、起りしものとはみゆれど、今は押靡べて女夫の繁榮をことほぎ水魚の中を祝するものとはなれり。おん身も此のごとく雛を祭るは、はやくも、いひかはしつる良人ありや、又はをさなき其の折から、杯は夫婦になすべしと、親と親とが結契けしかもやある、兎にも何にも御身の素性聞かまほし。」と問ひければ、菖蒲答へて「妾は元京都の者なるが、父も母も三歳の時亡せ給ひ、一人の兄を力にて、此の國にうつり住み、六浦の海に網引して、細き煙もたえだえに、宿もさだめぬ海士の子の、いかでか結名けし人のあるべきぞ。」といふに、吉三又曰く「世には似たる事もあるものかな、われも稚き時は京都がたの者なるが、往ぬる年此の國に住居を移し、今は琵琶小路にておろおろ人にも知られたる富度の吉三といふ者なり。郷にもきこゆるごとく、落せし扇のあとを慕ひ、圖らずも此の家に來り、一盞を酌みかはすも宿世よりの契りなるらめ。殊におん身が便りなき物がたりを聞くに堪へず、うちつけなることにはあれど、若し我に仕へなば、兄も共に世をやすくおくらすべし。」といへば、菖蒲は深く恥ぢて、はかばかしくも答へず。吉三は緒心の裏を語らんとなしけるとき、遠寺の鐘寂々と響き、塒爭ふ鳥の聲もかしましく、はや、藤向々たるに驚き、吉三も殘り多きに座を立ちあがり、又異日來るべしと

ちかひ、退でんとなすに、折よく從者一人走り來り、「君はこれに忍ばせ給ひしか、かくとは知らで、界地藏大岡村の邊までも、人を分けて擇ね參らせし。」といひつゝ、吉三に從ひてたちかへりぬ。かくて後吉三は氷人を頼み、菖蒲が許へ通ふよし、閑樂夫婦風かに傳へ聞きて、彼いまだ定まれる妻もあらず、これぞ幸ひなりと思ひしが、よくその素性を聞き果てて後婚姻をとりむすぶとも遲からじと、其の日吉三がむかひにいたりし從者を招きて、彼等が住所を聞きおき、折をみて佐吾七を甲第に召抱へ、さて吉三が忍びあひしとは更にしらぬ面持にて、前にもいふごとく、菖蒲を伊吹が養女とはなしけるなりとぞ。

綟手摺昔木偶卷之一　終

綟手摺昔木偶　卷之二

江戸　柳亭種彦作

四　こぢよろで

此の頃鎌倉扇ヶ谷なる山端のかたに、新たの花街を開き、數多の娼婦紅粉を粧ひ、軒にたち籬に傍うて客を招きければ、此のところをさして假粧坂とよびなしける。漸に賑しくなりゆくまゝに、娼家女肆連延と建つゞき、昔の江口神崎にも劣らず、こゝに菱をもて家號とする何某が長の許に、薫となづけわきて時めきたる遊君ありけり。渠は虞氏西施が容貌をかね、衣通姫小野小町が秀麗に似つるといふにもあらず、天性の清らかなるは尋常にてあれど、頗る俠勇の心ありて義氣おさ〳〵男子に恥ぢず、暇ある時は和漢の書に亙り、螢雪の勤め怠らず、歌をよみ詩を作り、かつ箏にさへ工なれば、時の人渠が才あるを慕ひ、あるひは紙絹をよせ、或は扇をことづけて、書をのぞみ、歌をもとむるもの、前後爭へども、己が身を卑下して、漫りに筆を下さず、強ひて乞ふ者あれば常にいふ、「自は倡を

賣り色をいはず、寶財を盗むの賊なり。かかる風流たる藝にたちさはるべき器におはさぬことと聞く醉して承け引く氣色なし。たゞ巨杯を傾けて醉ふことなく、終夜眠らずして、姿の亂れざるのみ自ら誇り、よそ目にはなやぎて親しみやすきを專らとし、淡く粧ひ艶かに彩らざるは、情は節にあらずとおもひてなるべし。かかりければ此の樗花の裏、艶色は遙か薫にまさりし伯婦も多かれど、薫が心操と嗇にはおよぶべき者もなく、其の名一時に高く、遂には花の魁とよばれける。かくていづれの年にやありけん、正月上旬のことなりけるが、松立てわたす大路のさまの、常には異なりてみゆるものから、花街はわけて人の往來もしげく、あまたの遊君裝ひかざり、一際花麗にいでたちぬ。薫もこの日生常に往き交ふ茶屋のもとに、客の來つる由告げきたれば、花車女童なんど從へ徐やかに立ち出でしが、袿の摺箔は眩きまで春の日影に輝き、さとこぼるゝ衣の香に、梅の匂ひも氣壓され、なよやかなる鬘の髪に挿せる色なきこゝちせらるゝ。玳瑁の簪は頭上の花鬘とみゆれど、更に装める樣へなく、綾錦の衣紋をたゞめ、天衣もかくやとおもはれて、しかも塵垢の汚れなし。只これ天人の雲を離れ、假りに下界に遊ぶにやあらん。こゝに浪人と見え、編笠ふかぐ\とかぶり、垢づきし紙衣を着て、長脇差を帶びたる男、簾に薫が往くさきに、進みては顧み、後にひき下りては見送り、思ひありげに行き小止み、稍もすれば袖摺りあうて、ものいひたげなるを、花車は大いにうち腹だち、一觸にふれ心をつくれど、

上下も傘も持たねば、說經讀むともおもはれず、案山子めきたる姿にて、太夫主のゆくさきを妨ぐるは、世に便りなき浪々の身のうへと合力を望むにやあらん、此の薫主を情ぶかき性なりとは、花街は更なり近鄕に知らざる者なし。故由を聞えなば金を與へ給ふこともあるべきなれど、今は折もあしきにかさねて來るべし」といへば、浪人は尙近くより「我も情ふかき薫の君なることはよくも知り、頼みまゐらせたき由緣ありて、花街にきたること數なれど、寠しき姿を省み、今日まではいひもいです。まつたく合力を請くべき小臣が心ならず。情と思ひ、わが頼みの一條、憂くとも聞き果てて、願ひをかなへたまはれ」と丁寧にいひければ、奚奴は呵々と打笑ひ、籲により汝が爲體をみるに、あき給ふ太夫主なることを知り、僞りの辭を制へ、絕えて程へし見なりなどと、薫の君に恥辱をあたへ、金を貪る心なるべし、其所速かに立去らずば辛き目みせん」と息まきて罵れど、浪人は耳にもかけず、「只管情をかけ給へ」と寄らまくするを、衿首摑んで突き退け「いよ／＼拐兒にうたがひなし、其奴擊てよ」と罵きぬ。薫は忙はしく奚男を押止め「妾は情を賣ふ身なり、情とあれば聞き流さんも本意ならず、まづ待たれよ」と褄かいとつて彼の浪人の側に歩みより「賤しき妾が名をしり給ひ、頼みたきと宣はすのは、何なる事にや侍る。まづ此方へ來り給へよ」と、茶屋の前なる牀机を借りて腰うちかくれば、浪人頓て懷より反古に包みし楊枝をまた取りいだし「この楊枝にておん身が前齒を

さし、再びわれに與へ給へ、隣に願ひありといひつるは此の事なり。」といふに、傍は不審しき面ぶりして「いと易き事にはあれど、妾ふつに心得ず、詳かに緣由を告げ給へ」と問へど、頭には答へもなさず、少時ありていひけるは、「小子は原西國武士水泡信夫之助といへる者、故ありて浪人なし、官途の望みは絶えたれど、又他に漏らしがたき願ひありて當地に來り、往ぬる年八月十五日鶴か岡八幡の放生會に詣でしとき、御身も客に誘引はれ、路のきぶりの物がたり、我は何の心もなく跡に從ひ聞きゐたるが、強ち媚をすゝめもやらず、語の文に情をふくみ、ものいひざまの事馴れたる、噫、遊君はかくぞありたきもの、容止の美麗びたるは花街に數多あるべきが、おん身の如き郎才を兼ねたる婦人はあるべからずと、おもはず思ふがおもひの種、たちかへりても其方の俤、我がめざきにありありと、見ゆるは心の迷ひぞと、思ひきりつゝ寐る夜半は、會ひてふ夢を曉の、鐘のひゞきに覺されて、人しなけれど恥かしく、性根もくさる錆刀、心もいつか亂燒、世わたる計に突きどめの、削る楊枝のそれよりも、手足も細る戀病とは、淺ましき心ぞと、われと我が身に飽きはてても、いかなる宿世の報いにや、忘れんと思ふに忘られず、おん身と一盞を酌みかはし、せめては思ひをはらさんと、賄ふに甲斐も嵐ふく、朝も紙衣一重にて、幅は草履にはく許り、僅か一夜の揚代を、調へん事もかなひがたく、思ひつきたる手細工の其の楊枝、五香にあてて給はらば、楊は翠の帳の裏、心の花は紅

の、閨の契りに異ならず。吾が爲の不死の藥、ためしを菊の杯を、くみ流すおもひして煩惱の絆を斷ち、迷ひの雲を消除して、正覺を得ることもあらんと、佛とよび、觀音と名づけしも、おなじ流れに萍の、花に匂ひはあらねども、名にし薫の君なれば、寠れ、袖にも香をとめて、願ひを果させ給はれ。」と、切なる思ひに恥をも捨て、面はさだかに見えねども、引結びたる編笠の、紐をつたうて涙の露、消えなん憂身をかこちければ、哀れをしらざる花車さへも、理とや思ひけん、瞼しばゝゝうちたゝき、さらぬ方をながめゐたり。薫は信夫之助が信やかに物がたるを、きくからにまづ胸塞がり、少時うち泣きけるが、漸く涙かき拂ひ滿面に笑みを含み「總て遊君の身のうへは、人に多くおもはるるをもて歡びとなす。縱ひ空言にもあれ、思ふとあれば嬉しきに、まいてや猛き武士を、勞はせまゐらせしは、此うへもなき妾が譽にこそ侍る。かく數多の人も往き交ふ街にて、恥をも忘れ、かき口說き給ひしは、切なる御心ゆゑならめと、編笠に隔りて、御顏はみえねども、思ひ焦るゝ妾が心も今日よりは君と齊しかるべし。さりながらこゝをよく聞きわけ給へ、此の所にて親しく君とかたる時は、あだし名の巷にもれ、浮きたる心と、世の人に嘲られんもうしろめたし。折をうかゞひ、揚屋が許へ通ひ給へ、客とかたるは遊君の、常にしあれば厭ひなし。その時こそ妾が心の裏をもきこえまゐらせん」と、連れ來りし雛妓に密語き服紗包をとりいださせ、信夫之助が手にわたせば、信夫之助は彼の

服紗包の重きをもて、金なることを知り、忿然としてたちあがり、物をもいはで薫が面に投げつくれば、包ほどけ金みだれ、時にもあらぬ荼蘼の、花を散らして身近くより、「おん身嘗て、和漢の書を讀みたるよし、財をもつて交はる者は財盡きて交はり絶す、色をもつて交はる者は、華落ちて愛衰ふ、といふことあり、鸚のやうにはいひつれど、我おん身が一夜の揚代をとゝのへざるにもあらず、路頭にて、恥辱を顧みずいひよりしは、我が心の潔きをしらせ、交はりに色と財とをもつてせず、心をもて盟ひとなさんとおもひしに、多なる金をおくりしは、花車とやらんがいひつるごとく、我を物ねだりに來ぬる者とや譏りけん。かく事を辨へざる粉頭ともしらで、年月慕ひしはわが悞りぞ。」と、立たらんとなしければ、薫は周章て携りつき「こは妾が思ひあやまちなり、赦させ給へ。」と打泣きて、ひき留むるを、信太之助は聞きもいれず、突きのけて往かんとす。「否かへさじ。」と、猶もとゞむる薫が手さき、胸さかとつてひきまはし、編笠の紐おもはずもひき解き、笠は地上に擲的落ち、此の時初めて、信太之助が面をみるに、年は二十ばかりとおぼしく、色白く眉秀で、世に類なき美男子なり。情の道は事なれし薫なれど、胸とつくとをどり、赧然たる面をたれ、稍ありていひけるは、「諄々も故なき金を贈りたるは妾が愆りなり、只管に宥させ給へ。」と窺ひより、信太之助が中刀抜きもち、雪を欺く腕をさしのべ、あはや突き刺いて盟をたてんとなしければ、信太之助忙はしくおし止め、「我一

目の怒りに乗り、難面き事のみいひつれど、實におん身が赤心を知らざるにはあらず、假にも父母の遺體を破ることなかれ。」といひ和めければ、薫も心おちゐて女童をまねき、「妾俄に痞に苦しむといつはり、今宵の客をかへし參らせよ。」といひやり、信夫之助を、誘引ひ往かんとなしければ、火車を初め奚男等もよきこととはおもはねど、薫が心に露ばかりも悖ることあれば、言ひ懲らす事の常なる故、強ちにも止めず、信夫之助はたゞに紙衣一重を著て、薫が羅綾の袂と連ね、更に恥ぢらふ色なく高樓に登りける。此の女郎は菱屋とて、後に長堤を阻て、前に清渠をのぞみ、曲屋歩擷いさぎよく制りなしたり。さて信夫之助は、窶しき姿にて、錦茵のうへに坐し、頓て懐より近江布の汗巾を財布をいだし、「よきに計らひてよ。」と雛妓に渡しければ、うちひらくに裏に五十兩に餘る金あり。そもそも此の信夫之助は、鄕にいへるごとく、浪々の身にて、外に寸祿なく内に半錢を貯へず、自ら清貧を甘んじ、頗る聖賢の書にわたりし義男なりしが、何なる惡因緣にや往ぬる年この薫に戀戀なし、其のおもひをはらさんと、千辛萬苦して調へし金なれば、明日は柴鹽の料なしといへど、これを惜しとも思はず、みなそれ〴〵に分ち與へ、塵も殘さずつかひ盡しけるにより、火車は忽地笑みを作り、數多の歌妓を叫び集ひ、明燭を炳け佳酒を酌み、鄕に信夫之助を嘲りし事など後悔なしけり。とかく、なす間に夜も更ければ薫は座をたち、信夫之助をいざなひ、重幄を披き、綺衾を援いて打臥しける

が、春の夜の明け易く、いろ鷄の聲はなやぎてうたふに驚き、信夫之助和ら起き出でて、別れを告げて立ち出でんとなしける時、薫少時とひき止め、「春ながらまだ朝風は身に染みて肌寒きに、これ着てかへり給へ。」と、取出すをみれば、信夫之助が紋を染めし黑小袖と、おなじ色の羽織なり。これは紙衣の火打に紋所の殘りしをみて、一夜のうちにとゝのへしなるべし。信夫之助も彼が心ざしを感じ、頓て紙衣と脱ぎかへつ、昨日の姿ひき替へて、はなやかに出でたちければ、薫は女童ひきつれて出口まで見送りける。かくてのちしばしば艷書をもてまねけど、信夫之助絶えて薫が許にいたらず。おもふに彼娼婦の艷色に迷うて、身上を忘るべき器にあらず、一旦薫が才に愛戀し、年月辛苦して調へし金を、たゞ一夜につかひ果し、こゝろざしを遂げて、再び花街に通はざるなるべし。總て花街の風俗にて、招いでいたらざるは、薄情とのみこゝろえ、草のごとく捨て、忽ちおもひ絶ゆること、遊君の性なれど、薫は却つて信夫之助が丈夫の資性あることを感じ、終身をまかすはこの人なりと、心の裏に誓ひ、絶えず消息して安否を問ひぬ。かくて春の末より、薫は酷きものを好み、たゞならぬ氣色なれば、まづ醫師を招きてみせしむるに、懷妊なるよしこたへぬ。去年より心持勞はしとて、客をむかふる毎に只酒をすゝむるのみ、絶えて横陳せしことなし。僅か一夜のあふせに、信夫之助が種を宿せしは、宿世より結びおきつる縁ならめと、うち驚かれ、且恥ぢらひて人に會ふ事なし。此の菱屋の長

露次郎といふに、情ある男なれば、薫をあつくいたはり、いとやすらかに玉のごとくの男子を産みおとさせけるが、思ふむねありて女子なりと披露し、名を信夫とよび、揚屋に往き交ふ時は、雛妓に抱かせ、更に子をまうけしことをつゝまず。ときの人彼が心操の直なるを稱し、全盛昔に彌增しけりとなん。此の一條の物がたりは吉三瀬戸明神へ詣で、菖蒲をみそめしと同年なり。是れは扨おき富度屋の母雪吹、ある日吉三をよびていひけるは「いつぞは聞えんと思ひしが、折なくて捨ておきたり。佐吾七の妹菖蒲を妾が養女となしたるは、其方と末はめやはすべき心なりしが、性質も怜悧しく、二人が中も睦まじきに、閑樂殿も喜びて、近きに婚姻をなさせべき用意をなし給へり。此のうへとても夫婦中よく活計のみち怠らず、初孫儲けて歡ばせ給へ」といふに、吉三曰く「母うへのおんこゝろざし、忝くは侍へど、菖蒲と祝言とりむすび候ことは、聊か由緣ありて承引き難し」と、思ひの外なる應へなれば、雪吹少時うち案じ、微笑ひ「商家ながら此の鎌倉の舊家なれば、あれ、富度屋の娘を見よ、歌妓倡婦の姿ぞと、不良人にいはるゝが口惜しさ、國司の姫君の姿態をうつさせ、上代めかしき風俗ゆゑ、其方の心にそまぬにやあらん。それも母の僻より起る事、是れよりは今樣の小袖を著せ、髮のかゝりもあらためなば、花街とやらんの太夫にもおさ〳〵おとらぬ菖蒲が顏ばせ、婚姻の事承引きて、夫婦が心おちるさせ給はれ。」と、壯年の吉三なれど、童の如くおもひ、さま〴〵歎

しなごむるも、親の心のたらひとは知られぬ。吉三又曰く、「いかにことわけ宣ふとも、我はふかき願ひありて、妻と呼ばんはいと苦し。此のことはいくたびも御言葉に悖り候ながら。」と座を立たんとなす留る雪吹しかととらへ、「やれ吉三いふべき事のなほあれば、まづ待つべし。」と座に引居ゑ、往ぬる年彌生の頃、御身櫻狩にいでし時、不圖菖蒲が伏屋を訪ひ、互におもふ心の底をかたりあひ、忍び會ふと聞きつるゆゑ、それとはなしによびむかへ、娘となさしあの菖蒲、今となりて祝言を、辭退むはふかき由縁あるべし、仔細を聞かぬその中は、此の座をばたたせじ。」と、常に替りし母の怒り、吉三大いに迷惑なし、「宣ふ如く菖蒲此の家にいたらざる昔、某假りに戯れしことなきにもあらず。其の時彼が赤貧なるを見て、不便に思ひ、我が家にきたらば召仕ふべしとはきこえつれど、妻となすべしとは曾ていはず、側室となし給はば、兎も角も御心に任せん、婚姻のことは努々も許させ給へ。」といひさして、一室のうちへ走りいりぬ。雪吹も吉三が後に從ひ、なほ事を聞き果さん氣勢なれば、紙門を隔てて聞きゐたる、菖蒲は周章て走りいで、「仔細は詳に聞き侍る、これには由縁あることなるべし、妾不便と思ひ給はば、只管御心和げたまへ。妾が身より事起り、いつになき御腹立ゐるからに、胸もさくる許りに侍る。」と、言を盡して歎きければ、雪吹も漸く心解け、菖蒲が前も面なくやありけん、物も一切いはでうちしをれつゝ入りにける。菖蒲はあとに吐息して、一人言にいひけるは、「世に有り

難きは母さまの御心、又吉三さまの願ひある身と宣ひて、祝言してたまはらぬは、こゝろえぬことなれど、それも我が身の拙きゆゑ、たれを恨みん縁もなしとはいへ、餘所の色香ある花にやくらし給ふかこ」と、思ひ屈したる背より、菖蒲が袖をそろ／＼ひくは、雪吹が甥の田子松といふ者なり。彼は未だ年若けれど、奸曲邪智の愚者にて、その上好色なりければ、さま／＼のことをしいだし、詮方なく往ぬる年勘當して、鎌倉によせもつけざりしが、近會雪吹が亡父二十七回忌の法事の折、閑樂さまざまに詫びて雪吹を和め、よび反すとそのまゝ、この菖蒲に懸想して、折もがなと待ちゐたるに、今彼が歎息を聞き、まづ涙を落すさまにもてなし「いふまじとは思へども、餘りとや心根がいとほしさに告げまゐらする事のあり。おん身知らずや、吉三は去る頃より假粧坂の遊君何某が許へ通ひ、やがて彼を妻となすべき契約あれば、今の如くいひつゐならめ。さすれば其方は疎んぜられ、いかなる身にやなるべし」と信實ていひければ、菖蒲うち微笑み「妾が心に初めより、吉三さまを夫とし思はば、かかることをきくにつけ、妬み心も彌増さんが、いかに母上不便を加へ給ふとも、妾は貧しき昔をわすれず、水仕女の心なれば、たとひあだし女をよびむかへ給ふとも、更に恨めしとはおもひ侍らず」といふに田子松横手を打ち「おん身は賢女とやいはん烈女とや譽むべき。しかし強ちにみちをまもるも、愚かなるうちとやらん、まづ我がいふことを聞き給へ。原來此の富度屋は、繼母雪吹が仕

似せ来りし家にして、閑楽は吉三を誘れての贅壻、その吉三がありごとくの身持なれば、季母の心しだいにて、吉三は更なり從父の閑楽まで追ひ出されんもはかり難し。不便や人の門にたち、破れ扇に古編笠、さる程に受衰へたる讀經讀みにもなれ得まじ。さある時は、我ならで、家を續ぐ者あるべからず。水性の吉三にかゝづらひ、操を守りて老いくちんよりは、我が心に從ふべしことと、樣々にかき口說きけるによりて、菖蒲は怜悧しき性ながら、まだ世に馴れぬ少女なれば、彼が不法の詞をきくに絶えず、うち腹だちていひけるは、母上にさる回僻みし御心のなきことは、却つて妾よくもしれり。よしそれとても吉三さまと諸共に追ひ出されなば、讒謗便なし。宣ふごとく袖乞して、世を甘身しく送るとも、御身のやうなる驕けき男につれそひ、侍女に冊かれ、内君とよばれんより、遙かに勝り侍らん、この後かゝるみちならぬ事をきこえたまはば、母上に告げ參らせ、言ひ懲し申さんことと、袖を振りて田子松が面を撃ち、一室の裏へ走りいりぬ。田子松は手に持つ玉を奪はれしごとく、惘然としてゐたりけるが、忽地背のかたに、呵々と笑ふ聲のなしければ、誰ぞなりやと顧みれば、これ甲斐の段八なり。さて田子松にむかひ、和主がいひつるを詳に聞きしが、兎を見て鷹を放つとやらん、せい急にしてしかも事闕ひがたし。若し彼を手にいれんと思さば、まづ吉三と縁を斷らせ給へ。そはさま〲の計策あり。私だも我も魚形なれば、なみ〱のことにては承引くまじ。といふに、田子松點頭き、

一御身の語理あり、何等計事を施すべしや」と問ふ。段八又曰く、「和主熟に、吉三は假粧坂なる遊君の許へ通ひつる由いひたるが、口にいづる儘の空言なるべし。彼は姿も閑雅びたれど、衣服を著て恥とせず、只管活計の道を勵み、花街にはたちもいらじ。」といふに田子松不審しき面持して、「御身初めに我を色邪なりといひつるさへ腹立たしかりしに、今又彼を閑雅びたりと稱め、頻りに吉三が美をのみあげ給ふ事心得ず。」といへば、段八打笑ひ、「これ吉三をよきものにせん起りなり。かかる篤實なるものを烟花に誘ひ、色と酒とをすゝむる時は、鐵腸却つて蕩け易く、猛虎忽ち羊となり、鳳凰頓に家鴨と變ぜん、そのしかたは箇樣々々」と、耳に口をよせて密語けば、田子松大いに喜び呵々と笑ふを、音たかしと押しとゞめ、なほも奸計を謀じ合はせける。

五　ふじおろし

かくて遊君薫は、信夫が健かに成長なすをたのしみ、夢のまに三年を過しけるが、今において信夫之助絶えて花街にいたらず、只折にふれ、消息なすのみなり。然るに春の頃より信夫之助風の心持と打臥し、はじめのほどはさせる勞きにもあらざりしが、漸に病おもりかになりゆき、今は枕をもあげ難く、命も旦夕に迫りし由、筆をもて告げこしければ、薫が歎き大かたならず、長露次郎にかくとき

こえ、半日の暇を得て、信夫を老女に抱かせ、信夫之助が隠家は、花ヶ谷なるよし、豫て聞きおきければ、いそぎ彼所にいたりけるに、樹木森々として更にことゝふ人もなく、ほと／＼索ね侘びけるとき、何所ともなく鉦鼓の聲きこえければ、さてはこの林のうちに、住む人ありとおもひとり、信たが老女に碎米薺など摘みとらせ、餘念なく遊びゐるを幸ひ、薫はたゞ一人供をも倶せず、彼の鉦の音を知方にて尋ねよれば、軒端傾き壁おちて、荒れまさりたる庵あり、果せるかなと猶ちかくすゝみ、廬簾の間より窺ひみるに、極めてまづしき人の住家と思はれ、蜘は所えがほに網をむすび、塵は一寸ばかり積り總ての調度も見えず、佛壇もなきにや、西窗のもとに坐し、鉦うちならす其の人は、紛ふかたなき信夫之助なり　いたく病み勞れしとみえ、髪も亂れ、身うち垢づき、ありしに替る面影をみるに薫は胸せまり、つと走りいりて信夫之助にとり携り、泣くより外にことばもなし。信夫之助も鉦うち止め薫をみて大いに驚き、「おん身いかにしてか此の家には來りし。更に現とも覺えず。」と問ひぬ。

此の時薫は信夫之助が勞きを訪はんため、長にきこえ宥しを許けてのち、信夫もろともいたりしよし仔細に語り、「おもはず妾先だちて此の處にきたり、彼等は尋ね惑ふべし、かくと告げて歡ばさん。」と立たんとするを信夫之助押止め、「すべて此の所の路は蜘手に分れど、悉く死巷にて、うち捨ておくとも、此の家の前にめぐりいでんは必定せり。まづおん身にいふべき事あり。」と、病に弱る膝ふみし

ふ、醉ひよつて薫が小腕首に綟ぢあげ、あはやと喚ぶを、聲立てさせじと、手拭とつて猿轡、足にまとへる葛籠の繩をこれ幸ひと高手小手に縛りあげ「いかに薫、無慙のことをなす物と心に怨みおもはんが、是れには一條の物がたりあり、心を定めよく聞くべし」と、やをらもとの座に直り、我深き願ひありて、往ぬる年此の鎌倉に來りしが、不幸にして宿意を遂げず、剩へかくの如く病に苦しみ、所詮本復なすべしともおぼえず、甲斐なき命をながらへて、病に仍つて死なんこと、武士たる者の本意にあらず、今月今日生害なさんと、おもひ極めしその折ふし、おん身此の家に來りしは、いと〳〵ふかき縁ならめ。しかはあれど、女の心の弱きより、我が切腹をとゞめ妨げもなさんかと、此の理をきこえざるさきにかくははからひたり。おん身と一夜の横隙に、まうけし一子を信夫となづけ、實は男子なるよし聞きおよぶ。彼十五歳にいたらば、此の一品を與へ給へ」と、錦の袋を取りいだし、「此の中には我が種性を祕め、遺言の仔細をかきて籠めおきたり、其の期をまたず、漫りに開く事なかれ」と、いひつゝ兩肌押脱げば、薫は視るに眼もくれて、心もきゆる氷の刃、信夫之助心徐かに脇腹に突きたてたり。まづ待ち給へも聲出でず、寄らんとすれど、搦まれし繩にひかれて尻居に倒れ、繋げる犬の柱を遶る苦しみを、信夫之助も不便と思ひ「其方の歎きも尤もなれど、是れ皆宿世の惡業を贖ふとおもはゆれば、未來は極樂に生まれ女夫仲よくそひとげん。我なき後も、一香一華の供養

に及ばず、信夫だに健かにおひたて給はらば、これぞかへなき追善なり。噫、諺言には似つれども、此の信夫之助ほど薄命のものはあらじ。父にも母にも幼き時別れまゐらせ、貧苦に迫つて一日安堵の思ひなく、現在我が子の信夫にさへ、義をまもる心からつひに會ひつる事もなし。この世の餘波に只一目あはんものをと、昨日までは思ひつれど、不熟愛らしき顔みたらんには、思ひ切つたる生害も未練の心や起らんかと、このまゝ死する心の裏、いかばかり苦しからん、推量せよ。」といひつゝも、猶切目ながにひきまはせば、薫は胸を擘かるゝ思ひ、力を極めてひけばなほ、結目も締る縛り繩、輪廻の絆にからまれて、おなじ思ひに信夫之助、涙のあめのぬれ燕、翼縮なる縄されて、轉ぶ薫を膝に引敷き、刀逆手にとりなほし、吭掻切つて絳絶えたり。薫は死骸にとりすがり、聲の限り泣きけるが、時に風あれ松の響きものすごく、ありし庵も幻に消えうせ、愕然として眠り覺めぬ。薫は昨日長に暇をこひ、今日なん信夫之助が許を訪はめと、おもひ寐の一夢なり。扨は夢にてありけるかと、少しはたのみある心持して、急ぎ支度をとゝのへ、信夫を老女に抱かするも、なほ夢に似て胸まつふさがりぬ。從者はかかることありともしらで、嘐きわたり、程なく花ヶ谷にいたりけるか、木立のものふりたるより、路の蜘手にわたりしまで、夢に視つるに一點の違ひなし。此所ぞと思へるに果して白屋あり。從者が喧ふもまたず、薫は庵のうちにたちいり見れば、憐むべし、信夫之助は腹一文字にかき

きり、錦の袋を左の手に攫み、俯臥に倒れゐたり。薫は周章て走りより、亡骸を押動かし、歎き果つべうも見えざれば、從ひきたりし者共も、かつ駭き、かつ怪しみ、さらにいふべきことを知らず。薫暫ありて、はふり落つる涙をとゞめ、夢中の事ども詳にかたり、近鄰の人につけ、とかくなして信夫之助が亡骸をば、葛原岡に埋めけり。怪しむべし、信夫之助が怨鬼、薫が閨房にきたりて、想ひを夢に告げつるもの歟、薫が夢魂花ヶ谷にいたりて、信夫之助が最後を視はてつるもの歟、兎まれ角まれ、奇なることにあらずや。さる程に富度屋にては吉三が婚縁を承諾せざるよしを、雪吹は閑樂に聞えければ、「我折をゐていひきかせ、兎にも角にも承引かすべし」といひつゝ、世事にかゝつらひ徒らに四五箇月を經て夏の半にもなりぬ。晝のほどは炎暑蒸すがごとく、堪へがたかりしも、日傾きて漸く涼風を生じ、蜩の聲遠里にきこえ、彈きすてたりし箏の絲に、自來響きあるも、瀧のよどみを聞くこゝちして、やゝ暑さをわすれける頃、吉三は竹縁に蒲筵をはしらせ、只ひとり涼みをれば、菖蒲も一室たちいでつ、種々の草うゑならべし、花壇に水を濺ぐべしと、手にとる如露も物思ひ、ある身はきえんと悲しくて、まだ花咲かぬ絲萩に、むすばぬ縁をうち恨めど、いはで心にしのぶぐさ、あくがれいづる魂かとも、見あぐる軒の螢籠、ひかり仄かに暮すぎて、人しなければ菖蒲は吉三が側につい居て、「母うへは嚮に八幡宮に詣で給ふとて、田子松どのを誘引ひ出でゆき給ひ、今に歸り來まさ

ぬを、いかなることぞと、妾は心もやすからず、それのみならで頃日より、何をか思ひ勞ひ給ひ、御顏色も常ならず、君はさは覺さずや」と、流石に白意を、白地にも聞えかね、かくはいふぞと吉三ははやくも推しながら、呵々とうち笑ひ「さることあらばおん身にきこえ給ふべし、御心の裏にとゞめ、思ひ屈し給ふ母うへの性ならず」と、たゞ一言にいひ破られ、菖蒲はとかうの應へもなく、落つる涙を兩袖にうち拂ひつゝ、紛らせば、吉三も團扇まさぐりて、話とだえし折こそあれ、旅裝の男後門の外面に徬徨み、富度屋の奧を窺ひ見て、小腰をかゞめ歩み來り「和尙は佐吾七殿にて坐すか、さあらば仲父島九郎殿より、直に渡し申せとある、書簡を持ちきたり候ぞ」といへば、吉三は何心なく手に取上げ「佐吾七々々々」と喚ばはるにて、彼の男人違へなるを心づき、吉三が持てる書簡に手をかけ「和尙佐吾七殿にてあらざれば是れ返し給へ、譴も直に渡せとあるを、外人には進らせ難し」と、身うち傾りに戰ひ、書簡を奪ひて遁れんとすれば、吉三大いにあやしみ、彼の男が攫的投げのけ、讀おしきりて讀みくだし、翻然と怒りを起し「佐吾七々々々」とよびたつるもあわたゞしければ、なにごとなるやと走り出づる、佐吾七が膝のほとりに、彼の書簡を投げつけ「おのれ密通なせし女を妹なりといつはり、主を瞞く天罰、忽迺その身に報いきて、その書簡我が眼にかゝりしは、傾く運と思ひあきらめ、疾く此の家を出でゆくべし」と、いきまきて罵れば、佐吾七ふつに心得ず、怒る〳〵披き

みるに、其の旨趣に曰ふ「其方菖蒲とやらん女と私情を通じ、剰へ妹なりといつはり、富度屋とかいへる豪家の害となし、彼の家を奪はんと、奸計をめぐらすよし風かに聞けり。かくては遂に事露覚れ、罪せられんは一定せり。はやく心を轉し、とく〳〵國にたち返るべし」と、なほ意見の趣詳らに演べ、佐吾七どのへ烏九郎と記したり。佐吾七大いに驚き慌しくいひけるは、「すべて此の件の事は、小子嘗て覺えなし。殊に仲父なりといひこしたる、烏九郎とやらんは、名を聞くさへも初めなり、其奴ひき捕へて糺問なさば、こと分明に知るべきなり」と、飛び懸らんとなしければ、彼の男周章てまどひ、外面の方へ迯けいづる。つゞいて追ひゆく佐吾七を、段八は走りいで、「おのれ主人の疑ひたいひも解かず、事にかこつけ迯れんとは、はらぐろなり」といひつゝも、衿首掴んで動かせず。無念とおもへど佐吾七は、主人といふに力もぬけ、手むかひもなし得ざれば、段八は心持よげに呵々と笑ひ「頃日汝が人もなげなる行跡を、心憎くはおもひしが、かゝる計策ありとはしらざ。速かに告逃なさずば辛き目みせん」と烏府おつとり、散々に打擲なす、菖蒲はたゞ泣きくづをれ、思ひ辨ふかたもなく、兄が無實の災難を、視るに堪へかね走りより、「まづ待ち給へ」と聞きいれず、打てばこぼるゝ櫻炭、雪の腕に力を究め、止むる菖蒲を蹴返せば、起き上つてむしぶりつく、袂の裾に足を纒はれ、撞と尻合に倒るゝ段八、佐吾七はその間に、外面に驅け出で偖とみれば、彼の曲者の往方は

更にしれざりけり。此の物音の奥にや泄れけん、閑樂も一室をたち出で、まづ菖蒲を扶け起し、一間よりの爲體は、紙門を隔てゝよくも聞けり。やをれ殷八主の言もまたず、佐吾七を打擲なし、その間に書簡を持ち來りし男さへとり逃しつる愚者、かかりせば汝も罪なきにあらずと、深くいひ懲され殷八も恐れをなし、脱ぎたる肌に袖をひきかけ、紮けし裾をつくろひ、とかくして下の方に屈まり居れり。浩かる處へ年の頃四十に近きが、亂れし髪を藁にて結び、綴りし一重衣を着て、貌寠しくは見ゆれど、眉目ざまは艶妖なるが、柴折戸を慌はしく押開き、恥ぢらふ色なく佐吾七が胸前を無手と捕へければ、佐吾七大いに驚きたたんとするを、彼の女はうち泣きつゝ手を放たず、一晌、此方故に纏許の患苦して、索ね會ひつる甲斐もなく、言葉を交さず離れんとは、心きたなし佐吾七殿。と、よゝと聲たて泣き臥せば、佐吾七は益呆れ、おのれは一定物に狂ふ花児なるべし、きたなきだに我は濡衣着て、ほしもあへぬ其の折から、かかる事を怨ずれば、いよ／＼我に疑ひのかゝりやせん、疾く立去れ。と蹴飛ばせば、撻的倒れて起きも上らず。閑樂も訝りて、彼の女を熟視やり、其奴は樋か塔の街の乞食なりとおぼしく、大行寺のほとりにて、常にみつる女なり。察するに、あらぬことをこしらへ、此の富度屋に恥辱を與へ、物貰はんとて來たるならん。早く大路に誘れゆき追ひやるべし。といへど、殷八は更なり吉三も心焦燥ちて、これ等の事は耳にもいれず、やゝの佐吾七、實に汝菖蒲と兄弟

なりせば、疾く／＼證を見せよ、分說あらばきかんずるわ。」と、言せはしく問ひけるを、非人の女は聞くと齊しく、合破と身を起し、「さては思ふに違はず、菖蒲も此處に坐すか。」となほ腹だたしき面ぶりして、よらまくするを段八やをら立ちへだたり、「おのれはたゞ、狂人とのみおもひうちすておきしが、爰ありげなるもののいひざま、必定深き由緣在るべし。そも何等の者なれば、彼等兄弟をかくはうち怨むぞ。」といふに彼の女顏を擡げ、「白地に聞えなば、恥辱をしらぬ者と笑ひ給ふは推しながら、悶悵るゝ胸苦しさをはらさん爲に來りつれば、此の儘に歸らんも便なし、妾皇都にありつるときは、水莆とよびて白拍子にて候が、不圖佐吾七殿にまみえてより、情が世の絆となり、佐吾七殿もろともに、遂に彼の地を亡命なし、津の國長柄に隱れ住み、良人は手かくことを人に教へ、妾も舞の指南して、細き煙はたてかねぬれど、心やすきをたのみにて、三年四年過す中、いかなる故にや家出して、良人の歸り來まさぬのみか、鄰れる家の處女なりし、菖蒲どのまで往かしれず、未だ年も幼ければ、密通ともおもはれねど、若しや遊女に賣りわたし、金を得てん計挍にて、勾引し給ふものなるか。さあらば遂に辭發覺れ、思はぬ憂目や見給ふらめと、捐て果てられし自身より、たゞ其の事のみ思ひ勞ひ、果ては病にふし柴の、焦れしたへど詮爲かなく、看病なすべき親類さへ、嵐に殘る病葉の、偏面い命たすかりて、吾妻といふ名の慕はしく、闇の東を志し、露に宿り草に臥し、そこはかとなく索

ね巡り、飢ゑに臨むをり〳〵は、往來の人の袂に携り、賤が軒端に傍徨ひて、花容貰ふ身ともなり、死なんとおもふも幾許度。おもひかへしつ今日までも、つなぐ命の甲斐ありて、環り會ひつる嬉しさに、怨みん言葉もなきものを、妾が身に越度あらば、唯幾度も言ひ懲らし、妻ともよびて給はれ。」といひつゝ涙湧くがごとし　佐吾七水花をはたと睨み、「我は素より孤にて成長り、妻たるものを倶しつる覺え更になし、かかる係なきことをきこゆるは、我を罪におとしいれんと計り、欺に書簡を持ちきたりし曲者も汝が同了なるべし。」と、襟髮つかんでひきたつれば、水花はなほうち泣きて、「御身より妾は年も增したれば、老女めかしきを疎んじて、かく宣ふかしらされど、海山越えてはる〴〵と、東國の空に伶俜ひきて、此の儘にてはかへらじ。」と泣きつゝ居れば、吉三をはじめあたりあふ人々、ただ呆れにあきれ、更にいふべき言を知らず。佐吾七なほ怒氣に堪へず、水花を責め撃ち、事を問ひ果さんとなすを、閑樂「少時まて。」と制し、「實に汝此の女をしらざるや。」といひければ、佐吾七答へて、「我も端よりその心をつけて窺へども、何とやらん彼が面體みしれるに似て、また相貌にもあらず。」といふ。「さもあらんずらん。」と閑樂點頭き、やがて傍にありける角盥に銚器の水を移し、「吾曾てきく、鮮血を水にいるれば、親子は更なり兄弟もなほ合和するといへり、汝等不意き無實の罪に陥り、言ひとくに詞なけん。早くしか計らひて、兄妹なる事分明しくなさば、水花とやらんが目撃も自來發覺はる

べし。」といふに、菖蒲は此の事を聞きて、枯れたる魚の斗水に活へるおもひしつ、ほと〳〵うち喜び、「父うへの宣はするが如く、身におぼえなきことにしあれば、證なければ、いかにとも詮爲方なし、これみて疑ひはらし給へ。」と、汚名を雪ぐ、雪なす腕、戒刀をもてあはや刺き破らんとなすを、佐吾七慌はしく其の手をとゞめ、「縦ひ家君の命せにもあれ、吾においてこの事許りはなし難し。」といへば、菖蒲膝をすゝめ、「こは心得ぬ事を宣ふものかな、しか仰すれば、いよ〳〵二人に疑ひ懸り、憂目にあふは厭はねど、不良き名を負はされて、身は埋木とくちはてん。肉身分けつる兄弟の、鮮血を水にて合はさんこと、いと〳〵安き事ならめ、何とて躊躇ひ給ふぞ。」と、涙と共にかき口說けど、佐吾七は手を叉き、默然として答へもなさず。吉三やをら身を起し、佐吾七を緣より下に突落し、「父君の仰せ重く、口を箝みて覩り居れば、汝最前水苔に對ひて孤なりといひ、今又父のことばに悖り、僅かに肉身を剖き鮮血を合することをさへなさざるは、縦ひ菖蒲と密通にあらざるにもせよ、汝が心裏に計策あること歷然たり。我も思ふ宗あれば、分明に詮議を遂げず、菖蒲を誘引ひ急ぎこの家を出で行くべし。」と、いきまきつゝ佐吾七が、膝のほとりにつきやれば、はふり落つる涙に咽び、菖蒲はとかうのことも聞えず。閑樂も不便とおもひ、「嗚呼毛を吹いて疵をもとむるとやら、汝等が丹心を我よくも知り、ことを潔白になさんとして、却つて吉三が疑ひをましたり。知らず御身等は實の兄弟にては

あらざりしか、噫それも由縁あることなるべし、いま悔ゆるとも詮なければ、是れも宿世の悪業の、報い來るとおもひとり、菖蒲もろとも疾く此の所を立去りて、便宜を窺ひ、必ず隱居へ音信れよ。雪吹も家に歸りなば、とも〴〵に詮議して、又詮ずべきもあるべし。」と、いひつゝ立つて戸棚より、脇差一腰とり出し、「世を捨てし身に用なき器是れを汝にとらするなり。小柄は獅子に牡丹の彫、手の強弱を試しみる、喩へならねど不意く、菖蒲も親に捨てられて、さぞ便りなう思ふべし、心の限り慰めて勞はし給はるな　頓て此の家によび還し、再度花咲く富貴草、時節を待てよ。」と言ひ諭せば、佐吾七潸然と涙を落し、「篤き恵みを受け參らせ、更に答へん言葉もなし。原來菖蒲と小子とは。」トいふを閑樂おし留め、「やよ佐吾七、最前の書簡を初め、非人の女が爲體、ふかく巧みし事としられぬ。此の期におよび分明に分説くとも、是非を聞きわくものはあらじ、多言を費す事なかれ。」と、傍を顧みれば、佐吾七も閑樂がことば、理あるに感激なし、泣きゐる菖蒲が手をとりて、「今聞くごとく我を罪におとさめと、計按みし事なれば、譬へば此の儘生害なすとも、何人かは讃め、孰かは不便とおもふべき。父君の言にしたがひ、一旦此の家を立退きたまへ、無失の罪に落ちいりし、其の無念さは我とても、御身に爭で替るべき。心の月は曇るとも、科戸の風に邪の、雲を拂ひて又清き、光を見んは遠からじ。」と、亂れし髪を掻きあげて、漸うに菖蒲を誘引ひ、外面の方へ立ち出づれば、水苔も後に

従ひて「晴我が夫、妾が口の不良くて、あらぶる事を聞えあげ、夫れ故にこそ褻しき、姿となりゆき給ひなば、さぞ惜しともおぼすらめ」と何やらん呟きつゝ、切戸をいづれば佐吾七は、水莟が手首をしつかと捉り、脊に捩ぢあげて動かせず「家君のことばおもく、うち捨ておけばいひも止まず、おぼえなき事いひかけし汝は先づ何者ぞ、告述なせ」と責めど、水莟は驚くけしきもなく、腰を捻つてふりほどき、物をも言はず行かんとす。「逃しはせじ」と佐吾七が、又掴えつくを星あかりに、投八は窺ひ寄り、棒とりのべて打ちかゝる。心得たりと身を閃かし、棒を足下に踏えおとせば、はやくも水莟は其の間に行方もしらず逃げ失せたり。菖蒲は悲歎の涙にむせび、夢に夢見し思ひにて、なか〳〵に語もなく、佐吾七は氣を焦燥ち、投八には心も留めず、何をか思ひ出しけん、礑と小膝をうつ手にて、閃りと縄をはせをりつゝ、往かんとするを止むる投八「妨げなすな」と手練の佐吾七、胸さか投つて突倒せば、戻りをうつて展轉ぶ。仕すましたりと走せいでしが、又立戻り菖蒲にむかひ「あとより來ませ」と言ひ捨てて、水莟があとを追ひかけける。

綟手摺昔木偶巻之二 終

綟手摺昔木偶　卷之三

江戸　柳亭種彦作

六　やきいんあみがさ

命だにとて頼まれぬ、果なき身をや何に譬へん、末の露、もとの雫、消ぬる間またで世を去りし、信夫之助が事のみ慕はしく、梢の猿友を失ひ、水鳥の陸に迷ふ思ひしつ、薫は一切人にも見えず、活きて物思はんよりも、死してうれしき命とは、思ひしみしが長に身を委ねし妓女の淺ましさは、死するさへ心に任せず、且は信夫がことの絆となりて、夢に似たる日をおくり、訪ひよる客はしば／＼なれば、三百の操も守り難く、客あれば笑ひ、客なければ歎き、峯の白雲立ちまがふ、花はみる／＼雪とし散り、菖蒲に涼しき夕風も、いつか眞葛を飜し、蟲の聲の弱り行くにぞ秋も末になりぬとは知られし、彼の信夫之助が生害なしてより幾祭は更なり、石刊銘を作るまで悉く薫がなす所なれど、暇なき身は詮術なく、それかれ人にあつらへて、いまだ一度も墓に詣でず。一日長に暇をこひ、信夫が

ぅ其、未の下刻花街をたちいでぬ。そもく、信太之助が亡骸を埋めたる、葛原ヶ岡といふは、假粧坂の西にあたり、梢ヶ谷、綴喜里の山手を名づけ、彼の鳥邊やま、蓮臺野に等しく、亡人をおくる三昧なれば、荼毘の煙絶ゆる時なく、此所に消ゆれば彼所に燃え、昨日おくれし其の人も、今日は又明日の人に先だつ。松阡のもとは曉訪ひし洞にうら枯れて、誰が名を殘す形見にやあらん、苔蒸す石碑、雨露に朽ちたる卒塔婆、路のゆくてに連なり、寶篋印塔の斷離せしは、枯骨に変りてうち散り、最幽閑く、氣疎き荒野なり。かくて信太之助が墳のほとりに到り視るに、野草雨に開いて華を供じ、淺茅が露風に散りて、自來は倆を手向くるのみ、我ならで弔ふ人ありともみえず。夫れ生あれば必ず死あり、形を殘す者さらになく、焚けば灰燼となり、變じて塵藪となるとは、唐の書にも見えたれど、いまだ卅年の丈夫、墳墓一基の主となりしをみるからに、果なかりし最期の事さへ思ひ出で、涙にかきくれゐたりしが、やがて信太を墳の前にいざなひ、「おん身の父は不幸にして病に寢し、命襄へ運極まり、悲しいかな宿意を遂げず、自殺して亡せ給ひぬ。いかなる故縁といふ事は、妾も詳に知らざれど、仔細を書きて籠めおきし、錦の袋を與へ給へば、おん身はやく成長して、父の素懐をうけつぐべしとをさなけれども憶念して、忘るゝ事なかれ。」と言ひ諭し、己も墳の前に額突き、「今きこえ候ごとく、信太だに成長ちなば、何にまれ君が怨みをはらし參らせんあひだ、永く幽冥に安んじ給へ、南無

佛南無佛」と唱ふれば、蟲の聲さへ哀れを添へ、觀念の助緣となりぬ。此の日富度の吉三は、鄰翁の死せたるを野外に送りけるが、此の翁は壽八旬にすぎ、いとめでたき往生なりけるにより、親類さへ只管には嘆かず、まいてや雨雲の餘所に見なす人は、樒を煙となし果つるをもまたで、己が心々に別れさり、吉三も先づ麓の方にくだらんと、岐傳ひに梯をうちわたり、段八と物語らうて向うより人の來るをしらず、薫も此の橋にさしかゝりけるが、爪繰る念珠に心をいれて、是れも人ありとはおもはず、橋の眞中にてはたと往き合ひ、互に身を避けんとなしけれど、橋の面いと狹くて心にまかせず、徒歩ふ足を踏みとゞめかね、薫は吉三の袖に縋り「免させ給へ」といひつゝも、思はず身近く倚り添ひて、其の人を熟みるに、年の程は信夫之助に三ツ四ツばかり若やかに見ゆれど、容貌はよくも似たり。孰か招魂の法を修し、現には見ぬ陽炎の、世に亡魂や招きつらんと、怪しきまでに見とれつつ、その名を問はまほしく思ひしが、いひ出づる便もなくて往き過ぎしに、此の時薫が誘引ひたる、雛妓の中に段八を相識る者ありしにより、忽ち富度の家君なる事を知りしが、嗚呼いかなる因緣にや、せめては此の人を心放に見まほしく、心恍惚として歩むに力なく、とある辻堂に憩ひ、火車をまねきて此のこと白地にきこえぬ。頃日薫は愁へに沈み、客をむかふるを憂しとおもふをりなれば、これぞ幸ひなりと、火車は滿面に笑みをふくみ、事調ふやうに計らふべしと、雛妓に密話きければ、

心得果てて走り行き、程なく吉三主從に追ひつき、投八に如此々々の由きこえけるが、投八は兼て田子松とはかり、吉三をおひうしなはんと計狡み居る時なれば、これ這奴が心を蕩かすには屈竟の事なりと思ひ「吾儕よく言ひこしらへ、今宵は是非に誘引ひ申すべし、用意をなしおき給へ」と、雛妓をかへし、さて吉三に箇樣々々と物がたり、なほ言を巧みにして言ひけるは「君にも豫て薫が名はしらせ給ふべし、薫は今、時めきて招いですら漫りには來らず。かかる高妓却つて彼方よりいひよりしは、君はさも春日の神の化現なるべし。天、人の祿をたやさずとはいへど、我們は絶えてかかる幸福なし」と少し怨ずる樣にきこえければ、吉三うち笑ひ「それ粉蝶の花を戀ふはその紅をめづるにあらず、露を啜めんと欲してなり、娼妓の客を思ふはその才を賞するにあらず、財をうばはんと欲してなり、かくことありげにいひよるは、すべて娼流の習染にて、是れをや虚情といふならん、懼るべしおそるべし」と、兩三歩ゆきたりしが、又心に以爲、薫も名に聞えたる花魁、一千を擲けてさへ、馳驟をしらざる水性の婦人ときく、いかなる計策を以てか、わが心をいざなふやらん、まづ試みに薫が許を訪ひ、媚びを進むるに及び、道理をといて言ひ懲らさばこれも一興なるべしと思案し、投八のみ留め、その餘の從者は家に歸し、とある酒樓に登りて日の暮るゝを待ちぬ。投八は敢て多言を費さず、吉三が心忽ち變じ、生平は究鬼のごとく恐れたる花街に、今宵前渡りするなれば、心の底にかぎりな

く喜び、とかくなして菱屋が許へ誘引ひけるに、早くも女童いで迎へて座鋪に請じぬ。吉三は只管滑稽のみちのみ心にかけ、花街にいたることとなしといへど、彼も一個の才子なれば、さながら初々しくも見えず、やがて上座に直り、傍を顧みれば、銀燭の火影御厨子に映じて、色々の飾もて繕せる住居は、欄桁も撓むばかりに掛けつらね、緞帳をたれ、金屏を廻らし、國司の藩君なんどが閨房も、かくあらんと思ふばかりなれば、これ皆さま〴〵の容言をもて客を欺き、その金にて絶妙くならん。あな懼ろし、心あるべき人の少時なりと止まるべき所にあらずとおもふより、酒も心よく咽にくだらず。なほ眼をとゞめて仔細に視るに、かく花麗に營り設けし座敷には似氣なく、小女郎手の編笠と、垢つきし紙衣を床の間に飾り、これに香華を手向けたり。あな不審しと、故こそあらめと思ふ折に、薫は女童をしたがへ徐やかに出できたり、親しからず疎からず物語らひ、杯をめぐらすさま事馴れて見えける。稍ありて酒もすがりになり、段八も席を退出ければ、薫は吉三が身近くより「初見参にかかる事を聞ゆるは面なくは候へど、君を強ひて招きたるは、此の編笠の主に容貌の似給へる故なり。姓名は水泡信太之助とまうし、原は由緒ある武士なりしが、今は此の世に亡き人の形見となりし編笠に、香を焚き華を供じ、今日しも御墓に詣でし時、不意く君にあひ参らせ、慕へど甲斐なき黄泉の客に、つゆ違はぬがゆかしくて、心故にと誘引ひし、昔の容止みるからに、いまは中々涙の種となり侍

る」と、袖を額に押當てつゝ泣き臥せば、吉三は案に違ひその由縁は知らされど、薫が涕泣の光景を視て、心更に樂しまず、薫は少時ありて涙を拂ひ、無益きなげきに暇どりて、首尾をも聞えあげず、憂くとも聞き果てゝ、共に一遍の唱名をも手向け給へ」と、信夫之助が來りし夜の樣より、宿志を遂げず自殺せしこと、一夜の契りに一子をまうけ、女童となしおくまで、漏るゝ所なく物がたり、かさねていひけるは「かく聞え侍らば、浮きたる心と思さんが、自他歡びて夫婦となるにあらず、苦しき海と知りつゝも、親兄弟の爲に身を沈め、客を便りとする墨の濃きも薄きにとりなして、此方に空言あれば、又彼方にも空言あり、客にも實なきものを、たゞ粉頭のみ信實なしと、いひつる人ぞ恨みなれ、落花心あるときは、流水なんぞ情なからん、喩へば清き水ありとも、散らざる花は誘ひがたし、其が中に信夫の君は只一夜の逢瀨なれど、義あり信あり戀ありて、此の人ならではと盟ひをたて、心頼めになしつるに、その甲斐とても夏蟲の、影さへきゆる朝嵐、消のこる露の身を觀じ、心は尼と思ほへど、花街の住居の詮方なく、墨染ならぬ花衣、袈裟に換へたる引きしごき、何ごと人のとひしとき、露と答へん水晶の、珠數も袿のしたに操り、あと弔ふことも白地には、ならぬ自身を不便とおほし、花のあした雪の夕べ、訪ひ音信れて給はれ」と、更に恥らふ形勢なく、紙衣を膝に抱きあげ、よよとばかりに泣きまどひ、袖に涙を湛へたり。吉三は先より手を叉き黙然として居たりしが、誠ある

意に感激なして、いひけるは、「噫て煙花にたゞよふ人は、皆卑賤たる者とこゝろえ、道理のいへることとは甞て上のみ思ひとらし、昔は井への非蛙にて、滄海を知らざるなり。貞男なるかな信夫之助。かくまでわれ身に懸想なし、只一夜にて想ひを果し、ふたゝび花街を顧みず、信を守り義を重んじ、自殺せしは殘りをし、思ふに彼が路頭にて、恥辱を捨てて口説りしは、切なる心を知らせしなるべし。姿の異へに拙なをたとはせ、節に女子を論せし、その古事には適りに静め、これをや誠の徳行者とはいふべけれ。嗚呼吾もまた鎌倉に住へながら、信命のうち相異らざること目出度しき。まろ身ともに風流たるを嫌はず、財あるに親しまず、信夫之助が義心に感じ、終身の苦楽を倶にせんと誓ひしは、尋常の婦人のおよぶべきところにあらず。まよひきや艱難の林のうちに、無れる花のおもいふとはこと数回嘆息なしけるが、原來徳行の士こそ、無方貞操を確かに貫する心かな、忍迎愛慕の想ひをいだき、郷によりて淫妖に、見ゆるる遂ひの初めとは、白地の居うちならし、今いひつるごとく、信夫之助は貴に一個の義男なり、吾いかで渠が意に及ばん、一旦宿線の縁つるをもって、招きよせ給ふとも、造れる花の心持して、香ひなきを疎んぜられん。然はあれどおん身も渠をおもふがごとく、心隔なく相談ひ給はば、我もなんぞ丹心のなかるべき。併しながら我に義理ある妻あれば、妻とよばれは難しといへども、花街に在すその程は、憂苦を語らふ友となるべし。おん身いかにおぼすやらん、貴あり

て妻の在所も安定ならねど、白地に聞ゆるなりと丁寧にいひければ、薫漸く愁眉をひらき、初め
て蹉跎とうち笑ひ「それぞ妾が願ひなれ。不肖にして世を早く辭し給へど、信太之助といへる夫あれ
ば、君に終身を任さんは本意ならず、妾は花街に紛れなば、世道心とも姿を害へん、君は早く室をむ
かへ、行末榮ゆる共白髪、松の操を守られよ、戯女の其のうちは、君は妾が情人なり、心にいふ事
あらば、幾度も言ひ慰らし、見おとしに合はるな。今よりあがる時は、女夫の情あひきかへて、君は
室を迎へ給ふ時に離れ旁ははなさじといふ、心の隈々に待こと、頻を言ふに與へ、生れて嗣子に跡を
ありし手箱をひらき、さゝやかなる錦の袋を取りいだし、これぞ吾が夫信太之助の遺物にて、一子信太
成長なさば、その期ひらき視るべしと、正しく夢の告げぬれば、妾が身にはこよなき寶なり。此の一
品を君に預けまゐらすをもて、妾が丹心を領し給へ。」といふに、吉三も又首にかけたる守袋を薫
にあたへ「此の裏にも吾が大切の品あれば、御身がたのその形見と、取替へおくも互の心、變らじと
いふ證なり」と、いふこゑもいと信實なり。其の時薫はつとさつて形見の袱衣に打向ひ、われが君靈あ
らばよく聞きわき給へ。君に別れ申してより、只管に無常を觀じ、世を形なく思ひとり、念佛三昧に
今日までは過せしが、かくて居らば、忌なしき事と疎まれて、訪ひくる客も絶えぬるには、多くの金も
て吾が身にかへたる、長の心のいかならんか、是れを武士の室に比へば、貞操を護りて忠義を明かにな

すとやいはん、此の道理を發明して、花街に居るべきその程は、愈花やぎて客に思はれ、定めし年も果てて後は、金簪を投げて念珠に換へ、紅裙を斷つて法衣を着け、女僧となりて君が後世を、心おきなく弔ひ申さん、これ浮きたる心に似て、君が宿意を遂げんには、却つて便宜なるべし。南無佛南無佛」と唱へしが、唱名もこれ限りぞと、右の手して爪操りし、珠數を撥鉢傍に投げ捨て、左の手にて茶椀をとりあげ「今は淵瀬の瀬川」と、かすけき聲して曲子を歌ひ、かたはらの銚子引寄せ、程よく酒を呑み終り、一つ衾に寄り添ひて、吉三と他事なく相語ひけり。嗚呼此の薰が爲體善しとや讃めん、惡しとや謗らん、思ふに俠氣闊達も、遊君には猶宛すべし。若し常の婦人にかかる行跡あらば、王庭を踏むの罪人なり。遊君は銀を學んで、客をいざなふの計策を習ひ、常の婦人は銀が水性を定つて身の教へとなさば、破衛を補ふ書といへども、又益なきにあらず。

七　いちもんじ

浦島の子が海若に得てしてふ、玉の手箱にあらなくに、明けてくやしききぬぎぬは、老いとなるべき心持やはする。彼の葛原の笠宿り、假寢の夢を結びそめ、吉三は兎に角薫がことの忘れがたく、一夜二夜と會ふ夜半を、數ふうちこそ、情の花もさきにほへ、日をかさね月をわたり、戀慕の心ますま

す深く、夜毎薫がもとにのみ宿りぬ。母雪吹も初めより、それとは疾くに推しながら、若き身にはあるべきことぞと観念せしも、今は却つて仇となり、生産も疎かになりもてゆくを、閑楽は心安からず思ひ、折にふれ言ひ懲らせど吉三は更に承引かず。又段八田子松は、是れをよき幸ひとして、様々にそゝのかしけるに、嗚呼いかなる因果にや、かく怜悧なる吉三なれど、鐵腸忽地蕩け、いふが随意心をいざなはれ、日頃の行跡露ばかりもなく、金を塊のごとく投げうち、いろ〱の遊びを仕盡し、めづらかなる事がなあれかし、目覚しき遊燕を開いて、花街に名を殘すべしとうち案じ、一日塔の辻を通りけるが、此處に地獄變相の畫幅を掛け、前に毛氈を敷き、鉦をならして布施を乞ふ法師あり。吉三何か心に點頭き彼の法師に物數多とらせ、地獄の畫幅を買ひ請け、その夜花街にいゆき、酒燕も闌となりて吉三段八を招き、彼の畫幅を衣桁にかけさせ、「我珍らしき彩色繪を得たり。」と誇りかにいひければ、薫をはじめ居並れし遊君、齊しく立つて是れを視るに、中央には閻羅王と思しく、法座を構へ、罪人の罪の輕重をたゞす所あり。或は血盆、劍の山、もゆる所なく畫きたれば、その繪様の忌はしきを見て、人々大いに興を失ひ、ことさめて見えければ、吉三は果せるかなと心に歡び、今宵わざ〱地獄の畫幅を持ち來りしは、曾て遊興のためならず。菩提の要路成佛の勝因を説きしらせ、汝等を教化せんと思ひてなり。」と、扇を以て畫幅を指しめし、「抑も此の地獄といふは、贍部洲の下

五百億劫部を過てあり。地下なるが故に地獄と號く。長阿含には、閻浮提の南、大金剛山の内に閻魔王宮あり。其の城七重、七重の欄楯七重の羅網、七重の行樹とも說かれたり。荒言に捺落迦、又泥犁といふは、苦しみを具へ、或は不可樂と名くなり。扨中央に、鳳輪鉤輪、とりわけて心留ふ円角いろは十王の第五番目、御名は世に最高き閻魔王にて在すなり。峯には火燄燃え上り、谷には氷の通備けるか、さもすさまじく書きたるは、これぞ無量の地獄なり。造惡の衆生を陷め、總て善果なくざる此の所に墮在し、或は焦熱の猛火に焦げ或は紅蓮の淵底に沈み、長夜に水火の責めを受くるなり。徒事とな思ひそ、是れ則ち汝等が身の上なり。それを如何といふに、邂逅受けがたき人間に生を受けながら、宿世の業つたなくして、憂きふし重き苦竹の流れに沈み、朝には容鏡を事として、鸞鏡に磨けども眞如の月影くらく、夕には蟬頭を撫でて、衣裳に薫すれども、一香一華を佛に捧げず、ものの哀れを知らざれば、更ある聲に愛でつゝも、秋野の蟲を籠に苦しめ、厭かぬ別れの東雲に、咎なき鳥を恨むるは、とりも直さぬ殺生戒、又他女の客をねとり、忍びて會ふは偷盗邪淫、思ふといひて思はざるも、人の心を蕩かすは、妄語戒にあらざらんや。飲酒は元來杯をあげぬ、夕はなきものを、五戒を受けず三寶を信ぜず、自ら作りし地獄に墮し、永劫惡道に苦しまん。さなきだに女は五障三從とて、罪最深き者とはきけ、猛惡を増す者、逆獄に隨えたるはなく、なほ餘罪無量なり。爰において昔に大徳惡

悲末願の心を起し、此の女等にて地獄あそびと名づけし戯樂を催さんと、先づ閻魔王、奪衣婆、三途河、淨玻璃、倶生神、無數の鬼神を初めとして、或は無量の地獄に堕ち、呵責をうくる罪人にいたるまで、悉く鬼となして其の役をさだめ、現世に地獄の體相をうつし、作りし罪を果さするならば、無量の業障有りと雖も、極樂往生うたがひなし、此の事如何あるべき」といひければ、なみ居たる遊女共、唯呆れに呆れて、善しとも悪しとも更に答ふる者もなし。時に禪間を事とする、大盡の醫師何某に傳りしが、少しく文學もありと見え、進みいでて申しけるは、「我記憶なければ書目は忘れたり。馬祖が曰く、眞如に迷ひて、三毒を迴らして三業の淨戒となし、六賊を迴らして六神通となし、煩惱を迴らして菩提となし、無明を迴らして大智と作す、これを善知識といふ。眞如に委順なきは外道なりといへり。願はくは吉三和尚の大徳をもつて、地獄道を迴らし極樂道となしたまひ、金銀瑠璃、綺羅なんどにて、此の座敷を莊嚴し、瑪瑙の簾、珊瑚の格子、青、黄、赤、白、紫色の雲に、眞珠の柱を並べては、寶幢をとりすてて、摩尼眞珠の網を張り、四辨八音の節を嗜好に、琴箏笙を調和させ、客に送る艷書さへも、紺紙金字に書かせつゝ、竹輿は鳳車と作りかへ、遊女は觀音勢至に擬し、諸天のおのおの華を雨らして供養なさば、かく申す拙僧まで、歡喜踊躍の思ひをなさん。先づ今宵彼の華ばかり降らせ給へ」と、貪慾面に顯はれしは、未だ圖をもてさだめずといへど、これぞ地獄の罪人とは知ら

れたり。その時蕉いひけるは「吉三君の宣ひしごとく、實に遊君ほど罪いと深きものはあらじ。されば血盆、不産女地獄なんどに當らば、自業自得といふべけれど、鬼神奪衣婆等の罰をひかば、いと似氣なかるべし」。「吾儕等淺ましき身にしあれど、爭でか人を嘖め懲る事をなすべきぞ」といへば、吉三點頭き、「さな言ひそ鬼は月を日として五百年、汝は夜を日として、苦海十年、因なきにあらず」と、笑ひを催し其の夜は止みぬ。さる程に吉三は、地獄遊をひし〳〵とおもひたち、菱屋が長にもかくときこえければ、あまりとや怪しき遊びを、長も善しとはおもはねど、頃日より數多の德つきたる吉三が催しなれば、強ひても留めず、とかくなして本日にもなりぬ。さて庭には大いなる釜を陶ゑ、これにて酒の燗をなさせ、廣らかなる魚板に野猪、鹿の類を載せ、新たに砥をいづる庖丁を添せたり。これ釜は罪人を茹で殺す鼎に比し、猪鹿は罪人を鋸き斬るに擬へたり。猶吉三樣々に指南して、樓を鐵城とよばせ、廓を二河白道といひ、盆池を跋提河といひ、假山を劍の峯と唱ふるなんど、總てその日の法律なり。その時吉三小四方に膳を載せ、さも敬しく捧げいで、衆人に向ひ「近曾もいひたる如く、此の席には地獄の官人を始め、三途に迷ふ罪人にいたるまで、悉く書き載せたり。まづ閻羅王に當るものは、今宵の主となし、十王是れに次ぐべし。扨八寒地獄に當るものは、薄衣一重となし、盆池の側に居らしめて、冷酒を喫ませ、酒菜は水貝なんどなるべし。焦熱に墮つるものは、

幾重かの衣を著せ、脊中には薪棚を覆ひ、前には火桶をひかへさせ、酒はもとより熱燗にて、遊君女童此の獄に的らば、遊びは火わたし、或は續松、火に因あることは免すべし。又血盆に沈むをは紅の門著となり、紅の蓄圃に坐し、酒に紅霞の異名あれば、程よく呑みて紅に面をなすらをかしからん。扨等活といふ大獄あり、磨にて人を搗碎き、又活々と唱ふれば、活くる事需の如し。此の獄に當るものは、生靈なきまで酒を喫ませ、沈醉に及ぶとき、醉ひを解す藥を用ゐ、醒めて後又喫ましめん。酒を強ひるをそれはむれに露殺すといへばなり。さて畜生道は角を戴き鱗を備へ、又羽毛あるものをいふ。強きは弱きを伐し、血を飲み肉を啖らふが故に、解脱經には血道といふ。此の獄に當る者は起居に總て四足をまなび、物を喰らふも箸を用ゐず、器に口をちかづくべし。遊藝は虎拳、狐鼬、鞭鼠子ッ子、雀の子とり、宮虎といふなれば、目隱しなどもよかるべし、これ皆羽あるもの、毛あるものに因あればなり。若し遊君此の獄に取當り、廊下駄の名ありとも、曾てこれ等をはかせず、四ッ這にて廊を通ふべし、かならずしも恥となおもひそ。これ積惡の報いなり。たゞ空行は免すといへど、譬へば羽織を著たりとて、空飛ぶ事はかなふまじ。さて餓鬼道に墮つる者は、美酒珍膳を前に備へ、終日これを守るのみ、一日も喰らふ事なかれ、饑餓せしむるを餓鬼道といへばなり。扨阿修羅道は無酒といふ義なり。花を採みて大海に醞し、その味酒と變ぜざるを詫り妬む。阿修羅は無修羅なり、修

罪は酒なり。故に無酒といへば、此の鬮に當る者は、酒を呑むことを戒むべし。常に鬪戰を好んで、他に勝つことを欲ふといひ、爭に實のかよひもあれば、爭は元來、將棊、雙六、或は碁盤の矢をとばせ、そうして勝負を爭ふことを、專らとなさしむべし。就中圍棊は、日月の鼠に譬へたる、黑白の石三百六十、過ぎゆく日數を爭ふは、佛の敎へにいとおほく、打つ、斷る、爭道、虎口なんど鬪戰に因あり。さて又漢の花街に隱語といふことあり。銀子を杏樹といひ、錢を圓兒といふの類なり。今は此の花街にも流行はれ、深くつゝむを羅傘といひ、僞りを人の傷といひ、言ふ事を睡むといひ、言ふ事を二六といふ由なり、我らこれ等に效うて隱語を作らん。黑繩とは引きしごきの帶なり、鐵錨とは三線なり、熱鐵とは酒なり、ゆめ忘るべからず。と說き終り、扨鬮を分ち取るに、古三は餓鬼道に當り、薫は修羅道に當り、其の餘も多くは迷ひ、不産女地獄、血盆に落ちたるは、皆なも數く男子にて、阿防、羅刹、異類の鬼神となりたるは、悉歌妓娼婦なり。其の中に杉といへる老女、奪衣婆に當りしのみこそもあるなれと笑ひを催すかたもあれど、今宵の花主たる古三が、餓鬼道に墮在せしは少し興さむる心持して、杯の流れも淀みし折から、女童一人、慌しげに走り來り、誰やらん舞の君に會ひ給はんとて、今此處へきますなりことと告げければ、古三益々興を失ひ、我が逍遙をも厭はず、推して來る愚者、縱ひ賓の炎羅王にもあれ、たゞ速かに追ひ退けさるや、我直に風景の殺ぐを構へ、酒をもて

鞠門せんと、寛々として廊までたちいでしが、俄に周章て忙きつゝ、衣桁の陰に身を潜め、更に語をもいださず。正座に在る人々も吉三が光景を見て、且恐れ且怪しみ、漸に席を退きぬ。程なく禿に案内させ、いりくる女は四十のうへ、四ッか、五ッか、三割帯、花色ならぬ小袖の著なし、花にはなけれど葉櫻の、昔ゆかしき面様に、嘘する色なく歩みきつ、衣桁に結と眼をつけしが、さらぬ風情に徐ら座に著き、「薫どのとは其方よの、かくいふは吉三が母、雪吹といへる者にしあれ」と、聞きて薫も打驚き、衣紋つくろひ裾かいなほせ、容を正して手をつかへ、「これもおもひもかけぬことなれば、物からはにひきなした、瞼はしき標見せ参らせ、最面なし」と微笑みつゝ、女童に茶を運ばし、もてなす様の賢し気なるを、雪吹はつくぐ、打見やりて、「世の聞えをはゞかりて、今日までは訪ひもせざりし、さはれ日々おん身の名は、よく聞き染みて侍るゆゑ、その昔より相識りし、心ともへば遠にかくれ、物いひすごしなすとても、老いのならひの繰言と、うち腹だちて給はるな。談らふ事もござれば、あい、これと寄り給へ」と、隔てなき、言葉に薫は猶聖かしく、はかなくしくは答へも聞えず。雪吹重ねて薫に對ひ、「かねぐ風説にきき給はめ、閑楽殿はとりわけて、物がたき性といひ、今日なれ此所へ詣でる事、白地にはきこえかね、忍びての事なれば、土産も心許りのこと」と、巻絹髭籠、菓子盆を、薫が前に持ち運ばせ、「錦の上に花をそふると、常言にはいふめれど、これは花にはおよびなき、雪よりいうる氷海

昔、酒甕を醸す業のみ、夜毎に酒も過ぎなんと、おもひついたる老婆心、又巻絹は紺縞、あつらへたかりし物ながら、古流の専縛にて、今はその手は離れなれば、割いて傳習になし給へことと言だねて間のみに、漸く顏を擡げ、いくその苦勞をかけ參らせ、罪いとふかき此の薫を、いぶせきものとおもはさずに、かずかずの贈物を請け奉る苦しさは、罵らるゝに百倍して、恵みに報ふる詞もなし」と、消えもいりたき光景を、侍しながら笑ひにまぎらし、流るゝ水は止めがたく、止まる水は流し難し、男女の情も其のごとく、外目に見るはさておきて、自己が心の儘ならぬも、戀する人の常にしあれば先ついふべきは吾が子の吉三、心ぐまたくかたらひ給ふ、情が却つて仇となり、頃日は信ずる長谷の觀音、年に一夜の通夜のほか、夜は歩行かぬ月人男、七夕妻もほしげなる、菖蒲といへる處女ありしを、軒のつまにも見よかしと、兒もろともによびむかへ、婚姻させよとすゝめしに、これをさへ承引かず、剰へ五月の末方は田子松誘引うて、寺詣での留守のうち僅かな晝度をいひたてに、菖蒲も兒も追ひ出し、それより後の柳巷通ひ、もしや其方と兼てより、契りおきたることありて觸ゝ嘘、それも女のまはり氣ならんこ、唯悲しきは吉三が行跡、親の心は束の間も、おもひやりせらるゝものを、寝に寝る夜を偶と、数ふる様になりゆきしっ。かくいへばとて、御身を恨み縁斷り給へと頑に、いふにはさらさら侍らず、吉三が心に祟る神の、入りかはりしとおもひとり、諦めても尚あきらめがたき、胸

苦しきを其方に逢ひ、いうて聞かせて兎も角も、又諫言もあらんかと、語るも昔懐かしき、懺悔に罪も消えやらで、罪や重ねん愛別離苦、吾が身を摘みて他の身の、痛さを知ればいひがたき、妾も原は[illegible]の産まれ、伊里江といへる歌妓にて、名をも面も人に知られ、端手を勝と思ふより、五條あたりに住居して、立ちよりて視ん人し待つ、夕顔ならぬ夕化粧、情はうらねど憂きふしは、苦竹よりもなほしげき、絲竹に世をわたりつゝ、不斗した事より人を戀ひそめ、假寐の夢をむすびしが、一夜二夜の數重なり、阿漕が浦に引く網の、何人いふとなく二人が仇し名、巷に漏れて言ひしらふを、聞けどもおもひ堪へ難く、よしなき意地も若氣の慨り、剰へその人は、京家の武士に何某とて、由ある方の愛子なれば、浮れあるくを幾許度、言ひも懲す老臣はあれど、却つて是れを不興におもひ、親の詞に悖りし罪の、忽地おん身に報いけん、よからぬ漂名が大内に、聞えて遂に御暇賜はり、浪々の身と落魄れ給ふ。元はといへば妾が罪人、疾くにも縁斷たらば、かかる憂目は見まじきものと、其の時初めて心づき。悔ゆれど更に甲斐もなく、せめては憂きにともなひて、愈貞ぐが女の道と、おもへど遂による年の、花も散りなば訪ふ人なく、金を得てん手段もなし、いつまで若くてあるべきと、歌妓はおもひ絶え、彼の人もろともに旅立ちて、此の鎌倉に足をとゞめ、僅かの本錢をたのみにて、商人とこまを替へ、昔は琴をかいたらす、其の手に今日は十露盤の、邂逅ならでは鬢櫛とらず、姿容を

つくづくはず、浮きたる心を懺し、商賣の道勵みしに、流石繁華の都會なれば、漸に利を得、花主も増し、富むにはあらねど世を易く、過ぐる樣にはなりゆきしが、滿つれば闕くる世の習俗、或年の春の頃、風のこゝちと打臥して、良人の病氣に臥され、醫藥に疎かはなけれども、常業にいたはしきん、漸に重る精の、今般と見ゆる枕方に、我を招きて宣ふは、かくも病苦の激しくては、存命ふべしとも思ほえず、我が死にゆかば年若き、おん身一人に此の家を、立つべきことの覺束なし、改嫁を恥ぢらひて、節義を守るは理なれど、却つて女の家住みは、よからぬ名を立てられて、人も嘲るものなるぞ。後のたゞ迎へとり、富度屋の繁榮を續ぐも、草葉の陰へ見せてくれ、と仔細にいひ遺し、其の曉に縡きれ給ふ。その時の悲しさは、同じ道にとおもひしゐ、露の憂き身のなかなかに、消のこるをかこちしが、良人の詞のおもければ、心を重にとりなして、女ながらも家業を嗣ぎ、三回忌も弔ひつ、近隣の人のすゝめにまかせ、よび迎へたる後の夫は、卽ち今の閑樂どの。まだその頃は、名を與次右衛門と呼び給ひ、吉三を誘れて富度屋の入婿、そらだのめなる媒人が、ことばには大いに違ひ、妾に二十も年老い給ひ、覇氣なき夫婦といふもあれど、折角仕似せし富度屋の店を、絶やさじといふ後夫にて色を貪る心はなし、老實なるをたのみに思ひ、殊に脊腹いためもせず、子までまうけし喜びに、侍女よ乳母よと、俄に裏もさゞめきて、少しは心安堵しが、吉三が幼きそのをりは、ひとか

たゞならぬ癖もちにて、三日にあけずの詞勢ひ、諭ひな薬をむたいに喫ませ、厭がる氣をこまぐ\に、賺し宥めてすゝめさせつ、多病の兒は成長して、愚かなるものとしきけば、又夫れさへも案じられ、おもふには似ず健かに、おひたつのみか利發にて、生産に懈怠せず、すこしは書を讀み、文字も知り、近隣の人の譽るものと、なりたるものが今さらに、遊君の色に溺れ、浮れあるきて内へはもどらず、己を責めしその人を、眼がねちがひと又人に、笑はするのも本意ならずと、いへばいふ程其方の胸にあたりての諫言が、切なしやと此の母を、厭ひ給ふも知りながら、端よりもきこゆるごとく、吉二と妾は義理ある親子、昔堅氣の閑寂殿に、此の頃の彼が行跡、裹むとすれど遂には發覺はれ、妾が前に氣をかね給ひ、面なき形勢にこまり／＼の、心遣ひを見る苦しさ、譬へば巨萬の寶ありて、いたづらに失ふを惜しむ心はなけれど、諫々も閑寂どのゝ心の裏をおしはかり、今宵來りて身の恥を、語るも道理を知らせんため、長うて一年、半年の、うちには妾も隱居を構へ、夫婦もろとも別室に、住ひて後富度屋の店を、此の假粧技に卜すとも、吉二が心任せなれば、夫れまで吉二を縛し留め、元のごとくに産業を、勵むやうにすゝめ給へ。妾も昔は覺えあり、意見をきけば胸だちて、理も非もわからぬものにはあれど、流るゝ水を止むるには、義理といふ柵より、恩と情に導かば、止まる水も流るゝめり、あぶない心なや我ながら、年老いぬれば詞も多く、聞くもうたてき長物語、さぞ倦じとやおぼさめ。

と、いひつゝ衣桁を顧れど、何地ゆきけん隠居し、吉三が姿は見えずなりぬ。薫その時膝をすゝめ、「聞くことぐ〜に理り究めて、返し申さん言葉もあらじ。初めより吉三の君は、妻とよばれ夫と崇く願ひにあらず、正室を娶り給ふ期に臨み、妨げはなさじといふ、契約の杯酌みかはし、憂きを語らふ友とちと、賑ひの證はこれを見て、疑ひはらし給ひねかし。」と、上着の袖を脱ぎかくれば、下に重ねし破紙衣、縁故こそあらめと見やりながら、譲りにはことばも出さず。薫涙にかきくれて「吉三が身におもひ断らせんと、白地に宣へば、妾もつゝまんやうはなし、原来親にも兄弟にも、幼きときに死にわかれ、孤のよるべなく、妓女とまでなり下り、箇樣々々の義に迫り、水泡信之助といふ武士の浪人にかたらひ、此の人をこそ良人と思ひ、唯に一夜の契りをこめしが、不思議にまうけし男子あり。柳巷に居る身の悲しさは、女童に姿を粧り、母ともよばせず、子といはず、名をも信二といふからに、これをや憂きの忘草、おひ出づるを頼みにて、世を住みよしと思ふなる、期し待ちたる甲斐もなく、夫は病の牀に臥し、自害して世を去り給ふ。心の儘に看病りてさへ、夫の別れの悲しきと、宣ふ心に比べて、片時も側に附添はず、剰へ非業の死、はかなき姿を見し時の、妾が思ひを察し給へ。此の紙衣こそ亡き夫の、即ち形見に侍るかし。かくて思はず日を經て後、再び良の兆しを得て、夫の墓に詣でし折から、不意くあひ參らす、吉三君の面容、良人に似たるに心ときめき、人してむかへ侍

りしは、昨日のやうに思へども、はや一年になりもやせん。蝴蝶は花を慕はねど、花に香ひを散らしつゝ、蝴蝶を招く淫婦、さぞ憎しともおぼすらんが、花街にあるその程は、男の心をいざなふも、活計なれば詮すべなし、さはいへ信しき母うへの、おん語を聞くからに、向來は吉三君をふつに思ひ絶ゆべきあひだ、過ぎつる罪は幾重にも、見免して給はれ。」と、傍に侍りし信夫が手をもて押しやれば、由縁は知らねど泣く母の、顔を見つゝも雪吹に對ひ、「免させ給へ。」といふも可愛し。雪吹ほとほと感激なし、「かかる理ある事を、妾はゆめにもしらざれば、御身が色に賺されて、吉三が倥侗と一條に、思ひしことの鈍ましや、水泡とやらんが義心を嗣ぎ、其方の憂苦を介けしは、放蕩に似つれども、少しは丈夫の魂あり、なほ慢らす教育せば、もとつ心に歸るべし。兎に角おん身が實ある、心操をきくにより、安堵のおもひに猶もおりぬ。たゞ此のうへも吾が子のこと、たのむは其方ばかりなれ。吉三が夜毎に訪ひよらば、三夜に一夜は戻し給へ、妓女が道理に感じ、客に横陳なさざるは、漁る翁が殺生を、厭ひて網魚を放つといはん。嗚呼夜もいたく更けぬらん、かさねて寬々來りなば、道知方して花街の色氣、見せ給はれ。」とことばを殘し、たたまくする袖に携り、「譬へば我が子がそゝのかし、他の女を勾引てさへ、吾が子の非をばいひもせで、他の女を蛇蝎の如く、惡むがなべての親心、それにひきかへかくばかり、篤きめぐみをうけながら、御心の安堵させ給ふやうなる爲便もな

く、吾が身が吾が身の儘ならば、髻を切拂ひ、潔き心の程を、少しは知らせ申さんに、殘り多し恥かはしっと、深くも實におもひいる、入江の洲鳥羽くゞもり、袖に涙の淵なさぬ、彼かれ水もほしけなり。雪吹もそゞろにはふり落つる、涙を袖に置きはらひ、「此の様に愛らしき、女子ありとも知らされば、土産さへも用意せず、摺箔の帯日結の衣、花簪やよかんなん、何にまれ欲しき物は、伯母が許へいひこしたまへこそと視しき詞に恥ぢらひて、面をたれ袖を弄り、愛敬づきて答へはきこえず、折から向ひの樓に鼓弓の音色すみわたり、我が身一ッの秋ならで、此處にも秋はありとてや、賤が伏屋に打わび侘ぶ、砧の聲も風が傳へて、興ある事とは聞ゆれど、憂きを積める心には、却つて涙の種となるべし。かくて薫は雪吹が歸るを送りて、女郎の門首まで立ち出でしが、雨雲落つる許りに覆ひ、辻行燈の火影幽にて、心ぼそさは彌増しけるとぞ　却つていふ、吉三は今宵はなぐ〳〵しき遊びして、花街の者の目を驚さんと思ひ、豫てよりの用意も母雪吹が來りしをもて、徒らになりゆくのみか、理ある母の諫をも聞きて、其の席にも堪へ難く、離亭に逃れ去り、只管大杯を傾けつゝ、胸の塞がりしをはるけんとなせど、あやにくに醉ひもせず、少時思案しありけるが、屹と心に思へらく、かく安閑となし居らば、いよ〳〵不孝の罪や重ねん、せめては今宵、母に先だちて戻りなば、歸り來ます其の時に、少しは心もおちゐ給はん、これに越えたる計らひはあらじと、あわたゞしく竹輿

を命だい、母の詞を半ば聞きかけ、先づ女駕を立ち出でける。爰に又、菖蒲は去年の五月の下旬、不意く無実の罪に陥り、佐吾七諸共富度屋を追ひ放たれてより、別に分説く術なければ、諸越が原なりける田舎に、兄弟身をよせて、今日と暮し明日とまち、夢の間に数箇月を送り、今ははや一年にも餘りぬ。しかるに近頃より吉三が、煙花に通へる由を仄かに聞き、いかにもして環り會ひ、諫めもせめ根みもいはめと思ひこみ、ある夕隠家を忍び出で、假粧坂にいたりし頃は、日も疾くに暮れ果てしが、おもふに増したる熱閙にて、青楼が軒端に掛けつらねし、燈籠の火影は恰も白日の如く、菖蒲はかかる光景をながめ、頻りに心臆せられ、東西と立忍び、兼て聞きおく菱屋の門を、恐る／＼さし覗けど、絶えて其の人は見えも渡らず、白地には問ひかねて、往きつ戻りつ窺ひ居る樓、調ぶる琴の曲さへも、想ひ彌増す想夫戀、昔を慕ふ涙の雨に、濡れて色ます山吹の、花ならねども籬に添ひ、不熟に物いひかけ、言ひつぐ人もなき時は、いよ／＼躊躇を重ぬる理、明けなば歸り給ふべし。其の折にこそくもりなき、心の裏をきこえんと、念じつゝも待ち居れば、風吹きあれて雲暗く、夜も漸々と更けゆく折から、暖簾口より昇きいだす、駕籠に結びし提灯は、おぼえある富度屋の紋。もしや其の人ならましかばと、思ふより先づ胸さへ轟き、駕籠の後方に從ひて、出口をもたち離れ、往来迹絶えし畷路、折こそよしと駕籠に近づき、これぞ富度の家君ならずや、さあらば少時待ち給へ。いふべき

事の候ふ」と、きいて輿舁菖蒲が姿を熟々と打見やり、夜道に女の只一人、供を倶せぬを不審りしが、流石花街に立交らへば、早くも彼が心を猜し、兩人は點頭きあひ、頓て駕籠を傍に下しおき、「いかにもこれぞ吉三の君なれ。寛りに語り給へ」といひつゝも、小暗き松の下陰へ、輿舁は退きけり。菖蒲は駕籠の簾押開け、「吾が夫なう」と動り覺せど、此の時吉三は十分の醉ひを發し、心持よげに眠り居て、菖蒲なりとは思ひもかけず、漸くに目覺めつゝ、駕籠よりいづる足元の定かならねば、「あら浮雲や」と笑む菖蒲が肩に凭れ、「無益き心遣ひなれ、我更に醉ひしにあらず、今の如く徙倚ひしは、最前首に當りたる餓鬼道の學びにこそ。諺「抑々餓鬼道と聞えしは、德ある者は山林塚廟の神に祀られ、德なきものは不淨の處に居り、苦を受くる事無量なり、饑ゑに臨めど喰らふ事能はざれば、身體總て力なし」」と扇をあげて歌ひつゝ、又蹣行きて倒け懸り、昔に變る形勢を、見るからに先の胸塞がり、「絶えて逢ふる菖蒲が顔を、早くも忘れ給ひしや、身におぼえなき罪を得て、追ひ出されし其の時は、死なんと思ひ定めしが、さあらば愈疑ひ懸り、心の詐援顯はれて、詮方なさの自害よと、浮きたる名をば死きあとに、歌はれんも影毛く、死ぬに死なれぬ身はいかにせん、一人音をなく谷添ひ、涙の雨に水越えて、底の水草の菖蒲草、ひく人もなく朽ち果つるは、みな宿世の報いぞと、おもへば恨みはあらざれども、忘れもやらじ侍從川、落ち浮く花ともろ共に、流るゝ君の扇を慕ふ、四箇の蝴蝶

た驚かし、取りあげたるが縁となり、いまは胡蝶の夢の世に、秋の扇と捨てられつ、忌々しき者にみおとされ、かかるすがたにならざりしや。兒手柏の佞人、それが巧みといふ事を、猜し給はば今一度、よび戻したまひねかし」と、涙を額にふりきれば、破亂離と零るゝ前髪に、ひかれて櫛も膝に落ち、いよゝ別れの辭やと、心一つに歎くべし。吉三は今宵花街にて、母の意見に興を失ひ、いま又菖蒲にかこたれて、いと憂くおもひければ、賺して此の場をかへさむと、呵々とうち笑ひ、「さほど身におぼえなくば、など其の刻に分説せざりし。おん身に別れて十餘箇月、今頃は改嫁して子を生くる頃なり。」といひすてて駕籠に乘らんとす。菖蒲は尚も泣きしづみ、「斯く宣ふも理あれど、思ひがけなきことのみにて、頓には言釋く術便もしらず、その暇に追ひ出され、など血を合はして兄弟と、知らし給はぬ情なやと、兄を恨めば由縁在る事と、答ふるのみにて力なく、恩愛義理の四絃に、身は搦まれて琵琶小路、晝は人目も繁くして、流石に面伏なれば、夜な／＼彷徨む我が家の門、昔は自に冊きし、侍女奚婢は言葉もかけず、畜生の心にも、主に疎まれ追ひ放たれし、我が身を悪しと思ひてや、手飼の犬の吠ゆるも轉く、其所よ此處よと徬徨ひありき、思ひを空しう戻りしを、改嫁をせし頃とは、そは餘りに情なし。かくまで氣強うなり給ふは、花街に住みゐる妓女の、風俗にやそみ給ふ。とはいへ人を妬しといふ、心は更に侍らず、君が意にいり給ふ、阿曾比を迎へ給ふとき、妾も婢の中にくはへ、縱

ひ實の情はうけずと、御側におきて給はらば、それに上こす願ひはあらじ、やゝ嘆をこと泣き叫べ、とりつき歎けば心なき、千種も道理に感じけん、涙をこぼす萩の露、尾花も風にうなづけど、吉三はいぶせき面持して、一言の答へもなさず、和ら駕籠に乗り移らんとなす折しも、何方に隠れ居たりけん、佐吾七つと走りいで、忍びやかに立ち出でし、妹が形勢心得ずと、見え隠れに慕ひ来りつ、仔細詳に聞き候、菖蒲も今いふごとく、餘り無慙の御ふるまひ、よし我々が實の兄弟にあらずとも、如何ぞ不義をはたらくべき、そは生平の行跡にても知らせ給へ、先づきこゆべきは、我富度屋に在りし昔、君は曾て漫行もし給はず、まいて柳巷は何方とも知らせ給はぬ程なれば、皆人に似氣なしと、誹る人もあんなれど、商人はかくてこそ、いよ〳〵家を起さめと、我はこれを喜びしに、近曾より薫とやらん遊君の許へ通ひ、家には宿し給はぬ由、仄かに傳へ聞きたる故、某私かに窺ひ見るに、渠は容華絶代の婦人といふにもあらず、思ふに言を巧みにして、君が心を蕩かせしものなるべし。たれ花を愛づる者は花落りて再び訪はず、風水を愛づる者は開落を知らず、四時をいはず、男女の情も亦然なり。容を慕ふは短く心を慕ふは長し。限りある錢財をもて、限りなき愛情に失ひ給ふぞ愚かなれ。はやく心を轉し給はずば、遂には親類血族に捨てられ、路頭に吟ふ身となるべし。さはおぼさずや。」と尚意見の趣心の限り聞えんとなせど、吉三はその言を聞きも果さず、怒り心頭より起り、佐

吾七が髻を摑んで大地に摺りつけ、「初めの程は菖蒲のみと心得、少しは不便とおもひしが、今こそ知ンぬ、妹を進めて誘引ひ来り、又こりずまに我を謀るものなるべし、そが上、汝が詫びは得もいはず、只管意見の趣に假託け、己の妹を美麗たりといはぬ許りに、薫が姿を榮えなしと罵る條、忠と義とをおもてとし、心の底は妹を、餌となしつゝ己が身の、榮利をはかる横道者、さまで我が放蕩を諫き思はば、とくにも来りて諫むべきを、今まで遲々せし分説ありや、語れ聞かん。」と突き放し、はたと睨めば、佐吾七少しも退かず、「こは情なきことをきこえ給ふ、御勘當うけたる日より、罪なきよしを告し解き、御免しを蒙らんと、片時も忘れはいたさねど、生平君が傍には、彼の段八が附添ひ居れば、直言も佞辯に妨げられ、聞きいれ給ふ期はあらじと、諫めもいれず詫びもなさず、今日までは默止したり、塵垢は鑑を曇らせ、讒言は人を惑はす、かく御心荒々しくならせ給ふ、原はといへば、家の裏に養ひ給ふ猛犬あり、彼を退け給はずば、遂には齒牙に害せられ給ふべし、歎かはしきことならずや。早く心を轉し給ひねかし。」と、理を盡しつゝ涙と共に諫むれど、沈醉のうへなれば、吉三曾て聞きもいれず、「おのれ既に勘當うけ、我を主人とおもひはせまじ、他人に對ひて無益き譫言、おもはぬことにかゝづらひ、我も醉ひを醒しぬ。」と袖を拂つて去らんとす。佐吾七忙はしく引留め、「かさね〴〵難面き事を聞え給ふ。主人とおもひたてまつらずば、如何で初めより諫めこしらへ申す

べき、縱ひ御暇賜はりても、心は君の傍に、片時もさらず侍ふ」と、聞くより吉三勃然と怒りを生じ、扶地と足にて蹴返せば、吐嗟とばかり打驚き、たちよる菖蒲を引きのけつゝ、起きも上らぬ佐吾七が、眉尖面の差別なく、踏みつけ／＼聲ふりたて「やをれ佐吾七、主人と思はゞ家を諂ひ竊かに諫言なすべきを、夜も更闌けて、聞く人なしとはいひながら、大路に主の非をあばき、己が誤は己がいふ、心の鏡を曇らす塵垢。我原の武士なりせば、汝を一刀兩段となし、此の憤りをはるけんものを、今商人となり下り、身に寸鐵も佩びざるぞ口惜しき」と、眼逆つり狂氣の如く、さん／＼に打擲なし、衣紋亂れて懐中より撲的落ちたる錦の袋、うちより零るゝ一品を、佐吾七は手に取りあげ、提灯の火影に見やり、且驚き且怪しみ、吉三が面を信度見れば、吉三は更に心もつかず、「おのれ我を嘲まへて、何をか恨み思ふらん。」と、又も駕籠に乗りうつれば、「わが夫餘り聞きわけなし」と、携る菖蒲を突き退くる。このすきに佐吾七が、駕籠の簾に手をかけつゝ「かくなる上は曾て意見の筋を聞ゆるにあらず、別に問ひ申したき事あれば、まづ少時待ち給へ」といふさへも聞きいれず、佐吾七が手を拂ひのけ「駕籠とくやれ。」といきまきつゝ、西を望んで急がせける。

此の稿を半ば脱して後、耳食錄とかいふ小説を讀むに、七賢の名を題として、酒宴を設くることを載せたり。吉三が地獄の禮冊をうつすに髣髴たり。彼の書をもて此の趣向をなすにあらねど、

和漢の人情はひとしきことかくのごとし。

繡手摺昔木偶卷之三 終

縷手摺昔木偶 巻之四

江戸 柳亭種彦作

八 おぼろふじ

歸命無常の世の中に、易往無人と說かれしごとく、往きやすくしてしかも人無し。日頃は篤行の吉三なれど、驕奢日々に超過し、いまは虎狼の心となり、更に兩人が諫めを用ゐず、家路を作して立ち歸れば、菖蒲は只管、身のはかなきをかこたれて、落つる涙をはらひもあへず、佐吉七は手を叉き、大路に窒と座を占めて、深く思案しありけるが、己が肩に殘りたる、吉三が草履の泥の跡、數回見かへりつゝ、土足にかけられ踏まるゝとも、主人と主のある其の人を、恨むる由は曾てなし、さはいへかく噂を聞きわき給はず、放蕩無賴の人とよばするも、皆段八が所爲なれば、渠に打擲せられしと、思へば無念口惜しく、只憎むべきは段八なれ、主人に假託け遊狂なす、惡意もとくに知るなれば、花街に在らんは必定せり。と吉三が前を憚りてや、芒の中に押隱せし脇差一つ、腰に帶び、花街を指度

見わたしつゝ、西を望んで走せ去れば、菖蒲は驚きとり携へつ、袖にひかれて臥し轉び、こは思はずも理なれど、花街を騒がし給ひなば、それを越度に段八等が、愈悪事を計較みて、いかなる憂目や見給ふらん、罪なき罪を身に負ひし、元はといへば道ならずも、田子松が妾に懸想し、さま／＼にいひ口説き、剰へ吉三樣の後言いふが面憎く、言ひ懲らせしを遺恨に思ひ、段八と牒し合はせ、人が巧みと知りながら、證據なければ詮術なし。心の淺きを見すかされ、いひよらるゝは女の恥と、只一條におもひしに、果やたにつゝみしも、今となりてはいと悔しく、かくまで斯うぞと知るならば、是を豫め艶書をかゝせ、それを證に言分せん、といふも六日の菖蒲草、兄にいはゞこの苦勞もなからん、悪黨は咎なれば、是れより直に富度屋に行き、田子松に恥知らせ、怪しき心の裏をいく度も言譯させ、なほも聞きいれ給はずば、潔う自害して、女の操を全うせん、身をも恥辱も捨てたれば、思ひは更に遺らじ」と、抱帯引きしめつゝ、脛もあらはにかけいづる、緒に縛ひし秋草も、野分の風に飜り、空凄まじく雲蔽ひ、顔は定かに見えねども、涙にふるふ聲曇り、思ひつめしと知られたり。佐吾七は忙はしく、往く先にたち隔たり、其方に恥を捨てさせては、心を竭せし甲斐はあらじ、その上に田子松は、悪人ながらも主の血脈。それより先に段八を。」と、兄が走れば妹が止め妹が走れば兄が止めつ「兄の語を聞きいれずや。」「妹を不便と思さずや。」と、理なく携る袂を拂ひ、道理と知れど言ひ懲らし、

往きつ戻りつ同じ路を同じ思ひに兄妹、心も闇にたどりまよひ、爭ひ果つべうも見えざりける。抱へて諍ふ。段八は今宵吉三と共に、女郎に在りて醉ひしれたる折から、雪吹が來りしに驚き、早く其の席を遁れ去り、雪吹には絶えて影をさへ見せず、樣々に心を案じ、これ吉三をおひ失はん、緒なりと思ひつゝ、先づ家に歸らめと、急ぎ花街をたちはなれ、長き堤を歩み行き、はしなくも田子松に出で會うたり。小夜更けて何地行くらんと、段八不審に思ひ、まづ我が身の上を詳にかたり、さて仔細を問ひければ、田子松曰く、「今宵姉雪吹を送りたる下婢、口不良くも朋輩に語るをも聞き、姉の花街に往きつる事を仔細知り、これ屈強のことなりと、今夜所へ赴く路なり。日來血脈在る我を疎んじ、吉三のみ譽めのゝあく姉雪吹、いと面なくて、是れより猶後つかた、我放蕩となればとて言ひ懲らす事はなるまじ。今頃は吉三の愚者、辛き目や見つゝ居らん、あな心持よや。譬へば渠容色閑雅にて、張良孔明が姿を欺くとも、我宗主彌子瑕の計策を施し佐吾七菖蒲が行方を索ね、菖蒲をば人知らず殺害なし、佐吾七を夫として、富度の家を、嗣ぐべき事も遠からじ。」と、心せかれて物いひざまの、前後異なるには氣もつかず、猶いへりけるは、「吾主はやく家に歸り何ごとも知らぬさまにもてなし、熟寐してゐ給ひね、姉の手前は宜しくこしらへおくべし。」と我がいふべき言を果して、段八が答へは耳にもかけず、足をはやめて花街にいたりしが、とかくなすまに夜も既に更たけ、雪吹が女郎をたちいづ

る門邊にて行き會うたり、雪吹は田子松なりと見るよりも、面隱しして往かんとするを、田子松は心得てはやくも前に跪き、「姉君此の所へいたらせ給ふ由、由縁ありて詳に知り、眞夜なれば心もとなくおん迎ひにまゐりたり。なみ／＼の事なりせば、手代にも命じ給ふべきを、自らいたり給ひしは、一定深き由縁あるべし」と信だちて聞ゆれど、雪吹は絶えて答へもなさず打笑ふのみなり。田子松は早くも來りて、吉三が雪吹に言ひ懲らさるるを聞き、彼等に口を開かせじと、計決みし心あて齟齬ひ只管後悔なしけるが、又心に一計を生じ、俄に脚氣の起りし樣にもてなし、「あら痛やたへ難や、かくては一歩も歩みがたし、少時此の女驛に憩ふべし」と立ちいらんとなすを、雪吹和やかに押留め、「思ひのほかに夜も更けつ。はや四更も過ぎ五更にもちかかるべし。躊躇ひ居らば夜や明けなん。妾も駕籠を命けたれば、其方も駕籠にて戻り給へ。さまで路の勞はしき事はあるまじ」と、又一挺の駕籠を命じ、下奴等に介け抱かし、漸く駕籠に乘らしめける。田子松は雪吹を賺き女驛の裏を窺ひ、吉三が在所を看濟まさんと、思ひし其の計策も徒らになりもて行き、詮方なく雪吹と駕籠をならべ、家路をさして急がせつゝ、路の程五六丁もたち離れしが、空ます／＼結陰り、雷遠く轟きて、いと凄然き繩手路、往來も途絶えし折こそあれ。芒の隈より閃きいづる、電ならぬ白刃の光、あはやと見る間に草押分け、一個の曲者顯はれいで、物をもいはず切つて懸る。駕夫は狼狽なし、駕籠を傍に捨て置き

て、後をも見ずして遁げうせけり。曲者は悠々と提灯を手に取りあげ、頓て白刃の鋒にて、駕の簾を押上ぐれば、田子松生きたる心地もなく、慄れ戦き倒れ伏す。曲者は猿臂を延し、襟首掴んで突放れば、再び生きたる思ひもなし、闇に紛れて落ちうせける。此の時既に火も消えつ、闇を探りて曲者は、雪吹が駕籠に往き当り、得たりと白刃を取直し、持ちたる柄も砕くる許り、力を極めて突き貫せば、阿とばかりに魂きえて、中には女の叫ぶ聲。曲者は打驚き、倚傍ず後に遁げ残りし、一個の轎夫うかゞひより、息杖ふりあげ打つてかゝる。心得たりと身を反し、電光石火と閃く刃に、息杖斜に切り折られし、地上に撥的倒れつゝ、両截になりて死せにけり。此の夜雪吹に従ひ来りし者は、田子松を始め悉くいひ甲斐なくて、皆疾くに遁げ去りつ、絶えて是へとゞまるべき者もあらず。曲者は先づ刀をぬき直し、鮮血を拭ひて鞘におさめ、駕の簾を揉りすてて、雪吹が死骸を探り見て、駭然と驚き、此はしく東の空に去られたり、後をつけくる非人の水音、行燈にも燈臺にも、一切用ゐるに大萬燈、高提灯の火影を隠し、慾にはふける鶉衣、人を殺して立退く曲者、證據をとり得て物ねだりせんと、足音忍ぶ駒下駄に、當るを何ぞと取りあげみれば、鍔に引かれて抜けたりける、小柄をうちたる小刀なり。是れ屈竟と拾ひあぐる、曲者はむつき、ふりむく顔にさし出す提灯、見られじものと打落す、水音は小刀口に銜へ、帯ひきしむる其の間に、只一刀にと抜きかくる、背をおさふる水音が早業、足を緬に

踏みこらへ、撲れて起きもはやならざる筒音、力餘りて倒け懸る、響きを細方に曲者が、此所なンめりと踏出す足に、丁度踢返す作りし鴛籠、小楯に取りしを此方は知らず、又立ちよるをよせつけじと、拔き放したる白刃の光、心得たりとかい潜る、はずみに鴛籠の棒鼻にて、鳩尾をや突きたりけん、呵と喚んで倒れ臥す。仕すましたりと曲者が、胸さかを無手と捕へ、膝おつかけて止めの刀、あはや刺し通さんとなす折しも、夜風に散らす千種の露、面に懸りて氣のつく水苔、傾ゆる手先に支へられて、鎌を左に撥切れば、手元狂ひて突き迦し、襟に冷りと刀の背、睫眨と許り身を振りほどき、砂を摑んで打ちつけつゝ、面は女なし堤傳ひ、水苔は遂に逃げさりける。さる程に、吉三は少し段八に後れて家に歸りければ、母雪吹が實ある諫を聞くからに、今までの放蕩を只管に後悔して懐ろ手をもせず、日に母が戻りの遅きを案じ、門を望みて待ち侘ぶる時しも、田子松は喘ぎ〳〵走り來り「變事あり〳〵。」と叫ばひ、詞はなくて、先づ雨々泣きぬ。此の聲を漏れ聞きて、閨裏も臥戸をたちいで、段八もその後に從ひて坐しければ、吉三田子松に對ひ「汝が愁傷ほど〳〵心得ず、やうすを疾く語れとおかしこ」と息まく、田子松涙の間よりも「姑雪吹は人に討たれて死し給ひぬ」といふに人々大いに驚き、吉三は恰も狂氣の如く、「なに母うへには人手にかゝりて死し給ふとか、讐は何方の者なるぞ、」泣きつゝ居らざること果てじ」と歎きを止め仔細に語れ」と疎まされ、田子松漸う涙をおさへ「姑君今宵花街にいゆ

き給ひしを、我ゆゑありて詳に知り、心もとなく思ひ御迎ひにまゐりつゝ、花街をはなるゝこと三四町、並松のかげよりも、曲者大勢むらがりいで、簡々刀を閃かし、姑君の乗り給ひし、轎籠を目がけて切つてかゝる。我何等由縁は知らずといへども、かくと見るより抜合はせ、これを遮へ彼を防ぎ、勢ひ猛くぞ戦うたり。噫歎ずべし、寡は衆に敵し難く、そのうへ敵は地の理に精しく、我は案内知らざる夜路、遂には足を踏みはづし、数千丈の谷底へ、真逆しまに落ちたれども、原来拳法に達せしかば、幸ひに身は恙なし、其の暇に曲者は姑君を殺害し、行方もしれず逃失せたり。あゝ無念口惜し」と、實しやかに語りける。斯かる処へ奴僕等は、雪吹が死骸を轎にかき載せ、漸くにたどり帰れば、閑楽吉三は周章て惑ひ、雪吹が死骸をあらため見るに、手疵は殊に浅く見ゆれど、爰に撃かれし形勢なれば、只夢の思ひして、吉三は只管涙にかきくれ、女めかしく泣きつゝ居れば、閑楽熟思案なし、つとたちて雪吹が死骸を奥まりたる一室に移し、頓には出でも来らず、良久しくして閑楽元の席にかへり、奴僕等を近くまねき、「おもひまうけぬ事にはあれど、汝等など用手松を介けて曲者を捕へざるや、いかに商人の従者なればとて、餘りにいひがひなき奴等かな」と言ひ懲らせば、奴僕は皆面目を失ひ、恐る〳〵いひけるは、「只一人の曲者に懼れ、主の危急を顧みず、己が志々に逃げ去りし怯懦、いかに罪し給ふとも、絶えて怨みとは思ひ候はじ。せめては用手松どのにもあれ、踏みとゞまりて

る給はゞ、刃を合はし防ぎ申さんが、夫れさへ吾儕に先だちて逃げ失せ給へば、人々は猶度を失ひ、かゝるきはにはおよび候ことゝいふに、閑樂大いに憤り、田子松をはたと睨み、「一體には汝多勢を相手に戰ひしと、誇りかにいひつれど、今彼等がいふを聞けば、曲者は只一人にて、殊には汝奴僕等に先だちて逃げ亡せける由、熟く思ふに汝が身には戒刀さへあらず、何をもてか曲者とは刃り交びしぞ、又花街に近き鳰松に、落ちいるべき深谷ありや、分説せよ」と辱しめられ、流石面なくやありけん、一言半句の答へもなさず、稍ありて田子松は漸くに頭を擡げ、「一端にも聞え候ごとく、曲者と渡りあひはな〴〵しく戰はんとは、只心に思ひしのみにて、實はいちはやく逃げ去り候。さるから曲者は、一個とも多勢とも仔細しくは知らざるなり。常言にいふ如く衆と寡に勝ち難し、我持病の頭痛にて、足なへて立ちがたく、心は猛く勇むといへども、やみ〳〵賊を討たせたる心の中の苦しさを推し量り給ひねかし」と、理ありげにいひければ、閑樂いよ〳〵打腹だち、「汝既に蹉へて、何の足をもてか其の場を逃れ此の所へ來りし」と、なほ嚴しく問ひつめられ、田子松は頭を掻き、「されば其の事に候、彼の曲者に刃向ふ時は足なへて立ち難く、逃ぐる時はいと健かなり、おもふに曲者は脚氣の毒にやあらんずらん」と、いふこと〴〵のをかしげなるを、段八は傍いたく思ひ、眼をもて己がこゝろを知らせ、田子松を退かし、和ら其の跡に居かはり、「今田子松どのを、いかに折檻し給ふとも、世を去りま

せし今嘆けり、再び活きいで給ふにもあらじ。夫れよりは先づ眼前に在る讐を討ち、靈魂とならんを慰め給へ。」といふに、吉三は膝を進め、「知らざりき、母の仇眼前に在らんとは、姓名を疾くきかせよ。」と、せきたつを宥め嘆き、縱ひ姓名を言へばとて、此の敵容易くは討ち得難し、強ひて聞かであらんこそよからなん」と答へたれど、吉三大いに怒り、「我商人と生まれ、劍法に熟せずといへど、聊か仁義の道を知れり。たしかに讐を知るときは、晏と見つゝ居らんや。早く語れ。」と、田子松を目注にふくれば、段八點頭き、「當の讐は別人ならず、則ち富度の吉三なれ」「とは〳〵いかに。」と駭く吉三。仔細あらめと閑樂も、謾りには語を出さず。段八はつと立つて、吉三が脇差取り出し、膝の邊へ押しやりつゝ、「母君おん身の放埒を歎き、薫が許を訪ひ給ひしその歸路に果なき最期、御身の行跡正しき時は、如何ぞ深夜に母君が、花街に往き交ひ給ふべき、さる由縁にこそ、當の讐は吉三なりといひ出でし、我が言葉は愆りならず。仁義の道を知り給はば、潔く切腹なし、母の仇を討ち給へ。」と非を責ひたる佞辯を、吉三は悲歎の上なれば、宜なりともおもひけん、既に自害と見えけるを、閑樂忙はしく押止め、「昔は兎もあれ角もあれ、今は商人の吉三、切腹はいと似氣なし。」そがうへに、母の横死も御身が所爲に、一定せしといふにもあらず。しかはあれど、此の儘には捨ておき難し、未來までの勘當ぞ、疾く〳〵此の家を出で行くべし。」と、脇差捥ぎとり突放し、涙に情を籠らせけり。田子松は膝

苛りいで一理非明白なる段八が言を用ゐず、吉三を勘當し給ふとは、寛仁大度のおん計らひ、彼は喜び候はんが、我は彼のゐる姑を討たれ、活けおいてに遺恨なれ、願はくは吉三が隨意、自害させ給はれしと、眼前曲者に出で會ひながら、後をも見ずして逃げかへりし、我が臆病は得もいはず、事に假託け遺趣ある吉三を、失ふ心と早くも猜し、閑樂は聲ふりたて「原來吉三が放蕩故、姑の非業の死といひて、恨み思はば其のはじめ、吉三の行跡わるかれと、花街に通ふを勸めし奴等も、姑の讎の同類なれ。たれをも共に征罪せんや。往ぬる年段八と謀し合はせし一條、菖蒲に心をかけしまで、我物陰にて熟々も聞けり。汝は雪吹が聟なれど、惡楷とたち交らひ、勘當うけしを幾度か、われ雪吹に贖話なして、從者の中へ加へたれば、我は汝が主ならずや。最前もいふ如く、主と病に勝ち難し。再び讒りに口を開かば、夫彼分明しく詮議を遂げ、罪の輕重を整すべし。といふは武門の口眞似にて、原商人に生長ちし閑樂、吾が子の自殺も止めたれば、是等の小事にかゝづらはず、と左右を顧みれば、田千松は更なり、段八も心持よからず、さらぬ方のふうちまもり、遙か末座に退きぬ。其の時閑樂吉三に對ひ潸然と涙を流し、汝が生質、強ならず弱ならず。頗る在常の道をあきらめ、縱ひ花街にたちいるとも、侫倒たる者にはならじと思ひしとは雲泥に違ひ、たゞ一人の遊君に魂をうばはれ、日夜を分たぬ柳巷通ひ、日頃より言ひ諭せし、親の言葉に悖りし天罰、忽地其の身に報いきて、母を討たし

に脅しきと段八に嘲られ、流石に恥をしればこそ、自害と思ひ定めしならめ。其の恥辱をとくにも知らば、かく躁動には及ぶまじ。いふが隨意切腹させ、義理ある妻に身の罪を、贖はせんと思ひしが、殺すにも殺しがたき、其方と我とも義理ある中、こゝを思はゞ惜しからぬ、命なりとも存命へて何卒母の仇を討ち、それを功に立還れよ。噫往ぬる年、家業を嗣がせ閑かに樂しむ心にて、閑樂とよびなしつ、向來信士と名をかふる外に用なき老法師、今日より原の與次右衛門、朝時參りの肩衣ならで、馴れぬ袴を引繕ひ、再び人にたち交らひ、一人の子さへ勘當なし、何樂しみに存命へ居る。」と近鄰の人に言はるゝも悉皆が放埓ゆゑ。顏見て居れば怨みの語つくる期はさらにあらず。やよ段八吉三を寢卷一重となし、琵琶橋より追拂へ。」と老いの怒りに聲漠濁り、涙のみこみ縁先より、吉三を撲地と突落せば、死ぬに死なれぬ慈愛の語、吉三は父を伏し拜み、涙にくれて生體なし。承りぬと段八は、己が寢卷をとり出し、吉三が小袖と脫ぎかへさすれば、田子松も少し心放せらるゝ心持して、「いざや黑暗なる追放らめ。」と、吉三が襟頭引摑み、「とく〳〵立ちね。」といきまきたり。心づからといひながら、吉三は親に捨てられて、今一度母の顏見まく思へど、それさへも叶はぬは、悉皆己がなす業とし知りて、中々に田子松を恨みもやらず、膚着の襟をくひしばり、身も戰栗きて行き惱み、涙の玉は玉盤に落つる聲あり。琵琶小路善と惡との心の清濁、呂律はいかに鳴き渡る。鴈は栖を求むれど、我が身

はいかになりゆかん、往方さだめなき流泉啄木、かい探ひかい拂ふ、涙に路のあやめも知らず、琵琶橋のもとに彷徨ひけるに、扨、段八田子松は吉三を追ひ出し、程なく家にたち還りけるが、閑樂はその間に、早くも雪吹が死骸を異所に移し、三五日を經て、葬送かたのごとく營みけり。是れ雪吹が非業の死を深くつゝみ、人口を恐れて、しかはからひしなるべし。

九　やぶあみがさ

吉三は琵琶橋のもとに彷徨ひ、ありし事は全く只夢の心持して、今なん覺めて、身の咎を知り、熟く思ひあぐらすに、母の横死は更なり、故なく菖蒲を追ひ失ひしまで、悉く我が業にしあれば、此の川水に身を沈め、死をもてそれがれ罪を贖ふべしと思ひしが、また父閑樂が厚情の破りがたきことあれば、ひと先づ鎌倉を立退き、其の後に自害すとも遲からじと、思案をさだめ、往來の人に面をみられんも恥かしければ、夜明けぬ程にと路をいそぎ、稻瀬川の邊までいたりしが、また心におもへらく、かくて此の地を立ちいでゝ、菖蒲が許に音信なさずば、いか許り我を憾みん、初めより色に愛で情に絆されしとにもあらねど、義をもて盟ひし仲は、いよ／＼捨つるに忍び難し、寃せん角せんと躊躇ひ、沈思鬱結として、さま／＼に思ひ亂れ、彼も名にきこゆる俊才の婦人なり、とも／＼に商議せば、立退く

に便宜のこともあらんか、再び女郎に赴かんは、嗚呼の業なれど、相識に言託やり、街にて面を會はし、此頃をなりよし聞ゆるほどは、物わらへとなるべき罪もあらじと思ひながら、往くともなしに、館を目谷もうち過ぎ花街のかき堤にそひてたどり行けば、夜はほのぼのと明けはなれ、雲も晴れぬ。秋の空の定めなく、朝霧ふかくたちこめ、更に咫尺もわかちがたし。昨日に替り窶々しき姿には、却つて便りよくおもひ、なほ足をはやめて往くをりから、野夫編笠ふかくかうぶり鼻紙にて面を覆ひたる男と、木綿の袷きたる羽織を頭よりかぶりたる男と、くるわのかたより出で來り、二世にたふときもの金に越えたるはなし、樓屋の長り阿曾比何某とやらん、多田翁に身請せられ、妓院のなごりとかいひて、彼の權は讓りあひぬ。邂逅通ふだに心にまかせぬ吾儕も、阿曾比を贖ひいだす何某も、人に差別はあるべからず、唯金の多なると金の乏しきとによれりと語り出せば、一人が答へて、こゝなるぞ、かく無念に金を失ひ、如何ぞ卑しき人の業ゆへき、譬へば西施が容貌ありとも、しほたれ衣轉ゆふにみなれなば、愛なきことの多かるべし」といひしらひつゝ往きすぎぬ。吉三は此の事を聞いてふかく心に恥お思ひ、嗚呼彼等が言ふに違はず、多なる金を遣ひ失ひ、かく甘身姿となり、又こりずまに花街わたりを徘徊なすは、我ながら愚かなりし。何卒母の仇を索ね片時も早く討ち取り、靈魂を慰めまゐらせんと心を勵まし、もと來しかたへ立戻り心におもふは、昨日は千金を擲ち、今日は半錢をだに貯

へず、面を覆ふ笠だになき、憂身に替へて遊君を、携へいづるは何者ぞ、あな傾羨しと煩悩の、絆にしがらむ縄手路、ゆき小止みて吐息しつ、さはれ昨夜まで此の事を聞かざりしぞ不審しき、先づ身請せらるゝ遊君は何人なるべき。青柳にてやあらん、彼は身もしなへて姿なつかしく、殊にものにさからはぬ性なれば、人の意にいのりつるものか、牡丹は艶にて上臈めかしく、肉づきたるもみどころあり、女郎花が媚きたちて、客人の心をやいざなひけん、彼かこれかと無益き事を思ひつゞけ、遙かに花街を打眺むれば、朝霧少し晴れたる間より、いろ／＼の繡なる袿は、秋野の錦のごとく、遊君数多群り来れば、是れなめりと思ひとり、流石面なくやありけん、松の木隠に身を隠し、事のさまを窺ひゐたり。かくとも知らず遊君薫は、不計も身請せられ、最はなやかに粧ひ、長露次郎を始め、親しき阿曽比に傍を囲ませ、なほ雜具を数多後に従へて、笑ひ散動き来るにぞ、吉三は此の形勢を見てふかく驚き、窶々しき姿もわすれ、「やよ待ち給へ、言ふ事あり。」と、往くさきにつと立ち出でる。唯に馴衣一重著て、さも甘身しき姿なれば、薫は先づ胸ふさがり、「こは何故に」ととり携り、涙にかきくれ詞なし、稍ありて吉三いひけるは、「今日なん菱屋の長の阿曽比、客人に贖はれ花街をいづるよしは道行く人の物語にて知れど、他人とこそあれ、雨雲のよそごとに聞きながせしが、知らず御身の上にてありけるか、それに引きかへ我は不意く勘当せられ、便りなき身とはなりぬ。是れにも種々の由

緣あれど、先づ其方のことより聞くべきなり。かく身請せらるゝばかり親しき人もあらんには、かねていひ知らせ給ふべきに、何とて今まではかたり給はずやと、少し怨ずるやうにきこえければ、薫は、涙拭きはらひ、原來浮きたる心もて、契りしなかには侍らず、異所に往く事あらば、如何ぞつゝみ申すべき。則ち君の許に參るにこそ、と雨々と打泣きければ、吉三は更に不審はれず。薫を送り來りし者共も、吉三が爲體を見て、且怪しみ且呆れ、絶えていふ由を知らず。露次郎漸く膝行りいで、「それ彼心得ぬ事のみにし、驚き給ふも宜なり。おん言葉に從ひ昔のことを後にして、薫主のうへより語り申さん。「母御雪吹きさま日外私かに我が家を訪ひ給ひ、「おん身が許の妓女、薫とやらんに契りてより、吉三の心物狂はしく、我がいふ事さへ聞きいれず、畢竟薫が身うけなさば、吉三が心もなごりなく、定まるべしと思へども、親がゆるして往ぬる年、菖蒲といへる女をむかへ、彼にさだまる妻しあり。如此々々のことにより婚姻をも調へず、故なく菖蒲を追ひ出しぬ。我はさら〳〵知らざれど、ともかくに計扱みてしか計らひし事なるかと、思はれんも影護う、漸く在家を聞きおきたれば、ちかきに菖蒲をよびかへさんとおもふなり。婚姻だに調へば、薫を吉三が側室に、なすとも深き咎はあらじ、いかに承引き給ふべきか」と、薫が身請を望み給ひぬ。「まだ年もいと若く、我が爲の搖錢樹、樓[illegible]蓮華の盛りより、あすふしとみる薫なれど、今まで許多の金を得て、德つきたるも薫なり、恩ある

人の世に出づるを妨げんも本意ならずと、花街を出すに一決なし、身の代に賜はるべき金の數を定めしかば、雪吹さまも喜び給ひ、鴇よりもいふ如く、菖蒲を再びよびむかへ、婚姻なさするそれまでは、薫を知方に託けおき、吉三がいたらば身請の事、必ず風說し給はるな、金を送らぬ其のうちは、無きのにも漏らすまじと口がためして歸り給ひしは、はや十日許り鴇の事にてあらんずらん」と、いと仔細に物語れば、吉三いよ〳〵驚きぬ。薫稍淚を止め、昨夜母君の訪はせ給ひし一條は、君も知らせ給へば、今又いふも勞がはし。母君かへり給ひて後贈り給ひし、金、髭籠なんど、女童にいひつけ、持よせんとなしけるとき、いと重いかなるを訝りつゝ打ちひらけば、こはいかに裏は悉く金なり。なみならず驚く物から、其の儘にも捨ておきがたく、かくと長にきこゆれば、長は疾く心得て、雪吹君の兼ていたり給ひしことを初め、菖蒲君の身のうへさへ、初めて詳に語り聞かせぬ。おもふに母うへ昨夜妾が許を訪ひ、理をせめ情素をしめし、緣を斷たんとしたまひしは、君のおはすを兇くしり、一時も人が中を離き、菖蒲さまとやらんをむかへ、婚姻を調へんと、遠くもおもひめぐらし給ふ、母君の心とは其の時知らねど愚かなれ。鴻恩をうれしみつゝ、妾は長の別莊に忍びゐて、異人に請けられしと君の許にきこえなば、浮きたる心と見おとし給ひ、元の妻の菖蒲君を迎へたまふは必定なりと、露次郎主と謀し合はせ、今日なん彼所へ赴く路にてはんべるかし。君が妾の寠々しきも、

なほ深き由縁あるべしとおもふから、白地には聞ゆるなり。」いざとく〳〵おんみのうへを語り給へ。」といへども吉三は、胸さへ裂くる苦しさに、女めかしく涙にくれ、顔も擡げず泣き臥しければ、薫はいといとゞ心許なく、露次郎もろともに左右に立ち繞り、「様子はいかに。」と問ふにより、吉三漸く顔をあげ、「おん身の許より歸り路、人に討たれて母上は、はかなくも死て給ひし。」と思ひきつて言ひはなせば、「何母上はこといひつゝも、薫はよゝと泣き臥せば、露次郎とかく介抱なし、「思ひがけなき事ども故歎き給ふは理ながら、涙の限り泣きたりとも死したる者が活くるに在らず、必定深き由縁あるべし、仔細詳に問ひ給へ、日頃男々しき心には最似氣なし。」といひ懲らす詞に恥ぢしや、吉三もやゝ姿を正し、「昨夜此のわたりにやありけん、曲者一人忍びより母上を殺害し、往方もしれず逃げうせしとか田子松が物語りぬ。我は母の詞に恥ぢて、先だちて歸るにより、微細しき様子は知らずと雖も、母の横死のもとはといへば、我が放蕩より起る事と、恰も夢の覺めたる如く、後悔すれど其の甲斐なく、父の慈悲にて勘當せられ、恥をも忘れ眸と、こゝらわたりを徘徊なし、不圖も其方に會ひ、聞けばきく程一方ならぬ、母の恵みをうけながら、恩を仇なる我が行跡、車の轍に身を引くとも、猶厭きたらぬ重罪人、自害なすより他はあらじ。」と、深くも思ひ亂るれば、薫は此の事を聞きてなみならずうち驚き、さまざま思案しありけるが、心に徹する事やありけん、自ら痞を撫でおろし、「不意き母君の御

最期悲しといふに語もあらず、君が放埒故なりと、かこち給ふは理なれど、もと妾が身のなかりせば、君も花街に在り給はじ。さあれば同じ罪人なり。君生害をなし給はば、妾も活きて何かはせん、とあつて二人もろともに、死して浮名を負はんも苦し。唯此の上は片時も早く母君の仇を索ね、討ち給ふこそ孝ならめ」と聞いて吉三又曰く「我も既に其の心なきにあらねど、悲しい哉曲者の面は更なり名もしらず、如何で索ね得つべき」といひも果てぬに、薫は顔に懸りし髪を右左に振拂ひ「君にも豫て聞え給はず、花街に忍びて来給ひし、雪吹様をよくも知り、討ちとる程の曲者が、容易く面を知られ證を殘し止むべきや。然はあれど熟〻思ひ廻らし給へ、先づ其の概畧を知つて、心長くも詮議なさば、遂には漏れぬ天の網、本意をとげでおくべきか、丈夫の心緒ふり起し給ひねかし」と、道理を盡して諫むるにぞ、吉三實にもと思ひけん、薫が辭を承諾なし、涙をはらつていへりけるは「汝等も知るごとく、情深き母君の本性なれば、怨みを買ひ、禍ひを結びし事の心得なし。これに就いて我思ふ仔細あり」といひ、なほ委しく語らんとなすを、喜次郎頓ておし止め「何事を宣ふも、街上にては便りあしし。薫殿もろともに、我が別莊に忍び給ひ、其の後ことを議し給へ。先で彼所に道案内申さん」といへば、吉三頷をふり、厚意に悖るに似たれど、嘘忽當地に屈まり居らば、便宜を得んこと覺束なし、ただ此の儘に打捨ておきね、法の姿にあらねども、身は雲水の安きにおき、心の限り索ね遶り、

本意のごとく讐を討おほせ、めでたく二人再會せん。薫はありし如くにて、長の許に身をよすとも、知がれたのみ忍びゐて、をりをり仇を索ぬるとも、心任せになし給へかしと、袖を拂つて立さらんとす。薫少時と攜りしが、一世に落魄れし其の人は、愈貞だかなの心なりと、昨夜母上も宣ひき。かゝる姿となり給ふを、爭でか餘所に見すごさん、妾も共に將て往き給へ。もろともにかたきをうちて、頓て本意を遂ぐべきにと、衣紋つくろひ帶ひきしめ、頻く姿ひきかへて、いともけゞしく打拵ぬ。さきにもいへるごとく、薫が生質俠氣闊達にて、金あれば水の流るゝがごとく遣ひはたし、更に其の費えを顧ず、生平に半錢の貯へなきを、却つて潔しとなす。しかりければ、絹布商、紙店、香藥商、裁衣師をはじめ、總ての商人にあまたの負目あり。されど彼等も薫が性をよくも知りて、強ちには責めず、いつも客人の許より金を得るを待ちつけ、其の期には德つく事も多かりしが、今度富俊屋に身請せらるゝよしを聞き、是れ名にしおふ豪家なれば、此の緣をもて花主ともなさめと、いよいよ利欲に眼くらみ、負目のことは得もいはず只管に覬きて、これ等もみな薫が後に從ひ、此の所まで送り來しが、豈計らん吉三は早くも勘當せられぬ、かくてはいつか負目を責る期あらんと、呆れ惑ひ互に耳をとり交し私語きけるが、頓て香具屋の伽羅右衛門とかいひて常に利口する男、薫が前に跪き、好事をな生するとやらん世の常言に違ひなく、嚮よりの爲體、傷ましきとも哀しとも、更にいふべき詞もな

し、頃日より薫の君は縫ひ何程の負目ありとも、金さへ得給へば、吾儕に損はかけ給はぬみ心をよく存じ、これ等のことも、いひもいでず、其のうへ音にきこえたる、富家の側室となり給へば、いよ／＼たのみある心持せられ、喜びし甲斐もなく往方の程も覺束なき、讎を尋ねに旅だち給はば、いつ歸り給ふ期もはかり難し、願はくは負目の金を此の所にて償ひ給へ、かくいはば心逢きものなりとおほさんも恥かしけれど、利を得て妻子を養ふが活計なればせんすべなし。源氏小服紗疊紙、伽羅の割賣何くれと塵積りて山となる、金の嵩は三十兩、うたがはしくば見給へ」と帳面を差出せば、彼がことばを便りとして、「此の夏よりの小袖の代、いかにしてか給はること」と呉服屋も這ひ出でぬ。殘りの商人我おとらじと囂しく罵れば、露次郎はうち腹だち、「一勘氣をうけ給ふとも、名にきこえたる富度屋の令郎、音に響きし菱屋の高妓、遲かれ速かれ汝等に金は與へ給ふべし。なみ／＼ならぬ大事の首途、妨げなすは嗚呼なり。」と制するを聞きもいれず、猶濫がましく諍ふを、薫は聞くも懶しと彼方此方をいひ和め、色衰へて愛弛び、金散じて交はり疎し、昨日の人今日は目を餘所に斜になすも、世に捨てられし身の常にて、總ていやしき人心、かくあらんは實に理なりと露次郎にうちむかひ、「吾が身の代の金のうちにて百兩貸し給ひね、否うともいひはせじ、是れより月の圓かならぬうちには、かならず調ひ侍らん、疾く／＼」と急がせば、露次郎は心得果て、人を走せて金を取りよせ、「最よりも聞ゆる如

く、昔の不許多の徳ひきたれば、僅かの金を何ぞか惜しまん、戻し給ふはいつなりと、心任せにはからひ給へことといへるのを耳にもかけず、蕉は頓て庠にて金の封を押切りつゝ、或は十両二十両、皆それぞ〳〵にわかち与へ、是れにて望みは足りぬらん、いふことあらば疾くいへことと、うち笑ふを背にうち聞き、商人は悉皆退きけり。此の時蕉は引き荷はせし箪笥長持の蓋をひらかせ、一茶良が別離に忍び居らせ、いつを限りとていふ事もはかり難し、さるから数の小袖を貯へしが、行方さだめぬ身となれば、今ほとゞめて何かはせんことと、指南して取りいださせ小袖袴の類はさらなり、首の飾りにいたるまで、みな傍輩の阿僧比に贈り、残せしものはかの信太之助が破紙衣と編笠のみなりき。吉三は是れを熟〳〵見やり、両親にさへ見放され、よるべなき我が身には、錦に勝るやれ紙衣、幸ひのひと品なり、信太之助が義心に傚ひ、やす〳〵本意を遂ぐべきことと、心持よからぬ投八が馴衣を脱ぎ捨てて、件の紙衣を着なしければ、露次郎愉しげたゝき、浮世の義理はせんすべなく、昨日に替る御姿、身なれ給はぬ一重ぎぬ、秋とはいへ膚寒どき、風や御身にあたりなん、無益ながら我が羽織と、思ふも賤しき忘八かな、勘当の身を顧みつゝ、かゝる姿となり給ふ、潔きみ心には、よも承引はし給ふまじ、心ばかりに候へども、路用に充てて給はれことと、金と思しき服紗包、吉三が手に渡しければ、物をもいはず投げかへし、二心をしは嬉しけれど、かく浅ましき身となりしも、無益の金を失ひし、其の天罰と

おもひとられず、手にふるゝさへ恐ろしし。此のまゝに餓ゑ、死なば死ね、理なく金を受けはせじ、さはいへかくまで志の厚きをやぶらぬその證に、おん身が腰にさしたる扇を、小子に賜はるべし。泣にさへあまた覆ひたらば、面を隠す笹にせん。」と、強ひて扇をこひ求め、数回おし頂けば、薫は涙忍びがたく、よゝとばかりに泣きしづみ、信夫の殿の面影ある、君の愛女は戀ひまゐらせ、おもはずよ、其の馴衣を着給へば、いよ／＼姿も信夫のとのに、似給ふのみか贈りたる、黄金を大地に投げかへし、はかな清き心を知らするさへ、其の折に露たがはず。是はいかなる因果にて、縁を結びし殿はかく、はかなき姿となり給ふか、いと／＼宿世のつたなきに、長いきをいかにたふるべき。」と、愛子信夫の事さへも、思ひ續けて歎きければ、露次郎もなぐさめかね、落つる涙を打拂ひ、氣をおとさせじと笑ひを含み、「昔は千金を我に賜はり今日は扇一本をいたゞき給ふも世の盛衰、好事かならず魔を生ず、滿つれば缺くるも大陰の、理つて徳とすべくなれば、圓かとなれる望の夜を、身を守りつゝ待ち給ひね。いかに薫君、信夫の和子は、小子が身にかへても、成生てん、是等のことに念じ心を殘さず、世なれ給はゞ吉三の君を、心の限り慰め給へ、とかくいふ間に時移り、人の目とゞめばあしからん、いざ疾く／＼。」と催しつゝ、襟に袂を分たんとなせど、阿曾比は更なり奴僕にいたるまで、薫に名殘をしまれて、頓には立ちも上らず。吉三は心をとり直し、なか／＼に詞もなく、「命あらば。」といひすてて、薫が手を

とりなしたりけん。かかる吉三が姿をみて、世に戀に痴れらしきといひ舟にも駕籠にも得のらいで、圖像をさしかへしと、かの曲手にはつくりしならんか。

綟手摺昔木偶巻之四　終

綟手摺昔木偶　巻之五

江戸　柳亭種彦　作

十　ふせあみがさ

富度の吉三は段八等にそゝのかされ、旦に墻の花を愛で、夕に路の柳を尋ね、いつしか情の海に漂ひ、色を漁る奴となり、薫を誘ひ東を指して走りつゝも、いよ／＼母の恵みに感じ、知方にたゞよらんも面伏なれば、其の夜は腰越村の旅店に宿り、さして陸奥へや下らめ、皇都へや赴かんと、さま／＼に栢譚へども、空ゆく雲のそれよりも、まだ定かならぬ鱗の在所を、俄に探らんやうもなく、おもはず此處に逗留なし、それから風說を聞き定むるうち、吉三不斗足をいため、命に關るべき病にはあらねど、日々に痛み重らかになりもてゆき、頓に癒ゆべうも思はれず。原來貯へも乏しければ、かくて居らは遂に飢渇に苦しまんと、心頻りに焦燥てど、如何ともせん爲便なう、二人は心も心ならず、更に一層の憂苦を添へたり。薫はなみ／＼の人にもたち勝り、俊才の婦人なれど、幼少きより廓にあり

て、只管の心を遊ばし豁達なるを肝要と思ひ、嘗て世事を知らされば、いと温和かには仕へながら、なかなる折、物のやうにたつべうもあらず。己も其の事はよくも知りけん、或時吉三に對ひ、「昔不意く病に臥し給ひ、鎌倉の地さへ去りやらず、安閑と日を經らば、遂に乞食となりやせん、それ嘆ふにはあらざれど、かくて故郷に伶俜ひ居らば、父君は更なり、君が親類を辱しむるに似たりとはいへ妾は忘八が許にて生長り、女子の嗜むべき縫針の業さへようせず、絶えて活計の爲便なし、さる故に大磯の淺芽が長に吾が身を託し、再び阿曾比となりなんと、昨日私かに相談ひおきぬ。さあらば身の程の金は得つべし。近曾菱屋の長に借り得し金も償はず、これも旦夕心に懸れり。我が身の代の金もて心きゝたる人を傭ひ、君が傍に侍らせば、妾が看病なすに同じ、常の心持にひきかへり、健かにさへなり給はば、兎も角もして旅だたん、なほ此の事、理なしとおぼさば、心隔てずいひ知らせ給はれ」と、うち潛みて聞えければ、吉三少時思案なし、「嗚呼おん身と我とは終身の苦樂を共にせんと、盟ひしにもあらず、義をもて結びし其の人を、再び荊棘の林に遊ばし、本意とは思はねど、別にほどこすべき計策もあらじ。一旦御身が心に任せ、全快の後更めて商議せん」と、思ひの外に承引きければ、薫漸く心安堵其の夜彼の淺芽が長に金を借り得て、菱屋の長は更なり、それ彼の負目を償ひ、再度大磯の阿曾比となり、名を、お香と改めければ、世の人渠を渾名して狂花のお香とよび、前後を爭

ハ、客人の來ること、なほ昔に彌まさり、おもはず多くの金を得て、なか／＼に心やすく、さて近きほどに軒舍をしつらひ、吉三をば彼所に移し、又信夫を菱屋に託けおかんも便なく思ひ、これをも大磯に呼びむかへ、原のごとく女童に拵させ、我が傍に侍らせける。こゝに又鬼總太といふ者あり、何方の人とも定かならず。頃日よりお香が許へ通ひけるが、その對面さはあて悪態とも見えず、されどみだりに人を嘲り、萬事才覺に傚り、人もなげなる形勢なれば、お香は只管渠を厭ひ、たゞ酒をすめ笑ひを獻するのみ、初めより枕席をともにせず。鬼總太更に怒る色なく、却つてこれを潔く思ひ、我は他の客人のごとく、夜な／＼通ふ水の月の、浮きたる色に愛づるにあらず、おん身こそ難き人ありとも、其の縁を絶ち、實に我が心にしたがひなば、直に身を贖ひいだされ、心を定め答へよかしと、折にふれ聞えければ、お香はいよ／＼うたてく思ひ、猶も難面くもてなせども、あやにくにおもひ絶えず、日暮るればかならず來り、にくさげに物言ひなどしてしたゝかに酒に醉ひしれ、閨房にさへいらで夜半ばかりに立ち歸りぬ。さる程にお香が誠心の驗ありてや、吉三が病なごりなく癒え、心持もすが／＼しくなりたるよし、書簡をもて告げこしければ、歡び譬へん方なく、ある夜竊かに吉三を招き、つもる物語なすべしと文書い認め、人して彼所へ持たせやりしが、今宵も又例の如く、ながれの鐘もろともに、鬼總太ははや／＼も來り、歌妓をよび集へ大杯をめぐらしけるが、さらぬだに心すゝ

ある商人の、殊に今宵は待ち侘ぶ人の意中にあれば、お香はてれてものさへいはず、鬼總太が沈酔を窺ひ、次の間に退きければ、折よくも吉三は信夫に案内せられ、編笠を手に提げつゝ、板縁にあがりけり。お香深く喜び、幸ひ傍に人なきを見て近くるより、いづれより語り始めんと心持まどひて、先づ全快の歡びを演べ、さていひけるは、「昔に初めて會ひ參らせし其の折託け給はりし一品、昨夜探りて袋の口を開きしが、裏に胡蝶を縫時せし香筥の片しあり、いかなる由緣ことと不審りつゝ且さの顛末を詫び、香筥を差置けば、吉三曰く、「我實は生まれながらの商人ならず、故ある武士の嫡男にて、幼少より結號の女あり。世の騷擾しきに亂離り、今は何地に在りともしらず。されど彼方に其の香筥の隻しあれば、それを徵に廻りあふせもあらんかと、今日まで妻を迎へざるも、彼の女に義理を思ひ、且は父の遺言を守りてなり」といひ諭せばお香が疑ひ一時にはれ、「かゝる怪しき人あり」と鬼總太が形勢を語りいづる折しもあれ、「お香は何方に往きたるぞ、遠かに誘れ來れ、いふ事あり」と呼ばはれば、思はず立つて袖屏風、吉三を後に押隱し、「あの聲は慥かに鬼總太、原來彼は儂人、君が姿の眼にかゝらば又さまざまに罵りたらん、渠が歸りて後にこそ、寛やかに語りはべらん、向ひの一室に忍ばせ給へ。」と、忙はしく指示せば、吉三も疾く心得て香筥を袂にかくし、信夫が案内を柴折とし て、櫻を描く紙門の陰、奧を尋ねて立ちいりける。此の時既に初更も過ぎ、空もの凄く冴えわたり、

風に笛ふく矢挿の竹垣、手拭冠りと日に眩へ面を隠す怪しの女、垣の外面に徘徊り、裏のやうすを窺ひ視て、何か心に點頭き、行馬の竹に和ら手をかけ、引抜き／＼身を齟齬め、忽ち庭に這ひ入れど、閑每の酒燕酣にて笑ひ散動く聲囂しく、かくと知りたる者もなし 心安しと打點頭き傍を見廻し思案なし、頓て下屋に潛りいる。鬼總太は障子を開き、縁の欄に身をよせて、首尾を看得しつゝ、徐かにこなたへ立ちいづれば、お香は吉三を忍ばせたる一室の裏のみ心に懸り、顧みがちに鬼總太が、來るともしらで往きつかふ、袂を掴んで座に居らしめ、「日頃も言ふ如く、情人と縁を絶ち我が心に隨ふか、もはや心も定まりつらん、疾く答へよ。」と無禮なる、詞は心に懸りながら、事例れし身の面振に、かくとは知らせずうち笑ひ、「幾度かのたまひても、縁を絶たん、それ程まで、ちぎりし人は侍らず。」と、手を懐に簡居して、衿に埋むるお香が顔を、空嘯いて目注に視やり、鬪に吉三が脱ぎ置きし、編笠を手に取りあげ、お香が眼さきに突きつけて、「此の世には居らずとも、汝がたは黄家に在りん、姓名は水泡信太之助、渠と契つて一子を産け信夫といへる禿となし、此の花街に在る事まで、いつ點滑らさず知覺せり。渠貯へなき浪人の身に在りながら、偶得たる金もて、衣裳さへ調へず、野分にあへる山田の案山子、さも寒氣なる姿にて、恥をも知らず女郎に來り、一夜に金を失ひしは、潔きに似たれどこれ名利を貪るにて、實に御身に懸戀せしにもあらず。又何なる由縁は知らされど、

深き契りのある身とききぬ。さあらば共に死したりとも、針金表の縫ひたものか、今惟ふまでもこそなけれ、たとへいふべけれ。時に苦しみ心乱れ、自殺なしたる臆病者、彼にすけじ義をたてる、御身が心の不審しさよ、かかる不覚の信夫之助が行状を可しと思ひ、破霊位に紙衣、遺物を譲り着けし者こそ愚かはいふに足らず。彼は尊む此の霊位、見るさへも眼の穢れなり。」と、足下に蹴へ冷笑ふ。お吉はすでに夫の上を包くまでに罵られ、無念と思へど酔ひ狂ふ、人に無益き問ひ答へと、心に念じ黙へもなさず、帯解けてしどけなき、姿のまゝに立たんとする、裾のうへに押と坐る雄介、声高にいひ諭せど、理とは思はずや、よしなし今宵身請なし我が傍に侍らさ、心得るそれまでは、日々夜々が非を諭らん。努へばいかに思ふとも、信夫之助は死にきりて、吉三は遂に勘当せられぬ。早く先非をあらためて、東總太が妻となり、生涯の栄華を計れ。憶原来貴族の種ならねば、家に馴れざる山猫と、喰ふ道具の価値に替で、信をいふも古の譬え、泥に尾を曳く亀は、金匣の内に飼ひ、愛の草を喰む獣の苦きを知らぬ類ならん。我も一個の丈夫たり、いひつる事は反古になさじ、身の代ここにありと、金の包を取出し、耳根に振り鳴らせど、細やかなる手を額に嵌へ、背をさし向けて答へもなさず。東總太は心ありて、お吉をさまぐ〜嘲弄なせど更に憤る色なければ、的なき弓を射る心持やしけん、是非はともあれ、御身を今宵贖ひ出し、明日は家に誘引はん、用意をなしおきね。」と

なげの言葉に立ち上り、先で假寢して天明を待たんことと、設けおきたる一室の閨房に、徐々とこそ入りにけり。かくてお吉はたゞ一人道きたつ心推鎭め、今宵鬼總太が惡口を、もしや吉三の漏れ聞きて、憤りやし給ひけん、あなうたてしこと鶴歩なし、忍ばせおきたる一室の裏、窺ひ見れば熟寐して、吉三は絆のありとも知らず。少し安堵の思ひしつゝ、原の所にたち還り、雪吹きみの恩惠により、苦海に渡りの船をば得たれども、思はぬ方の風ならで、不良き人に負目を債られ、憂きは變らぬ大礒の、花の街にかへり咲き、片時もはやく金調へ、身まゝになして雪吹君の、籬を索ね遣らんと、心をくだく心としらで、鬼總太とやらんが戀慕し、さま〴〵にいひよりしを、初めの程は戲れと、思ふにかはるいまの形勢、もし渠に身請せられば、何れの日か仇を討つべき。信夫の郎君は更にもいはず、吉三の君にも分諒なし。とはおもへども金にかへし、我が身を金に請けられなば、せんかたなきが妓女の習俗、生涯の浮き沈み、今宵にありと思ふから、中々に淚も出でず、茫然として立在めり。他處にはかゝる憂き事の、ありとも知らで調ぶなる、琴の音色にはしたなく、響きあひたる松風も、吾が身に物を思へとや、袖に透りし肅寒さ。お吉信と心づき、寧ろあの鬼總太を殺害なし、金を奪ひて此の身を贖ひ、心安く雪吹君の、仇を討つより外はあらじ。素意を遂けたる其の上は、縣守に訴へて潔く罪をうけん。形見に遺す編笠を、土足にかけて信夫の郎君を、嘲りたる鬼總太は、怨みなきともいひ

離し、夫れよ〳〵とうち點頭き、胡蝶を彫りたる簪を、飛ばせて消したる燈火は、姿をかくゝお者が機轉、人窮すれば盜むといふ、辭にもれず惡念の、義理と情に起るまい、頃日の心ひきかへて、最前其處よ此處よと探れど、戒刀一本あらざれば、「こは何とせん悲しや。」と、見廻す庭に曲者が、崩せし矢拂の竹、倒れ散らしに眼をとゞめ、是れ屈竟と小膝をうち、とつたる竿を思はずも、放せば破亂離とこぼるゝ夢、錦の櫻は時ならぬ、花を散らすや夜嵐に、傳ふる野寺の鐘の聲、さゞめく星の影見えて、滿きはしらるゝ漣漪を、身をひらめかし躍り越え、石燈籠の火影にかざし、尖き竹を撰みとり、一振二振枝葉扱き、即座の竹槍脇ばさみ、かの鬼總太が臥したりける、一際たかき小座敷を、屹度見かへり涙を流し、一近習吉三君の戯れに、當りし闔の修羅道を、似氣なき事とおもひしが、此の寺は忽地地獄の苦しみ、今こそおもひ當りたい、良人を罵る恨みはあれど、原來罪なき其の人を、いかにしに害さるべき。何とせん淺ましや。」と、少時涙にくれけるが、「かくてはいつか思ひを果さん。身は盜賊の汙名を得るとも、義のためには換へがたし。」と、弱る心を鬼になし、緣より梯子にさし寄り、一段登れば膝ぶし慄ひ、鳴る音餘所に聞かせじと、清搔く琴の音色に紛らし、彼方にひけば此方も軋り、彼方にひかねば此方も躊躇ひ、忍びよつたる氣は半亂、心は猛くとりなせど、か弱き力に仕損じなば、いかなる憂目やみつべきと、息を呑んで窺へば、速くもかくと知りたりけん、鬼總太は寐もやら

す、障子に身をよせゐたりしが、鎗管をのばし竹槍を、しつかと握りて鉾ふりたて「遠く索ね給ふに及ばず、外姑の仇を討ち、本意を遂げよ薫殿」と、言の下より吾とわが、脾へぐさと突きたてたり。お菖は今更驚かれ「吁嗟」とばかりうち騒ぎ、かけよる敵には構はざる、障子、手負も供に倒れあふ、鎗はれし竹槍發矢と折れ、殘りし逆鋒をたゞにもはなさず、撓と尻居に坐したりける。此の物音に睡りを醒し、吉三も一室を立出でし、目暁き目擦れ、鬼總太と名號りしをいかなる者と思ひしに、汝は甲幹佐吾七なりけるや。それと知りつゝ薫が許へ通ふさへ不審しきに、必死と定期極めし光景、一定深き由縁あるべし。語れきかん」といふ折から、菖蒲は外面に忍びより、かくと見るより我をも忘れ、矢庭の闇より走りいり「こは兄上には何ゆゑの、御生害」といひつゝも、携りつきて泣きにける。お菖は吉三がことを聞きて、佐吾七なるを細めたりしが、今更少女が見なりと云へるに、菖蒲なることを知在り、いと面なげについゐたり。佐吾七苦しき息をつき、「世になき人の介けとなり、當時君の仇を討たんと、薫殿の貞操苦節、感賞するに堪へたり。不意く宿志を遂げ、さぞ嬉しとやおぼすらん。とばかりには疑念はれまじ。吉三君も諸ともに、心を碎きて索ね給ふ、同じ一の仇は別人ならず、かくいへる佐吾七なり」と、聞いて三人再びおどろき、由縁あるべしと思ふから、小膝を進め佐吾七が、面をうちもりて詞なし。痛疵に屈せずやをら座を占め「小伜菖蒲とまうせしに、御暇賜はり諸越が原に閑

居の折から、君、薫とやらん遊君に想ひを懸け、夜毎花街にかよひつ、行蹟昔に異なりと、ますます人の風説を聞き、これ悪段八が仕業にて、君を放埓情弱となし、田子松に家を嗣がせ、心のまゝに計らはんと、そゝのかせしに必定せり、かかる計校の妨げとなるべき者とおもふゆゑ、我にも無実の咎を負せ、遠ざけしものならん歟、かねての推量違はじと、思ふにいと／＼心ならず、出口に出つかへりを待ち、辭をつくし諫むれども、柴に油、水に霜、いよ／＼消ゆべき氣色も見えず、かくては御身も危かるべし、寄る我段八を殺害なし、君が病根を断たん、是れに越えたる良薬あらずと、菖蒲を騙してさきに戻し、渠が花街にあるを推し、走せ行くむかうへおぼえある、提灯をかざせし駕籠は、慥かにそれと見究めて、岜の隈に身を潜め竊しの白刃打揮つて、轎夫を退かせ、先に進みし竹輿の簾を、押しあけ見れば田子松なり、こゝろ憎くは思へども、主人の血脈殺すに忍びず、襟首摑んで突き放す、響きに提灯うち消して、空定めなき秋の夜の、星さへ見えぬ薄陰り、搜りよつたる後の駕籠、君は疾くにかへり給ひつ、段八ならで田子松と、諸ともに来べき者なし、慥かに這奴と思ひつめ、心追かれて面もふらず、簾を越して刺し通す、裏には女の喚ぶこゑ、人違へなりけるかと、なみならず驚くものから、惘然して立在む折から、忍びよつたる一個の轎夫、おもひもかけぬ両段となし、紬ひおたればなか／＼に、露もいとはぬ小篠原、又も支ふるあやしの女を、たゞ一刀に切りつけしが、這奴

ましれ者身を閃かし、闇に紛れて逃げさりぬ。空はますく、掻曇り、燈火なければ咫尺も辨ぜず、漸く死骸に探りより、女なりとは知りしかど、雪吹君とはおもひもよらず、跡を暗ませ逃げ歸り、餘所ながら樣子を聞かんと、次の朝役所にいゆき、又も芭の陰に忍び、吉三君のおん身に會ひ、物語れるを詳に聞き、後悔臍を噛むにいたる、其の庵を去らず切腹と、既に覺悟を究めしが、とてもかくても死ぬ命、潔く名告つて出で、いづれにもあれ御兩所の、御手にかゝつて死ぬべきと、便宜をうかゞふ折に幸ひ、浮世の義理の絆となり、遠くも離せぬ駿馬を、忘八に又も繫ぎとめ、此の大磯に在りとしり、おん身等が面體を知らざるゆゑ鬼熊太と變名し、忍びくに花街にたちいり、心をもちゐる人に問ひ、兼て詳に聞きおきたる、信夫之助が事をはじめ、吉三君の上さへも、さまぐに嘲弄せしは、おん身が怒りの刃にふれ、かくならん我が願ひ、しかも其の夜に帶せしは、閑樂君より賜はる脇差、主人の刃に主人を害す、類少なき重罪人、竹鋸に異ならぬ、行馬の竹に身を逐はれ、死するは我が身に的當なり。お香殿よくも雄々しき心を起し、所望を果させ給はりし。」と、苦痛を凌ぎ物語れば、菖蒲お香は悲しさに、いふべきことは得もいはず、涙のかぎり泣きにけり。吉三は默して佐吾七が言を聞きはて、叉きし手を膝におき、かくいへば言葉を巧り、身の非を覆ふに似たれども、田子松が菖蒲に懸想し、佐八と計みて家を奪はん結構へ、兼て推量なしたるが、我は富度の養子なり、又田子

松は母常破の通称なり、我に家を嗣がすることこそ難からめ、さはいへ此の事をいひいでたりと、承引き給ふ様も一の性ならず、寧ろ段八等がすゝめに随せ我慢に放蕩不頼となり、厭かれて家をいづるにしをりし、昔語も體面くもてなさば、我を怨みて田下松が、心に従ふ事もやあらんと、彼等が計策と同わたりしが、汝もともに追ひいだしぬ。又不審しきは我これなる薫がもとへ通ひ、信夫之助がことを聞き、われも貞操を感ずるものから、不図も悪濁なし、今日までは夢のごとし。今汝が自殺を云て、ここに初めて身の非を知ること、恰も妖顔に惑せられし人に似たり。嗚呼汝が誠忠醒覚の上味、変化して善となりしを、吉三が不善をおこなふゆゑなり。いかなれば天罰吾が身のうへにおよばず、忠義なる其方に、不善き事の及ぶかるは、天道は是か、非かと、空を仰いで嘆息なし、なかなかに佐吾七を恨みもやらず、先非を後悔なしにけり。手負は頭を打ふりて、「さな宣ひそ吉三の君、これ尚はせつと懐より、香筥の蓋とり出し、膝のほとりにさしおけば、手に取りあげてうちかへるに、是れも胡蝶の蒔絵あり、さてはと思ひ吉三も又、懐の香筥とりいだし、合はせば合ひて毫髪も違はず、四筒胡蝶の蒔絵の筥、更に不審はれざりける。佐吾七莞爾とうち笑みて「此の香筥を證となし、結城おりと宣ふ、吉三君の幼名は、染丸との と號し、波達検上のの一子にてやおはすべきに」と聞へば、吉三ますます驚き、未だ答へもなさざる折から、「其の付細小吉が、詳に語りきかせんこと、一室の障子押

しあけて、立ちいづるに閑藥なり」いつの程より後堂に、忍びてや居給ひけん」と、騒ぐを閑藥いそがはしくおしとゞめ、「我がうへは少時さしおき、心得がたきは佐吾七なり。吉三が幼名染丸と知つたるのみか香筥の、片見を持ちしは由縁こそあらめ」と、いふに佐吾七吐息をなし「思ふに違はず吉三君、渡邊の嫡男なりせば、閑藥どのも援の相公に、所縁ある人とおぼゆれ。我も同じ渡邊姓、競瀧口が扈從の童、黒丸といひし者、染丸君に結號けし、主君の娘千島こそ、則ち嫁の菖蒲なり、往年源三位入道頼政高倉の宮に御謀叛をすゝめまゐらせ、援、競、仲綱の相公を初めとして、渡邊一黨御味方に加はりたまふ。又由縁ありて主君競宗盛が悪しみ強きにより、其の咎妻子におよばんかと、豫てより深草の、里の知方に忍ばせ給ひぬ。妨々は六浦とまうし、其の時千島は三歳なり。かくて治承四年五月下旬、宇治平等院合戰の刻、我も軍中に侍りしが、主君の命にしたがひつゝ、彼の妨々六浦の方の、隱家に馳せ參じ、軍のやうを物がたる。歎ずべし其の隙に、味方悉く敗北して、主君をはじめ宗徒の兵士、あるひは討たれあるひは自害し、軍は既に結果てつ、いかゞはせんと躊躇ひしが、逸まれ角まれ妨々に、再び仔細を語らんと、又深草にたちもどりぬ。原來妨々六浦の方は、男子に勝る勇氣あり、端に我相公の危急を告ぐるとそのまゝ、心ならずやおぼしけん、女に似氣なく物具著し、戰場に趣き給ひ、手痛くはたらきたまひけん、其の身數箇所に手瘡をうけ、苦痛にたへぬありさま、

その時小子を近く招き、天運いまだ開いたらず、君にも生害なし給ひ、良人も一定討死と覺ゆれば、我此世に思ひおくことなし。唯心にかゝるは嬰子千鳥、汝よろしく養育して、結髪せし染丸に、妹は夫婦となさしめよかし。此の香筒は、ある年月山奥ひき谷より、出現なしたる地仙赤魚、後に一人の女子あり、霊符此の蝶のごとくならんと、とき論し給ひし品なり、片しは分けて染丸が方に遣りぬ。これに上に二言はあらじと、三包の金さへ賜はり、そのまゝ息絶え給ふ。おもはずも端夫の露場き給はず、僅くも顔の會ひ給へど、今日まで我は知らざりしことと、物語るもいと苦し氣なり。お香は泣ゐに忍びかね、下括りの紐をとき、襟口をしかと結び、とかく介抱なしにける。自ら涙を拭ひ二歳僅かに三歳の時なれば、父母の上は熟くも知らず。さはあれ、乳母なんどに抱かれ、数多の女房児の冊かれしは、夢のごとくに今もおぼゆ。さるゆゑにこそ我が素性は、何なる者と折にふれ、問ひまゐらせし事もありしが、唯都がたの曖の子と、聽へて今日まで渡邊の、處女なりとは語り給はず、いと恨めしとかこたれて、佐吾七かさねて云へりけるは、一其の疑ひも理なれど、染丸どのは嬰子にて、正室の妬みつよく、他所に移して住ませ給ひぬ。さるからに我君の、昵近の武士の餘は、生平さへ在所を定かに知らず。ましてやかゝる騒動にて、何地へ落ち行き給ひしや、絶えて知るべうやうもなし。不熟おん身にいひ聞かせ、往方もしらぬ染丸どのに、操をまもりて生涯を、寡にておかんも便

なりし折こそあらめと思ひしより、心に秘めて漫りに語らず、さる故あれば往ぬる年、血を合はせよとこ閑楽君の、宣ふ言葉に答話なく、寥々富度屋をたちさりぬ。熟く思ひめぐらせば、六浦の方の御志に契り、千鳥様に御遺言をいひも留らさず、剰へ吾が君の通じ給ふを知りながら、是れ名にしおふ豪家の令郎、世にいだしまうさんには、幸ひとおもふからに、知らぬ顔にもてなせしが、もとより吾妻丸どのにて坐さずば、主君の姫に操をやぶらせ、己が榮利を計らんといはれし歟。かくまで道に背くとき、今日まではゆめ／＼しらず、只管に主家の姫を、世に出さんと思ふからは、吾原素孤獨にて、一點ばかりも不忠不義の志を挟まず、いかなればかかる事辟に離隔なりて、不幸き事のみ多かりしと、瀰に君も仰するごとく、皇天を恨みしが悉あやまれるが僻事と、漸くここに發明なす。此の御包の金こそ、六浦の方の賜物にて、貧苦に窮れど失はず、貯へおかしが幸ひに、薫どのの身を贖ひ、平吹様の仇なりと、名告りて君に討たれなん、さすれば少し怨みもはれん。其の時にこそ菖蒲が身に、罪なきよしを遺言して、一旦互におもひしなか、元のごとくに呼び還し、婚姻なして給はれと、願はんものと思ふにましてし、結號の郎君なりせば、いまいく續む菖蒲なること、必ず見おとし給はるな、諱なき彼が身に悞ちは權にもなし、私かに素性を包みたる、我が邪より起るにこそと、思ひ殘さず告げければ、菖蒲はとかう涙にくれ、縦ひ主從なればとて、幼兒きより育みて、生長して給はりし、その鴻恩は兄

上にも、遙かに隷る御身を棄てゝ、數にもあらぬこの菖蒲が、往くすゑ頼むのおん詞、なかなかに罪恐ろしく、何の世にかは此の恩みを、報い申さんことはかたしと、いひかけしく泣き沈めば、閑業常を誠と拈て、はじめて聞きし汝が素性、推量のことにて、我も渡邊授が家隷、眞門部衛門一黨と云ひし者、まだ其の頃は我に一人の母あり、老後の多病起居こゝろに任せず、日々牀に臥きて、看病なさんとおもふから、身の暇をまうしこひ、母が所領の地なればとて、河内國楠川の邊に閑居し、おもはず二五年の星霜を經しにぞ、つひに母は病に死みて、折しもあれ宮部の騒動、聞くと其のまゝ馳せのぼらん于時治承四年五月の下旬、はや、宇治橋の合戦眞最中、亂軍の中をたづね、折よくも[illegible]に面謁なす、是れも兼て討死と期し給へば、其の香筥の片しなたへ、斯様々々と説きしらせ、若君どのゝ隱家さへ、仔細に我に告げ給ひぬ、直に彼所へ馳せ行きて、再び河内に誘引ひまゐらせ、生長の後吾が子といひなし、此の鎌倉にいたり、商賈ながらも豪家なれば、富度の養子となしまゐらす、且に聞く主家の愛子、男女と異なれど、心に一點の違ひなし。おん身往ぬる年血を合はするを辭みしも、我が身のうへに比べて、由縁あるべしとはおもひしが、兼て其の名は風かに聞く、黒丸ならとはしらざりし、おん身が主人の遺言を秘せしも、菖蒲女郎を世にいださんとおもひてなれば、誤る道に導くとにもあらず、嗚呼これ是に似たるの非か、非に似たるの是か、凡智を以て議しがたし。」と云ふに言葉に近く、

より、母等吹がことばに叛き、婚姻なさざるも許嫁ある其の人に、義理をたてての故なれば、菖蒲には則ち渡邊の女千鳥と聞くからは、何とて疎んじおもふべき、未來までの夫婦なれとはいへ、我も勘當の身にして妻を倶せん事、最便なきことゝ、さしうつぶき、彼の香筥を手まさぐり「我往ぬる年侍從川に櫻を尋ね、水面に扇を落して、時しもあれ散りくる花にともなはれ、四箇の胡蝶の飛び來り、流るゝ扇を慕ひゆくに、ほと〳〵興あることに思ひ、漫行きて御身に會ひ、今又こゝに四箇の胡蝶の蒔繪せし、香筥の媒介して、結號なる事を知んぬ。不審しきは此の四箇の胡蝶のうち、三つの蝶は儼然として活くるがごとく、一つの蝶はその形備はれど朧げに影のごとし。」といへるを聞きて、佐吾七も熟視やりうち點頭き「其のとき菖蒲、昔の扇をとらんとして、繆の帶に結びたる、絆を投げかけしが、愕ちて一つの蝶にうちあてぬ。羽をたれて凋花のごとく、水のまに〳〵流れ行く。殘りし胡蝶も是れにおどろき、二つは君が傍に飛びさり、一つの蝶は我が懷に飛びいりぬ。其の時は心もとめず、窺ふ一室の障子を押したてゝ、籠りて君に面會なさず。おもふに此の胡蝶の筥を脫けいで、赤繩をひきたるものか。主君も兩個、家來も兩個、四つの胡蝶のそのうちに、一つうせしは四人のうち、小子非命に死すといふ、奇瑞を顯はす胡蝶の筥、榮枯此ゝの如くぞと、豫て諭せし女仙の辭、嗚呼奇なる哉妙なる哉。」といふに在りあふ人々も、深く感稱なしにける。

十一　大あみがさ

開業は座をたちあがり、我おん身等に會はすべき稀人あり、かならず驚く事なかれ」と次の間にたちいで、多時ならず一個の尼を倶していりくと見れば、是れ則ち雪吹なり。夢かとばかりに驚き、菖蒲吉三は更なり、人々の喜びいふべうもあらず、開業いへりけるは、雪吹生まれ得て癲癇の病あり、これを治せんとするに験なく、驚怖なせば必ず發す。故に手術は僅かなりといへども、此の病によつて氣絶なせしものにて、實に死したるにはあらず。我是れを推し、異所に移し醫療を加ふ。果して蘇生を得たり。もし段八等が、所爲成らんかとおもふから、如才にふかく忍ばせおき、窃に諭めて稽を送り、兼ての願ひに任せつゝ、我とおなじく剃髪なさせぬ」と、語るうちより雪吹も座をしめ、開業どのも言ふごとく、妾が命數いまだ盡きず、心持すゞしくなるにより、今日なん強て聞きえきたる、菖蒲が許を訪ひよりしが、同胞とも家にあらず、父薫どのの再び身を賣り、吉三を貢ぎ給はる事も、風の便りに聞きたる故、忍びて此處に來る時しも、佐吾七が手負ひし光景、仔細あらめと濳みゐて、詳に事は聞き果てたり。吉三がうかれありくを歎き、思ひ違へし事にしあれば、佐吾七は仇ならず、妾が爲には恩人なり」と、きくよりお花は笄とりあげ、あはや咽に突きたてんとなしければ、[illegible]あれ

止めよ。」と迫きたつ雪吹、青柳は其の手に縋りつき、「とゞむればいと面なげに、とかく健かに雪吹君のならせ給ひし上からは、佐吾七殿は罪にあらず。由縁なく人を殺害なし、此の身は此處に自害して、罪を贖ひ放してよ」と、辭ふ時しも奥の間より、信夫は周章て走りいで、母が手に持つ簪を、力も用ゐず挘ぎ取つて、撲地と後に投げすてくれば、佐吾七訝り、面をあげ、目瞬れざる一個の武士、我を睨むは何者ぞ。」といへば、信夫は聲ふりたて、「此時我が子の體を假り、闇浮に迷ふ信夫之助、黒丸にいふことあり。」と、最物凄く、面色變り、膝の側につゝよする。佐吾七が眼には、信夫之助の姿や見えけん、襟帯締めあけ形を正し、「陽炎の世にたゞよふ魂の、我に對して何をかいふ」と、問ふに信夫莞爾として、「水泡信夫之助とは世を忍ぶ假の名、實は宇治橋合戰の砌、汝に討たれし千鶴太郎が一子水雄丸なり。其の時仇を復すべかりしに、名に深草の叢より、矢一筋射かけしが、また撫子の力も弱く、霜にいたゞる枯生の芒、碎け散つて本意を遂げず、誓ひし詞を忘失なしや。」と、語るを聞きて深く驚き、佐吾七は青柳に指南し、我が袂のうちよりも、錦の袋をとりいださせ、「事に紛れていひ漏らせり。盟ひし辭を忘れしや、汝其の折十歳ばかり、幼き身をもおもて、仇を狙らふ心に感じ、討たれまくおもひしが、主君の艦をいでなへば、我が盡さぬ我が命、しかはあれど反り討たんも長然氣なしと、汝生長の後をまて、其の時こそは討たれなんと、著せし鎧の栴檀の板をとり、變心なき證に與ふ。不思

議なるは往ぬる頃、吉三郎の懐より、落ちたる錦の此の袋、内には彼の一品あり、もし其の人ならんかと、数へみれど水雄丸と、吉三郎とは年齢違へり。今ぞ知る、信夫之助は水雄丸が、生長りたる姓名なるかことと、血に染みし手をさしのばし、袋をひらけばいひつる如く、裏よりこぼるゝ栴檀の、板を吉三は手にとりあげ、お香佐吾七を顧みて信夫之助が遺物とて、我に預けし此の一品、酔狂して失ひしが、面なくてふかくもつゝあり　さては日外用日にて、佐吾七を打擲なし、其の刻落せしこのならん、我いかなれば今日に至るまで、諫言を非とのみ心得、無慙の事のみ多かりしことといふも待たず、信夫はなほ居丈高になり、一言もありなん、我宿志を遂げず自害なし、其の怨み散ぜぬものから、魂魄中有に伶俜ひ遂に魔界に生をひき、黒丸が在所を知り、ある時は蕉が胸肝に分けいつて吉三に懸想させ、ある時は吉三が影身につきそひて、放蕩無頼の行状をなさするまで、悉く我が所為にてことゞゝに及びし、二人が手をかり、父の仇黒丸を討たまく欲してなり。今日昔年の怨みをはらし我が怨魂立ちされば、蕉、吉三の両人は、夢の覚めたる如くならん。さるからにありし吉三の放蕩は、嘗て彼が過ちならず、譬へば人を害すとも、蕉が罪も死に当つべからずことと、おもひもなく説き諭せば、人々驚異のおもひをなし、雪吹かさねてお香に対ひ、いま霊魂のかたるを聞けば、佐吾七の黒丸は、其方の為には讐敵にて、由縁なく人を害すにあらず。おもひかへして自殺をとゞまり、菖蒲諸

とも富度屋に來り、昔こに聞き給はりなば、なほ此の上の喜びぞ」と、信だらで聞ゆれば、お香はとこかく思案しつ、「後の夫の母の仇と、きくさへもいと怪しきに、前の夫の父の仇と、又變りゆく佐吾七どのを、討ちしは脫れぬ因緣ならめ。さはいへ初めよりかかることありとは知らず、金を盜みとるべしと、一旦惡念を發せし妾、富度屋に在りて榮ゆる時は世の人の惑ひとならん。慾心の萌したるは惡なり、讎敵を討ちしは善なり、善惡不二の界に遊び、榮華も欲はず、自害もなさし、只我が儘に棄ておき給ひね」。尙此の上の惠みには、世に便りなき信夫がおひ先、賴みまゐらす其の人は、君たちならで他になし」とふかくも思ひ沈みけん、默して詞もなかりける。かかる折しも紙門の陰に、「小筵に衣かたしき小宵もや我を待つらん宇治の橋姬」と朗詠なす聲なしければ、何人なりやと見反れど、いまだ姿は顯はさず「いかに黑丸、汝昔年橋姬の古廟にて、怪しの女に會ひつらめ。身には氷の練絹を穿し、振亂したる黑髮を几ッに結びわけ、眞此の如く、禿倉の扉を押し開き。」と屛風かいやり立ちいづるは、是れ非人の女水昔なり。佐吾七は咎めもやらず、「我六浦の方の遺言に任せ千鳥姬を唐櫃の内に隱し、鎧の上に蓑をまとひ、深く人目を厭ひつゝ、そこよ此處よとたち忍び、其の夜も既に更闌けて、松ふく風も物寥く、漲り落つる川波の、音すさまじき乙路の里、時こそ來れ落ちゆかんと、咲き殘りたる卯の花垣、やをら片足踏みこえて、「汝が窺ひ見るとも知らず、堅田が死骸を汀に蹴反し、念願

叫ぶ歡ばるゝ、莞爾と打笑み佇ずめり」一時にも懸らぬ事なから、最不審しき擧動のみ、面を見合せ立ちよれる二人も疑はしと思ひ、一歩二歩も戻りしと、言葉の中に閑樂も聽くりとせし我等年月時まなしで其方を晴れたる故、其の折荒論士と姿を移し、染丸君を忍ばせたる、錦繡を脊負ひなから、思はず波邊に往き懸り、二人が光景心得すと又往く先に立ち塞がる、捕へられなば愛恥かんと、雙き此にこそ、此の水若が一時に隠つて出でたる黒丸と、一盛の閑樂が捕へし草摺ふつつと斷離れ、二手になか論も恐れ、閑室に插上げたる、兩人は「一時に談合だすこ一措手、一雅君、其の時の若武者は佐倍七にこあのけるか、「その時の荒論士は、閑樂殿にて伝せしやこ」前髪捕つて面擬り、一剃髪なせは其の人とも今日までは努々知らずに一途に語りいでけり。一思ひきや非人の水若も、その夜のななるこそとは」と閑樂懸言すれば、佐倍七水若に對ひ、浮ねる年無失の罪を我に負はせ、今又此の室の有馬を破り、忍びよつたる爲體、いかなる怨みのある者にや、包まず語れ」と問ふに連れ、果然たる面をあげ、妾は則ち授措の側室、其の頃の名は葛城とて、これなる吉三が母なるぞえ。妾は皇都の白拍子、素性賤しき者なりと、おとしめらるゝが口惜しさ、正室野田を失はれんと、樣々に計策を廻らし、彼の女の妬みにより、染丸を毒殺なすと、一味の人に流言させ、讒言を構へれど、相公はいかに思しけむ、妾と吉三を別所に隔して住まはせ給ふことあらば、野田と吉三は呪詛なさんと、萬が前に參籠して

七日が間、食を斷ち、此の御神に願言なせば、いろ／＼の怪異あり。畢竟これに驚くときは、願なしと聞きつるゆゑ、矢叫の音鬨聲いと物凄く聞ゆれど、神業なりとおもひとり、合戰なりとは嘗て知らず、心の限り祈りしが、其の夜堅田に表したる、藁もてつくる人形より、血汐俄にしたゝり落ちぬ。さては願ひのみちたるにやと、立ち出でみれば案に違はず、自害なしたる堅田の死骸、その時おん身等兩人に、おもはず支へられ、脊負ひし櫃に我が子の泣聲、おなじ館にありながら、隔てて住めば閑樂の、一盛が顔をば知らず、目に遮めく黒丸が、鎧は渡邊一黨にて、専ら用ゐる耳生濃、此の裏にこそ忍ぶらめ、あないぶかしと潜みゐたり、黒丸が後に從き、妾がゆくぞと汝は知らず、とある木陰に匿かくれゐしが、介け出すは女子にして、藥丸ならぬにふかく驚き、直に館に立ちかへれど、相公は討死し給ひ、家臣もみな落ち亡せて、更に人氣もあらざれば、我が子の往方を索ぬべき、便もこゝに絶えはてて、身のおきどころなきまゝに、此の鎌倉に流離ひ來て、惡報にのみなれもまじり、遂に非人となりくだり、富度屋の家を田子松に、奪はせんと計技みし、良八と語し合はせ、佐吾七が妻なりと、根なし言をいひ強り、同胞を追ひ出させ、又佐吾七が、人違ひにて命取られ、殺害なされしとき、ある夜に、拾ひとりたる小柄の小刀、閑樂殿より讓り給ひし、覺えある鍔子の高彫、人殺しは佐吾七たり、物をねだらんと思ふから、今宵此の家に忍びこみ、様子を聞けば思はずも、田子松等に同意して、

追ひ失はんと思ひたる、吉三は却つて我が子なり、惡の報いの速かなるゐ、漸うに知覺て、身の恥辱をも顧みず、一伍一什を告げゝるになん。只管頼むは閑樂どの、雪吹どのも言葉を添へ、吉三と菖蒲に添はさせ、佐吾七殿や妾が心も、安堵させ給はれ。」と、ふし拜みつゝ泣き沈む。聞く程無慚の行狀に、母としもいひかねて、涙を隱す吉三が心を、閑樂は推し量り、いかにも御身が頼みに任せ婚姻の杯させば、黑丸も安堵して、心殘さず成佛せん、蝶花がたを飾りたる長柄の銚子はあらずとも、一雙の胡蝶の此の香筥、吉酒を酌まんに幸ひなり、氷人は薫殿、とく〳〵」と催せば、心得果てし立ち上り、二人を勸めて座に著かしめ、ありあふ銚子をさゝげいづ。菖蒲は嬉しさ悲しさに、とかうのことも聞えかね、香筥を手にすうれば、お吾は最もかひ〳〵しく、右左に立ち續り、假に整ふことの九度。手負はさらなり閑樂夫婦、水苦もふかく喜びて、「名には似ず月こそいづれ朝日山、山吹の瀬にものいはで。離れし三人は此處に集會ひ、我が子のゆくへ結號の千鳥どのさゝ來給ひ、嬉しといふに餘りあり。宇治の橋守年を經て、花はいつしか散りしかど、其の日の軍物がたり、傳へ聞くまゝ朗詠なし、一指しまうて祝がん。」と、流石昔は舞女の、はてとて恥ぢらふ色もなく、誰が忘れしや白地の扇、手にとりあげて立ち上り、

「蝸牛の角のあらそひも、はかなかりける心かな。」そも〳〵治承の夏のころ、よしなき御謀叛を勸

ふ申し、名も高倉の宮のうち、雲居のよそに在明の、月の都をしのびいで、うき時にしも近江路や三井寺さしておち給ふ。

とさる舞ふ此方の紙門のかげ、とゝより樣子を窺ふ段八、計技の一々白状せられ、無念とやおもひけん、我を忘れて顯はれいで、本営に無手と組みへいたれり、莞爾と笑ひ身を捻り、放るゝやうにして投げ退くれば、撻的傍に展し轉ぶを心持よげにうちみやり、一際聲をはりあげて、

、さるほどに平家は時をうつさず、數萬騎の兵士を關の東に遣はすと、聞くや音羽の山へ、、、山科の里をよぎ、木幡の關を餘所に見て、爰ぞ浮世の旅ごゝろ、宇治の河橋うちわたり、

と心にいれて舞ひすませば、纐纈の袖もことさらに、羅綾を着たる風情あり、思ひみる時なりせば、いとも興あることならめ、段八漸く起きあがり、又たちふれば纐纈拂ひ、扇を疊んで口に啣へ、手首を投つて脊に捩おあげ、膝押しつけて動かせず、闇樂は聲におよび、瞋怒もせさせまゐらするに、本営に對ひいひけるは、一我尺八の笛をはじめ、總てふき物を好むがゆゑ、常に呂律に心をとゞめ、人は更なり鳥獸にいたるまで、其の聲を聞いて其の心を知る、今おん身の舞振健かなれど、音聲甚だ死地にちかし、訝しきよ、と問ひかけられ、驚くものから手元もゆるみ、膝すりぬけて走りゆく、段八を追ひもとゞめず、

「今は何をかいはん、執心の浪に浮き沈む、因果の有様あはれなり。」と懐の刃を抜き放ちざま、咽喉にとばしる血汐は紅、[illegible]たる小柄にて、鳴尾を貫いたる。人々、これはと驚けば、佐吾七は[illegible]と携へ、掌を合はせ[illegible]、弱る心を取り直し、すりよつて[illegible]は叶ふまじ、一旦悪に与すとも、先非を悔いし其の自害、それにてこそ勇者の[illegible]、[illegible]けれ、憾いふべきこと聞くべき事の多ければ、思はず期を延ばし、心臆すと人やみん、今は[illegible]事なし、先で[illegible]とも[illegible]深く、[illegible]陀の御国に赴かんこと、竹の穂先を取り直せば、[illegible]ちもあらで、落ちたる扇子に取りかへて、黒丸覚悟といひつゝも、はつしと打てば不思議や、刃[illegible]りなくて断るゝごとく、憐むべし佐吾七が、首は前にぞ落ちにけり。[illegible]と心を定め、[illegible]首を小柄に諸手をかけ、いと苦しさに捩きとれば、鮮血さつと迸り、[illegible]面色変り果て[illegible]のうへも我が子の事、[illegible]、聞きとも[illegible]たき最期の言、[illegible]的[illegible]て悶絶[illegible]二人が死骸に取りつきて、歎くを忍ぶにつきたる霊魂、人々を制しているゝうち、たれかれ天の定むる命数、ここに在るも因縁なれ、我佐吾七を討たれ、思ひも[illegible]にもあらぬ吉三を苦しめ[illegible]障礙をなし、漸くに本意を遂げぬ。此の罪を贖はんと、汝源氏の正統たりと八口を備へて衛にあたはず。既に昇進の期いたれり。歎きをとゞめ、[illegible]度をなすべし。」と、いふかと思へば、[illegible]の中より

し、一團の陰火となり出で、雲に乗じ風を起し西をさして飛び去りければ、信夫はさめて醉ひざめごこち、
悄然としてついゐたりし。かかる所へ此の家に宿りし客なるか、一個の武士徐やかに出で來り「昔年治承の合戦に頼政とともに討死なしたる、渡邊授が一子染負、當地に來つて隠れ住みし、鎌倉殿下の聴に達し、東の方甘粕秩父殿に、供し參れとの台命あり。故に人の集會ふ處を擇み、まぎれ／＼往きて待ちしが、我計らずも此の家に宿し、詳の事は奥にて聞け。用意あれよ」とぞ演べたりける。人々彼が語を聞いて、此の客は是れ秩父が家隷ならんと推し、且は靈魂の告げに違はざるを感じ、吉三郎はしく懐かへし見合ふ如く、母の横死葬中はいたがへしこし。いまだ果てなば秩父どのの御館まで推參せんと、命し辱うするの條ことは喋して演ぶ。かかり、彼の武士を伴ひ、兩人が亡骸を丁寧に葬り、佐吉もお厚志を謝止する彼の三百兩の金を…、再びお吉を請けいだしければ、お吉は深く喜びて、から、富度屋にはかへらず、又なくて信夫は直浦が許へ託し、次いで夜鎌倉を亡命なしけり。或は近江眞野川の邊に、権花といふ所に住みし無宿町に、此のお吉が事ならむともいひ、或は播磨の室にゆきて、生涯を遊君にておくりしともいふ。その始めをつまびらかにせず、その終りをかくなり。これ妓女中の一奇人といふべし。さて田子松枝八は奮惡一時に露顯し、周章して惑ひて迯げたりけるが、程なく縣守何某に捕られ、それ／＼に罪せられ、又佐吉しに殺害せられし輿昇は、往ぬる年馬九郎の使ひなりし富度屋

一書簡を持ち來りし役八が同子の悪根なりしぞことたる程に吉三は鎌倉殿に姓名を謁し奉り、賞を授が舊領その半ばを賜はりければ、人々の歡びいふべうもあらず。吉蕃と改めて婚姻の儀式を調へ、信たを養子となし、閑樂夫婦には厚く扶持して、藏に巨萬の寶を貯へ、家に數多奴婢を養ひ、富み榮えけりとなん。爰に往ぬる年月山琴引谷の石室を發きし、土人ある夜彼の女仙赤魚鯉魚に跨り、風に乘じて飛びたると、郷齊しく夢見たりしが、かくて三五日經て地震大いに震ひ、琴引谷の絶壁悉く崩れぬされど石室とおぼしき所もなく、只一尺ばかりの赤鯉を得たり、石に非ず、金にあらず、赭然たる金鱗、恰も飛動するがごとし。是れをある禪院に納めて磬にかふるに、其の音戛然と遠く響き、もつとも梵唄の介けとなれり。彼の女仙を赤魚といひ、今又こゝに赤鯉を得る、是れ因緣あるに似たり。此の一奇事今もなほ土人の口碑にありとなん。

綟手摺昔木偶卷之五　大尾

正本製

正本製　初編

編者　柳亭種彥

柴屋の續き繪　於仲淸七物語

○住楠天神の場　「ドレ／＼吹矢も置きにして、ドレ茶を一ぱい飲んで行かう。」と、吹矢の店より二三人、茶屋の牀几に腰をうち掛け、「ナント此の住楠天神さまは、いつも賑やかなことで御座るノ。」「左様とも／＼、今日は殊更御緣日、何でも御利生のある樣、しつかりと拜んで行かう。」「イヤ天神樣より御利生を、受けたいは此所の娘。モシお前の名は何といふ。」ト問はれて莞爾と打笑ひ、「ハイ梅と申して不束者、今日始めて出ましたれば、まだお舊交の御方もなし、御贔屓なされて下さりませ。」「それはさうとあの吹矢といふ物は、中ると何か人形が、出ます物では御座りませぬか。」「オヽ、初手に中るト斯ういふ鹽梅に、金時が出るわ。又中ると一ッ眼のきり禿が、茶臺を持つてから出るわ。」ト爲方話の側から、「まだ中る物がある。此の繪草紙が中つて、板元から褒美が出た。」「イヤおれが的が此

所にあること、うつかり起つたお梅をひつしやり「そりや小當りにあたつたら笑ひが出よ」と仇口仇口、皆散り〳〵に立ち歸る。こゝへ折柄來るは道具屋の團九郎、お仲といふて大磯に、並ぶ方なき名取の藝子、幇間太吉を引連れて、華表の前に佇めば、船頭の生の八、遙か後より聲高に「これ〳〵旦那此の荏柄の天神までは、大磯から餘程の道、どういふ趣向で御座ります」と、いふうち茶屋の牀几に休み、「さればさ、おれも何角樣子は知らねど、お仲がこゝの天神に、願懸けがあるといふゆゑ、牛に引かれての分い奴さ」「さいな、私も日頃から信心した天神さま、久しい願ひで今日の參詣、船から上つて道も遙々、ま、しんどや」ト取り出す鏡袋の厚板も、金氣の多いを見そけの團九、「梅は一生立たねども、天神樣へ連れて來たは、御蔭で嬉しい返事が聞きたさ、張も意氣地も程があること」いふを仲居が引取つて「引く手數多の團九さん、ほんに當座の花ならば、後でけつく思ひの種と、案じ過すは女子の常、ねえお仲さん、大方おまへもその心でござんせう」と取繕ふその折柄、「これぞうそ、清七に逢ひたいものおや」ト呟きながら來かゝる男が、それを見て「これは〳〵は團九樣、相變らず御全盛、お羨ましう御座ります」と挨拶すればじろりと見やり、「ヤ、貸物屋の磯六、天神へ參詣か」「イヤ私が參つたは、信心ばかりの事ではなく、ちとお仲樣には差合ひながら、あの小浪屋の清七め、跡の月の晦日までと、屹度對談致した金、耳を揃へて三十兩、今までなしも礫もなく、内へ行けばいつ

でもなさるゝに、所が此の天神の縁日には、屹度参詣致すとの噂ゆゑ、今日は是非とも清七に出會せ、受取らうと存じまして。」「そんなら何といふ、あの清七が此の所へ。」「一夕ぐれには参りますわいな。」「ヤ、聞きれた、お仲が今日この天神へ、願懸けがあるといつたのもあの清七に。」「エ、」と驚くお仲が顔、尻目に見遣りて團九郎、「井筒屋で飲み掛けう、磯六其方にも用がある、みなも来やれ。」と引連れて、木社の方へ歩み行く。跡に娘が獨言、「あの様な美しい、眞染のある清七さんへ、たとひ私がどのやうに、思うても及ばぬこと。エ、儘ならぬ浮世かや。」と思案途方に暮近く、僕連れし武士が、何か心に左思右考、幽花顔に歩み来る。後より息急き小浪屋清七、助松といふ小僧ひき連れ、「これはそれへお出でなされまするは、小越木の御家中、大倉佐賀右衛門様ではござりませぬか。」「オヽ、」いふに武士立ちどまり、「さういふは小浪屋清七、ハテ善い所で逢ひました。」ト折入つて頼み度き仔細あり、幸ひ其の茶店に立寄り、頓て牀机に腰打掛け、家来に向ひ、「こりや其方は構内、大切の密事なれば、四面へ心を附けやれ。」と小聲になりて、「コレさ清七、御主人小越木左衛門公の息女調姫、兼ねて大友判官の子息小太郎殿と、結號ありし所、此の節專ら輿入れを急がるゝ。一體、大友、小越木は、御先祖より御中が不和なる故、兩家和睦の爲とあつて、是れ將軍の嚴命なれば、私しの事にあらず、玆に難儀なるは主君の姫君、十二歳の時より家出し給ひ、御行方曾て知れず、白地にいふときは、御家の恥辱とあつて、

ます〳〵行方を尋ね給ふ。その時携へ出でたまふ、守友卿は無名の正宗、長さ二尺七寸、鐔まで二寸目に與ればなり、鞘は黒塗、金粉にて三本傘の紋散らし、何卒其方力を盡し、御行方を尋ね出さば、此の佐惣右衛門は推擧して、再び舊の武士に回復る小浪屋清七、其方が性根を見込んで頼むと眞實見えて物語れば、清七は頭を下げ「思ひ掛けない御家の大事、以前私の親共は、貴方様の御朋輩、或時殿の御金藏へ盗賊が忍び入り、數多の金子を盗み取る。其の夜の番は即ち親共、それ故の御暇、其の事を苦に悩んで、病死なせしも早昔、それより私は小浪屋の、養子となれど何卒一つの功を立て、元の家名を興したいと、片時忘るゝ間は御座りませぬ。御氣遣ひなされますな、御姫様の御行方も、此の清七が命に替へ、乾度尋ね出しますこと」いふに大倉打點頭き、「それは過分まするの時の用金」ト小判両取り出し清七が手に渡し「ついで乍ら、もう其方は、大磯の妻子お仲とやらいふに深い、馴染、竊々内へ戻らぬとの噂、若い身にはある事なれど、邸の聞えも宜しからず。當分では身を持てぬ。早く内方を呼び迎へ、勤勉しうならねばよい」ト眞味の意見に面目なく「ハイ成程左樣の事も御座りましたが、今ではふつ〳〵思ひ斷り、近々妻を呼びます相談」「それは重疊。シテそれは何方から」と、當座遁れの間似合日、眞顔に受けられ行き詰り、ハイそれとはいへど手をモヂ〳〵、恥かしさうにお梅は差寄り「ハイ清七様の女房は私で御座ります」思ひ思うた清七様へ、嫁入する樣なれども、天神樣

の御留守、今日一日此の茶店に出て居たも、天神様に仕ふる心と、いふ顔つく／＼佐賀右衛門は打守
り「いかさま左様いへばつまはこれの尋常さ、賤しからざる顔容、丁度似合の良い夫婦、それで身共
も安堵致した。なにかといふ間にモウ暮六ツ、そんなら清七」「佐賀右衛門様。」「ヲヽ御出でなされ
ました」「可内来やれ。」と黙禮なし、原来し道に立ち返る。清七は不審顔、一竟に近附でもない茶屋の亭
主、貴女が味にいうてくれたばつかりで、あの正直な佐賀右衛門様、御歸り成され。」「ア、い／＼。」「
「此の御禮は、乾度受けねばならぬわいナ。」「ハテ、何なりと望んでみや。」「サァ此の御禮には、夫婦
になつて下さんせ。」「ト、賤しいうても嬌羞の、顔は上気の朧紅葉、助松は遠慮もなく、「コレ旦那さん
お前の女房になりたいと、日外女を頼まれた、お梅さんとは此の姉さん、その文お讀なされしたな、
貴夫や忘れはさんすまい、自分も其の時貰うて喰うた、夫婦良の其の美味さ、今にとふう覚えて居る」
「トいふに清七ナンとなく日外助松に、文をよこしたお梅とは」「ハテ聢かしながら私でござんすはい」
「ヲヽ圃九郎がえわにつき、性根の腐つた御仲へ、面當、此方も丁度渡りに舟。」「トシ其の面當といは
しやんすは。」「サァ儀佐も嫌いも恋の習ひ、あの主遊が眞實なら」「夫婦になつて下さんすか」「此
の世は愚か未来までも」「いよ〳〵そりや、お前のかくれな誠、清七お仲と浮名の立つ、深いおかたがあ
りながら、野暮な首つ尾の肆、色も香もない私を、何の女房に持たしやんせう」「ハテ疑ひぶかい、

十三盤取らる法もあれ、夫婦になるに違ひない。「そんなら私が心休め、起請を書いてくださんせ。」「イヤもう易い事なれど、ここには紙も筆もなし。」「はてあるわいな。」ト起ち上り、牀の間に飾りたる盆燕を、お梅が持ち来り、「天神様へ奉納の梅の盆燕、私が名に所縁もあり、神の物なり牛王も同前、此の所へ變るまいと、起請を書いて下さんせ。」ト望むに否と言はれもせず、簪取つてちら/\と、砂に書いたる起請の文言。「讀んで見やれ。」と差出す清七。お梅はうれしく推戴き、守袋を取り出し、砂を包んで納むれば、助松は吹矢筒、一寸此の場のすゝやき竹、「モシ/\お梅さん、此の茶屋で譜れ掛けると、却つて人が目を著ける、思ひも附かぬ吹矢の店、私がいつて借りて置いた。」サア〳〵「お出で。」ト恥かしがる、お梅が手を取り無理やりに、「なんの燈はへらぬもの、氣の利かぬ薄洞だ。」ト文取り出す吹矢筒、蠟燭ふつと吹き消せば、「これは闇いこと」と清七が、探り寄つて、「お梅さん。」「清七さん、必ず變つて下さんすな。」ト寄り添ふお梅の振袖が、あたつて撒る、吹矢の的、かつたりいうて兩人が、間にぬつと般若の人形、吃驚飛び退く清七、お梅、「キヤア。」「此の道具ぶんまはす。」

の貸座敷非倚屋の場　　唄「天地けんこん、こんとんみぶん、みごとなすけは多けれど、きいてびつくりまはる三ばい、のんだまかうきつい/\のつい。」團九郎はむつと顔、「エ、面白くもない、もう踊りも置きにしろ、お仲是れ程實を盡しても、ふつて/\ふりぬくは、それ程までに清七の、貧乏野郎

お可愛いかさ」ヲイ、因果なことでごさんすネエト、起つを引留る生の八「イヤとんだ揚卷だ、團九さんの仰しやる通り、貧乏野郎に繋がつて、年が明けて女房にならうが、三月と堪ふることではねえ。羊眉毛に乙雪白齒、二度の勤めは二疊敷、蒲團ばかりに簡略枕、立派な物は鏡臺ばかり、いつまで苦患をしようも知れねえの、また團九さんの、お心にさへ從へば、閑靜した新道に、江市屋格子の無商賣、陪婢針妙お櫛上げ、矮狗より外は厄介なし」ト云ふのもお仲は空吹く風、搭抑へて起ち上り「エヽ人の心も知らずに、其の口合も置かしやんせ、いやな男に連れ添うて、榮耀榮華を仕ようより、矢張好いた男を持ち、九尺二間の店借りで、かゝアどうおやなうおやト、損料蒲團のいろなる果て、玉の輿より味噌漉で、豆腐買つて來い、八百屋へ走れ、二人寝酒のしつぽりと、四文一合で五十年、榮華の夢よりたれが樂しみ、ア、浮世ではあるわいな」トいふに團九も堪り兼ね「こゝな堪忍が二ト借相變へて、起ちかゝると、幇間末社、こゝな癡話喧嘩は奥手のこと、ヤア見晴でアッサリと、飲めや唄へや一寸先は、闇夜も月夜も照らすも降るも、そこが手管の肝心要、シテコイ、カセ」トなどゝ掛け、皆々誘ひ奥へ往く、折しも二階に彈き出す唄の、唱歌も身に連れて、思はなにおく露小笹のあられ、なみだの玉のはら〳〵と、こぼれやすいがこひのくせ」清七唯一人、井筒屋の切戸口、ソツト覗いて獨言、此の井筒屋で待つ程に、一寸來いとお仲が文、來て見ても寂寥閒、あの團九郎がえりにつき、

所詮叶はぬ縁の腐つたなさに、更々未練は残らねど、一目逢うて此の恨みを、と、さういふも矢張愚痴、思ひ切つて歸りはすれども、口と心は裏道や、見つけられぬやう出る折柄、ただ見るより走り寄り、逢ひたかつたと縋り附けば、源七眞實を現はせし、清七はすつと突き退けて、中に連寄まで備、しい己が涙、その水で家も蔵も流しました。いくその奥で團九郎に、取附いた引附いた、其か足らいで清七にまで、目合の瞬ぎ、其の志は忝いが、この喫ぐまじき國前にも目かひなふ、たればこそ、袖に縋つて、これまでに、待ちかねた清七さん、お前の目には此の神は、矢張藝子と見えるかえ。いやや聞えませぬ胴慾な、私やとうから女房ぢやと、思へば勤めの心もなく、眞實と眞實を明し合ひ、逢ひ初めてから丸三年。あの團九郎が惚れくさつて、色々と口説けども、お前の顔も知らぬ中よ、ふつつりと抜くや、わしにつけた口舌のしき、これまで言はれた事でないのに、と涙交、口に隠す過去の種、あふぬきはでて清七は、さあその心知らいではないけれども、ああまのはつと世間の取沙汰、若しやといふ疑ひも、やつぱり其方を思ふゆゑ。」「そんなら疑ひ晴れたかえ、アヽ、嬉しや。」と抱き附く、後に疑ふ團九郎、南無三寶清七が逃げ出すを呼びとめ〳〵、待て清七、たかが藝子は売物買物、たとひおれが目の前で、枕並べて寝たとても、咎めかういふ野暮でもない。男なら男らしく、受出して女房にしやれ。ところが、二十か三十両の、端金さへ返さぬ汝が、所詮身受は出来まい、

嘲弄なせど清七は胸へつかへ、はて味に變つた物のいひ様、養子の身の悲しさは、我が物なれど我が
物ならず、借つそすれ此の清七が、此方に貢ぎつけた平仲、借りた覺えはござらぬと言ひは出来ぬ、
證人は此處に居ることゝ立ち出づる質物屋磯六は猫撫でたかに、これ晦日の暮日まで、どうぞ此方が手を
合はせ、頼まるゝが氣の毒さ、直覧い此の磯六、ほつかり貸した三十兩、今日が今までうぬだとて、
つぶれたとも音沙汰なし、男なら男らしく、…たつた今返しをれと言はれて清七面目なく、一成程
此方に借りた三十兩、返さねば君が誤り、ござります、それをまた團九殿が、一いち知れた事だ、たかが
其の日稼ぎの磯六、三十兩といふ金を、我に貸さうやうがない、其の金はおれが金だ。ナニそんな
らあの金は、「團九郎様のお金だわい、耳を揃へて返さねば、此の磯六が顔が立たぬ」エ、うぬいふな
しやつ面だ、…物質様に誰多打て、…仕事…立ち寄り…なんの磯六殿、…
三十兩、…の捕りの指…、此の…を…、…ます…團九郎、一那
覺りう、…押隔て、われが身體を今日一日、買ひ切つた此の團九郎、…清七が…打たうか、
殺されうが、ふびで…指でするこことはならぬ…、是ばかりはつたと清七を、…する躍…し、睹の
…ば、…アあれ…」と擬仰向く、途端にぶつたり懐中より、取り落す金財布…
…を…て…が…、返さぬ…うどう」と又逃さ…清七に、手早く財布を押隠し…成

程、さう思はるゝは重々尤もなれど、此の金財布は仔細あつて、小判一兩でもどうも使ふ事はなりませぬ。サアこれ程までに打擲さるゝ、手向ひせぬ此の清七、モウお腹もいえましたらう。長うとは申しませぬ、せめて明日の夕方まで、お待ちなされて下さりませ」ト泣き詫ぶれば磯六ハヽ、顔色和げ、「さういふに、無理もあるまい、エヽ、幸ひ汝が差して居るその脇差、金拵の鮫鞘、コリヤ一兩が物はあらう、それを質に取つてやらう。」トいへば清七容姿を繕ひ、「成程お渡し申しませう。ジヤが、義理ある母の手前、こしがあいては歸り悪うござります、仔細あつて見られぬ如く、亡父の封印附けおけば、遂ど此の清七も、拔いたことのない此の脇差、慥か身は吉廣とやら申しますれば、どうぞ此の身計り質物にお取りなされ、お待ちなされて下さりませ」といへば磯六打點頭き、「成程男の魂を、質に取れば心は慥か、ドレ〳〵。」ト脇差の封印切り解き、エヽ、これは持たにくい預りもの」ト小言たら〳〵吹矢の筒を、打割つて白刃を風呂敷に押卷けば、清七も四方を見廻し、落ちたる物差取り揚げて、鞘にしつらひそくさの竹光、紐通しに目釘竹押篏めて、爰爾らしさに封印附け、腰に帶せば團九郎二貫物を取りて置く印形の其の代り、極印打つて置く、ミイ」ト雪踏脱ぎ取り清七が、額をはつしと打裂けば、「ソリヤあんまり。」ト驅け寄るお仲、「どつこいまつた」と差止むる磯六、清七は額より流るゝ血汐を手に移し、無念面親に顯はれたり。團九郎打笑ひ、「魂を取られた清七、落魄姿あの樣は。」トいふ

う、鐵六まで宵に寄り、これ色男な殿たちの當面、[illegible]と踏んだ罷いつことば[illegible]置けこれ團九郎、泣き居るお仲を引ヶ立て、奥の間にこそ入りにけれ。清七漢を振拂ひ「金はこゝにありながら、御主人の入用金と、おつと辛抱して居れば、附上つての今の打擲、土草履にて面顏を殴たれ、どうまァこれが堪忍されう、歸りは慥か油堤、人なき所に待ち合はせ、金を返した其の上で存分に意趣返し、[illegible]と身繕ひ、逸散にこそ走り往く。奥より[illegible]く生の八、最前武士が、清七への嘲を聴き、どうか所業になりさうな事と、呼びに遣つた[illegible]、もう來さうなことと見廻す此方い、障子押開け立ち出でる。すでには行く横槍に、いきなり結びの黒繻子と、耳の磨れたる挑だこ「二八さん何ヨネキヨロ〳〵する」ト言はれて吃驚一寸、「姉エか、待ち兼ねた、先刻手紙で聞かせて遣ツた狂言は、「ハア氣遣ひしなはれな、[illegible]の遣って金は山分け、[illegible]つてよこしれ通り、彼の奴が持って居れど、[illegible]急には取りにくい、漸うに清ばかり」ト懐中より短刀の鞘取り出せば、遂を見たる[illegible]これに違ひはねえが、是れおやァ手前よこかの役にこそ立たせやうは隙もなから、此の姉さんの胸にあること。」ト、暫く後へ團九郎、鐵六引連れ四ッ手駕籠、ガァ〳〵釣らせ出で來り、[illegible]相なくて清七が、駈け出したは待伏して、お仲を連れ退く心と合點き、七段目ならおもい附き、[illegible]此の客駕籠、これやア[illegible]〳〵と私語けば、ふた人の悪漢合點きあって「それなら

あの清七さん、打捨すのは手もない事、わつちに任せて置きなせえ」と、若輩なれど世馴た口上、達
聞いて喜ぶ此方衆、「それで私が肩も持つたのさ」「ナニ是しかし目に物みせるのだ、お前とは魚
と水、八百屋の店にも愛想か、好いくとおだてられ、いい手も撫でお家をも又、おやたち門前に水魚の
縁、商賣も中の三味線持と、好いでうたお客には、叔さへも又、座敷を出、日に五貫六貫が、たたけ
をさせて、浮氣の仕業から、人の家を潰させた、悪報で今はに二度までも、讒言を吐て喰つてる人住の、
一ことならなおすまい、しさというて義理もあり、日出度く立つ様にさせぬてもなれい、低頭
もした清七、手に鏡に寫し、ドさこつちからやいわれくがやるなん、氣を丈夫に持つて、まへそれ
ならいよく清七さん、一見それぬしてもきにばかりはないぞ、一樣に法圓ほかにより出る所から、
手を引てまつふるだん九郎、八「鏡をかのうはなくれるよ」と、あいさつしてそを調べ姫、こいつら
そうかといつてなくなり」などいふ言やでおのおなしに、井筒屋の場をはなれ

○油屋の場　夜も猶更けて、往來の人も途絶えて油屋、今に来ると清七が、首引きかけ待へ所
へ、二人の惡漢引連れて、一杯機嫌に來かゝる團九、それと見るより走り寄り、ニヤ約束の三十兩、
昨日とはいはすまいた、返して遣ると投げ出す小判、小氣味惡げに磯六が揚げて「ヤ、慥かに受取
つたぞ、往くを引止め「マア待て磯六、金返したら言分あるまい、サアおれがのも返して貰はう」

「葛籠には騒動か、持つて歩行くも物騒と、茲へ預けて置いた程に、明日でも取りに来やれ」ト空とぼけて起つるをたゝみ、ヤ、それ外にあることそりや又何か」「余が額の此の傷が、質物の印形代り。受戻したらやツぱりと、印形執いて貰ひてえ」「どうしたと」「主といへば置主、受人、皆はましで三人が、首を並べて懸作しることも伝聞ふれば勘六とで、それ代りて團七郎、おれはわれがしつすべて、其の騒動は物争だから、それで人が切られもしたこと聞いて勘六、一つ、それ／＼質に取つた騒動を、知らぬ中は丈夫た、切れぬくいこと喇叭なすこと、滴しさへと専構へし、竹篦でも物差でも、心の鍛へは一寸の蟲さへ五分の此の魂、一分でも皆く明でなく、たゞ今の知れたる目積りに、つもり違へて後悔するなこつた、面倒な口をきくめ、構へでしまへト生の六倍六両へ入れ代り、暫く捻ぢ戦ひしが、折構も雲霞なりて、星の光も見えぬ暗さ、暗こそ宜しと團七郎、脇差抜き持ち切つて懸る心得たちまち、首の八が鬢髪攫み、首討つもとて突きやれば、ことも切られてガツパと伏す、八滴と、仕止めたと、團七郎心に喜び、人目に触るゝその中にと、もと来し道へひき返す、逃しはせぬと追ひ縋く滴七、手先に當る勘六を、團七郎と心得て、ノてことまぜ、引揚げ、前なる川へ投げ込めば、土手で行き廻る白波の、左右へハツと飛び散つたり、折柄引き来る囲ツ手燈籠、團七郎が紋所の、提灯わしはでなさと心得、前ニとも拾ひ、落ちの騒動、驚絶早に裏魂して、背後をも見ずして逃げて

往く、心靜かに扉押し揚げ、お仲／＼と喚ぶ聲に、「アイと答へて立ち出るトたん、南無三寶人違へと逃げ出すを、引止むる拍子に、トもんが懐中より、バッタリ落ちたる短刀の、鞘を濡し手に取り揚げ、「コ本家の紋散らし、若しや貴女は小餘綾の」「姫と知つたる其方は」ト問ふ間に氣の附く主、「アノおれ人殺し。」と呼ばはれば、心得ひろりと頓智の當身、よろばふ所をあんぜう打たせ、前なる川へざんぶと落ち、「女に穢れる御手のうち、いよ／＼貴女は――調樣」「トン／＼（此のみえよろしく幕）

口こゝに、花水橋の下に繋ぎし屋形船あり、中の間を杉戸に仕切り、ともの方には船宿の亭主舟藏、船頭相手にあくせくと、拭くやら掃くやら掃除して、ドン一服と大胡座、船頭も煙管取り出し、一時に親方日外から、此の船に貸船と言ふ札を出し、此の様に掃除するは、即何言ふ趣向でこんす」ト問へば舟藏打合點き、「さればや、此の鎌倉は日に増しての繁昌故、華奢と言ふ事が流行つて、相應に暮す者は、我が内の外に月限の家を借りて、世間構はず飲みあかし、外色狂をするも有る、庭で思ひ附いた此の屋形、夏向に成れば先づ第一に氣が晴れるし、又愛の見晴に倦きれば、何處へなりとも勝手な方へ、漕いで往くはよしか、こいつ卻つて寮よりも、借人があらうとあれア、言ふ、札を出したら客の有り、早速に借人が附いた。したがほんの時々の、氣變事故、此の船では廣過ぎると、中の間から杉戸で仕切り、みよしの方は昨日借した、又此のともの方は己が借りたり、すゝみの娘あの桜が、春

公して居る小浪屋の別家の娘御、能く有る癪のぶら／＼病、悴と此の船での出養生、す、何かと言ふ間に向うから來るあの小舟が、確かにさうおやんす、イノ／＼、お杉が戀しや／＼、ト兄の聲「お杉が聞き附け小舟を急がせ、お梅樣これが彼の御噂し申した屋形船、ちやつと御上りなされませ、御浮雲うござります。ト手を取り勞り乘り移れば、お梅は何か面はゆ氣に。そんなら杉、そなたが兼々我が身に噂した。「兄と申すは則ち私、妹奴が戀しい噂で、段々容子を承り、ト大混雜仕なく、だき、思ひ附いた此の貸船、ふんまと船首を半分仕切り、彼の御人に貸しましたれば、申さば是れから相借家こゝ一本に大れ／＼、大れが何よりの貴君の御藥、御病氣も早速に御本復成されませう、それは左樣と兄樣、何卒手自ら飯炊いて、世帶持つ眞似がして見たい。トお梅樣の御好み、勝手道具は揃うてあるかね。「其處に如才がある者か、鍋釜曲突火吹竹灰ならしも御座候、それ／＼先づ曲突は爰へ直して、水は川から汲み揚ぐれば、釣瓶が有れば水甕入らぬ、船の中の世帶持は、爰等が餘程かすりだわえ、ア、爰等へ一ツ棚が欲しい、南無三錐を忘れて來た。「是れ兄樣、あすこへ錐が流れて來た。」ナ、願掛けの錐で、丁度間が合ふ、大體是れで片付いた。ト兄弟掛つて取り片付け、舟藏は差寄つて、「ア成程此方等は、貧乏世帶に倦き果てゝ、一月ならずは二日でも、米櫃のあるなしと、聞かずに居たいと思ひますに、また貴君方のやうに、靜平して御座つても、何不足無い御身分では、世帶持つのが

顔を見て、是れ禿は太く(千枝鶴)。お茶を世話持の情者には、漢を攻く先に番って、宣言が番頭なれば、女郎衆に此の着物、誰めさまおゝく申師が、二十年もって組肆、即可能ら一節傳授致さうと申しかけ、お浮きたれ。お梅殿の心は最後けの寂、殻で私の仕候を表の御方に、あ〜つと遣る。「はて急いあはこうのませぬ。二つさげ上音もせぬは、達ってやく〜寐て御座る容子、私が能い時分を見合はせて、とつ働きと遣はせます」とお針も面を伏せにして立つる、また箇に寝てこしてら、来すといで御覧じたか。されば水を汲の水は打たずと、七種から直に附けう、され汁の實でも刻まうか」と、膾は鳴られ八人前、働き立てれば仕方無く、一寸と襷に掛へ帯、風呂敷取つて前垂を、お梅は手鍋の水往來、折角彼所の寂屋敷に、謠ふ小唄を浮世節、暫く斯も途絶えけり。

○花水橋借舟の場　おもてを借りしは小浪屋清七、此の頃よりの屈託、内に居るのも氣六つかしく、別莊代りの隱宅に、暫くまぎらす氣晴らしか、揺を返つて春着すて、最う日も暮れるでうな、思はずくつと寐てしまつた。ハテとも枕を敷い、もし引越があつたと見える、どれ先づ眠氣を醒まさう」と、ずま違うしあやかに、謠ふ小唄をふつと聞き付け、「ハテ心にくいあの唱歌、声俤をふと其の儘、寐てしまうたら中程もこき、節を合はせて工樂しまうこと、尺八取り出し吹き合はせ、暫く連れを唄ひけるに、折からうろ〜生の八、清七と見るよりも既にん徳や大明神、是れ日外浦里で、よう

手ひどい目に合はせた[illegible]、茄子の香々見る樣に、[illegible]つた上の[illegible]で、命を[illegible]に振[illegible]とした、[illegible]
藥代[illegible]らたつた百兩、とつとと爰へ蒔き出せ。」、泥[illegible]膝に積み掛けても、清七は耳にも掛けず心を澄まし、尺八を吹き澄ませば、氣をいらち、「是れ落著くも市に寄る、[illegible]を出さずばまつかう／＼縣守へ訴へようか、左樣すれば清七、汝が[illegible]の臺が飛ぶによ、是れ[illegible]を言へ／＼ヤツ可哀や、汝や[illegible]が潰れたか、己と違うて水心を知らぬ磯六、[illegible]がどんぶり言はせてから、[illegible]て行方が知れぬ。[illegible]れば[illegible]は人殺し[illegible]聲[illegible]ぐれば堪りかね、その[illegible]のめ[illegible]せ[illegible]取[illegible]の[illegible]つ首押へて動かせず。

折角舟藏用ありげに步行[illegible]ツて入り來れば、見付けられじ、清七は、[illegible]の八が襟髮摑み、川へざんぶり素知らぬ風情、[illegible]／＼舟藏殿、昨日[illegible]ら色々御世話。 いや最う[illegible]取れば矢張[illegible]賣、[illegible]はさ[illegible]とともの方も貸しまして、唯今引越されましたれど、[illegible]申[illegible]も[illegible]は女中連で、參る[illegible]くこ[illegible]なれば、お親睦には御苦勞ながら此[illegible]から、往つて下[illegible]ます。」[illegible]案內すれば氣も附かず、御[illegible]免成されと清七は、二人が顏を見て吃驚、「[illegible]そなたは、天神で一寸逢う[illegible]お梅殿、一人は別家の[illegible]女の[illegible]、どう[illegible]琴[illegible]不審顏。手をもぢ[illegible]お梅は差寄り、恥かしながら清七さん、前から[illegible]の言號の琴ト[illegible]でござんす。」「フヽ成程、今の用人も昔は[illegible]る武士の妻、お琴と[illegible]娘、[illegible]け、[illegible]の時仔細有つて離別なし、小浪屋[illegible]二世の嫁[illegible]、[illegible]夫に死に[illegible]て[illegible]と成[illegible]る[illegible]、

杉々は呼んで取つて、此の清七と配偶せたいとある、故人が亡父への頼で、此の頭鶴を呼んで取つて、別家へ置くとは聞きたれど、此の清七には深く秘し、ついに逢はせずにゐたところ、夢々知らぬ自他、となりお梅と名を更へたは、ニヤア此の頃の事なれば、御存じ無いも道理、茶店へ一日假の奉公あの杉が兎角で此の船を借りましたる、堪能する程恨みが言ひ度さ、マア下に居て下さんせ。」ト跡は涙に綾も無き。舟藏に膝摺り寄せ、杉に聞いた荒増し、掻抓んで申しますれば、お梅様は清七様と、婚禮を遊ばすを楽しんで御座つた所が、どういふ事やら御袋様が、清七には逢はす事もならぬと、お可哀さうに御別家の一間住居、其の御心根を察しまして、茶屋女に仕立てたも、此の船の借りまし、私共が皆狂言、酒が無ければ座がないる、わつさり一ツ上りませ。」ト銚子盃持ち出でゐる。扱、清七は、お梅を言號のお妻なりと聞き、義理有る母の手前を思ひ、暫く思案なしけるが、今更何とも仕方無く、酒酌み交し居る折から、迂路々々来掛る小浪屋の後家お崎、斯くと見るより清七が、襟髪掴んで引据うる。「是れのう母様、堪忍して下さ」ト、縋るお梅を取つて突き退け「ヤイこゝなのら殿、能うもようも大切な娘をそゝのかしをつたな」ト煙管取り揚げ滅多打ち、お杉は周章て押隔て「モシお袋様それや貴様があんまり御無理、言號のお二人さん、いはゞ世間晴れての女夫に」「だまりをれ、一ツ穴の狐奴が、おのれにも澤山言分有る。是れ清七、おのれは一體小菅木の家中の倅、身寄の無いを不便が

り、死んだ此方の御心善しが、「養子にして末々は、我が娘と配偶せろ」と、遺言もあつたなれど、先づ第一が商嫌ひ、其の上大磯のお仲とやら言ふ、賣婦めと腐れ合ひ、内にはごつはり戻りをらぬ。ア、さう言ふ身持では、所詮家は讓られぬと思ふから、國から呼んだ此の娘に、竟に逢はせた事も無いに、誰が差圖で杯する、サア娘己と一所に往にをれ」といがみ掛れば舟藏も差出でて、「成程貴方の御腹立ち、御尤もには存じますれど、申さば爰は往還同前、先づ私が内へお出で成されし。靜かに言うても事は分る。サアお杉、お梅樣の御供しやれ」と漸うに物を宥め、四人打連れ歸りけり。清七は夢見し如く、茫然として居たりしが、やゝあつて頭を揚げ、「上の樣に言譯しても聞き入れぬ母の氣質、夫れ故押默つては居たものゝ、お琴と知つての不義でも無し、ハテどうしたら宜からうな」ト思案半ばへぶら〳〵と、來掛るもンがたれと見て、「其處に居るのは清七樣か」ト言はれてびつくり見上ぐれば、髪は例のおとしばら、夫れにも逢はぬ總模樣、小紬一ツに下げ帶計り、青味の拔けぬ白縮緬、びらりと見せて身へ飛び乘り、「南無阿彌陀佛」と清七が、脇差取り上げ拔かんとする。「コハ何故の御自害」と、押止むれば空涙、「是れで放して殺して呉れねえ、活きて居られぬ始末があらアな。」「いや先づ御待ちなされませ」ト、脇差もぎ取り小聲に成り、「日外油堤にて、落したまひし短刀の、鞘の蒔繪は三本傘、若しやとお尋ね申せし所、小越木の息女調姫と御名乘りありし故、大倉氏より預りし、

金子の内五十兩貴所様へ御渡し申し、早速御身の廻りを取繕ひ、御歸國あるべき筈の所、今日まで何の御沙汰も無く、御自害遊ばす御覺悟に、どうも合點が參りませぬ、不良事にお金を失ひ、先故の事ならば、包藏さずお話し成されませ」ト問はれてとこは顔を上げ、「成程私やアお前の手から五拾兩受取つたが、何を言つても今までが、亭主持たずの獨身暮し、稼がぬせるが貧乏で、九十九甲程おさ拔いて、質の鐵にも困ッた事何、唐壬も見えぬ不義理の借錢、大屋さんにも丁度五月、酒屋も二軒で三兩三分、こいつもまんざら啞にも成らず、御懇様に成る層が、下駄でも往かれめえと、是れ見ねえ總模様の大柄向、湯もじも氣張つて白縮緬、大巾で三尺三寸、湯へ往く時の御裝には、花色裏の結城が三枚、こり〳〵する黒縮子に、平ぐけも厚板の小意氣なのを見立つて買ひ、差物も本甲で、一寸遣つても下三あえ、老管にぬでつくのを奢り、樂屋鏡臺盤漱盥、何か諸式突つくるんで、梅川おやアたけれども、遣ひ果した四拾兩、差引き殘ッた拾兩は、私が屋敷へ歸る時、小口お釈いた音樂に、蒸籠でも積まうと思つて黄楊へぶち込んで、前夜の雅飾に當てられて、寝て居る内にすつかりと、誰だか盗んで往きやした。日の前へも氣の毒なり、所詮お陀佛おてあんおやア、活きて居ても納まらねえ。ヤあんまり饒舌つて口が乾えた、あふつきりで氣を附けて、夫れから自害をやらかさう。」此と彼奴廿日だ、しかし小けへならば八文だらう、ふたは虎鯖東鰈燒、ヤ此の烏芋伝腐つて居るぜ、存じ掛けねえ

御馳走になりやすこと何を言ふやらしどもなし。清七もあきれしが、主君の姫と御をさすり、一下世話にも申す通り、命に換ふる寶は無し、金銀で濟む事なら、御自害には及びませぬと言はれて荒増とことに打笑ひ「そりや一番愛嬌を、立て引いて呉れなさうやア、好きこのんで死ぬものかな、そりやアさうと、お前日外佐賀右衛門と言ふ、この本藩から請取つたのは百両だの、それなら未だ、お拾両有りやせう」「成程左様でござりますが、些と譯有つて、今はどうも」「金が無けりやア、かつては死ぬよ、たゞれおやア折角頼まれた、任の顔が立ちやすめえ」「ハテ承うとは申しませぬ、何卒翌日の夕方まで、待ちませう」其の時金が出來ねえと、待て暫し無く御自害だョ」左様ならもこ様に一晩變詞をつけへたッ、ヨヽ是れおやア、劇場の様だ」鼻唄交りにたち歸れば、清七跡を見送つて、「エヽあの御行跡では、御館へ御歸りなされてからが、大友家への御聞えが、それは心もとない、夫れはこうと、日外油堤にて、團九郎めとおもひ、川へさんぶと言はなしは、貸物屋の瘦六にて、あの團九郎に、彌々導る戀の意趣、薬子のお仲をうけ出す相談、今さら人手に渡しては、どうも男の一分立たず、佐賀右衛門様から前つた殘金の五拾両、揚代なり、手附なり、お仲が親方花水屋へわたしては仕舞うたなれど、もとの様のあのお姿、金が無ければ御館へ、御返し申す事も出來ず、一寸遁れに翌日までと、言ひ延べては置いたれど、金の出來よう筈も無し、ハテ何とした物で有らう」と思案の折角小

舟を急がせ。「確か爰に。」と見廻すお仲、夫れと見るより舟寄せさせ、何か私語き船頭を、先へ歸して屋形へ移り、脇眼もふらぬ清七が、後へ廻つて「是れまうし。」ト、言はれて漸う振り返り「お仲か。」「逢ひたかつた。」ト寄り添ふ折しも、ともには道より立ち歸り、疾くより容子を立ち聞くお梅、清七思はず顔見合はせ、悔り突く手に最前の、錐取上げて打付くれば、燈籠消えて薄暗がり。(此のとたんよろしくチョンと黒幕にて船を消す。)

(○川原な辻路々々に、お婆ア、同じ仲間の奇々妙藏、お藥南兵衛引連れ來り「聞きねえ道路も言つた通り、跡金の五拾兩も、翌日は此方へ奪める註文、いつやらの五拾兩も、みゝを揃へて此の懐中に。」「そいつア上策わ、そんなら彌八の野郎を。」「見當り次第に片付けて呉んねえ。」ト、噂を言へば影の差す、夕月に透し見て、つゝと寄つたる生の八「是れさ、もし手前での惡い者だぜ、いつやら什栖の天神で、大倉佐賀右衛門が清七への噺を立ち聞き、其の註文の短刀を、お仲が持つて居る事を知つた故、其の短刀の鞘を盜んで、旨くいつた此の狂言、調姫に成りすませば、是れからは榮耀の仕がちみんな己様のお蔭だよ、リア清七から請取つた、五拾兩を渡しやれサ。」「否だ。」「エ。」「命掛けで詐欺つた金、何しにお前に遣る物か、御姫樣に成る〳〵ト、恩ヶ間敷く言ひなさるが、大友の御館へ往つた所が、どうして私に、御長家の御交際が出來る物か。」「そんなら彌其の金を。」「エ、しち〳〵ど

いこ」「オ、取つて見せう」と尻引つかゝげ、懐中より引出す財布、妙藏南兵衛かせになり、争ふ折から後より、つゝと出でたる舟藏が、もとの利腕しつかと取る。佐賀右衛門が下部可内、折能く來掛り生の八を取つて押へ、寄手は殘らず立働いた。「金を詐騙つた二人の合剪兒。」「お旦那へ連れて行く。」「覺悟ひろげ。」と極め付くれば、「ヱヽ、面倒な、疊んで仕舞へ。」「心得たり。」と入替り、邊の寺の勤行の鉦、木魚の音に打ち合はせ、暫くいどみ戰ひしが、ちつごが手下の兩人は、可内に投付けられ、半死半生起き上らず、透を見合はせ舟藏が、財布を持つて驅け出せば、「それ遣つては。」と驅け出すもと、可内も跡ぼつ掛け、組んづほぐれつ三人は、花水橋へとかけり行く。

（ト元の船の内の噺　お梅は船に只獨り、鏡臺引寄せ顏打守り、「思ひ思うた清七樣、折角逢うて未だ碌に噺さへせぬ内に、おのかゝさんが來やしやんして、つれと最う此の髪の亂れた事わいな。」ト撫で附けて置かうか。」ト櫛取り揚ぐる折からに、邊につなぐ船の内、唄ふ小唄もしめやかに、「思ひにほどうした花の咲くことぞ、身にぞしみるゝ憂や辛や、いかに習ひぢや勤めぢやとても、いやな客にも逢はねばならぬ。」「あの謳ふ唄の通りつらいせつない勤めの内に、眞實を盡すお仲樣、清七さんの迷はさんすも無理では無い。先程はマアひよんな所へ來掛つて、腹が立つて／＼、思ふ存分言うて退けうと思うたれど、悋氣嫉妬は吃度女子の謹愼と、見ぬ振して舟藏樣の所へはづし、今來て見れば

お仲さんも言はしやんせず、此の清七さんはまア何所へ往かしやんした事ぢややら、斯う言ふ事と知つたなら、きつと引付いて居よう物を。唄やほなら斯うした憂目は逢まい、いとし男は、まゝならぬこの世のあひ〳〵や手くだのよくらい、無理なやうでもどこやらかはいい。」お梅は暫し唄に聞き取れ、「あれはたしか無間の日利安、先刻、今日中に五拾兩の金が無ければ男が立たぬ。」と清七樣の獨言、さ、何卒して其の金を拵へて上げたい物ぢやが。さ、金が欲しいなア。」と唄ふじみ重なり樂しむ中に、あはぬつらさにこがれしよりも、あうてわかるゝかねの聲、本のめうとといはるゝならば、今はむかしのかたりぐさ。」と唄も終れば髪結ひ仕舞ひ、手を洗はんと舟藏が心得て調へ置きし、手水鉢に立ち寄つて檜杓取り揚げ、今謡ひし無間の鐘の傾城の名も梅ヶ枝、私が名も丁度お梅、本夫の爲に入用の金さへ出來る事ならば、無間地獄へ墜つるのも、何の厭はうさりながら、此の手水鉢を鐘と準へ、百日千日打つたとて、何のまア金が出ようぞ、さ、此のお梅が祈る神も佛も無い事かいのと、未だあどけ無き娘氣の、じれるも愛らし二ッ三ッ、持つたる檜杓に打つ折しも、舟藏もと可内三人、花水橋にて奪ひ合ふ、財布思はず川へ取落せば、紐は解けてばら〳〵と、お梅が乘つたる船の內、小判亂れて山吹の花を散らすに異ならず。夢か現か此の嬉しさ、死んでも忘れぬ〳〵と、又も引出す三味線の、早目に連れてそこ此處と、拾ひ集むる心もそゞろ、三兩五兩十三兩、丁度合はせて五拾兩、袖引きらぎ

つて押包む、折角人の足音に、見附けられじと髪掛り、前垂取つて行燈へ、覆ふと知らず清七は、一杯機嫌の千鳥足、闇は綾無しお梅をとらへ「コレお仲、さつき村のあるき目が、用が有ると言うた故何事かと思うたら、油堤で磯六を、川の中へ打込んだは、己で有らうと言ふ詮議、所を旨く言ひ抜けたわ。コレなぜに其方は物を言はぬ。ア、聞えた其の様につん〳〵するは、アノお梅が事を根に持つてか、成程摺膳喰はれは男の恥と、箸を附けは付けたれど、腥い茄子雜魚、どうしてこんな江戸前の、洗ひ鱸に優ふ物か、コレ機嫌直しやいの。」と言ふ程ぴんと袖振切り、返辭せぬこそ道理なれ。お仲はお梅に見付けられじと、格子の下に忍びしが、氣の毒さにそつと立ち出で、清七が袖を引きみよしの方へ誘引いて、手眞似仕方で教ふれど、清七更に呑み込まず、さては是れがお梅にて、今のを聞いて腹立ちしと、思ひ違へて小聲に成り「ハテ其の様に腹立つことはちつとも無い。あれは當座の開合口、高で藝子は賣物買物、二三度呼べば旦那様、内方よりと文で迷はせ、髪を切つても壁の身代り、指は贋から爪を吹く様に、爪澤山にはすそご、飛脚問屋の請取同前、惚こうで捺す起請の文言、煙草入の比翼紋、[illegible]目付ければ變縞、唐棧の道中着、左褄に重襦袢、虎の皮より怖ろしい淺葱縮緬びら附かせ、洗つた様な薄化粧、可笑しい事も辛抱して、莞爾と許りの流目に、殺さるゝはたわやづんと至らぬ人の身の上さ、百も承知で當座の花、どうして其方に見替へようぞ」ト言ふ後から、行燈の前

垂取つて手に提げて、二人が中へ立出るお梅、二人一度に顔見合はせ、吃驚仰天清七は、面目無さに顔をそむけ、暫く物も言はざりけり。お梅は銚子杯を、暫く有つて携へ出で「清七様、何の私が腹立つる位なら、見ぬ振して戻りませう。世間知らずの懐子、酸も甘いも知り抜いて居やしやんす、お仲様に叶はぬ事は、能う諦めて居る程に、機嫌直して酒一ツ飲ましやんせ」と、つげば不思議や酒ならで、銚子のくちより離るゝ砂、杯に請持ちて「此の砂をへいだ心は。」「矢張夫れがお前へ心中、さ夫から住柄の天神で「起請を書いて下さんした盆書の砂でござんす。」「忘らるゝ身をば思はず誓ひてし」ト言へばお仲も差寄つて、「人の命の惜しくもあるかな。」「それならお前清七様を」「さつぱり思ひ切つた印、起請を返す其の砂で、お仲さんと杯して下さんせ。」「肴も爰にと差出す金。」「是れは小判で四五十両。」「お仲さんの身請の残金。」「嬉しうござんす、お梅さん。今更のがれぬ勤めの意地、ど旦私が顔を立て、二日なりと清七さんと夫婦に成つた其の上では、ふつゝりと思ひ切り、お前と女夫にさせませう。お梅さん是れ取ッて下さんせ」ト服紗に包みし短刀取り出し、船の小縁に小指を押掛け、切らんとするを切らせじと、止むるお梅短刀を、側に繋ぎし家根船の、内へはつたと取落せば、船の簾を押揚げて、顔差出すは佐賀右衛門、清七は見て吃驚、いつの間にやら後に捕人、「人殺しの清七」ト言ふに驚きかたへなる、銚子取揚げ打ち付くれば、砂は亂れて即座の目潰し、お梅は心得吹き

消す行燈。（此のとたんよろしく幕。）

○「此の幕明の譯」爰に花水屋の裏口は流れを前に引請けて、星と輝く行燈の、光に著き黒板塀、風雅を見する茅門に、續く飛石駒下駄の、音世話し無き黄昏過ぎ、聞いて歸る子来る藝子、客と仲居が搦れ進ふ、中におなかがいそ〳〵と、「これお粂さんお前も能く知つての通り、色々の紛擾で二階のとまッた清七さん、掛の方もすらりと濟んで、今宵は晴れて逢はれる筈」「道理こそついぞ無い、お仲さんの急ぎやう。夫れはさうと今道でちらりと見た團九さん」「サアサア其れも爰へ来やしやんしたら能いやうにお粂さん」「合點でござんす、サア御出で」ト往かんとするを「お仲どの暫しと頼み度き用事あり、マア暫く」ト佐賀右衛門、引止むれば吃驚して、つひに見馴れぬ御武士さん、此の仲に御用とは。」「イヤ別の事でも無い、そなたに惚れた、今宵身どもを客にしては呉れまいか」「ホヽヽ、何ぞまア六ヶ敷い事いと案じたに、嘘言にも御客に思はれるは、藝子の身では譽とやら、したが今宵はどうも」「逢はれまいと」「丈折もござんせう」ト往くを止めて「成程小浪屋清七に心中立て、退くに退かれぬ義理となり、身請の手附も濟んだとやら」「夫れをお前が」「知つて惚れたは譯ある事、心を鎮めて身共が文、マア是れ讀んで下され」ト帛包を手に渡せば、不審ながら提灯の、火影に透してお仲は驚き「是れは私が守り刀」「花水橋の貸船にて、取落したる其の短刀、柄の蒔繪は三本傘、

□れ□と言ふに表向き、色気も梨子地で心は堅塗り、「何か容子のありさうなお伸で[illegible]、奥で「ま[illegible]
御座んせ。」打連れ切戸へ入りにけり。

○大磯河岸の場　いかなる所へ[illegible]のお婆で、女に似合はぬ鐵棒引提げ、男と見ゆる頬冠り、跡より[illegible]ぶら團七郎、「姉ェ[illegible]」と、呼び止められて振返つて、「オヽ團七さん[illegible]「合點の、いかねえ次第、時に彼の一件は[illegible]物の見事に失策りやした。折角御姫さんに成り遂せ、満しいお請取つた五十両、生の六[illegible]が目を叩いたばつかりで、内證にかぎ付けられ、[illegible]ても鋼わねえ[illegible]合字と、擲き合ふも[illegible]打ち合ふやら、惡句の果てにやア財布ぐるめ、花水橋からどんぶりこ、五拾両が放し亀を仕たと、噂のあるより外ァ有りやせん、是れが本の虻も取らずの野郎も草臥儲けさ。」「そしておりやア此の形[illegible]又元の下馬一枚、儘作此の町内の番太奴が、失策つた其の代りに雇まれて、あの箱番屋に夜番とやら、見なせえお長家中の罨頭、日ッぱたきの證據にやア鐵棒引と成る奴さ。」[illegible]、手前が夜番みことを儲作、[illegible]と斷う〳〵」と私語けば、「おつと皆まで宣ふな、[illegible]さんのお胸にありさ。」「必ず首尾能く、今度ァ最う失策ることはありやせん、私が居るなァあれ彼處の番屋だ[illegible]。」「そんなら後に[illegible]其の合圖は[illegible]。」「オ、合點。」と猶も私語き入る跡に、[illegible]お婆ァが獨言「こいつァまた面白く成り掛けたわえ、團九がお伸を連れて此の裏口まで連れて来る、合圖にあの鳴子を引くと、[illegible]

お物言はずに引拂って、大張團九には遣らずに田舍へ下りも賣つて遣らう、尾のくゝりはおつちに塗附け。マア前祝ひに一杯やらかさう。酒も未だ有る筈だ」ト番屋へ這入つて陶の儘火鉢へ突込み、無息飲みに一切戸の内より是れも又一杯機嫌で立ち出づる、佐賀右衛門が下部の町内三ッ、酔つた／＼、未だどうせお旦那は手間が取れよう。コレおいらがちよつくり素見さうと云ふ長屋へはどう往きやす。ト番屋に腰を打掛くる「奴様わつちが處で遊びねえな、俺達の相手が無えこと一ヤお前は女だの、こいつァよつ程おへねえ奴だ、一杯お曲と出掛けよう」と、言ひつゝ顔を打詠め「こなたはどうか見た様な「ヱヽ、いつもの花水濁で云はれてふつと氣の付いたこと」、折柄に、ト初夜の鐘ゴヽヽヽ最う左ッたこと」ト行燈吹き消し、「火の用心さへしてやりませう」

○花水屋二階の場　かくて花水屋の奥二階に、男の意地づく清七が、團九郎に喰突掛け争ふを、止むるお杉丹藏も來掛って、遠くに退かれず二人を宥め、「ハテ悪い御合點、爭ひごと言ってでも事は済む。マア下に居やしやんせ」ト言ふのも構はず團九郎「エヽ、もう何にも言ふな彩をして、何を汝が知る物だ、お仲の身請は己がするぞ」「斯う成ったら金輪際此の清七が」「イヤ、そのおれがつ」と團九郎立ちかゝるを「まア押へて、なへ、年は纏めでも、百両耳を揃へねば、身も心も、嬢はお帰さんゝ一ト、ちなア胸…されの言はいやいや通り、廿年のお仲さん、百両の金さへ渡さば暇遣らう」と、親方様の金で引離したお

ぢやに寄つて用意した此の百兩、親方に渡して呉れ。」と財布を投げ出す團九郎。清七も金取り出し、「五拾兩は日外渡し、跡金の五拾兩。」「まア肝腎の此のお仲は、何處へ往つた。」「イヤ癪が痛いと言はしやんして、あの屏風の内に寝ておやわいなア。」「そんなら爰へ連れて來て、」「いゝさうだ」ト駈け寄る團九郎、お米が止むる其のはずみに、持つたる財布を思はずも、屏風の内へ投げ込んで、周章て團九が差込む手先、しつかと捕へて佐賀右衛門、お仲を後に押圍ひ、屏風を披けば驚く清七、「やア貴君は。」ト云ふを制し、財布を披いて金を改め「我が遊興の側近く、立ち騒いだ其の上に、泥脚踏み込む素町人、擲放す奴なれど、助け歸すも武士の情、はやく歸れ。」トきめ付くれば、團九郎はせゝら笑ひ「イヤ歸るめえ、まア其の金を請取らう。」「此の金は汝が金か。」「知れた事だたつた今、お米が邪魔をひろいだ拍子に、打込んだ己が金だ。」「すりや汝にも詮議が有る。」「どうしたと。」「これや是れ一兩々々に小越木家の極印、先年失せた御家の用金。」「エ。」「繩打つて屋敷へ引く。」ト言はれて胸に答へながら、弱味を見せぬ團九郎「己が心は水晶輪、何所までも往きませう。」佐賀右衛門容姿を正し「イヤ清七彼の御方の御行方知れしと有つて、日外其方の手紙に差添へ、短刀の鞘計り身が方へ送りしが、今の御名は何とやら。」「ハッ、もし。」と申す女寡婦御住居も定かならず、歎かは敷き御身持。」「よし〳〵夫れで大概容子は知れた。お仲とやらにも用事あり、身請濟みなば同道して、丹波屋

敷へ密かに参れ。」「サア町人うせう。」「今も言ふ通り雲霞のけちりん無い團九郎、不肖ながら往つて遣らう。」「そんなら清七。」「佐賀右衛門様。」「又重ねて。」ト氣を許さず、團九郎を引連れて屋敷へこそは歸りけれ。清七お仲も茫然と、詞無ければお米は差寄り、「そんなら申し清七さん、此の五拾兩を親方様につい渡して、お仲様の身請の事を。」「さ、さらりと埒を明けて呉れ。」「心得ました。」ト往く跡に、舟藏も思案顔、お仲も漸う顔を上げ、「清七さん私が身の片付くは嬉しいけれど、あの金お前が遣はんしては、内方の手前がどうもの。」「なる程案じらるゝはお仲さんが尤も、無躾ながらお前は御養子、さう早急に成さるなと、膝とも談合舟藏に任せて置いて御覧じませ。」ト言へば清七、「さればさ知つての通り六ヶ敷いお袋の氣質、誤つて居ては方圖が無い、そこで己が言ふには、『是れお袋藝子狂を厳重しく言はつしやるが、夫れはお前のが甚い御無理、仲間の參會又御出入りの御屋敷方で、清七斯う云ふ譯が有る、一寸花水へ交際はぬか、そんならお供と口輕に請合ふも商賣づく、交際は缺かれませぬ。』」「成程言へば、そんな物でござりますなア。」「そしてまア、あらう事かあるまい事か、言號のお梅をば別家住居、親々が呉越の久我の助雛鳥さへ妹脊山へ出養生顔をば見するが親の慈悲、若い身での獨住、お仲に惚れたらチツトも無理は御座るまいト大把にやらかした。」「成程言へばそんな物でござりますなア。」「ア、あんまり喋ッて口がはしやいだ。茶椀で一杯氣を付けよう。」お仲も飲み

やれ。」と續けて四五杯醉ひが廻つた高調子、「そこでお袋もぎつちり詰り、そんならお仲を身請して遣る程に、是れから傾城狂を廢めろと、夢見た樣に小判で百兩、こつちは弱味を見せず、各々是れでは足りませぬと投げ返した。夫れでは己が安堵せぬ。身請の金はいくらでも、入用次第遣る程にまア是れを手附にしろと拜む樣に言はれたから、不承々々に持つて來た。清七が外聞ぢや、斯うしても置かれまいと、お仲が部屋が十五疊、柱は檜の四方柾、疊はりうびん黑部の天井、其の普請最中氣に入つた女房を持つて病氣にはなるまいかと、地黃を百斤買ひ込むやら、此の鎌倉中の自然薯をたづぬるやら、三町四方に堀を掘つて中へ鰻を放すやら、今内は亂騷ぎ、コレお仲些と浮き〳〵しやいの。」ト眞顏で言へば眞實と思ひ、「何だやら知れんがうばかり、お前は酒が過ぎた容子、寢て醉ひを醒さんせ。」ト手を取り側に寄添ひて、屛風ぐるりと引廻せば、舟藏も手持無く、「五月蠅え奴さ。」ト、氣吹ばつたり、既に其の夜も更渡り、裏河岸の番屋の内にこは火鉢と差向ひ、何と鳴海の三布蒲團引掛けて一人言、「思ひ掛けねえ折助奴にめつかつて、既に目算が割れようとした。さうしたら又梵天國よ。ドリヤ大分閑靜した。どれ一寝入りやらかさう。」と、呟く折柄人音して、供をも連れず驅け來るお梅、「さう思ひ諦めても、諦められぬ清七さん、團九郎と意地づくで、お仲さんを請出す筈なれど、未だ金が足らねエとやら聞いた故、道成らぬ事ながら、かゝさんの眼を忍び、盜み出した此の金で、お仲さんの

身請をしたら、おつとは私を可愛がつて下さんせう」おつとも早く」と驅け出す。先へ廻つてもとお婆ア「姉さん待ちな」「エ、」と吃驚「なァに怖えことァ無え、私やアしンと言つて、お心善しの女孀、仔細があつてお前方の身の上は、篤りと知つて居やす。ほんにお前は貞女とやらだが氣の善いのも馬鹿の内と、今時そんなことァ流行りやせん、成程利發な方だと、身に恥ぢて退くやうな、お甲だと思ひなさるか、五兩出た八幡黑で、手當は羽二重でも性は矢張平羽織サ、是れはどこの馬の骨ッて目を瞑くして言つて聞かせるに、逃げたがる事アねえわな。夫れよりかお前、懐中に有る金を己に呉んな、そうすりやァ、今夜お仲を引拂ッて、團九郎が方へ連れて往きやす。よしか、エ否でも應でも清七樣の女房はお前だヨ、夫れ古いたことに謳ふ通り「私とおまへはたばこの煙よ、とほくなるほどうすくなる。」のが莫子の習慣、枕二ッ並べてから可愛がられる御傳授は、及ばずながらわつちがしやす」ナア其の金を俺に呉んな」「エ、知らんわいなァ」「殘酷い目見するが否さに下から出れば付上り、ヤヤとんだ五段目だ、ナア是れでもか」ト、蒲團の内に隱し置いたる脇差を、お梅が眼先へ突付くれば、アット許りに身も震ひ、更に正體泣くばかり。「しかもこりやァ、磯六が質に取つた清七が脇差だよ、己が殺すと思はずに、恨み有らば男に言へ、エ、面倒な」と突掛る。お梅も愛ぞ一生懸命、彼方へ走り此方へ逃げ、鷲に追はるゝ雛鳥の、既に危き其の所へ、お梅が跡を追ひ來るお杉、斯くと

見るより身を惜しまず、二人が中へ割つて入り、としを支へ止むれば、此方は猶も氣を苛立ち、「おいれも冥途の供しろ」ト、暫く挑み戰ひしが、としは我が持つ脇差にて、己と肩先切り下げて、「アレ人殺し」ト呼ばはれば、聲立てさせじとさそくのお杉、脇差扱取り蒲團に押卷き止めを刺さんと乘り掛れば、としは其の手に取り付きてもがく拍子に脇差を、思はず彼處に取り落す。いつの間にやら燗酒賣、後に容子を窺ひ居て、落ちたる脇差拾ひ揚げ、火影にかざしとつくと見る。人こそ有れと振向くお杉、行燈吹き消す燗酒賣、闇はあやなし。(又花水屋の二階の場に戻る。)

(眠り覺めて清七が、「お仲〳〵」とゆり起せど、返辭無ければ目をしばたゝき、「己が言ふのを眞實と思ひ、氣が弛んだやら能う寢て居る。アヽ、我が身で我が身に愛想が盡きた、後前知らぬ鐵子狂、どんな氣の善い親ぢやとて、身請の金を何の呉れよう、殊に歪んだ母の氣質、未だ其の上にお梅が事を腹立てゝ居らるれば、内へはどうも歸られず、佐賀右衛門樣から預つた金も央ばは遣ひ果し、義理有るお梅が呉れた金で、假令身請仕たればとて、どの面さげて添ひ遂げられう、今宵の内に死ぬ覺悟、せめて一筆書き遺さん。エヽ、折惡く硯も無し、ハテどうかな」ト見廻す折、誰が戯れに謳ふなる、唄の唱歌も身につれて、唄「世の中に夢と云ふものなかりせば、ほんにはかないうき身をば、なににたとへん實かうそか、二ツまくらにとふ事も、ないてうれしいきも知らず、わかれをいそぐかねのこゑ」清

七ふつと心づき、八間とか號けたる提行燈を取りおろし、油煙に黒む紙こそよしと、杉箸折つてさらさらと、書けば宛然卽座の石摺、お仲は更に睡り覺めず、寢返る機會に懷中より、落ちたる短刀手に取り揚げ、白紗披いて不審顏、梢の蒔繪は三本傘、是れは鞘無き守刀、若しや夫れかと打驚き、「ム、身が無さに腰が輕く、忘れて差して上つた脇差、三味線箱へ入れて置いた、是れ倖せと取り出し、白刃ばかりの物さしを、彼の短刀に較べ見つ、長さは七寸、鐔際より三寸上に此のこぼれ刃、丹藏が噺した通り、そんなら眞實の姫君は、ツヤツ。唄「あれ心なくふき送るエ、面憎やさよあらし、戀の花にもよぎてふけかし」ト謳ふ小唄の其の内に、書置あらまし書き終り、さうだと驅け出す清七の、裳裾にお仲は纏り付き「恰相變へて、お前は何處へ往かしやんす」ト言はれてハッと行き詰り、返答無ければ男の顏、恨めし氣に打眺め「御前は死ぬ氣でござんしようがの。」「エ、鶴龜々々何の己が死ぬ者だ、お米が歸りの遲い故、一寸往つて」ト立つを引止め「死なぬものが、其の書置はなんの爲。」「そんなら今の容子を殘らず」「寐た振して聞いて居た。」「ヤ。」「聞えませぬ清七さん、死なで叶はぬ事ならば、なぜ斯う〳〵と打明けて、言うて聞かせて諸共に、三途の川も手を取つて、連れて往んでは下さんせぬ、私を助けて唯一人、死なうと覺悟さんしたは、眞實過ぎて恨めしい。」「オ、其の恨みも尤もながら、己が心で己が心が最う合點のゆかぬ程、迷ふと言ふも初手の事、一日逢はねば氣に掛り

後前見ずに通ひ詰め、金に詰ッて此の二階を、閉められた其の時に、格子の外に立ち明し、そなたに笑ふ聲がすれば、よ、此方の氣も知らず、面白さうにと腹も立ち、鬱閉顔を見て歸れば、おれ故苦勞を仕やるかと、また夫れが案じられ、お梅が事は打捨てゝ、無ければ成らぬ金さへも、遣ひ果し程なや物、何の其方が憎からう。諸共にとも言ひ度いが、不所存な己故に、死んで呉れとは言ひ兼ねた。」「夫りや私も同じ事、内外の者の目を忍び、お前と二人船宿の二階で終夜泣きあかし、結號のお梅さん、事を別けて言うてたや物、退かねばならぬと言ふ事は、能う合點して居ながら、どうも思ひ切られぬは、是れが誠の惡縁とやらでござんせう。」ト、今更言ふも詮の愚痴、身請が濟めば隱れ忍ぶに及ばねども、夫れと知られて止められ、未練な心が發起つては、猶此の上の恥の恥、ト、此の身に無常を知らするか、昨日の花も雪と成り、「庭の梢も青葉勝ち、一世に秋風や散らぬ内、」最期を今日と、ト顏見合はせ、ほつと太息を月の入る、山子規聲立てゝ、ほぞんかけたと過ぎ往けば、「あれ時鳥、」ト立ちあがる、お仲を圍うてきつと見遣り、「死出の田長も冥途の道連れ。」「そんなら事を聞き分けて、一緒に死んで下さんすか。」「オヽ」ト手を取り行く向うへ、斯くとも知らず來かゝる舟藏、お米もいそいそ立ち歸れば、見付けられじと兩人は、襖の陰に身を隱し、遣り過して邂逅に、跡を暗まし落ちて行く、

○正本製栞屋の樋綸浄瑠璃の段　清元「いま捨つる身にもおそろし夫いこゝ、夜はふけねども風あれて、なつのやなぎのかげくらき、ゆゝゑ〳〵たびを清七が、お仲とふたり相がさに、宿とひだりのそでぬれて、ゆふべのまくら思ひだす、手と手とかさなるあかきい、えにしも細きたんぼ道、しぼしこかげに立ちとまり」「最前も言ふ通り、此の清七は人殺しの罪遁れず、又其の上に大切なる金にて身請なしたれば、どうも生きては居られぬ義理、罪無きそなたを何ともまず、我が手に掛けて殺されうよ」ト源組の見、つくゞゝと男の顔を打眺め「夫りや何言はんす清七さん。」清元「しほひがへりの其一寸、お前に惚れまれたとき、いやでなければすいたとも、おもはすまはるとこの内、ことばすくなにかうとうで、は、にいかまいのないおかい、添ひとげたらばゆく末は、おもしろかろとおもひその、それからふおうなるにつけ、わるどあしたらうはきさやと、ひよつとあいそがつきようかと、ひへしたあとでたお人を、そつとよんでひでかけるとは、つとめのたのちひと思はんしよが、わたしやや女房の氣おやものと、との付きなけく折からに」「お田鬮酒」清元「夜を晝なる世渡りは、ねすみけいせいかんざけや、いつももどりは七ツ梅、おらがたちあが待ちかけの、やあ〳〵、つもるむつごとも、よしにしろさけやき餅の、もちはこつちにたえやさく、きりいが江戸さいつはんぎ、うかれてこゝへ来りけり」一八、「お前方は駒落だの、此と時代な臺詞だが、廣賣物の此の酒は、百薬の長なれど、がりゑは人

の身に當る、一寸一合寢酒の罰、是れ程樂しみな事は無い。お前方も短氣を止めて、善い思案をさつしやりませ。」「否々私共は左樣な者ではござりませぬ。」「オヽそれ〳〵此の女子は、伊勢の山田川崎町の娘子、此の女子を送りながら、伊勢參宮を致さうと、旅の者でござります。」「成程、伊勢の山田は踊の名所、人も知つたる川崎音頭、何と姉さん踊ッて見せる氣はねえか。」「おやと言うて私がまア。」「はて大事無い、伊勢の者ぢやと言ふ證據に、何なと踊つて御目にかきや。」「所望だ〳〵。」（淨瑠璃の文句中を略す）お仲も今更仕方無く、踊り終れば燗酒屋、我を忘れて浮れ出で、「おいら覺えた田舍唄、ちくとん許りやらかさう。」唄「うなぎ鱠はぶなりたものよ、それはそゑぞにぼおよによろり、せどご忍ばばほくりはよしやれ、かつくりそつくり音がする、緣のかまちでけつまづいて、お痛しこ、さんりの灸をすりおいた。こゑきたちやるなおけがらす。」「どれ商賣に掛らう。」ト、おたふたとして急ぎ行く。跡に二人は太息をつき「こゝは人の往來も繁く、見咎められては最期の妨げ、里離れなる向うの森こそ一夫れが二人の死處。」淨瑠璃「あきならねども、ふねよばふなるこの音のかしましく、又人やくるこなたへと堤づたひにおちてゆく。」かかる所へ佐賀右衛門「ヤレ死ぬに及ばぬ、眞實の姫は其のお仲、證據とすべき短刀を、彼が持ちしを船頭の、八とやらんが知つたる故、もとに盜ませ姫と欺り、汝を謀る段々は、町内が捕へたる八とやらんが殘らず白狀、日外お仲が貸船より、取落

したる其の短刀、不思議に我が手に入つたれば、客と成つて容子を見るに、彌〻姫に疑ひ無い。又お梅が汝に負ひし金も、もとが伝り取りたる金、姫を尋ねる其の爲に、我が渡したる百兩にて、身請なしたも勿怪の僥倖、團七郎は金の盗賊、汝が親の證明も立つたり。斯く證據の出づる上は、姫君と御名乘りあれ。」「成程十二の時勾引され、卑しい勤めの身に恥ぢて、今日までは隠れしが、思へば實の闘姫。」「南無陀彌陀佛。」ト清七は、お仲が懐劍取るより早く、既に自害と見えければ、お仲は周章て押止め、「ア、恥を捨てて此の姫と私が素性を名乘つたも、お前の命が助けたさ。」「自害と覺悟極めたる、仔細はどうぢや。」ト佐野右衞門、「ハテ、其れは素より詞にて、實の姫はお仲殿と持賴が物語、知らぬ振にて誘引出せしは、貴君へ御詫、申さん爲。主人の姫と言替へた申譯の此の自害。」「夫れも知らねば詫りならぬ。」ト爭ふ折柄潮濟寶、大小立々しく出で來り、「ヤレ待たれよ、大友の若殿小太郎樣は則ち貴君、一體御姿腹の御生産にて、奧方の嫉妬強く、藁の上より御家來何某へ御預けなされし所、其の者共に行方知れず、大殿判官公の御秘藏、牛王義廣の差添を附け置き給ひし、夫れ證據に姿を變換し尋ねし所、ともとやらが女を捕へ殺害成さんと爲す所へ、我思はずも往き掛り、手に入つたる此の白刃、判官公の御差添に相違無し、其の持主の清七殿は疑ひも無き小太郎樣、姫君とは御結號なれば、御自害には及びませぬ、斯く申す某は、大友の譜代の御家來大當用求之助と申す者。」「すりや差添に親

人が、封印附けて置かれしも、素性を慎む故であつたが、今こそさんならお前と是れからは、世間晴れてこの度のたゞには、御輿入済んでの後、お梅とやらんも御寝間の傍に、家来参れと呼ばれて、騎塚の影にまはりて、幾多の同勢を召出でて、二人が守護なし、本陣なる頼朝の御帰館に、若殿の御立ち。

（まづ初編はこれぎりめでたく打出し）

正本製初編　終

正本製 弐編

編者 柳亭種彦

曾我祭 小稲判兵衛物語

「判兵衛様、御見物でござりますかエ」「是れは針蔵さん、お前も知つて居なさるあの小稲が病氣でネ、そこの醫者様まで連れて來ましたが、私共の方にも、又例の無盡講に狂言をしますから、繁忙しい中にも一寸と芝居見物に。此のお世界にもお定まりの曾我で此とうこんだが、私が工藤をやつてはうまく御屋で演んなさるだらうに。お前にも何れ一役當てにやアならねえ。時に晩まで御見物かエ」「イエイエ此と用があつて、是れから長谷の觀音まで参ります」「私等が内でも今日は花見ついで觀音で待ち合はせて居る筈だから、歸りに寄つたら又後刻に」「オヽヨ、もう明くさうだ」

うたたともし火の、花をたづね亂る夜の蝶、露は命よひらひらと、ゐのかが羽をさの追風に、さゞなみよ君がいはんたらうえ、ありて恨みし菊の花一折りに來かゝる虚無僧が、籬垣のそとに佇みて、處も近

江の菊ヶ濱、小蝶を道の案内にて、思はず來かゝる庵のうち、心ありけな今の樂が、日もはや暮れて、夕月の、影さへ匂ふ菊のいろ〳〵、はて興ある住居ぢやなア」ト又尺八を吹きすます、內には澤瀨儀太郞、經文書寫の机にもたれ、妻の澤田が手向の爪音、猶も靜かに掻き鳴らし、「思ひいだしてせかいはまるに、いつれをしまぬ人もなし、かたみに殘る姿繪を、くり返し見る珠數の玉だな」礒太郞庭に下り立ち、志す佛の忌日、弔ひの御修行者廻向の一曲所望せんと、柴戸開くる顔うちまもり、「さう仰しやるは兄ぢや人、お懷かしう御座ります」と、急ぎ棄ててうち通る、澤田も起ち出で、「ほんにお前は幼稚いとき、勘當うけさんした主の弟小二郎樣、合點のゆかぬ虛無僧姿」ようまア來て下さんした」と嬉しき比類なかりけり。小二郎は兩手をつき「今更申すに及ばねども、殿樣堂月判官公、御祕藏ありし白玉の硯を過つてうち割り、其の咎とあつて御勘氣うけしは十二の歲」「その時に此の兄も殿の御前へ罷り出で、若年者の事なればと只管お詫爲せしかど、物堅き父郷太夫殿、更に承引し給はず、仕方なく鎌倉の知己のかたへ落し遣り、夫れよりは音信不通、その後音羽家の重寶菊一文字の短刀を、仔細あつて當方へ贈られし途中にて、盜賊の所業と見え音羽の使者を切害なし、短刀を奪ひ取つて立退きしを、殿判官公殊のほか惜しませ給ひしゆゑ、何卒彼の短刀を尋ね出し、それを功に御勘氣のお詫せよと、此の事委細文通にて、其方へ申し遣はせしが、當國へ立ち歸りしは定めし

其の短刀を尋ね出せしなれば、ハテ、天晴功々。ト兄の喜び、如何にも其の御状早速に到來なし、種々詮議致しますれど。」「今以て刀の行方は知れぬと言ふのか。」「ハッ。」「ホイ一つの功を立てぬ中は、私ならお暇の御願も言葉換すも是れ限り。」ト言ひながら立つ袖に縋り、「其の御腹立を知りながら餘りと申せばお情なしや、面おし拭うて參りました、窃かにお遇ひ下さるやうお執りなし。」「イヱ、叶はぬ事ぢや。侯つとしやう、」ト言ふを押出が押宥め、「父様には此の事が會はせませう。」ト佛壇より一つの位牌取り卸し、手づから片手に差出せば、火影に透し不審顏、「なに星流刃雲信士。すれや父うへには二三年以前九月七日、人に打たれて果敢なく御最期。」「ヱヽ、今日が三回忌の御逮夜、拙い妾が夫としても、心にかゝる手向草。」「して〳〵敵は何處の者、樣子はどうぢや。」ト急き立つ小二郎、兄は涙ながら俤の譯ひ、嚢絹指南をなひ立てに、當家へ來りし浪人者、父上と竹刀の立會ひ、打負けたるを遺恨に思ひ、道に待ち受け言葉もかけず、暗討に父上を、敢なくも殺害して、直に當地を出奔なし、今鎌倉に居ることを幸ひ、是れを證據に敵を討て。」ト笄を與ふれば、小二郎は手に取り上げ、「御葉菊の紋所、そんなら是れが敵の笄か。如何なれば此の小二郎は殿樣には御勘氣を受け、父の最期をさへ年越、知らぬとは何たる業ぞ。ムヽ、又しても歸らぬ繰言、一體己は短氣者、縱ひ如何なる事ありとも、無念を忍耐へて本意を遂げい、人の見ぬ間に早う歸れと、柴戸はたと閉て切る折、螢火を目

掛け舞ひ來る胡蝶、手燭の中に飛び入りて、翅も焦れ焼け死にて、燈火はたと消えければ、磯太郎聲くもり、「この蝶の如くわたし身上、無常を我に知らするか。」「胡蝶の夢やはかなの浮世。」「果敢ないものは、生命ぢやなア。」「燈火が消えては兄上の、最早御顔を見る事も爲らぬか。」「行けと云ふに未だ行かぬか。」「何卒御顔が今一目。」「未練の奴め。」「菊畑の場を思ひ。」」

のうたひ、まことは夢の中なれば、みなきえ〴〵とうせはてゝ、ありつる邯鄲のまくらのうへに、ねぶりの夢はさめにけり。」「此の浪人の謠はつしやる邯鄲で思ひ出した。己は昨夜盧生が夢の二ッ掛と云ふを見ました。」「はてな。」「聴いて下さい大磯で、太夫を揚げて騒いで居た最中へ、親父が來たとおもはつしやる。」「夫れが何故二ッ掛で御座るの。」「はて盧生が夢は五十年、私は百年目だと思ひました。」「ハヽヽヽ、イヤ何時も此の長谷の觀音は賑やかな事で御座る。どれ茶代の餘りを進上いたさう。」ト謠を唄ふ浪人に錢を與へて、參詣の群集は散り〴〵別れけり。茶屋の娘が後見送り、「本に夢と云へば彼の大臣の判兵衛さん、此の騒々しい所で、能く寝られた事ではある。」ト、簾を揚げて呼び起せば、判兵衛は目をさまし、四方見廻し涙に暮れ、「四年以前に御病死なされた、兄磯太郎様御夫婦にお目に掛り、御親父様も人手に罹りお果て爲されしお物語、はて氣にかゝる夢では有る。」ト、我を忘れて獨語氣を取りなほして、「多門樣能く御精が出ますの。」ト、云ふに浪人笠脱ぎすてて、「壁一重のお長屋に居

りますれど、何やかやに取り紛れ、とんとお目に懸りませぬ。そなたに足下の今云はるゝを承れば、四年以前に兄きが先立てさつしやつたとやら、拙者も姨が御座つたれど、幼き時に分離れまして、互に顏も覺えませねど、今以て尋ね會はず、身につまされて御愍傷察しゐることと云へば、制兵衛涙を拂ひ「一生の別れといふ者は尋ねさつしやる樂しみも御座るが、返らぬものは死出の旅、若しや今のが正夢でこ「はて夢は逆夢、必ず氣に掛けさつしやるな。どれ參詣してこう。」と立ちいる跡へ、さゞめきくるは大磯の遊女屋のかつへやの女房おさん、新造禿引連れて、茶屋の床几に腰打掛くれば、制兵衛は小腰をかゞめ「是れはかつへやのお内儀さん、觀音へ御參詣で御座りますか」と云ふに、につこり會釋して「今日は餘り清麗さ、花見ながらの信心參り、これの藻兵衛殿もあの小稻が病氣故、醫師さんの處へ連れて行くと、一緒に内を出やしやんしたが、いかう暇のいる事ではあるぞ。ほんにお藻殿は子供を連れて今の内、觀音樣へ行つて下さんせ。私は此處の茶屋を借りて、主の歸りを待ちませう制兵衛殿晩に遊びに來やしやんせ」と茶屋の女房に案内させ、障子の内へ入りければ、籠を離れし小雀の、「コア山へ往て遊ばうと、騷ぐ子供をお慾ねめつけ「エ、喧しい靜かにしな、ほんに何ごといふと、小稻々々と内所で贔屓さつしやるが、さつぱりと合點が行かぬ。女のざいに力は強し、我等共が云ふ事は、空吹く風の鼻あしらひ、あの新造衆の惚れる男にあらねば身生の徒はねえ」と制兵衛を尻目

にかけ、「お花さんお雪様、マア御出で。」と引込む新造の手を引いて、寺内へこそ入りにけれ。判兵衛は吐息をつき、「さうでも氣掛りな今の夢、マア觀音へ參つて來よう。」と、手水遣つて手拭取り上げ、「見覺えある家の紋澤瀉氏と染めたるは、こりやこれ兄ぢや人御存生の折から、此の觀音へ信心にて納められし此の手拭、時も時、折も折、我が目にかゝるも涙の種、兄ぢや人お懷かしう御座ります。」ト彼の手拭に打向ひ、宛然人に物言ふごとく恭しく兩手をつき、「我御勘氣を受けし砌、あなた樣の仰せ有りしは、父郷太夫殿の召使はれし下僕進平と云ひし者、今鎌倉に在て頼もしき者なれば、彼を便りに下れよとの御言葉、夫れより色々尋ぬれども、今以て居所知れず、かゝ淺ましき姿となりしを、さぞ不甲斐無き者と、御腹立ちも御座りませうが、是れ御覽下されませ。」と、道具箱の内より脇差を取り出し、「無銘なれども中々切れもいゝ、友達に金を借り、此の脇差を買ひ取りて道具箱へ隠し置くも、昔忘れぬ武士の魂、軈て短刀尋ね出し、澤瀉の家を繼ぎまする。」と、振仰向けば二つの蝶々、彼の手拭を飛び巡るをきつと眺めて、「フゝ最前の夢の内にも小蝶を道の知るべにて、兄にあふ身のきくが瀬、此處は大悲の法の庭、流れも清き水淺葱染めて殘りし寒菊を、又も慕ひて二ツの小蝶、今日の前に舞ひ遊ぶは、過ぎつる人の無き魂か、南無阿彌陀佛。」ト唱ふる後、障子細目に引きあけて、樣子を聞き取るおかつへやおさん、何心なく立ち出づる。茶屋の女房に覺られまじと、判兵衛脇差後へ隠し、

「エヽ大きなとうへきだ、一折なでゑべえかエと、尻をひつしやり足早に、笑ひにまぎらし行き過ぎぬ。「アヽもし御免なされませ、勘忍してくださりまし」ト詫ぶる酒屋の丁稚が襟首ひつたて來る二人連、「折檻來やゝる文使」「これは藻屑の貴平樣損料屋の釘七さん、どういふ洒落だ大人氣ねえ」「氣三こうか聞いてくりや、此奴の所で八ッ時分から飲んで居て、序にやらうと出て來れば、久しい物だと此の餓鬼めが、口小言ぬかしやァがつて餘り業がにえるから」「モウようござえます、コウ手前も人を見て口を利け、おれが旦那に御詫をする、サァいきねえ」ト追立てやり、「時におれは懐手をするが癖で、腕を切られた樣だといつて、綽名が腕の氣三郎、釘七さんもいじかり股で懐手をした樣子、何でも一物ありと見えるが」「慥かに此處に」「何が何と云ふ處だ本名を名乘らう」ト股ぐらから取り出すチロリ、「たれ見ねえチロリと見ても遣りやしねえ、幸ひ此處に客人の病氣見舞の蓋茶椀、慥かまアこゝに坐禪豆」「何方のお内の姫妓しが、しかみ火鉢でお手酌らお菰へ遊はしたのだ、氣三樣でァ始めなせえ」「まだ四五軒往かにやァならねえ、半分にして置かう」と茶椀で引受け「旦那安心しこれから彼方へ直に」「知れた事さ、一遍でも通つてこねえと寢心が悪いが病だ」先づ春は四ッ手駕籠に髪飾の掛つてゐる時分から、櫻山吹散りすぎて、花の暖簾は梅茶の前垂と姿を變へ、燈籠の頃俄の頃、コヲ巻煎餅を肴にして、目移しの茶を小格子から呑むと云ふやつは、まだ誰も穿たねえぜ。漸う

夜寒になる往けば、錦の内に霧間の濡手さへ日をたがへ、菊の節句恵美須講、然ういひ續くれば宮城野が、若覺ごとにことふりたり。イヤとんだ四季の段だ。」「時に日暮チヤツト貴君に御話が。」「そんなら貴君の甘七は、氣轉を利かして遊んでこよう。」ト行くを見送り小聲になり、「もし貴君、上には菊一文字、此方も晴れて掛けぬ代物、それだから三十兩で手を拍つては見たものの、餘りそれぢやア情ねえ。何卒もう五兩許り料簡して下されまし。私が方へ殘して置いた折紙をも上げませう。」「そりやはて余も都合次第どうでもしてやる心だが、」ト暫し思案し、「コ、宜い事がある、コレ此の簪は金も餘程附いてある、是れをお主が方で掴いて、當季の間を合はせてくれ。此處は餘り人繁い、委しい事は例の茶屋で。」「そんなら跡から三平樣。」「どうかをかしな寄合だ、降らぬ内往つて來よう、必ず來やれ。」ト別れ行く。折柄釘七錆藏が判兵衛を引立て來り、「もう今日は料簡しねえ。」「此の生すかね只今片を付けろ。」と打擲なす。「サア約束を違へたは此の判兵衛が誤り故、是れ程詫びても聞き入れぬ餘りそれは。」「何が餘りだ、エ、まじ／＼としたしやツ面だ。」と、蹴返す足首確かと取り、むつとせしが手拭にふつと目を付け涙を流し、「兄者人短氣者と最前の御意見骨身に染みて忘れませぬ。」トし一人ながら何卒四五日料簡して。」「嫌だ／＼。」そして我やア兄者人と吐したが、此處らに其そんなは居ねえ。」「大方氣でも違つたらう。」ト又打ち掛る折こそあれ、戻り掛りし以前の浪人、兩人を左右へ

投げ遣り、樣子は何か知らねども、餘りと云へば無法の打擲、その譯吐せ」と云つたと詰る、面を靜めて起きかへり「ヤ、ま、譯を吐して聞かせよう、此の質七が三十兩、此の針藏も小判で十兩、極月の三十日までと、耳を揃へて貸した金、今日の晦日のと一寸遁れ、一文も返さねからせめてもの腹いせに打つたのだ」「聞いたのだ」「ヤイ浪人、立派に口が開きたくば、兩が合はせて四十兩」「サア其の金は」「有るか、何有る物か、なければ矢張判兵衛を」と、立ち寄る後の障子のうち「其の金私がかへしませう」と立ち出づるを見て吃驚「御前には、つれやの御内儀」「サア人の難儀を見て居ぬが、これの大藻兵衛殿の女房、なんぼ私が女でも、聞きすてにはならぬ」「そんなら私等が貸した金を」「たつた今返しやんなさい、サア取らしやんせ」と差出す小判を、二人は取り上げ「こうした處に長座をしたら、武士に向つて惡口雜言、男の拳打も喰はぬ中に、一膳食でも往つて喰はう」「おさきん旦那へも宜しく」と、足早にこそ迯げ往きけれ。判兵衛は摺り寄つて「お蔭で男が立つたとは申す者の、四十兩と申す大金」「ハテ大事御座んせぬ、抱へを一人欲しいと云つて、主が尋ねて居やしやんすに、幸ひの判兵衛殿」「そんなら私は勝美屋へ」「抱への印の判證代」「男も及ばぬ此の場の曖き、受人は此の多門」「御武士の其の一言が印形した、確かな受狀、是れから直に」と云ふ折柄、子供引連れ立返るお慾が差出で「モシ御内儀小稻樣と浮名の立つた、判兵衛殿をこちの内へは」「ハ

テ何もかも己が胸に二三十りやうの金は集つて来る、拙者は最早御暇申さう、三人も其處まで御一緒に、判兵衞殿、子供衆やつこと打連れて大儀さして返りけり。氣三郎は最前より後の方に引下り、物をも言はで居たりしが、煙管手に提げ立ち出でて、一面を出しては面倒故、簾の陰に見て居れば、半纏代が四十両、抱への相場がかうだと上つた、だれはさうと貫平様から預つた此の鋒、どうかこれ落しちやうだ、ま、丁度宜いものがある。」と、納手拭ひつちぎり、くるりと捲いて懐中なし、そばに落ちたる印籠取り上げ、二枚に日の出の時代蒔繪、一重たらぬ此の印籠、何奴か今の騒動に、落して往つたに違ひねえ、此品も役に立たうも知れぬ。」ト見やる向うへ来かゝる武士、「おぬしは氣三郎ではないか。」「さう仰しやるは貫平様の御門人、三津太夫様。」「これ氣三郎、此の書状を少しも早く先生へ届けてくれ、其の仔細と云ふは先年御手にかけられし郷太夫に、コレもし一子が幸小三郎と云ふ奴、此の鎌倉に居るとの事、必ず油断なさつしやるなと、江州へ殘し置かれし門人よりしらせの文通。」「お氣遣ひなされますな、屹度御届け申します。」ト状箱取つて懐中なす。三津太夫悦び、「身共はチット用事もあれば宜しく頼むぞ。」と、慌しく、元来し道へ返りけり。判兵衞は煙管入を件の茶やへ置き忘れ、立ち戻つて彼の武士が言葉の端を聞き咎め、氣三郎が懐中へ手を掛くれば振拂ひ、「野郎め汝やァ何をするのだ。」「其の懐中にある文が入用だ、なんと見せちやァくれめえか。」「人に知らさぬ魂膽の、文の使が余が

商賣、見せる事はマァならねえ。」「見せずばかうして。」「何を奴。」ト牀机をこだてに爭ふうち、取り落したる文取り上げ、「勇士は久方にて御目に掛り、しかし何の御斷もなウ。」「エヽ、おきやァがれこれおやァねえ。」ト逃げ出すを引止め、又一通の文奪ひ取り、「なぜ主の心が分らぬかと、しんにノヽじれつたく。」「ほんに余もじれつてえ、きりノヽ密書を渡しやァがれ。」ト、組んづ解れつ攫み合ふ、折柄うろノヽ、針藏が立ち返るを幸ひと、氣三郎は狀箱取り出し、夫れを早くと目顔の合圖、心得たりと驅け出す針藏。夫れ遣つてはと起き上る、判兵衞が襟髮攫み、共に尻居にはつたと倒る。チョン〳〵(此の道具ぶん廻す。)

○時ならぬ、夕立雨に一しきり、篠を亂して降り來れば、郭へ通ふぞめき客、上らぬ先からふられるとは、縁起が惡いと往くもあり、びつしより濡れて頭から、ぶつかけとなる夜蕎麥賣、按摩はピーの音も出でぬ、辛き目に合ふ唐辛、暖かさうな姿とは、見えぬがおでん燗酒や、己が樣々行き違ふ、大磯がよひの一筋道、一挺ならべて四ツ手駕籠、宙を飛ばして來りしが、一息入れて、「モシ旦那、モウおつとで御座りますが、桐油がなくて參られません。」「仲間のとけへ參りまして、ちきに借りてまゐります。」「此の寺の門の下で、チット待つて下さりませ。」「ハイ、もう此處は地藏樣の前で御座ります。」ト並べて下す四ツ手駕籠、「どれ早く往つて來よう。」ト、足を早めて驅り往く。引違へて針藏が、

さあ〳〵罵り騒ぐ處へ、廿二歳の侍なる此時、尻でくるの持兵衛に目くばせしては最とも突背を見たれ。こここに見返臨は二義ある中、尻垂き、一々、罵せ、此の細首を前に切つて落さんと思ひ、取る作へておそや手鋪と論の村も者で在るに、未打あにぞる斎のて、腰の大刀抜取り打し、合点々入れと作目鼻も取り辣く組の討ひ候べしと是れ程やといふと一と合ふ丼ぬ里へ、問兵衛と名のれ、首の打ちたりとも盤ねもこそ其のつゝに出でしと引留め、手に持つ紅葉を散らして一叉々に踊に走るまでもなし。訳しやそれと要さ處に、四さし寄られんと爲らで、巫が使へ仕る道をば、そそ〳〵東ぶ彼方の道まで。すら打かて聞ゐ二一簡問ひを謹らぬうに、不在ぬ物ゃ小はも事なりと、去の一本で中にはもさ其田舎もの表法で。と兵助は聞かされた。いとど額を寄せた處せ、とやかの支度しにて斯うぞに、腕の下に寸を寄れば、寄て寄つてかゝりと、寄せと寄る處前の紅葉に、鞘を拂いて先の鍛の峯を、寄返の内より手を差出し、取らんとするは此こそあらめと、樹上なる栄樹に挑みて、其の手を取へて突きて出つるは、鈴木田の兵兵衛なり。腕は取られて、一瞬間か、只に共れと取らここそ。賀平手早く左の袂を取りたけ。体々を違らしと引き行る。此方の御暦が身の構手取り、股子を取る本店小路、足音を爭う手れ忍び寄つて賀平が。手に持つ松茸も取れて、一途樹もて、ふ。見ぱし、小癪なりとは兵衛を押らす、首尾の兵を擁い擲ち、打くに引きぬれて足を踏む。先が田の畔に宿手で、挙てる手をつい引りと、掉へて

[illegible]、小袖は女の常なれば、髪を厭ひてわれ知らず、あれよと云うて手ばなす密書、[illegible]は
掴んでばつたりと、力餘つて[illegible]。手に持ちながら摺り寄る賛平。(此の
仕組よろしくひやうしまく。)

○[illegible]
[illegible]三太は走りきたり、「宜い所で御用に懸つ
[illegible]
[illegible]
[illegible]とす。」ト二人の噺に三太は聞き咎め、
[illegible]
[illegible]
ひ、「これ三三太殿、只今彼等が申しましたは、此のかつみやに[illegible]
[illegible]張紙の首に火の玉か。」「あいサ、たゞ
[illegible]
[illegible]

だらしき者も見えねば、拙者が事かと存じ申した。イヤ何其の文の主を暫時の間、借用が致したい」「あの見れを」「標草を一緒に付け申す」ト言葉になれば差出しさす、捕へて懐中より、彼の手紙に包みし儘、書を取り出し「与三郎が貴殿より、預つた此の書、どうも急には返されぬ代物、御返し申せと頼まれました」「扨はさうと此の計策が先度の節、主殿様の文箱と掏り替へて近頃失した、近江とやらから参つた密書、貴殿の御手に入りましたか」「されば其の後の小稲めが、其の密書は持つて居るに違へはねえが、どうも迂闊に詮議もならず」ト半分聞いて急立つ三五太、「スリヤ拙者が持参致せし密書は、先生の惚れて御座る小稲めが持つて居る事、今見掛けしこそ幸ひなれ、拙者が往きて一詮議」「これまァ待つた」も聞き入れず、脱兎とつて走り行く。後見送つて貴下が一成程野暮にも困つた者だ、そんなら愈かつみやへ」「總泛に参りますか、して又貴殿は」「ヤアト云にて小稲が所へ」「夫れで讀めた、只ならぬ君の扮装」「二人も一緒に」「先づいらせられませう」ト、ことひよく管絃の太鼓「もう總泛が始まつたさうだ」一軒毎に弾く清掻の喧しく、茶屋より戻る引箱のお花お雪に付いて来る、小稲に顔を捻ぢ上げられ、面をしかめて三五太が、爪立足の横歩み、今は姿もかつみやの抱へにうつす判兵衛が、大提灯を手に提げて「小稲さんもう料傷しておやんなせえな」「此の後の見せしめに、些と懲らしてやりいす」ト莞爾笑うて歩み行く。暖簾の内よりお愁が立ち出

で「小稻さん久しいものよ、ほんにお前に力の有るは、玉に瑕だと世間の評判。」「いえ〱小稻樣のがみんな尤も。」「おもいれ懲らしておやんなんし。」「お慾どんまァ聞いて下さんせ、今此の子樣方に附いてな、茶屋の縁に腰掛けて居たれば、私に詮議が有ると云うて、遠慮も無しに懐中へ、此の手を入れて。」ト捻ぢ上ぐる、手先へ思はず入る力、「あいタヽヽ。」ト伸び上る。顔を眺めて打笑ひ、「巫山戯なんすが惡らしさ。此處までは連れて來たが、もう堪忍する程に、此の後屹度謹愼みなんし。」ト力に任せ投げ付けられ、はふ〱に起き上り、「いやはやトンダ目に合つたが、おもへば是れも安いもんだ。」ト云ふに判兵衞合點往かず、「投げられたが安いものとは。」「ハテ二階へ上れば投げられても矢張一分出さねばならぬ。」ト仇口云うて迯げて行く。年は往かねど郭成人、二人が樣子を夫れと悟り、「小稻さん、今客人から貰うた物を、茶屋へ忘れて來た程に、何卒お前今の内、取つて戻つて下さんせ。」「サアお慾どん一緒に。」ト遣手を外す此の場の氣轉、お慾が袖に兩方から、縋りて内へ入りにけり。

判兵衞小稻は差向ひ、「立つて居ては人の目に立つ、歩行きながら噺さう。」ト人の途絶えに、「コレ小稻毎度も噺した通り、觀音で見た夢はあれが眞の正夢とやらで、親父樣は三年以前、雨雲闇九郎と云ふ者に討たれ、お果てなされし歿月日も違はず、叔父おや人より知らせの書狀、漸うに余が住居を聞き出し、届いたは五日以前、此の頃あの贅平が所へ、近江國から確か密書が來た樣子、どうも余は合點

往かねえ。マアマア夫れでも中に依つて前方は、振つて〳〵振り付けたれど、今宵魂して呼び寄せたも使の[illegible]三[illegible]様子を聞かう許り、其の密書は是れ斯う〳〵と私語けば、[illegible]其の夜兵衛様の手に入つたに違ひはねえか。」「イヤ私は是れから二階へ行て何ぞ證據に成りさうな、事が有るならば人知れず。」ト斷す後へ差出るお慾「小賢しい何を胡乱〳〵して居るのだ。」ト「キャア〳〵」御出で。」ト追遣つて、「判兵衛殿、此方も何をして居るのだ。」「今此處に蛇が居ましたから、打殺さうと思ひまして。」「ハテ馬鹿らしい、こんな處に如何して蛇が居りますものか〳〵、而も此の蛇は若い女が嫌ひで、年老を見ると得て見込むと、云ふ事で御座ります。」ト針箴が取り落せし茶番に遣ふ蛇取り上げ、曲尺掴んで「そりや此處に。」と差出せば、「おや〳〵嫌だよ判兵衛殿、早く取つて捨てゝ下さいな。こんなに見えても内氣者、長蟲は禁物だ。」と、逃げ往くお慾を追ひ掛けて暖簾の内に入りにけり。

○「[illegible]やアとこせえよいやなア、ありやりやこれわいせえ、このなんでもせエ。」唄ト「よし蘭蝶を彈いてお聞かせなんし。」「わつちやア眞の明烏が好きざいますよ。」「エ、まア靜かにしねえナいとゞせえほんまで無闇にさわぎやアがつて、氣逆上がしてならねえ、だんなら中ア取つて胴巻としよう、後生樂な三絃だ。」と、贊平は上胡座、三絃一寸爪彈きに、唄「その聲色や色ゆゑに、身をはふするのいの助が、昔は人にもたせたる、たいこを今の世渡りに、よばれてこゝへきさくらの、廊下のうちより

ここたかく、禿山さんお慾どんが用が有ると、縁ぞんら娼妓で呼ばつしやる、サアはやく御出でなんし。」ト新造禿を追ひやりて、小稻はそつと貫平に寄たれ掛れば、ウタ「ヤアきをつた〳〵、今夜はきついごきつたいでえすの、憎い奴めおやこ」「ほんに憎いは道理で御座んす、前度は些少の間違で振り拔いた此の小稻、能うマア御前は腹も立てずに」「来て呉れたとは忝ねえ、眞に振つたと云へば、此の頃の花見歸りの俄雨、處は地藏の門前で」「コレ、ソレ」「額から落ちた状箱の、中の手紙は貫平が、身に係つた大事の密書、小稻お主が持つて居ようがの」「イヤ、ソコ知らんわいなア」「コレ知らねえとは云はさねえ、是れを見やれ」ト差出す簪「こりや是れ私が」「何と覺えが有らうがの、雨は止んでも村雲に星さへ見えぬ暗紛れ、四ツ手の簾を刎ね上げて、一人は男一人は女密書を奪ひあふ其の時は、我が身に係つた大事とは、知らねど怪しい二人が素振、樣子有らんと雙方を支へ止むる其の塗炭、手に殘つた此の簪、浮名の立つた判兵衛が、紋の付いたが確かな證據、後にて聞けば近江から余が處へ来た書状、人手にあつちやア氣掛りだ、何と返して呉れめえか」「そんならこちの旦那樣の、手に入つたのは怪しい書付。」「どうしたと」「サア呼び遂げる氣に成つた私、お前の夫れ程云はしやんす事知つてさへ居る事なれば、隱さう樣は無けれども、何を云つても知らぬが眞實。」「そんなら夫れは夫れにもして遣らうが、コレ小稻判兵衛と切れて呉れ」「ヱ」「疾うから退く氣で居るわいな。」「餘り味すぎ

「合點が往かねえ、疫病神より嫌がつた此の賛平なア。」「はて疑ひ深い、初めて會うた其の時から、嫌と云ふでは無けれども、行き渡つたお前ゆゑ、苦界する身を立てると思ひ、義理ずくめの氣つきは、結句心の揉める種と、振つて／＼振り拔いたは、何卒お前を實にして、會ひとほしたい私が心。」「矢張若草でやらかすな。」「モシ賛平さん前度お前が近江とやらに、居やさんした其の時に、闇九郎と云ふしやんしたでは御座んせぬか。」「どうしてそれを、イヤ余は大和者、近江國に知人はねえ。」「ハテそれでもお前たつた今、近江國から來た密書と云うて置いてしら〳〵しい。」「此奴は一番黒つた、なる程近江に居た事も有つたが、夫れを聞いて何にする。」「ハテ知れた事さ、年が明いたら何う斯うと思ふ男の國所、聞いて置くのも此の身の落着き、眞に男と云ふ者は、氣強い者。」と寄り添うて、賛平が懐中より取り出したる以前の笄、「賛平さん是りや何で御座んす。」「それかそれは余が笄、氣三郎から返したのだ。」「エ、嬉らしい手拭に包んである。」と廊下へはつと投げ出せば、屏風の陰に身を隠し、様子を窺ふ判兵衛が、手に取り上げて押開き、「こりや口外の納手拭、御葉菊の紋所、夢に違はぬ此の笄。」「さう云ふ聲は判兵衛め。」と、驅け出す賛平、隔つる小稻、「女め待て。」と賛平が、止むる小袖の裾振り拂ひ、「往つて參りイせう。」(かはり)

○かつみ屋の内證茶番狂言稽古の場　「あゝそれぢやア違つた、其處を切つて。」「夫れお花さん、

余が手の密書を受つて。」ト針藏釘七兩人が、お花を相手に下座敷の、廊下なときの稽古舞臺。亭主藻兵衛は息繼に、女房お三諸共に、杯引受け機嫌よく「サァ皆四たて日は極つたに、モウ大概にして置きな、時に釘七さん、是れから淨瑠璃と想つて對面の場だが、困つた事に五郎と虎になる二人が、今夜は據ない用があると云つて、斷りを遣しやした。人々商賣を以て、唯の慰みの茶番なれば無理にとも云はれず、左ればと云つて總浚を、殘らず氣掛りだから、あの判兵衛に五郎の書抜を讀まして、マァあれに五郎の役を授け、又新造の小稻も、禿の時分に踊が好きで、かう云つちやァ可笑しいが、中々の拍子きき、其處であれを虎にして、對面許りも浚つて見やせう。オイ判兵衛や／＼、小稻も居るか。」と呼び立てられ「アイ。」と小稻も判兵衛も、迷惑さうに出で來る。「そんなら先刻言つた通り、判兵衛は五郎、小稻は虎だが承知かい」「サァ些少許り書抜を讀みましたが、どうも私にやァ。」「ハテわるい料簡だ、まだ惠美壽講の晩には約束の衆も來さつしやるが、今夜ちよいと余が工藤の稽古をして見てえが、相手が無くつちやァ張合がねえから頼むのだ。二人が大黒舞の拵へ、お三が舞鶴で淨瑠璃が有るけれど、其處ははしよつて對面の處せへして見れば宜いのだ、絶句が有らうが、きつかけが違はうが其處が素人、殊にやァ總浚の事タ、云ひ損つて蕎麥を買やァ、引初のある縁起に成つて却つて宜いといふもんだ。」「そんなら曲りなりになァ小稻さん。」「夫れぢやと云うて、私にやァ。」「は

てサ、書拔を讀みながら爲るがいい。お花お幸、呉竹をかただだよ。」「此の針藏や留七は、此の幕おやア、梶原兄弟い惡まれものにやア相應だ、なア判兵衛。」「おつと舞臺へ踊る事ア法度さ。」「おさん此方は舞鶴だよ。」「夫婦して是れが眞の。」「狂人と人や思ふらん、夫れから案じ出した狂亂卜藤、余が押出しの處から遣つて見よう、さア囃子の栞たのみやすよ。」〇「實に慾界の仙境と、唐人が云ひしに違はず、琴高が戀、列子が風乘り、心よさ三ツ蒲團、郭の酒の不老不死、老いも若やぐ心地して、はて麗かな景色ぢやなア。」「祐經殿には此の程より、七ツの鐘を打つが相圖。」「胃病に苦しむ世間の取沙汰。」「是れ信神の勞れなれば、其の鬱結を開かん爲。」「此の揚屋に同道して、晝夜を分かぬ酒宴遊興、お供もお堅い殿子は差置き。」「八幡が妹の此の呉竹。」「近江が娘の此の早田。」「能囃子とは事變り、郭遊びの大黒舞、呼び寄せたのも舞鶴が、貴殿のお氣を慰む爲。」「祐經殿、御氣分は如何で御座るか。」「五月下旬は賴朝公、富士の裾野に御狩の催し、其の總奉行を蒙りて、狩場の陣取裾野の塵、工夫を凝し心を勞し、此の程所勞に犯されしが、各方のお心遣ひ、舞鶴が計らひにて、目馴れぬ舞の一奏で、鬱散致してこゝろも壯健、鬢の亂れを搔きあげん、誰ぞ有るか鏡臺もて。」「あい。」ト禿が長返事、櫛笥鏡臺持ち運ぶ。折柄響く七ツの時計「ありやもう七ツ。」ト祐經に心付くる梶原兄弟、何處ともなく千鳥と胡蝶、人も恐れず飛び廻れば、祐經は只茫然と鏡に寫る顏打守り、ハヽヽ、

ハヽヽと高笑ひ、〽笑へば笑ふます鏡、かけ恥かしく立ちよりて、とひせまずこ〳〵、月にもしのべよるのかさ〽ぬしは誰ともしろむくに、とへど答へぬくちなしの、きむく重ねてつかみざし、あれほうらい寺の鐘の聲、海の音やらあらしやら〽くるふ物はなに〳〵、ねずにから猫花に蝶、ちる花が〳〵峯のあらしに狂ふとよ、なうさりとはつらき心や」と、しやうたいもなくふしにけり。「どうでも怪しい其の病氣。」と、立寄る梶原止むる舞鶴、蝶も千鳥も消え失せつ、左衛門佶と居直りて「御騒ぎあるな此の祐經、病氣全快いたして御座る。」「只今まで狂ひし胃病。」「全快いたしてずんど壯健。」「はてなァ。」「イヤア、左衛門様へ一ツのお願ひ、最前舞ひし大黒舞に、逢うてやつては下さんすまいか。」「如何様功有れば必ず賞す。苦しうない此處へと申せ。」ト云ふに舞鶴立ち上り、「あれ祐經さんが、逢うて遣らうと云はしやんす、怖めず憶せず恥ぢらはず、急いで此處へ出やしやんせいなア。」「畏まつて御座ります。」ト虎と五郎の名代に立ち出づる判兵衛小稻、釘七針藏梶原にて、「舞鶴が呼び出した、二人の奴等は大黒舞が、地色でもあるかして送つて出やる肌薄な、貧窮舞が相應だらう。」ト態ト小稻に當てこすり、祐經をきつと見遣り、「一に一老別當が、にぎりつめたる三ケの莊、四ツ、世になき父の仇、五體も碎くる無念の年月。」「六ツ、無理では無けれども。」「七ツ、何にも云はしやんすな。」ト止むる虎を撞き退けて、「八ツ、矢鱈に高上り、九ツ、小腕と悔るな、驕る奴等の首をば、此の大黒の

道ではる、お望みならば拳骨一杯食らはすべいか。」ト立ち寄る五郎を宥むる鎌倉、祐經熟打見遣り、「はて能く似たな。」「祐經様。」「似たとは誰に。」「似ましたか。」「我が一類なる祐時に。」「似たも道理先いつ頃、箱根を下山なさんした。」「扨は河津が」「倅で御座る。」「兄の一萬成長した。」「曾我の十郎祐成さんに、繋がる縁の私は虎。」「弟箱王丸となつて。」「曾我の五郎時宗。」「時宗。」「祐經殿。」「はて珍らしい。」「對面おやれや。」「親の敵祐經觀念。」「心得ぬ汝が一言、敵と云はるゝ覺えはないぞ。」「よし又お覺えあるにもせよ。」「お傍には近江が控。」「八幡が妹が附添ひあればこそ。」「とつこい。」「そつこい。」「やりやァせぬわいなア。」權頭兄弟言葉を揃へ、「見る蔭もねえ曾我殿ばら。」「此の果報者。」「果高も匠の事に四十兩。」「何時やら棒に振らうとした。」「何うして余が首が立つ物か、ハハヽヽ。」と嘲笑ふ。「狂言かと思つて居ればこそ。」「此の判兵衛の當擦り、奴を。」ト飛出す袂に縋り、「こりや子も知つた親の敵、包み隠すは、そりや御未練で御座んせう。」「能い折柄と當擦り、此の時宗が怖いのか。」ト二人を尻目に掛くる判兵衛、藤兵衛はさあらぬ風情にて、「頼朝公の命を蒙り、役目濟まざる其の内は、身で身にあらねば包みしが、未練と云ふに捨て置き難く名乘り聞かする能つく聞け、如何にも河津の祐康を、打取つたるは祐經ぢやわい。」「扨こそなア。」「適な左衛門様、敵とお名乘りなさんす上は。」「サア立ち上つて勝負々々。」「いゝや富士の御狩の濟まざる中、祐經が身に過ちあれば、

曾我一家の身の上おやぞ、義理ある養父に不孝となれば、此の場で敵は打たれぬか。エ、こじれつてえ。」「敵は敵、一家は一家、初春の杯せん、呉竹かたく酌致せ。」「畏まつて御座りまする。」「五郎やい。」「何だ。」「杯くれうずつと参れ。」「頂きますべイ〳〵、今日は如何なる吉日にて、逢ひてえ見てえと神佛を、日頃請願んだ甲斐あつて、出會せたる優曇華の、花の郭の今日の對面、杯頂戴致して御座る。」「はて勇ましき其の成長、親を討たれて悔しいか。」「さん候。」ト判兵衛が我が身の上に引較べ、思はず涙はら〳〵、「口惜しいか。」「さん候。」「これ一體己は短氣者、仇を討たうと思ふものが、そんなこつちやアなか〳〵いかねえ、何程無念しい事が有つても、其處をじつと耐忍して、なア小稻、イヤサ聞き及んだ虎御前へ、此の場の引出。」と短刀を差出せば取り上げて、「是れこそはあかぎの短刀。」「時宗に付添ひて、時節を待つて勝負を遂げやれ。」「此の判兵衛が、イヤ此の時宗が、身の上をどうして貴殿が。」「イヤ何にも知らぬ此の祐經、見事討つか。」「何でもねえ事、今に仇の生ツ首を。」トふつと氣の付く傍の兄弟、二階の欄干に顏差出し、小稻に見とるゝ賛平が、顏あり〳〵と寫るに目を附け、「夢に符合の先刻の、狂言ながら親人の仇に出合ふ折も折、時も時とて鏡の中に寫りしかほは藻屑の賛平、是れも矢張死なしやつた兄者人の引合はせ、どうでも怪しい彼等が素性。」ト稿と睨めば針藏釘七、「これ〳〵判兵衛、そんな文句は無え筈だ。」ト云ふをおさんが紛らして、「左衛

門樣の今のお言葉、必ず惡う聞かしやんすなと此の場は此の儘」ト、是れ寶の山に入りながら」ト
一階に心を碎く六判兵衛「イヤ手を空しくは返すまい。斯く言ふ今日の其の内にも、暫時も忘れぬ狩
場の陣取、工夫なしたる裾野の地理、能つく覺えて兄祐成へ土産にせよ」ト立ち上り、寝間の屏風を
披かすれば、夜具堆く飾り立て、數多の枕を並べたり。「見よや時宗忍び〱に鎌倉武士、通ふ由縁の
傾城が、枕に附けし紋所は、取りも直さず狩屋の幕張、錦の夜具は富士峯。」「鹿子斑の蒲團は裾野に
「此處に移して三ツ鱗、三本傘、笹折竹、」「釘抜松皮木村が」「一文字は岩永一統。」「又がひは鷹の
羽。」「おほすながしは安田の三郎。」「左巴は小山の判官、鎌鍵は淡の左衛門。」「山の内の一統は、
大一大萬大吉と」「白一文字、黒一文字。」「中に目的は俺に木爪。」「乾に離れし陣屋は祐經。」「夜具
に夜具の響きあり、枕に眞暗い通ひあり、戀ならねば兄弟が、忍びくる夜は五月暗、目當外さず討て
や時宗。」ト「立石に立つ矢の射垜の枕、眞ッ此の如く。」と飛掛り、彼の木爪の紋付きし、枕を判兵衛打
碎けば、内より出づる切手と書付、小稲手ばやく取り上げて、小「是れは私が年期證文。」と「イヤ夫れ
は狩場の繪圖。」と「ここのや大門の通り切手。」と「はて夫れも狩場の切手。」小「何から何まで親方さ
ん。」判「藤兵衛樣ではない祐經殿。」と「二人も無事で合點が行かぬ。」と、針藏釘七駈け寄るを、と一寸
と押へ、と「狩場で逢はうの處をや、」と「夫れ是れでチョ、だよ。」と「さらばだ。」ト〔宜しく拍子幕〕

つ)「是りやお前方は、此の小稻を如何しようと思はんす。」「如何と云つたら是れから直に、貫平様へ連れて行くのだ。」「す、サ、曾我狂言の稽古に、外へ證文まで持つた様子。」「障子の陰から氣三郎がとつくりと見て置いた。」「判兵衛奴を欺くらかして、此處へ導いて來たからは、否でも應でも二人が顏を。」「立てて上げたら宜からうが、否で御座んす、成程云はしやんす通り、親方さんのお情で、證文を貰ふからは世間晴れて、今宵ァイ判兵衛が女房で御座んす、餘り無體を云はしやんしたら、主も見ては居さんすまい。」と思はず腰の短刀の、柄に手を掛け詰め寄すれば、釘七はぎよつとして、「マア汝や脇差を差して居るな。たゞさへ力の強い上に、刃物が有つちやアナア氣三公、滅多に手出しは成らねえわえ。」ト云へばクツ／＼吹き出し、「もし／＼、そりや確か先刻狂言に遣つたあかぎの短刀を、うつかり差して來たので御座りませう。箸置か鯨身か、張籠の首で無けりやア切れねえ。ア、さう臆病神に付たれちやア、判兵衛奴を打つちめる眞道の役にやア。」「エ、そんなら主をも。」「余等が仲間が待ち伏せして、今夜ばらして仕舞ふのだ。」トきいて小稻は仰天なし、「こりや斯様しては居られぬ。」ト驅け出す襟髪取つて引据ゑ、「どつこい左様は成らねえわ、日頃近江の遣へをして、お心安い余が顔へだ、貫平様御元へ參ると、一筆なゞ、ればよし、否だと云へばたつた今、命の切れ文急用事、返事が汝が生死の界だ、キリ／＼ぬかして仕舞やアがれ。」ト泥臑踏ん掛け動かせず。釘七キヨロ／＼見廻し

て、「オヽノ」小稻が差して居る、短刀に氣を取られ、余が此の脇差を、さつぱりと忘れて居た。是れが有れば大丈夫、サア是れでも否か。」と脅しの白刃、小稻が目先へ突き付くる。小稻ハツと起き直り、外に支ふる手段もなく、腰の木太刀を抜き持つて、一打二打打ち合ひしが、釘七が脇差を、中よりホッキと切り折つて、肩先深く切り込まれ、アッと許りに倒れ伏す。小稻は短刀打落し、月影にとつくと見、「木太刀と許り思ひしに、氷の如き此の短刀、天の與へ。」と驅け出す。身輕に出立ちて氣三郎、「ドッコイ遣らぬ。」ト立ち塞がる。「毒食はば皿とやら、夫に刃向ふ惡者奴ら覺悟しやれ。」ト身構へたり。「小癪な女め觀念しろ。」と、人も靜まる丑三過ぎ、風が傳ふる三味線の、音色に交る紙砧、組んづ解れつ揉み合ひしが、小稻が運や強かりけん、氣三郎を組み敷きて、膝押掛くれば、「人殺し。」と、呼ばはる口に袖押宛て、「南無阿彌陀佛。」と突込む止め、宙を摑んで苦しむ中に、小稻が片袖喰ひ裂くを、夫れとも知らず月影に、落ちたる印籠拾ひ上げ、松に日の出の時代蒔繪、「覺えある此の印籠、若しや尋ぬる私が兒さん、エヽ。」ト仰天はつたり後方に倒るゝ向うより、提灯提げ出で來る多門、見付けられじと手拭に顏を隱して行きちがふ。多門が躓く二人の死骸、合點行かずと透し見る。提灯目的に打つたる礫、月も陰れて眞の闇、「ヤレ人殺し。」と喚はる大勢、俄に金棒早拍子木、夢路を辿る心地して漸う其の場を立去りけり。南無阿彌陀々々々々々百萬遍の廻向もはて、「サアお茶一ッ。」ト饗す

判兵衛、西念が差出でて、「大屋さん見ますれば、爰の内には佛壇も無し、澤瀨氏と書いた手拭に香花が手向けて御座るが、何うも合點が行きませぬ。」ト問はれて大屋が仔細らしく、「あれは判兵衛殿の兄貴ぢやげに御座るが若死をさしつたとやら、今日の百萬遍も其の菩提の爲で御座らう。」「大屋樣の仰しやる通り、兄ぢや人兄嫁も皆世を早く致されましたが、存生の時初瀨寺の觀音へ納められた此の手拭、位牌と思うて御廻向を御賴み申すも未來の爲。」「夫れで樣子が知れました。ア、陰德あれば陽報あり。」「煎德あれば茶焙あり。」「洒落處では御座らぬて、一體判兵衛殿は正直者と世間の噂、夫れぢやによつて善い事許り吹き附けて、まだ永年の小稻殿、夫れ年期證文と投り出して呉るゝ親方が、芝居ではあるまいし何うして今時ある可きか、是れ皆陰德の餘慶なり。」「南無阿彌陀。」「ア、是れ愚僧が馴染の長屋の女め、小稻殿に似つて大黑殿と勸請なし、世間晴れずの夫婦とならば極樂世界の樂しみも、何此の上の有るべきや。報恩謝德南無阿彌陀。」「おきやァがれ。イヤ滿全と日も暮れました、ドレお暇致しませう。」「若し〳〵一杯上げようと存じまして小稻を今表の伊勢屋へ。」「否々御馳走なら重ねてに致しませう、大屋さん御一緒に。」ト皆々打連れ立ち出づる。小稻はチロリ肴の岡持兩手に提げて立返り、夫れと見るより會釋して、「大屋樣も皆樣も何故マァお返り成されまする。何は無くとも熱燗で。」ト云はれて西念怨めしげに、皿の中を眺めやり、「黄肌の鮪江戸前の、鮹と知つたら返るま

いゝ精進酒と侮つて、不覺を取りし口惜しさヅッ。」「何程愚癡を云はしつても、モウ此處まで出掛けては、取つて返す事もなるまい。」「ヱ、千兩の寶の大和屋へ往つて恥を曝しくかへる樣に。」「何をいはつしやる、サア〳〵行かう。」ト大勢ガヤ〳〵云うて入りにけり。判兵衞小稻を見るより、「何ぞして居やァがる、手前があんまり遲いから皆モウ返らしつた。」「夫れぢやと云うて長屋の衆と、顏見合はせ知らぬ振でも居られぬ故。」「默りやァがれ廊下鳶を見習つて、長屋鳥に成つたさうで、夜が明けるとガァ〳〵云つて歩きたがる。一杯つぎや。」ト茶椀で飲干し、「サア手前も是れで氣を付けろ。」ト差出すを、手に取り上げて、「若し、人は老少不定とやら、いつ別れうも知れぬが浮世。」「大分むづかしいことを云ひだしたな。おれが反り討にでも逢つたなら、牛を馬に乗り替へる。」「夫れさう云ふお前の水臭い心では、私が死んだら又外に、能い女房でも持たしやんせ。」ト噺す表へ來かゝる多門、門口より差覗き、「これは水入らずで、お樂しみで御座ります。」ト内に入れば、「イヤ宜い所へお歸りなされた。小稻其の杯を。」「お構ひ成さるな。酒は百藥の長と、口では唄へどかなづち下戸。」「夫れぢやと云うて一ッ位は。」「ア、若し溢れます。」ト云ひつゝ多門は、傍の屏風に掛けたる袢纏に、屹と目を附け、「若し無躾ながら、あの袢纏は片袖切れて居りますが、如何なされたので御座ります。」ト問はれて、胸に答ふる小稻、判兵衞は氣も附かず、「御存じの通りかつゐやの旦那の情で、此奴を連れ

て戻る晩に、寒いと云つて袢纏はなァ小稻。」「あい私が借りて歸り掛、泥んだ犬めが側に居つて、喰ひ裂いたので御座ります。」「どうでもこれや一詮議。」ト多門がきつと居直れば「エ、。」と許りに驚く小稻、樣子知らねば判兵衛が「大きに詮議者さ、犬も／＼然も唐犬に、額をぐつと極めこんだ、小意氣な野郎とトッ狂つて引裂かれたのに、逆へはねえのサ。エ、いめえましい。」ト茶椀で四五杯、醉ひが廻つて犬なりに、轉りとこける骨枕。多門も笑ひに紛らして「ハ、、、、變な事を申しだしタ、併し思ふ中なら苦説も樂しみ、左樣ならお預け申した私が鍵を。」「まァお噺しなされまし。」ト云ひつつ鍵を差出せば、「小稻樣では無いお內儀樣。」「おれ又あんたの。」「後程お目に掛りませう。」ト我が家の鍵前押明けて、戸を引き明けて入りにけり。「判兵衛殿モウ一ッ飲ましやんせ、エ、。」と搖り起しても高鼾、小稻は暫し淚にくれ「私やア兄さんとはつゆ知らず、あの氣三郎を殺したを云譯に、自害して死にますわ。今飲んだのは別れの杯、エ、未練な事を云はうより、さうぢや。」とあたり見廻して、「男孀と云ふものは、硯箱も紙もなし、ほんに去年見た草雙紙に、淸七が書置を、八間へ書いた事があつたが、ア、是れ何ぞ宜い、ヲ、それ／＼。」ト大工道具の箱よりも、墨壺を取り出し、筆の代りに墨差にて、傍の屛風引きよせて、かきのこす心づくしの筆のあや、しんきしんくにさゝがにの、絲ひきいだすつぼすみれ。多門は密と立ち出でて、表に樣子を窺ふとも、知らぬ小稻がひとりごと「御

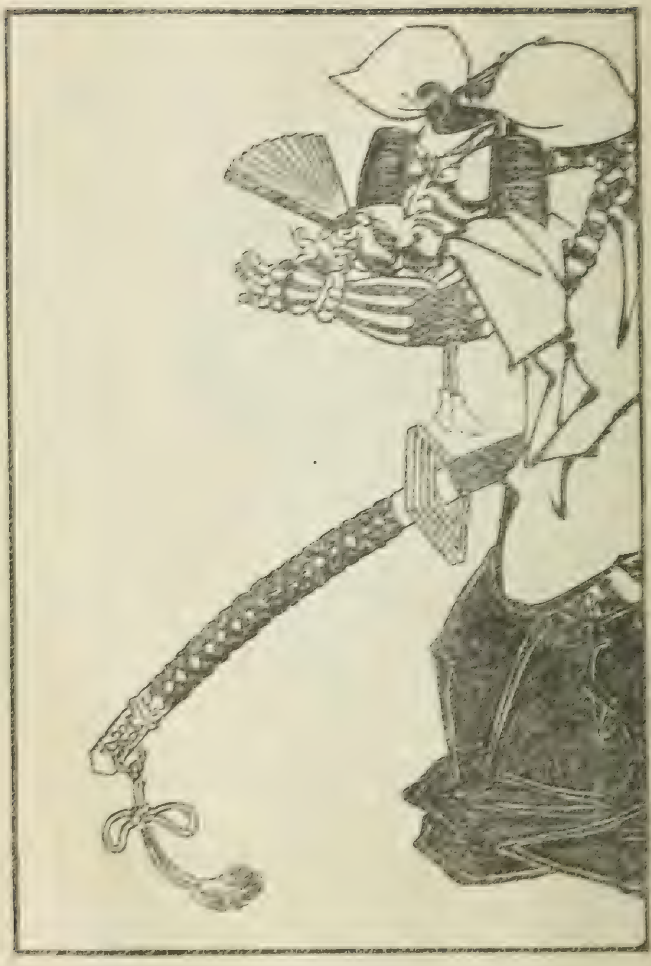
恩を受けた旦那さんに、碌々お禮も云はぬのが、未來の迷ひで御座んす。」ト袖口しぼり忍び泣き、はすみの袖におぼほれて、つゆにぬれたるあれあの花、見ればないてわかれし人ぞ戀しき。」書置も書き果てて、「南無阿彌陀佛。」ト短刀を拔き放す。小稻が手をを門しつかと押止め、「疑ひもなき菊一文字、寶の盜賊親の仇、判兵衞め觀念しろ。」ト云はれてふつと目醒す判兵衞、透もあらせず切込むを門、様子知らねど落ちたる短刀、取り上げて切り結ぶ、「待つた〳〵。」ト門口より、跳り込んだるかつみや藻兵衞、傍の屏風を切り結ぶ、白刃の上に投掛けて、我が身をしがに止むる時しも、表のかたに潜々と、此の家を窺ふ取手の大勢、小稻ははつと門の戸立て切り、胸を冷して居たりけり。藻兵衞は屏風に目を附けて、「何書置の事。」ト讀むに判兵衞心付き、「兄とも知らず氣三郎を殺し、其の言譯に自害して相果てたな。」「そんなら其の夜の人殺しは。」「アイ、此の小稻で御座んする。」「エヽ、何だかかうこゞらかつては、どつから様子を聞かうかと、氣がてん〳〵します。不肖ながらかつみやの藻兵衞だ。お三人とも、お顔の汚れる様にやアしません。まア御武士樣あなた此の判兵衞を、親の仇と仰しやりまする、夫れから先へ聞きませう。」「某は音川の家來、村萩與五右衞門と云ふものの倅、先年主君の重寶、菊一文字の短刀を、仔細あつて近江國、望月判官殿へおくらるゝ折、父横右衞門其の使に趣く途中、何者とも知れず、我が父を殺害なし、菊一文字の短刀紛失、斯く浪々の身となりしも、父の仇

を打たん爲、此の頃郭にて人をあやめて立退く曲者、我其の場へ行き合はせ、能く〱見れば死骸の口に殘りしは、判兵衛が此の片袖、傍に落ちしは紛失せし、菊一文字の折紙なり。猶も心を付くる折柄、小稻が拔持つ其の短刀、菊一文字に疑ひなし。サア判兵衛親の仇と名乘つてしまへ。」「若し〱夫れで樣子が知れました。親御樣の仇短刀の盜賊も、矢張氣三郎で御座ります。かう許りでは御合點がまゐりますめえ。其の菊一文字を氣三郎が、盜んだ處が致方が無さに、質平に賣つた樣子、觀音の茶店で、お三が委しく聞いての噺。判兵衛殿も短刀を、尋ねさつしやることを知つて、質平が脇差を預つたを幸ひに、ばんとうがたぎをやらかして、摺り替へたのは此の藻兵衛。狂言にこと寄せて、小稻に遣つたも思案があつて。」「スリヤ判兵衛も短刀を。」「尋ぬる拙者が本名は、望月の家來澤瀨小二郎。」「そんなら兼て噂に聞いた鄕太夫殿の御子息か。」ト驚く多門小稻はさし寄り、「是れ覺えて御座んすか。」と取出す印籠、「松に日の出の高蒔繪、幼き時に別れたる、妹に廻り逢ふ印と、二つに分けて持つたるを、四重揃へにどうして貴殿が。」「若しお前の妹は私で御座んす。」「兄を殺した此の書置も。」「氣三郎が懷中から、此の印籠が落ちた故。」「此の多門が觀音で落したを、此奴めが拾ひ持つて居たのが證據となつて、貴殿の覺悟。」「兄さん。」「妹。」「危い事で。」「あつたなア。」ト嬉し淚にくれにけり。「スリヤ氣三郎は、小稻が爲に親の仇。」「是れがほんの勿怪の幸ひ。イヤ判兵衛樣折が無ければ申

ませんか、其の義兵衞は貴殿の親御、郷太夫樣の僕逸平めで御座りますと、續きし者と聞き、訪ね尋ねた逸平とやら、日外ァノあの手拭に、御對ひなされた獨言に、御身の上を仰しやつたを、是れもまア立聞きましての、扠は左樣かと夫婦の驚き、及ばずながら御世話致さう、親旦那への御恩報じ、日外工藤の文句にふぞへ、我への意見は身の上を、知つた樣子と思ひしが、扠は由緒の者であつたか。」「其の時ァ、貴方はノーと云ひながら、貴殿の御顏を見ました時は、親旦那郷太夫樣の事を思ひ出して、ほんに涙が下れました。」「ア、目出度く御見立て申さうと思ひ乍ら、又うつかり泣きました。」「何目出度く見立てるとは。」「仇打に。」「何と。」「郷太夫樣を討ち取つたは、間違ひもない藻屑の貫平。」「さうだ。」ト驅け出す判兵衞が袖に縋つて、「其の御短氣が氣遣ひさ、疑うからたれと知りながら、差控へて居りました。」「マア樣子をお聞きなされまし。地藏堂の門前で、手に入つた此の密書、貴殿の手に掛けられし、郷太夫の倅小三郎と申すもの、其の御地にある由、必ず油斷あるべからず、宛名は藻屑の貫平殿、此の一通が確かな證據、今宵も變らず貫平は、大磯に居る事を、とつくりと見て置きました。」「彼奴が歸りは。」「明け六ツ頃、何時も變らぬ田圃道。」「私も一緒。」ト付添ふ小稻、二人彼處に待ち合はせ、「本望達せし其の上に、歸參の願ひは多門が受合ひ。」「人殺しの女め取つたト、はせ來る組子が思はずも、足に蹴返す道具箱、鉋、金槌錐、鋸、手當り次第に郎庫の目潰し、

漸う其の間に脇差とり出し「落ちゆく兩人逃さじ。」と、追ひ行く組子の襟髪を、引戻したる多門と藻兵衛。「こゝ構はずと。」「御座りまし。」(幕)

○貫平に立ち掛る判兵衛小稻を、針藏・三太夥多の惡者立ち掛り、押隔てたる田圃道。「如何に貫平、以前の名は闇九郎、我こそ汝に討たれたる、鄉太夫が倅小三郎、證據は則ち此の手紙、何と覺えがあらうがな。」「すりや、かうなる上は名乘つて聞かせる。竹刀で負けた意趣ばらし、鄉太夫の老耄は、此の貫平が殺して仕舞つた。」「扨こそなァ。」「私が爲にも外父の仇。」「サァ尋常に勝負々々。」「面倒な疊んで仕舞へ。」ト惡者大勢入り替り、此處を先途と切り結ぶ。素よりてだれの判兵衛小稻、惡者殘らず切伏せて、貫平と渡り合ひ、袈裟にずつぱり切り下げて、返す刀を貫平が肋へ、ぐつと突込んだり。斯かる折柄走せ來る多門。「判兵衛殿御手柄々々々。仇を首尾能く討ちおほせ、寶の短刀戻りし上は、貴殿も拙者も本國へ、召し返されんの御墨付、只今國より到來致した。」「そんならこちの判兵衛殿も。」「元の武士に立ち返り。」「再び花咲く後日の繪雙紙。」(まづ當年はこれぎり。)



當年積雪白雙紙　顔見世物語

編者　柳亭種彦

「ヱ、へんなこの、此の赤松入道假名書が、懐中へ手をさつ掛けて、これやアどうする何とするの
だ」ト山住八郎雲高が、行く先を止めたには、先刻神事の今様を、勤めたるわいらはしあだなニツいかに
も此の松尾の社に於て、今日の神事を催に、鳥帽と身を變換せしは、大屋の太郎光國が弟小三郎光
遠といつして又鹿島踊の女めは、蒲仲公の奥方萩の臺様の侍女、白綾小三郎様と諸共に、今日の役目を
勤めしも、悪人原を見出さん爲ぞ。而て又一人何故あつて我々を止めたのだ。二一お隠匿ある唯今
雲高様が入道殿へ、御渡しありしは先いつ頃、紛失爲したる勘合の印。コレサア尋常に渡すまいか、小癪
な奴め等そこ退いた」ト、四人様々入り亂れ、渡さじ、取らんト、爭うたりし八郎苛つて打込む刀に
傍に有合ふ鳥籠にて、小三郎はつしと請け止むれば、籠はふたツに切り割れて、内より出づる一羽の白

鳩、赤本入道假名書が、取り落したる勘合の、印を忽ち引ッ咥へ、雲居遙かに飛び上る。「南無三寶。」と驚く人々。鳥の行方を目當にて、神樂の音に打紛れ、心々に追ひ行きけり。「田原の千春參詣。」ト呼ばはる聲と諸共に、はつたり音して廻廊より、突出したる白刃の光、程無く廻廊切り破り、錦の袋に納めたる、寶劍口に引ッ咥へ、現はれ出でし獨りの曲者、四方を窺ひ寶劍を、とつくと詠め莞爾と打笑み、「源家武運を禱りの爲、神前に飾りしは、擬ふ方なき膝丸の寶劍、忝いことと押戴き、手に携へて悠々と立去らんとする向うより、又「參詣。」ト呼はつて、白羽の鏑矢三寶に、恭しく携へ持ち、彼の曲者の行く先へ立隔たりし田原の千春、「おり／＼。」と押戻し、「此の松尾の御社へ武運祈りの其の爲に、參詣なさんと爲す折柄、忍扮裝の怪しき男。「ヤア、尋常に名を名乘れ。」ト止むる千春、曲者は耳にも掛けず行かんとす。刀の鐺を確と捉へ、背後の方へ引き戻せば、「入らざる仲裁立て其處放せ。」と、其の手を拂ッて兩人が、爭論ふ折柄八郎雲高、鳥の行方を見失ひ、迂路々々戻つて曲者の、顏打詠めて仰天なし、「貴殿は坂戸の九郎殿。」「ヤヽ。」と止めて寶劍を八郎が前に投げ遣り、「夫れを疾く。」ト眼交の知らせ、「心得たり。」と取り揚ぐる。又白綾が驅け戻り、「八郎やらぬ。」ト止むるを、「エ、面倒な。」ト頓智の當身、恐怖ぐ間に八郎は、逸散にこそは走り行く。「平穩事ならじ。」ト、入道赤本たち戻ッて、八郎が背後を慕ひて往かんとす。仔細こそあらめと田原の千春、手を差伸ばして入道が襟上採ッて引据

うろ。其の間に白縫心附き帶引締めて八郎か、行方を慕ひ追ひ行きけり。

の大事「それたう／＼として淀みなく、水かさまさる大井川、たかのりすてし筏木に、ゆりくるもみぢかきよせて、嵐かたゝやあらしやま、月まだいでぬとけつけう、しん／＼としてものすごし」筏の上には八郎實高、白縫も、氣を取り失ひ、茫然として居たりしが、八郎ふつと心附き「女めを追ひ驅けて寶劍を奪ひ合ふ機會、思はず足を踏み外し、南無三川へ眞ッ逆樣、と夫れから後は夢心地、ア、命冥加な筏の上、確か彼奴めも此の邊」ト炭火のかげに透し見て「ヤ、女めも是れ此處に氣絶して居るこそ僥倖、此の間に夫れよと白縫が持つたる寶劍取らんとす。白縫も正氣附き「是れこそは源家の重寶、膝丸に疑ひ無し。己等風情に渡さうか。」「小言云はずに渡して仕舞へ。」「イヤ、假令此の身は死するとも頼光樣へ手渡しする」「小癪な女め放せ」ト轉んで起きつ爭ひけり。折柄吹き來る小夜風に散り來る紅葉は、紅の、肌着も明白に白縫が、一世の瀬戸と挑み合ひ、遂に寶劍奪ひ取ッて、逆卷く水にぞ飛び入りける。續いて入らんと八郎實高、水面屹と見渡せば、紅葉の錦引替へて、浮み出でたる血汐の紅、はッと驚く水中より、白縫が首筏木の上に、がつしと打上つたり。折柄矢一ッ飛び來り、右の肩先篦深に射られ、尻居にどうと倒る、八郎、水を潛つて一人の曲者、寶劍口に引ッ啣へ、浮み出でたる途端の拍子、筏の小家を押明けて、賤の男が弓携へ、窺ひ出づれば松尾の、

夜の神樂も遠音に聞え、猶一頻り吹く風に、汀の柳さつと散り、田舍娘の媚能きが、木影をひらりと飛んで出で、柳の落葉諸共に、水に浮んで行くともなく、歩行むともなくする／＼と、是れも筏に乘り後る。水より出でし曲者は、邊に人のありとも知らず、矢疵に弱る八郎を、只一刀に切つて捨て、死骸は川へざんぶと蹴落し、濡れたる裳裾の水打絞り、消え殘りたる篝火に、透し眺めて寶劍を、握り詰めたる白綾が、手を捥ぎ取らんと力量にまかせ、しごけば一念凝り固まり、放しもやらねば漸く袋を拔き取ッて、傍に打棄てつ、寶劍、腰にわきばさむ。賤の男子は歩行み寄り、件の劍の嚢を取り上げ、つら／＼見れば白綾が、手は宛然に活けるが如く、指を披いて落ちたりける。折柄紅葉の木の間より、白鳩一羽羽敲きして、口に啣へし錦の嚢、はたとおとせば賤男が、取らんとするを傍より、娘は手疾く拾ひ上げ、帶の間へ押隱す。此の時焚火は消え失せて、互に闇を探り合ひ、物をも言はず挑みしが、又も吹き來る川風に、再び篝は燃え上り、三人顔を見合はせつ、賤の男子が止むる手先、娘は振の袖にて拂ひ柳の落葉諸共に、又水面を走り行き、忽ち姿は消え失せけり。怪しと見遣る二人の男子、又も篝火消え失せて、更にあやめの知れざれば、不覺を取らじと雙方へ、立ち分れてぞ猶豫ひける。(此の仕組よろしくひやうし幕)

○雜兵の詞　「此のたび近江國高島に、兇賊籠り押入強盜、民家を惱まし穩かならずと、日夜の注

莚に一折、御頼光公には、四天王を召し連れられ、肥前へ在國に下り玉ひし御留守なれば、則ち御舍弟頼信公、逆賊討手の敕命下り、近日出陣あるべしと、戰爭の用意區々なるに、心得ぬなども、此の所へは何しに來たのだ。」「ア、けうと、わたしらは江口の郭の傾城、このうちの太夫さん小蝶さんと、お前方の殿さん頼信公とは深い中、此の陣中とやらの徒然を、なぐさむため日外から、小蝶さんは爰へ來て居さんすから、跡追うて來たのおやわいな。」三「兵藤殿御聞きやつたか。敵の間者と思ひの外、江口の郭の遊女とあらば、此の儘御前へ通しても、失策にもなりますまい。」ヤイ女共、汝等が名は何と言ふ。」二「ア、怖、御前方は何ぞと言ふと白眼まれすが、此方の内の遣手衆に、どうやら顔も似た樣な、杉とか玉とか言はしやんせう。」ア名を言うて」「御聞かせなんし。」「いかさま人の名を聞く時は、必ず己が名を名乘るとやら、己も言つて聞かせるから、我達が名も言ふのだぞ、傳て言にも聞きつらん、頼信公の執權職、政戸の九郎が御内にて、磯黑兵藤宗高。」「太夫さんの御内とやらで禿の綠と言ひやんす。」「てれん僞り投島田、金山と言ふお轉婆者。」「殿御に實が有るならば、虎臥す野邊も添ふ心、名も中華と言ひやんす。」「岩門軍次成景。」「是れより我々警固して。」「御前とやらへ。」「往こかいな。」「急いでたせう。」「おいイ引」。〔三〕士卒を調練の陣鉦太鼓、淸攝く絃の音色に紛れ、皆皆打連れ入りにけり。

○西村屋見世の者口上「先づ以ちまして當店、御愛顧と御座りまして、賣出し早々賑々しく御購求め下さりまする段、版元與八は申し上げまするに及びません、都て繪雙紙に打掛りまする者共、心魂に徹しまして有り難い仕合に存じ奉ります。扨當年は顏見世狂言の趣に、書き綴らせましてはござりますれど、初編にも御斷り申しました通り。眞實の狂言とは、殊の外違ひました所も御座りませう。高が繪雙紙ぢやと御免し下さりまするやう、偏に願ひ奉ります。此の所は淨瑠璃の趣にござりますれば、則ち下題を御目に觸れます。「淨瑠璃名題、「菱川が昔振」」「歌川がいま樣」」「一寫浮世畫姿」」「一彌淨瑠璃始まり、左樣に御讀み下さりませう。」紙數僅かなれば、淨瑠璃の文章は、只其の要を摘むのみなり。

上るり「ひきう高き所せいうんに入り、仙樂風にひるがへつてしよ〳〵にまがふと、からもやまとも戀といふ、もじはかはらぬ訓と音、てきをあざむく謀計も、手くだといへばやはいかに、木々はにしきの返咲き、ときはといへどどこやらが、松は木ぶりもきつとして、しがらむ藤のむらさきは、色の司の太夫やう、ものいふ花のだて競べ。（三人せり出し）「ぐんのよに聞せぬよめのぶきやう、いで物みせんとはうちやうの、しのぎを削るまな板も、折をふほしのうをといふ、敵にかつをのかうわびと、すぎたつ門へまつがはく、てふを小てふがてにさげて、おろしあはみや八文字、供の奴のしば平が、よ

しや羽織のぬひもやう、あげやにあらぬ陣屋の軒、しばしはこゝに佇あり。「頼信衣紋かき合はせ、「たれ君子は楽しんで淫せずと、唐土人の教へに慣ひ、軍務の労を晴らさんと、遙々と太夫を呼び寄せ、思ひ付いた阿彌陀の光、此の頼信は料理役。」「此の柴本は阿彌陀に當り、今日一日はお旦那代り。」「コリャ冷泉院の判官代の料理人、もう刺身は出來ましたか。」「イヤ最う佐々木と言ふ者は、吾等とは違うて、遣はるゝ物では無い。夫れはさうと胡蝶太夫、そなたは早う酒買ひに往きやらぬかいのと言はれて莞爾うち笑ひ、「あの殿さんの無理ばつかり、私にどうして是れがまア。」「はて鬮に當ッたら、否應は言はさぬ」ト、立ち寄るを押止め、「最う／＼阿彌陀の光は是れ限り／＼。此の柴本もついぞ着附けもせぬ羽織で、びつしより汗になりました。イヤ申しお旦那頼信様、江口から遙々と、胡蝶殿を呼び寄せ、此の陣中は揚屋同然、御出陣延引を、御母公萩の臺様も、殊の外御案じ。」「さいなア私も殿さんの、御側に居るは嬉しけれど、ひよつとお爲にならぬ事があらうかと。」「ハテ又野暮を言ひ居る。そなたを爰へ呼び寄せたは、戦争の仕やうを習はう爲。」「そんなら此の胡蝶どのは。」「イヤ最う孔明も跣足々々。此の頃胡蝶に習うて置いた、陣取り城責め。」「士卒の進退。」「さらば語ッて聞かさうか。」

浄瑠璃「まづつきだしのうひ陣に、小ざくらをどしのぬひもやう、二りやうかさねてうちかけを、ざつくときなしこまげたの、しゆんそくふみしめしづ／＼と、あげやのもとへはつかうす。てきもきかゆ

るだいじんなれば、さかづきにして盛りつぶさせと、こきうのゆみにとうこの矢、こしびやうぶのそでの楯、さんなといたばすむのとこたへ、同士うちすなと下はざをさだめ、めれんになさんと待ちかけたり。こゝでふはこれを事ともせず、たゞあたまからひつたりと、なつんだいに見せかけて、ゆびきりかゐきりきんをゐだし、たいこまつしやにいたるまで、花を散らしてたいまいの、しりぎをけつてたゝかうたり。きたりやおうとそらなきの、なみだの水の水ざめに、大じんたちまちらくじやうして、あみ笊一ツうちかつぎ、おちうどとこそなつたりけれ。「何と柴平傾城と言ふ者は、いかう戦争が上手な者ぢやの、たれぢやによつて、雑兵葉武者に至るまで、傾城を買はぬ者は、此の陣中には適はぬぞ。」汝ら随分心掛けい。」「是れは又迷惑な此の奴目は、遂ぞ女郎と言ふ者は。」「買つた事がなければ、軍の供には適はぬ〳〵。」「ハ、采配々々。我は阿彌陀に當ッて、今日一日は大義ぢや、此の将棊を斯う捨てな、揚屋通ひの丹前姿、又酒買ひに往かぬ代り、供の奴は胡蝶太夫。」サア稽古して見やいの。」と言はれて柴平詮方なく、「えゝ何をするのも主命ぢや。」てんぽのかはにやりませう」[illegible]「やつてこまそとしば平が、花の大小つかみざし。「こいよ。」「ネイ。」「こいよ戀しりなさけしり、ならがだんなのたましひが、此のふところへとびこんで、たもとは女のかくれざと。」「ねい〳〵ねんのその内は、一夜ぎりなるつま平が、かほにもみぢのあかつつら、わが名のてふはさめざやに、かくつばうつてほ

つこんだ。こしのやなぐひはなさけの風に、なびくかく〳〵しつほみぬれたはなの日あか、ふりだすく〳〵けだしつゝ、ゆきのすみしの花とわけ、そこつであはやのけんくわんさへにふたたび鬪に見とれつゝ、傾信おもはずなおあかり。[illegible]「やつこのこのく〳〵この日かほに、うかれてしめく〳〵いやとぼくいり。」盲覧らしく見て掛けたら、みんなそつおいはかのごとし」[illegible]「つひにはまぶのふせぜいが、どつと且つて手くだのやりさき、てれんのはこきあつとりのへに」「突き出されぬ其いきさきに、さふばいなう」[illegible]「トふたり上る、ささや四郎はひきとめて「あれ文さんなんぞのごとし、ねのをじやうずにいひまはし、わけもないことをやらせ、くぜつするのがすきかいな」といふを業平押しへだて「無のたゞなかうはきのもたか、うまいさかりのくどきのだん」「最うく〳〵それは後にして、お二人ながら御機嫌能う、つい仲宿の踊り様り、キャく〳〵」と輿おもられ、拍子取りく〳〵業平へ」[illegible]「さればしたくのみだれいと、とけぬ心がつみござる。それく〳〵く〳〵く〳〵よいやさ「こひはなさけのかへことば、そらにたつ名がつみござる」それく〳〵く〳〵く〳〵よいやさ」かくことはてじとしば平が、二人をむりにおしやりて「ぜれ仲人はよひの内、さふばこれからひとやすみ」と、ざんやのうちへ」いつの間にか四人の組子、「業平遁らぬ」と追つ取り巻く「叶したりな飲時節めり、觀念ひろげ」と秘術を盡し、落花狼藉と投げ散らす。四人の組子は散々はじと、逃げゐるを追うて業平は勇み進んで入りにけり。

〽唄「衣にこそかへれ梨花、〳〵、なかめに時やうつるらん。「既におんれいおごそかにつたはつて、さふひやうはむしやにいたるまで、身におうじたるきけんじやう、花のゆきとてしたつゞみ、うつゝたわいもなききかげに「あをやぎのひたひのくしや三日月の、よひにちらりとかけさして、ほの〴〵見ゆるゆふけしやう。五でうあたりの花のかほ、かぜのやなぎが人招く、はしの袂の袖屏風、いつゞけきどりできふひやうがかぶとのはちの小ならべたて、きけにかけてはつはものと、ぐつとのんだる鬼こゑし、懸の山入りこれならん。」「エヘン籠り出たる者に、雑兵の四五六と申す者にて候、打物採ッての狭業は、唐土の張良樊噲、我か朝の田村麿なぞは、名を聞いても戦慄するこ、ずんと臆病なる出生にて候。是れなるは、ほちや〳〵のお千代と申す辻君なるが、我が心に随はず候程に、口説いて見ばやと存じ候。」「何だな四五六さんに候々と、さう〳〵部屋子をおいたなら、お奉所へ書くだらう。そしてマア面白い所へ連れて往くと、人をば伊豆屋へおこわに掛けて、何だか妾の御長家に、無性にどんちやん〳〵と飛んだ無縁法界だ。」「コレサそんなにぴん〳〵仕無え者だ。己が御旦那頼信公は、何でも女郎を買はぬ者は、陣中へは置かれぬと厳しい御触。それでお主を呼んだのだ。」「ア、御志は御嬉しいが私には色があるよ。」「したらさう白化に出られては、重ねて返さん詞もなし。そしてお前の色と言ふは。」「商人でなし武家でなし。委細構はぬ手拭をひらりと肩へ勇み肌」〽唄三絃

魚見たならさてらも帯と、すぐに伊勢屋へとびつうを、かねえどうだ、此間のさき、ちよつと見てくれ四りくな帯で、ぞらすとたがやとくらはすべえ、口でてえけえにひやかしねえ、用があるよも空ふく風つきうよい風でどこやらが、すいたらしいとその人の、癖までまねて肩で風、きりを裁いてこちらしの、はてはありけり海までも、流れ渡りの寺はすて小舟、こんなしがねえ身になつたも、男の者なら何のその、厭ふ心はないわいな、のみけばなんの四萬千、ごけにうきをやはらすら八二十両無さつとむやうがあるた。富が此の四五六が御大將にて有るぞば、新うき言ふ時には淡島か、鹿島姫が来合はせて取り出つて見れべきに、顔みに思ふ十割屋も、四文二合の目を極め、喫越の中となつたれば、今更悔んで返らぬ事こと、言ひつゝ四五六伸び上り「ヤ、あれ／＼向うへ手甲脚絆、佛の頭巾が見えるのは、何商人か知らなども、二人が中の結ぶの神、しめた／＼と独笑み」金奉行かかる所へ向うより子どもたらしの商人が、うかるいよわたお氣もかふく、己がとくいはおんぱく盛り、おやつ下りたおてにして、ごされ／＼なう、取換へべえ／＼、咆くびの髪の落ち、太刀の折をもとつけへべえ、こてふはつゆをすひ口の、きせるのつぶれとごくらあめ、たの根となならばつよ弓の、三けんばりを十五本と、つけへべ／＼、かへてやらうと浮拍子、うかれ／＼て来りける。四五六喜び走り出で「さつきから待つて居た。此の浄瑠璃へ出るからは、定めし貴様も承知であらう。コレ能いやうにたのむ頼

むこ」ト獨り呑み込み悦べば「若し／＼私やァ取換へべえの頓平と言ふ、飴屋商賣の其の外は、なんにも知らねえ氣老賣男、靭の毀れか太刀の折、矢の根でも矢羽でも、入らねえ物があるならば、取換へて進ぜませう。」ト言ふにお千代も差寄つて「ほんにめづらしい飴屋さん、私や煙管ばかりかト思ふたに。」「否々戰爭場へ出る取換へべえは、是れで無くてはいきません、してまたお前の頼みと言うは。」「はてさ大概御推文字、彼姉娘を何卒手に入れる。」「取持を頼まつしやるのか。」「コレお取替への此の餘りで飴は殘らず買つて遣るわ。」「成程何をするのも商賣づく、そんなら扱つて見ませうが、あの姉えをお前が見初めた其の話から聞きませう。」「サアそれは。」淨瑠璃「とはれて語るも恥かしながら、だんなを送つてもどり橋、もうし／＼とよびかけしは、おにか鬼神かいうれいかと、振りかへりたる柳のかげ、さつても白いけしやうのもの、我わたなべには及ばずとも、やいとへはつた三ッぼしの、そのおうやくのがうのもの、いでものみせんとたちどまり「ちよつとよんなとそで引きとめて、たべら棒の心なし、文箱もつて己はつかひのヤレ歸りがけ「ちやつけくふとてひしこのぬたは、大べら棒の心なし、とくりもつてすらば酒屋へヤレひとはしり「おちよはふつとふきいだし「あれ又そんな嘘ばつかり、私はふつてふり付けて、こひよりすきな相撲の手、四ッに組ませず肩すかし、かたはづしとはお屋敷風よ、こちやみ水髮のなげしまだ、さまたにかけておとしばら。」「四五六かぶり打ちふつて、

浄瑠璃「ふけられはせぬけしとびし、當のかたきは西爪のかは、きうりはとんでほとゝぎす、てつぺんた
かけだす暗紛れ、座頭のしつぽをふんだやら、わんとひと聲むかうずね、にげるひやうしに山犬に、
ゆきあたつたか杖ふりあげ、めつたやたらにたゝかれて、やう／＼そのばは遁れしが、またつぎまに
かよふたる、心をふびんと思ふなら、ひと夜は酔けうき人と、顔ににやはぬかこち言、語のてだなや
しほるらん。」頓平はうち笑ひ、浄瑠璃「さつても延びたり延ばしたり、おまへの鼻はとんだおけし、は
まのまさごとといふてくりよふ。「よむともつきぬといふことか、なりはきやほに見ゆれども、朝の團炭で
じやうがある。」ちと温かなうまれつき、どういふ心か氣がしれぬ。此のまにはやうとん平が、目顔
でしらすを心得て、おちよは奥へはしりゆく。」四五六は氣も付かず「リヤ面白くなつて來た。ちよつと貴
樣の豆太鼓、假に繕ふ唐人姿、前から著たる陣羽織。」「イヨきつい者／＼。」浄瑠璃「いひきにて／＼す
いおやァすかんとげるにはらついぞナウ／＼。」浮かし掛けてもわらはねば、あたり見まはし心づき、
「ヱヽ、お千代奴にはめられた。」浄瑠璃「遠くはいかじといつさんに、あとをしたうてかけりゆく。
しもし、オヽイ／＼、こいつは飴の總仕舞もざつと御破談か、ヱヽらつちも無え所へ來た。」と獨りつ
ぶやき頓平が、心を配つて懐より、一ツの髑髏を取り出し、邊の石の塵打拂ひ、恭しく押直し、
蓮かドツて手をつかへ「思ひ出すも涙の種、御主君諸共大望を、企て給ひし效もなく。秀郷が矢先に

掛な　[illegible]無念で御座りませう。せめては敵の枝葉を斷たゞ、靈魂を慰し奉らんと、日頃願ひし甲斐あつて、忍び込んだる今月今宵、頼信始め源家の奴原、討ち取らんは瞬く間。あら悅ばし」ト立ち上る折柄天地動搖して、雲間に閃く七曜の、影を見掲げて礑と睨み、「はつて心得ぬ。時は今冬の央ば、臘陰却つて陽を含蓄む」ト詞の内より二人の組子、捕ッたと掛るを見向きもせず、折に臨んで陰々たる殺氣北斗の影を襲ふは、凶事か吉事か怪しや」ト二人を左右へ投げ退けたり。後に容子を窺ふ柴平、「汝が面體只者ならずと、豫て心を付けしに違はず、仔細有り氣の問はず語り。サア本名を名乘つて仕舞へ」「其處退いて通せ」「名を名乘れ」「何よ」「ヤ、」「ゆくをやらじとしば半が、たおへだたればきぬ焦ち、あふごにしこみし太刀ぬき翳し、「うてば」「ひらき」「はらへば」「つけいる」「しゆれんと」「しゆれん」猶もさゝふる二人の組子、落花みぢんとうち立て〳〵、しばらくいどみたゝかひける。隙をうかゞひ柴平が、ずつと詰掛け聲高く「最早遁れぬ尋常に、きり〳〵其の名を名乘るまいか」「名乘るまじとは思へども、汝が心のしをらしさに、今こそ名乘る能つく聞け。我は先年筑紫にて、敢なく亡び失せ給ひし、純友公の御内にて、伊賀壽太郎とは己が事だ」「扨こそなア」「斯う成るからは破れかぶれだ。彼奴も此奴も觀念ひろげ」「たち風山風とう〳〵〳〵、おいつまくりつ切りむすぶ、つるぎのひかりはひらめく稻妻、花のくもまに、見えつ隱れつはやわざき

そく、こなたも名におふ下館のわかもの、ひろまするなたゝかひしは、めさましかりけるしだいなり。此の淨瑠璃にて花をしきたてありてとゞ囃子の上へ乗り宜しく見えにて此の道具ぶん廻す。

兩花道、二人四五六が右左より立ち掛り、「すりやどの様に我々が」ト詞を盡し言ひ聞けても、「お目附に頼まれた」「心は無いと言ふのだな。」「どうしてマア怖ろしい。そんな事が出來ませう」ト逃げいだす四五六が襟髪取つて、二人は引据ゑ、われ/\此の趣を御目附へ」「聞いた/\」ト轄押分けて立ち出づる坂戸の九郎「コレ四五六とやら、汝が面體頗る貴人の相あつて、此の役仕遂げんとおもへばこそ頼みもすれ」「ア、若し/\どの様に仰しやつても、おつかねえそんな事が」ト又逃げいだせば坂戸の九郎「最う是非に及ばぬ。」ト刀ひらりと抜き放す、四五六ハツと仰天なし、「そんならどうでも私を」「大事を聞いた上からは、活けて置かれぬ觀念しろ。」「頼まれませう。」「何と」「所詮逃れぬ此の場の下語、命を資本に頼まれませう。」「しかとさうか。」ト四五六が、眼先へづつと差出す白刃、「しよう事がごさりませんに。」(幕)(管絃にてつなぎ直に引返し。)

「マア/\御待ち遊ばしましよ。」「太夫さんもお放しなんし。」ト、支ふる傾城止むる腰元、口説が募じて頼信胡蝶、互に詞角爭ひ立ち、舌も廻らぬ酒機嫌、「イヤ/\どうも、合點がゆかぬ。此方が行く度ごとに、田舎客だの初會のと、間に合ひに言ひ抜けても、間夫とやら言ふ色男が、何でもあるに違ひは無

いこ」「ソリヤ可笑しい名代のある其の時は、御為ごかしに私をいなし、新造の雛を捕へ、口説かさん
した悪性男。こちから詮議をせにやならぬ。」「こりや面白い。どうして其方が。」「アイ斯うして。」ト
取る胸倉、頼信其の手を振捕へば、胡蝶はぐつと押鎮め、差込む目元涙ぐみ、銚子、杯、[illegible]、手當り
次第投げ出す。」「己男に投打仕たな。」「夫婦喧嘩の當然。腹が立つならどうともなんし。」「成程下さ
までは、左様な事もありと聞く。併しなんぼ軍場でも、やなぐひ靫を揮つては、餘り喧嘩が頭固過ぎ
る。誰そあるか。圍へ参つて鷹屋簽を持ち参れ。此方が秘蔵の鴬鶉の餌、擂盆も次にあらう胡蝶に負へ
て毀させい。」「毀さいではこ」ト又投げ出す。「もう堪忍か。」と、煙草盆振上げて、立向ふ折柄向うに聲
高く「秋の前様御入り。」ト呼ばはる聲に驚く人々。金山中華立ち寄つて押隔つるを突き退け蹴退け、
逃げ行く胡蝶を追ひ掛くる。又「御母公様御入り。」ト呼ばはる聲と諸共に、満仲公の奥方萩の臺、打
掛姿しとやかに、優々として打通り、胡蝶を後に押囲ひ、イ給ふを頼信は、夢にも知らず煙草盆、
また振揚ぐるをきつと見遣り「そなたは頼信、はしたない此の行跡。」ト母の詞に打驚き、思はず跡へ
立ち戻り、消えも入りたき風情なり。腰元共は詞を揃へ「思ひ掛け無き御母公様。」ト言ふを母上聞き
流し、上座に直り容姿を繕ひ「智者にも一ツの過ちありと、詞に違はず我が子ながら、智勇揃ひし頼
信も、酒に溺るゝ一ツの瑕瑾、見れば見馴れぬ女共、扨は噂に聞き及ぶ傾城の胡蝶とやら、イヤ胡蝶

は花を纏ふ者、露の咲きなる櫻木の、梢に翼を休めたより、草の塒へ立ち歸り、又來る春を待つて居やう。心有りげの詞の端、面目無げに差俯向き、胡蝶は返答もなかりける。二人の顏見立ち寄りて、「若し母御さんの御出でござんす。心を付けて。」ト搖りさませど、肘枕して賴信は、更に正體の有らざれば、萩の臺しとやかに、「大切なる敕命を被りながら、淫酒にふける不所存者、今と成つて此の間に、何と辭が交されう。唯其の儘に棄てて置きや。」ト日ふ折柄向うにて、「院使の御入り。」ト呼ばはれば、萩の臺驚き給ひ、「思ひがけ無き院使の御入り、女子共は賴信を奥へ誘導ひ介抱しや。」誰かある院使の出迎へ、早う〳〵。」此の詞に連れ、幾多の武士立出でて、行儀正しく控へたり。又も院使と呼ばはつて、束帶姿淑かに、靴音氣高く歩み來る。後に隨從ふ東門の九郎、院使暫く立ち休らひ、「我が敷島の道ならで、浮世の雲の立ち覆ひ、靜心なき大内山、寢殿穩かならずと有つて、花山院の内命に「思ひ掛けなき院使の御入り、賤妾は多田の滿仲が妻、萩の臺、折惡しく伜賴信は病氣に付き、取敢へず御出迎へ。」「大江の太夫則經齋藤五郎公淸。」「伊久野桃六親孝。」「大屋の小二郎光遠。」「いづれも出迎祝着せり。」まつた院を護送の其方は。」ト、振向き給へば首頭を下げ、「則ち當家の執權職東門の九郎兼則。」「院使にはいざ先づ是れへ。」と詞に附いて、いう〳〵と上座に直れば、萩の臺「唯今申す通り賴信、病に犯され拜顏も協ひませねば、院旨の趣一通り、斯う申す萩の臺に、仰せ聞かされ下

さらば有り難う存じます。」「而して又院使の御尊名は。」「中納言藤原の季孝、花山院の内命。」「ハッ。」
「院命の趣他の儀に非ず、此の度近江国高島に逆賊籠り、民間を悩ます由注進櫛の歯を挽くが如し。
是れ先年大江山にて、頼光が討ち留めし茨木童子が眷屬と言ひ、まつた天慶の往昔、亡び失せたる
純友將門が餘累なりとも言ひ、兎に角世界靜謐ならず。然るに頼光任國の留守なれば、則ち弟判官
代頼信、討手の大將たるべしと敕命を被りながら、出陣延引爲す條、逆鱗尤も甚しく、申し開かん
筋あらば、急ぎ敕答致されよ。」トもの柔かに宣へば、萩の臺進み寄り、「既に此の如く陣營を敷き、士
卒の調練怠惰なきは、是れ敕命を重んずるが故ならずや、和歌の道にて譬へて言はば、趣向が既に浮
みながら、手爾遠葉が整はねば、短冊に乘せざる如く、譜代の家臣幾多の兵、趣向に事は缺かねど
も、士卒の進退軍術と言ふ手爾遠葉が整はねば、思はず出陣延引も、頼信が誤謬ならず。」「いかさま
是れはさもあらんが、朗詠催馬樂事變り、今樣の小唄を謳はせ、踊とやらん事を催し、日夜狂ひ戯る
るは。」「夫れも一ツの謀計、踊の人數と打扮せしも、實事は手だれの組子にて、アレあの如く思無邪
と書いたる額の内に、相圖の狼煙を籠め置いて、モシ陣中へ曲者の、忍び入つたる其の時は、夫れを
相圖に組み捕る手筈。」「而して又傾城遊女を呼び寄せ、逸悠酒宴に日を送るは。」ト問ひ掛けられて萩の
臺、はつと答辭に差詰る、したり顔にて坂戸の九郎、「成程祕すより顯はるゝはなしと、頼信公の放埓

天聴に達せしとは、最う是非に及びませぬ。何も角も有るやうに言つて仕舞ふが御家の爲」ト言ふ。打出し夜中貴ミ入られる己が差出口、其處下らぬか」ト尻目に掛け、傾城を招き寄せ、わざと酒宴に日を送るは、此の陣中に敵方の、間者と覺しき者あれば、此の趣を告げ知らさせ、敵に心を弛させんと、是れも矢張反間の謀計でござります」ト頓智の答へに太田則經、主人頼信淫酒に耽り、[illegible]などとは、當家を亡す人の讒言、宜しく賢察下さるべし」ト小二郎諸共訴ふる「否や頼信は病氣とな」「一卒快致さば早速出陣、此の上とても然るべく、傳奏頼ひ奉る」と言はせも果てず九郎兼則「否さ包み隠しては却つて御家の爲にならぬ。頼信公を是れへ誘導ひ病氣の體を御目に掛けい」「はつ」ト答へて武士共、鼓み枕に正體なく、倒れ臥したる頼信を、疊の儘にて舁き据うれば、はつとばかりに族の衆、息を呑んでぞ居給ひける。仕たり顔にて坂戸の九郎「我が君、イヤサ頼信公、中納言兼輔卿、院使とあつて是れに御入り御心を附けられよ」と言ふ聲漸く耳に入りにけん、「何だや御客がある。ただは何處に、爰の縁に言附けて、薄茶一服立てておおやれ」ト又夫れ形に高聲「何と何れも御覽じたか、斯程な生醉が儀でも、所詮意らぬ主人の病、何はともあれ院使の御前、方々それと眼配せ、宇藤太郎心得て「我が君様御目を覺され教答あれ」ト、手を取つて引き起せば「はてさ最う飲めぬと言ふに、又さかもりをしろト言ふのか「一所はじんやうの」「江のうちのさかもり」「しやうたいまひをまは

ふよご」ト「あしのはのふえをふき、なみのつゞみをどうとうち。」鼓を持つて頼信は、しどろ拍子に字藤九郎が、彼處へはつたと投げ遣けたり。「こは御短慮なり我が君様」トとゞむるふりにて藤六が、又たち掛れば「何ぢや。今の後を舞へと言ふのか、最う／＼御免眞平恐れ」」ト「入江にかれたつあしもとは、よみ／＼とよわりふしたるまくらいのあの、さむると思へばいづみはそのまゝ、つきせぬ笛こそめでたけれ」起きも揚らず頼信は、鼓を持つて藤六左郎を、右と左へ千鳥掛け、機會を打つて投げ退けたり。萩の聲掛け給ひ、院使の前にて立騒ぎ、無禮を知らぬ舍頼信、今日より勘當ぢや。」「何頼信公を御勘當とや。」「何此方を勘當する。こりや面白い勘當を下物にして、一杯飲まう銚子持て。」ト正體無ければ一間にて、容子を窺ふ胡蝶は、あるにもあられず走り出で「何程酒が好物だとて、あんまりな頼信様、正氣を付けて肚様に、何卒最一度御詫言。」「又野暮を言ひ居る。うか／＼此處に永居をすると、命掛けの戰爭と言ふをせねばならぬ。それよりは怪我の無い二ツ蒲團の床の内、さらば籠城致さう。」ト無理に胡蝶が手を取つて、疊を蹴立て入りにけり。九郎兼則手をつかへ「頼信公を御勘氣あつて、盜賊討手の大將は。」「頼家が出陣する。」「すりや女儀の身を以て。」「たとへに取るも憚りあれど、往昔神功皇后は、我が國ならぬ三韓を、從へ給ひし例もあり。」「斯く申す太田則綱は、武内には及ばずとも、力を盡し補佐し申さば、愛度く凱歌を唱ふるでござりませう。」「八幡宮へ備へた

る、神酒を以て三獻くみ、出陣なさるゝ當家の吉例、誰であるか用意致せ。」「はつ。」ト答へて伊久野藤六、銚子土器持ち出づれば、土器請け持ち、銚の幸、旣に飲まんとし給ふを、陸使暫しと押止め、「藤六とやらん、其の酒の毒味致せ。」「あの此の酒を。」ト俄の仰天、「滅多には飲まれまい。」兼て言ひ付け置いたる神酒、いそいで是れへ。」「ハツ。」ト答へて一人の侍士、またも銚子を持ち出づる。「黄器は阿黒兵藤殿。」「ハツ途中ながら中納言、季卿の御目に掛り、御内意請けて斯くの仕合。」「夫れこそは内侍所の大御神酒、取りも直さず天杯同然、有り難う頂戴致せ。」ト陸使の仰せに我の幸、押戴いてさらりと乾し、大江の太夫に賜はれば、則經はぐつと飲み、「慮外申す。」と大屋へさす。「コハ有り難し。」ト小二郎も、三獻飲んでぞ控へける。陸使は猶も心を許さず、「コレ藤六とやら、汝が持參なしたる神酒、などを毒見をば致さぬな。」「サア、夫れは。」「サア。」「サア。」「サア。」と行詰る。杯九郎が撓取つて「陸使の言ひ掛つたる、神酒の毒見は兼則が斯くの通り致してござる。」「曖姿は最早出陣、陸錬共早參れ。」「畏まつてござります。」ト、兼て用意や仕たりけん、長刀取り持ち幾多の女ばら／＼と立ち出でて、後にここは控へけれ。かゝへ引縮め袂の幸、立ち上らんとし給ひしが、俄に五臓擱亂なし、眼も眩れ心亂るれば、はつと思へど苦痛を隠し、一あありがたき、わよの衾をまつ風の、ふけ行く月の夜かぐらを、そうしてこそはいのるらん、倒るゝ足どりふみしめ／＼、扇追取り舞ひ奏で、陸使に一つ

禮事終り、「一統おぢや。」と陪侍の女を從へりゝし氣に、立入り給ふを坂戸の九郎、眼を放さずに打守り、「コリヤ藤六五郎の兩人は、其の臺が後ほつ掛け容子委しく見屆け參れ。」「畏まつた。」ト逸散に後を慕うて入りにけり。太夫則經大屋の小二郎、苦痛に堪へずどつかと座し、「はつて心得ぬ、五臟を挫る此の苦しみ、扨は內侍所の神酒と言ひしも、」「毒酒だ。」「ヤ、、、。」「ハテ能く利いたなア最うどうで横死る體、此の九郎兼則が、詭計の程を言つて聞かさう。汝に居るは雜兵の四五六と言ふ新參者人の面體知らぬを僥倖。己が賴んで院使と欺り、所詮一通りでは喰らふまいと、わざと彼奴に見顯はさせ、毒消のやうに見せ掛けた。先の神酒は唯の酒、己等が飲んだは大毒藥。なんと膽が潰れたか。ヤ、四五六最う能いわ休め／＼。」「扨は院使も贋者、うぬらが謀計で有つたよなア。」「如何程じたばたじろいでも、モウかなはぬハテ能い體だ。」ト兩人をはつたと蹴据ゑ高笑ひ、「コレサ四五六最う能いわ、大儀で有つた休め／＼。」ト獨り笑ゑ、折柄驅け來る岩角軍次、「扨も御母公の臺、女ながらも氣丈の生質、苦痛を忍んで馬に打乘り、十町許りはうたせたれど、何かは以て堪るべき、馬より撞と眞逆、終に果敢無く成り給ふ。」ト聞くより九郎益々悦び、「オ、よし／＼、ハテサ四五六何時まで我はさうして居る。大儀で有つた休め／＼。イヤ兵藤軍次各位の骨折で上首尾行つて愛度い。」ト言ひつつ忽ち顏色變り、「ヤ、五臟突然に憹亂爲し此の苦しみは。」ト言ふ顏を、四五六じろりと打見遣り、「夫

れも毒だ」ト、、、、「は、能く利いたなア、最うどうで横死る體、何もかも言つて聞かせる。所詮一通りでは喰らふまいと、汝に頼まれて神酒と言つたも矢張毒酒、何と肝が潰れたか」「そんなら我々は汝の雑兵では無かつたか」「知れた事だ。臆病者に成つて居たも、斯く為さん皆計略、兼て音にも聞きつらん、盗賊の張本袴垂の保輔とは己が事だ」「エヽ、」「いくらじたばたしたいでも、最う協はぬはて能い樣だ」ト高笑ひ、「親方上首尾行つて目出度うござんす」ト上下小袖脱ぎ捨つれば、忍出立の兵藤軍次、「扨は汝も保輔が手下にて有りしよなア。」「イヤ夫ればかりで無い我々も、皆保輔が謀者」ト奥より出づる藤六九郎、坂戸金藏かゐをなし、側に有合ふ鼓を取擲け、思無邪と書いたる額を目懸け、はつしと打てば相圖の裏煙、濛々として立ち昇り、陣鐘ならぬ太鼓の音、遠き拍子の花々しく、鳥籠小脇に掻い込んで、對の扮装の諸振り、あらや〳〵〳〵と保輔を中に圍んでよんやなと、聲を揃へて取り巻いたり。」九郎苦しき息をつき、師の人數は手だれの組子、最早遁れぬ觀念と、言ふを保輔耳にも掛けず、「皆の者、首尾はどうだ、まんまと首尾能く軍用金を」ト言ひつゝ師の衣装を脱れば、是れも同じく忍び出で立ち、抱へ出でたる鳥籠を、打ち割る中より取り出す金箱、供の仕丁も一樣の、覆盜巾に面を隱し、各手に持出す千兩箱、渦高くこそ積んだりけれ。保輔達に心を配り毒薬廻ツて正體無く、のたれ臥したる小三郎太夫、二人を足蹴に彼處へ蹴やり、坂田の九郎が懷中へ、

手を差入れて連判と、おぼしき一巻取り出す、よろぼひながら九郎兵衛、刀やう／＼抜き放す。直にもぎ取り首打ち落し、一巻さらりと押披げば、一度に差出す忍び松明。チョン。(此の道具ぶん廻す。)

○「動くな。」「こりや何となさんする。」「何とするとは知れた事。御寝所近くへ忍び込み。」「怪しい女名を名乗れ。」ト中華金山始めとし、新造引船凛然気に、お千代を中に追取り巻き、「ハテ一寸見てから知れて有る、恥かしながら夜鷹の女、此の御屋敷の大部屋の間夫男と二人して、今宵駈落する約束。高いと低いと違へども、皆さん方も勤めの身、何卒情に見逃して。」ト往くを止めて中華が、どうでも怪しい此の葛籠と、さゝふる其の手を振拂ひ、中は時雨の古袷、紅葉笠やら足駄やら、男寡はしだらの無え、藁で結んだ生海鼠襟、拳で十とはふみ兼ねる、夫婦の者が一世帯、見ずとも済まして呉んねえ。」ト、逃げんとするを左右方より、遣らじと組付く新造引船、「邪魔さんすな。」ト投込くる、塗端に落ちたる上著の袖、破亂離と裂けて冠りたる、手巾落ちればこは如何に、緑翠の黒髪滿高く、玉の簪珊瑚の櫛、倭錦の振の袖、尺の絲總結びトげ、邊も輝く粧ひは、彌曲者遁さじと、金山向うへ立ち塞り、各妓に突き出す雪洞へ、お千代は手疾く簪の、手裏劔一發に破亂離と打ち、闇に紛れて逃げ失せけり。(幕)

○何と各位、平常さへ氣味の悪い此の崩折へ、日は暮れ、斯く遠に時ならぬ白雨で、大きに難儀を仕ま

すのうに「愚僧は一體雷嫌ひ、併しマア此の辻堂で助かりました。」「左う言はッしやるは大般若連立の坊樣、佛の堂で助かッたとは、成程是れは尤もだが、こちらのはたしか鹿島の事觸殿、今宿邊の鳥居殿、神の庇蔭で助かッては、些と道が違ひませう。」「ハテ其處が神佛一體でござる。發生するも商賣、佛も大目に見て御座らう。」貴樣は一體猿廻しの故かして、猿賢い事言はッしやる。」「イヤ／＼平野山が晴れて來た。押付け雨もやみます」と、口の下から「ソレ電光つた。」どうでも是れは噂の有る、變化の仕業で御座らう」「ドト、觀音經やら祓やら、一ッ所へ寄り集る、又鳴り響く雷公に、臆病なる胡蝶が柴平が、樣々と介抱なし、「若し／＼夫んなに御氣が弱くては、お旦那には逢はれませぬ。」「夫れぢやと言うて、私や恐怖うてならぬわいな。」「アヽ／＼夫れ意氣地の無え、もつと斯う揚げねえと裾がみんな濡れますわいナア、今更言ふには及ばねども、不慮な事にて御旦那の御行方知れず、夫れ故にこそ徒跣足、足が痛みは仕ませぬか。」「何處も痛みはせぬけれど、賴信樣を葛籠へ入れて、美しい女中さんが盜んで行つた、中華さんや金山さんが委曲い話、私や氣が氣では無いわいな。」「サア此の高島の幸塔婆ヶ嶽に、擒となつて居たまふと、誰言ふと無く世の取沙汰。」「夫れぢやによつて些とも狹く。」「ハテ急いては事を仕損ずる、其の夜の女が七本の、此の簪の手裏劍を、一度に打ちしが詮議の手掛り。」「アレ又電光つたわいな。」「オヽ倖のあの辻堂。」ト二人も彼所へ馳せ入りぬ。なほ大

執が喧しく、一顕偏に此のやうに、經櫃を背負うて大般若建立を致しますれど、世の中が喧がしくて、御修行がござりませぬ」「イヤ般若と言へば、アレ／＼向うの卒塔婆ケ嶽に、鬼神とやらが籠ると有ッて、源の頼信に討手の勅命下りしかど、どうでも鬼が怖いやら、逃亡隱たと世の取沙汰」ト、聞いて側から車鋼が、「夫れと言ふも信心の無い故、神の御託宣に僞りは御座ん無い、十二條の御湯花を上げ、身を清淨にさつしやれば、怨敵退散疑惑無し、昔頼信の過誤で、おじやりや申す」ト饒舌りけり」欠伸交くら猿引が、「所詮猿賢い大將では、また猿目出度い世の中とは成りますまい、のう船頭どの」「さうとも／＼、斯ウ風が變ッては、臆病者の頼信殿、此の灘は越されぬと、おもひ付いた葭舟、帆掛けた方がもましでござらう、どうやら雨もやみさうな、序に日和を見て給れ、猿引殿」ト打笑へば、柴平がつッと出で、「頼信公を臆病者と、口に出る儘の雜言、今一言言うて見よ」トきつと睨せば、「ア、若し／＼口の過ぎたは車鋼丈け、頭に宿る正直に申したは私が過誤、このやうにあなたへ御免なう」ト、平常云ふ癖にて詫びければ、殘餘の者も口々に、「車鋼が言ふ通り、臆病者の頼信故、臆病者と正直に言つたが俺が過誤か」ト言はれて柴平は、柴平堪り兼ね、腰差すらりと抜き放せば、「ソリヤ光つた」ト大勢が逃ぐるを追うて柴平は、足脚に任せて走り行く。「ア、コレ柴平殿、最ウ堪忍爲て遣らしやんせ、必ず怪我して下さんすな」ト往きッ戻りッ氣を揉み焦る、胡蝶が姿をすかし見て、逃げ掛つたる

二人の轎夫、草臥れてつッと寄り、胡蝶が小腕取るより早く、轎口の綱引きちぎり、其の儘頭にぐるぐると巻き、あれよと叫ぶ手巾にて、手早に掛けし猿轡、後を見返し最前の、法師が捨て置く経箱を、是れ倖せと後盾めし、胡蝶を中に打込んで、身軽に背負うて行かんとす。折節向うへ来かゝる人音、早聞けられじと辻堂の、戸を押披いて忍び入る。間も小止みてかうかうと、いと物凄き鉦の声、折柄来たるは御所風俗の、被衣深に着なせし女、乗物つらせ立ち出れば、陪従の武士手を支へ、「是で排け無き鄙の田舎、備後中も寒れましたれば、御帰館急がれ然るべし。」ト言ふになは詞もなく、眼配するを心得て、邊り窺ひ立ち戻り「荒磯様。」「コレ。」「往来途絶えし崩坂、最う気遣ひはござりませぬ。」ト聞いて荒磯こゝろ配り、被衣取れば、包装し持たる数多の衣裳、陪従の侍各々に上着を脱げば忍の衣裳、被衣を偏に遣ひ、我々は此の如く武士と姿を変替し、盗賊輩のみ働くも、便用の面通の為に「アヽこれ何ぼ人が聞かぬとて、声高に言ひやんな、乗物是れへ。」ト招き寄せ、戸を押開けば用意の鬘、忍の拵太刀刀、荒磯上着脱ぎ取ッて、衣紬諸共中に打込み、二挺は目立たぬ此の姿で彼の忍路から往く館に、そなた衆は些とも疾く。」「合點でごんす。」ト大勢は、元来し道へ引返す。荒磯後を見送ッて、「父君の御無念が晴らしたいばつかりで、女のあられぬ盗賊働き。」「アヽ、浮世ぢやなア。」ト往かんとす「姉さん待ちなおくッて遣らう。」ト、経債其處へどつかと下し、腰打掛くる以前

の番頭「否々私や近所の者、怖いことはごうんせぬ」「ハテサテ左様で無え、若年齢でたつた一人」「一同のさア私等が様な者に、親兄弟かから頼ンでも、構うてくれる人が何の」「有る段では無え、先うざつと文通に寄りて」「あの不調法な私でも」「お前がうんとさへ言へば」「女房に持つて下さんすか」「時機を取らぬ法も有れど」「アレ又其様な虚言ばつかり」ト、爰に心を許さして、逃げんとするを引離し「虚言で無え大真實、時にマァお前のうちは」「あの私が内はツイ其處の」「あの」「辛崎塚ア薮か」「エ、」「そんなに吃驚する事アねえ、あすこにやア妖怪が居るとよ」「そりやアまア讀の事でござんすわ」「譚の段か、ある時やア辻君と拵袴たり、又ある時は御所な中」「エ、」と吃驚驚く荒磯、雲間を出づる日影に、熟顔をうち詠め「然う日ふお前も確かに日外」「オ、さ己も妖怪だ、雜兵と化けたり、擧句の果てにやア御公家様」世に捨た者は夫婦とやら、何と相談する氣は無えかヨ」ト、詰め寄る後に柴平が、物をも言はず切り込むを、荒磯ひらりと身を交し「ヨウ何と成さんする」「サ、其後で容子を見て居たが、面白さうな夫婦の相談、餘り己も羨ましさ、ちつと早いが祝言の、石打替り」ト又切り込むに入れ替つて、番頭が落ちたる刃に丁度請け止め「冷りとした私豆腐、精進肴はおらア嫌へだ」「ヤ、經横より洩れ出づる、裳裾は覚えの縫模様」ト寄らことするを立ち隔たり、爭ふ隙に荒磯は、傍なる古井に飛び込んだり「南無三寶」ト、立ち寄る番頭、襟髪取

つて紫平が、引き戻してたぢ〳〵〳〵、其の手を拂ッて落ちたる蓑笠、件の古井に打込めば、どつさり雛々小僧の音、二人は左右に立別れ、暫時ためらひ〳〵〳〵幕

〇崩坂の辻堂で、唯一打と思ひの外、運の強い二合半、「何は遁さぬあれ、玉座間近く立ち騒ぐ、無禮の下部」と其座下らぬか」ト大勢が立ち隔たれば、紫平は遮る衛士を打拂ひ「爰は名に負ふ幸蹟寮の裏、胡蝶どのを奪取りしも、たしかにそれと來て見れば、昨晩逢つたる猿廻し。こちらは鹿島の事觸め、扨はうぬらも盗賊だな。一知れた事だ。お頭の指揮に從ひ猿公と、姿を變へしは禰宜の黑彌五と一轉觸と身を窶せしは、壁蝙の鼠八と言ふ盗人だ。わざと頼信を悪口したも、我が此處へ誘き寄せん計略だわい。一ア、成程是れやアさうでもあらうが、内裏を摸造す普請の結構、玉座近しと制するは、官女と云ふべき氣高き粧ひ、合點の行かぬ此の家の容子。一成程其の不審は尤も。此の處は世界を放れし大内裏、今日立行の御祝として我々が此の捧物。一オヽ、官女達の言ふ通り、此の内裏の御頭は、盗人の天皇様、一ム、其んな眼鏡は爲て居れど、おいらも皆御公家様、たれ〳〵に位が有るわい。一我も早く下手に成ッて、御淨所の水でも汲め。一いやだと吐しやア眞ッ二ツだ。返答仕やれ」と立ち掛る。折柄後に聲有つて「騒がしい何者だやツ。一あの聲は關白職の洞藏殿。」ト、遽に行儀を繕へば、仔細有らんと紫平も、片邊に退き窺ひ居る。御簾卷き揚ぐれば洞藏は、どてらの上に官服引掛け、鎗の鞘に

高胡座、下の方には荒磯が、昨晩の姿引替へて、十二單衣を氣高く著なし、額に扇を打翳し面恥氣にぞ坐し居たる。洞藏くわん／＼打詠め、「滿邊の宰相、壁毀の中將、今日の働きは如何で有つた。」「ハゝたつた金が一歩、中古な袷が一枚。」「默りおらう。」隨分精出して働けと、救命を被りながら、二人でたつた是れ許りか、憎い奴め。」ト立ち掛る。荒磯が押止め、「これもし父さん今日はあり、立行とやら言うて、私と天皇さんと夫婦にすると、コレ此の樣に著物まで、著せてくんしためでたい日、堪忍して遣らしやんせ。」「折角の娘が訴訟、今日はマア免して遣る。」些とやじりでも切り習つて、ずつしりとした仕事を爲ると、逆敕の罪に行ふぞ。」「ハイ重ねて逆鱗に觸らぬ樣、追剝でも致しませう。」ト恐るゝ二人を柴平は、押退けてすつと出で、「さう言ふ汝はさいつ頃、討ち洩らしたる伊賀壽太郎、崩坂に出で會ひし、女は汝が娘とや、サア尋常に繩掛れ。」ト詰め寄するをびくともせず、「唯一人にて陣中へ、忍び込んだる其の時さへ、手に合はざる某を、搦めん抔とは思ひも寄らぬ。茨木童子が眷屬と、世に言ひ囃らして手下を招集め、造り立てたる大内裏、先づ天皇の龍顏を拜して後、刃向ふ氣なら對手に成らう。」「ヤア盜賊の分として龍顏拜とは事笑止し。數年間でも源家の家來、刀の切味試みよ。」ト階壇に足踏ん掛け、屹と見上ぐる折こそ有れ、「天皇の御入り。」ト喚はる聲に猶豫ふ柴平。程無く上の屋臺の翠簾、さら／＼と卷き揚げさせ、金龍の白衣の上に、錦の溫袍を引掛けて儼然たる顏打

守り、サア陛下は御目出度う頼信様」「サア、柴平能う来て呉れた。」「サアもや伊賀寿太郎が最前より、天皇と言つたのは」「サア、サ此の頼信が事ぢや。日外陣中で太夫と口説の腹立ち紛れ、茶碗やら丼やら呑んだところ言へ否最う〆れんに成つて居たが、葛籠の中へ押込まれ、サアサア其は如何なる事と思の様に案じて居たが、アレあの葛籠が、おれを爰へ連れて来て、何か無しに盗人の天皇様、文武抔と違うて、大體氣樂な者では無い。」ト辭に荒磯差寄ッて、「辻君と姿を窶換し、忍び込んだも何卒して、積る思ひが晴らしたさ。願ひが叶うて今宵から娘は居、此の洞藏は閻白黒、我も早く手下に成れ。」「サア夫れは。」「サア／＼／＼。」ト洞藏は、優々として下へ降り「否と言へば者共夫れ。」ト、指揮に從ひあまたの仕丁、既に矢番ひ追取り卷く。「ヤア仔細有り氣な此の場の趣き、有無の返事は觸りと、思案を定めた其の上で。」「是れ柴平、それにはあの太夫が事。イヤ太夫聞きたい事も有れば、奥へ往つて待つて居やれ。」「ハッ。」ト答へて立ち上れば、仕丁は猶も油斷せず、矢衾造つて取り圍むを、柴平は物ともせず、莞爾と笑つて入りければ、黙と御簾も下りけり。

○「下れ／＼。」と制する下僕に、「ハイ／＼御免されて下さりまし。」トつか／＼來る賤の女、洞藏じろりと打見遣り、「奥殿近く眼馴れぬ女、其方は何者ぢや。」「ハイ、私は此の近村の賤の女、些とお願ひがござりまして。」「ムウ其の願ひとは。」「御奉公が致したうござります。」「あの此の館に。」ト不審の顔

角、黒彌吾兵衛平太が寄つて、「己が仲間へ奉公を、望んで我もうせたからは、些つとは腕に覚えが有ら
う」ト一寸断うして一りの襖を、一ト組み付く二人を右左、何の苦も無く投げ退けたり。洞蔵小膝を丁とう
ち、「遖れ手練、して又何ぞ望みが有るか」「あの私が望みと申しますは、ヘ、僅作にと為る、鳥
萬燈を差出し、「是れが望みでござります」「あの是れが、ハテなア、マア奥へ行き暫時の間」「左様
ならば」ト立ち上る。油断を見澄まし、便宜の手裏剣佃にてはつしと打落し、「後ほど御目に掛りませ
う」ト尊罹罹して入りければ、洞蔵は手を拱き、「表に烏を畫きしは、日輪の形容を表はし、裏は玉兎
の月を摸す。此の萬燈が望みとは、某儀て奪ひ取りし、日月のあの御旗、此の家に有るを知つてう
せたか、心憎ツくき女め」ト睨と睨んで立ちたりけり。又表の方騒がしく、経櫃背負ひし番頭が、丈
ふる仕丁を投げ退け蹴退け、のつかのつかと入り来り、「噂に聞いた盗人の内大裏、己も御公家様に成ら
うと思つて、仲間入りの印にと、態々持つて来た代物、取つて置いておやア下さるめえか」ト、経櫃下
して蔵部座、洞蔵は嘲笑ひ、「へ、、、、世界の宝は皆我が物、金銀財宝望みで無え、持つて帰れ」ト
言はせも果てず、「イヤ、此の内は天皇へ心を籠めし貢物」「どうでも合點の行かねえ曲者」ト「己が
改めて」ト立ち掛る鼠八黒彌吾、「イヤ天皇へ手渡しする大事の代物、我等にやアマア見せられねえ」ト
突き放しどつかと腰を掛けたりける。「心を籠めし貢の一品、某直に請取らん」ト潔く箱をぞ揚げさせ

頼信公、立ち出で玉へば黒蝶居り八、又立ち寄つて唐櫃の、蓋こじ放せば戒めほどけ、静ぞ出でたる
遊君胡蝶「ヤ、太夫か。」ト頼信公、立ち寄らんとし給ひしが、人目を兼ねてためらひけり、常磐六
と寄人の顔打ち守り吃驚し、「ヤヤそなたは。」「アイ又お目に掛ります。」「たしか小富にあの子等と一緒
と常との身代で、命を一ツ拾ひました。」「アヽ、怖い事〳〵。」ト、密嘯いてぞ居たりける。胡蝶は打合點
き、「あのこれが、噂に聞いた胡蝶太夫、成程天皇には何よりの貢物、コレ常磐、疾く御側へ連れて行
け。」「あの女中さんを頼信さんの、」「サ、其否々然うしやんすまい。」「十二の后は天子の定まり。」「お
やと言うて。」「未だ泣すか。」「あい〳〵最う何も言ひやんせぬ。」ト不承々々に下り立つて、「さアござ
んせ。」ト引立つれば、胡蝶は生きたる心地もなく、「妾や、マア生きて来たのか、死んだのか、此處は
あの冥土とやらぢやござんせぬか。」「能うマア知ッて居やしやんす。彼處に御座んすが、夫れは〳〵
性の悪い閻魔様、妾や三途川の老婆が娘でござんする。」「エ、」「あのお前元の所へ歸りたうござん
すか。」「ハイ〳〵歸り度いだんぢやござんせぬ。」「そんなら歸して遣りやんせう。お前を歸すは妾が
方でも、勝手でござんす其の代り、あの閻魔様のお側へ往くことは成らぬぞえ。」「いえ最う御側へ往
かずとも、ちつとも大事はござんせぬ。」ト、言ひつゝ、ふつと顔見合はせ、「キャア御前は頼信さん、其處
にぢつと見て居ながら、なぜ黙ッて居やしやんした。」ト、裾もほら〳〵駆け上り、取り付き歎けば頼

信公「餘り汝が怖がるが笑止さに、如何なる事かと詠めて居た。」「エ、マア憎い。」と寄添ふを、荒磯左右へ押分けて、持ッたる扇階壇へ、力任せに打付くる、響に連れて卷揚げし翠簾又さつと下りにけり。黒彌吾鼠八鎚々に忍姿を脱ぎ變へて、「さらば是れから一休。」と、打連れ這入れば件の細頭、「何ぞ用でもござんのか。」「汝が名は何と言ふ。」「私が名かへ。」「おのしが名は是れでおらう。」ト狙公の袴を取つて差出す。「すりや某を袴垂と。」「知つて止めたる吾が俗性。」「聞くまでも無いたしかに是れこそ件の袴に、狙公の道具を添へて差出す。」「狙公の此の道具袴は縞。ノウ猿島の、内裏なうつして陪侍く姫君、たしかに瀧夜叉。」「夫れ知つたれば生けては置かれぬ。觀念しろ。」ト切り付くる。保輔翻然と身をかはし、烏萬燈に請け止むれば、中より二ッに切割つたり。「聊爾あるな伊賀壽太郎。今日より一味同心。」「すりや某と力を合はせ。」「まづ此の通り。」ト、切り割つたる烏萬燈を兩手に引き分け、烏を蕪くは日の形容、此の日本を二ッに分けて。」「面白い、猶奥殿にて萬事の手つがひ。」「容子は聞いた。」ト、驅け出す仕丁、唯一刀に切ッて棄て、「正かに源家の廻し者。」ト、差出す白刃に保輔が、落ちたる袴打掛けて、血汐を拭ひ取たりけり。「ドヨ、ゆく〳〵にしぶんまはせ。」

()奥殿に立ち集合ふ、幾多の官女口々に「今日立行の折も折、あの遊君の胡蝶とやら。」「ひよんな處へ來た事と、御姫様には御氣もじの、揉めるさなかへ洞藏殿、随分大事にかけいとは。」「どうぞ合點

が往かぬわいな。」ト私語く背後の障子のうちより、其の爪音を下物にもして、一献酌まん銚子持て、二十ばかりの女中は細語に言ひつゝ、左右へ立ち退く。障子明くれば玉琴を、胡蝶は引寄せ搔鳴らし、〽浅茅原すぎりさへ、あさてまぶねのあざましや、けふはてくしの人となりて、あすは東のとのさへと〽あふみはつかしとこのやまかぜのやなぎのねくたれがみ、はなさくのまくらのとがにもしようか、われかやつれたみわれにみず、かざみのしやくの音もつらやと、琴の音色の洩れにけん、下屋敷へ荒磯が、足音忍ぶ庭づたひ、非簡に添ひし柴垣の、おぼさやせつとなき出づるや、胡蝶はそれと氣も付かず、〽しんきしんくのしらべをかけし、うつや鼓のうつゝにも、こちやわすれやせぬものか、ひらの松おれしさら〱と、あだしあだなみよせてはかへす、ありてあとなき花こゝろ」頼信公は機嫌能く、「久振での汝の唱歌、此の頃にない鬱散した。」「種々に憂苦労して、御目に掛りは掛りながら、未だ心さへ落着かぬ、私をとらへて琴弾けの、唄謡へのと無理ばつかり。」「ハテサ最う案じる事は無いに。」「否々案じられるは、あの荒磯様とやら、美麗しいあの容貌。」「いや〱、見えてもあれや盗人おや。」「エ。」「ヤレ聞夫な代物おやの、やれふけるのと、顔に似合はぬ詞遣ひ、聞く度一倍愛想が盡きる。」「あの私やどうやら寒うなつて来た。」ト、寄添ふ背後に荒磯が、「アイお火鉢。」ト、二人が中へどつさり据うれば、はつと立つ袂を袖にて打拂ひ、「汝は荒磯何時の間に。」「アイお二人でしつぽり。」ト

間夫な仕事を成さんすには、私が此處をふけつたら能からうが、マア然うは仕やんすまい。コレ胡蝶さん仲間の甲斐に殿様を、此の荒磯に下さんせ。」「アノ妾を仲間とはえ。」「人を欺して金取る傾城、退いた仲でもござんせぬ。」「否々妾や頼信様を。」「馴染した見えが無いならじい、母御に阿氣を附け給ひ、便宜ない身に成らしやんしたを、なぜ餘所に見て居さんした。」「サアそれもお行方知れぬ故。」「仕様がないと捨て置くは、矢張眞實が薄情から。サア奥へござんせ。」ト頼信が手を取れば、然うは成らぬと隔つる胡蝶、「斯ウ成るからは此方も意地、命に換へても配偶にはならぬ。」「否々配偶せぬ配偶で見する。」ト、胡蝶を縁より突落し、其の身も續いて翻然ト下り立ち、隠し持つたる懐劍の、柄に手を掛け身構へたり。頼信二人を押隔て、「ヤレ輕忽いマア〳〵靜まれ、胡蝶を誘導ひ侍女共、疾く〳〵。」ト追立て遣り、「コレ荒磯、胡蝶とすつぱり縁切つて今宵汝と祝言しよう。」「エヽ、夫りやアマア實の事でござんすか。」「サア日頃からの眞實を、更々仇には思はねど、今日まで枕を交さぬは、汝の心が知れぬ故。」「あの妾が心が知れぬとは。」「サア心の知れぬ其の譯は、ヤ、御前。」ト荒磯が、懐劍取つて雪洞の、側へ差置き件の玉章、此の柱に建て掛けて、「此の心を解いて見やれ。」「それなら妾に此の謎を。」「謎が解けたら今宵から、二世も變らぬ我が妻琴。」「積る思ひを岩越すに、並べて嬉し絹絲。」「脇へはいれぬ割形の、丸う納まる思案を仕やれ。」ト心殘して入りにけり。跡に荒磯太息をつき、「是

れ斯う〳〵とつい一寸、言つて聞かせて下さんせいで、六ケしい制物、そして其の妻が心を不了簡さは、オヽ夫れ〳〵心中見せいと言ふ事なら、此の指切つて、ト懐劔を、手に取る背後に只前の女、ト「若し貴様は不死身のお生まれ、指切る事はなりますまい。」「然う言ふ汝は見知れぬ女子、…私は御館へは今参、あの頼信様に眞實配偶たいお心なら、御身にも換へぬ大事の者を、譯ト則ち心中に。「大事の者とは、たれ〳〵。」ト懐中より錦の袋取出し、「内は何かは知らねども、大事におけいト父上が、御渡しなされし此の一品。」「大方是れでござりませう。」ト言ひつゝ、紐を解きにかゝ「疑ふ方なき錦の御旗、忝い。」ト駈け出す「さうはさせぬ。」トへだつる保輔。「邪魔せずと其處退いた。」ト二人が争ふ其の機會に、側なる井筒へ打込ンだり、「南無三寶。」ト立ち寄る女、眼前へ白刃を突き出し、御旗を口にひッ咥へ、井戸よりぬつと出でたる洞蔵、「貴殿は伊賀寿太郎殿、」「涸井戸の抜道で容子は殘らず皆聞いた。合點の往かぬ其の女、次へ引立て拷問爲やれ。」「ハッ。」ト答へて保輔は、無理に女を引立て行く。跡に虚氣イみし荒磯ホぐつと引き寄せ、「コレ、汝はのう忝くも御父は、桓武天皇の孫裔平親王將門公、下總國猿島郡に、斯くの如く内裏を構造へ、大望を發企し給ひし其の甲斐も無く、闇々と滅亡び給ひし御無念か、晴らし度い計りに、汝を己が娘と呼び、心を碎くと知りながら、當夫の時は人質と、隱まひ置きし頼信が、色香に迷ッて大切なる、御旗を渡さんなんどとは。

天魔の見入れか情ない。將門公の此の靈魂、私ならぬ公の折檻。ナント骨身に答へしか。」ト、散々に打擲ゑたり「いや〳〵假令父上の仰せでも、思ひ切られぬ頼信樣、何卒配偶してたもいなう。」「エヽ、さりとは聞譯ない。コレ頼信が此の謎を、汝は何と見さしッた。琴を縱に見る時は、瀧り落つる瀧の形容、此の燈火と言ふ物は、夜ならでは用ゐぬ物、夫れに刃を添へたるは、汝の本名瀧夜叉と、氣取つた上は頼信も、最う生けちやア置かれねエ、源家へ預る此の御旗、まつかう爲して。」ト傍の火鉢の中へ投げ込めば、はつと立つたる相圖の狼煙、伊賀壽太郎突立ち上り、「ハテ心得ぬ、館を取り卷く貝鐘太鼓。」ト言ひつゝ表に馳せ出づれば、槍打振つて二人の組子、遣らじと向うへ掛け隔たる。序惡しと引返せば又も此方に二人の組子、鉾先を揃へて突掛けたり「シャ面倒な。」ト切り拂ふ、折柄背後に聲有つて「多田の新發意滿慶入道。」一判官代源の頼信、伊賀壽太郎に見參せん。」ト障子一間に引き明くれば、中央には頼信公、右の方には氣高き女性、袈裟打掛けて坐し給ふ。左の方には胡蝶太夫、薙刀抱込み控へけり。伊賀壽太郎屹度見返り「ヤア己は最前奉公を望んできたりし賤の女。」「オヽ賤妾こそ頼信が母萩の前、此の度夫多田の滿仲、剃髮染衣の身となつて、名も滿慶と改稱め給ふ、夫れに從ひて五條の袈裟、掛けたる容姿も法師武者。態と放逸惰弱と見せ、擒となりしも頼信が謀略なりと知らざるや。」一遊君胡蝶と呼びなせし、姿も眞實は頼信樣と、幼兒き時より言號、藤原の

是則が、娘の白拍子「最早遁れぬ觀念せよ」「ハヽヽヽ我等が禁廷より、預け置きし錦の御旗、引裂き捨てたる上からは、假令我が手に下さずとも、源家の滅亡瞬く内。」「ヤ、其の御旗を恙なく、賴信が手に入つた上は、平井の保昌、捕へ來れ」「畏まつてござります」と、背に御旗を負せ直一文字に馳せ來る」「ヤア我や謀られ、くりや保輔と言つたのも偽りであつたよな」「言ふにや及ぶ吾北國にて人と往み、面體似ぬ偽作に、目代九郎が兼則に、業と加擔の體に見し、彼を殺して奪ひ取つたる一味徒黨の連判状、真先掛けて汝が姓名、最前井戸へ打込みし、錦の御旗は真赤な贋偽、眞の御旗は其の時に、今ぞ我が手に有り」「何と驚き入れたか」「斯く言ふ我は大江の太夫小二郎光遠、身請に當りし體に見せたも、取下の九郎に合體させし、汝が謀計を見出さんと、昔保昌と言ひ合はせ、真の保輔と言ふ者は、あの保昌が舎弟なれど、悪逆無道の奸佞故、此の賴信が下知を傳へ、疾つくに征伐したわやい」「最早遁れぬ名を名乘れ」「謀計るゝと思ひしに、却つて汝等に謀計られたか」「如何にも親友が御内にて伊賀壽太郎とは己が事だ」「妾こそ下總にて敢無く討たれし將門が、忘記念の瀧夜叉姫」と名乘りも敢へず懷劍取揚げ、既に自害と見えたる折柄、ヘャと響いて陣鐘の、矢一ッ來つて瀧夜叉が、持つたる懷劍射落したり」「是れは」「將門は平常より、ぞ宥られける、俵藤太が例に傚ひ、今田の源吾廣神見参々々と喚はる聲と諸共に、素袍の袖も鮮かに、現れ出でし案平が、

欣然として馳せ来り、武蔵国にて成長なし、容貌を匿つたる者なければ、下僕と成つて窺ふ貫綱、傳へ聞く将門は、七本の手裏剣を、一途に投げて敵を討つ、故に其の擬姿、七人ありと言ひ觸らす、さいつ頃七本の簪にて燈火を、一同に消したるなが奇術、我は彼が餘黨ならんと思ふに違はず、将門が娘にてありしよな。」最早遁れぬ覺悟を爲せ。」ト額の髻ふつッと切り、「三田の源吾貫綱が、瀧夜叉を討ち取つたり。」ト、有情の辭に菰の臺、婆娑取り揚げて庭に打掛け「此の簪も七本の、卒堵婆、汝も是れ佛緣、名も如蓉尼と更めて、父の菩提を追弔はれよ。」伊賀壽太郎も先非を改め此の頼信が幕下となれ。」「アア儀らはしき其の一言、斯うなるからは死人の山だ。何奴彼奴も觀念しろ。」「愚蒙や伊賀壽、斯く大勢にて捕圍めば、假令汝が摩利支天の術ありとも、今討取るは容易けれど、一度は見遁せよト入道の仰せに從ひ、重ねての參會まで汝が首は汝に預くる。」ト、其の時は味方を語らひ、花々しく勝負を遂げん。」首頭を洗つて待つて居ろ。」「勝負は重ねて。」「戰場々々。」「マヅ夫れまでは。」「頼信。」「伊賀壽太郎。」「さらば。」「さらば。」「是れより二番目はじまり左樣に御讀みくださりませう。」

〇時に不思議や雲居より、車輪の如き白狐顯はれ、彼の将門が髑髏を咥へ、何處ともなく消え失せけり。「二番目讀み始め、私は此の家の家主杢作と申す者、土蔦城は留守の儀でござりますれば、郎

公家様も御武家様も御用の趣一通、御聞かせなされて下さりましよ。」「ハテ杢作の申す通り、師匠さんは古道の洗湯へ往きましたれば、此の夢野蝶平と云ふ一番弟子が、御用の趣承ッて。」ト云ふ側から押隔て、「毎度嫌ひの世話役頭、此の蜻蛉の鴈八を差置き、然うはさせぬ。」ト争ふ両人、上座の侍士ぐつとねめ付け、「ヤァ喧々と姦しい、某は毬栗止気右衛門と云ふ者、大切の密事なれば、葛城へ直々に対面致して言ひ聞かさん、控へて居をれ。」トきめつけば、流石に雲の上人は、物柔かに打取直し「麿は頭弁中将直成と云へる者、面切る事も厭はずに、妹がり行きし甲斐も無く、逢はぬ戀とは難面い難題、帰りの程を待ちつゝ居らん。」「未だ／＼帰りは滅多な事ぢやァござりません。山東製の水晶粉で磨き上げ、白牡丹で薄化粧て居ますから、其の牡丹に縁の有る、四々十六日も掛りませう。」ト噂中央に葛城は、諸衣抱へて立戻る。背後より来るは秀慶とて、尺八指南の優男。「オヽお勝さんお勝さん、又雪が散乱付くに、此の傘へ這入ッて往きな。」ト、呼び掛けられて立ち止り、「オヤ秀慶さんお前までがお勝／＼と誰が事かと思ふわいな。」「ハテお前の名の葛城に、おの字とさんを付けて見なせえ、假名で書くと七字あつて御題目と同じ事だ。そこで半分言ひ残して、お勝切りですまして置くのヨ。」「今日は稽古も休みなり、合奏して遊ばうかいな。」「則ち用意の尺八袋。」「サァ御座んせ。」ト打連れて、内へ這入れば口々に、「お勝さん。」「お師匠様御公家様と侍士が。」「何かお前に逢ひ度いと

じ」「端から待つて居やんするに」「エヽ、靜かに言うて下さんせ、氣逆上がするわいなア」ハイわたしが三味線指南で、世を送る葛城と言ふ孀住、何の御用でござんす。」ト問はれて武士威儀を正し「他聞を憚る一大事、邊の人を遠ざけて呉りやれ」「否々みんな内輪の者、御心置き無う何なりとも」「然らば言うて聞かすべし、某が用と言ふは」「御用と云ふは」「三味線稽古が致し度い」ト聞いて杢作横手を打ち「仕たり、突張り返ッてござるから、綸姿でも取り出し、此の者を搦め捕れ、屹度申し渡したト時の太鼓で揚幕へ、ずつと這入ると思ひの外、藝者の内へ御出でなされ、三味線が習ひ度いとは、呉服屋で反物を買ふよりは手輕な事」「夫れにやア近邊の人を遠避けいト御仰山な御武家さん」「否々遊藝稽古致す事、他へ洩れては武門の瑕瑾、薄鈍氣野暮の某なれども、其方にと積る戀、アノ關の扉が習ひ度い、御指南なされ下さるか、どう言ふ心か氣が知れぬ」ト、寄り添へば鼠嗁中將「武士と言ふ者はあんな勝な者にござある。麿が今まで待ち侘びしは、唄の傳授が請けたさ故」「御公家樣があの妾に」「否々詠歌の事にはあらず。長唄とか言ふ謳物、此の頃流行るお兼とやら、其の文章のしならしさ、四ッに抱かれて手事とやらで、投げの情の取組みを、教へて呉べ」と縋り寄る。止氣右衞門押隔て「サア某への返辭は如何だ」「麿への答へは如何にぞ」ト言ふに葛城莞爾と笑ひ「三味線指南は妾が世渡、教へてもあげうけれど、今日は稽古も休みなり。此の頃に來やしやんせ」ト、言ひ流して

見向もせず、針箱を取出いだし「秀慶さんお前の裾には、綻びが切れて有る、妾が縫うて上げ遣んせう」ト、言はれて秀慶心つき、「ハイハイ此処は見悄え、それなら御頼み申しやす、成程お前は器用者で居なさる、針利くとは餘ツ程能いお嗜みだ」「アイ妾だもの」ト言うて、いつまで斯うして居られもせず、頓て可愛い男と一緒に。」「世帯持ちになる氣なら、一寸半口乘りてえの」ト、いと睦まじき二人が有様、此氣右衛門眼を瀬怒らし、「ヱヽ拙者に碌々詞も掛けず、是れ見よがしの二人が素振」ト、勘忍ならぬ」ト立掛れば、鰻平頓八詞を揃へ、「あやかり者の秀慶さん、一寸祝儀の胴揚か」ト、右左より取り付きたり「アヽ針が危ないてある、浮雲いわいな」ト止むる葛城、秀慶は二人が手を振拂ひ、逃げんと焦れば縫ひ掛けし、絲に四方へ九身を引纏ひ、かつはと伏して正體なし。[illegible]、葛城周章て呼び起せば、秀慶漸う眼を見開き「今葛城が持つたる絲にて、此の身を纏はれ目眩き、忽ち正氣を失ひしは、ハテ心得ぬ」ト見返るにぞ、ヱヽ、」ト吃驚く葛城、途端にプツと絲切れて、心も清涼しく秀慶は、宛然夢の覺めたる如し。色成卿とやらに、一物騒がしくて此の所は、何を語らん便宜も悪しし、鰻は奥にて勞れを晴らさん。」「いざござ此の此氣右衛門も、一間へ往きて休息せん。」「實に夫れだれば大分雪も降つて来る。何は無くとも酒一ツ。」「そんなら此の鰻平も頓八も、對酌と出ようかい。」「サア斯うお出でなされまし。」ト杏作秀慶先に立ち、皆々一間へ入りにけり。跡に葛城唯獨り、ほつ

と諦めも大悲みつきぬ二匠なく／＼と思へども、縁こて人を苦しむる、因果は遁れぬ此の身の素性。」ト、言ひ掛けて父親をとゞめし、雪も次第に積つて来る。「過ぎおで寒うなつて来た。」ト、火鉢に寄りて撫牛を、手習りてぞ居たりける。折節来るは賤物屋の五郎又と言ふ男、娘のお花諸共に、世帯道具を一荷に擔ぎ立ち止まれば、「コレ兒さん、急に宿替せねばならぬと、雪の降るのに大忙て、然しマァ何處へ往くのでござんすの。」「知れた事だ、後堤の姉御の内は賑しい、此方へでも来て居ろト、言つて呉れるお徳様に、マァ當分厄介とやらか積りだ。」「それはお前と言うに人のうちへ。」「ハテサ、只置も姉様々々と、中の能い葛城さん、心遣へはなんにも無え。」ト言ひつゝ門へ荷物を下し、「姉御内か。」父撫牛を玩弄物だの、御前の様に撫牛を大事にする者も無え、」「ハイ、五郎又さん、お花様も能う遊びに来やしやんした。」「姉さん、あの姿や遊びではないわいな。」「オヽサ、ツと待ッたり、仔細は兎もん、マァお勝さん聞いて呉ねえ。私は毎日賤類を賣りに出るし、お花も此の頭尾橋の楊弓場へ働に出て、月の内に三十日、錢前を掛け詰めでも、矢張取られる晦日の借債、左月たまッて今日只今追ひ出されて斯くの如く、」「ホヽ、ニ其れは勿怪の僥倖、私も獨りで寂しいから、こつちの内にマァ當分。」「居なさと言つても居るつもりで、がらくた道具も渡ッて来やしたこ」「姉さん、姿やどうも御世話になるがの、一ツハニ大事ござんせぬ。ホンニ其處はあがり口、無用心で御座んす。小道具はこつちへ片付

けでございますにそんなに案じなさる物でも無しさ。」「昔張る物は紅葉の錦へ、御殿物と縞木綿が衾を揃ふた行燈よ、楊弓の弾と矢車は、商賣物、塗下駄に鞘に味噌、家に粋って大きなは、蝶足の膳臺、ふ、是れで時代有りたけだ。」ト、お花も共に取片付け、「そんなら御聞いて喋、れア、此の子も何時まで斯うしても居られぬ者だ、旦那でも取って呉れれんと、わりやア稼を勤めても、」「いゝえ、それおやと云うて讃美浄瑠璃は女子の業情」「アレ見なえ、あんな時代な書物が、一番目にあるものかな」「ハテナ、夫れも何ぞ深い仔細が有る事でござんせう。あの子の胸もとつくりと、妾が聞いて置かうわいな。」「そんなら姉御、」「マア奥へござんせ。」ト、二人を誘導ひ入りにけり。折柄鉦鼓の音も聞えて、六十六部の修行者が、雪踏み分けて悠々と、歩行む背後より尾行来る捕人。それとも知らず立ちとまり、雲靉く雲に乾度眼を注け、「あゝラ不思議や、神龍深く蟄すれども、細雲帶にあいたいたり。たれに有らねど赤白の、運氣軒端を去り遣らぬは、天下に稀なる神寶の、秘めある兆か何にもせよ、怪しき蜘蛛の擧動おやなァ。」「捕つた。」ト掛る二人の組子、六部は結と見返りて、錫杖に仕込みし氷の刃、抜かんとすれば言甲斐なく、組子は後へ引返す。鹿打拂ひ莞爾と打笑み、「魁偉のあの伏家、今宵の宿りをす、さうおやっ。」ト、又いうノ＼と鉦打ち鳴らし、柴の外に佇みて、「行き暮したる旅の修行者、一夜の宿泊を御報謝に預りたい。」ト、云ふ聲洩れて秀慶は、立ち出でゝ柴戸押開け、「見れば貴公は六部殿、

此の大雪で嘸御難儀。妾は女の獨住、主に逢うて直々に、お頼みなされて御覽じまし。ナイお勝さん
お勝さんに「おい〳〵。今其處へ行くわいな。」ト、暖簾押揚げ立ち出でゝ、「仔細は何處で聞きやんし
たゞ御修行者の事なれば、御宿仕たとて大事もあるまい。マア〳〵此家へお入りなされまし。」「夫れ
は千萬忝い。」ト、草鞋脫いで打通る。「サア御煙草。」ト饗應す葛城。「イヤ最う御構ひなされますな、
然んたら女中が此の家の御主人。」「ハイ左樣でござります。」「シテ又貴殿は。」「イヤ拙者は尺八指南
致す秀慶と申す者、御修行者にはどれからどれへ、志しての御旅行でござります。」「往く先とても
定まらぬ、ホンの三界無庵とやら。」「其の樣に諸所の國を御巡廻りなさんしたら、嘸珍らしいお物語
がな。」「何さ、別に變ッた事もござりませぬ。」「併し又所替れば品々の。」「話も旅の憂さ晴らし。」「打
寛いで夜と共に噺しませう。」ト、二人が崩るゝ膝の前近く、風に扇つて倒るゝ栞戶、掛け直さんと立
ち上る、秀慶が懷より取り落したる劍の嚢、修行者屹と眼を注め、「烈しき夜風に吹き返す、此の栞
戶の形は筏木。」「ヤ何と。」「思ひ出せし事こそあれ。是れ此の如く紅葉葉は、今は盛りの嵐山。」ト、
言ひつゝ紅葉を畫いたる、件の行燈差置けば、葛城も進み寄り、「所は嵯峨の大井川、御太刀を奪合ふ
女と男子、遂に女は御太刀を摑んで、逆卷く水へ飛び込んだり。」ト、云ふを秀慶引取つて、「散り浮く
紅葉引替へて白浪染むる血汐の紅、扨こそ此の水底に曲者ありと心を許さず、まつこの如く指に矢

舂ひこト、祠の内に縛たる、楊弓を手に取り揚げ、うへうと放せば水中より、浮み出でたる二人の曲者、傍に控へつゝ立ち来て、色能き女の怪しき扮装、ほつと燃え立つ篝火に、こゝ人顔を見合はせし、其の曲者は汝で有つたか。「女は貴様で有つたよなア」ト、倶と容姿を践正めしが、何思ひけん容貌を和げ、「へ、、、、、「ハ、、、、、、」と打笑ひ、「思はず爰に来りが来ていはえ寝覚の、」ト言ふものゝ是れこそは、三帝曼の古金襴、確かに韻の此の襲、ト、修行者が取らんとする、其の手を葛城押隔て、「ほんに美しい此の裁に、差が貰うて袈裟にせうわいなア」「モシ若し六部殿、嘸草臥れさしつたらう、いつそお勝手へ、ちよつと奥へござんして、酒でも飲んで緩りと」「ドレ御造作に預らうト心残して修行者は、葛城と打連れし閨の内へ入りにけり。

日秀慶背後を見送つて、「怪しき雲気の靆く此の家、仔細あらんと思ふに違はず、大事用にて勘合の印を奪ひし女は葛城、殊に怪しきあの修行者、詮議を遂ぐるは今宵の内」ト、屹と一間を見返りしが、人音するに打驚き、上の障子を押明けて、忍んで容子を窺ひ居る。此方右衛門色成は、杢作を引立て来り、「是非共に葛城を、取持つてお呉りやれ」「イヤ／＼、嬢へ媒介して給はれ」「ハテ此の杢作が折る見て、御取持ち致しませう」「然うはならぬ、翌日ともいはずたつた今」「、色能き返答を聞かせて呉れ」「ハテさう仰しやつても、何うも今日は出来ませぬ」「イヤどうも断り言ふと借金乞ひの

お詫のやうだ。」「成程借金を催促るに似たるも理、今日は霜月晦日。」ト聞いて杢作仰天なし、「何今日は晦日とや、大事を慥と忘れたり。イデ家賃を取集めん、さうだ。」ト、指を繰折ッて、眞一文字に驅り行く。二人は宛然夢見し如く、茫然として居たりしが、邊を窺ひ小聲になり、「成程。」「奥様。」「御旦那下春様の御せを請け、權漢となつて入り込ンだも、葛城を詮議の爲。」「今宵泊ッた六部奴も何でも尋常の奴ぢやアねえ。」「コレ斷う〳〵。」ト呼ぎ、「必ず油斷るな。」「合點だ。」ト、柴垣踏み越え忍び居る。上の一間に人音して、障子をさつと引開くれば、秀慶が袖を引き留め、お花は近く差寄りて、

「そんなら貴方が頼光様でござんすか。妾やお前と許婚の雛伸が娘の花園、お愛しうござります。」

「アヽ勅敬條果詮議の爲、在園と言ひ觸らし、尺八指南秀慶と、容姿を變替し此の頼光、世の騒がしさに取紛れ、許婚は爲たれども、容貌さへ知らぬ花園姫、そなたが正眞の花園ならば、一首の古歌を書き贈りし、其の歌を覺えて居やるか。」「サ、其の御歌は。春の園くれなゐ匂ふ桃の花。」ト、先づ上の句を吟ずれば、一間の内に聲あつて、「したてるあおにいでたつをとめ。御染筆の蹟は花園が、こゝに持つて居ります。」ト、言ひつゝ出づる主の葛城、「ヤア今まで妾が持つて居た、其の短冊を如何してお前が。」「否々正眞の花園は、此の葛城でござんする。」「否々妾が。」「いえ妾が。」ト、爭論ふ二人を偽と頼光は打守り、孰れを夫れと分け難き、菖蒲と顔世の花園姫、思ひ出せし事こそあれ、中納

言惟仲は、大内守護の弓矢の家、其の娘の花園姫、女ながらも蟇目の口傳、知らざる事はよもあらまじ、去れ其れこそ正眞の花園。委々語れ」と言ひ放てば、ハットばかりに篤實ふ葛城こ　お花は傍に有り合ひし、楊弓の弓矢を取り揚げ、「仰せの如く父惟仲は、武官ならねど弓矢の家、幼き時より聞き覺えし、蟇目とやらのあらましを、恥かしながら」ト、座を改め、「抑も蟇目の濫觴は、天竺のまたたらし、吾が日本の天の香久山の櫨の木、これ神佛清淨の一挺弓、末筈に日天子、下筈に月天子、重籐の數、二十八宿に配ッて弓は丸くて外に巡り、弦は桁にて裏に位す。矢は其の中に業を爲す事、人間天皇に亂動せられ、動搖するに異ならず」ト、言ひつゝ弓に矢打番へば、葛城俄に色蒼醒め、身を慄はすと見えたるが、容姿はハッと消え失せけり。頼光莞爾と打笑み給ひ「果敢なき弓矢にありながら蟇目の法則備はりし、矢先に恐怖れて消亡せたる、此の家の主葛城は、怪性の者にてありしよな」ト、言ふ内に花園が、思はず持ちたる矢を放せば、側なる撫牛がつしと射返し、錦に包みし勘合の印は内より與はれたり。「確かに寶」ト、頼光が差出す手先をむんずと捕へ、火燵の蒲團押上げて、現はれ出でし五郎又が、寶の印を取り揚げたり。「心得ぬ汝が扮装、本名名乘れ」ト詰め寄る頼光。「ナニ、問はずとも名乘つて聞かせん、兼て音にも聞きつらん、市原野に年を經る鬼童丸とは己が事だ。觀念しろ」ト切り付けたり。「心得たり」と尺八袋に、仕込みし劔を拔き合はせ、請けつ流しつ頼光が、疾業氣

轉に鬼童丸、叶はじとや思ひけん、寶の印を引ッ啣へ、障子蹴開き驅け入りけり。「コレ〳〵花園點頭ゆかざる今宵の仕宜、汝は戸主葛城が、容子を篤と見定めよ。予はひと先づ踏ん込んで、鬼童丸を擒め捕らん。」ト、言ひつゝ太刀を鞘に納め、渡し給へば請取つて、「合點でござんす頼光樣。」ト心を注けよ花園姫。」「觀念ひろけ頼光。」ト、背後に佇細を窺ふ下僕、撲つてかゝるをはたと投げ退け、「コヽ。」

（道具かはる。）

〇一間の内に修行者が、怪しき者とや思ひけん、鬼童丸を乾度見遣り、錫杖に仕込みし白刃を拔き掛け、打ッて掛らん其の結構、飛び退ッて手を仕へ、「これうじあるな良門公、今日より鬼童丸が貴殿へ一味の其の驗、イザ御請取り下されよ。」ト、寶の印を差出せば、掌に採り上げて推披き、「是れこそ正しく軍勢催促の割合の印、コリャ汝が、豫々噂に聞く鬼童丸であつたよな。」「豫て頼光に遺恨のある此の鬼童丸。今より貴殿の幕下となり、源家の奴原鏖し、最前も頼光を討つて取らんと思ひしが、彼の鬼丸といふ銘劍を帶したれば、其の名劍に優るべき、劍なければ討つこと能はず、無念ながらも見遁せし。」ト、聞いて良門打點頭き、「是大井川の水中にて、女を殺し奪ひ取つたる、源家の重寶膝丸の此の一腰、暫時汝に預けん間、頼光を討つて取れ。」ト、錫杖に仕込みし件の劍、拔き取ッて差出す「仰せにや及ぶべき、此の寶劍さへ手にあらば、今宵の内に彼奴が首、實驗にそなへん。」ト、已

が刀を左に出し、右に寶劍請取つて、「良門公。」「鬼童丸ちつとも疾く。」「ハツ。」ト、答ふる詞に連れ幕と簾は下りけり。

○花園一間を立ち出でゝ「女ながらも今日よりは、頼光が妻の花園、如何なる妖怪變化なりとも、詮議を遂げいで置くべきか、あの二階こそたしかに寢臥室、さうぢや〳〵。」ト、帶引きしめ、往かんとすればアラ不思議や、ありし容姿を引變へて、ひらり帽子に振りの袖、影の如くに葛城が、容姿は彼處にあらはれたり。唄「うきたるくものゆくへをば、風の心にまかすらん、風の心もしらゆきの、きえかへりてはおもたきの、いは波高くせきかへす。」背後に窺ふ鵙八蝶平、「曲者遁さじ。」ト、組み付くを右と左へ振り解き。」唄「わがせこが來べきよひなりさゝがにの、絲のもつれやみだれがみ、心のやみの水くらく、さはのほたるの夜は猶、こがれよるべはあをやぎの、つゆかなみだかはら〳〵〳〵と、もすそみだるゝしのびねに、ひとく〳〵ときやう讀む鳥の、わが身にぞつとしみわたり、のうおそろしのはんにや聲。」「どうでも怪しい葛城め、觀念しろ。」ト、二人の男打つてかゝるを事ともせず、唄神變不思議のえうくわいは、かすみをふんで身もかろく、はなのか散らすくものそで、こゝにあらはれかしこにきえ。」花園をはつたとにらみ「汝知らずや妾こそ、南閻浮州に蟠り、葛城山に年を經る、土蜘蛛が娘の小女郎、大日本を横領し、魔界になさんと大望を、企てたまひし父上は、頼光に討ち亡

ほこれ、屍は泥土と成つたれども、猶一念は五行造化の機にとゞまり、一念我が身に再繼ぎ、華鏑が往昔にあらねども、柳の落葉を船と爲し、大井川にて白鳩の、咥へ來りし寶の印、奪ひ置きしも頼光や、罪に沈めんたが計らひこト、蝶平が襟髪掴み小膝に引敷き動かせぬ。花園も心附き、「ヤア小賢しい汝の詞、假令如何なる變化なりとも、天孫附屬の天下の威光、所天頼光が武勇を加へ、討ち亡ぼさで置く可きか」ト、太刀おッ取ッて進み寄る。其の間に蜻蛉の眼八が、組まんと寄るを葛城は、扇を揚げてはつたと投げ退け、一ッの髑髏を取り出し、「さいつ頃、頼信が陣中にて奪ひ置きし、將門が此の髑髏、彼が一子良門にこれを與へ、猶も謀反を勸めしと、我が神變の奇術を以て、彼を此の土に招き置く」と、詞の内に蝶平が、がばと起きるをもんどり打たせ、「誰かある。此の髑髏を良門に手渡し爲せ」ト、呼ばはる聲と諸共に、一ッの大蜘蛛現はれ出で、髑髏を咥へて消え失せけり。心を勵まし花園は、太刀拔き持つて戰はんとす。葛城飛亂離と身を踊らし、寒紅梅の早咲の枝おッ取りのべ立ち向ふ。唄「りんたいじやうかんのまさかり、うちたてくとうくく、ぱつとちつたるこうばいの、花もたちまちほのほとなつて、ゆきかあられか、もまの月の、影もおぼろにて」「女め捕ッた」影も朧に消えにけり。

〇樓上、されば修行者は、小膝に臉を突き持たせ、轉寐爲して居たりしが、むつくと起きて軒端を傳ふ

怪しの蜘蛛を吃とながめ「ハッテ訝しや、いま夢ともなく現ともなく、氣高き女忽然と現はれ、「これこそは汝が父將門が髑髏なり。是れを汝に與ふる間、父の宿志を請け續げヨ。」ト、云ふかと思へば夢覺めて、其の形壯なるあの蜘蛛の、髑髏を咥へて舞ひ下るは、ハテ心得ぬ。」ト詞の内、髑髏をはつたト彼處へ落し、其の儘蜘蛛は消え失せけり。「たれ。」と言ひさま手に取揚げ、「父尊靈の御首に、疑ひなくば眼前に、一ツの功驗を見せ給へ。」ト、押戴けばアラ不思議や、障子に映る髑髏の影、七ツに分れて七曜を、此處に映せし如くなり。背後に窺ふ成平粟平「良門遣らぬ。」ト左右より、打つて掛るを事ともせず、秘術を盡して戰うたり。何時の間にかは賴光公、裝束變更め欣然と、背後の方に座したまひ「ヤア〳〵良門われこそは、源家の正統多田の新發意滿慶が嫡子、源の賴光なり。任國に赴きしと、世に言ひ觸らして容姿を更へ、忍んで都を徘徊なすも、汝を見出さん豫ての計略、最早遁れぬ覺悟なせ。」ト、言ふ内に御側に、控へし武士下り立ッて「村長杢作とは假の名、我も源家譜代の家臣荒岡次郎忠正なるわ。斯く八方を取り卷けば、遁れぬ所だ腕まはせ。」「こしやくな奴原、觀念しろ。」ト、良門凄む氣色もなく、縱横無下に切ッて廻る。時に二階に聲あつて「草も木も我が大君の國なるに、何處か鬼の栖なるらん。」「變化の其處を立ち去れ。」ト呼ばはる聲に打驚き、人々屹と見返れば、中央には髙城が、六臂は宛然枯木の如く、怪しき扮裝にすツくと立つ。右の方には花園が、弓矢携へ

控ふれば、左の方には鬼童丸、さも勇ましく扮装ちて、恐れ氣もなく坐したりけれど。良門不審の顔色にて、「サア心得ぬ鬼童丸。コリヤ汝も頼光が、間諜であツたよナ。」「云ふにや及ぶ、鬼童丸と名乗りしは、汝が持つたる寶劍を、奪ひ返さん計畧にて、秀郷が一子俵の二郎千春なるわ。」「扨は最前某に與へたる、勘合の印も僞物であつたよな、チエ口惜しい。」葛城其のとき聲高く、「假令此の家を何萬騎にて取卷くとも、妾神變の通力にて、易々落し參らせん、心易かれ良門殿。」ト、持つたる扇を振り上ぐれば、「女あやらぬ。」ト取卷く組子、ばつたばつたト蹴轉打ち、六ツの冑に六ツの首、一度にふつつと捻ぢ切ツて、莞爾と笑ふぞ凄まじき。花園は進み寄り、「サア葛城、此の日の本を立退るか、左なくば父より請繼ぎし、蟇目の矢先にまつ斯ウなして。」ト、弓に矢かかりト打番ふ。頼光御聲爽かに、「此の膝丸の寶劍にて、汝が父を討ちたれば、名も蜘蛛切と稱び更へたり。いで／＼劔の威德を見せん。」ト差付け給へば葛城は、遽に身心戰慄ひ、「劔の威德に隔てられ、蟇目の矢先の怖ろしさに、障礙をなす事叶はぬか、エ、口惜しい。」「サア良門心を更め降參なせ。」「ヤア降參などとは穢らはしい。死人の山だ觀念しろ。」「あれや／＼／＼。」「どつこい。」「マヅ當年は是れ限り目出たく賣り出し。」

正本製三編 終

正本製　四編

編者　柳亭種彦

昔模様女百合若　於菊幸介物語

○一本國屋のお美津さま、御見物で御座りますかヽヽト、貸物屋の眼七が、土間の内より喚掛けられ、後家のお美津は花道を往きながら振返り「ほんにお前も能う御見物にヽヽ」「ハイ閙しい暇を缺いても此の頃下ッた辰之助の評判、どうして見ずに居られませう。」「ほんに鎌倉始まつて、此の位大入りは御座んすまい。」「それは其の筈作者は名代の円左衛門、此の幕からが新狂言の一番目、面白い事で御座りませうヽヽト、話の中に、チョン〳〵と舞臺の廻る知らせの拍子木「いよ口上。」ト動搖めく聲ヽヽ口上「狂言名題昔模様女百合若。役人替名の次第、一つ百合若の小性小鷹丸、じつは白鷹の生霊(小野川宇原治)、一つ船頭早尾の又(三笠丈右衛門)、一つ同じく取梶の七(玉川七左衛門)、一つ同じく取乗の三(三澤治部左衛門)、一つ百合若大盡の娘百合姫(水木辰之助)、右の役人殘らず罷り出で相勤めます。此の

處第二番目發端始まり左樣」チョン〳〵〳〵……チョン「そんならば眼七さん」「後刻お棧敷へ參りましよ」「西の下で御座りますよ」

○幕明き、船頭の詞「ヤレ〳〵凄まじい風であつた」「ドウやらカウやら漕ぎ拔けて」「こゝは慥か玄海島」「兼々謀し合はせた通り」「コレかう〳〵」ト四人の船頭、耳から耳へ、私語き合ひ「必ずぬかるな合點だ」ト、立ち別れてぞ忍び居る。義太夫「昔はがんくつのはらにこめられて、三しゆんのしうたんをおくり、いまはかうでんのうねにすてられて、こてきのいちぞくとうらみしも、かりにこきやうのたよりあり」いたはしや百合姫は」「我いやしくも綸命を蒙り、もゞりの大敵を一戰に討ち滅ぼし、此の島まで凱陣なせしが、巖が根枕思はずも、睡眠を催す其の中に、國家に野心を插む、佞人ありと覺しくて、我のみ一人殘し置き、悉く船を漕ぎ去り、世界のたより絶えたれば、冥土も同じ離島、言問ふものは磯千鳥。」義太夫「いそ山おろし沖つなみ、月日はこゝもかはらねば、みねの花谷の雪、そらのけしきをこよみにて、ゆびをり見れば」「もう三年おもへば〳〵口惜しい」義太夫「くやむにかひもあらいその、もくづにかゝるつゆの身も、あればある世のならひかや、さうもくだにもまれなれば、まして五穀のたねもなく、いそのみるめやひかたのかひ、なるゝになれてつりのいと、たひ釣りかつを釣りかねし、かのうらしまにあらねども、いつかかへらんふるさとの、そらはかしこと

うらなかめ、ばうぜんとして坐せしが、なぎさにきつと目をつけ給ひ。」「ハテ心得ぬ黄昏に遣りし此の足跡、ム、彼處に舟の繋ぎあるは、今の暴風に吹き立てられ、此の島へ漂着なせし賊子ありと覺えたり、何猶たしかみて立ち歸らん、エ、有り難や嬉しやと」ト、言葉のうちに最前の、船頭背後に忍び寄り、櫂振上げて物をも言はず、右左より打ちかゝる。百合姫ヒラリと身を換し、「何ゆゑあつて此の狼藉、仔細を語れ。」トいふのも聞かず、又打ち込むをかい潜り、もどりを打たせて投げ退けたり。「ヤアヤア姫君それこそ敵の廻し者、御油斷あるな」ト件の船の梶子を刎ね除け、一人の若者躍り出づるをキッと見遣り、「珍らしや小鷹丸、懷かしかりし近う／＼。」ト仰せに、「はつ。」ト立ち寄る所を、「觀念しあはこと若子共、むさぼり附くを小腕捻ぢ上げ、膝に引敷き頭を下げ、「まづは麗はしき尊顏を拜し恐悅至極。」トいひさまに礑と投げ退け飛び退り、兩手をついて蹲る。百合姫莞爾と打笑み給ひ、「もぐりと戰ふその折に、分捕高名手柄を著はし、討死せしと思ひの外、勇壯なる汝の扮裝、是れは格別最前より此の百合姫を討ち取らんと、慮外働く船子共」トいひも果さずこりずまに、又取り附くを千鳥に掛け、一度に投げ退け、「小鷹丸樣子は如何にぞ、なんと」ト邊の岩に腰打掛け、悠々として坐しければ、「されば候籠臥御前、君を恨み給ふの餘り、御家臣別府太郎と語らひ、斯かる荒磯に捨て參らせ、彌猛る我儘非道、若し存命にて坐さば、人知れず害せよと、船頭ばらに金を與へ、言ひ含め

るを聽き濟し、船底に深く隱れ、念願叶ひし御對面、いざ〳〵御供仕らん、片時も早く御歸國あれ、憎ツくきは船頭ばら」ト兩手を宙にて打返せば、ドンドト仰向に倒れ伏し、一度に悶絶したりけり。百合姫なんと思ひけん、藤弦掛けし丸木の弓、鯨の鬚にてはいだりける、三年竹の征矢打番へ、小鷹丸に差向けて、已に放さんその結構、小鷹丸ハツト飛び退き「何故あつて某に」「ヤヤ何故とは白々しい、疾く〳〵正體顯はすまいか」「ヤ、、、否く以て拙者めは、妖怪變化の類にあらず、正體を顯はせとは心得ぬ御言葉。」ト、いふに百合姫なほも詰め寄せ「最前も言ふ如く、許多深傷を被つて船縁を踏みはづし、まツさかさまに博多の沖へ、落ち入つたる小鷹丸、再び來らん樣はなしト、心を附けて窺へば、これ見よ眞砂に遺りし足跡は、其の樣風の如くなり、人間にては餘もあらじ、サア尋常に身の上を、語れ聞かん」ト云ひ放つ。小鷹丸は差俯向き、暫し言語もなかりしが、漸うに顏を上げ「斯くなる上は今更に、何をか隱み申すべき、我れ眞は人間ならず、君の寵愛蒙りし、白斑の鷹の生魂なり、御在所を尋ねんと、羽翼に任せ飛び巡り、やう〳〵これに御座ある事、窺ひ知つて立ち返り、せめては故郷に文の音信、その御役に立たんと思ひ、筆と硯を羽翼に隱し、誤つて海に落ち入り、其の儘命は絶え果つれど、思ひは此の土に留まつて、水底に小鷹殿の、死骸あるを探り知り、名ある所縁ある我が魂を、假に宿して暫しがうち、御眼を掠めしも、君を事なく故郷へ、送り申さん其の

猶でこト歳ふ音に、物語れば、扨は衣が秘藏せし、白旗の鷹の靈なるか、不便の者の心や。ト、涙に暮れ給ひける。小鷹丸さつと見遣り、猶豫をもて時移らば、必ず惡風起るべし、斯く淺ましき小船なれども、某守護し奉れば、御氣遣ひ更になし、御道案内仕らん。ト片方の岩にひらりと飛び乗り、我を目當にいそがせ給へ、今こそ眞の小鷹丸が、果敢なき姿御覽ぜよ。ト、いふかと思へば、忽ちに、太刀も刀も消え失せて、遺りしものは一具の白骨、微塵に碎けて飛び散つたり。時に不思議や白旗の鷹、雲に翔つて宛然に、故郷の方は此方ぞ。ト、物言ふ許りに飛び去れば、百合姫嬉しさ限りなく、件の船へ乗り移る。漸う氣の附く、船頭共「さうはさせぬ。」ト取り附くを、其の儘海へまつさかさまに、ほつと散つたる水煙、チョン、義太夫「あとしら波と、ヨヨヨ〱〱〱……ヨヨここぎてゆく引く(幕)あとしやぎりに拍子木なしに直に引返すと此の芝居の裏口、しやぎりは矢張芝居の中にてうつて居る。」

○「鰶の鮨、鰺の鮨、海鬼灯やほゝづき。」「蝶々蝶々が三文々々、よう飛ぶのが三文。」ト商人見物とりどりに、行き違ひたる樂屋口、「ア、もし、お浮雲う御座ります。」ト、茶屋の娘が取る手を突き除け、微醉機嫌の後家お美津「なんの私や醉やせぬ、サア醉やせぬけれども、あのお前に醉うたふりして眞のお頼み。」「おや仰山な、」シテお頼みの趣は、と、藤十郎ならかういふ身でいふ處で御座ります。」「あ

れさ冗談ではござんせぬ、お前もつきせぬ屋のお花さんといはれては。」「ナャいやよ誰知つたものもござんすまいに」「ナァ後家の口から恥かしながら、酒の對手に呼びたい人が」「役者衆でござりますか。」「アイ。」「ハテ誰様でござんせう。」「芝居の内にて藤十郎さんやァ、甚兵衛さんや、澤之助さんや、吉右衛門さんや、辰之助さんやァ、イヽエ。」「ナニ、それ〳〵慥かにあの水木さんを。」「アヽ、これ委しい事はお前の内で。」「マァお出でなさりませ。」引違へて眼七がうろ〳〵見廻し〳〵「急用だと余を呼び出し、其者が何處へかなくなるとは、イヤ氣怖なことがあるものだ。」ト、覗き込んだる樂屋口、楽子の小三と打連れ立ち、立ち出づる其木手間藏、眼七は傍へ寄り「急用だと呼び出したはお前樣で御座りますか。」「ナニ、いかにも拙者。」いや〳〵知らぬな、それ、知らぬ〳〵。」これ小三手前は金五郎といふ色があるはよしか、それも承知余が上げて逢はしてやらうというたはよしか、其の時汝やつても粹なお方さんでござんす、此のお禮には貴君の惚れてござんする、あのお菊さんを取持つて、上げやんせうというたぞよ。」「アイ、いうたがなんぞしましたかいな。」「したかいなどこのかえ、个においてお菊めは、熱湯をついだ燒餠茶椀、とん〳〵として手がつけられぬ、花見に行きたいチッと承知、芝居が見たいチット承知と、今日見物に來たでないか、それに芝居は見て居らず、茶屋へ許り往つて居るは、小間物屋の幸介めと、大方ちん〳〵鴨南蠻、その入用は此方へぶつつけ、余に手盛を喰はさうとは、

人を運鈍にした奴めら、手打にするぞ此處へだせ〳〵ト、ぎしやばりかへるうしろから「サア〳〵お手打になりやんせうト、いはれて吃驚振返り「其方はお菊いつの間に」「サア餘り氣合が惡いによつて、小三さんにたのんでおいた、茶屋の二階で暫時の間休んで居た、その樣に腹立てさんすと手間歳損。」「實のないのが知れやんす」ト、小三も傍から乘せかくれば「オット誤り閉口〳〵、そんなら序にやうも棧敷で一杯一緒に來やれ」「急用札が氣に懸れど、幕に對酌と出掛けませう」「サアござんせ」ト契子のお菊、小三にたれと目で敎へ、皆々打連れ入れにけり。四方見廻し金五郎「小三々々」ト立お寄れば、物をもいはず取る胸ぐら「エヽ氣違め人中で、靜かにしや。」ト突退けられ「アイ、氣も違ふ筈おやれいな、文を遣つても返事もせず、内にはさつぱり居やしやんせぬと、委しく私や聞いたわいな、大方何方ぞへ這入り込んで、碌な事ではござんすまい。」「ヤ、手前誰ぞにしやくられたな、それ處だやアねえ余ア勘當されたわえ。」「エヽ、エ。」「眞にたれも其の筈さ、商賣は投げ遣り次第、日さへ暮れれば驅け出して、揚句の果ては流連り、不首尾が積つて母親が、お過ぎなされた義理ある親、綿右衛門殿の位牌を取りだし、一文二文の利を爭ふ、町人の身を以て分限知らぬ驕奢の段々、終には身代潰し居らう、若しもさういふ事があつては、此の位牌にどうも立たぬと、其の夜のうちに追ひ捲くられ、餘り酷いと一旦は、親を恨みは恨むものの、能く〳〵おもへば此方が不身埒、いま道で見た蝶

蝶賣、此處があれは上方者、編笠で顔は見えねど、もう餘程な年の樣子、あのやうに精出しても、二百といふ錢は取れまい。それを又買ふ者は、二本で五文に減けるといふ、イヤ減からぬと爭ふが、商人の善い手本、なんとやらいふ唐人は、蝶々の夢を見て、我が身の上を悟ッたと、讀本に書いてあつたが、余はあの蝶々で始めて夢が覺めたわいの。」ト、話せば小三も淚に暮れ、「エ、まァお前のおッ母さんは、さりとては分らぬお方、いとしぼなげに勘當して、後家の癖にだいそれた、辰之助に惚れるとは。」「ハテそんなら余が母親は。」「アイ隣座敷で聽いて居れば、化粧坂の榮壽へ往つて、辰之助を呼ぶといふこと。」「ア、夫れでよめた。余といふ子があつては、手前の年が知れるによつて、纔かなことをおとりに取り、勘當したはひよんな自分、母親が色氣附いて矢張此の身の不仕合。」「私も後刻榮壽へ往けば、お前も跡からござんして。」「何彼の樣子をきいたら小三さん。」「金五郎さんかならず待つて居るぞいな。」一折から知らせの擊柝チョン。二人は別れ入りにけり。また出で來る眼七が、「どうでも氣に懸つてならねえ、余を喚んだは誰だか知らぬ。」ト、いふ後から小聲にて、「眼七、眼公、眼先生、喚んだは余かや、イヤ拙者かや。」「ホヽ仰しやるは手間藏樣、それでも貴君は最前に。」「知らぬといつたは四方に人目、樣子といふは此の度の、下の作者の門左衛門も、跣足で逃げる新狂言。」さらば還向に御目に掛けん。」ト、取り出したる縞の財布、眼七は中改め、「これや價金で四五十兩。」「サ、そ

れこそは此の芝居で、一番目にある忠臣藏の、五段目につかッた金、小道具部屋から盗んで來たわい。これから／＼、ト囃けば、「成程こいつは當り狂言。」とん／＼間に行ッた時は。「褒美の金は望み次第たに」「それはあんまり時代な臺詞、矢張世話に出金で、一やりかけるのはまァ首尾能く、初日を出した上でのこと、ちつとも早くお菊が親方、頓平とやらを呼んで、「一左様なら手間藏様。」ト眼で來やれ」といふ折柄、父も知らせの拍子木、チョン／＼「ナニ聞くさうで舞臺へ木が廻りました。」ト二人打連れ入る後へ行き合つて、最前の蝶々賣が獨言、「此の頃噂に噂を聞いた、金五郎とはあの若いの、夫婦子のお菊が惚れて居るは、小間物屋の幸介とやら。あゝ、吾妻の道行に、蟲さへも交ひ離れぬとかたるもの、況してや人間若い身そら、好いた男もなくてはなんとせうぞいの、ただそれを思ひ断らさねば、ならぬやうになつたが浮世、義理程せつないものはないに」拍子木のおと「チョン」「ハア幕があくさうな。」チョン／＼／＼／＼／＼。天王立ちにて（幕）

の拳「こう、りう、ごう」「ヤイ拳も止めにしろ、面白くない喧しい。」ト、手間藏が腹立顔、眼じは打笑ひ「これお菊さん、堅法華が御とりこしへ、呼ばれたやうに肝腎の、本尊様を後向け。」「モシちつとこちらをお向きなされましに」「イ、エ私やこれが勝手でござんす、折角人が面白く、芝居を見て居る最中に、ヤレ永壽へいつて遊ばうと、心なしナ手間藏さん、アヽ、頭痛がしてならぬわいな。」「そりや

始まつたわ、これお主は往生際の悪い生まれた、ア、何よ、それ上方の連歌に、どうともなされ俎の鯉、といふ句があつた。その鯉といふ奴が、びんしやん〱と刎ね廻れど、俎の上へ乗せると、もう叶はぬと往生して、おつとして居るわやナ。そこでどうともなされ俎の鯉。手前も丁度其のとほり、なんぼびんしやん〱しても、身受といふ俎の上へ乗り、黄色に光るいびつなり庖丁で、料られてはもう叶はぬと往生しや、なんと眼じさうではないかナ」「イヤもう旦那の仰有る通り、今日中に身受をすると、お菊さんの親方を呼びにお遣りなされたれば、後刻来るでござりませう、鐵漿を喰ひたがつて、白歯に黄の附く年まで、藝者をするが見栄でもあるまい、受出されれば直に奥様、あんまり嫌でもござりますまい、なア申シお菊さん。」「エ、知らぬわいな、手間蔵様は眞底から、野暮に生まれたお方なれば、せう事もないけれど、眼七さんまで同じ様に、身受々々と仇漆濃い、金で添はれる藝者おやない、申しにくいが大和惣、謂ひ串とて御存じの、土地に育つた紫は、ねきよらんせのおきせんのと、生けた色の京鹿子と、あい、一緒にはなりやんせぬ。新内さんが語る通り、御新造さんの奥さんのと、上見ぬ私で暮さうより、好いた男と裏屋ずみ、九尺二間が玉の輿、糊費も要アとなるのが望み、まアさう思うて下さんせいナ、起ち上るを裳裾を捉へ、「なんと云はうが身受をすれば、お主が身體は余が氣儘」「身體は儘でも心まで、お前の儘にはならぬ程に、喉が立つなら突きなりと、アイ切

りたりとしやんしやんせ。」「そんなら泣や性根を据ゑて、一一どうともなされ当の顔こ」涙振拂ひ入りにけり。」風さえみく〳〵に尾花のみだれ、障子のうちにお花が、こゑ、「サア幸介さん、辰之助さどうぞ一目」會ひたいやしく〳〵と絡命をかうむり、もだりの大敵一戰にせめほろほし、此のしまでないとんなし、肯おみえくらで思はすも、ねぶりみちよはすそのうちに、「マ、もう出来ねえ、堪忍してくんなへ〳〵」「アヽやうりや此の内に、幸介のも。」よなち寄る手間蔵、眼七がこれかう〳〵と私語けば、打合點いて手間蔵は、一間の中へ入りにけり。幸介は立ち出でて「イヤ眼七さん、何かお前はわたくしに。」「用があると呼びに遣つたは、外でもない手間蔵が、お菊を身受するといふ。」「エ、」「サアさうなつたら泉州、伊賀屋助右衛門正本に、お菊幸介なんとやらと、祓る様にならうかと五十両お渡した。サアこれを手附に渡し、なんでも彼方へ遣らぬ様にと、頼まれもせぬ事なれど、余り久しい作平次者よ。ニヽネれは千萬忝いが、假令手附を渡したとて、又後金の才覺が。」ト、思案に暮るゝ後から「其の金私が貸しやんせう」ト聲掛けられて振返り「誰だとおもへばお花さん、コレ戯談をいひなさんな。」「イヤ戯談ではござんせぬ、本國屋の後家子お美津さんが、辰之助さんに惚れ込んで、今宵何卒逢はせてくれと、手を合はせわたしへお頼み、受合ふことは受合つても、女子の客は取らしやんせぬは、聞かいでも知れたこと、お前の顔が辰さんに、生寫しな其の上に、聲色も能う似てあれば、水木さんの衣裳

を借れて、勤めて見る氣はござんせぬか。」「それおやというて此の體へ、氣聰かいし振袖衣裳、殊に化が顯はれては、お前へまでの難儀になる事。」「何のお前、すつぽり話したその後では、本名が顯はれても、やつぱり最惜しうなるわいな、あの家は名代の身代、百兩や二百兩はつい一寸與れさうなもの、ナアまうし眼七さん。」「成程こいつア面白い、萬更でもねえ後家のお美津、余なら直に相談するぞ。」ト話半分へ門口から、「手間藏樣といふお方は、此方にでござりますか。」ト、いふ聲聽いて一間の内、「オ、手間藏は茲に居る、何の用だ。」ト立出づれば、見附けられじと幸介は、あたふた金を懐中へ、入れて次へご立つて往く。件の男小腰を屈め、「私はお菊が親方頓平と申す者、身受なさると承り早速に參りました。」「オ、大儀々々、卽ち手附の五十兩、サア受取れと差出す、財布を頓平受けとつて、紐引解き吃驚し、「モシ／＼此の中には、紙に包んだ石ツころ、金は一朱も御座りませぬ。」「なに其の中に金がない、ドレ見せやれ。」とツくと改め、「ハテ此の盗人に盗れたわえ、眼七一寸逢ひたい此處へ出やれ。」「ハイ出ましたが何の御用で御座ります。」「返して呉れ。」「そりや何を。」「汝が盗んだ五十兩。」「コレいい加減な事をいはつせえ、覺えもない盗人呼はり、お武士とはいはせませぬぞ。」「此奴盗人たけ／＼しい、何ぼ立派にほざいても、コレ此の石を包んだ紙は、我に芝居で遣つた紙纏頭、賣り買ひにない國の名產、余が此の鼻紙としつくり合ふが確かな證據。」「サアそれは。イヤ知ら

お知らぬ／＼、なんといつても知らぬ／＼。」「知らねば汝斯うしてこますト、煙草盆おつ取り上げ、丁とハッシ打ちつければ、額破れて流るゝ血汐、見兼ねてスッと立ち出る幸介、「其の金私が盗みました。」「アヽそれでは。」ト進み出る眼七を押退けて、「イヤ深切は忝いが、禮は心で／＼。」ト、[illegible]たゝきつ眼で押へ、「申し手間藏様とやら、其の金お戻し申すからは、どうぞ此の場は波風立たぬやうに。」ト、濟ましまし悪い所なれど、神妙に白状した。其の褒美に免して呉れる。」ト、中改めて又驚天、ヤ、／＼ヤ、此の金は皆道明に、なに其の金が道明とやら。」ト、驚く幸介さん／＼と、眼七につこり出で、「幸介さりや手前あるからうぞ、斯うなるからは何も彼も、有り様にいつてしまはう、お前が彼方へ身受されては、どうも男が立たぬによつて、手間藏様の持つて御座る、あの金を盗んで下されと、汝を頼んだだぞよ。」「いつ余がそんな事をつ。」「イヤ言つた／＼。」「成程若い身の上では可哀相だと常々から涙脆いが余が癖、盗み取つた五十兩、とつくりと改めて今我に渡したを、いつの間にやらこれこんな鉛小判と摺り替へて、其の金私が盗みましたと、見せ掛け許りの寶事師。」「イヤいけ図太い前髪めこト聞くより手間藏幸介が、髻を摑んでぐつと引き寄せ、「サア摺り替へたほんまの小判、こゝへだせだしやれ。」ト無體の打擲見るに堪へ兼ね、表に控へし武士が、つか／＼と内に入り、兩人を押隔て、「察するところ始めより、贋金をつきつけて、此の若衆に無實をいひ掛け、菊とやらいふその禁下を

手に入れんとはこすとい謀計。」「默れ武士始めから、此の金が贋金であつたといふ、何ぞ確かな證據があるか。」「證據といふは最前に、それなる男と何事か、竊々話す芝居の裏口、とつくりと見ておいた。」「イ、ヤ夫りや證據にはなるまいわえ、見れば汝もいけ年をつかまつて、引込んでけつかれ。」ト冷む氣色はなかりけり。」頓平おづ／＼這ひ出て、「成程今お出でなされました、お武士の仰しやる通り、その小判は初手から贋金、證據人は此の頓平、一番大和屋氣取りになつて、これから判きと出掛けませう。」「諸件も御免なされまし。」ト眞中へ押直り「扨狂言が入組みますから、先づ私が身の上の本讀みから致しませう。私は辰之助と、此の度一緒に下りました、狂言作者門左衛門でござります。最前此のお武士が、樂屋をうろ／＼なされまして、一番目にする忠臣藏の五段目に、遣ふ財布を盗んでお出であそばす樣子、もし茶番にでも遣はつしやるか、なんにしても合點がゆかぬと、氣を附けて見て居れば、限七とかいふ男にその金を手渡しして、なんだか二人がこそ／＼話、あれは何方のお人だと、承りにつかはしたら、藝子のお菊に惚れてござる、手開藏樣と申すことゝ。お菊が親方頓平殿は、ヤレ近松々々と日頃贔屓にしてくれられますれば、もし是れが廻りまはつて難儀にはなるまいかと、頓平殿の處へ往き、樣子を話して居る中に、手開藏樣からお人でござる、お菊を身受しようとある。扨こそ先刻の小道具は、こゝへ遣ふつもりだなと、狂言の筋が知れたゆゑ、此方も矢張六段目の

一文字屋の衣裳を着て、役人かへ名は親方頓平、本名近松門左衛門、一寸端役に出掛けたは、其の實偽りも見出す頃、番頭といふは其の財布、一文字屋の此の衣裳、寸分違はぬ縫入、はつと計りの勘平ならぬ腹切りの身を悔いては、ほつと無常が居りませぬ、これ此の財布に血が附いて、すいなかつた縄目が附いて居るが、芝居で遣つた確かな印、今度下りの門左衛門も、跣足で迷ふ筋狂言の二番目は、まだ出ませぬかな……、……やれ／＼かうざに無くなつた」トいひ立てられて首へにやり、「眼七やい」「手間蔵様」「でえぶ日和が」「変つて来ましたぜ」「さア、あつとさうも御座りませい」レ幸介殿とやら、何をいうても彼方は帯刀者ぢや、腹がたたうが辛抱して」「否もう、お陰で胸の明りが立ちました。お上からは、申分はござりませぬ」ト言葉のうちに駈け来る丁稚「旦那さん」ト門左衛門が顔見て吃驚「すゝ、膝を潰す筈だ。余ア旦那のふきかへだ」頓平さんは道から別れて、幸介に付いてござるに、それはいよ／＼大変だ」「何がそんなに大変だ」「大変だ、お前が出ひや、お菊さんの身受に来ると、内は亂れき大騒ぎだ」「ナニ、こいつは分らねえ、そりや何ぞの間違へだらう」「間違へちやアねえ、蔭類が、お菊さんの身受をするとて」「エ、大きな声だ」ト遮を見遣し、「眼七め手間蔵め、こそ／＼消えて無くなる奴さ。モウ余も役はねえ、小僧とお其邊まで送つてくんな、ネ武士様幸介殿これに縋りとござりまし」ト足を早めて立ち歸る。幸介は手をつかへ「此の身の悪名を雪いだ

こ、貴君様の若御達、有り難う御座ります。」「イヤもう現在其許と見た故に、此の事は止めたれど、詮様のないにホッと当惑、善い所へ門左衛門が、来合はせたが此方の仕合。夫れは格別、チト其方に頼みて無心がある。」「ハイ〳〵私に。」「其の無心は外でもない、余りお菊に惚れたわいの。」「エヽこの、操にしても善い年でも、つまらぬことも聴かしけれど、是れも因果かや。」「たつた一夜何卒其方の執持で、逢はしてさへ下さつたら、身受してすぐに余が嫁にして添はして遣る。」「おやというてあのお菊が、○○○おもひこんではなかなかの出を、つんてきたとておしやなかの、なびくことはないわいな。」「ハヽア浮き居るわい。」（此の道具ぶんまはす）

〇「一手門蔵様。」「一眼七。」「まんまと旨く失策りました。」「なんでも本まに見せる積りで、ぶつ毀した額の其の傷。」「金にさへなる事ならと、辛抱して居ましたが、どうか此の塩梅では、犬死ではない大傷に、ならうと思へば其の故か、大分痛くなりました。」「又先刻の贋金を、盗んでソット逃げ出したは、門左衛門が一年に逢はふうも先へ詰め、最う一狂言やらかす積り。」「成程お菊が親方には、寺参りして居るとの事、なんでも押へて往生さしやあ。」「夫れで行かねば、まだ余が前髪のある時分、ぬすんで置いたなんばんいもかしらの此の利鋭、捨鉄にしても慥かに百両。」「そいつを掴いて、此の額の膏薬代を些とも早く。」「一眼七手前はこれからう。」ト、なにか囁き追立て遣る。折柄、向うに数多の人

頃は掛念佛の聞ゆるは慥かに葬禮、ム、さうだ」ト尻引絡げ身扮装、念佛講中附き添ひて、動揺ぎ來る弔ひの行く先へ、ト立ち、此の葬禮待つた、訊ねたい仔細がある」ト、いふに驚く人々を、押鎮め、丁稚の丁松、先づながえと見せて袋杖、おつ取つて進み出で「イヤ何れもお構ひあるな、此の丁松が奉公初め、忠義の働きお目に掛けん」こりやゝい、琵琶小路に隠れもない、古手屋の葬禮は、知つて止めたか知らいで止めたか、但しは汝大胆か、イヤ氣も違はねば此の弔ひ、見ちがへもせぬ舅子のお菊、身受に行くのであらうがな、其の譯聞かぬ其の中は、此の輿遣らぬ」と威はつたり。「アハ、、、、今丁松が遣り掛けた此の弔ひ、止すなりと左分なりと、止めらるゝなら止めて見ろ」「アリヤ／＼／＼／＼こハウン／＼／＼／＼」「ェ、騒々しい丁松、我ゝ下つて居ろ」ト上下着たる男が立ち出で「ハイ私が弔ひの卽ち施主、古手屋八郎兵衛で御座ります」成程貴君の仰有る通り、お菊を身受致しまするは、今葬禮を營みまする母妙貞の豫ての遺言、仰しやり分も御座りますかは存じませぬが、母事は高野山へ參詣の途中にて、急病で相果てまして、骨になつて居りますれば、ト御相談が分りますまい」「イヤ／＼骨にならうが骸にならうが、お菊を外へ身受されては、身共が顔を切らねばならぬ」「左樣なら一層御切腹遊ばしまして、冥土で母と直々の御相談になされまし」「いや、此奴武士を馬鹿にするな」「どうして貴君お武士をつ」ト爭ふ後ろに大勢が、「もう日が暮れるに、

つまでも分らねえ武士だ。稲荷に掛つてやらかせ〳〵。南無阿彌陀佛武士御陀佛。なんまいだんぶつ
さむらひおだぶつ。なんまいだ。侍だこと。女が先方に突きやり押しやり、多勢に無勢狼狽る、手間藏がなかに伴の與吉、寺中へ逃う囃き込んだり。跡から來いの女旦那さん〳〵、いつ下さるので御座りやするな。お寺まで参りやしたな、二度死ぬらなア御座りやせぬ。たつた一度のお弔ひだ。私等が様なごつほう人も、助けてお遣りなされるか、御功徳で御座りやす。おや〳〵此の同勢にヱツト二百も、三十門口をはたいて、藪拂ひの蒟蒻のおよしにも見りやせん。此處にうか〳〵居たところが、犬も喰はねえお赤飯だらう。「かう〳〵お前さん、これでも貰ひねえにやア損しだらう。これでも貰つて歸んねえ、此の子アまア預けて置きなせえ、其の内か、跡に一人付いて止まり。一先へ廻て聽いて居りやア、手間藏の二本棒がうか〳〵棄つたなんぼんの、いまだしたとやらかなぶしたとやら、捨賣にしても百兩だアな。と耳寄りなお話だアエ、何でも此處に構つて居て、エ、此の餓鬼めえ。ついでにやらかした。半鐘ジャンジャン〳〵〳〵〳〵。てんぶくはい。
○蘭塔には頓平と八郎兵衛が膝突き合はせ、「やれ〳〵これは善い處でお目に掛りました。お宿へ参つて、承ればお寺参りと申すこと、同じお寺であらうとは、狼狽へた神ではない佛も御ぞんじ御座りますまい。左様ならいよ〳〵お菊は百兩でござりやす、手間藏とやらの方へは、百兩と申しましたれど、何か往

きこえたがる様子。貴君は身受なされた上で、片附けて遣らうとあれば、差當つてお前が仕合。」「ますれば彼方へ持つて參る積りで、持參致したお前が證文、貴君へ上げて置きませう。」「夫れは有難う存じますれども、手間藏殿とやらの方がの。」「イヤノ\、此方の相談は、變替するが宜からうと、慥か貴君もお近附きの門左衛門が、私の名代に往かれました。お氣遣ひは御座りませぬ。」ト語れば聞いて八郎兵衛、金の財布を取り出し、「先づ持合はせが五十兩、殘金は明日早々お届け申すで御座りませう。」「これはしたり、人に知られた吉手屋様、間違ひないは知れた事、最早日も暮れましたれば、其の金を頂いて、一人道るも心遣ひ、お出での節、殘金もろともお届けなされて下さりまし。」といふものの、墓場で藝者の身受の相談。」「致すと申すも不思議の緣。此の世の名殘、母のお骨を手自ら收めませう。」「どれお前を屏風に裝飾らせて上げませう。」「頓平どの。」「八郎兵衛樣重ねてお目に懸りませう。」ト左右に別れ入りにけり。手間藏眼七石塔の、陰よりソツト立ち出でて「八郎兵衛がうけ取つた、お前があの證文。」「賣金でない本統の、山吹色が五十兩。」「あいつを此方へ捲き上げて、旨い旨い。」ト打點頭き木陰に隱れ居る。かくとも知らず八郎兵衛、同宿に提灯點させ骨壺提げて出で來れば、待ちもうけたる二人の若者、手ごろの卒塔婆ふり上げて、提灯バツタリ打落す。思ひ掛けなき八郎兵衛、狼狽へ騒ぐ懐中へ手を差入れて、お前が證文手間藏が引き出し、「それ遣つては。」ト止むる途

端に、骨壺諸共懐中より、取落したる金財布、窺ひ寄つたる非人の女、手早に取上げ口に啣へ、猶もかゝぐる手先に障る、彼の骨壺を水差と、打合點きて前垂に、包んで持つも闇紛れ、眼もはう／＼と足に當りし金財布は、又手開藏が落したる贋金なりとは夢にも知らず。其の與へと押戴き、逸足出して顫り往く。女ながらも不敵の非人、拔足指足證文を、爭ふ二人に行き當り、八郎兵衛が脇差を、ソツト拔き取り手開藏が、肩先深く切込んだり。「ギヤツ。」ト一聲どつさりと、佛倒しに倒るゝ音、吃驚飛び退く八郎兵衛、壺背大事と件の水差、袖に隱して思はずも、鞘のみ殘りし脇差の、鯉口探つてハッと許り後方に倒るゝ途端の拍子、突き込む止め手開藏が、宙を攫んで苦しむ聲に此いとたんよろしく拍子幕。）

唄「おちにきと、人に語るなおまめけど、どこやらかたいをとこへし、露のちぶさにやしなひし、胡蝶も同じしなれば、さこお花は漸う幸介を擬め落して、辰之助に姿形を繕はせ、「アレお美津さんの寢てござんすは、あの一間に。」「さやもう、著馴けもせぬ振袖衣裳、氣恥かしくてたらぬわいの。」「ハテ男の樣にもない。たつた一夜の辛抱で、お前と添はれることならばと、お菊さんは得心して、あの武士の爺客と、寢やしやんすではござんせぬか。」「ハテ夫れはさうなれど、なんだか胸がドキ／＼して。」「エヽ、氣の弱い。サア／＼早く。」「モウ苦痛うてならぬ。こつちやこの本に能う姐さんに似たわ

いな」ト無理に一間へ連れて入る。木陰をソツト金五郎、小三も共にたち出でて「成程こなたの云ふた通り、嘲れ果てた樣の放埒」「さしてお前を勘當するとは、餘りではござんせぬか」ト云ふの樣子を見た上で、小三來やれ。ト芝垣の、陰に隱れて窺ひ居る「東」男のわけのありし又なさし、て、なし殿のとのもあて、いつかあふぎの風のつて。」「彼處の障子おし開けば、寢床の上に件の武士、窮屈さうに畏まり、「これお宥。そないに此方向いたら首筋が痛からう。余が樣な澁紙爺に抱かれて寢るも、先生からの因果づくおやと締めて、蒲團の上へあがつてたも。」「アイ私や貴君に一生の、お願ひがござんすわいな。」「今夜抱いて寢ることを、宥してくれといふことか。」「サアどうも氣合が惡いによつて。」「なんの我が身を抱いて寢よう、惚れたといふたは人を除けて、差向ひの話がしたさ。」「エエ、そんならお前は。」「眞實の其方の父親。」「エ、、、。」「娘ア、大きうなつたなア。」「斯う許りでは合點が行くまい、それ覺えがあらう長町へ、養子に遣つつたは其方が四ッの年の暮。」幼名はお俊眞實の親は此の桂作。」「エ、、お前は聞えませんわ、なぜに是れまで訪ひ音信、便りもしてはドさんせぬ。」「余も實の娘なれば、逢ひたいは山々なれど、親子の名乘をせぬ譯は、これ見てくれ。」と肌押脱げば下は木綿の千枚よせ、「ヤア其のお姿は。」「何を祕さうあの余は、其の日暮の蝶々賣、其方の親ちやと知れたら、外聞が惡からう、勤めの邪魔にもならうかと、ヂツと辛抱して居たわい。」ト小羽織身の廻

り、けふ一日の損料借て、斯ういふ姿になつて来たは、云はねばならぬ仔細がある。もと余は市松屋の佳作とて、音川様へ出入りの町人、いもがしらといふ大切な水差を盗まれて、其の科でお園を追放、其方は四ッ、弟の宇吉といふたは二ッの年、うか／＼として居たら、親子四人が餓死を、しようも知れぬ身と零落れ、貧苦にせまつて相談づくで、夫婦別れした時に、弟の宇吉を附けて去ッた女房は、今出精して本國屋の後家お美津、宇吉といつたは金五郎、余は其方を育て兼ね、養子に遣つた先も死に絶え、藝子に賣られた事までも、能う知つて鎌倉山海跡追うては来たれども、商賣せうにも資本はなし。こんな穢い形をして、蝶々が三文能う飛ぶのが三文と、辛い浮世を送るのも、他ながら其方の出精を見よう許りが余が樂しみ。どうぞ善い身になつて呉れ、善い男を持たせたいと願うて居るに情ない、我が言ひ換した幸介は、あのお美津が後の配偶本國屋の與次平との、あれは實子呼び返して、本國屋の相續になる人ぢやといの。エ、リヤあの人と夫婦になつては。お美津と余が馴合で、本國屋の家を横領したと、世の人に名さがたてられては、どうも余が義理が濟まぬ。こゝの道理を聞き分けて、幸介どのと斷いて呉れ。首振るは否ぢやといふのか。コレ聞けば琵琶小路の古手屋からも其方の身受するとのこと、八兵衛の母妙貞は、前度余が世にある時、陪婢で使うた女、其の義理があるさかいで、我が身の事を聞き出し、身盡にして呉れるからは、悪い様にはすまい程に、どうぞ彼方

へ行く氣になつて、幸介さんと斷いて呉れ。」「いえ/\、なんといはしやんしても、幸介さんと縁切る事はならぬといへば、己や此處で、首縊つて死んで去けるわいな。」「ヱヽ、其の樣に親の死ぬるが悲しくば、つひの起請を書いて呉れ、コレ手を合はせて頼むわいの。」トいはれてお菊は涙を拂ひ、「まうし親父さん斷くに斷かれぬ義理なれど、私や斷文かく程に、どうぞお前はいつまでも、お壯健で居て下さんせ。」「そんならアノ念ひ斷つてこ。」「アイ親の命にや替へられぬ。」「ヱヽ、忝い。」障子ハッタとたて切ッたり。唄「こひし/\とかたがきの、まみのゆかみがわしやきにかゝる。」(西)。此方の障子押開けば、居座を正して後家お美津、「幸介様。此の樣に申しましても御合點は參りませぬか。お前の實の親御といふは、私がためには後の配偶木國屋の與次平樣、證據といふはお前の守に、建長二年三月三日の誕生、龜市と書いてあるのが確かな印。ヤレ長之助に惚れたのなんのと、心に思はぬことというて、内證をお花に頼み、貴君をこゝへ呼びましたは、人を退けて此の事が、とつくり申したさ、私は以前難波にて、桂作といふ人の女房、仔細あつて世に零落れ、相談づくで夫婦別れ、四ッになる娘の子、お俊といふを桂作殿の方へ殘して置いたのが、藝者のお菊でござんすわいな。」「ヱヽ、」「サア私が其の時連れて退いた、おとの宇吉は金五郎、まだ一ッの頑是なし、里に預けて本國屋へ、私はたれより物縫ひ奉公、貴君の實の母御樣は、　お果てなされた其の後なれば、旦那樣も寢房寂し

く、何の彼のと御しやる故、イエ／＼、私には三ツになる子も御座ります。御免されて下さりまし。」「ハテ何の大事ない。そんなら其の子も引取つて直に余が實子の弘め。」「そりやマア本で御座りますか。」と、我が子に引かれて二挺の身、處に去年旦那様も御臨終。枕元へ私を呼んで仰しやるには、「余は毎度陪婢を懐胎させ、女房の思はく世間の聞え、店の者やの手前を兼ねて、金を附けて人知れず、直に宿へ返したを、其の後委しく聞き合はすれば、今の名は幸介とて、微かな商賣するとの事、人は氏より成長とやら、碌な身持なし居るまい。それを今更呼び返し、此の家は繼がされぬ。」とは云ふものの實の我が子、不憫を懸けて下されと、女房といへば女房下女の私に此の樣に、手を合はせての御遺言。それ聞いて金五郎に、どうして後が繼がされませう。藝者狂を言ひ立てに、勘當したは是れまでの、御養育の御恩報じ。そのお菊と緣斷つて、本國屋の後日相續、何卒なされて下さりませ。」「そんならどうでもあのお菊と、一緣斷つて下さんせぬと、娘をおとりに本國屋の、矢張家督を取つたのぢや。先の亭主に貧乏人、いひ合はせであらうこと、義理堅い桂作どのまで、惡名を取らせては、どうも私が立ちませぬ。そんなに默つてござんすは、どうでもお菊を念ひ斷る、お心はござんせぬか。夫れ程までに娘が事、思うて遣つて下さるを、忝いとも嬉しいとも、禮もいはぬ浮世の義理、南無阿彌陀佛。」ト用意の髪剃、すでに自害と見えければ、「マア／＼待つて下さんせ。」「そんなら斷れて下

さんすえ」「ハイ」ト、でかしなされた幸介様、私が心の潔白くたゝ、ござきれ込みたつ一寸、障子ハツヽと立てきつたのこ見るおもひまふらせ筆すての、まつといふ字もしばしにそめて、なみだの雨のふるやふりそゝぐ彼處の障子の内には椎作「ヲヽ、嬉しやでかしたそれ程までに思ふもの、余も涙はして遣りたいわいのト涙ながらに立ち出づれば、後家のお美津も庭に下りたち「椎作どの、目出たお前にお目に掛り、いひ合はせて置いた通り、酒う書かせた此のきれ次「ヲヽ、余も書かせた此の起請に「殿さまも置かれもせぬ中なり」とゝといふ事誰が始めた「親の目から踏たらしい」「料簡して下さんせ」トヤツと許りに伏し沈む。小三諸とも金五郎、木蔭を立ち出で母にむかひ「お前様のお身持ちは斯、眞實と思ひて芝垣の、蔭で殘らず様子を聴き、貰ひ泣きを致しました」ト、いふ手を取つて後家お美津「椎作どの別るゝ時にお前から、預つた字吉が顔、ようう見て遣つて下さんせ」「ヲヽ、字吉が、すも大きうよい男になつたなァ。嗜めに附けて遣つたのが、今でおもへば我が仕合、夫れに引替へ余が方へ、殘して置いたお菊めは、憂き艱難して甕子の勤め、余り面目ない面目ないことながらも涙に暮れにける。折節お花が附き添ひて、むかへと見えし四ッ手駕籠「ヲヽ、大儀々々、此處へ出るも面目なからう。すぐに駕籠を彼處へ入れて、二人をかへして下さんせ」おつと心得二挺の駕籠、左右にわかれて二人を昇き乗せ、往かんとすれば後家お美津、つかつかと立ち寄りて「これ駕籠の中な水木さん、

必ず私に變るまいと、書かしやんした此の起請を、反古にして下さんすな」「す、それ〳〵」書「假令此の場は引き別けても」か「互に縁さへ離れねば」ミ「わするなよ」書「ほどは雲居にへだつとも」小「空ゆく月のめぐりあふまで」「縁と」「且時節を待つたがよい」「せめて別れに顔なりと」ト、立ち寄る小三金五郎、四ッ手の簾を押上ぐる、折柄告ぐる夜明の鐘、桂作お美津は涙を隠し、背くる顔と見合はす顔、パッタリト下す四ッ手の簾、拍子木、チヨン〳〵鳥の聲、カアー〳〵〳〵（幕）

（淨瑠璃）「月日もしげくたち續く、いへるひまなく諸國から、いりこむ人とでる人と、しゆつけ武士しよあきんど、百えん石もけんへきも、それちがうたるはんじやうは、金のなる木のうゑどころ」ト、門には乞食が一文淨瑠璃、聽きとれて居る丁稚の丁松、内には叔父の雜八が、帳面披いて胡乱顔、暖簾押上げお菊は立ち出で、「イヤまうし雜八樣、不思議なえんで身受され、どうなる事かと案じて居たに、夫れ程思うて居る事なら、聽て余が嫉妬して、添はして遣らうと、それは〳〵嬉しい八郎兵衛樣、晴れて夫婦になつたなら嬉しい事でござんしよ」ト、いふに雜八莞々顔、「丁度よい間に門淨瑠璃、「われが身にうけておやう八が、首筋もとからじわ〳〵〳〵、我はつゝむと思へども、ほにあらはれしか、ヤア面目ない」「イヤそれ聞いて安堵した。大枚な金出して身受しながら、其方のそばへ寄りさへせぬ八郎兵衛。どういふことかと思案たらだら、そんなら余があのそもじに、いきついたこと

知りくさつて、夫婦にしようと云ひ居ッたか。エヽ、忝い〳〵。」ト聞いてお菊が惘れ顔、「なんのお前へ其の様な、私が思ふはつい其邊に。」「ついそこらに。」淨瑠璃「えゝやつぱり余ぢやおれより外に、誰も男はないもせぬものを、おれぢや〳〵。」ト、又門口で大聲あぐれば雜八は、腹立紛れの八當り、「余ぢや〳〵と余が事を語る様な一文太夫め、ヤイ丁ま何なうつかりして居る、出たのがないにいなしてしまへ、通れ〳〵。」ト、ねめつけられ、仕様々々に立つて往く、折柄戻る八郎兵衛、行き當つて一文太夫が、目も落ちて見合はす顔、胸にギックリ足早に、行き過ぐる後影、見送つて小指を傾け、「彼奴はどうか見た様な。……、それ〳〵一昨日此方の店へ来て、四五兩餘りの買物した、其の時の立派な町人。あゝいふ身形で来るといふは、ハテ合點の行かぬ。」と獨言、いひつゝ歸るを知らぬ雜八。「これこお菊、あの八郎兵衛を追ひ捲れば、小分ながら拙者めは、古手屋の旦那様、此の小袖着たうござんす。」ヨット着やれ。」此の帯が締めたうござんす。」ヨット締めやれ。」いひなり次第の心中男、女房になつてお呉れいな。」ト、嫌がるものを追ひまはし、八郎兵衛に抱き附き、「南無三しまうた悪い處へ。」「宜う戻つたといふ、臺詞はいつも芝居で申します。モシちと御謹慎みなされませ。お果てなされた妙貞様は、貴君の爲にも現在の姉、其の御方が若い時、お勤めなされた桂作様の娘子のお菊どの、へリヤ貴君や私には御主人も同じこと、それ故の御遺言で身受をしたでは御座りませぬか。淫猥があ

つては濟みませぬぞ。」イヤお菊どの、定めしお腹も立ちませうが、あれあの樣に俯向いて、畏つて居られます。」私にお免じなされて下さりませ。」「サア堪忍を、するのせぬのといふ譯ではござんせぬが、お前が若いお身でさへ、義理を思うて下さんすに、年に不足もない人が。」「ハテもう宜うござります。本に貴君は灸がしたいと仰しやる故、艾も買つて參りました。」「松居眠をせぬ樣に、氣を附けて据ゑて上げや。」ト彼方此方を取繕ふ。折柄戸外にびやううち乗物、何事なるかとお菊を始め、奥へ追ひ遣る間もなく、武士一人走り來り、「古手屋八郎兵衞殿とは、内方で御座るかな。」ト「ハイ私が八郎兵衞で御座ります。何方から御出でなさいました。」トいふに武士立戻り、乗物の戸を押開けば、三十歳餘りの立派な女、會釋こぼして打通る。樣子は知らねど手をつかへ、「拙者は郎さ此の家の主人、御用の趣一通り、仰せ聞かされ下さりませ。」トいへば莞爾と打笑ひ、「私は入江の屋形に奥向を勤むる者。其の品これへ。」ト骨壺を目通りへなほさせ置き、「此の度殿の御用につき、某手開藏に仰せ附けられ、南蠻いもがしらの水差を、當地に於て求められしが、正木寺の蘭塔にて手開藏は不慮の横死、其の場にありし一品は、其方の母の骨なりと、後にて住持の物語。闇まぎれにて水差と、とり違へしといふ樣な、事であらうと屋形の評議、母の遺骨戻しし上は、水差を受取つて差上げたうござんす。」ト靜肅にこそ陳べにけれ。「ハッ仰せの通り其の夜の騷動、骨壺大事とひん抱へ、本堂

の燈明で見れば、茶の湯で使ふ水差とやら、なんでも様子のある事と、大切に致し置けば、唯今お咄し申しませうと、此の頃にいつたなら、其方の勝手に宜からうが、さう旨くはまゐるめえ、あの一、十文目許か二、三匁、其れ町人、女ながらも入江家の奥向を勤むる者に、意外があると竟さぬぞ、成程盗人たけ〴〵しいと、乞食の身でだいそれた、やの字結びに總模様は、一昨日一文淨瑠璃を、町人に捨へて余が内で買つた著物、帯様は誰に匿し箱體、今の其の淨瑠璃の名先へ遣して、内の様子を見せた事まで知つて居るわ」「すや〳〵、それなら此の著物なア、お前さんで買ひやしたか、イヤハヤ憫れはえつたほんくらだぞ。余が所業に行く内は、断う〳〵いふ處だとあれ程いつて聞かせたに、道理こそどぶ板へ、しやッつくばつて泣き落し、あはれ果敢なき一文野郎め、わやゝふうにしやァがつたな。かう左めへにものがなつちやァ、私が御運しれたわえ、本に、左めへで思ひ出した、見ねえ此の襟さきにやァ疵があるよ。お前だまつて賣りなさつたさうだ。冥利が悪いぞ氣を付けねえ」ト吃驚ともせぬ、丈、憎さも憎しと八郎兵衛、襟髪取つて引立つる。ト、もし餘り手荒にしなさんな、お小袖が破れると、寶物を賣つたが知れやすぜ。下は木綿の剝ぎ〳〵で、取らして遣つて下さりやしと、しだいに安く見出される、お乞食様とは違ひやす。落戸のおれだと云はれちやァ、人に知られたおやまちよほ、騙詐めがとんちきで、水差の一幕は、ト「おや〳〵がこねえでも、二番目序幕はお菊を連れて、えき

りでえしたわらかしやせう」ト起つを押止め八郎兵衛「なんで我があのお菊を」―アイ、連れて往かねえかってこれを見なえ、ト取り出す一書に、お菊年期證文、成程夫れがあるからは、連れて往かうといふ筈も、中検めて相違がなくば、如何にもお菊を渡して遣らう。」「ハイ検めて見さやせう」ト押披いて吃驚し、「琵琶小路古手屋八郎兵衛寺」キョト／＼とよもやと思ッて上書を、的にして居た證文が、變り締とは古手屋さん、どうも合點がいきやせん」「おゝサ、お菊が親方頓平から、此の八郎兵衛が受取つた、手間鐵といふ奴が、背後で聽いて目掛ける樣子、直に其の場で叫びの、貼札と摺り替へて、直衛のは爰にあるわ」「南無三こいつもおてれんか、それならばこれからは、切狂言の大詰に、手間鐵が高縁で、手に摑んでくたばつた、此の著物の上褄は、叫びの時お前さんの著なすつた下著だア、己もがとつくり見つものや、其の夜は闇の黒衣で、世界の人は目盲鏡と、うか／＼して居なはつたら、濡れ衣が飛んだ八おやう、將來で負ければ果盤端、ひつ切れた褄先が、繊細才なく貴いて百兩、なんと買ふ氣はごさんせぬか」「成程此の身に覺えはなけれど、手間鐵が横死の場へ、行き掛つたが余が不運、百兩で買つて遣らうか、金十覺の其の間に」「待つて異れろも久しい臺詞サ」「ハテさしッの鐘を打つまでに」「それなら山東様、乾度言葉をつがへたと、かす眼で引込んで、ドレお晝寝とやらかう、サァお前方ァ先へいけへいんな。お歸りにやァお乗物アいらねえよ。いけ馬鹿々々しい此の位

出したやつたに、茶を一杯飲ませねえ、商賣振の惡い内だつたと苦笑ひして入りにけり。雜八おくれ
り立ち出でゝ、思案に暮るゝ八郎兵衞を、帶追取り滅多打ち、「こりや伯父御なんとさつしやる。」「な
んとも言ぬがだいそれた、人殺しの八郎兵衞、余が内へはさア置かれぬ、たつた今出て失せう。」「ハ
テ合點の行かぬ事を仰しやります。此の家の主人は此の八郎兵衞。」「こりや云はいでも知れてある。
尤も今日只今まで、此處は己が内なれど、これからは此の雜八が旦那樣ぢや、いや斯う許りでは合點
がゆくまい。死んだあの姉御の言はるゝには、コレ雜八、不身持者の八郎兵衞に、此の家を繼がして
は、どこぞの果てには潰し居らう、嫌ぢやあらうがあの其方、此の名籍を立てゝ呉れと、書いて下さ
つたコレ此の讓證文。家藏家屋敷其方へ讓り與ふる事實正也。雜八殿へ妙貞と、ちやんと爪印押したは
親父の印形。」「イヤ〳〵そりや譃ぢや、母に限つてさういふ事を。」「言はれぬといふ證據があるか。」
「サア其の證據は。」「ないならば此の骨壷へ、這入つて御座る妙貞殿を、今此處へ生かして出せ。」ト
かさにかゝつて難題非道、暖簾の内聲高く、「ヲヽ、骨になつた母妙貞、それへ往つて逢ひませう。」ト
立ち出づれば雜八は、開いたる口を塞ぎもせず、憫れて言葉もなかりけり。妙貞は靜かに、「コレ雜八
己は一家一門に、見限られた放埒者、乞食になるが不憫さに、此の姉が取り上げて、嬰なれども、八郎
兵衞を、主人と思へと言つた時、手を合はせて拜んだを、暫時の間に打忘れ、此のごろの己が我儘、

お過ぎなされた旦那殿の、印形のなくなつたも、汝が所業と思ふから、八郎兵衛といひ合はせ、高野山へお参りまうし、道で死んだと嘘いうてから、空巾着を眞實とおもひ、私が僞筆の讓狀に、盜んで置いた旦那殿の印形を押し居つて、科もない八郎兵衛を、追ひ出さうとの汝が謀計、どうしてくれう」と振上ぐる、煙管の下へ八郎兵衛、「ア、お腹の立つにお道理なれど、惡いにもせよ伯父のこと、とつくりと意見して、善人にして見ませう。」「コレ權八どの、惡の報いといふものは。」「イヤもう怖ろしい發明して、今こそ懺悔致します。邪智深い私なれば、さうでもないと此の骨壺の、蓋取つて檢めましたが、骨まで這入つて居ると云ふは。」「オヽ合點行かぬは尤も／＼。其の作者は爰に居る。」ト、門より這入る門左衛門。「下の早々御贔屓になされて下さるこゝの旦那、大畧譯を承り、日外の顏見世に、だんまりの時使つた骨壺、今度小野川宇源治が、細工物の白骨の、餘りを入れたで番頭どのが、一杯喰ッた當り狂言、一つしめて置きませう。」ト打笑へば八郎兵衛、「母人お喜びなされませ。手間權が人知れず、殺された場に居合はせたが、此の身の不運疑ひ受け、錢や角心を痛める折、最前來りし女の非人、彼が仲間の一文太夫が、一昨日こつちの店とも知らず、買物した此の金は、私が其の場に失ひし見知の極印。」「スリヤ金盜賊も手間權を殺したも。」「女めが指所業、夫れと覺れと覺らぬ顏で、奥に待たせて置いたれば、彼奴引捕へて詮議なし、此の身の潔白を立てます。」トつッと驅け

入る蓮廉川、引遣へて丁稚の丁松、行燈提げてうろ／＼顔、「日も暮れ相たに行燈を、小僧とへりやす
るのだ、お面気でも違へたか」ト、合點の行かぬ門左衛門「ォォ氣も違はいで何とせう、卑っお菊様
に恋を掛けて居たから、つい聞てしまうたうも、ヲヽ、書置がお菊さんを書い、有難ゃ裏口から
何處へか行つてしまひました」トヮッと許りに泣き出すに、「ャリャ大事だ」ト立ち寄つて「なに／＼、
書き殘し升、なまなか此世に長らへ居りましては、私の義理に絡まれ、幸介様の御出世の邪魔と、
瀧川へ身を沈め相果て升る」ト、門左衛門が讀み下せば、拙者は件娘の、柱に結びし一通取り上
げ「二ッにお菊殿へ幸介より、、、此の書置も世を見限り、死なうと書いてあるわいな、こりやまアど
うせう何とせう」「ヤ、、、そんならば其の狀がお菊殿へ屆いたゆゑ、跡追掛けての道行か、、ヤ飛んだ事
は油堤、、、氣遣ひなさつしやるな、惡念發起の手初めに、此の雜八が魂限り、尋ね出して命は
助くる、ドッコイでおきせ」ト身繕ひ、奥より驅け出る八郎兵衛「樣子はあれで聽いて居た、乞食の女
も風をくらつて」「南無三其奴を逃しては」「エ、これも氣遣ひ」「それも氣遣ひ」「一時人目を憚ん
ます」ト先に進んで八郎兵衛、丁稚雜八門左衛門、思ひ／＼に東西の、道に別れて追うて往く、（ト藝）
の「お菊やあい」「お菊さんやあい」、、、何か落ちて居ります」丁松が取り揚げて差出すを、權
八取り上げ「ハァこりや先刻門左衛門殿が、懷中に入れて居られた芝居で入る書物を、落して往かれ

たものであらう、ドレ／＼コト押拔き、淨瑠璃名題の私を招ぐ」扇屋蝶一兩面堤ゝ畝一相勤まま
する役人、化粧坂の藝者お菊、だうけ面貴の里の子、小間物屋幸介、淨瑠璃太夫殘らず似顏に書き現
はし御覽に入れます」此の處淨瑠璃の段、始まり左樣に御讀み下されませう」「お菊やあイ」「お菊
さんやあイ」淨瑠璃「野渡人なうして、舟おのづからよこたふ、かたいことは川水に流れて、きしのふ
ねのうち、人めしのぶの春すだれ、空ははれてもはれやらぬ、むねのけむりがかけるかお、風になびこ
いてあをにはぬれて、やなぎに似たるたちすがた、ちしごくる手にとるつまは、ひまゆくこまかこま
下駄も、わが名さへの聞くかとて、足おとしのび見あぐれば、こしぢへかへるかりがねの、ひとつは
なれてつまなしどりよ、つばさしをれてしよんぼりと、おなじおもひの幸介も、それとしらさにまあ
さき、てぬぐひ肩にかけかさを、かたげてすべるうしろかげ、見るよりそばへはしりより」「吉手屋
の奥座へ、投げ込ましやんした書置を、私やとつくり見たわいな」淨瑠璃「お前ひとりが死なうとは、
そりやあんまりむやだうよくな、つとめといふ字はひとつでも、うきをはたけにひとふしに、たらぬ
しやみせんひきならひ、かたいみだてにしたわしが、ふつとおまへといひかはし、これこのやうにひ
よんなもん、なぶられるのがうれしうて、くぜつした夜のきぬぐゝは、なみだであらふけはひさか、う
き名のたつたふたりかなあ、おまへにわかれてたんとまゝ、あとになからへるられふごと、くどきな

けいて取りすがる、おかそを幸介ふりきつて、おりゐて、くれるお菊もともに、揃いてよろびおかたきつ、なみだ果てしはなかりけり。」道具まはり二ッ、其の嘆きは道理なれど、此の幸介がなかないてはこ」浄瑠理「あれ、ほんごくやりのおみつさま、義理をたててのごかんだう、金五郎どのりおもはく小さんがなげき、そなたのためには大おんある、八郎兵衛がんごろしのあくみやうも、身にひきうけて死なうとかくごしたわいの。こゝのだうりを聞きわけて、あとに残つて桂作どのに、かう／＼してたもやいのと、なだむる折から人おとに、見つけられじと川ぞひの、やなぎのこかげにたゝしのぶ。「世わたりは草のたねなゝくさたばね、しゆぬりのくしのあかぬけて、こしやくむすめとみえた人り、今日まほゆきどてうたひ「あしませ／＼かはしやんせ、こゝらでなだいのどうけめん、さるがゑぼしをきつねとは、あざなつゞきとわらひ顔、しやう／＼めんでもゑびすでも、よりどりみどりわさくさの、もゆる堤におうた子を、すかしなだめてきたりける。」「エ、此の子は悪いとき眼を覚しやつた。ドレ／＼姉が花を取つて遣りましよか。」浄瑠理「花はよしのよもみおはなつた、いつもながめはふじのゆき。」「さりは酒やにそれ茶は茶屋に、女郎はきつじのなみかはに。」「なんぢやもつと踊つて見すれいか、ます、それ／＼恵比子にしやう／＼おやま面、数も合はせて三面を。」浄瑠理「おもつとまなんでみつあふぎ。」「鬼を一寸太たさん。」浄瑠理「ひとりの人じん蛙づくれぞ、さいしのみやの三郎と云はれては、己がかゝへ

ただいてゐな、てくだで釣らるゝ男ぢやない、そつちはもとよりこぜんせい、あきなひはんじやうまもらせて、よいころにてくりふねつきだされては、ほんによい鼈のかみ、さらばいなうことたちあがる。これまア待つた待たしやんせ、はじめてあうた顔にらだた、好いたらしいと見ぬやうに、おかほをそつとみしあなは、たがひにふかうたるにつけ、おみきどくりのくちのはに、かけてぞひとはゆふだすき、み前のすゞの振りすてゝ、行かうとはそりやあんまりおや、つれないお方ことと取りすがる「いや／＼はなせ」「いやはなさぬ」とあらそふなかへ「こりやだんなお二人ながらにつこりと、笑うて済ますはこのちがえもの」しやう／＼まひを見さいな、いつも手じやくでおやわれ酒、ぐいのみゞいいきぐいがへり、足もとはふら／＼と、あぶないきんばしがつてんおや、なみのつゞみにあしぶみえ、たいこかもんさくくおびやうし、ひやうしにかゝつてをさな子の、きげんとり／＼はしりゆく〽はや日もにしにいりあひの、かねがふちかや川ぎりに、あきならねども水くらく、降りくるあめはしのすゝき、このまにそれよと幸介は、とゞむるそでをふりきつて、きしにつなぎしやねふねの、うちにしのぶをそれぞとは、知らぬおきくは気もきやうらん、つゝみかたひを追うてゆく〽此の道具ぶんまはす」

○「エヽ女の正本寺の蘭燈で、能く賃金を攫ませたな、其のひつはつたべんへらな、貰つた餘りがあ

る筈だ、ヤリ／＼金を渡しやアがれ」ト、非人のおわけを眼七が、足下に踏へて一足立ち、「イヤ知らぬそこ放せ」「なんでもこゝに」ト懐中へ、手を差入れて引き出す財布、「ソレそれ遣つては」ト、なさぶり附く、折柄あたりの禪寺に、勤めの木魚鉦の音、降り來る雨をも厭はばこそ、堤ながれの石垣の、下りつ上りつ一生懸命、暫時は挑み合ひけるが、眼七力や勝りけん、遂におわけを川へ蹴落し、金をふんまと奪ひ取り、一息ホッと突く處へ、思ひも寄らぬ屋根舟の、簾の中より突き出す白刃、肋を縫はれて眼七が、うんと後方に倒れ伏す。簾刎ね除け立ち出る幸介「誰だと思へば小間物屋め、奴手荒い目に合はせたな。」ト、痛傷に屈せず切り込むを、掻いくゞり／＼眼七を取つて伏せ、ぐつと突き込む止めの刀、金取り返して幸介は、兼て用意の書置諸共、鞘にしつかと結び附け、脇差逆手に取り直し、「八郎兵衞どのゝ人殺しも、身に引受けてオヽさうぢや」ト、已に自害と見えたる所へ、一文太夫な高手こてに縛り上げて、門左衞門宙を飛んで驅け來り、「ヤレ待つた死ぬに及ばぬ。お菊が親の桂作どのが盜まれた水差は、骨壺の間違で八郎兵衞が手に入つた。此の品さへ差上げれば、桂作殿は昔の通り、音川樣の出入りの町人、此方を直に養子聟、本國屋にも劣らぬ身代、ソリヤお美津どのゝ義理も立ち、小三が身受もさらりと濟んで、金五郎は本國屋の相續に定まれば、兩方よしの兩夫婦。手間藏を殺したは、非人の女と此奴が白状、八郎兵衞が潔白も立つた、其の眼七は金の盜賊、まだ其の上

に人殺し、手に掛けた𢀓を、音川様へ申し上げなば、武士に齊しき出入りの町人、誤りには餘もたるまいと。そんなら義理あるお美津様の、忠を破らずに、ト、導い二十、さお菊も已に死なうとしたを、雁八が善人に立ち歸つて止めて置いた、今年は取りわけ善人に、怪我がなくつて一入目出度い、（まづ）此の書はこれぎりめでたく賣り出し」

正本製四編下

正本製 五編

柳亭種彦 著

吾妻花雙蝶々

○云聞き、一春の末ぞ、貞蔵は、近國の御家中山崎與五郎殿で、お國許には高名の家中、平野市右衛門と申す者、家來某の妹これへまでこゝまで打掛け、それ此方も共に、御存じで更打掛け、二腰の達は與五郎と申す若年者、今の情熱にて御能の役儀を勤め、是れまで何候致して御礼に、又た御國にに呼び迎へまするに、御門外にて暫時の休息、二御者も此頃の役に達まれ、最前より相待ち居る、其がこれに衛士の控帳薄で一般致されたこーいふさゝ左樣生ずること人が實で、其のところへ、娘と見ゆる姿形、後と目前に供人を、若と者して隨縁一人、御気に入りなる髭奴、あれが噂に聞く其の郎が、と、耳から耳へ囁き合せ、僅にこそ控へけれ。斯ういふ遣をさすらふきまる故、島原の藤屋の伊左衛門というて連れ來る、恋の素山寄間の香助、これもそれとは見えぬとも、連れの人目に隔り、行燈のか

にぞ控へ居る。二人は斯くと氣も附かず、飛古助は煙草をくゆらせ「イヤ與五郎殿貴殿には、御同家中梶川苦郎三の愛妹小菊どのと、前々よりお結號で御座らうの。」ト、藪から棒に問ひ懸くれば、與五郎は忽備と笑ひ「これは又何から何まで拙者が事を能う御存じ、成程親共兼てより、結號は致したれど、仔細ござつて引取りませぬ。どうして貴殿が其の譯を。」ト、尻背に懸くれば飛古助は、あたこくゐくゐそらさぬ顔「イヤ／＼御不審までもない、淀岡と高槻と、二人は隔てゝ罷りあれど、苦郎三殿とはもと／＼入魂、それは差措き、お持たせなされし其の箱は。」ト問はれて與五郎容體を正し「これこそは神功皇后御直作の假面にして、此の日本にたゞ一面、即ち主人淀岡左衞門、禁中より預り參らせ、年々此の面を掛け、御能を勤められしが、當秋より病氣につき、未熟なれども拙者が名代。」「コリヤコリヤ角彌、其の假面箱をこれへ置きて、與五郎是れまで參りし事、瀧口殿も早く／＼。」ト扈從の武士追立て遣れば、飛古助は差寄つて「ハヽリヤ其の假面が噂に聞く、ノウ。」ト計りに一思案、差合ひ知らぬ仲居禿、小石を取つてバラ／＼／＼、與五郎はうつかりと「霰がちらつく其の上に、こりや又霰が降るさうな。」ト、見上ぐる此方に被衣の娘、鼻紙捲んで投げ附くれば「雪も大分大きなが降つて來たわ。」ト氣の附かぬ、與五郎が顔飛古助は差覗いて苦笑ひ「雪にもせよ霰にもせよ、貴樣は大分濡の道が好物といふ世間の取沙汰、島原の傾城藤屋吾妻に現を抜かし。」「エ。」「ハテお祕しめされな、

拙者能う存じて居る、今の雫の正體は慥かにあの被衣から。」ト、言ひ掛くれば此方の娘にあい、雫の正體それへ出でお目もじを致しませう」ト被衣を取つてスッと寄る。顔見て與五郎吃驚し、「思ひ懸けない小菊殿。」「ハテめいような」ト飛古助も、何思ひけん手をもぢ／＼。小菊は頬紅む顔振上げ、「餘りな與五郎さん、結號したばッかりで、輿入へても下さんせぬ、もとはといへば」ト、云ひ掛くを、飛古助目顔でチャッと押止へ「アヽこれ滅多な事をいひ出すと、余は此處で腹切るぞ。」ト、威して見すれば小菊が腰元、清美がすッと進み出で「アイ／＼お腹切すのが宜ござんせう、小菊樣の御供して態々と此處へ來たは、今日の御能にお二人樣が、お出でなさると聞いた故、其の眞中でいはせましてと、何處のか人をおもいれに、困らせう爲ばッかり、あらう事かあるまい事か、小菊樣に惚れくさつて、彼は己が色ぢやなんのと、我が口から云ひ觸らし、御縁組を妨げて、我が田へ引かう惡計界、おいよいようとした顔わいの。」ト、いひ立てられて飛古助堪らず、差添拔いて我が腹へ、突き立てんとして邊を見廻し、南無阿彌陀佛も二度三度、與五郎は心に可笑しく、「何故の此の切腹。」ト押止むるをふきしほと、飛古助は顔を上げ、「サァ身に覺えなき事ながら、貴殿へ對して一分立たず、思ひ詰めた此の切腹」「否々あのや飛古助樣のが皆謔、兄樣の處へ來て閒がな隙がな私を提へ」「ハテさ女の知つた事ではないわ。」萬夫とは思へども、大切なる御能の前、僅かなりとも血をあやさば、主人へ對して言譯

ない。」ト、與五郎が言葉に取りつき、「成程此の飛吉助が腹切つては、左衛門殿まで御咎めの掛るのは知れた事、然らば切りたい腹なれど、今日は延引致さう。これ小菊どの、清美もミヽ〳〵喋り居るな、今度はもう止まらぬぞ、余が死ぬると與五郎殿も、矢張これを極めねばならぬ、イヤ兎やかう云ふ間に最早時刻、ドレ打合をいたさう。」ト、こそ〳〵逃げて入りにける。清美は跡にくよ〳〵と、「エ、折角あの飛吉助を。」「ハテもうよいわ。」「そんならばお疑ひは。」ト寄り添ふ小菊が顔打守り、「いはずと知れた武士の、娘が不義して善いものか、其方に兼々心を掛くる、早野飛吉助と聞いた故、心易く物いうたは、彼奴が心を探らう爲。」「そんならあのほん〳〵の夫婦になつて下さんすか。」「親々の結構女房に持たいで善いものか。」「ア、嬉しや。」ト寄り添ふ背後に、帯間のべたこの新助、「敕諚なり。」ト大聲に喚はれば、ハット許り、二人は拝跪平伏なす。新助ハッ〳〵笑ひ出し、「旦那を一番甘うやつた。」ト、いふに與五郎顔を上げ、「新助か、處が處ぢやによつて、余や吃驚としたわいの、戯談も事によるこ」ト、顔膨らせば仲居のお美津、「イヤ戯談ではござりんせぬ、お前がすつきり此の頃は、島原の内裏さんへ参内がないさかい、吾妻さんの逆鱗が、甚しくてあの悉の繁山と、お美津がわざ〳〵敕使に来たのぢやわいな。」「さ、サ其の敕諚の趣は、此の與五郎が知つて居る、なんにも云はずと早う往な。」ト、眼顔でいへども聞き入れず、「綸旨はへ、かこが持つて来た。一寸讀んで御覧じませ。」ト、

證書差出せば小菊が手前、面目なさに押隠し「見るには及ばぬ此の事で、昨日から見せやんした、與兵衛様が郭へ御出の、金も大方済んだであらう」ト、いふに仲居が首を振り「成程、其の與兵衛さんが相談に来てたれど、肝腎の残金が済まぬさかいで、内はもう〳〵頓と埒はござんせぬ」ト聞いて與五郎不審顔「ハテめいようだ、そんなら本能の済み次第、余が往つて太夫に逢ひ、其の上で埒明けう」ト往なんとするを引止め「イエ〳〵それは一寸遁れ、私等をかへさう軍法おや、あれ結號の被衣様が、彼處に見てござんすから、往かれぬとはそりや卑怯な、サア〳〵ござんせ〳〵」ト、與五郎が手を無理やりに、仲居禿が引立つれば、小菊が中へ割つて入り「これはマアはしたない、縦令結號あるにもせい、私等が様な者を怖がらしやんす貴君ぢやない、今宵は主君の御名代、大切な御役目が缺ければ御腹を切さねばならぬ、料簡して女郎方、何卒返つて下さんせ」ト、詫びれど更に聞き入れず「イエイエ其の手は喰はぬ〳〵、直に郭へござんすとも、腹とやらをやらんすとも、片を附けたが宜いわいな」ト引戻し「さりとては聞譯ない、何をするのも貴君のおためと、賤しい者に武士の娘が、手を下げて詫しても」「あい聞かぬ〳〵、賤しい者といはれては、猶與五郎さんを連れて去なねば、濟まぬ」ト、立ち掛るを清美は主人に怪我させじと、仲居禿を押き退ければ、又立ち掛つて、武者振附き、彼方へ引けば引戻し、更にしやうどはなかりけり。飛古助そつと立ち戻り、背後に様子を窺ひ

しが、此の騒動を好き隙と、傍と寄つて假面箱の、紐を解く／＼取り出し、與五郎が取り落せし吾妻が覺書を中へ打込み、假面は己が懐中へ、件の箱は又元の、所へ傍と押直せど、人々は氣も附かず、何も爭ふ其の處へ、小性角彌走り來り「早時刻延引とて、上には殊ない御急ぎ、御入りありて然るべし」ト聞きて與五郎大いに周章て「ハッ只今それへ參るで御座らう」エヽ、放せ／＼ト人々を、突き退け突き退け假面の箱、小腋に抱へて御門の内へ、直一文字に馳せ入れば「コレ／＼待つて」ト件の大勢、續いて内へ入りにけり。そつと立ち出る早野飛吉助「甘いわ／＼此の假面さへ捲き上げれば、與五郎めは切腹、そこへ附込みあのお娘、こりや運が蘇ッて來た。暮六ツの半鐘ジヤ。／＼」「此の道具廻る。」

「これ老耄余も何の某と、人に知られた武士のはしくれ、こんな殺生する氣はないが、何を云ふのもみんな色ゆゑ、其の金渡して死果れ」ト聞きて、手負は眼を開き、扨は當座の出來心、盜賊ではなかつたか、ムヽ初めから云はッしやれば、十か二十の僅かな路用、何の露塵厭ひませう、併し戀ゆゑ非道と知つて、非道をするの今の言葉、まだしもかしは頼もしい。汝に頼んで置く事あり、某は伊勢國梁田磯太夫と云ふ浪人者、姉妹の娘がござるが、姉は瀧岡の家中、山崎與五郎殿の家來、難波蝶五郎といふものと、若い同士のどれあひにて、親を捨て國を出奔、憎い奴と一旦は、勘當をしたる

もの〳〵、歳月立つに隨ひて、先では詫びる此方でも、竟ゆるす氣になつて、國を隔て住みますれば、女婿の顔は知らねども、家に傳はる一腰を、好贈心に贈り遣はし、書通を以て絶えず音信、然るに妹娘も善い事は見習ひ居らず、是れもまた伊勢參宮の、武士とやらと野交合ひ、其の人から迎への來るを安閑と待つて居て、外へ頓と嫁入を爲居らず、其の事や此の事を、姉娘にも話し婿殿にも、初對面を遂げたさに、伊勢を態々旅立ちて、淀圖殿へ參る道、思はず汝の手に掛り、千本通りの此處の土となつて死ぬるも前世の約束、頼みと云ふは外でもない、此の一卷は某が、先祖より傳來の兵法の祕書なるが、これを婿の蝶五郎が、窗からなりとうち込んで、屆けてさへ下されば、汝に遺恨は少しもない、頼む〳〵。」も四苦八苦、武士は打頷き、「ム、氣遣ひしやるな其の蝶五郎に尋ね逢ひ、一卷を渡してのち、外父の仇讎と尋常に、名乘つて其中討たれて呉れう。」「エ、辱いそれさへ聞けば、もう此の世に思ひ置く事更々ない、とは云ふものの久闊で、娘が顔や婿殿の、顔が見てから死にたい。」ト、のたうち廻るを面倒なと、又突き込んで一ゑぐり、敢なく息は絶えにけり。最前より來かゝつて背後に樣子を窺ふ奴、「お旦那苦郎三樣。」「仲間眼助申し付けたる一品は。」「ハツ仰せに從ひ島原へ罷り越し、彼の揚屋へ忍び込み、南與兵衛が脇差は盗み取つてござりますが、これをなんになされます。」ト渡すを苦郎三手に取り上げ、「成程合點の行かぬ筈、余が兼々惚れて居る藤屋の吾妻、與五郎奴と云ひ

おはし、辭の蒟蒻のと舅が聞かぬゆゑ、彼の與五郎は余が妹、小菊を女房に遣る約束、さらば彼奴に焚き附けてと、妹に色々水を向けても、貞女か阿房か取り合はず、わしが今に嫁入して、其の吾妻を受出し、與五郎さんと二人一緒に、睦ましう暮さう抔と、とつけもない事云ふ故、これでは行かぬと仕法を換へ、大束に此方から、身受の相談して見れば、全高は三百兩、色々と才覺して、先づ半金は渡した處が、聞きやれ彼の南與兵衛といふ奴は、與五郎が見なれど、己は異腹だやというて、山崎を弟へ讓し、南といふ母方の、苗字を繼いで住居も別々。生得いた執拗もの、義理ある弟の肩持つて、彼奴から半金拵へて、親方へ渡したれど、一人の女郎に兩人の身受、先でも頓と持て扱うて、何方でも殘金の、速い方へ渡す筈。余もなにが心は急く、どうせうと思つた處が、天道人を殺し給はず、かすの樣な婆ア奴が、百五十兩の金持つて、島原から出るを嗅ぎ附け、此の五六丁彼方で、ばつさ、いはせて其の金を、捲き上げ此處まで驅つて來た處が、善い時には善い事だわいの、此の爺を乞兒めが、大勢寄つて酒錢おこせとねだるを見るより、乞兒めらを追ひ散らして、實事の樣に見せ掛け、こいつも芋串どうか物になりさうな、一卷は手に入るし、わりやかでも此の金も、身受の日のお小遣、又汝に言ひ附けて、與兵衛の駒差を、盜ませたはこれかうぢやわい、死骸の咽喉突き通し、「斯うして置けば人殺しは南與兵衛、彼奴さへ片附ければたかの知れた彼の與五郎、そこで吾妻は余が物にすると、礒太夫より取

つたる金、最前奪ひ置きたる金と、一緒になさんと我が懐中へ、手を差入れて驚愕なし「ヤ、肝腎の先刻の財嚢、今の騒動に落したさうなわい。コリヤ大變なわい〳〵、眼助其邊を尋ねて見れ」ト、いふに此方もうろ〳〵「モウ大分雪は積りましたし、滅多には知れますまい」「イヤ知れねでは濟まぬ〳〵」ト、燧石コツ〳〵火縄の光、雪の明に彼處此處と、元來しかへ尋ね往く。折柄此處へ來かゝる旅人、「そこなお旹様。蹴上から一息で、嘸お草臥で御座りませう、お旦那與兵衛様のお邸までは、まだ四里許り御座りますれば、幸ひ彼の辻堂、まア〳〵御休息なされませ」ト、云へばお旹が廻頭り「何から何まで蝶吉どの、いかい御世話になりますわいな、些とも早く與兵衛様に逢はうと思ひ、あの私は、疲勞はせぬけれど、今も那邊で誰やらが、斬られたと聞いてから、どうも怖うて歩ばれぬ」ト、云ひつつ堂の縁端に、腰打掛くれば蝶吉が「此の處は千本通りと申しまして、島原への通行路、遺趣切でがな御座りませう。イヤ申し道々も申します通り、お旦那與兵衛様が私をお呼びなされ、斯う〳〵いふ譯なれに依つて、大儀ながら伊勢へ旅行ち、お旹を連れて來いとの御頼み、主命なれば是非がなく、參ることは參りましたが、何とも早」ト云ひかぬるを、お旹は態と笑ひに紛らし「其方までが其の様に、案じる事はないわいな。此の三月與兵衛様が、伊勢參宮の折柄に、無端ことより云ひ換し、不日迎人をおこさうとの、御言葉を娯しみに、待つて居た甲斐があつて、其方が持つて來たお玉章、讀ん

で見れば義理ある弟兒、與五郎樣の事につき、なければならぬ金の才覺、私に身を賣つて呉れとの打割つたお依頼、云ひ難い事を此の樣に、いうておこして下さんすは、私を實の女房と、思うて御座んすからの事、思へば結句嬉しうて、其の吾妻どのとやらの、代りに此の身を沈める覺悟、父さんも其の前の日、姉さんに逢ひたいとて、此の京へ御座んした、其の不在を幸ひ逃亡同然、父さんもさぞや嘸、跡では腹を立たんせうが、與兵衞樣のお爲なら、些とも厭ひはせぬわいなア〳〵、聞いて蝶吉涙に暮れ、ヽヽそのお言葉をお聞きなさらば、與兵衞樣は嘸御安堵、併し此處までお供したは、一日のお志を無そくにせまい爲ばッかり、私もわが女房を總嫁に賣つても、阿孃樣に苦界の勤めはさせませぬ〳〵ト、力を附くるその處へ、周章しく驅け來る仲間、死骸へばッたり行き當り、コリヤ、切つた〳〵、人が切られて居る〳〵ト、大聲あぐれば、お菅は驚愕一最前も此の先で、人が切られて居るとの噂、又此處にも死骸があるとは、氣味の惡い如何せうぞ〳〵ト、打擲ふを蝶吉が、背後に隱うて倩と見やり、こそちや與五郎樣のお仲間、可内ではないか〳〵、左樣云ふは蝶吉殿、オヽ〳〵善い處で逢ひました、今宵お旦那與五郎樣が、禁中で御能のお勤めなさるにつき、蝶五郎か蝶吉か、何方ぞ一人連れて來いと、今迎へに行く處、ヤア〳〵、來て下され〳〵ト、聞いて蝶吉胸を轟めかせ、そんなら一寸行かねばなるまいが中しお菅樣、お聞きなさる通りの仕儀、左までお手間は取らせますまい、此の可内をお連れなされ、後

の茶屋で暫しの間、休憩んでござつて下さりませ。」ト、いふにお菅が案じ顔。「モシ私が事が知れて兄御への義理をたて、さうはならぬと與五郎さんが、いはしやんすのではあるまいか。」「イヤ／＼此の事は彼方へ、洩れることではござりませぬ。お心遣ひ遊ばすと、可内もお供せい。」ト、二人を追遣り小提灯、たゞつすがめつ死骸の[illegible]、打眺めて獨言。「こりや正しく與兵衛様のお召料、斯かる非道をお目附が、遊ばさう筈もなし、假令また免れぬ義理あつて、人を害め給ふとも、止めを其の儘差し棄てて、逃げ隠れはなさるまい。察する處佞人原が、與兵衛様を罪に落す計略に極まつた。ハテどうかな。」ト打案じ、伴の差添抜き取つて、我が脇差と引換へて、元の如くに突き立つる、折もこそあれ胡亂々々と、立ち返ツたる仲間眼助、物をもいはず組み附くを、振解いて眞のあて、[illegible]の悶絶。道具元の内裏へ返る。」

「口　合點の行かぬ其の一品、此方へ渡して縄掛れ。」「ヤ、小癪な奴ら其處退け。」ト支ふる仕丁を投げ退け蹴退け、秘術を盡して飛古助が、難なく越ゆる内裏の築垣、伴の假面を目に隨へ、雲を霞と走せ失ればゞ、續いて仕丁も追うて往く。斯かる折柄御門の内に人聲して、上を下へと立ち噪ぐ、蟲の通知か蝶吉は、息をはかりに驅け來り、門の扉を打敲き、「拙者事は南與兵衛が家來、吾妻蝶吉と申す者、主人の弟與五郎に、急に逢ひ度き仔細あり。」ト、いふ聲すれば門内より、「與兵衛殿の家來とあれば仔細な

し通られよ。」ト、門打開けば嬉しげに、あたふた内に入にけり。程もあらせず女一人、裲襠律々しく引上げつ、たッた手駕籠に引添うて、後先見廻し忍び來り、これも門を打敲き、「私は蝶吉が女房、房と申す者、蝶吉殿が居られますなら、鳥渡逢はせて下さりませ。」ト、聞くより門番大聲上げ、「今宵の御能に使はれる大切な假面が失せて、内裏は轉倒ぞ騒動、其の盗賊の知れぬ中は、滅多に御門は開けられぬ。」ト、云はれてお房はハッと驚き、「そりやきつと與五郎様の御身の上、夫れも氣遣ひ是れも氣遣ひ、アヽこれ鳥渡蝶吉殿にと、云うたところが其の騒ぎでは、何の御門からも這入れまい。可内證に逢で遣うて來たからは、良人は此處に御座るに違ひはあるまい、これ駕籠の衆、妾は御門の開くまでは、何時までも待つて居る、お前方は其の駕籠を此所へ置いて、何かその酒屋で一杯づゝ、此のお錢で飲んで居て下さんせ。」ト、渡せば駕籠屋は足早に、元來し道へ引返す。折柄又も人聲して、「それ由崎與五郎を御門外へ追拂へ。」ト、名々に割竹叩きたて、門打開けば與五郎は、能の姿を其の儘に大小とても荒司子共に、追立てられて悄々と、後に續いて蝶吉が、共にうろ／＼拜望し、遙か下ッて蹲踞る。與五郎中將立ち出で給ひ、「禁廷より淀岡へ預け給はる、大切なる假面を失ひ、其の罪最も輕からず、重き罪科にも處せらるべき處、格別の御慈悲をもつて、淀岡には御祟りなく與五郎は御追放、それともに彼の假面を、來六月下旬までに尋ね出して差上げなば、舊の如く召使ひ取らせよと、

淀屋へ有り難き御内意」ト聞きて眞五郎ハット平伏し「面目もなき此の身の越度、せめてもの申譯、命に替へても竜の假面、尋ね出して參らん」ト、威儀宜しく御暇成しければ、前を雪に押開くる奥方中將扶の内より假面の箱を取り出し給ひ「此の容貌より落ちたる一通、人目に掛らば其方の、罪に罪を重ぬる道理と、取り隱して置きつるが、これを篤と見るならば、却つて詮議の筋ともならん、若其引けト箱を投げ遣り、御門の内へ入り給ふ。眞五郎は取る手遅しと、件の箱を押開けば、中には昔妻が書かし艷書、「エ、有り難き御仁心」ト、手を打合はして拜む。粂吉は彼の艷書を懐と拾うて讀み下し、「ヤシ眞五郎様、今宵中に幾をねば、若郎ことやらの方へ身受されると、吉實殿から遣した此の艷書、ハ、アこりや貴殿、金に詰つて假面を質に置かしやつたか、ドウラしし昔の大事の實を「否さそこが思案の外、但しは賣つて仕舞にしつたか、サア有體に云はつしやい」ト、天地を叩いてハテノ、漢何というても余に知らぬ」ト、爭ふ背後へお扇が差寄り、「モシ良人粂吉殿、見せねばならぬ物がある。鳥渡來て下さんせ」ト、袂を引けば振拂ひ「エ、夜夜中女の身で、此處へは何しに歸せ居ッた。そこ所ではない早くかへれ。サア何處の人へ賣らしつた。きり／＼と言はッしやいこ」ト取り合はねば無理やりに、お扇は本夫の手を取つて「アレヲ／＼。」ト指す駕籠、合點行かずと粂吉が、垂押上げて吃驚し、お扇が胸倉ぐつと引据ゑ「駕籠の中なはそなたの母、朽葉殿の〃／〃死骸、若

かケへ引取ッて、内々心の及ぶだけは、と、大事に掛けて置き申したに、なぜ纏かな留守の間に、ナンナ事にはして呉れた、夫れと云ふも夜が夜中、其の様に出歩行く故、昨夜御座ッた其の處へ、盗人が這入ッたか、但しは酒興の胡乱か、様子を話せト責めば、お房は涙に聲曇り、一端御の事でさへ、其の顔に顔色變へて、腹立てゝ下さんす、況してや妾には壹個の母様、何の顔得に居ませうぞ、與五郎様の御前では陳備い事なれど、妾が夜中其の様に出歩行く故御前にまで、つまらぬの面目なさ、仕馴ぬ密話さう程に、マア下に居て下さんせ。一昨日の晩母様が、妾をお側へ呼ばしやんして、コレお房今晩の與吉殿が、伊勢へ旅立された容子、此方も知ッて居やるであらう。アノ與五郎様が吾妻と云ふ傾城に馴染み、意氣張とやらになつて、身請を成さる其の殘金、百五拾兩が足らぬ故に、旦那様與兵衛様が高借した、女中が伊勢に御座るによつて、其の女中を呼び寄せて、吾妻殿の身の代の、替りに御遣りなさる御使、與兵衛様には義理ある御舎弟、與五郎様の御命に掛ける程の事と聞けば、更々無理とは思はねど、其の御案事の與吉殿が、身に取つては憎や憎、苦痛苦しい今度の御使、ナ、ト妾が用達つく、與吉殿の知らぬ内一寸此方が身を責つて、金整へては上げまいかと、涙を流して妾へ御依頼、妾が様な不美類でも、御役に立つ事なら、とうから願うて居りましたと、肝前夜、で島原へ、妻子に妾は行く筈に、用意極めて其の金を、母様が請取りに、往かしやんしたが夜

に入れど帰りのないのが気に係り、迎へに往けば情なや千本通りで敢無い御最期、肉を持ッて出やしやんした財布が、此の御懐中にないからしては、金持ッて戻らしやんすを、狙つた奴が殺して奪ッたに違ひはない。お前に別れて翌日から、妾や島原へ往かねばならぬ。それは覚悟の上なれど、金の御役に立たぬのが、悲しいわいのトト泣き出せば、與五郎は堪へ兼ね、蝶吉が脇差を抜くより早く吾が腹へ、突き立てゝと爲す其の手を押へ、ヨよしない人に歎きを掛くるも、原は其の身の放埒からと、御心附いての御切腹か、ソリヤ御思案が違ひます。寶の假面を尋ね出し、差上ぐるそれまでは大切なお前の體、サヽ是れしきの些細な事御心に掛けられずと、共々に姑・朽葉が敵を尋ねて下さるが、此の上もない能い追善、それとも今腹切つて、死んだ母が蘇生らば、たりや御勝手になされませ、ト、実意されて與五郎が、何にも言はぬ誤ッた。宥して呉れとトト伏拝む、蝶吉もお詞に打向ひ、一面で同人が持つてござッた財布の裁は、コレ其のお前の著てござんす、絲織縞で妾が縫うた、コレサ、よしよし、サア心許りの野邊送り、ト片棒を擔いで給へ、アイ、トト言へど女の力、涙に暮れて蹌けば、與五郎は見るに堪へ兼ね、サ、浮雲いへ、此の身故に果敢ない最後、せめてもの言分に、何卒己に擔かせて呉れ、ト、有り難い、是れが直に弘誓の船、ト御主の肩に乗ッて御座るは此の世の果報、ト未來は得脱、南無阿彌陀佛、ト四ッの半鐘、道具廻り元の野邊になる、ト

の河内連れて文元の所へお菅は立ち戻り「モシ／＼河内どのとやら、蝶吉さんの戻りが遅さ、其の内裏さんとやらへ、往く氣で此處まで戻ッたれど、先刻に人が切られて居たに、確かにアノ堂の邊、何卒彼處を通らずに、廻る道にござんすまいか。」ト、云ふに河内透し見て、「否々たゞ百姓、其が見付けましたと見えまして、焚火を焚いて死骸へは、菰が掛けてござりますれば、怖い事はござりませぬ。サア／＼斯う勝の方へ寄ッて御通りなされまし。」ト、言はれてお菅はこは／＼ながら、急ぐ徑の向うより、是れも周章てゝ駈け來るを、通り違ひに熟見遣り、「コレ／＼其處へ往きやるは、妹のお菅ではないかいの。」「さう言はしやんすは姉さんお綾さんか。」「ホンニ丁度好い處でマア／＼此處へ。」ト辻堂の縁先に腰打掛け「イヤモウ何から話さうやら、久振で顏見たりや、頓と仕樣がないわいなア。マア／＼無事で目出度い／＼。今更言ふも面目なけれど、此の姉が淫奔から國を出たのは十年以前、漸うに御勘當の御赦しも叶ひて、姉つれ、今年は往かう來年は、是非とも旅立ッて父上に御目に掛り、そなたにも何や彼や、聞きたい事言ひたい事が積ッて居れば、戀しさの心には絶えねども、何を言ふにも主人持ち、種々の御用があつて、終にそれぎりに思はぬ不孝、それはさうとそなたはマア、如何して今度上京りやつた。」ト、問はれてお菅は顏打赤め、「妾がこゝへ斯うして來たも、矢張マア姉さんの。」「ヲヤそんならば男ゆゑにか。」「淀岡の御家中南與兵衛樣と言ふ御人と、伊勢參宮の道すがら、不圖し

た事より言ひ替しっこ」ト、聞いてお綾は膝摺り寄せ、「其の與兵衛様と言ふ御方は、妾が良人浪花蝶五郎殿の御主人、與五郎様の御兄様、でもマア縁は不思議な者、是れから此の姉は、そなたの爲には家來筋、綾ト御何セイ断うセイと、詞を下げて言うたが能い、ホンニ妾とした事が、今言はいでも能いことを、ホヽヽヽ、それよりは肝腎の父上は御達者でかの」「さいなア、お前御夫婦に會ひたいとて、妾より一日先に此の京へ、態々上らしやんしたが、そんならお前の處へは」「イエ〳〵未だ御座ンせぬ、モシ道中で御持病が、發りはせぬか」ト姉妹が、一途に太息つく處へ、百姓を先に立て足を早めて蝶五郎、「コリヤ〳〵淀園の御領分に、人が殺害めてあるとの訴へ、主君山崎與五郎殿まで、早速申し次ぐべき處、御能に就いて御留守なれば、マヅ其が臨檢め取らせん。して其の死骸は何處にあるぞ」ト問へば百姓這ひ蹲踞ひ「只今まで私共があたつて居ッた焚火が目じるし。」「成程それ」と立ち掛る、袖をお綾が引止めて、「モシ良人今宵禁裏の御能に付き、詰さにやならぬ大事の譯、それ故お前の背後逐うて」「寶の假面の失せた事か」「如何してお前がそれ知つて」「知ッた段か屋敷へは、追ひ〳〵に委曲注進、彼の假面の盜人も、大方それと吾が推量、尋ね出すは胸にある」「そして此所に居るのはな、漸々話した妾が妹」「ファ、何かの事は同道して、内へ歸ッて緩々聞かう。ソレ百姓共、死骸の邊を刎ね退けよ」ト立ち寄れば、お綾も怖々差覗いて吃驚し、「ヤ、ヤ、コリヤ父上さま〳〵」ト

ト、お菅も轉び寄り、「コリヤマア如何せう何とせう」「十年振で顔見せに折角來て下さんしたに、誰が斬つた誰が殺害した。せめて姉かお綾かと、タッタ一言コレ申し、何卒言うて下さんせ」ト、狂氣の如く泣き叫べば、蝶五郎眼をしばたゝき「ヲヽ、驚きは尤もなれど、何程泣いてもせんない事、此の上は敵の手掛索ね出すが能き追善。コリヤノヽ百姓、死骸の親族出でたる上は、モウ汝達に用はない休めノヽ」ト追立てやる。何思ひけんお菅は凜々しく、かゝへ引揚げ可內が、脇差拔取り蝶五郎に、グッと詰掛け眼を配り、其の死骸へ差捨てた脇差は、父上の秘藏なされた關の孫六、姉様の勘當を宥さしやんした其の時に、終に逢はねど聟殿へ、是れを遣つてと引手物に、お前が貰はしやんした一腰、狼狽へて此刀を其の儘、捨てて置いたは運の盡き、姉聟とて用捨はせぬ」ト、言ふにお綾も打驚き、「ホンニ妹の言やる通り、コリヤ父上からお前の處へ來た脇差に違ひはない、此の樣な道ならぬ事をさしやんすお前ではないは、妾は能う知ッて居れど、あの子は始めて會うた故、疑ふも無理ではない。何卒合點の行く樣に言譯して下さんせ」ト、取り附き歎けば蝶五郎、「ほくノヽ」ト打點頭き、「夫れ見やれ」ト懷中より、拔ぎ出す一通姉妹が、火影に翳して讀み終り、「コリヤ蝶吉殿の處からお前の處へ來た手翰、アノ脇差を二十兩に買ひ請けると云ふ文體。」「されば主君與五郎樣の郭通ひの金に詰り、せめて夫れでも足しにもと、其方へも相談せずアノ脇差は一昨月賣り拂うた。」「そんなら敵はあの蝶

昔」「コリヤ人が聞く。静かに言へ。」折柄向うに人音して、息をはかりに駈け来る女、お菅にはたと行き當り、「ヤ、御免なされて下さりませ。些と心の火急ます者。」ト云ふ顔睨めて蝶五郎、「ヤ、吾妻殿ではござらぬか。」「さう云はしやんすは蝶五郎さん、やれ／＼嬉しや痞が下りた。ヤア聞いて下さんせ、與兵衛様がござんして、向後の事は予に委任せて逃走せいと言はしやんす、詞を頼みに抜け出で、此處まで来た事は来たけれど、ヤレ／＼アノ提灯は確かに追手、影を隠して下さんせ。」ト、半分聞いて蝶五郎、辻堂の戸を押開き、吾妻を忍ばせ南側の女も心を配る。其の處へ郭の大勢引連れて南與兵衛が急ぎ足、藤屋の亭主は仏頂面、「モシ／＼與兵衛様、箇様申すもいかな物なれど、吾妻が今宵逃走したは、どうか貴方が入智慧と思ふ者もござります。中々さうではござりますまい、貴方さうこした所が、跡金さへ下されば、何にも夫れで言分なし。おやが此の様に、ヤア私共を何處まで御連れなされます。」ト、聞けば與兵衛は立止り「最前も云ふ通り、伊勢まで金の才覺に遣ッた家来が、今宵は確か戻ッて来るに違ひはない、左まで手間は取らせまい、大儀ながら一緒におぢや。」ト、言ひつゝ来るなお菅は見るより、「そこな與兵衛さんではござんせぬか。」「オヽ、お菅能う来て給ッた蝶吉から委細の譯を」「マア／＼何も彼も承諾して」「忝い／＼。コレ／＼親方此の女は予が親戚、ヤヽ、吾妻が身の代の代りに、此者を勤奉公連れて帰ッて呉れまいか。」ト、聞いて藤屋は不審顔、お菅は滿座へ進み出で、「與

兵衛様の此の様に、お世話なされて下さりまする、原はと言へば御舍弟へ義理を立つる眞實の御心、其の御舍弟與五郎様の御家來の女房が、如何して夫れなうか〳〵と、餘所に見て居られませう。コレ妹、ではない他家の女中、お前の代りに郭へは、妾を遣つて下さんせ。」「何のお前がわッけもない、矢張妾を。」「イエ妾を。」ト、兩個が競爭聞くに堪へ兼ね、吾妻は椽を轉び落ち、よしない歎きを掛けるのも、原は妾が心柄、サア親方さん、是れからお前と歸樓つたら、言分はござんすまい。」ト、涙隱して先に立つ。思ひ掛けなき背後より、「吾妻が戻ッた上からは、殘額渡して身請せう。」「エ、、お前は甚兵衛さん。」「ハテ吃驚する事はない。汝等が背後から從けて來て、何も彼も聞いて居た。サア與兵衛尋常に繩掛れ。」「何與兵衛に繩を掛れとは、ソリヤ又何で。」「イヤサ盜人猛々しい、汝ヤ先刻から一本刀、合點ゆかずと能く見れば、其の死骸へ刺し棄てた脇差と對の拵へ、殘額の手段に盡き、人を殺害して金奪ッたな。」ト、言はれて更に合點行かず。「どれ。」ト與兵衛が立ち寄るを、蝶五郎は押隔て、夜分と言ひ殊には遠眼、ハテ感心の御眼力、若し又死骸の脇差が、與兵衛様のでない時は。」「此の甚郎二が首頭をやる。」「しかと左様か。」「諄いわいの。」ト、火影に照らし見て吃驚、「如何でござるな。」「コリヤ違うた。」「御首頭を御貰ひ申さうかな。」「サアそれは。」「ム、夜眼遠眼笠の内見違へたは閉口々々。」「エ、、コレ何を云ふのも御主人の御許婚の兄御だけ、貴殿の首頭は。」「オット春永まで

預らう」ト見込みすれば藤屋の亭主、「此の苦郎三樣も身請々々と口では立派に仰有れども、矢張金はない樣子、ナア吾妻えば連れて戻り、殘額の早い方へ上げる樣に致しませう」ト、おう〳〵言へば蝶五郎「オヽ、夜明までには金調達へ、迎への人を遣るであらう」ト、聞いて亭主は嬉し氣に、手を引立てゝ立ち歸る。「吾妻さんを遣つては。」ト、驅け出るお菅を引止め、金調達へるは及ばずながら、此の蝶五郎が胸に御座る。又此の死骸は百姓共に取り納めさせますれば、何事も御構なく、ソレお義宅へ早く御連れ申せ、河内御供して上げい。」ト追立て遣つて茫然たる、與兵衛が前へ進み寄り、「世俗に申す金は湧物、又好い思案もござりませう。其の樣にきな〳〵と思召さずと御一緒に、ヲヽサあのやうに舍弟めが思ひ詰めたあの吾妻、若しや身請が整はず命づくにもなるならば、彌以て家は破滅。」ト兩個は顔を見合はせて涙に暮るゝ膝の邊。苦郎三は滅多大鱈、雪を攫んでかゝぐり足、彼方此方と周章へれば、合點行かぬと透し見る、焚火に雪や解けたりけん、撓りし竹を刎ね返す。枝に掛りし一ツの財布、「コハ心得ず。」ト蝶五郎、立ち寄るを苦郎三透さず、「南無さん其の金取られては。」ト飛んで掛れば身を替し、もんどり打たせて頭顛倒、起きんと藻掻く襟髪を、與兵衛は取つて膝に引敷き、「確かに小判で百兩餘り、此の金持つて疾く往け。」ト、投げ遣る財布蝶五郎、「オヽ合點。」と請取る途端、突き出したる夜半の鐘。（此の仕組よろしく幕）

「ニーッ一服やらッしやりまし」ト、大工左官が各々に、煙管取り出し大胡座、「じたいマア此處のうちは町人か武士か、隠居でござりますと言ふ人が親同士さ、で隠居とは妙味な住居。どうでも此の藪の森は店賃が安値ッかい、わからぬ者の居る所ヂヤ」ト、大工が言へば左官が差出で、「知らずば己が語ッて聞かさう。此の普請のある内は山崎與五郎様の家來、浪花屋五郎殿の父親藤忠次と云ふ人、又此の家は南與兵衛様の家來、吾妻藤吉殿の父親加左衛門と云ふ人。兩個ながら子に譲ッて親同士へ樂隠居、普請の間要の日那藤浪次様は、あの鶉の畑左衛門様の處へ同居、それおやに依ッてあの様に、飯櫃だの葛籠だのが、座敷に一ぱい預けてある。それ餘り達者つた故かして、餘程頃の時計が來たか、米壕でぴん／＼打つ二ツいたさま一杯茶漬ッと、表に一ト昔を資へ行く。跡へ小菊は一間うろ／＼と、走り讀く門の口。ドコヂ物と物が聞ひ度うござんする。浪花屋五郎殿の父御藤忠次様と云ふ御人は、内方ではござんせぬかエ」ト、尋ねる聲に下婢のおなべ、縁側の方から走り出で「ハイ其の藤忠次様は此の御家、御普請が有るに依ッてここへ來てござんすれど、折悪しう今は御留守、何ぞ御用がありますならば、こちへマア御通りなされ待ッて御出でなされませ」ト、聞いて小菊が案じ顔二否を知らぬ御内へ來て、御世話になるも氣の毒な、なれど普請の中だやと云うて、何處のか隅に居る事のない事はござんすまい、矢張妾は此家で歸りを待ッて居りませう。」ト、普請場へこそ入りにけれ。程なく帰き來る四ッ手駕

籠、垂押上げて立ち出るお房「そんなら何卒お前が、良い様に夕方まで執り成しして下さんせ」ト、一寸投遣る壹歩の鼻頭、合點々々と隠し物、言はせて駕籠屋は立ち歸る。思ひがけなき背後より「お房お房」ト言はれて吃驚「良人蝶吉殿お前はマア何時の間に。」「サア駕籠の垂からちらりと見て、素知らぬ振で附いて來たが、其方も今は藝子の勤め、如何して爰へ來やつたぞ。」「さいなア、あの父上がお前を勘當さしやんして、予が前へ蝶吉が、此の後顔出しするが最後、手討にすると腹立ててござんすと言ふ事を、女で見ていから其の苦勞、其の詫言に是非お前が來やしやんすであらうと思うて、郭へは御客と一緒に稻荷詣と虚言いうて、其の事が聞ひたさに。」「されば汝も知つて居やる通り、大切なる假面が失せて與五郎様は御追放、其の場に附いて居りながら、不埒な奴とて御勘當、お常様の御迎に往つたは素より内證づく、斯う／＼ぢやと打明けて言譯もならぬ仕宜。而て見れば親父様の御腹立ちも御尤も。」ト、聞いてお房は打萎れ、「それではモウ御詫言の。」「綱手は切れて仕舞うた故、予や御暇乞に來たわいの。」「ハウそんならお前は又旅へ。」「イヽヤ冥途へ。」「エヽエ。」「サア御主人の事につき、予が色々苦勞をするを、汝の母が見るに堪へ兼ね、可愛や汝を藝子奉公、其の身の代の金を奪ひ、剰さへ母御まで殺した奴を生け置いては、どうも武士の義が立たぬ、とは言へ若しも運盡きて返討になるならば、一生の見收めと、餘處ながら親父様の御顔を予は拜みに來た。」「エヽ、縁起の惡

い返討の何のとは、無餘にも言うて下さんすな。父上は日頃から一徹の御生質手討にすると言はしやんすも、滑道ではござんすまい、必ず油斷さしやんすな」ト、言ひつゝ、表を窺き「ヤレ〳〵確かに向うから父上が戻らしやんす。幸ひな空葛籠、コレへまア些との間這入つて居て下さんせ」ト、おろおろ聲に云ひければ、「成程あの樣に腹立てゝ御座る處へ押付けて、お目に掛るも却ッて御氣を揉ませる種、そんなら汝が云やうに」ト、忍ぶ葛籠に隠ふる刀、お房に渡して蓋ひつしやり、一時ばかりの義理思うてなら、妾が合圖をするまでは、必ず出て下さんすな。エヽもし合點でござんすか」ト、葛籠の蓋を打叩き、心殘して奥へ入る。

〇此方の門より驅け出る小菊、背後に續いて早野飛吉助、「コレ其の樣に怖がる事は無いわいの、汝を女房に持たさに、兄菖郎ゝと相談して、到頭此方へ貰ふ筈に極めた處が昨々日から、邸を遁走したと聞き、なんでも此の藤の森は、蝶吉や蝶五郎が親が隠居して居る故、此處へ來るは必定と、普請場の口働取りに化ッて先刻から待つて居たっ サア來給へ」ト取る手を拂ひ「與五郎さんと云ふ乾度した、殿御のある身に不作法な、重ねて慮外しやつたら、其の儘には宥さぬ」ト、突き放せば飛吉助がクックッと笑ひ出し「殿御々々と云つて居る其の與五郎は、傾城に現を拔かした其の上に、寶を盜まれ阿房拂ひ、されたる男に心中を立てた處がお前の無餘花、身にもなからぬ奴は西の海へさらり〳〵。

斯く申す情ありの男に隨身がマッ當世、否と言へば此方から意地、引摺ッても連れて行く」ト、又立ち掛る胸倉を、取り掛ッた加左衛門、取るより早く頭轉倒「アヽ痛たテモマア酷いなあ」ト起き上ッて顔見て吃驚「イヤ老耄の分才で何で余を投げた」ト立ち掛れども煙草盆引寄せて空嘯き「爺イ者は年寄の歯に合ふまいと思うて居るな。へ、、堅齒の氣で居るさうな」ト、煙管取出しスッパ〳〵、「イヤ落著顔置いて見れ、適ひさうな」ト組付くを、引外して元首押へ、荒縄手繰ッてグル〳〵巻き、「ソッ扨は貴女が蝶左郎様と。」「アイ許嫁の小菊でござんす。そう云ふお前は。」「蝶吉が親加左衛門と申す者、妾等は娘で小菊様、なぜお出でなされました。」と飛吉助宙に引立てゝ、座敷の内へ入りにけり。お前は患念を晴け來り、無念次が門口に打眺めて不審顔、一家根も頂々もいくッてあるは、コレ宿替でもなされましたか、合點の行かぬ。」トそこらを胡亂々々、「度來かゝる蝶左郎、女房共、お袴で無いかに」「オヽ良人、能う此處へ來て下さんした、何時同じ事ながら、何卒お前の勘當御詫が仕たさに來て見れば、父上は何處へやら内は見さんす通りの仕宜。」「イヤノ〳〵心配しやんな親父様は、普請の間鄰の加左衛門殿の處へ來て居らるゝと聞いて居れど、知つての通り目通りへ出るが最後手討にするとの御立腹、近所には這入り憎い。」「サア夫れと言ふも皆妾から發ッた事、手までなしたる此の縁を、嫁とも言うて下さんせぬ。」「アヽ、モウ其の愚痴も聞き飽きた。余が今日此處へ來たは勘當の詫ではな

い、餘所ながら御暇乞に。」「そんならお前旅へでも。」「イヤ/\冥途へ往かうも知れぬ。」「ヤレ/\また何で如何云ふ譯で。」「ハテ知れた事、汝の親、磯太夫殿を手に掛けたアノ吾妻、蝶吉を生けて置いては武士が立たぬ。」トは言へ、惜しも運盡きて返討になるならば、一生の御別れと態々來た甲斐もなく、お留守と見えて、ヤレ御好物な將棊盤が明いてある。」ト、云ふ内お綾は目早く見付け、「ヤレ/\モシ裏道から父上が見えしやんす。窮屈なやあらうけれど此の半櫃へ些小の中隠れて居て下さんせ。」「そんなら波折を見て。」「アイ/\。」又もや裏へ駈け來る女中「モシ此の御宅に與兵衛さんか與五郎さんは居やしやんせぬか、南鐐の中が御用でたなら、吾妻が一寸逢ひ度いと、女中様さう云うて下さんせ。」ト聞いてお綾が立ち上るを彌惣次は聲を掛け、「其の女此の宅へ入れる事罷りならぬ。」「アイ/\。」トお綾が畏まる。加左衛門又聲を掛け、「苦しうない、こちへ通せ。」「アイ/\。」トお綾が立ち上る、「入れる事はならぬぞ。」「アイ/\。」「ハテ通せと云ふに。」「アイ/\。」トお綾は立つつ居つ彌惣次は眼に角立て、「コレ/\加左衛門殿、アノ吾妻と云ふ女は御主人の心を蕩かし、御家を亂した島原の傾城、して見れば我々が門塀も踏ませ難い、其奴をこなた宅へ入れ、如何さうと思はるゝ。」ト、詰り掛れば加左衛門、莞爾と打笑ひ、「譬へて云はば此の將棊、先の手に金銀はこの擒にありながら、大事々々と追ひ詰め、王の詰むに氣が附かぬと、家中の奴等が同じこと、たかで遊女は寶物質物、此の騒動にならぬさき、其の金

銀を手放して、身請をすれば事は破れぬ。左すれば罪は此方にあつて、彼方を憎む事はない。」「イヤ
イヤソリャ貴樣のお桂馬飛び、斜に行く角行料簡、此の彈忠次は何處までも、眞ッ直な此の香車で、
又命を頂戴して置かう。」「夫れ／＼さう片意地で手前の圍ひに構はぬ故に、御追放與王の樣になつて御
家來も皆散り／＼。」「コレサ加左衞其の香車は如何される。」「イヤ其の香車で思ひ出した。ヤリの樣な
風が來て、大分寒うなつて來た。」「如何樣障子を少し立て〻。」「さしてまひとて工夫をせうか。」ト重ね
て詞あらざれば、入れて善いやら惡いやら、お綾は中に氣はどき／＼。小菊はお局諸共に暖簾口より
立ち出でて、「吾妻樣を其の儘に歸しては、悋氣故と妾が跡で與五郎さんに積らるゝが恥かしい。彈忠
次どのに叱られたら如何樣にも詫入らう、マァ／＼此内へ。」と手を取る顏、吾妻はじろ／＼打守り、
「そんならお前が惡人の、苦郎三樣の妹御、小菊さんでござんすか、與五郎さんの御難儀も、原はお
前の兄さんの意地惡から發ッた事、坊主が憎けれや何とやら、お前の顏を見てさへも腹が立つて。」ト
振放す、袖を小菊は引止め、「お前にこそ遺恨はあれど、悋氣は女子の嗜みと、美麗しう言うて居れば
あんまりな吾妻どの、兄さんと一ッでない言譯は妾が胸に。」「コリャ面白い其の言譯を見やんせう。」
「アイ其の言譯は先づ斯ゃ。」ト隱せし懷劍拔き持ッて、既に自害と見えければ、「なうコレ待つて。」ト
兩個の女房、半櫃の蓋刎ね退けて與五郎も飛んで出で、小菊が手を確乎と押へ、「貴孃君の御心に曇り

傍杖のない事は、拙者が存じて居りますれば、御自害には及びませぬことゝ、漸う懐劔捥ぎ取る處へ、加左衛門は二階より周章しく下り來り、「ハア、浮雲いことを能う御止め申して與えた。お綾女郎は小菊さん、吾妻殿も御一緒に、奧の座敷へ御連れ申し、お心の和ぐやう、能う御話を申すがよい。サア／＼疾くと追立て遣り、「珍らしい蝶五郎何と思うてわせられた。」ト、問はれて屹度手を仕へ、「先以て御宿も昔直の其の間、貴殿の方に同居の由、御世話の御禮も申したうござりまする。」「ハテ兄弟同然の彌惣の事、何の禮に及びませう。」「仰せの如く親共とは兄弟も及ばぬ程御懇意の御中故、拙者が勘當を何卒赦し與れます樣、親共への御詫成されて、數回御頼み申せしかど、一度も御返事ござらぬは、些とお恨みに存じます。」ト言ひ掛くるを笑ひに紛らし、「妙な處へ勘當のことは聞いたが、成程アノ彌惣次殿が見當り次第に尋ねを、ぶつ放して捨てる拵と、噂迄ッしは居られたれど、肉身分けた親子の中、如何して憎い事がありませう、他人の余を頼まずと、直々に言はれたら、終に詫びなりに濟み申さうこと、聞くにお綾は心嬉しく、「そんならば蝶吉さんが直に御詫をなさんしたら、お前樣も御勘當を御赦しなされて下さりますか。」「イヤ、赦す事罷りならぬ。面出しすれば直に手討にするぞ。」「エヽ夫れとは違うてあるわいの、此の間大内にて與五郎殿が御追放、其の時に蝶吉は御供して居たではないか、左すれば其の身の罪は逃れぬ。又蝶五郎は別段に、主用あつて御供せねば、其の夜の事は知らぬ筈、蝶五郎を彌惣次

か勘當した仔細なれば、お扇も大方知ッて居やらう。蝶五郎が女房お綾に、伊勢國とやらんの鄕士梁田磯太夫と云ふ者の娘、密かに語らひ誘引ひ出し、夫婦となッたを物堅き、彌惣次が大いに怒り、武士の身として、親親が許さぬ女と不義ひろぐ、人非人は子に持たぬと、此の隱居へ引籠んで、對面も遂げられぬは、モウ一昔の餘にもならう。今は心も和いでか、嫁と言はねどお綾には、逢はるゝ程の仕宜なれば、磯太夫殿を頼み、子までなした事なれば、美しう娘なれば蝶五郎に遣りました、汝も勘當許しやと、此處から詫をするが近道、ナ、トさうではござらぬか。」ト言はれてほつと蝶五郎、太息をついて顏振上げ、「左樣にも存じたれど、磯太夫は相果てました。」「ソリヤ何時頃。」「四五日以前に病氣でか。」「人に討たれて。」「ヤ、何者に。」「吾妻蝶吉に。」「ナニ倅に、ふう。」「意趣の仔細は存ぜねど、正成より傳來の兵法の一卷を、某に讓らんと懷中して、磯太夫伊勢を旅立されし由お菅殿の物語、是れを奪ひ取らんが爲か、心の急きし體と見え、止めに其の儘刺し棄てしは、見知りある彼が脇差、これに過ぎたる證據はなし。」ト聞くより蝶吉駕籠の蓋刎ね退けて出でんとす。お扇は周章て、「アし待ッしゃ。」ト、吾が身を膝に押へる後手、加左衞門じろりと見やり、「如何に傳書が欲しいとて、人を殺害する樣な不法な奴でない事は、生みの親ぢや知つて居る。愁我が言譯を、仕立てに爰へ出るが最後、其の事は脇になり手討にすると口外へ、出した言葉が反古にはならぬ。ア、此處邊に蝶吉が居

つたら人手は借らぬもの、居らいで狡猾めが仕合なつこト、云ふにお房は取付いて「ナンノ爰等にござんせう。其の様に言ひ繕つても、其の詞を違背いては、本意でないと云ふ事は、なぜ能う心得て居られますこト、夫れと葛籠へ知らする辭、下女のりんが走り出で「モウシ／＼旦那様、若し御手間が取れますなら、夫れへ参ッてさしませう。猶忠次様が御待ち兼ね、早ウ御入来遊ばしませ」ト聞いてほく／＼打點頭き「今のは確か余が負け、さきねばどうやら卑怯な様な、どれ／＼往かうか。お房はおやつと座敷へ御暇間を仕けて居れこト、心有氣に立つて行く。背後に始終を聞き居るお篠、蝶五郎に取縋いて「モシ御約束なされた縁を切れ、コリャマア何とせうぞいのう」ト、泣き出すを取つて突き退け、「エヽ、めろ／＼と何寝言、汝が想ひは晴らしてやるわこト、尾引揃げ聲勵まし一刀の敵は妻の仇、葛籠の中に居る事は最前より知つたれども、鵜鳥をさすも同じ事と、態と容赦なして置いたこト、輾常に惣生々ト言はせも果てず、と出で、姉の敵蝶五郎、此方からも望む所觀念なせ」ト詰寄するこ此方は更に不審晴れず、何此の蝶五郎が姉の敵とはこりや又何でこ「ヤア言ふな／＼、己が胸に覺えがあらうこ」聞け其の事に付き種々金の無心するを、姉が見るに堪へ兼ね是れたるお房を蔵子に貰り、其の金持つて戻りを待伏せ、姉を蹴殺し、金を奪ツて取ツたる曲者、如何なる奴と心を注くるに、菩提喫の鬢額を、汝が遊に見覺して、請出せしは合點行かぬと、蝶堂へ往きて事を糺せば、

其の金を入れたる財布は、此の蝶吉が着物の裁、其の夜國の持たれたる、財布ぐるめにうか／＼と、渡して置いたは己が天命、遁れぬ處だ覺悟なせ。」「否々それには言譯あり」「言譯はそつちより此方にあれど、此の隠居の證據となッて、此の蝶吉が疑惑請けた上からは、矢張何處か何處までも、敵と名乘るが武士の意地だ」「ヲヽ、面白い、余も敵になつて遣らう、サア拔け、」「拔けヽ」ト詰め寄する、「コレ／＼待ッて」ト、止むる女房、突き退け／＼切り結ぶ、白刃の下へ將棊盤、小菊はどつさり押直し、「両個の子供が勝負より親と親とが將棊の勝負、彼處へ往つて極けようとて」「何親人がある此處へ」「顏見次第にすぐに御手討、只今命を果してはこ「本望も遂げられず」「況してや主人の御先途は」「ホイ」ト二人が氣もたゆむ。能い汐合と女房と女房「サア／＼矢張元の樣に」「隠れて御出でなさんせ」ト無理に葛籠と半櫃へ押入れて、一時にホッと太息をつく處へ、徐々下りる二人の親、伴の葛籠と半櫃へ、封印附けて座に直り「嫁女」「お綾悴が預けて置いた刀爰へおこせ」ト、一時に拔き放して顏見合はせ「加左衞」「彌忠」「言ひ合はさねど心と心、此方は蝶五が名代に」「ヲヽ、貴樣は蝶吉が代りに命を捨てる氣か」「如何にも」是れ／＼嫁女、面々親を殺害され、臍口惜しく思ふうが、今悴めが其の鬱憤晴らさうとする時は、何方か一人が死なねばならぬ、又合討に両個共、最期を遂げまい者でもない、左すれば主君へ不忠の第一」「加左衞殿の言はるゝ通り、そこを思うて両個の倅

に代ッて安で敵討。」「親子は一體、汝達の恨はこれで晴らして呉れ」ト、立ち上れば両個は驚き、「如何して〳〵勿體ない、良人の勝負でこそ、これから願うた事ではないわいな」「さいナアよしや親不孝と人が笑はゞ笑へまでと、留めて居たのも面々の所天大事と思ふからは、況してや何も御存じない、貴老方に御怪我が有つては、ネヱお綾様、「如何して見て居られませう」思ひ止ッて下さんせ」ト、お扇が云ふも聞入れず、「此の期に臨んで何の泣面、アヽあの二階で心静かに勝負を遂げん、加左衛殿。」「能う御座らう、コレ其の封印を切るが最後、勘當の上に又勘當。」「卒は素より両個の嫁女も、二階へ来ると縁切るぞ。」「そんならどうでも。」「是れがお顔の見收めか。」「未練な奴。」ト袖振拂ひ、二階の障子立て切ッて、内に打ち合ふ白刃の刃音、堪へ兼ねて封印引切り立ち出る蝶吉蝶五郎。女房は門口で押止め、「妾等こそ彼處へ行くと縁切ると云ふ厳しい御詞。」ト、おろ〳〵と言うてコレがのう〳〵。」「其處を辛抱さしやんすも、御両翁へ矢張孝行。」「マア〳〵待つて下さんせ。」ト、止むる内に障子へ血煙。「ヤ、どうやらお御怪我が有つたと見えた。妾等は行かれぬ體、誰ぞ見て来て下さんせ。」ト、お扇が呼ぶ聲、小菊は怖々障子を覗いて走り來り、「藤忠次さんが胸先から乳の下掛けて一刀に。」「エヽ」ト蒔りにお綾が驚き、又も障子へはつと血煙、「加左衛門さんも咽喉を切られさんして、両個ながら御臨終。」「ハッ。」ト四人は途方に暮れ泣くも泣かれず茫然と、暫時詞もなかりしが、ヤヽあつて顔を

上げ、二四五六、三四五八四。一四ぎこい、存ずるに代ゆる一定の数ない理を付、一生が上げ者を組に帰る御す人々言に出す名物々の着を追善し一箇早進擢に残るべく」と一つと太夫兵衛死絶てのと見たきりと、輝の翁が参り敢てそれを打くまい。懇に離って一下、ほえのと波をし残様を換へて上一言せと「輝右節」一言なて會はずに下西帖に、別れて其の場を立て去ければ、陽子ひらいて加左衛門、兼惣次に潜く耶、市に罪お助嶋の音がひ一寺の南側が、見え殺す、要衣を東を許け合せば、朝な書いた事古助次、離迄しにた傷る、正義に親ぞ打果すと、思うて、れ其先の要路に一それ入、人を殺した権取る頼次、兄たるに實は譲られ。元助進は細かれた事、夫れ六の東をかへく、書きに入い前折へた二十、兼吉助を膝に引入る。ぐつとすくら止めの刀で、横恵、未だ若くして嫁鬮して喰れた

（終）

正本製五輯　終

正本製 六編

編者 柳亭種彦

吾妻與五郎新狂言（前編の續き狂言）

○「此の頃名代のお福の茶屋、ナント美麗しい事ではないか。」「イヤ最う辰の助でも仙壽でも寄つても付かぬ」ト、莫大評判。」「コレ姉樣、あの子はお前の」「ハイ妹でござりますが、何を言ふにも未だ年はこ「おつと待ッたり其の年の、至らぬ處が稽古貫禄、何程處が北野でも、千本處かへ一本、掛替のないお松樣、お福の假面の招牌に、僞りのある愛敬の、醤の水で煎じたせゐか、茶までがどうか旨いやうな。」「コレ〳〵、餘り饒舌ッて貰ふまい、貴樣や己が此處へ出るは、此の繪草紙のホヽの吉例、おやうな寒けぬ内、どれ徐々と往きませう。」ト、皆散り〳〵に歸りけり。娘は茶碗取片附け、「モシ姉さま參徐々と仕舞はうかえ。」ト、言ふ手を取つて上座へ直し、「ヱヽ、勿體ない、せめて人の居る内なりと、端近どうぞ此所はさいと、御有つて下さりませ。」ト「淀間の御家中では人も知つた桂川の御娘子の小

兄様が、形容も連葉な茶屋女郎階婦の私を、僞にも嫁と様附で御呼び遊ばす其の時に、心で泣いて居りますぞいな。さればいな、小菊は態と笑ひに紛らす利發者、何のいな、斯うして居るは紛失の寶の詮議を詮議の内、又一ツには貞五郎様の御行方が尋ねたさ。頓て藥人と女夫になり今の辛苦を昔語り、妾や結句樂しみな、泣きも泣いて結んだや、唯恨めしいのは兄さん、昔郎三さんの道徳なお心から、ミヽひよつと。」ト言ふを滿見が押止め「ヤレモシ人事言はゞ目白とやら、向うから來る編笠に昔郎三様ではございませぬか。」トヤ、ニ確かに見極めや、此の形容を見附かると、なぜ然うして居るの何のと、又例の意地悪で、苛られるのは知れた事。」其處等邊を着覗き、イヤこりや誰も居らぬさうな、どれ／＼手前で茶腹も一時、小粋の顔が見えるまで、凌ぎに一杯やらかさう。」ト、床几の上に大胡座、折節來掛る立派の武士、背後に續いて藪原毒庵、微醉機嫌のよろ／＼眼、イヤ是れは昔郎三様、昨朝は御文通、其の時委細申し進じた南七様とは此の御方、マツ一寸お親睦に。」ト詞も後前腰掛へ、べつたり坐ッて他愛無し。件の武士威儀を繕ひ「ムヽ其許が貴殿が毒庵より御噂を承る檜川氏でござるよな、是れにて御談じ申す筈の御約諾を致しながら、思はぬ隙取り、御退屈察し入る。」ト手を突けば、「コレハコレハ痛み入つたる御挨拶、毒庵より申し入れし、拙者が家に傳へたる、楠流の兵書の一卷、彌金子三十兩に御求めなされて下さるか。」トイヤ最うそれは望む所、マツ拜見を致した上に一則ち持參

致してござるサア〳〵、苦三郎が取出せば、毒蟲は扇ばた〳〵、と斯く、申さば世俗の奴が、三味線を弾くとやらと嘲呼るかは知らねども、又二ツとは無い品柄、三十両にはマヅ下直、御祝儀に是れから例の藤屋へ直に戒り込ンで、愚老が十八番のなのはの妙音、上々様も痴話文は、例に變らず様参る、やつて御聞かせ申し度いと謡ふもひよろ〳〵、懐中より何やら手輪の落ち散るに、心も附かぬ夢半分。小菊は密と立ち出でて、件の手輪を掻寄せ〳〵と、焦れど折悪敷届かぬ煙管、ふつと氣の附くお端の假面、顔を隠すに無作と、舞ッて徐々帶り寄れた、此方の二人は一巻の請取り渡しに餘念も無く、神楽の太鼓の物音に、紛れて漕う手輪を取揚げ、其の儘隠す假面の内、元の處へ掛け置きて、足音忍び逃げて入る。七三は一巻改め、「疑ひもなき楠家の兵書、御約束の三十両、イザ御請取り下され。」ト金差出せば苦郎三はさらく数へて懐中なし、「確かに受納致してござる。而て貴殿の御姓名は。」「イヤ矢張南七三、仔細ござッて實名は隠して暫時當地に逗留、旅宿代りは例も島原、苦しからずば御同道。」「拙者は少し用事御座れば、夜半頃にお跡から、参ッて御目に掛るでござらう。」「然らば御出でを相待ち居る。」ト立ち上る向うより、仲居のお美津に禿子のお露、幇間のべかこの幇助、眞先に聲高く、「七三様の御迎へに者共引連れ只今参着、太夫様も御待ち兼ねと申し度い所なれど、どう言ふ事か旦那には何時でも禿子ばかりで飲み明かし、肝腎の敵が無い故郷を忘れた權煮の様で、私共まで張合が内證で相談

陳ふ、今夜から突出の青楼さんと言ふ太夫衆、年も十六夜月の顔、天人を油で揚させて、衣を掛させた旨味の出を掛け参らす。其の為に假に下界に顕はれたり」ト拍子に係れば「エ、嘘らしい、此の七さんはよくの恩を、敵方に気を揉むは手前達が骨折損、併し年はゆかぬ奴が罪がなくてよからうか。「イヤ昔郎三どの、マア何處へかモウ往かれたさうな。新助お美津皆の者。「サア お供致しませう」ト、こゝふき立てば毒腕が、又ひよろ〳〵と立ち出でゝ「愚老にばかり御詞の、無いのは少分恨めししに、牡丹牡丹と玉の汗、未だ酔ひが醒めぬさうな。ちよつぴり安等は関八に語らせて、お房坊連行と出掛けよう」と取る手を冷淡く振拂ひ「妾や些とした願ひが有つて天神様へ参ッてから」「イヤ彼奴は些と怪しに、牡丹々々と玉の汗、願ひの筋が聞きたい」ト、春向れ寄るを隔つる七三「ハテ野暮を言ふ奴な。そんならお房縛りと、天神様が又他で、悪性をさせぬ様に」「コレ矢張お前までが」「ずッと前日ォヤ来やれ」ト、お房は本社へ人々は門の方へと急ぎ行く。中間引違へて眼助「何卒コレお旦那に逢ひたいものだ」ト咳きながら行き過ぐるを「是れ〳〵此處だ」ト、牀几の影より立ち出る苦郎三、「ヤ、お旦那には味な處に」「オ、合點の行かぬ筈、蝶吉めが女房お房、今では貳朱で藝子の勤め、此處へどや〳〵と来た故に、一寸影を隠して居た」ト、聞いて眼助不審顔「貴方様には何でお房に」「ハテ知れた事、去年殺した婆々アめはあのお房が實の母、余を敵と彼奴めが、知らう筈は無けれど

ら、何だかじろ／＼見られる樣で、心持が好く無い。イヤそれは扨置き、手前を呼びに遣つたのは彼の彦助から頼つた泥圖の寶の假面、南蠻か日入りで南七三と云ふ武士が百兩に買ふ相談、彦助は藤の條で龜惣次と畑左衛門に仕舞はれたと云ふ噂、然うして見れば分口し、入らずにづつしりな大利益、大分旨うなつて來たが、肝腎の寶の假面は左條通りの百足屋で、三十兩借りて置いた、所で日外貸したる、殺して奪つた兵法の一卷、唐崎へ片附け先づ骨折らずに三拾兩、是れを資本に假面の商ひ、資本も此處に有れ、是れから手前は一走り百足屋へ行つて呉れ、「イヤモ最う資本は有り金銀は有り、其の假面を請取るには何の手間隙入らぬ事、直に往つて參りませうが、お旦那は矢張此處に。」「イヤ／＼餘り人の通りが繁い、目立たぬ所は辻の後、御安堵なされ少しの間。」「ちつとも早く。」「合點だ。」是れも左右へ別れける。

○又も聞ゆる神樂の音、お園は鏡を手に持ツて、日途參りの往き戻り、折柄向うへ深編笠、何か此方を忍ぶ寄手。今宮へ行りすがら讀續き合はせ、笠の内を差覗き、「イヤ貴郎は蝶左郎樣ではござんせぬか。」「蝶吉殿の御内室お園殿。」「妾や貴郎にお目に掛り、問ひ度い事がござんしたに、ホンニ丁度能い所で、マア／＼此處へ。」ト、あり合ふ床几、蝶左郎も仕方無げに笠脱ぎ捨て腰打掛け、「貴女に逢ふも面目無い。ふとした事の間違から、互に敵と思ひ合ひ、蝶吉殿と既の事、討ち果さうとした不料簡、親と

國と云ふ我々の替りにお果て遊ばしたと、思うて其の場を立別れ、後にて聞けば兩人に、犬死をさせま
いと見ゆる彼方々の遺言は、『御堅固なのを聞いての悦び』『アノ敵と狙はしやんしたは、お前樣の親の
と言ふ事ではござんせぬ。此方も聞いた時、夫れに是に逢うたとて、面目無い何とは、他人がまし
い物の言ひ樣。」「イエ／＼。夫りや汝のが聞き誤り、蝶吉に日外逢うて藤の森で、角芽立へたはあれ
はまゝの時の機會と、互に笑うて元の交際、其の事は濟んだれど面目無いと言うたはな、ソレ此方の華
夫妻、苦しい藝子の勤めをさする、元はと言へば此の權左郎が、御主人から起ッた事」「ハテ夫れが
矢張それが他人がましい心の隔て、お前の御主人眞五郎樣と此方の蝶吉殿が奉公する夏兵衞樣は、御
兄弟ではござんせぬか」「夫れはさうとあの、お前に問ひたいと言うたはな、今日披露目の青柳さんは眞
實のお前の妹御樣さんで御座こざう」「エ」「ハテ隱さしやんすな事は無い、内分のお話すにも一緒に
これへござんして、此の頃から傍輩奉公、何でも容子の有る事と心を附ければ挨拶前で、ソリヤ必然
噂に聞いた樣樣と汝が推量、ナント違ひはござんすまい」ト、云はれて吻と蝶五郎太息をついて頭振
上げ、「今ら汝が言ふ通り此に藝子の勤めをさするが本意で無いと思ふから、女房お綾を總嫁にならうと
貰うと心に定めたれど、親々に得心させず配偶うて居る中なれば流石に苦界はさせ惡く、妹樣に
容子を話し、納得づくで奉公に往つては與れたが未だ年若、中々汝の身の代話はどうも我が話はさ、

一素の晒れと女房も、直に傍輩に附屬てやり、其の給金や彼是を、取集めた上で一貫目、才覺すれば汝の器量、此方へ返戻して呉れる對談。今少しの事ながら力づくにも行かれぬは金銀、貧は諸道の妨げと、能く狂言でも言ふ通り、義理を缺くのも身貧から、免して下されお局殿。」ト、涙を包む心根を、思ひ遣つてお扇も共に、打萎れしが氣を取直し、「何のマア斷うして居るも暫時の内、寶の假面を尋ね出し、源の通りに御知行を、戴いてから妾が身は、どの樣にもならう程に、モウ〳〵案じて下さんすな、殊にお前とお義樣の中には、蝶松樣と云うて愛らしい幼兒も有れば、些とも早く御兩個樣を呼び戻して下さんせ。」譬へて言へば此の茶碗、模樣は松竹千代八千代、親子御兄弟睦まじく、末も洩らさぬ内輪同士、無據い義理に打碎けば、まうこの樣に皆ばら〳〵。」ト茶碗を大地に打付けて、「ホヽセシ、何にも役に立たぬ塊。」「イヤ〳〵此奴親子が此の樣に。」ト茶碗を掌にて粉微塵、「ばら〳〵になるのは道、汝は一旦碎けても、義理と道とで繼合はせ、又丸ウ納めねば此の蝶五郎が武士が立たぬ。」「たンなら如何でも。」「汝の身請を爲にや置かぬ。」「然う言はしやんすりや賤妾も意地、靑柳樣に貴婦はさせぬ。」「ハテ味な事から互ひの意張、イヤ最う晩鐘お局殿。」「蝶五郎さん其の内お目に掛りませう。」ト、立ち別れてぞ入りにける。ばつた〳〵と人音足音、驅け來る眼助追ひ來る惡漢、「確かに夫れこそ寶の假面、此方へ渡して繩掛れ。」「ヘヽ、洒落臭い小丁稚め、何の我等が何とう知つて。」「夫ンな者が

やァこりやァ無い。よし又假面でも、不用な事に出しやばッて怪我捲るなどゝいらざる事には舌長な某は與五郎が家來須崎角彌と云ふ小性、紛失の夜も禁廷まで守護して行ッた寶の假面、見違へよう筈はない。此の頃五條の古道屋が質物に取つたる由、仄かに聞くより詮議の爲、容姿を窶して丁稚奉公、密に逢はゞ我が見る前で請取つたは運の盡き、細事云はずと腕廻せ。」「其處退いて通せ。」「腕廻せ。」「何よう小癪なことを。」「どつこい。」ト左右へ別ッて尻端折り附入る丁稚捥取ッし、打てば外して飛掛る。心得ひらりと身を反向け、互に烈しく挑合ひ、腰の一刀拔く間もあらせず、鐵ンと放避れつ又立別れ、暫時勝負も付かざりしが、角彌は脾腹を強か擲てられ、ウーンと計りに悶絶す。仕て遣つたりと眼助が、立掛れども是れも又、足腰疲勞れてひよろ〳〵よろ〳〵、透て掛りし茶屋の床、不圖眼の付くお福の假面。「ハテ能い物が。」ト寶の側、あたふた取つて摺替へる。其の間に氣の付く須崎角彌、中は僞物とも白木の函取るより疾く元來し道へ、眞一文字に走り行く。眼助跡に舌べろり。「ヘ、、、へ、汝が欲しがる寶の假面はコレ此處に、坐す、其の中なは緣起々々、可愛や知らずに持つて往つたはヽヽニ能い福の神、ハ、、、、イヤ旦那が嘸御待兼ね。」ト、行かんとすれば又向うへ、立て隔たりし女の顏、夕月の影に透し、「ヤ、貴孃は小菊様、合點の行かぬ其の衣裳、如何して此處へは。」「サア是れには深い仔細のある事、夫れはマア捨て置いて今兄樣に逢ひたれば、余は急に用があッて大坂

へ行かねばならぬ。眼助が寶の假面を爰へ持ッて來たならば請取ッて置いてたもと、呉れ〴〵賴んで
ござんした。」「ヘエ左樣ならあのお旦那は大眞へ、ハテあいような其の假面は、則ち此處にと差出
せしがらやッと隱し、「イヤ滅多に然うは參るまい。オウ〳〵怖や。」ト、立ち戻る。此方を隔つる腰元
清見、「女性の主人と侮ッて小菊樣の御詞を叛くと、妾が免さぬぞ。」「夫りや姨御旦那菅郎三樣の御妹
子の事なれば御如才には存じませねど、御許婚の山崎が此の代物に些と差合ひ。」「そんならどうでも
渡さぬのか。」「ハイ、マア大方其の樣な噂を何處でか聞きましたこと、ト、容捷して逃げ出す。させうはさ
せぬこと眼助の襟髮掴ンで引戻す、清見が力は一生懸命、「エ、面倒な。」と振解く、透もあらせず付け
入る小菊、「大人そばえを遊ばすな。」ト、搔潛ッて驅け出す、脚に纏ひし襷の紐、清見に引かれて眼助
が、尻居にどッさり倒るゝ機會、取落したる寶の假面、小菊は手早く取上げ、「南無三夫れを。」ト立
ち寄る眼助、有り合ふ手桶を天窓から、ざッぷり浴びせし清見が機轉。心を早急つて其處此處を、う
ろ付く容姿は假面無い千鳥、狼狽る手先は放し鳥、兩個は可笑しく一時に、小手を返せば囘轉動。（チ
ヨンチヨ、にて此の道具廻る。）
○鳶鴉にならうなら、なれば、飛んで行きたや主の側。主と兩箇で私や暮さなら、さけでくらうもおき
ながし。やれやれ、誰も譽人がないさかい、余がでに譽めて置かう。「イヤ新助が所作は其の筈の事

てもあるが青楼の浄瑠璃がなアおほゝゝ」「さいなけうといものでござんすぞえ」「サア〳〵飲めさ」ト七三が一枚づゝ投げた小判「ヲット此の黄金割では忽地に利目が見え、嘸ぞ此の青楼が沈没で御目に掛けよう。なにでも浮いた座敷では、江戸唄で無ければゆかぬ〳〵」お房さん可愛からすをおよびりと」「サア弾きは弾かないけれど、お前がぼつかり其の様に気業が能うても主さんに肝腎の」ト云ふを押へて南七三「又敵娼を勧め居る、お房おのしは芸子を廃業にして、花車になつたら繁昌せうぞ」「アレマアそんな悪口を。」ト、一寸手軽く振上ぐる、撥の下へくぐかこの新助「オット此の立入は暫時仲裁、先刻も北野で云ふ通り、旦那が何と御有つてもナア亭庵。」「ソレ〳〵今日只今披露目の青柳様と云ふ太夫、年のゆかぬ可愛らしいを約束して置いたのに。」ト門口を差覗き、「イヤうんど新しい台詞だが、太夫さんがあすこへ見えるわ〳〵。」両「花はうはきにさかねども、風が誘うて香をちらす。」そこでこてふがくるわいな。つゆにやどかすゆふ月夜、かはゆらしいおやないかいな。」青柳しやんと立ち止り、「妾が行く揚屋とやらはあの内でござんすか。」そんなら縁はやゝ来や、手を突いた羽子突いたり、隠恋慕して遊ばゝぞ。」ト、云ふを楼把は気の毒顔、「これはしたり歴々の太夫さんが、恋の縁と同じ様に、隠恋慕して能いものか。」ト、笑はれて顔うち赤め、「ツイうつかりと云うた程になア姉さん。」「ア、コレ。」「そんならばお綾さん堪忍して下さんせ。」ト、言ひ直すを又打消し、「モシ〳〵今日から

御前は太夫さん、妾は玉と云ふ樓媼、忘れても今の樣な名を呼んで下さんすな。コレ旦那さんも此處になり、エヽ、氣を付けたが能いわいな。」ト、眼顏で知らすを漸う見て取り、「アイ／＼能う合點して居るけれど、あんまり往來の見物に、逆上せた故かト、ト最う、正度が無うてナ、しんど。」「しんどうても最ウ二足三足、此の壽兵衞もあの揚屋に些とばかり用もあり、太夫が初の道中を見ながらうかうか附いて來てびつしよりと汗になツた。」一ホンニマア親方さんまで供にして、太夫さんは傑倖者。」「ソレ此處が大事の揚屋入、習うた樣に其の小褄を。」一「アイ斷うでござんすか。」「ナツトよし／＼。」一子供來やあいゝ引つ」唄「月はあだにはさえねども、彼が誘うて玉にちゐ。そこでうきよはすてをぶね。しんきらしいぢやないかいな。」「イヤ太たさん待ち兼ねた。サア／＼あそこへ／＼。」ト、そゝりたつ程お玉はアフ／＼「餘り騷いで下さんすな。ひよツとして太夫さんが、泣き出しはしやさんすまいかと、氣が氣ではないわいな、ほんの今まで懷子、何卒座敷の取捌き教へて上げて下さんせ。」「コレサ案じ給ふ可からず、御側には此の毒庵、其處等の配劑匕加減は諸事愚老が呑みこみ山、是れから貴妓に合の山、お杉お玉のぽつとり者、どうして呉れる。」ト取る手を拂ひ、「妾を見ると何ぢややら、仇ぢやら／＼と氣味の惡い。」ト、逃げる程猶附け廻す、中を隔つて藝子のお扇、「人の厭がる惡戯は爲ぬ者でござんす。」ト、突き飛ばされても懷ともせず、惡戯で無い眞實。是れさ、樓媼には惚れるなと

揚屋や茶屋に招があるか、滿座の中で言ひ出すからは余も男の端個だ、厭でも應でも顔を立つて貰はにやならぬ」ト大胡座、白け掛くるを七三が、「ハ、、、、、太夫時代な口說きやう、きないで行かぬは德路の習慣と、ア、何やらの文句にあつた。余に任せて皆と一緒に。」「いかさま奧でわつさりと、飲み掛け山や谷の山、先生はちと左の方がお好きと見えた。お玉さん此處構はずと、サア／＼奧へイヤ踊れ／＼。」ト、普助が打つたり舞つたり饒舌ッたり、皆人々をそゝり立て、奧の間とこそ連れ行きけれ。折柄難波蝶五郎足取早き屈託顔、門口より差覗き、「否モシ誰ぞ賴みませう、」ト、云ふ聲を壽平が聞きつけ、「アレ誰やら人が來た案内があるぞや。」ト、云ひつゝふつと見交す顔、「蝶五郎殿。」「壽平樣是れは丁度能い處で。」ト、おつ／＼這入つて兩手を突き、「年も參らぬ妹操、女房共までお世話の段々。」「ホ、是れ／＼何の禮には及ばぬ事、夫れが此方の飯の種、世話とは些とも思ひませぬ、操も今日から青柳と名を嗣いで此處へ來て居る。お綾殿もお玉と名を更へ樓婢を餘程勤め馴れた。些とも案じさつしやるな。」ト行かんとする袖を押へ、「妹が身の代に金拾兩そへますれば、菓子のお扇を此方へ返して下さる御對談、種々才覺致しますれど今以て其の金が調達はぬとてうか／＼と、お扇殿を爰許へ置いてはどうも濟まぬ義理、何卒餘分拾兩は私が借用の證文になされてなりとお扇をお戻し下さる樣、偏に賴み存ずる。」ト、言はれて壽平は天窗を搔き、「御侍士の詞なれば御間違は有るまいけ

れど、取膳見應の此の當貴、さう忽にはどうもならぬ。尤もお前に青柳が、劣ツた美貌と云ふでは無いが、年は漸う十五なり、世間知らずの未だ幼なさん、殊に年季も短ければ、お前とは取り替へ惜く、算盤玉のぎり/\で積上げた處が、拾兩持つてござれば、今にでもお前が手形は渡して進ぜる。しかしアノ子が今夜から勤めを見た上では又相談の仕様も有らう。イヤ未だ大分用があるわえ、蝶五郎どん是れに綴りとござりまし」ト、闇しさうに走り行く跡につツくり蝶五郎、アヽ言はれるは皆じも、俺が金は拾兩なれど眞五郎様へ御貢ぎ申し金目貫さへ内證は、鑄のつまつた大小許り、ハテ何とした物であらう」ト、思案に暮るゝ奥の間より、「ヤレ/\綾衣前借りた七百を返さねばならぬ/\」と、手鞠を袖に青柳が、走り出づれば振返り「姉様ではないか、ヤレ/\現在兒が見捨ふ程苦勞しうなつたなア。是れが嫁入衣裳なら、何ぼうか嬉しからうに、可愛や年もゆかぬ者を」と、ほろりと泣きしが思ひ直し、「コレ/\今日からは太夫になツて、御客を取ツて居るでは無いか、ソレ其禿を相手にして手鞠を突いて遊ぶ白玉が何處の國に有る者かい」ト、叱り附けられ顔打赤め「それでも夜前借りたのを返さぬが氣に掛るから。」「エヽ、又ひよんな事言ひ出して、此方にも返さねば氣に掛る拾兩の金の事を思ひ出させた。サア/\遊んで居す、御客を大切に爲て呉れるのが御主の御爲、汝の心置く無いやう、荊妻まで屆けて遣したに、お綾めも氣の注かぬ。イヤお綾と云へば荊婦に一寸逢ひ度いものお

やが、此の揚屋に居るであらうな」「アイ、今奥で嫖客と酒飲んで居やんす。お前は人の氣の付かぬ閨座敷へござんして。」ト、一腹喫んで待ッて居よう。」「そんなら座敷を取繕ひ、一寸彼處へお越してたも」「今直に姉様を遣る様に仕やんせう。それは然うと蝶松は獨り遊んで居やんすか。」「オヽ、俺か背後を逐ひをる故、蝶々止まれを買うて遣ッて忍けて出たのは晝時分、種々の用が有ッて歸ッて見ぬが如何したやら。」「饑じからうに可愛さうに。」「御家の浮沈武士の義理、子に關係つては居られぬわい」「ちやと言うて頑是無い。」「ハテ些細な事は棄てて置きや、コレ禿衆茶室へは何處から行く。」「緣案内して上げヤ。」「サア斯ウ御出でなさんせ。」ト打連れ奥へ入りにけり。唄「てふはなたねのあおしらず、なたねは蝶の花しらず、しらず知られぬなかならば。」奥にて誰か彈き諷ふ。表の方に蝶松が蝶々持つてうか／＼と、來掛る揚屋の角の口、差覗いて嬉し氣に「モシをばさん。」ト、驅け寄れば、「オヽ、蝶松か逢ひたかッた。」ト青柳が、抱き上ぐれば目を摺り赤め「かゝさんもをばさんもこちの方ぢやと聞いた故、昨日も態々尋ねて來て、かゝさんに逢ひたれば、物も言はずに睨み附け、何處へか走ッてござんした。わたしやかはゆい子でもなく、にくい子になつたさうな。」ト、ワッと許りに泣き出す。「オヽ、尤もぢや道理ぢやが、それがみんな浮世の義理、エヽ、斯ウ云うたとて辨別はせまい。サアサアかゝさんに見附かッて又叱られぬ其の前に、ちやつと往にヤ／＼。したが、とゝさんは居やし

やんせナ、空腹じゥはないかいの。」「アイ、晝飯をたべた儘で、わしや空腹うてならぬけれど、皆に逢ふを樂しみに、浮々と來たわいナア」ト、さうであらう／＼、ちつと其處に隱れて居ヤ。」ト、門邊見廻し青柳は、飯櫃密と取出し、手疾く造る握飯、人音するに打驚き、袖に隱せば一間より、「イエイエ主はそんな酒に、逃げる事ちやないわいなア」ト、言ひつゝ、外して立ち出るお綾、「是はしたり太夫さん、此處に何して居やしやんす。貴妓が座敷にござんせぬと、皆は門邊が見られてならぬ。御客の御機嫌の損ねぬ内、サア／＼早うト手を取つて、「エ、、まア此の不始末な形容はいなア」したが、此の樣に長い小袖は着振されぬもしれないの、まア是れ樣を斷り寄せて」ト、引繕ふ青柳が振の袖より一ツ二ツ、轉び落ちたる握飯、お綾は吃驚青柳は、面目無げに取隱す、其の手を押へて顏打守り、恥かしい奉公すればこそ心までが、其の樣に無情しうなッたか情ない。內に居た其の時は、あんな行儀の好い御嬢は、又兩箇とはあるまいと、賞者になッた身が、假令どんなに空腹くとも、辛抱するが武士の娘、武士喰はずと高楊枝ト、俚諺にさへ言ふわいの。御主樣の世になれば直にお前を請出し、歷とした聟取ッて奧樣と言はさうと、私等夫婦が樂しんで居るに甲斐無い操さん、姨に恥かしめられ口惜しいと思ふなら、此の樣な無情しい事ふつ／＼爲て下さんすな」ト、眞實餘ッて腹立ち涙、一日君何卒をばさんを堪忍してドさんせ。」ト、取附く蝶松お綾が突き拔け、「あれ程までに合點させ、內へ置い

たに夜陰が夜中、連れがあつたか一人で来たか、長然しく内に居ぬとても母で無い子で無い。」ト叱り附けられ狼狽と、「今度から来ぬ程に何卒子にして下さんせ。」ト、言ひつゝ側に落ち散つたる、握飯を密と取り上ぐれば、「エヽ此の子とした事が、をばさんの叱られたを見て居ながら、そんな物喰ふ者ではないわいの。」「夫れぢやと云つて空腹いわいな。」「そんなら我が身が。」「アイ。私が空腹じいと云うたから、をばさんが此の握飯を拵へて下さんした。」ト、言はれてお綾は面目無く、差俯向けば青柳は、涙の顔を振上げて、「お前にアノ児を叱らせまいと隠したは私が過誤、堪忍して。」ト取縋れば、「其の詫言は私から知らぬ事とて今の意見、気に障つたら堪忍して。」ト、お綾は両箇を右左抱き擁へて泣き居たり。漸うに涙を止め、「コレ蝶松、父君が待つてであらう。早ウ往きや〳〵。」と突きやるを止むる青柳、「兄様は最些と先此処の楼へござんして、人の眼に掛らぬ様茶室に待つて居やしやんす。」「ムヽそんならば妾本夫は。」ト、見返る背後に嬰子のお房、「ふつと愛へ来掛ツて貰泣をしたわいな、貴女方の御心遣ひ、更々仇には思はねど、其の様な可愛らしい子のある中を引分れ。又、年もゆかぬ操様を妾が代りに何とマア、勤めがさせて置かれうか。能う考へても見やしやんせ、先刻も北野の聖廟で蝶五郎様に面謁り其の事を言ひ募り、夫れから茶椀の我々となつたも互の義理と義理。」「さいなア其の義理が重い故、お前を原の身儘にして蝶吉さんに返戻さねば、妾本夫の顔が立たぬ。」「否々妾が戻ッ

ては蝶吉殿の武士が立たぬ。」「お前も。」「お前も。」両人ともに忠義を立てたさ。」ト思ふに甲斐無い眞五郎さま。」「眞兵衛様まで御浪々。」「夫れと云ふも實の假親の紛失ゆゑ。」「頓て詮議を仕出して。」「今の難儀を。」「昔語りにせうぞいな。」と見替す互の眼に涙、折柄表へ走り来る奴僕が門口差覗き、「申し／＼、お局さん。」と差出す文を手に採上げ「アイ／＼、合點でござんす。」ト、半分讀んで懐中へ、押隠すを見て取るお綾「何にも妾に隠さんす事は無い。蝶吉様が御病氣故、柳街へ引取つて置かしやんすと云ふ噂は、疾くに聞いて居るわいな。今来た文も大方主の所からでござンせう。」「アイ、能う知つて居やしやんす。成程此方の蝶吉殿が跡の月から感冒が抜け兼ねて癪に成り、浮浪としてござんすから遠出に置いては猶氣掛り、柳街の裏家を借りて一寸の間にも外けて行き、心許りの妾が看病、今臨終が悪い故、急に来てはくれられまいかと云うて来たのでござんする。」「さう云ふ事なら能い様に座敷に取繕めて置かう程に、早う往て上げなさんせ。」「そんならば少しの間お綾さんではないお玉どん頼んだぞえ。」と云ひ棄てて、倉皇として出でて行く「蝶吉さんに傳言を能う心得て下さんせ。」ト影見送ッて立歸り、「妾本夫が逢ひ度いとは跡金の事で有らう。サア太夫さん蝶松もマア一緒に御出。」ト思案しながら奥へ入る。跡へばた／＼驅け来る眼助、物をも言はず銚子引寄せ茶碗で一杯呷で下し、「ヤレ／＼飛んだ目に逢つた。女と侮り物品を巻揚げられ、何でも郭の入口までは慥かに背後を遂

うて来たが、たれかの影も容姿も見ずお脚の早い女めだ。エ、是れ誰ぞに逢ひたいものだ。」ト、呟く、折柄奥に人音、一寸木影へ隠れ居る。毒庵は青柳が手を採りて又千鳥足、「座敷が明いたら愚老が呑込何事とも氣遣ひ仕給ふな、マア／＼此處へ。」ト連れて出で、「今日此方に聞いて来た酒手の主は、お絹と云つて、傍で有らうかの。」「エ、。」「エ、さ、其の姉夫婦が身の上に急に金が拾兩許り無ければ成らぬ事が有らう。」「エ、。」ト云ふ度毎に顔色變へて吃驚々々すべからず、先刻親方壽平とやらと蝶五郎が談合を、暖簾の影で聞いて居たが、成程武士の義心は格別、人は斯くこそ有りたけれと、潸々と感涙を余や離して居たれいの、其の志が不便さに七三様に御願ひ申し拾兩貰うて持ッて来た。御客から櫛を買へと私に是れを下さッたと、姉に渡して安堵さしや。」トざらりと拾兩金入ごと渡せば、青柳飛立つ嬉しさ、「ま、、御恩は忘れません、七三様へも篤りと禮言うて下さんせ。」ト立上る袖を捉へ、「モット待ッたり其の替り、些と聞きたい事が有る。」と云つて餘談でも無いが、アノ蝶五郎は奥になれど蝶吉が行方が知れぬ。定めしお主は知つて居よう。」ト問はれて何の辨へ無く、「ハイ左様なら、蝶吉さんは御病氣で柳街の裏家とやらに過月からござんすと、お扇さんの先刻の話。委曲しい事は知りやんせぬ。」ト、袖を拂ッて奥へ行く。時分はよしと密と出で、「毒庵様こ、眼助殿兼て手管の寶の假面は、旦那の妹子小菊様と腰元の清見めに首尾好と巻上げられました。シタガ高で女の事、今の間に探し出し取戻し

て奴が面晴れ、ソレは然うと毒庵様には思掛ない實事師、女郎めにアノ金を御遣りなされたお心は。」「彼奴を玉に女郎と幼童を小ツ惨い目に合はせ、報應はさず惚れて居る。お綾を抱いて寝る思案、又二策には柳街の隱家を聞かう爲。」「何柳街と仰有るは。」「コレ」ト眼先へ突付けるは蝶松が忘れし翫弄物、「コリヤ何ぢや蝶々が二ツ。ウヽ、そんなら蝶吉蝶五郎を。」「コレ此の蝶々を闇殺めると、菜の花に似た黄色な物を菩郎三様からしつかりと。」「ナツト最先度の先、登樓の客に紛れて奥へ。」「忍べ忍べ。」ト兩人は、こそ／＼として入りにけり。入違ひて蝶五郎お綾も跡より立出でて、「奥で一寸云つた通り御客から貰うたと操さんが紿れなさんした。此の金は丁度拾兩、些とも狭くお屑様を請戻してドさんせ。」ト、蝶五郎が手に渡せば、「ハヽヽ、牀へもいらぬ初會の客がどういふ譯で此の金を、エヽ、儘ヨ時の用には鼻を殺げ、仔細が有れば後で分らう。壽平が内に居れば能いが。」「そんならお前一走り。」「オヽ、直に往て來る。」ト言ひつゝ出づる門の口、「觀念ひろけ。」ト切り込む眼助、引外して元結をたんの苦も無く引摑む。ハツト驚き立ち寄るお綾、「此處構はずと奥の客に、心を注けや。」ト翻轉うたせ、投げたる儘に見向きもせず、半踏ちやら／＼走りゆく、ゆふの山ゝ夕朝のうき勤め、花いつときの眺めとは、しれども迷ふ數々の、夜にそめても實はうすく、思ふ方へと駿河なる、ふじも麓の戀の山、わがふみわけてわが迷ふ、夢のなかどの夢枕、月を憎みし夜半もあり。」琵琶三味線弾き連れて門に彳

む三人連ニアレ合の山が來たわいな、面白さうなァノ唱歌、此方へ入れて諷はせて、聞いても大事ございませぬか」ト、立出づる青柳太たじ、續いて仲居引船禿、ぐかこの新助浮れ出で、「イヤ最うたたきんの御好みなら、些とも遠慮は內證まで、「ソツト通ツて諷ツたノヽ」「左樣なら誰方樣も御免なされて下さりまし」ト、人目を包む編笠は、其の儘內にご入りにける。仲居禿が寄り集り、「てもマア三人物好きに、揃ひの衣裳の派出姿、兩箇の女中の其の中に一箇殿御の徒風俗、斯うぶふ打扮に成らしやんしたも、大方譯故ナァ申し、そんな事でござんせう、羨ましいでは無いかいな。」ト口々言へば件の男、「面目なげに顏をも上げず「羨ましいとは貴妓方、なんの罪も報いも無く、笑ッてござるが實の極樂、他日には私共も何の苦勞も無い樣に、見えまするかは存じませぬが、心の內の苦しさは、言ふに言はれぬ米貰ひ、推量して下さりませ」ト、我を忘れて打向ふ、顏を見やりてお綾が驚きつ「ヤァ貴方は」「サァ穴の穴まで知り拔いたこなさん方、必ず人に覺られぬ、ナ、郭で流行の文句をむやつと、サァノヽ諷ッて。」「お聞かせなんし」ト、言はれて件の三人は、又も調子を掻合はせ、あひの山、辛いぎしきを貰はれて、よそにゆくみをかの人に、一寸かしまの神も知れ、しんぞ嬉しさ可愛さの、みにも答へて忘られず、しよて二度まではふる雪の、つみもおそれぬむり起請、かみも佛もふたつのみ、に、うきことまことをさゝやきの、はらのくもてにものおもふ、かうし叩くをおひづにて、まれのごけ

んもまがきごし、なにをなげくぞなげきても、ゑは十年のつなぎぶね、ひとのなさけにやう／＼と、きしをはなれてうきよの浪に、よるべのしまを又へだてられ、なき明したるいそちどり。」奥には七三手を打ちたゝき「たれも居らぬか、太夫はどうした、新助々々。」呼び立てられて「アイ／＼其處へ。」「サア／＼早うござんせ。」ト、皆逐ひやッて四邊を見廻し、お綾は側へ摺り寄つて「モウ遠慮はござんせぬ。」ト、聞いてお菅が嬉し氣に「そんならば姉さんと、言うても大事ござんせぬか。」「オヽ、大事無いは無いけれど、薩張と合點がゆかぬ。マア妹の事は差置いて絶えて久しい吾妻樣、與五郎樣まで輕々しい此の御容姿はどうした譯、仔細を聞かせて下さりませ。」ト、問はれて與五郎笠脫捨て「そなた衆に種々の難儀を掛ける原はと言へば、皆此の身から發る事、面目なきに腹切ッて死なうとしたは數度なれど、蝶五郎や蝶吉が心を盡してくれるのを、仇にするのは本意ならずと惜しからぬ命を存在へ、此の樣な容姿をして彷徨ひ步行くは紛失の、寶の假面を詮議の爲、何ほ家來筋ぢやと言うて、皆の者に辛苦を掛けた、其の罰でもモウ再度、以前の身には成られまい。手遊の此の蝶々、思はず足に障ッたを勿體無いと心の內で、余や戴いて置いたわいの、刀劍を帶さぬ法もあれ、兩箇の者の眞實を仇には思はぬ來世では、余が方が家來に生まれ、其の時恩を報らう。」ト、聲を忍びし男泣「エヽ、勿體無い事仰有ります。御主の爲に艱難するは面々の當然、ナア申し吾妻樣。」ト、氣輕に言へど是れも

又其に愛想尽かし、鬼様上げ、面目ないとは妾が事。此の騒動の元々の原を正せば、此の身の罪やら誤なら
に、今日は無理言うて見たれども、小菊様は昔から御許嫁の中なれば、隔つる心は露塵も無い、寧そ
叶はぬうて配偶れぬ縁、配偶れねば死ぬるより外に仕様は無いわいな、夫れに引替へお菅さん、與兵
衛さんには義理の有る、女中さんが無い故に、離縁らぬ女夫中、お羨ましうござんす。」「夫れ故
ばお菅は投首して、は色香る松風と誰やらが讀んだ通り、妾も矢張末永く配偶れる事ではござんせぬ。
此の事は姉さんにも今日までは話さねど、父君儀太た様の所へ軍學を修行ひに來た南方十字兵衛と云
ふ武士が、妾を女房にくれぬかと言出したと思はんせ、與兵衛様と言替して居る事は父君に未だ打明
けぬ前なれば、此の通り不行届な者でも能くば、如何にも娘を上げませうと請合うて結納の取替せ。
そか是れは叶はぬと覺悟を極めて與兵衛様の事を委曲父君に言うたら、彼方も吃驚して両方共に無事
なればよいが大體では濟むまいと、蝶五郎様へ其の事を相談に旅立たしやんした道で、敢なく御最期
とも知らずに妾も國を逃亡、其の十字兵衛様に見附かると妻敵ぢやと唯一打、マリャ今日有つて翌日
無い命、羨ましい事は些ともない身の上でござんせう。」ト語るに人々打驚きお綾は取分け思案顔、「一
寸延びれば寸延びる、随分とマァ其の人に見附からぬ様にして、此處は端近貴方方も人の眼に掛らぬ
様奥の茶室へ、妾と一緒に。」「否最う顔は編笠で隠せど両箇が形容、新助や仲居めが。」「それいナア吾

妻ぢやと言ふ事を氣が附きはせまいかと、お背さんに謳はせて、妾や默ッて彈いて居た。」「何かの事
はマア奥でこーゆアござんせ。」ト打連れて、皆々奥へ入りにけり。（作者曰く、掃舞臺とか云うて舞臺
に人一人も無くなると、チヨン／＼にて此の道具ブン廻す。上方の狂言にはかかる趣向多くあり。）
○サア飯が出來やんした。」ト、ちつと喰ッて力を附けようどれ／＼。」ト蝶吉は蒲團の上に起き返り、
「イヤお扇とろ／＼ト寐つた内に、誰も此處へ來はせぬか。」「イエ／＼誰も來やんせぬ。それはさう
と、見馴れぬ葛籠が出して有るが彼品は何で御座んすエ。」ト、問へば蝶吉不審顔、「あれは此方の口上
で木綿夜具では重からう。此の襟を著て寢ろと、最ちッと先刻新助が、持つて來た儘明けても見ず、
ア、して置いたが其の贈人が、知らぬとは合點のゆかぬ。」ト聞いてお扇が打點頭き、「ソリヤ大方お綾
さんが心配でござんせう。さう云うては氣の毒ぢやとお前が戻さんすで有らうと、妾が名を新助さん
に詐構せたのでござんせう。」「成程それに違ひは有るまい。アヽ、毎晩々々裏の揚屋の三味線を聞いて
ぶら／＼して居るとは思掛けない俄大盡、夫れは能いが寶の事や敵の事を思ひ出すと些とも早く本復
したい。」「ハテ其の樣に氣を急くは病氣の毒でござんすぞえ。マア緩々と養生をしやしやんすが能い
わいな。」ト、話す背後にがわつたり物音、「エヽ、吃驚した今の音は何で有らう。」「イヤ餘り鼠が若鼬
いから落しを掛けて置いたのが、首尾好く落ちたかアレ／＼啼くわ。」「お前もマア可愛相に。」「何さ

アレは極楽落し後では遠くへ放してやる」ト、喰ひ仕舞ひし膳突出す。門を與兵衛が差覗き、蝶吉や日は気合が宜いか」コレハ／＼旦那様マア／＼御通りなされませ」ヨ、お房も此処へ来て居やるい。昨日よりは顔色も大分に見直した。其の容体では段々に心よく成るで有らう」ハイ。最前は熱寒気で余程悪うござりました。夫れでお房を呼びに遣はし、加減の薬を飲用みましてから大分力が増きました」ヨ、夫れは能い與五郎始め皆の者が太秦に隠れ住み、姿を変へて宝の詮議、油断無くしてれ行けば、そんな事を苦にせずと、気永に保養をしたが能い」ト力を附くる其の所へ、真一文字に馳せ来る若者、合点行かずと振返り「イヤアそちや與五郎が小性角蒲で無いか」ト「さう仰有るは與兵衛様蝶吉殿、ヤレ／＼嬉しや／＼」ト、胸撫で下して太息を継ぎ「今日若郎が中間眼助といふ奴が、宝の仮面を質屋より、請取ッたを篤と見届け、北野の社内へ逐込ンで、到頭宝を奪返し、與五郎様の隠家太秦へ参りし所、何れへ御越しなされたやら門の戸は締てて有り、南無三宝と暫時は当惑、然るに是れなる蝶吉殿が此の郭へ移転られしト、豫て聞きしを思ひ出し、取つて返して漸うと、尋ね当つて貴方にまで、御目に掛るは天の冥助、イザ御請取下さりませ」ト、差出せば悦ぶ三人「ヤレ／＼夫れはお手柄／＼」ヨ、うい奴出かした／＼、嘸與五郎が悦ばう」ト、與兵衛は仮面の箱取り揚げ、蓋打開いて憫れ顔、角蒲は側より差覗き「ヤヤ宝の仮面と思ひの外、似ても似付かぬお福の仮面、コリ

まさうぢやノヽ」ト、立つて見居て見、意外の事に涙も出でず唯うろノヽ、思ひ迫ッて差添を、拔くよりも早く我が腹へ、突立てことなしければ、「コリヤ角彌急氣るな」ト、止むる與兵衛お房も共に、「ナナ何でお前は腹切るのぢや」ト縋り付けば、顔振上げ、「五條通りの百足屋が、寶の假面を質物に、取ッたる由を仄かに聞き、其の家へ丁稚奉公、今日と云ふ今日眼助が、請け戻すをしつかりと、見定めて遂掛けしが、何時の間に摺替へたか、子供欺しの樣な物を、寶と思ッて浮々と、持つて參ッた不甲斐無し。申譯の此の切腹」ト、あせるを與兵衛は猶放さず、「摺替へた其の假面は、眼助か苦郎三が持つて居るは知れた事、寶詮議の手掛りを聞き出したは汝が大功。ハテ、切腹には及ばぬ」ト、角彌が白刃を捥ぎ取ッたり。蝶吉も摺寄ッて、「御旦那が此の假面を、取上げ給ひし其の時に、内より落ちたる此の一通。「彌々明日北野にて金子御渡被下候段、忝く、又々跡の假面の事も御取持ち頼み入り候、彦助より預り物なれどふじの森相果て候へば、賣拂ひてもかまひこれなく候、ふと手に入り候金子を雪の中へ取り落し、蝶五郎に拾はれ、見請の先を越され殘念此の上無く、併し今にも金子さへ調達ひ候へば、吾妻を手に入れ候手段有るべくと樂しみ居り候、以上毒庵老へ黒印。」「疑ひも無き苦郎三が手跡、お房が母を殺したも彼奴が仕業で有つたよな。」女房悦べ此の手紙で敵は知れた。」「是れと云ふも角彌樣とやらの御蔭、忝うござんす。」ト、夫婦が悦び大方ならず。與兵衛はすんど立ち上り、

「此の上は菩郎三が潛伏所を探して詮議を遂げん。コレ、ナ合點か。」ト、蝶吉が耳へ密事を打囁き、「角彌來れ。」ト引連れて心忙しく出で行く。「お扇脇指出しや。」ト、蝶吉も帶締め直し出でんとせしが、顔色變ッて身中はわな／＼、又戰慄ひ附かしやんしたか、如何して其樣なおんばいで、外へ往かるゝ物かいな、貴方衆に任せて置いてマア休ンでござんせ。」ト、寢牀の上に誘導はれ、どつかと居ッて齒嚙を爲し「エヽ、時も時とて此の寒氣、瘧病と云ふは何たる業病、御主人の御先途を見屆けられぬか情ない。」ト、いと苦し氣の息遣ひ、お扇は側におろ／＼と「其樣にお前寒いなら、あの夜着を重ねて着て、汗を取ッて見やしやんせ。」ト、葛籠の蓋を取り退くれば、思掛けなき中より菩郎三、スット出づるを見て吃驚、逃け退くお扇を取つて押へ、引窗の紐引きしやな繰り、かんじ蔓みに縛むるを「コレハ。」ト、蝶吉透迤きながら摺寄るをハッタと蹴倒し「舌切雀の古葛籠、重い中から此の菩郎三、お宿は此處と聞いた故、ちよつちよと出入る角助を、欺して首尾好と入込んで、熟視と聞いて居た。汝が推量に違ひは無い。慳貪らしい媼アめを千本通りで闇殺したが、お扇汝が阿母か、ヤレ／＼不便や御笑止や、是れから兩箇を嬲切り、予が一期榮えるを草葉の陰から見物しろ。」ト葛籠へどつかと尻打掛け、煙管取出しスッパ／＼。「エヽ、尋常の勝負は爲ず、卑怯未練な今の廣言。」「ふいを打たれて此の繩目、名乘り掛けての立會なら、女でこそあれ己等に、斯ウ無殘々々とは縛られまい。臆病未練な

大武士に犬でも猫でも是れが當世、急くな／＼病氣の毒だ、ム、腰拔めが洒落くさい」ト、足下に踏へ動かせず、扠これからは療治の一段、股から突かうか腕からかつ」ト、既に危き折こそあれ、息をはかりに驅け來る小蝶「蝶吉殿々々々假面が手に入つたわいなア」ト、言ひつゝずつと内に入り「ヤア兄さんかア」ト驚く弱腰飛び掛つて蹴摑み「假面と言すはこいつかア」ト、小菊が抱へし緋縮の、包を苦郎三に引つたくる「それ遣つてはつ」ト蝶吉が、蹌踉ひ／＼武者振り付く「エヽ、面倒なつ」ト振拂ひ、持つたる假面にて打々々々、打つ手を下より蝶吉が掻潜ッてしつかと捕へ、假面を奪取り苦郎三を、其の儘其處へ頭轉倒、尻骨折つて直つたりけり「ヤヽお前は如何して遽に病氣が一寸、癒ッたのは寶の威德、今此の假面にて打たるゝと、忽然夢の覺めたる如く、癪が落ちれば千人力、女房共もう些ッとも氣遣ひするな」ト、乾度身構へ居たりけり。所を斯うト苦郎三が切込むを引外し、其の手を持添へ縛めの繩を蝶吉切り掛ふ。お扇は悦び腰指をおッ取り上げて右左、夫婦一緒に詰寄すれば、優物とや思ひけん、竈に足を踏み掛けて、引窓より家根傳ひ、落ち行く苦郎三逃さじと、お扇が進むを偏つる蝶吉、引窓ぱわらりと立ち切つたり「手に入る敵を見遁すとは、血迷うてかこちの人」「イヤ血迷ひはせぬ蝶吉が心は是れこ」ト鼠落しお扇が前に突出し「苦郎三が大門より入り込む影を、與兵衞様が確かに御覽なされたとて、角彌を引連れ篤に手配り。ハテ此の郭は一方口、此の鼠と同じ事、他に

出所は無いわいやい。當時の内の極樂落し、此處で討たぬは小菊樣へ、守吉と言ふも白癡しいが、能く考へて見たが能い。如何程惡でも現在の、兄を討たれて安閑と、見てはどうも御座られまい。素よりそッで無い事は、與五郎樣が能く御存じ、贋の假面は剝引手、頓てめでたく御輿入。」「何から何まで蝶吉殿、何にも言はぬ忝い。」ト、小菊は涙に咽びいる。何時の間にかは忍びいた、「蝶吉覺悟。」ト切込む眼助。身を替して脇差拔取り、直に突込む止めの刀、讐討の丁度血祭。「そんなら妾は出口へ追驅け。」「心靜かに支度仕やれ。」チョン／＼／＼ト幕(直に引返すと揚屋の奥座敷となる。)

(「餓鬼めも女めも動くな。」ト、蝶松を宙に引立て、青柳が襟髮を摑んで毒庵動かせず「可愛さうに幼ない者を、コリャ何としやさんす。而してマア妾には何の過誤何の咎で。」「イャ盜人猛々しいと、コレ蝶松が手遊びに持ッて居た此の金嚢、聞けば青柳が遣つたさうな。コリャ七三樣の確かに金嚢、枕捜しの詮議をする、愕瀨せずと下座に居やれ。」ト、聞いて青柳呆れ顔「其の金は七三樣が妾に下さんしたと言うて、お前が現在渡さんしたを、今に成つて何の詮議。」「否々々己や知らぬ。何うして未だ牀へも入らぬ初會の客が、大枚拾兩くれる白癡が有る者か。顏に似合はぬ怖ろしい。コリャ大抵では言ひ居るまい。」ト兩箇を引敷く膝の下「伯父樣何卒堪忍して。」ト、泣入る蝶松物影より、お管は堪らず走り出で、「どうしてマア此のさん達が、其樣な事をせうぞいな。靜穩に仔細を言はしやんせ。」

ト、止むるを拂ひ退け「エ、面倒ナ」ト、煙草盆振上ぐる毒庵が手を背後よりしつかと押へ、お綾は兩箇を押留ひ「太夫さんに惡い事が有れば人の手は賴まぬ。此の樓姐が折檻する。主が詮議をするわいな。初會は愚か見ず知らずの、娼妓に金を遣るも意氣張、そこが都の花の郭、無き慣ひでは無い故に、其の金は太夫さんから妾がしつかり預ッた。夫れが何としやんした。」「フウそんなら其の金出して見せや。」「エ。」「有るまい、ヘ、何の有らう。ソリャ徐々相撲が出掛けて詮議が面白い。コレ分別道知らぬ突出しの太夫に、其方が附屬いて居ながらなぜ金を貰うた時、お客へ一寸挨拶せぬ。ハハア此奴を道具に遣つてコリャ己が仕事だなと、己が喚き立てて見やれ、其の美しい頸がコロリ、其處が毎時言ふ事なれど魚心あれば水心、應とさへ言うてくれれば關東詞のうにや櫻、水にして流して仕舞ふ。否と言へば此の幼童まで、慘酷い目見せるがサアどうだ。」ト、立ち掛る毒庵が襟頸を、背後から搔摑んで踊躓打たせ、煙草くゆらせ悠々たる、顏を眺めて又吃驚、「ヤア貴方は七三樣、此の毒庵を頭顚倒、何でお投げなされました。」「不要詮議をするからサ。」「それでも貴方の此の紙囊。」「太夫に己が遣ッたのぢや。」「エ。」「コレ毒庵此の金囊を己がのと、見知つたのさへ合點の行かぬに、初會の客が大枚拾兩くれる筈は無いなどと、如何して員數を知つて居やる、と己が喚き立てて見やれ、其の頸がツイころり、ぢやに仍ッて矢張太夫に遣ッたにして流すがよからう。コレ青柳、昨日劇場を

観覧したが、ア、何とか云ふ敵役が自分が金を偸みながら、それを人に塗り付ける。其の謀計が露顕はれて、密々隅へ隠れる所が一番己は小気味が宜かッた。ア、皆の者にも見せ度い」ト、莞爾々々と打笑ふ顔をお菅は差覗き「エ、エ、お前は南方十字兵衛さん、面目なうござんす」と、袖打覆ふを見向きもせず「離縁状を遣らぬ内、其の名を言へば刀の手前、見遁されぬ事が出来る。矢張己は南七三今宵初めて会うた客」な、ア、最う鶏が謳ふさうな、座敷を変替へて飲み明さう、青柳おおや」ト、引連れて徐々這入る背後影、両箇の女は手を合はせ、伏拝んで居る所へ、勇み進んで蝶五郎、息つき敢へず馳け来り「悦べ〱、お房殿の身請は済む。宝の假面も御手に入り、お房が隙の敵は茜郎三、朱雀野に待合はせ、今暁彼奴を討取る手配り、後見として與兵衛様、與五郎様も御出での由、蝶吉に會うて聞いた」ト、云ふに人々飛立つ嬉しさ、一間の内より聲掛けて「お房にばかり茜郎三を討たせては、両箇の女の義がたつまい」ト立ち出る南方「ナニ妾等が義が立たぬとは」「汝達が親、梁田儀太夫を殺したも矢張茜郎三」「エ、エ」「證據と言ふは梁田の家に傳はりし此の一巻、茜郎三より買請け置きしも、これを験に汝衆に本望が遂げさせたさ」「重々厚き御志」「ナニ〱禮には及ばぬ事、軍術秘密を残り無く傳へられたる恩送り」「ソレ離縁状」ト、投げやる一通、お菅が披いて「コリャ青柳さんの年季證文」「否汝への離縁状だわや、離縁って仕舞へば遺恨は無い、師匠の息女へ我が賜覺

その一腰、是れで見事に。」「ハッ。」ト取揚げ押戴く、背後に毒庵物をも言はず切つて掛るを引外し、首先摑ンで突率ばり、お綾は長柄の傘取揚げ、打ち碎けば仕込の槍、轆轤を直に管として肺臓を串差し、毒庵は、ウンと一聲倒れ伏す。「適れ手の内。」「まづ此の隙に苦郎さんかた一東雲近く疾く〳〵。」「ハッ。」ト一禮驅け行く三人、跡見送つて十字兵衛死骸を池へはつたと蹴込み、心靜かに奥へ入る。

「道具替つて朱雀道と成るご母さんの敵。」「父さんの讎。」「サア尋常に。」「勝負々々。」「小癪な女め返討ち」觀念ひろ」ト、打ち掛るをお扇が手練の鎖鎌、はつしと請ければ附け入るお菅、吉田妻なくも苦郎には、切立てられて逃げいたり、向うへお綾が後れ馳せ、槍引つしごいてじり〳〵と、元の所へ附け戻し、暫時勝負は附かざりけり。與五郎與兵衛は昔に返る社祢立派に扮裝して、牀几に掛り見物なし、共に從ふ蝶五郎蝶吉も手に汗握り、面々妻の働きを瞬きもせず守り居る。孝心全き三人に、苦郎三、宰で及ぶ可き。お扇が鎖の眼潰しに、辟易く所をお綾が一突、後れはせじと飛掛り、お菅が直に止めの刀、蝶五郎聲を掛け、「出來た〳〵、寶の硯面の御手に入れば、是れより直に御供して一事件納まりし其の後に、小菊様と御婚禮、吾妻殿も御側近く、召遣はれて下さる様、此の蝶吉が兼ての願ひ」とやかう云ふ間に早東雲、御陪從の用意。「ハッ。」ト先づ此の本は是れ限り目出度賣出し。」

正本製六編 終

正本製 七編

編者 柳亭種彦

立物抄 於染久松物語

○唄「[illegible]ござる程にこれはまた、もつたいらしくもうつくしま、べんてんながやのおんからい、くはしくこれをたゞぬるに、むかしはなかのしてんわうぢや、今ではまのといふとかや、あだとうはきをこきませて、けんとほしでめかしもの、しやうとくたいきの御生まれ、いたこのつめひで心いき。「あらひあげたるそこびかり、ちよくで八はいいきなしに、あとはたばこのあさまやまッ」ト變り文句の唄祭文、參詣繁き天滿の境内、背後の牀几に密々談話、「オイこれ〳〵息精張ッて語ッても、もう強い貰ひもあるまい。半まで骨折代を奮發んだ上に、些少許り頼んで置きたい事がある、耳を出しや。」ト祭文讀を、呼んで何やら密語いて、「ナ、合點かッ」追立てやり、「これ泥八、そんなら於染や母親はッ」「ハイ、もう後刻で御座りませう、今日で旦那太郎兵衞が、百ケ日も濟みますれば、寺參りから戻り

に寄つて、此の天神の御山屋で、精進落をされる筈、こちの娘子お染様は、御結號の事なれば、假令否と仰有つても、貴君の者に極つて居れど、とてもの事に此方の家の若旦那さへ片付ければ。」「成程お染が兄の太郎助さへ、遣つて仕舞へば瓦屋町の、家藏總體此の山鹿屋の佐四郎へ流れ込み。」「サアそこで御座ります、お家さんお艶様は發明でも高が女、殊に惚れて御座らッしやるお染さまの實の母視、差して邪魔にもなりますまいが、困り者は番頭久兵衛、どうぞ彼奴を追捲る。」「オヽ其の思案、貸して遣らう。」ト聲掛けられて二人は吃驚「汝ゃ丁稚の頓松め、生膽を抜かせ居ッた。」「モシ泥八さん口頃一味合體の余なればこそ宜けれ、外の者で御覧じろ、つい其の首がコロリとしめやくに逢ひやすぜ。」餘りお前も大膽な、太郎助様はもう疾くに御山屋へ来て御座ッて、母様やお染はもう来さうなものぢや、其處まで見て来いといふお使に、此の頓松が打立ッたり。」ト獨り浮き立つ背後より「エヘ何をして居るやら頓松々々、まだお見えなされぬか。」ト云ひッヽ出て「これは〳〵思掛けない佐四郎殿。」「イヤ太郎助殿不圖此所へ參り合はせ、泥八に承れば御家内一統御山屋で、精進おちの御振舞、好い折柄と最前から、お待ち申して居ります。」ト話の中に頓松が、伸び上ッて前面を眺め、「アレ〳〵草其の方からお家さんが、お染さんと連れ立つて、お供は余とは犬と猿の、久松と見るは僻目か、後からハチヤクチヤ喋ッて来るは、久兵衛が慥かに内儀、娘子の小富を連れて次なるは、赤くも下女

の土にて渡らせ給ふ。一度拜する輩は、しやくし果報をあらせんとの御誓願なり、近う寄つて御縁を結ばれませう。イヤ御縁といへばお染さんが。」ト言掛くるを、「えゝへん〳〵。」佐四郎が紛らす中、お捨は目早く、「あれ〳〵前面に旦那樣や佐四郎樣が。」「眞になう何ぞうか〳〵是れお染、皆も一緒にお出やいの。」ト母の言葉も上の空、顏を背向けて立ち竝ぶ。佐四郎は扇子はち〳〵、「ツイ寺參りと聞いた故、もう其方は來さうなものと、數時なり少時なり、大抵待つて居られたは、あの兒の太郎助殿、イヤ母親樣お草臥で御座りませう。」言ふにお艷は打笑ひ、「是れは〳〵佐四郎樣、誰が知らせて宜うまア爰に。泥八も早かッたの。御存じの通り太郎兵衛殿に別れまして、今日で百日夢の樣に暮しましたが、皆の者に遺言を言ひ聞かせて是れからは、愈店の取締に、氣を付けねばならぬ體と、あの太郎助に褒められし。」「サア母おや人の御愁傷も、御尤もでは御座りますれど、未だ年若な此の太郎助、是れから萬端氣を付けて、貰ひませねば行き立ちませぬ。それはさうと是れ妹、佐四郎殿へ挨拶しや。」ト氣を付けられても顏振つて、「兄さんの何しつてあはうらしい。」ト取り合はねば、母のお艷は氣の毒さ、態と笑ひに紛らして、「御覽じまし身體許り大きうてもまだ少兒さん、頓と兒を朋輩か何ぞの樣に心易立て、チト了得んだが宜いわいの。」ト、取り繕へば涙ぐみ、「あい、あはうらしう御座んすから、あはうらしいと言うたのぢや、あはうらしい。」トぴんとする、「これはどうぢや、母でも兒でも阿房ら

しいと、ア、こりや何ぞ其方道で腹でも立つたものであらう。たま汝や様子を知つてゐるか。」ト、太郎助に問ひ掛けられ「ハイ大概存じて居りますが、お染様のが御尤も、阿房らしい。」ト同じ様にびんとすれば、うるノヽと泥八が顔打守り「此の様にあはうらしいが流行るも頓とあはうらしい。」モシお染様、何がまた其の様にあはうらしう御座ります。」「さア私があはうらしいと言うたのは。」「ふウ私があはうらしいと言うたのは。」「あれ。」「あれ。」「あの久松がこツちやわいな。」「はてな、日頃は貴嬢の御氣に入り、だれが何で今日に限つて。」「いえノヽ泥八殿、此の久松はお染様の御機嫌をそこねた事は。」「いゝやある、此の染をたかが女の主人おやと侮つて、」「どうしてまア勿體ない。」ト、二人が爭ふその中へ、小富を連れてお捨が立ち出で「そりや若し斷うで御座ります。母親様は何や彼や、お寺に御用があると言つて、先へ御出でなされました、後からそろノヽ参る道で、道頓堀の新狂言、一幕見ようとお染様が仰しやつたを、久松どのが「否々常とは違ひます、まア重ねてになされまし。」と申したのであのお腹立ち。」ト聞くより頓松社張り出で「こりやお染様のが御尤も、ヤイ久松、汝や己と同じやうに、丁稚奉公する身で居ながら、何の主人に指圖だて、此のほゝけたで吐したか。」ト、ふり上ぐる手を背後から、引摑んで頭轉倒「ヤ此方の人久兵衛殿、お前はまア何時の間に。」ト、立ち寄るお捨をつき退けて、頓松が起き上り「番頭さん、イヤ番頭どの、何で己を擲けたのだ。」ト入らざる

手出しをするからさ、はて久松に越度があらば、お母親樣や太郎助樣が能い樣に御叱りなさらう。」「嗚呼こりや誰ぞへの追從に、當り文句を一段、日待の晩まで仕舞つて置きやれ。それはさうと母親樣、何やら私夫婦の者に、」「用といふは外でもない。此のお捨は陪婢で、使うて心も知つてゐる。運針は利くたまかもの、夫れ故其方に媒妁して、配はしてからは通ひ勤め、程なく夫れ其の娘は出來る、夫婦合もよささうで、何よりの私が安堵。不足にはあらうけれど、暖簾に添へて六貫目、夫婦にやつて何なりと、氣に濟んだ商賣を、させいといふ太郎兵衛殿が、くれぐ\も末期の遺言、何を言ふにも内の取込み、百ヶ日も濟んだれば、少時も早くなア太郎助。」「左樣々々別家を立てゝ與りやるのが、親父樣への善い追善。何日でも金は渡さう程に、仕廻れた内の商賣なりと、又は外の商賣でも、勝手次第にしたが宜い。」と聞いて夫婦は涙に暮れ、「心に思ふ百分の一も、口では御禮が申されませぬ。十二の時から御家へ上り、元服致した其の時に、旦那樣の御紋附、下さつたをお墓參りに是れいつでも、著て參るが心に御恩を忘れぬ證據、お捨、涙ばかり流して居ずと、御禮申してくれたが宜い。」「お前にさへ言はれぬお禮が、どうして私に申されませう。只此の上は戴きましたお暖簾を、汚さぬやう商賣を精出しまして少しづゝでも、資本の内を納める樣に致しませう。」ト伏し拜めば、お辨は合點き、「返すには及ばねど、さうさへ思へば油斷がなうて、身代の爲にもならう。そしてあの久松もこがひ

からの奉公故、一人不便に太郎兵衛殿が思はれて、遺言に。」ト、言ひ掛るをお染が引取り、「あの久松にもお捨のやうに、誰ぞ女房持たせいと。」「いやさ左様言ふことではない。」「さうでなければ若し國へ」「ハテ其のやうにいやつては、私がいふ隙がない。」「そんならまア／＼後にして。」と、控へる後へ差出る佐四郎、「それ／＼久松への遺言は、たかが言つても言はいでも、夫れよりは肝心の、お染が事が聞きたいて、定めし此の佐四郎と。」「否もう幼少い時から結婚、何の變改致しませう。」「あゝ母さん夫れでは私やこ」「ハテ默止つて居やと言うたなら、まア默止つて居やいなう。」耳かゞがひで打ち付けた、縁でもどれからどう廻つて、我が身が可愛う思つて居やる、それ、な、あの佐四郎様と夫婦になられる事もあらう、私に任せて置いたが宜いに」「そんなら必ず、あの佐四郎さんと夫婦にして下さんせ。」「此奴は日和が宜くなつた、さア御山屋で、内祝言の三々九度。」「何をお前あはうらしい。」「あれ母上、お染は何だか濟まぬ顔附。」「はて宜ござります、諸事は此の泥八が。」若し此所に御座ります母上様や、兄子の傍で何のあの懐子が、嬉しい顔が出來ませう。矢張お染が胸の内は、恥かしいが一杯々々。」「イヤこいつ堪らぬ。」ト、寄り添ふ手先が太郎助に、當つて吃驚氣を取りなほし、「母上久兵衛皆も一緒に。」「さアお供致しませう。」ト、さゞめき行けば久松も、續いて行かんとする袖を、泥八がそつと引き、此處へ／＼と前へ連れ出で、「日外我が身が左下雨に賣つてくれと、おとした短刀

漸うに片付け、取つて置きやれ」と差出す財布、久松はつと請取つて、「段々の御世話、忝う御座りま
す」「朋輩は相互ひ、禮受けうとてしたではない。イヤ己はまだ用があつた、コレ人目に掛らぬやう、
確かと仕舞つて置きや」「ト、とばくさ這入る後見送り、「やれ／＼嬉しや幸ひ手紙は書いて置く、人を
雇うて些とも早く」と、續いて行かんとする後に、お染は竊と立戻り鼻紙挾んで打ちつけつ、手拍く
音に振返り「お貴孃は何して御座ります」「さア何もして此方居やせぬ、逢ひたうて拔けて來たが、何
やら書いた物持つて樂しんで居やる處へ、心なしにどれいなう」と、ひぞる袖を引止め「是れは又わ
つけもない、日外私へ下さりました短刀を、泥八に頼んでたうとう賣拂ひ、只今金も請取りました、
エヽ忝う御座ります」「夫婦の中で何の禮、そんなら我が身が入るほど金が、」「はい、調ひは調ひ
ましたが、大事な物を下さつて、若しひよつと貴孃のお身に」「何の氣遣ひしてたもんな、毎度あれ
は内方へ、質に取つたが流れた上で、母さんから守刀に下さんしたりや私の物、少とも大事はない
わいな。又何ぞあんな物で用の足りる事があらば、遠慮なく言うてたも」「はい、有り難う御座りま
す」「是れ其の切口上置きやらぬか」「それでも貴孃は御主人樣、私は子飼の丁稚、」「もう／＼そ
んなら勝手にしや、此の頃は人目が多くて頓と噺もせぬうちに、誰に習うてねすりごと」「さア是れか
ら二人歩行きながら、言ひたい事や聞きたい事を」「いや最う聞きたうもござりませぬ、數日中何所

にお婚禮が、あると言うてそはノヽと。」「お千代さんが其方の歸るを國で待つて居やらうがの。」「なんと仰しやります。」「隱しやんな宜う知つて居る。」「モシノヽ、お染様御山屋には、其所では御座りませぬ。」「いえノヽ、私や是れから斯う廻つて、又此方から斯う行く程に構はずに置いてたも。」「構ひたうても乾度した佐四郎様といふ、お婿様が極つたから此方の事は。」「何の忘れて宜いものか、夫れより苦勞は其方の年期をお千代殿が待ち兼ねて、久作殿から母さんへ、暇を取りに遣したけれど、嘸樂しみで御座んせう。」「コレ久松なぜに物をいやらぬぞ。」「それおやと言うて私の嫌がる事を、選りに選つて仰しやるから、御斷り致し様が御座りませぬ。」「そんならば佐四郎さんの事を其方はなぜ云やる。」「其りや又ほんで御座りますから。」「いゝや父さんの遺言でも、私や其方より外に殿御を持つ氣はないけれども、何方かの人は結號で、然も容貌も好いお千代さんと末永く。」ト、いふまにそつと逃げ出す久松を引止め「其方こりや何方へ往きやる。」「ハテ覺えもないことと仰有るから、腹が立つても下人の悲しさ。」「腹が立つならなぜ擲ちやらぬ。」「夫れでは罰が當ります。」「女房打つに何の罰さア擲ちや擲ちや。」ト、縋り寄する姿を立つ身でおやッと隱し「其のお心なら嬉しけれど、もうあれ此所は御山屋の、離座敷の前なればの。」「人が聞いても大事ない、若し露はれなば豫ての覺悟。」「そんならあのお前様も。」「あいひよんなものに惚れられたと、諦めて居て下さんせ。」トぴつたり寄り添ふ後のかた、

「いやもう己が。」といふ聲に振返つて、「お捨どの面目ない。」と、久松が往くをお染は俯向きながら「いつそ見つかりたい、母さんへ此の事を、さァお捨早う告げて下さんせ。」ト、いふ顔眺めて當惑を突き、「私が告げるまでもなく母上樣は疾うから御存じ、お染が願ひを叶へて遣れば御遺言が反古になり、それを反古にせまいと思へば、一人ならずに悲しい目を見ようもしれぬと幾世のお案じ。たとへ見つかり度いの覺悟極めて居るの何のと、其の樣な聞い氣に、いつまァお成りなされました。」「仇浮名がはつとしては、其はなゝ縁も世の義理で、切らねばならぬと言ふ事にモシお心は附かぬか。」ト眞味の涙に顔打赤め、「あゝお捨恥かしい、母樣のお心遣ひも知つては居れど、萬一して佐四郎さんへ行く樣になつた時にはどうせうと、只それが悲しさに短氣な事も言うたわいな、堪忍して。」ト合はす手を押開いて、「勿體ない、縦令お頼み遊ばさずと、波風立たさず治める思案は此方の人、久兵衛殿が工夫して置かれました。久松殿も隨分と。」「否もう面目次第もござりませぬ、恩を仇なる此の身の越度、母上樣のお腹立、久兵衛殿の手前を思へば死ぬより外の言譯は。」「あゝ若しそれが悪い。お前が短氣を出しやんすと、跡に殘ッた一本薄、つい折り易くなるわいの、露の命と消えぬ樣、穂に出ぬ樣にしやしやんせ。」「なんにも言はぬお捨どの。」「そつとも早う久松と。」「はて久兵衛殿に何もかも、任せておいて御覧じませ。」ト、言ふうち飛石傳ふ足音。あれへ／＼と目交仕方、二人を追ひ遣る離座敷。途

端の拍子に佐四郎泥八「これお染は何所へ行つた、お染〳〵」ト、うろ〳〵眼、泥八も一杯機嫌「お捨さん何日から此所に坐す、お前あのお染さんを其邊で見掛けはしねえか」ト、態と大聲耳の端。「エヽ聾は居やんせぬ、眞に吃驚するわいな」ト素知らぬ顔を見遣るもしほらめ「久兵衛殿と申し奉る男が渡らせ給ふさかい、若しも小聲で言つたなら、人が何とぞ思はうかと大聲上げたは僞聟から、あゝ我ながら心は堅し女房になれば可愛がる、母附の寡男コレ乗り換へる氣はないか」ト、言ふに佐四郎取り附いて「夫れ〳〵合はせ物は離れ物、お捨思案をして見や」と言ふ可笑しさを袖に包み「此所の人久兵衛殿は男は好けれど水嗅し、私もとうから飽が來て、眞實らしい愛憐しらしい人があらばと思うて見れば、泥八さん。」「はい」「お前の顔なら心なら」「ハ、」「どうもかうもならぬ程」「うまいわ」「嫌でならぬ。」と突き飛ばし、お捨は奥へついと往く、泥八はむしやくしや腹「己人を馬鹿にして、どうしてくれう」と身繕ひ。佐四郎が押止め「急いては事を仕損ずる、あのお捨を手に入るゝ、思案は様々まア待ちやれ、夫れはさうと先刻からお染が居らぬが心掛り」「モシ棒鱈になつた様に人目は見せても此の泥八、底ぬかりは御座りませぬ。彼の得手者の久松を連れて的めはあの座敷へ」「ヤ」「急いては事を仕損ずる。確かな證據は、お染様の袂へ落して置いた櫛も、そつと拾うて置きました」「そんなら一間へ踏込んで、二人をしめどり續いて來やれ」ト、障子ばわらりと

佐四郎が入るより早く頭轉倒、翻轉うつて庭先へ擲け出さるゝを泥八が見るより吃驚、緣先へ足踏み掛けて差込む手先、取つて其の儘ぐつと捻ぢ上げ、障子開かせ一人の武士、杯受け持ち悠々たり、泥八面觀打顰め「アイタヽヽヽヽ、こりや久松と思ひの外。」「エヽ喧囂しい後生で居れ。」ト小手を返して泥八を、又擲げ退けて扇子ぱちノヽ、「こりやノヽ關助もう今日は何時ぢや。」「ねい、じッ前でも御座りませう。」ト、言ひつゝ控へし奴が立ち出で、草履直せし件の武士、「暮頃には叶はぬ用事、歸らずばなるまいか、申し付けたる酒肴の價。」「早取らせまして御座ります。」「オヽ宜しくノヽ。」と立上る、向うへずつと佐四郎泥八「ええゝ武士人を嬲りと言はせて置いて。」「これノヽ歸らうも能く出來た、まア待ち居れ。」ト腕捲り、供の關助立塞がり「御遊興の場處柄故、汝等が無禮を其の儘にお見免しなされたを有り難いとは思ひ居らず、何だ目に角ぶッ立ッて、重ねてほでぶしさいたなら、旦那のお手は下させぬ。」トそり打掛くれば「こりやノヽ關助控へ居れ、ハテ控へというたら控へい、其の無禮物慮外とは、そりや人間を咎むる言葉。犬同然の奴らへ向つて、いひ聞かするは眞の無益。」ト、聞いて二人は尚逆立ち「イヤ腹さんざ投げて置いて犬同然も凄まじい、さア其の犬の譯聞かう。」「はて知れた事、假令茶屋遊女場でも、借切る一間は身が邸、素町人の分際で、案内もなく踏込むは慮外ではあるまいか、慮外があらば幾重にも、御免なされと手をついて、謝るが人の大法、夫れを知らぬが則ち畜

生い、まッ二つとは思へども、犬を切るのも刀汚しと、用捨して返して遣る。犬になつたが其の身の仕合せ、長吠せずに逃つて失せう。」「お旦那どうやら空合が。」「オ、降らぬうち急がう。」ト、袴の股を打拂ふ。右左より佐四郎泥八、「奴。」ト言ひざま打ち掛るを、一度に薙ぎ退け柄に手を掛け、一刀一腰捨てうか。」「ウ、。」と二人が蹲踞る。(此の見え宜しく道具廻ると本社の傍となり)後先見廻し太息を吐き、「お染様。」「久松危い事で御座んした、何方のお人か知らねども善い處へ御座んして、余に任せて迯げろて〳〵。」ト、胸撫下せば久松は、傍へ摺り寄り小聲になり、「あのお武士は野上半平殿というて備後國に御座らつしやる、夫れ兼てお前にお噺し申した。」「ふアそんなら彼方が其方の見様。」「半平殿で御座ります。何の御用で此の難波へ何日お登りなされたやら、問ふ暇もない今の騷動、ハテ氣掛りな。」ト向うを見遣り、「アレ〳〵誰やら四ッ手駕籠を舁かせて此處へ走ッて來る。早う人目に掛らぬうちまア御山屋へ御座りまし。」「夫れおぢやと言うて、私やあの佐四郎樣の顏見る事も。」「はてそれではお爲になりませぬ、ちやッとお出でなされませ。」ト、突き遣る程なく四ッ手駕籠彼所へ下させ一人の男、「やれ丁度宜い處で。」ト、言ひつゝ傍へ立ち寄りて、「いやモシ私は曾根崎の萬九が手代候七と申す者で御座ります。お千代さんの事に付きそッとお店へ參つた處が、此所に御座ると聞きまして彼所此方と尋ねました。」ト、聞いて久松四方を見廻し、「夫れはいかい御苦勞で御座りました。したが竟ぞ

眞親でもないお前、私を久松といふ事をよう知つて。」――いえ／＼それは襁褓の中から私が見付けて、綾七さんに教へたので御座んす。」ト言ひつゝ簾を押上げてずつと出で。驚く久松「ヤヤお千代殿。」「久松さん久々で懐かしい、蓮葉なたりを見せました。ひよんな事からお前にまで、由ないお世話を掛けますが、私や何より悲しうて。」「何のいのゥ、すき好んで其方の爲た譯と言うでは更々なし。今更言ふに及ばねど、其方の實父久作殿へ此の久松は養子に貰はれ、あの久兵衛は久作様の家來筋の者ぢや故、其の縁で商賣を覺えさせに此の久松も同じ内へ丁稚奉公、末々は其方と夫婦になる筈であつた處が、久作様の御連が曾根時の難儀故に其方を賣つた無得心、私が見牛平殿へ言譯が立たぬ故、今五十兩お渡しして受取してくれと、ある日久作様より久兵衛の處へ密かに御交通、恩義を忘れぬ久兵衛なれば如才なくお屋に心は碎けど、今以てどうも金は出來ぬ様子。もし其の事が手違になり露顕れた節お父様、萬一した事でもあつては、今までの心遣しも皆無益事となるが悲しさ、漸うと私が方でお隠しして置きました。」ト、いふにお千代は涙を拂ひ「よしない私に繋がれて長い苦勞をしやしやんす。お前が此の大阪へ奉公に御座んした其の後で、母様は長の病氣でお果てなされ、何や彼や内證の下難しは惡うなる、仕方なしに私を連れて、今の母様の處へ入聟、義理ある今の母様の事を言ふは惡けれど、夫れは邪見なお人、父さんの商賣用で、近江國へ行かしやんした其の後で、大阪へ私を奉公に出すと

の相談、否と云うたら父さんのお爲にもなるまいし、又大阪へ來たならば折節はお前の顏も見られうかとの樂しみに、何心なく來てみれば、先は曾根崎の御山屋、自分奉公に勤め奉公、ほんに夫れが悲しうて、泣いて計り居ましたわいな、父さんの方からも金貰へて、請けもどすというては來たれど彼是なお主し、どうかかうかと案じの最中、思ひがけないお前のお文、何右衛の心當もして置いた故、少しの間辛抱して居てくれというて遣して下さんした。其の時の嬉しさ、幸皆い奉公したればこそお前に逢ひもしたれ、志が届いたと思や、此の儘で其方で死んでも本望で御座んすわいな」と、取り縋り泣く女を抱きかかへ、「其の口說は尤もと伴で逢つたが宜いわいの、イヤ久松殿此方の親が萬九殿が五十兩で取つた奉公人、百兩や二百兩に手ばなす譯にはなけれども、孝行した其の日から晝も夜も泣いて許り、無理に返れと責め抜る、持て餘して居ん處へ、此の奉公人は好う／＼云ふ譯で、實の親父に得心させ、結構な眞似を致したというて、又もや／＼元金で戻してくれと長々といふ顏か敷、それなら夫れと連れて來ました、さァ五十兩で取つて奉公人を渡しませう」と言ふに久松打合點き「はい、金も爰に持つて居ます」「どれ、それなら請取と引替に請取りませう」と言ふ背後から聲掛けて、「イヤ其の金の取引は一寸待つて貰ひませう」と言はれて久松顏返り、「久兵衛殿何時の間に」「一頭に久兵衛久振で逢ひました」「思ひがけないお千代様、モシ久松様様子は後で聞きましたが、今もお前が申しやる

通り、私の親彌右衛門は、貴君の爲には御養父、お千代樣には實の父親久作樣の御家來、此の久兵衛は幼少の時から油やへ奉公しても昔の御恩は忘れませぬ、其の縁で貴君も此所へお呼び申して置きますれど、人目があればよそ／＼しく主從ぢやといふ事を知つた者はお捨ばかり。處へ今度久作樣からお千代樣の事に付き細々との御文通、胸一ッでも濟ませ難く、貴君へもお囁し申し色々と才覺しても、主人の前へ闇くない金を五十兩は、ア、出來ぬもので御座ります。其の私の心配を助けて下さるお志、忝いと言ひたいが、番頭でさへ出來ぬ金、無躾ながら丁稚の身で、どうしてお前は持つて御座る、さうそれ聞きませう。」ト問ひ掛けられ「あの此の金は。」ト、いひ兼ねる久松に膝突掛け「どうして調達さしつた。」ト、尙問ひ詰めれば太息をつき「お染樣が下されました。」ト聞いてお千代は合點顏「味なお人に久松さん。」「夫れでもやるてて。」「はてなア。」ト、二人が開ける眞中へ久兵衛は割つて入り「そりや貰はしつたでもあらうけれど、娘子の身の上で、五十兩といふ金が一寸出來よう譯がない、何ぞ後でお染樣に難儀の掛るといふやうな事があつては余が濟まぬ。早う返して御座らつしやい。」ト、急き立つ程尙うじ／＼と「サア返さなら返さうけれど、一轍な親父樣若しや萬一取詰めて。」「はて其の事は久兵衛が此の胸にござります、お捨／＼小富を連れて爰へおぢや。」「あい／＼合點でござんす。」ト立出でて會釋なし「そんなら貴君が久松樣と、お結號のお千代樣で御座りますか。　私

は久兵衛が女房捨で御座ります。」「噂に聞いたお捨さん、ひよんなことで久兵衛殿に澤山苦勞を掛けます。」ト、女同志は馴れ易く、話のうちに久兵衛は矢立取り出し一通を、さら〳〵と書き終り、「花形やのお千代萬九どのとやら、聞かるゝ通り色々な義理で、現在ある金がどうも渡して遣られぬ仕儀、身請の事を何卒十日、延ばして呉れと頼みたけれど、もう夫れも度々故、一通りでは得心をされまいと、推量して今認めた此の證文、小富を質に遣つて置くが變替せぬ、慥かな印。」と渡せば取つて押開き、「ふゥ十日の日限が切れた上は、此の子を此方の心任せに使へといふ此の證文。」「さア日限の其の内に請戻さずば、煮てなりと燒いてたりとも心任せ。」「否もう夫れ程慥かな事ならば親方も定めし得心、そんなら此の孃はお千代さんと一緒に此方へ預ります。」と手を取りて、泣顔を袖に隱して立ち上り、「母さん是れから何日寢ると迎へに來て下さんす。」「オヽ、五ッ六ッ寢すると、父さんが行かしやんす、靜穩しうして待つて居や。」「そんならお前は其の前に逢ひに來て下さんせ。」ト、いふに不便さお千代は堪らず、何にも知らぬ此の子にまで悲しい目をさするのも、みんな妾から起ッた事。モシ萬九さん私が客を勸めれば言分は御座んすまい。そんなら此の小富さんとやらを連れて行くには及ばねども、お前方のお志、屹度私が預つて、若しも金が調はずば帶紐解いて身をけがし、此のお子は戻します、久松さん堪忍して下さんせ。」ト、小富を勞り駕籠の内、載せてばつたり簾の音、胸に應へて久兵

衛が思案に暮れし目を開き、貴様にお身を汚させる、其れなら何の此の様に、氣苦勞は致しませぬ、此方に些の疑心當、さァ案じますとござりまし」「そんならばお捨さん此の寺の事は、必ずこつちの貴様と一しよになれば、苦勞は致しませぬ」といひつゝ、後へ立ち廻り、お千代が帶を引締めなし、其の内萬丸も身拵ひ、一ツよう入相に間もあらまい、客は遠か寄つて來る、片時も早くこゝと、お千代が手を取り、小富が側にひつ添うて、元來し道へひきかへす。跡に久兵衞突思是考へまアあれはあれで宜いが、イヤ心懸りは今の奴、久松樣ござお染樣へと言うた處が、此の儘ではどうも安心なりませぬ、己と一處にござらしつて、見る前で逃さつしやいこと迷惑顔な久松が、無理に手を取りツとと入る。お捨は獨り言樣で下し一個は男の心ぢやてゝ、遂ぞ一夜も手放して、泊りに遣つた事もない、輿小富を見ず知らずの、人に預けて迎りながら、まアあれはあれで宜いことと、私には言葉も掛けず、甘い言ひ度い事許り、言ひたいにして行かしやんしたが、もう男といふ者は氣強い者でござんすなァ」と、一言に女といふ者は、氣弱いものでござんすなァ」と、言はれて吃驚の猿迯り、イヤ氣味の悪い花八さんに一雜氣味が悪からう、我が身の隣に氣強いはあの久兵衞、又己が身に取つて、氣強いの樣木開山元祖といふは其方にて、しよしの哀れを止めたり、最前も嚔をさんざんな赤い顔の子で、それからどこかへ隠遁早、コレ連れないぞえノーレこト、縋り附いて動かさねば、當座逃れの笑ひ顔二つ言つ私おやと言う

て、あんな氣強い久兵衛殿に、配うて居る氣はなけれども、何方の方人も口先許り、眞實底が知れぬ故に一寸ッと告まで言ふべからず、斯く言ふこともあらんかと、認め置いたる此の一通、起請がはりおやおやッとまア、讀んで見て暮の鐘、うんとさへ合點くと、今宵直に泊り烏、可愛々々といふわいなこッと、文取り出すをお捨は取るより。「そこに緩りと御座んせ。」と、文打附けて迯げて入る。「二度ならず二度三度、あんまり馬鹿にしくさつて、どうしてくれうこッと立ち上る。折ふし小夫の驅け來り、落ちたる文を引奪へ、行くに泥八驚愕し、エヘ畜生あたれ取られて堪るものかこッと彼方此方と追ひ廻せど、牀机の下を抜けつ潜りつ、犬の行方見失ひ、呆れ果てたる後の方、立填つたる蹙眉讀、一間方あおな所で逢ひましたこッれはこッと押へて泥八は、四方を見廻し小聲になり、ヲオ、さういふは丘億權助、己も最前我か身おやと、おらりと見るよりどうした事で、此所邊に構へて居るか、何や彼やが聞きたうても、人目があれば素知らぬ顔、それはさうと中國に居た時に、汝と一緒に彼の屋敷へ忍び込み、盗み取つた東神太夫の此の短刀、責先に困つて居る間に、閣書が己つて中間の者は、處々方々へ散り／＼分々、手前と己は此の難波へ迯げ上り、當座凌ぎに油屋へ、奉公に住んだを幸ひ、百兩の質物に、たうとう家内へつつぱめて、其の金は汝と分け取り、味な事で此の短刀が己の手に、又渡つて直が下つて五十兩、算盤玉で胡麻化して是れこゝに坐す、汝大儀ながら、己が實の母親の處へ此品を

こかしてくれ。」又首にする思案、これ、な、なこと密語けば、藤助は呑み込んで、されたる陰謀の虎

書は。」「オイ此所に書いて持つて居る。」ト前後に氣配り、繪馬堂の奉納の短刀、手早く取つて中子を

交り換へ、眞の劔は手拭にぐる〳〵巻いて差出せば、懐中へしつかと收め、「イヤまだ此には行かれぬ。

「久松といふ丁稚を歸りに思入しあてくれろ」と先刻主と一所に居た、なんとかいふ旦那の頓み。

「いや其の事は氣遣ひ無用。」と、づッと立出る丁稚の頓松、「エ、又吃驚するを居つたで。能く吃驚する奴ぢや、日頃から小忠ましい久松が事なれば、己が諸事呑み込んで、そして泥ッこん何はお前樣主でも、寶り拂ッたといふ短刀持つて居るのは危ないもの、それは私があづかつて、」ふの奇麗貴樣が久松へ、」「一々子の寃の此の手拭。」一顔を隠して歸りを待ち伏せ、」「トレ」(道具よはるさ)

「」二人とも動きやアがるな。」「これはしたり佐四郎どの、お染と丁稚の久松を捕へて何とさつしやるのだ。」と太郎助が止むるを、耳にも入れず傲高聲、「ヤッと此方で怪しいと、睨んだ事がある故に、お染が著替をする時に捲き上げた此の背負守、中には是れお染樣久松といふ起請、もうあらがはれぬ覺悟しろ。」と、飛び掛つて久松が襟髮摑んで引寄する。後へすつくり番頭久兵衛、佐四郎が手をき放し、どつから摺るを尻目に見やり、「何ごとといふと久兵衛め、何程贔屓が仕たくても、是れ書いた物がものを言ふ。起請文句は讀むに及ばぬ、お染樣へ久まつと、へ、たれから御覧じろ」と語り掛け

ても乾齒ともせず成程貴君の御推しやる通り、書いたものはものないへど、これや讀み樣が違ひまし
た、久よりではないそりや久より、お染樣と不義したは此の久兵衛で御座ります」「イヤ、、、、」
「さア所詮逃れぬ所と明かす現在の當人が名乘つて出たれば、もう御詮議をなさるゝもお無駄で御座りま
せう」「アヽ、夫れでは久兵衛殿」と掛け寄る久松押隔て、「一人ときゝる所へ差出すともよ、己が懺悔噺ひ
と通り聞いて呉れ、アヽ色は思案の外といふ譬は誰が云ひ初めて、幾年になつても迷ふは此の道
況してや若い身空ではと、さ己が若くは少しは不便に思うてくれる人もあらうに、最うさういふ年齒
でもなし、殊に此方は御主人なり許嫁と極つて御座る大事のお染樣、又其の身故に苦勞苦患させ
る女房のある事も忘れたが彼の思案の外で、不圖惚れたが因果の初め、「私が此の氣性是非に請けて
下さらねば、貴君を殺して其の場で直に腹切つて死にまする」と無理押付けた娘氣で、怖々持つて御
座つた許り、他は愚かな染ゑ〳〵と囃させぬうちに、貴君の御目に懸つたは、御主の御罰天の咎め、
もう〳〵思ひ斷りまするな、斷りまするからお染樣、佐四郎樣と末永くお配ひ成さつて下さるか、
矢張あれが、イヤ此の久兵衛が矢張身の爲、」ト久松、「惡い事した身の成り果て、よく見て置きや。」
トはら〳〵涙、「何時の間にかは後家お艶、一思ひ掛けない久兵衛が不埒、然し今の言分では、夫た不義
といふでもない、是れお染泣いて許り居ては濟まぬ、氣を落ち付けて言譯しや。」ト、取り繕へば太郎

助も「母おや人の被仰る通り、年も違つた久兵衛と妹が不義せう譯がない。な、佐四郎殿左樣では御座らぬか。」と、言はれて渋々打合點き、「えゝ是れ顏の皮を引剝いて、寸斷々々に刻んでも飽きのたい彼なれど、荒立てては大事のこなたのお爲にも瑕瑾が付く。そして母上久兵衛めは此處から直に[illegible]い追ひ出して娘が顏を洗うてお目に掛けませう。」「コレ久兵衛言ひたい事も、さア言ひたい怨みも澤山あれど何にも言はぬ。主從でない、何方へなりと勝手次第に出て行きや。」ト、言葉は立派に目は涙莞爾々々もので泥八が「イヤ申し母者樣、最前から彼の一間で樣子を聞いて居りました、嘸お腹がたちませう。」「イヤ久兵衛、ア、汝や仕合者ぢやなア。主あるものに不義すれば、首の飛ぶのが當然、たれる此の儘直にお暇有り難いと參拜して何方へなりと出て失せろ。」ト、足下に蹴飛ばし空嘯く、顏をお龍が差覗き、「泥八主ある者へ不義すれば、首切らるゝと言ふ事はお主も知つて居やるのかえ。」「それ知らぬ者が御座りませうか、堅い顏に似合ひ居らぬ久兵衛めが不行状、金輪こんな人でなしは小ッ酷い憂目に合はせるが後の示しで御座ります。」ト、又立ち掛るを押止め「後の示しの爲なれば、久兵衛よりまだ外に捨てて置かれぬ者がある。」「ハテそりや何方に御座ります。」「外でもない左樣言ふ泥八。」「エ。」「今奥座でされる小犬が、何やら目に啣へて居るを、取らせて見れば是れ此の文、主ある者捨へ無體の戀慕。」「あゝ夫れは。」「イヤ首の飛ぶが當然、おやが此の儘永の暇、あゝ泥八其方は仕合も

の、參拜とやらをして早う出て往き居れ。」ト、言はれて言句も出でばこそ、頭抱へて蹲踞る。太郎助は差寄つて、「泥八が勤方どうも常から合點行かず、ポツ／＼と帳面を調べて見れば案の條、百兩餘り此奴が引迫ひ、其の事も親父様の百ケ日が過ぎてからと胸に納めて置きました。其の代りに丸裸體で早く出て失せ居れ」ト、帶ぐる／＼と引解き、此所に先刻頓松めが悪あがきして膝を擦し、脱いで置いた布子がある、是れでも情に着せてやらう。」ト胸高帶に蜻蛉結、流石に面目なげ首して、すご／＼と立ち上り、「あゝ是れも徒らに往なれまい、矢張古風に一首詠まう、斯うもあらうか。種油人を縊木の報いにて己が顏へ掛る泥八。何とふう言はッしやる。」自問自答の只一人、狐鼠々々として出でて行く。お艶は心に彼思此考、「思ひがけないもやく／＼で、佐四郎様にもお退屈、座敷を替へて酒一つ。」「成程それも宜からうか太郎助殿。」「まアお先へ妹も一緒にさアおぢや。」ト、心殘して奧へ入る。お捨は一間を走り出で久兵衛に縋り附き、「必ず此所へ出まいぞと、くれぐ／＼も言つてぢや故、辛抱しては居たものの、ひよんな事になりました。」ト、歎きに久松は膝摺り寄せ、「是れと言ふも此の身の誤り。」「イヤ久松より此の染が皆徒らから起つた事。其の詫言がしたい許り、直に座敷を拔けて來た。久兵衛何にも言はぬ。」ト手を合はせば、「あゝこれお二人ながら壁に耳あり滅多な事を言ふまいぞ、まアどこがどこまでも科人は久兵衛一人。な、御合點が參りましたか。最前も申す通り、主人に不義した冥罰は如此云

ふものぢやと言ふ事を、能く見て置くが其の身の後學。若い同志では猶の事覺えねばなりませぬ。お染樣も甘頭ない、お心易立てが過ぎまする。明けても久松暮れても久松、お傍近うお仕ひなさると、假令左う言ふ事が無うても、人の口葉に違掛つて、彼者が嫉みを受けまする。コレ其方はまだ年期の中、絲入縞や紬縞其の著物が不相應、己が今著て居るは先旦那のお召下し、彼の位なお暮しで一生木綿物、これでなければ商人は行かぬ物ぢやと、お手自ら下さつた御家の紋付、お暇の出た體で著て居るは勿體ない。ドレ其方の著物と取替へて行きませう。ト、帶を解く〳〵、久松が上著と替へて身繕ひ。お捨も上衣引上げ、さア所たの人そんなら一緒に。「イヤ〳〵己は少と用もあれ、殊に此の身の不埒から暇が出れば科人同然、最う當地に一日も、足を止めては義理が濟まぬ。それでは小宮やお千代さんの、コレこれ。ト押へて目で知らせ、お染が前を紛らすしはぶき、背後の障子細目に明け、少ないけれど持合せ、お飛が投げ出す包金。お捨がいやツと取り上ぐる、途端に建て切る障子の音。此の仕組よろしくヨヨ、ノヽと拍子幕。あま車、時の鐘、直に引返す。

「二混八さんに、糠助か、又たうとう失策つた。夫れはさうと汝や佐四郎樣に頼まれて、ヱヽき、久松をぶる積りで三味線彈の絲六誘ひ合はせて、先刻から頑張つて居る此の道筋。「戻つて來るに違ひはない。ト、言葉を繼ぐも、背後から、「手前は眞松何時の間に。「拔驅して此所の海鰻で一杯飲んで、

今の小降を霽らして居たが、又どうかばら／＼と來さうな空合、暗さはくらし必ずとも。」「何人違ひをする物か、絲入縞の三筋立、とッくりと見て置いた、あれ／＼向う八頬冠、慥かにそれと糠助が、摺り違ひさま雨戸漏る、日影に透して「す、そだ／＼。」「汝久松。」と左右より打つて掛るを引外し、

「久松なりや汝やどうする。」「ヤ左う言ふ聲は慥かに久兵衛。」「はゝア讀めた、泥八めが佐四郎に頼まれて、久松なぶる積りの待伏か。ちッと年增で前髪のないが不足か知らねえが、袖を引かれた間違も、多少の縁の絲入縞、是れから兄様弟と、可愛がッたりがられたり、〆て寢るのがお好みなら少とは覺えの新結料、骨身に應へさして遣らうか。」「エ、面倒なぶッちめろ。」「ホッとまかせ。」と各々に割木ひッ下げ滅多打、心得たりと身を交し、腕首摑んで捻返され、體は換れて久兵衛が、襟髮摑んで引立つるを、膝で落して頭轉倒、又入れ替ッて有合ふ傘、小立に開いて立寄るを、引外されてひよろ／＼／＼と、「どつこい止ッたまつかせ。」と、隙もあらせず後から、組まんとするをかい潜り、足を掬ッて千鳥掛け、ばつたばたつき起き返れば、倒れ掛りしあなごの行燈、打抜く躓く踏み破る。一處に掛れと四人が、四方へ分れば久兵衛は、跳り上つて小欄の、上にどつかり身繕ひ、處を取つと泥八が、取る胸倉を振拂けば、力餘ッテヘッたりと、こけて居る頭の上、足で踏へて平蜘蛛、其の間に糠助立ち廻り、抱き附く手を右左、見事に拂つて擔投げ、生憎もなく絲六が、微塵になれと拜み打、

顔を背向けて空を打たせ、直に割木を引つたくり、なぎ立てられて二人は、思ひ〳〵に逃げて行く、隙擦で下し久兵衛は、ホツと一息片頬の、雲間に出づる春さんと、逃げ残つたる頼松が、彼の手よりへし鉾の白刃抜いて突掛くるを、危く避けて睨見合はせ、然したる遺恨もあるまいに、人殺さんとは止しにしやれ」と突放せしが、落ち散りし短刀の袋を取上げ「こりや覚えある大内切、どうして汝が持つて居た。」ト、言ひ様寄つて頼松が、手に持つ短刀取らんとす「これが欲しくば在り処、耳を揃へて此処へ出せ、借遣つてなる物かこ」と又引つたくる短刀にて、時の機会を頼松は、我と吾が手に笛の鎖ぐつと突込み七転八倒「アレ久兵衛の人殺し。」と叫ぶを他所へ聞かせじと、袖にて口を確りと押へられて呼吸も此の儘倒しにばつたりと、こけたる時しも又月は、雲に隠れて世の暗さ「ヤアこりや頼松めはもう息が二ト、かゝぐり寄つて驚く久兵衛。折もこそあれ半平は提灯持たせ来掛りしが、のりに滑つて躓く間助「お旦那誰やら此所に死骸が。」「ドレ。」ト立ち寄る途端の拍子、小石を掴んで久兵衛が、さそくの礫打消す提灯「スハ曲者。」と半平は、ヒラリと投ぐる柄袋、その打掛けられ久兵衛は、後退去して頬冠（此の模様宜しく幕。）

○一迷子の〳〵お染さんやアイ。」「是れ〳〵皆ようよい加減にしたが宜い、こちの丁稚久松が逃去した跡追うてお染様もぶらいと家出。所詮あののら狐に誘はれた徒らもの、子供でもあるまいし、鐘太

鼓で其の樣に尋ねたとて何の出ようし、何方ぞで二人はちん／＼鴨、小鍋立で樂しむに湯漬も喰はず
に夜が夜中、駈步いて溜る物か。」ト、言へば傍から男共も「これ／＼お前は内の手代、私共が誹る
をも止めねばならぬ年嵩で、先へ立つての其の惡口、モシ大人氣なう聞えます。」ト止められても尚減
らず口、「主人の事でも惡い事は惡いと言ふが眞直か、此の戸惣次が生性、己が折角合口な泥八は追
出される、頓松は殺される。最う所詮油屋に詰める奴は一人もない。」ト、顏脹らせば氣の毒顏、「夫れ
はさうでもあらうけれど尋ねに出たも主人の言付、もチッと辛抱さッしやりませ。」迷子の／＼お染樣
やアい」とよばはり／＼走り行く。跡へうろ／＼小提灯、短羽織の木綿物、律義仕立は久作が庭下と呼
ばるゝ下男、喜平が其處見遁して、「いや又今夜も狂人を尋ぬる晩はない、ア、逃亡をさッしやつたら、
内へ戻つて御座る筈。シタがあの雷婆が鳴り喚くを五月蠅がつて、何處ぞへ隱れて御座るのか。ア
リヤ又其所へ尋ねて來た」ト、顏を反向けて片寄る道筋、萬九が手代の銚七先に男共が口々に、「花
形や始まつてお手代候でこでも行かぬ奉公人もない物をや、四の五の言うて一晩も客を勤めた事はな
し。」「それ／＼擧句の果てに逃亡して騷動をいらせ居る、今でも彼奴を見附けたら引張凧にしておい
ど。」「これ／＼あれは大事の寶物、どうして汝が儘にならう。」「さア引張凧と言うたのはオ、此の端
所で見ておいて酒屋で一寸矢大臣。」「なる程そいつは宜からう。」ト、徒口々に行く後を喜平は見送り

目に涙、一さア尋ね居るわ〳〵、てつきり然うであらうと思うた。大事の内の娘子を、如何に金で買いたとて能うまア凧に譬へ居つた。己れ指でも付けさせうか、余が先へ探し出してお供して返つて見せう。とは言ふものゝ何處にどうして御座るやら、お千代様いのう〳〵。」呼ぶも前後に心を付け、屈託顔に行き過ぐる。折柄安島の家根船に、唄ふ唱歌は二ツ紋、「睦言も、連理といふは嘘くろし、比翼じたてのねまきにはさむ單帶、ほんにひたちの神さんは、粋な事して妻定め。」「わかれに羽織きせながら、袖と袖とのもろはがひ、しめればしめてかさゝぎの、星に譬へし二ツ紋。」右と左の細道を、言ひ合はさねど一時に、辿り來るのはお染とお千代、思はずばつたり行き當り、たがひに吃驚胴振ひ。「はい堪忍して下さりまし。」ト言ふも同音膝わな〳〵。お染は怖さに歯の根も合はず「内に居るのも何や彼や、辛苦い譯が重なつて遂其の儘走つたは、皆私が徒らから、堪忍して下さんせ。」ト、聞いてお千代は只うろ〳〵、「私が言ふ事其の樣に、お前に先へ言はれては、眞に消えても亡くなりたい。親方樣へ詫言を、諸願能うして下さんせ。」「いえ〳〵親方さんとやらの事は、此方何とも思やせぬ。只母さんが腹立つて居やしやんせうと、夫れ許りが氣掛りで御座んすわいな。」「さいなア母さんは、彼の樣なぞん氣な人で御座んすから、なぜ内へも斷らず、逃亡したと大抵や大方では御座んすまい。」「ふウそんならお前も斷りなく。」「あい、逃亡したので御座んすが、お前も矢張人目を忍んで。」「あ

いこ」「さうとは知らず内方の追手と思うて私は吃驚。」「私も今に胸がどき〱。」「どういふ譯か知らねども、身につまされてお惜しう御座んす。」ト、二人が太息を突くも一時、胸撫で下すむかうの方、「お染様いなうお染様いこ」ト鐘太鼓。見付けられじと傍に、繋ぎ留めたる苫船へ、倉皇として隠るるお染。お千代は此の闇におゝ夫れと、覺悟極めて下締の、紐を右の櫂へ打掛け、首を縊めんとする處へ、丁度折能く後から抱き止めて、「まゝ待つた／＼。」「情に放して殺してたも。」「はてナ短氣なお千代様、死なす事はなりませぬ。」ト、言はれて吃驚火の明、「ヤ、さう言ふ貴様は慥かに壽平。」「オ、壽平ぢやお千代さま、エ、まア此のお子は。」ト、胸倉を取つて彼所へ無理に引摺る。「ひよんな事をさつしやると、お年寄られた久作様、能うまア生きて御座らつしやらう。是れ手を出して現在の、親を殺すも同じ事。」と言ふは己が言はいでも能う知つて居さつしやらうに、な、な、何で死ぬのおやされ聞かう。」ト、言はれて涙掻き拂ひ、「父さんの御供して其方も近江へ行きやつた留主、母さんに欺されて曾根崎へ賣り渡され、苦界をしては結號の、久松さんへ義理立たず、父さんも半平さまへ言譯がないと言うて、久兵衛へ其の事を手紙で知らせてやらしやんしても、是れも金が調ひ兼ね、夫れが葛藤で久兵衛が、娘の小留も可愛さうに、曾根崎の同じ内へ質とやらに來て居やるを、今日は迎へに來る事が、明日は便りが有らうかと、共に待てども音沙汰の、ないのも道理様子を聞けば、久松さんの身

の罪を、久兵衞が引受けて油屋を追ひ出され、行方が知れねば浮々と、待つて居たとて金輪へ、逢への來よう筈もなし。其の身に引受けた久松さんの、罪と言ふは娘子の、お染さんから起つたとは、誰知らぬ者はない。私や終ぞお染さんに逢うた事はないけれども、祭文や唄にさへ、唄はれる程美しい、娘子さんぢやと言ふ噂、そんなお方を振捨てて、何の私が様な者を女房に持つて下さんせう。生きて居たとて久松さんと所詮添はれぬ身の因果。一ッには小富さんが、苦しい苦界奉公を、私故さしやんすを、どうまア見て居られうぞ。夫れぢやによつて死ぬ程に、父様へ此の理由を善い様に言うてたも。

ト、潸々と泣く顏を、恨めしさうに打守り、ヲヽそんな譯の分らぬ事がどうしてまア、旦那様へ善い様に言はれませう、馬鹿々々と名の様に呼ばッしやる、此の壽平よりお前の方が餘程馬鹿ぢや、委しい譯は知らねども、彼方此方で概略は、此の頃中から聞いて居る。其の曾根崎の親方が、此方へ抱へた奉公人のお千代が死んで仕舞うたから、さア小富に勝手次第、連れて戻れと言ひませうか。お前の死んだ憎しみで、五年の物なら十年も小富に苦界を爲せるは定、殊に少さい子ぢやとやら、突出までのこじよく奉公、永い苦しみさせる時は、久兵衞へ貴様の義理が立ちますか、立ちませぬか能う考へて御覽じませ。又お染とやらが天人の様な美人であらうとまゝ、夫れは眞の當座の徒ら、久松様の女房は何處が何處までもお前様ぢや、ハテ今でこそ丁稚奉公して御座れ、野上半平殿と言ふ屹度したお武士

の弟子の久松様、親旦那久作様が此方の娘に配はしたい。そんなら野郎の言約束、どうして反古になりませう、今に婚禮させまする。所で其のお染とやらが振り込んで來でもすると、一昨日來いと掃き出して、門口へも寄せ付けぬ。モウ〳〵死ぬの死の字をば、必ず言つて下さりますな。」ト、わッつくどいつ諫言あられ、お千代は漸う顏を上げ、「餘り心が急いた故、小富さんの難儀と言ふ事頓と氣が付かなんだ、堪忍して給やいの。」とは言ふ物の今更に、内へはどうも戻られず。」「イヤそこに氣遣ひなされますな。先づ貴娘をば氣の付かぬ處へ四五日隱して置き、花形屋へは人を頼んで手の入れ樣が御座りませう。私に何も彼も任せてお置きなされまし。」ト、お千代が帶を引解き、「ちやッとまア其の上着を脱いでお遣しなされまし。」「さア脱ぎは脱がうけれど、左うして貴方どうしやる。」「そこが孔明楠公も素足で逃げる謀計。イヤ其の素足で思ひ出した、其の草履をも脱いだ〳〵。」トッと宜し宜しサア斯うおやっ」ト柳の枝へ上着を打掛け、下へ草履は程能く直し、「狂言でも綺草紙でも、身を投げた處には上着と草履が此の樣に殘してあるから思ひつき、貴娘の追手が此の端所の酒屋に飲んで居るとの事、己が顏を知らぬが幸ひ、其所へ休んで他事事の樣に斯樣々々言ふ女が、今彼所で身を投げたと、一番ちやりで彼奴等を欺らせて戻します。貴娘はなア。」ト耳に口。「ネ、隱れてお出でなされませ。」「そんなら何卒久松さんと。」「ハテ諄い、私が命に替へても今に夫婦に致します。」「必ず[illegible]頼ん

だぞよ」「エヽ、必ず〳〵寄手も入らぬ早う〳〵」ト右左、別れて二人は急ぎ行く。折惡く遠寺の鐘、お染は猶も立ち出でゝ、邊見廻す獨言「そんなら今のがお千代さんで御座んしたか、あの人が言うた通り親の許した夫婦中、私や羨ましい〳〵。胴慾なは彼の久松、何方へ行きやッた事ぢややら、内に居れば嫌らしい佐四郎様に云ひよられて寧そ死なうと思つても、何卒今一度久松が顔を見てから逢うてからと、未練が發つて死なれぬわいなう。眞に夫れ〳〵お千代さんの彼の小袖を、私が着替へて此の川へ身を擲げたと思はせたら、それぎり追手は掛るまい、夫れからは命限り久松を尋ねるより最う外に思案はない。一ッには約婚のお千代さんに似る爲」と、言ひつゝ小袖取り下し、手早に着替へて我が上着を元の如くに柳に打掛け、草履も狐鼠々々脱ぎ替へる。向うの方に又人音、手代の戸惣次下男どや〳〵、郭内の提灯見附けられじと立戻る。彼方の道より母お艶下女お玉に下男「お染様いの」と呼ばはる聲々。仕方流れに裳裾を浸し倉皇忍ぶ元の苫船。斯くとは知らず堤の上、左右の人が行き合ひて「母上様で御座りますか」「ヲヽ、戸惣次皆の者も大儀であつた。親を捨てゝ逃亡する憎い娘めどうなつても私や構ひはせぬけれど、近處のお方や出入の者が深切に夜夜中尋ねて下さる人様へ、お氣の毒な許りに、私も今宵は彼所此所と、心當り歩行いたれど」「いや最う頓と知れませぬ。太郎助様天王寺安部街道から堺の方へ向けて行くと仰有りました。アヽひよんな事からお前様は甚う御苦勞な

されます。惜い〳〵と上邊では被仰つても、現在の我が子を憎いと思ふ者が、天地の間に御座りませう。包むに餘るお眼の潤み、それを見ると此の胸が一杯になります。」ト、口に任せる眞實こかしに否とや今も言ふ通り、不幸な娘に露程も、未練な心はなけれども、深切を無にして今夜も尋ね合はず、すご〳〵と戻るかと思へば夫れが悲しうて、あいたゝ夕夜露に中つて冷えたせゐか、ヤ、又差込んで歩行まれぬ。コレ玉確り此所を抑へてたも。」ト聞いて戸惑次驚き顔、「左樣ならば私が此の羽織でもお敷きなされ、まア〳〵お下に御座りまし。」と介抱する中に候七を、連れて壽平が立ち戻り、「今言うたはあれあそこぢや、紫の曙染、蔓葡萄の裾模樣の上着を、印の爲と言うて柳の枝に掛けてどんぶり――それが眞では堪らぬわ、せめて死骸を探し出して持つて行かねば、大勢掛つて尋ね居たが、嘘の樣で親方の前へ立たれぬ。賴んだ駕籠は來て居るかの。なる程小袖があの枝にまア掛つてある樣な。」と、候七はとつぱかは立ち寄つて提灯差上げ、「是れ其所な人、今言つた小袖の色合最う一返、此所へ來ずに其處から言つて聞かせてくれ。」「はて知れた事、裾は葡萄の友禪入り、紫の曙縮緬。」「ハヽ、、、此の色は露芝茶で結ひわたの中形だ、目玉を明けて能く見やれ。」と擲げ付けられて壽平は吃驚、「眞に是れは然も振袖、山の芋が鰻になり、五兩の粧花こぎ〳〵になるとは、げつれいに見えたれど、紫の曙が露芝茶に變ずるとは、未だ和漢に例を聞かず、此品はどうぢや。」と礑と打つ横手は

それで目あればこそ、お艶は聞いて心ならず「若し／＼今の小袖の詮議はちつと此方に心當り、どうぞ見せて下さりませ」「見るとも食ふとも勝手にしや、其品は何でも怪訝な奴、取逃しなさんな」ト傳七は、お艶の前に小袖を投げ遣り、寄つてたかつて藤平を引立て元來し道へ急ぎ行く。お艶は急ぎ手に取り上げ「ヤァこりや娘が小袖おやわいの」「成程お染様のお草履も此所に脱いで御座りますに」「そんなら川へ身を投げてか」「ハァひよんな事してくれたなア、それ程な事ならば、なぜ斯う／＼おやと此の母に、打明けては言やらいで、太郎兵衛殿の遺言を、守り過ぎて其方を先立て、何の私も生きて居よう、今に行く待つて居やれ」ト、飛び入らんとする背後から「まア／＼待つて」ト止むるお玉、男共も驚天し縋り附くを「イヤ／＼放しや」と身を藻搔き焦るを見る悲しさ、常磐之遅くるお染が顔。「ヤア其所に居ッたかとお艶は嬉しく二度吃驚。「何ぢや其所に居りました。」ト、戸惣次が差出す提灯、お艶は手早く打落し「其所に居たとは、此の水底に娘が居やらうと返らぬ事をなの日。是れお染假令其方が言はいでも何も彼も知つて居る願ひの通り配はせて遣らう、最う／＼人の命程貴重な物はないわいの、是れ此の頭巾で人目を忍び、幾久しう榮えを待つ、なう」「若し／＼母親様、そりや何を被仰ります。」「否なうお染が生きて居やつたなら、先づ此のやうに言ひ聞かせ、落してやらうと思うたれど、あゝ浮世は果敢ないもの、是れ此の鼻紙袋には合藥の熊膽丸、幼少い時から蟲氣持で、今も不圖逼塞ある

と夫れはそれは強い癪、此の藥が相應して、近頃は起らぬが何や角やに氣を揉んで、又煩ひはせまいかと心附いて持つて來たも、斯うなつては夢の夢、ドレ捨てゝ行きませう。」ト、頭巾諸共龕の内、そつと投げ遣りお染が小袖、持たせて悄々、立ち上る。戸惣次は身繕ひ、「是れ男共案内知つた處の者を四五人其邊で雇うて來い。お染樣のお死骸を片時も早う探さう。」ト噪ぐをお勘が押止め、「何のあんな不孝の奴、構ふ事はないわいの。」「ぢやというて此の儘で。」「はて夜が明けての事にしや。」「ヘエたッた今頃いて川へ身を投げようと仰有つたお前樣が其の樣に。」「思ひ斷る日は斯うした物、私や最う去ぬる必ず健全で。」「エ。」「さア健全で居た時とは顔も大方變ッたで。」「夫れぢやによつてお死骸さへに「エヽもう愚痴な一緒におぢや。」と、心殘して人々をお館へ引きつれ往ぬる後に、船を出づるも夢心地、お染は後を伏し拜み、「母さん堪忍して下さんせ、何彼のお詫をしたいにも、内の者に私や顔を合はするのが面目なさ。彼所で泣いて居りました。一日の孝行を盡した事のない此の身を、お憐しみ遣ばさます、お志の此の二品、有り難う御座ります。」ト、泣いつ口說いつ獨言、折柄向うに人音ハッと驚き猫頭巾被る處へ逃げ來る清十、後追つ掛けて候七先に花形屋の男共「何でも彼奴が怪しい。」「否己や何にも知らぬ／＼、最う堪忍。」と清十が胡々「夫れ逃すな。」とどッたばッた、お染に礑と行き當れば、此方も吃驚及向くる顔。候七は小袖に目を附け、「紫の曙染、是れお千代は此所に居た。」

「左様なものでは御座んせぬ」と、言ふのも聞かず寄つてたかツて無理に押込み昇ぎ出す駕籠、壽平は驚天ニエ、先刻あれ程言うて置いたのに、それ遣つてはニト取り附くぞ、邪魔ひろぐなと踏み飛ばされ、堤を滑つて轉々々、其の間に駕籠は一文字ニエ、待ち居れ待つてくれ。」ト、漸う岸に這ひ上る、壽平はびつしより濡鼠、跡を慕うて。（幕）

正本製七編 終

正本製 八編

編者 柳亭種彦

立物抄 於染久松物語(前編の續き)

(「綾巻さん上菊さん、さアノヽお客がお急ぎで御座ります。」「えヽ忙しない、今家のお民さんに髪撫で付けて貰うて居るに、それが眼に見えぬかいなう。」「それが見えねば旦那様におこしやうさまと言つて居ますが、上彩敷が餘り永い。」と迎ひは門でせがむ程、落付き顔に鏡臺引き寄せ「お民さん日外中の平髷より此の方がどうか私に。」「おい、綾巻さん、お前には人柄で宜いわいな。上菊さんちやッと後を向かしやんせ。」と油手拭うて帶締めつ、衣紋直して手傳ふお民に、主人のお顔は臺帳を控へて何やら屈託顔、「是れ皆如才はあるまいが、精出して賣つて呉れ、此の帳面では水も飲めぬ。賣物にははなゝゝしく、お民隨分裝飾つて遣りや。」所天の人萬九殿か、「一昨年の暮死なれてから、若い身空で私が後家持ち、やつぱり世間は花形屋萬九の名前で濟して置けど、夫れはノヽ氣扱ひ宜い、奉公人を

抱へたと、思つたお千代は客が振り、悪句の果てには逃亡して、今宵で三日行方が知れず、あの猿七めも何か浮かなして居なる」ト、喚き立つるを娘のお民、氣の毒顔に押止め「母さんもう宜いわいな。高が女子の足おやもの、今の間に追つ付いて、連れて戻るで御座んせう」と、宥むる言葉の尾に付く二人が久しう交際はねど、好い氣ぜんなお千代さん、今にも戻らしやんしたら、母親さんの詫言をねえお民さん」「アイそれは私が合點で御座んす」「そんならば母親樣、私共は些とも早う」ト、出んでたも／＼十日も二十日も百日も、歸らぬでも大事ない。隨分お客へ追從して、正月も近うなつた、物日／＼に帳面の、黒くなる樣頼みます。コレ男衆お前どうぞ氣を附けて」「氣を付けるには熱燗ごくつとやらねば目が覺めまい。やれ／＼やつと御出立、お客は嘸かし鷺の首、長い夜でも最う四ツ時過ぎ、些少早めて貰ひませう」ト、綾菊上菊二人が追立て行き過ぐる。後打詠め「是れ／＼誰ぞ居ぬか、門口の行燈が消え掛る。いらぬ火鉢に火がカツ／＼、彼處の藥罐が沸え返る。男どもなども、何れも逃亡したか知らぬ。イヤ逃亡と言へば日外お千代の一件で、質に取つたる彼の小富、彼奴っまでも久見えぬ」ト、目に角立つれば娘のお民「彼の子は腹が痛いてゝ何も食べぬから、私が平常の搔巻著せて二階で今すや／＼と」「おゝそれが悪い。餘の我が身が喰ひ立て勞つて遣る故に、彼奴も此奴も食ひ飫え碌な奴は一人もない。何の役にも立たぬ餓鬼め、酷使ふがせめての腹癒せ。否猿七

が戻つたさうな。」ト、見遣る表へ丹波屋の柹蔵がとつはかは「いや申し母親樣、此の間から言ふ通り私共の大事のお客西國邊のお武士、終ぞ見た事もないお千代さんを、身請したいと百兩お出しなさる相談、今宵中に埒はねば、明日はお國へ御發足間き限りに來ました。」ト、聞いてお筬は何もやく、「さア容姿は美くても樣子があつて持て餘して居る彼のお千代、夫れは此所も喜悦なれど何を言うてもこれ、憎い奴は候七め、何をのろ〳〵してけつかる。」「若し〳〵候七ののろ〳〵には此所は頓と構ひはないが、百兩で手を打つては」「上げましたが請取二三日。」「はて悪い合點なそれが待たれる位なら、内はお客でどんちやんするに、夜更寒氣に來はしませぬ。今宵は延びると此所は破談、後で私を恨まッしやるな、やれ急がし。」と柹蔵は足早にこそ歸りけれ。お筬は後にむしやくしや腹、「エ、ひよんな貧乏神を抱へて太い苦勞をする。油屋の久兵衛めが立金をする積りで小富を質に遣しながら、其の日限は切れて仕舞ふ、久兵衛も油屋を追ひ出されたと言ふ噂、所詮彼奴は埒が明かぬと思ふ矢先へ高山の傾城、彼方へ遣れば直に百兩、夫れにまア逃亡し居ッて何方に隱れて居くさるか、ドレ己が一走り行つて來ずばなるまい。」ト、帶締め上ぐればお民が差寄り「最前も言うた通り候七が如才なう今に尋ねて歸りませう。夫れにお前がはしたなく」「いゝや置け〳〵彼奴が必定彼所でへ這入つてのらかはいて居るであらう。今に己がどうするか、コレ女ども、茶漬一杯喰はせて呉れ。お千代がお陰

で二度の夜食、何で損をしようも知れぬ」と、疊立てゝ奥へ入る。お民は後に太息を突き「あの樣に言はしやんすか、最う／＼私が癪の種、何日直つてなごやかな、心に直つて下さんすか。あゝ浮世ではあるわいな。」一室も籠つてはら／＼と、二ッぶ三ッぶ冬の雨、涙のこぼれ上げしなき、歎しよんぼり川柳にうたふ小唄も小夜風も、身に染み渡る久松が、顏を隱せし頬冠、あの百姓に花形屋、ヤア此戸おや／＼」と若しちつと頼みませう。」「あい何所方で御座んす。」ト、お民が立つて差覗けば、顏を反向ける明影、「イヤ内方に久兵衛が娘の小富と申しまするが居りまするなら、一寸此所でどうぞ逢はせて下されませ。」「そんならばまア／＼此方へ」「否をちつと急ぐ用事もあり、此所で一寸逢ひさへ致せば。」「若し小富さん／＼誰やらお前に面會たいとて。」トお民に呼ばれて「あい／＼」の返事諸共二階を下り、「オヤ、お前は久松さん」是れと押へる目配せ、はやく小富は見て取つて、表へ立ち出で聲細かに「父さんや母さんやお前に數多逢ひたかつた。能う尋ねて來て下さんした。」「おゝ道理々々な己も數多逢ひたかつた。さア便りがしたいにもどうして善いか譯は知れず、定めしお前はお千代さんの樣子も聞いてで御座んせう。」ト、問はれて久松不審顏「なにお千代はどうしたと。」「そんなら何にも知らずかえ、お千代さんは逃亡して。」「ヤア。」「まア是れ見て下さんせ。」ト、差出す一通、行燈の火影に透して繰りかへし、「餘り悲しさの禿筆も復らず候へども、言譯のため示しまゐらせ候、私故に

久兵衛どの其方までの憂き難儀、久松様に未来永く添ひ遂げる事もなり難し、皆此の身の因果と諦め身を隠し参らせ候、細々と書き残したく候へども筆の宛所も定かならず、必ず／＼息災にして。はて思ひ詰めた、斯う言ふことは努々知らねど、余や親なりの大事の使でよい處へ行かねばならぬ。又何日戻つて逢はれるやら、其の程も知れぬに因つて此方の鍍金簪を見て、夫れを此の世のさア暇乞に来ましたわいのこと、減睦しておお千代が文、後は讀まずに差戻せば、手に取りながら久松が、顔を小富は差覗き、「なぜそんな悲しいことを言うて下さんす。よい所へは外の人を遣つて、お前は何日までも此處に居て下さんせ。」「否どうでも行かねばならぬ義理、是れ此の財布に五十兩金が有る、無くさぬ様に持つて居て、父様の来た時に渡して身儘になつてたら、必ず人に見せやんなこと、財布取出し小富が懐中へ押込んで前掻き合はせ、「内を出る時間違つて久兵衛殿に逢はぬから、若し此所へ見えたなら、今まではだいお世話、来年の七月は戻つて禮を言ひませうと、左う言うて給やいの。」「そんならお前はどうあつても。」「さらばで御座ること、駈け出すを、お民が縋て聲掛けて、「久松さん待たしやんせ。」「エ。」「はて油屋の久松さんまア／＼待つて下さんせ。」「否々私はそんなものでは。」「ないならなぜに小富さんが久松さんと言うた時、是れと止めて言うなてて。まア／＼夫れは捨てて置き、噺したい事もあり、さア此所へ御座んせこと、手を取ればもぢ／＼と、色々雑はぬ用もあり、一寸いなせて下さりよ

せ。」ト振操つて久松が、逃げ行く向うへ立塞り「隠しやさんすな此の民が何も彼も知つて居る。」「知つて居るとは何なぞ」「お前方の身の上さ」「えゝ」ト吃驚久松が、へつたりすれば小聲になる。「さう言ふ仲か、お千代樣と、深い馴染と言うでもなけれど、夫れ〳〵は心の丈打明けて何彼の事、お前と言ふ許嫁が有りながら、妹さんの邪見から勤奉公、かてゝ加へてお染さんと、睦まじいと云噂を聞き、思ひ詰めて逃亡の元はと言へば、矢張お前に配ひたいから起つたこと。夫れを振捨て、死なう、いや遠い處へ行かうとは、餘り氣強う御座んせう。今にも尋ねて戻つたら、お千代さんに顔見せて、たんのうさせた其の上で、行かんしやんすが宜いわいな。」「お志は嬉しけれど、どうも今更お千代に顔が、若しお情に私をば請願歸して下さりませ。」「いえ〳〵歸さぬ往なしはせぬ。小富さん一寸早う門口を。」「あい合點で御座んす。」ト、ばつたり戸口差堅め、逃けんと急る久松を、二人が手を取り引戻す。奥には主人のお袋が高聲、「六兵衛々々、早う提灯點して來い。」「アレ折の悪い様さんが、今此所へ來やしやんす。早く彼所へ〳〵。」とお民が無理矢理久松を、二階の下家へ忍ばす中、お袋が立ち出で其所をキヨロ〳〵。「己や是れ程に苦勞をするに、共々に傍へ來て苦を助けうとはし居らいで、何をうつかりして居るのぢや。門口も能う締めて今夜は乾度起きて居や。」「そりや合點で御座んすが、お前がまアはしたない、自身にあのお千代さんを。」「オ、引きずつて來て見せう。六兵衛

来いことと立ち出でしが、小富が落せし文取上げ、「餘り懐しさの儘筆も廻らず候へども、」「あゝそりや若し私がッ。」ト立ち寄る小富。お艶は次の間にて不審顔、「其の提灯此所へ遣せ。」ト、後は讀むのも口の内。「否最うこりや尋ねに行くには及ばぬわい。是れ小富、お千代めは何所に居る。」「どうして私が。」「一向知らぬので濟まさうか。」ト提灯の棒振上ぐる。お民は吃驚被ひになり、「利巧な樣でも子供の事、覺えが有るなら斯う／＼とつい言うてご御座んせう。どうして此の孃がお千代樣の。」「えゝ邪魔な退いてゐ居れ。是れは小富へお千代が書置、是れ持つて居るからは、お千代が居處は此の餓鬼めが知つて居るに違ひはない。少さな形をして其の野太い根性では、大抵では言ひ居るまい。已是れでも吐露さぬか。」と、打つて／＼打ち据うる。久敷見るに堪り兼ね飛び出づるを、ツヾくりとお民が立身で押隱し、「あゝ出ては惡い／＼。」「ヱヽ何が出て惡いこ」ト、咎むるお艶、傾首のお民、「さア其の子は全體拷責持、其の樣に折檻して、蟲氣でも出ては惡からうと止めたので御座んする。」「へ、蟲は愚か叶きねば死つても大事ない。」「たれでも何にも知らぬ者。」「あれまだ矢張減らぬ口、已どうするか待つて居れ。」と、止むるお民を拂ひ退け、下緒とけて立ち向ふ、折から表をグワラリと開け、「ハイ母親さん今日は。」「オヤ緑六さん何と思うてお前は今頃。」「何と處か約束の彼の泥八が見えました。」「あの噺のあつた婿どのが。」ト、言ふを娘が聞き咎め、「母さん婿どのとはそれや何所へ、お前世話してやらし

やんす。」「何所へも遣らぬ内へ取る。然も百両黄金を持つて来ると聞いたから、綿六殿と相談を昨晩急に取り極め。」「お前まア節季師走馬鹿らしい。」とぴんとする、顔を綿六差覗き、肝腎の娘御が不得心では納まらぬ。お嬢さんどうしたものであらうぞ。」と、言ふを打消し「何のお前あれは娘私は親、親の言ふ事背く様な馬鹿でも御座んせぬ。彼の百両さへ承知なら、今宵直に祝言させうが、是れ代金に違ひはないかいなう。」「サア代金しきが外れては當にして十分一己が懐中も喰ひ違ふ。其所に抜りは少しもない。」「ナ、宜し／＼、コレお林やお三は居るか盃の用意おや。サア娘餓鬼めも此所へ失せ居れ」と言はれてお民は投首し、是非なく打連れ奥へ入る。跡に綿六門口を差覗きつゝ延び上り、「えゝ何をして居をるやら否のう／＼と出掛けに来たワ。」ト、待つ間程なく泥八が上下引掛けブウラブラ「行燈に花形屋まア家名が華奢でいい。コレ綿印、一生に一度持つ御臺所の事なれば、顔見ぬ中は安心かぬ。「彌貴様が噺した通り。」「大和屋をつぶの代物、あゝ早う見せたいなア。」「己も實の母ぢや人の處へ、彼の鼡助を設け口に遣つて置けば其の方も氣懸りなれど、手前が其の噺故不圖爰へ来る氣になつた。さア案内ぢや／＼。」「ナッと待つたり昨日も談合した通り、何も彼も揃うて居るか。」「否揃うた段かいの、鼻紙が小半紙二帖、うすきいを奢發んで五匁六尺と思うたれど、どうも引張り足りぬから、緋縮緬を二尺買うて、木工にして縮めて来た。」「其の事ではない彼の敷金。」「はて夫れ

が無くては來らるゝものか。」「ヤレ〳〵夫れで安堵した。到頭貴樣も油屋をお讓りなされてつる〳〵と、己が家へ流れ込み、何ぼ素からの馴染でも、狼を飼ふ樣な物で内へ置くと夜の目が寐られぬ。所で幸ひ此處の相談、貰はう行かうで埒は明いたが、百兩と言ふ金の才覺どうであらうと思うて居たが、ア、流石古川に水絶えずぢや。媒妁役にそんならば其の金を請取らうか。」「寛棒め其の金が此所にあつて堪るものか。」「エ。それでも今其方の口から。」「さアあると言うたは此所の家に。」「えゝなんだかどき〳〵〳〵と己にはさッぱり譯が知れぬ。まア篤りと安心く樣確りと言うてくれ。」と、緑六が屈託顔、泥八はなほ落付いて、「ア、是れが分らぬ箆棒では、末永く語りは出來まい。此所の家に有ると言ふは、今夜まア壻入するわ、宜しか誰に限らず氣に入ることは此の鼻が大名人、二三日馴染んで居ると、内の子供を書入れ證文、百兩位はこつそりと拵へて、「ハイ是れが私の敷金で御座ります。」とごまかす積りでお乘り出し遊ばした。」ト、聞いて緑六横手を拍ち、「否餘り呆れて物が言はれぬ。此の頭も糠助に教唆かされて、久松を締め損ひの、久兵衛に強かな目に逢ひの山、三味線さへ手が痛んで彈かれぬ程の不仕合、又此の上に汝までがとんだ目に逢はせてくれるネ。」「おッと氣遣ひの氣の字もなし。先づ一杯をせぬ先に母親を一寸呼んで、扨今晩持參致す筈で御座りますが、餘り夜が更けました。明朝は手代共が持つて參るで御座ります。手輕に貴樣が遣らかすわ。若し先が不性な顏

を僞るを見ると、上が徐々と罷出で、「ヘヽヽヽとわらひ掛ける。夫れから後は此所へ請取り、ぴく／＼せずと遣らかせ／＼。」「夫れで宜いか、先がけゞんな顔をする所へ貴様がヘヽヽヽ、こゝで、どうやら危險い仕事、失敗つてくれるな。」ト、呟き／＼内へ入る、「三絲六殿々々々、喃殿は最う見えたか。」と言ひつゝ、娘ひき連れて立ち出づる主人のお鰒、俄に二人は行儀を正し、「只今見えられました。是れが貴女の泥八どのではない、遽法屋萬八どの。若し貴方が此所の母親様、おちかづきにお成りなされまし。」ト媒的資格して扇子パチ／＼、泥八かき繕ひ、「扨は貴方が親母殿で御座りますか。斯様になるも宿世の奇緣、幾分お目を掛けられて。」「是れは／＼私こそ、以後からたんと憐しがつてもらはねば成りませぬ。此所に居るが娘のお民。コレ御挨拶しやいの。」ト、言はれてもじんしやんと、「あい、能うお出でなさんした。」と言つた許りで背後向く、顔を尻目で泥八が、「イヤ奇妙。三絲六香絲六大々明神、何にも言はは是れおや／＼。」と一寸片手で伏し拜まれ、傍高慢の鼻高々、「何と大和屋丸出しと言つたに違ひは投島田、まだ鐵漿を付けぬ中が千兩所の命取り、イヤ其の千兩で思ひ出した。お鰒さん彼所へ一寸。」「ちと投言ふ事があるならば此處で言うたが宜いわいの。」「否お暇は取らせませぬ。一寸々々。」ト門へ連れ出し、「此の樣に申しまするとどうやら斷う譃らしう思召すかも存じませぬが、死なれた親父を地獄の釜へ、まほんと嵌める法もあれ、今日の天道掛けて最う／＼譃では御座りませぬ。今に無間

手代共が持參致すで御座りませう。遁うても明朝は」ト、言ふにお腹が打案じ「そりや約束の彼の敷金」「イエサア永い事では御座りませぬ。どうぞ今晩たつた一夜」「氣に入つた」「エ」「サア聟殿が氣に入つた。敷金は何時なりと勝手に遣すが能いわいの」「そりや眞實で御座りますか」「何の譃を言ふもので」トたちもどれば、泥八は機嫌を伺ひ「へ、、、。」と寄るを綠六押止め、「あゝ最う其のへ、へ、には及ばぬ〱。此方が氣に入つたから敷金は何時でも宜いと」「其奴は甘いわ、又もや御意の變らぬ中に」ト勇み立てば、お腹も莞爾「此方でも杯を早うして落付きたい。女子共銚子々々。それならば上げます」と差す杯を泥八が、押頂いてバツと乾す。綠六は目をはち〱「せも親子の杯を先へするが本式か、委しい譯は知りませぬが、先づ嫁から聟へ差すがありふれた世間並、其の方を取り急いで、ねえ申し母親さま」ト言はれて、お腹が噴ツと顔、「夫れぢやに寄つて私から飲んで聟の萬八殿へ上げたので御座んする」「何ぢや又どぎ〱と分らぬことが出來て來た」と泥八も尻もぢもぢ、お腹はたゞ笑顔して、「何の分らぬことがあらう。聟は彼の萬八さん、嫁と言ふは私で御座んす」「ヤアそんならば彼の娘子へ聟取るではないかいの」「サア彼へも何日か一度聟を取らさねばなるまいけれど、まだ年若故急ぎもせず、又私も其の様に老い朽ちた身でもなし、旦那に別れて前三年、寝屋の寂しい折も折、綠六さんが斯樣々々言ふお人があるとの噺故、相談したので御座んす」ト、口說き

立てられ「左樣なら一寸行つて參じませう。」ト、徐々と逃げ出す「泥八今更お前靜なうとはそれや餘りおやこ」と引止められ、あぐみ果てゝ溜息突き「締六餘り噺が甘いからこんな事であらうと思ッた。」「サア壻と許り相談したは己が惡い樣なれど、お主が今ウ」と言へば此の家は悉皆丸取り。二底もあれば、蓋もある。割鍋でも金氣の出ぬを取得にして居据らうか。」「そんならお前此のお顔を女房に持つて下さんすか。」「オヽまアあいおやっ。」「所天の人ナ、恥かしっ」と抱き附かれ、迷惑顏を振り向く表へ、息急き走つて來る候七「母親さんたうとうお千代を締めた／＼。」ト、聞いてお顔が猶いそ／＼、「オヽ出來した／＼手前連れて戻つてか。」「はい。駕籠に押込み細引で上からぐる／＼がんじ搦み。」所詮彼奴久松と言ふ足が附いて居ては、戻つた所が長とく內へ。」「何の置く氣があるものか、丹波屋の武士客がどう言ふ譯か、竟に一度も見た事もない彼のお千代を身請して、明日直に西國へ連れて下ると、夫れは／＼急の相談、まア／＼金を拾うた。」ト、喜ぶ中にえい／＼聲、裸體で舁き込む四ッ手駕籠、泥八は立ち上り「此所の內へ壻入すれば、其の千代めも己の抱へ、久松と言ふ足があるとは些と此所に心當り、まア其奴を引摺り出せ。」「あい合點で御座んす。」トお顔は有り合ふ庖丁取上げ駕籠を搦みし繩切り解き、襟髮摑んで引出され「私や何にも存じませぬ。堪忍して。」と詫ぶるを構はず、「其の紬頭巾取り居れ。」ト引きしやなぐるを止むるお民「モシ母さんありやお千代では御座んせぬ。」

ト、言ふに泥八、「ヤアお染様か」「泥八か」「ハテ迷用な」ト、お鰒もきよろ／＼、「コレ萬八さん、此方さんあの子と近付か」「近付の段ではない、河原橋油屋の娘お染さんや」「ヤア／＼」ト驚く中に差出るお鰒、「何で又其のお染が逃亡した、お千代が小袖を」「はい／＼、つい著たうなつた故著て見たので御座んする、堪忍して」ト震ひ居るお染が手を取り、お鰒は高聲、「これ綿六殿此の娘を其の駕籠で油屋へ連れて往んで、逃亡した奉公人の著物を著て居た譯を能う言うて聞けて來や。明日は乾と己が出てすつぱり埒を明けて見せう」ト、嗚り立てられてお染はおろ／＼、「私や最うどうあつても今更家へは歸られぬ」「此處から逃して下さんせ」「歸られぬとて生身を浮々留めて置いて、彼所から逆談判を喰つてはならぬ」「ヱヽ、候七厄介者を連れて來た科人は己ぢやぞ。何をきよろりとして居るお染を駕籠へ引摺り込め」と急るを泥八押止め、「イヤ夫れには及ぶまい、まア／＼己に任せて置きや。たゞお染様お前の噂も前夜チラリと風の便りに聞きました」「これ的者の久印の跡追うての逃亡なら、家へは浮々戻られまい。其所を察して己が分別、家へも往なず彼の人と夫婦に成る性が有るが、頼まれもせぬものを世話役もほんの粋狂。どうしたものでごんせう」ト、持たせ掛くればハツと乘り、「是れ泥八其の願ひもし叶ふなら、どんな辛い悲しい事も、私や辛抱をする程に、どうぞ世話して給やいのう」ト、以前は以前、今では此所の花婿の萬八にテモ大束な頼み樣」「そんならば萬八さん、

私が爲には結ぶの神、コレ手を合はして拜むわいな。」ト　ニツト宜しく〳〵賴まれた男冥利呑み込んだ。、「コレお長坊、人の目に掛らぬ樣お染樣を彼の二階へ。」「ヲヤ何時の間にか私が名を。」「サァお染さんとやら私と一緒に御座んせ。」ト、手を取り二階へ連れて入る。お駒は傍へ摺り寄つて「モシ、ちつと合點が行かぬ。どうする氣ですの、娘をお前はまァ此方の内へ。」「どうもせぬ金にする。」「エヽ、ハア」「今此方が先刻の噺を聞けば、お千代を覓ぞ見た事もないその武士が身請の相談、先の茶屋へ呑み込ませ、其のお千代にして賣つてやるこつた。」「夫れでもお前人の娘を。」「サテ彼家方も逃亡者、家へ戻る心はない。所へ附込む此の狂言、久松が許嫁のお千代にお前成つて行くと、國で夫婦になられると欺してさへ遣つて仕まへば三百里の浪の上、假令泣いても喚いても滅多に尻揉屋も來られえ、今日から此所は己が家、こなたに泡を喰はせる樣な迂闊な仕事はしねえ程に、まァ落附いて居るが宜い。」「夫れで私も安堵した。コレ綾七丹波屋の棚藏が所へ行つて言はうには、『只今お千代が戻りましたが、お客へは沙汰なしに、お前許り私が内へ一寸來て下さりまし。』と。」「エヽ、手前許り遣つた分ではまだ心が落附かぬ。締六さんも大儀ながら一緒に行つて下さんせ。」「おつと承知、媒妁役の一割は其の内で頂戴だ。」トいろ〳〵な目に逢ふことと呟き〳〵急ぎ行く。「コレこちの人、宵からの混雜も〳〵で酒肴がまだ濟まぬ。さア御座んせ。」ト手を取られ、「あゝ思ふ樣にならぬが浮世、さすの代りにとんだ鹿寶玉味噌汁

でも實嘆しよう」ト、エヽ悪らしいト「あいたヽヽヽヽ」ト二人打連れ入りにけり。ト不義義理に、久松は窓の下より立ち出でて「思ひがけないお染様、どうして此所に御座つたやら、あゝ新う思ふも皆愚痴、ちつとも早く」「さうぢや」ト、闇け行く此内の二階より「久松待ちや」ト「さう追掛るはお染さま」「其方は其所に」ト言ひながら、下りんとするを聲掛けて「あゝ申しお染様、貴娘が今私の傍へお出でなされると直に逃げて行きまする」「汝が身が退いて行きやると、此所で私や自害して死なるぞや」「さアたれでも」「さうなら死なうか」「さア其れは」「さア〳〵」ト「これ聲が高いお二人様」「お前は此所のお娘子」ト「先刻から蔭の陰で様子を聞いて居たわいな」「人が聞いてはお爲にならぬ」「なア申しお染さん」「何ぼ人が聞くと言うても、逃げて行かうと云やるものゝ」「其れぢやと言うてお前様と、どう一處に居られませう」「あれ彼の様に胴慾な氣強い事を言やるもの」ト、ワツト泣くを止むるお民、「これやお染さんのがお道理ぢや、さアお久松さん、貴君の得心さしやんす様に譯を言うたが宜いわいの」「はて譯は言はずと知れた事、親旦那の御遺言でお約束の佐四郎様、御婚禮も最う近々、夫れにどう言ふ義理がやら、果敢ない此の身を其の様に愛しがつて下さるお志つて今では仇となり、浮世の義理に變められ覺悟極めて居りまする」久兵衛殿へたつた一言が言ひたい許りに、ひよんな處へ參りまして、お目に掛るも思ひの種」「それ程までに覺悟して内を出やる程

ならば、なぜ斷う／＼おやと打明けて、私に言うてはくれられぬぞ。父さんの遺言を聞かぬ先に、不圖した事から其方と夫婦の約束、今となつては是非がない。未來で言譯せう程に、とても死ぬなら、どうぞ私も一所に殺して給いなう」ト、お染が口說くを聞き捨てて「おさらばで御座ります」ト驅け出す久松お民が抱き留め「コレさア提へて居る程にお染さん早う此處へ」ト、あいと許りに轉び下り、としや遲しと取り縋り「えゝ其方はなう／＼」と押動かせば久松も、涙に暮るゝ顔振上げ、私故に貴娘さまは、太い辛苦をなされますなア」「思ひなしか顔の瘦せ、必ず身を大切に存へて居て給るのが私への矢張心中。」「ハイ最う思ひ止りました。死ぬ事では御座りませぬ。安堵して下さりまし。」と言うもうろ／＼漫ろ氣配り、お民も共にうち悄れ「お前が短氣を出しやさんすと、お主を殺すも同じ事。さア得心が入つたなら、人目に掛らぬ其の中に、此處を早うお二人さん」「あい／＼合點で御座んす」と、お染が上衣引上げる。其の間に久松身を搐り抜け「どう思案仕直しても、貴娘と一緒に立退いては、世間の思はく浮世の義理、必ず恨んで下さりますな」ト言ひ捨てて表の方眞一文字に驅け出す。「コーレなう待つて」と狂氣の如くお染も續いて走せ出す。折もこそあれ綠六が、戻り掛つた出合頭、お染が帶際引摑み、最う一足で肝心の、玉を種なし危い事。若し親御さん／＼丹波屋が今に來る筈、此の代物に篤りと、言ひ含めて置いたが宜い」と呼ばはりながら無理遣りに、お染を内へ引戻す。昔

に驚き泥八お鰒、暖簾口より飛んで出で、支へるお民を「面倒な手前の知つた事ではない。」ト、納戸の内へ押込んで、襖をお鰒が建て切る中、泥八もとつばくさ「其の丹波屋へ掛け合ふ中、お染さんをばまア〳〵奥へ。」「トツト心得。」締六が暖簾内へ連れて入る。引違つて驅け出る小富「申し〳〵お染さま、お前を欺して彼所とかやらへ賣つて遣るとの相談を、私は奥で聞いて居た。早う逃げて下さんせ。」ト、言ふも泣聲お鰒は吃驚「夫れ喋られて堪る物か、萬八どの此の餓鬼めを小酷い目に逢はせて下され。」「なに彼奴は久兵衞めが小ごつちよなア。日頃から長せた餓鬼め、滅多なことほざき居ると、己これで芋指かし。」と嚇しの脇差鞘ぐるめ、小富が肩先二ツ三ツ、打つたる途端に鞘割れて、切先下りに五六寸、「アツ。」と一聲此の世の名殘、哀れはかなく息絶えたり。「南無さん餓鬼めが死つた。」ト、お鰒も共に胡々目。折柄表へ、丹波屋の楝藏に案内させ、來掛る身請武士客「花形屋の掛提燈、お千代が居るは此の茶屋ぢやな。」「ハイ〳〵左様で御座りますか。全體先づ私に先へ一寸參つてくれと申す事では御座りますれど、達て貴君がお急ぎ故。」「ムヽ、さ直に相談するが捷策さア案内ぢや〳〵。」「ハイ畏まりました。」と楝藏が立寄つて「こりや最う門が締めてある。モシ〳〵一寸頼みませう。丹波屋の楝藏がお客をお連れ申して來た。早う此處を明けてくれ。」と門の戸ドン〳〵、打敲かれ、内の二人は尚驚天。「こりや來たわ〳〵、萬八樣どうしたら宜からうぞいの。」「ハテ己に思案がある、な、斯う〳〵。」ト

耳に口。「夫れで宜う御座んすか。」「はてよいてや、イヽ〳〵今に開けて上げます。」ト言ひつゝ疊を蹴ね返し、小富が死骸を下家へ押入れ、「さア、さう寛々しては行かぬ。奥へ行つて湯と茶でも飲んで御座りまし。」ト、お腹を追ひ遣り、何氣なき素振で門を押明くれば、「イヤ甚く待たせ居つた。」ト、泥八が顏打守り、「お前は竟ぞ此所の内で見た事もないお人おやが。」「否もう見た事のないは道理さ。たつた今出來たての小分ながら是れでも花婿。」「これは麁略を言ひました。」彼の丹波屋の株藏が、お千代の身請お成さるお客をお連れ申して參りましたと、お腹さんへお前どうぞ。」「否々あれへ言ふにも及びませぬ。」「其の事は萬々承りて置きました。」「夫れでは早速埒が明かう。」「モシ旦那お開き遊ばす通りの譯。」「そんなら己が其の者に面談して掛合はう。亭主促しやれ。」「さア、お通りなされまし、なる程繁華の地程あつて、何れの茶屋も綺麗な住居ぢや。」「いや最うお褒めに預つて、お恥かしう御座ります。」取別け此所は勝手口、穢しい設では御座りませぬ。是れ女子どもお茶上げぬか、お煙草盆早う持て。」「いや構やるな〳〵。」ト、上座に通つて「扨亭主、此の頃から掛合うた彼のお千代が事につき。」ト言ひつゝ煙管取り出し、煙草盆引寄する手が障つて、打返す茶碗に少し呑殘り、溢れ掛りし膝の邊「是れは麁相。」と鼻紙で、拭へばベッタリ染めなす鮮血、めを付けながら押隱し、「こりや亭主是方の名は何と言ふ。」「へイ萬八と申します。」「あの萬八。はて見た樣な。イヤ能い骨格の男ぢやな。」「へ、

左様にも御座りませぬ。ヤ、只今も申す通り此方は様の贔屓、未だ〳〵あのお二階へ…、顔めても
悠々と、「どう言ふ事か此の様の御心が変へだ好い。」「貴君に立らても此所にぢつと詰りへ、、、、ハ
ハ、、、、左様に御客様がさうしてお出でなさる所が、どこの国に御座りませう。」「はて奇貴衛にも厭
ぬ野暮を言ふ男で御座りなわ。又客を勝手へは置かれぬと言ふ掟もあるまい。」尉屋の亭坊様は此所
借りお無さし何よりの御余へ随達。ドレ綴りとしてお千代が身請話議をせずにはなるまいわえ。」ト、言は
れてぎつくの仲八は、応気味悪く面喰ふし、「コレ雨雲殿まー、お客をばお連れ申さず、貴様がつかつか
へ来て、掛合つて下さいと言つて遣つたは此所の事、なんぼ呆けたお方でも、お客が此所に御出あつて
は談合がどうも仕難い。聞つての通り不調な住居。」ト、言ひかくるを武士客、「コレ〳〵、仲と意見を言
わる。余が今升一ぱいで出呑んで居る所へ、此所の使ひ男が来て其の通り言うたれど、余の話は嫌めて
置く。只何にもとまれ言へば、金を渡してお千代を直に連れて帰る分の事。最う其貴に延やかうと掛
合ふには及ばぬ訳。夫れ故問違して来たのぢや。金も百両持つて来た。さ、渡す請取つて奉公人を早
う渡しや。連判があると武士が立たぬ。武士道を捨てさすると其のよりか此所に思案があるぞ。」「い、
さぬ渡し申します。金請取つて奉公人を上げたら仔細は御座りませぬ。」言はいでも知れたこと、
コレ嬉しや、お千代を直に連れて行く、駕籠の用意をして置きやれ。」「はい〳〵、左様ならお館へ参つて言付

けて置きませう。若しお前宜しくお頼み申します。やれ／＼是れで安心いたした」ト呟き／＼泣きけり。
泥八は倚媚託顔、「これお腹得心したら奉公人を」「おい／＼今連れて出る處で御座んす」ト、暖簾押
上げ、「これは／＼お侍達で御座りませう。是れが貴君のお望みの。ナ、お千代御挨拶を申しやいの」
ト座形を造る空笑ひ、武士はじろりと見遣り「大分悲歎に暮れた樣子」「イヤあの、こりや嬉し涙で
御座りませう。さアちやッと顔上げてお目に掛けたがよいわいの」ト、お染が手を取り突遣れば、顔
見合はせて二人は吃驚。「やア其方や。」「貴君は半平樣とやら。」「あゝこりや／＼、己は知らねど其方
は余を見た事もあるであらう。でも思ひがけない、イヤ何は兎もあれコレお千代、余と一緒に國へ行
けば、悪い樣には取扱はん。」「そんなら貴君と連れ立つて。」「但しは否か。」「何の否で御座んせう。」
「あゝ夫れで此の腹もとんと痞が下りました。お千代が得心致したからは、へ、、、、お約束のな。」
「オ、金の事か如何にも渡さう、まア奧へ往て篤りと杯事でもした上で。」「同じ事なら早い方がな
アお前。」「萬八どのの言ふ通り善は急げと申します。」「唯今請取らうと言やれば、此所は動かぬぞ。」
「えゝ。」「さア居心の宜い此の疊を立つて、花を持たせるも望みの身請整ふ祝儀、併し後に二人の宿へ
乾度禮は言ふ程に何方へも行かず待つて居や。お千代おぢや。」唄「露は亂れて二人が居る跡打詠め。」
「まア一方は片付けたが、氣味の惡い。お腹古い葛籠があらうがの。」「藏の二階に御座んした。」「そ

んなら余が取つて來よう。此方は其の內、例の死骸を下屋から引出して、蒲團で抱んで置いてくれ。」ト、言ひ捨て這入ればお嚊は怖々、疊を上ぐる表の方、「ハイ御免なさいませ。」ト、言はれて吃驚、「エエ。」膝追掛けてお嚊は震々、「えゝ氣味の悪い誰ぢやぞいの。」「否私で御座ります。」「やア久兵衛殿か、飛んだ處へ宜う來やしやんした。」「餘り宜うも參りませぬが、此の間から度々參ッてお掛合ひ申した一件、打捨てても置き悪く、何彼の諸埒を付けませうと。」「えゝそんなら何彼の諸埒を知つて。」「諸埒を知つてと仰被つては面目次第も御座りませぬが、何か貴君はそは〳〵と、モシお下に御座つて下さりませ。」「下に居たりや何とします。」「左う一々にお言葉に角があつては頓と早申し樣が御座りませぬ。先づ漸う三十兩才覺致して參りました。殘りの處は娘の小富を奉公人にお直しなされ、お約束のお千代をどうぞお戾しなされて下さりまし。」「知らぬわいの、約束の日限が切れては小富も矢張此所の者。」「左う御座りませうが其處をどうぞ。」「えゝ五月蠅い、コレ男共棒持つて來て早う彼奴を追ひ出して吳れぬかやい。」「否打たれても擲かれても、此の相談の付かぬ中は滅多に此所は動きやしねえ。」ト、煙管取り出し緩々と、煙草燻らす橫顏を、奧より萬能引擲け、出て來る泥八差覗き、「ヤ久兵衛。」「さう言ふは泥八だな、はゝア聞えた我が此の家へのめくり込み、味な所から疫病の、神で敵の腰押しするな。」「あゝ是れ〳〵滅多な事を言ふな、今日からは花形屋の花壻の此の萬八、お主が

隣の世帯をさればこそ此の節にも[illegible]、[illegible]とこ、[illegible]と對[illegible]聞いて、それでこの
關もすつかり[illegible]込めなければ[illegible]、[illegible]大きに[illegible]を申しました。[illegible]がある[illegible]
[illegible]、打ちやりと[illegible]と[illegible]に成りませう。[illegible]の[illegible]は[illegible]、是非[illegible]
て頼みます。[illegible]お千代を[illegible]して下され。二人、それ迄に[illegible]して下さう、とこへ出て
一同者にも更に三十程に一合[illegible]の事をやつて[illegible]、お千代は少し[illegible]二階と二人[illegible]
お千代を[illegible]し、[illegible]へ[illegible]置いて、[illegible]して行つたのを[illegible]、[illegible]つて[illegible]
此の白々しいしらつ言は[illegible]、[illegible]つて[illegible]を、手を[illegible]して[illegible]、二階へ[illegible]人[illegible]
手の[illegible]捨して置いたが、この手段があつて面白い、[illegible]ないと[illegible]で[illegible]と云つても、[illegible]
義の目に二度めた者は、もう是れなれば[illegible]の、[illegible]も情に[illegible]、或の込んでそせよ[illegible]
一つ、ふ、ふ、むつと思ふ事も、[illegible]の[illegible]もので、手の[illegible]に[illegible]の[illegible]
を、一寸、[illegible]して、[illegible]の時に[illegible]に乗かけた二[illegible]を込めて、お千代を[illegible]んだお千代
を出でて、[illegible]は[illegible]き、打つて倒れて引外し、[illegible]を起つて[illegible]ふ二人、[illegible]にお[illegible]はたゝみ
ある、二階の[illegible]けて上り[illegible]とやら、[illegible]お千代[illegible]して[illegible]のにて、[illegible]と[illegible]
其は二両お千代を一寸[illegible]とまで[illegible]は[illegible]、[illegible]と[illegible]に、[illegible]

身共は業とした田舍武士、お身が知らう筈がない。不圖した事で爺が足運び、見もせぬ嫁に生出した、是れが此處の抱へのお千代さ。」「否々それは」と久兵衞が、言ふを押止め「はて惡い料簡な、今更の間で此の家の娘お民とやら共々に、戀しさゆゑお千代が委しい噺、今更や角と言ひ立てするのと、何方へ其れ等がどう違つて誰が難儀をしようも知れぬ。」「でござんす、半平さんの其れは〳〵有り難いお志、矢張私をお千代にして、何うとも貴君に任せて置いたが宜いわいな」とお葉が言葉に久兵衞も、仕樣あらうと擬へ見る、半平は靜々と衣紋繕ひ膝に手、「是れ萬八今まそこで聞いて居れば、お千代を隱した、出せ渡せ」と、此處で二人爭ふが、己には頓と合點が行かぬ。なぜと言や、お千代はこれに輸して此家に現在居るでないか。他事は武士を僞りは致すまいな。」「どうして嘘を申しませう。其れが内へ抱へましたお千代に違ひは御座りませぬ。」「こりやさうあらうなもんです。默らしやれが證文渡しや」「これお萬早う貴君へ上げてくれろ」と混八は後尻去り、お萬も何彼薄氣味わるく、さうならうと存じまして、此所へ持つて參りました。左樣なら引換に何卒お金を下されまし」と差出せば、半平は取るより早く引裂き捨て、證文請取る上からは、如何にも金を渡してくれうが、イヤ酒は惡い物、最前これへ來た時は、余も餘程の機嫌であつて、ツイ金を取落し。」「エ、」と一同吃驚する事はない。慥かに有處は知つて居る。其の疊の敷合へからりと落したれば、縁の下へ落ちたであらう。

どれ取り出して渡して遣らう。」ト立ち掛れば、泥八は上へどッかり一生懸命「ア、これ上げられて堪るものか。」「はゝアそんならまだ下家にあるな。最う余は彼の葛籠へ移つたかと大う案じた。」「え、そりや何が。」「知れたこと余が金が。」「いや其の金は請取りました。此の萬八が確りと、然らもし貴君のお手から。」「成程さう言へば渡した樣でもある。ア、酒と言ふ物は本心ないものである。夫れならもうお千代が身に掛り合ひは決してないな。」「何の御座りませう、金は請取る證文は上げまする、天竺までゞも唐までゞも、手を引いて御座りまし。御醉中とは申しながら、百兩と言ふ金を渡して置いて御失念。ア、御覺えの悪いことなァ。」「イヤ余よりは手前が悪い。」「何が悪う御座ります。」「覺えが。」「へエ此の泥八に覺えが悪いと仰しやる。」「夫れ御山屋の離座敷、刀一腰捨てうか。」「え、」ト許りに泥八は、腰も震々べつたり坐り、「何ぢややら今宵は最う碌な事は一ッもない。貴君は最うお千代を連れてどうぞ歸つて下さりまし。」「貴君はお歸りなさつても、此の久兵衞は歸るまい。」「夫りや又なぜに。」「お千代が諸挌が濟んだなら、娘小富を請取らう。」「返して遣らうが明日來い。」ト、空嘘けば引取る半平、「なる程余は用も濟む、もう戻つても宜けれども、ハテ田舍者と言ふものは味な所が野暮堅い。御合客へ杯も致さぬが如何にも氣掛り、持合はせたを差します。」と、抛け遣る一品久兵衞は、不審さうに手に取り揚げ、「こりや覺えある大内切。」「平野町を戻道、雲に隠れし其の杯提灯

はつたり、宵暗の明光も知れぬ時代錦。」「さては其の夜の。」「こりや氣に入らずとも一ッ參れ、失禮ながら此の祝儀。」ト差出せば、久兵衛合點行かねど押戴き、「ヤ。生々しき此の血汐。」「夫れ。」と目配せ。「合點だ。」ト、跳り掛つて久兵衛が、泥八に翻筋斗打たせ、疊を上げて、「ヤ、娘小富が慥かに死骸。」「夫れ見られては百年目。」ト、脇差取り出し泥八が、切つて掛るを久兵衛は、心得たりと引外し、直に脇差もぎ取つて、「我が子の敵、觀念しろ。」ト、言ふより早く拜打ち、返す刀にお顔を目掛け、「序に己。」ト立ち掛る。周章て惑ひて驅け出るお民、我が身を惜しまず被ひになり、「これモシどうぞ。」ト手を合はせ、涙に暮るれば半平聲掛け、「お顔は高で女の事、お染や千代が世話になつた、お民へ面じて助け遣りやれ。」「ハ、命冥加な。」「一人殺しの久兵衛め。」ト、飛び出す絲六半平が、刀の小尻で多足の當身、お染は小富が死骸を抱き上げ、わつと許りに泣き沈む。久兵衛も恩愛の羈絆に絡まれ蹌々と、よろめく足を泥八が、胸へ踏んがけ、「是れ娘、必ず成佛してくれ。」と、突込む留め絲六が、息吹き返して組み付くを、彼所へ見事に頭轉倒。（幕）

○淨瑠璃おや〳〵アイ 引。「さる程に源義經は、川面法眼の元を頼み、暫く吉野に寓居ある。いで其の頃は彌生半ば、櫻を思ふ白雲と、峯も麓も一面に、盛り爭ふ花戰、夫れかあらぬか春風に、連れて聞ゆる鬨の聲。靜は心得我が君の、おんきせながを取つて打掛け、白あや疊んで鉢卷しめ、薙刀おつ

とりはせいだすを、義經「暫し。」と聲をかけ「ヤレ待て、血氣にはやるは匹夫の勇、高で名もなき雜兵が、子供狂ひと同然な、小競合ひでもするであらうわいの」「それおやと云うて小敵を、侮らぬが軍の法、昔しや此所に在す事、鎌倉方へ漏れ聞えつ」諸軍勢「くりふだんおそひきたる時は、きみのおんなをかりまゐらせ、よしのよく見よよしつねが、さいごのていとはらかききり、にほんがはなに名をのこし、いつたん敵をあざむくうち、あのじゆんきやくのみねうたひ、おちさせたまへわがきみさまと、いさみすゝんでものがたるは、なくよりも猶あはれなり。よしつねにつことうちゑみ給ひ。」「ヤ、頓もしし去りながら、龜井片岡始めとして、股肱の臣も多ければ、其方が行くには及ぶまい。あれ〳〵凱歌も遠ざかる。モウ止しにしや〳〵、一體鎧といふものが、つめッても摸ッても、頓と通じのないもので、余はまアずんと好かぬ。其の上帶を解いたり〳〵」「夫れでも貴君若し敵が」「ハテ押寄せて來たならば打死する分の事、アヽ、斯うと其方が今余が代りに鎧を着てくれたに依つて、余は又其方の代りに、然らば一差舞ひませうか。」諸軍勢「ばんだいの池にかめうかび、みぎりにたかき松がえに、つるこそむれゐて遊ぶなれ。あそべ〳〵こども、ぶり〳〵ぎつちやうたふうち、ひゝなの殿のいもせ事、それ覺えてか初穗に、かほはほのめくもゝの酒、やがてこのよにせたいして、そしてどそこやへッつひに、みやうしくみだなみすきちやう、だいりさんでもうらやでも、こひにふたつはないわいな。」

「そんなはずはな今様は、聞いた事が御座んせぬ。そして女子の口説ごと、妾は男子の心になつて、浄瑠璃「あやめ葺く、軒にかぶとのはなくしく、けんぺいのはたふきなびかせ、かはらいんおやしやうぶきり」「はやあき風のたちそめに、ほしよつる夜のあまの川、ごしきなみたつたんざくは、ことしのたけのはつしごと」「きくのきせわたまだあてておに、はなみこそでのかへりざき、ぬひのこてふのひら／＼と、まがきをかざるこまげたや、たづなかいくりひだりづま」「さァこれからは静が眞の今様が見たい／＼」浄瑠璃「すゝむるをりからふちとのかた、またもきこゆるおひがねたいこ。すは事こそと見おろす山みち、ごふひやうひとりえいさッさ、さッささてはらいぼうみち、にくやこなさをちよいとひく。あひたしこひおでひきのぎら、わつたらしよことがない／＼／＼、やつこおひよつこりてがらがほに」「御注進々々々」浄瑠璃「と、おんがさかたへにとつてなげすて、うおとにきこえしよかはのおにはん、なにになぶするなむかしとの、おにきとなどいふあらにふれ、もつたいなくもきみをうちとり、かまくらどののおんしやうを、しのこのうさぎ兎くらへ、くわんおんだうやざわうだう、そこやかしこにまいふくして、一どにうつていづるところを、さようたゞのぶこれにありと、いふ日かゞやくにしきのこて、もえぎにほひの鎧まきして、あかおふごばんごいしをつかみ、おからにふかせてなげいだせば、四ツ目ごろしにばつたばた、つゞくせいなくみなばら／＼。四ちやうにかけてに

ぐるをおつとめ、そばのがけみちわたりをきり、唯いちばんにかくはんはじめ、のこらずかたれてみよはんぜい、ごあんど遊ばせわが君さま。」と、拍子に懸つてしやべりけり。義經きげんうるはしく、「さこそ〳〵、幸ひ此所に銚子盃、祝ひに一杯飲んで行きやれ。」「ハイ私も一ッや二ッ萬更ならぬ口でもなし。お辭儀致さず頂きませうか。」「それ〳〵靜ついで遣りや。」「サヽ一ッ飲ましやんせ。」「ハイこれはお染さま憚りで御座ります。」と言ひ掛けて心附き、「あのマア私とした事が、狂言であッたもの、靜様と云ふのを忘れてホヽヽヽヽヽ。」と雜兵の笑ひに似合はず艶かし。「イヤもうお捨陣營で御注進。今ののりおちの取廻しは、強いものであッたわいの。不思議な事で此の久松、お染と首尾よく婚禮して望み叶うた其のお禮。天神祭の練物へ平に〳〵と勸められ、胡散くさい義經公。」「お前より此の染は似ても似つかぬ靜の役、何ぼ神でも鎧を著たり雉刀を持つたりして、オヽしんど。シタがモシ久松さん、妾やもう此の様な嬉しい事はないわいな。」ト、言ふをお捨がひッ取つて、「そりや知れた事いな。思ひ思うた久松さんと誰憚らぬ御夫婦中、此の梅田橋の御別莊で、練物の稽古にも御大將と水入らず。」獨吟「どんすのよぎのえうじやうに、ふたり寢巻のおびぐるわ、びやうぶふすまのさくをたてきり、あひ〳〵のけぶりのきやらをたきしめ、よするを今やとまつばかんざし、ぐんりよをむねにたゝみさん、くるかといへばくるといふ、たよりうれしきあひことば。」「アヽもう私も草臥れた。

何日も斯ういふ所へは、傀儡師や花賣が執持に來てくれるのに、どうして遲い事ちややら。」ト延び上り延び上り「申し／＼お二人さん、丁度折宜くアレ／＼彼所へ。」浄瑠璃「うかれ法師がひよつくらこちやん、ころり／＼ちやん／＼／＼／＼／＼たゝきがね、くわんぎゆやくと聞くときは、をどるもほとけのをしへなり。われらがしんするべんてんは、そゝゝそれはあり難い。あめやあられのふるごとく、かねときんとしやことめなうときんごこは／＼の七はうを、ぱらり／＼としゆつしやうして、だいふくちやうじやとなさしめ給ふ、はやせや子どもはやしたものにや、こづちはうびやうによいほうじゆ、とらしよ／＼とまねかれて、後から子供がてびやうしを、うちつれだちて來りけり。」お捨はやがて立ち出でて、「私も日頃信心する、丁度其のほんさんが宜い所へといひたいが、今日は神事の練物の、稽古の中へ敲鐘、どうやらそぐはぬお前の形。」ト云ひ掛くるを、「そゝゝそれが凡夫の心得違ひ、神佛は水と浪、名は變れども元と同體。」浄瑠璃「かんさりませばたかまがはら、ちやうすればごくらくせかい、どうさとッても一つの世に、遊ぶがとくとのふけしき、にほんつゝみのふたばしら、かみとまつしやをひきつれて、とこやみしらぬ大門の、いはとにあとをたれたまふ。」「ふたりがぶろをひきつれて、さんざんかゞやくあみだざし、紫雲のうちかけそらだきの、いきやうくんじてやうがうある、しまわうごんのゆきのはだ、すくひとられんそのために、かのだいじんはおはやぶる、かみばなふらせ

て供養すれば、歌舞の菩薩は管絃妙音楽、はつくだくわの木でうし、かりようびんがのなげぶしに「ヤレ／＼みんなも来たり／＼、おッと待て／＼、太鼓の代りは此の鐘だ。それ／＼／＼よいやさ」[illegible]「世の中にこひとはなゝとがないならば、かぜもふけ／＼かゞみきいもな、やみならうきなもたちやせまい。」「えゝまアにくやおぼろ月」「このさとに、まぶと月とがないならば、とりもなけ／＼かねもならばくもれ、しめてねたよを心なく、えゝまアにくやあけのかね」「をどり狂ふもさんぶつじやう、えにしはつきぬおやと子が、こゝろみさつしていぜんのほふし、かたへにおろせしおひのかげ、なくしおいたるをさなごを、こゝへ／＼とよび出し、わたしたまへばおどろくお捨。「ヤア其方は小富、能う健全で居てたもッたなう」「かゝさん逢ひたかッたわいな」「ヤ、道理ぢや／＼」[illegible]「と、うれしなみだのはら／＼と、のきばをあぐるしぐれのあし、はなと見えしはゆきもよふ、さらでものすごくゆふぐれの、かねのひゞきにさそはれて、いづちゆくらんひとだゝの、かげのしだいにきえうすれば」「もう／＼、お染さま久松さまいなう」[illegible]「よばはり／＼おすてはうろ／＼、あんにかッぱとふすとぞ見えし、はかなくゆめはさめにけり」お捨は四邊見廻して、此所は矢張千住院の地蔵堂、さては今のは夢であつたか、此方の大久兵衛殿が、花形屋へ行かしやんしたは、ゆふべ最う九ッ過ぎ、アアどうなつた事ぢややら。小富が機嫌の能い顔を、今見た時の其の嬉しさ、したが夢は逆夢と、昔し

へまつと悲しい事を」ト、見違ふ此方につツくりと佇立なを見て吃驚」ト、其所に居やるは小富ぢや
ないか」「母さん逢ひたかつた」ト取縋るを、立つて見居て見抱き上げ「私やも張見れが又、ひよッ
と夢ではあるまいかと、嬉しい様で悲しいわいなう」其方はどうして何日から此所に」「そんなら母
さんお前も夢を見やしやんしたか、私も彼の花形屋で意地悪の泥八に打たれる所へ、何方からか坊さ
んが御座んして、お己と一緒に此方へおぢや、母さんに逢はせて遣らう」ト手を引いて行かしやんす。
夫からは夢の様に面白く遊んで居て、お前に逢うて嬉しやと、思ふと目が覺めたわいな。母さん此
所は何所で御座んすえ」「此所は夫れ日暮寺の上保院の地藏堂、父さんは花形屋へ夕夜中に御座んし
て、今日八ツ過まで待てど暮せど歸つて來やしやんせぬ、こりや寧そ後から往て樣子を見ずばなるま
いと、思ふ所へ父樣から、使に持たせて此のお文」どういふ事か此のお寺の堂へ來て待つて居ろと、
見るより[illegible]吉待になり、其の儘に走つて來て、其方の身の上守護と地藏樣をお頼み申し、何時の間
にやら逢とろ〳〵と、眠つたのか覺めたのか、頓と私には合點が行かぬ。夫れはさうと最う入相で聞
もあるまいに」ア、早う久兵衛殿に逢うて樣子が聞きたいに」ト噂する中人音足音「まア〳〵此所へ隱れ
て居やこ」ト小富を隱す地藏堂、斯くとも知らず久兵衛は、葛籠を脊負ひ走り來り」ナ、お捨、待遠で
あつたらう」コレ其方に見せる物があるが、假令どういふ物であらうと必ず吃驚しやるな」ト、言ふ

に此方も不審顔。「私もお前に見せねばならぬ物が爰に御座んすが、必ず吃驚しやしやんすなエ。」「ハアなァまア其方のから先に見ようか。」「どれお目に掛けませう。」ト、小富が手を取り突遣れば、「エヽ。」ト許りに呆れる久兵衛。「何と不思議で御座んせう。」「不思議も不思議察する所、狐狸が我々の、悲歎へ付込み、誑さうと、目論んでも左うは行かぬ。コレ小富は殺された。」「エヽ。」「此の寺へ葬る覚悟で死骸は葛籠で持つて来た。ドレ取り出して化の皮現はしてくれうか。」とあた蓋取つて掻き探し、「ヤ、現在入れた死骸はなく、思ひもつかぬ此の掛繪。」「夫れは妾が信心する、これ此所の地蔵様のお影に違ひはない。」「血汐に染みて在すからは、六堂のうげの慈悲を垂れ、娘小富が身代りに、立たせ給ふか忝い。お捨能うお禮申しや。」ト、小富も共地に平伏し、有り難涙に暮れにけり。久兵衛暫く打案じ、「コレお捨、かねぐ〵其方へも噺して置いた、久松様の兄御半平様にお目に掛り、不思議なことでお染様が花形屋に御座つた故、半平様の御旅宿へ此の明方に御同道、余も積る物語。殊に小富を葬るも晝の中は人目を憚り、態と彼所で日を暮し、葛籠を脊負ひて二三丁、出ると葛籠の其の輕さ、合點行かぬと思つた不審も今漸う晴れたれど、萬更な空葛籠にしては何やらまだ重身か。」ト、言ひつゝ尋ねて取り出す財布、「こりや金が四五十兩、外に何やら此の手紙。」ト言ふを小富が脇より目早く、「其の二種は久松さんが、私に預けて遠い處へ、行くてて態々暇乞に。」「ふうお捨夫れを讀んで見

やれ。」「一筆申し殘し候。」「エヽこれ今短氣を出さッしやると何所も彼所も皆黒暗、當てどは知れねど追驅けて。」ト、尻引褰け久兵衛が、身構ひする向うより、縁六先に惡者が、久松を中に取り込め、「エヽ、若衆め待てと言つたらまア待ちやな。」「ふゥ竟ぞ見た事もない人等、こりや私をどうするのぢや。」「否どうもしねえ打つちめるぞ。」「それ／＼お金にでも有りついて、人違へで久兵衛に、二度まで酷い目に逢つたが、埋める積りで付けて來た。」「己ア眞の彌次馬だが、口が怖くて乘り心が、娘の樣にやア行くまい。」ト、右往一度に割木を振上げ、飛んで掛るを引外し、久松は一生懸命逃ぐるを隙さず追ひ詰めて、又打ち掛る後より、縁六が襟髪を物をも言はず鷲摑み。「エヽ汝や久兵衛又此所にうしやがッたな。三度の神には正直正路な我を捉へてあいたゝゝゝゝ。」「三度の神の御利生で、其の正直の素頭を張挫いて遣らうと思つて。モシ久松樣。」「久兵衛殿面目次第も。」「ア、もうそれは言はずと能い。怪我せぬ樣にお捨と一所に遠くへ寄つて見て御座れ。」と、言ふを隙さず殘りの一人、打つて掛る腕首を確と捕へ顔打守り、「己もどうやら見た樣なが、どうも急に思ひ出されぬ、久松樣彼奴知つて御座りますか。」ト、問へばお捨が差出でて、「そりや慥か油屋の丁稚次が弟のそれ生次郎とか言うた奴。」「否女はどうでも目角が強い。餘り人に譽められぬ丁稚次さへ見限つて、二三度うせたを些少許り金をくれて、それからは門端へも寄せぬ奴。」ト言ふ中に、縁六は

身を遁れんと足手を藻掻き、これ〳〵目角が強いの何の彼のと女房を誉めるのか、斯うして居ては聞きにくい。此の首目を放して呉れ。出抜け故に此の不覺、尋常の立會なら、己おやとて斯う手輕くは「面白い。さアどうする」ト、突き飛ばされ「すゝ、斯うする」ト綿六が、言ふより早く尻ひん捲り眞一文字に逃げて往く。破れかぶれと生二郎、捕へられたる腕首を振切つて、武者振り付くを直に彼所へしんの當、倒るゝを久兵衛は見向きも遣らず、久松が胸倉取つて涙に暮れ、「コレ何にも知らぬあの小宮に、此の着替を突付けて死なうと言ふ無分別、呆れて物が言はれませぬ。此許の兄御半平様が、御主君大内様からお預りの鬼神太夫の短刀を、何者にか盗み取られ、其の御咎めでお暇にもなるべき處を、外ならぬお氣に入りの事なれば、お叱責許りで其の場は濟めど、尋ね出して差上げたいと久作様にも内意を通じ、貴君を此の大坂へ上されて質屋奉公、其の短刀をお前様も私も、遂に一度見た事はなけれども、斯う〳〵おやと言ふ事は聞いてお出でなされながら、手に入つたを釣代なして、夫れで義理が濟みますか」と聞いて吃驚顔色變へ、「そんなら日外泥八が」「されば、お頓松が持つて居た短刀の袋は、正しく外に類なき大内切、中は似ても似附かぬなまくら。半平様も己が尋ぬる短刀の、袋にこれは違ひないとのお物語。今日お染様が御覽なされ、慥か日外久松に余が遣つたに宜う似て居るが、泥八を頼んで貰う賣つたとやら言ふ噂と聞いて、半平様共々彼思此考案じた處が、現在同じ内に

有つたを知らぬのは此の久兵衛が一生の身の誤り、剰へ泥八は余が手に掛け殺してしまふ、外に詮議の手蔓もなく、實に途方に暮れましたが、まだ神佛にも見放されぬ、コハ泥八めが脇差をもぎ取つて、何の氣もなく差して來た下緒の端に結んであつた此の手紙は、糠助と言ふ奴から泥八へ遣した密書、ア、これお目に掛けたいが、日が暮れてもう讀めまい、彼の預つて居る短刀を、賣拂ふ口があると其の問合せに來た樣子、取分け、思ひがけない久作樣のいもうとにお成りなされた其の女は、泥八が實の娘と言ふ事までも此の手紙でさらりツと知れますから、サア死なうと言ふ不所存は、薩張やめて短刀のコレ詮議をなされて下されまし。」ト、眞實見えし潤み聲にお捨も傍へ膝摺り寄せ、「其の樣な六ケしい譯は妾に分らねど、此方の人があれ程に氣を揉ましやんすを傍で見分けて、私、ま、久松さん最う／＼死なうの死の字をも、必ず言うて下さんすな。」「段々誤り入りました。これから此の久松はきつぱり心を切り替へて、一得心が參りましたら、お捨と一所に御座りまし。」ア、と小言が寝ぶたがつて、眞にまア可愛さうにお堂の縁にこけて居る。久振で逢さんが、どれ／＼負うて遣りませう。さアお地藏樣へお禮を申しや。すぐ此の子とした事がお辭儀をすると思うたに、寛それなりに寝ぶつたさうな、是れ程に頑是ない者を今日まで他人の中へ。」「エヽ、又愚痴を言つて居るか。余も今に歸るから行く、陰分道を氣を付けて。」「それならば久兵衛殿ござりまし」ト追立て遣り、影見送つて獨言に夢

見た樣な小富が蘇生り、ア、有り難い／＼、これ何卒お染樣を油屋へ戻す手段が。ヤ、あれは店の小提灯、誰が來るか面倒な。」ト、四方へ一寸たち忍ぶ。あとへ來掛る戸惣次が生二郎に蹴躓き「えゝ、醉ひどれか病人が吃驚とさせ居つた。」ト、言ふ聲爰に正氣附き、「己久兵衛め。」ト起き返り「ヤ、お前は兄き。」「ふウ、そんならば汝は誰ぞに頼まれて久兵衛を害ひ、一寸息を止められて。」「へヽ、今まで此邊に居るものか。夫れに懲りてたしなめ。」ト、行かんとせしが立ち止り「禍ひも三年、彼奴をかうして、否甘い。」「甘いは半日、余をも兄。」「オヽ、乘せて遣らう。此の手紙を讀んで見ろ。」と拋げ遣つて差附くる提灯の火影に透し、兇々もので讀み終り「佐四郎郎樣が油屋へ壻入が極つて實の娘の氣に入らねば、どうで今に梵天國、夫れよりは今の中にすツしりとした大仕事。」「コレ何ぼ外に聞人がないとて、餘り大きな聲をするな。今夜幸ひ佐四樣が油屋に來て御座る。此處へ汝が忍び込み、力一杯金箱を負ひ出す途端に、佐四郎樣が盜人見附けた動くなと、留める振で逃げて行く、勝手な方へ突き出すは何處ぞで一寸當身を見せると、佐四郎樣は直にだア引。其の間に我は隨德寺命に替へて盜人を捕へうと存じたれど、不覺を取つて面目ないと、跡へ廻つて己と二つ分け、まだ其の上の上分別。コレお染樣から久松が所へ遣つた此の文を漸うと取つて置いた。是れを跡へ殘して置くと、夫れ盜人は彼の久松。佐四郎樣や此の戸惣次が疑はれる氣遣ひなし。彌お染は情男に違ひないと、其の跡が又金

と縛んで來る有樣は、其の盗人を今尋ねに行く所、下地から器用貧な手前は丁度打つてつけ」「そんな事なら何日でもごんせ。」「陰膳ではない、掛金を内から撤して待つて居よう」「オヽあの鐘は慥かに四ツ、これから一緒に油屋へ」「やれ〳〵僥倖者に逢つた」ト、打連れ立ちて元來し道へ立ち返るを、久兵衛は莞爾笑つて打眺め、「彼奴を斯うして斯うやツて、ハテ宜い事を聞いたなア。」（此の道具ぶんまはす。）

正本製八編　終

正本製九編

編者　柳亭種彦

立物抄　於染久松色讀販（前編の續き）

○「たまご／＼うでたまご。」「ぶつかけ南蕎麥そばえそば。」「按摩はりの療治。」「たけやさんなん時だらうね。」「ア門ツおや。」「チヽトッチヽ／＼おきやアがれ。」「導引も療治。」太郎助は立ち留り、「これお染、道々もいふとほり、一旦うちへ歸らねば、どうも世間の義理が濟まぬ。こゝの所を聞きわけて、兄と一所に戻つてたも。」「さアよう聞きわけて居る故に、茲まで來たことは來たれど、かうして今更母さんに、妾や顔が合はされう。」トさしうつぶけば、團助すゝみより、「これはしたりお染さま、妾共の譯は主人半平、くれぐれも申した通り、なア太郎助さま。」「ハヽ、あれ程な深切を、よもやわるうは聞くまいな。」「何の／＼勿體ない、どうして惡く聞きませう。」「一旦まア油屋へ戻つたなら、其の上では吾が遁はしてやらうて。」「あゝ、若し其の後は今は無事。」「ホ、爰はもう油屋の裏手、お客でも

あるかして、あれ三味線の音がする」ト話を脇へ散らす關助、太郎助はうち合點き、「今宵は月並の家の日待、山家屋の佐四郎も夕暮から來て居る筈」「夫れおやから妾やどうも」ト逃げだすお染を突き廻し、太郎助先に立ち廻り、「はて惡い合點な、是非に夫婦にせにやならぬと言ふにこそ、何處ぞへ義理の濟まぬ事あらう。高が暫時の内の辛抱、店から這入り憎いなら、庭口から密つと、戻つて給るが母の氣休め。イヤ關助殿、爰の木戸を内から誰ぞに明けてくれと、店へ往つて言ひ次いで下され」トお染の手を探り立ち寄る庭口、障ればつる／＼開く引戸、聲を密めて差覗き「コレ關助どの、言ふには及ばぬ明けてある、ふう夜が夜中此所が何であいてあつたか、ハテ合點のゆかぬ。まア／＼夫れは後でのこと、人の見ぬ間に吾と一處に、關助殿も御座りまし」とお染が手をとり太郎助が、立ち入るあとへ拍子木を、カチ／＼打つて時廻り、遙かに聞ゆる夜半の鐘、ばつたばた／＼驅け來る久兵衛、後を密々久松が、尾行け來るとも知らずして、久兵衛傍を急度見やり、道を換へて一目散。まだ彼奴は失せ居るまい、先へ廻つて油屋の、あの裏口から、う、さうだ」と獨言して帶ひき上げ、忍び入らんと裏手の板塀、ひらりと垣木に手を掛くる、「久兵衛殿待たしやれ」ト聲かけられてふり返り、「ヤ久松さま、ゑゝ此方はの／＼、あれ程詫を申したを、まだ聞き入れさつしやれず、何で爰へ歸らしやつた」「聞えた、お染様を太郎助様が、連れて家へ戻らしやるを、今道で見掛けたから、吾は小影へ隱れ

たり、そんなら此方も其の事を、知つて矢張未練が残り、誘引ひ出して来さしつたか、直に次の出鼻のこと、あるまい事でも御座らぬが、お前はたゞそれでは濟みますまい、先刻もくれ〴〵短刀の、事を言つたをどう聞かしつた。半平様は申すに及ばず、數ならぬ此の久兵衛まで、苦勞苦患を仕ますのが、此方の目には見えませぬか。コレ性根を付けて下されこト、胸ぐら採つて引廻し、大地を敲いてはらはら涙。久松は氣の毒顔。一モシお染様が油屋へ、お戻りなされた其の事は、吾は夢々知りませず、さらさら左右いふことではない、ホア譯を聞いて下さりませ。お捨殿と連れ立つて、道までは戻つたれど後の事が氣遣はしさ、取つて返して様子を見れば、何かは知らねど氣相換へて、此方が爰へ走つて来る。扨こそと後を追うて来て見れば、大反れた主人のお家の塀を越して、忍び込むとは、よもや此方は正氣の沙汰では御座るまい。誰ぞに遺趣があつての事か、但しは慾に目が暮れてか、夫れを言はうと呼び止めたが、後手になつて其許から、意見をされたが腹が立つて、言ふではないが久兵衛殿、心を鎮めて篤りと、思案をして下されまし。一膝突つかけて心身の言葉。一えゝ、人にごそあれ此の久兵衛が、なんの慾に目がくれませう。此方の手から、廻り廻つた五十兩の其の金も、それ爰に持つて居ます。又遺趣遺恨ある奴めが居れば、旦那のお家を騒がせまと、人を廻して呼出し、何うせうと儘なれど、忍び込むには仔細のある事、案じまとまァ何處ぞへ隠れて見て御座りまし。ヤあの提灯は慥かに

戸惣次。モシ、な、斷う」ト耳に口、二人は彼處に隱れ入る。後へ孤兎々々戸惣次が、生二郎とうち連れ立ち一來ながらも話した通り、必ず手筈の違はぬやう」ト「そりや兄氣遣ひの氣の字もない、必定遣つて見せませうが、忍び込むには」ト「ナニ、夫れに如才があるものか、兄は見だけ此の戸惣次が、智慧の程を見せうか」ト塀への引戸にたち寄つて、押しつしやくりつ「こりや明かぬ、はてなァ」ト思案顏「內を出るとき人知れず、此の掛金を外して置いたが、常に出入のない戸口、誰も氣の附く筈はないに、どういふ理由で掛金を、掛けをつたか合點の往かぬ」ト思案にくるれば生二郎、くつ〳〵と吹き出し「兄は兄だけ迷ついては、お智慧の程もこれで見えた」なんの此の塀乘り越えるに、手間も暇も入るものか」ト轉がし出したる油の明樽「こゝ構はず上兄貴おまへは」「ウ、忍び込んだら夜更まで、薪部屋に隱れて居て、あの三味線の止むのを合圖に」「おつと承知」ト戸惣次を追ひ遣つて、生二郎後の明樽を足懸り、塀へ手をかけ乘らんとする。後に伺ふ久兵衞が、ものをも言はず飛び掛り、生二郎が襟髮をひつ摑んで、頭天動、うぬ苛い目に逢はせたな、どゞ何奴」ト起き上り「やァ久兵衞め」ト言ふ口へ、手拭揉ませて猿轡、早速の久兵衞、傍の荒繩ひつしごいて、くる〳〵捲き、起きんともがく生二郎を、踏み据ゑ〳〵駒寄に、かんじがらみにからみ付け、油樽より見越の松に、傳へて內を窺く。チヨンチヨン、此のへい左右へひらく。

〇「暇申して歸りけり、浪の音の、須磨の浦わけて、イヤハ、村さんめといひしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん、松風のノ丶、跡は世々に遺るらん」「やんやノ丶」「ほんに何誰も能く出來ましたさ、さア佐四郎樣、何はなしとも最う一箇」ト云ふは母のお艶が聲「否もう大きに飲み過ぎました。月の上るに間もあるまい、下戸は寒いか知らねども、簾を揚げて端近へ出かけようでは御座らぬか」ト佐四郎が答ふるを、忍び込んだる久兵衛が、聞き取つて打合點き、奥藏目懸け足音を、聞かさぬ樣に傳ひ行く。簾を捲かせ佐四郎は、母のお艶仲居の玉、善孝始め人々打連れてすゝみ出で「此のお子たちはどうでもはや、樂屋新道の仕込だけ、水際が立つて見える。」「夫れは其の筈でもあらうが、感心なはお玉が三味線、なア善孝。」「いやきつい段では御座りませぬ。是れから私が引きとつて、木場の傍へ外妾つて置いて」「オヽ、サ水入らずで御座敷を、勤め度いと云ふ善孝が願ひを」「ヤそんならば佐四郎樣、其の密談を疾くに御存じ。」ホイ、包むノ丶と思へども、ほに顯はれしかまア面目なアい。」「コレお玉さん嬉しうござります。忝い、おまへ故には善孝ともあらう者が、彼の正木稻荷樣へ素足參りを致しました。モシ、お稻荷さん、どの提灯にも寶珠の玉が、書いてあるを見ますれば、私と同じ樣に貴君も矢張玉のゑに、御苦勞なさるがおいとしい。ほんに思ひ廻せば我が身程、よに味氣ない者はない。是れに御座るおたまさんを、いろノ丶口說いても猫のあだ名と男の心、替るが習ひと

蒟蒻玉の、様にぶりしやりしくさつて、眞珠の玉や貝の玉、目薬ほども情は掛けず、是れ程思ふとしら玉汁粉、こし餡であつたかい、懐へ入れぬ貪慾者、あんまり酷い情ないこと、珊瑚珠程の血の涙、落ちて流れて玉川の、水嵩も増る如くなり」ト「モシ壽一太夫の假聲はきついもので御座いませう。」「コレお玉さん、今の口説はほんのこつたよ、それかうき／＼浮氣らしい、つゐひきであしらふとは、あんまり聞えぬ。」「アレ又さんしてはぐらかされる、こいつ盛場の縫ひほどけで、いつまでも納まらぬ善孝さんの、久しいもんだ私を、何時でも嬉しがらせて、爾しお前の外妾になる程の科もない。」「さア大失策、お玉さんの御機嫌直しに、米が炬燵に這入つて居る所から、微に炊かれるまでの見振を、一寸一つ遣りませう。」ト浮き立つ善孝。「母お咄は物案じなる顔もちにて、「眞に壽一太夫といやれば、月々の日待には、代り／＼太夫を呼んで、淨瑠璃を語らすれど、日外からのお染が病氣、人にも逢はず部屋へ引込み、明けても暮れても寝て許り。淨瑠璃が聞えると、理に詰んで悲しうなるといやるから、諸君をお頼み申して賑やかに、折角踊つて下さつても、きて見ようとも云ひやらず、はてしのないぶら／＼病」ト云ふを佐四郎打消して、「いや母親、全快な時には全快らうに、其樣に氣な／＼思はつしやるな。」「コレお玉、此の頃浪花一面に、流行歌の扇拍子、鳥渡ひいて聞かせぬか。」「はい忠きは曳きませうが、歌許りでは拍子がなうて、面白うござりませぬ。幸ひのお兩人さん、扇拍子を鳥渡爰

お二方ぞえ私らも未だ本統には。「はて覺えぬ處は鵺の間で、良い加減でもおすまし母親樣っ「何の大事があらうぞえ、妾らもだんな歌か未だ聞かぬ、面白う御ざんせう。「さア母親樣のお好みだ、此の吉原も枕鬮いたさう　東西々々獨拍子の初まり〱。」「さうしよにすゞめし候得や、海原と同じ流れ、なその入江の夕晴れに、おびするふじの薄霞、心もさゝらに浮島か、ほしのいよな除おや。此所ふに佐四郎せゝら笑ひ「そりや花菖が作つておこしたか、へ唱歌で可笑しうない、それが其な俗な所には安越元の唄がよい。どれ吾が唄はう、もう一つひきやれ。」「目へ久太郎司のつき來屋、うなを主人の娘子に、何にも知れば我こそ、滞して進上というたれば、此の樣なお顏にならんした、ほてぬいよなほらぬやえに「一母親令の唄を聞かしつたか、うなたきしゆじんの娘子にゝな、世間には能くある奴、親の甘い心から、娘の不義徒らや、知つても態と知らぬ顏、婿の男を棄てさする、これを俗に付けて馴馬鹿子馬鹿。素性も知れぬ丁稚めに、心構だてて膽落し、奥うから内に居らぬのを、其の母馬鹿が病氣やの、それ樣で詐り居りますのと、同じ樣に隠しても、疾うに承知だ知つて居る。」ト云はれてお龍は膝立て直し「他所の噂に聞いてゐれば、どうやら此方の娘が後に氣らぬ事でも有つた樣な。」「えゝ、恍けさつしやるな、久松と腐敗れ合ひ墮落して家には居ぬ。」「ふゝ若しも又お染が此の家にゐるならば。」「、連れて出やれぃレ此の手をついて謝らう。」ト云ひ放す一圓より「誰よりお樣お染おやっ」と

云ひて、兄の太郎助が、お染の手をとり立ち出づれば、窓に相違の佐四郎は、手をもぢ〳〵後退り、太郎助は打笑ひ「無い事も有る様に尾に尾を付けて噂する、夫れが世間の人の常さ。なァお染賢ない人の云ふ事を採用せて、兎やかうと云はしやんすのは。」「矢張姿が否な故で御座んせう。否なら否と男らしう断然いうたが能いわいな。」ト、ぴんとひぞられ佐四郎が、「あゝ勿體ない左右いふ理由ではなけれども、此の宵ではどうしてもお主は可笑しく悉皆つて、「此の手を突いて誤らうと拝つた、お言ばかりや通じはせまい。なぞと申し佐四郎様」「おつと讃め商口々々、最うあれは八ツの拍子木彼の時刻には」「何の時刻」と咎むるお染「いや月の棒る時刻には最う程もござるまいに。な、太郎助殿二親の代から毎月々々、六夜待をするのが家例、さァ母さや人、いつも月をお拝みなさる其二階へ供物を献へ、掃除させて置きましたニナ、夫れなら夫れへ往きませう。太郎助も一所にお出で、お主手前を付けてもらうニト打連れて這入れば後には善挙、座作師の太夫様方お前兩人は今の中、さら〳〵と茶をつてたら、兩人奴が一番所望だ。あれあの座敷にお膳がおらいのと並んである。見えばらずと食つたり〳〵。あれ此の子等が私に惚れて居るからからかひますの」「嫌よニト云ひさま兩人の囃子、袖振上げて善挙を打つ真似、奥へつッと入る。「さて差引残つてお染様。肝癪持なきやうだいといふ見さんでうんとかう、後をむいて思はせぶりな、何のこつしおざります。太鼓持も取持

も持と云ふ字に二つはない。あれ佐四郎様が何やらお前に話したいと云ふ顔色が、さつきから眉間の間に顯はれた。はて恥かしい事はない。もつと此方へ寄り給へ。ヱヽ、無理に手をとり燭臺へ、行き當つて打消す燈火。ヱヽ此奴は麁相をした。どれ火をとつて参りませう。其處にじつと御座りませ。ト、云ふは大聲お園が耳に口を差寄せ小聲になり「早く〳〵。ト奥へ追ひ遣り、かゝぐり〳〵踊の鬘、吉孝手早く打被り、衣裳の振袖ひつかけて、闇をさぐり〳〵歩み寄る。斯くとは知らぬ佐四郎は、にこ〳〵首で身を摺り寄せ「其方と吾と爰に於て、麁相の振で燈火を消した。あゝ吉孝は通りもの。まア下に居やれと振袖を、捕へてぐた〳〵しなだれ寄り「なぜ物いやらぬぞ。生娘ではあるまいし、最う久松が箸を探つて、あがり膳でも其許さへ、承知と云へば吾や食ふ氣、爰で鳥渡見れば佳たり。かぶりを振りやるか、花簪の音が微にがら〳〵する。あゝ最うどうも。ト顔と顔、差寄する其許へ何心なく、立ち出づる、お玉が差出すぼんぼり、見合はす顔、吃驚愕き立退く佐四郎、「これまア待つて」ト、取りすがる吉孝を突き飛ばし、「おきやアがれ」、、、、、、、、、(此の道具ぶんまはす。)

○「盗人見附けた出逢へ〳〵」ト、戸惣次が呼ばはる聲、家内は驚き母お龜太郎助初め其の餘の人々おく〳〵追々に走せ出づる。中にも佐四郎進み出で、「其奴おれが」ト戸惣次と入れ換りて、盗人を捕へるふりにて突き遣れど、さのみ逃げべき様子もなく、胡盧々々すれば氣を揉む戸惣次「えゝ手ぬるい〳〵其

の間に早く、夫れ捕へた。彼の當身を忘れてか、扠じれつ度い事ではある。どれ〳〵吾れが。」ト兩人して、無理に件の盜人を、目今に押込んで、佐四郎態ト齒嚙をなし「ゑゝ無念な、遠くは行くまい追駈けて」ト、驅け出すを戸惣次押止め「これ〳〵今の働きは、餘程腕に覺えのある奴、其の上に此の暗夜、生中に追ひ驅けて不覺を取るより、盜人の手掛りになる物が」、「あつたぞ〳〵爰に手紙が落ちてあつた。」母親樣これよんで御覽じたら、盜人は知れませう。今夜日待で賑やかな處へ付け込み這入つたからは、家の勝手を知つた奴。」ト云ふ間にお鉄は手紙を取上げ、燈火を近づけて「戸惣次殿へ内用佐四郎より」、「そりや違うた」ト戸惣次が吃驚して捩ぎ取る後へ立ち戻りたる以前の盜人、又飛び掛りて戸惣次が、手より手紙を取り返せば、「えゝ其の手紙の間違ひは、此方でどうか云ひ抱める。手前が此等を迷ついては、えゝまアさりとは不器用な。」ト突き飛ばせば、佐四郎も是非なく立ちより組み付いて程能き處で「タア引」ト大聲其の儘ばつたり倒るれば、盜人くつ〳〵吹き出し「當身をもせぬ先に、先走つた倒れやう。我ら兩人が逃さうと、氣を揉んでも滅多に逃げぬ、そどつこいと、抱へたる金箱下して尻打ちかけ、頰冠りとる顏見て吃驚し「ヤ、吾や久兵衞、扠こそ〳〵、此の戸惣次の、家の勝手を知つた奴と云うたは違はぬ、大恩請けた主人の家へ、忍び込むのみならず、千兩といふ金を盜まうとは、人外れたイヤわうだう者。」ト、云ふ顏久兵衞じろ〳〵打詠め「言しいわえ、大

れ金箱が改めろ。」「ヤこりや最上ころ柿が一箱。」「なんと味な盗人であらう。」「お袋様、よく解つて来ま
りまする。佐四郎と戸惣次が云ひ合はせた悪巧み、どつこい滅多に逃しはせぬ。」と、首筋つかんで両人を
引寄せ、「五郎助様を失つて、此の油屋を佐四郎が、丸取りにする注文で、思ふ壺に出かけた盗
人を拵へて、今夜八ッを合図に忍ばせ、両人が寄つて捕へるつもりで、宜い時分に当身で倒し、それ
を渡して金やら分け取り、其の後へ久松が手紙を落して、盗人に取つて落すといつが魂胆。」「なんの
等がそんな事を。」「いや知らぬとは云はさぬ。証拠は佐四郎から戸惣次が所へ遣した此の手紙、これ
しく中に書いてある。それを落して置たのを、久松が拾うやと思うて、陸観様御覧じましたは、あす
麁相な番頭殿。イヤ太郎助さま相方の泥坊は、戸惣次が弟の生二郎といふ悪漢者、両人が示し合
はする聞き取り、生二郎が忍び込む処を押へてふん縛り、盗人代りに這入つた所が、金箱と見せるに
は、これが最上ころ柿を、甘く喰らつては良いざま、此の上に陳ずれば、生二郎をそびいて来て、
水を喰らはせ云はして見せう。」「どうだ。」ト云ひ様両人が襟首、摑んで撞と投げ付ければ、狼狽へ廻つ
て起き上り、「それ知られたら百年目、奴。」ト云ひつゝよりもつかれず、左右へ分つて戸惣次佐四郎一
目散に逃げ出す。久兵衛すつくと立ちあがるを、お艶太郎助おし止め「久兵衛が働きで、両人が旧悪
あらはれたれば、もう浪速の住所は出来まいに「逃げて往つたは設けの幸ひ、私もこれで安堵した。」

「追はずとよいわ捨てゝ置け。」「成程夫れもさうなれど、餘り圖太い。」「はてもうよいわ。」ト宥むる所へ久松は、生二郎が繩引立てゝ引き來り、「久兵衛殿、此奴が繩を引切つて、迯げて行かうとするゆゑに。」トいふら前々々、此方より出で來るお染が、「久松が。」ト、寄らんとするを隔つるお常、久兵衛心得生二郎が鼻先とつて團取うたせ、久松往きやれも言葉はなく、跡で知らする其の逢瀬、打ち出したる七ツの拍子木、チヨン〳〵〳〵。（幕）

○一ト、前何田舎でも節分丈に、太神樂が來居ッたわい、通り神樂と云ふ者に、春寄萬好い者ぢや。お豆様イヤ阿母様、お前もおち〳〵急かすと、ソレ其と續々となされませ。」ト、壽平が櫃看取り出せば、「お豆は惡鬼佛頂面、此方の久作殿はあの通りの結構人、阿房のから名で呼が聞かさ、已が入れもぐれゝ焦つてさへ、トント內が纏らぬに、寛々として居らるゝ物か、無業飯か云と傳聞て、燻う書うて腹も立ちや、月迫ッての節分は、ごた〳〵して行かぬ物ぢや。マダ豆も撒き居らぬな。」ト、大口が濕ッて節季喧かぬし。」ト、小言たら〳〵年神の、燈明獻げて行燈へ移せし壽平は鬢落眥き、豆を撒かぬ由緒因縁、さらば御噺申さうか。」「何知ッて商模臭い、節分に豆を撒かぬ所が世界に二軒あるかございます。きりとては無學文盲後學の爲篤と聞け。抑法華經守護の神鬼子母神の御堂には、節分の夜に豆を撒かすと、ト僕兼て聞き及ぶ、由緒と云へば福は內とは神の御耳に障らねど、鬼は外と云

此時は、神をどうやら追ひ出す如く聞ゆる故に候なり。阿母さん聞えましたか、ソレお前の名がお呪、其の兄が打ち出しては縁起が悪いと、面倒とふ等分にして御休みおやと眞顔で饒舌るを睨み付け、山海言にへら／＼と、譯も無い事吐し居らずと、夫レ仕舞うたら膽を据いて御膳を焚いて飯炊いて、人參切ッて牛蒡剥いて、膳立して置き居らう」「イヤ世話の焼かた事では有る」ト、呟き／＼入りにけり「何だや、さうして斯うして」ト、ての字盡で言附けても、手と云うては唯一本、如何して其樣に出來るものか」ト出來上つたる注連縄をくる／＼と巻く「門口から「壽平々々」と呼ばれて吃驚し「ト、お兄めが今の影口きいて、又喚き居るかと可惜膽を一寸潰した」「己呼んだは誰か表に」「わし壽平己ぢやわいの」「久松様か能う御出した」「が何と思うて今時分」「サアたれには色々譯がある、マア親父様は御在宿にか」「イエ／＼旦那様は、庄屋殿から急用ぢやと先刻方呼びに來て」「フウ若しや此の身の、イヤ是れ壽平、此の久松が事に就いて何ぞあの父上が噂でもなされたを、汝聞きやつた事はないか」「ハイ」久松はモウ藪入に來さうな物ぢやと言ふ事は、常平素仰有つたれど、其の外の事は何にも」「ハテナア生の親より御不便な、御掛けなされて下さつた、久作様に打付けて、御目にさへ掛られぬ様に成ッたも此の身の不品行」「コレ壽平そなた機會を見合はせて、親父様に餘所ながら、會はれる様にしてたも」ト頼めばほく／＼打點頭き「其の義理や此の義理が蔓まつて、余には知

れねど此處の家も何やら紛議、お千代樣の事に付き、貴方に問ひ度い事も有れど、宵の内は眼が多くて、緩りとは話されぬ。そして又爰のお豆が親戚から、手紙を添けて御遣し居ッた毛節の糠助と云ふ惡徒、直に家へ居しかッてお豆の事を叔母御々々々と、イヤ嘗め過ぎてゆかぬ野郎、噂を言へば影のさす。アノ提灯は確かに糠助、貴方は此の間爰の角の空家に隱れてござりまし、追付間合を見合はせて、何かの御話致しませう。ア、己は臺所を手傳はねば、婆々アめが又怒き居るであらう」ト、久松は鄰の空家へ請平は暖簾押揚げて、倉皇として入りにけり。糠助は心配顏、雪踏ちやら〳〵脚疾に立歸ッてきよろ〳〵眼、「叔母御々々々、叔母御は在宿か。」ト呼立てられ、鬧がしさうにお豆は立ち出で、「仰山な何の用で。」「サア何の用所かい、爰へ一寸。」ト前へ呼出し鼻突合はせて小聲になり、「己が中國に居た時に此方の子息泥八と言ひ合はせて、大内家へ忍び込んで、盜み取ッた鬼神太夫の此の短刀、油屋へ質入したが、廻り廻ッて又泥八の手に入つたを、己に預けて爰の家へ隱して置き、泥八も跡から來て賣り拂いて金にする。」「きいなウ、己が實子のアノ泥八から手紙を添けて此方を此處へ御遣しなしてから、ふつつりと便りはなし。」「ないも道理、花形屋と云ふ女郎屋へ、壻入りして段々と舊惡が露顯、たうとう閉店れたといふ噂。」「ヤアそんならあの泥八は。」「おいの斬られて死んだに違ひは有るまい。己が急に飛脚を遣ッた其の狀の返書も來ず、コレ叔母御其樣に泣いて居ては濟まぬ。加之一

の鞘をもとへ仕舞ひし、問はれたが己が手に此の短刀のあるのが知れては、内から配符が廻り、其の村は上を下へ、沸て返す大騒ぎ、久作を庄屋から呼びに来たのも慥かに其の事、此方も知つて居る通り、此の短刀も当分の遣繰に、些と許りの金に質入して手放しては猶更気遣ひ、工面をして受けて来たら首に掛けて置きますがト渡せばお豆は手にも取らず「私ぢやとて其の様に、(?)の(?)ろうな持つて居るのは気味が悪い、マア、可愛さうなはアノ泥八「ヱ、、泥八の事かへ、お前も恐る可事へとゐ様人火が燃ツて来るのト、四辺を見廻し、(?)が(?)うた往連を、(?)助手に取上げ、ア、憶苦の此の短刀往連、中へ短刀突込んで、ウ、斯うして置いて様子を見合はさい、(?)何だの(?)だのと、一番に言出したなら、誰が見ても市(?)の、捕まつて其の中を(?)されても、ふれ(?)出来まで「(?)、(?)助出来た矢張たれは(?)の所へ置くと、誰も心は付かぬ「是れから奥で何かの相談「(?)助」「(?)」「さアおおや」ト、両個打連れ入りにけり。

○「コレお捨久松が父御の所は、ツイそこぢやと言やツたから、川端から駕籠を戻して、妾や草臥うてならぬわいなア」「サア道で雇うた駕籠なれば、ソレ其の様に眼に立つお姿で、御供と言つては妾許り、萬一あの駕籠舁が、不審にでも思はうかと、往く先は見せともなさ、夫れで途から戻しました。アレあの内が久作様か」「そんなら一寸問うて来う」ト、往かんとするお染を止め「モシ貴嬢はマア彼

内へ往て、何とて問うて御覧じます。」「ハテ知れた事、久松に逢ッてかト。」「そして又久作様が家に御座ッて、お前は何處の御人だやと問うたらば。」「油屋の染おやと云ふわいの。」「ァ、遠想な久作様は良人久兵衛殿の主人筋、夫れおやから私も折々は参りましたが、夫れは／＼堅い御人、お染様おやと聞いたなら、假令家に久松殿が歸ッて居ても、ツイ一寸逢はする事ではござりませぬ。」「夫りゃなぜいな情解の佐門郎は、自身から身を退いて、其の掛けも構ひもなし。」「其の事を打明けて仰しやッても久松殿の貴様は今まで旦那様、殊に又彼方にも、お千代と云ふ許嫁が御座りますれば急々に此方で思うてござる様には。」「ならぬと云や死ぬるぞや。」「其のやうに自儘ばかり内でも言うて、何ぞと言ふと泣いて御出で遊はすから、御供致して参りました。マア私が言ふ次第に成ッて御出でなされませ。」ト、言ふのは表内には壽平、暖簾押上げ立ち出でながら、「ハイ直に往ッて参ります。イヤ節分のお豆で年が又一ッ寄り居ッたら、猶々世話しくなつたやうな。」ト、獨言して小提灯、提げてあたふた表へ出で、件の願首と行き違ふ。お捨は眼疾く、「壽平どの。」「ヤ、お捨さん何と思ッて夜に入つて。」ト、立ち止まればお染は差寄り、「お捨あのお人は。」「ハイあれは久作様の継子と云つて、御前なら手代業でござりまする。」「そんならば久松は戻ッて居るか問うてたも。」ト、云ふ有様をだん／＼と、壽平は眺めて「是れで分つた。噂に聞いた彼娘であらう。道理こそ最前に別段な行粧で別段な事、云うて

ら、ヲ思うて呉なさりして、アレあの人が最前に別宜で行灯と言ひやつたからは、戻りやつたに違ひは無い。これ、郡さんのお娘を出なさるお捨、言中は跡へ立たれもせぬ。宿家の角の細目に明け、言ふて／＼を久松が、手で教ふれば打點頭き、こなたへ来れば、ヲヽ能う逢はしやつた／＼。ト、お染に世話やかせて、おの久松つぁんは来やしつた様でも有り、又来やしやらぬ様でもあり、節分の闇がもまで頼しも忘れて仕舞うて退けた。お捨さん、ハア内へ、ニーヤイ久作様は今宵は御留守にござりまする、庄屋殿から用が有ると言葉前から呼びに来て、まだ帰らしやらぬ。夫れで己が今迎へにト言ひ掛けて向ふを見やり、あれあれあの提灯が確かに旦那、モウ迎へに往くには及ばぬ。サア御座りましたト両人を誘導ひ内へ這入れば、程もなく立ち帰る主人の久作、腮を撫めて案じ顔、イヤ今戻ッた。ホヽ久兵衛の女房お捨能う尋ねて給ッたの。ニーハイ大夫でも御苦労に参上りましたが、何や彼やの取込でニートヤ最う年末に隙な者は世界の中にない中で、取分け商人は店が放れ憎からう。イヤ無沙汰とは決して思はぬ。夫れはさうと久兵衛が親は、已前未だ己が屋敷に勤めて居た時の、奉公人で有つたとし、此の様に零落れても絶えず便りをして呉れる。夫れは／＼深切者、それらの縁で久松をも、あの油屋へ奉公にとうから遣つて置きながらに、眞の貧乏隙無しで、己は竟ぞ油屋へ往ッた事はなけれども、何も彼も久兵衛が引請けて世話をして呉れれば、安堵して居ますわいの。ニーもう親達の御主人なりや

己が爲にも矢張主人、疎かに思ふなと常々言うて居られます。」ト、さうおやらう〳〵。コレ詩半鬱
然として居すと、茶でも汲んでおましやいの。イヤお捨其處に御座る見馴れぬ女中は。「アノ是れは
私の妹でござります。」「そんなら我身の夫れが妹たしか噂の、ハテ能い美糸な妹を、持つて汝は仕
合な。」ト、何か心にとつおいつ、機會を伺ひ門口へ、徐々と久松が、絶えて久しき父の顔、見たさに
密と窺く。久作じろりと打見やり「ヤア久松。」ト、云ふ聲に打驚いて立退くにぞ、お捨は夫れとも
心づかず「何久松と御有つたは。」「ム、己が久松と云うたのは、莊屋殿で久松が噂を種々聞いた故。」
「エ、久松は奉公を大事に勤めて御主人の氣に入つて居る様に、今に己が元服して數人をするで有ら
う、樂しんで御座れよと、皆の衆が己へ歡び。」「ハイ夫れや違ひは御座りませぬ。」「夫れ聞いて此の
久作が此の胸は一杯に、イヤ悦んだ様ではない、此の頃も市場りに人並ものして居るを、何おや知ら
ぬと不圖と、立ち止ッて見たればな、精文句の歌祭文、餘り夫れが面白さに、ヤレ一冊買うて來た。」
ト、投出すをお捨が取上げ「お染久松歌祭文、妹背の種油エ。」「ヤアまア。」「何と妙な本で有らう
其の文句を讀んで見れば、久松と云ふ丁稚とお染と云ふ家の處女が懇ろして、逃走し彷徨うて歩行く
事が歴々と記いてある。聞けば此のお染には左四郎と云ふ許婚の男がとうから有つたげな。其の男が
嫌はれた意趣返しに此の歌を作ッて、浪花は云ふに及ばず、近等邊の在所まで、讀賣に謳はせて、兩箇が

陪者をはつとさせ、町中人に知られては、商賣して居られぬと思ひ詰めて情死して、跡で云ふ[illegible]ちやと云ふ。己が子の名も久松の久松、したが今も言ふ通り、ありや實直に勤めて居れば、此の久松と云ふ者は他の者に違ひはない。さすれば掛けも構ひもない。他人の事でも此の樣な、不所存者には同心して、己や意見がして遣りたい。萬一今死に居ると、みす〳〵と彼の左四郎が謀計の壺へはまつて、先のある大事の體を、犬や烏の餌食にして、擧句に人の笑種。跡に遺ツた親の氣はどげどの樣に有らうと思ふ。コレお捨の妹御、こなたは何で最前から其の樣に泣いて御座る。したが餘所他の事でも、己が云ふ事尤もぢやと思ふ心が附いたなら、能う胸へ落着く樣に聞いて置くのが其の身の爲故、此方にそんな事は有るまい。さ、さ、無いのは知れて有るけれど、年端もゆかぬ身空では、又無い事とも定め憎い。思ふ男と添はれずば、一素の事先の見えぬ未來を宛に必ずとも、ひよんな浮名を流さつしやるな。ヤ、此方を其樣な氣にしたも原因はと云へばアノ久松、憎い奴と思ふ程可愛うなるが親の因果、我もおしつけ子を持つたら、己が今の胸の中を其の時に知り居らう。」ト、身を打慄はせ口說言。門の外には久松が堪へ兼ねてワッと一聲、お染は夫れと聞き取ッて、行かんとするを止むる久作、お捨も中を押隔て、「貴方も今御存じ有る通り、唯名が似たと云ふ許り、是れは餘所の久松殿、唯の若氣の淫事でちやつと家をば出てであらうが、此の兩箇にも年寄つた父御や母御もあるであらうに、

滅多な事はさしやんすまい。なア若し。」ト、夫れと兩個に聞かすれば久作も涙を拂ひ「ヲヽ誠に實が入ッて、どうやらお捨の妹御へ意見した樣で有つた。コレ腹立てて下さるな。」ト、わらひに紛らす其の所へ奥より出で來るお豆が高聲「コレ喜平節分しまに汝やナぜ泣く、年取酒でも買うて來居れ。」ト追ひ遣つて其處をきよろ／＼、見付けられじと久松は、元の空家へ忍び入る。お捨もおやつと涙を隱し「御袋御久しう御眼に掛りませぬ。何時も貴様御息災で。」「アイ憎まれ子世に蔓ると感冒を一ッ惑きませぬ。コレ久作殿見馴れぬ女子は誰でござんすえ。」「ナ、あれがありやお捨が姉ぢや。」ト云ふを打消し「コレ親父殿、さう云ふ此方が鈍作故か一倍氣骨が折れる。ありや油屋の處女のお染。」「ヤア、モシ妾やそんな者ではご」「云やんないなう／＼、竟ぞ逢うた事はなけれど形容貌でも知ッて居る。イヤ久作殿こなたの連子久松は、主の處女のあのお染と懇した其の上に、刀とやら脇指とやらを偸んでとうに逐電、お染には左四郎と云ふ許嫁が有る上は、密夫なり盗人なり、ア、木の空で涼むであらう。其の相手を引込ンで、私までが掛合ひに成つてはずんど迷惑な、さア往なさすば己が引出して。」ト立ち掛るを、久作は押止めて太息をつき「ア、要々の疑ひ深い。お捨の妹に違ひはなけれど、たれ程にまで思やるなら、歸して遣らう。」ト、お染の手を取り表へ立ち出で「コレ女中樣には些と用もあれば、今跡から歸さう程に、此の道を眞すぐにみぎりへ取ッて未だ若木の松の、な、松の本に待つて御

落れ。」ト言ふ内も家へ見えしと我が身を隔て、角の空家の中へ突遣り、態と向うを見遣りながら、「おれあれ聞き分けて歸ッたれば、假令お染で有らうと儘、必ず案じる事はない。」ト、道掛けて言ふ詞を、お捨も夫れと聞き取ッて、「イヤ最うひよんな嬢を連れまして阿母様には疑はれ、貴方様にも降つて湧いた御苦勞を掛けました。何や彼やの御咄は、後刻で寛りと致しませう。久作様阿母様、奥で御待ち申します。」ト、言へどお豆は背中差向ひ、物をも言はず煙草ばく／＼。折柄表へ野上半平殿物詣らせ歩行み來て、「御助案内。」「ハッ久作様は御在宿でござりますか。」ト、問はれて表を打見遣り、「コレハ／＼思掛けない半平様、マアこれへ。」「然らば御免。」「コリヤ闘助申附けた通り、心得たか。」ト家來を戻して打通り、「扨打絶えて御意得ませぬ、例ながら御健勝で。」「コレハ／＼痛み入つた御挨拶以前は貴方と傍輩なれど、只今では少々の田畑持ッて、百姓の片手間に小商ひ、斯う言ふ身分になつて居るを、其の様に仰有つては御挨拶の致しようがない。」「さ、さ、御手を御上げ遊ばせ。」ト、身を謙遜れば、「何サ／＼拙者が弟久松を、幼少より其許へ養子に遣はし置きますれば、ずんと親密しい一家の中、其の樣に卑下されては、又此方で迷惑致す。イヤ久作殿の御内方、お前もいつも御壯健で。」「ハイ變る事もござりませぬが、久作殿と連配偶つて、見ればお前の弟御、久松もマヅ私が子。夫れが逃けたの走ッたの、果ての難儀が此方へ掛らうかと、夫れは／＼能い苦勞を致します。」ト、云ふを久作

聞かせじと出もせぬ咳二ツ三ツ、「イヤ半平様、とうから難波に御逗留と承つては居りますれど、渡世業に紛けまして、ツイお訪ね申しませぬ、月迫つて御事多い中で、態々私し方へ御出でもござりますまい。何ぞ近所に御用が有つて、其の御序と云ふ様な。」「否々御宅へ態々と参つたは些と御無心が。」「アノ此の久作に何ぞ御用が。」「サア用と申すは拙者事、兎角近年多病にて勤めも碌々心に任せず、隠居の願ひと存ずれども、家を譲る子が御座らぬ、さればとて又他人に野上の家督を嗣がせんも口惜しう存ずる故、其許へ上げ置いたるアノ久松を取り戻し、直様国へ連れ帰り、名跡を立てさせたさ。」ト、半分聞いて急立つ久作、「そんならば、アノ久松を帰して呉れと仰有るのか。」「近来無理な御無心ながら。」「否そりや成りますまい。此の久作はお千代と云ふ娘を一人持つた許り、夫れおやから行末は娶はせる相談で、久松が七ツの年御親父に貰請けたは御同家中の時分の事、其の後に不図した事で御屋敷を退散、其の砌是れからは、禄に放るゝ身分故、久松を戻さうと申したら、其許がイヤ武士と武士とが契約して、養子に遣つた舎弟め、何国までも御連れなされ、養父が浪人致すなら、久松も浪人致すが道、町人になされるとも、百姓になされるとも、御心任せと仰有つた其の時に、こ、こ、此の両手を突いて御礼を申したを、よもや忘れはさつしやるまい。夫れから国を一緒に立退き、此の様な草深い所へ置くも不便なから、瓦屋町に奉公に遣はして置きました。お千代もモウ背丈は伸

ぞめ、今に宅へ呼び取つて祝言させうと此の親も、娘も待つて居る所へ、藪から棒に変へすとは、本気
の沙汰では有るまい」と腹立つ久作。半平も、膝摺り寄せて察と直り、「如何様に言はれても、久作も其
許の親子の縁は離れず御座る二ツ申す迄ない、久作が、聞へは半平言葉も無く、すぐと言うて、
只今に、内ら出来りし事情よりお千代を誘引て座に直せば「娘おれやどうして戻つた」と暫く久作、
お千代はうじ／＼、差俯向いて涙にくれ、「私や常の身分おやと思ひの外に先は機嫌悪、先方からは否
出して貰うた妾の帯なれば、勤めかせ容取れと言ふのは重々尤もなれど、身を捨して久松さんへ
何うも義理が立たぬから、其の事を酒屋へ密と云うて遣つたれば、久松さんや久兵衛殿が、色々世話
して下さんしても、リンリンとは済み兼ねて種々の事の離れ、一層此の身がないならば人に苦労は掛け
まいと、思詰めて其処を逃走、身を投げようとした所をあの喜平に止められ、其の上に段々の意見を
聞けば、死なれもせぬ義理詰で、喜平が知己の所へ隠れて居たれども、内の様子花形屋の噂も知れね
ば、半平様へ今までの荒増を文で云つて上げたれば、迎へをおこして下さんして、厚い御世話に逢ひ
ました。」「能う御礼仰有つて」「オ、言はいでは半平様有り難う御座ります。」したが娘住んで呉れ」と
お千代が手を取り引立つれば、「父上、妾や何処へ往くのぢやえ。」「知れた事花形屋へ。己は近江へ往
んだ留守で、知らぬ事とは云ひながら、己が名前で貰つた汝を、金も済さぬのめ／＼と、内へ置くは

そりや爰、金子渡すまでは否やが有らうが、親方の懐へ戻ッて居てくりやれ。」と、詞の内に半平は懐中より一礼取り出し、「疎かながら拙者が手土産、久作殿まづ御受納下され」と、差置けば手に取上げ、「コリヤ此お千代が年季証文。」「一心置なくお千代殿を嫁に差置かれて」「エヽ、重ね〴〵の此の御恩」「何の礼に及び申さう。」「イヤ先刻と申した通り貴殿と親子の縁の切れた久松めは、是より直に同道致して罷り帰ること」、立ち上るを押止め、「恩を掛けた其の過怠に、筋も無い事言ひ掛けて、久松を取りかへさうとは夫りや稀代なされ方、親子の縁の切れた謂が、「とつくり胃の腑に落着かぬ其の内は、どう有つても歸さぬとはそりや無體、最前も言はれし如く、貴殿は其の娘御、それ故に倅めは娶合はする契約で、貰請けたる久松が女房に成るべき女を、何で諸人の遊び者、遊女の勤めに賣らしつた。すりやお千代とは配偶せぬ合點、配偶せぬからは久松とは、親子の縁は切れてござると申すが拙者の存念か。」ト同じ声で膝を打ち、膝詰の論すれば久作は、詞はなくて立ち上り、おのが腰を引提へ、「己が近江へ往んだ留守、印形を盗み出し、可哀さうにお千代を騙して賣つたは此女房が仕業、サア半平様へ早ウ御詫を申してくれ。」此の一言に行詰ッて、「余や半平様へモウ顔が合はされぬ」ト、身を掻き揉き悶絶落着き、「此の家は釜の下の灰までも己が物、こなたが家へ入つてから辛勞をしもつらかし浮かくしては水も飲まぬ。此方が皆拵へた。負債の其の代りに、此方の娘を賣ッたのが、サ

（…）取っても（…）ぬは久作は、半平の前へ（…）かと申し、（…）皆の武士（…）、見事（…）て腹切（…）に（…）れし、今は（…）貴方の手に掛け、此の首取った其の後に、久松を（…）手次第、連れて御歸りなされませ。」ト、言はれて半平溜息つき「（…）是非に及ばぬ、久松には縄打って、在所へ引かねばならぬ（…）。（…）ながら今までの其許の御養育、不便を掛けて下されたら、あいつめに縄掛けるのか、御目に掛けるが笑止さ故、何事なく此の家ならば、同道して歸らうと、先刻より慮外の段、御用捨なされて下され」ト懐中より早縄を取り出せば、お千代は驚き「ヤレ久松さんは、（…）人にさへしやんすといの、父上何卒詫言して」ト、わっとばかりに泣き出せば、半平も眼をしばばたゝき、「たった一人の弟に何の縄が掛けたからう。是非に及ばぬ様子と言ふは、先年國元において主人の重寶、鬼神丸の短刀紛失、其の盗賊が、此の浪花へ持ち來って油屋へ質入したが、廻り廻りて久松が手に入りたが、夫れとも更に心付かず、其の短刀を泥八に、賣拂ひしが不思議にも、久兵衛が手に入ったれども、疾すり替へて中は偽物、儂は覺えの大内裁、扨はと彌油断なく、詮議を遂げれば短刀は、他でもない此の家に有る。證據と云ふは四五日以前、久兵衛が殺害せし泥八が、脇差に結び付けしは權助より泥八へおこせし手翰、短刀を賣拂ふ其の事に附き、急々に逢はねば成らぬと云ふ文體、其の權助と言ふ奴が此の家に居るに取留めて、詮議もせぬ弟が麁忽。」ト、詞の中にお豆

は密々氣味惡さうに立つて行く、半平は鼻打拔き「ヤイ久松先年密かに汝を呼び、一人の弟を手放して他國へ遣るは久作殿へ義理を思ひて、又一ツは紛失なしたる短刀を汝が見知つて居るこそ僥倖、心を付けて詮議をせよと命令け置きしも打忘れ、色に染みて情に絆され、言ふ樣もなき不屆奴、是れへ出よ」ト、空家へ眼を注ければ隔てる久作「出まいぞ／＼、手前が今繩掛ると、己も此處で死ンでのける。義父への義理を思はば出まい／＼」ト眼で知らせ「イヤ半平樣其の短刀が私の家にあると云ふ事は眞以て存じませぬ。今宵の內に其の詮議を久松に言ひつけて屹度させて見せませう」「ふウ若し又夫れが出ぬ時は」「一久松に私が繩掛けてお渡し申す」「ムヽ面白い」「そんならば久作殿、此の捕繩は暫時の間預け申す」ト投げ遣りて、彼の乘り物に半平は乘り移りてぞ歸りける、

「お千代は父の側へ寄り「久松さんに、お前はマア實地に繩掛けて」「何の久松に繩掛けるほどなれば、半平樣に渡すけれど、何卒して其の樣な悲しい目を、見まいと思うてコレ久松、モウ隱れて居る事はない」「爰へ來てお千代にも、久振で逢うて遣りや」ト、言ひつゝ門へ立ち出でて、空部屋覗いて吃驚し、「ヤアこりや裏の壁が拔けて、久松もお染も居ぬ」ト、我を忘れて大聲を、聞き付けて奥間よりお捨も驅け出で、お捨諸共其處か此處かと四邊を見廻し「そんなら父さん久松さんは家へ戻つて」「おいの、門まで來たは知つて居れど、戀しいの爲意見して、未だ染々と逢ひはせぬ。確かコレ此の

客電に成と云で斯る様子なやから、お逃なも」ト、言ひ遣はしてお千代が顔を打ち見遣り、、ひとえ然ち
もよのはたと」我と我が口を掴へ。お捨は呆れて飛び出でて、」南持扮から内へ入って来た丸兵衛、
以て御制せう御とせう、、、宿家の中へ駈入りつ久走り出て、「ヨ、ナ〈安に何やら書いた紙を渡し
「これ〈、久作は舎り、行燈の火影に照し、「ふむ、ころや懐中の紙を筆で奉紙へ書いたのも、何と
書置の事」ト、三十兩箱は二度吃驚「ヤ、騒ぐでない〈」ト、口には言へど久作も、おろ〈涙
揃ひ「久作様と配満れすば、隠して置きたき所、折重なり久作様の御難儀、名乗って出ては久作
様の押名を被り、又忍び隠れては兄半平様への義理立たず。一層此の身を亡き者にと、覚悟を御極め
なされた姉様下故、私も御跡を慕ひ出でまする」「モシ其の後は此の紙に」ト、お捨が受取り上げ「嘘
悲しきは母様に御嘆きを掛け、お捨も恨み候はんと夫れのみ心掛りに候」ト、讀めばお千代は覚悟定
両親「此の様に面白いに皆になぜ泣いてゐやる」サァ〈私は居る程に、取敢うて下さんせ」ト、小
松を持って立ち上れば、久作は猶うろ〈「苦勞に苦勞が重なッて、其方は氣が違うたのぢや」ト
レ氣を静めて下さんせ」ト、お捨も共に取り縋る。折柄森平が駆け来り、「短刀の言訳が最早、極助か
裏口から逃げ出した。其の處へ半平様の御家来が折重なッて搦捕り、村の出口は大騒動、其の短刀の
盗賊は、お互親子の仕業ぢやと、白状なして居りますと」ト、物語る背後の方、お捨はそッと立ち出で

て、聞く度々に吃驚びくり、南無三夫れでは身の上と駈け出すそこどッこい。」と善平が止めて有合ふ
注連繩、お夏が腰に引結ぶ。夫れとも知らず駈け出す、捕手にぐる／＼ほぐるゝ注連の、中より落つ
る短刀を、手早く久作取り上ぐる。其の間にお千代は東の方へ、飛さ／＼て走り行く。久作短刀とつ
くと見、是れこそ確かに質の節、ちつとも早くお給上臈「マァ合點でござんす」ト、短刀懷に小柄を
引除け、お千代の事も氣づかはしく跡を慕ひて。（幕）
○唄「筋をとなりにうゐわらふ、たゞわかくさはもえねども、さはへ行るゐむねさどけの、のみち
はたゐちうゐ／＼と、かぜにやなぎのみだれがみ、みだれごゝろぞうつゝなき。「わが名のちふとたの
みたる、かひもなぎさのすてをぶね、こがれしなかをふのはなし、ひとよねの目のこまつとは、根め
しいやらどうよくやら、これひきまつさんあんまりおやと、さながら人にいふごとく、手にもつふま
つにうちむかひ、しぼしなみだにくれけるが、又おきかへつてにこ／＼顏、「そんならお前得心
して、說話して下さんすか、さア嬉しやノーとこ嬉しさ「よういつのだらざには、あまがつほうこにい
ねはりこ、あとからしぶ川しぶあもん、れんぜんあしはにさくのくら、たづなかいくりかいくつて、
しつたん／＼したんこくたんたかやさん、しやみせんこきうに笙のふえ、びはことわごんかとりさみ
へ」「何おや妾に琴を彈けと云やるか、今宵は大事の趣意に就してたも／＼。夫れよりは肝腎の。」

あまてらしてみすまにたて籠もつたら、心もとけにしたとしの、おかねて日をはやうこでみはず、それ
くしさんもやほらしい、いつもかみよのとこやみならば、ながなきどりがないたとて、なんのいなそ
こぶんさうで、それはあだめくしのびねか、これはむすぶのかみかいの、あるきしやんしたるふとな
か、いもせのまへゐしまだいに、やがてそはこのたよりや、うんでだいたりだかせたり、これ見や
しやんせのんとした、あもとはおまへくるきとは、わたしにたちやないかいな、いつかさういふ
にならば、嬉しからうとあなたへはしり、此方へはしり往人や、しやうたいまなくふし流む。」
のかかるところへ向うより、いつはいきけんでかぐらじゝ、鬼ではれとうふくれなき、もんはこッの
をかぐら、しゝはけもののきがしらかぶ、すがたはかるきわらおかけ、くびにたいこをかけまくゝ、
かしこやこゝでよねかれて、よはせぼこのせきよはされて、せけんじやうこのひよみゝ、あし、内で
かゝァはおばゞゐじゝ、つけて今ごろあくびして居よ、朝からばんまでさんぱんだすき、かけてはたらく
しよたいもち、おくたびれなら御みあしを、もとおひねりのもらひため、父さしむかひのおみき酒、
これからいんでたのしもことと、うかれ／＼て來りけり。おもよはやがてはしりより、「可好い所へ太神
樂、さアまうて見せや／＼。」「イヤ待てよ。遠くから見て居れば、小松の枝を手にもつて、笑うたり
ないたりするは、はァおきちぢやの／＼、とし忘れにおもしろから」おれといつしよにおどつたを

どつたこ」浄瑠璃「かみ垣のみむろの山のさかきばは、おしげりなんししつぼりと、まァようござんすととめくれば、ましとるせいけるはたしがひ、ちよつと花ののかをかぐはしみ、には火にすみの紙風も、ちらちらゆきがしらやたび、じようをま袖にふりはらふ、あさくらがへしさくらがみ。」唄「さッサそつこでとこ」浄瑠璃「みやまのこつゞらくれ〳〵こつゞら、さぎのくびはのろりそりよ、とろとおもうてあかゞりふむなこあとのこおれらめがあるさきのこ、おらがかゝのちゑは、しもつきしはすのかッきもち、あぶりこやひばゝひばしやあぶりこ」唄「面白え〳〵こ」思からはうしろ假面だこ」浄瑠璃「やんもしろやくわうじんの、おまへみ見れば松うゑて、まつはさま〳〵おほけれど、人をまつ程よの中に、しんきなものはないわいな、せきだのおとがちやら〳〵と、してもたしかにかんぬしさん、ねすみがばりばりこめびつを、かじつてさへもかんぬしさん、おまへのたよりとむなさわぎ。「此のごろうちもかかさんが、おかめやおかめおほかめや、そなたもはやせいじんして、うちへおいてはこそ〳〵と、火のようじんがわるいによッて、はやうどこぞへかたづきよと、かんなくりではあるまいし。」「さてこれからがごきたうぢや、むじやうれいほうしんばうが、人はかんじんかなめいし、ゆるぐはをすゑ口中の、あしきかをさるごたくせん。さァはみがきがごようなら、おもとめなさいとくちびやうし、なにをいふやらたわいなさ、そのまにおちよはさふくだいこ、むねにうちかけうつゝなく、ほおもちたす

…みるにも、…これも、一目さん。南無…はしやうばいだうだ、やつてはならぬと太かぐら、くるひくるうて追うてゆく。」

口惜しうてくやしうてならぬこと、しりやうせんのこりきもあんまと、ふりのたもと二ンまのかぜ、つ、ありたびとふたりづれ、はしりつきあふ、あたいどうより、…お家様道々を申す通り、見ずや人よりのまれれも、わけ隔てられた…の銀刀、旦外貴嬢が下さつた、…それとも知らずに人手へわたし、言訳なきに此の身の覚悟、貴嬢は同存へ…つてそりや何はずな、久松さん、…一言おもひいだせばなとゝしい、さまわのよばにこうしるて、はつかしいやらうれしいやら、はれにかなごはいつしやうに、なつしといふはたゞひとり、ふたりとはだふふれるのは、みなごでないとふだなみの、じやうあるにきへあゝわいな、それとしらねばとゝさまが、あの山がや…いひなづけ、又そのうへにおまへにも、おちよさんたてうつくしい、よだよあおかたがあるときき、しあせんそはれぬあくえんと、とうからかくこしたものを、あとにのこれのなんのして、しなでかなはぬことならば、わたしをさきへてにかけてと、とりつき縋りなき叫ぶに、母其の御歎きはお道理ながら、山家屋の左四郎は、己が罪己を責め、亡命して仕舞うたれば、貴嬢の御身に曇りはない。其れに引換へ此の久松は」涙声「そのたんたうのでぬ時は、半平様へいひわけたたず、おとしよられた久作さまへ、たゞいちにちのあう〳〵きへ、つ

くさぬのみかきまん〳〵い、こゝらうかけしもみなわれのみ、此のうへのおなさけには、どうぞ死なせなくたさりませと、とゞおゐてでをふりはらふ、そりからおひ〳〵かけくる人々。」[illegible]「死ぬに及ばぬ短刀り、有所は知れてこれ爰に。」[illegible]「はつと思うてお千代さん、取逆上せなさんしたれど、跡追うて捕へたら、劍の威徳で直に本服。」[illegible]「左門郎始め戸忠次は、日頃の悪事悉皆く露顯して悪人亡び。」久兵衞「寶は戻る。」[illegible]「お御両親さん。」[illegible]「もう案じる事はない。」[illegible]「うめのゐがはやおかきのかねこう〳〵と。」久兵衞「マヅ當年は是れ限り。」

正本製 九編 終

女模樣稲妻染

女模樣稻妻染序

稻妻や、きのふは山の東に輝き、けふは西村が需めに應じ、又古劇の急作の爲、仕かたなさの間にあひし、名古屋が紋のはり替へ傘、ひと夜ながれの遊君にも、實有りける道行に、つながる縁の鹿藏は、扨も忠義な奴といふ、文字から案じた女の又平、善と惡との追分に、戀をされとや梅津が隱家、討たすに隔りし亡夫の姦計、討つて知りたる女房の貞操、謠の音頭にとりかへて、吃の討手は御存じの、反魂香の煙空にて、花街の際當草履の遺恨、皆こと古りし趣向なれば、不破の關屋の板廂、あらたに作りかへて、風情を失ふ草紙と云ふべし。

文化十三年丙子孟春

柳亭種彦識

巻中人名

五條坂の道哲遠山太夫
音川百合之助龍元
鹿藏が妹畫筆
不破宗犬が娘關屋
名古屋が娘おさん
哥門が一子梅津桂之助

○遠山の禿みどり、かすみ、
○名古屋が下部鹿藏
○不破宗犬
○名古屋貢左衛門
○梅津哥門

女模様稻妻染

柳亭種彥

むかし京都五條坂に遠山といふ名高き遊君あり。或時曲輪をぞめく惡者等、遠山が全盛をそねみ、さまざまに喧嘩をしかけ、果ては打てよ叩けと騷動に及び、さすが物なれし遠山も、彼等が無法にもて餘しける時、器量骨柄勝れたる奴此の所を通り合はせ、遠山が難儀を見兼ね、惡者等をさんざんにうち散らしければ、遠山は大きに喜び、彼の奴をあたりの揚屋にいざなひ、酒肴をまうけさまざまに馳走なし、つくづく見るに、色白く目すゞやかにて、類無き美男なりければ、ふと戀慕の心起り、近く寄りて云ひけるは、「實にぬしとは不思議の赤繩なり、お心にはそむまじけれど、今宵わらはが客となり給へ、ゆるゆる御禮申すべし」と云ひければ、彼の奴打笑ひ、「我は名古屋贊左衛門が下部鹿藏といふ者にて、一合半の粕奴、太夫狂ひは思ひもよらず、縁もあらば重ねて。」と立つを引きとめ、樣々にかき口說きけるにぞ、鹿藏も岩木ならねば、遂に遠山と假寐の夢をむすびけり。

抑遠山はふところより鬢鏡を取出し、「わらはも武士の娘なりしかど、色々のわけ有りて賤しきつと

もの身とは成りたり。見給へ此の鏡はうらに山鳥のいたありて、乃ち父のかたみなり。其の銘に名も遠山二つを鑄たり。肌身離さぬ大切の品なれど、心の實を知らせ參らす爲に預け申すなり。唯々無き身をあはれみて、必ず見捨て給はるなと、末々の事まで約束なし、寶藏が鬢のほつれ毛をかき上げなどして暫し別れをなしぬ。やゝ有りて出口まで送り出でける。時に柳の元にかき下せし間の手駕籠の内より、目ばかり頭巾に顔を隱せし黒出立の侍あらはれ出で、しと／＼歩み來り寶藏が懷中に手をさし入れ、遠山が與へたる鏡をつかんで引出す。何か樣子は知らねども、やらじと止むる寶藏を、身を開いてうんとうたせ、袂にすがる遠山を刀の鐺に拂ひ退け、何處ともなく立ち去りけり。されど遠山は元此の寶藏は忠義無二の者なる故、主人の聞えをはゞかり其の後當て曲輪に行かず、ふみにて寶藏が安否を問ひ、夢の間に三年をぞ送りける。

昔京都將軍の御時、音川百合之助龍元と聞えしは、近江半國を領し、家臣には不破宗左名古屋貫左衛門など云ふ者ありて、家ゆたかに富み榮え給ひける。

然るに、此の百合之助如何なる事にや、心あら／＼しくて女を嫌ひ、滋賀郡に住む浪人梅津嘉門が一子、桂之助といふ容色よき若衆を小姓として、常に是れを愛したまひ、山城國に居住ある前司久國の娘錦織姫と云號はありながら、呼びむかへたまふべき氣色も見えざれば、皆々心安からず思ひ、

まつ百合之助が心をやはらぐるには、側使を好になすこそよからめと相談なし、宗見が媒にて問屋五左衛門が娘お三、其の外數多の美女をそろへ、十種香歌合などを催し、百合之助をなぐさめける。

又島津畑門がはからひにて、東都在住の連中といふ名高き遊君を根引して、そばつかひとなしければ、常に見馴れぬなまめかしき風俗に、少しは百合之助が心もうつる樣に思はれけり。

さらさら此の不實の宗見と云ふ者は、奸計邪智の曲者にて、折をうかゞひ百合之助をおし込め、已が家を立てんと、よりよりと味方をあつめけり。娘閑屋も父の行ひを見習ひ、心よからぬものにて、彼の桂之助が男ぶりに迷ひ、たびたび文にて心の丈を知らせけれど、桂之助はいつもつれなき返事のみなしければ、扨は我より先に云ひかはせし女ある故なるべし、日頃より名古屋お三がそぶり心得難しと、邪推まじりに二人をうたがひ、今に思ひ知らさんと、折をうかゞひ居たりけり。

實面後さらぬく百合之助が心靜け、にしき綺麗をよび迎へたまふに極まり、すでに縮緬問條の旅籠まで來り給ひ、與太の日限定まる内、かしこに暫く逗留なし給ひければ、是れも百合之助の家來館野杉蔵と云ふ者を付け置き給ひぬ。

頃しも四月末つ方の事なりけるが、ある夜お三閑屋に向ひ「今日宇治の百姓共數多のほたるを差上げたれば、それを奥座敷のお庭に放し、たかめ給はんとの御事なり、お三殿もとく行き給へ」と云

ありければ、「はい。」と答へて立つを呼び止め、「螢のかげを見給ふに、燈火は持つて邪魔なれど、よい敷もくらがりなり、其の心にて手燭もともさず、切戸口より早く〳〵。」ト、云はれてお三はほかに下り立ち、星のあかりを便りて離座敷に立ち入り見れば、われより外に人も見えず、如何はせんとためらふ折柄、是れも關屋にあざむかれ、桂之助は唯一人急に召させ給ふと聞き、木立茂りて黒白も知らず、離座敷を其處此處と探り見れば、寢間をしつらへ枕二ツならべあり、殿のお寢間と心得て探り見るに女なり、互に驚く後より、「ヤア不義者見付けた動くな。」ト、袖に隱せしぼんぼりを差出すは關屋なり。桂之助は少しも騷がず、「心得ぬ今の言葉、急のお召しと此方の知らせ。」「わたしも矢張關屋樣のお知らせで爰へ來たものを。」「不義者とは何を證據に。」「エヽ、つべこべとかしましい、コレ唯二人さし向ひ、燈火もつけずくらがりに、枕二ツならべて有る、是れが不義であるまいか。」「燈火を付けねば殿樣が、螢を御覽あそばす故と、たつた今關屋さん、云はしやんしたを忘れてか。」「やかましい、わしや云うた覺えは無い、未練な云譯しようより、如何にも忍び合ひましたと、さつぱりとぬかしてしまへ。」と打つて變りし關屋がそぶり。扨は兩人に濡衣着せて罪に陷さんたくみぞと、うす〳〵知れても差當り、證據なければ仕方なく、拳を握り顏見合はせ、無念の涙に暮れ居たる。障子を開いて百合之助、讃左衞門御供にていう〳〵と立ち出で給ひ、「樣子は殘らずあれにて聞く、我が目をかすめ密通

なし、家風を亂す不届者、門前より阿房拂ひか、但し又首討つて捨つべきか、閨屋部屋にかなすべきか」ト宣へば、二日頃から病氣の桂之助、定めしお主のいたづら者がいろ〳〵とそゝのかし、斯う云ふ事になりましたに、大方違ひは御座りますまい。すれば桂之助が罪は輕く、大罪人はお三人。おさんをばお手討に遊ばされ、桂之助はお暇か、但し當座の閉門が相應で御座りませう。ト申し上ぐれば、うなづき給ひ、「我先の頃拾ひ置きし艶書あり、これぞ不義の證據なるべし。賛左衛門よみ上げいと、百合之助懷中より、一通の艶書を取り出し給へば、賛左衛門我が子の越度に面目無く、差俯いて居たりしが、仕方無くにじり出で、手に取上げて讀み下す、其の文に曰く、いつもつれなきお返しのみにて、今更申さんも愚かなれど、其の後は讀むに及ばぬ男の方へ送りし文、賛左衛門名宛を讀め。」「月の内なる君へ進る。ト手に取り難き古歌に習ひ、桂之助へと云ふ事なるべし。」「あれはてし身より。」ト讀めば閨屋にぱつくりかなし、女を頼らんと立ち寄るを、足蹴にはつたと百合之助、庭に蹴落し聲あらゝげ、「此れと同じく古歌にたよひ、不破の閨屋の隠し言葉、殊にはこれうたがひも無き汝が手跡、知るまいと思うて居るか、汝儕で桂之助に心をかけ、是れ此の如く度々文にてかきくどけど、承引せぬを遺恨に思ひ、罪無き二人をあざむき、不義者の悪名付け、我に成敗させんとは云ふ樣も無い人非人、物堅い桂之助を擒口説いたるいたづらは、大罪人と汝が差圖、今手にかくる覺悟なせ。」ト立ち

と…には遠山は、一間を立ち出でゝ此の体を、…付き、三左衛門諸共に御短慮なりと押止むるに、この有様。里々あれにつけき、身のあやまりに言葉なし。此の物音に何事ぞと、不破宗兼も共に来り、様子は知らねど娘の身の上、胸を痛めてひかへ居る。百合之助は気をいらちうつと…置かれぬ奴なれど、両人が言葉に頼むし、命許りは助けてくれん。其の代りに後の見せしめ、おさんぞ其の草履にて、彼を打つてうちなさい。」「おやと申して是れがまア、打たれはやはり身が手にかけうか。」「サア〳〵、…」と怒りの面色、お三は何と仕方無く、ざうり取上げ立向ひ、お言葉なれば是非も無い。うらみなさんな関屋さんと発矢と打てばざうりが砕け、髪も乱れてはら〳〵と、しのぎ兼ねたる無念の涙、これ手ぬるい〳〵、力にまかせて眉間を打て、これ激しき仰せに是非もなく、おやう〳〵発矢と打ちすうれば、眉間破れて流るゝ血汐、手にうつし見てお三が顔、さも恨めし気にきつと見る。百合之助は高笑ひ、「是れで少しは心が晴れた、下部共に云ひ付けて、関屋めは外庭へほい出せ、早夜もふけつらんに、長體の贊左衛門、勝手次第に退出なせ」と宗丈には言葉もかけず、皆々引連れ入りたまふ。扠数多の下部共出で来り、手取り足取り関屋を引出し、外庭のくらがりへ捨て置きけり。

扨も関屋は外庭に追ひ出され、呆然として居たりしが、ほつと許りに吐息をつき、如何に殿の仰せおやとて、此草履にて面を打ち、小気味よげなるおさんが振舞、たゞ恨めしきは名古屋親子、今に思

ひ飾らさんし」ト驅け出すを「まア待つた」と止むるは、関屋が乳母朽葉といふ老女なり。「邪魔しやんな。」トふり切れど、かよわき力にすがり止め「委しい様子は知らねども、お前様の難儀と聞き、爰まではおかけ着けしが、行く事かなはぬ離座敷、わしや爰で気をもんで居りました。日頃から我がまゝなお生まれ付き、人をうらむる事は無い、大方お頭の悪さ故と、推量に違ひはあるまい。草履とやらで打擲されし、爰に御座るが面目なくば、私が在所へちつとも早く。」ト勧むるを耳にもかけず、「其方が知つた事ぢや無い、につくいは名古屋め。」ト又驅け出すを立ち隔たり、心は矢竹に逸れども、老いの力に止め難く、持て餘したる後より、「娘待て。」ト父宗犬徐々と歩み寄り、「現在娘が泥草履で、打擲されるを安閑と、詠めて居たは此の宗犬、深い思案あつてのこと、コレ斯うノ〳〵。」ト囁けば、関屋も謝うなつとくなし「そんなら朽葉が意見にしたがひ、一先づ爰を立ち退きませう。」「よう御合點遊ばした、わたしが在所は近江國瀬多の橋の片ほとり、隱家にはよい静かな所、サア御座んせ。」ト甲斐甲斐しく、関屋をともなひ出でて行く。

後の方には最前より、賛左衛門が下部の鹿藏、主人の迎へに來懸りて、殘らず様子を立ち聞けり。

扨賛左衛門は御暇をたまはりて、鹿藏を召し連れ己が家路に赴きけり。

宗犬は思案を定め、又奥御殿にたち歸り、折柄出で來る遠山が、「よい所で宗犬様、殿様の急のお召

し、さすれば出で逢ひませう。なぜと云ふ御捉へて逢を見届まし、人も無ければ小聲になり、この中宮、[illegible]時う請ひては合點が行くまい。最前其方がふところより取り落したる此の鏡、裏に山鳥のかたちありて、某が秘藏のかゞみ。思ひ出すも昔なり、我一年ある女に忍び通ひ、一人の女子を儲く、是すなはち御身なり。我其の頃は浪人にて、殊に母は産後に身まかり、其方をはごくむ手當につき、野田の浦の百姓に一生不通にやりたるが、我は其の後當館にかゝへられ、此の如くの立身出世、それに引替へ其方の養家は殘らず死に絶え、五條坂の遊君に賣られ、名を遠山といひたるよし、風の便りに傳へ聞き、折もあらば受け出し親子の名乘をせんものと、此の事ひそかに梅津嘉門に頼みしかど、夫れとは無しに身受して、當館に出せしなり。此の鏡を持つからは、うたがひも無き我が娘、ようまあ居て呉れたこと」と手を取り顔を打ちまもれば、「そんならお前が本當の父さんで御座んすか、知らぬ事とて今日までは、餘所々々しい事ばかり、堪忍して下さんせ」と取り付き歎くぞことわりなる。「扨て、早速ながら折入つて頼み度き仔細あり、よもやいやとは云ふまいな」「それや父さんの仰せなやもの、何の否と申しませう。」「よし／＼是れ此の差添をあづくる間、百合之助を切害しやれ」と云はれて遠山あきれはて、返答なければ近く差寄り、「我誠は先年亡びし菊地の殘黨、この音川は仇ある家、それとも知らず某を抱へたるこそ幸ひなれと、より／＼に味方を集め、早手くばりも調ひたれば、

今宵九ツの鐘を合圖、館を取卷く兼ての手筈。そなたは何氣なく百合之助が寢間に近寄り、唯一刀にさし殺し、乾の方なる小門口より立ち退くべし。其の心得にて彼處は圍みをゆるめ置くべし」又我が家來眼下といふ者にいひつけ、今宵にしき繪姫を人知れず討つて捨てさせ、是れ百合之助がにしき繪をきらつてのはからひなりと風聞なさば、たとひ百合之助を此の所にて討ち洩らしたりとも、前司久国が怒りを引出し、同士軍を起させて、自滅をとらせん我が工み」ト言葉も未だ終らぬ所へ、姫の旅宿へつけ置かれし笹野才藏、宙を飛んでかけ來り「申し上げたき事あり」と息を切つて訴ふる「何事なり」ト百合之助立ち出で給へば「ハツ」と手を付き「今宵何者とも知れず、錦繪姫の御旅宿へ忍び込み、無慚にも切害なし、御死骸は庭の井筒の傍に捨て置きたり。其彼處にありながら、曲者は何處ともなく立ち退きたる後なれば、仕方無く候」ト仔細殘らず物語れば、人々は大きにおどろき、宗犬はしすましたりと、心の中に喜びけり。

是れより先、おきんも御暇を賜はり、屋敷をさして急ぎけるが、とある藪陰の細道に血に染みたる死骸あり。よく／＼見れば父讚左衞門なりければ、夢うつゝともわきまへず、抱き上げれど縡切れたり。あたりには鹿藏が脇差ぬき持ち、すでに腹へつき立てんとなしければ、おきんはあわて押止め、一失をうたれて言譯なく、自害なすは理ながら、急かずと樣子をまづ話し給へ」ト云はれて鹿藏顏を

上げ、面目も無い此の場の仕儀、拙者を始め親旦那にもお迎へにまかり出し、お供致して帰りかけ、御旦那の御帰りには、名古屋山三お館へ鼻紙袋を忘れて来た、お小姓衆に云ひ付けて取つて来いと帰しやる故、畏まつたと二三丁、取つて返しは返したれど、月に浮れし山鶉、よく声が耳にかゝり何とやら聞きわけず、いや／＼途中に置き申し、もしもの事でも有つてはならぬ、鼻紙袋は明日でもお聞きかけにもなるまいと立ち帰れば、是れ此の仕儀、申訳の切腹しようと又取り直す手に縋り、死ぬる命をながらへて、此のおさんが力と云ひ、仇を討つが忠義の一ツ、シテ仇は何者だやら、只今も申す通り、拙者が帰らぬ其の内に、お討たれなされし曲者の、後影さへ見ませねば、手がゝりも御座りませぬが、最前おむかへに参りがけ、何心なく立聞きしますれば、さる所で打擲されたとやらで、関屋殿のこと無い腹立ち、うらめしいは名古屋親子と口走つたが一ツの不審、ト尚ほもくはしく物語る。桂之助も館を下り、最前よりうしろに立聞き「拙者もちやうど爰へ来かゝり、委細残らず承り、御愁傷察し入る。我が父哥門と御親父は一方ならぬ懇意の中、斯く申す桂之助当お館へ召されしも、御親父のお取持ち、すりや大恩ある貴左衛門殿の仇、及ばずながら拙者奴も力となつて討たすべしと力をつくる折こそあれ、四方に聞ゆる陣鐘太鼓、桂之助借と見返り「おさん殿泣いて居る所で無い、館をとり巻く夜の遠寄せ、故こそあらめ」と云ふ所へ、梅津の下部猿平と云ふ者後走せに駈け来り、「不破宗太

謀叛を起し、館の騒動大方ならず、早御返りあるべし。」と半分聞いて大きにせき立ち、「おさん殿は親人の死骸をかた付け、急いで後よりまゐられよ。」と云ひ捨て館に引きかへす。

館にては不破宗犬小具足に身をかため、百合之助が寝所近くうかゞひ寄り、「我實は先年汝に討ち亡ぼされし菊地が殘黨にて、其の恨みをはらさんと兼て工みし甲斐有つて、館は過半味方となる、早く切腹召されよ。」と、遣戸ふすまを蹴破れど、百合之助始め遠山が行方も知れざれば、宗犬大きにいきどほり、扨は娘遠山が、百合之助が恩愛に引かれ、我が大事を打明けおとせし物と覺えたり、何處に隠れしのぶとも、尋ね出さで置くべきかと、だれ／＼に手分をなし、四方に追手をかけさせけり。

さてもおさんは、父の死骸をかりに片付け、館に急ぎ立歸れば、其の騒動大方ならず、むらがり來る奴原二三人切り倒し、ほつと一息つく折柄、「音川百合之助龍元運つきて討死する、討ち取つて手柄にせよや。」と立ち出で給へば、組の大勢槍おつ取つてつゝかゝる。「小癪な奴等。」と振りかざし、上段下段とはげしき働き、皆さん／＼に切り立てられ、後をも見ずして逃げて行く。

おさんも共に力を添へ、逃ぐる奴原追散らし、近づき見れば主君にあらずこれ桂之助なり。扨おさんに向ひ云ひけるは、「われ最前館に取つて返せし所、早君には御行方知れず、御寝間にお召物のありしを幸ひ、我が君の御名をなのり討死せんと思ひしが、今はつゞく勢も無し、我が君御安體にてましま

「事は我われ行つてよく知れり。」おさん殿には一先づこゝを立退き、父の仇を尋ね出し討つて本意をたつされよ」と云ひければ、おさんも大きに安堵なし、又も追手のかゝらぬ内と支度なす其の所へ、鹿藏喜平も尋ね來り、おさんに委しき樣子を聞きて鹿藏云ひけるは、「昔御安體のまことに、桂之助樣が御存じなれば氣遣ひなし、拙最前も申す通り、親旦那の仇といふは、たしかに彼の間居殿、乳母の在所近江國の瀬田のほとりに引込む樣子、さいはひ私の妹畫筆と申す者、大津追分に居りますれば、一先づ彼處に立退き給ひ、仇の詮議なされまし。」と、眞實見えて云ひければ、人々も尤もに思ひ、支度もそこ〳〵にとゝのへ、大津をさして急ぎけり。

扨も又鹿藏が妹畫筆といふは、年も二八の花の顔、器量發明そなひしが、生まれ付いたる吃にて、言舌更に分らねば、嫁入ざかりをいたづらに大津の宿に小家を借り、子供たらしの浮世畫ゑいつの間にやら書きおぼえ、煙の代としけるか、追分繪として名代となり、日にまし見世はにぎはひけり。

扨も鹿藏は桂之助おさんを伴ひ、妹畫筆が家に來り僞りて云ふやう、「此の御方こそ當國の國司、音川百合之助龍元公にて渡らせ給ふ、然る所此の程不破宗犬と云ふ者謀叛を起し、不意を討たれてせんかた無く、館を立退き給ひしなり、又此の女中はそれがしが御奉公せし贊左衞門樣御娘御おさん樣、お二人とも暫しの内、御隱まひ申し上ぐべし」と、有りし事ども物語れば、畫筆は大きに驚きて、思

ひがけ無き館の騒動、さぞかし御心勞で御座りませう。見ぐるしけれど私が内に、いつまでなりと御ゆるりと御逗留あそばしませ。」と心に思へど否まはらず、そばから鹿藏通辯して心一ぱいもてなしけり。おさんふつと戸外を見やり「此のとなりの宿札は鬼の面に斗と云ふ字、何者の住居ぞ。」と問ひければ、畫筆は傍の筆取上げ「近頃唐崎より引越されし、梅津哥門といふ兵術指南の浪人。」とあり合ふ紙に書くを見て、桂之助大きに驚き「殿の御用繁くして、久しく父の機嫌も聞かず、此の所へ別宅をかまへられしと聞くが始めて、どれお目に懸らん。」と立つを鹿藏目で知らせ「浪人者のあばら屋へ、殿の御出ではかる〴〵し、拙者め行きて樣子を見ん。」と鄰の門に案內すれば、哥門は庭に咲き殘る、花を眺めて居たりしが、鹿藏を近く招き「倅桂之助を殿樣と偽り、立退きし段々は壁越しによく聞いた。」と云へば鹿藏慇懃に「逐一樣子を御存じなれば申すに及ばず、心得ぬは彼の宿札、如何なる仔細と尋ぬれば、哥門ほく〳〵打うなづき「鬼と云ふ字に斗と書けば魁といふ文字、海は諸木の兄と云ひ、眞さきかけて咲き匂ふ、花の梅津が隱家と、人に知らする判じ物、我此の所に移りしは深き仔細有つての事、又一間の其の内には摩利支天を勸請なし人の來るを憚れば倅も面出しするに及ばぬ、此の上とても心をつけ、殿樣になりおほせ、まさかの時に死ねと云へ、是れより外に用は無い。」と切つて放れし挨拶なれば、鹿藏直に立歸り斯樣々々と語るにぞ、桂之助思案をなし、父上斯くておはす

心に敵をあざむく手立ならんと、少し安堵の思ひをぞなしたりける。

おさん桂之助に、屋敷にてかゝる名を立てられし中なれば、一つに住まんも人の聞えを憚り、鹿藏にかくと云ひければ、繪筆とも相談なし、此の裏にくられかゝりし空屋の有りしを借りて、是をおさんと鹿藏が住居となし、桂之助は一人繪筆が家に忍び居たり。

さておさん鹿藏に向ひ「いつぞや其方も云ひたる如く、父の仇は關屋なるべし、彼が立退きし乳母が住家も瀬田のほとりと聞きたれば、近きあたりを徘徊なす事もあらん、われは人だちしげき所へ行き、仇の實否を聞き出すべし。」とて、爰に柴屋町とて遊女屋ある所へ夜毎にいたり、心を付けてぞうかゞひける。

斯而ある夜おさんは、いつもの如く柴屋町にゆき、鹿藏一人留主して居たりけるが、此の夜は風はげしく吹きて荒れはてし家なれば、燈火度々吹き消しけるにぞ、兼て妹にあづけ置きし古葛籠の内より、昔遠山が送りたる文の反古にてこしらへたる紙帳を取り出し、風ふせぎにつりける折しも、何處ともなく遠山は走り來り、鹿藏に取付けば「ヱ、汝は〳〵何の面さげて爰へ來た、コレ末々は女夫にならうの、ヤレ女房を持つなのと、此の紙帳になる程文を遣し、眞實らしく見せかけて、何ぼ我が身の出世ぢやとて、己に一言斷り無く、よう身受をされ居つたな、其の身受をした人は己が旦那の殿樣

なれば、口惜しうても無念でもせんかた無さに無言つて居た。」と疊叩いて云ひければ、遠山は泪に暮れ、「其のおうらみはことわりなれど、妾が身受なさる時、哥門さまの仰しやるには、名古屋が下部鹿藏と、そなたは深い譯あるは、樣子あつて知つて居る、やがて其方に暇をやり、女夫にしてやらう程に、其のかはりにかう／＼せいと、計略とやら云ふ事を、色々教へさんしたが、云ふにいはれぬ譯有つて、ついそれなりに成つた故、七七四十九日が間お暇をお願ひ申し、思ひに思うて來た者を、機嫌なほして下さんせ。」と眞實見えてかきくどけば、鹿藏少し心とけ「そう聞けばどうやら尤もらしけれど、殿樣のお手かけに成つた其方を爰へ置いては」「はてそれに氣遣ひ微塵も無い、おつ付けお前のうたがひも、さらりと晴れる事がある、然しちとわけ有つて、わたしは人に逢ふ事ならず、人の見ぬ間に世帶持つ眞似をして見たら、たとひ今死んだとて迷ふ事も御座んすまい。」と鹿藏に寄りそひて、つもる事共語りけり

斯而次の夜より、おさんが留守なれば必ず來り、おさんが歸る頃は何處へか立去り、鹿藏より外の人に逢ふ事を恥ぢらひければ、怪しき事とは思ひながら、斯くと人にかたらねば、誰知る者もなかりけり。

扨も大津柴屋町といふは繁昌の色里なりしが、名古屋おさんは父の仇を尋ねんと、女だてと姿をか

へ、三本傘の紋付けて雨につぼくらの濡模樣なしたる小袖を着なし、紋所の御寺の鷺着に尺八を背に
さし、日覆笠にて顔をかくし、六法がゝりにあゆみ行く。
折節見れば雲に稻妻の派手模樣著て、同じ出立の女おさんと行き違ひ樣、さやを發矢と打當てければ、これは慮外なりと、彼の女の脇差の、鐺を摑んで引返す。彼もしれ者身をかはし、腰の尺八持つよりも早く、打つてかゝれば心得たりと、おさんも共に尺八取延べ、二打三打うち合ひしが、雙方編笠一度にぬけ顔見合はせて、「其方はおさん。」「其方は關屋。」「はてよい所で逢ひしよ。」と立別れて關屋に向ひ、「いつぞや其方を草履で打つたは、殿樣の仰せなれば、妾を怨む筈は無いに、怨めしいは名古屋親子、腹立てさんした其の樣子は、鹿藏に委しく聞いた、其の夜に父は敢無い最期、そなたが討つたに違ひは無い、さア尋常に仇と名乘りや。」と詰め寄すれば嘲笑ひ、「權左衛門が討たれしとは、今聞くが始めなり。如何に殿の仰せぢやとて、仕樣もやうもあるべきに、能く泥草履で打ち居つたな、其の恨みが云ひたさに、方々と尋ねて居た、此の尺八に吹きすさむ戀慕の敵戀の仇、虚空に閃く稻妻は、不破の關屋が染模樣、夕立雨より烈しい手の内、受けて見やれ。」と打ちかゝる。身を開いて莞爾と笑ひ、「雨に燕の濡衣を著せうと其方が工んでも其處を凌ぐが三本傘、小癪な事を。」とつゝと寄り、既に斬らうと見えければ、「それ喧嘩よ。」と所の者共、「打てよ叩け。」と犇けば、「待つた〳〵。」と奴一人、二

人が中へ割つて入る。何者ぞとよく見れば、桂之助が家來猿平なり。扨猿平云ひけるは、「何か樣子は
存じませぬが、爰は往來人立繁き中なれば此の事ばつと沙汰有つては、御身の爲も宜しからず、この
場は拙者にお預けなされ、明日の事になされませ。」と、云へば漸う納得なし、「關屋殿わたしが住居は
此の町はづれ、必ずともに明日の夜、わたしが家へ御座んして、討つうたるゝは時の運。」「此の場の
出入は此のまゝに、すましてそんならおさん殿。」「ねぐらかごうよ濡燕、ねぐら定めて待つて居る。」
「あれたる後は秋の風、かせを食らうて逃ぐるやうな、卑怯な關屋ぢや御座んせぬ。」と言葉をつがひ
いうノヽと、右と左へ分れけり。

ある日畫筆は見世あきなひの片手間に、挽臼ひいて居たる折しも、瓢簞の大きひ笛をぶらノヽ提げ
て、一人の生醉、「大津繪を買ふべい。」と、腰をかくれば會釋して、「お土産のはお安か、さゝ御覽なされま
せ。」と、種々の繪を取出し見する所へ、「南無阿彌陀佛々々々々。」と鉦打鳴らして、憎體なはつち坊主、
衣の奉加と帳面をはふり出せば、「ア、今オ、お客でイ、急がしい、明日御座れ。」と見向もせず、「これ
生佛の道樂寺ぢや、さう慳貪には云はぬものぢや。幸ひ爰に煙草盆、錢をくれねその替り、休んで行
かう。」とすつぱすれば、又も後から鳥毛の槍擔いだ奴がうろノヽ眼、「出來助爰にか、今宵旦那は此の大
津のお泊り故、お宿を取つて置けと有つて先へ走つて來たで無いか、酒計り食らつて居てのらかはか

すまさず來いよと、云ひはなつて藁へ出し、今に己やお旦那の尋ねさつしやる百合之助とやらを捜し出し、侍になる程に、其の時乾と禮はしよう、部屋が探したらよい樣に云うて置け、と取合はねば叩くとして、イヤ此奴くらひそこねたかす奴、を引いて行く、ことしがみ付く、馬鹿ひいでな、ことのき截ぼて、取押へんにも女の力、果てはぶつやら叩くやら、此の騷動に驚きてのききの男女立騒ぎ、あり笠おとして逃ぐる者あり、鼻紙捨てて行くもあり、二人の奴は次第にあわふき散らして狂ひゐく、繪筆は後ろ打見やり、瓢簞の吸筒も捨てて行つたのは、是れがほんのやり放し、この塗笠も通りの女中が今の騷ぎに逃ぐるとて、つい落したに極まつた、今に取りに戻るであろ、と一つに集めて片寄せながら、小首かたぶけ思案顔、「百合之助樣を尋ねるとは、そんならあれは敵の家來、殿樣の御身の上、はて氣遣ひや。」と獨言、云ひつゝふつと最前の、はつち坊主とかほ見合はせ、「まだ其處に御座んすか。」と、云はれて此方はそらさぬ顏、「大きにお世話になりました。」と足早にこそ歸りけれ。

早夕暮のゆききも途絶え、人音なければ桂之助、一間をそつと立ち出でて、「何やら今の騷ぎにて晝寐の夢をついさきました、もう日の暮れるに間もあるまい、見世をしまうて休まれよ。」と、云ふ顏つくづく打眺め、「えゝ、お前は。」と心のたけ、云ひ度いにも口へは出ず、節をつくればどもらぬ事を、思ひ出して臼引寄せ、

うきさま「ふつと見そめこやるせなく、およばぬとおもひながら、おもひきられねヨ——

「おぢゝのあられついおちよ、をしからぬゝわがいのちを、あしいゝたゞはきゝある

なヨ——

「成程此の頃よりの其方のそぶり、心ありとは知りながら、知らぬ體にもてなしたは世を忍ぶ身故、ふたゝび殿を、ミヤわが身さへ世に出でなば、はてどうなりとなる事。」と、云はれてさすが娘氣のうれし恥かしさしうつむき、暫し言葉もなかりけり。

扨も笹野才藏は藤の花をさしたる花筒をたづさへ、哥門が家に來り、對面して云ひけるは、「にしき繪姫の母君なぎの葉さま、清水まうでしたまふと承り、何かの樣子を探らんと、それがし道に待ち受けて、御目見得致せし所、人を遠ざけのたまふ樣、「百合之助龍元には、傾城遠山とやらが色香に迷ひ、娘錦繪はなが〳〵、京都の旅宿にさし置き、盗賊に切害されし段々不届至極と、先前司久國どのいきどほり大方ならず。然るに音川の館騷動して、此の頃大津にかくれ居るよし、直に赴き急度理非をたゞさんと宣ふゆゑ、清水まうでにかこつけ、妾まづ百合之助殿に逢ひ、此の事を委しく語り、娘が横死も遠山がねたみよりとの風聞あれば、不便ながら遠山をまづ此の通りと、松が枝にかゝれる藤の花房を、この如く切り落し、今夜八ツの鐘を合圖に、なぎの葉樣この所へ御出であられと宣ひし、祭

すべ兩遠山が首の場に立つて、久國とのいさかひありし時、ものと有る花と見、御前衆あれど、拵門殿と、樽子殿らず物語れば、二在ごとあらめ、と讀みかけし、かくり返し倫津寄門殿、更に數々氣色ぶて、いう／＼として居たりけり。

扨ば才藏が聲をふつと聞き付けて、何事ならしと忍び寄り、樣子とつくり立聞きて、度胸にさすが綺樣の御最期は、遠山が仕業なりとうたがはれるも御尤も、此の上に久國公と仇敵になる段は、いよいよ我の御大事、あの話の通では、とても遁れぬ遠山が命、今宵も我が家に遠山が來て居ることを知られ、此の樣子をくはしく語り、不便なれども首討つて、哥門樣へお渡し申し、旦に離れぬ家あが、と根性をお目にかけたい、ちつとも早く」と二足三足、「いや／＼かまやに樣子を語り、もしや未練な心が出て、得心せぬ其の時は、下郎が忠義も水の泡、それのみならず遠山も、可愛や浮世の遊ひ草、いつそ何氣なく立歸り、だまし寄つて只一討、さうだ／＼」とうなづきて、障子の隙よりさしのぞけば、西に向つて合掌なし、觀音經をくりひろげ、佛を念ずる其の風情、蟲が知らせしものならんと、思へばいとゞ不便も增し、暫し涙に暮れけるが、かくては果てじと脇差ぬき持ち、障子蹴破り拜み討に、水もたまらず遠山が、首は前にぞ落ちにける。

かかる折柄表の方に、わやう／＼發矢と太刀音刃音、何事やらんと桂之助、立出で見れば舊臣にて

顔は纔かに見えねども、花やかに出立ちたるなりとおさんは切り結び、晋門が庭に付け込んで二節何に
闇屋昨日茶屋町にて出で逢うて、今宵我が家に來れと約束して別れし所、時刻延びしは合點行かずと
間暇れまで出でぬゆへ、彼が來るを待ちたるに、一言の言葉もかけず、切つて掛りて纔へ、此の家
に逃げ込む卑怯者、何の彼と尋常に、名乘るまいかと云ふひもきかず、一打二打うち合ひしが、闇
屋は既にだうと倒れ、刀片手に取直し、我が膝へつきなしたり。これはと驚き桂之助おさんも共
に走り寄つて、誰ぞとれば是は如何に、闇屋が乳母の柏葉なり。苦しき息をほつとつき二手しほにかけ
てお育て申し、我が子も同じ闇屋様、ほんたいは由々なれど、何う云ふ事やら少さい折から、わたくしな
いお生付き、夫れ故にこそ親御の佛と、疑はるゝも尤もなれど、おさん様に草履で打たれ、腹立てら
れしを種々と、意見しても聞き入れず、所へ親御宗九殿が來給ひて、何やら密々云ふのを聞き、俄に
妾が言葉に從ひ、立退く氣になられたは、おさん様は云ふに及ばず、殿様まで打取る工みと父御云う
て聞かせしと、後にて思ひ合はせしぞや。夫れより直にお供して、妾が在所へ戻つたれは、贊左衞門
様を討ち取つたは、外の人に違ひは無い、昨夜のしだら委しく聞き、闇屋様の姿となり、此の云分を
した上で、妾は討たれて死ぬ覺悟、命を捨てるに嘘は無い。疑ひ晴らして下さりませ。手前の心に引
比べ、貴方がなれそめて、御座ると思ふ間違ひより、よし無い工みはした物の、謀叛の事は其の夜

よ、關屋樣には御存じない、此の頭家こそ宗夫殿か、迎へいれをよこされしが、關屋殿をつれての
は、御下ゑ御助けたて、又迎ひとめ聞かせなれば、迎ひ被遣へれ宗大殿は、討たれ給ひし其の時は、
阿古浦ともたし給ひ、關屋さまの命乞ひ、お頼み申すおぜんさまつたに、眞實見たる物語れば、心を不
審と桂之助、おぜんも共に涙にくれ、ばうぜんとして居たりけり。

時に障子の内に聲あつて「老女が心根いたはしく、今こそ名乘るふつゝ聞け、贊左衛門を討ち取つ
たは、某なり」と立上るは、此の家の主人哥門なり。かくと聞くより張りつめし、氣もかへつてとと
露霜に、いたむ朽葉はかつけと臥し、あへなくも息は絶え果てたり。

暫しの事にそ三に興覺め、言葉無ければ桂之助、父が前にどつかと座し「それがし今音羽が近臣と
なり、人に敬ひ用ゐらるゝも、贊左衛門殿のおゆるさなれば、すりや恩こそあれ仇はなし、其の人
を手にかけしとは、よも眞とは思はれず、樣子くはしく語られよ」と、せきたつ程なは騒がぬ哥門、
「恩ある故に人知れず、贊左衛門を手にかけたこと、聞くにおぜんも堪り得ず「忠臣と思ひの外、非
義非道の悔津哥門、父の仇敵なぞ」と、切つて懸れば事ともせず、扇であしらふ手練の哥津、妻
も聞きつけ走り來り「なゝゝゝなんぞ樣子があらう、ふゝゝまつた」と止むれば、哥門此の時懐中よ
り一巻取出し「謀叛一味の連判狀、よつく見やれ」と差出す。合點行かねどおぜんは手に取り、くり

返して見て大いにおどろき、「疑ひも無き父の手跡、殊に名古屋讃左衛門と云ふ、先に記しあり。「そんな
ら謀叛の棟梁は」「汝が父讃左衛門。」と聞くよりはつとおきんが仰天、桂之助も呆れはてて共に言葉は
無かりけり。哥門はすつと座を立つて、人や聞かんと門の戸を、丁とさして座に歸り、聲を潛めて言
ひけるは、「ある日讃左衛門かくいふ哥門をひそかに招き、われ音川の家を横領せんと、宗犬を始め家
中に過半味方となれり、汝われにしたがはば、一廉の知行をくれん、いやとあらば只一突」と、云ふよ
り早く家來の大勢、矢襖作つて追取りまき、一味方となるか命を取らうかサアく何と。」とのつ引させ
ぬ言葉つめ、さすがに密を推察なし、様々思をかけたるも、味方となさん工みごと、其の時始めて心付
き、組みする體にもてなして、漸うに其の場を免れ、何卒殿を救はんと、手立を構へし其の上にて、
讃左衛門が下りを待受け、人知れず討つて捨て、此の連判状を奪ひし故、今日まで謀叛の統領と、我
ならで知る者なし。又宗犬は讃左衛門をも出しぬいて、おのれ家を奪はんと、其の夜味方を狩集め、
討つて出でたる當の騷動、殿樣初め家中の各々皆ちりぢりに成つたれども、宗犬を討取つて御家再興
せん事は、我が方寸の中にあり、左ある時は大切の我が命、時節を待たれよおさん殿。」と理非明白に
述べければ、始めて知つたる親の惡事、何と云ふべき言葉も無く、さしうつむいて居たりしが、「親の
仇梅津哥門覺悟なせ。」と門口にかけたる宿札打落し、「鬼の面に斗るといふ字は魁といふ判じ物、花

より梅津さへ失せけて、討つたと思へば胸雲も晴れた、諺に云ふ敵の首、我の首とも面取り上げ、先立つて突へ亡の手向、折節暗く八つの鐘。

噂の何遠山が首受取らんと門の戸開き、前司久國の奥方様の菜御前自ら首桶小脇に抱へ、しづ／＼内に入り給ふ、後に續いて笹野才藏庭先にひざまづき、最前仰せの趣を、とつくと哥門に申し聞かせ、取つて返して某は、走井まで御出迎へ、見えがくれに御供せり。」と言葉の内に梅津親子おさん綸箒も末座に下り、疊に頭をすり付けて、愼み申せば梛の葉御前「哥門とやらんは其方よの、最前才藏にも云ひたる如く、憎にしき縁を切らせしは、遠山が嫉み故なりと、專らの取沙汰、早く遠山が首討つて、夫の怒りをなだめられよ。」との給ふ内に門口より、「遠山が首下郎奴が御渡し申さん。」と立ち出でたるは鹿藏なり。袖につゝみし女の首を縁先にさし置けば、不便と思ひて桂之助、おさんは更に見もやらず、合點行かずと哥門は差寄り、とつくと見るに疑ひ無き、遠山が首なりければ、心のまよひか狐狸の仕業か、はていぶかしやと心を定め、はつたと白眼めばあら不思議や、朝日に向ふ露霜と肉は忽ち消え失せて、髑髏とぞなりにける。

人々是れはと驚けば、哥門は目をしばたゝき、愛著輪廻のきづなに絡まれ、かりに姿を現はしたるか、不便の最期と涙に暮れしが、思ひ直して手を仕へ、「御心安かるべし、錦繪姫は御安泰、かくばか

りでは御合點がまゐるまじ、様子残らず御物語申すべし、方々もよく聞かれよ、扨も此の度謀叛を企てたる不破宗犬、浪々の其の昔一人の娘あり、貧苦に逼つて養育もなし難く、藁の上より親子不通の養女にやりしが、彼の娘成長して遊女となり、名を遠山と付いたる由、父宗犬が聞き出し、さすが恩愛去り難く、近々に忍び行き、對面なさんとへだて無き人に語るをよつく知り、先へ廻つて様子を見れば、ふとした事より是れなる鹿藏遠山が客となり、割符を合はす身の上話、襖をへだてゝ荒増聞きとり、出口に待ち受け、遠山が鹿藏にあたへたる鏡を奪ひ、立退きしもかく云ふ梅津掃門なり。其の後折を見合はせ、我再び揚屋に行き遠山を招いて云ひけるは、「御身名古屋の下部鹿藏と、云ひかはしたる段々は、仔細有りてよく知れり、やがて彼と添はせて與れん其のかはり、少時の間我が計略に從ひ、如何樣の事有りとも、必ず人に語るなと、口かためして受出し、我が家に忍ばせ置き、錦繪姫をも我がかたへ、密かに招き參らせて、髮の結びぶり品體、言葉遣ひに至るまで、遠山に指南させ、姫を遊女の體に作り、我隊で奪ひ置きし鏡を姫に與へ参らせて、此の鏡を宗犬が目に懸る樣になし給へ、樣子は斯樣々々なりと、遠山と宗犬に實の親子たる事を姫君に申し含め、君の御そばへ差上げ、又實の遠山には數多の腰元はしたを付け置き、にしき繪姫の御旅宿と披露なし、敵の様子を窺ひしに、かくとも知らず忍び入れて、姫と心得殺害せしは遠山なり。然あればとくに此の世を去りし遠山、今鹿

藤原殿も心得ずと、よく〳〵見れば是れこそ[illegible]、内には[illegible]て、[illegible]は、
鹿蔵に親書して、此の世に通ふなき魂の幽霊にてありけるか、不便の最期と計りに、暫し詞
涙に[illegible]けるが、[illegible]て、こそれは迷もあれ、いざ雛衣に御対面あれ」と襖の奥の[illegible]御前に、一[illegible]、
摩利支天の尊像、[illegible]一間の襖を押し開けば、立ち出で給ふ由利之助、後に続いて遠山こそ[illegible]
のぞれしにしき雛姫一[illegible]つゝしや隼様とて[illegible]給へば、なぜの[illegible]御前恩寵に翳りなく、[illegible]
[illegible]のたまふやう、一悪人をまさなく[illegible]、[illegible]言葉に[illegible]、なれぬ[illegible]の姿となり、[illegible]宗
太と[illegible]たりし時、[illegible]小門を[illegible]行けと、心を許し[illegible]へし[illegible]、殿様諸共忍び出で、折
能く[illegible]門に出で[illegible]て、今日まで愛にありけるぞや、我[illegible]はかなき死を遂ぐる、さてこそ[illegible]の遠山や、
二[illegible]を[illegible]に抱き上げ、なげき悲しみ給ひけり。桂之助近く寄り、一[illegible]方を父が守護なし[illegible]給ふ
と見るにより、是れにお忍びあらんこととくに[illegible]せり。しかし雛君とは努々存ぜず、遠山殿と
[illegible]おしらさ、只今までは不[illegible]の扱まつ平御免」と手をつかへ、おこも共に[illegible]けり。桂之助日く、
「最前[illegible]忍び込み、首打つ女の[illegible]、わが目には五輪の[illegible]と見えたるは、疑ひも無き遠山の
[illegible]にてありしよ」と云ふに[illegible]を拂ひ、一[illegible]の御身替りになつたるは、我にまさりし忠臣者、未
来は替らぬ夫婦ぞや、四十九日お暇を下されたことうたのも、餘所ながら死んだ事を知らせ[illegible]一

とかき口説けば、人々も共にしをるゝ表の方、最前來りし衣の奉加はつち坊主と思ひの外、頭巾を取ればそれ下げあたま」「斯くあらんと察せし故、とくより忍んで様子は聞いた、待つて居ろ」と驅け出す「さうはさせぬ」と鹿蔵が飛びかゝつてそつ首つかめば、才蔵目早に「こいつは確か姫君の、旅宿へ忍びし曲者」と、云はれて尙も弱身を見せず「す、宗犬に一味した眼平といふ奴様だ、禮と思つて殺したは、傾城の遠山とや、無駄骨折つたその替り、此の通り注進」と又驅け出すを立塞がり、能い所へ女房の敵と、纏綾ふり上げ發矢と討てば、刀にて切つたる如く首は前にぞ落ちたりける「敵を討つて恨みも晴れ、今ぞ成佛得脱」と何處ともなく遠山が、聲のみなして體は見えず、彼の纏綾より心火ひらめき、やがて虚空に消え失せけり。哥門重ねていひけるは「輕々しく楓の葉御前首桶たづさへ給ひし事、それがし更に合點行かず、仔細あらん」と蓋取りのくれば、中より出づる數多の黄金、楓の葉御前につことわらひ「其方がはからひにて、姫も無事にてあらん事、われらはとくに推量なし、敵を亡ぼす軍用金、娘が持参受納あれ」と、言葉にはつと平伏なし、驚き入つたる御挨拶と、皆々感心したりける

斯かる所へ猿平は走り來り「お旦那の仰せに從ひ、諸々方々と驅けめぐり、敵の様子を窺ひしに、京都の館へ參らん爲、宗犬始め一味の者共、今宵此の大津にやどり候、御油斷あるな」と申しけり。

柵の袴重ねて、うす、其の事も氣遣ひあるな、たゞ久闇ツ人數にて、はや宿宿は十重二十重に取巻いたれば、宗犬は例の魚早く、討手を差向けられよ」と大峰に畫筆かざし寄つて、其の討手をばわれもわれもと、回つて、捺せ付けられ下されませ」と心せく程ひ書かるゝ、鹿藏は笑止がり、「こ、ときりの間を回つて、捺へて居よ」も聞き入れず、落ちたる宿札拾ひ上げ、敵と云ふ字を書き添へて差出せば、哥門はへく打點頭き、「書ると云ふ字の宿札へ、敵と云ふ字を書いたるは、敵を斗ると云ふことならん、中々頓智出來た〳〵、御身が工夫を見物せんこと」と云ふに畫筆が立ちたり、最前拾ひし鳥毛の槍、雲霞吸商枓取り、兄鹿藏は槍鋪、黄平は瓢簞で鯰押ふる奴のいでたち、眼平が衣を取り鬼の面をと添へて、人のいふ事聞き入れぬ、東の樣なつれ無いお方、桂之助は東の念佛とは、仕方で教へ身振で知らせ、己はぬり笠打被り、藤のしなへを取りあぐれば、哥門二つこと打笑ひ「面白し〳〵、即座に出來た大津繪姿、われ〳〵が走せ向はば却つて敵が用心せん、練物と思はせて宗犬に近付き寄り、やす〳〵と討つてほまれを現はせ、節付く事は咤らぬものぞ、歌の唱歌で驅引しやれ」と、云ふに各々勇み立ち、繪筆は聲を張上げて、「とんごつゆの命をきみにくれべいとぞ、めこんだこんのだいなしきらひなし、あひて選ばずうてやうて〳〵、たゝきがね」「黄すかたは沙門頭は鬼、きじんをあざむく働きして、奉加帳には方々の、高名記して立歸らん」と勇み立つたる桂之助、「黄ネイ〳〵此の猿牢らさる者と

兼て手筈は知りつゝも、此の瓢箪は輕くとも、忠義は重きかなめ石、なまつにあらぬ仇のそつ首、おさへて討たんは今宵の内。」弓しゆく入り下馬先を關まへ、案内知つたる鹿藏が、いし突つかんでうんどさきがけ一番槍、はや夜も更けた八聲の鳥毛、うたにぬ先にとふり出し、姉ぬかるな。」〔唄〕アイ〳〵仇はそね松、此方は又、女刀の藤かけ。」

〔唄〕「ひきまとうては養矢と打ち、晝にぬる胡粉の粉にくだき、仇ぞ安々討ち取らん、斯くて鹿藏勇みを付け、又もや御意の替るべき、早討立てよと勸めける」一も、いしくも申されたり、身こそか弱き女繪なれ、連立つ人は手をこめし、若木の梅の極彩色、唐繪の樊噲張良を、楯についたと思召せ、お暇申す」と勇み立ち、忠義にこつては先立さし、つまに引かれぬ鹿藏が、しかりけたげな畫筆がはたらき、名も黒色も上げんずと、勇み進んで出でゝ行く。

宗犬は京都の館へまゐり、百合之助出奔と披露し、國家を奪はんと大津の宿にやどりけるが、面白きえり物の縮ありと云ひ次第に者ありければ、直に呼び入れ何心なく見物なせ折を窺ひ、人々はだまし寄つて、何の苦も無く宗犬を討ち取つたり。

百合之助は哥門を始め、おきん才藏其の外々國が手勢をしたがへ、鬨を作つて攻めかけ〳〵、暫時の間に惡人ことごとく亡びたりければ、早速本國へ立歸り、皆々それ〴〵に恩賞を與へ、にしき繪

と中むつましく、男女の子供あまたまうけ、家富み榮え給ひけり。

斯而畫筆は遠山始め、なき人々の菩提の爲に、百枚の佛像を大畫繪にゑがきければ、ある夜の夢に遠山は天人の姿となり、さも心よきかほばせにて、畫筆に向つて云へるやう「御身が追善供養によりて、わらは始めなき人々皆天上に果を受けたり、是れは天人のくみかはす酒なり」とて黄金の盃 瑠璃の壺を取り出しすゝめければ、何心無く飲むとおぼえて夢さめたり。

不思議や、是れより畫筆がどもり忽ちなほりければ、喜び云はん方なく、願ひの通り繪之助と大持になり、目出度き事のみ重なりけり。

是れ悪人は一端榮ゆるといへども遂には亡び、善人は一度おとろふると云へども、末は必ず榮ゆ。よきが上にもよき方へ赴き給ふ。めでたし／＼／＼／＼。

關屋をば朽葉が願ひにまかせて尼となしければ、是れも悪念發起して、父の菩提をともらひけり。めでたしく／＼／＼／＼。

女模様稻妻染　終

國字小說

三蟲拇戰

國字小說 三蟲拇戰

童部の遊戯たる蟲拳といふものは、いかなる事よりか起りけん、涅槃經師子吼品に、蛇と鼠と狼と、相ともに怒心を生ずることを說かれたり。金口よりいでし方便にて、遊戯の類にはあらざれど、頗るこれに似たり。又五雜俎に、蛇、蜈蚣、蜥蜴、蜘蛛のあらそふ事は見えたれど、是れは人の取りて、一器のうちに籠むるにて、自ら戰ふにあらず。且今の蟲拳といふものの如く、蛙蛇蛞蝓の三蟲鬪爭なす事、古き書には見えず。これはともあれ、彼の戯れに基きて、例の小說一編を著はす、破窗を補ふ書に似たれど、善を見てまなび、惡を見て愼まば、善人も師、不善人も亦師ならん歟。

文化十三年丙子春三月稿成　東都臺下　柳亭種彥誌

文政二年己卯春正月販板

國字小說

三蟲拇戰 甲之卷

柳亭種彥

往昔永久の頃、丹波國船井郡熊崎といふ處に、夏衣の桃作とて彫物の名人ありけり。舊は臼ほりの工人なりけるが、天然細工に妙を得て、或は印籠藥籠の根附、又は牀机上の置物なんどを作り出し、何にまれ夏衣と銘を彫りたり。これは臼の餘材にて彫りたりといふ心にて、臼木に薄きを通はせて、しか記せしが遂に己が名となりて、華奢風流を好む足利武士競うて是れを求めければ、斯かる偏鄙に住ひぬれど、其の名一時に高くぞ聞えける。或時桃作は園部川の邊に所用ありて赴き、瓜生野を過ぐる時しも、叢さや／＼と戰ぎ一つの小蛇蛙を目掛け走り出でしが、傍の蛞蝓蠢蠕くと見えければ、蛇はこれに怖れて進みもやらず。三つの蟲暫時が程睨み合うて居たり。是れ世にいふ三蟲の戰ひなるべし。あな珍らしと眺め居たるが、思はず桃作が手に持てる火繩の火枯草に移り、ハッと吹き來る風につれ、次第に火は盛んとなり、彼の三つの蟲も此の火の裏に燒け死にけり。時に不思議や三つの陰火空中に閃き、或は上り或は集まり、宛然心ありて戰ふが如く飛び去りければ、桃作猶其の跡に隨ひ

行くに、己が住居の軒の邊に消え失せけり。いと怪しき事とは思ひながら、女房早苗にも此の事は深くつゝみて語らず。さて或時、彼の三つの蟲を見たる儘に、心を留めて彫みけるに、常に携りて生けるが如くなりしかば、求むるもの有りと雖もこれを讓り與へず、常に傍に置きて愛で居たり。斯くて或夜女房早苗、一つの小蛇口の裏へ入ると夢みて懷妊なし、次の年彼の蟲の燒け死にたる、其の月其の日に玉の如くの男子を產み出せり。これ全く彼の蟲の執念、妻の胎に宿りしならんと、桃作は心に慚れ、生まれ出づると其の儘死したりと女房には僞り、潛て彫り置きたる蛇を神符の袋に入れ、これを添へて嬰兒をば、只有る處に棄てたりけり。又程無く蛙を夢みて、再び早苗懷胎なし、次の年月日は更なり時刻も違はず、這度は女子をぞ產みたりける。桃作愈恐れ、これも同じく彼の刻み置きし蛙を添へて、近き邊に棄てたりしが、又もや早苗は蛞蝓を飲むと夢みて、次の年其の月其の日の其の刻に男子誕生したりけり。桃作今は包み難く、ありし事ども物語りければ、早苗は先に夫桃作が、二人の子を死したりと、僞り棄てたる事どもうち恨み、又彼の蟲の執念深きを怖れ、遂に病の牀に臥し、程なく早苗は死りけり。桃作愈たよりを失ひ、彼の嬰子にも去る年作り置きし、蛞蝓の置物を神符に添へて、黑瀨の長者と名に高き人の門へ棄てたりしが、心づからとは言ひながら、三年に三人の子を失ひ、妻をさへ先立てければ、浮世の望み絶え果てて、墨の衣と姿を替へ、剃髮をこそなしたりけ

り。爰に空華禪師とて、道德高き聖人ありけり。此の頃は同じ國の何鹿郡に閑居したる、天狗棚の西淨寺に、錫を止め給ひければ、桃作急ぎ彼處へ參り、御弟子となして給はれと只管に願ひつゝ、ありし事ども申すにぞ、禪師暫く定に入り、稍あつて宣ふやう「善き哉桃作、三子を設けて三子を棄てしは無慙なるに似たれども、今より汝道心堅固の身とならば、三蟲の怨念も却つて散ずる時あらん。思ふに蝦蟇蛙の二つは、元來奸惡の蟲にあらねば、彼の念の宿りし二人は、品行も正しくして、行末富貴の身となるべし。悲しい哉や三毒の一つに譬へし蛇の怨念宿りし一子は、大惡無道遂には其の身を亡ぼしなん。今より十有九年を經て、因果の道理を眼前に見すべきなり」と宣ひて、桃作法師を伴ひ給ひ、諸國修業に出で給ひぬ。是れまでは此の草紙の發端にて、次は十六年經て後の物語なり。前に說きたる條より十六年を早くも經て、攝津國川邊郡伊丹の野田といふ處に、琴岩左衞門俊景とて、權威猛き武士ありけり。其が扈從の侍に、花樹曾丹次、菖蒲太郎と呼びなし、兩人の若者あり、豫て兄弟の約をなし、いと睦ましき仲なりければ、徒然たる折節は、打連れ立ちて神崎の遊郭に至り、曾丹次は楓太夫といふ遊君に深く契りけるが、太郎はそれと定めたる相方の遊女もなく、かれ尺八の妙を極めければ、折にふれ楓が搔鳴らす爪琴に吹き合はせ、曾丹次諸共快く酒うち飲み、夜すがら興じ戯れけり。斯くて曾丹次は、日となく夜となく、楓が許に通ふ程に、曾丹次が兄丹之進といふ者、

其の事を深く嘆き、様々意見を加へける。又彼の菖蒲太郎は、容貌の清らかなるに引替へ、心正しからぬ者なりけるが、何時しか楓に心を懸け、曾丹次が目を忍び、言葉を盡して掻口說きけるにぞ、楓は方見く思ひながら、斯くと曾丹次に告ぐる時は、善からぬ事もや引出さんと、何時も座興に取り成しつゝ、當らず觸らぬ應答のみなしければ、太郎はなほ氣を苛ち、或夜曾丹次が醉ひ臥したるを幸ひ、楓を捕へて様々と戯れけるにぞ、楓も今は忍び兼ね、目には涙を受持ちながら、聲震はして言ひけるは「色を商ひ情を賣る、果敢なき身には取分けて、義理と意氣地といふ事あり。夫と思ひし其の人と親しき人に靡かんや、其處退き給へ。」と往かんとす。太郎は捕へし裳を放さず「意氣地を立つるも遊女の常、とそれ知らぬにはあらねども、思ひ切られぬ煩惱の、犬とも猫とも云はば言へ。御身を落籍し、快く添ひ遂げんと思ひながら、身の代金二百兩、其の半ばは調へて此處に持てり、身受濟みなば通常の婦人、意氣地を立てて何かせん、曾丹次と緣を絶ち我が心に從ふや、左なくば御身と曾丹次を唯一刀に切つて棄て、我も其の場で生害せん、如何に／＼。」と附き纏ふ。楓は途方にくれながら、身を逃れんとなす折しも、誰とは知らず打つたる礫に、燈火ハッタと消えければ、闇に紛れて柴垣の陰に楓が隱るゝを、太郎は遂に見失ひ、奥の方へや逃げたりけんと、廊下を傳ひ入りにけり。今礫を打ちたるは、駕籠舁の一八とて、即ち楓が兄なりけり。思はず此處へ來かゝりしが、妹が難儀の體な

見て、燈火を打消しつ、共に忍びて居たりしが、人音無ければ立ち出でて、「妹々。」と呼びければ、楓は喜び走り寄り、「定めて樣子は聞き給はん、二百兩の金調へ、妾を早く身受して、言ひ替したる曾丹次樣に、添はせて給はれ兄上。」と涙ながらに言ひければ、一八は吐息をつき、「其の金調ふ程ならば、義理ある和女を苦海に沈め、今まで打捨て置くべきか、賤しき此の身を恥ぢらひて、御目には掛らねど、曾丹次樣と和女とは、一方ならぬ仲と聞く。譬へば今のが眞實にて、外へ身受が濟めばとて、悲しき事なし給ひそ、斯く言ふ兄が命に換へ、曾丹次樣と夫婦になし、喜ぶ顏を頓て見ん、些細な事を苦にやみて、癪を起し給ふな。」と言ひ慰めて別れたり。扨一八は郭を離れ、善法寺の邊なる只在る處に憩ひて、「駕籠やらん〳〵。」とぞ呼び居たる、折柄三十歳餘の武士、惱める體にて立ち留り、「神崎の遊郭まで道程なき樣には聞きたれど、持病の癪にて歩み難し、賃錢は先方にて取らすべし、駕籠早遣れ。」と乘り移れば、一八心得て相方を打招き、駕籠舁き上げて三丁許り、遊郭の方へ行きたりしが、乘りたる武士は苦しげに、屢吐息をつきけるにぞ、堤の上に駕籠舁き下し、何思ひけん一八は相方の男が襟頭取るぞと見えしが、息杖にて急所を一當てうんと滯らせ、深田の中へ蹴落したり。駕籠の裏なる件の武士は、支へに苦しみ夫れとも知らず、一八は心に喜び病氣を尋ぬる體に持做し、刀を竊かに奪ひ取り、簾を越してぞ突いたりける。思ひ懸けなき事なれば、急所を刺されてアッと叫び、駕

[illegible]よりせうと味方落ち、「何意趣あつての騙し打、様子を語れ」と差添に、手は掛けながら重傷に弱り續く處を又切りつけ、「意趣も遺恨もあらざれど、義理ある人の其の爲に無くてならざる金の才覺、兎も角心を痛めし折柄、御身を乘せたる駕籠の重量、多くの金を持ち給ふと心附くより起りし惡念、道ならぬ事ながら、此の金與へ給へよ」と言ひつゝ手負の懷中より、金の包を引出せば、其の手に縋り躙り寄り、「此の金惜しとは思はねど、病氣に苦しむ故にこそ、汝等風情に打たるゝと、思へば無念口惜し」と言ふ聲諸共打伏しに、倒れて息も絶え／＼なり。月の光に一八は、落ちたる扇と矢立を取上げ、さら／＼と書き下し、耳の邊へ口差寄せ、「貧窮には暮せしかど、我も以前は郷武士、何某と言ふ者なり、此の金用に立てて後、御身の親戚に屆く、打たれて恨みを晴らすべし。我が姓名は此の扇に、委しく認め置きたり」と手負にしつかと握らせて、人音するに打驚き、金取り收めて逃げ去りけり。殺害せられたるは是れ何者ぞ、曾丹次が兄丹之進と言ふ者なり。曾丹次は斯くとも知らず、忙しげに去り來り、手負に躓き透して見て、「こは兄上か」とて勞り起し、餘りの事に涙も出でず、茫然として居たりけり。丹之進目を開き、「兄弟の縁盡きず、臨終の對面嬉しし、汝我が意見を用ゐず、日夜を別かぬ遊里通ひも、楓とやらん遊君に、執心故と聞いた故、寧ろ彼女を身受して、夫婦となさば自ら、遊郭通ひも止みなんと、二百兩の金を調へ、彼處に至る道すがら、持病の癪に苦しみて、辻駕籠

を倩ひしが、斯様々々の事ありて、其の金も奪はれたり。これぞ仇敵の姓名なり」と件の扇を與へければ、曾丹次不覺の涙にくれ「我故多くの苦を掛け申し、それ故に此の御災難、我が手を下して兄上を、害したりとも言ふべきか、言ふ如く楓に迷ひ、相手は誰と言はねども、落籍する客ありと、今宵彼女が物語、聞くと其の儘立ち出でしは、此の古光の差添を、賣代なして金を調へて、彼女を身受なさんず心、女に迷ひ重代の、劒を賣らんとなしたるは、天魔の魅りしと言ふことを、漸く爰に發明せり。神に契ひて楓が事、斷然と思ひ絶え、仇敵を討ち取り申すべし。過ぎつる罪は幾重にも免させ給へ」と言ひつゝも、件の扇を打開き「二人を害して金を奪ふ者は、丹波の郷士笹形井吾藏と言ふものなり」と高らかに讀みければ、丹之進苦しげに「姓名を殘せしは仇敵ながらも殊勝な振舞、譬へば邂逅ふところも、篤と仔細を正して討て、或は主人親の爲、義理にせまりし事ならば、用捨なすりも武士の情」と言ふが此の世の名殘にて、果敢なく息は絶えにけり。曾丹次は泣く〳〵も兄の死骸を取隱し、今更館へ立歸り、人に顔を合はさんも面目なくや思ひけん、行方も知らず旅立ちけり。駕籠舁の一八が井吾藏と言ひし時は、丹波國にて貧窮なる、郷武士の子なりしが、父は早くも世を去りて、一人の老母大病に臨みし時、人參代に差塞り、妹楓を遊女に賣り、身の代にて藥を調へ、一旦病氣は救ひしが、老後の大病治し難く、今を限りと見えける時、一八を近く呼び「汝も豫て知る通り、妹楓は拾ひ

手にて義理ある者を遊郭へ遣りし、これのみ心懸りなり。」と哭々も言ひ置きて其の夜遂に死りけり。母の遺言重ければ、何卒彼女を身受して、善き人に添はせんと、思ふに甲斐なく益々落魄れ、住所なく棄て置きしが、菖蒲太郎が邪なる彼女への戀慕を見るにつけ、若しや身受をせられなば、思ひ詰めて死にもやせんと、善からぬ事とは知りつゝも、人を殺して金を奪ひ、楓が主人に身の代の金を償ひ漸く妹を身受して、曾丹次が許へ送らんと、遊郭をこそは立ち出でけり。素より菖蒲太郎は大膽不敵の曲者なれば、或夜主人の金藏に忍び込み、許多の金を盗み出し、見咎めたる番人を、唯一刀に切つて棄て、左らば此の金にて楓を身受なさんと喜び、直に遊郭へ至りしが、先刻楓が兄一八といふ者、彼女が身の代を償ひ、楓を誘ひ行きしと聞き、「扨は曾丹次金を調へ、世の聞えを憚り、彼女が兄を語らひしか、左すれば手延びになり難し。」と跡を慕ひて走せ出し、難無く楓に追附いたり。尋常にては渡すまじと、心に點頭き物をも言はず、楓を引立て往かんとす。一八は立ち隔たり、「今までこそ遊女なれ、身の代を償へば、某が妹の楓、淫逸があらば許さぬ。」と、言葉放つて言ひけるにぞ、菖蒲太郎益々怒り、「人の花となさんより、太刀風にこそ散らさめ。」と刀抜き持ち切つて掛る。一八も心得て、さま〲支へて止むれど、太郎が手練に及ぶべき、既に危き折こそあれ、數多の組子馳せ來り、「如何に太郎、汝が討つて棄てたる番人、未だ息あつて盗賊は菖蒲太郎と訴へたり。因つて主君の仰せを受

け、我々討手に向うたり。上と金棒振上げ打つてかゝる。太郎は獅子の荒れたる如く、秘術を盡して働けども、多勢に如何で及ぶべき、遂に搦め取られければ、一八は其の隙に、妹を誘ひ逃げ去りけり。

近江國滋賀郡稗ヶ辻と言ふ處に、唐琴宅太夫と言ふ郷士あり。莊園許多持ち傳へ、福裕に暮しけるが妻は先達死り、岩越、柏葉とて二人の娘を有てり。此の頃又丹波國にも、黒瀬と言ひて名高き郷士ありけるが、此家には男子三人ありて、兄を無一郎と言ひ、二男を里二郎、三男を延之助と名付け、唐琴にも優りて家有福に住みなしける。元來此の兩家の先祖は兄弟にてありしかば、國郡は隔つると雖も、折節は書簡を通はせ、互の無事を尋ねけるが、唐琴の家には女子のみありて男子なかりけるに由り、黒瀬の二男里二郎を養子として、姉岩越に配偶はせ、唐琴の家を襲がすべしと、豫て言ひかはし置きけるが、今年はや岩越十八歳になりければ、早く里二郎を迎へとり、宅太夫は隱居して、世を安く送るべしと、老いの心を苛ちつゝ、旅の支度を調へ、自身直接に丹波へ立越え、壻里二郎を連れ歸らんと、家をば永年召使ひし家來に委任せ、娘二人を殘し置き、丹波へこそは旅立ちけれ。さる程に菖蒲太郎は、一旦主人俊景が家臣に搦め捕られしかど、其の夜縛めの繩をひき切り、近江國に逃げ來り、杜氏が崎と言ふ處に、漁夫となりて暮せしが、又此近邊の無賴漢、餓鬼七、修羅助なんど言ふ者を語らひ、樣々の惡事を巧み、兎に角善からぬ事のみしけるとぞ。頃しも水無月初旬にて、螢谷の

螢見んと、此の近邊は夕暮より、いと賑しかりければ、菖蒲太郎は漁業の歸り途、彼方此方と浮れ歩きけるが、優に富める家の娘と見え、歳のころ十七八ばかりなるが、侍女下婢數多引連れ、湖水の邊に牀机を据ゑ、其の上に小竹筒等取散らし、遊び戯れ居たりけり。太郎不圖彼の娘を見るに、眼唇は比良の雪より清く、顔は石山の月より香ひ優りて、比類稀なる美人なりければ、忽ち心恍惚となり、暫時立留りてありけるが、娘は更に心も附かず、懐中より短冊を取出し、螢の光を明りとして、一首の和歌を書付けけるにぞ、太郎はこれを見んと思ひ、過ちて傍なる茶辨當を蹈み反しければ、僕夫いに憤り、「慮外な奴め」と立ちかゝる、太郎も己が過ちに、如何とも仕方なく、「免させ給へ。」と三丁許り、足に任せて逃けたりしが、暇もあらせず二人の僕、眞一文字に追掛け來り、太郎が髻を引摑み、散々打擲なしけれど、太郎は更に抵抗せず、言葉を盡して詫びつゝも、金子一兩取出し、彼の僕に與へければ、忽ち顔を和げて、「今宵は先づ免すなり、重ねて吃度愼め。」と、言ひ捨てて往かんとす。僕が袖を太郎は引留め、一葉重ねて御館へ参り、ゆる／＼御詫申したし、如何なる人の御息女か、教へ給へ。」と問ひければ、彼の僕強氣に、是れは音にも聞きつらん、主人は唐琴某とて、鄕士ながらも由緒ある家柄、今宵御供なしたるは、姉君の岩越どの。妹君の柏葉どのは障る事のあるやらん、此處には來給はず、あれなる姬の婿君は、丹波國なる黑瀬の二男、里二郎殿と定まり、主人は是れが迎

へに赴き、此の程家に居給はず」と、金を得たるが嬉しさに、實際の儘にぞ語りける。太郎愈喜びて、「能くも教へて給はりし、猶も問ひ度き事こそあれ、素より一家とあるなれば、岩越殿と聟君は、相知り給ひし仲なるか、これをも聞かせ給はれ」と又一兩を取出し、渡せば僕莞爾として、「いや／＼近江と丹波路と、國を隔てゝ住み給へば、互に名を聞くばかりにて、遇ひ給ひたる事はなし、年は十九と申せども、若しも醜男子なら、岩越樣と釣合ふまじと、侍女輩が平常に、それのみ苦に病み候」と、貨財に迷ふは僕の習慣、問はざる事まで細々と、語る僕が脇差を、拔く手も見せず兩人を、右と左へ切り倒し、與へし金を奪ひ返し、死骸は湖水へハッタと蹴落し、莞爾と笑つて立つたりけり。

國字小說　三蟲拇戰甲之卷　終

國字小說 三蟲拇戰 乙之卷

柳亭種彦

扨も唐琴宅太夫は、聟里二郎を誘ひて、丹波を發足なしける由、近江の住家へ告け越しければ、婚禮の用意にて、家内はさゞめき賑へり。斯かる折柄髮も亂れ、衣裳も破れし一人の若者、肩先に薄傷を負ひ、心急きたる有様にて、取次の告ぐるも待たず、切戸口より馳せ來れば、岩越、柏葉驚きて、奥へ入らんとなしけるを、彼の若者聲を掛け、「それなるは此の家の息女、岩越殿にて坐すべし。某は御身の聟里二郎に候也、物語るべき事あり。」と言ひつゝ、縁に尻打掛くれば、不審しながら姉妹は、様子あらんと躊躇ひたり。里二郎胸撫で落し、「扨も某宅太夫殿に隨ひ、山城國大原より、笹峯越に差しかゝる、折柄松の繁みより、山賊大勢羣り出で、無二無三に斬つて懸る。思ひ懸けなき事なれば、舅殿を始めとして、家來も殘らず討たれたり。」と、聞くに二人は狂氣の如く、「何父上は御最期とや、こは何とせん悲しや。」と、前後不覺に打歎けば、里二郎も涙を拂ひ、「其の歎きは道理ながら、様子を篤と聞き給へ。命限りと某も、様々防ぎ戰ひしが、相手は多勢の其の上に、土地の案内知つたれば、遂

には我も輕傷を負ひ、少し其の場を引退き、中にも賊首と覺しきが、舅を討つたる奴なれば、かれを漸く誘き寄せ、マツ此の如く討ち取つたり。」と袖引斷りて押包みし、一つの首を取出し、近邊の島臺引寄せて、其の上に差置けども、二人は更に見もやらず、泣き崩れて居たりけり。里二郎氣を苛ち、「今更歎き給ふとも死したる人の蘇生るにあらず、我も果敢なく舅を討たれ、生害せんと思ひしが、左あるときには舅の最期、誰か來つて御身に告げんと、思ひ止り恥を棄て、逃げ來りしは此の首に、若し見覺えもあるならば、それを手筋に討ち洩らせし、曲者を尋ね出し、再度恨みを晴らさんため、兼て舅に意恨ある、惡漢ありと言ふ事は、傳へ聞き給はずや、歎きを止め思案あれ。」と言葉を盡して諫めけり。唐琴の家來等、此の事を洩れ聞きて大いに驚き、姉妹の娘をば、奥の間へ移し入れ、急ぎ醫者を招きて、里二郎が負傷を治療させて、彼の持ち來りし首を見るに、更に見知れる者もなく、殊に平常慈悲深き宅太夫なりければ、意趣遺恨を受くべきとも思はれず、畢竟山賊の仕業ならんと、評議是れに一決して、此の由丹波へも告げ知らせ、又人を馳せて宅太夫始め、家來の死骸を取寄せ、菩提所西淨寺へ葬りけり。扨て程なく里二郎が負傷も癒え、宅太夫が百ヶ日も過ぎけるにぞ、契約の如く姉岩越は里二郎と婚姻を取結び、以前に替らず唐琴の家有福にぞ治まりける。次の年彌生中頃、岩越は夫里二郎と打連れ立ち、宅太夫を葬りたる、堅田の西淨寺に詣でけるが、其の日は殊に麗かなり

されば、甲二郎はそれより浮御堂へ赴き、岩越は道に疲れたりとて、彼處へは往かずきぬ川の船橋にて、待合はせんとて別れぬ。扨きぬ川の船橋と言ふは、唯一艘の小船に大きなる綱を附け、それを手繰りて渡れるにて、いと危き處なれど、是れ堅田より唐琴の住家稗ヶ辻への捷徑なり。はや薄暮を告ぐる頃、岩越彼處へ至りしが、十七ばかりの容貌美き若衆、僕一人召連れて、彼の船橋へ差掛るを、熟と見て聲をかけ、「率爾なる事ながら、稗ヶ辻の唐琴を尋ぬる御方に候はずや、聞かま欲し」と言ひければ、彼の若衆不審げに、「御何にも我は黒瀬の三男、延之助と言ふ者にて、稗ヶ辻へ參るもの、何とて斯くは宣ふ」と問はれて衣紋掻繕ひ、「岩越とは妾が事、兼て知りたる黒瀬の定紋、附け給ひたる其の上に、夫の顔と生寫し、斯くも似給ふものなるか、それは兎もあれ何として、此處へは來り給ひし」と、言ふを聞いて延之助、「扨は岩越どのなるか、歎きて歸らぬことながら、父君には不慮なる御最期、今更申さん言葉もなし、疾くより御館へ罷り越し、何れもの御目に掛り、兄の無事をも尋ねんと、心に絶えねど遙かの道、漸く這度來りしが、如何なる事にか道に迷ひ、此の船橋を打渡れば、稗ヶ辻へは道程近しと、道往く人に尋ねし處、思ひ掛けなく御目に掛り喜ばしや」と言ひければ、岩越尚も打笑みて、「兄君も浮御堂へ最前參詣し給へば、追付戻り給ふべし。連れ立ち給へ」と言ひけるにぞ、延之助愈喜び、「此の舟はいと狹く、二人の外は乘り難し。夫れ故家來は我より先へ、川の向

うへ渡し置く。左あらば我も川を渡り、彼等にも言ひ聞かせ、川の彼方に待ち申さん」と言ひつゝ、舟に乗り移り、實平と言ふ僕に、縄を手繰らせ漕うと、向うの岸に著きにけり。斯かる折柄里二郎浮御堂より戻りしかば、岩越は忙はしく、右の大略物語り「彼の向うに居給ふが弟君にて侍るなり、早々川を越え給へ」と、此方の岸に彼の小舟を引寄せさすれど、里二郎更に喜ぶ風情もなく、頭巾目深に打被ぎ、刀すらりと拔くより早く、彼の船橋の引綱を發矢と切れば驚く岩越、弱腰蹴返し足下に踏まへ、「汝等も寄らば撫斬」と、威しの白刃振上ぐれば、言ひ甲斐もなく連れ來りし、僕は殘らず逃げ散つたり。岩越更に合點ゆかず、「是れは狂氣し給ひしか、心を鎭め給はれ」と言ふ顏眺めて打笑ひ「我よりも先づ己が、様子を聞かば狂氣もせん。川を隔てし延之助も、其處にて聽聞仕れ。我は菖蒲太郎とて攝津國の者なるが、仔細あつて浪人なし、杜氏ヶ崎に世を忍び、漁夫となつて居たりしが、去年の水無月初旬頃、螢谷にて岩越を、初めて見るより戀慕なし、金子を與へて僕を蹴著け、里二郎と言ふ壻を、舅が迎へに往きたる事、それ彼を聞きすまし、修羅藏、鐵東七、鐵助なんど、無頼漢を語らひ寄せ、南は横川阿彌陀ヶ峯、北はなしほの山續き、牛馬も通はぬ篠峯越、これ屈竟と彼處に待ち受け、種ヶ島にて宅太たを乘物越しに打つて止め、里二郎を初めとして家來も殘らず斬り盡し、里二郎が衣裳を著て、態と少しの負傷を作へ、面體知らぬを僥倖に我里二郎と詐つて、汝を初め唐琴の家

内を悟らず欺き果せ、皆共の如く感謝して、遂に婿となつたれども、延之助めが來りしは、事の破れと觀念し、包まず語りて聞かすなり。汝が父を討ち取つたる、當の仇敵と言ひたるは、是れぞ眞實の甲二郎に、討たれて死したる鐵由七と言ふものの首にてあり。岩越はじめ延之助、嘸や驚き思ふべしと言ふ豐川の彼方に聞え、無念と思へど船橋の引綱は打切つたり。實なければ延之助、如何とも仕方なく、せめては仇敵の顏を見んと、伸び上れども川霧に、隔てであいろは知れざりけり。岩越無念の涙にくれ、「父の敵、夫の仇、思ひ知れや」と太郎が脇差拔くより早く斬り掛る。太郎は白刃を踏み落し、其方を助け返すのは、假りにも女房と呼びたる情誼、それを嬉しと思ひはせで、刃向ふこそは心得ね、無念と思はば延之助、此處へ來りて兄諸共、同じ劍の錆となれ」と嘲笑けば堪り兼ね、羽織脫ぎ棄て延之助飛入らんとなしければ、實平周章て押止め、「案内知らぬ此の川を、假令ば渡り越したりとも、彼方の岸に待合はす敵に七分の強みあり、無念を耐へ時節を待ち其の時本意を遂げ給へ」と言葉を盡し教訓す。此方の岸には岩越が、脇差咽喉へぐつと突きたて、「父や良人の敵と知らで、枕替せし口惜しさ、未來へ往きて言譯せん、如何に菖蒲太郎とやら、魂魄汝が身に附添ひ、追付け思ひ知らせん」と其の儘氣息は絕えにけり。心靜かに菖蒲太郎、二刀を鞘に收め、足を以て岩越が顏を擡げて打見遣り、「可惜花をば散らせしぞ、最早暮六時に歸らん。如何にそれなる延之助、上へ廻れば三

十六丁、下は湖水へ流れ落ち、他に道なき此のきぬ川、浮々守りて居んよりは、唐琴の住居へ赴き、某を討ち取るべき評議こそ肝要なれ、重ねて逢はん。」と悠々と塵打拂ひ歸りけり。斯くて菖蒲太郎は何方へか逃れけん、一年許り影を隱し、又もや大津に小家を借り、尺八指南菖蒲太郎と書き記せし標札を門に掛け、世を憚らず暮しければ、修羅藏獄助尋ね來り、「貴殿は數多の人を殺し、仇敵もつ身にありながら、姓名も變へ給はず餘り不敵の爲體、合點ゆかず。」と言ひければ、菖蒲太郎打笑ひ、「夫れ故にこそ一旦は東の方へ赴きしが、彼の延之助と言ふ若衆、唐琴の家を襲ぎ、我を仇敵と狙ふ由、風の音信に傳へ聞き、稗ヶ辻の唐琴へ三里に足らぬ此の大津に、取つて返して住居せしは、延之助を誘引き寄せ、返討に打取つて世を安く送らん爲。」と聞いて兩人は進み寄り、「イヤ／＼それは僻事ならん、彼の延之助と言ふ者は、顏と容貌は美しく、未だ前髪さへ剃らねども、纔か年齡は十九にて太刀抜き持つての早業は、今牛若と異名せり。若しや不覺を取り給はゞ、後悔して更にせんなし、先づ先づ此處を立退いて、計略を以て討ち取り給へ、欺すに手なしと言ふ事あり、惡しき樣には計らはじ。」と少か許りの道具をば、獄助が取片附け、菖蒲太郎は修羅藏が住居へこそは誘ひけれ。扨も黑瀨延之助は唐琴の家に留まり、末々は乙の娘柏葉と祝言して、唐琴の家を襲ぐべきに定まり、兄の敵身の仇菖蒲太郎を討ち取らんと、竊かに行方を尋ねしが、此の頃大津に住家を求め、尺八指南なす由を傳へ

聞きて大いに喜び、足手纒ひと思ふから、何處にも告げ知らさず、或日樺ケ辻の住居を立ち出で、大津へこそは赴きけり。是れは扨置き先の年、駕籠舁の一八は妹楓を身受して、遊郭を立退く其の夜に、菖蒲太郎に支へられ、やう〳〵其の場は逃れしが、頼みに思ひし曾丹次は、如何なる事にか出奔して、其の行方知れざれば、兄妹大いに力を失ひ、彼方此方と吟行ひて、早くも三年を過せしが、此の頃大津の宿外れにとある小家の賣物あり。彼處は人の往來も繁く、曾丹次を尋ねんには、幸ひなりとこれを買ひ取り、妹の楓諸共に急ぎ彼處へ引移り、其處此處を取片附け、何心なく一八が、不圖門口の柱を見るに、尺八指南菖蒲太郎と記したる、宿札をうちてあり。彼は先年津の國にて、組子に捕縛られしが、如何にしてか遁れけん、彼が住みたる此の家を、買ひ取りしも不思議なりと、心の裏に思ひながら、楓には斯くとも言はず、兎角なす間にはや薄暮も告げ渉り、夕暮近くなりければ、楓は名に負ふ芝屋町の、夜の景色を見がてらに、戀しき人の其の行方を、聞き訊す手段もあらんかと、兄に暫時の暇をこひ、忙はしげに出で行きぬ。爰に又曾丹次は兄の仇敵井吾藏を、尋ねに出國なしたれども、名を知るのみにて顔を知らねば、此れも空しく月日を送る。此の家の前を行き過ぎしが、菖蒲太郎と書き記せし宿札を見て立ち留り、扨は彼も浪人して、尺八指南をなすやらん、久振にて對面し、故郷の樣子聞くべしと、案内もなく内に入り、一八を太郎と思ひ、「珍らしや菖蒲殿、思はず門の

宿札にて此處に住み給ふを知れり、何故浪人し給ひし。」と、言ひつゝ顔を打守れば、年格好は似たれども、其の人ならねば打驚き、口を噤んで躊躇ひたり。一八は打笑ひ「太郎殿は四五日以前、何處へか立退かれ、我々は此の家を處の長より買ひ取りて、漸く最前引移れり。何處のお方か知らぬども、旅に疲れし樣子と言ひ緩りと休みて行き給へ、澁茶一杯參らせん」と打寛いで待遇せば、曾丹次は大いに喜び「然らば左樣致さん」と塵打拂ひて打通り、互に顔を知らざれば、尋ぬる人とは心も附かず浮世話をなし居たり。斯かる折植之助門口の方に窺ひ寄り、彼の宿札を透し見て心に點頭き、ツッと入り、「此の家の主人に對面せん、此處へ出でよ」と呼ばはつたり。一八少し膝を進め「主人は即ち某なり、何用ありて來給ひし」と言はせも果てず植之助「何用とは事可笑しや、互に顔は知らねども兄の仇敵覺悟せよ」と褄元寛げ詰め寄せたり。葛籠の裏より一八は手早く脇差取出し「能くも尋ねて來給ひし、仇敵と名乘り討たるゝは、某兼ての覺悟なり、いざ尋常の勝負せん」と言ふは先年堤にて、殺せし人の弟と、思ひ違へし覺悟なり。此方は太郎と心得て、互に心急かれては、名乘りも果てず拔き合はせ、丁々發矢と斬り結ぶ。曾丹次は驚きながら、卑怯に此の場を遁れもせず樣子知らねば止めもならず、よし無き處へ來合はせしと、唯うろ／＼となし居たり。素より手練の植之助、一八如何で及ぶべき、眉先深く斬り下げられ、ウンとばかりに倒るゝを、起しも立てず斬伏せ／＼、兄の敵、

男山伸、菖蒲太郎思ひ知れ」と遂に留めを刺したりけり。曾丹次は今延之助が、菖蒲太郎と名乘り掛け、留めの刀刺したるを、傍にまもり居て、さては彼も人違ひと、心に驚き[illegible]、一樣する處貴殿には、菖蒲太郎に意趣あつて、尋ね給ふと覺えたり。然れども彼が顏を知らず、門に掛けたる宿札にて、太郎と誤り此の者を、打留め給ふは粗忽なり」と言ふを聞いて延之助、猶も心に油斷せず、「して又太郎にあらずして、此の者は何者ぞ」と問はれて曾丹次差詰り、「何者と言ふ事は、我も知らねど太郎には、面體似ても似つかず」と聞きもあへず延之助、から／＼と打笑ひ、「門口に樣子を窺へば、彼と親しき汝が體、今となつて姓名を知らずと言ふこそ心得ね。其方も太郎の親戚にて、我に心を許させて、討ち取る手段に疑ひなし」と刀振上げ身構へたり。斯かる折柄我が家へ立歸る楓は、此の體見るよりも、餘りの事に涙も出でず、落ちたる脇差ヲッ取上げ、「何意趣あつて一八殿を、無殘に手に掛け給ひしぞ、兄の仇敵遁さじ」と斬つて掛れば曾丹次が、其の手を押へ顏打守り、「左樣いふ御身は楓にあらずや」「留め給ふは曾丹次樣」「是れは」とばかり打驚き、暫時言葉もなかりけり。曾丹次重ねて言ひけるは、「これなる女は楓とて、某が由緣の者、今彼女が言葉を聞くに、打留め給ひし其の男子は、一八とか申す者、心を鎭め貴殿の身の上、一通り語られよ」と急き立つ楓を押鎭め、從容に言ひければ、延之助も容儀を正し、「某は舊丹波國にて、黒瀨と申す鄕士の三男、斯樣々々の譯ありて、

恨み重なる菖蒲太郎、當所に住居なすと聞き、天の與へと喜びしが、彼に逢ひたる其の時は、夕暮と言ひきぬ間を、隔てて見たれば顔を知らず、あの宿札を印として、心急く儘名乗りもやらず、打留めたるは我が誤り。さるにても人を殺し、討たれて死する覺悟なりと、彼が言ひしは心得ず」と事の概畧語るにぞ、曾丹次は楓に向ひ「御身が兄とは夢にも知らず、我もあれなる宿札にて、菖蒲太郎が住居と思ひ、計らず此處に來りしことありし次第を物語り「扨又御身に兄ありとは、今日まで嘗て聞かざりしが、如何なる事にて此の處に、斯くは住家を求めし。」と問はれて楓は顔振上げ「世に落魄れて兄上は、遊郭に通ふ駕籠舁渡世、淺ましき身なりとて遂に御目に掛らねば、知り給はぬは道理なり。又去ぬる年遊郭にて、他に身受の客ありと、言ひたるは虚言にて、眞事は菖蒲太郎殿、妾に不義を言ひかけて、身受なさんとし給ひしが、在るにもあられず悲しさに、兄にも此の由語りしかば、如何にしてか一八殿、其の夜の内に金調へ、妾が身の代償ひて、自由にはなつたれども、貴方は家出し給ひて、お行方更に知れざれば、三年が間方々と、憂苦を忍びて尋ねつゝ、適う逢ひは逢ひながら、果敢なき兄の此の最期」と、死骸に取附き泣きにけり。曾丹次は眉を顰め「兄は遊郭の駕籠舁にて、其の夜の中に金調へ、和女の身受なしたりとか、して／＼生まれは何處の者」と言ふに楓涙を拂ひ「以前は丹波の郷士にて、本名笹形井丹蔵」と聞くより曾丹次仰天なし、呆れて言葉もなかりけり。楓はす

つゝと立上り、延之助に打向ひ、「人違ひとは言ひながら、妾が爲には兄の仇、いで尋常に勝負あれ」と帶引切つて身構へたり。折しも姿美しき處女一人走り入り、楓が前に立隔たり、「さてこそは柏葉とて、未だ祝言は濟まねども、延之助が妻にてあり、良人の素振心得すと、聲を震はせて最前より、樣子は門口にて聞き侍る、良人の代りに妾を殺し、親の仇敵菖蒲太郎を討取るまでは彼方の生命、助けてたべ」と掌を合はせ伏し拜むこそ殊勝なれ。彼の處女に從ひし、僕が慌て馳出で「下郎奴は貫平とて延之助が仲間、不慮なる事にて兄を討たれ、嘸無念にも思さんが、是れも前世の惡業と、思ひ斷念め下郎奴を數多々々に斬りさいなみ、蕾の花のお二人を、助け給はれ情ぞ」と柏葉を押圍ひ、首差延べて覺悟の體。「良人の代りに此の柏葉、いざ討ち給へ」と貫平を又引退けて振上げし、白刃の下へ立廻る。兩人は心根悼はしく、討つに討たれぬ此の場の仕儀、張詰めし氣も撓みけん、楓は刀振上げながら、茫然として躊躇ひけり。曾丹次は最前より、默然として居たりしが、眞中へ押直り延之助に云ひけるは、「事の始末を考ふるに、敵と狙ふ菖蒲太郎、討取り給はぬ其の前に、楓に討たれ死せんこと、なんぼう無念に思すべし」とは言へこれなる一八を、討取り給ふは貴殿の祖忽、楓が爲には兄の仇、如何で遁れ給ふべき、思ふにこれより楓を誘ひ、菖蒲太郎が所在を尋ね、先づ太郎を討取つて本意を遂げし其の後に、又もや貴殿が楓に討たれ彼女が恨みも晴らさせ給へ、これより他に思案はあらじ。

方々如何に」と言ひければ、延之助大いに喜び、「夫れこそ願ふ所なれ、左あらば何卒楓どの、太郎を討取るそれまでは、御身と我との仇討を、宥免して呉れられよ、曾丹次殿にも某が、一つの頼み候なり。最前よりの様子を聞くに、楓殿は元遊君にて、相馴染給ひし中なれど、貴殿の妻と言ふにもあらじ、今改めて祝言なし、夫婦となつて打連れ立ち、我々諸共旅立ち給へ、今にも太郎に邂逅ひ、本意を達せし其の上では、楓殿の手に掛り、我は討たるゝ覺なり、左すれば太郎に遭はざる前に、楓どのを討つて取り、後の難儀を除かんと、某が卑怯の振舞せば、其の時貴殿力を添へ、其の座を去らさず討取り給へ、女一人を誘ひて、未練の働きなさじと言ふ、是れぞ我が身の潔白」と語れば楓も差侍つて、「敵ながらも天晴なり、目出たく本意を遂げ給へ、先づ其時までは御身の命を、御身に預け参らせん」と言ひつゝ、銚子杯を、戸棚の内より取出し、一児の死骸の傍にて、祝儀の杯取結ぶは、憚りあるに似たれども、方々の御心を休むる爲」と差置けば、寶平柏葉心得て、仲人役と待女郎、「今日より眞實の夫婦ぞ」と悲しき中にも楓が喜び、杯受持ち面羞げに、曾丹次にさしければ、曾丹次は物をも言はず杯キッと打眺め、暫くものを打案じ、思ひ切つてグッと乾し、「嗚呼世の事に義理といふ二字程切なき物はなし」と屢歎息したりけり。扨人々は一八が遺骸を埋葬め、菖蒲太郎が隱家を、窃かに尋ねけりとなん。扨も菖蒲太郎は大津を立退き、修羅藏が住家へ至りしに、如何なる事か其の夜より、

假に熱の病に苦しみ、枕も上らず打臥しけるが、漸く百日ばかり經て、心地涼しくなりければ、一先づ宇治の知己に赴き、身のありつきを尋ねんと、一人旅の用意を整へ、石山寺を後にして瀬田の方へと志し、東風取別所村と言ふ處にて、とある小川の渡船に乘り、船錢を尋ねければ、船頭答へて「一人に付き二錢なれば、六錢賜はるべし」と言ふ。「我のみ一人乘りたるに、心得ぬことを言ふぞ」とは思ひながら、錢を取らせて船より上り、道を急いで行きたりしが、不圖彼の船へ菅笠を、忘れし事を思ひ出で、立戻らんとなしけれど、はや二里ばかりも來りしかば、其の儘に打捨て置き、木幡といふに宿をとり、先づ入浴して疲れをはらし、飯打喰らはんと座敷を見れば、二つの膳を並べあり。「我は一人の旅なるが、何とて二膳出せし」と宿の下婢に問ひければ、宿の下婢不審しげに、「先刻には女中と二人にて、宿り給ふと思ひしが、何處へか往き給ひし、其の女中の手に提げて來り給ひし菅笠も此處にあり」とて出すを見れば、最前船へ忘れたる我が菅笠に紛れなし。太郎愈々合點ゆかず、「して其の女の年頃は、何歲許り」と問ひければ、宿の下婢打案じ「年の頃は十九許り、色白にして瓜核顏旅行に似合はぬ派手姿、上著は黑に唐鳥を錦絲に縫ひし裾模樣、下に樺無垢うち重ね、紺地のもうるに紫の、抱帶して居給ひし。」と言ふのを聞けば岩越が、自害したりし其の日の姿、「扨は彼女が幽靈の、我に從ひ來りしか」と、流石の太郎も慄然して、襟より水を注ぐがごとく、燈火闇き座敷の隅々、見

巡らしてぞ居たりける。斯かる折竹修羅藏獄助、太郎が跡を慕ひ来り「此の處に居給ひては、身の爲惡しき事あれば、急いで立退き給へ」と言ふ。菖蒲太郎は最前より、怪事に怖れし上なれば、何かは知らず大いに驚き、二人と打連れ立出でて、金ヶ辻といふに至り、漸く心を取鎭め「何故斯くは慌忙しく、我を誘ひ立退くぞ」と、問はんとすれば修羅藏が、立留つてハッタと睨む。顔は正しく岩越なり。ハッと怖れて振返れば、又獄助が莞爾と、打笑む顔も岩越なり。太郎は餘りの恐ろしさに、眼をとぢて差俯き、夢と現の境を知らず。其の時修羅藏聲を發していひけるは「妾が死したる其の日より魂魄汝に附添へど、勢猛き其の中は、恨みを報はん事能はず、汝此の程病に冒され、氣力大いに衰へたれば、其の虚に乗りて此の年月積る恨みを晴らさんと、二人の者の體を借り、此處まで誘引き出せしは、延之助に討たさん爲、最早用なき二人の者、汝等とても敵の荷擔人、此の世の暇とらせん」と言ひつゝ修羅藏獄助は、手々に脇差拔き放し「アラ苦しや堪へ難や」と足しどろに斬結び、互に數多の重傷を負ひ、其の儘息氣絶えかつぱと伏す。「アラ喜ばしや」と打笑ふ聲のみなして姿は見えず、數多の陰火燃え上り、梢を渡る風の音、颯々として物凄し。斯かる處へ延之助楓柏葉打連れだち、宿り後れて氣も急かれ、茫然として佇みし太郎に礑と行當り、顔打眺めて柏葉が、喜び勇み懐劍拔き持ち「ヤア珍らしや菖蒲太郎、覺悟なせ」とぞ呼ばはりける。延之助も進み出で「川を隔てし見参故五

に顔は覺えねど、我こそ黒瀬三男なれ。汝が宇治に立退く由、杜氏が崎にて聞き出し、跡を慕ひて來りたり。其の次第はいふに及ばず、逃れぬ所ぞと詰め寄せたり。太郎右衛門が傍にて、良人一人はなしあらん、同伴の女は確かに聞く、何故同道なしけるぞ、先づ汝等を討つて棄て、樣子は閻王に問ふべし」と丁々發矢と斬結ぶ。道に後れし貫平曾丹次、斯くと見るより馳せ來り、一指もや危き事あらば助太刀せんと身構へたり。兩人劣らぬ手練の早業、暫時勝負も付かざりしが、菖蒲太郎は再度三度眼前死靈の不思議を見て、氣を奪はれし上なれば、次第々々に太刀筋亂れ、遂に刀を打落され、袈裟にずつぱと斬下げられ、どうと倒ぶを起しも立てず、ずた／＼に斬伏せ／＼柏葉に留めを刺させ、首を發矢と打落し、貫平に持たせたる行李より位牌を取出させ首を前にぞ手向ける。其の時楓は曾丹次が、脇差濡々しく腰に差し「本意を達せし其の上にて、討たれ給はん兼ての契約、兄の仇敵の延之助、勝負あれ」とぞ呼ばはりける。延之助打點頭き「一旦契ひし言葉は金鐵、いざ／＼寄つて討ち給へ、されども女一人は相手に取つて不足なり、曾丹次殿にも助太刀あれ」「心得たり」と三人が一時に拔き合はせ、また斬結べば貫平柏葉、良人と主の命に代り討たれんと立隔てる、隙を窺ひ曾丹次は、女房楓が手を持添へ、延之助が肩先へ輕傷を負はせ、兩人を右と左へ押分けて、「小癪なれども仇敵の血が刀へ塗れば恨みは晴れん、先づ此の儘に立別れ、時節を待て」と言ひければ、延之助進み出

で「重ね〳〵も情の言葉、辱くは候へど、罪なき人を殺害し何とて命永らふべき、我が首討つてマア此の如く一八殿へ手向け給へ。」と退く景色はなかりけり。曾丹次は首頭を打振り「討取り給ひし一八も罪なき者とはいひ難し、いかに楓、今日唯今離別なす、暇の印は此の扇」と懐中より取出し楓が前に差置けば、不審しながら打開き「人をば害して金を奪ふは丹波の郷士笹形井吾藏といふ者なり」と讀むより楓愈驚き、更に不審は晴れざりけり。曾丹次は涙にくれ「我が兄丹之進といへる者、御身を受出し我と添はし、遊郭通ひを止めんと、二百兩の金を調へ、神崎に赴く折柄痞に苦しみ、一八が駕籠を雇ひし八丁堤、其の時一八惡念起り、兄丹之進を殺害し、金を奪ひ立退く折、此の金用に立てし後、親戚の人に討たれんと、其の扇に姓名を、書き認めて立退きしが、後にて思へば其の金にて、御身を身受なしたるなり。我はそれより井吾藏を、尋ねに直様出國なし、口外大津の住家にて、邂逅へども面を知らねば、御身が兄とも我が兄の、仇敵なりとは夢にも知らず、己が討つべき其の人を、人違ひにて討取るを、安閑と守り居て、思はず楓に邂逅ひ、討たれて死したる兄の本名、聞いたる時の我が仰天、後悔更に詮方なく、義理に迫つて現在の、仇敵の妹と祝言の杯したる其の苦しさ、唯一杯の酒なれど、鐵丸を飲む心地せり。夫れかれ因果と斷念めて、再び延之助殿を仇敵と狙ふ事勿れ、夫婦の緣を切つたれば、汝も仇敵の片破なり、我も刀に血を注ぎ、冥途の兄に言譯せん」と楓が片先

轄傷を負はせ、其の傷轄に敢なけり。延之助小膝を打ち、「それにて思ひ當りたり、日外一八我に向ひ仇敵と名乘り討たるゝは、豫ての覺悟といひたるは、己が殺せし其の人の、親戚とおもひ違へしならん」と過ぎつる事ども語りける。時に不思議や、菖蒲太郎、楓、延之助三人の血汐の内より、蛇、蛙、蛞蝓の三蟲忽然と現はれ出で睨み合うてぞ居たりける。あら不審しと人々も、暫時眺めてありけるが、楓は不圖心附き、神符袋を取出し、「妾は元來捨子にて、神符の内に木を以て彫りたる蛙ありけるが、袋の内に失せたるは、魂宿つて此の蟲の現はれ出でしか怪しや」と言葉の裏より延之助、同じく神符の袋を取出し、「我も木を以て刻みたる蛞蝓を神符に添へ、黒瀬の門に捨てられて、父母は如何なる者とも知らず、御身が言ひしに聊か違はず、血汐を注げば、自身と蠢き出でたるは仔細ぞあらん」といひければ、曾丹次は立上り、菖蒲太郎が取落せし神符袋を拾ひ上げ、「三人ともにさゝ鶴の形も變らぬ錦の神符、故こそあらめ」と目も放たず彼の三蟲を打見遣れば、暫くあつて木を以て彫りたる元の形となりぬ。時に後方の辻堂より、「其の理由語りて聞かせん」と一人の徒弟を隨へたる、老僧徐々立ち出でて、「貧道は空華とて、一所不住の法師なり。これなる徒弟は其の昔、夏衣の桃作とて汝等が父にてあり。彼丹波に住みける時、思はず三つの蟲を殺し、其の念妻の胎にやどり、三年に三子を設く。蛇の執念やどりしは、今討たれたる菖蒲太郎、蛙は楓、蛞蝓は、卽ちそれなる延之助」と告げ終り

給ひければ、桃作法師近く寄り「木を以て物の姿を彫るは、我が世渡りにてありしかば、三つの蟲を見たるまゝ、心を用ゐて彫りたるを、神符に入れて三人とも、生まれて程なく捨てたるは、蟲の執念宿りし故、祟りあらんを恐れてなり。其の時十有九年を經て、邂逅はんと告げ給ひし老師の言葉聊か違はず、喜ばしや」といひければ、三人は夢にも見ぬ父を、相見る事の嬉しさは、譬へん方もなかりけり。倉井次丁と横手を打ち「熟〻思ひ回らすに、菖蒲太郎が妹と知らず、風に戀慕なしたるは、蛇の蛙を魅入るゝなり。延之助が太郎を討ちしは、蛞蝓蛇に勝つゆゑなり。今又風が延之助を仇敵と狙ふは蛞蝓に蛙の勝てる因縁なり。斯くまで因果の廻るものか、風は即ち蛙手にて、菖蒲は蛇の異名なり。延と書いて蟲を添ふれば、是れ蛞蝓といふ文字なり。三蟲の名を三人の名に込めたる不思議の一つ」とありし事ども桃作に、細々とこそ語りけり。延之助言ひけるは「日外近江のさぬ川にて柏葉が姉若越、我聖二郎に似たりとて、呼止められし其の時に、元來捨兒の某が何でか兒に似るべきと、心の裏に思ひしが、聖二郎と僞りしは我が肉身の兄なれば、容貌似たるも道理なり」と差添逆手に取直し、既に自害と見えければ、人々倉惶てゝ押止む。其の時禪師宣ふ様「兒を討ちたる故にこそ、自害せんとはなすならめ。大惡無道の菖蒲太郎、殊には義理ある兄の仇、討留めたるは其方が、過誤にして過誤にあらず、天道汝が手を借りて、彼を征伐し給ふなり。生命をながらへ唐琴の、家を治めて亡き

人の、菩提に弔ふべし。鐵は最前蓮之助を一と刀なりと討つたれば、一八への義理は立ちぬ、死したる上は恨を絶ち、今改めて當作が娘となれば曾丹次と、夫婦とならんに妨げなし。幸ひなる哉曾丹次が、且靭左衞門俊兼は、我檀越の縁あり、因果の道理を能く知らせ、軈て歸參をなさすべしと、木にて彫りたる三つの蟲を、鐵鉢に取收め、人々を誘ひて、知己の寺院に宿泊をなし、其の夜はあかし給ひけり。斯くて禪師は丹波國へ至り給ひ、靭左衞門俊兼に對面し、ありし事ども物語り給ひければ、左衞門も三蟲の執念深きを感心なし、兼て禪師の道徳に、深く歸依してありしかば、直樣花街曾丹次を、再び館へ呼び戻し、從前の祿をぞ賜はりける。思ふに曾丹次兄を討たれ、一旦浪々なしたるも、新町遊里に通ひしに起れり、たゞ愼むべきは色慾なり。叔蓮之助は、其妻の家を治め、人々の亡き後を懇に弔ひ、彼の三蟲を鏡の裏面に彫りたるを作らせ、菩提所西淨寺に納めけるが、それも火の爲に失せて今は無しと、或翁の語りけり。斯くて容華禪師北國遊行の折、越後國蒲原郡竹の町村といふ所に至り給ひ、只在る禪院の後山に、彼の三蟲ををさめたる鐵鉢を埋め給ひ、數日讀經供養して、一字の堂を建立し、觀音を安置し給ひしが、菖蒲塚菖蒲の觀音とて、今も尚ありとなん。

國字小說　三蟲拇戰乙之卷（大尾）

浮世形六枚屏風

浮世形六枚屏風

此の書に無いものは、先づ第一に敵役、惡人妖術怪談、狐狸ひきがへる、家の系圖や寶物、紛失すべき物も無い、親子兄弟名乘りあふ、由縁かくれし割髪搔、神や佛の夢知らせ、腹切身替ぬき刀、面を見る事が少しもない、人と屏風は直にはたたぬと、下世話を悪く心得て、曲ればいふ／＼古めかしい、浮世新形六枚屏風、かかるはかたき繪草紙も、意見のはし書あらましを、一寸つまんで記すになん。

文政 庚辰秋七月稿成
　　辛巳春正月發販

柳　亭　種　彦

卷中人名

白[illegible]千人集
宮詩六許寄

蕉向書[illegible]來照字
逗來紅[illegible]蕭歌筵

花月[illegible]知己
詩書結靜[illegible]

眉[illegible]間[illegible]月
紺婦石照花

乾使直釣道分北
不將浮世[illegible]浮名

一心種德傳
是無上種子

[illegible]子多門太郎[illegible]

新宿花咲屋の[illegible]花

[illegible]人三紋の左吉

[illegible]子二[illegible]の小松

新宿花咲屋戸平

[illegible] 宗 柳 助

浮世形六枚屏風

柳亭種彦

むかし／＼、關東の管領瀧名入道の一族に、豬子多門太郎昌好といふ者ありけり。上總國半國を領し、文武好ある道に長じ、名ある家來も多かりければ、勢ひおさ／＼管領に劣らず、相州鎌倉小袋坂のほとりに、善美をつくしたる館をかまへ、又大磯金澤なんど所々に遊覽の亭をまうけ、いと目出度く富みさかえけり。

頃しも秋の末つかた、今を盛りの紅葉見がてら、射鳥狩せばやとて、かねてしつらへ置きし大磯の下館へ赴き、日あらず遊び暮して、早黄昏の頃、鴫たつ澤にぞ至りける。實に「心無き身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮」と西行法師がよみけしも宜なり。遙か人家に引離れ、唯かたはらに古りたる法堂の立てるのみ、いと物さびしき所なり。折しも遙か向うの方に、鴫の一羽あさり居るを近習の侍、あれ／＼御覽候へ、鴫立つ澤の名に負ひて、鴫の下り居るも一しほ興あり、先づ暫し此の堂に御腰をかけられ、鴫の飛び立つを見給はば、時も秋の夕暮なり、西行の歌のさまに少しも違ひ

暮」と云はれしを、多門太郎打笑ひ「鴫立つ沢と詠まれたるは、誰言ひ出したるか、此処には鴫の唯何となく

く打ち聞き、鳥の立ちたる様を云ひたり、斯る歌の体を思ふに、鴫の飛ぶ所を描くは、却つてあやま

まりなり。されば今ありさりもやらず飛びもやらず、物寂しげに立てるこそ、鴫立つ沢とは云ふべけれ」

と物語り給へども、歌道に疎き侍はよくも心得ざるにや、上の空に聞き流し「彼の鳥の居る所まで

は凡そ三十間もあらん」と何気なく云ひ出づるを、一人の侍聞きしが「いや〳〵鴫と云ふは鶉等

しき小鳥なり、斯くあざやかに見ゆるは二十間にはよも過ぎじ」と答ふるに、以前の侍頭をふり、

「人々のどよめく頃に、恐れもやらず立てることこそ、遙かに隔たる証なれ」「イヤ〳〵試みにこぶし

付け小的を射るべき心にて試し見るに、左まで遠くには覚えじ」と両人が云ひ募り、此の争ひさらに

果つべう様も見えず。時に兼好が近習の侍、水間宇源太が同苗島之助、其の年漸く十四歳、お側

去らずの小姓にて、今日もお供に有りけるが、両人が前に進み出で「先づ暫く此の争ひをやめ給へ、

拙者が細矢を以て遠近を計り見るべし」と袴のそば高く取り上げ、弓に矢からりと打ちつがへ、よつ

ぴいてひやうと放せば、矢はあやふくも鳥の背をすつて蘆間に止まり、鳥は驚き飛びさりけり。多門

太郎大いに怒り「汝若輩の身を以て古老の武士を差置き、人も頼まぬ出来しだて、剰へ鳥を射損

じ、面目無くは思はずや」とさん〴〵にしかり給へば、島之助も其の怒り面に現はれ、弓をかたへに

にづたと投退け、「彼の矢取りて来るべし。」と下部に向ひ云ひ付けけるにぞ、何かは知らず澤に下りたち漸うにして拾ひ取り、件の矢を差出せば、島之助手に取り上げ、更に恐るゝ氣色も無く、主人の前に進み出で、「鳥の下り居る其の所を、遠しと云ひ近しと云ひ、二人が爭ひ果てし無ければ、吾儕が其の間を計り爭論を靜めんと存じ、始めより遠近を計らんとは申しつれど、鳥に射當てんとは申さず、是れ御覽候へ、それ故に征矢を用ゐず。陣頭の蟇目の中へ鴫の羽を止めたれば、矢のとゞきしには疑ひも無し、東夷の荒くれしく歌の事は知らずと云へども、所も所折もをり、彼の鳥を射留めん心がつ以て候はず、如何に方々小腕と云ひ、未熟のそれがし目當はづれず、鳥の羽を蟇目に留め候こそ其の間近き證なれ。」と言葉よどまず云ひ放つ。多門太郎ますます怒り、「汝に道理あるにもせよ、主人に言葉を返すのみか、今投げ捨てし其の弓は我に投打なせしも同然、其のまゝに差置きなば寵愛あまつて道知らぬ曲者を召使ふと、世の人口にかゝりやせん。然有る時には家の瑕瑾、切腹さすべき奴なれど、前髪あれば小兒も同然、今日よりしては勘當なるぞ、其處退れよ。」と顏色替へはつたと白眼み給ひければ、島之助も今更に何と返さん言葉も無く、大小差置きすごすごと、其の場をこそはまゝ立去りけり。

此の日島之助が父宇源太は御供に加はらず、島之助は面目無くや思ひけん、直ちに歸つて父に對面する

事も無く、何地へか立去りけん、絶えて行方は知れざりけりとなん。

此のところ發端より八年ほど立ちてのちのものがたりなり

摂州中之島の小商人に嘉右衛門と云ふ者あり、年老ゆるまで一子無かりければ、或者の肝煎にて佐吉と云ふ者を養子となし、其の身は八十餘歳にて身罷りぬ。嘉右衛門の妻は法體して妙參と法名し、家は佐吉にまかせ置きて、寺參りの外所在として、更に浮世に交はらず。然るに彼の佐吉は若きに似合はぬ律儀なる生まれにて、妙參を眞の母の如くに傅き、家業大事と心がけ、物見遊山にさへ出でざりしが、いつか氣鬱の病を引出し、次第に顔色おとろへければ、太鼓とか世に云ひて口がろきをかし男、又町風につくりたる藝子の類を呼び寄せて、佐吉が伽となしけるにぞ、藥よりは利目よく、少し心も浮き立つ樣に見えたりけり。頃は如月半ばにて、野山の景色も春めき渡り、櫻もやゝ咲き初めければ、「かゝる折にうつら〳〵と引籠り居る時は、彌病重るべし、何處にもあれ立ち出でて氣をはらすにしくべからず。」と母妙參の勸めにまかせ、さらば大和巡りに旅立ち、古き名所をも尋ねばやと、店の事は重手代に賴み置き、供人少々召連れそこ〳〵に旅立ちけり。

爰に又奈良南圓堂のかたはらに、年の頃十七八とおぼしきみめよき娘、四歳ばかりの女子を連れ、

紫原に出家言をかまへ、彼の娘は琴を彈き、女房は柱本の人に盃を差しつけ、實をこふらのあり

器量の勝れたる上に、琴の爪音氣高く、歌うたふ聲もしをらしければ、語し傳へ聞き傳へ、つどひ寄る者少なからずとぞ、世に男女の赤縄ほど奇しき物は無し。中之島の佐吉は此の程奈良に來り、柴辻町といふ所に逗留して居たりしが、ふと琴弾の噂を聞き及び、人を以て尋ねさせければ、此の女は其の名をみさをと云ひて、非人調の類にあらず、もと浪人の娘なれど、親の身貧なりとて、其の姉の娘小よしと云ふを連れて、暫く斯る世渡をばするなりと、其の仔細のたゞしさを聞くに、ますます思ひいやまし、かねて聞き及びたる名所古跡をば見物もせず、日毎夜毎の茶屋に來り、心を付けて物など與へければ、いつと無く物いひかはし、みさをも佐吉が實儀にて、然も情深きを憎からず思ひながら、身の賤しきをかへりみて、言ひ出でんよすがも無く、互に心にのみ物思はせて、一日々々を過しけり。

さすがに旦暮の日も、早や幾日の暮の歸り、暇も久しくなりたるに、逢ひつゝと稍まれば、「やれ／＼大まきに退屈したこと」と茶屋が持て成すに笑つるは、是れも浪華の内に徳若屋の才藏とて、人に知られし豪家の亭主。みさをは傍へ立寄りて「今宵お待ち遠で御座りませう」「まア／＼此方へ」と人無き小陰、お藏は小聲になり「昨日、お話した通り、其方はいよ／＼百兩で得心して勤めてたもるか。」「はい其

の今で、姉さんの姑御の大病を、思ふ樣に療治がさせたさ、ほしさ私が得心で私が身を賣るに、其が否と申しませう。とは云へ義理の有る兄さん、後で知れても貴方のはうへ參るまでは、先づ御沙汰なし、其れ故書いてお貰ひ申した此の證文へ、兄樣の判はそつと盜み出して、妾が押して置きました」と見すればお藏かんじ入り、「道理こそ、昨日己に證文を書いてくれとの頼み、又と有るまい孝行者。そのつもりで是れからは大切にかけて勤めてたも。明日の朝四つ頃に駕籠つらせて迎へに行き、其の證文と金と引替へ、夫れで都合はよからうかの」「有り難う御座ります。目かいの見えぬ母樣へは、お屋敷へ御奉公にあがると云うて置きませう」「夫れも承知、切口上で侍の迎へに來たと知らせたら、一層悦ばるゝで御座んしよ」と涙の顔を横にふる、心を不便と思ひながら、わざと笑ひにまぎらして、「はて何にもさな／＼おもやるな、仕合次第で玉の輿、乗物で呼屋からざゝんざ云うて出るのは今の間」「左樣なら旦那樣」「おむす明日」と、お藏はいそがし氣にぞ別れける。

爰に奈良般若坂に駕舁の戸平と云ふ者あり。去る年關東に下り、數村亭太夫と云ふ武士に足輕奉公して居たりしが、亭太夫が妻初瀬が妹花世と密通して、花世懷胎の身と成りしかば、せん方無くや思ひけん、花世を連れて出奔なし、故郷なれば此の所に迯げ上り、程無く女子出生して、是れを小よしと名付け、今年四歳にぞなりにける。此の戸平に朽葉といふ一人の老母あり。風眼とかいふ病にて

一年ばかりわづらひしが、遂にむなしくなりければ、姉妹が歎き大かたならず。かゝる所に又珍事こそ出で来れり。関東に有りける戸平が主人数村亭太夫、故有りて浪々の身となり、是れぞといふ世渡も無くて一人の娘をさへ養ひ難く見えければ、妻の利発が計らひにて、其の方にて兎も角もしつけ呉れよと娘を、花世が許へ頼みおきて遣りけり。是れ亭太夫には深くつゝみ、爰に隠れ住むよしを密かに姉の許へ知らせ、折節文を取りかはし、又姉の心を休めんと、かゝる身貧の住居を知らせず、世を安く送るやうに、兼ていひやりし故なりけり。彼の花世とみさをは伯母姪の中なれど、僅かに三ツ四ツの違ひ故、表向は姉と呼び、又戸平が為には現在主人の娘なり。取分け大切にいたはりつゝ、日毎木辻へ通ふ辻駕籠をかき、身を粉にくだいて稼げども、元よりたくはへ無き上に、去年よりの母の大病、自ら家業も怠り、家内の道具も売りつくし、其の日をさへ送り兼ねるを、みさをは見るに堪へ兼ねて母は更なり、姉の為にも、南円堂へ百日が間日参なし、百巻づゝの普門品をよむべき大願をかけたりと偽り、幼けれど彼の小よしは利発なる生まれ故、彼には堅く口留して、諸共に彼処へ行き、袖乞をなしたる銭を金に替へ、国元より来る貢の金といひなして、姉の花世にあたへけり。

あくれば三月二日にて、桃の節句の事なれば、小よしは早く起出でて、一ツ二ツ売残せし雛を、母の鏡台の上に並べて、余念無く遊び狂ふや犬張子、口のかけたる徳利に、桃は手折りてさしながら、

かくれ住しき住居には、いつ花咲の絵雙紙の赤本開けて片言まじり、雛に書ときして聞かす、子供に暇は無かりけり。今は今日もいつもの如く、母の機嫌を伺ひて、獨言打ちかたげて出で行きければ、みさをは嫡に打向ひ、父さんの御本地にお立帰り遊ばされ、昔のお身にお成りなされ、又こゝには何當惑様が、眼病平癒祈りの爲、南圓堂へ日毎の參詣、時ならぬ寒さ故か、今日は私は氣合が悪い、何卒お前名代に、お參りなされて下さんせ。」と、頼むに花世は打頷き「そんなら妾が行かう程に、母さんのお目がさめたら、お藥を上げてたも、厚着をして大切にかけ、わづらうてたもんなや。これ小ふしおとなしうして、留守しませうぞ、其の替りにはよいおみや、買うて戻るを待つて居やと、是れもとつかは出でて行く。

折柄来かゝる徳若屋才藏が差しのぞき、首尾はよいかと目で云へば、此方へと顔で答ふるみさをがおつと承知と才藏が、勿體らしく咳ばらひ「たそ有るか案内頼む。」「どうれ。」とみさをがよそ〳〵しく、手をつかへればをかしさこらへ「拙者は籠治判官が家来徳若才藏と申す者、今日いよ〳〵みさを殿お目見得に上られて然るべく候よし、お局頭若藤殿の、差圖に依つて迎への四ツ手、南無三寶打乗物の、ひかりひか〳〵かゞやくを、わい〳〵のわいとさと、舁かせてわざ〳〵推參せり、急いで用意あられよ。」と口から出次第間に合ひを、實と思ひ母朽葉、枕屏風を押退けて「左様ならお前さま

は、御主公のお目見得に今からお出で遊ばしますか。」「あい姉さんや戸平殿は、おねん〻承知の事なれど、お前の病氣の其の中へ、心無しと思ふ故、今日まで延べて置きました。」「はて何も無い事俤有ります。戸平といふ者はあり、嫁と云ふは勿體無けれど、花世殿はあれ程に、孝行にして下さりますれば、何も不自由は御座りませぬ。申すでは無けれども、取分け貴方は大切のお體、かう云ふ所に浮浮と置き申すのは心遣ひ、一日なりとも早いが、此の婆は却つて安堵、やれ／＼貴方、御苦勞さまに存じます。して判官樣のお屋敷は、どの邊で御座ります。」と問はれて才藏眞面目になり「上屋敷は扇が谷、南無三それは鎌倉だ、伯州でも遠過ぎる。おゝそれ／＼此の程奥方花世御前病氣に依つて、御保養がてら八幡邊に御逗留、彼の山崎の渡し場を左へ取り、判官樣のお屋敷はもう其處かへと、お尋ねあらば早速相知れ申すべし。」と、取繕へば倚すり寄り「妾も彼の邊へ参つた事も有つたれど、見も聞きもせぬ其のお屋敷、いつ頃御普請なされました。」と聞かれてはつと思ひながら「イヤ昔も昔大むかし、彌勒十年辰の年、諸神の立つたる御屋敷。」「お廣い事で御座りませう。」「廣いとも／＼お座敷なんぞを見てあれば、綾の縁が五百疊締の縁が五百疊、高麗縁が五百疊千五百疊のたゝたゝみを、さらりやさつと敷かれたり。」と、己が名から案じ付き、我を忘れて舞ひ出す才藏。みさをは見るにあぶあぶと「風が當れば御身の毒、まァ／＼此方へ。」と朽葉が手を取り、寢間に誘ひあたふたと、枕屏

嬢さま引廻し、これ着物召させましたと口には言へど無い情に、ふたりは何とやらこゝろよからぬこれは京子にとて、其の頃は母君より自分を取出させ、其のをりに心得の文と引替へに、自分の守りに襟にかけて肌身離さず見しに、されば遺愛の物を着たりけれ、書置諸共かたはらなる、雛に並ぶ犬張子の中に隠して、さんなれば大切に養生遊ばせやと言ふ聲聞いて母朽葉、又もや寝間をさがり出でし居間で遊ばしますか、定めし今日は總模様、立派にお着替へなされし所を、たつた一目見たけれど、言ふに甲斐ない此の盲目、どれ探つてなりと見ませうことかと寄ればみさをは驚き、切ない時の神だのみ、佛の前にかゝつた打敷、模様の緞子の地黒、是れさいはひと佛壇よりそつとはづして膝に押しあて、探らすればにこ／＼顔、おゝ是れでこそ數村様のお娘御、隨分お首尾なされまして、皆さ案じは言ふに及ばず、あがり物に氣をつけて、おむづかしい出ぬ樣に、大切にお勤めなされませ」と言はれて行くとはしらがの母、喜ぶ折柄納戸より立ち出る小よしは頑是無く、「おや／＼をかしな前垂し」と言ひかくるをみさをは打消し「おゝ是れ姉がうつゝいたゝを著て、羨ましう思やらうが、おし付け其方も大きうなると、妾が方へ引取つて、なア申し朽葉さま。」「おゝそれ／＼小職とやら、小僧とやら、お使ひなされて下さりませ」とつい何と無く言ふ言葉も、靴持つすねに邊をきよみ／＼、合點行かねばうつかりと、小よしは二人の顏打守り、物も得言はず居たりけり。才藏は打ちしはぶき、一邊ならはつ

ては屋敷の手前、亭主とも迷惑致す、いざ御越し」としかつべらしくすゝめられて涙を隠し、暇乞ひさへそこ／＼に、みさをは外へ立ち出でて、小手招ぎして小よしを呼び出し「母様か父さんか、今にも戻らしやんした時、妾を尋ねなさんしたら、毎晩教へて置いた通り、花咲爺の此の赤本屋の所をいつもの様に、讀ときして聞かせると、妾が行つた所が知れる、必ずわすれてたもんなや」と名残をし気に見返り／＼小聲になつて「親方さんお待遠で御座りませう」「イヤもう待遠より、云ひ付けお切口上によわり果てた、さア急いでやらかさう」とみさをを駕籠に打乗せて、足を早めて歸りけり、

斯くとも知らず下人の戸平、忙がしげに立歸り、そこら見廻し上り口、忘れた煙管手に取上げ、「南無三寶で落したかと、戻つて見ればやつぱり爰に、どうでもほんのあはう者、煙草のお陰で暇つひやした」それはさうと陰者人、もうお目がさめましたか」「おゝさめた段かいの、今艶屋様がお屋敷から迎ひにお來て、みさを様は御奉公のお目見得に上ると云うて、身ごしらへにも人手は無し、お一人で小紬を召し替へ、乗打の乗物で行かれたに、彼のこなた道で遇ひはしやらぬかいの」と、云ふに戸平は不審晴れず「さう云ふ事が有るならば、何ぞお役に立たねばとて、一通りは私に、御相談も有る筈の事、どう云ふわけで怠し無く」と問へば杓薬は打笑ひ「こなた衆夫婦は兼々に、承知の事と貴方のお言葉、よもや嘘はおつしやるまい、夫れを忘れてけたゝましい。」「イエ／＼此の戸平は眞以て存

ひとり言ーー「今道で見た四ッ手駕籠、己に遇ふと垂を下し、どうやら俄にかくれる樣子、何にして
も合點が行かぬ、後をつけてこつそと駈出す、向うへ廻つて娘のかよし、「これ父さん、今姉さんの御身
しやんした樣に、誰か知つて居ることぢや、そんなら貴が聞いて置いたか、まアどうぢや早う言や
れ」と言ふなれど、頑是無い子のいたいけに、彼なる赤本押開き、「むかし〳〵有つたとさ」と言ふ
に戸平は氣を焦ち、「是れ小よし其處どころぢや無い、ささみ樣のお行方は、さア何處ぢや、ちやつと
言うて聞かしやれ」「ても此の赤本の讀ときをすると俺が行先が知れると、姉さんが言うておやから、
まア下に居て聞かしやんせ」そこで、正直爺といふものが有つて、犬の子の命を助けてかはいがつ
て育てたら、其の犬がだん〳〵大きく成つて、ある時爺にいふには、明日私を連れて出て、吠んだ所
を掘つて見なと、敎へると思つたら夢がさめたから、夜が明けると此の犬をつれて出て、吠んだ所を
掘つたれば、小判や小粒といふお金がたんと出て、それで一期榮えた」とまはらぬ舌で長々しく言ふ
に、戸平は堪兼ね、「え、何の事たか埒も無い、どうでも貴方に追付いて、樣子を聞くのが近道」
と、驅出す足に思はずも、蹴かへす雛の犬張子「や、や、是りやこれ小判、フヽ犬が吠んで金が出る
と、今の話ときは犬張子が、これぞば金が出るとの謎々、中に込めたる此の一通、なにお兩方へ申し
置き、ささみ樣と有るは合點行かぬ」と封おし切れば樣柄葉「何ぢやささみ樣のお文が有る。何う言ふ

爰おや讀んで聞かしやこと、耳そば立つればくらひかけ、驚きながら笑ひに紛らし「お氣違ひなされますな、くれぐ\もお國許の親御の事が案じられる、お前さまの御病氣がお心よふなつたなら、鎌倉へ私に下つて安否を聞いてくれ、お氣にさへ入つたならもう家へは戻るまい、直に屋敷へ落付く程に、宿下りまで逼はれぬと、夫婦の者へ殘し文」「イヤ申し母者人、風がひやひや當つては、御氣分にさはりませう、まア一寸入なされませ」と寢屋に連行き障子を立て切り、思はず知らぬ一人ごと「もしみさをさま、お待遠でうらめしい、何ぼ貴君が鎌倉で匿しなされても、毎日通る南圓堂、命乞をなさること、知らいで何と致しませう、あゝ、身貧な此の暮し、貢いで下さるおこゝろざし、夫れを無足に致すまいと、今日まで[illegible]しらぬ顔、陰で拜んで居りました、夫れさへ有るに勿體無い、おまへ樣の身の代で、何と浮世が渡られませう」とどつかと居つてはら\/涙、いつの間にか戻りけん、門に樣子を聞き居る女房「えゝ、そんならみさをはアノ曲輪へ」「おゝ樣子はあらまし此の書置、母者人に聞えぬ樣讀んで見やれ」と投げ出せば取る手おそしとおし開き、

一筆申しのこしまゐ、たゞ今まではごふうふに深くつゝみ、まい日\/小ふしをつれ、觀音さまへ参るといつはり[illegible]にいで、國もとよりの貢と申し、少しは御ちからになり候へども、それも思ふ樣にはかどりかね、此の樣にうか\/致し居り候ては、いよ\/貧苦の御身になり候はんかと

これが悲しく島之内之竈屋へ、百両にこの身をうりまゐらせ候、此の金にておもふやうに杉菜様の御養生なされ、何になりとも少しも早く、御首尾に御とりつき、若しも餘計の金子あり候はゞ、鎌倉へ御下しくださるべく候、是れもにはかの御浪人の事に候へば、嘸御不自由がちと案じ参らせて、なにとぞ／＼取急ぎあら／＼かしこ。

と讀み下せば戸平は聞くに絶え兼ねて、件の金をひつつかみ、驅け出すをすそを花世は引止め、さつきう遠くてこりや何處へ行かしやんす。」「はて知れた事、此の金返してみさを様を、一イたく／＼一日諸共にただ上では、元金は扠置いて一倍しても返さねばおきて、妻には現在姉の事、勤めさするは本意で無けれど、斯うなるからは仕方が無い、これ此の文にあれが書いて置いた通り、此の金を資本とし身を粉に碎いて身上仕上げ、國元の姉さん御夫婦御貢ぎ申して、其の内に身受するより外は無い」とさまんにだいなため、妹は更なり鎌倉へも武家奉公といひ下し、夫婦いよ／＼心を用ゐ、金にあかして蓄生なしけるにぞ、程無く妹の眼病平癒なし、是れになほ／＼力を得て、すこし知邊の有りければ、攝州難波へ引移りけるとぞ。

斯而みさをは島之内の娘子となり、其の名を小松と改めしが、容色よき其の上に、利發なる生まれなりければ、全盛ならぶ方も無く、常に二ツの櫛を押並べてさしけるにぞ、難波の人彼を仇名して、

三ッ櫛の小松」と呼ばれけり。

又其情人佐吉はそこが行方知れずとなりければ、せんかた無く是れも轡虫の籠を、宵寝保養の其の籠とし、抓には之れ其處由緒と存ぜしかば、月岑花に三ッ櫛、紋に付けるにぞ、誰いふと無く之れを綽名して、三ッ紋の佐吉と呼び、同じ轡虫に由縁あれば、その轡虫の声聞く事は、未だみさをにはめぐり逢はざりけりとなん。

「これより又五年ほど立ちての物がたりと見給ふべし」

柳の橋詰は柳田橋、橋に繋のいる早月雨、晴れて水無月朔日は勝是参りの頂り船、岸に繋いで立ち出づるは、結ひ綿の三ッ櫛小松と云うて名取の娘子、夕風さつと吹き送すおとし模様、花と見て、蝶もあと追ふ堤づたひ、「まうし其處へ行かしやんすは、花咲屋のお花さんではおまへんか」と呼びかけられて立ち返り、「さう云はしやんすは小松さん、おまへ何處へ御座んした」「あい、いつとした願掛に、聖天さま様へお詣り申しての戻り道、今お前のうち方へ行く所で御座んす。」と云ふにお花が打笑ひ、「こちも聖天といふ心で、小松と名を付けたらうと人さんに云はるゝ、お前、愛染様へ参るとは、遠の寄て御座んすなあ、それはさうと今宵は、伴根崎へお客を送つて来る所、まあ一寸の行き違へで

離れぬ所で御座んした、お前も又お舟なら、なぜ此方の行末親にうちあけては下さんせぬぞ」若い衆は揺籠なれど、餘り今日のむし暑さ、帰り道でも向で行かうと、ほんの葉の風に吹き、縁先に涼む間も無しにと語しながらに花咲の家へ這入れば嬉しく、二階で待つ備中の主なれ、さればまでひつそりと舞ひのほうちもまもり〱と語れば小謡の叶点をつき、「あゝ云ふ事が有つたれば、悦しい事でもあらうぞ」と思はず知らず一人言、お花とふつと顔見合はせ、「あの上なるはお前の朋輩衆おとしつたで御座んすか」「アイ、鶴澤の御師匠さんがとなりに有るを幸ひと、稽古させては見るものの、未だほんのおさらへさんで、何だか私は御座んせぬ」と云ひつゝ向うを打見やり、「あれあの肩は戸平殿、お客もお気有るさうな、おまへ此方へ。」と打連れて二階へ上る程も無く、又階につく足音よりてつゝ連れて来る三人、此の頃名代の三ツ紋佐吉、匙より舌のよくまはる座敷の配剤加減よき、幇間都合の萱原竹齋當の如くにせんじの羽織、鴫鳴徒跣の物真似師深善兩人左右に從へ、「サア是れからは貴様の所で一杯飲んで歸らうか。」「ハイあつ苦しい狭い所も、お気が替つておなぐさみ」と、兩人が惡口云はぬ内、先へくゞりの裏口を、開けて亭主の戸平が案内「おつと卑下を宣ふな、此の花咲屋は船宿中で第一の物数寄第一番、しのぶも釣さず黒石に、杜鵑花つゝじの山も無く、板塀かくしの建仁寺、垣根ばかりで植物の、無い所がきぜつ〱」といつも変らず竹齋が、喧しき蟋蟀聞き付けて、お花も二階

を下り來の「めづらしい佐吉樣、すつきりお足の引かぬのは南の方に面白い」「いや／＼此方も知つて居る通り、何處へ行つても相方を定めぬが己が持ちまへ、然し餘り遊び過ぎて、何ほ氣のよい母者人も、すこし呆れもされた樣子、あの佐吉と云ふ奴はうたゝ寐にも算盤を枕にして帳合の寢言を云つた程で有つた、若い者には珍らしい商賣好きの遊びぎらひ、よい事には二ッ無く、醫者も手をおくぶらぶら病ひ、頭にはかへられぬと、おれがすゝめて遊ばせたが癖になつて、近年は家のことには構ひ居らぬ、あゝ云ふ事では身代が、くつし始めの紋所二ッ紋とやら名を取るを、常々案へ來て居ながら、竹齋や深善が、意見をせぬがうらめしいと、おつしやつたと手代のはなし、夫れ故丁度百日ばかり戸口へも出なんだ」と云ふ内二人の末社ども、「そりやこそなかしな日よりに成つた、南無三くはばらくはばら」と、耳を塞げばお花はうち笑み、「此の雲行きでは、ほんたうに今夜はなるかも知れぬのに、緣起の悪い」と云ひながら、ます杯を竹齋が手に取上げて、あたりを見廻し、「床の間に三社の託がかゝつて有るのは聞えたが、其のまへの大張子に七色菓子が上げてある、なで牛が古いからなで犬とは新らしい」と云はれて戸平は目くばせし、「それは内の山の神が、七ッ目だからと言ひまして、なァお花」「アイそれで大事に今まで致します。」と云ひ紛らせば指折かぞへ、「お神さんの眞の年を見顯はした、此の小道具におよし坊といふ子が有れば、成程さうでも有らうかえ、三十には餘程とくだ」と

実にほお花は前垂や、たゞ醤油をして立つて行く、深善がまかりいでゝ安と無い口を開いて、主夢を人の取遁したつ遣すと云ふは此の屏風は、男と女が連立つて駈落をする所、向うに橋がかゝり事古いとあるは何處であらうと引出せば亭主の戸平、し若くるしい、たでお置きなされ、大名は矢張安い景色相間橋に浅橋、その次が曾根崎橋、いづぞやお初徳兵衛の上るりの出来た時、人形芝居の看板をとなりの三絲に貰ひましたを、屏風にして置きましたと話せば竹齋又もし出で、其の上るりで思ひ出したは、近年評で名代の藝子、二ッ櫛の小松とは道行に出さうな名、貴方は二ッ紋二ッ櫛とならでござふと、角とやらの割外題とやらの様で、狂言名題に打つて付け、何と是れなお まずいと乗地に成るお佐吉が打消し、成程己も名は聞いたが未だ遭ひはせぬ小松とやら、道行の屏風から思ひ付いては悪い對句、末の世までも此の様に、浮名を殘すお初天神、情死をして死ぬ阿房にたとへられては迷惑な、遂ぞ今まで相方を定めぬ己はほんの遊び、はてたかが藝子は賣物買物、金さへ出せば自由になる、それを誠のある様に思うて居るは大たはけと人事云はゞ目白置け、階を下りる二ッ櫛小松とふつと顔見合はせ、お花が送る後影見とれて佐吉が手に持ちし、酒がこぼれて我が膝も、ぬれのはしとはなるとも知らず、今の藝子はありや誰ぢや、あれが今竹齋様の噂を云つた、二ッ櫛の小松さんで御座りますと聞いて佐吉は呆然と、杯なげ捨て帶しめ直しさア今からあれを

上げて遊んで見よう」と心も空もかはりて降り来る夕立雨、「すゞしくなつてしつぽりと、おしけりなさるに最屈強、ものどもぬかるな、ヤレ来いえゝ」とそゝり立つたる両人を打連れ、戸平を供に小松をしたひ、島の内にぞ至りける。

座敷もすんで跡の内、小松は背中おし向けて、物も云はねばつぎに無く、佐吉は煙草くゆらせながら、昔の事を野暮らしく云ひ出して、ふさがせると心に思ふも知らねども、大和巡りをなした時に、南圓堂でこなたの爪おと毎日々々聞きとれて、折もあらばと思ふ内、何處へかとんと行かは知れず、身を賣つたといふ人の噂、目と鼻の間程な此の島之内に居るとは知らず、大體捜した事では無い、然し今日めぐり遇うたはつきぬ赤縄と、己一人合點するのも阿房なれど、これから折節来よう程に、いやであらうと付き合うて遊ばせてたもやいの」とすらりと小判で十兩ばかり、紙にひねつて差出し、背の許によい様に、花に取らせて餘りがあらば、浴衣でも買うて来や」と云へど小松は見向もせず、煙管おさへてひたひにあて、うつぶく顔をさしのぞき、「骨からの面で、気色が悪くば薬もある、なぜ物を云やらぬぞ」と取る手をすげなくふり拂ひ「気合も悪うは御座んせぬが、ほんの遊び、高が藝子は賣物買物、實が有ると思うて居るは、阿房と悟つた人さんには、どう云うてよい物やら、此の小松は知りやんせぬ」とすつかり云へば胸すり寄り「己がさつき船宿で云つた事を、二階で聞き其の様にひぞ

りやるのか、はて相方をせかれても、其方の行方を尋ねてみたら、此方は矢張りきかといふ噂を聞きて居るわいの」「そんならば互に紋袖に、相應な手の内は下さんせず、なまなか出ては自由にならぬと、見下げられた立腹が立つて、嗜ぎやら寄らうが付き合うてゐ、折節は來ようの上は随分頼みにならぬ心もし、猶遂げらるゝ事なれば、御座んせぬがはるかにまし、そんな事をの水臭い、心と心に合せ申せば、夫婦さまへお首尾して、これちやつと見て下さんせいと、ぴらりとしたる起請を出せば、佐吉が手に取上げ「えゝ年の明くのをあつか知れぬやうに、願ひまゐらせ候、三十六番の神に誓うて己が年もきたら一心中と定めた人、知らいで何と致しませう」「そんならわが身も眞實に」「さてさて口先ばかりで喜ばせ、親の通らぬ事ならば、いつその事に顔をも見せて下さんすな、変業様も聞えませぬ、何の是れが親の書、あゝいふ主の心では、ふきらめいゝのは知れてゐる」と御身の書付引裂けば、又も其の田ずる雷の、ぐわらぐわらとひゞく音、あれよと云うて我知らず、佐吉にひしと身を寄せて、又も見合はす顔と顔「もし眞實なら何とする」「妾が心は主の儘」「命も與れと云うても引かぬな」「あいさ」と小聲に答ふるぞ、深き赤縄の結めなる。

前の世よりも結び置く、緣にやあらん此の後は、互に離れぬ妻と夫、名にし負ひたる二人の、月にも通ひ、雪にも通ひ、花をふらしつ其の年は、夢見る内にくれはてて、又立歸るなどりの春、小

恁と云へど餘の客は、せきてゐるきぬ初子の目、手と手引合ふ合々傘、今日は生魂今日は天滿、其處よ此處よと浮れあるき、湯水と遣ふ金銀に、あかのぬけたる當世男と、世間の取沙汰家の噂、母姉讓は聞き兼ねて、つらく當るも佐吉が憎さと、奧の一間に押込めて、我が身のそばを離さねば、悲し嬉しと百ばかり、書いた小松がぬらし文、竹齋が手段にて目に付けがしの花活に押込んで差置けば、何心無く佐吉は手に取り、其れを見るより心にうれしく、ふたゝび見返し讀まうと、半分ばかりよむ端へ、立ち出づる母親が、一寸すふようと思うたれど、己にはどうも讀み兼ねる、目がよいか見てたもと差出す塔の中状も、開くをもしや見られたかと、あやぶみ、をさむ、懐中へ入れはせど氣はどき〳〵、「今日は天一天上ぢけお部屋へ御座つてあつとの間、こゝを兩日になされぬと、此方の工面が十分に、れ、身になる金なら四五百兩、手にとる切手のか女房になれ、それでたびらに、此の家が納まらうの に、夫れ聞いて下されば、血いふでもひよんな心になりませう」と何を云ふやらたわいなし。母はあきれて「これ佐吉殿の内は此方から、いかに譽めた遊びぢやとて、夜の目も出あるいて惡い噂をせられては、第一家のしめしがきかぬ。まア一年位も辛抱して、何事も人の氣の付かぬ遠い所で、月の内に二度や三度の遊びをば、己は少しも止めはせぬ。さア、其の樣に浮々させずと、根合でもしたがよい。」小さい子に甘い物を食はせ過して、蟲持ちにするのを見ては堪へながら、何ほ新氣の保養か

やそこで、遊びを過してお山と云ふ、むしやくしやにして苦勞する、あゝ親馬鹿とはよう云うたものじやと、吐息ついたる其の處へ、小庭に取りし路地口の戸を押開けて、一人の女ーいと御免なされませ、妾は天王寺巫子町の黒格子辻と申すあのさゝ巫子、笹叩が遊ばしたいとお人の參つた、米問屋佐吉樣と云ふは此方で御座りますかと云ひければ、不審さうに母妙讃「あいの、佐吉とは此方なれど、巫子殿を呼びにやつたと云ひかくるを佐吉が引取り「成程御合點が參らぬ筈、貴方樣へはお隱し申し、私が人をやりやした。彼奴が例の癖が起つて、あまへ居ると仰有りませうが、又此の頃は氣分も惡く、食も進まぬぶら〳〵病、遊んであるけば病氣もなほり、内に居ると氣色の惡いは祟りものでも有らうかと、笹叩をして見るつもり。巫子殿はサア〳〵此方へ、貴方は側にお居でなされ、あいなうつとか申しまして、佛樣への御挨拶遊ばして下さりませ」と聞いて母は頭をふり「イヤもう妾や生まれ付いて涙もろく旦那樣の墓參りしてさへも、供に連れた女子が見る前も氣の毒な。ましてや巫子にのり移りどうのかうのと仰有るを、何うして聞いて居られうぞ、あゝ夫れは惡い物好、呼びにやらぬ前なれば、止め樣もあらうけれど、巫子殿の御座つたを、斷り云うては歸されまい、わが身一人よう聞いて、人の事許り話してたも、妾は聲の聞えぬところで、お念佛を申して居よう」とそこ〳〵立つて奥ふかき佛間へこそは入りにけれ。後見送つて佐吉はすり寄り「コレお花よう來てたもつたの」「ハイ、己が内へ來る

なふは日宿になつて来い、さうさへすれば逢はれると竹居様へのお言傳、急にお話し申さねばならぬ様に
成つた実議、夫れ故かうした姿になり、につこらしう云ふ内に、びつしより汗になりました。「ほんにあ、
さうで有らうとも、彼の様に己をそばに寄して御出でなされては、一寸した話しも出来ぬ、所で此方
のおふくろは、雷栗子に胡瓜の香々、此の三色が大のお嫌ひ、夫れからの思ひ付きで巫子ぢやと云ふ
たら案の條、お部屋へ逃げて御看經、爰では泣いても笑つても、最う聞える事では無い、まァ聞かう
はすつき髷いた小松さへにも、ひよんな事が出来ました、早く遇ひたい／＼と、話の様に書いた許り
で、何の事おやか譯が知れぬと問はれてお花は目に涙、今までは貴方にさへ、お隠し申した程なれ
ば、ましてや他人の聞く前では、小松さん／＼とまそ／＼しくは云ふものの、實は妾が姉の子にて、
云はずと知れし現在、伯母、姉、姉聟は鎌倉にて某殿のお鷹あづかり、御秘蔵の其の鷹をそらした
越度で御暇、それよりはすつと前に妾が花世と云つた時、内でつかうた侍と、いたづらしてはなれ
ぬ仲、大和國までにげ上り、夫婦と成つたが彦平どの、内證では姉さんと、折ふし文の取りかはし、
其の内に御浪人なされた事を聞いての悲しさ、姉さんも途方にくれ、ほんの親はなきよりと、果敢無
い妾を便りにして其方で行儀しつけた上、御奉公なさせてくれと、彼の小松がやうやうの年とて、十四の春
に大和まで、人を付けて上されたれど、彦平殿が駕籠かいて、漸う親子が憂き命、繋ぐ程なる身貧な

住居、みすで加へて姑御が目がいの見えぬ母の病氣、彼の子も見るに絶え果てゝ、我が身の命も又
れ、南無堂にて淺ましい猫と化して果れました」と泣き出せば作者には聞かうせんならぬさきをと一度に頭
乞に出でた、おひさの御詫は此の頭義太夫三味線の稽古をする、ありまよしか、さう云へば其の時もた
しかし小よしと云うたと思うた、ちつとの間に大きう成つて、已にとんと見忘れた、夫れはよいが其の
ひよんな事と云ふのが早う聞きたい」二一さい前からの始終を云はねば様子が解れませぬ、夫れから小
さんが猫乞も、はかぐ〳〵しう貰ひも無しと思うたやら、妾ら夫婦に相談もせず、留守の内此の島之内
の德若屋と云ふ置屋へ、直段に身を賣つた書置と其の金が、小よしが彈く大黒子の中から出て内は騷
動、なんぼ母の病氣ぢやとて、女房の身なり主人なり、其のあ方に勤めさせては男が立たぬと、戸
平殿が半氣狂になられたを、妾が漸う云ひなだめ、まア夫婦連立つて德若屋へ來て見れば、彼方で却
つて面目ながり、何卒樣ゆるして下さりませ、國の父さん様さんが、御浪人で無いならば、賣がねば
ならぬ筈、其の悲しさにわけも云はず、妾が身を沈めました、御母様は親の片親なり、お前ばかりの事
ぢや無い、國に御座る母樣にも孝行かと思ひますと、聲を上げて泣いた顔、今に忘れは致しませぬ。
其の眞實にかんじ入り、戸平殿も得心し、金に明して療治したれば、姑御の目もなほり、殘つた金で
今の住居櫛田橋へ引越して、山から川の船宿商賣、どうなりかうなり暮すのも、元はと云へば彼の子

の御詮、常々御覺なされた通り、大旦子を大事にするも、小松が恩を忘れぬ爲、姑御は昔かたぎ妾は故郷を忘れぬと、大和に御座るか氣にかゝれど、無理に難波へ呼び申し、今まではお屋敷の御奉公と云うて置いた、彼の子の勤めを知らせては、却つてお氣がもめようと、隔たりて居る程なれば、國へは猶更隱しかくし、所に今度小松が父さん、妾の爲の姑様が殿様へ召返され、昔の武士に立歸り、云號とやらが有れば、みさをは此方で繼付ける、奉公先の暇を取つて、鎌倉へ連れ歸れと、五ツの年まであの子の傍に付いて居た、乳母の子、菅谷柳助と云ふ男、今は妾も見違へる立派な武士が迎へに上り安治川に宿取つて、みさを樣のお勤めなさるお屋敷へ案內して、逢はせてくれと日毎の催促、恥を捨てて今の身を、云ふのは手間暇入らねども、かうして彼方で金殿へ身受されては、戸平殿が彌々國へ顏向ならず、小松は妾に取りすがり、國へ歸つて久しぶりな、父さんや母さんのお顏を見たうは有るけれど、佐吉さんと緣切つて、外へ嫁入をする事なら、寧そ死にますと泣いて居る、此方で身受したいには、金子のあては無し、縱ひ金がとゝのふとても、武士同士の云號は反古にはならぬと矢張騷動、大和に居つた時分には、妾は貴方を知らねども、お世話に成つたと彼の子が話し、今でも親らぬ目をかけて下さりますれば、神のなさる事の樣に存じまして、身代の眞下し、今宵は幸ひおなじみの歌川屋へ、うらの客で小松は出て居りますれば、まア彼に逢うての上、相談なされて下さりませ。」

とおく／＼嫌にて語りける。佐吉は聞いて氣もそゞろ、「そうない事では捨てゝはおかれぬ、まゝ、ま、まゝ、母者人に又明日出らるゝ分の事、さ、なら行かうなま、待てよ、歌川様に問ふて下流ごかのが有れば上げ居るまい、それ／＼にそれもどうかなら、まア／＼其方は先へ歸りやれ」「まう日も暮れますれば、おつしゃもお早く」「おゝ合點ぢや」ことお花を戻し、箪笥の着替引出し、帶引きしむる一間より、母妙賛はたち出でゝ、「巫子殿は何と云はれた、話して聞かしや」「と聞はれてまくい、たいい、それは一是れ何も其の様にうたれる事は無い、汝や聞かいでも知つて居る、大方其方の噂では、小松と云ふたゝびの者、色と酒との二股竹、間のまくらの睦言に、昔は其の身も手取り、大切の體を忘れ果て、今町人の身の上には、酉の鏡で大切な金銀をまき散らし、兩人が浮名は小紫垣、ゆかりて知れては座敷のしめしがきかぬと、此の母が扇の陰や日向となり、意見をしても遂に今に、甲斐ない涙補に角な藷、あひ兼ぬるとて聞きはせず、おつとの内の部屋住も、茨で目をつく思ひして、意氣地とやらを立て鳥帽子、搖ればさわる木の葉の露、わが身に掛る淚雨が、ひよつと出來た其の時は、車は淵へ身は田、逆事でも見ようかと、夫れがどうも氣に掛り、百萬年も生日のままで身代大切にしやことと云ひつつその一夜との投げ出したる百兩包、佐吉は夢見し如くにて、おし頂けば顏をそむけ、「燈下へ初穗の百一升よ、今夜は逸しでやる程に、明日の朝は皆の者の目のさめぬ内歸らうぞ、もう是れきりおや、後は

だうしても母は知りませぬことと接穂も雨露の恵みにて、同じ色香に咲く花の小梅を徒に散らさじと、親木の恩ぞ深かりける。

恋草の種植ゑ初めて堂の島、花なき里を花にする、橋の名さへも梅櫻松はみどりの曾根崎に、續く呼屋に引く三味線も、氣は上りかけ下がり、心せかるゝ三ツ紋佐吉、お花が許へもおとづれず、母よりもらうた百兩の金懐中へねぢ込んで、歌川屋の裏波岸を行きつ戻りつ見上ぐれば、奥の二階にしよんぼりと、物案じ氣な小松が姿、幸ひ邊に人は無し、爰まで來たを知らせの手拍子、戀しゆかしい男の顔、夜目にもそれと見て取つて早う早うの手招ぎに、氣は飛び立つほどつばさは無し、せんかたなじみの家なればこそ、見付けられたら謝る分と、戀には闇の黒板塀こじ放す音聞き付けて、俄になき出す犬の聲、かみ付く許り吠えかゝれば、雨落の石手當り次第、掴んで投げる其の内に、懐中より百兩包ころりと落つるに氣も付かず、石と諸共うち付くれば、遙かにそれて川岸に繋ぎ留めたる屋根舟の提灯ぱつたり打消すにぞ、えゝ投打し損ねは何奴めぢやことと咎むれ聲にてわめかれて、見付けられじと尚うろうろ、二階の上より見るひやひやさ小松が松に打ちかくるしごきの帯の蔦紅葉、やうやう夫れを力草高塀のり越え吐息をつき、始めからかうすれば、何の骨は折れぬのに、かういふ事では盗人にもあつたにはなられぬことと二階へ這入れば小松は取付き、「口合所ぢや御座んすまい、妾は半分死んで居

な、悲しい事はお花さん、聞きしやんした通りの場合、今更お前に引別れ國へ戻つて嫁入せ、ならますならうと思はんす、いつそ殺して下さんせ、と、わつと泣出す口へ手をあて、「あゝ靜かにござんすがよい、ひよんな亡者につながつて、國に御座る親達に、嘆きをかけるは眞の惡縁、ゆるしてたもと云ひければ、あれ勿う忘れて居た國の事を云ひ出し、又泣かせて下さんす、うたるゝ杖もゆかしいもの、まして拳もあてられず、可愛がられた父さん母さん、是ればつかりは忘られぬ、迎へに來たは乳母の子にて、顔かつかうは覺えねど、國の由縁の人なれば、逢ひたいは山々なれど、屋敷勤めをすると云ふ其の姿が此の樣に、あぶらけ無しの大島田、蓮葉な體で逢はれもせず、心の中の悲しさを推量して」とふし沈む、男は背をなでさすり「身受さへしたならば、又仕樣もあらうかと、母の情で百兩の金は貰うて持ちながら、掛も拂はず裏口から忍び込んで來たわいの、まア此の金をお花に渡し、己ぢやと云はずに身の代の、手付に入れて置いたがよいことさがせど〳〵有らばこそ「やゝ、今夫に打つた礫、重い石ぢやと思うたが、落した金で有つたも知れぬ、えゝこれ手拭にでもくるんで置いたらかう云ふ事は有るまい」と呆れて下をさしのぞく。小松は尚もすがり寄り「惡い事の重なるも、死なねばならぬ因縁づく、縱ひ身受をさしやんしても、生きて居れば本國へ歸らねばならぬ體、歸れば嫁入をせねばならず、夫れよりお前の手にかゝるが、此の身の願ひで御座んする、流石に妾も武士

の護守刀に持つて居る、是れで殺し〳〵」と男に渡し死神に、誘はるゝこそあはれなれ。今更其方に別れては、己も浮世の望みは無い、石や瓦と百両を取違へる不運では、死んでしまふもましかいの。「そんならお前も諸共に、嬉しう御座んすかたじけ無い、今夜の客は座敷ばかり、此の頃つとめた侍衆、昼から上げて置きながら、未だ御座んせぬこそ幸ひ、人目に掛らぬ其の内に」と覚悟きはむる表より、「小松さん〳〵お客さんが御座んした。」と云ふに驚き袋戸へ、佐吉をあたふたおし隠し、我が身を憑れて素知らぬ顔、口に鼻歌心に稱名、最期を急ぐと白紙の、障子引開け入り来る客に、小松は色を悟られじと、「何がお氣に入らぬやら、初回の時も座敷からすいと歸つてしまはんす、裏の今日は待ちぼうけ、何處に遊んで御座んした、急度吟味もしたけれど、馴染の無いだけ宛して置く」と言葉に色をもたれ寄る、袂に戸棚をうち覆ふ、客は何とも挨拶なく、扇ばちちと打ちならし、顔をながめて居る所へ、お花は小松に何彼の様子、人目も無くば話さんと、うつかり来かゝり鷲愕し、「小松さんおまへはあの人見知らずか。」「あい今日で二見のお客なれど、心安いお人なれば、まア〳〵此方へ這入らんせ。」「ゑゝ、たれどこれでは無いわいの、其方の迎へに上つた人卿助とは此のおかた。」「そんならお前がおゝ恥かし。」と云ひながら立つも立たれぬ後にも氣遣ひ、「いや〳〵、其方より此の花が、どうも顔が向けられぬ。」と泣き出すを押靜め、「あいや、御心遣ひ決して御無用、御本國鎌

育ちに引離れたる此の難波、いやしい業をなされても、誰知るものも御座らねば、苗字の障にはならない。申す迄、唯今では桃井家へ奉公致す雲宗栁助、以前は貴方の乳母の倅、乳兄弟なり、御家来なり、拙者が連れて参つた由、御内意のお耳に達する事もあらば、承り、取りはからへとの御指図、此の間花世ござる言葉のはしばし、何とやら合點参らず存ずるから、方々と聞き合はすれば、小松と云ふ名代の傾子は、花咲屋の娘との噂聞き届けて、念の爲客と成つて四五日先表向の御一座、幼顔はうたがひ無しと、藏屋敷にて金とゝのへ、唯今親方徳若屋へ對談致して、身の代つぐのひ、證文を受取つたれば、今宵からは自由の御身、さきごにじきや雙六の御合手致した此の栁助、御迎へとあるからは恥も恥辱も打捨てゝ、御息災な御顔ばせ早速お見せ遊ばす筈、たれを他人かなんどの様に、お隱し有りしはお兩人ながら、ちとお恨みに存じます」とほろりと泣いて語りけり。小松は更なりそばで聞く、お花も面目擬首し、こんなさまに勤めをさせたのも、元はと云へば妾が科、もう何事も堪忍して、是れぎり云うて下さんすな。今度國の出世に付き下るは其の身の仕合なれど、彼の子もお客の其の内に、逃れぬ中の人がある。何卒其方の才覺で國へはよしなにいひやつて、其の男と夫婦にして、お兩人を此の難波へ引取る様には成るまいか」と頼めば小松も涙に咽び、「云ふまでは無けれども、海にも山にも譬へられぬ、御恩を受けた此の身なれば、明暮あひたさゆかしさの、體は爰へ殘つても、魂は母さんの

懐中へいつて居る、是れ程思へど生中に、武士の娘と云ふ事は、うす知りに人も知る、逃れぬ義理にからめられ、難波の土とならねばならぬ、其方を頼んで置く程に、みさをは氣合が悪いとも、死んだとも云うてやり、矢張爰へ置いてたも、國へはいやぢや」と手を合はせ、拝み口説けば柳助は、涙を含む目に角立て、「氏より育ちが恥かしい、派手蓮葉なる身に染り、上の空なる世に習ひ、親の事も故郷の事も、忘るゝ程のお心にはいつお成りなされました。お兩方が私をお側へ呼んで仰しやるには、「浪人て居る中に、髪を下して樂々と法體しようと思うたれど、みさをが戻つた其の時に、變り果てたを見るならば、嘸やあれが悲しからうと、其の儘居たが今度の幸ひ、早う連れて歸つてたも、柳助樣頼みます」と、御家來筋に手をついて、殿樣付けるも貴方が可愛さ、待ちこがれて御座る所へ、すごすご一人歸られませうか。お國には歴とした云號も御座る事、僞り云うたが現はれると、親旦那は御切腹なさる樣にならうも知れぬ。花世樣も同じ樣に鎌倉へ下るのを勸めはなさらいで、此方で夫婦にしてやり度い、其の者も存じて居る、堂島の米屋とやら十千萬兩の分限でも、町人へ娘をやり、其の聟の世話にならうと、召返された御主をふり捨て、此の難波へ御座る樣なお兩方だと思召すか、私が此の樣に腹立つるのも、みさを樣のお身の上が大切故、あゝかう云ふ事とは御存じ無く、今日か明日かと日を數へ、指を折つて待つて御座る、母御樣の此のお文、御覽なされてとつくりと、御思

案じられて下さりますな」ト差出すを小松が手に取り上書見れば、「父さん殿まゐる、母より。此の方ぶじに遊ばせしお筆に年の寄つた事、十四の年に大和へ来て、八年拜まぬ親の顔、見たう無うて何とせう、何う云ふ事で今宵にも死病受けた時、母様のなつかしさに、臨終をしそこなひ、如何なる恥をさらさうかと、案じ過しかせらるゝに、親の事忘れたと餘り叱つてたもんな」と文を抱きしめ〳〵、消え入る様になげきしが、どうなりかうなり云ひくるめ、両人を歸したうへでの事と、思案定めて涙を拭ひ、「ほんにさうぢや、親に男はかへられぬ、もうきつぱりと思ひ切り、明日は國へ歸らう程に、今宵は今まで心安い人さんに、ゆる〳〵と暇乞ひもしたければ、其方は戻つてたもいのと云へば律義の郷助は、實と思ひ打喜び、「おゝお出来しなされた、然らば明日目立たぬ様駕籠をつらせて御迎へ、イヤさし付けがましい事ながら、なに彼のしはらひ置土産、金子の御用も御座るなら、必ず共に御遠慮無う、花世様にはまだ種々おはなし申す事もあれば、さアお宿まで御同道」と打連立ちてほつ〳〵と、何か云ひさす襖さす、さすや障子の紙一重、見えざることこそ是非なけれ。袋戸明けて吐息を付き、「小松」「佐吉さん」「これ」と云ひさま手を取つて、最前忍びし松が枝を、傳うて下りる河岸づたひ、両人は其處をはせ去りけり。

上るり「此の世のなごり夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに

消えて行く、夢の夢こそあはれなれ。あれかぞふれば曉天の、七ツの時が六ツ鳴りて、殘る一ツが今生の鐘の響の聞きをさめ。」

梅田橋の鶴澤が月詣さらひの上るりを、我が身に似たる二人連、堤の陰を立出でて、佐吉は向うを打見やり「是れ小松なまなか遠くへ走るより、近くへ隱れて追手の者を、やり過さうと思うたれば、案の定堺川屋の提灯が行き違ひ、花咲屋へも走つて來て、戸平もお花も我々を尋ねに出でた樣子なれば、其の留守の家へ行きて心靜かに最期をとげん。」と、小松を忍ばせ我一人、花咲屋をさし覗き「およし、およし夜が更けたに未だ寢ずか。」と云はれて何の頑是無く「今宵はとなりのお師匠さんの上るりを聞いて居たれば、小松さんが駈落をさしやんしたとて迎へが來て、父さんも母さんも、後追うて御座んしたれば、行きたうても留守が無い、さらひをしまうて明日でも逃げさんすればよい物。」と云ふに佐吉が打ちうなづき「己が爰に居る程に、聞き度くば聞いておぢや。」「あい〳〵そんなら留守して下さんせ。」と鄰へあたふた走り行く、影見送つて小松が手を取り、奥の一間にそつと入り、聲もらさじと有り合ふ屛風引廻せば、壁ごしにもれて聞ゆるとなりの上るり、

「くも心無き水のおと、北斗はさえて影うつる、星の妹背の天の川、梅田の橋をかさゝぎの、橋とちぎりていつまでも、我と其方は女夫ぼし。」

「あれ彼の文句はお初德兵衛、屏風にしたる繰の、此の看板も同じ人、所も矢張梅田橋、心中した死ぬ者を、阿房よ己はいうて居たが、

じやうるり「あやなや昨日今日までも、餘外に云ひしが明日よりは、我も噂のかずに入りこ死ぬ氣に成つたも不思議の縁」ト聞いて小松は泣きいだし「不思議所かほんの悪縁、ひよんな私につながつて、何の越度も無いおまへを、冥土の闇の道連に、すると思へば勿體無い」

じやうるり「げに思へどもなけれども、身も世も思ふまゝならず」

「成程外の心中は、人を殺すか金銀につまつて死ぬが世の習ひ、夫れに引替へ身受はすむ、己も百兩持つて居たれど、犬奴がお蔭で棒にふり、それから死ぬる心になつたも、戀路に迷ふ煩惱の犬張子を爰の家ではそなたの恩を忘れぬ爲と、お燈明まで上げて置けど、己は犬奴がうらめしい、よく汝ほえ居つた、せめて拳で犬張子、汝をぶつのもはらいせ」ト何の科無き犬張子を、打倒せば其の内より、まろび出でたる百兩包「ヤ、これは己が落した金どうして爰へ這入つて居たか、是れで其方の云號か頓死でもして終ふと、心中するには彌及ばぬ、まアそなたの母御の文どう云ふ事が書いて有るか讀んで見やれ」とせりたてられ「さア柳助も云ふ通り、武士と武士との云號、反古にはならぬ此のお文、來世でよまんと肌に付け、此のまゝ持つて居たれども、呵責にあはば目もくらみ、妄執の雲霧に

文字が消えてはなんにも無し、讀むも此の世の名殘ごと、親子の縁も封じめも、切つて開きし文の内、「これ、のしと昆布と節分の豆で下れの祝ひ言、今が冥土の首途と御存じないか御痛はしや、母樣は血の道持、長文かくと目がまふと、常々はおきらひなれど、子がかはゆさに細々と、道中息災に早々下り待ち祝ひ……、父樣の六十の御壽一門衆のふるまひも、そもじ下りて後緩々と、生靈魂の祝ひと一所に盆まで延ばし……盆には妾も新生靈親子の杯みそはぎの露の手向と引替へて、草葉の陰から聞く時、お兩人樣のお歎きが、思ひやられて情なや、何事もみな追付け目出度くめもじに申しす、目出度くかしく」是れが何の目出度い事、國をへだてて御堆ふしても、嘸や夢見が惡からう、明日は占夢違へ、違へても祈つても返らぬ後の悔み言、いとほしの父樣や一ト間に憧れて泣きにけり。作吉は件の文取上げ、「尚々そなたの三ツの年云號致したる、水間宇源太殿の子息島之助、これもながながの殿樣の御勘氣受けられ候所、此の度御免なされ、今行方を詮議最中に御座候、その島之助殿の戻られ次第、そなたと祝言致させ候間」と讀みかけて小首を傾け、「小松そなたは綱干の家中にて、數村亭太夫殿の娘、五ツ六ツの頃まではおまへんと名を云はなんだか。」「あいよくお前は夫れ知つて御座んす。」と顏打守る其の所へ、屏風引退け立ち出る戸平、「ヤレまァ待つたお兩人樣、死なうと覺悟なされたは、云號への義理詰り、夫れはどうでも成りませう、梅田堤の後影ちらと見た故立戻り、樣子は

聞いて僕ゃよしたが、大息つけて涕を付く佐吉、「さてもこう苦勞いしていたまでない、なんぼ[illegible]でも、小さい時の日は苦勞で、變替る事はならぬと、時代の上なり見る樣に、よもや首も斬るまいと、己を盲をいつつて居たが、死ぬるふりして見せたのは、彌小松に腐てっかれるのをためして見よう爲、この伴ひ、家業の島之助とは己が事だや、蟇目の論より御勘氣かうむり、二君に仕へず武道を云はず、浮世いるせはして居れども、主人の御恩親の慈悲、寢た間も忘れぬ故郷の戀しさ、此の文を見たならば、我が身の歸參叶ひし事、何日までも知らずして、町人にて朽ち果てん、是れと云ふのも其方の蔭、心の嘗が聞いたこと聞いて小松は飛び立つ嬉しさ、戸平も共に勇み立ち、「歌川屋の裏河岸で、お客待つ間にとろ／＼と、やらかした屋根舟の、提灯ばつたり打消す礫、取上げ見れば白い紙包、不思議なことと存じましたが、屏風の陰でお話を、承れば貴方のお金、犬に打つたるつぶて故、しまうて置いたも犬張子、犬がころんで寶が出る、緒ときりかんくは昔々むかし噺の花咲爺、今より一期榮えん吉瑞、おうれしからう小松樣」と、あふぎ立つたる其の所へ、尋ねあぐんで柳助お花、立戻つて始終を聞き、無事を喜ぶ歸參をよろこぶ、となりの「さらでも祝儀の上るり、

「常磐かきはのまさきのかづら、絶えずつきせず萬々年、治まる民こそめでたけれ」

斯て、佐吉小松柳助は急ぎ鎌倉に下り、絶えて久しき親子の對面、其の喜び更に云ひつゝすべうもお

ほえず、殿にも御機嫌限りなく、數多の祿を賜はり、元の水間鳥之助に立歸り、小松と婚禮首尾よくとゝのひ、戸平お花は彼の米屋の後をつぎ、何れも親に孝行をつくしければ、男女あまたの子をまうけ、目出度き事のみ重なりけり。めでたし／＼／＼／＼／＼／＼。

浮世形六枚屛風 終

大正十五年十二月十五日印刷
大正十五年十二月十八日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第十九卷

編輯兼發行者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座　七八三番
　　　　　二一八八番
　　　　　三六八六番
振替東京　五二二九八番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03045 0605